バカとテストと召喚獣　試験召喚のすすめ

秋雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと召喚獣　試験召喚のすすめ

【Ｎコード】
Ｎ８７４２Ｊ

【作者名】
秋雨

【あらすじ】
試験召喚システムを導入した試験校である文月学園。Ｆクラスに所属する事になった拳銃マニアの少年が、幼馴染である木下秀吉を始め、吉井明久や坂本雄二ら親友たちと召喚獣との大奮闘！

プロローグ

文月学園

新設校にして、現在世間で最も話題を呼ぶ新技術“試験召喚システム”の試験採用校。
学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られるこの学園。
それ故に、多くのスポンサーが付いており学費は極めて安い。

そんな文月学園の校門にて、学校指定のカバンとボストンバッグを持った少年が1人。
時間が時間故、筋肉隆々とした体格の良い教師に呼びとめられていた。

ここから、物語は始まる

「遅いぞ、久遠！」
「あっ、おはようございます。鉄人先生」
「その呼び方を名前の様に扱うな！」
「え？　……先生の名前って、鉄人じゃないんですか？」
「吉井ですら知っている事を知らんのかお前は！？」

少年の目の前にいたのは、生活指導の西村教諭。
トライアスロンが趣味の肉体派であることから、通称“鉄人”

少年“久遠光一”は、その彼に目をつけられている問題児の一人である。

「それより、他に何か言う事があるんじゃないか？」
「え？　えーっと……今日も肌が黒いうえに暑苦しいですね？」
「お前は遅刻の謝罪より、俺を罵倒する事と肌の色の方が大事なのか？　……まあ良い、受け取れ」
茶色の封筒を差し出され、それを興味なそうに受け取った。
「あまり関心があるようには見えんな？」
「どこだろうと、戦って勝てば設備を奪えるのがこの学園の特色でしょう？　不満だったら奪えば良いだけです」
「そうか。流石は我が学園の問題児の中で、最も過激思想の持ち主だな。その方向が勉学の方向に進む事を期待させてもらうぞ」
彼の言う問題児とは、主に吉井明久と坂本雄二、そして久遠光一の事。
「そのボストンバッグは、またエアガンか？　何度没収されても聞かんのだな？」
「当然です。崇高なるサバイバルゲーム愛好会の一員であり、銃を愛し銃社会の実現を望む者として、手放せるわけがないじゃないですか」
「……それ位勉強にも気合を入れていれば、今頃Ａクラスの首席として立っていた物を」
常にエアガンを持ち歩く過激派の久遠と、教師の間では恐れられていた。
のりづけされた封筒を破り、その中に入っていた紙を見ると……
「あーあ、Ｆか」
「お前の幼馴染は、弟の方が同じだ。残念だったな？」

「残念じゃなくて、喜びですよ。片方はともかく、あいつとクラスが一緒だなんて冗談じゃない」
「何だ、違うのか？　まあいい、急げ」
全く……と、愚痴を漏らして、彼は校舎へと。
そこから靴箱に到着したところで……
「ん？　よう明久」
「あっ、おはよう光一。どうだった？」
彼の去年のクラスメイトにして、同じく悪友である吉井明久。
学力的に最低ランクのバカさと、行動力により彼と同様に鉄人に目をつけられていると同時に、バカの代名詞である“観察処分者”の称号持ち。
苦笑して、全然のジェスチャーを交えての宣告。
「Fだった」
「じゃあ、僕と同じだね？」
「ははっ、まあ仲良くやろうや」
基本、いじられ役である事が多い明久だが、光一は彼をいじる事を良しとはしていない。
どことなく、自分と何か強く通じるものを感じていたためである。
それはさておき、彼らは2人でFクラスへ。
途中興味本位で覗いたAクラスの教室を見て、二人は驚愕した。
「Aクラス、すごかったね？」
「ああ、システムデスクにリクライニングシート……あれじゃ教室

っていうより、ホテルだ」
「もっと頑張ればよかったかなあ？」
「欲しけりゃ奪い取ればいいさ。それがこの学園の特色だろ？」

この学園が注目される理由の一つにある、試験召喚システム。
試験の点数がそのまま強さに影響する召喚獣を呼びだし、それを使ってクラス間競争である“試召戦争”というシステムがある。
それを使用し、AからFまで異なる環境を施し、簡単に“良い設備がほしければ奪い取れ”のシステムのもと、日夜勉学に励む者達。

当然エリートであるAクラスは、それ相応の高待遇。
そして、彼ら2人が所属するFクラスは……

「なんか、近づいただけで格差があるのがわかるね？」
「ああ……さっきはああ言ったが、もう嫌気がさしてきた」
「それはそれとして、早く入ろうよ。よし、それじゃまずは明るく行こう」

見るからに、建て付けの悪そうな戸を開くと……

「すいません、ちょっと遅れちゃいました」
「早く座れ！　この蛆虫野郎ども！！」

教壇にいたのは教師ではなく、彼らの悪友である坂本雄二。
見るからにガラの悪そうで、かつては悪鬼羅刹と呼ばれた男。

「いきなり挨拶だな。そんなところで何やってる？」
「先生が遅れてるらしいから、代わりに教壇に上がってみた。何せ俺がここの最高成績保持者……つまり、代表なんでな」
「ほうっ……でも傍から見たら、お山の大将気どりのゴリラにしか

見えんな」
「何だとこのモヤシ野郎、サラダにしてやろうか？」
ボキリと指を鳴らす雄二と、懐からエアガンを取り出す光一。
竜虎相対す、という雰囲気にクラスは沸いた。
「そんなもんに頼らないとケンカも出来ねえのか？」
「黙れよ。腕力なんて時代遅れだってこと、その身を持って教えてやる」
クラスが同じで面識がある上に、文月学園の問題児トリオと称されるだけあって彼ら3人は仲が良い。
当然、こういったやり取りも割と一般的だった。
「あんた達、去年から良く飽きないわね？」
「げっ！　しっ島田さん！？」
「ちょっと吉井、何よその“げっ！”って？」
現在教室の中での紅一点、島田美波が呆れたように乱入してきた。
去年から何かと痛い目あわされてる明久は、傍から見ても分かるほど顔を青ざめた。
「よう島田、お前もFだったのか？」
「はろはろ～。ウチまだ日本語の読み書きが苦手だから」
「帰国子女ならではの弱点だな」
その場に顔を連ねているのは、ほぼ全員バカの代名詞を受けて当たり前な者達。
しかも全員が男で、ただ1人女子が居ると言うだけのムサっ苦しい空間。

「それはそれとして、島田が居てくれてよかった」
「え？　そっそう？」
「だよね。こうもムサっ苦しい上にカビ臭い空間だから、ほんのちょっとだけ膝があらぬ方向にぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！」
いつのまにかひっくり返され、４の字固めに処され悲鳴を上げる明久。
いかにもへし折らんと言わんばかりに、ギリギリと嫌な音を立てつつ力を入れる美波。
そして、そのスカートの中に注がれる視線。
「やっぱりお前もいたのか、康太」
「……よろしく」
「趣味についてとやかく言えた義理じゃないけど、犯罪はやめとけよ？」
彼の言葉もどこ吹く風と、主に美波のスカートに視線を注ぐ少年、土屋康太。
通称“寡黙なる性職者ムッツリーニ”。
「あいたたた……」
それから程無くして解放され、膝を擦る明久。
「お前も学習しろよ。だからバカなんて呼ばれんだろ？」
「相変わらず朝からにぎやかじゃのう。光一も相変わらず、明久の世話を焼いておるようじゃな？」
「ん？　よう秀吉。えーっと……」
「席は好きな所に座っていいそうじゃ。どれ、あそこにちょうど３

つ程席が空いておるし、そこに移ろうかの」

目の前にいる、翁言葉で話す美少女……いや、美少年である木下秀吉。

荷物をまとめ、光一と明久を伴い空いている3つの席へ。

「なっ、何だ？　座布団、綿がほとんど入ってないのかよ？　しかも畳、破れてる上にキノコまで！？」

「この卓袱台、痛みまくってるよ？　鞄置いただけでぐらぐらするし、良く見たら天井クモの巣はってる！」

「先ほどから、隙間風が酷いのう。それに埃っぽいから、喉に悪いぞい」

殆ど廃屋同然の教室、腐った畳、綿のない座布団、足の折れた卓袱台、隙間風が吹くツギハギの窓。

最低の中の最低ともいえるカビ臭さ満載の空気に、改めて顔をしかめる光一と明久。

「まあそれはそれとして、今年一年もよろしく頼むぞい」

「ああ、こちらこそ今年もよろしく。やっぱ付き合いが長く、気の合う幼馴染って良いもんだな、秀吉」

「そう言ってくれて何よりじゃ。姉上も一緒なら、もっと面白かったのじゃがな」

「冗談言うな。あいつと一緒だなんて、考えただけで怖気がする」

秀吉と幼馴染だけに、彼の姉である木下優子とも当然幼馴染という間柄であり、面識はあった。

が、彼は秀吉とは親しい物の、優等生で何かと衝突しやすい優子を苦手としている。

「改めてみると、酷いよね？」
「ああ。Ａを見ただけに、格差があまりにもひどすぎる……そういえば秀吉、優子はＡクラスなのか？」
「姉上はワシと違って、優秀じゃからのう。なんじゃ、姉上が気になるのか？」
「そりゃあ……あいつには散々怒鳴られてるから、同じクラスだったら気が気でならないよ。何より本性知ってるだけあって、ろくでもない事になるのは目に見えてるし」
「素直じゃないのう」
と、笑う秀吉に光一は懐に手を入れて、ある物を取り出そうとした。
「ねえ光一、本性って？」
……が、そこで興味津々で質問してきた明久に、光一は一旦手を止めてにやりと笑みを浮かべた。
それはだな……と切り出そうとした光一を、秀吉が沈痛な顔で制した。
「やめておけ光一。以前その事で、全身の関節が壊れる寸前にされたの忘れたか？」
「……すまん明久、俺の命の為にも忘れてくれ」
「え？　それって……よくわからないけど、光一も苦労してるのかな？」
「その通り」
明久も通じるものがあったのか、すんなりと頷いた。
話が終わった処で、光一は持ってきているボストンバッグを開き、そこからエアガンを取り出す。
もちろんマシンガンやライフルと言った、そういう大型の物を。

「さて、先生が来るまで銃の点検でもするかな？」
「銃社会のアメリカならともかく、日本で堂々とやる事じゃないのう」
「エアガンだぞ？　別に改造してる訳じゃないんだから、年齢制限やらを守れば問題ない」
「さっきそれを人に向けた者の言うセリフじゃないぞい」
「良いんだよ秀吉、どうせ雄二なんだから」
「明久、ちょっと来い」

ガラッ！

「ＨＲを始めますので、席についてください」

そこで、初老のさえない男性教師が入ってきて、全員が席に着く。
こうして、文月学園の学生生活が始まった。

第一問

問題
『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希の答え
『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント
正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

久遠光一の答え
『問題点……ガスコンロの火力が低すぎる事、火炎放射機でも使用するべき
合金の例……ジェラルミン』

教師のコメント
そんな事をしたらこの問題以前の問題です。そして合金の例の方は“ジェラルミン”ではなく“ジュラルミン”です。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント
そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）

教師のコメント
すごく強いと言われても

2年Fクラス、初日のHR

「えー、おはようございます。Fクラスの担任を務めます……」

担任らしい教師は、薄汚れた黒板に視線をやり手を伸ばそうとして……視線を皆の方に戻した。

「福原慎です。よろしくお願いします」

「……チョークすらまともにないんですか？　良く見たら黒板消し

もなさそうなんですが」
「後で申請しておきますので、授業には間に合うはずです」
全員が改めて、ここが最悪の環境であることを実感した。
「皆さん全員に、卓袱台と座布団は支給されてますか？　不備があれば、申し出てください」
不備という言葉に、全員がありまくりと言わんばかりに名乗り出た。と言うより、どこが完備されてるのかむしろ聞きたいと言わんばかりに。
「俺の座布団、綿が入ってないんですけど」
「我慢してください」
「俺の卓袱台、脚が折れてます」
「木工ボンドが支給されてるので、後で自分で直してください」
「窓が割れてて、隙間風が寒いんですけど」
「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直してください」
1つ1つの質問を丁寧に応えていく福原教諭。
しかし大半が大きく分けて“我慢してください”か、“自分で何とかしてください”の2択のみ。
重ねて言うが、ここは学力最低クラスのFクラスの教室である。
「では必要なものがあったら、極力自分で調達する様にしてください」
「これがFクラスか……」
「そういう事です。これがこの学園の方針ですから、不満があるな

らしっかり勉強して来るべき試召戦争に勝ちあがってください。それでは、自己紹介をお願いします。そうですね、廊下側の人からお願いします」

と言われ、まずは廊下側の一番最後に座っている秀吉が立ち上がった。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年1年、よろしく頼むぞい」

とても男とは思えないその可憐な姿に、男で埋め尽くされたその空間は癒しの空気に包まれた。

余談だが、その容姿から“女装が似合う男子生徒ランキング”から不公平の意見が多数出たため、候補から外されたという話あり。

「……土屋康太」

次にムッツリーニ事、土屋康太。

本名は知られておらず、異名であるムッツリーニの名は割と知られている存在である。

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話はできるけど、読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」

一旦区切り、明久をちらりと見てから一言。

「吉井明久を殴る事です」

当人は先ほど受けた4の字固めのダメージが再発したのか、膝を抑

えガタガタ震えていた。
そのあとは、ただ単に名前を告げるだけの作業が進んでいく。

「久遠光一。サバイバルゲーム愛好会の一員で、そこの木下秀吉とは幼馴染」
「まあそれなりに仲良くさせてもらっておるぞい。姉上共々な」
『木下優子とだとお！！？』

木下優子と言えば、秀吉と瓜二つの双子であり、現在Ａクラスに所属する優等生。
ほぼ全員が光一に対してカッターを構えるが、光一がボストンバッグからマシンガン（エアガン）を取り出した。

「ちなみに銃が好きで、常日頃から持ち歩いていないと気が……調子が狂うほど。当然腕にも少々自信あります」
「とんでもない事をサラリと言うでない」
「ちなみに秀吉とは親友ではありますが、こいつの姉木下優子とは他人以上知り合い未満程度ですので、誤解のない様お願いします」

エアガンだとわかっていた物の、流石に銃を見て構えた全員が萎縮してしまった。
先ほどのやり取りもあってか本気で撃ちかねないと全員が本能で察知し、逆らわないことを誓ったのは別の話。

「まさかと思うけど、それ本物じゃないよね？」
「エアガンにきまってるだろ、ここ日本だぞ？　それより明久、次はお前の番だぞ？」
「あっ、そうだったね」

次は明久の番となり、軽く咳ばらいをした。

彼は出だしが肝心だと言わんばかりに、気さくにふるまう事に。

「え～っと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

『ダァアーーリィーン！！』

男らしい野太い声の大合唱が、Ｆクラスの教室に響き渡った。

当然明久はめちゃくちゃ笑顔をひきつらせ、混ざらなかった秀吉と光一も苦笑い。

「……失礼、忘れてください。とにかく、よろしくお願いします」

「なんつー不快な大合唱だ」

「確かに、当事者でないワシも鳥肌が立ったぞい」

ガラッ！

「あの、遅れて、すいま、せん……」

「えっ？」

そこへ、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

その姿に、男子生徒全員が意外を通り越したかのように驚いた声が上がる。

「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願いします」

「は、はい！　あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします！」

途中から尻すぼみな自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。

「はいっ、質問です！」
「あ、はいっ。なんですか？」
「何でここにいるんですか？」

傍から見れば失礼な質問ではあったが、ほぼ全員（光一と明久を除く）がそう思っていた事だった。
彼女は容姿も人目を引く程で、テストでは１ケタの順位に必ず名を連ねている学力の持ち主でもある。
当然こんな場所に来るべき人間ではなく、最高設備であるＡクラスに入っている物と誰もが思う事。

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

ＡからＦまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決まる。
その試験は難しいという評判だが、途中退席は０点扱いにされるという厳しいテストである。

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでＦクラスに」
「ああ、化学だろ？　あれは難しかったな」

瑞希の言い分を聞いて、１人がそう言いだした。
それを皮切りにざわつき始め、次の言い訳が飛び交う。

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」
「黙れ１人っ子」
「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」
その様子を見て、光一は一言。
「……想像以上にバカが多いみたいだな」
それを聞いて、明久と秀吉はうんうんと頷いた。
「で、ではっ、今年1年よろしくお願いします！」
瑞希は逃げるように、明久と雄二の間の空いてる席に着いた。
彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏してしまう。
その姿に光一は明久に目配せをして、あの事を聞くことにしたと意思表示。
「よう姫路、体調は大丈夫か？」
「あっ、久遠君に……よ、吉井君！？」
光一の声に反応して振り向いた先の明久の顔を見て、瑞希が驚いた。
その反応に、明久は何かまずかったかとおろおろし、光一はその様子からある事を察した。
「姫路、明久が不細工ですまん」
が、そこへ雄二が割り込んできた。
それも明久への罵倒込みで。
「そ、そんな……えっと？」

「坂本だ、坂本雄二。それよりこのバカの顔を見て、体調が余計に悪くなっただろ？　友として謝っておく」
「友が言うセリフに聞こえないぞ？　それより何いきなり割り込んで来てんだよ？」
「代表としてクラスメイトを気遣って何が悪い？」

表情が“明久の幸福を邪魔する為だ”と言っていた事は、当然光一も察していた。
ちなみに明久は、その罵倒で悲しそうな顔をしている。

「そっ、そんな事より、吉井君は全然不細工ではありませんよ？」
「え？」
「目もパッチリしてるし、顔のラインも細くてきれいだし、その、むしろ……」
「まあ確かに、悪くはないかもな。そういえば、俺の知人にも明久に興味がある奴が居た気がする」

雄二のその言葉で明久は嬉しそうに、瑞希は驚いて、光一はまさかと言った様な表情に。

「え？　それは……」
「そっ、それって一体誰ですか！？」

明久の声を遮るかのように、瑞希が声を荒げた。
それも必死そうな表情のオマケつきで。

「姫路、落ち着け。身体に障るぞ？　しかし、随分と必死だね？」
「え？　そっそれは……」
「ははっ、姫路さんも色恋沙汰には結構敏感なんだ？」
「そっその……はい。やっぱり恋をするって素敵な事だと思います

から、つい力が入ってしまって」

明久が微笑ましそうに瑞希を見て居る傍らで、雄二と光一は半ば呆れたように明久を見ていた。

「ねえ雄二、話の続き聞かせてよ？」

「え？　ああ、そうだな。確か、久保……利光だったか？」

「男かよ！」

久保利光　性別（♂／オス）
現在Ａクラス所属　学年次席

「おい明久、さめざめと泣くな」

「いや、よりにもよって男に恋愛感情持たれてるかも知れないなんて、普通こうなると思うぞ？」

「……まあ、確かにな」

パンパン！

「はいはい。そこの人たち、静かに」

バキィッ！　パラパラパラ……

「してください……ね？」

本人としては、軽くたたいたつもりだろう。
だが、壊してしまった事は事実の為、少々気まずそうな態度に。

「え～。代えを持ってきますので、皆さんは自習をしていてくださいね」

「どんだけ酷い設備なんだよ！？」
「これがＦクラスです」

福原教諭の台詞に、何度目かの改めて設備のひどさを理解させられる面々だった。

「全く、こうも埃っぽい上に湿気だらけじゃ、俺の大事なコレクションも痛んじまうな」
「きゃっ！」

光一が取り出したエアガンを見て、瑞希が軽く悲鳴を上げた。
まあ普通、一介の学生の荷物から銃が出てくる事自体非常識の為、無理ないかもしれない。

「ん？　ああ、これモデルガンだよ。俺こういうの好きだから」
「そうなんですか？」
「それより振り分け試験の時、大丈夫だったか？　あれから明久が酷く心配しててさ」
「吉井君が……ですか？」

明久と瑞希は振り分け試験の時隣の席で、光一も割と近くの席にいた。
その為光一は瑞希の事情は知っていたし、明久の瑞希に対する気も当然気づいていた。

「うん。体調が悪そうだったし、いきなり倒れるからびっくりしたよ。保健室に様子を見に行った時には、もう帰っちゃってたからさ」
「何だ、お前らだけ驚いてないと思ったら、そんな事があったのか？」
「うん……ねえ雄二、ちょっと良い？」

「あ？」

明久は雄二を伴い、廊下へ。
瑞希が怪訝そうな顔をして見送り、光一に問いかけた。

「吉井君と坂本君、どうしたんでしょうか？」
「何だ、明久が気になるのか？」
「え？　いっ、いえ、そういうわけでは……」
「はいはい。まあ俺で手伝えることがあるなら言いなよ、協力してやるから」
「え？　あの、あっ、ありがとうございます」

光一は2人が出て行った廊下をちらりと見て、すくっと立ちあがる。
秀吉はそれを見て、幼馴染特有の勘を働かせた。

「なんじゃ、またお主ら3人で悪だくみかの？」
「まあな。ちょっと面白い事になりそうだ」
「やれやれ……まあ光一らしいのう」

たがいに笑いあって、光一は1人気取られない様廊下へ。
そしてゆっくりと建て付けの悪い扉を開いて……

「つまり、姫路の為だろ？」
「そっそういう訳じゃないけど……でも、姫路さんには酷い環境だから、改善してあげたいって気持ちはある」
「素直じゃねえな。まあどうせ、試召戦争はやるつもりだった。世の中学力こそがすべてじゃないって事、その証明がしてみたくてな」

それを聞いて、光一はこそこそするのをやめにして、思いきり戸を開けた。

「何だ？　俺を差し置いて、随分と面白そうな話をしてるじゃないか」
「光一！」
「俺にも一枚かませろよ。そんな面白そうな話、この俺が乗らない訳ないだろ？」

明久はそれを聞いて感激し、雄二も不敵な笑みを浮かべた。

「全く、お前も物好きだな……っと、先生が来た。入るぞ」
「それじゃＦクラス代表のお手並み、拝見と行こうか？」
「ああ、任せておけ」

光一と明久は、雄二に向けてグッと親指を立てた。
雄二もそれに倣い、同様に親指を立てる。

「それより明久、試召戦争を提案したからにはお前も頑張れよ？」
「うっ……」
「“あの事”があるから無理ないか……じゃあさ、俺とコンビ組まないか？」
「改めて言うが、お前も物好きだな。明久とコンビを組みたがるなんて」
「その方が色々と面白そうだから良いんだよ」

吉井明久、坂本雄二、久遠光一。
この後、文月学園で知らぬ者なしと言われる程の問題児トリオとして、一躍名を轟かせる事になる
その第一歩が今踏み出された事は、誰一人として気付く事はなかった。

第二問

問題
以下の意味を持つことわざを答えなさい
（1）得意な事でも失敗してしまう事
（2）悪い事があったうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え
（1）弘法も筆の誤り
（2）泣きっ面に蜂

教師のコメント
正解です。他にも（1）なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、（2）なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

久遠光一の答え
（1）サルを木から撃ち落とす
（2）泣きっ面にマシンガン

吉井明久の答え
（2）泣きっ面蹴ったり

教師のコメント
君たちは鬼ですか

土屋康太の答え

（1）弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね

「Fクラスは、Aクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う」

壇上に自己紹介の為立った筈の雄二の、いきなりの提案。

それに対し、クラスメイト達は当然非難轟々の嵐を巻き起こした

「勝てるわけがない！」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

「姫路さんが居たら何もいらない！」

選りすぐりのバカだからこそのFクラスが、逆の意味での選りすぐりのAに戦争を仕掛ける。

試召戦争は負ければ設備を1ランク落とされるのだから、更に最低になる事を考えれば自殺行為に当たるそれに、非難の嵐が吹き荒れるのは当然だった。

だが雄二は、その非難の嵐に怯む事もなく、代表らしい堂々とした姿を崩す姿勢が見られない。
ある程度治まった処で、不敵な笑みを浮かべ口を開く。

「皆がそう思うのも無理もない。だがこのクラスには、勝てる要素が揃っているからこその発案だ。今からそれを説明してやる」

自信に満ちたその発言に、クラスはしんと静まった。
不敵な笑みを崩さないまま、雄二はある個所に視線を向けた。

「おい、康太。いつまでも姫路のスカートの中をのぞいてないで、前に出てこい」
「……！！（ブンブン）」
「は、はわっ！」

恥も外聞もなく、低姿勢からの覗きこみの体勢を指摘され、必死に顔と手を振って否定し始める少年。
顔に付いた明らかな覗きの証拠を隠しつつ、前に出ていく。

「紹介しよう。こいつがあの有名なムッツリーニだ」
「……！！（ブンブン）

ムッツリーニと言う名に、クラスがざわめいた。
その名は男子から畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を持ってあげられており、その正体は謎。
……とされていた人物が、今目の前にいる。

「バカな、奴がそうだと言うのか？」
「だが見ろ、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？」
「ああ、ムッツリの名に恥じない姿だ」

ただ1人、瑞希だけは頭に疑問符を浮かべていた。

「姫路の事は説明するまでもないだろう。皆だってその力は知ってるはずだ」

「えっ？　わっ、私ですかっ！？」

「ああ、主戦力だ。期待している」

その容姿と共に知られている彼女の成績を考えれば、もっともな話である。

「そうだ、俺達には姫路さんが居るんだった！」

「彼女なら、Ａクラスにも引けを取らない」

「ああ。彼女が居れば何もいらない」

「木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす。」

次に、学力ではあまり聞かない物の、優等生である双子の姉と演劇部のホープという要素で有名な人物。

そして自身もまた、代表として名乗りを上げた。

「坂本って、確か小学生のころは神童とか呼ばれてなかったか？」

「それじゃあ、実力はＡクラスレベルが2人も居るってことかよ？もしかしたら、やれるんじゃないか？」

「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」

士気は確実に上がっていき、ほぼ全員やる気が出始めて来た。

そこへ雄二の一言

「それに、久遠光一と吉井明久、このコンビが居るんだ」

悲鳴が木霊した。

「久遠って……あの学園の過激派筆頭って話の!?」
「ああ。マフィアからスカウトが来てるって話だろ?」
「けど、吉井明久って誰だ? 久遠とコンビってことは、相当な悪人ってことじゃないか?」

先ほどとは違う意味でざわめき始めた。

「ちょっと雄二! どうしてそこで全く関係ない僕の名前を呼ぶのさ!? しかもなんか、変な設定までつけられてるよ!!?」
「久遠の事は知っているみたいだから良いとして、明久を知らないなら教えてやる。こいつは“観察処分者”だ」
「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ?」

誰かのその発言は、明久の心に深く突き刺さった。

「ちっ違うよっ! ちょっとお茶目な16歳につけられる愛称で……」
「そうだ、バカの代名詞であり、久遠の腰巾着同然の雑魚だ。ハンデにはちょうどいい」
「肯定するな! それに自分から降っておいて、そのセリフはないよね!?」
「まあ落ち着け明久。これから挽回してけば良いだろ?」

光一になだめられ、一先ずはと席に着く明久。
それに構う事なく、政治家の演説を思わせるような堂々たる態度で言い放った。

「とにかくだ! 俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服し

たい。皆、この境遇は大いに不満だろう！？」
『当然だ！』
「ならば全員筆を執れ！　出陣の準備だ！」
『おおーーーっ！！』
「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！　Ａクラスのシステムデスクだ！」
『うおおーーーっ！！
「お、おー……」

雰囲気に押され、瑞希も懸命さが見て取れるように小さく拳をふりあげる。
その姿に明久が和んでる所に、雄二の一言。

「明久には、Ｄクラスへの宣戦布告の為の死者になって貰う。無事大役を果たせ！」
「……下位勢力の宣戦布告の使者って、大抵酷い目に遭うよね？しかも今字が違わなかった？」
「大丈夫だ、だまされたと思って行ってみろ。俺は友人を騙す事はしない」
「わかったよ、それなら使者は僕がやる」

下位勢力との試召戦争など、面倒でしかない。
だからこそ、そんな面倒事を持ってくる奴に危害を加えない訳がないだろう。

結局雰囲気に流され、明久は意気揚々と出ていった。
ある程度時間がたったところで、雄二が一言。

「とまあ、ああいうバカだ。皆も危なくなったら、あいつを囮にしてさっさと逃げるように」

「やっぱりか……仕方ない、俺も行ってくる」
「お前も物好きだな」
「お前が酷過ぎるだけだ」

数分後

「騙されたぁっ！！」

そのしばらくの後、明久が教室に転がり込んできた。
Ｄクラスにつかみかかられ、ぼろぼろになった姿を見た雄二は一言。

「やはりそう来たか」
「やはりって何だよ、使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！　光一が来てくれなかったら、今頃どうなってたと思ってるんだ！？」
「それ位予想できないで、代表が務まる訳ないだろ」
「少しは悪びれろよ！！」
「まあ落ち着けよ。こいつが酷いのは今に始まった事じゃないだろ？」

そこへボストンバッグを持った光一が戻ってきて、明久を宥めた。
明久と違い無傷のその姿に、雄二は一言。

「撃ってないだろうな？」
「問題ない。コレクション見せれば、大抵の奴は怯える」
「これは思わぬ収穫だな。生贄ではなく、お前を行かせるべきだったか？」
「生贄って言った！？　今生贄って言ったな！！？」

内容を考えたら、当然の表現である。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「大丈夫、吉井？」

制服までぼろぼろにされた明久に、瑞希と美波が駆け寄った。

「あ、うん。平気だよ、心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……ウチが殴る余地は、まだあるんだ」

「ああっ！　もうダメ、死にそう！！」

冗談と分かっていても、光一はその言葉に戦慄を覚えた。

そしてうめき声を上げ始めた明久に、手を差し伸べる。

「……ほら、立てるか明久？」

「え？　うん、ありがとう」

「そんな事より、今からミーティング行うぞ？」

と言う雄二の言葉に従い、主要メンバーは屋上へ。

そして、屋上にて。

「で、明久。時間は伝えたのか？」

「うん、今日の午後からって伝えといた。だから先にお昼ご飯だね？」

「じゃあ明久、今日くらいはまともな飯食えよ？」

「そう思うなら、パンでもおごってくれると嬉しいな？」

彼、吉井明久は生活破綻者である。
彼は1人暮らしであり、親からの仕送りを元手に生活しているが…
…仕送りを後先考えず趣味に費やす為、本人いわく“清貧生活”を
送っていた。

「あれ、吉井君ってお昼食べない人なんですか？」
「いや、一応食べてるよ？」
「水と塩、もしくは砂糖じゃ食べるとは言わん。全く……ほれ」

光一は取り出したカロリーメイトを、明久に投げ渡した。
それを見て、明久は表情を輝かせる。

「賞味期限切れだけど、良いか？」
「あっ、うん。食べられるなら」
「お前、明久の奥さんみたいだな？　何かと世話焼いてる事と言い」
「それは身近にズボラが……」
「光一よ、その先はならん！！」

光一が口を滑らせようとしたところで、秀吉の制止が入った。
その事に気づいて、ホッと胸をなでおろした。

「……そっそうだったな。すまん秀吉、助かった」
「ズボラが、どうかしたのか？」
「いや、何でもない。それよりさっさと食っちまおう」
「そっそうじゃ。戦争に向けて、力をつけねば！」

多少不自然そうに、光一と秀吉は話をそらした。
その姿に疑問符を浮かべるも、皆は食事に。

明久は光一からもらったカロリーメイトを、少しずつ味わい噛みし

めていた。

「久しぶりに固形物を食べるって、幸せだね……」
「全く……彼女でも作って、生活全般を管理してもらった方が良いんじゃないか？」
「光一が管理してやれよ。明久みたいなバカに彼女なんて無理だろ」
「雄二、せめて即答で言わないで！！　……ううっ、何だか変わったチョコレート味だね？」
「いや、それチーズ味だ」

色がドス黒いのは、明久が血の涙を流しているからである。
ふと光一が瑞樹に視線を向け、瑞希が何か決心した様な表情をするのを見て、ほほ笑む。

「……あの、良かったら私が、お弁当を作ってきましょうか？」
「ゑ？　……ほっ、本当に良いの！？」
「はい。明日の昼でよければ」
「へぇっ、良かったじゃないか明久。女子の手作り弁当なんて、撃ち殺したい位羨ましいぞ」
「うん！　……でも、後半が全然笑えないよ？」

冗談だとは分かっていても、光一だからこそ笑えない明久だった。

「ふーん。瑞希って、随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」
「あ、いえ！　その、皆さんにも……」
「え？　俺達にも？　いいのか？」
「はい、嫌じゃなかったら」

女の子の手料理を断る外道など居る訳もなく、全員が喜んだ。

作る当人は、７人分となると大変なのに、嫌な顔一つしない。
その様子に明久は、再度彼女に再度関心の視線を向けていた。

「それじゃ雑談はそこまでにして、そろそろ本題に入らないか雄二」
「ん？　ああ、そうだな」
「気になっておったのじゃが、なぜＤクラスなのじゃ？」

まず真っ先に、秀吉が疑念をぶつけた。
それもそのはず、段階を踏んでいくならＥクラスが妥当であり、目的はＡ。

「簡単だ。姫路に問題がない今、Ｅなら正攻法でも勝てるが、Ｄクラスは難しい。それに初陣だから派手にやって景気つけたいし、Ａクラス攻略の為に必要な要素がＤクラスにはある」
「成程。つまりこれは、最初のステップってわけだな？」
「ああ。ここにいるメンバーは最強だ、お前達が俺を信じて協力してくれるなら勝てる！」

雄二の確信した表情による言葉に、全員が頷いた。
そして光一と明久は、拳を打ち合う。

「それじゃやるか、明久」
「うん！　僕達コンビの力、見せてやろう！」
「代表として、頼りにさせてもらうぞ。光一だけ！」
「ひどい！！」

Ｄクラス　ＶＳ　Ｆクラス
今年度初の試験召喚戦争が、幕を開ける

「ほぉ～っ、今年の2年は1学期初日から試召戦争やろうってのかい？　面白いじゃないか、承認してやりな」
「承知いたしました」
「さて、どうなるかね？　見せて貰おうじゃ……ん？　Fクラスと言えば、例のガキどもが居るクラスかい？」
「はい。吉井明久、久遠光一……“観察処分者”と、その候補です」
「そうかい、それはますます面白そうじゃないか……見せてもらうよ、ガキども」

第三問

問題
以下の英文を訳しなさい
『Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ　ｈａｄ　ｕｓｅｄ　ｒｅｇｕｌａｒｙ.』

姫路瑞希の答え
『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

久遠光一の答え
『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント
正解です。きちんと勉強していますね。
しかし、久遠君は素直に喜べないのはなぜでしょうか？

土屋康太の答え
『これは』

教師のコメント
訳せたのはＴｈｉｓだけですか

吉井明久の答え
『☆●◆▽♪＊―　―』

教師のコメント
出来れば地球上の言語で。

試験召喚戦争　Dクラス対Fクラス

「よし、Fクラスの……げっ！　あれは、さっきの！　まさかあいつ、やっぱ久遠光一か！？」
「うっ、ウソだろ！？　何であの久遠が先陣なんだよ！？」
「くそっ、騙された！　そうだとわかってたら、中堅に回ってたのに！！」

Dクラスと Fクラスの先遣部隊の衝突。
……だがDクラス先遣部隊は、その先頭に立つ少年の姿に怖れ、即座にパニックに陥ってしまう。

「すごいね。光一の姿を見た途端、皆動揺しちゃってるよ？」
「このどこから見ても立派な青少年に対して失礼な……」
「普通どこから見ても立派な青少年は、モデルガンとは言え銃を持ち歩かんと思うのじゃが」

その後ろに従えるは、彼の相棒の吉井明久と幼馴染の木下秀吉。

先遣隊長を買って出た久遠は、手を掲げて号令を。

「よし、やるぞ！」

『おおーーーっ！！』

「くっ……ひっひるむな！　所詮はＦクラスなんだ。俺達はＤクラス、勝てるぞ！！」

『おっ……おお！』

向こうも先遣隊長が負けじと、号令を上げるが……

やはり、尻込みしてしまい意気消沈。

「では、始めてください」

学年主任の高橋女史の立会、彼女を中心に召喚フィールドが展開される。

先陣を切ったのは、Ｆクラス

「Ｆクラス先遣隊隊長久遠光一、行くぞ！　召喚獣召喚、サモン！」

光一の足もとに幾何学的な図形が現れ、その後に召喚獣が現れた、毛皮のジャケットに、黒いスラックスに編み上げブーツ、そして右手にはライフル、左手に自動拳銃を持ったデフォルメ光一。

「やっぱり光一のって、銃なんだね？」

「俺と言えば銃だ。それ以外が出たら、召喚システムの方に欠陥があると断言できる」

「久遠君、問題発言……」

「よし、光一に続くぞ！　吉井明久、出る！」

高橋女史の声は、即座に明久にかき消された。

続いて全員が召喚獣を次々と召喚。

「くっ……ひっひるむな！　相手は所詮はＦクラス、俺達Ｄクラスなら敵じゃない！！」

尻込みしているのがわかる先遣隊長の号令で、Ｄクラスも応戦。
まず１人が、光一の召喚獣めがけて襲いかかった。

「久遠光一、その首もらったあ！！」

その召喚獣に光一の召喚獣はまずライフルを構え、引き金をゆっくりと引いた。
放たれた弾丸は敵召喚獣の腕を弾き、武器を落とした所をすかさず左手に握られた拳銃を構え、何発も撃ちこむ。

「そっそんな……！？」
「確かに俺は所詮Ｆクラス程度の点数だが、お前らはミスをした。俺の弾丸は必ず当たる」

そのままライフルを召喚獣の頭にむけ、それで撃ちぬいた事により敵召喚獣は持ち点０となって消えていった。
それと同時に

ドンっ！！

と言う効果音を上げて現れるは、チンパンジー……もとい、生徒に畏怖をもって“鉄人”称される漢。
補習室の暴君にして、生活指導の鬼と呼ばれる西村教諭の姿。

「てっ鉄人！？」

「戦死者は補習室へ集合!!」

先ほど光一にやられた召喚獣を操る生徒が、あっという間に担がれてしまった。

「さあ来い、この負け犬が!!」

「いっ、嫌だ!　鬼の補修は嫌だあああああ!!」

「安心しろ。“趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎”と言う、立派な模範生に仕立て上げてやる!」

「たっ助けて!!　誰か……助けてえええええええ!!!」

死に物狂いで逃げようとするも、びくともせず。

そのままその生徒は、補習室へと連行されていった。

その場に残った、自身にも起こりうる最悪の未来……その戦慄を残して。

「哀れな……じゃが、これは戦いじゃ。躊躇えば、次は我が身やも知れん」

「じゃあ俺のは遠距離型だから、後方援護に回る。明久と秀吉は俺のガードを、皆は今のうちに各個敵をたたけ!」

「あっ、ああ。よし、やれるぞ!」

「久遠が居れば、おそるるに足らずだ!!」

光一の号令と活躍で一気に士気が上がった傍らで、犠牲者が出たDクラスはいきなり動揺。

それもそのはず、一歩間違えばああなっていたのは自分かもしれないのだ。

「なっ、なあ……逃げないか?」

「そっそうだよ！　あいつと戦う位なら、俺もうFクラスの設備でいい！　鬼の補修が確定されるなんて嫌だ！」
「そうよ！　あんなのがFにいるなんて、聞いてないわよ！！」
「だっ、だったら誰か、五十嵐先生と布施先生を呼べ！　確かにあいつは恐ろしいが、点数は所詮はFクラスなんだ。消耗させれば後はこっちの物だ！」

召喚獣は、召喚者が最後に受けたテストの点数で、強さが決まる。
そして消耗に応じて点数が減っていき、0点になれば戦死。
他にも細かなルールはあるが、ここでは割愛。

『久遠光一　総合科目８９０点』

「流石、銃に関してはすごいのう。まるで熟練の技じゃ」
「秀吉、俺を誰だと思ってる？　それより中堅部隊を何人か呼んでくれ。明久、お前は俺のガードだ」
「うん、わかった」
「任せるのじゃ」

明久も召喚獣を出し、秀吉はいったん後退。
ふと、秀吉が立ち止った。

「そういえば光一」
「ん？　何だ秀吉？」
「何故、明久とのコンビなのじゃ？　成績や付き合いで言えば、ワシの方が上じゃというのに」
「俺の召喚獣の特性と、明久の“観察処分者”の利点……まあそれは、すぐわかるか」

Fの兵隊を倒した敵召喚獣が、光一の召喚獣めがけて襲いかかって

きた。

「よし、もらった！！」

「明久、頼む！」

「ええ！？　……援護は頼むよ！？」

それを、改造制服に木刀と言う装備の明久の召喚獣が食い止めた。

敵召喚獣が、そのまま力押しで押し切ろうとしたところで……

「明久」

「うん」

明久が受け流し、敵召喚獣が体勢を崩したところで光一の召喚獣がその頭にライフルを当てて……。

「鉄人、補習室1人追加でーっす」

と、笑顔で宣言したと同時に、ライフルの引き金が引かれた。

「西村先生と呼ばんかバカ者が！」

「俺の事より、戦死者が逃げようとしてますよ？」

「ひっ！」

「ちぃっ、逃げられると思うな！！　戦死者は1人残らず補習だあああ！！！」

人間とは思えないスピードで駆け出し、そのままとらえ補習室へ。

その場に断末魔の名残にも似た戦慄を残して……

「流石は観察処分者。動きに精密さがあるから、相手の隙を作るにはこれ以上ないパートナーだ」

「え？　どういう事？」
「お前は召喚する機会が多いだろ？　それにフィードバックもあるから、通常より高精度な動きが出来る。俺は精密射撃が得意だから、お前とは相性が良い」
「？？？　……よくわからないけど、でもこれならいけそうだね！」
光一が居てくれて助かった」
「油断するな明久……ちっ、まずい！」

光一の視線の先には、２人の教師の姿。
化学の五十嵐教師と布施教師。

「全員分隊を維持して、敵を確実に撃破する事を考えろ！」
「雑魚に時間をかけるな！」

戦線は拡大され、あちこちでは個別にぶつかり始める。
Ｄクラスとｆクラスでは、単体での戦闘はあまりにも分が悪く、押され始めていた。

「さて……明久、化学は？」
「……聞かないで」
「奇遇だな……」
「明久、光一よ！　援軍じゃ！！」

そこへ秀吉が美波をはじめとする、中堅部隊の援軍をひきつれ登場。

「ちぃっ、合流は絶対にさせるな！」
「言った筈だぜ？　俺の弾丸は当たる……それは」

光一の召喚獣が両手の銃を構え、辺りを見回し始める。
そして、光一が軽く息を吸い……。

「動く多数の的だろうと、例外じゃないんだよ！」

左手に握られた拳銃から放たれた弾丸が、敵召喚獣の足を。
右手に握られたライフルから放たれた弾丸は、敵召喚獣の武器を破壊。
しかも全て命中し、大半が行動不能に陥った。

「よし、今のうちに下がれ！　……ちときついわ、これ」
「すっすごいね。本当に全部当たってたよ？」
「射撃に関しては、俺にミスはない……それより先遣は中堅と交代だ！　補充テスト受けるぞ！」

久遠光一　化学　１２点

「まずい、無事な奴は久遠に攻撃をしかけろ！　このチャンス、絶対にものにするんだ！！」
「危ない、光一！」

光一の召喚獣を狙った敵召喚獣を、明久の召喚獣が対抗。
召喚獣の拳銃が火を噴き、敵召喚獣の腕に当たって武器を落とした。

久遠光一　化学　１点。

「ギリギリ持ちこたえたか」
「今のうちに、補給を！！」
「すまん明久、恩にきる！」

先遣部隊は補給に。
明久と秀吉は、中堅部隊と合流してＤクラスと交戦。

Fクラスの教室にて。

「それで、明久とのコンビはどうだ？」

化学の補給テストを受けている最中、代表の雄二からの言葉。

「予想以上にしっくりくる。あいつの観察処分者の肩書き、俺とのコンビなら最強に出来るな」

「成程。流石は久遠だ、－１＋－１兆を、１０にも２０にもできるか」

「さり気に人をけなすんじゃない。しかも何で片方の桁が違うんだよ？」

「坂本ー！　吉井副隊長から伝令だ！」

全く……とぼやきつつ、テストを進める光一。

最も彼は、学力はＦクラスにふさわしい程度しかもっていない。

「あのぉ……」

「ん？」

そこへ、この戦争の切り札であり、現在全科目のテストを受け直している最中の瑞希が声をかけた。

最後に受けたテストは振り分け試験の為、途中退席した彼女は現在全科目０点。

なので現在、テストを受け直している最中だった。

「吉井君、大丈夫でした？」

「あいつなら大丈夫。俺とのコンビネーションで自信をつけた筈だから」
「本当ですか？　良かった……」
「ははっ。まああいつとはこの学園からの付き合いだけど、そう簡単にやられやしない……」
ピンポンパンポーン♪
『連絡いたします！　船越先生、船越先生。吉井明久君が、体育館裏で待っています。教師と生徒の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです！』
「……と信じたいな。可能性、恐ろしく低いかも知れんが」
「あっ、あははっ……」
「よし、これで戦線拡大阻止は大丈夫だろ。さて、そろそろ中堅部隊と合流するぞ！」
船越教諭　４５歳独身
婚期を逃し、ついには単位を盾に生徒に交際を迫る様になった女性教師。
吉井明久　本日2回目の生贄となる。
生存確率　０．０（数ケタ省略）０１％
「……つくづく思う事だが、あいつ明久の人生と命をなんだと思ってるんだ？　よりにもよって船越女史の生贄に捧げるだなんて、正直容赦ないを通り越してるだろ」
「あっ、あの……」
「……明久、もし生まれ変わりがあるとしたら」
「久遠君！　吉井君はまだ死んでませんよ！？」

数分後、身心ともに憔悴しきった姿で補給試験を受ける明久の姿があったという。

第四問

問題
以下の問いに答えなさい
（１）４ｓｉｎＸ＋３ｃｏｓ３Ｘ＝２の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するＸの値を１つ答えなさい。
（２）ｓｉｎ（Ａ＋Ｂ）と等しい式を示すのは次のどれか、？～？の中から選びなさい
？ｓｉｎＡ＋ｃｏｓＢ　？ｓｉｎＡ－ｃｏｓＢ　？ｓｉｎＡｃｏｓＢ　？ｓｉｎＡｃｏｓＢ＋ｃｏｓＡｓｉｎＢ

姫路瑞希の答え
（１）Ｘ＝π／６
（２）？

教師のコメント
そうですね。角度を『。』ではなく『π』で書いてありますし、完璧です

久遠光一の答え
（１）Ｘ＝３０。

教師のコメント
惜しいですが、ニアミスです。
象限における角度は『。』ではなく『π』で書いてください。

土屋康太の答え

（1）X＝およそ3

教師のコメント
およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え
（2）およそ？

教師のコメント
先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを着ける生徒は君が初めてです。

Fクラス　姫路瑞希　現代国語　３３９点
ＶＳ
Dクラス　平賀源二　現代国語　１２９点

「え？　あ、あれ？」
「ご、ごめんなさい！」

FクラスＶＳDクラス、姫路瑞希の召喚獣の一撃により、Dクラス代表戦死

この瞬間、試験召喚戦争はFクラスの勝利となった。

「おいおい、一撃かよ。流石は姫路、我らが切り札だ」

「いっいえ、そんな……」

先ほど明久と共に、平賀に攻撃を仕掛けようとした光一は、先ほどの光景を思い出して茶化す。

瑞希もほめられ、顔を赤らめた。

「ほら、明久も……あれ？」

「す、ストーップ！　僕が悪かった！！

先ほどまでいた筈の場所にはおらず、雄二に腕をひねりあげられている明久。

その足元には包丁が落ちており、光一はどうしてこうなったかを即座に理解した。

「あの放送は雄二の指示だから、明久がああなるのは仕方ないが……」

「久遠君は、吉井君には優しいですね？」

「あいつには何故か、通じるものがある様な気がしてな……皆の様にいじる気にはなれんだけだ」

解放されて、顔を青ざめた明久がよろよろと退却。

光一は呆れるも、駆け寄ってポンポンと肩をたたく。

「大丈夫か？」

「うん、まだ大丈夫……生爪はがされるよりは、ね」

「そうか……さて、そろそろしめと行こうか？」

と言う光一の言葉で、雄二をはじめとするFクラスはDクラス代表へと視線を向ける。
敗残軍としてへこたれる中、ゆっくりと力なく立ち上がる代表の平賀源二。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて、信じられない」
「彼女は試験の時、体調不良で途中退席したんだ。だからFなんだよ」
「そうだったのか……じゃあ久遠さえ倒せば楽勝だと甘く見た時点で、俺達の負けは確定してたんだな」

さて、ここからは終戦後のルールが適用される。

試験召喚戦争において、勝者が下位クラスだった場合は敗者のクラスの設備を交換する事が出来る。
そして負けた勢力は、3ヶ月経たなければ次の戦争を起こせない。
勝てば英雄の様に扱われる代表も、負ければ戦犯として手酷い扱いを受ける立場……つまり。

「……ルールに従って、クラスは明け渡そう。ただ今日はもう遅いから、作業は明日からでいいか？」

彼はFクラスの最低設備で、クラスメイトに恨まれながら過ごさなければならないという事。
その表情からは、これから受けるだろう恨みと罵倒への不安しか見てとれなかった。

「いや、その必要はない」

……が、雄二のその一言が、それを一気に払い去った。

「え？　それは……どういう事なんだ？」

「Ｄクラスには、ある事をしてもらいたい。それを呑んでくれれば、設備は見逃してやる」

「……話を聞かせてくれ」

雄二に伴なわれ、Ｄクラスへと歩を進めていく代表。

それに続いて、光一は明久を連れて駆け出す。

「で、代表は何を御所望するつもりだ？」

「言っただろ？　Ｄクラスには、Ａクラスを倒すためのステップとして必要な要素があると。それはあれだ」

窓際に歩み寄った雄二が、ある個所を指差した。

それは、Ｂクラス用の室外機。

「俺達の合図にしたがって、あれを動かなくしてほしい。タイミングは、俺が指示する」

「……わかった。上手くやれば、厳重注意だけで済みそうだ」

最低設備の下で、３ヶ月もの間恨みと罵倒をぶつけられる事を考えれば、まだいい方。

そう考え、平賀氏は呑む事に。

「でも、室外機なんて壊して、一体何の意味が？」

「さあな、代表には代表の考えがあるんだろ。ダメだったら思いきり罵倒してやればいいさ」

「それもそうだね。今回の事で戦争のコツとかもわかった気もするし、次も頑張らないと」

それを見ていた明久と光一の会話が終わった処で、雄二が号令。
本日は解散となった。

「さて秀吉、俺達も帰るか？」
「そうじゃの。ならば代表に明久、お疲れ様なのじゃ」
「ああ、今日はゆっくり休んで明日のテストがんばってくれ」
「じゃあまた明日」

明久に雄二と別れ、秀吉と光一は帰宅準備を整え帰宅。
ちなみに秀吉と光一の家は、お隣さん同士である。

「よもや、ワシらがDに勝つとはのう。光一による物も大きいじゃろうが、流石じゃ」
「ははっ……俺だけっていうの、確定なんだな？」
「いや、明久も立派に戦ったとは思うぞい。だがやはり、光一と比べるとのう」

何事も、フィニッシュを決めた者が映える物である。
それに援護の面でも、彼による戦果は大きい。

「それにしても、疲れたな。なんか食べて帰るか？」
「そうじゃな。精密射撃ともなると、疲れる物かの？」
「当たり前だ。集中状態を維持するって、すごい疲れるんだよ」
「あら、光一に秀吉。今帰り？」

秀吉に近い質の声に振り向くと、そこには……

「何だ秀吉、いつの間に着替えたんだ？」
「光一よ。ワシら姉弟が揃うなりそういうボケをするの、いい加減

やめてもらえんか？」
「いや、これって双子だからこそのお約束だろ。そう思わないか、優子」
「アタシはこっち！」

秀吉の双子の姉にして、光一のもう一人の幼馴染、木下優子。
Ａクラス所属の優等生であり、教師達から光一達と真逆の意味で覚えの良い模範生である。

「こんなところで何してるんだ？　もう殆どの生徒は帰ってる時間なのに」
「職員室で明日配る資料の整理を頼まれたのよ。それより、どうだったの？　試召戦争は」

新学期早々行われた試験召喚戦争は、当然話題にもなる。

「ちと苦労したけど、俺達の勝ちだ」
「じゃあ明日からは、教室が近くなるのね」
「ああ。まあ今日は遅いから、明日から入れ替えだ」

目的はＡクラスだと言う事は、伏せておいた。
優子がＡクラスだと言う事もあり、ヘタに察知されればこれからに支障が出る。

そう考えての上で、先ほどのやり取りを聞かなかった事に。

「そうなると、明日からは大騒ぎね」
「まあ最低クラスがいきなり２つ上のＤを破ったって事は、大きな波紋になるだろうな」
「全く、余計な騒動の火種を作ってくれたものね。まあ学校からし

てみれば、好都合なのでしょうけど」

元々学力低下の解決の為のシステムが、試験召喚システム。
テストの点数こそが全てであり、優等生こそが正義が文月学園の理である。

だから現状に甘え、ぬくぬくと過ごしていれば寝首を掻かれる。
そのいい教訓になるだろう。

「そういう意味では、俺達の決起も無意味じゃない訳だ」
「調子に乗らないで！　ろくすっぽ努力もせず、不満だけを声高に掲げる様な人たちが調子に乗る事まで、肯定する気はないわ！」
「それは最もだけど、立場と扱いは人を変えるって言うし、明日からは違うかもしれないだろ？」

優子とて楽してＡクラスに所属する才女になった訳ではない事は、光一とて重々に理解している。
少なくとも、Ｆクラスのバカ共とは違うという事は。

「私も、もっと頑張らないと」
「ならまずは、家の中を下着姿でうろつくのはやめ、その関節はそっちに……」

文月学園に、断末魔が響き渡った。

そして、その帰り道

「いってー……復活に時間がかかるまでやることないだろ」
「うるさいわね、私の評判に傷がついたらどうする気よ！？」
「その前に問題児とはいえ、堂々と同級生に暴力をふるう時点でお

かしくないか？」

怒りのオーラを纏い、先ほどやられた個所を摩る光一を睨みつける優子。

実は彼女、学園では模範的優等生である事で有名だが、プライベートではドがつく程ズボラだった。

「それに言われたくないなら俺が来た時位まともな格好してくれ。１００歩譲ってジャージ位は」

「いや、それもどうかと思うのじゃが」

木下姉弟とは幼馴染と言う間柄で、しかも家が隣なので彼は遊びに行く事が多い。

だから、優子の下着姿を見た事は１度や２度ではない。

「まあ見慣れた上に寸胴だから、大して面白くも何ともないけど」

「それは腕と足がいらないと解釈しても良いのね？」

「ん？　光一よ、あれは明久ではないか？」

秀吉の視線の先には、とぼとぼと歩いている明久の姿。

流石に光一と秀吉以外に暴力的な姿を見られるのは勘弁なのか、優子もそれを聞いて殺気を納めた。

「よう明久、どうした？」

「ん？　ああ、光一に……あれ、秀吉？　どうして女子の制服着てるの？」

「ワシはこっちじゃ。それはワシの姉上じゃ」

「姉上って、じゃあもしかして木下優子さん？　へえっ、確かに秀吉そっくりの美少女だね」

「ワシを基準にするでない」

秀吉とは仲が良くても、優子とは縁の薄い明久。
基本遊ぶのは明久の家である事が多い為、彼女とは面識がなかった

「彼が“観察処分者”の吉井明久君？　へえっ、どんな極悪人かと思ったら、意外とまともそうね」
「極悪人って……ねえ、僕の評判って一体どうなってるの？」

学園１の過激派と名高い光一の相棒なのだから、そういうのも無理もない。

「それより、どうしたんだ明久？　偉く落ち込んでるようだけど？」
「あっ、うん。ちょっとショックなことがあってね」
「ショック？　……何があった？」

光一がかけより、明久と向き合う。
それを優子が、顔を赤くしてそれを凝視し始める。

「……」
「フムッ、そういえば、姉上の部屋に光一と明久のあっ、姉上っ、違っ！　その関節は、そっちに曲がらな……」

訂正、優子が秀吉に関節技をかけつつ、その光景を凝視し始める。

「姫路さんに、好きな人が居るって話を聞いてね」
「ああっ、その事か」
「あいたたた……なんじゃ、随分と面白そうな話ではないか？」
「姫路さんって、あの姫路さん？」

恋の話ともあって、木下姉妹（笑）もそれに駆け寄った。

秀吉は先ほどやられた関節技の痛みで、よろよろと遅れての到着。

「それが誰かっていうのが、わかっちゃったから」
「おっ、そうなんだ」

光一はにやにやとし始め、優子と秀吉はその様子を見て光一の考えに感づいた。

（姫路さんって、まさか吉井君の事を？）
（うむっ、明久に話しかけられ動揺しておったり、お弁当を作ろうかと提案したりとかの）
（そうなんだ。彼も“観察処分者”なんて言われてる割には、意外とやるわね）

勘づいてからは、２人してこそこそと内緒話。
美人姉妹の内緒話と言うのも絵になる光景だが、そこは割愛。

「でも意外だったな……まさか姫路さんが、雄二の事が好きだなんて」
「ああ、そりゃ確かに……「「はい？」」」

光一と秀吉、優子が明久の口から出た答えに、素っ頓狂な声を揃えてあげた。

「ちょっと待て。今なんつった？」
「だから、雄二だよ。驚くのも無理ないかもしれないけど」
「一体なぜ、そのような答えに至ったのじゃ？」
「さあ？　でも、姫路さんも雄二と話してる時一生懸命だったし、あそこまでだったらクラスメイトとして、応援してあげないとね」

と、明久は自分の家の方向へと走り去ってしまった。
その場に残された人間は……

「あれって多分、坂本君に吉井君の事を相談してた場面に出くわした……そう考えても良いのよね？」
「うむっ、確実にの……姫路も気の毒にのう。自身の行動が、これ以上ない程裏目に出るなどとは」
「明日は違う意味でも、大きな波紋が起きそうだな」

第五問（前書き）

ＰＶ１万突破！

連載開始１０日でここまでとは、誠にありがとうございます。

今後とも、この作品をよろしくお願いします

第五問

問題
以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい
『光は波であって、（　）である

姫路瑞希の答え
『粒子』

教師のコメント
よく出来ました

久遠光一の答え
『ビーム』

教師のコメント
先生も昔は憧れていました。

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もＲＰＧは好きです。

「あれ？　どうして？」
「ん？　どうしたの？」

一時限も終わり、折角だからと元Ｄクラスの教室へと出向いた優子。
そこにいたのはＦクラスの筈なのだが、元の通りのＤクラスの面々。
中をのぞいてみたら、通常通り過ごしている光景があるだけで、引越しの準備には到底見えない。

そして何より、目の前にいるＤクラス代表もいつも通りである事。
誰も彼に対し、恨みや侮蔑の視線を向けてはいない。

「Ｄクラスは負けた筈なのに、なんで明け渡す準備をしてないの？」
「ああっ、設備の入れ替えは免除してもらったんだ。ある取引をしてね」
「ある取引？　……そう。それなら、邪魔してごめん」

その言葉に引っかかりを感じて、優子は一路Fクラスへ。
その去って行った姿をみて、話し相手であった平賀源二は一言。

「もしかして、久遠と付き合ってるって言う噂、本当なのかな？」
「どうしたの、代表？」
「いや、何でもない。それより、テストの勉強しないと」

事なきを得たとはいえ、Fクラスに負けた敗残勢力であることには変わりはない。
なので来るべき次に備え、勉学に励むようになったという。

そして、旧校舎にて。

「なっ……何ここ？　Fクラスって、こんなに酷いの？」

教室に出向くなり、優子はその光景に顔を顰めた。
設備に差がある事や、それによりFクラスは最低である事は知っていた……が。

開け放たれている扉から見える光景は、Aクラスである優子には衝撃的なものだった。
確かにこれでは、今すぐ変えたくなっても無理もないかもしれない。

「ますます怪しい……何で、この設備を取り換えなかったの？」

キノコの生えた腐食畳、脚の折れた卓袱台、ぼろぼろの座布団。
中には卓袱台を木工ボンドで修理していれば、窓をビニールとセロテープで修繕している生徒の姿も。

「ん？　姉上、何故ここに？」

その中の２人、弟である秀吉が気付いて駆け寄った
それを聞いて、幼馴染である光一も同様に。

「何だよ優子、Ａクラスの一員様がこんな汚い所に何の用だ？」
「何の用だじゃないわよ。一体どういう事？　折角だからって顔出してみたら、設備を入れ替えていないなんて」
「代表の意向だ。詳しくは俺も知らん」

その言葉に、優子は引っかかりを感じた。
……が、所詮はよそのクラスである自分に、ばらす訳がないとあきらめる事に。

「うあ～……」
「あの、大丈夫ですか吉井君？」
「うっ、うん……貞操は守る事が出来て、良かった」

ふと、卓袱台に突っ伏して唸り声をあげている男子と、それに心配そうに見守る女子の姿が目に入った。

「ん？　あれは、吉井君じゃない。どうしたの？　テスト疲れってだけじゃなさそうだけど」
「昨日の放送についてだ」
「ああっ、船越先生に男女の会合の呼び出しをしたって話よね？」

全校放送であった為、優子も例の放送は聞き及んでいた。
偉く酔狂なマネをと思ったが、状況的に考えればそういう作戦なのだろうと、即座に考えつく。

「作戦とはいえ、明久も災難じゃったのう。偉く目をつけられておった様じゃし」
「ああ。近所のお兄さん（３９歳独身）を紹介して、事なきを得たらしいけど」
「Ｆクラスにも色々あるのね……それより」
優子は少し視線をずらし、明久の席の隣の席に座る瑞希にピントを合わせた。
幸せオーラに身を包みながら、明久を微笑ましく見守る姿を見て一言。
「確かに、見ればわかるわね？　同じ女性として、羨ましい程に」
「そうじゃのう。何故あれで坂本に好意があると、断定できるんじゃろうか？」
「わからん。けど明久の場合、言える事はただ１つ」
コホンっと咳ばらいをし、一言。
「鈍感な人間と言うのは、総じて自信を持っていない人間の事だと思う」
「成程のう。可能性を考えつく事は出来ても、自信の無さ故に否定してしまうと言った処じゃろうか？　確かにそれでは、上手くいく訳がないわい」
「見た目はそれなりにまともだから、傍から見ればお似合いなのにもったいない」
はぁっ、と３人そろってため息をついた。

Fクラスのテスト漬けの午前が終わり、昼休み。

「よし、昼飯でも食いに行くぞ！　今日はラーメンとかつ丼とカレーと炒飯にすっかな？」

「あっ、じゃあウチも一緒していい？」

雄二の言葉に、美波が駆け寄った。

その近くで話していた明久と光一、秀吉も同意。

「それじゃ僕は、贅沢にソルトウォーターでも」

「……奢ってやるから、塩水を贅沢と言うのはやめろ。そんなじゃそのうち倒れるぞ？」

「だって、新作ゲームや漫画は毎月出るし、発売日に手に入れるのが当たり前じゃないか」

「けどそんな生活がバレたら、確実に1人暮らしをやめさせられるぞ？」

「うっ……」

普通に考えて、明久の生活は一定水準を遥かに下回る。

仕送りをしているにもかかわらずこれでは、意味がないと思われても文句は言えない。

「お前ら、本当に夫婦みたいだな」

「そうよねー。久遠って世話焼きなのは知ってるけど、ダメ亭主と世話焼き女房にしか見えないわ」

「確かにのう。世話焼き気質、ここに極まれりじゃ」

「……同意」

4人4様の反応を見せる中で、1人の少女がその空気を崩した。

「あっ、あの、皆さん？」
「ん？　どうした姫路……って、あれ？　そのお重箱は？」
「あの、昨日の約束の」
と、恐る恐る手に持った重箱を差し出す瑞希。
それを見て、全員歓喜の声を上げた。
「へぇっ、本当に作ってきたのか。しかも重箱にだなんて、大変だったじゃないか？」
「いえ、そんな事は……だから、御迷惑でなければ」
「迷惑なもんか。ねっ、雄二！」
「ああっ、そうだな。ありがたい」
「そうですか？　よかった～」
ほにゃ～ッとした笑顔で、喜ぶ瑞希。
「むーっ、瑞希って意外と積極的なのね」
その中で、明久を睨みつける美波。
「折角の姫路の手料理、こんな汚い所で食う物じゃないな」
「そうじゃの。屋上で食べると言うのはどうじゃ？」
「そうだな。今日は天気も良いし、ちょうど良い。それじゃ先行って場所を確保してくれ。飲み物買ってくる」
「あっ、それならウチも行く。１人じゃ持ち切れないでしょ？」
雄二と美波は、一路１回の売店へ。
その残りは、明久が瑞希から弁当を受け取って、屋上へと歩を進めた。

「結構重いね。こんな量、作るの大変だったでしょ？」
「その……がんばりましたから。それに、喜んでいただけるならこれ位は……」
「なんか、姫路さんの旦那さんになる人が羨ましい」
「えっ！？　でっでしたら、その……」
その会話を、傍から聞いてる光一と秀吉は。
「……なあ、秀吉」
「何じゃ？　あれで本当に気付いてないのかと言う疑問なら、ワシもちょうど同じ事を考えておったぞ」
「そうか……空気的には見ててほのぼのするけど、実際には姫路が気の毒なんだよな」
傍から見れば、ほのぼのとした恋人らしい雰囲気の光景。
事情を知る者として、どうしても姫路が気の毒に見えてしまう光一と秀吉だった。
「どうにかしてやりたいのう」
「明久自体、既に姫路の相手は雄二だと確定……おーいムッツリーニ、階段の下で低姿勢になるな」
「……！（ブンブン）」
その後屋上に到着し、シートを広げて陣取り完了。
「風と日差しが心地いいね。それにお弁当も楽しみだな」
「ああ。こんな好条件で女子の手料理を食べるなんて、俺達健全なる男子高校生にとって最高の贅沢だ」
「うむっ、男として心から同意じゃ」
「……（こくこく）」

「あの……あんまり、自信がないのですが」

期待が渦巻く中、瑞希は中央に置かれた重箱のふたを持ち上げる。

そして、瑞希作のお弁当の全容が、今明らかに！

「「「「おおっ！」」」」

今、４人の男の声が一つとなった。

「すごいなあ。流石は姫路さん、料理までできるなんて」

「うむっ、良い嫁さんになりそうじゃ」

「そっそんな……」

「じゃあ早速って、あっ！」

その破滅の足音は、誰一人気付かなかった。

「ずるいぞ、ムッツリーニ！」

しかし、それは着々と近づいていて……

「……（パクッ）」

今、それは明らかとなる。

バタンッ！！！　ガタガタガタガタガタ……

彼らの身に降りかかる、大いなる災厄の姿に。

「……ってちょっと待て、何でミステリー風味なんだよ！？」

「何がですか？」

「いや、こっちの話。そんなことより、どうしたんだムッツリーニ！？」

第六問

問題
『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え
『Ｃ６Ｈ６』

教師のコメント
簡単でしたかね

土屋康太の答え
『ベン＋ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント
君は化学を舐めていませんか

吉井明久の答え
『Ｂ－Ｅ－Ｎ－Ｚ－Ｅ－Ｎ』

教師のコメント
後で土屋君と一緒に職員室に来るように

久遠光一の答え
『鞭善』

教師のコメント
君も後で職員室に来るように。

楽しくほのぼのとした筈の昼休み。
しかし今、戦慄が走ろうとしていた。

「つっ土屋君！？」

姫路瑞希作のお弁当の一品、海老フライ。
それを口にした途端、豪快に倒れ小刻みに震え始めた男、ムッツリーニ。

「どっ、どうしたのムッツリーニ！？」
「何があったのじゃ！？」
「わからん。海老フライを食べ……まさか」

光一は海老フライをとり、匂いを嗅ぎ始めた。
即座に顔を青ざめて、めまいに似た感覚に襲われる。

「……とりあえず、何を入れたかを聞かせてくれないか？」
「何と言われましても、普通に作りましたよ？　隠し味に“硫酸”

を入れた位で」
「普通に……ん？　硫酸？」
不吉な単語を聞きとった光一は、その海老フライを畏怖の視線で見つめる。
「どうやって手に入れたかが気になるところだけど、どうしてそんな物を？」
「ちょっと、酸味が欲しいと思いまして」
「……なあ姫路、俺の知識に間違いがあるかもしれないから、硫酸の特性を教えてくれないか？」
少々罪悪感に晒されつつ、光一は内容説明に。
秀吉と明久は、その姿をまるで勇者の様に尊敬の意を以て見詰め始める。
「おう、待たせたな。へー、こりゃ美味そうじゃないか。どれどれ？」
手に飲み物の缶を抱えた雄二が、瑞希の弁当に手を伸ばす。
そのうちの卵焼きをつまんで、一口。
「あっ、雄二！？」
食べた途端、缶をぶちまけて倒れた。
それも、ムッツリーニと同じく小刻みに震えるのも同じに。
「……で、卵焼きは何を？」
「えっと、クロロ酢酸を……」
「……パンとお茶を買ってくる。明久、手伝ってくれないか？」

「うん、わかった」

とんだランチタイムとなってしまった。

数分後。

「……まさか、姫路にこんな欠点があったとは」

「……意外」

被害者2名は、殺菌作用のあるお茶を大量に飲みながらの会話。

顔色も悪く、小刻みに震え続けたまま。

「……すみません」

「気にしなくて良いよ、姫路さん。誰にだって失敗はある物だし」

「そうだぞ姫路。失敗を言ったら明久なんか、土下座どころか死んでも詫びきれない量あるんだ」

「失礼な！」

瑞希への明久のフォローを、雄二が茶化す。

それを見て、瑞希もようやく落ち着いたのか笑みを浮かべた。

「でもうまそうなのは事実だし、筋は良いとは思うよ？　だから明久の家で練習すればいいじゃないか。いっそ花嫁修業の一環って感じで」

「はっ、花嫁修業……ですか！？」

「え！？　ちょっ、光一！　何を勝手に……」

「女の子が世話しに来てくれるってのに、何の不満があるんだよ？　そもそもお前の生活破綻ぶりを考えれば、その方がずっといいだろうが」

明久とて、健全な男子高校生である。
そういう事に理想を抱くなと言われても、無理な相談である。

「でっでも、そこまで酷くは……」
「あの生活のどこをどうしたらそう言える？　ガスや水道は止まってるわ食える物は何にもないわ、生きてる事自体が不思議なくらいだ」
「失礼だなあ。何にもないってことはないよ」
「砂糖に塩、サラダ油だろ。今でも思い出すだけで吐きそうだ」

その他全員も同意したように、多少顔をしかめて頷いた。
少なくとも、現代人の食生活じゃない。

「確かに、世話する奴が居た方が良いな」
「そうじゃな。とても“現代の人間がやる”生活とは思えん」
「……同感」

雄二、秀吉、ムッツリーニも、その方が良いと肯定。
が、雄二とムッツリーニの目は笑っていなかった。

「ちょっ、そんな勝手に！」
「それにだな」
「え？」

光一がニヤリと笑みを浮かべ、皆に聞こえないように声をひそめ始める。
それを見て、秀吉も混ざり始めた。

（チャンスでもあるだろ？）

（チャンスって、姫路さんは……）
（それはあくまで明久の勘じゃろ？　ここで頑張れば、あるいはの可能性も含まれるじゃろうて）
（光一、秀吉……けど、姫路さんの都合もあるし、それに男の１人暮らしの部屋にだね？）

「あの……吉井君さえ迷惑でなければ、お願いしてもよろしいですか？」

あっさりと了承された事に、明久は驚き光一と秀吉はうんうんと頷きあった。

（よし、チャンスだ明久。良い雰囲気を作って、押し倒せ！）
（うっ、うん。わか……らないよ！　最後の余計だよ！）
（大丈夫だ、お前ならできる。お前なら姫路を押し倒す事が出来る、自分を信じろ！）
（いや、青春ドラマみたいなノリで言われても困るよ！）

動揺はしてはいても、明久の脳内ではシミュレートされていた。
しかし、その空気を破る者が。

「ちょっ、ちょっと、何言ってるのよ瑞希！　吉井は１人暮らしだって言うのに、行ったら何されるかわかった物じゃないわよ！？」
「考えてみれば、ケダモノの檻にウサギを放り込むような物だな」
「……（こくこく）」

美波の剣幕を見て、にやりと笑みを浮かべる光一。
ピンっ！　と、閃いた素振りを見せ、美波にある宣告を面白半分で告げた。

「じゃあ島田も一緒に行けばいいだろ？　何かやろうとしたら、いつも通り関節外せばいい訳だし」
「え！？　なっ、何でウチが！？」
「その前に僕、了承してないんだけど……」

パンを食べつつ、まったりとした時間だけが過ぎて行った。

パンが無くなり、ある程度時間もたったころ。

「それで試召戦争だけど、次はＢクラスなんだったな？」
「ああ。Ｂクラスにも、Ｄクラスと同様に俺達がＡクラスに勝つための要素がある。俺たちじゃ真正面からぶつかった処で、勝ち目はないからな」

Ａクラスは当然、この学園選りすぐりのエリート達。
試召戦争は代表を倒す事が勝利であるが、Ａクラス代表はそれすなわち学年首席。
Ｆクラスの戦力では、囲った処で返り討ちに遭う事は容易に想像がつく。

「それで、どうする気だ？」
「Ｂクラスとこの戦争のシステムを使って、Ａクラスとの戦争は一騎打ちにする」
「システム？」
「ああ。下位クラスが負けたらどうなるか知ってるか明久？　ムッツリーニ、ペンチ用意しておけ」
「え！？　えーっと……」

いきなり話を振られた明久は、どぎまぎし始める。

それを見て瑞希が、こっそりと耳打ち。

（吉井君、負けたらランクを１つ落とされるんですよ）

「あっ、そうそう。で、下位クラスが勝ったら設備を入れ替えが出来るんだったね？」

「そうだ。そのシステムを利用して、Ｂクラスに交渉する」

「成程な。設備交換免除を条件に、ＢクラスにＡクラスへ宣戦布告させる。そのあとで俺達は連戦を匂わせる通告をし、一騎打ちの条件を呑ませる……か？」

雄二が頷く。

明久も今の話を聞いて、納得するように頷くが……

「しかし、上手く行くのか？　向こうとしては試召戦争の方が確実なのは事実だ」

「そうじゃな。低得点じゃが実力者の光一は当然として、姫路の事も既に知れ渡っておるじゃろうし」

「それに関しては考えがある。それよりまずは、Ｂクラス戦だ」

いずれにせよ、Ｂクラスを倒さなければ意味がない以上はと、話は締めに。

雄二は明久と光一を交互に見て、一言。

「明久、今日のテストが終わったら、Ｂクラスに宣戦布告して来い」

「断る！　雄二が行けばいいだろ」

「やれやれ、それじゃジャンケンで……」

「ちょっと待て」

２人の間に入ったのは、その手にはアサルトライフルが握られている光一。

その姿に、若干2人どころか、瑞希をはじめとする他のメンバーも恐怖を感じた。

「俺が行くよ。Bクラスの代表、あの根本って聞いたことあるから」

「根本だと!?」

根本恭二

とにかく評判が悪い男で、目的のために手段を選ばない事で有名。

“カンニング常習犯”“ケンカで刃物はデフォ装備”“球技大会で一服盛った”とまで言われる程。

「そうだとしたら、妙な事をされないように牽制した方が良い」

「そうか。確かに明久じゃ、インパクトに欠けるな……」

「だったら雄二が行けばいいだろ。でも、それじゃ光一1人っていうのも……」

「じゃあ明久も来るか？　心配しなくても、コレクションとこれ位なら貸してやるよ」

と言って、光一は懐から自動拳銃とスタンガン（20万ボルト）を取り出し、明久に手渡した。

「……また、僕は危険人物として知れ渡るのかな？　365度どう見ても美少年なのに」

「バカとしてなら知れ渡ってるぞ？　ちなみに5度多い」

「うむっ。実質5度じゃな」

「2人とも嫌いだ！」

そして放課後。

「それで、明日の午後からかの？」
「ああ。根本の姿もきっちり確認したし、色々と脅したからまず問題ない……と信じたいな」
「うむっ。卑怯な手を使われて負けると言うのは、納得できんからのう」

家がとなりなので、自然と一緒になる光一と秀吉。
その帰り、明日からの試召戦争と……敵側の代表である根本の卑怯な手段への警戒について、話し合っていた。

「まず狙われるとしたら、光一と姫路じゃな」
「俺はともかく、姫路が心配だな……ん？」

ふと、光一が目を向けた先には……

「……あれは」
「ん？　どうし……」
「しっ！」

秀吉をひっつかんで、物陰に隠れる光一。
口をふさぎつつ、もう片方の手で目標に指差した。

「改めて、警戒した方がよさそうだな」
「うむっ。事によっては、の」

と、こっそりとその場を後にしようとした所で……

「光一、秀吉！　あんた達何やってるの！？」
「え？　優子？」

「おおっ、姉上。どうしてここに？」
「そんな事はどうでもいいわよ！　何であんた達、こんな所で抱き合ってるの！？」

ふと、光一と秀吉は自分達の現状を省みる。
“ある物”から隠れる為に、秀吉を抱き寄せる形で……。

「言ったわよね光一？　秀吉と妙な事をしないでって」
「妙な事って、ワシも光一も男じゃぞ？」
「その所為でアタシが光一と付き合ってるって、迷惑な噂が流れてるのよ！」
「迷惑って、それが幼馴染に言う事か？　それに俺だってもう、お前みたいな寸胴に……あっ、ごめんなさい。訂正するからその関節をそれ以上……」

断末魔が響き渡った。

第七問

問題
以下の問いに答えなさい
『ｇｏｏｄおよびｂａｄの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え
『ｇｏｏｄ？ｂｅｔｔｅｒ？ｂｅｓｔ
ｂａｄ？ｗｏｒｓｅ？ｗｏｒｓｔ』

久遠光一の答え
『ｇｏｏｄ？ｂｅｔｔｅｒ？ｂｅｓｔ
ｂａｄ？ｗｏｒｓｅ？ｗｏｒｓｔ』

教師のコメント
その通りです。

吉井明久の答え
『ｇｏｏｄ？ｇｏｏｄｅｒ？ｇｏｏｄｅｓｔ』

教師のコメント
まともな間違え方で先生驚いています。Ｇｏｏｄやｂａｄの比較級と最上級は語尾にｅｒやｅｓｔを付けるだけではダメです。覚えておきましょう

土屋康太の答え
『ｂａｄ？ｂｕｔｔｅｒ？ｂｕｓｔ』

教師のコメント
『悪い』『乳製品』『おっぱい』

第二回試験召喚戦争
Ｂクラス　ＶＳ　Ｆクラス

「いたぞ、Ｂクラスだ！！」
「高橋先生を連れて居るぞ！！」

昼休みのチャイムが鳴り終わると同時に、戦いは始まった。
前線指揮は姫路瑞希、先陣を切るは吉井明久と木下秀吉。

「ねえ光一、今回は前に出ないの？」
「いや、今回は俺が前に出るのはまずい」
「光一は文系科目が苦手で、特に化学と古典と歴史が特に壊滅的でのう。文系の多いＢクラスと相性が悪いのじゃ」
「うるさいぞ秀吉！」

Ｂクラスはまず、１０人前後に対しＦクラスはほぼ総力。
今回は廊下を制することが先決ともあり、勢いが大事だからだ……

が。

『Ｂクラス　野中長男　総合１９４３点』
ＶＳ
『Ｆクラス　近藤吉宗　総合７６４点』

『Ｂクラス　金田一祐子　数学１５９点』
ＶＳ
『Ｆクラス　武藤啓太　数学６９点』

『Ｂクラス　里井真由子　物理１５２点』
ＶＳ
『Ｆクラス　君島博　物理７７点』

Ｄクラスとは格が違い、ほぼあっさりと大半が押し切られてしまった。

「援護する、やられそうな奴は下がれ！！」

やられそうになった召喚獣を、光一の援護射撃でフォローし撤退を指示・

『Ｂクラス　工藤信二　物理１６５点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一　物理３９８点』

「え！？」

「今回ちと調子が悪かったからこの程度だが、物理なら得意中の得意なんだよ」

「うっ、ウソだろ！？　調子悪くてこれかよ！？」

召喚獣の武器は基本的に剣や槍等であり、銃や弓と言った遠距離武器はまれにしか存在しない。
しかも遠距離の場合は精度も求められる為、基本牽制程度にしか使えない。
だが光一の場合、元々の腕と武器のフィーリングと言う利点もある為、それらは一切関係ない。

「よし、１人撃破！」
「Ｂクラス、真田由香。久遠光一に数学勝負！」
「受けて立つ！」
「光一、援護する！」

『Ｂクラス　真田由香　数学１６６点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一＆吉井明久　数学１２８点＆５５点』

「何とかやれない事もないか」
「僕はトリプルスコアだよ」

点数を見て、敵Ｂクラスの女子は笑みを浮かべた

「でも点数は勝ってる！」
「甘い！」

敵召喚獣が久遠めがけて飛びかかるのを、明久の召喚獣が迎え撃った。
楽勝と言わんばかりに武器を振り下ろすのをかわして、足払い。

「え！？」

「そこだ！」

そこをすかさず、敵召喚獣の腕をライフルで狙い、打ち抜いた。
それにより落とされた召喚獣の武器は、明久の召喚獣が蹴り飛ばした

「よし、あいつを狙え！」
「よし来た！」
「俺もだ！」

そのまま物流に呑まれ、Ｂクラスの女子は哀れ補習の餌食となった。

「やったな相棒」
「うん！」
「よし、久遠と吉井に続け！！」

そのまま光一と明久はハイタッチ。
それに勢いを付けて、Ｆクラスは奮起！

「古典で久遠光一に勝負を仕掛ける！」
「げっ！　しまった！」

『Ｂクラス　鈴木次郎　古典２１０点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一　古典５点』

「いかん、光一が！」
「援護するよ！」

『Ｆクラス　吉井明久　古典５４点』

「どいてろ雑魚！」
「うるさい！」

敵召喚獣の攻撃を、明久の召喚獣は先程の様にいなしてよけ、そのまま思いきり顔にパンチ。
少しよろめいただけだが、時間稼ぎとしては十分だった。

「ちょっ、さっきの、偶然じゃなかったのか！？」
「光一、今だ！」
「ああ、ありがたい！」

古典の教師のフィールドから外れ、物理教師のフィールドへと逃げ込んだ。
一息つくと、同じフィールドにいる同志達の援護へ。

「お、遅れ、まし、た……ごめ、んな、さい……」
「おいおい、大丈夫か？」
「はい……平気、です……」

そこへ、息絶え絶えだがＦクラスの勝利の女神登場！

「来たぞ、姫路瑞希だ！！」
「長谷川先生、Ｂクラス岩下律子です！　Ｆクラス姫路瑞希さんに、数学勝負を申し込みます！」
「律子、私も手伝う！」

瑞希が現れた途端、Ｂクラス陣営は表情を引き締める。
まず、１０人程度の戦力しかいないのに、２人がかりで勝負。

『Ｆクラス　姫路瑞希　数学４１２点』

VS

『Bクラス　岩下律子&菊入真由美　数学189点&151点』

「あっ、腕輪！」

「腕輪？　……それって確か、何点かオーバーしたら、特殊能力が付加されるって言う？」

「まあ、姫路ならおかしくはないか」

瑞樹の召喚獣が、腕輪を付けた左腕を向けると、腕輪から光線が放たれる。

そのうち1体を炎でつつみ、もう1体も大剣でなぎ払い、戦闘不能へと追いやった。

Bクラス前線戦力現在6名。

「よし、このままBクラス教室まで押し切るんだ！」

「みっ、皆さん、頑張ってください！」

「「「「おおーーっ！！！」」」」

2大主力の激励（効果割合　瑞希9：光一1）で、士気は大幅アップ。

「さて……姫路、このまま前線の指揮頼む。秀吉、明久、一旦戻るぞ！」

「え？　はっはい、わかりました」

前線は一旦瑞樹に任せ、光一は明久を秀吉を伴い一旦後退。

秀吉は事情を知っていた故に納得したが、明久はまだ光一も自分も補給が必要な程ではない為、疑問顔。

「どうしたのさ、光一？」
「そろそろ根本が動くころだと思ってな」
「っ！　……そうだね」
「雄二に何かあるとは思えんが、そろそろなんらかの手段を講じる頃じゃ」

３人は駆け足で、Ｆクラスへ。
教室の扉を開けるや否や、そこに広がっていた光景は……

「……やってくれやがったな」

穴だらけの卓袱台に、へし折られたシャーペンと消しゴムと言う光景。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」
「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」
「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

そこへ、代表である雄二が割り込んできた。

「雄二、これは一体どういう事だ？」
「協定を結びたいという申し出があってな。調印のために、教室を空にしていた」
「協定じゃと？」
「ああ。４時までに決着がつかなかったら、戦況をそのままにして続きは明日午前９時に持ち越し。その間、試召戦争にかかわる一切の行為を禁止するってな」
「それ、承諾したの？」
「そうだ」

時間的には、こちらの作戦通りに事が進み、そのころには教室へ押し込める戦況から始められるはず。
Fクラスとしては、好条件ではある。

「確かに、それなら姫路が万全の状態で始められるから、俺達としては都合が良い……が、どうにも解せないな」
「ああ。確かにあの根本がそんな協定を結ぶなんて引っかかるが、今回もクラス全体と言うより姫路の個人戦力がカギとなる以上、乗った方が勝率が高くなる事は事実だ……一応、用心してくれないか？」
「ああ。明久、秀吉、お前らは前線に戻れ。俺は雄二と一緒に、シャープや消しゴムの手配をやるから」

明久と秀吉が頷くと同時に、教室を飛び出して行った。
2人を見送ると、近衛隊および雄二と共に教室整理を始める。

「それで、代表閣下はどういう思惑だとお考えで？」
「補給手段を断つ為だけに、こんな向こうに不利な条件を出すとは思えん……何かがあるな」
「ああ……ムッツリーニと合流して情報収集に」
「それはダメだ。姫路に次ぐ主戦力のお前に何かあれば、士気が落ちる」

舌打ちをして、片付けと手配に戻る光一。
それらが終わり、4時となって協定通り一旦休戦。

「……で、一体何があった？」
「わかりません。気づいたら、廊下倒れてまして……」
「おいおい、まるで散々殴られた後で廊下に頭から叩きつけられた

かの様なケガじゃないか!?　すぐ寝かせないと！　姫路、ハンカチか何か濡らして持ってきてくれ！」
「はっはい！」

終戦と同時に戻ってきた戦友達と、文字通りぼろぼろにされた明久の姿があった。

「全く、戦争じゃからと、本当にケガする必要はないというのに……」
「ああ……根本のヤロー、手段を選ばないにしても程があるだろ。そういえば、島田はどうした？」
「服に着いた血を洗うと言って、どこかへ行ったぞい」
「ふーん、服を洗う……ん？　血？」

その一言で、何が至らせたかはわからなかったが、何があったかは容易に想像がついた光一だった。
余談だが、光一は明久の姿に異様なまでにデジャヴを感じ、その痛みがフィードバックされているかのように背筋が冷えたという。

「……それで、戦況は？」
「顔が青い事は置いておくとして、相手を教室に押し込んだところで休戦時刻じゃ」
「その辺りは、予想通りだな……だとしたら、やっぱり解せないな」
「じゃが、今の処は明久を除くとこれといった目立つ被害もないぞい」

瑞希に看病して貰っている、今だ目覚めぬ明久に目をやっての発言である。

「うっ……」

「ああ、気がついたか明久？」
「……」
「ん？　ムッツリーニ。何か変わった事があったか？」
「……（コクリ）」

気がついた明久に駆け寄ろうとした光一に、いつの間にかいたムッツリーニがそれを遮った
彼は今回出番が来るまで情報収集にいそしんでおり、警戒に当たっている。

「Cクラスが、試召戦争の準備を？」
「……（コクリ）」
「狙いはAクラスじゃないだろうから……大方、漁夫の利を狙うってところか？」
「んー、そういうことならCクラスと協定でも結ぶか。俺達が勝つとも思ってないだろうし、Dクラスを使えば難しい事でもないだろう」

と言うや否や、明久、光一、瑞希、ムッツリーニを伴い教室を出る。
その途中、美波と須川の2名も加え、一路Cクラスへ。

「Fクラス代表の坂本だ。このクラスの代表は居るか？」
「私だけど、何か用かしら？」

扉をあけると同時に、名乗りを上げた雄二に応えたのは、1人の女生徒。

「っ！」

その姿を見て、光一は昨日の光景を思い出した。

街中を、ある人物と共に歩くその姿。

「ああ、Ｆクラス代表として……」
「ちょっと挨拶に来たんだ。Ｃクラスの代表は美人だと聞いたから、是非ともお近づきになりたいと思ってな」
「なっ！？　……あっ、ああ。へえっ、聞いた通りに活動的な美人じゃないか。ぜひとも、仲良くしてほしい」
「ちっ……あらそう？　ありがとう。小山友香です、よろしく」

微かに舌打ちをした後、あいさつを返す小山代表。
それから軽く談笑した後、Ｆクラスの面々は帰っていった。

「作戦失敗か」

奥の方からＢクラス代表、根本恭二が小山に歩み寄った。

「どうやら彼、私達の事を知ってたみたいね？　久遠光一、Ｄクラス戦や今日と、随分と目立つ戦果をあげたらしいじゃない？」
「関係ないな。たかが低得点者がどうあがこうが、俺達の勝利の算段はもう出来てるんだ」

そう言ってニヤリと笑みを浮かべ、ある封筒を取り出した。

一方、Ｆクラス面々は。

「どうしたのいきなり？」
「あいつ根本の彼女だ。Ｃクラス代表だってのは、今初めて知った」
「そうだったのか……危なかったな」

試召戦争に関わる一切の行為を禁じる。

その条文はこれが狙いだったのかと、雄二は舌打ちをした。

「それでどうすんだよ？　これじゃＢクラスに勝ったとしてもＣクラス戦だ。分が悪すぎる」

「それに関しては考えがある。心配するな」

「ある意味一番性質が悪いな。根本のクソヤローめ……さて、明日はどんな汚い手を使ってくる？」

彼は頭の中で、勝った暁に行うペナルティについて、模索を始めていた。

第八問（前書き）

ユニーク３５００人、ＰＶ２５０００突破！
こんな作品ですが、こんなにも読んでいただけるなんて嬉しいです。

では、これからもよろしくお願いします。

第八問

問題　以下の問いに答えなさい
『女性は（　）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める』

姫路瑞希の答え
『初潮』

教師のコメント
正解です

土屋康太の答え
『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が１．５ｋｇに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均１２歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される』

教師のコメント
詳しすぎです

吉井明久の答え
『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね

久遠光一の答え
『初恋』

教師のコメント
恋は人を変えると言いますが、残念ながら外れです。

「今から昨日言った作戦を実行する」
「作戦って、Cクラス対策のか？」
「ああ、その為には、秀吉にこいつを着てもらう」

現在午前8：30、Bクラスとの戦争再開にはまだ早い時分。
教壇に立ち、そう宣言した雄二は文月学園の女子制服を取り出した。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」
「いや、そこは構うべきだと思うが、雄二の狙いはわかった。秀吉に優子になりすまして貰ってCクラスを挑発、攻撃の矛先をAクラスに向けさせるってところか？」
「その通り。お前ならまだしも、面識がないCクラスでは見破る事

は不可能だ」

優子と秀吉は二卵性双生児だが、パッと見では家族ですら見分けがつかない程似ている。
ちなみに光一はふざけて間違えたりする物の、実際は2人を完璧に見分ける事が出来る唯一の存在。

「と言う訳で秀吉、用意してくれ」
「う、うむ……」

雄二から制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉。
明久をはじめとするFクラス男子は、その着替えの光景に絶句。
ムッツリーニもすごい速さでカメラのシャッターを切り、その光景に釘付けとなる。

「よし、着替え終わったぞい。ん？　皆どうした？」
「さぁ？」
「……さあな？」

秀吉、雄二が疑問符を浮かべ、光一は呆れたようにその面々を見ていた。
それから雄二、秀吉、明久、光一の4人は一路Cクラスへ。

ある程度まで近づいた処で、雄二、光一、明久は身を隠す。
秀吉は姉になりすます事に、気を重くしつつCクラスへ。

「ねえ、大丈夫かな？」
「秀吉なら大丈夫さ。増してなりすますのが優子なら、さぞや面白い事になるだろうよ」
「随分と楽しそうだな？」

何かと痛い目あわされてる優子になりすましての悪戯に、光一も期待を抑えきれない。
さて、どんな挑発をしてくれるのかなと、期待を込めて秀吉を見つめる。

深呼吸をし、表情を引き締めてCクラスの扉を開くと、まずは一言。

「静かになさい、この薄汚い豚ども！」

「おおっ、優子だ」
「え！？　優子さんって、あんなふうなの？」
「……本人には内緒な？　全身の関節壊されちゃうから」

以前光一は優子の家での姿をバラしかけて、全身の関節を壊される寸前にされた事があった。
それを言ったら、秀吉もそうなのだが……。

「な、なによアンタ！」
「話しかけないで！　ブタ臭いわ！！」

「おーおー、やれやれ、もっとやれ。優子はもっと高飛車にやるぞ？」
「すごく楽しそうだね」
「どうやらこいつ、普段木下優子に痛い目あわされてるクチらしいな」

にやにやと笑いを抑えきれない顔で、こっそりと囃し立てる光一。
それを見て、何やら妙な事に感づいた雄二と、複雑そうにそれを見る明久。

「あんた、Aクラスの木下ね？　ちょっと点数良いからって、良い気になるんじゃないわよ！　何の用よ！」
「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！　増してブタ臭い貴女達なんて、豚小屋で十分だわ！」
「なっ！　言うに欠いて、私達にはFクラスがお似合いですって！？」

「おおっ、良い具合に冷静さを失ってるな。流石は優子だ」
「いや、あれ秀吉だよ？　というか小山さんの中では、Fクラス＝豚小屋みたいだね？」
「否定はできないがな」

楽しそうにそれを見る光一と、少々呆れたように光一にツッコミを入れる明久。
雄二も、それを苦笑しながら見つめる。

「手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備もしている様だし、覚悟しておきなさい。近いうちに、私達が薄汚いブタの貴女達を始末してあげるから！」

そう言い残し、靴音を立てながら秀吉はCクラスの教室を出ていく。
それと同時に、Cクラスから小山代表のヒステリックな声が響き渡る。

「これで良かったかのう？」
「ああ、本当に優子かと思ったくらいだ……本人には内緒な？」
「わかっておる。こんな事が姉上にばれたら、ワシも生きた心地がせんわい」

「だったらあそこまでやるなよ……まあ楽しませてもらったから良いけど」

２人とも、どこかすっきりした顔だった。

「Ｆクラスなんて相手にしてられないわ！　Ａクラス戦の準備を始めるわよ！！」

「上手くいったな。流石は根元の彼女、ヒステリックな事で」
「ある意味お似合いかもね」
「ああ。性質が悪い者同士、嫌な組み合わせではあるがな」

明久、秀吉、光一はうんうんと、寸分違わず頷いた。
４人は一路、Ｆクラスへ。

「さて、副司令は秀吉に任せていいか？　俺は回復テストを受けた後で、先生を呼ばないといけないから」
「うむっ、任せるのじゃ。呼ぶのは“木村先生”かの？」
「ああ」

そして、ＢクラスＶＳＦクラス戦、再開

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！　戦線を拡大させるでないぞ！！」

秀吉の指示が飛ぶ中での、右側と左側の扉でぶつかりあうＢクラス教室攻略戦。
代表の指示は、『教室内に敵を閉じ込めろ』であり、戦況的には順調。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！　補給も念入りに行え！」

始まってから数時間、事は順調に進んでいるが、ここにきて異変が起こっていた。

「……」

本来秀吉より先に指揮を執る筈の瑞希が、一向に何かしようとしない。

それが大きく響き、戦線は危うかった。

「すまん、遅くなった！　状況を説明してくれ」

そこへ光一が、木村教諭を伴い戦線へと復帰。

明久が状況説明を行った後に、秀吉から指揮権を譲り受ける。

「よし、秀吉と明久、姫路はこっちへ！　明久と秀吉は、木村先生を拉致されない様ガードしろ」

「うん！」

「承知した！」

物理の木村教諭のフィールド内で指揮をとり、Ｆクラス勢は冷静さを取り戻し始めた。

昨日の事で、物理が光一の最大武器だとわかっている以上、そう簡単には手出しができないと見越してである。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！　援軍を頼む！」

「ちっ……明久、“あれ”を使え！」

「わかった！」

光一の指示を受け、明久は古典の竹中教諭に駆け寄り耳打ち

「……ヅラ、ずれてますよ？」

「っ！！　少々席をはずします！」

「よし、今のうちに体勢を立て直すぞ！！」

文系相手では光一も分が悪く、指揮する側に回るしかない。

その上、主力である瑞希の行動がおかしければ、戦況的にも危うい。

「姫路さん、一体どうしたの！？」

「そ、その、なんでもないです」

明久が様子のおかしい瑞希に駆け寄った。

だが、それでも時は待ってはくれず、無情に戦況は変化していく。

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Ｂクラス内に拉致された模様！」

Ｂクラスには文系が多い為、状況的にも不利となった。

「光一、あれを使うべきじゃろうか！？」

「それはまだダメだ。姫路、頼む！」

「はっはいっ！」

瑞希がようやく動き、一歩前に……

「あっ……！」

動こうとしたが、急に動きを止めて俯く。
明久はふと、瑞希の視線を追っていき……根本の手にある封筒に目を付けた。

「あれは……！」
「どうした、明久？」

秀吉と光一もその視線を追い、根元の手に握られている封筒に気がついた。
それを見て様子がおかしくなった事と、怯えたまま明久を見つめる瑞希の姿を見て、２人にはある程度の予測がついた。

（おそらく、明久宛のラブレターと言った処じゃろうな）
（ああ……あのクソ野郎、だからあんな協定を持ちかけやがったな。昨日の罠といい、やってくれる）
（うむっ。何と言う下劣な手を使うのじゃ、あの男は）

協定の内容自体は、瑞希が居るからこそＦクラスにとって有利に働く。
だが動けなければ、Ｂクラスにとって圧倒的に有利に働く条件。

「姫路さん」
「は、はい……？」
「具合が悪そうだから、あまり戦線に加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気を付けてもらわないと」

明久がなだめるように瑞希を戦線から外そうと説得。
その間秀吉と光一は頷きあい、光一は明久のもとへと駈けだす。

「明久、行くぞ」
「うん！」
「指揮はワシに任せるのじゃ、頼むぞ明久、光一！」
「あ……！」」

明久と光一は背を向けて、教室へと駈けだす。
そして……

「面白いことしてくれるじゃないか、根元君」
「へえっ、お前から皮肉聞くなんてな……協力するぜ？　相棒」
「ああ、頼むよ。相棒」

光一が拳を差し出すと、明久もそれに合わせ拳を差し出し、打ち合う。
そして……。

「「あの野郎、ぶち殺す！」」

第八問（後書き）

ご意見、ご感想があればよろしくお願いします。

第九問

問題　以下の問いに答えなさい
『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希の答え
『?脂質　?炭水化物　?たんぱく質　?ビタミン　?ミネラル」

教師のコメント
流石は姫路さん。優秀ですね

久遠光一の答え
『?銃社会　?銃　?銃弾　?金属　?火薬」

教師のコメント
君の将来があらゆる意味で心配を通り越して不安です。

吉井明久の答え
『?砂糖　?塩　?水道水　?雨水　?湧水」

教師のコメント
それで生きていけるのは君だけです

土屋康太の答え
『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時

を原発性無月経といい……』

教師のコメント
保健体育のテストは一時間前に終わりました。

「雄二！」
「うん？　明久に光一か。回復試験ならさっさと席に着け」
「話がある」
「……とりあえず聞こうか」

Fクラス教室にて。
回復試験を受けている中で、ノートを広げて戦力分布を書き記す雄二。
突然戻ってきた二人に、いぶかしげに顔を向ける。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」
「……お前に何があったんだ？」
「明久、それじゃ誤解されるだろ。つまりだな雄二、ちょっとあのクソヤローにやってみたい面白い罰を思いついたんだ。だから根本

の服をはぎ取って、捨てる必要がある。そう明久は言いたかったんだ」

「面白い罰？　……どんなだ？」

光一がひそひそと小声で雄二に説明。

話し終わった途端、雄二はそれはもう良い笑顔で頷いた。

「よし、良いだろう。良い余興になりそうだ」

「そうか……じゃあそれともう１つ、理由は言えないが姫路を前線から外してもらえないか？」

「っ！　……理由を言えない事は置いておくとしても、どうしてもか？」

「うん」

光一や明久とて、無茶を行っている事は理解していた。

瑞希はＦクラスの最重要戦力であり、彼女が居るからこその作戦でここまで来た。

だからこそ、それが原因で負ける事も十分あり得る話で、その責任を問われるのは代表である雄二。

普通、こんな頼みを受けられる訳などない。

「……条件がある」

「何だ？」

「明久、光一、お前達が姫路の担う予定だった役割を果たせ。どうやっても良いから、必ず成功させろ」

光一と明久は互いに顔を向け合い、頷き合った。

「わかった。絶対に成功させて見せる！」

「俺もだ。その役割はなんだ？」
「良い返事だ。仕事は簡単だ、根本に攻撃をしかけろ」
「皆のフォローは？」
「ない。しかもBクラスの出入り口は今の状態のままだ」

今現在、Bクラスの出入り口はどちらもが入り乱れての、乱戦状態。
そこを突破してのBクラスの広い教室の奥、そこに根本が居る。

「そうだ！　光一の……」
「無理だ。両方とも俺の苦手な文系のフィールドだってことを忘れたか？」
「あっ……そっか。じゃあ、どうすれば？」
「明久、お前は確かに点数は低いが、光一がお前を相棒と認めているように、俺もお前だけにあるムッツリーニや秀吉、光一の様な秀でている部分を信じている」

そういうと、雄二は立ち上がり教室の外へ。

「どこに？」
「Dクラスだ。例の指示を出してくる」
「僕にしか、出来ない……あっ！」

明久が、ふと或る事を思い出した。
観察処分者である事の利点と、ある配置について。

「何か、策があったのか？」
「うん！　光一は先に戻って指揮を頼む！」
「……わかった。しっかりやれよ？」
「うん！」

作戦開始、３分前

「点数が危なくなったら下がれ！」

再び秀吉から指揮権を受け取り、指揮官として指示を飛ばす光一。
その立ち位置は物理教師のフィールド内。

「怯むな！　ここをしのぎ切れば勝てるんだ！！」

ドォン！　ドォン！

Ｄクラスの教室へと、明久が仲間数名と英語の遠藤教諭を連れて行ってから聞こえる轟音。
それが鳴り響く中で、光一は指揮官として奮起を続ける。

「光一！」
「雄二！　それに、近衛隊！」

代表の雄二をはじめ、近衛部隊が合流。

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって、暑苦しいことこの上ないっての」
「どうした？　軟弱なＢクラス代表サマは、そろそろギブアップか？」
「はァ？　ギブアップするのはそっちだろ？　久遠は文系だとゴミで、頼みの姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

作戦決行が待ち遠しくてたまらない、そう思うには十分という程根本を睨みつける光一。

秀吉も同様で、姫路を汚い手で脅す方法を使われた以上、何としてでも勝ちたいと思っている。

ドォンッ！　ドォンッ！

「お前ら相手に姫路を頼る必要なんてないさ。それに久遠も、指揮に専念してさえいれば十分だ」

「けっ！　口だけは達者だな。負け組代表さんよぉ……さっきからドンドンと、壁がうるせえな」

「人望ないな。余所のクラスから嫌がらせなんて」

音が大きくなっていき、時間もそろそろ作戦決行時間。

雄二に視線を向け、頷くのを確認すると光一はＤクラスへと歩を進め始める。

「何だ、久遠光一ともあろうお方が脱走かよ？」

「わざわざ雑兵どもに構ってたら、疲れるだけだ」

「ゴミの分際で余裕ぶっこいてんじゃねえ！　まあ負ける瞬間を見ないだけ、ラッキーだろうがよ」

ゲラゲラと笑う根元に一発ぶち込みたいと思う光一だが、一先ずは自重。

一旦Ｂクラス前から離れ、Ｄクラスへ。

それを確認した後、雄二は号令をあげた

「……体勢を立て直す！　いったん下がるぞ！」

「どうした、散々フカしておきながら逃げるのか！」

光一は木村教諭を伴い、Ｄクラスの戸を開く。

「だぁぁあぁぁあっっしゃあああああああ！！！」

ドゴォっ！！！！

「ンなっ！」

と同時に光一の目に入ったのは、明久の召喚獣がＤとＢの教室の壁をぶち抜く光景。

次には、根本の驚いた声。

現在向こうの戦力の大半は、雄二率いるＦクラス本隊を追って、教室から出払っている。

その為、代表の防備は薄い。

「くたばれ、根本恭二ィーー！」

明久をはじめ、美波達Ｆクラス遊撃隊は根元を打ち取るべく、駆け出す。

だが近衛部隊に阻まれ、足をとめた。

「は、ははっ！　驚かせやがって！　残念だったな！　お前らの奇襲は失敗だ！」

「下がってろ！　こいつらは俺が片付ける」

そこへ割り込んできたのは、壊された壁から入ってきた木村教諭を伴う光一。

明久達は先程壁を破壊する為に立ち合わせた遠藤先生を伴い、光一達から離れる。

「なんだ？　おまえ１人で近衛部隊とやりあう気か？」

「ああ。Ｆクラス久遠光一、Ｂクラス近衛部隊全員に物理勝負を申し込む。サモン！」

光一の掛け声と同時に現れる召喚獣。
その召喚獣の腕につけられている腕輪を見て、近衛部隊は驚くも……。

「たかが銃で、これだけの人数相手に勝てるか！」
「たかが？　……その言葉、後悔させてやる！！」

『Ｆクラス　久遠光一　物理４９８点』
ＶＳ
『Ｂクラス　近衛部隊　物理平均１９８点』

「点数は関係ねえ、近衛全員で久遠を打ち取れ！」
「「「「おおおーーーっ！」」」」

光一の召喚獣がライフルを構え、銃弾を放つ。
その銃弾は近衛部隊の召喚獣にではなく、その陣形のちょうど中心に。

「はっ！　どこを狙ってやがる！？」
「……“爆発”！」

キーワードをつぶやいた途端、光一の召喚獣の腕輪が輝く。
それと同時に……

「え？」

着弾した銃弾が、敵召喚獣全員を巻き込む爆発を巻き起こす。

所々で召喚獣の悲鳴が響いては、戦闘不能となり消え去っていった。

光一の召喚獣が持つ腕輪の特殊能力“爆発”
銃弾を起点とし、半径2メートルの爆発を引き起こす能力。
その破壊力はBクラスで防げる訳もなく、爆煙が晴れる頃には近衛の召喚獣は影も形もなくなっていた。

「うっ、ウソだろ!?　近衛部隊が、たった一撃で……？」
「ゴミと言われた分、利子付けて返してやる……覚悟しろ、根本恭二」
「うっ、うわああっ！」

ダンっ！　ダンっ！

エアコンが停止した故に、涼を求める為に開け放たれた窓。
そこから2人の人影が飛び込み、逃げようとした根本の前へと立ちはだかる。

「え？」

入ってきた人影は、ムッツリーニと体育の教師。
屋上からロープを伝って侵入してきたムッツリーニは、根本恭二へと歩を進める。

「悪いが、ここは譲って貰うぜムッツリーニ？」
「……（コクリ）」

近衛部隊は全員が沈黙、前を光一に、後ろはムッツリーニに囲まれ、もはや完璧に逃げ場を失った。

「Fクラス久遠光一、Bクラス根本恭二に物理勝負を申し込む」

『Fクラス　久遠光一　物理４５９点』
VS
『Bクラス　根本恭二　物理１８９点』

「俺に狙われた時点で、この運命は既に決まっていたんだ」

ライフルの引き金が引かれ、その銃口から放たれた銃弾が根本の召喚獣に着弾。
それを中心に爆発を起こし、根本の召喚獣を爆発の中へと消し去った。

「俺の弾丸は、絶対をもって敵を撃ち抜く」

光一の召喚獣がライフルをゆっくりと下ろし、そのまま解除されたフィールドと共に消えていった。

「すごいよ！　光一にあんな火力が加わるんなら、もう天下無敵じゃない？」
「精密射撃と爆発……考えられる限りじゃ、最恐最悪の組み合わせね」
「ああっ。危ない物に危ない物をだな」
「おいコラ！　明久以外は罵倒が混じってるじゃねえか！！」

今ここに、Bクラス戦はFクラスの勝利をもって、終結した。

第十問

問題
『バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい』

姫路瑞希の答え
『リトアニア、エストニア、ラトビア』

教師のコメント
その通りです

久遠光一の答え
『魏、呉、蜀』

教師のコメント
先生も三国志は好きです

土屋康太の答え
『アジア、ヨーロッパ、浦安』

教師のコメント
土屋君にとっての国の定義が気になります

吉井明久の答え
『香川、徳島、愛媛、高地』

教師のコメント
正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう

終戦後のBクラスにて。

「明久よ、随分と思い切った行動に出たのう」
「うぅ……痛いよう、痛いよう……」
「大丈夫か？」

痛みのフィードバックで、両手を抑えて呻いている明久。
召喚獣でやったとは言え、鉄筋コンクリートを壊したフィードバックは、相当なもの。

「ま、でもお前らしい作戦だな」
「で、でしょ？　もっと褒めても良いと思うよ？」
「後の事を考えず自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」
「……遠まわしにバカって言ってない？」

明久の作戦は当然問題にならない訳もなく、放課後は職員室で過ごす事が決定。

初犯でなければ、留年や退学も大いにありうる事である。

「ま、それが明久の強みだからな」

そこへ雄二が歩み寄って、明久の肩をバンバンと叩く。
明久の方は、バカが強みと言われ多少ショックを受けていたが……。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか。な、負け組代表？」

「では不貞腐れたクソヤロー君、覚悟は良いかね？」

「……」

雄二と光一の視線の先には、先ほどまでの強気がウソの様に大人しくなった根元が床に座り込んでいる。
それを見る光一は、実に楽しそうだった。

「本来なら設備を明け渡して貰い、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言に対して、周囲が騒ぎ始める。
Ｆクラスは当然として、敵側の面々も。

「落ち着け皆。前にも言ったが、俺達の目標はＡクラスだ。ここがゴールじゃない」

「ここはあくまで通過点でしかない……そういう事だろ？　代表」

「ああ。だから、Ｂクラスが条件を呑めば解放してやろうと思っている」

光一の補足も合わさり、Ｆクラスの面々は雄二の性格を理解し始め、納得した表情となった。

Bクラスも3ヶ月間ボロボロの教室に縛られる可能性からの脱却ともあり、雄二に視線が集まる。

「……条件はなんだ？」

「条件？　それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やって貰ったし、正直去年から目ざわりだったんだよな」

と、普通に聞けば雄二の言葉は酷い言い様だが、彼はそれだけの事をやってきた。

その証拠にFクラスどころか、Bクラスの面々も誰1人としてフォローしようとしない。

「そこで、取引だ。Aクラスに行って、試召戦争の準備が出来てると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやっても良い。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争が避けられないから、あくまで戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

訝しげに尋ねる根本に、光一は冷たく言い放つ。

「ああ……だが残念な事に、お前にはさっき最悪の罵倒をされたんで、それ相応の罰を受けてもらう」

「そういう事だから、Bクラスがコレを着て先程言った通りの行動をしてくれたら、見逃そう」

そう言って雄二が取り出したのは、秀吉の変装の為に用意しておいた女子制服。

雄二の方も、どこか楽しそうにしていた。

「ば、バカな事を言うな！　この俺が、そんなふざけた事を！」
「Ｂクラス生徒全員で、必ず実行させよう！」
「任せて！　必ずやらせるから！」
「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！」

懐からエアガンとスタンガンを取り出そうとした光一だが、Ｂクラス面々の主張に手を止めた。
慌てふためいていた根本だが、その面々の同調にさらに慌てふためき始める。

「やっぱり随分と評判が悪いな、お前は」
「んじゃ、決定だな」
「くっ！　よ、よるな変態ぐふぅっ！！」

逃げようとした根本だが、Ｂクラスの面々が取り押さえ腹部に一撃。

「とりあえず、黙らせました」
「お、おう。ありがとう」
「手間が省けた。明久、早速着付けに入ろう」

変わり身の早さに、雄二もあっけにとられた。
が、すぐに気を取り直した光一は、明久とで早速着付けに移り始める。

「……男の服を脱がすって、思った以上に苦痛だな」
「うん……けど、これも目的のため」

２人してゲンナリとしつつ、服を脱がしていく。
まあ男が男の服を、それもクズ相手なのだから無理もない。

「うっ、うう……」
「ん？　明久、ちょっと離れろ」
「うん」

うめき声を上げる根本から明久を離し、光一は懐からスタンガンを取り出す。

「寝てろ」
「がふぅっ！！」

最大出力（５０万ボルト）のスタンガンを当てて一発。
根本の服をすべて脱がしたうえで、光一と明久は女子制服をあてがう。

「うーん……これどうやって着せるんだろ？」
「その前に、順序はどうなんだ？」

だが男子制服と勝手も違う為、全然わからず難航し始める。

「私がやってあげるよ」
「そう？　じゃあ折角だし、可愛くしてあげて」

Ｂの女子相手に、明久はそう提案するも……。

「それは無理、土台が腐ってるから」

だが否定する様に手を振って、笑顔でそう言い放った。

「酷い言い様だな……それじゃ明久、さっさと根本の制服捨ててか

ら手を消毒しよう」
「光一、そっちの方が酷いよ……じゃあ、よろしくね」
「そうだ、これ消毒液だ。着替えさせたら使うといい」
「ありがとう」

消毒液を渡した後、２人してＢクラスを後に。
それから明久が根元の制服を探り、ある封筒を取り出した。

「あったあった」

嬉しそうに封筒をポケットに入れて、用がすんだ制服は近くにあったゴミ箱へ。
彼は家まで女子制服の着心地を楽しむ事になるだろう。

そして２人は、手の洗浄および消毒を行った後Ｆクラスへ。

「それじゃ俺は帰るから」
「うん！　じゃあまた明日」

光一は鞄を手に、明久も瑞希の卓袱台と駄けだしていった。
Ｆクラスを出て少し後に、瑞希が教室に入っていく姿を見つけた光一はにやりと笑みをうかべる。

「さて、明日の報告が楽しみだな」
「まあ明久じゃから、あまり期待は出来んじゃろうがな？」
「ん？　ああ、秀吉か」

ふと横を見ると、秀吉の姿が。

「でもある意味、面白くはあるだろ？　実は雄二ではなく自分だっ

た……って後で知ったら」
「確かに面白そうじゃな。さて、帰るとしようかの？」
「ああ」

「こっ、この服、やけにスカートが短いぞ！？」

ふと、聞こえて来た叫び声。
見てみると、そこには女子制服を纏い髪にリボンを付けた、根本氏の姿が。

「はっ、吐きそうじゃ……」
「ああっ。提案しといてなんだが、おぞましい」
「きっ、貴様は久遠！　よくも俺にこんな事を！！」

第一印象を言い合ってると根本が気付いて突っかかろうとするが、付き添い2名に取り押さえられる。
光一は懐にやった手を戻し、笑顔で御苦労さまと労う。

「すまない久遠、これから撮影会があるから急がないといけないんだ」
「きっ聞いてないぞ！？」
「それはそれは。写真が出来たら送ってくれ、2度と舐めたマネをしない様しっかり管理するから」

付き添いの2人が笑顔で頷く傍らで、根元は忌々しげに久遠を睨みつける。

「久遠光一、この恨みは必ず返してやる！」
「無駄口をたたくな！！　ほら、キリキリ歩け！」
「くっ……覚えていろ、絶対にこの事を後悔させてやる！！」

と、見事にお決まりの台詞を残して、去って行った。

「さて、帰るか？」
「うむっ……ところで光一よ、しばらく家に泊めてもらえんかの？」
「え？　何で？」
「……今朝の事じゃ。あれが姉上にばれたら、ワシは車椅子か寝たきりにされてしまうのじゃ」

ふと、秀吉が優子になりすまし、Ｃクラス相手に散々罵倒した事を思い出す光一。
あれが優子にばれたら……

「……じょっ、冗談はよせよ。俺まで共犯にされちまうかもしれないだろ」
「何を言うのじゃ光一。これはＦクラスの作戦であるから、お主も同罪じゃ！」
「だったらお前も悪のりするなよ！」
「お主も楽しんだであろう？　頼む光一、ワシを見捨てんでくれ！」

涙目で上目使いに懇願する秀吉に、流石に光一も何も言えなくなる。

「……わかったよ。じゃあ早速優子に会う前に」
「アタシがどうかしたの？」
「「ぎゃあっ！！」」

突然割り込んできた声に、２人は心臓を鷲掴みされるかのように驚いた。
話題の中心人物である優子その人である。

「しっ心臓が……止まるかと思った、ぞい」
「いっ、いきなり声をかけるなよ優子……びっ、ビックリした」
「？　なんだかよくわからないけど、ごめん」

その様子を見て、まだCクラスからの宣戦布告はないらしい。
そう安著し、深呼吸。

「いや、こっちも悪かった」
「そう。それじゃ一緒に帰りましょ？」
「あれ？　一緒に？」
「あんた達を2人で居ると誤解されるから。3人一緒の方がわかりやすいのよ」

光一は優子より、秀吉の方と仲が良い。
実は噂の大半は秀吉を優子と誤認してのものだった。

「お前も大変だな」
「全部アンタ達の所為でしょ！」
「その言い分はあまりにも理不尽じゃ姉上」

多少機嫌が悪そうな優子を伴い、靴箱へ。

「で、Bクラス戦はどうだったの？」
「勝ったけど、どうかしたか？」
「……設備の入れ替えは？」
「さあ？」

優子の質問を、のらりくらりとかわす光一。

「……もしかして坂本君は、Aクラスが狙いなのかしら？」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。でも戦争は勝算があるからこそ仕掛けるものだろ？」
「そうだけど……じゃあ、大丈夫かしらね？」

Aクラス代表にして学年首席、霧島翔子。
彼女に太刀打ちできるのは、Fクラスにおいては姫路瑞樹くらい。
単科目で言えば、物理で光一、保健体育でムッツリーニと言ったところ。

しかしそれ以前に、Aクラスの戦力は当然Bクラス以上。
ハッキリ言って、雲の上の存在。

「まあ出来れば、静かにして貰いたいわね。Cクラスも殺気立ってる様だし」
「……そうだな。そうしたいところだな」
「……そうじゃの」
「？」

Cクラスという単語を聞いた時点で、2人は狼狽し始めた。
が、何の事かわからず、その場は適当にごまかされる。

「そうじゃ姉上、しばらくじゃが友人の家に泊まる事にしたぞい」
「そう？　……なんか怪しいわね？」

その次の日。

「……優子、どういう事か理由を説明して」
「そっそれは、アタシにもどういう事かさっぱり……まさか！」

Cクラスからの宣戦布告で、優子はその理由を知ることとなった。

第十一問

問題
『ＰＫＯとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え
『Ｐｅａｃｅ-Ｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒｅｔｉｏｎｓ（平和維持活動）の略。国連の韓国のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動の事。

教師のコメント
そうですね。豆知識ですが、Ｕｎｉｔｅｄ　Ｎａｔｉｏｎｓ　Ｐｅａｃｅｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒｅｔｉｏｎｓとも呼ばれたりします。余裕があれば、覚えておくといいでしょう

久遠光一の答え
『ＰＫ　Ｏｆｆｓｉｄｅの略』

教師のコメント
それはサッカーです

土屋康太の答え
『Ｐａｎｔｓ　Ｋｏｓｈｉ－ｔｓｕｋｉ　Ｏｐｐａｉの略。世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体の事』

教師のコメント
君は世界の平和をなんだと思っているのですか。

吉井明久の答え
『パウエル、金本、岡田の略』

教師のコメント
それはセ界の平和を守る人たちです。

補給試験も終わり、本日いよいよＡクラスへの宣戦布告を控えた日。
秀吉は姉の脅威から逃れるべく、光一の家で命の保護と勉強会。

「すまぬのう……」
「いや……考えてみたら、お前の姿がないのは不安を煽られるから」

彼らはクラスを救うある作戦の副作用に怯えつつ、日々を過ごしていた。

「さて、今日はいよいよＡクラスへの宣戦布告だ。あの卓袱台と腐った畳、座布団とお別れか」
「もしくは、敗北してあれよりもひどくなるか……じゃの？」

試験召喚戦争は、下位勢力が敗北した場合は設備を１ランク下げら

れる。
Fクラスが最低であるから、負けた場合は具体例はない。
「まあ泣いても笑っても、今日で運命はきまるんだ。頑張ろうぜ?」
「そうじゃの……むっ、光一よ。あれは明久ではないか?」
秀吉の視線の先には、交差点に差し掛かっている明久。
「ん? おーい明久ー!」
「あっ、おはよう光一、秀吉」
ドンっ!
「わっ!」
そこで、明久は誰かとぶつかり尻もちをついた。
「あいたたた……ごっごめんなさい」
「あっ、こっこちらこそ……っ! 君は、Fクラスの吉井君!?」
明久がぶつかった人物は、明久に気がつくと顔を赤らめた。
その熱のこもった視線を向けられた明久は、背に妙な寒気が走る。
「なんだ、どうした?」
「どうしたのじゃ?」
「貴様、Fクラスの久遠光一!?」
光一と秀吉が駆け寄ると、久保は光一の姿を見るや否や、敵意をこめて睨みつけた

「ん？　ああ、確かAクラスの」
「いかにも、学年次席の久保利光だ」

指でメガネを直し、キリッとした佇まいを見せる久保利光。
Aクラス所属、学年次席にして同性愛趣味を持ち、吉井明久（♂）に好意を抱く男。
その目は、明久に熱烈な視線を向けている。

「ほら明久、立てるか？」
「あっ、うん。ありがと」
「なっ！？　……なんて羨ましい」
「何ボーっとしてんだ？　あんたこの時間、いつも教室で予習してんだろ？」
「っ！　……そうだったな。では、失礼する」

名残惜しそうに明久を見て、その次に光一を射殺す様な視線で見る久保氏

「……おのれ久遠光一！」

と、密かに呪詛をぶつけて、去って行った。
彼の姿が見えなくなるや否や、明久は急にほっと一息をついた。

「どうした、明久？」
「気の所為か、久保君に会ってからの妙な寒気が、治まった気がするんだけど……？」
「それはお前が正常である証拠だ」
「うむっ、むしろ喜ばしい事なのじゃ。気にするでないぞい」

秀吉がうんうんと頷くのをみて、首を傾げる明久だった。

その様子を見て、光一は言い様のない感情が腹の中で渦巻くのを感じた。

「それよりも光一よ。やはり久保には嫌われておるのう」
「だろうな。相棒と宣言してるから、面白くないだろうことは理解できるけど」
「それに加えて、校内ではお主と明久の絡み合う本が、ベストセラーとして出回っておる始末じゃ」

“バカと銃神とバラの世界”（明久×光一　本人許諾なし）
文月学園の腐女子の間では、ダントツのベストセラーとして人気の一品である。

「……僕と、光一が？」
「ちなみに2番目が明久と雄二で、3番目は光一と雄二だそうじゃ」
「おえっ……何であのゴリラ野郎が出て、お前が出てこないんだ？　それにどうしてお前がそんな事知ってる？」
「ワシに聞かれても困るぞい。演劇部で女子部員がその手の話をしておるのを聞いたのじゃ」

朝から知りたくない世界を知ってしまい、吐き気が治まらなくなった光一と明久だった。

そして、Fクラス教室にて。

「まずは皆に例を言いたい。周りの連中に不可能だと言われていたにも関わらずここまでこれたのは、他でもない皆の協力があっての事だ。感謝している」
「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」
「でもまだ早いぞ？　そういうのは、終わってから言うもんだ」
「ああ。ここまで来た以上、絶対にＡクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ！！」

雄二の宣言で、Ｆクラス全員が歓声を上げた。

「おおーっ！」
「そうだーっ！」
「勉強だけじゃないんだーっ！」

Ｄクラス、Ｂクラス相手に勝利した自信が、彼らを奮起させていた。全ては雄二のシナリオ通りに事が進んでいる事も、それを大いに助長させている。

「皆ありがとう。そして残るＡクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を付けたいと考えている」

主要メンバーは既に耳にしており驚きはしなかったが、他はざわめき始めた。

「どういう事だ？」
「誰と誰が一騎打ちするんだ？」
「それで本当に勝てるのか？」

当然、いきなりこんなことを言われれば、動揺するのも無理もない。だが雄二はそれに構わず、机をたたいて皆を鎮める。

「落ち着いてくれ、それを今から説明する。やるのは当然、俺と翔

子だ」
「バカの雄二が勝てる訳ない……」

ヒュッ！　（カッターが投げられた音）
カシンッ！　（カッターがエアガンの弾に弾かれた音）
トンッ、カラカラ！　（カッターが畳に落ちる音）

「光一、邪魔をするな」
「明久の言い分も最もだろ。カッターを投げる暇があったらさっさと説明しろ」

雄二の視線の先には、エアガンを構えた光一。
その銃口は、カッターの射線に向いていた。

「……まぁ、その通りだ。まともにやり合えば勝ち目はないかもしれないが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？まともにやり合えば、俺たちに勝ち目はなかった。今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない……俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる！」

「「「おおぉーーーーっ！！」」」

信頼の証として、全員が雄たけびを上げた。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちは、フィールドを限定するつもりだ」
「フィールド？　何の教科でやるつもりじゃ？」
「日本史だ。ただし、内容は小学生程度、方式は１００点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

試験召喚戦争は、テストの点で雌雄を決する物である。
だからこそ、テストの点を用いた勝負であれば、方法次第では採用される。

「でも同点だったら、きっと延長戦だよ？　そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」
「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？　幾らなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」
「じゃあ、この作戦のからくりは一体何なんだ？　もったいぶってないで教えろよ」
「それもそうだな。それはある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

確実に間違える問題。
それを聞いて、全員が静まった。

「その問題は……“大化の改新”！」
「大化の改新？　誰が何をやったみたいな問題、小学生でやったか？」
「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。単純に年号を問う問題だ、その問題が出たら俺達の勝ちだ」
「大化の改新って言うとえっと、鳴くよウグイス？　いや、良い国創ろう？　……あっ、そうだそうだ。無事故の改新６２５年だっけ？」
「６４５年だ！　明久でもやらん様な間違えをするんじゃない！」

久遠光一は、日本史を壊滅的にダメな科目の１つとしていた。
ちなみに明久は、それを聞いて顔をそむけたのは別の話。

「だが、翔子はお前が今言った年号に絶対に間違える！　これは確実だ、だからその問題が出たら俺達の勝ちだ！　はれてこの教室とはおさらばだって寸法だ！」

そこまで断言するあたり、信用する価値はある。
そう結論付けるには、十分な自信を持つ雄二の姿だった。

「あの、坂本君？」
「ん？　なんだ、姫路」
「霧島さんとは、仲が良いんですか？」

それを聞いて、明久は訝しげに雄二を見た。
姫路瑞希にも好かれていて（明久視点）、学年首席の霧島翔子とも良い関係かもしれない。
それを彼が許せるかは……

「ああっ。俺と翔子は“幼馴染”だ」

答えは“Ｎｏ”である。

「総員、狙えええ！！」

その言葉に明久は激高し、号令を上げた。
それを受けてクラスメイト達は、アサルトライフルやマシンガンを雄二に向けて構え始める。

「なっ！？　何故明久の号令で急に構える！？」
「黙れ男の敵！　Ａクラスの前に貴様を殺す！！」
「俺が何をしたと！？」

「待て！　それ全部俺のコレクションじゃねえか！　いつの間に抜き取った!?」

光一がいつも持ち歩いてるボストンバッグが、いつの間にか空となっていた。

「ごめん光一、でもあいつを抹殺するにはこれが良いんだ！」

「だったら弾代含めてレンタル料１人１０００円出せ！」

という言葉に、全員が光一に向って千円札を手渡す。

（明久を除いて）人数分ある事を確認したら、ゆっくりと自分の席に座った。

「光一！　てめえ俺を助ける為に止めたんじゃなかったのか!?」

「これをコレクションなしでどう止めろってんだよ?」

「この役立たずのモヤシ野郎が！」

「良いかみんな、射撃というのはだな?」

「何射撃の講義始めやがんだ!?　しかもいつの間にお前まで構えやがった!!?」

いつの間にか両手に自動拳銃を持ち、それを雄二に向けて構える光一。

その手をそのままに、射撃についての講義を始めた。

「そっそれより、光一だって木下優子と幼馴染だろ!?」

「ちょっ、それは今関係ないだろ！」

明久を除く級友が彼にも殺意を向け、半分が光一にも銃を構えた。

「ちょっ、ちょっと待て！　優子とはもう何でもないぞ!!」

「もうって、まさか光一、木下優子さんといい関係だったとか！？」
「それは違うのじゃ明久。光一は姉上にフラれておるのじゃから、そんな事ありえん」
時が止まった。
「ひっ、秀吉？　光一、今にも崩れそうなんだけど……？」」
「え？　……あっ、すっすまぬ……」
古傷をえぐられ、その場にうずくまってしまう光一。
その姿を見て、原因を作った張本人は罪悪感を感じる。
「……まあ、その、なんだ……光一、すまなかった」
「……昔だよ。気にするな……」
「そっか……幼馴染だからって、それが良い関係であるとは限らないんだね」
その姿に何も言えなくなり、全員が銃を下した。
「あの、吉井君？」
「ん？　何、姫路さん？」
「吉井君は、木下さんや霧島さんが、好みなんですか？」
「そりゃ、まあ。美人だし……えっ、どうして姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？　それと島田さん、どうして君は僕に向かってなんて危険な物を投げようとしてるの！？」
攻撃態勢を取る瑞希と、教卓を持ち上げて明久めがけて投げようとする美波。
その２人に問い詰められ、明久の命は風前のともしび。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さい頃間違えてウソを教えたんだ」
「それが、大化の改新かの？」
「そうだ。アイツは1度覚えた事は、決して忘れない。だから今、学年トップの座にいる。だが俺はそれを利用し、アイツに勝つ！そうしたら俺達の机は……」
「「「システムデスクだ！」」」
その傍らでは、テンションは最高潮だった。
「今から宣戦布告に行くぞ、ムッツリーニと秀吉も用意しろ」
「っ！　すっすまんが、ワシは勘弁してくれんかの？　せめてもの詫びに、光一の看病をせねば」
「ふーん。じゃあ任せるぞ」
明久、瑞希、美波、ムッツリーニを伴った雄二は、一路Aクラスへ。
「本当にすまんかった」
「いや、良い……もう吹っ切ってたはずなんだけどな」
「すまぬな……さて、雄二達は大丈夫じゃろうか？　特に姫路が心配じゃ」
「ああっ、あの噂か？」
霧島翔子は、言いよって来る男性を軒並み断っている。
その事から、同性愛主義者という話が囁かれていると言う。
「所詮噂だろ？　幾ら言いよって来る男を軒並み断ってるとは言え、安直過ぎる噂だと思うがな」
「それもそうじゃが、万が一という事もあり得るぞい」

「いや、万が一が一般的になってる方がおかしくないか？　幾らこの学園は変人が多いとは言え」
「言われてみれば、そうじゃな」

その後、戻ってきた雄二達から勝負方式が伝えられた。

１０時より始め、一騎打ち5回で3回勝った方の勝ち。
教科選択権は、Ｆクラス3回でＡクラス2回。

Ｆクラス　ＶＳ　Ａクラス
バカ対エリートの戦いが、今始まる。

第十二問

問題　以下の文章の（　）にはいる正しい物質を答えなさい
『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（　）である』

姫路瑞希の答え
『水酸化カルシウム』

教師のコメント
正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください

久遠光一の答え
『小便』

教師のコメント
下品な回答はやめてください

土屋康太の答え
『塩化吸収材』

教師のコメント
勝手に便利な物質を作らないように

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント
それは反則です

午前１０時、Ａクラス教室にて。

「改めてみると、すごいな」
「だよね」

巨大サイズのプラズマディスプレイ、人数分用意されたシステムデスクにリクライニングシート。
パソコンや個人用エアコンや冷蔵庫まであり、その中身も学園側で管理。

「しかも担任が美人で才女の高橋女史と来れば、破格もいい所だ」
「私の担任するクラスになりたかったのなら、振り分け試験で相応の結果を出すべきです」
「ご最もで」

立ち会いとなるのは、Ａクラス担任であり学年主任である、高橋女

史本人。

「では、両名とも準備は良いですか？」
「ああ」
「……問題ない」

それぞれの代表が、決意表明。

「それでは、１人目の方、どうぞ」
「Ｆは当然、俺からだ」
「アタシから行くよ」

Ｆクラスから真っ先に名乗り出たのは、切り込み隊長こと久遠光一。
対するＡクラスはその幼馴染である木下優子。

「科目は何にします？」
「じゃあ、物理に……」
「ちょっと待って」

光一の科目選択の申し出を、優子が割り込んだ。
……怒りのオーラを纏った素敵な笑顔で。

「？　……どっ、どうしたんだ、優子？」
「ちょっと話があるんだけど、良いかな？　秀吉も」
「えっ！？　あっ、姉上？　せめて、この勝負が終わってからで構わんかの？」
「じゃあ光一は後でいいわ。大丈夫よ、すぐ終わるから」

逃げようとした秀吉を取り押さえ、そのまま優子は教室の外へ連れ出す。

助けを求める秀吉に、光一は頭を下げた。

「アンタ達、Cクラスで何してくれたのかしら？　どうしてアタシがCクラスの人たちをブタ呼ばわりしてる事になってるのかなぁ？」
「それは、姉上の本性をワシなりに推測して……あ、姉上！　ちがっ、その関節はそっちには曲がらなっ……！！」

ガラガラガラ！

「秀吉、急用ができたから帰るってさっ」
「世間一般では、急用じゃなく救急と呼ぶんじゃないか？」
「じゃあ光一、あんたとも早く話をしたいから、早く済ませましょ？」

光一にとって、それは死刑宣告だった。

「……せめて、話し合う余地くらいは欲しいんだが？」
「なあに？」
「……いえ、何でもありません」

せめてもの抵抗だったが、優子の良い感じの笑顔に二の句を告げられなくなった。
ついでだがAクラスの面々に、過激派筆頭の意外な一面を垣間見た。

「……改めて、教科は物理でお願いします」

終わったら人目のある所をメインに、さっさと逃げよう。
と、光一は心の底で、逃亡ルートを考えてると……

「ねえ光一、一つ提案があるんだけど、良いかしら？」

「提案？　何だよ？」
「この戦い、２回線目も含めたタッグ戦にしない？　教科は物理で良いから」
「おいおい、どういうこった？」

Ａクラス相手では難しいかもしれないが、明久の召喚獣の操作技術は３～４倍の点数相手に十分有利に戦える。
それに加え、光一の召喚獣は遠距離からの精密射撃に長けている為、コンビとしては相性が良い。

少なくとも、ＤクラスやＢクラスでコンビとしてそれなりに戦果をあげている事は、知れ渡っている。

「もちろん、貴方達のコンビを倒せる自信があるからよ」
「大口叩いてくれるじゃねえか。明久、俺達タッグの力見せてやろう」
「うん、わかった」

明久が一歩前に出て、光一と拳をうちあった。
それに対し、Ａクラス側は次鋒を予定していた佐藤美穂。

「待ってくれ木下さん、佐藤さん。タッグであれば、僕に……」
「その言い分は却下した筈よ、久保君」
「だが僕には、奴を倒さなければならない理由が……」
「これは競争じゃなく戦争よ？　文系の久保君に、物理で光一に勝つ事は出来ないわ」

重ね重ね言うが、彼、久保利光（♂）は、吉井明久（♂）に好意を抱いている。
その為相棒という間柄で最も親しい親友であり、“デキてる”との

噂まである光一を忌み嫌っていた。

「……何でかな？　久保君が現れた途端、妙な寒気がおさまらない」
「前にも言ったが、それはお前がノーマルである証拠だ。むしろ寒気を感じなくなった時が、お前の最後だと言ってもいい。忘れるなよ？」
「？　……うん、わかった」

久保が渋々と後ろに下がり、タッグ戦の組み合わせは決まった。

『Ｆクラス　久遠光一＆吉井明久　物理４９８点＆６２点』
ＶＳ
『Ａクラス　木下優子＆佐藤美穂　物理３９８点＆３８９点』

「やっぱり見劣りするな……」
「まあまあ、不足分はコンビネーションで埋めればいいさ」

学年で最も戦ったＦクラスの中で、常に先陣をきってきたコンビ。
それだけに、コンビネーションに関しては学年１を誇る技量を持っていた。

「光一が腕輪所有とは言え、遠距離型。距離を詰めればどうという事はないわ」
「はい。実質２対１ですし、何とかなりそうですね」
「ちょっと！　完全に僕は眼中なしですか！？」

当たり前である。

「それでは、始めてください」
「よし、行くぞ明久。サモン！」

「うん。サモン！」

改造制服に木刀という装備の、明久の召喚獣。
毛皮のジャケットに右手にライフル、左手に自動拳銃を持った光一の召喚獣。
その2体が姿を現した。

「覚悟しなさい光一、サモン！」
「では、行きます。サモン！」

西洋鎧に、ランスという装備の優子の召喚獣。
方や、同様に和式の服を纏い鎖鎌という装備の召喚獣。

「近距離型と中距離型か……明久、優子を頼む。俺は佐藤だったか？　その召喚獣とやるから」
「うん、わかった。でも良いの？　僕が木下さんで」
「良いに決まってる……というか、むしろお願いします」
「だったら先鋒辞退すればいいのに……っと！」

そこへ、ランスを持って突撃してくる優子の召喚獣。

「ちょっ、強い上に早すぎ！！」
「当たり前だろ。2人とも姫路クラスの点数なんだから！」

木刀で横からなぎ払い、そのまま軌道をそらす。
そのまま明久の召喚獣は木刀を振り上げ、優子の召喚獣に一撃！

「よし、行けるか！」
「よそ見をしないでください」

そこへ光一の召喚獣めがけて、鎖鎌が投げ放たれた。
が、苦もなくライフルで撃墜。

「俺の弾丸は当たる。それは当然、最も弾き易い個所も例外じゃない」
「良く召喚獣でそんな芸当が出来ますね？」
「そういう一芸に秀でてるのが、Ｆクラスなんだよ。たかが最低クラスと甘く見るな！」

自動拳銃を構え、佐藤および優子の召喚獣に向けて発砲。
……だが。

「え？」
「あなたの攻撃パターンは研究済みです」

武器を持つ腕、あるいは脚を狙って発砲した弾丸は、全てよけられた。

「だったら何だってんだよ！」

先ほどと同じく、足元めがけて発砲。
それを回避した直後……。

「明久、突き飛ばせ！」
「うん、わかった！」

ランスを振り下ろす優子の召喚獣の懐に入り、そのまま突き飛ばす。
それを狙うかのように、光一はキーワードを。

「“爆発”！」

光一の召喚獣の腕輪が光り、その次の瞬間打ち出した弾丸が着弾。
それを中心に弾丸が爆発し、Ａクラス召喚獣のみを吹き飛ばす。

「あっ、危ないよ光一。僕もギリギリだったんだけど？」
「俺がそんな下らん凡ミスをするか」
「まあ雄二と違って、光一はそんなことする訳ないから信じれるけど……あれ？」

煙が晴れると、そこにはよろよろと立つ敵召喚獣。

『木下優子　物理１３６点』
『佐藤美穂　物理１４９点』

「流石はＡクラス、一筋縄じゃいかんか」
「当たり前よ……けど、どうしよう？」

光一の腕輪の能力は、Ｂクラス戦での使用のみ。
その為まだあまり知られておらず、対策も立てていなかった。

「よし、良いぞ久遠に吉井！　そのままたたみかけろ！」
「やったれＦクラスの切り込み隊長コンビ！」
「お前をフった木下優子に、目にものを見せてやれ！！」

ドスッ！！

「あっ、あれ？　光一！？」
「……だッ大丈夫だ。これしきで参る俺じゃない」

「余計な事言うな須川！　さっきの事を忘れたのか！？」

「すっすまん……」

実は光一、内心では吹っ切れてはおらず、今だ未練タラタラだった。

「あの、木下さん。フったというのは、どういう事です？　久遠君と交際されているのでは？」

「なっ！　ちっ違うわよ！　あんな犯罪者臭いバカなんて、知り合いどころか接点がある事すら嫌だっていうのに！！」

ドスッ！！！

「……あの、光一？」

「……」

「光一？　ねえ、光一！？　……すみません、タッグ戦棄権します。雄二、運ぶの手伝って！」

「あっ、ああ、わかった！　光一、しっかりしろ！！」

『Ｆクラス　久遠光一＆吉井明久　物理４０１点＆６８点』

ＶＳ

『Ａクラス　木下優子＆佐藤美穂　物理１３６点＆１４９点』

Ｆクラス棄権につき、Ａクラス勝利

「あの、木下さん。もっと言い方というものが……」

「……優子、今の言い方は酷過ぎる」

「あの、そういう意味で言ったんじゃなくて、その……」

だが木下優子に対して、Ａクラスの面々は冷たかった。

「では、３人目のかたどうぞ」

「……（スック）」
「じゃあ、ボクが行こうかな？　１年の終わりに転入してきた工藤愛子です、よろしくね」

Ｆクラスからは、ムッツリーニ事土屋康太。
Ａクラスからは、ショートカットのボーイッシュな女の子が出て来た。

「どう、落ち着いた？」
「すまん……本当に、どう詫びたらいいのか」
「気にするな。惚れた女にあんな事言われたら、ああなるのも無理もない」

その傍らでは、復活した光一が許可を貰ってハーブティーを呑んでいる。
その辺りも、しっかりと完備されているＡクラスだった。

「教科は何にしますか？」
「……保健体育」
「土屋君だっけ？　随分と保健体育が得意みたいだね。でも、ボクだってかなり得意なんだよ？　……キミと違って、実技でね」

その言葉に、Ｆクラスの面々は沸いた。
そのうち、明久も例外ではない。

「そこのキミ、吉井君だっけ？　勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？」
「あっ、俺も混ぜて。出来れば実技での教授を希望したい」
「良いよ……って、もう復活したの？」
「元々フラれてる訳だし、優子の性格もガキの頃から知ってるから、

これ位どうという事はない」

それを聞いて、優子は少々複雑な表情を見せた。

「じゃあ光一も交えて、是非ご教授を……」

「吉井には永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんていらないのよ！」

「そうです！　永遠に必要ありません！」

「島田に姫路、明久がさっきの光一位に死ぬ程悲しそうな顔をしているんだが」

試召戦争で精神的に瀕死に追い込まれた人物は、おそらく後にも先にもこの2人だけだろう。

「そろそろ召喚を開始してください」

「はーい。サモンっと」

「……サモン」

Dに Bと、出番がなかった忍び装束に2本の小太刀を持つムッツリーニの召喚獣。

そして愛子の召喚獣は、セーラー服に巨大な斧を持ち、その腕には腕輪も装備されていた。

「実戦派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

愛子の召喚獣が、腕輪を光らせて踏み込む。

斧が雷光を纏い、高得点で得たスピードで距離を詰め飛び上がった。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」

「……加速」

「え？」

突如ムッツリーニの召喚獣の姿が消え、相手の射程外に。
そして……

「……加速、終了」

ムッツリーニが呟いてから一呼吸置き、愛子の召喚獣が倒れた。

『Ｆクラス　土屋康太　保健体育５７２点』
ＶＳ
『Ａクラス　工藤愛子　保健体育４４６点』

「そ、そんな……！　この、ボクが……！」

相当ショックを受け、愛子は床に膝をついた。

「これで２対１ですね。次の方は？」
「あ、は、はいっ。私ですっ！」
「それなら、僕が相手をしよう」

Ｆクラスからは姫路瑞希、Ａクラスからは学年次席である久保利光。

「ここが一番の心配所だな」
「ああ……事実上の、学年次席争いってところか」

振り分け試験でリタイアこそしたものの、そうでなければどちらが学年次席の座でもおかしくはない。
それほど点数はほとんど同じだった。

「科目はどうしますか？」
「総合科目でお願いします」

と進言したのは、久保利光。
総合科目は学年順位がそのまま影響する。

「ちょっと待った！　それは……」
「構いません！」
「姫路さん……」
「信じてやれよ明久、Ｆクラスの姫路瑞希をよ」

『Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目４４０９点』
ＶＳ
『Ａクラス　久保利光　総合科目３９９７点』

「ま、マジか！？」
「いつの間にこんな実力を！？」
「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！」

至る所から驚きの声が上がった。
点数差４００点オーバーなのだから、無理もない。

「ぐっ……！　姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ？」
「……私、このクラスのみんなが好きなんです。人の為に一生懸命な皆の居る、Ｆクラスが」
「Ｆクラスが好き？」
「はい。だから、頑張れるんです」

瑞希が礼をした後に、下がる。
光一に背を軽く叩かれた明久は、一歩前に。

「御苦労さま、姫路さん」
「……はい」
「……もしかして、杞憂？」
ただ1人、その光景を見て安心しつつ羨ましげに見ていた人が居た。
「これで2対2です。最後の1人、どうぞ」
圧倒的勝利の上、敗北も殆ど運による物という結果。
Fクラスがここまでやるとは思っていなかったのか、高橋女史も若干焦りの表情を浮かべる。
「……はい」
「俺の出番だな」
最後は当然、互いのクラスの代表同士。
「教科はどうしますか？」
「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は１００点満点の上限ありだ！」
「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」
ノートパソコンを閉じ、高橋女史は教室を出ていく。
そして、Ａクラスの面々はどよめいた。
「上限ありだって？」
「しかも小学生レベル、万点確実じゃないか」

「注意力と集中力の勝負になるぞ……」

2人の代表は、一旦自分達の陣地へと戻る。
まず雄二に声をかけたのは、明久。

「雄二、後は任せたよ」
「ああ、任された」

明久が差し出した手を、雄二はぐっと握る。
次にムッツリーニが歩み寄り、ピースサインを雄二に向けた。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」
「……（ふっ）」

口の端を軽く上げた笑みを浮かべ、ゆっくりと戻っていく。
次は瑞希が歩み寄った。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」
「ああ、明久の事か。気にするな、後は頑張れよ」
「はいっ！」

最後に光一が、雄二に向って拳を差し出す。

「泣いても笑ってもこれが最後だ。気を引き締めろよ」
「ああ。光一、お前と明久が一緒に成した功績には、随分助けられた」
「なあに、俺がやりたいからやったまでだ……頼むぞ、代表」
「ああ」

コツっと、拳をぶつけ合わせた。

所変わって視聴覚室。

「では、最後の勝負、日本史テストを行います。制限時間は５０分、満点は１００点です」

その様子はＡクラスの巨大プラズマディスプレイに映し出され、他の面々はそこで待機。

「不正行為などは即失格になります。良いですね？」

「……はい」

「わかっているさ」

「では、始めてください」

そして、問題は始まった。

Ｆクラスの面々は、ディスプレイに映し出される問題を凝視し始める。

勝利のカギを、懸命に探すために。

＜＜次の（　）に正しい年号を記入しなさい＞＞

（　）年　平城京に遷都

（　）年　平安京に遷都

・　・　・

（　）年　鎌倉幕府設立

・　・　・

・

（　）年　大化の改新

「あった……あったぞ！」
「じゃあ、ウチ等の卓袱台が……」
「うん！　最下層に位置した僕たちの、歴史的な勝利だ！！」
「「「うおぉおおおおお！！！」」」

Ｆクラスの面々が、歓喜の雄たけびを上げた

＜日本史勝負　限定テスト　１００点満点＞
『Ａクラス　霧島翔子　９７点』
ＶＳ
『Ｆクラス　坂本雄二　５３点』

Ｆクラスの卓袱台が、みかん箱になった

「総員、武器をとれ！　これよりあのゴリラ野郎を処刑するぞ！！」
「光一に続け！　期待と信頼を裏切ったあのバカ野郎に、僕たちの怒り全てをぶつけてやるんだ！！」
「「「おおおおおお！！！」」」

Ｆクラスの面々は、怒りの雄たけびを上げ視聴覚室へと

先陣を切るのは久遠光一、続くは吉井明久。
全員の手には久遠光一のコレクションが握られていた。

第十三問　（試召戦争編　エピローグ）（前書き）

ＰＶ数５００００突破！　ユニーク６０００達成！

毎度のことながら、ありがとうございます。

良い評価も頂けて、感無量でございます。

第十三問　（試召戦争編　エピローグ）

問題　次の（　）に正しい年号を記入しなさい。
『（　）年　キリスト教伝来』

霧島翔子の答え
『１５４９年』

教師のコメント
正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え
『雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った１９９３』

教師のコメント
ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです

「雄二、てめえコラ！！」

視聴覚室の扉が開かれ、Ｆクラスの武装集団が押し寄せる。

「３対２で、Ａクラスの勝利です」

それに構う事なく、高橋女史はそう宣言。
そのそばでは、座りこむ雄二とその傍で雄二を見下ろす翔子。

「……雄二、私の勝ち」
「……殺せ」
「いい度胸だ、殺してやる！　歯をくいしばれ！！」
「待て明久、その前にハチの巣にするべきだ！！」

掴みかかろうとする明久を制し、両腕や肩、背にコレクションを重装備した光一が両手の銃を雄二に突き付ける。
明久はそれを見て頷き、先程光一から渡されたアサルトライフルを雄二に突き付けた。

「吉井君、落ち着いてください！」
「光一も落ち着きなさいよ！」

瑞希が明久を、優子が光一を制し、雄二から引きはがそうとした。

「大体、５３点って何！？　０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数じゃ……」
「いかにも、俺の全力だ」
「糠喜びさせんな、このゴリラ野郎！！」

光一は更にスタンガンを取り出し、雄二に突き付けた。
だがそれは、美波によって阻まれる。

「吉井、久遠、落ち着きなさい！　アンタ達だったら、３０点も取れないでしょうが！」
「「それについては否定しない！」」

光一と明久の声が、寸分の狂いもなく合わさった。

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」
「くっ、３人とも何故止めるんだ！？　このゴリラには喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なのに！！」
「それって体罰じゃなく処刑です！」
「待て明久、まずは逆さに吊るし上げて俺のコレクションと投げナイフの的にしないと」

「待ちなさい光一！　前半はともかく、後半が明らかに処刑でしょ！」

瑞希と優子、２人に引き留められ明久と光一は大人しく（？）引き下がる事に。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ、負けていた」

「言い訳はしねえ」

「潔いのは結構だが、あまりにも情けなさすぎるぞ？　手を抜いて負けるなんて」

「……ところで、約束」

「……！（カチャカチャカチャ！）」

翔子の言い放った言葉で、ムッツリーニと明久が突如撮影準備を始めた。

その場にいなかった光一をはじめ、Ｆクラスのギャラリーは疑問符を浮かべる

「え？　どういう事？」

「霧島さんの提案で、負けた方は何でも言う事を聞くって約束をしたの」

「……成程ね」

光一は明久とムッツリーニの思惑を理解して、ため息をついた。

翔子に視線を戻すと、瑞希に視線をやった後に雄二に視線を戻した翔子が……

「……雄二、私と付き合って」

と、言い放った。

「「「……へ？」」」

光一を除き、Ｆクラスの面々どころかＡクラスの面々も面食らった。
それもそのはず、霧島翔子は同性愛主義者だと言う噂が、誰もがそれを疑わない程有力となっていた。
だからこそ、男性である雄二に冗談や酔狂とは思えない表情で告白する姿は、正直意外その物だろう。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか？」
「……私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」
「その話は何度も断っただろ？　他の男と付き合う気はないのか？」
「……私には、雄二しかいない。他の人なんて興味ない」

その姿を見て、全員が噂の真実を確信した。
つまりは霧島翔子についての噂は、一途に雄二を想っていたが故である事に。

「拒否権は？」
「雄二、んなもんある訳ないだろ」
「……その通り。約束だから、今からデートに行く」

と、雄二の首根っこをつかむ。

「ぐぁっ！　離せ！　やっぱこの約束はなかった事に……」

と、雄二は抵抗するも何故かびくともしない。
そのまま教室を出て行こうと……

「ちょっと待った」

するのを、光一が止めた。

「……何？」

「光一……すまん、恩に着る！」

「これを貸してやる」

と、翔子にある物を手渡した。

スタンガン（２０万ボルト）

「襲いかかってきたら、これを使うと良い」

「テメ、何の心配してやがる！？」

「問題ない。雄二になら襲われても良い」

問題発言だったが、誰もが絶句している状態のため特に反応は来なかった。

「じゃあ逃げようとしたら使ってくれ。俺でよかったら、幾らでも協力するから」

「ありがとう。久遠、良い人」

「良い人じゃねえ！　光一、テメ覚えてやがれ！　生きてたらぶっ殺してやる！！」

「幸せになれ、我が友（笑）よ」

と、再度雄二の首根っこをつかみ、２人は遠くへと去って行った。

「「「「……」」」」

去って行ったあとも、場の沈黙は今だ空間を支配していた。

「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」

それを破ったのは、とある教師の声。

「あれ？　鉄人……鉄村先生？　俺たちに何か？」

「おい待て。今俺の名前と鉄人を組み合わせて、斬新な名字を作らなかったか？」

「あっ、すみません。鉄人先生」

「違う、鉄人に統一しろと言ったんじゃない！　……まあ良い、今から我がFクラスに補習について説明しようと思ってな」

我がFクラスという言葉に、ほぼ全員の脳裏にある嫌な予感がよぎった。

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から補習授業担当のこの俺に担任が変わるそうだ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「「「なにぃっ！！？」」」

クラスの男子全員が悲鳴を上げた。

「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは、正直思わなかった。でもな、幾ら“学力が全てではない”と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、蔑にしていい物じゃない」

負け方が負け方だけに、グゥの音も出なかった。

「吉井と久遠、そして坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の“観察処分者”と“過激派筆頭”。ならびに“A級戦犯”だからな」

「そうはいきませんよ！　何としても監視の目を掻い潜って、今まで通り楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「その通り！　一筋縄でいくとは思わない事ですね。村人先生」

「……お前らには、悔い改めるという発想はないのか？　それと久遠、勝手に斬新な名前をつけるな」

彼らには、その気は一切なかった。

というのは、ポーズだけだが。

「とりあえず明日から、授業とは別に補習の時間を2時間設けてやろう」

「うぇっ！？　……けど、ちと頑張ってみるか？　どうせ3ヶ月何もできないんだし」

「うーん……そうだね。また3ヶ月後に鉄人の魔の手から逃れるって目標が新しく出来たから、やってみようか」

「やる気が出たのはうれしいが、もうちょっとマシな理由はないのか？」

「「ありません！」」

呆れるように言う鉄人に、2人して堂々と言い放った

「それじゃ今日はもう終わりだし、秀吉介抱してから帰るか」

「そうだね。帰って何しようかな？」

「姫路誘ってデートでもすればいいだろ。これやるから、頑張れ」

と、光一は映画のチケットを明久に手渡した。

実は“優子を誘うつもり”で買った物なのだが……。

「俺にはもう必要ないし、お前にやる」

「え？　でも……」

「良いから」

と、押しつけるようにチケットを手渡した。

「ねっ、ねえ吉井！　そのチケットの映画、ウチ観たかったのよ！」

「わっ私も、その映画観たかったんです！　一緒に行きませんか！？」

「え？　何々！？　どうして2人して殺気立ってるの！？」

と、それを見るなり瑞希と美波が、我先にと明久に詰め寄った。

それを見て、光一は笑みを浮かべる……が、どこか哀愁を背負っているのはお約束。

「……良いよなあ、明久も雄二も」

「何黄昏てるのよ？」

「親友がモテて、俺はお前に改めてボロクソにフラれたんだ。そういう気にもなるよ」

実際、その所為で試験召喚戦争に勝った側として、罪悪感を感じた優子だった。

「それにしても、まだ諦めてなかったのね？」

「俺もそのつもりだったよ……で、何でまだいるんだよ？」

「忘れてない？　Ｃクラスの事」

光一はすぐさま逃げようとしたが、優子に首根っこをつかまれ失敗。

「ちょっ、待て！　あんな事言われた上にこれ以上の罰なんて、理不尽にも程がある！！」
「それもそうだけど、だからと言って許す理由にはならないわ。まあ体罰は勘弁してあげるから、今日は買い物に付き合って貰うわよ？」
「名目が名目だから嫌な予感しかしねえ！」

光一は瑞希と美波に圧されてる明久に目をやると、明久も頷いた。まあ光一が原因だと言うのは、おいておくとしてだが……。

「鉄人先生、やっぱり補習今からやりましょう！　個人で良いですから！！」
「そうです。思い立ったが仏滅ですよ！」
「吉日だバカ。まあお前たちがやる気なのはうれしいが……まあ無理をする事はない。それに吉井も久遠も、彼女が出来れば少しは更生するかもしれんしな。先生は大いに応援してやるぞ」

普通に考えれば、ある意味男女交際を応援する様な事。だが2人には地獄へ突き落される様なことこの上ない。

「おのれ鉄人！　僕たちが苦境にあると知った上での狼藉だな！？　こうなったら卒業式の日に、伝説の木の下で釘バットをもって貴様を待つ！！」
「じゃあ俺はクリスマスイブの夜、雪の降りつもる公園でバルカン砲を持って貴様を待つ！！」
「斬新な告白だな、おい」

鉄人に詰め寄ろうとしたところを、明久は美波に、光一は優子にネクタイをつかまれ引っ張られる。

「逃げようったってそうはいかないわよ、吉井」
「そうよ光一。私の風評に傷を付けてくれた罪、きっちり償って貰うわよ？」
「では吉井君、この際3人で良いですし、久遠君に木下さんも同伴でいいですから行きましょう」

明久の方はそれに瑞希も加わり、左腕を抱きかかえるように引っ張り始める。

「ちょっと待って姫路さん！　なんで雄二の事をほっといて、僕と映画を観たがるの!?」
「坂本君？　何のことですか？」
「え!?　だって……もしかして、違うの!?　じゃあ誰が」
「無駄口叩いてないできなさい！」
「ぐぶっ！　ちょっ、ぐるじ……」

美波が引っ張る力を強め、ネクタイが首を締め付ける。
瑞希もそれに構わず、ただ引っ張る事に必死になっていた。

「なあ優子、手を離して。秀吉介抱しないと」
「そうね。じゃあ一緒に行ってあげるわ？　そう言って戻ってこない可能性も否定しきれないし」
「少しは信用してくれ！」

とりあえずだが、明久と光一をはじめ、先行した雄二には幸せそうで不幸なひと時が待っていた。

第十四問

文月新聞

『僕が小さなころ、祖父がよくこう言ってました。

“明久。泥棒でも何でも良い、一番を目指して精進しなさい”

今、僕は天国にいる祖父にこの事を教えてあげたいと思います。

じいちゃん……これで、良いかい？』

以上

『女装が似合いそうな男子生徒ランキング１位』

『こいつにだけはバカと言われたくない生徒ランキング１位』

『モテそうな男子（同性愛編）ランキング１位』

『危険人物ランキング２位』

の３．５冠を達成した、吉井明久さんのコメントでした。

ちなみに、予定していたもう一名

『危険人物ランキング１位』

『敵にしたくない生徒ランキング１位』

『武器が似合いそうな生徒ランキング１位』

の３冠を達成した久遠光一さんのコメントは、取材班が黒こげで入院という不幸があり、中止。

映画館。
そこは数々のドラマが存在する。

「で、何故ワシまで一緒なのじゃ？」
「毒食らわば机までだと思って、頼む」
「皿までよ。大体名目上御仕置きとは言え、毒とは失礼ね」

明久は瑞希と美波を、光一は秀吉と優子を伴って、映画館へときていた。

「チケット代、コーラ、ポップコーン……映画館、何と恐ろしい場所！？」

明久は普段を水と塩で過ごすだけあって、その値段に驚愕していた。というより、デートだと言う自覚そのものがないらしい。

「何シケた事言ってんだよ？　姫路や島田とのデートだって言うのに」
「そりゃ確かに嬉しいけど……どうも解せないよ。島田さんが僕と一緒に行きたがるのも、姫路さんは好きな人が居るっていうのに僕

なんかと映画観に来る事も」
「少なくとも、俺と優子よりは脈があるってことだろ？　……やべ、なんか悲しくなってきた」
「ごめん……そうだよね。相棒が男らしく玉砕したんだから、僕もいっそ玉砕覚悟で行くべきだよね」

自分で自分の傷をえぐってしまい、今にも泣き出しそうな光一。
男らしくぶつかって玉砕した姿に、自分がいかに情けないかを悟らされる明久。

「やはり光一は、本気で姉上の事が好きみたいじゃの」
「一途に1人の女性を純粋に想う気持ちって、素敵ですね」
「憧れるよね」
「やっ、やめてよ。その……だってアタシは、幼馴染としか……」

改めて光一の気持ちを再確認した秀吉と、その気持ちに敬意を示す瑞希と美波。
そして、自分に対しての気持ちに揺るぎがない光一に対し、複雑な気持ちを抱く優子。

「よし、僕も男だ！　初めてのデートなんだし、これ位の出費や痛手を負う価値はあるじゃないか！」
「ほうっ、随分と引き締まった顔になったじゃないか明久」

そこへ突如、割り込む声。

「……俺も今回ばかりは、負けを認めざるを得ないぜ」

そこには、先ほど交際をする事になった、霧島翔子と坂本雄二。
ただし、雄二には手枷が付けられており、逃げられない状態だった。

「……雄二、どれがみたい？」
「早く自由になりたい」
「じゃあ、これ」

と、雄二の言い分を無視して、映画の紹介表示を指差した。

「おい待て！　それ３時間２４分もあるぞ！？」
「２回見る」
「１日の授業より長いじゃねえか！！」
「授業の間、雄二に会えない分の、う・め・あ・わ・せ」

雄二は翔子の手に持たれた鎖をひったくった後、そそくさと出口へと向かう。
が、先ほど光一から受け取ったある物を取り出す。

「今日は、帰さない」

映画館に悲鳴が響き渡った。

「……ある意味すごいな？」
「うん……でもあれ、光一の所為じゃない？」
「気の所為だ。俺が渡さなくても、どの道逃げられなかったと思うぞ？」

雄二達を見送った後に、６人で映画を見る事に。
明久が用意したポップコーンとコーラを手に、瑞希と美波は今か今かと楽しみにしていた。
ちなみに席は、明久を挟んで左に瑞希が、右に美波という陣形。

「どんなのか楽しみだね、姫路さん、島田さん」
「そうですね……久遠君に感謝しないと」
「そうよね……折角のチャンスだもん」

それと同時に、チャンスをくれた光一に感謝していた。

映画終了

「面白かったね」
「はい。久遠君のセンスが良くて、幸運でした」
「うん。久遠のチョイスだからガンアクションかと思ってたけど、意外とデート向きだったわね？」

3人とも、満足の様子。
優子と秀吉も、それなりに満足した様子。

「たまには映画も悪くないわね。光一、ありがと」
「演技の良い参考になったぞい。光一は姉上と2人で観たかったじゃろうがの」
「もうよせよ……むなしくなるから」

秀吉の言葉に、まるで福原教諭の様な空気を背負った光一だった。

「……光一も報われないね」
「明久……報われない恋があるからこそ、恋愛は価値があるものなんだ」
「……光一」

その言葉は、その場全員の胸に大きく響き渡った。

「お姉ーさまーー！！

そこへ、突如乱入者。

「探しましたおねえさま！」

「みっ、美春！？」

突如現れたのは、髪を縦ロールにした文月学園の制服を纏う少女、清水美春。

「誰？」

「知り合いよ」

「違います、美波お姉さまの恋人です！」

その言葉を聞いて、全員の視線が美波に集中。

「お前、そんな趣味があったのか？」

「ないわよ！　うちはノーマルで、ちゃんと男の人が好きなんだから！！」

「いけませんお姉さま、男などという愚劣なブタなどにそのような事を！！」

その次に、光一と明久を見据えて射殺す様な視線をぶつけ、コンパスやカッターなどを取り出した。

それを見て光一は異様な殺気を感じ取り、懐からスタンガンを取り出す。

「この薄汚いブタ共は、今美春が処分いたします！」

「ええっ！？　なっ何でいきなり？」

「問答無用、お姉さまと映画を見たその罪、死んで償いなさい！！」
「やっ、やめなさい美春！」

美波の制止も聞かず、明久や光一めがけてカッターを投擲。
だがそれは、光一のエアガンによって阻まれた。

「いきなり出てきて攻撃とは、穏やかじゃないな」
「ブタの分際でお姉さまに近づくなど、万死に値します！」
「やれやれ……島田、お前も災難だな」
「ブタの分際で、美春の愛を災難と言いましたね！？　八つ裂きにします！！」

両手にカッターを構え、光一に襲いかかる美春。
だが、光一はスタンガンの出力を最低まで落とし、投擲。

「しっ、しびれますっっ！！」
「しばらく寝てろ」

あっけなくその場に崩れ、気絶してしまった。
そこへ、警備員やら何やらが駆け寄ってくる。

「さて、逃げるぞ？」
「え？　あっ、そっか。こんな場所で騒ぎ起こしたから……」
「当然、問題になるじゃろうの」

と、一目散に駆け出した。

それから、少し離れた地点にて。

「もうっ、どうしてアタシまで……」
「あの場合、他にどうしろってんだよ？」
「そうじゃ姉上、とても人の話を聞く状態ではなかったぞい」
優子は不満気に文句を漏らす。
光一や秀吉もあの場合他に手はなく、やむおえないと主張。
「はぁっ……はぁっ……」
「大丈夫？　姫路さん」
「ごめん、ウチの所為で……」
その片方では、疲れ切った瑞希に明久と美波が心配そうに寄り添っている。
「気にするなよ島田。あんなタチの悪いのに絡まれてる訳だから、むしろ同情する」
「ありがとう……美春ったらもう」
「……まあ、アタシも悪かったわ。それで、これからどうする？」
先程の襲撃があるかもしれないと考えると、そのまま続ける気にもならない。
なので、喫茶店でお茶をして帰る事に。
「席は、ちょっと男女別にしない？　ちょっと、姫路さんや島田さんと色々と話したい事があるから」
「え？　……ああ、良いよ。どうせだから男同士で腹わって話そうや、明久」
「光一よ、ワシを忘れておるぞい？」
ここで、明久、光一、秀吉と男性サイド。

そして、瑞希、美波、優子の女性サイドに分かれ、お茶を楽しむ事に。

男性サイドにて。

「それで明久、おまえ告白しないのか？」
「そうじゃな。明久は姫路に島田と、両手に花じゃからの」
「え！？　そっそんな事、急に言われてもさ……」

こちら側の話題は、断然明久について。
光一は脈なし、秀吉は興味なしの為。

「秀吉はどう思う？　俺としては、頭いいけど割と天然な姫路が合うと思うけど」
「そうじゃな。ワシは、割と気兼ねない関係の島田じゃと思うのじゃが」
「あのさ、島田さんの普段の扱い知らないの？　あれで脈ありだったら、少なくともこう……ああいや、霧島さんを考えると、そういうものなのかな？」

危なく光一と言いそうになったのを、明久はとっさに雄二と翔子の２人を思い出す事で回避。
流石に雄二ならまだしも、光一を追い詰めるのは明久とて本意ではない。

「そういえば雄二、どうしてるんだろ？」
「今頃のんびり映画観てるんじゃねえか？　スタンガン突き付けられて」
「それでは、のんびりが余計な表現じゃぞ。しかし何故じゃろうな？　その姿がくっきりと想像できるぞい」

それは、3人とも例外なく想像できた。

一方、女性サイドにて。

「へぇっ、振り分け試験の時にそんな事が？」
「はい……結局、体調管理も試験のうちだと言われて、Fクラスに行く事になったのですが」
「そうなんだ……観察処分者だからって、色眼鏡で見るのは良くないってことかしらね？　今の話聞く限りじゃ、光一と気が合うのも分かる様なバカだけど、2人が吉井君に好意抱くのも分かるわ」
「ちょっ、ウチは違うわよ！」

優子の発言に、瑞希と美波は顔を赤らめた。

「でも、久遠君も良い人じゃないですか」
「そうよね。犯罪者臭いのは事実だけど、話す限り良い奴じゃない」
「それ位、わかってるわ。幼馴染だから……それさえなかったら、アタシだって」

風評を気にする優子にとって、危険人物と周りに思われてる光一を遠ざけるきらいがあった
時々それが、嫌になる事はあるが……。

「何となくだけど、島田さんとは仲良く出来そう」
「いきなり何？」
「こっちの話」

女子は女子で、盛り上がっていた。

一方、映画館にて。

「……今のうち」

ガシッ！

「……今日は帰さないと言った。退屈なら寝てて良い」

「だからそれ気絶ぎゃあああああああああ！！」

第十五問　（学園祭編　プロローグ）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください
『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希の答え
『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント
成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかもしれませんね。
写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え
『Ｈな本（訂正）　成人向けの本』

教師のコメント
取り消し線の意味があるのでしょうか

吉井明久の答え
『カロリー』

教師のコメント
この回答に、君の生命の危機が感じられます。

久遠光一の答え

『新しい恋』

教師のコメント
この回答と何度も書き直した跡を見て、君の哀愁の深さを実感しました

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始める季節。
文月学園では、新学年最初の行事“清涼祭”の準備が始まりつつあり、所々で活気があふれている。

お化け屋敷、喫茶店、展示会、などなど。
さて、我らがFクラスはと言うと……

「さて、そろそろ春の学園祭、“清涼祭”の出し物を決めなくちゃいけないんだが……」

代表の雄二は、床にござを敷いて座るFクラスに、だるそうに言った。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そ

いつに全権を委ねるので後は任せた」

彼、坂本雄二は基本興味がない事にてんで無関心。
なので、丸投げして後はサボる事にしている。

「んじゃ、実行委員は島田という事で良いか？」
「え？　ウチがやるの？　う～ん……ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな？」
「雄二、実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任なんじゃないの？」
「え？　私ですか？」

余談だが明久は映画の帰り、美波に名前で呼び合うように言われていた。

「姫路には仕切り役は向かないだろ」
「それに瑞希も召喚大会に出るのよ」
「え？　じゃあ島田は姫路とペアを組んだのか」

学園祭では、試験召喚システムのプロバガンダの為、召喚獣による大会が開かれる。
形式は2対2のタッグ戦で、今回は新技術のお披露目も兼ねている為、一層力が入れられていた。

「瑞希に誘われたのよ。瑞希ってば、お父さんを見かえしたいって聞かないんだから」
「はい。お父さんったら、Fクラスのみんなを Fクラスってだけでバカにしたんです！　許せません！！」
「ははっ。バカなのは否定しないが、そこまで言ってくれるなんて嬉しいな。そう思わないか明久？」

「そうだね光一。それじゃ僕達も応援するから、Fクラス代表として頑張って」
「はい！」
「あー、4人とも、こっちの話を続けていいか？」
そこへ雄二が割り込み、脱線した話を戻そうとする。
「ああ、ごめん雄二。で、美波は召喚大会に出るって話だから、あまり負担は……」
「じゃあ補佐をつければいいじゃないか？」
「うーん……そうね。補佐次第ではやっても良いけど」
「そうか。ではまず皆に、副委員の候補を上げてもらう。その中から島田が2人を選んで投票したらいいだろう」
そう告げられると、教室がざわめき始める。
まあ面倒な役は御免被りたい、と思うのは皆一緒
「吉井が適任だと思う」
「やはり坂本がやるべきじゃないか？」
「前線指揮官ならやっぱ久遠だろ」
「姫路さんと結婚したい」
所々で、候補の選別が始まった。
中には、関係ないラブコールも交じっていたが。
「ワシは、光一か明久が適任だと思うのじゃが」
「って秀吉、僕もそういう面倒な役は、出来ればパスしたいな～なんて」
「俺も、どっちかというと面倒は嫌だ」

責任者となると、当然色々な責務や責任も生じる。
そうこうしていくうちに、候補が美波の手により黒板に書かれた。

『候補1……吉井』
『候補2……明久』

「さて、この2人のどちらが良いか、決めてくれ」
「ちょっと待て！　それ候補を2人にした意味がないだろ！」

「どうする？　どっちが良いと思う？」
「そうだな……どっちもクズだからな」

「お前らもバカ丸出しの発言をするんじゃない！」

光一のツッコミもどこ吹く風と、真剣に悩み始めるクラスメイト達。
でも結局、明久に決まることには変わりなく、しぶしぶと明久は壇上へと上がって行った。

「全く……ドンマイ明久。じゃあ俺はトイレ行ってくるから」
「早めにお願いします」
「ああ」

光一はそう告げると、教室を出てトイレに。

それから……

「ふぅーっ。すっきりした」

と言いつつ、教室の戸をあけて黒板を見てみると……

『候補１　写真館「秘密の覗き部屋」』
『候補２　ウェディング喫茶「人生の墓場」』
『候補３　中華喫茶「ヨーロピアン」』

光一の眼が点になった。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」
「今のところは、候補派黒板に書いてある３つです」
「どれどれ……補習の時間を、倍にした方が良いかも知れんな」

その言葉に、全員が驚愕した。

「せ、先生！　それは違うんです！」
「そうです！　それは吉井が勝手に書いたんです！」
「僕らがバカな訳じゃありません！」

と、口々に明久を売り助かろうとする。

「アホ、そういうみっともない良い訳する時点で、バカも同然だ」
「その通りだ！　そもそもバカな吉井を選んだ時点で、間違いだと気付かんか！？」
「いや、アンタのその発言も教育者として間違ってると思うぞ？」
「全くお前たちは……少しは真面目にやったらどうだ？　稼ぎを出して、クラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

光一の主張はまたしても届かず、ため息交じりに鉄人はそういう。
その言葉に、クラス全員の目が輝き始めた。

「み、皆さんっ！　頑張りましょう！」

と、珍しく瑞希が率先して動き始めた。

「それで、どうする？　利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？」

「いや、初期投資の少ない写真館の方が」

「それだと、運営委員会の見周りで、営業停止処分を受ける可能性もあるぞ」

それに加え、クラスメイトにもやる気があふれ、意見が飛び交い始める。

「中華喫茶ならハズレはないだろ」

「それだと真新しさに欠けるな。汚い所為であまり人が来ない旧校舎だと、その特徴の無さは致命傷じゃないか？」

「ウェディング喫茶はどうだ？」

「初期投資が大きすぎる。たった2日の清涼祭じゃ、儲けは出ないんじゃないか？」

「リスクが高いからこそ、リターンも大きいはずだ！」

……が、まとまりからは程遠い光景。

所々で周りを無視し、それぞれ好き勝手な意見も出始める。

「はいはい！　ちょっと静かにして」

と、美波が注意しても、全く効果がなし

「お化け屋敷とかのほうが受けると思う」

「簡単なカジノを作ろう！」

「焼きトウモロコシを売ろう！」

試召戦争のまとまりがウソの様に、ドンドン意見がばらばらに。
見るに見かねた光一が、ボストンバッグからマシンガンを取り出しおよそを狙って引き金を引いた。

「「「ぎゃあああああ！！」」」

そこからさらに、スタンガンを数本取り出し突き付けると全員手を挙げて静まった。

「ありがと久遠。決まりそうにないから、店はさっき上がった候補の中から選ぶからね！」

ブーイングが響くが、光一が美波にアサルトライフルを手渡そうとするのを見て静まった。

「ほらっ、ブーブー言わないの！　この３つの中から１つだけ選んで手を上げる事！　良いわね！？」

と、強引な手で話を進める。
雄二の人選が当たりを見せた瞬間だった。

「それじゃ、写真館に賛成の人！　はい、次はウェディング喫茶！
最後中華喫茶！」

そして僅差で、中華喫茶に決定した。

「Ｆクラスの出し物は、中華喫茶にします！　全員、協力するように！

「それならお茶と飲茶は俺が引き受けるよ」
「……（スック）」

厨房担当を名乗り出たのは、須川とムッツリーニ。

「2人とも、料理は得意なのか？」
「任せておけ。提案したからには、自信くらいある」
「……紳士のたしなみ」
「じゃあまず、厨房班とホール班に分かれてもらうからね、厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキと久遠のところに集まって」

と、それぞれは自分の希望する班に流れ込む。

「それじゃ私は、厨房班に……」
「ダメだ姫路さん！　君はホール班じゃないと！！」
「そうだ姫路、2人しかいない女子はホールに回って貰わないと困る！！」

と、厨房班に回ろうとした瑞希を、光一と明久が必死になって止めた。

「大丈夫ですよ。あれから練習しましたから」
「いや、その練習の成果の方向によってはまずいから！」
「そうそう。それに姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんと接した方がお店として利益が痛っ！　み、美波！　僕の背中はサンドバッグじゃないよ！？」
「か、可愛いだなんて……吉井君がそういうなら、ホールでも頑張りますね」
「“でも”はやめてくれ。専任の方が効率良いんだから」

“必殺料理人”姫路瑞希、ホール決定。

「じゃあ明久、一緒に厨房行かないか？」
「そうだね。料理なんて久しぶりだから、勝手覚えてるかな？」
「その方が良いじゃろうな。危険人物ランキング1位と2位がうろつく店に、客が来ると思えんしの」

ちなみに明久は、光一のトバッチリである。

「じゃあウチは、厨房にしようかな？」
「それなら、ワシも厨房にしようかの？」
「秀吉、何バカなことを言ってるのさ！？　秀吉はそんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってるじゃないか！」

明久の意見を聞いて、自身を挙げようともしない美波は怒りに身をまかせようとするが……。

「まあ落ち着け島田、ここで我慢すれば明久と一緒に料理ができるだろ？」
「うぅっ……そっそうね。ここは我慢してあげるわ」

と、一旦は怒りを納める事に。
だがそれは、死亡フラグだった、

「美波ちゃんだけズルいです！　やっぱり私も厨房に回って、吉井君と楽しくお料理します！」
「明久、お前と島田はホールだ！　逆らえば撃ち殺す、良いな！？」
「さすがは光一、ちょうど僕も同じくホールに出たいと考えてたところだよ！」

始まりの時点で波乱万丈なFクラス。

第十六問

清涼祭アンケート
学園祭の出し物を決める為のアンケートに御協力ください
『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え
『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント
いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

久遠光一の答え
『動き易く、品を保てて人目を引く服装』

教師のコメント
君からまともな意見が出て、意外だと思った先生を許してください。

土屋康太の答え
『スカートは膝上１５センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位のものを用意し、裏にはロゴを入れる。靴は５センチ程度のヒールを……』

教師のコメント
裏面にまでびっしりと書き込まなくても

吉井明久の答え
『ブラジャー』

教師のコメント
ブレザーの間違いだと信じています

「アキ、久遠、ちょっと良い？」

帰りのＨＲが終わり、現在放課後。
何やら神妙な顔をした美波から、明久と光一は声をかけられた。

「ん、何か用？」
「どうしたんだ、島田？」
「うん。どっちかというと、相談なんだけど……」

その真剣な様子に、明久と光一は何かと思いつつも相談に乗る事に。
そもそも美波が明久を頼る事自体珍しい事の為、なおさらに。

「うん、ありがと。多分、２人が言うのが１番だと思うんだけど……その、やっぱり坂本を何とか学園祭に引っ張りだせないかな？ほら、あの様子じゃ坂本が仕切らないと……」
「あー、まあ確かにな」
「でもそれは難しいなぁ……さっきも言ったけど、雄二は興味ない事に徹底的に無関心だからね」

１年来の悪友の為、２人は雄二の事はそれなりに理解している。だからこそ、その提案がいかに難しいかも当然理解していた。

「でも、アキと久遠が頼めばきっと動いてくれるよね？」
「え？　別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」
「ううん、そんなことない。きっとアキと久遠の頼みなら引き受けてくれるはず」

まるで確信めいた様子で、美波は言葉をつづけた。
その手にある本が握られている事に、明久も光一も気づかないままに。

「そりゃ確かに、良くつるんではいるけど、だからと言って別に……」
「あんた達、愛し合ってるんでしょう？」
「もう僕、お婿に行けない！！」
「というか、どういう経緯でそんな結論にたどり着いた！？」

明久は泣き崩れ、光一は全身に鳥肌がたち抗議。
それに疑問符を浮かべながら、美波はある本を差し出した。

『バカと銃神とバラの世界』　（光一×明久）
『バカと筋肉と交わりと』　（明久×雄二）
『銃と拳と絡みの旋律』　（光一×雄二）

「……何これ？」
「この前、友達にもらった物なんだけど」
「あのさ島田、俺が優子にフラれたって事知った上でそんな事言うのか？」
「あっ！　……ごめん」

吐き気と寒気が治まらなくなったどころか、最近えぐられる事が多い古傷の痛みに顔をゆがませる光一。
明久もさめざめと泣き続け、ショックは大きい様子。

「誰が雄二なんかと！　だったら僕は、断然秀吉の方が良いよ！」
「……あっ、明久？」

そこにたまたまそばにいた秀吉が、動きを止めた。

「そ、その……お主の気持ちは嬉しいが、そんな事を言われてもワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ、年の差とか……」
「ひ、秀吉！　違うんだ！　ものすごい誤解で……」
「いや、年の差って、俺ら同級生だろ。いや、それより何故顔を赤くするんだ！？」

結局グダグダになってしまった。

そしてそれが落ち着いたころ。

「で、一体どうしたんだ？　やけに喫茶店に拘ってるみたいだけど？」
「そう言えば、随分と深刻そうにしておるの？」
「……本人には誰にも言わないでほしいって言われてたんだけど、事情が事情だし……けど、秘密の話だから、誰にも言わないでね？」
美波の真剣な様子に、3人は頷かざるを得なかった。
そして、秘密の話を打ち明けてくれる以上、無下に断る事もするつもりは更々湧きもしない。

「う、うん。わかった」
「右に同じ」
「……実は、瑞希なんだけど……あの子、このままだと転校するかも知れないの」
「なっ！？」

その言葉には、流石に光一も秀吉も明久も、驚きを隠せなかった。
本人どころか、教師からも話が聞かなかったことゆえ、動揺は隠せない。

「どっ、どういう事だ？　それに“このままだと”って、一体……？」
「む、待つのじゃ光一。明久が処理落ちしかけとるぞ」
「このバカ、不測の事態に弱いんだから！」
「いや、いきなりこんな話されたらパニックになってもおかしくないぞ？　おい明久、しっかりしろ」

光一が明久を揺さぶり起こし、ハッと目を覚ます明久。
先程まで目がうつろだった事は、気付く者は1人も居なかった。

「光一……モヒカンになった僕でも、相棒と呼んでくれるかい？」
「……どういう処理をしたら、瑞希の転校からこういう反応が得られるのかしら？」
「ある意味、稀有な才能かも知れんの」
「ああ、呼んでやる。呼んでやるから落ち着け」

全員が微妙な目で明久を見つめる中で、ハッと正気を取り戻した明久。
そして本来聞くべき情報を得るべく、美波に詰め寄った。

「美波！　姫路さんが転校って、どういう事さ！？」
「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は、転校しちゃうかもしれないの」
「このままって……まあ、この設備と姫路の体調を考えれば、納得するなという方が無理か」

光一が周りを見回し、頭を抱えた。
Ａクラスに負けた事で設備がランクダウンし、腐った畳はボロボロのござに、卓袱台はみかん箱。
最低の設備に最悪を加えた設備になった以上、瑞希の虚弱体質を知る者としては同様の結論。

それに明久が試召戦争を提案した理由でもある為、納得せざるを得ない。

「姫路の身体と教室の設備を考えれば、ありえない話ではないの」
「そうだよね……って事は、転校は両親の仕事の都合とかじゃないって事？」
「そう言う事。だから瑞希も対抗して“召喚大会で優勝して、Ｆクラスを見直してもらおう”とか考えてるみたいなんだけど、やっぱ

り設備をどうにかしないと」

ふと、３人は“Ｆクラスをバカにされた”と怒っていた事を思い出す。

これも当然だが、学力はあるのに最低クラスに所属している事自体も、問題としては十分な代物。

「わかった。そういうことなら、何としても雄二を焚きつけてやるさ！　協力してくれるよね、相棒？」

「当たり前だ。俺達の為に怒ってくれてる以上、ここで立ち上がらにゃ男じゃないだろ。相棒」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては、黙っておれん」

「それじゃまず、雄二に連絡を取らないとね？」

明久は携帯を取り出し、雄二へと連絡。

少し時間がたって……

「あ、雄二？　ちょっと話が……え？　雄二、何してるの？　……雄二！？　もしもし！　もしもーし！」

と、何やら意味不明の会話が行われたらしく、通話が切られた。

「坂本はなんて言った？」

「えっと、“見つかっちまった”とか“鞄を頼む”とか言ってた」

「……何それ？」

「誰かに追われてるんじゃないか？　だから島田、その“使えない”って視線で見るのやめてやれ」

ここ最近、雄二は忽然と姿を消す事が多い。

その原因は……。

「大方、霧島翔子から逃げ回っているんじゃろう。あれはああ見えて、異性には滅法弱いからの」
「そうすると、坂本と連絡を取るのは難しいわね」
「そうでもないさ。むしろ、これはチャンスと見ても良い」

光一は明久に視線をやり、頷きあう。
雄二を焚きつける為の方法を、２人して同じ方法を思いついたのだ。

「島田、秀吉、ちょっと協力してくれ」
「それは良いけど……坂本の居場所はわかってるの？」
「大丈夫だよ。何も雄二だけが、相手の考えを読める訳じゃないからね」
「じゃあ明久、雄二を頼む。タイミングはそっちに任せるから。」
「了解」

それから数分間……。

「じゃあ頼むぞ？」
「……こんなので、坂本を引っ張り出せるの？」
「大丈夫だ。おっ、来た来た」

光一の携帯に連絡が来て、それを美波に手渡す。

「もしもし坂本？　……ちょっと待って、今代わるから」
「（頼むぞ秀吉）」
「（了解じゃ）……雄二、今どこ？」

と言った途端、すぐに秀吉は携帯の通話をオフにした。

「ホント、秀吉の声真似はすごいな。本当に霧島かと思ったぞ？」

「当然だ（光一の声）」

「……それやめてくれ、自分の声は流石に気味が悪いから」

それから少しして、雄二を伴った明久が戻ってきた。

「そうか。姫路の転校か……そうなると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

「不十分？　どうして？」

「簡単な話さ。さっきも言ったけど、莫蓙やミカン箱と言った設備、健康を害する教室そのもの、姫路の学習面の成長を促せないバカ揃いのクラスメイト。喫茶店の成功だけじゃ、とても解決できない」

「そうじゃな。１つ目もそうじゃが、２つ目や３つ目も難しいのう」

「そうでもないさ。１つ目は喫茶店の利益で何とかなるし、３つ目は姫路と島田で対策を練っているんだろう？」

ふと思い出すのは、召喚大会の事。

確かに、Ｆクラスで優勝者が出る事があれば、その面は解決ができる。

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。“どうしても転校したくないから、協力してください”って。召喚大会なんて見世物にされるみたいで嫌だったけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

「ならいっそ、俺と明久も参加するかな？　俺達のコンビネーションなら、良い線いけると思うし」

「コンビネーションは確かに良いけど、あんた物理以外が殆ど壊滅的じゃない。そんなでアキと組んで、勝てる訳ないでしょ」

グゥの音も出なかった。
光一は苦手科目では壊滅的状態の為、その科目の場合負けは確実。しかもトーナメントは試合によって科目が違う為、良くて決勝悪くて秒殺という極端コンビだった。

「一応エントリーはしてくれ。運良く勝ち上がれば喫茶店の宣伝になるし、一気に問題が無くなる」
「わかった。となると、2つめがやっぱネックだな」

教室の改修は、流石に生徒や喫茶店の利益では賄えない。どうやろうと、業者の立会も必要になる以上学園のバックアップが必要になる。

「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだろ?」
「やっぱそうなるよな。けど学園長は偏屈だって噂だし、大丈夫か?」
「あのな、ここは曲がりなりにも教育機関だぞ? 幾ら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状況であるなら、改善要求は当然の権利だ」
「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

思い立ったが吉日というように、明久がそう提案した。
光一や雄二も頷き、美波も嬉しそうに頷く。

「それじゃ、さっさと行くか。一応行くのは、俺と明久と雄二……秀吉も一応来てくれないか?」
「そうじゃの。そのメンツでは、とてもお行儀よくとはいかんじゃろうて」
「失礼な。じゃあ島田は、学園祭の準備計画でも考えておいてくれ」

目指すは学園長室。
明久、雄二、光一、秀吉は、一路そこへと向かった。

『……賞品の……として隠し……』
『……こそ……勝手に……如月グランドパークに……』

新校舎の一角、学園長室前にて。
辿り着くや否や、出迎えたは言い争いの声。
「うむっ、何か言い争っておる様じゃな」

「どうした、明久？」
「いや、中で何か話をしているみたいなんだけど」

それに対し、疑問に思うも今はそっちのけ。
今はとにかく、問題の解決こそが自身の最優先事項。

「とりあえず、学園長が居るとわかったんだから、入っちまおうぜ？」
「ああ。さっさと中に入るぞ」
「失礼しまーす」
「おぬしら……」

早速学園長室をノックするや否や、光一、雄二、明久は中へ。
秀吉も呆れつつ、それに続く。

「本当に失礼なガキどもだねぇ。普通は返事を待つもんだよ」

そこにいたのは、長い白髪と妖怪じみた容姿（笑）が特徴の藤堂カ

ヲル学園長。
試験召喚システム開発の中心人物である。
研究者寄りなので、先程のガキ共という発言等の規格外な所が多い人物。

「やれやれ、取り込み中だと言うのに、とんだ来客ですね。これでは話を続ける事も出来ません……まさか、貴方の差し金ですか？」

それに相対していたのは、鋭い目つきとクールな態度で1部の女子生徒に人気が高い、竹原教頭。
メガネをいじりながら、学園長を睨みつける。

「バカを言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなせこい手を使わなきゃいけないのさ？　負い目があると言う訳でもないのに」
「それはどうだか。学園長は隠しごとがお得意の様ですから」
「さっきから言っているように、隠し事なんてないね。あんたの見当違いだよ」
「……そうですか。そこまで否定されるなら、この場はそういう事にしておきましょう」

負い目、隠し事。
教育現場に似つかわしくない単語が次々と出てくる会話を終え、教頭は学園長室を出て行った。

「ん？」

光一はふと、教頭が最後視線をやった個所を見て、疑問符を浮かべた。
……が、めぼしい物は何もなく、気の所為かと思い気にするのをや

めた。

「んで、ガキ共。アンタらは何の用だい？」
「今日は学園長にお話があってきました」
「アタシは今、それどころじゃないんでね。学園の経営に関する事なら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀ってモンだ。覚えておきな」

光一がツッコミを入れそうになるのを、秀吉が制した。
礼儀的には、当然の事。

「失礼しました。俺は2年F組代表の坂本雄二」
「同じく、2年F組の木下秀吉じゃ」
「そしてこの2人が……こちらが2年を代表するバカで、こちらは同じく過激派です」

雄二が勝手に明久と光一を、わかりやすく紹介。

「ほぅ……そうかい。あんた達がFクラスの坂本と吉井と久遠かい？」
「ちょっと待って学園長！　僕たちはまだ名前を言ってませんよね！？」
「木下というと、Aクラスの木下の弟かい？」
「おいこらバ……むぅぅう！！」

罵倒しようとした光一を、秀吉が口を塞いだ。
ここで騒ぎを起こせば、全てパーになる故に。

「気が変わったよ、話を聞いてやろうじゃないか」
「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったら、さっさと話しなウスノロ」
「わかりました」

まるで模範的な生徒を主させる佇まいに、3人は疑問符を浮かべた。
先程の光一の様に、すぐさまボロを出すと思っただけに。

「Fクラスの設備について、改善を要求しに来ました」
「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」
「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みその様に穴だらけで、隙間風が吹きこんで来るような酷いい状況です」

だがそれは、すぐに杞憂に終わった。

「学園長の様に戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

相当怒っているのか、所々で言動に綻びが生じ危険な単語がちりばめられている。

「要するに、隙間風が吹き込む様な教室の所為で体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババァ、という訳です」

そんな慇懃無礼な雄二の話が終わると、学園長は何やら思案顔になる。

「あの、学園長……？」
「雄二がとんだ御無礼をいたした……じゃが、どうか」
「……ふむ、ちょうどいいタイミングさね」

と、何やら小声で何か言ったご様子。
そして、４人に向かってうんうんと頷いた。

「よしよし、お前たちの言いたい事はよくわかった」
「え？　それじゃ、直して貰えるんですね！」

あっさりと問題が解決する事に、明久は喜びの声を上げた。
だが、世の中そんなに甘くない。

「却下だね」
「雄二、このババァをコンクリに詰めて捨ててこよう」
「やめろ、こんなの捨てたら環境の害にしかならん。ここは“文月妖怪　藤堂カヲル”と銘打った見世物として、利益にするべきだ」
「……お前ら、もう少し態度には気を使え！」
「雄二よ、お主が言って良い事ではないぞい」

秀吉のツッコミも最もだった。
というより、こんなグダグダな進言は学園始まって以来だろう。

「まったく、このバカ共が失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババァ」
「そうですね。教えてください、ババァ」
「理由なく断られて納得出来る訳ねえだろ、妖怪」
「堂々と妖怪呼ばわりするんじゃないよモヤシのクソジャリ！　……お前たち本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」
「……申し訳ない」

学園長は呆れた顔で３人を見て、秀吉は頭を下げた。

「理由も何も、設備に差を付けるのはこの学園の教育方針だからね。

ガタガタぬかすんじゃないよ、このなまっちろいガキども」
「確かにそうですけど、俺達はともかく体の弱い生徒が……」
「……と、いつもなら言っているんだけどね。可愛い生徒の頼みだ、こちらの頼みも聞くなら相談に乗ってやろうじゃないか」

それを聞いて、雄二は黙り込んでしまった。
光一も、何かがある……そう直感で感じ取る。

「その条件って何ですか？」
「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」
「ええ。俺と明久で出ようかと思ってました」
「じゃ、その優勝賞品と準優勝品は知っているかい？」

優勝賞品とは、“トロフィー”と“賞状”と“白金の腕輪”。
そして副賞として、如月グランドパークプレオープンペアチケット。
準優勝者にも賞品はあり、これには“盾”と“賞状”と“黒金の腕輪”。
こちらにも、プレオープンチケットは授与される。

そのペアチケットについて説明されると、雄二はビクッ！　と身体をはねさせた。

「で、それが何か？」
「話は最後まで聞きな。あわてるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」
「はい、知りません」
「堂々と言うんじゃないよ！　……まあ良いさね。この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ」

先程聞こえた話の中に、如月グランドパークという単語があった。
それに関係してるのかなと、明久達はそう決定付けた。

「回収？　それなら、商品に出さなければ良いじゃないですか」
「そうできるならしたいさ。けどね、この話は教頭が進めたとはいえ、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆す訳にはいかないんだよ」
「契約する前に気付いてくださいよ、学園長なんだから」

もっともな話である。

「うるさいガキだね。腕輪の開発で手一杯だったんだよ！　それに悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」
「けどチケットで良かったじゃないか。腕輪に問題があるならまだしも、それなら問題としては軽い」

そこで学園長の表情が崩れた事を、雄二は見逃さなかった。

「で、良からぬ噂ってのは？」
「如月グループは、如月グランドパークに１つのジンクスを作ろうとしてるのさ。“ここを訪れたカップルは幸せになれる”ってジンクスをね」
「ジンクス？　……どうやってです？」
「プレミアムチケットを使って来た２組カップルを、結婚までコーディネートするつもりらしいのさ。企業として、多少強引な手段を用いてもね」
「な、何だと！？」

それを聞いて、血相を変えたように大声を上げる雄二。

「どうしたのさ、雄二？」
「慌てるに決まってるだろうが！　今ババァが言った事は“プレオープンプレミアムチケットでやってきた2組のカップルを、如月グループの力で強引に結婚させる”ってことだぞ！？」
「別に言い直さずとも、わかっておるぞい？」
「その2組のカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」

文月学園にはその性質上、数多くのスポンサーが存在する、如月グループも当然、そのスポンサーの1つ。

「くそっ、うちの学校は何故か美人揃いで、試験召喚システムって話題性もたっぷりだからな」
「それに加えて、学生から結婚まで行けばジンクスとして申し分なしだ。候補としてこれ以上の学校はないだろうな」
「ふむ。そっちのモヤシのガキもそうだが、流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

雄二が神童と呼ばれていた事は、あまり知られてはいない。
それを知っている辺り、流石は学園長と言ったところか。

「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪い事でもないし、第一僕らはその話を知ってるんだから、行かなきゃ済む話じゃないか」
「……絶対にアイツは参加して、決勝進出を狙ってくる……行けば結婚、行かなくても“約束を破ったから”と結婚……俺の、将来は……！」
「……どうやら、安請け合いしたらしいな。妙な所で明久よりバカだよな、こいつ」

呆れたように言う光一の意見を余所に、学園長は言葉をつづけた。

「ま、そんなワケで本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

「つまり、交換条件ってのは……」

「そうさね。“召喚大会の優勝賞品および準優勝賞品”と交換。それが出来るなら、教室の改修くらいしてやろうじゃないか」

光一と明久は、目を見合わせた。

それも、良からぬ事絡みで。

「無論、優勝者や準優勝者から強奪なんてマネするんじゃないよ？　譲って貰う事も不可だ。アタシはお前達４人で召喚大会の決勝に進出しろと言っているんだからね」

考えてた事をモロに言われた為、苦虫をかみつぶしたかのような顔をする光一と明久。

２人の考えていた事に感づいて、呆れたように２人を見る秀吉。

「まあ落ち着くのじゃ、３人とも。幸いワシ等は４人おるし、これでチーム分けはできる」

「じゃあ僕たち４人が決勝進出したら、教室の改修と設備の向上は約束してくれるんですね？」

「何を言っているんだい？　やってやるのは教室の改修だけで、設備についてはうちの教育方針だ。変えてやる気はないよ」

こんな事で設備を変えては、他のクラスに申し訳が立たない。

何事も例外的な特別を許せば、必ずやどこかで綻びが生じるものである。

「ただし、清涼祭の売り上げでどうにかするのは別さね。今回だけは見逃してやってもいい」
「じゃが、喫茶店を経営しつつ大会を勝ち抜くと言うのも難しい話じゃぞい。そこを何とか……」
「やめとけ秀吉。俺達はあくまでも頼む側だから、話を引き受けてくれただけで儲けものだと思え」
「そう言う事だ。ババァに譲る気がない以上、この取引に応じるしか方法はない」

明久と秀吉は顔を見合わせ、頷き合う。
不満ではあるものの、事実だけに納得せざるを得ないと結論付けた上で。

「……わかりました。この話、引き受けます」
「ワシも、及ばずながら力になるぞい」
「そうかい。それなら、交渉成立だね」

“計画通り”という顔で、嬉しそうにする学園長。
それを雄二が見逃さず、一歩前に踏み出した。

「ただし、こちらからも提案がある」
「何だい？　言ってみな」
「俺達４人は最後に当たる物として、召喚大会は２対２のタッグマッチ。形式はトーナメント所為で、１回戦が数学だと２回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

プロバガンダの意味合いも強い以上、試合の派手さに欠ける要素は排除される物である。
特に今回は、新技術のお披露目もある以上、その辺りは念入りだった。

「それがどうかしたのかい？」
「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」
「ふむ……良いだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それ位なら協力しようじゃないか」
雄二は先程より目つきを更に鋭くし、光一も何やら妙な引っかかりを感じていた。

「で、ペアだけど……」
「いや、お前と明久のペアはダメだ。俺と秀吉は前回の戦争では殆ど指揮や裏方だったから、召喚獣の扱いには慣れてない」
「ああ、そっか……となると俺と秀吉、明久と雄二がペアとしては最適かな？」
光一は明久を除くと、相性が良いのは幼馴染である秀吉。
それに明久も、光一を除くと付き合いが深いのが雄二である。

「さて、そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、決勝戦まで進めるんだろうね？」
そう言われ光一は秀吉と、明久は雄二と拳を合わせる。

「無論だ。俺達を誰だと思っている？」
「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」
「うむっ、優勝して見せるのじゃ」
「ああ。やろうぜ皆」
全員で、頷きあう。

「それじゃ坊主ども。任せたよ！」
「「「おうよっ！」」」
「任せるのじゃ！」

こうして、明久と雄二による“文月学園最低”コンビそして光一と秀吉による“美少女と危険物”コンビが誕生することとなった。

「ワシは男じゃというのに！」
「危険物かよ！？　せめて美女と野獣にしてくれ！！」
「光一よ、ワシは男じゃと知っておるじゃろ！？」

第十七問

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。
『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

［？かわいらしさ　？統率力　？行動力　？その他（　）］

また、その時のリーダー候補も挙げてください。

土屋康太の答え
『［？かわいらしさ］　候補……姫路瑞希＆島田美波』

教師のコメント
甲乙つけがたいと言ったところでしょうかね。

吉井明久の答え
『［？可愛らしさ］　候補……姫路瑞希（訂正）　木下秀吉（訂正）
島田美波』

教師のコメント
用紙についている血痕が気になるところです。

久遠光一の答え
『［？可愛らしさ］　候補……姫路瑞希＆島田美波』

教師のコメント
何度も書き直した形跡がありますが、誰を書きたかったのでしょうか？

坂本雄二の答え
『［その他（結婚相手）］　候補……霧島翔子』

教師のコメント
どうしてＡクラスの霧島さんが、用紙を持って来てくれたのでしょうか？

清涼祭初日の朝。
Ｆクラスの教室はいつものような小汚さはなく、中華風の喫茶店へと変わっていた。
まあ食べ物を取り扱う店だから、小汚いと人が寄りつく訳がない。

「このテーブルなんて、ぱっと見は本物と区別がつかないよ」

そこに並べられたテーブルは、みかん箱を重ねてその上にクロスをかけた物。
演劇部である秀吉作で、小道具作りでの経験を生かした一品。

「ま、見かけはそれなりの物になったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がクロスをまくると、そこには汚いみかん箱。
少なくとも、食べ物を扱う店では適切な代物ではない以上、イメージダウンは免れない。

「これを見られたら、店の評判はガタ落ちね」
「まあ大丈夫だろ。こんなところまで見る訳ないし、見てもきっと見なかった事にしてもらえるって」
「そうですね。態々クロスを剥がしてアピールするような人は来ませんよね」
「おいおい姫路、たかが学園祭の喫茶店で営業妨害するバカはいないって」

少なくとも、そんな事をするメリットは全然ない。
室内の装飾もそれなりであり、瑞希は上手く行くという期待で胸をいっぱいにして見回す。

「……飲茶も完璧」
「おわっ！」
「むっ、ムッツリーニか……厨房はどうだ？」
「……味見用」

明久の後ろにいつの間にかいたムッツリーニは、木のお盆を差し出した。
その上には、陶器のティーセットとゴマ団子

「わぁ……おいしそう」
「土屋、これウチ等が食べちゃっていいの？」

「……（コクリ）」
「では、遠慮なく頂こうかの」

瑞希、美波、秀吉は手を伸ばし、作りたてで温かいゴマ団子を勢いよく頬張る。

「お、おいしいです！」
「本当！　表面はカリカリで、仲はモチモチで食感も良いし！」
「甘すぎないところも良いのう」
「やっぱり女の子。甘い物が好きなんだなぁ、３人とも」

明久の言葉にある“ミス”があったのだが、誰１人ツッコまなかった。

「お茶も美味しいです」
「本当ね～……」

おいしさにトリップしているのか、２人の目がトロンと垂れた。
それを見て、光一、明久、ムッツリーニも食欲をそそられる。

「それじゃ僕も貰おうかな？」
「ああ。たまには甘い物もよさそうだ」
「……（コクコク）」

さらに残ったゴマ団子を、明久と光一は一口。

「「ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず辛すぎる味わいがとても……ンゴパっ！！」」

光一と明久の口からありえない音が出て、目がグルンと垂れて白目

をむく。
瑞希たちと違う意味で、トリップした。

「あ、それはさっき姫路が作った物じゃな」
「見たなら止めてよ！　光一がなんかぐったりとして動かないんだけど！？」

以前姫路の料理を食べてない明久は、初めて体感したその破壊力に絶句した。

「うーっす。戻ってきたぞ……って、どうして光一が倒れてるんだ？」

そこへ雄二が戻ってきた。

「あ、雄二。おかえり」
「光一はじゃな……」
「ん？　なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

ゴマ団子を見るなり、雄二は“明久の食べかけ”を、何の躊躇いもなく口に運んだ。

「……大した男じゃ」
「雄二。君は今、最高に輝いてるよ」
「？　お前らが何を言っているのかわからんが……ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛過ぎる味わいがとっても……ンゴパっ！！」

その姿に、デジャブを感じる男３人。

「……ねえ瑞希、今度は何を入れたの？」
「えっと、塩酸を入れました」
「姫路さん、光一が以前言ってた事忘れたの？　お願いだから、薬品で味のイメージをするの……」
「ん？　雄二じゃないか……お前も、そうなのか？」
「ああ……何の問題もない」

突然の光一と雄二の言葉に、一旦話を止める事になった。

「あの川を渡ればいいんだろう？」
「ああ……あそこに船番が居るぞ？　行ってみよう」
「ゆ、雄二！　光一！　その川はダメだ、渡ったら戻れなくなっちゃう！！」
「しっかりするのじゃ光一！！」

雄二に明久が、光一に秀吉が必死に心臓マッサージ。

「六万だと！？　バカを言え、普通渡し賃は六文と相場が決まって……はっ！？」
「ふざけんな！　ぼったくりもいい所……はっ！？」

2人の蘇生は成功し、尊い命が救われた。

「……姫路、お願いだから厨房に立たないで。雄二は別にくたばって良いけど、これが一般客に出回ったら確実に営業停止にされちゃうから」
「そうだよ姫路さん。雄二だから良いけど、薬品を使った物を出したりしたら問題だから」
「おいコラお前ら、俺は良いとはどういう事だ？」
「……そうします。本当に、ごめんなさい」

しょんぼりという瑞希に、光一は罪悪感にさいなまれた。

「明久、光一、いつかキサマらを殺す」
「上等だ、殺される前に殺ってやる」
「やってみろよこのゴリラが」

……が、それからの笑顔のやり取りにすっかり忘れ去られた。
こんな彼らは仲良しトリオ。

「所で雄二は、どこに行っておったのじゃ？」
「ああ、ちょっと話しあいにな」

学園長室にて、例の試験科目の指定をしてきた所である。
でもそんな事を言う訳にもいかず、適当に誤魔化した。

「ご苦労だった。喫茶店はいつでもいけるぜ？」
「ばっちりじゃ」
「……お茶と飲茶も大丈夫」

唯一の心配事は、瑞希作の料理が混ざっているかという事。
これだけでも、相当な不安要素ではある。

「よし、少しの間喫茶店は光一と秀吉、ムッツリーニに任せる。俺と明久は、一回戦済ませてくるから」
「あれ？　あの、吉井君と坂本君も出るんですか？」
「俺と秀吉も出るよ？　折角だからね」

学園長は４人に“チケットの裏事情について誰にも話すな”と緘口令を敷いていた。

「あれ？　でもアキが坂本で、久遠が木下とペア？」
「こいつらも出たいって言うけど、召喚の経験が少ないからな。俺達はフォロー役だ」
「そっか……」
一応、瑞希の為に頑張ると言う事なので、美波も嬉しそうにする。
ついでに言うと、この場に瑞希が居る為大まかな事は言えない。
「もしかして、賞品が目的なんですか？」
「う～ん。一応、そう言う事になるかな？」
目的と言えば目的だが、理由と向こうの勘ぐりの内容自体は別方向だった。
「……誰と行くつもり？」
「え？」
「吉井君。私も知りたいです、誰と行こうと思っていたんですか？」
そこで、攻撃色の美波が明久に詰め寄った。
更に瑞樹まで、明久に詰め寄り始める。
「明久は俺と……」
「霧島のデートの為に協力してほしいって、雄二直々に頼まれたんだよ」
「なっ！？」
雄二がフォロー？　を入れようとしたのを、光一が遮った。
ちなみに余計な事をしようとした罰も含めてある。

「じゃあチケットは、坂本にあげるつもりなの？」
「うん、そうだよ。僕の興味はチケットよりも腕輪だし、チケットなんて貰っても一緒に行ってくれる宛てなんて全然ないからね」
「そういう事。まあ俺達で優勝と準優勝した場合は、売って金にするつもり」

賞品として出される腕輪は、優勝の場合が“白金の腕輪”で、準優勝の場合が“黒金の腕輪”

白金の腕輪は、召喚獣を2体同時に呼び出せるタイプと、立会人になれる（教科指定可能）タイプの2つ。
黒金の腕輪は、自分の召喚獣を他人のそれと融合させるタイプと、立会人になれる（教科指定不可）タイプの2つ。

一応表向きは、これらで行く事にしておいた光一だった。

「おいこらテメエ！　俺の人生をなんだと……」
「っと、そろそろ時間だよ雄二。早く行かないと」
「……くっ！　おっ、覚えていろ！！」

まるで小悪党の様な捨て台詞を残して、雄二と明久は教室を後にした。

「さて秀吉、俺達もそろそろ」
「そうじゃの」

と、光一と秀吉が教室を出ようとしたところで……

ガシッ！！

「ねえ久遠、木下、さっきのチケットを売るって話だけど……」
「幾らで譲ってもらえますか？」
「……まっまず、手に入ってからな？」
「うっうむ。優先すべきは雄二と霧島じゃからの？」
と言って納得して貰った上で、光一と秀吉は逃げ去った。
「……姫路、だんだんFクラスに馴染んでるな？」
「うむっ……早く設備を何とかしてやるか、明久をけしかけねばならんな」
2人は試合以上に、瑞希の壊れ具合の方が心配だった。
それから、校庭に作られた特設会場にて。
決勝は、AブロックとDブロック、BブロックとCブロックによる準決勝の勝者で行われる。
明久と雄二はDブロックの為、決勝で当たる様には考慮されていた。
「えー、それでは試験召喚大会1回戦を始めます。三回戦までは一般公開もありませんので、リラックスして全力を出してください」
で、こちらはBブロックの光一と秀吉。
一回戦の科目は数学であり、光一の得意科目である。
「ワシはあまり力になれんかも知れんが、よろしく頼むぞい」
「任せとけよ」
光一と秀吉が会場に上がり、相手と対峙。

対戦相手は、２－Ｅの中林宏美と三上美子。

「げっ、久遠光一に木下優子！？」

学年を代表する過激派と呼ばれるだけあって、光一の知名度は悪名が大きく起因する。

そして秀吉も、姉の優子はＡクラスの完璧超人と知られており、それに瓜二つともあって勘違いされる。

「げって何だよ！　それにこいつは優子の弟の秀吉だ」

「え？　……なんだ、それなら危険人物の久遠光一とはいえ、たかがＦクラスコンビ。楽勝ね」

「秀吉、練習にはちょうどいい相手だ。気楽にいくぞ」

「何よ、たかがＦクラスの分際で！！」

「お前らもＥクラスなら大して変わらんだろうが！！」

がんの飛ばしあいを始める光一と中林代表。

それぞれ、秀吉と三上になだめられ、開始線へと戻る。

「では、始めてください」

「「「「サモン！」」」」

４人の掛け声で、場に召喚獣が姿を現した。

毛皮のジャケットを纏い、手にライフルと拳銃を持った光一の召喚獣。

青い袴に長刀という、秀吉の召喚獣がＦクラスタッグとして。

野球のプロテクターを纏い、ミットとバットを持つ中林の召喚獣。

白いローブをまとい、手に本を持った三上の召喚獣がＥクラスタッ

グとして姿を現す。

『Ｆクラス　久遠光一＆木下秀吉　数学１３５点＆７８点』
ＶＳ
『Ｅクラス　中林宏美＆三上美子　数学９５点＆８２点』

「んじゃ秀吉、あの三上だっけ？　そっちの召喚獣相手に練習だ」
「承知した」
「眼中にないって事！？　目にものを見せてやるわ！！」

完全に冷静さを失った中林の召喚獣が、光一の召喚獣めがけて襲いかかる。
だが……。

「大人しくしてろ」

と、ライフルを構え引き金を引き、それが中林の召喚獣の足を撃ち抜いた。

「なっ！？」
「Ａクラスにこそ負けたけど、ＢやＤとお前ら以上の相手と戦ってきたんだ。お前らごとき敵じゃない」

Ｅは基本部活中心の生徒が多く、試験召喚戦争に対して興味はない。
その為、光一の事やＦクラスについてもてんで疎かった。

「えい、やあ！」
「むっ、はあっ！」

相手が本を振り上げ襲いかかるのを、秀吉が受け止めそのまま攻撃。

召喚獣は怪力な上に、体形も異なる故に操作も難く、単調な攻撃ばかり続く。

まあ例外として、観察処分者で操作に慣れてる明久と武器のフィードバックがある光一の場合、それ以上に高精度な動きが出来る。

「やはりなかなか難しいのう」

「そんなもんだって。でも大体はつかめただろ？」

「まあの。そろそろ良いぞ」

光一は興味なさげに指示を出し、三上と中林の召喚獣の腕を撃ち抜いた。

身動きが取れなくなると、ゆっくりと両手の銃を2人の召喚獣に突き付ける。

「そっそんな……こんな、あっさりと……？」

「俺に狙われた時点で、この運命はきまっていたんだ」

ゆっくりと引き金が引かれ、そこから放たれた弾丸は敵召喚獣の頭を撃ち抜き消滅。

「俺の弾丸は、絶対をもって敵を撃ち抜く」

「勝者、久遠・木下ペア」

立ち会いの教師により勝者が告げられ、敵側のペアは膝をつく。

秀吉と光一は、勝者らしく余裕ある佇まいでその場を去っていく。

「お主の決め台詞も中々決まっておったな？　今度演劇部で西部劇をやる予定なのじゃが、どうかの？」

「考えとくよ。それより、さっさと戻ろうぜ？」
「うむっ」

２人は一路、喫茶店へと駆け足で戻る事に。

「マジできったねぇ机だな！　これで食べ物扱っていいのかよ！？」

戻ってきた教室で２人を出迎えたのは、騒ぎの声だった。

「うわ……確かに酷いな……」
「クロスでごまかしていたみたいだね」
「学園祭とはいっても、一応食べ物のお店なのに……」

周りの客も、それを見て自身のテーブルのクロスを捲りあげる。
確かにそこには小汚いみかん箱が重なっている為、衛生上良くない。

「何だよあいつら？」
「ああ、良い所に来た久遠に木下！」
「あの様子からして、営業妨害じゃな。まずいぞ光一、ここでの悪評はかなり痛手となる」

光一は懐に手を入れて、秀吉に耳打ち。

「一応用意はできるが……あっても２つ程度じゃぞ？」
「構わねえよ。少なくとも今は、アピールできさえすればいい」
「了解した」

光一の指示を受けて、秀吉が教室を駆け出した。

営業妨害をしているのは2人、中肉中背の坊主とソフトモヒカンの男。

「まったく、責任者はいないのか！　このクラスの代表ゴペッ！」

光一は懐から取り出したスタンガン（２０万ボルト）を、殴る様に押し付けた。

「代表はただ今不在の為、この私が承ります。何かご不満でも？」

手に持つスタンガンを除けば、模範的態度ともいえる光一の態度と佇まいだった。

「不満も何も、今連れがスタンガンで殴られたんだが……？」

「それは私のモットー“２０万ボルトから始まる交渉術”でございます」

「ふ、ふざけんなよこの野郎……何が交渉ふぎゃあっ！！」

抗議すべく立ち上がった坊主が、もう1つ取り出されたスタンガンでダメージを負った。

先程使用した２０万ボルトをしまい、先程より大きめの物を取り出す。

「そして、“３０万ボルトでつなぐ交渉術”でございます。メインディッシュにこちらの“４０万ボルトで締める交渉術”が待っておりますので」

「わ、わかった！　こちらは夏川を交渉に出そう！　俺は何もしないから、交渉は不要だぞ！」

「ちょ、ちょっと待てや常村！　お前、俺を売ろうと言うのか！？」

2人の名が判明した所で、とりあえず光一は“常夏コンビ”と命名した。

「なんだ？　何の騒ぎだ？」
「光一、何してるの！？」

そこへ明久と雄二が戻ってきた。
光一は得意のアイコンタクトを2人に送り始める。

「（営業妨害だ）こちらのお客様が、不満を申し出ております」
「（やはりか）これは失礼いたしました。では……」

雄二はそう言うや否や、ソフトモヒカンの常村を殴り倒した。

「では代表として、まず“パンチから始まる交渉術”を。次には“キックでつなぐ交渉術”、最後に“プロレス技で締める交渉術”にて受けさせていただきます」
「い、いや、もう十分だ。退散させてもらう」
「そうですか……では」

雄二がキックで常村を蹴飛ばし、夏川の方へ飛ばす。
そして光一が４０万ボルトのスタンガンを手に、ゆっくりと歩み寄る。

「おいっ、俺たちもう何もしてないよな！？　どうしてそんな物をげぶるぁっ！！」
「お前もどうしてそんな大技をぐぶるあっ！！」

光一が夏川に４０万ボルトを押し付け。雄二が常村にバックドロップをかけた。

「それでは、お帰りくださいませ」
「お、覚えてろよっ！」

よろよろと坊主を抱え、走り去るモヒカン。
それでも、やった事の効果は出ている訳で……

「流石にこれじゃ、食ってく気はしないな」
「折角おいしそうだったんだけどね」
「食ったら腹壊しそうだからなぁ」

客から不安な声が出てきて、早速光一達は対処しようとする。
だが、それを遮るように教頭の竹原が席を立った。

「店、変えるか」
「そうしようか」
「あ、お客さん！」

それに合わせるように、他のお客も次々と出て行こうとする。
集団心理という物で、こうなれば次々と悪評は広まっていくだろう。

「先程は失礼しました！　こちらのミスで一時的にこんな物を使っていましたが、ただ今本物のテーブルとお取り換えいたします！」
「すまぬ、遅くなった！」

光一の進言に合わせるかのように、秀吉をはじめとする男子生徒が立派なテーブルを運んできた。
風評対策にもなり、これで良しと一息。

「良くやった光一」

「ああ……けどどうなってんだよ？　たかが学園祭の喫茶店で営業妨害だなんて」
「さあな……こうしちゃいられねえぞ。早く次のテーブルを確保しないと」
「そうだね。で、どこ行くの？　２回戦まで一応時間はあるけど」
「「それはだな……」」

所変わって……

「吉井君に久遠君、坂本君も！　今日という今日は、許しませんよ！」

廊下にて、化学の布施教諭の怒声が響き渡る。
そして……

「明久、光一、走れ！　捕まったら生活指導室行きだぞ！！」
「鉄人の根城!?　冗談じゃない！！」
「だったら走れ！　向こうは運動不足なのか、そんなに早くない！」

３人は先ほど応接室から盗んだテーブルを担ぎ、追手の教師から逃げていた。

「それにしても、どうして、テーブルを背負って、そんなに早く、走れるんですか……」

それを追うは、布施教諭と長谷川教諭。
ただし３人の体力についていけないのか、２人ともなかなか距離を詰められずにいる。

「こうなったら、西村先生に応援を……」
「まずい、鉄人が来たら確実に捕まるよ！」
「光一！」
「おう！」

光一はポケットからベアリングを取り出す。
それを指で弾く様に構え、撃ちだす。

「うわっ！」

指弾は布施教諭の指に命中し、携帯電話は廊下に転がる。

「それでは御機嫌よう、先生方！」
「光一、連絡は？」
「ああ、してある」

布施教諭が携帯を拾っている間に、３人は全力ダッシュ。
撒いた処でテーブルを放置し、次へ。
放置したテーブルは回収班が来て、喫茶店へ運ぶ算段となっている。

「よし、次は職員室そばの休憩室を攻めるぞ！　それが終わったら、２回戦だ！」
「はぁっ……僕と光一と雄二は、いつか停学になる気がするよ」
「仕方ないだろ、他に手がないのも事実なんだから！　ほら、急ぐぞ！」

こうして、３人のテーブル泥棒の暗躍のおかげで、喫茶店の悪評のもとは解決した。
もうすぐ、召喚大会２回戦。

「次は英語じゃが、大丈夫かの？」
「英語は大丈夫、いつかアメリカ言って銃を撃つために勉強してるから」
「……お主、どうしてそう危険思想なのじゃ？」

第十八問

文月新聞　号外

『召喚大会　２－Ｆクラス所属の３ペア大健闘！』

清涼祭名物“召喚大会”において、２回戦が終了。
各ブロックにおいて激戦を勝ち抜いた学力戦士たちが、一般の方々の目に映る事となる。

その中に、２－Ｆクラスの３組のペアが快進撃を続けていた。

“姫路瑞希＆島田美波ペア　通称『ゴミ溜めに咲く花コンビ』”
“久遠光一＆木下秀吉ペア　通称『危険物と美少女コンビ』”
“吉井明久＆坂本雄二ペア　通称『文月学園最低コンビ』”

Ｆクラスと言えば最下層のクラスであるが、先の試召戦争においてＤクラスとＢクラスを破る快挙達成。
そのＦクラスからの参加者は以上の６名のみであるが、その６名全員が３回戦進出を達成。

これはＦクラスが最下層という認識を改めるべきかもしれない。
という意見が多数出ております。

さあ、試召戦争から続くＦクラス旋風はどこまで吹き荒れるのか？

2回戦も危な気なく勝ち進み、光一と秀吉は教室へ。
秀吉も召喚獣の扱いにはだいぶ慣れ、光一との連携もとれるようになってきていた。

「光一には助かるわい」
「何言ってんだよ秀吉、お互い助け合うのがタッグって……ん？」

「……別れましょう」
「ちょ、ちょっと待ってくれ！　これには事情が……」

ふと、殺伐とした雰囲気で別れ話が持ちあげられている、とあるカップルの姿が。
女子の手には、ある写真集が握られている。

「あれ、BクラスのクソヤローにCクラスのヒステリーじゃないか」
「どうやら、あの写真集を見られたらしいの」
「是非見たかったな、あのクソヤロー君が慌てふためく姿を」

光一と秀吉は、巻き込まれる前にさっさと自分達の教室へ。

「ただいま……あれ？　全然人がいないな？」
「うむっ……風評の改善はしたと言うのに、何故ここまで閑散としておるのじゃ？」

自分達が駆け回り手に入れたテーブルと、その上で飲茶を楽しむ人たち。
……が居ると思ったが、教室には殆どお客さんがおらず、閑散としている。

「あ、光一に秀吉、おかえり。無事三回戦進出でしょ？」
「おっ、わかってるじゃないか相棒」
「光一、今の相棒はワシじゃぞ？」
「あっ、そうだったな。悪い悪い、勘弁してくださいな」

秀吉が拗ねたように言うと、光一もおどけた様に謝る。

「それで、雄二は？」
「トイレ行って来るってさ。それよりはい、これ返すよ」

明久が手渡したのは、根本恭二写真集“生まれ変わった私を見て”である。
実は明久に頼まれ貸していたのだが、雄二が用意してあった為不要になったのである。

「お兄さん、すいませんです」
「いや、気にするな、ちびっ子」
「ちびっ子じゃなくて、葉月ですっ！」

そこへ、雄二の声と一緒に小さな女の子の声が響いた。
そこでガラっと扉が開かれ、雄二が姿を現す。

「んで、探しているのはどんな奴だ？」

と、雄二は連れて来た少女に声をかけた」

「お、坂本。妹か？」
「可愛い子だな～。ねぇ、5年後にお兄さんと付き合わない？」
「俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ」

2人はあっという間に、Fクラスの面々に囲まれた。
客が来る事がなく、ヒマなのである。

「あ、あの、葉月は2人のお兄ちゃんを探しているんですっ」
「お兄ちゃん？　名前はなんて言うんだ？」
「あぅ……わからないです……」
「？　家族の兄じゃないのか？　それなら、何か特徴は？」

雄二は割と面倒見がよく、代表としても気配りはできている方である。
例外として、常に追い込む明久を除いて。

「えっと……鉄砲を持ってるお兄ちゃんと、バカなお兄ちゃんでした。とっても仲良しだったです」
「そうか……バカはたくさんいるんだが、もう一つで明らかだな」
「「「久遠と吉井だな」」」
「おーい、何で俺達が即座に出る？」
「「「この日本で銃を持ち歩くのはお前だけだ！」」」

それと仲良しでバカとなると、明久位しかいない。

「あっ！　鉄砲のお兄ちゃんと、バカなお兄ちゃんだ！」

光一と明久の姿を見るや否や、満面の笑顔で駆け寄る少女。
その少女は真っ先に明久に抱きついて、腹に顔を埋めた。

「ふむっ……明久、お前モテないからとついに」
「何を想像してるんだバカ雄二！！　……えっと、光一知ってる？　僕に、小学生位の知り合いいないはずだけど？」
「えーっと……もしかして、ぬいぐるみの子じゃないか？　ホラ、お前が観察処分者になるきっかけの」
「僕が……ああっ！　あの時のぬいぐるみの子か！」
「ぬいぐるみの子じゃないです、葉月です。折角のフィアンセとの再会なのに、失礼です！」

葉月ちゃんの言葉で、光一以外の空気が凍った。
光一はそんなことあったな……と、少し遠い目をして思い出す。

「瑞希！」
「美波ちゃん！」
「「殺るわよ！」」
「ごぶぁっ！？」

そこへ、美波と瑞希のコンビネーション技が明久に炸裂した。

「姫路に島田か。どうやら、勝ったようだな」

と、雄二はいたって落ち着いている。

「瑞希、そのまま首を真後ろにひねって。ウチは膝を逆方向に曲げるから！」
「こ、こうですか？」
「ちょっ、ちょっと待て！　子供の言う事だろ！？」
「子供なんて酷いです！　葉月のファーストキスもあげたんですから」

さらなる爆弾発言に、２人して激努。
明久の骨が危ない音を出し始める。

「坂本、包丁持ってきて！　５本あれば足りると思う！」
「吉井君、そんな悪い事をするのはこの口ですか？」

完全に殺意とみても過言じゃないオーラで身を包み、明久を痛めつける２人。
光一はそれに気押されつつも、何とか弁解しようと試みる。

「だっ、だから、ちょっと落ち着け！　キスって言っても……」
「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

葉月が美波を見て、そんな事を言った。

「え？　お姉ちゃん？」
「あれ？　葉月！　え？　葉月とアキ達って、知りあいなの？」
「ああ、去年ちょっとな。それより、まさか葉月ちゃんのお姉ちゃんって」
「ウチの事よ？」

技から解放された明久は、倒れこみつつ２人を見比べた。
良く見ると目元などが良く似ている為、成程と頷いた。

「大丈夫か明久？　災難だったな」
「……幾ら幼女暴行犯と誤解されたとはいえ、あんまりだよ」
「まあドンマイだ」

殆ど処刑なのだから、無理もないだろう

「吉井君はずるいです……どうして美波ちゃんとは、家族ぐるみの付き合いなんですか？　私はまだ、両親にもあって貰ってないのに……もしかして、実はもう“お義兄ちゃん”になっちゃってたり……」

「姫路、とりあえず落ち着け」

光一と明久、秀吉は瑞希の変貌ぶりに流石に怖気を感じ、一刻も早く設備の改善をと改めて心に決めた。

「ところで、この客の少なさはどういう事だ？」

雄二の言葉で、光一達は再度辺りを見回した。

「そう言えば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「ん？　どんな話？」

光一が屈み込んで、葉月の目線に合わせる。

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方が良いって」

店内の装飾は元々のボロ教室の面影をなくしており、掃除もきちんとしてある。

唯一の“汚い”はみかん箱テーブルだったが、それも解決している為どこにも不安要素はない筈。

「ふむ……例の連中の妨害が続いているんだろうな。探し出してシバき倒した上で、撃ち殺すか」

雄二の言葉で、光一は懐から自動拳銃を取り出し、安全装置を解除

する。

「例の連中って、さっきの常夏コンビ？　まさか、そこまで暇じゃないでしょ？」

「ったく、学園祭で下らねえ真似しやがって……いっそ俺のコレクション最高級を撃てば良かったか？」

と、奥の方へとスタスタと速足で去っていき、腕にバルカン砲を抱えて戻ってきた。

「……光一、そんなの持ってきてたの？」

「以前言ったろ？　バルカン砲持って待つってな。高かったけど」

「エアガンとは言え、マジで用意するか普通！？」

するのが久遠光一という男である。

だからこそ彼は、危険人物？1の称号が与えられているのだ。

「……まあ良い。一先ず、様子を見に行く必要があるな。光一、それを早く隠せ。イメージに傷がつく」

「ああ、悪い悪い。少なくとも、どこから流れてどこまで広がってるかの確認もしたいな」

小学生が聞くぐらいだから、どこまで広がっているか。

悪評が続けば売り上げに響くこともあって、不安を隠しきれない。

「という訳で、敵情視察も兼ねて昼飯でも食いに行くか。葉月ちゃん、一緒にご飯食べにいかない？」

「じゃあ葉月ちゃんと光一には、僕が奢るよ。光一には助けられてるし、葉月ちゃんも再会祝いにね」

「わーい、ありがとうございます」

明久もそう何度も光一に世話になる事に引け目を感じる為、多少は我慢すると言う事を覚えていた。
だからと言っても、“塩と水”から“カップめんと水”に変わった程度だが

「じゃあ、お言葉に甘えるか。召喚大会があるから、早めに昼を済ましたいし……秀吉も来るか？」
「うむっ、相伴にあずかろう」
「私もご一緒します」
「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね？」

美波の口調は、普段と違って柔らかく優しい姉その物。
これでトータル7人、学園祭を歩き回るには少々不便な人数となった。

「それで葉月ちゃん、中華喫茶の話はどの辺で聞いた？」
「えっとですね……短いスカートをはいた、綺麗なお姉さんがいっぱい居るお店……」

それを聞いて、真っ先に反応したのは3人。

「何だって！？　光一、雄二、それはすぐに向かわないと！」
「そうだな明久！　我がFクラスの成功のために、（低いアングルから）綿密に調査しないとな！」
「ああ。これもFクラスの為だ！　未開の楽園へと、いざゆかん！」
「「おおーっ！！」」

と、全力ダッシュで駆け出していく3人。
そして、取り残された面々は……

「アキ、最低」
「吉井君、酷いです……」
「お兄ちゃん達のバカ！」
「光一……姉上にフラれた故の錯乱と信じたいのじゃが、良いのかの？」

所変わって……

「明久、ここはやめよう」
「ここまで来て何を言ってるのさ！　早く中に入るよ！」
「頼む！　ここだけは、Ａクラスだけは勘弁してくれ！！」

Ｆクラスが宿敵Ａクラスが経営する、メイド喫茶『ご主人さまとおよび』の前にて。
雄二は心底嫌そうに、光一はすごく複雑そうな顔で立っていた。

「というか、主人なのかメイドなのか、どっちなんだ？」
「そっか。ここって坂本の大好きな霧島さんと、久遠の大好きな木下さんが居るクラスだもんね」
「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？　久遠君も、気持ちはわかりますけど……」
「……いや、大丈夫。いい加減未練は断ち切るべきだし、敵情視察何だから、な？」
「光一……」

その姿に、相棒の明久と優子の弟にして光一の親友である秀吉は、いたたまれない気持ちとなった。

「……！（パシャパシャパシャ！）」

その空気を破ったのは、連続して聞こえるシャッター音。

「……ムッツリーニ？」

「……人違い」

「どっからどう見てもムッツリーニだろ！　厨房責任者が何してやがる！？」

「……敵情視察」

ローアングルの写真撮影では、とてもその説得力はない。

「ムッツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことしたら撮られてる女の子が可哀想だと……」

「……１枚１００円」

「２ダース買おう……可哀想だと思わないのかい？」

「アキ、普通に注文してるわよ」

言ってる事は正論だったが、途中あっさりと注文した事で説得力はなくなっていた。

「……そろそろ当番だから戻る」

「全く、ムッツリーニにも困ったもんだね」

ムッツリーニは明久に写真を渡し、教室の方へ去っていく。

それを見つつ、明久は呆れたようにそう言った後にポケットに写真をしまった。

「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」

「やだな～、もちろん処分するに決まってるじゃないか。それより

そろそろお店に入ろうよ？　もうすごくおなかが減っちゃったよ」
「それもそうだな。雄二ももう腹くくれよ」
「……くそっ！」

雄二が吐き捨てるようにそう言い、観念したかのように同伴。

「あっ！　写ってるの、男の足ばかりじゃないか畜生！」
「やっぱり見てるじゃないですか！」
「ご、ごめんなひゃい！　くひをひっぱらないで！」

明久は瑞希に頬を抓られ、葉月に腿をつねられての同伴となった。

「それじゃ入るわよ。お邪魔しまーす」

美波が1番手となり、いざメイド喫茶へ。

「……おかえりなさいませ、お嬢様」

出迎えたのは知的な美人メイド事、霧島翔子。

「わぁっ、きれい……」

長い黒髪にエプロンが映え、黒のストッキングが美脚を際立たせている。
これは女であろうと、見惚れる光景。

「それじゃ、僕らも」
「ふむっ、流石はＡクラスじゃの。雰囲気も違うわい」
「はい、失礼します」
「お姉さん、きれ～！」

続いて瑞希と葉月と秀吉を連れた明久が、中に入る。

「……お帰りなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と、模範的な礼儀で出迎えた。

「ほら、いつまでも仏頂面してんじゃねえ」

「ちっ……」

今度は光一と、それに連れられ不機嫌そうな雄二。

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

と、雄二に対して、かなりアレンジが加えられた出迎えが贈られた。

「お帰りなさいませ。サービスとして、保健体育の特別実習を一晩中行います」

「……特別実習終了後、全身の関節が粉々になるまでマッサージをさせていただきます」

と、これまたかなりのアレンジが加えられた出迎えがあった。

「……って、あれ？」

光一を出迎えたのは翔子ではなく、工藤愛子と木下優子の２名。

ちなみに前者を出迎えはニコニコと笑顔の愛子が行い、後者は目が笑っていない笑顔の優子が行った。

「霧島さんに工藤さん、木下さんも大胆です……！」

「ウチも見習わないとね……」
「あのお姉さんたち、夜の間ずっと遊ぶのかな？」
「姫路、優子のは大胆じゃない。島田、お前は誰をどう見習って明久をどうする気だ？　葉月ちゃんは、ずっとそのままでいてね？」
……という訳で、お邪魔しました！」

と、光一は即座に回れ右をして、駆け出そうとする。
雄二もそれにあわせ逃げ出そうとするが、あっさりと翔子につかまってしまい苦し紛れに光一に抱きついて巻き添えに。

「テメ、何しやがる！？」
「１人だけ逃げようったってそうはいかねえぞ！？」
「離せゴリラ、俺にそっちの趣味はねえ！」

光一がそう言った処で、漆黒のオーラが放たれた。

「雄二、浮気は許さない……」
「まっ待て翔子、いくらなんでもこんな事で……」
「ちょっ、スタンガンはやめて！　俺まで……」
「代表、光一諸共にしっかりお仕置きしてやって」

と、優子の死刑宣告により、雄二は光一諸共に２０万ボルトの餌食となった。

「では、お席にご案内いたします」

その他の面々は愛子の案内で席へと向かう事になった。

「……何で俺まで」
「お前が変な事言うからだろうが！」

「テメ、ゴリラ！　お前が変な事するからだろうが！」

それから間もなく、光一と雄二がスタンガンのダメージを引きずりつつ、席へ。

一触即発の空気なので、自動的に離れた席に座る事を促す明久達。

「他のお客様の迷惑になりますので、騒ぎは控えてくださいませ。ご主人様」

と、優子に注意され、2人とも黙る事に

「あっ、悪いな……」

と、優子のメイド姿に、光一は絶句した。

「どうしたのよ、光一？」

「あっ、いや、その……」

「お前、やっぱりまだ吹っ切れてないだろ？」

雄二の突っ込みに、光一は苦虫を噛み潰した顔をした。

「ダメですよ、坂本君。誰かを想う気持ちを諦める事は、すごく辛いと思いますから」

「そうよ坂本。そう言う事でからかうなんて、感心しないわ」

そこへ、瑞希と美波のフォローが入り、その場は治まる。

余談だが、話し終えた2人の視線は明久へと向いた。

「あはは、学園1の過激派って話だけど、随分と純情なんだね？」

そこには、ムッツリーニに敗れた“保健体育の実戦派”事、工藤愛子。

「あれ？　確か保健体育実践派の……」
「愛子、遊んでないであっちをお願い」
「あっ、うん」

優子に注意され、愛子は別のテーブルへと向かって言った。
それと入れ違いで、翔子が見るからに高級そうなメニューを持ってやってくる。

「……では、メニューをどうぞ」

翔子が用意したメニューを受け取り、それぞれ注文品を決定。

「うちは『ふわふわシフォンケーキ』で」
「あ、私もそれが良いです」
「葉月もー！」

と、女性陣は女性らしいメニューに。

「僕はえーっと……じゃあ、その、オレンジ、ジュースで。後、トーストお願い、します」
「ワシもそれで」

明久はそもそも、喫茶店で注文などする機会などない。
なので、少々無難な物で行く事にし、秀吉も便乗。

「俺はケーキセット。飲み物はコーヒー、エスプレッソで」
「んじゃ、俺は……」

「……ご注文を繰り返します」

雄二の注文を、翔子が遮るように声を上げる。

「……“ふわふわシフォンケーキ”を3つ、“トーストとオレンジジュース”を2つ、“ケーキセット、お飲み物はエスプレッソ”を1つ、“メイドとの婚姻届”を1つ、以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞ！」

「はい、以上でお願いします」

「テメ、光一！！」

「……では、食器をご用意いたします」

女子3人と光一の所にはフォークが、明久と秀吉の前にはストローが。

そして雄二の前には、実印と朱肉が用意された。

「しょ、翔子！　これ本当にうちの実印だぞ！　どうやって手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながら、おまちください」

と、翔子は優雅なお辞儀をして、キッチンと思わしき方向へと歩いて行った。

「さて、そろそろ本題に入るか。葉月ちゃん、この辺りで聞いたんだよね？」

「うん。嫌な感じのお兄さん2人が、おっきな声でお話してたの」

「もしかして、あの2人？」

たまたま話を聞きつけた優子が、入口を指差した。

そこには、坊主とモヒカンの2人組が。

「それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな」
「そうだな。さっき言った２－Ｆの中華喫茶は酷かったからな！」
「テーブルは腐った箱だったし、虫もわいていたもんな！」

ワザとらしく、大声で悪評を叫び合う・。
特にＡクラスの場合人が多い為、これなら噂もドンドン広まっていくだろう。

「待て、明久。光一も、懐から手を離せ」

連中を殴りに行こうとした明久と、懐からエアガンを取り出そうとした光一を止める雄二。

「雄二、どうして止めるのさ！？　あの連中を早く止めないと！」
「落ち着け、こんなところで騒ぎを起こせば、悪評はさらに広まるだけだ」
「あんた達一体何したの？　さっきからあの人たち何度もああしてるから、こっちも迷惑なんだけど」

訝しげに見る優子に、光一はさあというようにジェスチャーを。

「こっちが聞きたいよ。なあ優子、秀吉にメイド服を着せてやってくれないか？」
「なっ！？　ちょっと、どういう意味よ！？」
「あのバカ共を黙らせる為だ。頼む」
「……わかった。秀吉、こっち」

光一の剣幕に押され、優子は秀吉を伴いバックへ。

「あの店、出している食い物もヤバいんじゃないか？」
「言えてるな。食中毒でも起こさなければ良いんだけどな！」
「２－Ｆには気を付けろってことだよな！」

今すぐ殴りかかりたい衝動を抑えつつ、秀吉の準備が終わるのを待つこと数分。
バックからメイド服を纏った瓜二つの２人が現れ、光一達の傍に駆け寄る。

「秀吉、良いか？　あいつらにだな……」
「ふむふむ……わかったぞい」

と、ゆっくりと常夏コンビに歩み寄る秀吉。

「とにかく、汚い教室だったよな！」
「ま、教室のある旧校舎自体汚いし、当然だよな！」

タダの嫌がらせだろうと、明久達にとってはクラスメイトの命運がかかった喫茶店。
無論タダで済ますつもりもなく、雄二と明久はボキリと指を鳴らし、光一は懐からエアガンとスタンガン（３０万ボルト）を取り出す。

「お客様」

秀吉が、さもこの喫茶店のウエイトレスの様に声をかける。

「何だ？　へぇ。さっきのメイド……とはちょっと感じが違うな」
「結構可愛いな」

舐めまわすように見られ、秀吉は気持ち悪さに顔をゆがめる。

「お客様、こちらへどうぞ」
「おっ、何かサービスでもしてくれるってか？」
と、モヒカンの方の手を取ると大きく息を吸い込んで……。
「きゃあああああああああああっ！」
「え！？　なっ、何でいきなりぐぁっ！！」
「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」
「最低だね。雄二、とっちめてやろうよ！」
と、雄二と明久が２人を蹴飛ばした。
後ろの方では、スタンガンとエアガンを持つ光一の姿が。
「た、助けてください！　この人たち、今私につかみかかって……」
「ちっ、違う！　今明らかに俺達の方がぐヴぁ！」
抗議しようとした夏川に、スタンガン（３０万ボルト）が投擲された。
「ああ、明らかにお前らから襲いかかっていたな！」
「とんだ最低野郎だな。こんな公衆の面前で、辱めるとはよ」
「そうだ、俺達の目は節穴ではないぞ！」
誰もが節穴だと思うだろう。
「よし明久、光一、こいつらを連れていくぞ！」
「うん、わかったよ」
とりあえず、明久は先程スタンガンでダメージを追った坊主に歩み

寄る。

「大丈夫？　君」

「ええ……ありがとうございます」

と、秀吉の服から何かがずれ落ちた。

明久はそれを拾い上げると、持ってた瞬間接着剤を使用して、坊主の頭にくっつける。

「くっ！　行くぞ、夏川！」

「こ、これ、外れねぇじゃねえか！　畜生、覚えてろ！」

モヒカンが逃げ出したにつれ、坊主の方も走り去って行った。

頭にブラをつけたまま。

「逃がすか！　追うぞ、明久、光一！」

「了解！」

「ああ。絶対にあいつらの黒幕、吐かせてやる！」

3人は2人を追いかけ、店を飛び出した。

「……お会計は、夏目漱石を2枚か坂本雄二の1名」

「並びに、久遠光一の1名ずつのどちらかとなります♪」

「ちょっ、ちょっと愛子！」

「坂本雄二と久遠光一の1名ずつでお願い」

そのあとの喫茶店では、女子3名と秀吉により光一と雄二が1人1000円で売り飛ばされていた。

第十九問（前書き）

ユニーク１１０００、ＰＶ１１００００達成！

いや、まさかここまでとは、バカテス人気恐るべし！

ご意見、ご感想があれば、作品の糧となるのでぜひお願いします

第十九問

頭の体操として、一風変わった英語のクイズをどうぞ
「?」と「?」に当てはまる語を答えてください。
『マザー（母）から「?」を取ったら「?」（他人）です』

姫路瑞希の答え
『マザー（母）から「M」を取ったら「Ｏｔｈｅｒ」（他人）です』

教師のコメント
その通りです。マザーから「M」がなくなると他人という単語になります。こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

久遠光一の答え
『マザー（母）から「暴言」を取ったら「別人」（他人）です』

吉井明久の答え
『マザー（母）から「お金」を取ったら「親子の縁を切られるの」（他人）です』

教師のコメント
英語関係ないじゃないですか。

土屋康太の答え
『マザー（母）から「M」を取ったら「S」（他人）です』

教師のコメント
土屋君のお母さんが『ＭＳ』でも『ＳＭ』でも、先生はリアクションに困ります

「あいつら、４階に逃げたよ！？」
「４階！？　だとすると、あいつら３年か？」

２人は３－Ａの“迷路風お化け屋敷”に逃げ込んだ。
３人もすぐさま追いかけようとする。

「いらっしゃいませ、３名様ですね？」
「いや、５名だ。金は後ろの奴が払う」

と、何の躊躇いもなく後ろの連中に会計を押し付けた雄二。
そして３人は中へ。

「暗がりだから気を付けろよ？」
「そうだな。あいつら、どんな罠を仕掛けてやがるか……」

暗がりだから、周りが良く見えない。
だからこそ罠や奇襲がかけやすく、むしろ追う側にとって不利な状

況。

「それにしてもあの常夏コンビ、一体どういうつもりで……」

と、そこで明久の前に何かが現れた。

男子の制服を纏い、坊主頭で、頭には……

「見つけたぞ、変態！」

「でかしたぞ明久、覚悟しろよ変態」

「今なら土下座して洗い浚い白状して今日明日タダ働きするなら、４０万ボルトで許してやるぞ。変態」

「変態変態言うんじゃねえ！　くそ、ここまで追ってくるなんて、しつこい奴らだぜ！」

変態坊主はすぐに奥へと走り出す。

光一はすぐさまエアガンを構え、撃ちだした。

「あいてて！　常村、今だ！」

「ああ、壁を倒して閉じ込めるぞ！」

「まッまずい、脱出だ！」

３人は退散し、入口へ。

だが、いつまでたっても壁は倒れてこない。

「……あれ？　壁、倒れてこないね？

「ハッタリか……やられた」

と、変態坊主の姿も見えなくなり、３人は諦める事に。

ふと、光一が時計を見る。

「あっ！　そろそろ時間だぞ！？」
「まったく、あの連中の所為でおちおち集中出来やしないよ」
「ああ。まあ閉じ込められる心配もないだろうし、ゆっくりと……」

「あっ！　さっきの無銭入場客！」

当然だが、先程の受付が駆け寄ってきた。

「げっ、まずい！」
「走るぞ明久、光一！」
「ああもう！　今日はこんなのばっかりだ！」

3人は受付に追われながら、教室へと戻って行った。

そして3回戦

「“爆発”！」

光一が撃ち出した銃弾を中心に、試合会場で爆発が巻き起こる。

「久遠・木下ペアの勝利です！」

秀吉の召喚獣が長刀を、光一の召喚獣が銃を掲げる。

「それにしても、危なかったの」
「物理で俺に勝てる奴はいない」

『2－Fクラス　久遠光一＆木下秀吉　物理552点＆53点』
VS

『３－Ａクラス　堀田雅俊＆金田一新之助　物理３０１点＆３９２点』

３－Ａのコンビと当たるとあって、雄二はそれを考慮したうえで光一の最強武器を選択していた。
科目によっては、最強にも最弱にもなるのが光一である。

「ワシはやはり足手まといか」
「観察処分者じゃない明久って所だろうな、この場合」
「それはワシが何の能もない役立たずだと言いたいのかの？」
「お前も大概明久に酷いな」

と、常夏コンビにめちゃくちゃにされた喫茶店の経営へと戻っていく。
ちなみに最低コンビの方は、相手が食中毒で不戦勝。

「さて、失った客を取り戻すためにも、何かインパクトが欲しいところだな」

教室の中は空席だらけで、とてもうまく行くとは到底思えない光景。
酷い悪評が広まっている以上、それを払拭する何かが欲しい所。

「で、一応用意したのがコレだ。安直だが、効果は絶大な筈」

雄二は刺繍も見事な、水色と白のチャイナドレスを取り出した。
作：ムッツリーニ

「成程ね。これなら確かにインパクトはあるはず」
「ああ。これを……明久が着る」
「“雄二が明久に女装を強いて、襲いかかろうとしている”っと。

んじゃ、霧島に送信……」

雄二の浮気対策と称し、光一は翔子のメアドを教えてもらっていた。

「冗談だ。頼むからそれだけはやめてくれ！」

「だったら真面目にやれ。というか、何で霧島は性別を些細な問題程度にしか認識しないんだろ？」

「俺が聞きたい！」

つくづく、この学園はどこかこう変な奴ばかりだと、改めて認識した光一だった。

無論光一も、自分が非常識である事は自覚してはいる。

「たっだいま～。皆無事に勝ち残れて、よかったわね」

「3回戦、不戦勝だったそうですね？　残念です、吉井君の試合見たかったのに」

「鉄砲のお兄ちゃんたちも勝ったよね？　鉄砲のお兄ちゃんの試合、すごかったよ」

そこへ、ちょうど女子3人が戻ってきた。

「ちょうど良かった。実は……って案が出たんだけど、頼めるか？」

「え！　それを着るの！？」

「さっ流石に、それは……」

2人は少々過激な格好になる事に、抵抗を見せた。

光一がちらりと明久を見て、ピンっと閃く。

「明久、チャイナドレスは好きだよな？」

「大好……愛してる」

「言いなおす意味がないぞ？」

吉井明久は、ウソがつけない人間である。

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうですね！　お店の為ですしね」

明久の進言で、言葉とは裏腹に我先にと服を手に取る。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？　葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い……？　あ、うん！　手伝うから、あの服葉月にも頂戴！」

葉月の真意は別の処にあったのだが、この際はと葉月は頷いた。

その言葉を受けて、ムッツリーニはすごい勢いで裁縫を始める。

「それじゃ、３回戦が終わったら着替えますね」

「いや、今着替えてくれないか？　宣伝の意味合いもあるから、できれば頼む」

「お願いだ！」

と言って、明久は頭を下げた。

「もしかして吉井君達、私の事情を知って……」

「仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」

「あ、は、はいっ！　これ位、お安いご用です！」

と、美波と瑞希は賛同。

それから2人は、チャイナドレスを抱え教室を出て行った。

「……できた」

「できた!?　まだ数分もたってないだろ!?」

「……朝飯前」

そして秀吉と葉月がそれに着替え、宣伝に回る事に。

光一も厨房の持ち場へと戻ろうとした時、雄二に止められた。

「それと、光一。お前も宣伝に回れ」

「え?　俺も?」

驚く光一だが、雄二が顎である方向を指した。

「ねえ、あの人じゃない?　さっき銃の召喚獣使ってた人」

「うん。ちょっと頼りなさそうだけど、よくない?」

と、ちらほら居る女性客が光一を見て、話題へと上げていた。

一般の見る中で3－Aを堂々の実力で破ってきた以上、話題となるのは当然の話。

「とまあ、そう言う事だ。憎らしいが、これも喫茶店の為だ」

「まさか、俺みたいな危険人物?1がね……」

「光一ならあり得るよ」

明久は基本、光一に対しては素直に尊敬と相棒としての情を持っている。

なので、雄二や他のクラスメイトに対してのそれは、全くない。

「（それに、あの常夏コンビがこのままとはとても思えんしな。そ

んな中で秀吉とチビッ子だけをうろつかせる訳にもいかんだろ）」
「（……用心するに越した事はないってところか？　わかった）」

幼い子供に暴行を加えたりなどはないだろうが、学園祭で営業妨害するような奴ら。
だからこそ、ある程度の護身は必要となる。

「じゃあ、頼むぞ」
「ああ」

そして時間は過ぎ、瑞希＆美波ペアが戻ってくる時間帯。

「何とか持ち直したな」
「ああ」

光一と雄二は、活気を取り戻した教室を見回して悦に浸る。

「さて、ここからが本番だ」
「ったく、どうして学園祭で妨害を気にせにゃならんのやら？」

と、吐き捨てるように光一が言うと、ウエイターに精を出す。
光一は“本性を知らければ”それなりの為、その辺りの評判も起因しているため女性客も多い。

「では、ゴマ団子２皿と本格ウーロン２つですね？　では少々お待ちくださいませ」

慣れない接客に精を出しつつ、荒事担当の業務もしっかりとこなす光一。

ふと、明久と秀吉の2人と話す竹原教頭を見つけた。

「……竹原、教頭？」

明久と秀吉との付き合いの中で、教頭と縁がある様な話はない。
特に秀吉はともかく、明久は開校以来初の観察処分者であり問題児であり、縁がない教師が話しかける人間じゃない。

「どうした、光一？」
「いや、ちょっと珍しい光景が……ん？」

ふと見ると、その光景を他校の者と思われるガラの悪そうな3人が見ている。
明久と秀吉が、美波から何やら指示を受けると、2人して教室の外へ。
それを見ていた3人が、それを追って出て行った。

「（……黒幕が見えて来たかも知れないな）」
「（何だと？）」
「（明久と秀吉が危ないかもしれないから、ちょっと出てくる。雄二は教頭から目を離さないでくれ）」
「（教頭！？　……わかった）」

「……明久と秀吉は？　饅子も足りなくなった」
「じゃあ、俺が行ってくるよ」

光一は明久達を追い、一路空き教室へ。
空き教室から声が聞こえ、そこで戸が閉められた。

「おい明久、秀吉。饅子も足りなくなったから俺も手伝うよ」

と、あくまで普通を装い、中へ。
そこには、秀吉をかばう明久の姿と、先程明久達を見ていたチンピラ。

「あっ、光一！」
「コイツどうする？」
「面倒だから、一緒にやっちまおうぜ！」

と、1人が光一めがけて襲いかかった。

「どうしてこう面倒ばかりあるのかね？」

チンピラが繰り出したパンチをかわし、すれ違いざまにスタンガンで殴りつける。
そこで悶絶した不良をほっといて、明久と秀吉に殴りかかるチンピラにスタンガンを投擲。

「あぐあっ！！」
「ぐうああっ！！」

それから1分後

「おっ、覚えてろっ！」
「テメェの面、忘れねぇから！」
「夜道に気を付けろよ！」

負け犬3匹が、よろよろと逃げ出して行った。

「大丈夫か？」
「あっ、うん。ねえ光一、あの連中何だったかわかる？」
「さあな……さっきの営業妨害の続きかもしれない」

喫茶店の営業妨害、明久と秀吉を狙った襲撃。
両方で見る教頭の姿に、光一は疑問を抱く。

「とにかく、急いで戻るぞ。ムッツリーニが待ってる」
「はいよ」
「承知した」

茶葉と餡子を抱え、喫茶店へと戻る3人。
その喫茶店には、既に教頭の姿はなかった。

「あっ、そうだ秀吉。お前これもっとけ」

光一は秀吉に、スタンガン（３０万ボルト）を手渡した。

「光一よ、いくらなんでもこれは……」
「営業妨害と言いお前らを狙った襲撃と言い、どうにも解せない事が多すぎる。用心に越した事はない」
「確かに、ちょっと不自然過ぎるね……」

明久も流石に、立て続けに起こる騒動に不安を感じていた。
光一は周りを気にしつつ、接客へ戻る事に。

「よっ、お帰り（どうだった？）」
「力仕事はやっぱきついな（やっぱり明久と秀吉を狙った襲撃があった）」
「もっと鍛えろよ、このモヤシ（成程な……ちっ、面倒な事になり

やがった）」
「モヤシ言うなゴリラ（雄二、後でお前の考えを教えろよ？　どうせもう何かつかんでるんだろ？）」
「誰がゴリラだ（ああ、最悪ババアも交えて話す事になるだろうがな）」

そんなこんなで、特に問題もなく４回戦の時間。

「やれやれ……きつすぎるにも程があるぞ？」
「確かにのう……」

本当は、明久・雄二ペアが瑞樹・美波ペアと当たる為、美波の鬼門科目である古典を選ぼうとしていた。
だが光一にとっても鬼門科目である為、美波が苦手で光一がある程度取れる科目“現代国語”で行く事に。

しかし……

「やほーっ、久遠君に優子の弟君」
「すみませんが、今回も勝たせていただきます」

２－Ａで光一が戦った佐藤美穂と、ムッツリーニに負けた工藤愛子。

『２－Ｆクラス　久遠光一＆木下秀吉　現代国語９９点＆６４点』
ＶＳ
『２－Ａクラス　工藤愛子＆佐藤美穂　現代国語２９５点＆２１５点』

「へぇっ、結構成績良いね」

「一応、うちのゴリラがバカやった1件以来、それなりに勉強はしたからね。それに元々が古典と化学と日本史と世界史が全部1ケタと壊滅的なんで、総合じゃFの中堅辺り」
「……偉く極端だね？　確かに物理がすごくても、Fクラスで無理もないかも」
重ねて言うが、彼は教科によっては最強にも最弱にもなるのである。

「さて、行こうか」
光一と秀吉の召喚獣が、それぞれ武器を構える。
そして愛子と佐藤の召喚獣も、同様にする。

「工藤さん、腕と足を気を付けてください」
「わかってるよ」
光一の攻撃パターンの研究は、前回の試召戦争で済んでいる。
その為、点数で勝っている事もあり既に勝利を確信していた。

「おいおい、忘れてないか？　これがタッグ戦だってこと」
「またまた。吉井君とのペアならまだしも、優子の弟君じゃ戦力には……」
「工藤さん、来ます！」
まず秀吉の召喚獣が、長刀を突き付けながら突進！

「突進？　なんで……」
「とにかく、迎撃しましょう」
と、佐藤の召喚獣が鎖鎌を投げつける。

「あっ！　待って美穂！」
「え？」

秀吉がそれをかわし、その直後佐藤の召喚獣が銃弾を受けた。
そのちょうど後ろでは、銃を向ける光一の召喚獣が。

「成程ね。弟君の背後での動きに合わせての射撃か」
「ですが、これは少しでも狙いを外せば味方を殺す様な物。どういう神経しているんですか？」
「光一の弾丸は狙いを外す事はない。ワシはそう信じておるから、迷いはないのじゃ」
「まあ、そう言う事だよ。行くぞ」

その後、攻撃は大半が光一の銃弾に弾かれ、秀吉の地道ながら攻撃を続ける事で、相手の点数は削れる。
ラストは光一の銃弾が2体の召喚獣を撃ち抜き、勝負は決した。

「勝者、久遠・木下ペア」

ボロボロになりつつも、勝利を手にした2人は晴れやかな表情。

「やれやれ……信じても、やはり精神的に疲れる事に変わりはないのう」
「相手はAクラスだから、仕方ないだろ？　まあ後でゴマ団子奢ってやるから、な？」
「ならば、早速相伴にあずかろうかの？　さて、すぐに戻るぞい」

と、駆け足で去って行った。
それを見て愛子は一言。

「久遠光一君か……優子はいらないって言ってるし、貰っちゃおうかな？」

と言った事は、誰一人の耳に届く事はなかった。

所変わって。

「ただいま」

「あっ、鉄砲のお兄ちゃん！　お客さんがいっぱい来てくれたよ？」

葉月が2人の、というより光一の姿を見るなり、トトトッと駆け寄ってきた。

「へぇっ、こりゃすごいな。葉月ちゃん、お手伝いありがとう。バカなお兄ちゃんも喜ぶよ」

「ホント？　バカなお兄ちゃん、早く帰ってこないかな？」

「ありゃりゃ、こりゃ俺の負けかな？」

おどけたように肩をすくめると、秀吉と顔を見合わせて苦笑。

「ねえねえ、あの人たちじゃない？」

「あの2人、付き合ってるのかな？」

「そうじゃないの？　だってあんなコンビネーション披露する位だから」

先程の試合を見たらしい客も入ったらしく、それぞれが声を上げる。

それを聞いて、秀吉が苦笑したのはお約束。

「ワシは男じゃと言うのに……」
「ぱっと見じゃ、優子と見分けがつかないからな。無理もないよ」
「ただいま」

そこへ明久をはじめ、４回戦でぶつかった４人が戻ってきた。
葉月が明久に駆け寄り抱きついて、頭を撫でて貰っている。

「お、あの子たちだ！」
「近くで見ると一層可愛いな！」
「手伝いの小さな子も可愛いし、レベルが高いな！」

それを見たお客が、更に声を上げる。

「で、どっちが勝った？」
「雄二、かな？」
「そうね。坂本の１人勝ちね」
「ですね」
「？　良くわからんけど、そろそろ仕事に戻るぞ？」

光一がそう掛け声をあげると、瑞希と美波、明久と光一と秀吉は接客に。
雄二は一旦厨房に入る事に。

「いらっしゃいませー！　中華喫茶ヨーロピアンへようこそー！」

「ちっ……まさか２組して、準決勝まで来るとはな」
「俺達の相手は、あの久遠とかいうスタンガン野郎のペアだ。金田一と堀田を破った以上、並の相手じゃねえが……」
「まあ落ち着け、所詮は二年坊主だ。年季の入った戦いって物を見

せてやればいい」

第二十問

文月新聞　号外

『今年の清涼祭も反響を見せている中、名物ともいえる召喚大会も盛り上がってまいりました。
準決勝は、AブロックとDブロック、BブロックとCブロックの勝者が戦う事になります

第一試合
久遠光一（２－Ｆ）・木下秀吉（２－Ｆ）ペア（Ｂブロック代表）
ＶＳ
夏川俊平（３－Ａ）・常村勇作（３－Ａ）ペア（Ｃブロック代表）

第二試合
吉井明久（２－Ｆ）・坂本雄二（２－Ｆ）ペア（Ｄブロック代表）
ＶＳ
霧島翔子（２－Ａ）・木下優子（２－Ａ）ペア（Ａブロック代表）

驚いた事に、ＢブロックとＤブロックを勝ちあがってきたのは、２－Ｆのペア。
ここで久遠・木下ペアと吉井・坂本ペアが勝ち上がれば、明日の決勝はＦクラス一色という事になる。
それを防いでＡクラスと上級生の意地を見せるか？

この戦いの行方が、気になるところです！』

「さて、準決勝だ」

明久達にとっては、これを勝てば目的が達成される。
ただし、明久と雄二、光一と秀吉のどちらかが負けてもダメ。
しかし準決勝となると、それ相応の学力戦士が生き残っている。

「僕たちの相手は、あの霧島さんと秀吉のお姉さんだよ？　きつそうだなあ……」
「俺達の相手は……っ！　常夏コンビ！？」
「あいつらが！？」

準決勝は、光一・秀吉ペアは常夏コンビ。
そして明久・雄二ペアは翔子・優子ペアとの対戦。

両方が2年3年のAクラスであり、まさに正念場ともいえる戦い

「お互い、因縁の対決ってことか」
「ああ……って、そっちは違うだろ？　雄二のいとしい霧島との将来を約束すれば楽勝だろうに」
「うるさい黙れ！！」
「……まあいいや」

準決勝の科目は保健体育。

光一もそれなりに点数はとれているため、そうあわてる事もなく試合会場へ。

ちなみに光一と秀吉のペアが先の為、これが終わったらある作戦を実行予定である。

「さて……行くか秀吉？」

「うむっ。光一よ、ワシはお主を信頼しておる。だから、存分に腕をふるえ」

「ああ。俺もお前を信頼してるし、お前の信頼にこたえてやる……だから、な？」

光一が手を差し伸べると、秀吉が握り返す。

そして頷きあい、試合会場へ。

「やっぱりあんた達か」

「お前らが公衆の面前で恥をかかないように、という優しい配慮だったんだがな」

「それで俺たちみたいな最下級クラス相手に卑怯な手か？　随分と小物臭い事クズどもだ事で」

光一や秀吉は、この2人のした事に当然腹を立てていた。

特に好戦的な性格の光一は、相手を逆上させるような暴言を平然と言い放つ。

「テメェっ、先輩に向かってなんだその態度は？」

「先輩なら先輩らしくしろよ。あんな真似が尊敬されて当然だとでもいう気かこの変態坊主」

「ああっ！？」

その前哨戦として、光一が夏川とにらみ合い。
本当ならリアルで一戦交えたいところだったが、場が場の為にこれでとどめる事に。

「先輩として忠告しておくぞ？　恥かきたくなかったら、とっととギブアップしろ。お前らＦクラスのクズどもとの一戦なんざ、時間の無駄でしかねえんだよ」
「そうはいかんの。ワシとて、お主らのしたことには腹を立てておる」
「たかが喫茶店ごときで随分な入れ込みようだな？　バカは嫌だね」

事情も知らず好き勝手言う態度に、秀吉も珍しく相手を睨みつける。

「君たち！　何をしているんですか！？」

それを立ち会いの教師に見咎められ、一旦距離を取る。
光一は秀吉に、夏川は常村になだめられながら。

「光一よ、気持ちは分かるが落ち着くのじゃ」
「わかってるよ……秀吉、勝つぞ」
「承知した」

『２－Ｆ　久遠光一＆木下秀吉　保健体育　１８９点＆６７点』
ＶＳ
『３－Ａ　常村勇作＆夏川俊平　保健体育　２１０点＆１９３点』

「へぇっ、Ａクラスだけあって勉強はできるんですね。先輩方」
「お前、本当にＦクラスか！？」
「物理ならお前ら一瞬だぜ？　命拾いしたな」

保健体育は本来はDクラス並みだったが、準決勝で行う作戦故に光一は勉強していた。
とある女生徒に教えてもらおうかと考えていたのだが、その辺りは断念してあるのであしからず。

光一の召喚獣が銃を構え、秀吉の召喚獣が長刀を構える。
向こうの夏川が剣を構え、突進してきた。

「甘い！」

光一の召喚獣が銃を構え、脚を狙い撃ち出す。
それは当然の様に夏川の召喚獣の脚を撃ち抜き、動きを止めた。

「っ！」
「アンタ達には恥かいて貰わないと気が済まないんでね。悪いが、即決でとどめをさす」
「くぅっ！」

ふと、秀吉の声が上がり見てみると、長刀でガードしつつも剣で圧されている秀吉の召喚獣が。

「待ってろ、すぐに援護に……」
「させるか！」

夏川の召喚獣が、秀吉の召喚獣に向って剣を投げつける。
それを光一の召喚獣が撃ち落とした。

「そら、ひっかかった！」
「なっ！？」

それに気を取られてる好きに、光一の目に砂利が投げつけられた。

「よし、今のうちだ常村！　さっさとそいつを潰しちまえ！」

「ああ。くたばれやお嬢ちゃんよ！」

見えなければ撃つ事は出来ない。

秀吉は2人に対抗する程力がない。

「ワシとて男じゃ！　いつまでも光一に甘えてばかりはおれぬ！！」

が、秀吉の召喚獣が長刀で剣を横にないで、そのまま敵召喚獣の喉に突きたてる。

「なっ！？」

そのまま縦一文字に切り裂き、常村の召喚獣が消え去っていく。

そこで目をこすり、視界を取り戻した光一が秀吉の肩に手をのせる。

「ワリィ、手間かけた」

「何を言っておる？　光一のしたことに比べれば、些細な事じゃ」

「そうかい。じゃあ最後くらい……」

動けない夏川の召喚獣の頭に向け、ライフルを撃ち出した。

「カッコつけさせてもらうぜ？」

「勝者、久遠・木下ペア！」

光一が秀吉の腕をつかんで、高々と掲げた。

それに合わせて、観客から歓声が沸いた。

「よし、急いで戻るぞ。（優子を取り押さえに……な？）」
「うむっ（……何故そこらのチンピラより強い光一が怖気づくのじゃ？）」
「（優子相手じゃ無理ないだろ！）」
「（確かにのう……）」

そして時間が過ぎて……

「……雄二、邪魔しないで」
「そうは行くか。俺はまだやりたい事がたくさんあるんだ！」

明久・雄二ペア　ＶＳ　翔子・優子ペア

ペアチケット目当ての翔子は、その相手となる雄二を前にして悲しい顔をする。

「さあ、頼むぞ秀吉！」

雄二の作戦は、秀吉と優子のすり替え作戦。
準決勝を終えた光一と秀吉が、そのまま優子を拉致しての入れ替えである。

「……ふふっ」
「秀吉、もう木下さんの演技は良いから、早く僕らと……」
「秀吉？　秀吉って、あそこの生ゴミどもの事？」

優子が指差したステージの一角。
そこには、ボロボロにされた揚句、手足も縛られた秀吉と光一の姿。

「ばっ、バカな!?」
「雄二の考えてる事くらい、私にはお見通し」
「アタシも、光一がやること位お見通しよ。まっ、匿名の情報提供もあったんだけどね」

優子の言葉に、明久は目を見開く。
明久はここにくるまで、作戦の概要を知らなかった。

それを知ると言うのは、常に自分達をマークしていなければ不可能だと言う事。

「くっ……すまぬ、雄二。ドジを踏んだ……」
「優子め……容赦って言葉の意味知らねえのかよ?」
「……!!（パシャパシャパシャ）」
「撮影なんかしてないで、早く秀吉と光一の縄をほどいてあげてよ！（その秀吉の写真、後で売って欲しい）」
「明久、本音が混ざってるぞ?」

優子の降伏勧告があり、その間にムッツリーニは即座に2人の縄を解いた。

（雄二、僕に考えがあるから、指示通りの台詞を言ってほしい）

と言った後に、多少のやり取りをして明久は雄二の背に身を隠す。

（翔子、俺の話を聞いてくれ）
「翔子、俺の話を聞いてくれ」
（お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ）
「お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ」

明久の指示通りに、雄二は棒読みにならない様気を付けてセリフを合わせる。

「……雄二の考え？」
（俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張ってお前と幸せになりたいんだ！）
「俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張ってお前と幸せになりたい……って、ちょっと待て！」
「……雄二」

雄二が明久の方を慌てて向こうとするが、明久が強引に頭を押さえつける。
一方、翔子は雄二の台詞に、うっとりとした表情を浮かべ始めた。

（だから、ここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう）
「だっ、誰がそんな事言うかボケぇッ！！」

光一がスタンガン（４０万ボルト）を取りだし、放り投げる。
明久はそれを受け取ると雄二の首に最大出力でおしつけた。

「くたばれ」
「くぺっ！？」
「……雄二？」

続きの台詞を待ち望む翔子に、明久と光一は目配せ。

（おい、秀吉）
（うむ、了解じゃ）

光一の指示に従い、秀吉がゆっくりと深呼吸。

「だからここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう。愛している、翔子」

本人と区別がつかない声真似で、最後の台詞が紡がれた。
指示していないセリフまで追加となっていたが、この際はと誰も気にしなかった。

「……雄二、私も愛している」
「ま、待て……俺は、愛してなど……こぺっ！？」

明久が雄二の首をひねり、そのまま黙らせた。

「ふはははは！　これで最強の敵は封じ込めた！　残るはキミだけだ、木下優子さん！」
「ひ、卑怯な……！」

翔子は雄二の亡骸に抱きつき、戦意喪失。
だが雄二の方も力なく項垂れており、とても戦える状態にない。

「おーい明久、明日の決勝はよろしく頼む！」
「光一、バカにしないで！　アタシ１人でも吉井君に負けないはず！　行くよ……サモン！」
「ふふっ。それはどうかな？　この勝負の科目が保健体育だった事を恨むんだね！」

明久がムッツリーニに目配せし、元々の秘策を実行。

「行くよ、サーモン（新巻鮭）！」

（……サモン（試獣召喚））
「え！？　それ、土屋君の……！」

これぞ秘策『代理召喚（バレない反則は高等技術）』である。

（……加速）
「ほ、本当に卑怯……きゃあっ！」

一撃で仕留め、勝負が決まった。

『２－Ａ　木下優子＆霧島翔子　保健体育３２１点＆ＵＮＫＮＯＷＮ』
ＶＳ
『２－Ｆ　土屋康太＆坂本雄二　保健体育５２１点＆ＵＮＫＮＯＷＮ』

「よしっ！　僕と雄二の勝ちだ！」

明久は高らかに勝鬨を上げておいた。

「……ただ今の勝負ですが」
「霧島さん、僕らの勝ちで良いよね？」

物言いがつきそうなところを、明久が遮った。

「……それは」
「翔子、愛してる（ｂｙ秀吉）」
「……私達の負け」
「……わかりました。坂本・吉井ペアの勝利です！」

観客は冷めた目でそれを見ていた。
それもそのはず、召喚獣の勝負を見に来たのにこの終結では、しらけてもしょうがない。
増して、先程が接戦だっただけに、その差は激しい。

「それじゃ、僕等はこれで」

ブーイングが出る前に、明久はさっさとその場を後にした。

「明久よ、中々の機転であったな」
「……作戦勝ち」
「ああ。見直したぜ」
「光一や秀吉、ムッツリーニのサポートがあったからだよ」

光一と秀吉は既に決勝進出を決めており、今自分達も決まった。
これで2つの問題が一気に解決されたともあり、明久はとてもうれしそうだった。

決勝戦は明日の午後1時から。

「やったね。これで僕たちの問題は解決したよ」
「いーや、まだだ。明日は姫路のお父さんも来るって話だろ？　なら姦計やら策略やら抜きにして、それ相応の戦いって物を見せてやらないとな？」
「うむっ、手加減はせんぞ？　明久よ」

光一と秀吉の言葉に、明久は力強く頷いた。

「ああ！　どんとこい！」

明久が拳を差し出したのを、光一と秀吉はそれにゴツっと合わせた。

「ところで、雄二はあのままにしておいていいのかの？」

「別にいいんじゃない？」

「そうそう。あいつもたまには素直になるべきだと思うし」

と、光一と明久は特に気にもしない。

「じゃが、霧島が雄二に一服盛って、持ち帰ろうとしておったので……」

「霧島さん！　雄二にはまだ決勝があるから、クスリは勘弁して！！」

「式には是非呼んでほしいけど、それはせめて決勝が終わってからにしてくれ！！」

2人が引き返してみたのは、うつろな目をしながらタキシードに着替える雄二の姿だった。

第二十一問

文月新聞　号外

『召喚大会準決勝が終了し、勝ち残ったのは久遠・木下ペアと吉井・坂本ペア
当初の予想を大きく裏切り、２年最下級クラスの２ペアが決勝へと名乗りを上げた。

決勝戦　科目（総合科目）
久遠光一（２－Ｆ）・木下秀吉（２－Ｆ）ペア
ＶＳ
吉井明久（２－Ｆ）・坂本雄二（２－Ｆ）ペア

決勝は明日からだが、最低から這い上がった２組の戦い。
これは接戦となる事も予想されるが、一方的に終わる事も予想される。

勝負の様子、結果、その他全てが予想不可能ともあり、その事も話題を引き起こすこの戦い。
勝負は清涼祭２日目の午後１時、これは見逃す手はない！』

「明久、光一、今日という今日はキサマラを殺す！」
「あはは。やだなぁ雄二、目が怖いよ？」
「なんだ、まだクスリが抜けてないのか？　帰ったらお茶飲んで落ち着けよ」

あの後2人は腹を殴りクスリを吐かせた上で冷水につけて、電気ショック（20万ボルト）を施す。
それにより、雄二は正気を取り戻し今に至る。

ちなみに秀吉とムッツリーニは、喫茶店があるのでその間に帰って行った。

「だいたい、雄二の作戦が読まれていたのがいけないんじゃないか。相手はあの霧島さんなんだから、充分考えられた事態だと思うよ？」
「ぐっ、それを言われると反論できん……」
「お前、霧島が関わるとどうも冷静に物事が考えられないよな？やっぱりお前内心……」
「そんな訳ないだろう！！」

噛みつくように光一に抗議する雄二。
それを見て、明久も光一もやはりというように頷く。

「それより、早い所戻ろう。心配事もあるし」
「そうだな。ところで、姫路や島田は教室にいるのか？」
「え？　まだ確認してないけど、いるんじゃないの？」

いきなりの話題に、明久は少々戸惑う。

「多分、そろそろ仕掛けて来る筈だと思うんだが……」
「ああっ、例の妨害か？」
「え！？　……まっまさか、姫路さん達に！？」
「……雄二」

教室の前まで行くと、ドアの前に立っていたムッツリーニが３人に駆け寄る

「ムッツリーニか。何かあったのか？」
「……ウェイトレスと、たまたま来ていた木下優子が連れて行かれた」
「なっ！？」
「えぇっ！？　姫路さん達が！？」

予想外の事態に、光一も明久も驚きの声を上げた。

「やはり俺や光一、明久と直接やりあっても、勝ち目がないと考えたか。当然と言えば当然の判断だな」

雄二は勉強をサボっていた分体を鍛えまくっており、中学時代は“悪鬼羅刹”と異名を持っている。
光一とて、エアガンとスタンガンを駆使すれば、そんじょそこらでは相手にもならない程強い。

「ってそんな事より、姫路さん達は大丈夫なの！？　どこに連れて行かれたの！？　相手はどんな連中！？」
「落ち着け明久、これは予想の範疇だ」
「え？　そうなの？」
「ああ。もう一度俺達に直接何か仕掛けてくるか、あるいはまた喫茶店にちょっかい出してくるか、そのどちらかで妨害工作を仕掛け

てくると予想できたからな」

“俺たちに”という言葉に、明久も光一も疑問を持つ。
だが、それよりも今回の事態を解決するのが先と、決定づけた。

「何だか、随分と物騒な予想をしてたんだね？」
「全くだ。誘拐なんて、流石に洒落じゃ済まないぞ？　下手すれば警察沙汰だって言うのに」
「……行先はわかる」

と言って、ムッツリーニが取りだしたのはラジオの様な機械。

「何それ？　ラジオみたいに見えるけど？」
「……盗聴の受信機」

耳を疑ったが、まあここは気にしない事に。
そう2人は決定づけた。

「オーケー、あえて何でもってるかは聞かないよ」
「さて、場所が分かるなら簡単だ。かる～くお姫様達を助け出すとしましょうか、王子様方？」

と、雄二はニヤついた目つきで明久と光一を見つめた。

「何だよその目つき？　気持ち悪い」
「そのニヤついた目つきは気に入らないけど、今回は感謝しておくよ。姫路さん達に何かあったら、正直召喚大会どころの騒ぎじゃないからね」
「……それが向こうの目的だろうがな」
「え？」

「ちょっと待ってろ、今コレクション持ってくるから」
光一はバックに行き、自慢のコレクションを詰めたボストンバッグを手に。
そして、急いで明久達と合流。

「さて、作戦だが、ムッツリーニはタイミングを見て裏から助けてやってくれ」
「……わかった」
「となると、俺達、特に明久のやる事は1つだな」
「ああ。そう言う事だ」

明久がそれを聞いて、不思議そうな顔をする。

「それってどういう事？」
「王子様の役目は、昔から決まってるだろ？」
「え？　それって？」
「お姫様をさらった悪者を退治する事さ」

『さて、どうする？　坂本と久遠と……吉井だったか？　そいつら、この人質を盾にして呼びだすか？」
『待て。吉井ってのは知らないが、坂本と久遠は下手に手を出すとマズい。坂本は中学自体は、相当鳴らしていたらしいしな』
『それに久遠って、あの久遠だろ？　俺たちだけでそんな奴ら、どうやれってんだよ？』
『ああ。出来れば、事を構えたくはないんだが……」
『気持ちは分かるが、そうもいかないだろ？　依頼は木下秀吉を含めたその4人を、動けなくする事なんだから』

ムッツリーニの持っていた受信機からの、音楽に混じって聞こえる会話。
それを聞いて、3人は顔を見合わせる。

（雄二に光一、この連中って）
（黒幕に依頼されたその辺のチンピラじゃないのか？）
（しかし、俺達を狙ってって……秀吉までどうして？）

ムッツリーニに案内された先は、文月学園から歩いて5分程のカラオケボックス。
そのパーティールームに、連れていかれたらしい。

『お、お姉ちゃん……』
『アンタ達！　いい加減葉月を離しなさいよ！！』
『そんな小さな子を人質にするなんて、恥ずかしいと思わないの！？』」

泣きそうな葉月の声と、美波と優子の怒鳴り声が次に響いてきた。

『お姉ちゃん、だってさ！　かっわいぃー！』

その声を聞いて、明久が今にも部屋に入りそうな勢いになる。

（待て明久、勝手に行動するな）
（まずは人質の救出が優先だ。ムッツリーニがうまくやってくれるから、それまで待ってろ）
（……わかったよ）

『……灰皿をお取り換えいたします』

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？　ヤっちゃっていいの？』
『だったら俺は、コッチの巨乳チャンがいいなー！』
『あっ、ズリー！　それなら俺、２番目ね！』

明久のボルテージが上がる中、光一と雄二は明久を抑える。
光一とて、手に持っているスタンガンをギリッと握りつぶしかねない勢いで、握りしめていた。

『しかし、まさか似た顔が居るとは思わなかったな』
『ああ、木下秀吉だろ？　ビックリするほど瓜二つだわ。しかも２人してかわいいと来たもんだ』
『やっ！　触らないでよ！』
『ちょっと、やめなさいよ！』
『あーもう、うっせェ女だな！』

ドン、という突き飛ばした音と、美波の悲鳴。
そのあと、まるで何かがテーブルを巻き込んで倒れたような音。

ガチャッ！

「おじゃましまーす」
「ちょっと邪魔するよ？」

明久は自分の中の何かがトんだ様な顔をして、そのままドアを開け放ち部屋へ。
光一も先程ので怒りの頂点に達し、それに続く。

「よ、吉井君に、久遠君？」
「アキ……それに、久遠も」

「光一……」

不良に腕を掴まれている瑞希と優子、そして倒れたテーブルの近くで尻もちをついている美波。
その突然の出来事に、驚いている様子。

「はァ？　お前ら誰よ？」
「それでは失礼して……死にくされやぁぁっ！」
「ほごあぁぁぁぁっ！」

明久は思いきり近づいた奴の股間をけり上げた。

「てっ、てめぇ！　ヤスオに何しやがる！」
「イィッシャァァーー！！」
「ごぶぁっ！！」

その近くにいたチンピラが明久の顔面を殴り、そのあと明久がハイキックを顔面に叩き込んだ。

「テメェら、良くも美波に手をあげてくれたな！　全員ぶち殺してやる！！」
「コイツ、吉井って野郎だ！」
「どうしてここが！？」
「とにかく、来ているならちょうど良い！　ぶち殺せ！！」
「誰をぶち殺すって？」

殴りかかってきた奴の1人の顔面を、光一が思いきりスタンガンで殴りつけた。
左手にはエアガンも装備してあり、それを殴り付けた相手に撃ちだす。

「げっ！　くっ、久遠光一！？」
「やれやれ……このアホウが、少しは頭を使って行動しろってーのっ！！」
「げぶっ！」
「貸しイチ、だからな？」

その傍らで、向かって来た相手を壁に叩きつける雄二。
そう言いながら、更に他の奴に拳をたたき込み、今度は膝を鳩尾にめり込ませる。

「で、出たぞ！　坂本だ！」
「坂本まで来ていたのか！」

雄二を見て、チンピラが浮足立つ。

「坂本よぉ、このお嬢ちゃんがどうなってもいいのかぁ？」

向こうの1人が、葉月を羽交い絞めにしていた。

「良いか？　大人しくしていろよ？　さもないと、ヒデェ傷を……」
「……「負うのはお前」だ」

ビシッ！　ゴインッ！

「あがぁっ！」

羽交い絞めにしていた男は、額を抑えると同時に白目をむいて倒れた。
隠し持っていたベアリングで額を狙った光一と、その相手の後ろに

クリスタルの灰皿を振り切ったポーズで立っている、バイトのフリして先に侵入していたムッツリーニ。

「お、お姉ちゃん！　お姉ちゃーん！」
「葉月っ！　よかった……怖かったよね……？」
「吉井君っ！」

解放された葉月を美波が抱きしめ、瑞樹が腕を広げて駆け寄っていく。

「姫路さん！」
「吉井ぃ！　ヤスオをよくも！」

それに備え、明久が腕を広げて構えた所に来たのは、チンピラのパンチだった。

「うわーっ……」
「な、何だこいつ？　血の涙流してるぞ……？」

鬼気迫る雰囲気で、そのチンピラをしばき始める明久。

「姫路さん、ちょっと待ってて！　こいつをシバき倒した後でもう一度……」
「島田に姫路、木下も先に戻っていろ！」
「雄二！　キサマまで僕の邪魔をするのか！？」
「落ち着け明久、この場合しょうがないだろ？　優子も早く逃げろ！！」
「光一……わかった。けど後で事情説明はしてもらうわよ！？」

光一はスタンガンとエアガンで、特に優子に乱暴をしようとしたチ

ンピラを重点的に痛めつけていた。

「くはははは！　それにしても、ちょうど良いストレス発散の相手が出来たな！　生まれて来た事を後悔させてやるぜぇぇッ！！」

「あーあ、雄二の奴完璧キレてやがる。タイミングが悪かったな」

「確かに、霧島さんに追い詰められてるこのタイミングで、雄二とケンカするなんてね」

同情するような言葉だが、その中に情はこめられていない。

なぜなら言葉とは裏腹に、自分達も今痛めつけている相手に容赦の念を込めず殴りつけているからである。

誘拐騒ぎも一段落。

喫茶店の1日目が終了したFクラスにて、明久と雄二、光一と秀吉。

そして……。

「で、いつまで待たせる気？」

優子が貸し切り状態の教室でお茶を飲み、光一の奢りのゴマ団子を咀嚼していた。

巻き込まれた以上、事情を聞かないと帰らないと言ってきかないためである。

「まあ待て。もうそろそろ来る頃だ」

「？　来るって、誰がじゃ？」

「ババァだ」

「？　学園長がわざわざここに来るの？」

「ちょっと待ちなさい、アンタ達なんて事を言うの！？」

普通に考えて、その場にいないとは言え学園長をババア呼ばわりなど褒められた事ではない。
というより、普通にババア＝学園長で通じる事に、流石に優子も驚いた。

「そう言えばさっき、雄二が何か話してたな？　あれはその事か」
「話ねぇ……ダメだよ雄二、一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこっちから行かないと」
「吉井君、一応は余計よ？」

敬意もくそもない態度に、優子はツッコむ。
だが、誰一人気にする事もなく、話は続く。

「用事もくそも……この一連の妨害の原因は、あのババァにある筈だ。事情を説明させないと、気がすまん」
「ババァに原因が……えぇぇっ！？」
「何じゃと！？」
「ちょっと待ちなさい。妨害って何のことよ？　それに学園長がらみって、アンタ達一体何をしてるの！？」
「あ、あのババァ！　僕等に何か隠してたのか！」

明久も怒りを隠せなかった。
その所為で瑞樹達が危険な目に遭い、喫茶店の経営は苦労の一途。
仲間の命運がかかっている以上、文句を言わないと気が済まなくなった」

「……やれやれ、態々来てやったのに、随分と御挨拶だねぇ、ガキ共が」
「あっ、がっ学園長！」

優子と秀吉は立ち上がって礼をする。

「来たかババァ」

「さて、どういう事か説明して貰うぞ？」

「出たな、諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

「……ねえ秀吉、アタシがおかしい訳じゃないわよね？」

「寄寓じゃの、ワシもそう思っておった処じゃ、姉上」

蚊帳の外の優子と秀吉は、そのまま黙る事にした。

「確かに黒幕ではないだろうが、俺達に話すべき事を話してないのは十分な裏切りだと思うが？」

「ふむ……やれやれ、賢しい奴だとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初に取引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。もっと高得点を、例えばそこにいる木下優子の様な高得点をたたき出せる優勝候補を使えば良いからな」

雄二の言葉を聞いて、学園長は周りを見回し優子の姿に気がついた。

「ん？　ああ、あんたが木下優子かい？　何でここにいるさね？」

「騒動に巻き込まれたんだよ。それで事情を聞かせろってうるさくてね」

学園長は成程ねと頷いた。

「話に戻るけど、そうだよね。優勝者と準優勝者に、後から事情を話して譲って貰うとかの手段も取れた筈だし」
「なのに、俺達を擁立するなんて効率が悪すぎる。光一、秀吉、説明してやれ。構わないだろ？」
「……ああ、構わないさ」

雄二の言葉に、学園長は頷いた。
それを見て光一と秀吉は優子に事情説明。

「成程ね、姫路さんの転校か……それで、教室の改修を条件に副賞の回収を？」
「まあ表向きはな？　考えてみたら、教育方針の前にまず生徒の健康状態が重要な筈だ。教育者側、増して学園の長が反対するなんてありえなかった」
「という事は、ワシ等を召喚大会に出場させる為に、ワザと渋ったと言う事じゃな？」
「そう言う事だ。あの時俺がババァに１つの提案をしたのを、覚えているか？」

話が終わった処で、雄二が割り込んできた。
提案とは……

「科目を決めさせろってヤツかい？　成程ね、あれでアタシを試したってわけかい？」
「ああ。めぼしい参加者全員に、同じような提案をしている可能性を考えてな。もしそうだとしたら、俺達４人だけが有利になるような話には乗ってこない」
「そうだよね。ましてや、科目によっては最強にも最弱にもなる光一もいるから、僕たちにとっては破格過ぎる条件だ。なのに、ババァは提案を呑んだ」

つまり、この４人が決勝に出なければ学園長が困ると言う事。
そして、学園長が困らなければならない連中が居る事につながる事も、その４人の周りに起きている。

「じゃあ学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たり、明久と秀吉を狙ってチンピラが襲いかかったり、優子達に情報を流した密告者が居たのは、俺達が勝ち上がっては困る奴がいるってことか？」
「ああ。それに何より、俺達の邪魔をしてくる連中が姫路たちを連れだしたのが決定的だった。ただの嫌がらせなら、ここまではしない」
「アタシも巻き込まれた事ね？　……正直、どうなる事かわからなかったわ」

幼い少女も巻き込まれたと言う事もあり、流石に優子も悪寒を感じた。
下手をすると警察沙汰であることゆえに、尚更に。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったのか……すまなかったね」

と言うと、突然学園長が明久達に頭を下げて来た。
その姿に、明久達も驚きを見せる。

「アンタ達の点数だったら、集中力を乱す程度で勝手につぶれるだろうと最初は考えていたのだろうけど……目論見が完全に潰されて、焦ったんだろうね」
「さて、ここまであった以上話して貰いますよ？　あんたが俺達を選んだ真の目的を」
「はぁっ……アタシの無能をさらすような話だから、出来れば伏せ

ておきたかったんだけどね……」

だから、誰にも公言しないでほしい。

そんな前置きをする学園長。

「無能？　じゃあアンタの目的は、チケットじゃなくて腕輪か？」

「そうさね。アタシにとって、企業の目論見なんてどうでもいいのさ」

腕輪とは、優勝者と準優勝者に贈られる2種類の腕輪。

優勝者には、テストの点数を二分して2体の召喚獣を同時の呼びだせる腕輪。

そして教師なしで立会人になり、科目指定をした上での召喚用フィールドを形成できる腕輪。

その2種類の“白金の腕輪”

準優勝者には、自身の召喚獣を他人の召喚獣と融合させ、1体の召喚獣とする腕輪。

そしてこちらも召喚フィールドが形成できるが“白金”より機能が劣る腕輪。

「そうさ。その腕輪を、アンタ達4人に勝ちとって貰いたかったのさ」

「僕たちが勝ち取る？　回収してほしい訳じゃなくて？」

「あのな……回収が目的だったら、俺たちに依頼する必要ないだろ？　そもそも、回収なんてマネは極力避けたいだろうし、な？」

「ねぇ雄二、どういう事？」

理解できなかったのか、明久が疑問を投げかける。

光一は呆れるように、かみ砕いて説明。

「新技術は使って見せてナンボだってことだろ？　デモンストレーションもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体疑われるだろうから、このババァにしてみれば避けたいってことだ」

「光一の説明の方がわかりやすいね」

「お前の頭が悪すぎるだけだ！　で、どうして俺達じゃないとだめなんだ？」

「……欠陥があったからさ」

苦々しく顔をしからめる学園長。

技術屋にとって、新技術の欠陥は耐え難い恥であり、それを生徒に明かすのだから無理もない。

「欠陥？　どんな欠陥です？」

「入出力が一定水準を超えると、暴走を引き起こすんだよ。だからアンタ達が使うなら、暴走は起らずに済む」

「成程な、だから得点の高い優勝候補を使わず、俺達みたいな“優勝の可能性を持つ低得点者”がババァにとっては一番理想的だったってことか」

「じゃあ、アタシ達がもし決勝に出てたら……」

知らないとは言え、自分達が暴走の引き金を引こうとしていた……その事に、優子は顔を青ざめさせた。

「えーっと、つまり……？」

「つまり白金の腕輪も黒金の腕輪も、バカにしか使えないってことだ。そしてババアが選んだバカが俺達って事」

「何だとババァ！！」

「説明されぬとわからん時点で、否定できないと思うんじゃが？」

秀吉のツッコミで、明久は苦々しい顔をした。

「とりあえず、2種類の召喚フィールド作成用の方はある程度まで耐えられるんだけどねぇ……もう片方の同時召喚用と召喚獣融合用は、現状だと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは出来れば吉井と久遠専用にと……」

「あのさ、これはほめられてると取っていいんだよね？」

「何を聞いてたんだよお前は？　平均点程度で暴走する可能性があるって事は、それ以下のバカにしか使えないってことだろ？」

光一は出来る科目ではすごいが、出来ない科目では壊滅的。

それ故に、総合では平均点に至ってはいない。

「何だとババァ！！」

「いい加減自分で気づけ！！　それより、そうなると黒幕の正体は大体絞れてくるな」

「そうだな。明久にもわかりやすく言ってやると、腕輪の暴走を阻止されたら困る奴ら。つまり文月学園に生徒を取られた他校の経営者が絡んでると見ていい。後これは個人的な直観だけど、教頭の竹原も関与してる思う」

その言葉に、全員の視線が光一に集まった。

「最初の営業妨害の時、真っ先に席を立ったのは教頭だ。それに明久と秀吉が襲われた時も、襲った奴らは明久と教頭が話をしてるのを見て明久だと認識してた素振りがあった。偶然と思えないんだよ」

「やはりそうだったかい……近隣の私立校に出入りしてたなんて話を聞いたが、最早間違いないさね」

「となると、ワシ等の邪魔をしてきた常夏コンビや、例のチンピラ

は……」

「教頭の差し金だろうな」

明久はふむふむ、と頷いてみてふと思う。

「あのさ……じゃあ僕たちは、文月学園の存続が掛かった問題に巻き込まれてたって事？」

「そうなるな。試召戦争と試験召喚システムは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非が問われているシロモノだ。そんな状態で暴走なんて問題が起きたら、学校その物の存在意義も問われる」

「騙していた事はすまなかったね。だが、目的は既に達成はされているんだ。このまま何もなければ、全てはまるく収まるんだよ」

確かに表向きは、既に目的は達成された。

だが、このまま向こう側が黙っているとも思えない以上、用心に越した事はない。

「はぁっ……まさかアンタ達が、こんな事に巻き込まれてたなんてね」

「ごめんね、木下さん。でも……」

「良いわよ。事情はよくわかったから……それに姫路さんと島田さんの事、しっかり助け出したでしょ？　だから良いわよ、それは」

と、優子は明久の肩をバンと叩いて、光一に駆け寄る。

「それじゃ、聞きたい事は聞けたし、もう帰ろう」

「そうだな。家に帰ってやる事もあるし……それに明日も早いしな」

「それじゃアタシは学園長室に戻るとするかね」

学園長が静かに椅子から立ち上がる。

「４人とも、学園長としても個人としても、礼と謝罪をさせてもらうよ」
「はい」

そう言うと、学園長は出て行った。

「さて、俺達も帰るか。秀吉と優子は、俺が送ってく」
「ああ。俺と明久はともかく、秀吉には荒事に対応する術はない。用心してくれ」
「あいよ」

と、２人が出て行った。

「それじゃ優子に秀吉、俺で悪いけどエスコートさせてもらうぞ？」
「ええ、そうさせてもらうわ」
「うむっ、すまぬの。何から何まで」
「気にするなよ。お互い、ガキの頃から迷惑かけ合ってきた間柄なんだしさ」

こうして、学園祭初日は幕を閉じた。

第二十二問

問題
『冠位十二階が制定されたのは西暦（　）年である』

姫路瑞樹の答え
『６０３』

教師のコメント
正解です。

坂本雄二の答え
『６０３』

木下秀吉の答え
『６０３』

教師のコメント
一体どうしたのですか？　驚いた事に正解です。

吉井明久の答え。
『６０３』

久遠光一の答え
『６０３』

教師のコメント

君たちの名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください。

「アキに久遠、木下。おはよ～」
「おはようございます、吉井君に久遠君、木下君」
「あ、2人とも。おはよう」
「ん？　よう、2人とも

学園祭2日目の朝。
先に来ていた明久と光一、秀吉は、揃って登校してきた瑞希と美波に挨拶。

「あ～、その……昨夜はぐっすり眠れた？」
「え？　はい、ぐっすりでしたけど」
「そう。それじゃ……朝ご飯はきちんと食べて来た？」
「はい。きちんと食べてきました」

明久としては、昨日起こった事が事故に、気を使っていた。

が、明らかにバレバレである。

「明久、気持ちはわかるけど気を遣いすぎだ」
「そうですよ、大丈夫です。大変でしたけど、不思議なくらい落ち着いてますから」
「え？　そうなのか？」
「はい、結局みんな無事でしたし……それに、きっとまた吉井君が助けてくれますから」

そう言って、無理のない自然な笑みを浮かべる瑞希。
そこに光一と雄二の名がないのは、渇愛という事で。

「アキというよりは、坂本と土屋と久遠かもしれないけどね」
「明久も報われないな。それでムッツリーニ、今朝は問題あったか？」
「……異常なし」
「そうか。ありがとな」

2人には、ムッツリーニを護衛として付けていた。
念のために、スタンガンを持たせたうえで。

「ワシも出来れば、手伝いたかったがのう。最近ワシは、足手まといにしかなっていないのじゃ」
「何言ってんだよ？　常夏コンビ戦じゃ、俺のお株を奪う活躍見せといて」
「お、今日は無事だったか2人とも」

奥から雄二が頭を掻きながら出て来た。
その様子から、特に心配はしていないご様子。

「あれ？　坂本ももう来てたの？」
「４人とも早いですね」
「朝一番でテストを受けてたからね。ふわぁ……」
「確かに、決勝が総合科目なのはきついな……」

決勝だからと、一番盛り上がる総合科目による対戦。
トーナメントで消費した点数を確保する為、４人は朝一番からテストを受けていた。

「もうっ、４人とも大丈夫なの？　ダレた試合すると、白けちゃうじゃない！」
「それもそうだな……じゃあ寝させてくれないか？　ここのところあまり寝てない上に、徹夜だったからもう眠くてさ……」
「そうだね……確かにこの状態じゃ、いくらなんでも集中力は持ちそうにないかも」

明久、雄二、光一、秀吉は全員が大あくびをした。
目がトロンと垂れ下がり、気を抜くと閉じてしまいそうな状態。

「そうだったんですか。それなら、ゆっくり休んでください」
「仕方ないわね。起きられそうになかったら、起こしてあげるけど？」
「ありがとう。それじゃ、１１時までに起きてこなかったら、起こして貰える？」
「１１時？　試合は１時からじゃなかったっけ？」
「１番込み合う昼時くらいは働くよ。俺たちだって、Ｆクラスの一員なんだから」

今からなら、３時間は寝れる計算になる。
秀吉や光一ならともかく、明久と雄二なら大丈夫なレベルである。

「んじゃ、明久達と一緒に俺も起こしてくれ。屋上で寝ているから。ほわぁ……」
「俺も出来れば頼む。今日は天気も良いし、昼寝にはもってこいな環境になりそうだ」
「うむっ、ワシももう限界じゃ。早く寝たいぞい」
「それなら、僕も屋上にいるからよろしくね」

と、明久と雄二、光一と秀吉は教室を後に。

「やっぱり、４人一緒に寝るんでしょうか？」
「間違いないわ。きっと坂本か久遠の腕枕で……もしかしたら、木下の膝枕なんて事も？」

去った後、不穏当な会話があったのだがそこは割愛しておく。

そして、時間は過ぎて……

「さてと、行こうか雄二」
「ああ……光一、秀吉。悪いが譲らんぞ？」
「望むところだ」
「うむっ。やるからには勝つだけじゃ」

４人は頷きあい、光一と明久、秀吉と雄二は拳をぶつける．

「島田、俺達は抜けるが大丈夫か？」
「大丈夫じゃなくても行かないとダメでしょうが。決勝戦なんだからね？」
「後で私達も応援に来ますね？　……吉井君の応援ですが」

「……どっちも頑張れ」

４人は苦笑しつつも頷いて、会場へと向かい歩きだした。

「ねえ、決勝戦を前に最後の妨害があるかと思ったけど、結局何もなかったね？」

「確かにな。俺達が決勝の舞台に上がれば、もう手の出し様がない筈」

「用心に越した事はないって所だな？」

目的のいくつかは達成されてはいたが、瑞希の父親が来る以上は最高の試合を見せる。

それが、４人にとって決勝戦の最高の目的。

「さて明久、お義父さんに良いところを見せてやれよ？」

「え！？　雄二、そんなんじゃないって！！」

「ははっ、じゃあ俺達は恋路の邪魔して馬に蹴られる側か？」

「やれやれ、悪役はつらいのう」

「こっ光一に秀吉まで……」

会場にたどり着くと、そこで４人の目を引いたのは観客の数。

そして今までにはなかった、係員である教師の出迎え。

「吉井君に坂本君、久遠君に木下君、入場が始まりますので急いでください」

「じゃあここで、一旦お別れだ」

「ああ。じゃあ、またあとでな？」

明久と雄二、光一と秀吉は別れ、それぞれ係員の教師に従いそれぞれの入場門へ

『さて皆様、長らくお待たせ致しました！　これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

アナウンスが会場に響き渡る。

明久と雄二、光一と秀吉はそれぞれの入場を待つ。

『出場選手の入場です！』

「さ、入場してください」

まずは明久と雄二が、係員の教師にポンと背中をたたかれ入場。

2人は頷きあって、観客の前に歩み出た。

『2年Fクラス所属・坂本雄二君と、同じく2年Fクラス所属・吉井明久君です。皆様、拍手でお迎えください！』

盛大な拍手が、2人を出迎えた。

『なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝に進んだのは、2年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！　これはFクラスが最下級であるという認識を、改める必要があるかもしれません！』

（あの司会、嬉しい事を言ってくれるな）

（だね。姫路さんのお父さんに、好印象になるね）

ここで2人を持ちあげておけば“試験召喚システムのおかげで、最下級の生徒もやる気を出して勉学に励んでいる”と言うPRにもなる。

学園的にも、この展開は望ましい事だろう。

『そして対する選手は、2年Fクラス所属・久遠光一君と、2年F

クラス所属・木下秀吉君です。皆様、こちらも拍手でお迎えください！』

明久達が定位置に着くと、次は光一達の入場。
拍手で出迎えられ、光一と秀吉が姿を現した。

『なんと、こちらも最高成績のＡクラスを抑え決勝に進んだのは、吉井明久君と坂本雄二君とのクラスメイトであるＦクラスの生徒コンビです！　決勝がＦクラス１色とは、これは流石に驚きを隠せません！』

こちらも、最下級の生徒が同様に決勝進出。
ＰＲとしてこれ以上ない条件でもあり、強調されていた。

『それでは、ルールを簡単に説明します。試験召喚獣とは……』

ルールの説明が入るが、４人ともすでに周知のことゆえ無視。

「わかっておったとは言え、雄二と明久が敵となるとはの」
「ああ。だが勝負は勝負だ、手加減はしない」
「望むところだ。誰がＦクラス最強かを決める、頂上決戦といこう」
「うん。負けないよ」

４人は頷きあい、表情を引き締める。

『それでは試合に入りましょう！　選手の皆さん、どうぞ！』
「では、始めてください！」

科目は総合科目で、立ち会いの教師は高橋女史。
２組の間に立つと同時に、４人は一斉に叫んだ。

「「「「サモン！」」」」

袴を纏い、長刀を持った秀吉の召喚獣。
毛皮のジャケットを纏い、ライフルと拳銃を持った光一の召喚獣。

改造制服を纏い、木刀を持った明久の召喚獣。
こちらも改造制服を纏い、メリケンサックを持った雄二の召喚獣。

『２－Ｆクラス　久遠光一＆木下秀吉　総合科目　１０５２点＆９１２点』
ＶＳ
『２－Ｆクラス　吉井明久＆坂本雄二　総合科目　１００２点＆１４９４点』

「へぇっ、明久も頑張ったんだな」
「うん。雄二が日本史を熱心に勉強してたから、便乗して一緒にやったんだよ。大半教えてもらったけど」
「こいつはこいつで、自主的にやってたみたいでな。正直、すごい集中力だったぞ？」

それを聞いて、光一は笑みを浮かべた。

「秀吉、明久を頼む。俺は雄二をつぶすから」
「承知！」

まずは光一と秀吉のペアが先制
秀吉の召喚獣が明久の召喚獣にとびかかり、光一の召喚獣が雄二の召喚獣に銃口を向ける。

「やあっ！」
「はっ！」

まず秀吉の召喚獣の長刀を、明久の召喚獣が木刀で横にないで、一閃。
そのまま頭をつかんで地面にたたきつける。

「くっ……」
「ごめん秀吉、でも勝負だから！」
「心配無用！　いつまでも光一に甘えてばかりおれんのじゃ！」

起き上りざまに一閃。
明久の召喚獣の胸に一筋の傷が入り、明久はフィードバックの痛みに胸を抑える。

「秀吉、よくやった！」
「よそ見してんじゃねえ！」
「おっと」

光一の召喚獣は、突進してくる雄二の召喚獣向けてライフルを構える。
脚を狙い打ち出された銃弾は、雄二のメリケンサックで弾かれるも、次は拳銃で連射。
連射には対応しきれず、雄二の召喚獣に次々と銃創が刻まれていく。

「近づけばこっちのモンだ！」
「甘いな。俺がただ遠距離から撃つだけだと思うか？」

雄二の召喚獣が繰り出すパンチを、光一の召喚獣がライフルで横から殴りつけそらす。

そして眉間に拳銃を押し付け……。

「はい、おしまい」

引き金が引かれ、雄二の召喚獣の脳天を撃ち抜いた。

「こっちもおわりだよ……そして、ここから始まりだ」

ふと光一が見ると、そこには秀吉の召喚獣を倒した明久の召喚獣。
光一の召喚獣は銃弾を補充し始め、明久の召喚獣も木刀を構える。

「行くぞ光一！　今こそ雌雄を決する時だ！！」
「さあ来い明久！　どっちがＦクラス最強かを決めるぞ！！」

『２－Ｆクラス　久遠光一　総合６９８点』
ＶＳ
『２－Ｆクラス　吉井明久　総合６３８点』

まず光一の召喚獣がライフルを構え、打ち出すも木刀ではじかれ明久の召喚獣が突進を始める。
そのまま拳銃で迎撃するも、観察処分者の高精度な動きは全てに対応し、全てを弾く。

「ちぃっ！」
「やあっ！」

木刀が光一の召喚獣に襲いかかり、それを回避。
それを狙うかのように、明久の召喚獣の足が光一の召喚獣の顔面にめり込む。
しかし、光一の拳銃の銃口が明久の召喚獣に向き、そこから撃ちだ

された銃弾が腹を撃ち抜く。

「ぐううっ！」

明久がフィードバックで顔を歪めるも、それでも後には退けない。
自信を相棒と呼び、信じてくれた親友が全力で立ち向かってくれる。
それに応えるには、自身も勝利へ齧り付かなければならない。

「まだまだあ！！」

その一念で明久の召喚獣が光一の召喚獣の腕をつかみ、そのままひねり上げライフルを落とさせる。
それを蹴飛ばして、そのまま明久の召喚獣を狙った拳銃を持つ腕を木刀で突き貫く。

「くっ！」

光一の召喚獣が明久の召喚獣を殴り飛ばし、そのまま腕を貫いていた木刀を投げ捨てる。

『２－Ｆ　久遠光一　総合科目９点』
ＶＳ
『２－Ｆ　吉井明久　総合科目１３点』

「行くぞ光一ぃっ！！」
「来い明久ぁっ！！」

２体はどちらともなく駆け出し、そのまま拳を振り上げて突進。
その拳は互いの召喚獣の顔面にめり込み、互いに吹っ飛んだ。

『２－Ｆ　吉井明久　総合科目１点』

『吉井・坂本ペアの勝利です！』

歓声が響き渡り、勝者のコールが告げられた

「いぃぃぃぃよぉおおおっしゃあああーー！！」

明久の全身は痛み、今なお吐き気が催してきてはいる。
だが今明久の中では、最高の気分が満ち溢れていた。

「負けちまった……すまないな、秀吉」
「良いのじゃ。光一はよくやってくれた……だから、ワシも何も言わんぞい」
「ははっ」

光一と秀吉は、２人に歩み寄って手を差し出した。
明久と雄二は、ニッと笑みを浮かべその手を握り締める。

「ご苦労だったね」
「バ……学園長」
「けど、思った以上に大接戦だったねえ。これじゃデモンストレーションが出来ないから、授賞式の準備が終わるまで１科目だけでもテストを受けてきな！」
「「「「なにぃっ（なんじゃと）！？」」」」

大勝負のシメとしては、あまりにもカッコがつかない物だった。

第二十三問（前書き）

ＰＶもユニークもうなぎ昇りの感激雨あられ、
気が付いたらＰＶ１６００００、ユニークは１５００００人突破と、
感謝感謝。
これで、出来れば感想とか足跡を残してくれると、作者が喜びます。

ここで、オリ設定の“黒金の腕輪”について。
出したのは単純に、アニメで秀吉も一旦腕輪を手に入れた事と、主人公に得意な能力を持たせたいと考えたが故です。
題目がコメディーなので、バカテスに見合うトラブルを引き起こすことも狙いの上で、オリ腕輪を設定しました。

では、これからもよろしくです。

第二十三問

文月新聞号外

優勝　吉井明久（２－Ｆ）＆坂本雄二（２－Ｆ）ペア
準優勝　久遠光一（２－Ｆ）＆木下秀吉（２－Ｆ）ペア

激戦を制し、見事栄冠に輝いたのは、吉井明久君と坂本雄二君のペア。
２人には“トロフィー”と“賞状”並びに“白金の腕輪”と“如月グランドパークプレミアムペアチケット”が授与されます。

惜しくも僅差で敗れ去った、久遠光一君と木下秀吉君のペア。
こちらには“盾”と“賞状”並びに“黒金の腕輪”と、こちらも“如月グランドパークプレミアムペアチケット”が授与されます。

今回から賞品として出された“白金の腕輪”と“黒金の腕輪”

白金の腕輪は、２体の召喚獣が召喚できる“同時召喚用”
並びに、教師の代わりに立会人になり、召喚フィールド形成ができる“召喚フィールド形成用”

黒金の腕輪は、自身の召喚獣を他の召喚獣と融合させる“召喚獣融合用”
並びに、召喚フィールド形成（教科指定不可）が出来る“召喚フィールド形成用”

以上の新技術のモニターとして、選ばれた訳です

授賞式が終わり、いよいよ新技術のデモンストレーション。
まず、雄二の腕に着けられた腕輪から。

「教科は、数学で良いだろ？」
「当然だ」

ちなみに、彼ら４人が受けたテストは数学である。
雄二の腕輪は科目指定ができ、その科目から点数を引いてフィールドが形成される。

「それじゃ行くぞ！　アウェイクン！」

とキーワードが放たれ、腕輪が軌道。
雄二を中心に、召喚フィールドが形成される。

「おおっ……じゃあ次は明久のだな？」
「了解。サモン！」

『吉井明久　数学６５点』

「行くよ、ダブル！」

と、キーワードに合わせて、もう一体の召喚獣“副獣”が姿を現す。

「へぇっ、本当に２体が現れたよ」
「けど、ちょっと操作難しいかな？」
「明久なら大丈夫さ」

雄二が腕輪を解除し、次に秀吉が前に。

「それじゃ、次は俺達だな。秀吉」
「うむっ。アウェイクン！」

たまたま数学に当たり、その点数が削られフィールドが形成される。
使用方法は同じだが、“黒金の腕輪”のフィールドは、教科がランダムになる。

「じゃあ次は俺だな……サモン！」

『久遠光一　数学１４３点』

「それじゃ融合相手だけど、やっぱあき……」

「アキと合体する気なの！？」

「まさか久遠君、それを狙って召喚大会に！？　ふっ不潔です、こんな大勢の前で！！」

「おのれ久遠光一！！！」

と、３人分の突きさす視線を感じ、中止に。

余談だが、明久の背に妙な寒気が襲ったとか……。

「なあ、ゆう……」

「……雄二と合体なんて、許さない」

次は、まるで呪い殺すかのような怨念が自身の背を覆い尽くす感覚に襲われ、中止に。

「……ひでよ……」

「奴め、木下と合体する気か！？」

「許せん！　今すぐ突撃し、生爪を剥いでくれる！！」

「待て！　動きを感知し次第、奴から腕輪を奪いとれ！！」

と、どこぞのバカクラスのほぼ全員の怨念をぶつけられ、中止に。

「……ってこの腕輪、ある意味ハズレじゃねーか！」

性質を考えれば、もっともな話である。

「どうしたんだい？　早くしな！」

と、うろたえている光一の気も知らず、学園長は急かす。
まあ新技術のデモンストレーションなのだから、早く見せたいと言う気もあるのだろう。

「はいはーい！　じゃあボクがその融合相手になっていいかな？」
「え？」

と、観客の中から立候補して来たのは、２－Ａ所属の工藤愛子。
ふと、腕輪の欠陥を思い出し躊躇するも……。

「かまやしないよ？　融合の主導権は腕輪の所有者にある訳だから、相手が高得点だろうと不具合はありゃしないさね」
「あっ、そうですか」

融合型の腕輪の場合、媒体の点数のみが関係している為、融合相手となる召喚獣の点は関係ない。

「それじゃ、よろしくね。サモン！」

『工藤愛子　数学３０１点』

セーラー服に、巨大な斧を持つ愛子の召喚獣の手を光一の召喚獣は握った。
融合の条件としては、相手の召喚者が同意である事と召喚獣同士が手を握る事。

「ユニゾン！」

愛子の召喚獣がとけるように光一の召喚獣に吸い込まれ、それと同

時に光一の召喚獣の服装が変わる。
ジャケットの下のシャツが消え、持っていた銃が巨大なバズーカへと変わった。

『久遠光一（＋工藤愛子）　数学１４３点＋３０１点』

「召喚獣自体の外見は、装備以外変わらないんですね？」
「ああ。基本、データを取り込んで自分のと融合させる訳だからね。後召喚獣の腕輪だけど、合計８００点じゃないと使えなくなるからそのつもりで」

流石にそう簡単に腕輪が使えるとなるとチートもいい所の為、そこまで甘くはないらしい。

「なんか光一の方が、使い勝手よさそうだな……手に入れたらあの世に近くなる気がするから、遠慮したいけど」
「全くだ。けど、光一の弱点の“教科によって最強にも最弱にもなる”が克服できるじゃないか」
「そうだね」

こうして、デモンストレーションは無事終了した。

「お兄ちゃん！　すっっっごい格好よかったよ！」
「ぐふっ！　は、葉月ちゃん……今日も来てくれたんだ。ありがとう」

終わった帰り、すぐに葉月が明久に抱きついて腹に顔を埋める。
というか、鳩尾に直撃していた。

「4人とも、お疲れ様。特に最後の久遠とアキの一騎打ちは、すごかったわね」
「やっぱり光一は親友で相棒だから、最後まで全力を尽くすのが礼儀だって思ったからね」
「お兄ちゃん、すごいです～っ！」
「葉月ってば、アキが困ってるわよ？」

これ以上鳩尾を圧迫されるときつい為、明久はやんわりと葉月を引き離した。

「あの、吉井君！」
「あ、姫路さん。僕の活躍、見てくれた？」
「はいっ！　とっても素敵でした！　今度土屋君に、ビデオをコピーして貰おうと思う位！」
「……（プイっ）」

瑞希の眼がきらきらと輝き、もう興奮していた。
それと光一がムッツリーニに目を向けると、本人は目をそらす。

「そ、それで、ですね……」
「ん？　ああ、なにかな？」

明久と話している瑞希が、体の前で指をもじもじとしている。

「後夜祭の時、お話があるので駐輪場まで来てください！」

まるで唐辛子の様に顔を赤くしてそう告げると、ダッシュでウエイトレス業務へと戻った。

「なんだ、告白の前振りか？」
「光一、バカでブサイクで甲斐性なしの明久に、そんなことある訳ないだろう」
「なんだとこのゴリラ面が！！」
「話し込んでいるところ悪いのじゃが、喫茶店を手伝うぞ？　ワシ等の優勝と準優勝のおかげで、客が増えて大変そうじゃ」

喫茶店は確かに大盛況であり、中ではＦクラスの面々が忙しそうに右往左往。
秀吉も先程の間にチャイナドレスに着替えており、裾をきわどく翻しながら駆けて行った。

「よし、行くか？」
「やれやれ、面倒臭いな」
「文句言うなよ。代表閣下」

メイン３人は、それぞれの業務を果たすべく、喫茶店へと駈けて行った。

『ただ今の時刻をもって、清涼祭の一般公開は終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「ふぅっ……」
「お、おわった……」
「大変だったけど、楽しかったな……」
「うむっ、じゃが流石に疲れたのう……」
「……（コクコク）」

放送を聞き、体から力が抜けて行った5人。
メイン格の4人は、特に注目も浴びた為疲れも一際である。

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろ？」
「ん？　お義父さんが気になるのか？」
「なっ！？　べ、別にそう言う訳じゃなくて！」
「後夜祭の後で、話をしに行くと言っておったのう。結論はその時じゃな」

優勝者と準優勝者を出し、観客全てをわかせる接戦を繰り広げた事もあり、喫茶店は大繁盛。
だから大丈夫だろうと思った全員だった。

「じゃ、ウチらは着替えて来るわ」

女性陣が更衣室へ向かおうとした。

「えぇっ、どうして！？」
「どうして、ッて言われても……恥ずかしいからに決まってるでしょ？」
「すいません。すぐ戻りますので」

2人は着替えのため、去って行った。
ちなみに葉月はそのままで帰って行った。

「ふむっ、ならばワシも……」
「させるかっ！　せめて秀吉だけは着替えさせない！」
「……（フルフル）」

2人は秀吉の足にタックルをしていた。

「おいおい、遊んでないで学園長室に行くぞ？」
「学園長室じゃと？　もしや、例のあれの清算かの？」
「ああ。喫茶店が忙しくて行けなかったからな、遅くなったが今から行こうと思う」

そう言った雄二に、光一と秀吉、明久は伴う。
それとムッツリーニも、同伴した。

「やれやれ、ワシのこんな姿を見ても、何の足しにもならんじゃろうに……」
「優子よりげふげふっ！　……そこらの女子より、色気があるからじゃないのか？」
「まあ聞かなかった事にしておくが、そういうものかのう？」

そして、学園長室にて。

「失礼しまーす」
「邪魔するぞ」
「いるかババア？」

ノックとあいさつをして、学園長室の扉を開く。

「お主らは……」
「アタシは前に、返事を待つように言った筈だがねえ？」
「あ、学園長。優勝と準優勝の報告に来ました」
「言われなくても分かっているよ。アンタ達に賞状を渡したのは誰だと思ってるんだい？」

お互いさまとは言え、遠慮のない発言である。

「さて、これで問題は解決したな？」

「ああ。感謝するよ、おかげでデモンストレーションも無事終わったからね」

来賓も満足していたと、嬉しそうに言う学園長。

「それで、腕輪は返却した方が良いですか？」

「いや、それは後で良いさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」

「しかし、これからテストが受けづらくなるのう。もし高得点を取って暴走を引き起こしたりなどしたら、それこそおっかないわい」

明久と秀吉が、腕輪を見ながら学園長と話ている。

その傍らで、雄二が疑問符を浮かべている。

「ん？　どうした雄二」

「そう言えば、どうしてあいつら俺達がババァと繋がっている事を知っていたんだ？」

「え？　……そうだ！　何であいつら……まさか！？」

「それじゃ学園長。これをゲットするっていう取引は成立しましたので、教室の改修をお願い……」

「待て明久！　その話はまずい！」

「え？」

光一と雄二は、それぞれ窓とドアに向け駆け出す。

「……盗聴の気配」

「やられたか！」

ドアを開け放った雄二が、逃げていく例の常夏コンビを発見。

「あいつら……追うぞ明久、光一！」

「ちょっ……どういう事！？」

「常夏コンビが、学園長室を盗聴してやがったんだ！」

「なんだって！？」

先程の会話を聞かれ、それを録音されていたら……それこそ、文月学園は終わり。

その為、ムッツリーニと秀吉、光一と明久と雄二の２組に分かれ、捜索に走る。

「それじゃまずは放送室を抑えるぞ！」

「了解！」

～放送室～

「邪魔するぞ！」

「なっ、何だおまえらは！？」

「ダメだ！　ここにいるのはタバコ吸ってるバカだけだし、置いてあるのは密かに学園祭で取引されてたアダルトＤＶＤくらいだ！」

「よし、とりあえずタバコとＤＶＤを押収して、先を急ぐぞ！」

「そうだね！　校則違反だもんね！」

「ど、どろぼう！　泥棒！！」

「ハチの巣になりたいか？」

「どうぞ持ってってください！」

～廊下～

「あれ？　アキに坂本、それに久遠？　そんなに急いでどうしたのよ？」

「ねえ光一、話が……」

「ごめん美波、木下さん、ちょっと急ぐんでまたあとで！」

「あ、待って！　何か落としたわよ？　えーっと、『女子高生緊縛物語』……何コレ？」

「逃げよう光一、雄二！　何だか美波と木下さんを中心に、闘気の渦が見えるんだ！」

「いや、違う！　あれは殺意だ、全力で逃げるぞ！！」

「待ちなさい！　アンタ達何でこんなものを持っているのよ！！」

「話を聞かせなさい、光一！！」

「「うわぁっ！　追って来たぁ！！」」

～２－Ａ教室～

「あっ、久遠君。もしかしてボクに会いに来てくれたのかな？」

「そうだと言いたいけど。ごめん、先急ぐから」

「そうなの？　残念だなあ、折角久遠君とさっきの召喚獣の様になってみたいって思ったのに」

「え！？　そっそれって……」

「雄二、光一、ここにはいないから先を急ごう！」

「待て明久、こっちはこっちで大変な事になっているんだ！」

「そうだぜ！　今はそれよりもだな？」

「何言ってるのさ！　それじゃまたね、霧島さんに工藤さん！」

「「待て！　頼むから待ってくれ！！」」

校舎を探しても見つからず、光一、明久、雄二の3人は主に人目のつきにくい所へ。

「マズいな……随分と時間をロスした」
「そうだね。あいつら一体どこに……ん？」
「何かあったのか？　ってこれって？」

そこにあったのは、良くテレビに出てきそうな布に包まれた玉。
俗に言う、打ち上げ花火である。

「なんだ、ただの打ち上げ花火じゃないか」
「あれ？　打ち上げのための大砲みたいなのがないけど？」
「おいおい、花火も火薬の塊なんだから、手違いで爆発なんてしゃれにもならないぜ？」
「流石試験校、お金があるね。こんなに大きな打ち上げ花火を用意しているなんて」

大きさから、2尺位ある。

「感心してる場合か！？　そろそろ向こうも何か動きだす筈だと……」

Ｐｒｒｒｒｒ！

「もしもし？　……っ！　新校舎の屋上！」

光一が双眼鏡と取り出し、新校舎の屋上を見始める。

「やべぇ！　あいつら、屋上の放送設備を準備してやがる！！」
「なんだって！？」

現地点から屋上までは、流石に明久たちどころか鉄人でも不可能。

「明久、秀吉達は？」
「部室連だって！　そこからじゃ５分はかかるよ！？」
「……だったら！」

光一が腕輪をつけた腕を２人に突きつける。
そして、視線を二尺玉に向けてにやりと笑みを浮かべる。

「そうだな。やっぱりお前も考えたか？」
「だよね。他に方法はないよね？」
「よし、雄二。頼む！」
「ああ……アウェイクン！」
「「サモン！」そして、ユニゾン！」

一方、屋上にて。

「夏川、そっちの準備は大丈夫か？」
「大丈夫だ。へへっ、これが流れりゃ俺達の逆転勝利だな」
「そうだな。これで受験勉強なんかしなくても……おぉぉぉっ！！？」
「なんだよ常村、何をそんなに驚いて……ゲぇッ！？　ウソだろぉっ！？」

「とにかく伏せろぉぉっ！！」

ドォーーーン！！　パラパラ……

「よし、スピーカー命中を確認！」

「流石は光一！　遠距離射撃は一日の長があるね？」

「続けていくぞ！」

双眼鏡を覗きつつ、明久と雄二が２尺玉を運びライターを導火線に近づける。

『Ｆクラス　久遠光一（十吉井明久）　数学１４３点＋６５点』

そしてその２尺玉を、明久の召喚獣と融合し物質干渉能力を手に入れた光一の召喚獣が担ぎあげる。

没収品のライターで火を付け、そのまま……

「発射！」

召喚獣の投擲により、目標物へ。

それは放送器具に直撃し、向こうの無力化を確認。

「よし、これで向こうは何もできなくなったはずだ！」

「そっか！　それじゃ、いい加減ここにいるのも危ないし……」

「そうだな。常夏コンビに一発ブチ込んだら逃げるか？」

悪をやっつけるなら徹底的に。

光一は２人が用意した玉を、召喚獣に担がせる。

「えーっと、少し動きまわってやがるな……よし、それじゃとどめ

の一撃！」
「貴様等ァッ！　何をやっているかァッ！」」
「うわあっ！」」

その声は、自身達の天敵、鉄人のドスの利いた怒鳴り声。
それにより光一は制御を誤り……

ドォーーーンッ！！！

「こ、光一！　学校にぶち当たったぞ！？」
「ああっ！　校舎がゴミの様だっ！？」
「しっ、しまった！　俺とした事が！？」

砲弾は見事なまでに校舎の一角に命中し、もはや部屋の主壁も見当たらない。

「き、君たち！　よりにも寄って、教頭室になんて事をしてくれたんだ！！」
「教頭室！？　……ある意味ラッキーか」
「吉井に久遠、坂本ぉっ！　貴様ら、無事に帰る事が出来ると思うなよ！！」

3人にとってお馴染みの怒鳴り声。
それを聞くなり、3人は散り散りに逃げだした。

「逃がすか！　今日は絶対に帰らせん！！」
「違うんですよ先生！　僕等は学園の存続のために！」
「存続だと！？　バカを言え！　たった今お前らが破壊したばかりだろうが！！」
「これには事情があるんですよ！　だからせめて話くらい聞いてく

ださい！！」

鉄人が大声を出すからなのだが、射撃や投擲で他の所為にすることなど光一のプライドが許さない。
なので、結局は逃げ回るしか手はなかった。

「恩に着るぞ明久、光一！　鉄人を引きつけてくれるとは！」
「なっ！　テメ雄二！　こうなったら……誰か助けて！　変態教師が襲ってくる！！」
「ひいいいっ！　服をはがしてどこかに連れ込もうとしてくる！！」
「貴様らはよりにもよって、何という悲鳴を上げるんだ！！」

こうして彼らの学園祭最後の夜は、恐怖と耐久マラソンで飾られる事に。
そして彼らは学園中にその悪名を轟かせ、畏怖と軽蔑を持って挙げられる名となった。

第二十四問　（学園祭編　エピローグ）（前書き）

今回はバカテストはお休みです

第二十四問　（学園祭編　エピローグ）

「痛てて……随分と殴られたよ……」
「くそっ、鉄人め。あの野郎は手加減を知らないのか？」
「やった事が事とはいえ、流石にこれはきつ過ぎだっつーの。あの鉄鬼が」
「斬新なニューネームだな」

結局逃げきれず、捕まってしまった3人。
本当なら停学か最悪退学の筈だが、処分は厳重注意という拍子抜けするような内容。
ただし、相手が相手だけに、3人の顔の面積が倍になっていた。

「ババァが手をまわしてくれたんだろうな」
「今回の処分の事？　そうだろうね。そうじゃなければ、こんな軽い処分な訳ないもんね」
「まあババァに借りを作れたし、お互い助かった訳だからまあ良しとするか？　まあ感謝する気なんてないけど」
「そうだよね。学園長が僕らを助けてくれるのは、ギブアンドテイクって奴だよね」

早めに解放されたのにも、命中先が教頭室というのもある。
その修繕という理由でがさ入れが始まっており、学園長は現在も徹底的に教頭を調べ上げている。
教頭の尻尾をつかむのは、もはや時間の問題だった。

「とにかく、問題は全部解決だね」
「そうだな」
「さて、打ち上げに早く混ざろう。最後位、級友と楽しく過ごす記

憶が欲しい」

と、打ち上げが行われている公園へと急ぐ3人。

「む。やっと来たようじゃな？　遅かったのう」

「……先にはじめておいた」

「ああ、ごめんごめん、ちょっと鉄人がしつこくてさ」

Fクラスの面々で、お菓子やジュースを持ちこんでの打ち上げ。

店でのそれと違い金はかからないが、これはこれで楽しい物。

「お主ら、もはや学園中で知らぬ者はおらん程の有名人になってしまったのう」

「……（コクコク）」

「……こんな危険人物どもと同じ扱いだとは、不本意だ」

「それは僕達の台詞だよ……」

「明久に同じだ。こんなゴリラと同類なんて」

お互い、五十歩百歩だった。

「あれだけの事をやっておいて、退学どころか停学にすらならないんだもの。妙な噂が流れて当然でしょ？　ウチだって気になるし」

と、話に割り込んできた美波が、明久と光一にジュースの入った紙コップを手渡す。

「ん、ありがと」

「ああ、サンキュ。それで、店の売り上げはどうだった？」

「そうね。すごいって程じゃなかったけど、たった2日間の稼ぎとしては、結構な額になったんじゃないかしら？」

「ふむ、どれどれ……？」

美波が収支の書かれたノートを取り出し、雄二がそれを覗き込む。
それを見て、少々顔をしかめる。

「この額だと、机といすは苦しいな。畳と卓袱台がせいぜいだ」
「やっぱりな……あの常夏コンビ共さえいなけりゃ、もう少しましだったかもしれないけど」
「確かに、それが痛いよね……ところで、姫路さんは？」

周りのバカ騒ぎの中に、瑞希の姿はいない。
彼女が転校する可能性もまだ否定しきれない以上、早く確かめたいと言うのが明久の考えだった。

「大丈夫だろ。俺達の４人の決勝の事があるし、多少だけど設備と環境の改善も行われるんだ」
「そうだぞ明久、お前はただドーンと構えてればそれで良いんだ」
「すいません。遅くなりました～！」

雄二と光一のフォロー直後に、瑞希の到着。
その嬉しそうな様子からみて、結果はわかりきっていた。

「あ、瑞樹。どうだった？」
「はいっ！　お父さんも分かってくれました！　美波ちゃんの協力のおかげです！」

その言葉を聞いて、ホッと一息つく明久。

「ほらな？」

と言って、光一は明久の背を叩いて行くように促す。

「さてと……」

そこから離れると、くいっとオレンジジュースを飲み干し、紙コップを放り投げそれをエアガンで狙う。

撃ち出された弾丸に弾かれ、その紙コップはクズ籠へ。

ちなみに弾丸は、足元に転がったので拾っている。

「見事なもんじゃのう」

「なんだ、秀吉か」

近くのベンチで、2人で並んで座る。

「色々あったの、義兄上」

「やめろよその呼び方。大体その呼び方したの知られると、また優子にダルマにされるぞ？」

「そうじゃったの」

以前秀吉は、ふざけて光一を義兄扱いした事で、優子に折檻された事があった。

折檻と言っても、内容は拷問と言える代物である

「仕方ないさ。方や品行方正の優等生、方や素行不良の問題児。考えてみりゃ釣り合い取れないし、俺じゃ優子の評判に傷つけるだけだしな」

「辛くないのかの？」

「……辛いよ。けど、清水さんだっけ？　ああはなりたくないし」

ふと秀吉の脳裏に、以前映画を見に行った時の、文房具を武器に襲

いかかった少女の姿が。
あれを光一と入れ替えて考えると……

「だからすっぱり諦めて、俺は俺で別の良い人探す事にする」
「……応援するぞい」

秀吉の心からの発言だった。

「で、秀吉はどうなんだ？」
「ワシは、特にはの。今は演劇が楽しいから、特に欲しいという感情はないぞい」
「そうか……昔から優子より“男に”モテてたけど」

そう言って大笑いする光一を、秀吉がむっと言う顔で掴みかかる。

「そんな大笑いするでない！」
「ああっ、悪い悪い……でも小学校の同級生とか、大抵優子じゃなくて秀吉に告白してた時は……ぷっ……あーっはっはっはっは！」
「だから、笑うでない！」

「……何やってんだお前ら？」

雄二の突っ込みに、２人はキョトンとした。
現在の体制は秀吉は光一の口をふさごうと、詰め寄っているような状態。
ぶっちゃけ、秀吉が光一を押し倒そうとしているような体勢だった。

「そうか……木下優子の事が忘れられないからと、瓜二つの秀吉と……」
「ちょっと待て！！　お前何トチ狂った事を……」

「いや、何も言わなくて良い」
雄二の口元は、当然笑っていた。
「そうそう、あの時はからかったりして悪かった……心から謝罪しよう」
「やめろ気色悪い！」
パシャパシャパシャ！
そこに、シャッターを切る音。
「ってムッツリーニ、いつの間に！？」
「やめるのじゃ、そのカメラを渡すのじゃ！！」
というや否や、ムッツリーニは逃げだした。
秀吉も現体制を続ける事をまずいと思ったのか、離れる。
「ねえ久遠。幾ら外見は似てるからといっても、よりによって……」
「だから違うって言ってるだろ！　それに俺は外見で優子を好きになった訳じゃない！！」
「こっ光一……」
「お前、勇者だな？」
自身の発言に気付くや否や、光一は顔を真っ赤にして口を塞いだ。
「……いい加減にしてくれ。島田のおっかけの清水だっけ？　ああはなりたくないんだ」
「あー……ごめん」

美波が申し訳がなさそうに、光一に謝った。
被害者として、あれに影響されるなど流石に申し訳がない。

「全く……」
「ワシも光一ならば、良いと思っておったのじゃがな？」
「「「え！？」」」

全員が耳を疑った。

「当然、義兄としてじゃ！」
「ビックリさせるな！」

光一にそっちの趣味はありません。

「はぁっ……なんか疲れた」
「災難だったな」
「そう思うんなら煽るな！　ったく、霧島にこれ渡すぞ？」

そう言って、懐から取り出したのは“プレミアムチケット”
優勝者と準優勝者に与えられ、現在持っているのは明久と光一。

「ひっ卑怯な……だが、ここで奪えば！」
「お前が持ってると色々危ないんじゃないか？　それに破り捨てたりしたら、霧島にチクればいいし」
「すまなかった！　どうか許してくれ！！」
「……それはどういう意味？」
「しょっ、翔子！？　ちっ違う、ちょっと待てぇえええええぇぇぇぁあああああああっ！！」

そのまま、翔子にアイアンクローをかけられながら、引っ張られて

いく雄二。
光一の手に握られているプレミアムチケットを見て、目の色を変えた美波が光一に詰め寄る。

「それで久遠、それどうするの？」
「しばらくとっとく。で、大体の処でめぼしい奴に売るつもり」
「……ウチは言い値で買うけど？」
「……その時にという事で」

行きたい相手は居るのだが、むなしい希望だと思いつつも光一はチケットを見つめる。
ゆっくりと立ちあがって美波の肩を、ポンポンと叩く。

「ま、頑張れよ。せいぜい明久を壊さん程度にな」
「なっ！　何言ってるのよ!?　……それと、気易く障らないでくれる？」
「ごめん。あっ、明久の奴随分と羨ましい……あっ、しまった」

視界の中に入った、瑞希にしなだれかかられてる明久の姿をみて、ポツリと呟いた事を後悔。
ゆっくりと首を横に向けると、そこには殺意を纏った美波の姿が。

「……ちょっと行ってくるわね？」

と、駆け出す美波と、そのすぐ後に聞こえる明久の断末魔。
光一はその離れたところで、合掌。

「ま、明久が姫路か島田でも誘えば、万事解決だな。俺のこのチケットは、霧島に譲渡でもしよう」
「……お主はどうするつもりじゃ？」

「優子の事が吹っ切れるまでの間は、しばらく今の生活を楽しませてもらう事にするつもりだ」
「やれやれ……不器用じゃのう」
ちらりとある地点を向けた秀吉は、呆れたようにつぶやいた。

一方

「へぇ～っ、優子ってば愛されてるね～」
「やっやめてよ……だって、その……」
「でも良いの？　優子がそう言うんなら、ボクがもらっちゃうよ？」
「……やっやめときなさいよ。あんな犯罪者臭いのとくっついたら、愛子も変な目で見られるわよ？」
「……優子さ、照れ隠しも良いけど、それじゃ完全に嫌いと思われても文句言えないよ？」

翔子の付き添いで来た2人は、幸いにも光一の居る地点から死角となっていた。

第二十五問　（オリ話）（前書き）

お気に入り登録者数１００人達成！

いや、自分の作品がこんな好評をもらえるなんて嬉しいです。

本当に、心からありがとうございます。

今回はオリジナル腕輪、融合型をメインにしたコメディー（のつもり）です。

楽しんでいただけたらと思います。

第二十五問　（オリ話）

問題
女性のバストのサイズを表す単位に“カップ”があります。基準となるＡカップの大きさを説明しなさい

吉井明久の答え
『島田美波』

久遠光一の答え
『木下優子』

教師のコメント
コメントは控えます

「成程。それで久遠は全身の関節を外された上に変な方向に曲げられた状態で、吉井は久遠の上で顔を陥没させた状態で、２人して気絶している訳か？　全く、久遠はそれだから木下優子にフラれるのではないか？」

「先生、そういわんでやってくれんかの？　フラれた後、しばらく壊れた状態で痛々しかったのじゃ」
「やれやれ、意外とデリケートな奴だな」

ある日のＨＲだった。

そして、昼時

「あー……酷い目に遭ったよ」
「全くだ。まさか全身の関節を外されたまま放置なんて」
「自業自得だろうが」

7人で、昼時の温かな屋上にて昼食。
光一はカロリーメイトを、明久がパンの耳を齧りながら、今だ痛む個所を摩る。

「最近明久の食生活は、随分と改善されておるのう？　水と塩よりは人間らしい食生活じゃな」
「光一に助けて貰ってばかりっていうのも、悪いからね」
「やれやれ。説教より相棒の情が、明久にとっては薬みたいだな？」

からかうように言う雄二の口調に、過剰反応をしたのは2人。

「やっぱりこの2人って……」
「まっ負けられません……」
「姫路、島田、いきなりなんだよ？」

不本意も良い所な見られ方をされてる気がして、光一はツッコむ。
が、2人の恋する乙女は気にもしない。

「ねえアキ、明日だけどウチがお弁当作ってあげようか？」
「え？　美波が……？」
「明久君、でしたら私も作ってきます！」

当事者の明久は当然ながら、光一達も背に絶対零度を思わせる悪寒が走った。

「ひっ姫路さんも！？　そっそんな、良いよ！」
「けど、パンの耳やカロリーメイトばかりも良くないでしょ？」
「そうです！　頑張りますから、食生活と栄養面は安心してください明久君！」

出来ねえ！
……それが、男子生徒＋秀吉の心の叫びだった。

余談だが、後夜祭以来瑞樹は明久を名前で呼ぶようになっていた。
本人いわく、負けていられない。

食べ終わって、一息。
一行は光一のエアガンで、的当てゲームを楽しみ始める。

「あれ？　……意外と難しいわね」
「そうですね。久遠君みたいにはいかないです」

可憐な少女と銃、そんなミスマッチをムッツリーニは撮影。

「それで明久、雄二、秀吉、腕輪は持って来てるか？」
「え？　うん、この通り」

右腕を差し出して、白金の腕輪を見せる。
光一も自身の黒金の腕輪を同様にし、雄二と秀吉もそれに続く。

「次の試召戦争で、これは大いに役に立つぞ？」
「わかっている。光一の短所を補え、明久の長所を生かせる能力だから、正直ありがたい」

明久は観察処分者の利点として、召喚獣の操作技術においては学年トップクラス。
だから同時召喚はそれを活かすにもってこいの能力。

方や光一は、教科によっては最強にも最弱にもなる。
だからこそ、他者の召喚獣と融合する事で点数を上乗せできる能力は、十分それを補える。

「問題が大き過ぎるのが難点だがな……」
「あー……そうだよね」

他者の召喚獣と融合する。
それはある意味、性的な考えがどうも一般とズレている文月学園にとっては火種である。

「女子のと融合させるにしろ、男子のと融合させるにしろ、どうも変な問題ばかりが起きそうだね？」
「デモンストレーションの時とか、偉く視線が突き刺さった」

主に3人の女子と、その他1名が殺意を向けていた事を光一は思い出した。

「それって霧島さんじゃないの？　まあ恋人が召喚獣とはいえ、男

と融合なんて嫌がるだろうね」
「おい明久、今聞き捨てならんセリフが聞こえたぞ？」
「……吉井はよくわかっている」

と、そこにいつの間にか来ていた翔子が、雄二の傍で明久の台詞で嬉しそうにしていた。

「心配しなくても、召喚獣とはいえ雄二と融合なんかやりたくない」
「俺だって嫌だボケ！」

互いに胸ぐらをつかみあい、にらみ合い始める。
翔子は光一の腕輪を見て、まるで獲物を見る様な眼で見始めた。

「確かに、ある意味使い勝手が悪いわね」
「そうですね。男性にしろ女性にしろ、問題ありそうですから」
「でも……特別な関係だったら……よね」
「でも……私が吉井君と……」

2人の脳内には、自身の召喚獣と明久の召喚獣が融合する姿。
デモンストレーションでは、召喚獣の見た目自体は光一のそれその物だったが……

「ねえ久遠、その腕輪貸してくれない！？」
「わっ私にもお願いします！」
「え？　ちょっ、なんだよいきなり！？」
「……お願い」

急に3人の女子に迫られ、動揺する光一。
雄二は同情しつつも、貸したら殺すと言う視線を光一に向けている。

「霧島さんは、雄二が居るけど……姫路さんと美波は、誰だろ？」
「明久よ、どうしてお主はそうも鈍感なのじゃ？」
「どういう事？　その言い方だと、姫路さんと美波が揃って僕の召喚獣と融合したがってるような言い方だけど？」
秀吉は、思いきり呆れたように溜息をついた。
「ちょっ、ちょっと待てって！　これは……」
「いーえ、美春が頂きます！」
そこへドアを大きな音を立てて開けたのは、“自称　美波の恋人”事、清水美春。
「召喚獣とはいえ、お姉さまとの融合は美春の物です！　そこのブタ野郎、その腕輪渡しなさい！！」
「それが物を頼む態度かよ？　そもそもこれは……」
「ごちゃごちゃ言ってないで渡しなさい！」
両手に刃物を構え、光一に襲いかかる美春。
光一は呆れるように額を抑え、美春から距離を取り突撃。
その後、スタンガンをすれ違いざまに喰らわせ、行動不能に。
「話を聞け！　この腕輪は俺以外が起動する事は出来ないんだよ」
「え？　どういう事ですか？」
「良くわからんが、召喚獣に直接影響を与えるシステム故に、パーソナルデータの登録が必要なんだと」
「あっ、そっか。じゃあそれに登録されてるのは久遠のデータだから……」

それを聞いて、３人はハァッとため息。

「……雄二と融合、したかった」

「それに関しては本当に悪かった」

「待て光一、お前は俺を一体何だと……」

それ以上をしゃべる事が出来ず、雄二はアイアンクローの餌食となる。

「じゃが、色々と面白そうではあるのう。融合により光一の召喚獣は装備を変える様じゃし、ワシ等が融合した場合がどうなるか、見てみたくなったの」

「じゃあ試してみるか？　霧島、腕輪を起動させたいから、一旦離してやってくれないか？」

「ん……」

アイアンクローから解放された雄二は、そのまま腕輪を起動。

雄二の腕輪を中心に、屋上に召喚フィールドが展開される。

ちなみに科目指定は適当に保健体育。

「よし、それじゃ……サモン！」

『久遠光一　保健体育１０３点』

「あれ？　この前より大幅に下がってない？」

「この前はたまたまヤマが当たっただけだ。通常だとこんなもんだよ」

「で、誰とやるの？」

ムッツリーニは興味なさそうにそっぽを向いた。
召喚獣とはいえ、男と融合するのは嫌なのだろう。

「考えてみれば、融合って男とやりたくないな……」

もっともな話である。

「ワシは構わんぞい？　融合して光一の召喚獣の装備がどうなるか、興味があるしの」
「秀吉……まあ、光一なら仕方ないよね」
「明久よ、何故恋に破れた顔になっておるのじゃ？」

秀吉は呆れつつ、召喚獣を召喚。
そして条件を満たし、光一がキーワードを。

融合した召喚獣は、ジャケットを道着の様なコーディネイトとなり、右手のライフルが拳銃に変化。

「さしずめ、小回りと連射性強化ってところか？」
「ふむっ。この前の工藤との融合はパワー重視という印象じゃったから、ワシの場合は技巧重視と言ったところじゃな」
「何だか面白そう。ねえ光一、次は僕の召喚獣とやってみようよ」

この前の時は、ろくに装備を見る事なく終わった為、明久自身も興味があった。
それに2度目ともなれば、さして抵抗する理由もない。

「ウチにはアキの本心がわからない！！」
「不潔です！！　そう言う事は、もっと大人になってからです！！」

と、それを聞いた2人の恋する乙女が、悲しそうに抗議を上げた。
それに対し、当人は思いっきり疑問符を頭に浮かべまくる。

「不潔って、融合するのは召喚獣なんだよ？　それにそもそも何で美波や姫路さんが怒るの！？」
「やれやれ、随分とあからさまな意思表示だな」
「ねえアキ、アンタやっぱり久遠の事が！？」
「ちょっと待って！　“やっぱり”って言葉が引っかかる！！　雄二も余計な事言わないでよ！！」

美波は今だ“バカと銃神とバラの世界”の事が頭から離れていなかった。
それがなくても、同性愛が似合いそうな男子生徒ランキングで上位にランクインしてるのもあるが。

「吉井君、幾ら久遠君と親しいとはいえ、男の子なんですから女の子に興味を持った方が……」
「明久だって、それが出来れば苦労はしないさ」
「とか何とか言って、実はその方が都合が良いとか言うんじゃないだろうな、雄二？」

ある地点から黒いオーラが噴き出した。
その元凶は、ゆっくりと雄二の肩に手をのせる。

「……雄二、浮気は許さない」
「ちょっ、待て翔子！」
「霧島、しっかりと教育してやってくれ。明久を引きずりこむ前にな」
「わかった」
「テメ、光一！　まっ待て翔子、誤解だ！！」

処刑を見て見ぬふりをして、気を取り直す光一と明久。

「……だからさ、俺が優子にフラれた事知っててそんな事言うのか？　そんなに俺の古傷えぐるのが楽しいか？　なあ、俺は優子に冗談か何かで告白してフラれたとでも思ってるのか！？」

「あっ……ごっごめんなさい」

「……本当に、御免」

流石に、以前公表された時膝をついたり、試召戦争時に石化した姿を見ているだけあって、流石に2人していたたまれない気持ちとなった。

「そう言えば、明久と融合した時は、フィードバックはやはりあるのかの？」

「んー……そういう意味でも、確かに気になるわね？」

「じゃあ試してみよう」

「そうだね。サモン！」

改造制服に木刀、という格好の明久の召喚獣が姿を現す。

そして光一の召喚獣の腕を握り、同意の意を示す。

「ユニゾン！」

光一の召喚獣に吸い込まれるように消えていく、明久の召喚獣。

『久遠光一（＋吉井明久）　保健体育１０３点＋６３点』

纏う服は変わらず、両手に小手が追加された程度。

ただし手にした両手の銃は、銃のグリップの剣……つまり

「ガ〇ブレード？　……とはちょっと違うかな？　剣に合わせての銃身はあるみたいだし」
「成程、ゲーム好きの明久との融合は、ゲームの影響を受けたか」
近距離、遠距離、両方に対応ができる武器という感じ。
それを2刀流という姿。

「へえっ、何だかかっこよくなったじゃない」
と、美波がぐりぐりと頬を突っつき始める。

「ちょっ、いてて……」
「むっ！　フィードバックは、光一の方に行っておる様じゃな」
「みたいだね。僕は何ともないから」

それから近くの物を持ちあげて、物質干渉能力も確認。
というより、とうに確認はしてある。

「でも、今までと比べると一体感があるな」
「まあ、感覚の共有がある訳だし、ある程度はね」
「ある意味利点だな」

余談だが、光一も観察処分者の候補に挙げられている。

「それで、腕輪はどうなるのじゃ？　確か８００点以上にならんと使えんという話であろう？」
「合計で８００点って言うと、姫路さん位じゃない？」
「Ｆクラスでやろうと思ったら、必然的にそうなるな。けどやめとこう、俺がやっていい事じゃないし」

「まあ、そうだよね。光一なら大丈夫だろうけど、流石にね」

明久と明久は苦笑いをして、召喚獣を納めた。

「（それに、姫路には融合したい相手は他にいるだろうし、な？）」

「（え？　……あっ、そっか。姫路さんの好きな人！　じゃあ、光一じゃないの？）

「（俺だと思ってくれたのはうれしいけど、残念ながらハズレだ）」

と、アイコンタクトをした所で、昼休みのチャイムが。

次の日。

「吉井君、どうぞ」

「ほっほら、アキ……あまりもので良かったら、上げるけど？」

「……」

「しっかりするのじゃ光一！」

「くそっ、心臓マッサージ急げ！」

「……美味い（美波の弁当）

いつもの7人ー（死体＋半死人）

という光景が、屋上にあった。

第二十六問　（如月グランドパーク編　プロローグ）

ラブラブ！　坂本夫妻のマル秘恋愛テクニック講座

「……おい翔子、とりあえず俺にわかるように状況を説明しろ」
「……これは私達夫婦が、吉井と久遠のアシスタントの元で恋愛の秘訣を皆に教えるコーナー」
「驚いた。このタイトル“の”以外全部嘘の事しか書いてないぞ。というか明久に光一、テメエ等なにさも当然かの様にカメラを構えてやがる！？」
「じゃあはがきはこちらです。坂本翔子さん、お願いします」
「たまには俺の話を聞け！　そして明久、勝手に翔子を入籍させるな！！」
「……“突然ですが、仲良し夫婦のお二人に相談です”」

ドンドンパフパフ～♪　（効果音）

「はがきの差出人よ、良く聞いてくれ。俺は今、手足を縛られて床に転がされている。コイツが本当に恋愛相談の相手にふさわしいか、もう一度考えてみてほしい」
「まあ力尽くって言うのはやり過ぎだと思うが、そう言う約束したのお前なのに一方的に拒否して逃げ回ったりするから、こういう力尽くの発想に出るとは考えないのか？　“普通に付き合ってみて、合わなかったら別れる”って感じにすれば、こうはならなかった筈だろうに」
「流石はフラれた男だな。哀愁漂う虚しいセリフに説得力がある」
「助けてやろうと思ったけどやめた。坂本翔子さん、続きをどうぞ」
「……わかった。坂本翔子、良い響き」
「だから、翔子を勝手に入籍させるな！！」

「……“私には婚約者がいるのですが、その人が周りの女の人の誘惑に負けて浮気をしないかが心配です。どうしたらいいでしょうか？”」
「いや、どうしたらと言われてもな」
「……夫の浮気には私も困っている。他人事とは思えない」
「そうですか。こんな一途な妻を困らせるなんて、許せませんね」
「頼むから他人事だと思ってくれ！　明久も余計な事言うんじゃねえ！」
「……だから、私の考えた浮気防止法を教えてあげる」
「それは楽しみですね」
「翔子よ、それは俺の身に降りかかる不幸の予告とみなしていいんだろうか？　それと光一、テメエあとで覚えてやがれ！！」
「……用意する物は３つ」

ガラガラガラ！　（明久の手で３つの幕の掛けられた台車が押される音）

「？　浮気防止に、道具が必要なのか？」
「盗聴器や発信器、それから携帯電話かな？」
「じゃないのか？　でもそれじゃ予防にはならないだろ。明久、幕を」
「あっ、うん！」
「……１つ目は」

ドロロロロロロ！　（ドラムロール　ｂｙ光一）

「１つ目は？」

バサッ！　（１つ目の幕がはぎ取られる音）

「“手錠”」
「翔子、ストップだ！　いきなり犯罪臭がする！！」
「……2つ目は」
ドロロロロロロ！　（ドラムロール　by光一）
「やっぱり聞いてないな。んで、2つ目は？」
バサッ！　（2つ目の幕がはぎ取られる音）
「“エプロン”」
「ちょっと待ってくれ。急にお前の考えが読めなくなった。というか、その組み合わせで俺に何をするつもりなんだ！？」
「……そして、3つ目は」
ドロロロロロロ！　（ドラムロール　by光一）
「3つ目は？」
バサッ！　（3つ目の幕がはぎ取られる音）
「“ビデオカメラ”」
「貴様何を撮るつもりだ！？　エプロンと手錠でドレスアップされた俺の何を撮るつもりだ！？」
「……その3つを用意して、夫に浮気の怖さを教えてあげると良い」
「……おえっ、気持ち悪い」
「……この世の終わりを見た気がするよ」
「勝手に下世話な想像をするな！　だがそれ以上に俺は今翔子、何よりもお前が怖い」
「……以上、“バカなお兄ちゃん大好き（11歳）”ちゃんからの

おハガキでした」
「差出人小学生かよ!?　世も末だな！」

「……所で翔子、さっきのは冗談だよな?」
「……カメラは5台以上が望ましい」
「まぁ待て、じっくりと話し合おうじゃないか」

「いや～っ。女の愛って、恐ろしいね」
「ちなみにこれは、この異常なラブラブカップルだからこそなせるテクニックだから、普通にやったら犯罪なのでマネしないように」
「明久に光一、何他人事の様にしてやがる!?」
「「他人事だもん」」

「俺が入院してる間、そんな事があったのか」

“気合を入れた”瑞樹の弁当を間違って食べてしまい、2日ほど入院した光一。

その間起きた、明久のラブレター騒動についての説明を、登校中に秀吉から受けていた。

「島田はともかく姫路まで……俺の苦しみが根本から悉く踏み躙ら

れてるって、どうなんだろ？」
「その辺は同情するぞい」
「やれやれ……」

呆れながら、頭を押さえる光一。
というか、たかがラブレターでクラス総出での追撃の上に、ラブレターは燃やして処分。

いくらなんでも、やり過ぎであると光一は思った。

「そう言う意味じゃ、俺が2枚とも受け取っといて正解だったかな？」
「2枚とは、例のプレミアムチケットかの？　そう言えば明久からも受け取っておったな」
「ああ、特に誘う相手が居ないからってな」

本当は瑞樹と美波に今日渡そうかと思っていたが、先程の話を聞いて気が失せた光一だった。
予定では翔子とそのどちらかに渡すつもりだったのだが（名目上どこかに売ったと言う事にして）

「予定が狂ったな。霧島と、後誰にあげようか？」
「自分が誰かを誘うという選択肢はないのかの？　……まあ、そのチケットを考えればわかるのじゃが」

このチケットは、普通のものとは違う。
如月グループが“如月グランドパークに訪れたカップルは幸せになる”というジンクスを作る為、そのジンクスの礎となるカップルを選別する為のチケット。

それを知っている以上、有象無象と行く訳にもいかないシロモノである。
かといって、迂闊に売る様な事をしたらそれこそ危ないシロモノでもある

「難しいのう。明久と雄二位じゃぞ？　ウチのクラスでそう言う事に縁がある者は」
「だよな……じゃあここはやっぱり優子に」
「アタシがどうかした？」

ふと振り向いてみると、そこには秀吉の姉の優子が。
丁度良い機会と、光一は

「優子、話があるんだ」
「え？　良いけど……それもしかして、如月グランドパークのプレミアムチケット？　え？　こっ光一……？」
「これを誰か、そういう相手の居る人にあげてくれないかな？」
「あの……は？」
「だって俺には持ってても意味がないし、優子なら知り合いに1人か2人位ってちょっと待て、何で腕を極め始める!?　その関節はそっちに……」

断末魔が響き渡った。

その少し後に、優子が返り血を拭きながらAクラスの教室へ。

「全く……何を言うかと思ったら！」
「……どうしたの優子？　機嫌が悪そう」
「何でもない……代表、これ欲しかった筈でしょ？」
「……それなら大丈夫、もう当てがあるから。優子、素直にならな

いからそういう事になる」
「だから、あんな危険人物となんて……はぁっ」

Fクラス教室にて。

「大丈夫かの？　光一」
「……俺が何したってんだよ！？」

あの後優子に肘の関節を外された光一は、秀吉に付き添われFクラスへと到着。

「あっ、退院おめ……どうしたの光一？　その腕」
「気にするな」

よろよろと卓袱台について、外された腕をはめるとそのまま突っ伏した光一。
それを見た雄二は、ある事を尋ねるべく駆け寄った。

「そう言えば光一、あのチケットどうしたんだ？」
「ああっ、知り合いと優子にそれぞれやった。行きたがってる人がいるらしいから」
「へぇっ、木下優子に……ってちょっと待て！　その行きたがってる人は一体誰なんだ！？」

雄二がうなだれてる光一の胸ぐらをつかみ、無理やり立たせる。
ダメージが抜け切れてなく、そのままなすがままの光一が面倒臭そうに。

「さあ？　霧島じゃあないそうだけど」

「確かなんだな!?」
「ああ、確かだ」
これは本当の事である。
なぜなら翔子に対しては……ここでは省かせていただきます。
「何なら、優子に直接確かめてみたらどうだ?」
「……そこまで言うなら信じてやる」
捕まえられた胸ぐらを離され、再度卓袱台に突っ伏す光一。
雄二に見えない角度で、にやりと笑みを浮かべた。
「それはそれとして、ラブレター騒動聞いたぞ? 雄二、お前な……」
「知るか。俺は明久の幸福が大嫌いなんだよ」
「それは知ってるし、予想は十分できるから別に良い。でもまさか、姫路や島田まで……」
と、2人に視線を移す。
「あれは流石にショックだったな……美波はまあ良いとしても、まさか姫路さんまで敵側で、しかもラブレターを細切れにしちゃうんだから」
「……本気で、Fクラスの悪影響が出てるな?」
光一は痛む頭を抱えた。
自分が優子を諦めようっていう気持ちは、一体何なんだろうと思いつつ。
「……苦労してるな、明久」

「光一だけだよ……僕を本当の意味で気遣ってくれるのは」

心底、明久に同情の意を示した光一だった。

「……何でウチ等と久遠に、ここまでの差があるのかしら？」

「どうしてでしょうか？　まるで、私達と久遠君には超えられない壁があるみたいです」

「そう言う目で見てる時点で……まあいいや」

その様子を見て、心底光一を羨む視線を2人は向けていたが、光一は無視の方向を決め込む事に。

「話に戻るけど、じゃあ僕があげたチケットもあげたの？」

「ああ。Fクラスの野郎どもじゃ使い道ないし、優子は友好関係広いから何とかするだろ。俺の知り合いで恋人持ちなんて、雄二位なんだから」

「俺をカテゴリするな！　まあ、それなら良いか。しかし明久も、姫路でも誘えば良いのに」

「雄二が言って良いセリフじゃないよね？」

ラブレター騒動時、主導となって明久を攻撃したのは雄二である。当の本人は明久の抗議を特に気にする事もなく悪びれる事もなく、飄々としている。

「しかし、姫路と島田に売るって話もあったんじゃないのか？」

「そのつもりだったけど、ラブレター騒動の事があるからやめた。恋愛は力尽くでどうこうする事じゃない筈だから、どうも俺の苦しみその物どころかその根本すら否定されてる気がしてな……」

優子にフラれ、諦めようとしてる光一ならではの台詞だった。

瑞希と美波は、それを聞いて少々後ろめたい気持ちに襲われる。

「成程、確かにそうだ……だがそれなら何故翔子をたきつける真似をした？」

“現在進行形で”力尽くによる恋に晒されている雄二が抗議を上げた。

そもそも、翔子に雄二を何度も苦しめるスタンガンを渡したのは、他でもない光一なのだ。

「別に雄二だからどうでもいいと思った」

「よし、今すぐ地獄へ送ってやる！！」

ボキボキと指を鳴らしながら、光一に今にも殴りかかろうとする雄二。

「……というのは冗談だ。話を聞く限りじゃ、霧島はずっと雄二の事好きだったんだろ？　そうやって一方的に突き離した結果が、今の積りに積った気持ちの暴走だとも見て取れるんだが？」

「あのな、そもそも翔子の気持ちは……」

「出席をとるぞ、席に付け！」

そこで西村先生こと鉄人がやってきて、出席をとり始めた。

時は過ぎ、週末。

ドドドドドドドドドドド！　ガチャッ！

「おふくろ！　どういう事だっ！？」

「あら雄二、おはよう」

とある場所にある坂本家。
そのキッチンにおいて、にこやかにあいさつする若々しい女性と、寝起きとは思えない程荒々しく駆けこんできた少年、坂本雄二
女性は雄二の態度に構う事なく、のほほんと流しで洗い物をしている。

「おはようじゃねえっ！　どうして翔子が俺の部屋にいるんだ！
おかげで俺は警察のオッサンに二次元と三次元の区別が出来ない妄想野郎と思われちまっただろうが！」

目を覚ましたら、そこに幼馴染である霧島翔子が近くにいた。
約束の類が思い当たらず、不法侵入であると辺りを付けて警察に電話してしまい、その時の警察の反応は雄二の心に深い傷を残したのである。

「……え？　翔子ちゃんが？」

その当人の雄二の母親は、大きな瞳を瞬かせ困ったような顔をする。
それを見て雄二は、翔子の単独行動かと思い、少々浅慮だったかもしれないと思い謝る事に。

「ああいや、怒鳴って悪かった。俺はてっきりおふくろがアイツを勝手に俺の部屋に……」
「もう、翔子ちゃんってば奥手ねぇ。折角お膳立てしてあげたのに何もしないでいるなんてもったいな……あら雄二、どうしてお母さんの頭を鷲掴みにするのかしら？」
「やっぱりあんたの所為か！」

雄二は母親の頭に手をかけ、自身が翔子にやられているアイアンクローに処する事に。
そこへ現れた翔子が、雄二の腕をつかんで邪魔をする。

「……雄二、お義母さんを虐めちゃダメ」
「止めるな翔子、俺は息子としてこの母親の再教育をしないといけないんだ！　それと今、“お母さん”の発音が普通と違う気がしたんだが？」
「……間違っていない、“お義母さん”であっている。それよりも、言う事を聞かないとこの本をお義母さんと一緒に読む」

と言って撮りだしたのは、Ａ４サイズの冊子。
しかも表紙は……

「ま、待てっ！　それは女子供が読むものじゃない！　早くこっちに寄越すんだ！」
「あら翔子ちゃん。それは雄二が世界史の資料集の表紙をかぶせて机の三番目の引き出しの二重底の下に隠している、秘密の本じゃない？」

自身の至高の一冊が見つかった事だけでも最悪の事態なのに、更に母親に既に知られていた事。
この時雄二は、明久の１人暮らしをこの上なく羨ましいと思った。

「わ、わかった。おふくろは解放しよう」
「……そう。それなら、この本は燃やすだけで許してあげる」
「待て翔子、それは許した時の処分じゃない！」
「……じゃあ、燃やしても許さない」
「燃やさないと言う選択肢はないのか！？」

結局その本は処分され、雄二は断末魔を上げる事に。
その少し後、朝食を食べて翔子にふと気になる事を聞いてみる事に。

「んで、どうして翔子が来てるんだ？」
「……これ」

上着のポケットから、ある一枚の小さな紙切れを取り出す。
その様相から言って、チケットである。

「あら、如月グランドパークのプレミアムチケット？　すごいわ翔子ちゃん、良くこんな物手に入ったわね？」
「……優しい人達がくれた」

それを聞くなり、雄二は携帯を取り出し番号通知をＯＦＦに。
そして光一の番号を呼び出し、数秒の呼び出し音の後に軽快な声が。

『ハイもしもし？　どちら様ですか？』
「……キサマヲコロス」
『何だいたずらか？』

プツッ！　ツーツーツー……

と、特に気にした様子もなく、通話を切られてしまった。
それに対し、余計に腹の奥が煮え繰り返る雄二だった。

「……雄二、行こう？」
「嫌だ！」

雄二はチケットの意味を知っている為、頑なに拒否をした。
これは一部の人間しか知らないが、“如月グループの力を以て結婚

を強要する”という意味合いがある。

「……じゃあ、選んで」

拒否の姿勢を崩さない雄二に、翔子はある物を取り出した。

「……すまん、話の流れがさっぱり分からない」

「約束を破れば、即挙式って誓ってくれた」

「誓ってない！　婚姻届に判というのは覚えがあるが、挙式は覚えにない！！」

ちなみに婚姻届の方は既に判が押されており、翔子の手により保管されていた。

「お母さんは、ハワイとかの海外が良いな～」

「おふくろ、アンタはどうしてそんなにマイペース何だ？」

「あっ、ヨーロッパも良いわね。雄二、どこがいいかしらね？」

と、一緒になって結婚式場のパンフを眺める翔子と雄二の母。

それに対し、雄二がとった手段とは……

「……俺は……無力だ」

所変わって、如月グランドパークの前。

「……やっとついた」

「よし、それじゃ翔子」

「……うん」

「帰ろう」

ミシッ！

「……ダメ、絶対に入る」

と、ひじ関節を極めて、往生際の悪い雄二を止める翔子。

「はっはっは、翔子、俺のひじ関節はそっち側には曲がらないぞ？」

「……恋人同士は皆こうしている」

「待て翔子！　お前は仲睦まじいと言う意味の腕を組む行為と、腕を壊すというサブミッションを同様に考えていないか！？」

で、結局は、入場ゲートに連行されてしまう雄二。

一方、監視カメラのモニタルームにて。

「来たみたいじゃの？　しかし、態々こんな事せずとも……」

「何言ってるんだよ秀吉、これは僕達から雄二への親愛の証、プレゼントじゃないか」

「……（コクコク）」

「で、もう1枚はどこへ行ったのよ？」

「さあ？　俺達は雄二に集中すればいいさ」

「そうですね。坂本君と霧島さんの幸せ、成就してあげましょう！」

そのもう1枚は……

「……光一の、バカ」

第二十七問（前書き）

今回も、バカテストはお休みです

第二十七問

「いらっしゃいマセ！　如月グランドパークへようこソ！」

グランドパーク入場ゲートにて。

受付のアジア系の係員が、片言のなまり日本語で雄二と翔子を出迎えた。

「本日はプレオープンなのデスが、チケットはお持ちですカ？」

「……はい」

「拝見しマース」

係員は翔子のチケットを取り出したチケットを受け取り、２人の顔を見ると笑顔のまま一瞬固まる。

「……そのチケット、使えないの？」

「イエイエ、そんなコトはないデスよ？　デスが、ちょっとお待ちくだサーイ」

係員は携帯を取り出し、雄二から背を向けて電話し始める。

「……私だ、例の連中が来た。ウエディングシフトの用意を始めろ、確実に仕留める」

「おいコラ、なんだその不穏当な会話は？」

「……ウエディングシフト？」

如月グループの企みを知らない翔子は、首を傾げていた。

「気にしないデくだサーイ。コッチの話デース」

「アンタ、さっき電話で流暢に日本語を話していなかったか？」
「オーウ。ニホンゴむつかしくてワカりまセーン」
雄二は内心、この係員に腹を立てていた。
「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ？　入場だけさせてくれたら後は放っておいてくれていい」
雄二は潔いネーミングで、如月グループの企みをよく理解した。しかし彼は乗る気は一切なく、いかにこの場を切り抜けるかを模索し始めていた。
「そんなコト言わずニ、お世話させてくだサーイ。トッテモ豪華なおもてナシさせていただきマース」
「不要だ」
「そこをナントカお願いしマース」
「ダメだ」
「この通りデース」
「却下だ」
「断ればアナタノ実家に腐ったザリガニを送りマース」
「やめろっ！　そんな事をされたら、我が家は食中毒で大変な事になってしまう！」
彼の母は、それを間違いなく伊勢海老と勘違いし、食卓に上げる危険な女性であった。
「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」
「……記念写真？」
「ハイ。サイコーにお似合いのお2人の愛のメモリーを残しマース」
「……雄二とお似合い……（ポッ）

翔子はその言葉に、仄かに頬を赤らめた。

「お待たせしました。カメラです」

そこへ2人の帽子とサンバイザーを目深にかぶったスタッフが、片方カメラを片手に現れた。

「アナタ達が持ってきてクレたのデスか？　わざわざありがとうございマス。助かりマース」

「では、撮影をしますので、こちらへどうぞ」

カメラを持ったスタッフが係員にカメラを渡し、もう片方が雄二達をある方向へと誘導し始める。

係員が礼を言いながらカメラを受け取るのを見て、雄二はある物を感じた。

こういった場所のスタッフが、客の前で同僚に丁寧な礼を言う事に対しての違和感を。

「悪いが、ちょっと電話をさせてくれ」

「わかりまシタ」

電話を取り出して、番号非通知で明久に電話をかける雄二

Ｐｒｒｒｒｒｒ　Ｐｒｒｒｒｒｒ

「ああ、すいません。僕の携帯ですね」

「あっ、待て！　それは……」

カメラを持ってきたスタッフの尻ポケットから、電子音が響きだした。
それをみて、誘導スタッフが止めようとするが遅かった
「……いよう明久。テメェ、面白いことしてるじゃねぇか……！」
「人違いですっ！」
「では、私達はこれで！　何やってんだよお前は！」
「ごっごめん！」

ダッ！　×　2

「あっ、コラ！　逃げるなテメェら！　明久と一緒って事は、あっちの野郎は光一だな!?　ええい、離せこの野郎！！」
「彼らはココのスタッフのエリザベート・ハナコ（35歳）通称スティーヴと、フォンティーヌ・アツコ（41歳）通称ジョンソンでース。吉井ナントカさんや久遠ナントカさんではありまセーン」
「黙れ！　人種性別年齢氏名すべてに、しかもダブルで堂々とウソをつくな！　しかもどう考えてもその名前で通称スティーヴやジョンソンはないだろ！　ついでに俺は吉井や久遠なんて名字は一言も言っていない！」

その係員に絡まれているうちに、2人のスタッフはさっさと逃げ去った。
そして、ここのスタッフになりすまし自分をハメようとする2人のバックについて。
これは個人でできる事ではなく、他にも協力者がいる可能性もあっという間に雄二の頭脳ははじき出した。

「翔子、すまんがちょっと我慢してくれ！」
「……???」

キョトンとしている翔子のスカートを掴み、軽くまくりあげる雄二。
見えるか見えないかのギリギリの高さまで持ち上がる。

「……っ！！（ギラッ）」

その瞬間、懐に手を伸ばした人影……というか、狐のきぐるみ。

「……やはり、ムッツリーニも来ていたか」

その動きから、きぐるみの正体を悟った雄二は、他の可能性も考え始める。
この3人が居るなら、秀吉と瑞希の存在も……と、神童ならではの頭脳の回転。

「……雄二、えっち」

翔子が少し怒ったような顔で、雄二を見つめる。

「なっ！？　ちっ違うぞ翔子！　俺はお前の下着になんか微塵も興味がないっ！」
「……それはそれで困る」
「ぐぁあああああっ！　理不尽だぁあっ！！」

翔子はアイアンクローをかまし、その握力で頭蓋がきしむ音が響く。

「でハ、写真を撮りマース。はい、チーズ」

その間フラッシュが焚かれ、ピピッという電子音と共に撮影終了。

「スグに印刷しマース。そのまま待っていてくださイ」
「……わかった。このまま待ってる」
「ぐぁあああっ！　このままだと俺の頭蓋がっ！」

律儀にも、アイアンクローを解くどころか、そのままの握力を緩める事なくキープ。
その間で、雄二は翔子の気持ちに思いっきり疑いを持っていた。

「はい、どうゾ」
「……ありがとう」

程なくして、係員が写真を持ってきた。
それと同時に解放される雄二が咳き込み、翔子が嬉しそうに写真を受け取る。

「……雄二、見て。私達の思い出」
「……なんだ、この写真は？」
「サービスで加工も入れておきまシタ」

写っているのは、翔子の後頭部と折檻に悶える雄二。
そしてその2人を囲う様なハートマークと、“私達、結婚します”という文字。

アイアンクローをかます女性とそれに苦しむ男性の周りを、未来を祝福する様に天使が飛び廻る図。
傍から見れば、どういう経緯で結婚に至ったかが気になる所であり、幸せは訪れるかと聞かれれば疑問だろう。

「……俺が言うのもなんだが、幸せが訪れる訳もないな」

「だよね。まあ雄二だからどうでもいいけど」
「……（コクコク）」

と、遠目でそれを観察していた明久と光一、ムッツリーニはそれぞれ好き勝手言っている。

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」
「キサマ正気か！？　コレを飾る事で何のメリットがあると言うんだ！？」

１００人いれば１００人がさあ？　というだろう。

「ああっ！　写真撮影してる！　アタシらも撮ってもらおーよ！」
「オレたちの結婚の記念に、か？　おい係員、オレたちも映ってやんよ！」

そこへ偉そうな態度で、チャラいカップルがやってきた。

「すいまセン。こちらは特別企画でスので……」
「あぁっ！？　いいじゃねーか！　オレたちゃオキャクサマだぞコルァ！」
「きゃーっ。リュータかっこいーっ！」

その間雄二と翔子は逃げ出した。
雄二にしてみれば、あの手の連中は下手に相手にすると執拗に絡んで来ることが多く、面倒でしかない。
何よりも、視界に入れる事さえも不愉快だと言う事で、翔子を宥めて雄二はその場を逃亡。

「ああっ！？　グダグダ抜かすとマスコミにここの態度について当初すっぞゴルァっ！！」
「そーよっ！　アタシたち、オキャクサマなんだからねっ！」

宣伝のためのイベントでこういう客が来るなんて、如月グランドパークも縁がないな。
と思いつつ、逃亡していく雄二だった。

それから、結局は場を楽しむ事にして、雄二はあたりを見回す。
３Ｄの体感アトラクションに絶叫マシン、コーヒーカップやメリーゴーランド。
デフォの物もあれば、見た目だけで想像もつかない場所もある。

「映画館でもあれば楽なんだがな」
「……折角一緒にいるんだから、そんなのはダメ」

と言われ、しぶしぶと面倒にならなくて妙な雰囲気にならない。
そんなアトラクションを探し始める雄二。

「……翔子、いい加減腕を放してくれ」
「でも、カップルは腕を組む物」
「この状況がカップルに見えるか！！」

腕を翔子にサブミッションに極められつつ。

『ねーねーそこのラブラブなカップルのお２人ー』

そこへ、ひょこひょことキツネが近づいてくる。
このテーマパークのマスコットキャラの、キツネのフィーである。

「ほら、そう見えてる」
「明らかにそいつの方が変だろ！！」
『そんなラブラブなカップルに、キツネのフィーがとっても面白いアトラクションを紹介してあげるよ？』
おどけた動作で、紹介を促すフィー。
しかし雄二は、そのボイスチェンジャーを介していない声に聞き覚えを感じていた。
「……さっき、明久がバイトの女子大生にデートに誘われてたな」
『えぇっ、あっ、明久君が！？　そっそれ、どこで見たんですか！？』
「……アルバイトか姫路？」
空気が凍った。
『キツネのフィーがとっても面白いアトラクションを紹介してあげるよ？』
それを取り繕うように、フィーは紹介に戻る。
「しらを切ると言うなら良いだろう。じゃあフィーとやら、お前のおススメを教えてもらえるか？」
『あ、う、うんっ。フィーのおススメはね、向こうに見えるお化け屋敷だよ』
噴水を挟んだ向こう側に見える、廃病院を改造したという話題のお化け屋敷である。

「そうか。じゃあお化け屋敷“以外”の処に行くぞ？」
『ままま待ってください！　どうしてですか！？』
「どうしてもクソもあるか！　お前らの手で余計な仕掛けを施されてる事は明白だろう！」

瑞希は良くも悪くも純粋な為、その辺りの化かし合いはてんでサッパリ。
簡単に雄二に見破られてしまった。

『そ、そんなの困りますっ！　お願いですからお化け屋敷に行ってください！』
「断る！」

そのお願いに、残りの人生を捧げる気はない。
という姿勢で断固拒否し、その場を後にしようとする雄二。

そこへ……

『そこまでだ雄二！　……じゃなくて、そこの不細工な男っ！　フィーをいじめると、このノインが許さないぞ！』
「その頭の悪そうな仕草……明久かっ！」

さっそうと登場したのは、マスコットキャラのノイン。

『失礼なっ！　僕……じゃなくて、ノインのどこが頭が悪いって言うんだ！？』
「……雄二。ノイちゃんはうっかりさんだから」
「うっかりで頭が逆になるキツネはいない！！」

きぐるみの頭部が頭部の装着の前後逆になっており、とてもシュー

ルな生き物となっていた。

『あっ、明久君っ。頭が逆です！　ああっ！　今小さな子が明久君を見て泣き出しちゃいましたよ！？』

『うわっ、しまった！　道理で前が見えないと思った！』

『早く治さないと、坂本君にバレちゃいます！』

と言って駆け寄ったフィーが躓き、そのままノインに抱きつく形で転がって行った。

雄二はそれを見て、呆れるように一言。

「……明久と姫路って、つくづくお似合いのカップルだと思う」

「……そう思う。今度2人に、私の考えた恋愛の手ほどきでも」

「それは良い。是非教えてやれ」

内心、良い仕返しが出来たと喜ぶ雄二だった。

「ハイ。すいませーン。お待たせしまシタ」

そこへ現れたのは、先程の係員。

「坂本雄二サン、お化け屋敷に行って下サイ」

「だからイヤだと言ってるだろうが！」

「断れバ、アナタの実家にプチプチの梱包材を大量に送りマース」

「やめろっ！　そんな事をされたら我が家の家事が全て滞ってしまう！」

彼の母親の趣味は、梱包材を潰す事だった。

それも、その目の前にある全てのを潰し終えるまで、時間すらも忘れるほどに。

『ところで明久君。さっき女子大生の声を掛けられていたって聞きましたけど？　まさか、大事な作戦の最中に他の女の人と……』
『え？　何の事？　さっきまで光一と……あの、どうして携帯電話を取り出すの？　誰かを呼ぶ気？』
『美波ちゃんが今すぐ来てくれるそうです。お話、ゆっくり聞かせてくださいね？』
『だ、ダメだよっ！　オープン初日で刃傷沙汰なんてここの評判に……ひぃぃっ！　なんだかすごい勢いで誰かが走って来てるみたいなんだけど！？　待って！　何もない事は光一が証明してくれるから、本気で待って！！』

その離れた場所では、ファンシーなキツネの痴話喧嘩という、珍しい光景が展開されていた。

「坂本翔子さん、お化け屋敷と言えばカップルイベントの宝庫ですよ？」
「……宝庫？」
「はい。お化けに驚き彼氏に抱きつくと言うのは、まさに最高の思い出だと思いませんか？」

そこへ、1人のスタッフが翔子に近寄り説明。
先ほどのスタッフの一人で、サンバイザーを被る少々貧弱な体躯に無造作に整えられた髪のスタッフ。
その姿には、思いきり見おぼえがあった。

「……雄二、お化け屋敷に行きたい」
「テメ、さっきの……やっぱり光一だな！？　翔子を使って罠にハメようなんて汚いぞ！　それと、勝手に翔子を入籍させるな！　ソ

イツの名字は霧島だ！」
「……大丈夫、すぐに変わるから」

再び翔子に関節を極められる雄二。
それに構う事なく、スタッフは係員に駆け寄る。

「チーフ、あちらは一体どうされたのですか（笑）？」
「全然ワカリマセーン？　それよりフランソワーズ・ナツコ事、通称ジェームズ君、誓約書を」
「おい待て、さっきと名前が変わってるぞ！　しかもさっきも言ったが、その名前で通称ジェームズはないだろ！　そしてその当人、お前今（笑）を付けただろ!?」
「では、こちらをどうぞ」

雄二の抗議を無視して、スタッフはバインダーにはせられた書類を取り出した。
それを係員が受け取って、雄二に差し出す。

「何だこれは？」
「ただの誓約書でございます」
「では、こちらにサインして下サーイ」
「誓約書が必要なお化け屋敷って何だ？　そんなに危険なのか？……だがまぁ、面白そうではあるな」

と、雄二は少し楽しそうにボールペンを受け取って書類に手をかける。

【制約書】

1．私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛し、苦楽を共にする

ことを誓います。
2．婚礼の式場には如月グランドパークを利用することを誓います。
3．どのような事態になろうとも、離縁しないことを誓います。

「ペンはこちらをどうぞ（笑）」
「……はい雄二、実印」
「朱肉はこちらデース」
「俺だけか!?　俺だけがこの状況をおかしいと思っているのか!?　しかもそこのお前、今また（笑）を付けただろ!?」

と、喚き散らす雄二。
まあ傍から見れば、当然だろう。

「冗談でス。誓約書は良いので中に入って下サイ」
「……うん。冗談」
「カーボン紙を入れて写しまで用意している癖に冗談と言い張るのか?」
「言い張るも何も、本気で冗談ですから（笑）」
「お前は喋るな」

雄二は色々言ってやりたかったが、常識を求めるのも酷だと思いあきらめた。

「それでは、その大きな鞄は邪魔になりそうですので、預からせて頂きます」
「……お願い」

と、翔子が持っていたカバンを、スタッフが預かる。
それは偉く大荷物だった。

「零れちゃうから、横にしないでほしい」
「わかりました。気を付けます」
「デハ、行ってらっシャいマセ」

何が入ってるんだろうと考える雄二を、翔子は再度肘関節を極めて一路お化け屋敷へ。
雄二の抵抗も虚しく、扉の前に立たされてしまう。

「私だ、お化け屋敷にターゲットが入った。吉井さん考案の作戦を実行しろ」
「えーっと……はいはい、わかりました。ウエディング体験の準備が完了したそうですよ？」
「ご協力感謝いたします、久遠さん」

2人が入ったのを確認して、係員とスタッフは互いに頷きあいそれぞれの行動に移った。

第二十八問　（如月グランドパーク編　エピローグ）

「お疲れサマでシタ。どうでシタカ？　結婚したくなりまシタか？」
「あれと結婚を結びつけて考える事が出来るのは、お前と明久ぐらいだろうな……」

明久考案の、秀吉による雄二の声真似で“姫路の方が翔子よりも好みだな。胸も大きいし”というセリフをアナウンス。
そこで釘バットが飛び出る仕掛けという、絶叫アトラクション（雄二限定）。

「オカしいデスね？　危機的状況に陥っタ2人の男女ハ、強い絆デ結ばれルという話なのデスが……」
「まぁ、襲い来る危機が結ばれるべき相手自身でなければそうなるかもしれないが……」
「……そろそろお昼」

翔子が噴水の上の方に見える多時計を見て、そう呟いた。
ふと、スタッフに鞄を返してもらおうと声をかけようとしたところで……

「デハ、豪華なランチを用意してありマスので、こちらへいらして下サイ」
「では、私がご案内させていただきますので、チーフは例の企画の準備を」
「ちょっと待て、何だ例の企画とは？」
「？　どうかされましたか？　坂本翔子さん？」

ふと、スタッフが翔子の様子がおかしい事に気付き、声をかける。

雄二もその様子を見て、疑問に思った。

「翔子、どうした？」

「……なんでも、ない」

スタッフの誘導に従い、しばらく歩くとこじゃれたレストランが見えてくる。

そこからさらに中に入り、あるパーティー会場の様な広間に出る。

「此方でございます」

そこはレストランというより……。

「……クイズ会場？」

そう、そこはクイズ会場の様な雰囲気だった。

一応テーブルには、豪華な料理が並べられている。

「いらっしゃいませ、坂本雄二様、翔子さま」

「では、こちらへどうぞ」

そこにボーイとウエイトレスが、それぞれの案内をスタッフから任される。

「秀吉、島田、ボーイとウエイトレスの真似事か？」

「秀吉？　何のことでしょうか？」

「そっそうですよ。別に、これから本格ムぐっ！」

秀吉は顔色一つ変えず、丁寧に切り返す。

逆に隠し事がヘタクソな美波の口を滑らせようとしたのを、ギリギ

リでスタッフ改め光一がそれを塞ぐ。

「しっ失礼しました（バラしてどうすんだよ？）」
「むぐむぐっ！（ごっごめん……）」
「それでは、こちらへどうぞ」
「あ、ああ……」

後は秀吉と美波が2人を連れて、会場へと移動。
そして光一は、着替えをする為にその場を後にした。

＜皆様、本日は如月グランドパークのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます！＞

司会服に着替え、髪もオールバックにした光一がアナウンスを告げる。

＜何と本日ですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルが、いらっしゃるのです！＞

その言葉に、雄二は水を吹き出す。

＜そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを企画させていただきました！　題して、【如月グランドパークウエディング体験】プレゼントクイズ～！＞

そこで、出入り口を封鎖する音が響く。
この辺りは、行動パターンを熟知している明久の手回しである。

＜本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答え

て頂き、見事5問正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを体験していただけるというものです！　もちろん、ご本人の希望によってはそのまま入籍という事でも問題ありませんが＞

大ありである。

……が、ここでは割愛という事で。

＜それでは坂本雄二さん&霧島翔子さん！　前方のステージへとお進みください！＞

司会が2人の席を示し、観客の視線が一斉にそっちに向いた。

「……ウエディング体験……頑張る……！」

「落ち着け翔子。そう言った物はだな、きちんと双方の合意の元に痛だだだっ！　耳が千切れるっ！　行く！　行くから離してくれっ！！」

「では、こちらです」

「テメ、明久か！？　痛だだだだ！！」

やる気満々の翔子と、それに耳を引っ張られる雄二がスタッフ（明久）に誘導される。

2人が壇上に上がり、クイズの回答席へと案内された。

＜それでは【如月グランドパークウエディング体験】プレゼントクイズを始めます！＞

そう言いながら、司会は問題を受け取る。

それを見るともう良い笑顔で、問題を読み上げた。

＜では第一問！　坂本雄二さんと霧島翔子さんの結婚記念日はいつ

でしょうか？＞

……ピンポーン！

雄二はおかしいと言った具合に呆けており、その間に翔子がボタンを押す。

「……毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！　恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！」

＜お見事！　正解です！＞

当然これは出来レースである

睨みつける雄二に対し、司会は観客に見えない角度で片目を瞑って返した。

＜では第二問！　お二人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうかっ？＞

……ピンポーン！

今度は雄二が先手を取り、ボタンを押した。

彼の真意は、必ずや間違える事である。

＜はいっ！　答えをどうぞっ！＞

「鯖の味噌煮！」

＜正解ですっ！＞

「何ィッ！？」

＜お２人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【鯖の味噌煮】で行われる予定です！＞

「待ていっ！　絶対その別名はこの場で命名しただろ！　強引にも程があるぞ！」

＜では第三問！　お二人の出会いはどこでしょうかっ！＞

雄二の言葉を無視し、司会は強引に進める。

ボタンを押そうとする雄二……だが

「……させない」

「ふぉおおおっ！？　目が、目がぁっ！」

目を潰して阻止したうえで、ゆっくりとボタンを押す翔子。

＜はい、解答をどうぞ！＞

「……小学校」

＜正解です！　お２人は小学校からの長い付き合いで今日の結婚にまで至ると言う、何とも仲睦まじい幼馴染なのです！＞

完全に雄二の目潰しは気にしない方向だった。

＜では第四問まいります！＞

……ピンポーン！

問題を読む前に、雄二が先手を打ってきた。
問題を読む前に間違える腹積もりである……が。

「……わかり」

＜正解です！　それでは、最終問題です！＞

目には目を、無視には無視をという方針で強引に正解に。
そしていよいよ最終問題に入ろうとしたとその時。

「ちょっとおかしくな～い？　アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーセーだけがトクベツ扱いなワケ～？」

そこへ、不愉快な声が会場に響いた。
先程雄二達に絡んできた、チンピラカップルである。

「あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか……」
「ああっ！？　グダグダとうるせーんだよ！　オレたちゃオキャクサマだぞコルァ！！」
「アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど～？」
「でっですから、これは……」

今すぐスタンガンをブチ込みたい気持ちを抑えつつ、司会者は宥めようとするも聞く耳持たず。
そばに控えていたスタッフ（明久）も、司会者の手伝いで宥めるも同様。

「ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルァ！　オレたちもクイズに参

加してやるって言ってんだボケがっ！」
「うんうんっ！　じゃあ、こうしよーよ！　アタシらがあの2人に問題出すから、答えられたら2人の勝ち！　間違えたらアタシらの勝ちってコトで！」
「そんな勝手な！　ですからこれは……」
明久をはじめとするスタッフを余所に、そのバカップルはズカズカと壇上に上がる。
設置してあるマイクを1つひったくり、いざ問題を出す。
雄二にしてみれば、チャンスでもある為その2人に感謝していた。
「……どうしよう光一？」
「……こうなれば、霧島に賭けるか……って、ダメか」
ふと、司会者の視界に、翔子の腕を握る雄二の姿が。
2人の脳裏には、万事休すという言葉が。
「じゃあ問題だ！」
仕方ないという感じで、明久と光一をはじめ、その場全員が問題を待つ
「ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！」
「……」
全員が言葉を失った。
「オラ、答えろよ！　わかんねぇのか？」

「（ねえ、ヨーロッパって国だった？　確か違うと思うんだけど？）」
「（ああ。確かヨーロッパは国ってカテゴリじゃないから、その首都なんて答えられる訳がない）」
「（だよね。まさか僕より酷いバカがこの世に存在するとは思わなかったよ）」

明久と光一は、一応アイコンタクトでそう話し合った。

＜……坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます、【如月グランドパークウエディング体験】をプレゼントいたします＞

「おい待てよ！　こいつら答えられなかっただろ!?　オレたちの勝ちじゃねぇかコルァ！」
「マジありえなくない!?　この司会、バカなんじゃないの!?」

そのバカップルがぎゃあぎゃあ騒ぎ立てる中、ステージに幕が下りて来る。
光一は“バカはお前らだ”と言いたい衝動を抑えつつその騒ぎを聞き流し、明久達スタッフに指示を飛ばす

「世界って広いわね。まさかアキより酷いバカが存在するなんて」
「全くじゃ。まだまだ明久も捨てたものではないらしいの」
「……（コクコク）」
「あっ、あはは……」

「おメデとうございマス。ウエディング体験が当たるなんテ、ラッ

キーでスね」
「……すごく嬉しい」
「喜んでいただけて光栄です。お2人にとって忘れられない、そんな1日にさせて頂きます」

先程の係員と共に、再度光一が扮したスタッフがそれぞれを案内。
光一が先程預かったかばんを、翔子に手渡す。

「そう言えば翔子、お前の持ってきたカバンは何が入っているんだ？　随分と大きいが」
「……別に、何も」
「ではウエディング体験の準備がありますので、こちらのスタッフについて行ってもらえますか？」

スタッフの後ろから、３０前後の女性スタッフが歩み出て頭を下げる。
如何にも業界人と言った風貌の人で、如月グループが用意した人員である。

「はじめまして、あなたのドレスのコーディネートを担当させていただきます。一生の思い出になる様なイベントにする為、お手伝いをさせてください」
「おいおい、随分と本格的だな？　まさかスタイリストまで付けて来るなんて」
「当グランドパーク初の式ですし、お2人の記憶に残す為にも相応の物にしなければ申し訳ありません」

グランドパークとしては、アトラクションよりもウエディング体験こそが真の狙いだったりする。
だからこそ、文月学園をターゲットにジンクスを作ろうとしたわけ

だが……。

「ってことは、俺は長い時間待たされるのか？」
「ご安心くだサイ。坂本雄二サンについての対応はワタシどもが考えてありマース」
「お前たちが？」
「ハイ。坂本雄二サンにはコレを使おう、ト」

そう言って、係員とスタッフ（光一）が取り出したのはスタンガン（２０万ボルト）

「絶対逃亡を考えるでしょうから、これで気絶させてから着替えさせます」
「こっ光一！　テメーっ！！」
「少しガマンして下サーイ」

バチバチと大きな音が響き、雄二が気絶したのを確認した後２人で雄二の着替えを開始した。

そして、会場にて。

＜それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！　皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！＞

再度司会に移行した光一のアナウンスにより、園内全てに響くかという位拍手が響き渡った。

「坂本雄二サン、お願いしマス」

今すぐぶちのめそうと言わんばかりに、その係員を睨みつける雄二。

「抵抗すれバ、海胆とタワシの活け造りをアナタノ実家に送りマース」

「やれやれ……まぁ、あくまでもタダの体験だしな。適当に付き合って、さっさと終わらせるか」

雄二がやけに大きく返事をする。

その内心では、いかに逃げ出すかの計算が既に始まっている。

相手が企業ともあり、自身の知識ではその狙いに至る手段云々は全て把握はしきれない。

世間的に結婚させるのが向こうの狙いである以上は、指輪の交換からキスまでの一連の行事に至るまでが勝負の分かれ目。

「さぁ、どうゾ」

「あいよ」

トントンと小さな階段を上り、雄二はそこから見える光景に少々面食らった。

「おいおい……なんだよ、このセット」

数え切れないほどのスポットライトに、ライブステージの様な観客席。

スモークやバルーン、花火に至るまで設備が整っているように見えており、そこから見える電飾に幾らかかっているかすらも雄二には想像できない。

＜それでは、新郎である坂本雄二さんのプロフィールの紹介を……

省略します＞

「おい、手ぇ抜き過ぎだろ！」

思わず雄二は、ツッコんでしまった。

「ま、紹介なんていらねぇよな」

「興味ナシ～」

「ここがオレたちの結婚式に使えるかどうかが問題だからな」

「だよね～」

そこへ大声で会話する2人組が。

それは、何かと横柄な態度をとる、先程のバカップルである。

＜……他のお客様のご迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮頂けるようお願いします＞

「これ、アタシらのことといってんの～？」

「違ぇだろ。俺らはなんたってオキャクサマだぜ？」

「だよね～っ」

「ま、俺達の事だとしても気にすんなよ。要は俺達の気分が良いか悪いかってのが問題だろ？　な、コレ重要じゃない？」

「うんうん！　リューター、イイコト言うね！」

「……全然良くねえよ、スタッフに紛れてなきゃぶち殺してる所だ」

マイクを一旦切って、光一は心底呆れたようにそう呟いた。

調子に乗った下卑た笑い声が一層大きく響き渡り、ここまで騒がれている以上迂闊に手を出せない。

「やれやれ、マナーを守らない横柄な客というのは居る物じゃの」
「そうだね。式がブチ壊しにならなきゃいいけど」
「……（コクコク）」
「全く、あれじゃ殆ど営業妨害じゃない」
「どうしてあんな迷惑な事をするんでしょう？」

それぞれ、バックに控える5人も、流石に計画がめちゃくちゃにされる事を懸念しつつも、何もできない事に若干腹を立てていた。

＜……それでは、いよいよ新婦のご登場です＞

気を取り直した光一のアナウンスが終わると同時に、会場の電気が消えＢＧＭが流れ始める。
スモークが足元から放出され、雰囲気が高まってく。

＜本イベントの主役、霧島翔子さんです！＞

アナウンスと同時に行く筋ものスポットライトが、壇上の一点つまり、純白のドレスに身を包んだ翔子がそこにいた。

「……綺麗」

誰ともわからないセリフが漏れ、静かな会場に響き渡る。
ゆっくりと翔子が雄二のもとに歩み寄るのを、静かに会場中が注目する。

「……雄二」
「翔子、か？」
「……うん」

雄二の口から、言わずもがなな質問が出て来た
その姿に見惚れ、動揺しているのだから無理もない。

「……どう……？　私、お嫁さんに、見えるかな……？」
「……ああ、大丈夫だ。少なくとも、婿には見えない」

雄二としては、最初考えていた“似合わなきゃ興ざめだな”という言葉等、既に消し飛んでいた。
だからこそ、そのセリフが出ただけでも上出来だろう。

「……雄二」
「お、おい。翔子……？」
「……嬉しい……」

翔子はそれ以上言葉を発することなく、静かに震えだした。
その様子を見て、見惚れていた光一はハッと意識を取り戻す。

＜ど、どうしたのでしょうか？　花嫁が泣いているように見えますが？＞

「お、おい。どうした……？」

観客から静寂の代わりに、ざわめきが生まれ始める。
そんな中、彼女は小さな、しかしはっきりと聞き取れる声で呟いた。

「……ずっと……夢だったから……」

＜夢、ですか？＞

「……小さなころからずっと……夢だった……私と雄二、二人で結

婚式を挙げる事……私が雄二のお嫁さんになること……私1人だけじゃ、絶対かなわない、小さなころからの私の夢……」

口数の少ない女性が、ぽつぽつと懸命に紡ぐ言葉。
それに込められている強い感情は、誰よりも目の前の男性が良く理解はしている筈だった。

けれど、どういうきっかけで自分への気持ちに至ったかを知っているだけに、尚更に雄二の中では大きな疑問がわき上がる。
何故、そこまで強い気持ちを持つことができるのか、と。

「……だから……本当に嬉しい……他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが……」

そこからは言葉にすることができずに、彼女はまた静かに泣き始める。
会場からはもらい泣きをしたような音が聞こえ始め、神聖な雰囲気に包まれていく。

「やって、良かったね」
「……（コクコク）」
「うむっ。雄二もここは、ビシッと決めるべきじゃな」
「そうよね……もしあれが、アキとウチだったら……」
「そうですね……もし、私と明久君だったら……」

企画した全員が、おそらく私情抜きでこう思っていた。
そして司会をやる光一も、同様の気持ちである。

目を伏せて乱暴に拭うと、表情を引き締める。

＜どうやら、嬉し泣きのようですね。花嫁は本当に一途な方のようです……さて、花婿である坂本雄二さん。お応えをどうぞ＞

雄二の返答を待つために、会場が固唾をのんで見守り始める。
しかし雄二の中では……

「翔子、俺は……」

「あーあ、つまんなーい！　マジつまんないこのイベントぉ～。人のノロケなんてどうでもいいからぁ、早く演出とか見せてくれな～い？」
「だよな～。お前らの事なんかどうでもいいっての！」

そこへ、場の空気を読まない罵倒が投げかけられた。

「ってか、お嫁さんが夢ですっ、って。オマエいくつだよ？　なに？　キャラ作り？　ここのスタッフの脚本？　バカみてぇ。ぶっちゃけキモいんだよ！」
「純愛ごっこでもやってんの？　そんなもん観るために貴重な時間割いてるんじゃないんだケドぉ～。あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない？　ギャグにしか思えないんだケドぉ～！」

＜お客様、イベントの途中ですのでお静かにお願いします！＞

今にも殴りかかりたい気で満ちていた光一だったが、ステージが台無しになる以上は抑える事に。

「うっせえな！　コントなら余所でやれ！！」
「え～っ！？　コレってコントなのぉ？　だとしたら、超ウケるんだケドぉ～！」

「ちげえねえな！　ぎゃはははははは！！」

口々に文句を言い、翔子を指さして笑い始める2人組。
光一は我慢しきれず、懐に忍ばせたエアガンとスタンガンを取り出そうとするが……

＜んだとテメェらっ！　もういっぺん言って見やがれ！！＞
＜あ、明久君！　落ち着いてっ！　ステージが台無しになっちゃいます！！＞
＜そうじゃ明久よ、ここで暴れればそれこそ大問題じゃぞ！＞

そんな放送が入り、誰かが暴れるような音で光一は正気を取り戻す。

＜っ！　きっ霧島さん！？＞

「えっ……？」

ふと見た先では、壇上から花嫁は姿を消しており、ブーケとヴェールだけがその場に残されていた。
それを雄二がゆっくりと拾い上げ、少し湿って重くなったヴェールの重みを感じて一言。

「……はぁっ、やれやれ」

「霧島さん！？　霧島翔子さーん！　みなさん、花嫁を探してください！！」

スタッフがバタバタと駈けだし始める。
大がかりな準備等をしてきたのに、たかが2人の所為で中止にまで

追い込まれた以上、お偉方は顔を青ざめるだろう。

「坂本雄二さん！　霧島さんを一緒に探してください！」

スタッフが1人、雄二に駆け寄って説得し始める。

が、興味なさそうに一言。

「悪いが、パスだ。面倒だし、便所にも行きたいしな」

「そうですか……便所でしたら、あちらですよ？」

「いや、マジでさっきのウケたな！」

「うんうん！　私……結婚が夢なんです……どう？　似てる？　可愛い？」

「ああ、似てる！　けど……キモいに決まってんだろ！」

「だよね～！」

雄二の眼を見て、駆け寄ったスタッフ……光一は、何をするつもりなのかを悟った上での言葉。

それを聞いて、雄二は笑みを浮かべた。

「……わかった。ありがとう」

「それと、こちらを」

翔子が持っていた、大型の鞄を雄二に手渡す。

「これ……そうか。態々すまなかったな」

「では、失礼いたします。翔子さーん！　霧島翔子さーん！！」

と、スタッフは再度花嫁探し。

そして花婿は……

「さて……この衣装、ボロボロにしちまうな。弁償とかしなきゃいけないか？　……まあいいか」

と、駆け出す雄二を見て、笑みを浮かべる光一。

「光一、どうだった！？」

「いや、見つからない……雄二は他に用事があるっつって帰っちまった」

「そんな！　追い掛けて一緒に捜させないと！」

「まあ待て明久」

「ちょっとそこまでツラぁ貸せ！」

そこで、聞こえてくる雄二の怒声。

「ほらな」

それですべてを悟った明久。

「あっ……じゃあ、僕達の出る幕はもうなさそうだね」

「んじゃ、後は雄二と霧島の問題だし、ここからはあいつら次第って事で」

「そうだね。じゃあ皆にもう帰るって伝えないと」

こうして、彼らの長い一日は幕を下ろした。

そして、週明けの学校にて。

「おい、明久に……どうしたんだ光一？」
「なんか、如月……買い物から帰ったら、いきなり優子に関節技の実験台にされた」
「？　よくわからんが、お前も災難だな。まあそれより如月グランドパークでは、随分と色々とやってくれたな？」
「あはは、何を言ってるのさ？　僕は一日家でゲームをやっていたんだよ？　如月グランドパークになんて行ける訳がないじゃないか」
「そもそも何で俺達が、そんなところ行かなきゃいけないんだよ？」
「……そうか。お前らがシラを切ると言うならそれでもいいだろう」
「な、何を言ってるのさ。変な奴だなぁ～」
「だよな」
「ところで、お前たちにプレゼントがある」
「え？　なになに？」
「？　なんだよ、珍しいな」
「今話題の恋愛映画のチケットだ。気になる相手がいれば、一緒に行くと良い」
「ペアチケット？　俺達がそんなの貰っても、使い道に困って……」
「それじゃあな」

雄二は強引に2人の手にチケットを1枚ずつ握らせ、離れて行った。手に握らされたチケットを見て、明久と光一は顔を向き合わせる。

「ねえ光一、どうするこれ？」
「誰か誘うか？　まあ相手なら……」
「あ、アキっ！　そう言えばウチ、週末に映画を見たいと思っていたんだけど！」
「あ、明久君！　私も調度見たい映画があったんですけど！」
「ほぇ？　何々？　どうして2人してそんなに殺気立ってるの！？」

「良かったな明久、居るみたいだぞ？　まあちょっと落ち着こうな2人とも、まずは明久の……」
「あ〝あ〝っ！　もげちゃう！　人体の大事なパーツが色々と取れちゃうよ！！」
「っておーい！」

悲鳴を上げる親友を助け出そうと、一歩前に踏み出す光一。
……そこへ。

「へえっ、映画のペアチケットなんて面白い物もってるね？　ボクと一緒に行ったら、映画終わった後で特別実習をしてあげるよ？」
「……その前と後で、ヨガを伝授してあげるわ」
「え！？　なっ、何で工藤さんと優子がFクラスにいるんだ？　それに優子、この前チケットをやってから偉く不機嫌だけど一体……」
「さあ、まずはタコのポーズをとって貰うわ」
「ちょっ、タコってなんだよ！？　マジで待って、脊椎動物の枠から外れたくない！！」

文月学園旧校舎に、断末魔による大合唱が響き渡った。

「全く……余計な事企むからだ、大バカ野郎どもが」

第二十九問　（プール編　プロローグ）

「……土屋と」
「工藤の」
「「性活小噺っ！」」

ドンドンパフパフ～♪

「今字が違わなかったか？」
「違わないよ。だってこの二人だもん」
「はい、アシスタントの吉井君と久遠君、ちょっと黙っててね？　このコーナーでは日々の生活に根差したちょっとエッチな小噺をボクこと工藤愛子とムッツ……」
「……土屋康太」
「ムッツリーニ君が、吉井君と久遠君のアシスタントの元で紹介していくという物です」
「……最近、本名を呼ばれない……」
「だってお前目立たないし、ムッツリーニだって事が存在の証明だろ」
「……光一は最初、本名で呼んでた筈」
「では、今日のテーマですが……」
「……本名……」
「……“シャワーの正しい使い方”です」
「……っっ！！（ドバッ！）」
「えぇっ！？　もう鼻血！？　ムッツリーニ君、想像力豊かすぎない？」
「……構わず続けろ」
「う、うん。えっと、ちょっとエッチなおはなしという事なので、ボクの体験談をお話します」

ドンドンパフパフ～♪

「……明久、録音の準備は？」

「……万全に決まってるじゃないか」

「流石に行動が早いね？　……まあいいや。実は先日、学校帰りに雨が降ってきて」

「……っ！（だらだら）」

「運の悪い事に、その日はふざけていたらプールに着替えを落としちゃって、下着がビショビショになっちゃったんだ」

「……っっ！！（ダバダバ）」

「下は流石に我慢して吐いていたんだケド、上は……ってムッツリーニ君！？　もう2リッター位血が出ているみたいだけど、本当に大丈夫なの！？」

「……構わずに、続けるんだ……っ！！」

「そ、それで、雨でシャツが透けてきちゃって」

「……っっっっ！！！（ブシャァァアア）」

「おっ、おいおい、大丈夫かよ！？」

「救急車手配しないと！」

「……大丈夫」

「やっぱりこの企画無理があるよ！　まだシャワーの話に入っていないのに、相方がグロッキーになってるんだもん！」

「……死しても尚、魂で聞き続ける……っ！」

「そんなの無理に決まってるでしょ！？　とにかく今回はこれで終わり！　それではまた次回お会いしましょう！　お元気でー！」

「……続きが気になる」

「それより先に保健室！」

ピーポーピーポー！

「あれ？　救急車呼んだの？」
「いや、その出血量だったらな……それより、話の続きを聞かせてくれない？」
「そうそう。雨でシャツが透けた先を是非……」

ガシッ！　×　3

「ひっ姫路さんに美波!?　……あの、僕をどこへ連れていくの？　まさかあの先にある拷問器具を使うんじゃないよね!?　まっ、待って!!」
「あの、優子？　その、せめて話を……まっ待て！　その関節はそっちには曲がらな……」

“雄二&翔子結婚大作戦”から一週間後。
いつも通りに平穏な週末の夜、光一と雄二は明久の家に泊まりで遊びに来ていた。

「あれ？　雄二、何か買って来たの？」
「食いものだ。お前の家にはろくなものがないからな」
「まあ確かに、あっても良くてパンの耳や白米、最低で砂糖と油だからな」
「少しずつだけど、生活は改善してるよ？　いつまでも光一に迷惑かけるわけにもいかないし」

雄二は買って来た物をテーブルに置き、光一も自分で用意した物を準備し始める。
ちなみに光一のメニューは……。

・サイダー
・冷やし中華
・つけ麺

「へぇ～っ。差し入れなんて、随分気がきくね」
続いて雄二が取り出したのは、以下のメニュー

・コーラ

・サイダー
・カップラーメン
・カップ焼きそば

それを見て、明久は摂取できるカロリーに喜ぶ。
ちなみに明久の勘では、雄二はやきそばとコーラを選ぶと当たりを付けていた。

「それで、雄二はどっちにするの？」
「俺か？　俺はコーラとサイダーとラーメンとやきそばだ」
「全部じゃねーか」
「雄二キサマ！　僕に割り箸しか食べさせない気だな！？」

そのセリフに、流石に雄二も光一も若干引いた。

「待て！　割り箸だけでも食おうとするお前の思考に一瞬引いたぞ！？」
「確かにビニール袋よりは、食べ物に近いのは事実だが……」
「というか、割り箸がないと俺は素手でラーメン食うはめになるだろうが。心配せんでも、お前の分もちゃんと買って来てある」

と、１つ目の下敷きになっている、２つめのビニール袋に明久は気がついた。

「なんだ、やっぱり僕の分も買って来てくれてたんじゃないか」
「まぁな。先週末は世話になったからな、感謝の気持ちだ」
「うんうん。そう言ってもらえると、僕も苦労した甲斐があるよ」

下敷きになっていた袋を受け取り、その中にある物を喜々として取り出す明久。

・こんにゃくゼリー
・ダイエットコーラ
・ところてん

「僕の貴重な栄養源がぁぁーっ！」

全てカロリー０のダイエットメニューであった。

「気にするな。俺の感謝の気持ちだ」
「くそっ！　全然感謝していないな！？　あの計画を実行するのに、僕がどれだけ苦労したと思っているんだ！」

明久がダイエットコーラを取り出し、構える。

「うるせぇ！　お前こそ、あれ以来俺がどれだけ苦労しているのか知っているのか！」
「ううん、全然」
「お前が言うな光一！　丁度良い、テメエとも一戦交えてやる！」

対する雄二は、普通のコーラとサイダーを構える。
光一はそれを見て不敵に笑い、持ってきていたサイダーを取り出す。

「……やる気かい、雄二？」
「ああ。お前達とは決着を付ける必要があると思っていた所だ。上等だ。早撃ちでこの俺に挑むなんて、無謀もいい所だ」
「ハッ！　口だけは達者だな！」

互いに相手を睨みつけ、牽制し合っている。
ここで下手な動きを見せれば命取りになる、まさに一色即発の空気。

……ピチョン

「「「……っ！！」」」

その音をきっかけに、３人は一斉に動き出す。
静から動へ、にらみ合いから闘いへと動く。
先手は光一がとり、それに続くようにほぼ同時に明久と雄二が動く。

シャカシャカシャカシャカ（３人がペットボトルを振る音）

ブシャアアアアアアアア（お互いに向けて炭酸飲料を射出する音）

バタバタバタバタ（３人が目を抑えてのた打ち回る音）

「「「目が、目がぁぁぁああっ！」」」

３人して、炭酸が目にしみるのか、苦しみにのたうちまわり始めた。

「やってくれるじゃねぇか、明久に光一！」
「雄二こそ、流石は僕がライバルと認めた男……！」
「ああ……だが、ここからが本当の勝負だ！」

そして雄二はやきそば、明久はところてん、光一はつけ麺を武器にして闘いへと身をゆだねていく。

――しばらくお待ちください――

「……雄二、一時休戦にしない？」
「……そうだな。この戦いはあまりにも不毛だ」
「……というか、やる意味あったのかな？　食い物を粗末にしただけな気が」
３人とも、互いの食べ物でべたべたになっていた。
「明久、シャワー借りるぞ？」
「うん。タオルは適当なの使っていいよ」
「言われなくてもそうする」
そう言うと、気持ち悪そうに来ているシャツをつまみながら雄二が脱衣所へと消えていく。
続いて、バサバサと景気良く衣服が脱ぎ捨てる音が聞こえてきた。
「ところで明久、ガスは大丈夫だろうな？」
「え？　……あっ、払うの忘れてた」
『ほわぁぁーっ！！』
ガチャッ！　ズカズカズカ
「……もっと早く思い出せやコラ」
腰にタオルを巻いた雄二は、寒さで全身に鳥肌を立てていた。
「ごめんごめん。えっとね、心臓に近い位置にいきなり冷水を当てると体に悪いから、まずは手や足の先にかけてから徐々に心臓へと……」
「誰が冷水シャワーの浴び方を説明しろって言った！？」

「何熱くなってるのさ雄二。そうだ、冷たいシャワーでも浴びて冷静に」
「浴びたから熱くなってるんだボケ！　……くそっ、このままじゃ風邪ひいちまう」
「けど、湯が出ない事実は変わらないだろ？」

週末で、しかも時間は遅い。
だからガス会社はもうやっておらず、どんなに急いでも明日以降になる。

「やれやれ……仕方ない、2人とも外へ出るぞ」
「外？　俺か雄二の家にでも行くのか？」
「それでもいいけどな。どうせならシャワーだけじゃなくて、プールもある所に行こうぜ」

近くにスパリゾートなんてあったかどうか、2人は脳内を検索し始める。
が、ヒットはなく余計に疑問符が浮かび上がった。

「ああ。シャワーもプールもあって、ここから近くて、尚且つ金もかからないところがあるだろうが」
「ええ？　おいおい、そんな好条件が……ああっ、あそこか」
「オッケー、すぐに用意するよ。水着はどうするの？　光一は僕のサイズが合うから貸すけど？」
「ボクサーパンツで泳ぐさ。水着と大して変わらないだろ」
「じゃあ貸してくれ」

手早くすまして、3人は戸締りをした後に外へ。
そして目的地へと駈けだして行った。

その2時間後

「……で、何か言い訳はあるか？」

場所は文月学園の宿直室にて。
3人は揃いもそろって、鉄人こと西村教諭の説教を受けていた。

「「こいつが悪いんです！」」

綺麗にハモる明久と雄二の声。
お互いを指差す姿勢まで、全く同じだった。

「雄二がまともな差し入れを持ってこないからだろ！」
「ガス代を払い忘れていたお前が悪い！」
「水が出るだけマシだろ！」
「水すら出ない事もあるのか！？」
「おい落ち着けよお前ら！　ちょっ、マジで！」

目の前でボルテージが上がっている鉄人を見て、光一は焦って2人を止めようとする。

「……もういい。よくわかった」

と、その様子に呆れ果てた鉄人は、額に手を当てため息をついた。
2人は特に気にはしなかったが、光一にはそれが嵐の前兆のように思えてならなかった。

「わかってもらえました？　それは良かったです」
「んじゃ、わかって貰えたところでそろそろ帰るか。いい加減時間

も遅いしな」
「そっそうだな？　それじゃ、失礼しま……ぐえっ！」
頭を下げて出て行こうとした3人の首を、その太い腕で抱え込む鉄人。
ぐいぐいとすごい力で締め付けられ、3人は下手な抵抗をすれば首の骨を折られかねない。
自己防衛本能が弾きだした答えに、大人しくなる。
「そう急ぐ事もないだろう3人とも。帰るのは恒例のヤツをやってからでも遅くはないよな？」
「あっ……やっぱり……」
「そっそうですね……是非、そうさせてもらいます……」
「お、俺も、そうさせてもらおう……」
こうして、3人は朝まで鉄拳付きの補習を受ける羽目になった。

「てな事があって、おかげで散々な週末だったよ」
週明けの教室、朝のＨＲが始まるまでの時間。
いつものメンバーで卓袱台を囲い、降りかかった不幸についての説明。
「そうじゃったか。それは災難じゃったのぅ……」
気遣うように柔らかな表情を浮かべる秀吉。
「おまけに今週末はプールの罰掃除とくれば、気が滅入るな」

「……重労働」

ムッツリーニが明久の隣で、ボソリと呟いた。

「だよね。あんな広い所を掃除なんて、何か褒美が欲しい位だよ」

「褒美という程じゃないが、“掃除をするのならプールを自由に使っても良い”と鉄人に言われたぞ？」

「え？　そうなの？」

「ああ。だから秀吉とムッツリーニも、今週末にプールに来ないか？」

折角の貸し切りなら、と早速2人を誘い始める。

まず最初にムッツリーニが頷こうとして……

「ただし、ムッツリーニにも掃除を手伝ってもらうけどな」

「……」

「なあ雄二、折角だし姫路と島田にも声をかけておこうか？」

「……ブラシと洗剤を用意しておけ」

雄二の言葉に動きを止めたが、光一のフォローにあっさりと頷いた。

「うむ、そうじゃな。貸し切りのプールなぞ、こんな時でなければ中々体験できんじゃろうし、相伴させてもらうかの。無論、ワシも掃除を手伝おう」

「え？　結構大変だと思うけど、いいの？」

「うむ、お安いご用じゃ」

と、快諾する秀吉。

明久にしてみれば、水着姿を見せてくれるのだから来てくれるだけでも感謝の代物。

なのに掃除を手伝ってくれるのだから、なんていい奴なんだろうと心の底から思った。

「んじゃ、後は……おーい姫路に島田。ちょっといいか？」
「どうしたの久遠？　何か用？」
「呼びましたか、久遠君？」

まずは美波が、それに続いて瑞希もやってくる。

「2人とも今週末は暇か？　学校のプールを貸し切りで使えるんだけど、良かったらどうかな？」
「「え……？」」

プール、という単語で2人が一瞬ビクンと反応する。

「あ、さては2人とも予定があったりする？」
「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな……？　プールって言うと、やっぱり水着だし……」
「そ、そうですよね。水着ですよね……その、えっと……」

美波は自らの胸部へ、瑞希は腹部へとそれぞれ視線を送った。
水着となれば、色々と見られる訳なので自身の悩みの個所が晒されるのに、少々躊躇いを感じていた。

「女には女の悩みがあるって所か？　……ついでに言うと秀吉も来るぞ？　明久に水着を見せに」

からかうような光一の言葉で、2人は急に目つきを変えて秀吉に鋭い視線を送った。

「ひ、卑怯よ木下！　自分は自信があるからって！」
「そ、そうですっ！　木下君はズルいです！」
「？？？　お主らは何を言っておるのじゃ？」

突然非難される事に困惑する秀吉。
渦中の明久も、当然ながら疑問符を浮かべていた。

「で、どうするんだ2人とも？」
「い、行くわ！　その、イロイロと準備をして……」
「そ、そうですね。準備は大事ですよね」

複雑そうな顔をしつつ、2人は一応肯定の意を示した。

「光一よ、姉上を誘わんのかの？」

姉上とは、秀吉の姉であり光一の想い人である木下優子。
最も、光一はとっくにフラれてる訳だが……。

「別に誘う理由ないだろ。そもそも優子は、明久や雄二達と殆ど面識ないんだし」
「あれ？　吹っ切れたの？」
「あの清水とか言う暴走ドリルの領域に入りたくないだけだ」

余談だが、美春は美波と融合がしたい一心で、光一の持つ融合用の腕輪を狙う様になっていた。
自分以外に使えないと言っても聞こうともしない為、殆ど力尽くで追い返しているのだが……。

「……光一なら、きっといい人が見つかるよ」
「そうね……ウチに出来る事があったら何でも言って？　協力は惜

しまないから」
「ありがとう……あと島田、そう言うなら明久を力尽くでデートに連れていくのはやめような？」
「……そうね」

流石に美春がとはいえ、自分絡みで散々迷惑をかけてる以上はと、素直にそう言った美波だった。

「さて、重い話はここまでだ。雄二、霧島にも声をかけておけよ？」
「……言われなくてもそのつもりだ」
「あれ？　随分と素直な返事だな？」
「うんうん。雄二も大人になったね」

憮然とした態度で、雄二が意外な返事をしたことに光一は疑問を感じ、明久はうんうんと頷く。

「いや、そういう問題じゃない」
「ん？　そういう問題じゃなかったら、どういう問題だ？」
「いいか、想像してみろお前ら。俺の立ち場で、後々になってからこの事が翔子に知られるという状況を。

雄二の真剣な顔につられ、２人は真剣に想像をしてみた。
雄二の立場で、水着の女子とプールで遊んだという事実が、翔子に知られた場合。

「樹海の奥……いや、湖の底……」
「深海魚の餌……いや、溶岩の不純物……」
「俺の死体の処理方法とその末路まで想像する必要はないが、まぁそんなところだ」

と、２人して納得した事情だった。
明久にしてみれば、翔子の水着姿を見る事が出来るのだから、願ったりかなったりだが。

「とにかく、全員オッケーなようだな。んじゃ、土曜の朝１０時に校門前で待ち合わせだ、水着とタオルを忘れるなよ」

雄二のシメの台詞と同時に、鉄人が教室のドアを開ける音が響いた。

そしてその週末。

「おはよー。絶好のプール日和だね」

雲１つない快晴の青空の下、明久は校門に立つ秀吉と光一に瑞樹、そして……。

「よう明久。今日は目いっぱい楽しもうな？」
「おはようじゃ明久、良い天気じゃな」
「おはようございます明久君、今日は良い１日になりそうですね」
「おはよう吉井君」
「あれ？　なんで秀吉のお姉さんが？」

ふと、女子制服を纏った秀吉かと思いきや、彼の姉の優子がそこにいた。

「光一と秀吉が話してるのを聞いたから、飛び入りで悪いけど折角だから連れて来て貰ったのよ」
「そうなんだ。じゃあ折角だし、目いっぱい楽しまないとね」

そして、或る人影に気がつく。

「ムッツリーニ、おは……」

「……！！（カチャカチャカチャ）」

鬼気迫る表情で、カメラの手入れをしているムッツリーニ。
彼にしてみれば、ここは絶好の撮影チャンスでもある。
明久に構う暇などないと言わんばかりに、カメラに集中していた。

「ムッツリーニ、準備は良いけど無駄になるだろ？」

「……なぜ？」

「いや。だってムッツリーニはどうせ鼻血で倒れるだろうし」

「そうだよね。チャイナドレスどころか、葉月ちゃんの着替えですら鼻血の海に沈む位だもん」

という明久の言葉に、ムッツリーニは肩をすくめて見せた。
そして大きなスポーツバッグを手に取り、２人の前に突きつける。

「……甘く見て貰っちゃ困る」

と言いながら、そのスポーツバッグを開けて２人に見せる。

「……輸血の準備は万全」

「どこで手に入れたかは聞かないが、ある意味準備が良いな？」

「うん、最初から鼻血の予防を諦めてる当たりが男らしいよね」

鞄いっぱいに入っていた携行用の血液パックをみて、とりあえず救急車は必要ないなと思う２人だった。

「……つくづく、異常なメンバーね」

「まあまあ。趣味は異様かもしれませんが、良い人たちですよ？」
「……姫路さんも、すっかりなじんでるわね？」

“朱に交われば紅くなる”

その言葉を実感した優子だった。

「準備と言えば、秀吉は新品の水着を買うとか言ってたよね？　忘れずに買って来た？」
「うむ。無論じゃ」
「ちなみに買って来た水着じゃが……」
「……！！（くわっ！）」

秀吉の言葉にムッツリーニが目をむく。
当然明久も表にこそ出さないが、興味津々。

「……トランクスタイプじゃ」
「「バカなぁぁああっ！！」」
「……何してるのかしら？」
「Fクラスは女子が2人しかいないんだから、ある意味飢えてる状態なんだよ。増して秀吉は優子と瓜二つの童顔の女顔で、しかもスリムと来てるんだから」

状況についていけない優子に、光一が呆れながら事情説明。

……タタタタッ！

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ！」
「わわっ！？」
「もう葉月ってば、アキがビックリしてるでしょ？」

明久の背中に、葉月が飛び付いた。

「あれ？　葉月ちゃんか、久しぶりだな」

「あっ、鉄砲のお兄ちゃん。エヘヘー、2週間ぶりですっ」

「鉄砲のお兄ちゃん、だって」

天真爛漫を体現してるように笑う少女、島田葉月。

明久を好いており、婚約者を自称する少女。

「バカなお兄ちゃんは冷たいですっ。酷いですっ。どうして葉月は呼んでくれないんですか？」

「あ、うん。ごめんね葉月ちゃん」

「……呼んだら呼んだで、明久がどこぞのある人物に八つ裂きにされるだろうがな」

「……どうしてFクラスはこうも常識を足蹴にする人達ばかりなのかしら？」

ボソリと呟いた光一の台詞に、正直自分の常識を疑い始める優子だった。

「家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃって。どうしてもついてくるって駄々こねて聞かないもんだから……」

と、美波がため息交じりに呟く。

「別にいいと思うけどな？　飛び入りがあって困る理由もないし」

「それもそうだけど……あれ？　坂本はまだ来てないの？　ウチが最後だと思ったのに」

「いえ、もう来てますよ？　今職員室にかぎを借りに行って……あ、丁度戻ってきたみたいです」

瑞樹の説明の最中に、校舎の方から雄二と翔子が歩いてきた。

「おはよう雄二、霧島さん」
「おう。きちんと遅れずに来たようだな」
「……おはよう。あれ、優子？」
「あっ、代表」
「お兄さん、おはようです」

雄二の粗野な外見に物怖じもせず、元気よく挨拶をする葉月。

「ん？　ちびっ子に木下優子も来たのか？」
「ちびっ子じゃないですっ、葉月ですっ！」
「ええ。折角だからね」
「んじゃ、早速着替えるとするか。女子更衣室のカギは翔子に預けてあるからついて行ってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の言葉に従い、一旦メンバーは男女に分かれる。
瑞希と美波、優子は翔子に。
明久と光一とムッツリーニと秀吉と葉月は雄二に。

「……ん？　こらこら、葉月ちゃんと秀吉は向こうでしょ？　霧島さんについて行かないとダメだよ」
「えへへ。冗談ですっ」
「ワシは冗談じゃないのじゃが……？」

完全に女として認識されてる事に、改めて実感した秀吉だった。

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下」
「し、島田！？　ついにお主までそんな目でワシを見るように！？」
「ちょっと島田さん！　秀吉は……」
「あの……それなら、木下君は1人でどこか別の場所で着替えるっていうのはどうですか？」
と、おずおずと手を挙げて提案する瑞希。
というより、自分の常識がことごとく無視されてる事に、頭を抱える優子。
「……秀吉、あんた女って認識されてるって言う話、本当なのね？」
「いや、前からだろ？　ガキの頃から男からのラブレターは全部秀吉宛てに行ってたし、優子には一通も……」
「代表、カギ貸して？」
翔子からカギを借りて、女子更衣室のカギを開け始める優子。
そして光一の腕を掴んで、そのまま女子更衣室へと連れ込む。
「あの、どうして俺を女子更衣室に？　それに俺の腕を掴んで……まっ待て！　その関節はそれ以上……」
断末魔が響き渡った。
「……ねえ、何で光一って秀吉じゃなくてお姉さんの方を、あそこまでショック受ける位好きになったのかな？」
葉月の耳を抑えながら、ふと思う疑問をつぶやいた明久。
「すまんが、俺にも全然わからん」
「……（コクコク）」

「その前に、ワシが比較される事を疑問に思わんかの？」

その数秒後、光一が気を失った状態で放り出され、その中で優子が返り血を拭っていた。

「さ、早く着替えましょ？　時間がもったいないし」

「あっ、ああ、そう……だな。明久、外された関節を入れてから運んでやれ」

「そっそうだね。待ってて光一、今治してあげるからね？」

第三十問

～文月新聞　特別コラム～

鉄拳人生相談

「さて、このコーナーは鉄拳先生事、この私西村宗一が諸君の悩みに応えるという物だ！」

「大丈夫かな？　脳筋の鉄人に」

「大丈夫じゃないか？　生活指導が俺達問題児にやる鉄拳措置しか知らんとも思えんし……それよりどうして俺達がここでもアシスタントなんですか？」

「問題児筆頭であるお前達2人に、俺が生活指導教諭としていかに生徒の事を見据え、真剣に考えているかを見せる為だ。そうすれば、少しは態度がマシになるやもしれんしな」

「いえ、見せる事は出来ない上に、俺達の相手してる方が絶対にまだマシだと思います。では最初の悩みをどうぞ」

「久遠、今すぐ謝るか血液型を俺に教えるか、そのどちらかを選ぶ権利を与えてやろう」

「とりあえず、このはがきを読んで貰う事を選びます」

3年生　T村Y作さんのご相談

『鉄拳先生、ボクの悩みを聞いてください。実は僕には好きな人がいます。その人はとても可愛らしくて人気があります。ですがそのK下H吉さんはどうやら戸籍上では“♂”の様なのです。これは同性愛になってしまうのでしょうか。先生、どうしたらいいか教えてください』

「どうですか？」
「……すまなかったな久遠。まさか、お前達以上に困る事態が引き起こされるとは」
「……T村ってまさか」
「……君が好きになった相手には、おそらく双子の姉が居る筈だ。容姿に惚れたのであれば彼女に想いを告げる事だ。容姿ではなく内面に惚れたのであれば……冷静によく考えなおす事だ」
「え？　どうしてです？　秀吉は“秀吉”でしょう？」
「ああ、そう言えばあったな。秀吉は第３の性別“秀吉”だって噂が」
「決してそんなバカげた説に惑わされない様に！　君が健全な学生生活を送れるように祈っている！」
「では次は……はいどうぞ」

２年生　K保T光さんのご相談

『最近、寝ても覚めても僕の頭から離れない人がいます。彼……Y井A久君が笑う姿を見るとボクも幸せな気持ちになり、彼が沈んだ表情をしているとボクも悲しくなります。相手は同性なのですが……この気持ちは恋愛感情なのでしょうか』

「君はここ最近の間に、強く頭を売っていないだろうか。記憶にないとしても念の為に病院で診察を受ける事を推奨する。同性愛云々はその後だ」
「なんで迷いもなく即答なんですか？」
「そうとしか思えんからだ。久遠、次だ」
「あなたも明久がらみだとどうもおかしくなりますね……」
「え？　光一、どうして僕が絡むの？　それに、なんかさっきから寒気が止まらないんだけど？」
「それはお前が正常である証拠だ。では、次は……うっ」

「いきなり不安にさせるな！　良いからよこせ！」

2年生　S水M春さんのご相談

『私には1年生の頃からずっと好きなお姉さまが居ます。ですが、最近そのお姉さまが悪い男に騙されています。どうしたらその男とその親友の物騒な男をせん滅できるか教えてください』

「貴様らには同性愛以外の悩みはないのか！！」

「以上です」

「……引き受けるんじゃなかった。まさか吉井達がまだまともに思える日が来るとは」

「……俺達も少しは自重するか？」

「……そうだね」

「それだけでも収穫と考えるか……」

文月学園のプールサイドにて。

「光一、もっと鍛えた方が良いんじゃないか？」

「うるさいな。別にいいよ、そんな暑苦しい身体になるなんて願い下げだ」

「負け惜しみにしか聞こえんな」

たくましい肉体を堂々披露する雄二とは逆に、上にパーカーを羽織る光一と明久。

全員がトランクスタイプの水着を纏っているが、その中で光一が４人の中でも貧弱な体躯。

「雄二、折角のプールでそう言う事言わないでよ。気分がそがれるじゃないか」

「まあそうだな。こんな事で時間つぶすのもバカらし……おっ！誰か来たぞ？」

不意に雄二が呟き、全員が顔を向けると小さな人影が駆け寄ってくるのが見えた。
その姿は紺色の水着を着た少女、葉月が……

「どどどどどどどどうしよう光一！？　あれってスクール水着だよね！？　そんなものを着た小学生と遊んでいたら、逮捕されたりしないかな！？」
「……弁護士を呼んでほしい（ボタボタ）」
「あのな……落ち着け2人とも。小学生の水着姿でそこまでとりみだすな」
「というか、別にやましい事してる訳じゃないだろ？　後ムッツリーニ、小学生相手に鼻血垂らすな」

雄二の冷静なツッコミと、光一の呆れたかの様なツッコミが入った。

「お兄ちゃん達、お待たせです」

と、息を弾ませて駆け寄ってきた葉月。
2人はある程度冷静になる様に……。

「懲役は2年程度で済みそうだね」
「……実刑はやむおえない（ボタボタ）」

……いや、冷静ではなかった。

「お前ら冷静なフリしてるだけだろ」
「というか、何かする気なのか！？」
「こ、コラ葉月っ！」

動揺している2人も呆れている2人も、一斉に聞こえた声の方向へ

と目を向けた。
現れたのは、胸元を手で隠している美波。

「お姉ちゃんのソレ、勝手に持っていったらダメでしょ！？　返しなさいっ！」
「ソレ？　……何のことだろ？」
「あぅっ、ズレちゃいました」

明久とムッツリーニを動揺させていた、小学生とは思えない胸のふくらみ。
それがいつの間にか、そのふくらみがおなかの方へ行っている。

「ん？　今美波が返しなさいって言っていたのは、葉月ちゃんが付けている胸パッ……」
「この一撃に、ウチの全てを賭けるわ……！」
「まあ待て、落ち着け。その一撃は明久の記憶諸共に存在すら消し去りかねない」

と、明久と美波の間に入って、光一は美波を宥める。

「そうよ島田さん、折角のプールで暴力沙汰なんて起こす物じゃないわ」
「あっ、木下さん。水着、似合うね」
「そっそう？」

と、いつの間にか来ていた優子も同様になだめる。
ついでだが、明久に褒められて頬を赤らめた。

「うぅ……折角用意して来たのに、葉月のバカ」
「別に必要ない気もするけどな。島田のスレンダーな体系にだって、

十分魅力はあると思う」

ぱっと見で、光一は素直な感想を口にした。
美波の格好はスポーツタイプのセパレートである。

「そっそうかな……？」
「スレンダーにはスレンダーの良さってものがある物なんだよ、そうだろ明久？」
「まあ、そうだね。手も足も胸もバストもほっそりしてて、すごくきれいだと脚の親指が踏みぬかれた様に痛いいいい！！」
「今ウチの胸が小さいって2回言わなかった！？」

うっかり発言をした明久は、美波に思いきり足を踏みつけられていた。
光一はそれより、優子の白いシンプルなワンピースに目を奪われている。

「……何よ、じろじろ見て」
「え？　あっ、悪い」

男というのは、特に好きな女性の水着姿に見惚れる物である。

「……のよ？」
「え？」
「だから、アタシの水着の……」

「ぐあああああっ！　目が、目がぁっ！！」

優子の蚊の泣くような声を遮るかのように、雄二の悲鳴が響き渡った。

光一と優子が何事かと思い見てみると、そこには目を潰されのた打ち回る雄二の姿。
そして手をチョキにしている、大人しめな白のビキニに水着用のミニスカートを組み合わせた格好の翔子が立っていた。

「すごいわ……坂本の目を潰す仕草まで綺麗だなんて」
「うん……あの姿を見られるのなら、雄二の目なんて惜しくないね」
「そりゃお前らに実害がないからな！」
「……代表まで」

Fクラスではなく、自分が所属するAクラスの代表である翔子のその行動に、尚更疑問を持つ優子だった。
しかしのた打ち回る雄二を見て、光一は翔子に駆け寄る。

「霧島、雄二の目を潰したら水着の感想が聞けないぞ？」
「それは失敗だった」
「というか、目を潰さなくても塞げばよかったんじゃないか？」
「ふさぐ……そう」

と、何か思いついたのか、頷いて雄二の元へ。

「さて……後は姫路と秀吉ってところか」
「……」

ふと、瑞希の名を出してから落ち込む優子を見て、光一は疑問に思う。

「ん？　どうした優子？」
「“人生は戦い、力こそが正義”……この学園の正義を、今日初めて呪ったわ」

「は？」

訳がわからない……といった表情で優子を見る光一。

そこへ……

「すみません！　背中の紐を結ぶのに、時間がかかっちゃって……！」

駆け足でこちらに来る瑞希の姿があった。

それを見て、大量の出血をして倒れるムッツリーニと、それと同様に出血多量で倒れた明久。

そして……

「Ｗｏｒａｕｆ　ｆｕｒ　ｅｉｎｅｍ　Ｓｔａｎｄａｒｄ　ｈａｔ　Ｇｏｔｔ　ｊｅｎｅ　ｕｎｔｅｒｓｃｈｉｅｄｅｎ，　ｄｉｅ　ｈａｄｅｎ，　ｕｎｄ　ｊｅｎｅ．　Ｄｉｅ　ｎｉｃｈｔ　ｈａｂｅｎ！？　Ｗａｓ　ｗａｒ　ｆｕｒ　ｍｉｃｈ　ｕｎｇｅｎｕｇｅｎｄ！（神様は何を基準に、持つ人と持たざる人を区別しているの！？　ウチに何が足りないっていうのよ！）」

「……えーっと、英語、じゃないな。ドイツ語か？」

「確か島田さんって、ドイツからの帰国子女だったわね？　今度教えてもらおうかしら？」

聞き慣れない言語に戸惑うが、何となく言っている事が実感が出来た光一と優子だった。

「確かにあれはすごい……さて、後は秀吉だな」

「……何だか遊ぶ前から疲れる展開ばかりね。これで秀吉まで妙な事したら、本気で骨の２、３０本は覚悟して貰わないと」

お前も十分非常識だ……と言ったら最後、自分の骨が2、３０本やられてしまう為、口を塞ぐ光一。
秀吉もトランクスだと言ってた事を思い出し、まあこれ以上刺激する事はないはずだと……。

「遅れてすまぬ。着替えはさほど手間取らんかったのじゃが、いかんせん校舎からプールまでが遠くての」

思っていたが、それは見事なまでに裏切られた。

「☆●◆▽□♪◎×（ううん、そんなに待ってないよ秀吉）」
「落ち着け明久、ここは地球だぞ」

秀吉の格好は、確かにトランクスである。
ただし、構成は美波と同じようなスポーツタイプであり、上は肌に張り付く様なショートタンクトップ。
下は飾り気のない普通のパンツの上に、ショートパンツのようなズボンを一番上のボタンを外した状態で重ねている。

つまりは、女物のトランクスタイプ。

「お前も落ち着け優子！　秀吉に悪気はない筈なんだ！！」
「離しなさい光一！　あのバカの格好もそうだけど、何でアタシよりも評価が高いのよ！？」

明久の態度が火に油を注いだのか、今にも秀吉を血祭りにあげんばかりに優子が暴れだす。
光一はとっさに優子を羽交い絞めにして、それを止めようとする。

「ちょっ、誰か抑えるの手伝ってくれ!!　というか秀吉、お前男物と女物の区別位つけろよ!!」
「ち、違うのじゃ！　ワシは本当に男物を買った筈なのじゃ！　きちんと店員にも“普通のトランクスタイプが欲しい”と言ったのじゃぞ!?」
「上がある時点でおかしい事に気付け！　やっぱり俺も行けばよかった!!」

「何だ……？　一体、何が起こってるんだ?」
「雄二」
「わっ！　なっ、何だ!?　この柔らかい感触は、一体!?　……って翔子!?　お前、何してやがる!?」
「目隠し」
「何で抱きかかえてやるんだ!!?」

まだプールにすら入っていないというのに、カオスがその場を支配した。

そして、そのカオスもようやく落ち着いたころ。

「はぁっ……」

光一は優子を宥めるのに大半の体力を費やす事となり、飛び込むことはせずゆっくりとプールに入った。
それを見て、勢いよく飛びこんだ明久は光一に近寄った。

「お疲れだね、光一？」
「そりゃあな……」

何となく光一の苦労を、身体（にしみ込まれた痛み）的に共感してしまう明久だった。

「あの、明久君に久遠君」

そこへ、梯子を使ってそろそろと水に入ってきた瑞希が、2人の近くにやってきた。

「ん？　なに、姫路さん」

「2人は水泳は得意ですか？」

「あ、うん。僕も光一も、それなりに泳げるよ？」

「実は私、全然泳げないんです」

「あ、そうなの？」

2人にしてみれば、すごい速さで泳ぐ彼女の姿は想像できなかった。そもそも身体が弱いと知っているので、運動自体が出来る印象は持ってない。

「ん？　瑞希って水泳苦手なの？」

「失礼だけど、確かに姫路さんは運動ができるようには見えないわね」

「はい、恥ずかしいんですけど、水に浮く位しかできなくて……」

「そう言う事なら、いつも勉強を教えてもらっているお礼に、ウチが瑞樹に泳ぎを教えてあげよっか？」

ちょっと得意気に、美波が胸を張る。

常日頃より教わってばかりの為、意趣返しが嬉しいらしい。

「それじゃ、アタシも教えてあげるわ」

「は、はいっ！　よろしくお願いします！」

そのやり取りを聞いて、２人はほほ笑んだ。
勉強ではＡクラスの瑞希が、Ｆクラスの美波にいつも教えてあげている立場。
ちなみに優子も、Ａクラスレベル。

「こうしてみると、美波がＡで姫路さんがＦみたいだよね」
「当然優子もＡだよな」

と、２人が何となくそう口走った処で……

「「寄せてあげればＢ位あるわよっ！！」」
「「ぐべぁっ！？」」

明久は美波に、光一は優子に三角絞めをかけられ、そこから互いの頭をぶつけるように捻りあげられた。

「「……来年には、きっと」」
「なっ……何の話だよ？　水泳で寄せてあげるって、意味がわからん」
「「え？　……ああ、そう言う事？」」
「２人とも、何だと思ったの？」

折り重なるように浮かぶ明久と光一の言葉に、２人は口を噤んだ。

「……雄二、ちなみに私はＣクラス」
「？　何を言っているんだおまえは？」

その遠くでは、雄二と翔子は（２人にとって）不思議な会話をしていた

ちなみに2人どころか雄二にもわからなかったが、ただ1人ムッツリーニは目を輝かせている。

「……わかったわ瑞希。あんたが泳げない理由」
「え？　何ですか？」
「その大きな浮き輪をずっと付けているから、いつまでたっても泳げないのよ！　外しなさい！　そしてウチに寄越しなさい！！」
「出来れば、アタシも欲しいわね」
「え？　ええ！？」

光一と明久は、その様子を見て邪魔しない方が良いと判断。
互いの顔を見て、思考を読み頷きあう。

「それじゃ俺達、向こうに行ってるから」
「頑張ってね」
「あ、明久君に久遠君っ。なんだか美波ちゃんと木下さんがとっても怖いですっ！」
「ふふふ……瑞樹、それは無駄な脂肪の塊なのよ？　だから、いっぱい運動して燃焼させましょうね？」
「ええ。脂肪は運動で燃焼するものだから、ね？」
「み、美波ちゃんに木下さん。あまりいい事ばかりでもないですよ？　肩が凝って大変ですし……」
「「それでもいいの！　肩こり位我慢するわ！」」

その2人のセリフには、魂が込められていた。
美波と優子は、互いの顔を見合って一言。

「木下さん、あなたとは良い信頼関係が築くことが出来そう」
「優子で良いわ。アタシも美波って呼ばせて」

今ここに、友情が結ばれた瞬間だった。
そして、或る2名にさらなる不幸が約束された瞬間でもあった。

「お兄ちゃん達っ」
「わぷっ!?」
「あっ、葉月ちゃん」

そこへ明久の背に葉月が乗ってきて、明久はこらえきれず沈んでしまう。

「どうしたの？　一緒に遊ぶ？」
「はい！　“水中鬼”をするです」
「水中鬼？　……水中でやる鬼ごっこかな？」

聞いたことない遊びに、2人は首を傾げる。
名称から推測した考えに、面白さを感じる2人だった。

「違うですっ。水中鬼は、鬼になった人がそうでない人を追い掛けるです。それで鬼が他の人を水の中に引きずり込んで、溺れさせたら勝ちです」
「鬼だ！　それは確かに鬼だ！」
「というか、溺れさせちゃダメだよ。危ないから」
「あぅ……ダメですか？」

ちょっと不満そうに、葉月が頬を膨らませる。
光一と明久は互いに顔を見合わせ、どれだけ危険かを教えてあげる必要があるなと伝え合う。

「じゃあ見ててね？　霧島ー！」
「え？　霧島さんを？　……ああ、成程」

「……何？」

光一が呼ぶや否や、すぐに来てくれる翔子。
彼女は運動もできる為、泳ぎも上手い。
とりあえず明久が前に出て、説明をすることに

「雄二と水中鬼って遊びをやって見せてほしいんだ。ルールは簡単で、雄二を水中に引きずり込んで、溺れさせた後で人工呼吸をしたら霧島さんの勝ち」
「……行ってくる」

小さくうなづくと、翔子は魚雷のように静かに、そして速く雄二に水中から接近していく。
とりあえず、光一は雄二に向けて合掌した。

「お？　何だ？　いきなり足が……おわぁっ！？　だ、誰だ！？　誰が俺を水中に（ガボガボガボ）」
「……雄二、早くおぼれて」
「ぶはぁっ！　しょ、翔子！？　何をトチ狂って……！（ガボガボガボ）」

それを見ていた光一と明久は頷きあって、葉月に一言。

「ね？　危ないでしょ？」
「はいです……葉月、水中鬼は諦めるです……」
「じゃあお兄ちゃん達と水鉄砲で遊ぼうか？　たくさん用意してあるから、取ってくる」
「流石鉄砲のお兄ちゃんです」

光一が早速プールサイドに向かおうとしたところで、騒ぎの中心が

近づいてきた。

「明久に光一っ！　テメェラの差し金だな！？」
「うわっ！　ダメだよ霧島さん！　きちんと捕まえておいてくれないと！」
「早くしてくれ！　俺達がおぼれさせられて雄二に人工呼吸されちまう！！」
「……ごめん。雄二、浮気は許さない」
「わっ、お兄ちゃん達、泳ぐの取っても速いですっ」

明久と光一と雄二と翔子の水中鬼、スタート。

「あれ？　プールを使っているのは誰かと思ったら、代表だったの？」
「……愛子？」

翔子が動きを止めて、声のした方に向く。
3人も一旦死闘を中止して、同じ方向を見るとそこにはAクラスの工藤愛子がいた。

「あれ？　確かAクラスの工藤だったな？　どうしてここに？」
「あっ、久遠君じゃない。ボク、水泳部だから」
「え？　今日水泳部は休みの筈だぞ？」
「うん、すっかり忘れていて学校に来てやっと思い出したんだけど……人の声がしたから寄ってみたんだ。ねえ久遠君、良かったらボクも混ぜて貰って良い？」
「何で俺に聞くかわからないけど、別に構わないぞ？　俺達のプールってわけでもないし……げっ！」

ふと見ると、そこにはある珍客が既にいた。

「お姉さまっ！　どうしてプールに行くのなら美春に声をかけてくれないのですか！？」
「美春！？　アンタどうしてここにいるのよ！　プールで遊ぶなんて誰にも言わなかった筈なんだけど！？」
「美春にはお姉さまを害虫から護る為のトクベツな情報網がありますから！」

そこには、何かと襲撃して来る苦手にして反面教師の見本同然である、清水美春がいた。
それを見て光一は、思いっきり苦虫を噛み潰したような顔になる。

「何やら、賑やかになってきたのう」
「元々そうじゃないの……あれ、愛子？」
「あっ、優子……え？　えっと、どっちが優子？」
「白いワンピースを付けてる方だ」

光一はこの2人を完全に見分けるコトが出来る人間である。

「じゃあボクも水着に着替えて来るね？」

スポーツバッグを掲げて、女子更衣室へと向かう愛子。
すると途中で振り向いて……。

「ん～……」
「？」

光一を興味深そうに見つめて、一言。

「久遠君、手伝ってくれる？」

「なっ！？」
「あははっ、冗談だよ。それじゃ、覗くならバレないようにね？」
と言い残し、去って行った。

「何で俺が名指しだったんだ？（雄二、明久、聞いたか？）」
「もしかして工藤って、光一に気があるとかじゃないか？（ああ、本人公認しかとな）」
「良かったじゃない光一（うん。男として、行かない訳にはいかないよね）」

と、３人で笑いあう。
そこへ、光一に迫る殺気。

「ねえ光一、さっき水中鬼がどうとかって言ってたわよね？」
「え？　ああ、そうだけど……え？　ちょっと待て、行こうとしてたならまだしも……（ガボガボガボ）」

と、水の中に引きずり込まれてしまった光一。
それを見て、明久と雄二は……。

「きっ、木下さん、本気でそんな事やったら光一が死んじゃうから！！」
「俺には迷いもなく翔子を嗾けたよな！？　……まあいい。さて」
「……雄二、今動いたら捻り潰すから」
「明久君、手伝いますから“一緒に”久遠君を看病しましょうね？」
「わかってるよ！　木下さん、なんか動かなくなってるから落ち着いて！！」

その後、愛子が水着に着替えて来た時には、ベンチで横になってい

る光一の姿があった。
そばでは明久が瑞希を伴い、本気で心配そうな顔で看病していた。

第三十一問　（プール編　エピローグ）（前書き）

ＰＶ３３００００突破、ユニーク２６０００突破！

ここまで来るなんて、皆さまには感謝してもし足りません。
今後も頑張りますので、ご意見ご感想、こうした方が良いというアドバイスがあればぜひお願いします。

第三十一問　（プール編　エピローグ）

問題　以下の（　）に当てはまる歴史上の人物を答えなさい。

楽市楽座や関所の撤廃を行い、商工業や経済の発展を促したのは（　）である。

姫路瑞希の答え
『織田信長』

教師のコメント
正解です

島田美波の答え
『ちょんまげ』

教師のコメント
日本にはもう慣れましたか？
この解答を見て、先生は少し不安になりました。

吉井明久の答え
『ノブ』

教師のコメント
ちょっと馴れ馴れしいと思います

久遠光一の答え
『アウストラロピテクス』

教師のコメント
この解答で君は小学校からやり直した方が良いと確信しました
西村先生に報告をして、補習強化を義務付けて貰います

しばらくして光一が目を覚まし、明久と雄二の3人でベンチに腰掛ける。

「あのさ、雄二、光一」
「なんだ？」
「ん？」

バシッと水面にビーチボールが叩きつけられる音が響く。
その少し後、ズバンと勢いよくサーブを打つ音が響き渡った。

「僕の気の所為かも知れないんだけど、工藤さんを除いたあの3人偉く険悪な雰囲気で水中バレーやってない？」
「大丈夫だ、俺にも険悪な雰囲気に見える」

「俺にもだ」

3人の目には、ボールよ割れろと言わんばかりに全力で打ち合う瑞希と美波&優子ペア。
瑞希とペアを組んでる愛子だけは、飄々と今の状況を楽しんでいた。

「美波ちゃん、木下さん！　絶対に譲りませんからね！」
「上等よ瑞希！　スポーツでウチに勝とうなんて思わないことね！」
「愛子！　ここは譲らないわよ！！」
「あははっ。随分と躍起だね？　けど、ボクも負けないよ？」

ボールよ割れろ！　と言わんばかりに全力で打ち合う瑞希と美波と優子。
最初は仲良くやっていたんだが、明久と雄二にもわからぬ間に今の状況へと変わっていた。

「で、どういう理由でああなったんだ？」
「わからん……時にお前ら、この前俺がやった映画のペアチケットはどうした？」
「誰か誘おうとすると何故か折檻されるから、優子にやった」
「僕も、美波と姫路さんが随分と見たがってたから、2人で見て来ると良いよって」
「……間違いない、それが原因だ」

光一と明久は、疑問符を浮かべながら互いの顔を見合わせた。
そのあとで、4人のバレーを見て更に疑問符を浮かべる。

「ほぅ……姫路に工藤、島田に姉上のペアでの勝負とは面白いのう。どちらが優勢なのじゃ？」
「ああ、秀吉か。今のところは姫路・工藤のペアが優勢だな」

「んむ？　それは以外じゃな。球技ともなれば、島田と姉上に軍配が上がりそうなものじゃが」
「いや、あれは明らかに……」
ふと、光一は審判に目を向ける。
「あっ！」
「これで15点です！　1セット目は姫路・工藤ペアの勝利です」
「ちょっと清水さん！　あれは明らかに範囲外だったわよ！！」
「審判に問題があるから」
審判をやっている清水美春が手を挙げて、最初の勝負の終了を告げた。
先程から、美波・優子ペアに対してどこからどう見ても、明らかに不利なジャッジを施している
「美春。アンタ、絶対エコ贔屓してるでしょ……！」
「そんな事ありませんお姉さま！　美春はお姉さまの（敗北の）為に全力で（不）公平な審判を行ってます！」
「これにはウチと優子の大切なものがかかってるんだから！」
「はい！　美春もお姉さまの（敗北の）為に全力で（不）公平な審判を行います！　あんなのとデートだなんて、お姉さまの為になりませんから！」
「ちょっと清水さん！　まさかあなたアタシ達を負かせる為に審判を！？」
「では続いて2セット目行きますよ」
その様子を少しの間に眺めて、光一が一言

「あれじゃ2対3だ。審判が敵じゃ明らかに不利どころか敗北決定だ」
「そうだね。幾ら美波や木下さんが上手くても、あれじゃ勝ち目ないよね」
「うむっ。もはや勝負は見えたも同然じゃな」

審判さえどうにかなれば別だが、どうにもそんな気配はない。
2セット目も半ばに迫り、今だ無得点の状況に美波は最後通告に

「……美春、今すぐ霧島さんと審判を交代しなさい」
「ひ、酷いですお姉さま！　美春はお姉さまの（敗北の）為に一生懸命頑張っているというのに、その頑張りを疑うなんて！」
「ヘタな演技はいらないわ。これから“清水さん”としか呼ばれたくなかったら、今すぐ審判を交代しなさい！」
「っっっっっっ！！！？？？　……わかりました。審判を交代いたします」

しぶしぶと審判交代を宣言する美春。
その時……

パァンッ！

「なっ、何だ！？」

そんな時、大きな破裂音がプールに響き渡った。

「あら、ちょっと力を込め過ぎてしまいましたね」
「どうやったらちょっとでビーチボールが割れるのよ！？」
「ではここは引き分けという事で、このチケットは美春が……」
「まさかウチを裏切る様なマネはしないわよね？　清水さん」

「いっ、今すぐボールを探してきます！」

と、ソニックブームを引き起こすようなスピードで、美春はどこかへと去って行った。

プールにはぷかぷかと、ビーチボールだったものが浮かんでおり、それだけが先程の勝負の形跡を残していた。

「さて、どうする？」

「そうだね。少しお腹すいてきたし、何か食べない？」

「じゃあ誰か何か買いに……」

「あ、それなら……」

そこで瑞希が、何かを思い出したかのようにポンっと手を打つ。

そして嬉しそうに、あるバスケットを取り出した。

「っ！　姫路、そのバスケットには何が入ってるんだ？」

「実は、今朝作ったワッフルが３つほど」

「あら、おいしそうね」

「うん、ボクも食べたいな」

と、何も知らないＡクラス２人は無邪気に喜ぶ。

だがしかし、その威力を知る者たちにとっては鬼門だった。

「で、今回はどんな薬品を入れた？」

「大丈夫です。塩酸と硝酸を加えただけですから」

「塩……ねえ姫路さん、それは料理じゃないわよ？」

「しかも塩酸と硝酸って……じゃあこれって王水が材料って事？」

恐る恐る言うＡクラスの２人。

５人どころか、（葉月を除く）全員の顔が青ざめた。

「工藤、俺化学は壊滅的だから間違ってるかも知れないけど……王水って確か塩酸よりも強力な酸だったよな？」
「うん……食べたら間違いなく舌どころか骨髄までやられるね」
「……不味いならわからないでもないけど、有毒は現実では初めて聞いたわ」

必殺料理人“姫路瑞希”の恐ろしさを実感した優子と愛子だった。

その後、明久と光一とで買って来たパンを食べて、落ち着いた後。

「ねえねえ、お兄ちゃん達」
「ん？」
「お兄ちゃん達の中で、誰が泳ぐの一番早いの？」
「誰が……か」

葉月のある言葉で、５人は思案顔に。
それからアイコンタクトを送って……

「第１回っ！」（雄二の声）
「最速王者決定戦っ！」（明久の声）
「ガチンコっ！」（光一の声）
「「「水泳対決っ！！」」」（３人の声）
「「「イェーッ！！」」」（秀吉とムッツリーニの合いの手）

折角だから面白そうという事で、５人はタイトルコール
結構ノリがいい性格をしているのが、彼らのいいところだった。

「明久、ルール説明だ」
「オッケー。ルールはとっても簡単、ここのプールを往復して最初

のゴールした人の勝ちという、誰にでもわかる普通の水泳勝負です」
「へぇ～、面白そうだね。それじゃ、ボクが判定してあげるよ。優勝賞品は、ボクの保健体育“実践”講座って事で」
「実践……ふぉおおおおっ！！」
ムッツリーニは鼻血を吹きだして倒れた。
その傍らで……
「……雄二、浮気は許さない」
「まっ待て翔子！　いきなりあんな事言われてどうはんのぎゃあああああ！！」
アイアンクローをかけられ、悶絶する雄二。
「ねえ瑞樹、さっきのワッフルだけど、３つだけよね？」
「はい。では、１位と２位が食べる事を逃れるという事にしませんか？」
「ええ。食べ物は粗末にしちゃいけないわよね」
という地獄へと突き落される宣告が告げられた。
「はい、行くよ！」
賞品は結局、１位と２位だけが殺人ワッフルを食べる事を逃れるという事になってしまう。
保体の実習はなしになったことに、ほぼ全員が理不尽だと顔をしかめていた。
「……何でこんな事に」

「というか、飛び入りの賞品でなんでこんな目に合わなきゃいけないんだよ……」

そこで、明久は考える。
ムッツリーニは出血で弱っており、秀吉や光一に体力で負ける事はない。
となると、残る脅威は……

「……スタートっ！」
「「くたばれぇぇっ！！！」」

愛子の合図と同時に、明久と雄二はとび蹴りを互いに放った。

「明久、テメエ卑怯な真似してくれるじゃねえか！　この恥知らずが！！」
「その言葉、そっくりそのまま返してやる！！」
「あのさ2人とも、取っ組み合いも良いけど、久遠君と木下君、ムッツリーニ君はそろそろ折り返しだよ？」

ふと見てみると、光一、秀吉、ムッツリーニの順ですでに折り返しが行われていた

「そうは行くかっ！　俺はムッツリーニを止める、明久は秀吉をやれ！！」
「了解！　この際だから光一は諦めるよ！」

2人はプールに飛び込み、雄二はムッツリーニ、明久は秀吉を止めるべく立ちふさがる。

「……もはや水泳対決じゃないわね」

「……事情が事情だから、必死になるのは無理ないかもしれないけど」

その様子を見ていた優子と美波は、呆れたようにそう言った。

「な、何じゃ明久!?　お主は隣じゃろう!?」

「ダメだよ秀吉！　ここは通さない！」

脇を抜けて先に進もうとする秀吉にしがみつく明久。

水中だとうまく捕まえられず、難儀する。

「明久、離すのじゃ！」

「逃がすもんかぁぁあっ！！」

ズルッ！

「……？　なんだろう？」

ふと、突然掴んで居た物から抵抗が無くなった。

その場に足をついて、手に残った物を確認し始める。

「あ、明久君！　何をしているんですか!?」

「え？　……もしかしてこれって、秀吉の……？」

「んむ？　そう言えば胸元が涼しいのう」

ゆっくりと振り向いた先には、上に来ていた秀吉の水着が無くなっていた。

それもそのはず、その上の水着は明久の手にある。

「……死してなお、一片の悔いなし……！！」

「ぷはっ！　よし、1位は……え？　何だ、何が起こったんだ！？」

その間にゴールした光一の眼前には、上の水着が無くなった秀吉とムッツリーニを中心に朱に染まっていく水面

「うおっ！　大丈夫かムッツリーニ！？　この出血量はマジでヤバくないか！？」

「……構わない。むしろ本望……！」

「わああっ！　ムッツリーニが大変な事に！？　血がものすごい勢いで出ているんだけど！」

「とっとにかく、俺は輸血パックを持ってくるから、明久は早く秀吉に水着を返してやれ！！」

「き、木下っ！　早く胸を隠しなさい！　土屋の血が止まらないから！」

「いいいイヤじゃっ！　ワシは男なのじゃ！　胸を隠す必要はないのじゃ！」

「木下君、わがままを言っちゃダメです！　土屋君が死んじゃいます！」

「もう……最後の最後まで、どうしてこう」

「……愛子。救急車の手配、頼める？」

「はーい。やっぱりFクラスの皆は面白いねぇ」

「バカなお兄ちゃん達、いつも楽しそうで羨ましいですっ」

「お姉さま、愛しています……」

結局、ムッツリーニは何度も峠を迎えながら、皆と救急隊員の懸命な延命措置で命を取り留めた。

その週明けの朝。

「……吉井、久遠、坂本、ちょっと聞きたいことがある」

現れるなり朝の挨拶もせず、鉄人が3人を低い声で呼びとめた。

「断る」

「黙秘します」

「言う事なんて何1つない」

3人はそれに対し、拒否の姿勢を取る。

すると、鉄人はプルプルと震え始めた。

「……どうして……どうして掃除を命じた筈なのにプールが血で汚れるんだ!?　鉄拳をくれてやるから、生活指導室で詳しい話を聞かせろ!!」

響くは、教室中を揺るがすような大音響。

それに対し、苦労した3人は心外と言わんばかりに抗議をする。

「説教なんて冗談じゃねぇっ！　むしろ死人を出さなかったことを褒めてもらいたい位だ！」

「その扱いはあんまりだ、俺達は俺達で大変だったんですよ！」

「そうですよ！　本当に危ないところだったんですからね！」

「黙れ！　お前達の日本語はさっぱりわからん！　拳で語り合った方が早い！！」

「ええい、この暴力教師め！　逃げるぞ明久、光一！」

「「了解！」」

「貴様ら、今度は反省分とプール掃除では済まさんぞっ！！」

そして必死に逃げ出す三人。

「あれ？　またあの３人西村先生に追われてるよ」
「多分、あの事じゃない？　まあ今回は事情を知ってるだけに、同情の余地はあるけど」
「……あっ、捕まった」

その様子を見る、Ａクラス３人の眼前では、鉄人に担がれ生活指導室へと連行される３人。
その後、殴りながら３人から事情を聴いた鉄人は一言。

「……今度の強化合宿の風呂は、木下を別にする必要がある様だな」

等と呟いた。

第三十一問　（プール編　エピローグ）（後書き）

次回は再度、光一の持つオリジナル腕輪“召喚獣融合”のオリ話を交えます。

第三十二問　オリ話

問題　以下の問いに答えなさい

マザーグースの歌の中で“スパイスと素敵な物でできている”と表現されているのはなんでしょう。

姫路瑞希
『女の子』

教師のコメント
正解です。流石ですね、姫路さん。
女の子の材料は砂糖とスパイスと素敵なもので、男の子の材料はカエルとカタツムリと仔犬の尻尾と歌われています

吉井明久の答え
『カレーライス』

教師のコメント
女の子は食べ物ではありません

久遠光一の答え
『木下秀吉』

教師のコメント
君は自分の幼馴染をなんだと思っているのですか

「で、腕輪の調子はどうなんだい？」

場所は学園長室。
そこで、明久、雄二、光一、秀吉と、召喚大会時に手に入れた腕輪の稼働記録の報告に。

「僕のは、最近ようやくダブルの扱いに慣れてきました。ただちょっと、副獣の動きが拙い時があります」
「フィールドの方は、科目指定ができるから楽だな。フィールドの広さがもちっと欲しいところだ」
「ワシも同様じゃな」
「そうかい。よし、わかった。じゃあ調整しておくから、明日また取りに来るように」

元々偶然の要素も強いシステムであり、その新技術ともなれば稼働記録は貴重な物である。
手に入ったデータを手に、満足そうな顔を浮かべる学園長。

「……しかし、問題は融合型だ。数名としか融合させてないのはどういう事だい？」

その言葉で、光一は思いきり嫌そうな顔になる。
性への認識が一般とは異なる文月学園において、この能力はいわば鬼門同然だから。

「あのですね学園ババア」
「開口一番に罵倒かい！？」
「……失礼。学園妖怪、この学園はですね」
「さっきより酷くなってるさね！」
「その年でそんな大声を出すと体に悪いですよ？」
「大声出させてるのはお前だよクソジャリ！」

数名（そっち系）が、快く（笑）承諾してくれた物の、妙な悪寒がついて回る状態。
少なくとも、事情も知らずにせかされて黙っている程光一は温厚じゃなかった。

「この文月学園はですね、どういう訳か性別の違いを些細な事と捉える人間が多いのです」
「そうかい。まあどうでも良い事だね」
「ですから、どこぞの間違いなくそっち系の縁がない奇怪で醜悪な老いぼれにはわからない事ですが、男にしろ女にしろ問題が発生するのです」

その姿に明久、雄二、秀吉はいつぞやの訪問時のある人物の姿が思い浮かんだ。

「早い話が、誰と融合するにしろ妙な問題がついて回るから、おいそれと融合出来ないんだよクソババア！　……という訳です」

「……そうかい。まあアタシにはどうでもいい事さね」

光一の中で、キリキリと何かが千切れそうな音が響き渡る。

同伴者3名は、限界が近いなと内心悟っていた。

「でしょうね。その外見じゃ間違いなく独身でしょうし」

「そこまでにしとけ光一、“本当の事”をズバリと言う物じゃない。失礼だろ」

「お前も十分失礼だよクソジャリ！」

「そうだよ雄二。いくら学園長が人間なら寄り付かない様な外見だからって、その言い分は酷過ぎるよ」

「明久よ、お主も十分酷いぞい」

慣れてきたとはいえ、やはりどこか呆れを隠せない秀吉。

「全く、融合型だけが遅れてるんじゃ話にならないさね。ノルマを決めるから、それを達成しないとアンタのエアガンを全部没収する！」

「なっ！？」

「学園に不要物を持ちこむんじゃないよ。それに銃を持ち歩く生徒がいるなんて、評判にも響くんだよ」

最もな話である。

「来週までに１０人分の稼働記録を持ってきな！　それが出来ない

なら、西村教諭に言って全部没収させるからそのつもりで！」
「そっそんな！！」
「出来たら見逃してやるさね。良いかい？　すでに出した稼働記録以外のデータを持ってくるんだよ！　ただし、融合召喚獣の腕輪のデータを持ってきたら話は別だがね」

その次の日の屋上の昼休み。

「……という訳だ」
「あんたも大変ね。そう言う事なら、ウチが協力するわよ？」
「清水に嗅ぎつけられたら面倒だから良い」
「……ごめん」

ただでさえその腕輪の事で狙われているのだから、これ以上の要素は避けたいと思う光一だった。

「でも腕輪となると、やっぱり物理辺りが妥当かな？」

『久遠光一　物理６０１点』

光一は物理においては、ムッツリーニの保健体育に迫る実力を持っていた。
時点で英語、数学がＢクラス級、保健体育はＤクラス並である。
それ以外は大半明久並であり、特に古典、化学、日本史、世界史は一桁の常連である。

「また増えたね光一、今度物理教えてよ」
「ああ。今度ゲーム貸してくれたらな」

「しかし、これに更に２００点プラスとなると姫路しかいないだろ？　俺は生憎無理だし」

『坂本雄二　物理１６８点』

「心配しなくても、個人的に嫌だ」
「俺だって嫌だボケ！」
「……（トントン）」
「ん？　どうしたムッツリーニ」
「……協力する」

友の一大事ともあり、協力の意を見せるムッツリーニ。
光一の得点次第では、もしかしたら腕輪も使えるかも知れない。

「そうか。すまないな、恩に着る」
「……（コクコク）」
「という訳で雄二、フィールド頼む」
「ああ。保健体育で、アウェイクン！」

雄二を中心に、召喚フィールドが形成される。
そして光一とムッツリーニの召喚獣が姿を現し、手を握る。

「それじゃ、ユニゾン！」

『久遠光一（＋土屋康太）　保健体育１２１点＋６８０点』

「……は？」
「……今回は調子が良かった」
「調子がって……まあいいや」

ムッツリーニの召喚獣と融合した光一の召喚獣は、狙撃用ライフルを手に映画で見るスパイの様な黒い服を纏っていた。
その手には、しっかりと腕輪が輝いている。

「成程、隠密行動型か」
「ムッツリーニらしいね」
「範囲が限られている召喚フィールド内で、意味があるかどうかは別だがな」

それは気にしない方向で。

「さて、腕輪が出たところで早速試してみよう」
「そうじゃの。光一の“爆発”の腕輪か、ムッツリーニの“加速”の腕輪か、はたまた両方の力を兼ね備えた腕輪か、あるいは全く別物の腕輪か、現時点では一切わからぬ」
「とりあえず、何かやってみるか」

と、光一はある地点に銃を向けさせ、撃ち出す。

「“爆発”！」

いつもの様にキーワードを叫び、着弾点を見守る。
しかし、うんともすんとも言わず、ただ弾丸がそこにあるだけだった。

「じゃあ……“加速”！」

と、いつもは聞く側のキーワードを叫び、召喚獣を走らせてみる。
しかし、普通に走る程度の速さに変わりはない。

「？」
「じゃあ、別物か？　……とりあえず」
以前見た瑞希の腕輪の様に、腕輪が付けられた腕を掲げてみる。
が、うんともすんとも言わない。
「おかしいな……ん？」
そこで腕輪が輝くと同時に、召喚獣の姿が少しずつ薄らいでいく。
ちょっとの後には、少しも見えなくなってしまった。
「あれ？　……これは」
「もしかして、姿が見えなくなる能力とか？」
「みたいだな。召喚獣が出ている時の感触はあるし」
とりあえず、銃を撃たせてみると銃を撃つ音が響く。
動かしてはいないので、最初居なくなった位置からその音が響いてきた。
「やっぱり透明になる能力だな。さしずめ“透化”ってところか？」
「……光一、頼みがある」
ムッツリーニが真剣な顔をして、その場に跪きカメラを差し出す。
「……召喚獣にコレを持たせて、女子更衣室に！」
「「言うと思った」」
明久、雄二、光一が即座に声をシンクロさせた。
「ムッツリーニ、俺の召喚獣は物質干渉は出来ないぞ？　それに融

合できるのは1度に1体だけだ」
「……くっ」

心底悔しそうに、その場で咽び泣き始めた。

「確かに、ムッツリーニが泣いて喜びそうな能力だね。何もできないのが皮肉だけど」
「なんか俺が悪い訳じゃないはずなのに、罪悪感がしてきた……」
「気にするな」

とりあえず融合を解除すると、光一のとムッツリーニの召喚獣が元に戻る。

「でもちょっと残念かな？　もしかしたら、僕の腕輪の効果もわかるかなって思ったのに」
「融合しても無理だ」
「何だと雄二！！　……でも、何だか面白いね。融合させるの」
「とある問題さえ除けば、確かにな」

とある問題というのを聞いて、顔をしかめる明久だった。
そして、雄二もそれは同様だった。

「俺の場合は、迂闊に誰かと融合したりしたら命がないからパスだ」
「別に霧島限定でも戦力的に問題ないだろ」

翔子は学年首席なのだから、融合すれば紛れもなく最強である。

「まあ“戦力的に”理想なのは、明久が姫路か霧島のと融合させることだろうけどな」
「え！？　わっ私と、明久君がですか！？」

「ちょっと、それどういう事よ！？」
「……雄二以外となんて断る」

それを聞いて、当然美波が抗議を上げた。
いつの間にか来ていた翔子も、発言した光一を睨みつけている。

「いや、戦力的にって言っただろ？　明久は召喚獣の操作技術に関しては学年随一だから、それに姫路や霧島の点数が加算されれば最強だって意味だ。別にそう言う意味で言ったんじゃない！」
「……ならいい。私との融合は雄二だけの物」
「翔子、危険な発言はやめてくれ！」

霧島翔子、雄二のゾッコンの学年首席。

「霧島さん、大胆です……」
「ウチとの融合も」

バンッ！

「美春だけのものです！」
「げっ！　またかよ……」
「ここであったが１００年目！　今日こそはその腕輪を美春の手に！」

両手に殺傷力のある文房具を持ち、光一に襲いかかる美春。
光一も懐からスタンガンとエアガンを取り出し、それに応戦。

「いい加減聞き入れろ、これは俺以外に使えないんだよ！」
「美春とお姉さまとの愛の間に、不可能はありません！」
「そう言う事は逃げられなくなってから言え！」

美春はカッターやコンパスなどを投擲し、その全てをエアガンによって撃ち落とす。
そこへ光一がスタンガンを投擲。

「そう何度も喰らう美春ではありません！」

と、スタンガンを難なくかわす美春。
……が。

バチイッ！

「という事はもう予測済みだ」

投擲すると同時に上に放物線を描く様に投げたスタンガンが、美春の脳天に命中しその場に崩れ落ちた。

「良くそんな芸当ができるな？」
「島田、悪いけどアイツの手足縛ってくれる？」
「……了解」

美波が美春を縛っている傍らで、落ち着く様に茶を飲む光一。

「やっぱり色々と問題あるね、その腕輪」
「明久が持ったら余計にな」

と、瑞希と美波を見てそう呟く光一。
明久は疑問符を浮かべている。

「それで、どうするのじゃ？　今から」

「腕輪のデータさえありゃ充分だろ。後は適当にFクラスのメンバーで見つくろう」

その後、適当に見つくろいデータを提出した事で、なんとか没収は免れた光一だった。

「しかし、姉上との融合は一体どんなものになるのじゃろうか？」

「さあ？　まあ確かめようとしたら、俺は即座にタコかイカにされちまう」

「どちらも大差ないじゃろ。まあそれ以上に、想像ができるのがまた恐ろしいぞい」

第三十三問　（強化合宿編　プロローグ）

（　）内の『私』がなぜこのような痛みを感じたのか答えなさい。

父が沈痛の面持ちで私に告げた
『彼は今朝早くに出て行った。もう忘れなさい』
その話を聞いた時、（私は身を引き裂かれるような痛みを感じた）
彼の事は何とも思っていなかった。彼がどうなろうとも知った事ではなかった。私と彼は何の関係もない。そう思っていたはずなのに、どうしてこんなにも気持ちが揺れるのだろう。

姫路瑞樹の答え
『私にとって彼は自分の半身の様に大切な存在であったから』

教師のコメント
そうですね。自分の半身の様に大切であった為、いなくなった事で『私』はまさに身を引き裂かれたかのような痛みを感じたという事です。

久遠光一の答え
『私にとって彼は融合していたも同然な存在だったから』

教師のコメント
君が召喚大会で手に入れた“黒金の腕輪”ならではの解答ですね
意味としてはあっているように思えるので、正解にしておきます。

吉井明久の答え

『私にとって彼は自分の下半身の様に大切な存在だったから』

教師のコメント
どうして下半身に限定するのですか

土屋康太の答え
『私にとって彼は下半身の存在だったから』

教師のコメント
その認識はあんまりだと思います

新学期になって2カ月が経過し、日没にはハッキリとした変化が感じられるこの時期。
そんな季節の朝、光一と秀吉はいつものように。

「最近熱くなったな」
「そうじゃの。アイスが美味い時期になってきたぞい」
「違いない」

日課である世間話をしつつ、のんびりと登校していた。

「今度誘導尋問の意味を辞書で調べてこい。んで、今背中に隠した物はなんだ？」
「……別に何も」

「ん？　何やってんだ霧島に雄二？」

ふと、いつものように（無理やり）一緒に登校している雄二と翔子の姿を見つける光一。

「……あっ、久遠に木下」

そのすきを見るや否や、雄二が翔子が背に隠した物をひったくる。

「……ふむ、ＭＰ３プレイヤーか」
「……雄二、酷い……」
「機械音痴のお前がどうしてこんな物を……何が入ってるんだ？」
「あっ、ちょっと興味があるな。もしかしたら、名曲が入ってたり……」

＜優勝したら結婚しよう。愛している、翔子＞

「「「……」」」

紛れもなく雄二の声で、しかも思いきり覚えがあるセリフ。
張本人の一員である光一と秀吉は、思いきり顔をゆがませた

「……そう。最高の音楽」
「これは削除して、明日返すからな」
「……まだお父さんに聞かせてないのに、酷い」

「いや待て待て待て！　それはいくらなんでもやり過ぎだ！！」

事の一因を担っていた為、必死で止める光一。

「どうして？」

「霧島、こういうのは本人の口から言うものだろ。なあ秀吉」

「そうじゃの。霧島とて“翔子を俺にください、お義父さん！”と直接言われた方が嬉しいじゃろ？」

雄二の声真似での台詞だったが、うっとりとした表情を浮かべる翔子。

しかし、聞き捨てならんと言わんばかりに2人につかみかかる雄二。

「待てコラ！　お前ら……」

「そんなに嫌ならその時までに何とかしろ。そもそもお前が試召戦争で軽々しく約束してヘマしなきゃ、こんな事にならんかっただろうが」

「ぐっ……」

思いきり否定できない要素を突き付けられ、反論ができなくなった雄二。

「……わかった。これは個人で楽しむだけに留めておく」

「いや、今すぐ削除しろ！」

「もうよせ、ここで騒いでも何の意味もなさない」

パサッ……

「ん？　なんか落ちたぞ？」

「あっ、それは……」

「どれどれ？　“私と雄二の子供の名前リスト”か……ちょっと待てやコラ」

光一と秀吉は、唖然とした。
そして雄二から数歩距離を取る。

「お前……まさか」
「そんな訳あるか！」
「そう。まだ何もない」
「まだじゃない、これからもずっとなぎゃあああああ！」

アイアンクローに処された雄二の手から、リストが落ちる。
とりあえず光一はそれを拾い、秀吉とともに読み始める。

「……なんか、変な名前ばっかりじゃないか？」
「そうじゃのう。“こしょう”に“しょうゆ”……とても人の名前とは思えんぞい」
「……“しょうゆ”は私のお勧め。私達の名前を組み合わせたやつ」

“しょうこ”と“ゆうじ”で“しょうゆ”
確かに組み合わせと言えば組み合わせである。

「……何故そこを組み合わせるんだ？」
「……きっと味のある子に育つと思う」
「俺にはひねくれ者に育つ未来しか見えない」

光一と秀吉は、呆れるようにうんうんと頷いた。

「……ちなみに男の子だったら、“こしょう”が良い」
「“しょうゆ”って女の名前だったのか……」

「それ以前に人の名前じゃねえよ」

その後、そんなやり取りをしながら学園へと向かう４人だった。

そして、教室にて。

「へぇっ、そんな事があったんだ……ちょっと危なかったね？」
「ちょっとじゃねえ！！」

いつものメンバーで、いつもの様に談笑する朝。
事を聞いて、一因を担っている１人の明久が、軽く笑いながら話を聞いていた。

「でも、まだ結婚程度で済んでよかったじゃない。僕はてっきり、あのペースだともう子供が出来た事にされているのかと……」
「……明久、笑えない冗談はよせ」
「子供の名前リストまで作ってたから、現実味があるな」

それを聞いて、同伴している明久とムッツリーニは雄二にさすような目を向けた。

「いや、何もないぞ！　……断じて」
「なんで自信なさそうなのさ！？」
「そう言えば以前、休日に気絶した状態で霧島に引きずられてどこかつれて行かれるの見たな？」
「見たなら止めてくれ！　時々薬で眠らされて、あいつの家やデートに無理やり連れて行かれるんだ！」
「……俺が優子を諦めようとしてるのって、一体何なんだろ？」

こうも力尽くの恋愛が続いている事に、光一は自分がバカらしく思えてしまった。
それと同時に、翔子の行動力というか、ある意味もうその領域に突っ込んでそうな勢いに恐怖を感じる。

「……まあいい。けど考えてみたら、あの時のあのセリフなんてどうやって録音したんだ？」
「そこだよ。アイツは機械オンチの筈だから、きっと盗聴に長けた実行犯が居る筈だ」

ふと、光一と明久と秀吉は、その時の事を思い出してみる。
雄二の台詞が録音されていた様子は記憶になく、誰かが密かに集音機をしかけていた可能性がある。
その前の試合では、瑞希と美波のチャイナ姿もあった事で、ある結論を出した。

「だれか、盗聴に長けた人物が協力してる可能性があるな」
「ああ。そこでだ、ムッツリーニ。その実行犯を調べてほしい」
「え？　でも、霧島さんは消去を了承したんでしょ？」
「いや、憂いは断った方が良い」

今後も、そういう手段に出ないとも限らない。
と、雄二は真剣そのものの顔でそう言い放った。

「確かにな。最悪セリフを合成して、言い逃れができん様なセリフが偽造される可能性も十分あり得る」
「偽造？」

そこで光一は紙を取り出して、さらさらとある一文を書き記す。

“翔子、俺の子を産んでくれるか”

「今盗聴されてる可能性もあるからこうさせてもらうけど、こんな感じのとか」

「……一刻も早く実行犯を探しださないと」

顔を青ざめた雄二が、身震いしながらそう呟いた。

「という訳だから頼む、実行犯を探しだしてくれ！」

「……わかった」

「すまん。報酬にお前の気に入りそうな本を持ってくる」

「……任せておけ」

ガラッ！

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。ＨＲを始めるから席についてくれ」

そう告げる鉄人事、西村教諭の手には大きな箱があった。

その中には、強化合宿のしおりがぎっしりと詰まっている。

「じゃあ一応、俺からも霧島を説得してみる。流石にちょっとやり過ぎだと思うし」

「ちょっとじゃないだろ。だが恩に着る」

と、それぞれの席に戻っていった。

といっても、自由席なのだからその近くに陣取るだけなのだが……。

「さて、明日から始まる“強化合宿”だが、大体の事は今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まァ旅

行に行く訳ではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題はないはずだが」

と言いつつ冊子を配っていき、皆も一冊取ってから後ろに回す作業を始める。

「集合の時間と場所だけは、くれぐれも間違えないように」

という鉄人の言葉を受けて、それぞれ冊子をめくり始める。

「へぇっ、卯月高原か。結構遠いな」

「でも避暑地だから、結構快適に過ごせるんじゃない？」

「吉井、久遠、私語は控えろ！　特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うんだからな」

それを聞いて、Ａクラスなどは快適なリムジンバスで向かうんだろうと、あたりを付ける面々。

「えーっと俺達Ｆクラスはどうなのかな？」

「やっぱり狭い通常のバスじゃない？」

「補助席やつり革かもしれんのう」

「ヘタすると、鉄人が引率するだけなんて事もあるんじゃないか？」

光一、明久、秀吉、雄二がそれぞれの予想を口にする。

「いいか、他のクラスと違って我々Ｆクラスは……現地集合だからな！」

「「「案内すらないのかよっ！？」」」

あまりの扱いに、全級友が涙した。

第三十四問

強化合宿一日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌
『電車が止まり駅に降り立つと、不意にめまいのような感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所で、何か素敵な事が起きる様な、そんな予感がしました』

教師のコメント
環境が変わる事でと良い刺激を得られたようですね。姫路さんに高校2年生という今この時にしか作ることのできない思い出がたくさんできる事を願っています。

久遠光一の日誌
『駅についてホームに足を踏み入れた時、心地よい高揚感で気分が浮足立ちました。勉強が趣旨といえど折角の合宿での遠出なので、秀吉や明久たちとも楽しく有意義な日々を過ごしたいと思います』

教師のコメント
意外と言えば意外ですが、久遠君は旅をするのが好きと見えますね。友達を大切にしているという事もよくわかり、君の意外な一面が感じられました

土屋康太の日誌
『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈の様な感覚が訪れた。あの感覚はなんだったのだろうか』

教師のコメント
乗り物酔いです

坂本雄二の日誌
『駅のホームで大きく息を吸い込むと、少し甘い様な、仄かに酸っぱい様な、不思議な何かの香りがした。これがこの町の持つ匂いなんだなと、感慨深く思った。

教師のコメント
隣で土屋君が吐いていなければ、もっと違った香りがしたかもしれませんね。

電車に揺られて2時間。
光一は窓際に座り、うつりゆく景色を眺め感慨にふけっていた。

「何じゃ光一、柄にもなく感慨にふけっておるのかの？」
「いや、旅ってどうも高揚してさ。こういう景色の流れも楽しめるもんだから、ついな」
「光一はもしかしたら、風来坊的な気質かもしれんのう」
「かもな」

と、秀吉と笑いあう光一。
その傍らでは、遅くまで調べ物をしていたムッツリーニがうとうとと眠っている。

「のんびりとした旅でよかった。明久と雄二、島田が居るから割とスリリングになるかと思ったけど」
「確かにのう……ところで光一よ」
「ん？」
「前から気になっておったが、お主は随分と明久の世話を焼くのう？」

明久と内外ともに、最も友好的に接しているのは光一である。
雄二を主として、大半は明久をバカ呼ばわりしているだけに、尚更目立っていた。

「何か悪いか？」
「人の事は言えんが、周りは明久に対し酷い扱いをしておるというのに、光一だけは明久を擁護しておるからの。それに付き合いの長いワシを差し置いてタッグを組んでおるのじゃから、ずっと気になっておったのじゃ」
「そう言えば、話した事なかったっけな？　俺が明久を相棒にしてるのは……」

ビリっ！

そこで、何かを破るような音が響いてきた。

「坂本、窓開けて！」
「捨てる気！？　僕を窓から捨てる気！？」

「島田、窓からゴミを捨てるな」

と、いつもの様なやり取りが始まった事を確認した光一と秀吉。
とりあえず、光一はハァッと息を吐いて、美波を宥めに行く事に。

「なんだ、何の騒ぎだ？　島田も落ち着け、雄二もゴミとか言うんじゃない」
「あっ、光一。助かったよ……実は、ちょっと心理テストをやってて」
「ああ、そう言う事か。大体わかった」

ひょいっと美波の持っている本を取り上げ、開かれている個所を見てみる。

「えーっと？　“次の色でイメージする異性を上げてください”ね。明久はなんて答えたんだ？」
「緑が美波で、オレンジが秀吉、青が姫路さん」
「ふーん……まあ妥当じゃないか？」
「光一よ、ワシが挙げられる事に疑問を感じんのかの？」

緑が友達、オレンジが元気の源、そして青が……。
光一はそれを見て、うんうんと頷いた。

「いや、異性っていう面を除いても妥当だと思うぞ？　秀吉が明久の元気の源っていうのは」
「……少し嬉しいから困る」

と、秀吉をからかう光一。
それを見てカチンと来た美波が……

「そう言うデリカシーがないから、アンタは優子にフラれるんでしょ！？」
「なっ！　お前こそそういう乱暴な事するから、彼女にしたくないランキングに挙げられるんだろ！！」
「うるさいわねこの負け犬！　犬小屋にでも籠っていじけてなさい！！」
「何だとこのまな板が！　とっとと調理場にでも行って来い！！」
「……」
「……」
「……傷つく位ならお互い黙っていればいいのに」
と、そこへ腹をすかして起きたムッツリーニが、ボソリと呟いた。

「大丈夫、光一？」
「大丈夫大丈夫。それより、そろそろメシの時間だな。明久、何か持って来てるのか？」
「今日はお惣菜パンをね」
光一と明久は、自分が用意して来たお昼を出し始める。

「……なんでアキは久遠ばっかり気にかけるのよ？」
「……私も明久君に、あんな風に気にかけて貰いたいです」
「あいつは明久をバカ扱いも酷い扱いもしない唯一の存在だからな。明久にしてみれば貴重なんだろ」
もっともな話だが、恋する乙女の耳には届かなかった。
しかし、明久の手にある総菜パンをみて、一言。

「待ちなさいよアキ」
「パンよりも、良い物がありますよ？」

「ゑ！？」

と言って、瑞希はバスケットを取り出した。
そこからはじき出される結論……それは。

「……待て姫路、薬品を使った物を許可する訳にはいかんぞ？」
「久遠君の許可なんていりません！　明久君、是非これを食べてください！」
「いや、だって僕には……」

そこで雄二とムッツリーニがアイコンタクト。

「おっと手が滑った（パシッ）」
「……足が滑った（グシャッ）」
「ああっ！　パン！　僕のパン！」

雄二が明久のパンをたたき落とし、それをムッツリーニが踏み潰した。

「お前らな……姫路、だから弁当は良いが」
「久遠は黙ってなさい！　アキ、ウチもお弁当用意してあるから、食べてみて！」
「そうです！　久遠君は邪魔ですから、あっち行って下さい！」

と、美波と瑞希に追い出され、元いた席に戻る光一。
結局明久が雄二を抱きこむ事に成功した位で、秀吉とムッツリーニは光一と食事を囲う事に。

「何で俺が目の敵にされるんだ？」
「お主ばかりが明久に気に掛けられておるのが、面白くないんじゃ

ろ」
「……（コクコク）」

俺男なんだけど……と言いそうになってやめた光一。
この学園において、性別の違いなんて些細な事だという認識は、実感しているのである。

「でもあれじゃ、手出しは出来ないな……せめて、無事を祈るか」
「うむ」
「……（コク）」
「いや、ムッツリーニはその前に謝罪する事から始めろ」

と言った処で、明久が悲鳴を上げて瑞希の弁当を掻きこむ姿が、光一の目に映った。
そして、顔を真っ青にさせてぶっ倒れる姿まで。

「……明久、無力な俺を許してくれ」
「ワシらはともかく、光一ならばあっさりと許すと思うぞい？」
「……（コクコク）」

そして時間は流れ、合宿所にて。

「明久、起きたか！　良かった……電気ショックが効いた様だな……」
「これで一安心だな……」

光一と雄二は心底安心しきった顔で、電気ショック機器をしまい始める。
明久は“冗談だよね”という顔で、周りを見回す。

「所で雄二、ここは合宿所？」
「ああ、そうだ。全く贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取って合宿所に作り変えたらしいぞ」
「まあおかげで結構快適に過ごせる訳だし、感謝しないとな」

８人位寝れそうな広い部屋だが、この部屋にいるのは現在光一と雄二と明久のみ。
問題児を集める為かなと思いながら、明久は周りを見回しているところで来客があった。

「む。明久、無事じゃったか！　よかったのう……お主がうわごとで前世の罪を懺悔意思始めた時には、正直もうダメじゃと……」
「あれは確かに焦ったな」

秀吉が胸をなでおろし、光一がそれに同意を示す。

「ムッツリーニはどこに言ったの？　覗き？　盗撮？」
「友人に対してそんなセリフがサラッと出て来るのはどうかと思うのじゃが……」
「否定できる要素が全くないからな、アイツの場合」

ガチャッ！

「……ただいま」

そこへ、ムッツリーニが戻ってきた。

「あっ、ムッツリーニで思いだしたけど、例の件！」
「……その件について、情報が手に入った」

「そうか。俺の方は、霧島との会話じゃどうにも掴めなかった。まあ過激な方向に行くのは防げてる筈」
「それだけでもありがたい。それでムッツリーニ、お前も随分早いな」

例の件とは、翔子が懐柔していると思われる盗聴実行犯の事である。
光一は浮気防止と称し翔子に連絡先を教えてもらっている為、それを介して説得。
だが強引な手を使う事への抵抗を与え始めて来ている物の、実行犯に関する情報は全く口を割らない。

「……昨日、犯人が使ったと思われる道具の痕跡を見つけた」
「へぇっ、流石だな。それで、犯人はわかったのか？」
「……（フルフル）」

光一が尋ねると、ムッツリーニは申し訳なさそうに首を振った。

「……すまない」
「気にするな。協力してくれるだけでも感謝している」
「……“犯人は女生徒で、お尻に火傷の痕がある”という事しかわからなかった」
「「君は一体何を調べたんだ」」

明久と光一が、ほぼ同時に突っ込みを入れた。

「……校内に網を張った」
「網？　盗聴器でも仕掛けたのか？」
「……（コク）」

それから、ムッツリーニが用意した小型録音機が取り出され、そこ

に収められた会話が流れ始める。

＜……らっしゃい＞

＜雄二のプロポーズを、もう1つお願い＞

＜毎度。二度目だから安くするよ＞

＜……値段はどうでも良いから、早く＞

＜流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃ明日……と言いたいところだけど、明日からは強化合宿だから、引き渡しは来週の月曜で＞

＜……わかった。我慢する＞

「片方は、霧島でまず間違いないな」

「だよね。雄二のプロポーズを欲しがる上にお嬢様と来て、この独特の話し方とくればね」

「もう動いていたのかって事も驚きだが、強化合宿があって助かった……」

「けど、タイムリミットが伸びただけだ。で、さっきの犯人のヒントは？」

ムッツリーニが機械を操作し、続いて録音機から声が。

＜相変わらずすごい写真ですね。こんな写真を撮っているのがバレたら、酷い目に遭うんじゃないですか？＞

＜ここだけの話、前に一度母親にバレてね＞

＜大丈夫だったんですか？＞

＜文字通り尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだか＞

＜それはまた……＞

＜おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対してひどいと思わないかい？＞

「成程ね、それで尻に火傷のあとか」
「……わかったのはこれだけ」
確かに、特定できる情報である事は間違いない。
……だが。
「でも、有力でもないぞ？　個所が個所だけに、確かめようとしたら間違いなく犯罪だ」
「だよね。スカートを捲くってまわったとそしても、わからない可能性があるし」
「赤外線カメラでも、火傷の痕なんて映らないだろうしなあ……」
「……事情を知っておっても、とんでもない会話じゃのう」
最もである。
「……夜中に俺とムッツリーニで忍び込むか？　気配を消す術ならサバイバルゲームで培ってるし、素人じゃ絶対気付かれない自信がある」
「……任せておけ」
と言って、ムッツリーニはある物を取り出した。
「……何だこれは？」
「……証拠を抑える為のカメラと、闇の中で近付く為の服。光一の分も用意してある」
「するな！」
服を手に取り、それを纏ってカメラを持った自分の姿を思い浮かべる光一。

「……僕が警官だったら、迷わず逮捕してるね」
「……言い逃れは出来ないな」
「そうじゃの。何より、光一がそんな姿で女子部屋に入り込んだなどと、想像もしたくないわい」

と、３人の意見で却下となった。
ムッツリーニは、多少ショックを受けている。

「そうだ！　もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえば良いじゃないか」
「明久。何故にワシが女子風呂に入ることが前提になっておるのじゃ？」
「いや、文月学園において秀吉を男として認識してるの、多分俺と優子と雄二だけだぞ？」

プールの時の美波と瑞希の反応を思い出し、ショックを受ける秀吉。

「それは無理だ明久」

雄二がしおりを放り投げ、明久に寄越した。

「どうして無理なのさ？」
「３ページ目を見てみろ」

～　合宿所での入浴について　～

・男子ＡＢＣクラス…２０：００～２１：００　大浴場（男）
・男子ＤＥＦクラス…２１：００～２２：００　大浴場（男）
・女子ＡＢＣクラス…２０：００～２１：００　大浴場（女）
・女子ＤＥＦクラス…２１：００～２２：００　大浴場（女）

・Fクラス木下秀吉…20：00～21：00　個室風呂？

「……コレじゃ秀吉に見て来て貰う事は出来ないね」
「そう言う事だ」
「どうしてワシだけが個室風呂なのじゃ！？」
「あー……そう言えば以前、鉄人が強化合宿で秀吉は風呂をどうとか言ってたっけ？」

ふと、プール騒動で指導された時、そう言う事を言っていた事を思い出した光一。

「……って、姫路と島田に事情を話して、探してもらえば良い気もするけど」
「そうか、その手があったな！」
「何故ワシより先に思い浮かばんのじゃ！？」

……ドバン！

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

すごい勢いで部屋の扉があけ放たれ、女子がぞろぞろと入って来た。

「な、何事じゃ！？」
「木下はこっちへ！　そっちのバカ４人は抵抗をやめなさい！」
「逃げられると思わないことね！　外ももう包囲はしてあるわ！」

先頭に立つ美波と優子が、とっさに窓から脱出しようとした明久達の機先を制した。

「何故お主らは咄嗟の行動で窓に向かえるのじゃ……？」
「そこは今において大した問題じゃない。それで、一体何だよ？　こんな時間にいきなり」
「全くだ。仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」
「よくもまぁ、そんなシラが切れるものね。貴方達が犯人だってことくらい、すぐわかるというのに」

そこへ出て来て高圧的に言い放ったのは、光一達にも見覚えのある顔だった。
その後ろでは、大勢の女子たちも腕を組んでうんうんと頷いている。

「確か、Ｃクラスのヒステリー代表こと小山だっけ？　確かＡクラスの試召戦争で無様に負けて戦犯になったって話だけど、大丈夫なのか？」
「誰がヒステリーよ！？　そして大きなお世話よ！！」
「いや、何でもない。それより犯人って何の事だよ？　俺達ここにきてからずっと部屋にいたけど」
「そんな嘘が通用するとでも思ってるの！？　コレの事よ！」

小山が光一達の前に何かを突き付けて来た。

「……何これ？」
「……ＣＣＤカメラと小型集音マイク」

ムッツリーニが答えた。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」
「……成程ね。だから、一番疑わしい俺達の所へ？」
「疑わしい？　何言ってるのよ、アンタ達がやったんでしょ！」

一方的な物言いに、光一はカチンと来た。

「ちょっと待て！　疑われるのは仕方ないが、証拠もある訳でもないのになんで俺達で確定なんだよ！」

「アンタ達以外に誰がやるっていうのよ！？」

「ふざけんな！　てか、何で姫路と島田までそっちにいるんだよ！？　しかも拷問器具なんかどっから用意して来たんだ！？」

ふと見れば、美波と瑞希も拷問器具を持ってそこにいた。

それも、明久に殺意を向けて……

「さて、真実を認めるまでたっぷりと可愛がってあげるわ」

「明久君、悪さをしたら罰を受けないといけないんですよ」

と、聞く耳すら持たない状態。

光一は呆れたように2人を見る。

「なっ！？　待てよ！　お前ら本当にあがっ！！」

いつの間にか腕を取られ、背にひねりあげられた光一。

実行しているのは木下優子。

「さあて、バカな幼馴染を持った責任として、たっぷりとおしおきしないと」

「まっ、待てよ！　せめて話くらい……」

「黙りなさい光一。あんたの言葉に信用する価値なんてある訳ないじゃない」

そこから先は、優子のサブミッションに阻まれて口にできなかった。

結局明久は瑞希と美波の拷問器具で、雄二は翔子のアイアンクローにより、刑が執行される事となる。

それからしばらくして、証拠不十分のため解放された面々。

「酷い濡れ衣じゃったのう……何故だかワシは被害者扱いじゃったのも解せぬが」

「ホント、酷い誤解だったよ」

「……見つかるようなヘマはしないのに」

「ん？　雄二に光一、大丈夫？　さっきから黙ってるけど？」

明久が話しかけると、決意したかのように立ち上がる雄二。

「……上等じゃねえか」

「え？　雄二？」

「どうせここまでされたんだ。本当にやってやろうじゃねぇか」

突然雄二は、怒りを目に宿し怒鳴るように言い放つ。

「まさか、本当にって……」

「ああ。そのまさかだ。あっちがそう来るのなら、本当に覗いてやろうじゃねぇか！」

「雄二、そんなに霧島さんの裸が見たいなら、個人的にお願いしたらいいんじゃない？」

こんな警戒されてるタイミングで覗きに行くなんて、明久でもどういう事かがわかる。

捕まりに行くようなものだと。

「ば、バカを言うな！　翔子の裸なんかに興味があるか！」
「ふむ。もしや、例の尻に火傷がある犯人探しかの？」
「そうだ。流石に覗きなんてマネはやり過ぎだと思って遠慮していたが……向こうがあんな態度で来るなら遠慮は無用だ。思う存分覗いて、犯人を見つけてやろうじゃないか！」

という雄二の傍らで、ただ1人光一は静かに拳を握りしめている。
まるで雄二とは正反対に、ただ静かな怒りに身を震わせるように。

「ねえ光一、どうしたの？」
「姉上の言葉なら、気にする事はないのじゃ」
「……いや、それはもう良いよ。おかげで優子の事は完全に吹っ切れた……けど」

ハァッとため息をついて、光一は口を開いた。

「……俺は降りる」

第三十五問

強化合宿2日目の日誌を書きなさい

姫路瑞希の日誌

『今日は少し苦手な物理を重点的に勉強しました。いつもと違ってAクラスの人たちと交流しながら勉強もできたし、とても有意義な時間を過ごせました』

教師のコメント

Aクラスと一緒に勉強する事で姫路さんに得られるものがあったようでなによりです。今度の振り分け試験の結果次第ではクラスメイトになるかもしれない人たちと交流を深めておくと良いでしょう

久遠光一の日誌

『今日は明久と秀吉に英語を教える事で、2人の学力アップと人に教えられる程度の知識は持ち合わせてる事の確認は出来ました』

教師のコメント

久遠君は問題児の上に出来ない科目は壊滅的ですが、出来る科目は確かに優秀ですからね。吉井君と木下君の英語のテストの結果が楽しみです。

土屋康太の日誌

『前略。夜になって寝た』

教師のコメント
前略はそうやって使う物ではありません

吉井明久の日誌
『今日は光一に英語を教えて貰いました。後略』

教師のコメント
後略もそうやって使う物ではありません

「何でよりによって、光一が降りるんだ？　しかも明久に秀吉まで……」
「……木下優子に言われた事にショックを受けた？」
「には見えなかったがな。ダメージと言うより、怒ってるようだったが……一体なんだってんだ？」

雄二は結局、自らの汚名返上と人生をかけた一大勝負を、ムッツリーニとともに挑もうとしていた。
場所は女子風呂へと続く廊下。

音をたてない様に靴もスリッパもはかず、靴下でその場を駆け出す

と……

「君達、止まりなさい！」

その前方から、化学教師の布施教諭が姿を現した。

「更衣室にカメラが設置されていたと聞いて警戒していたら……まさか本当に覗き犯がやってくるとは思いませんでした」

「……どうする？」

ムッツリーニの言葉に、雄二は躊躇いもなく……

「構わん！　ブチのめせ！」

「そこはかまいなさい坂本君！　私は一応教師ですよ！？」

「……了解」

「土屋君も、了解じゃないでしょう！」

彼らは問題児である上に、目的が真実の追求である故に迷いはなかった。

ムッツリーニは迷いもなく、さっそうとスタンガンを構えとびかかる。

「……この前の補習の恨み、受けて貰う」

「ひぃぃぃぃっ！　さ、サモンッ！」

そこで、突如現れた小さな体がムッツリーニの腕をはじいた。

「……っ！」

「しょっ、召喚獣だと！？　しかも今……教師用の召喚獣は、物に触れるのか！？」

あまり成績の良くない生徒が呼びだしても、人の数倍の力を持つ召喚獣。
教師の点でならその力は計り知れないが、普通は“観察処分者”である明久の召喚獣以外は、物に触れる事は出来ない筈である。

「そうだ。吉井が観察処分者に認定されるまでは、雑用を自分達でやっていたのだ。だから物質干渉ができる方が都合が良い」
「げっ！　鉄人!?」
「こういった問題児の暴走を止める必要もあるしな」
「……っ！　大島先生」

それに続くように現れたのは、補習教師である鉄人事西村教諭と、体育教師の大島教諭。

「ん？　吉井と久遠はどうした？」
「さあな？　部屋で寝てんじゃねえか？」
「そうか……ならば、貴様らを捕まえた後でじっくりと待つとしよう」

一方、割り当てられた部屋にて。

「……」
「ねえ光一、気にすることないよ。誤解なんだから」
「そうじゃ光一。姉上とて、誤解とわかれば……」
「どうでも良いって言ってるだろ！」

明久と秀吉は、先程からずっと機嫌が悪い光一を宥め続けていた。
が、一向に効果はなく、今も不機嫌そうに寝っ転がっている。

「……悪い。お前らに当たる気はなかったんだが」
「気にしなくていいよ。そりゃあ、光一が木下さんの事好きなのは……」
「だからそれはもう良い。さっきの事で吹っ切れるどころか愛想尽かしたから」
「……光一」

無理もないとはいえ、光一の言葉に複雑な顔をする秀吉。
弟であり親友である身としては、当然の心境である。

「雄二達は大丈夫かのう……」
「無理だろ。警戒態勢を敷いてるはずなのに、俺達を含めたとしてもどうにかできる訳がない」
「そうだね。確か僕が“観察処分者”に認定されるまでは、雑用って先生たち自身でやってたって聞いたことがあるから、召喚獣が僕のと同じように物質干渉能力を持ってもおかしくないし」
「となると、明らかに不利じゃの」

少々いたたまれなくなり、話題をそらす事にした秀吉。

「それに何より……」
「鉄人だね？」

生活指導教諭、西村宗一。
以前明久は召喚獣を用いて復讐をたくらんだ事があるが、見事返り討ちにあった事がある。

「僕の点数が相手とはいえ、本当に人間かなあの人？」
「……それ以前に、何で召喚獣相手に生身の人間が勝てるんだ？」

「となると、行かない方が良かったかも知れんが……光一よ、本当に良いのか？　汚名を返上せずとも」

光一は興味なさそうに手を振って一言。

「良いよ別に。元々不祥事＝俺達って思考が決定されてるんだから、今更不名誉の1つや2つ増えてもどうという事もない。姫路や島田といい、優子といい、証明としては充分だろ」

「むうっ……確かに、先程の拷問のやり取りを見る限りでは、否定などできんの」

吐き捨てるように言った光一の言葉に、同意を示す秀吉。

明久も流石に、不祥事＝自分達という志向が決定されてる事に落ち込み始めた。

「……泣きたくなるね」

「気を落とすでない、明久」

「そうだよ。大体お前が起こした不祥事は大半、誰かの為につながってるじゃないか」

2人の言葉に、じーんときて涙を流す明久。

ゆっくりと2人の手を取り、頭を下げる。

「ありがとう……秀吉も光一も優しいね。流石は僕のお嫁さんと無二の相棒だよ」

「婿の間違いじゃろ！」

「じゃあ流石は僕のお婿さんと無二の相棒だよ」

「……」

「何顔を赤くしてんだよ秀吉！？　お前まさか、本当に……」

幼馴染の意外の反応に、少々身を引いた光一。
それに気付き、慌てて弁解し始める秀吉。

「ちっ、違うのじゃ光一！　今のはその……」
「いや、だって、姫路の転校話の時とか、電車の心理テストの時とか、今回とか、なんか否定できなくなりつつあるぞ？」
「あっ、あの、秀吉……？」
「明久よ、何故そんなに嬉しそうなのじゃ！？」

明久にとっては、頭ではわかっていても心が否定しきれる事ではなかった。
そもそも好意を向けられる事に慣れていない為でもある。

「……大丈夫だ。この学園じゃ性別が些細な事だと認識されてる訳だし、文句言う奴なんて居ないだろ」
「何故目をそらすのじゃ！？　だから光一、今のは……」
「……すまん、ちょっと腕輪の事に加えて今回の事の所為か、感覚が壊れてたみたいだ」

彼、久遠光一は“融合召喚型”の腕輪の所為で、同性愛趣味者の間で話題の目玉となっていた。
それ以外にも、とある“寡黙なる性職者”の暗躍があるとかなんとか。

それは、別の機会に。

「……早い話が、俺達がバタバタ騒いだって意味がない事は明白だ。態々やる必要もない」
「そっか……まあ、そうだよね。姫路さんや美波もそうだけど皆問答無用だったから、今更汚名をそそいだって意味がないか。まあ僕

だから、仕方ないよね」

ハァッ、と2人でため息。

「明久よ、何やらネガティブ思考が身についておらぬか？」

「……何かと貧乏くじ引かされるわ、姫路さんと美波にはサイフ兼サンドバッグ扱いされるわ、クラスでもぞんざいに扱われるわで、僕の存在って光一が居なかったら一体何だろうって、週１００回は思ってたりするから」

「……お主の扱いを考えなおしてやるべきかのう？」

貧乏くじとぞんざいな扱いに関しては、自身も関与している為に流石に罪悪感を感じる秀吉。

……が、引っかかる個所を感じた。

「しかし、姫路と島田はサンドバッグはともかく、サイフ扱いではなくデートじゃろう？」

「サンドバッグは否定しないんだな、秀吉も？」

「……全部美波と姫路さんに強制されてる上に、全部清水さんに嗅ぎつけられて最近は包丁持って追いまわされてるんだけど？」

「……すまぬ、ワシが悪かった」

光一でさえ手を焼くというのに、明久ではひとたまりもない命の危険。

それが包丁を持って追いまわす姿には、流石に秀吉も背に悪寒が走った。

「……まあとにかく、俺達が今更評判がどうとかなんて考えても意味ないだろ」

「……そうだね。僕は光一がそれで良いなら、そうするよ。元々光

一あってこその僕だからね」
「お主らがそれで良いのであれば、ワシは何も言わんぞい。まあ今日は長旅と先ほどの拷問で疲れたじゃろう？　ワシが布団を敷くから、ゆっくりと休む事にしようかの？」

一方そのころ。

「何故吉井と久遠が来ないのだ！？」

とらえた雄二とムッツリーニに反省文を書かせる中、その監督を行う鉄人は風呂の時間が終わった事で疑問を口にした。
結局何かの策略かと思って身構えていた物の、結局姿を現す事はなく空回り。

「さあな？　怖気付いたんじゃないか？」
「そんな訳がなかろう！　一体何を企んでおるのだ！？」
「……ウソをつく理由がない」
「……まあ良いだろう。今日はもう戻ってよし」

雄二とムッツリーニは、書き終えた反省文を提出して部屋へと帰って行った。

そして夜は明けて、強化合宿本番。

「……雄二。一緒に勉強できてうれしい」
「待て翔子、当然の様に俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

本日のＦクラスの予定はＦクラスとの合同学習であり、形式としては自習となっている。

「雄二も素直じゃないね」
「まあ良いだろ別に。あれが雄二なりの愛情表現だととらえれば、可愛い物じゃないか」
「そうじゃのう。しかし、折角のＡクラスとの合同学習だというのに、何故自習なのじゃ？」

ふと、秀吉が疑問を口にした。
それに明久も賛同する。

「授業なんてやる訳ないだろ。Ａクラスと合同だったら尚更だ」
「やらない？　どうして？」
「この合宿の趣旨は“モチベーションの向上”だ。明久にも分かるように言うと、Ａクラスに“Ｆクラスの様になるまい”、Ｆクラスに“Ａクラスの様になりたい”と思わせて意欲を向上させるのが目的なんじゃないか？」

光一は面白くないという態度で、そう言い放つ。
それだけならまだしも、Ａクラスには優子が居るからである。

「そっか。だから授業をやらないんだね」
「そう言う事。さて秀吉に明久、物理と数学、英語なら教えてやれるぞ？」

『Ｆクラス　久遠光一　物理６０３点　数学１９８点　英語２３２点』

「じゃあ、英語教えてくれないかな？　流石に得意科目の１つは欲

しいよ」
「ワシもお願いしようかの。しかしお主の場合、弱点教科を補強した方がよさそうではないか？」
「失礼な……といいたいけど、否定は出来ないな」

『Ｆクラス　久遠光一　古典４点　化学２点　日本史１点　世界史３点』

「四捨五入しても２桁にすらならぬのう」
「……うるさいな」

だから光一はＦクラスなのである。

「最近物理と数学と英語の補習時は、高橋女史によるそれらの個別補習になっておるからのう」
「ビジュアル的にこっちの方が良いけど、“鬼の補習”と大して変わらんから、さしずめ“女王の補習”だ」
「でも何で高橋先生が？」

それもその筈、Ａクラス担任にして学年主任が、問題児相手に個人指導などあり得ない。

「……以前逃げ出した時、召喚獣に取り押さえられた。しかも俺の召喚獣の攻撃全部見切られた上で」
「……鉄人以外で光一を取り押さえられるなんて、流石高橋先生だね」

プライドをズタズタに引き裂かれる出来事故に、光一は表情を暗くした。

「あ、久遠君に相方の吉井君じゃない。それならボクもここにしようかな？」

そこへ、最近光一に興味を持っているＡクラスの女生徒、工藤愛子が近くの席に座った。

「工藤か。久しぶりだな」

「久しぶり。それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Ａクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から７８・５６・７９、特技はパンチラで、好きな食べ物はシュークリームだよ」

「……自己紹介でスリーサイズなんて、初めて聞いたぞ？」

最もである。

というより、あまりにオープンさにちょっとあっけにとられる光一だった。

「しかもなんか、最後の方にすごいのなかったか？」

「だよね……疑ってる訳じゃないけど」

「あ、さては疑ってるね？　なんなら、ここで披露して見せよっか？　久遠君も居る事だし、サービスするよ？」

「光一に対してのサービスなら、僕は目をつむってようか？」

「いやいや、見たかったら見ていいよ？」

愛子が立ち上がり、スカートのすそをつまみ始める。

明久は一旦目をつむるも、指の隙間からソレを見つめる。

「……騙されるな」

そこへ、ムッツリーニが意味深な言葉を告げて来た。

「どうしたムッツリーニ？　お前がこんな美味そうなイベントに乗らないなんて」
「そうだよね。僕ですらこんなドキドキしてるんだから、てっきり鼻血の海に沈んでいると思ったのに」
「……奴はスパッツをはいている」
「そ、そんな！？　工藤さん、僕を騙したね！？」」

と、落胆する明久。
光一も多少落ち込みはするものの、それほどのダメージは受けていない。

「流石はムッツリーニ君だね。まァ特技ってわけじゃないけど、最近凝ってるのはコレかな？」

といって、ある物を取り出した。

「何これ？」
「……小型録音機」
「うん。コレ、すごく面白いんだ。たとえば……」

――ピッ！　＜工藤さん＞＜僕＞＜こんなにドキドキしているんだ＞＜やらない？＞

「わあああああああっ！　僕そんな事言ってないよ！？　変なものを再生しないでよ！！」
「ごめんごめん、ちょっと遊んじゃったよ」
「さっきまでの会話をつなぎ合わせたのか。というか消してやってくれ、今すぐ」

――ピッ！　＜工藤＞＜なんて＞＜美味そう＞＜なんだ＞＜今すぐ＞＜やってくれ＞

「っておいいいいいっ！！」

「ね、面白いでしょ？」

いたずらっぽい笑みを、何故か2人の背後に向ける愛子。

「……ええ。最っっ高に面白いわ」

「……本当に、面白いセリフですね」

明久と光一が振り向くと、そこには氷の微笑をたたえた美波と瑞希がいた。

「ま、まあ落ち着こうな2人とぐあっ！」

2人を宥めようとした光一の腕が、急に背中の方にひねりあげられた。

「光一、さっきのは一体どういう事かしら？　まさか昨日の事で懲りてないの？」

光一が目を向けると、そこには同じく氷の微笑をたたえた優子が光一の腕を捻りあげている。

更に片方では、明久が美波にバックドロップの体勢につかまっていた。

「優子、もうちょっと頭を前に出させて」

「え？　ちょっ、ちょっと待って！　美波、僕をバックドロップの体勢に抱えてどうする気！？」

「え!?　おっおい待て!　まさか……」

そのまま関節技で固められた光一の後頭部に、バックドロップで加速がついた明久の脳天が衝突。
2人はそのまま場に崩れ落ちた。

「全く、昨日あれだけおしおきしたっていうのに、まだ懲りないの!?」

「明久君、エッチなのはいけないと思います!」

「光一も、いい加減にしなさいよ!」

頭となると流石にダメージが深く、2人してうめき声をあげる事で手いっぱいだった。

「明久に光一よ、大丈夫かの?」

「……ぼっ僕は何とか……それより光一、大丈夫?」

「あー、大丈夫?」

先程から黙っている光一をみて、愛子も流石にやり過ぎたかなと反省。
光一は後頭部を抑え、よろよろと起き上る。

「ってー……大丈夫だと思う。それより自習に戻るぞ。姫路たちもとっとと戻れ」

「じゃあ明久君、私達と一緒に勉強しましょう」

「そうよ。久遠だと科目が限られるでしょ?　だからウチと一緒に瑞希に……」

「いや、だから僕は……」

強制的に明久を連れて行こうとする美波の手を、光一が阻んだ。

「何するのよ!?」
「力尽くでやろうとするな。後大声出すなよ」
2人のやり取りは、教室中の注目を浴びていた。
「君達、少し静かにしてくれないか?」
「あ、ごめん」
明久が久保をはじめ、この部屋にいる全員に頭を下げる。
「吉井君か。とにかく気を付けてくれ。まったく、“久遠光一”をはじめとして、姫路さんといい島田さんといい、Fクラスは危険人物が多くて困る」
「姫路さんと美波が真っ先に挙げられるのもそうだけど、何で光一が強調されてるの?」
「……あいつには嫌われてるからだ」
そこで、痛みが多少治まった光一が、一言。
久保の姿を確認するや否や、明久にスタンガンを手渡す。
「どうして久保君を見るや否や、スタンガンを?」
「自衛手段だ。それより悪かったな。騒がせて」
「そう思うなら気を付ける事だね。君は行動が過激すぎるから尚更だ」
「はいはい。さあ明久、とっとと自習に戻ろう」
「あっ、うん」
2人で席に着き勉強に戻る。
ソレを見て、久保は一言。

「……おのれ久遠光一」

と言い残し、自分の席へと戻って行った。

「お前らもとっとと席に戻れよ、また久保が来るぞ？」
「だからアキを……」
「さっき断ってただろ？　良いから引っこめよ、姫路に島田。後木下も」
「え……？」

優子は光一の言った事に、違和感を感じた。
もし、自分の聞き間違いじゃないとしたら……。

「待ちなさい光一、今なんて……」
「姉上、いい加減にするのじゃ。Ａクラスは模範となるべきではなかったのかの？」
「……そうね。さ、行くわよ？　騒ぎは起こす物じゃないわ」

と、優子は２人を宥めて元の席へ。

「すまないな秀吉」
「……光一よ、考え直す気はないかの？」
「ないな。それより、英語やろう。えーっと……」

秀吉と明久は光一にじっくりと英語を教えてもらい、学力アップに成功した。

そして夜となり、入浴時間。

「なあ光一、考え直さないか？　お前と明久のコンビが居ないと、正面突破は難しい」
「断る」
「……そこを何とか」
「断るっつってんだろ！！」

結局光一の機嫌は治まらず、雄二とムッツリーニの説得に拒否の姿勢を取っていた。
光一が出ないならと、明久と秀吉も不参加。

「ちっ……まあ良い。犯人の目星はついてんだ、それを一気に取り押さえれば」
「……それはやめた方が良い」
「まあ、そうだな……くそっ！　あんなに怪しいのに手が出せないなんて」
「……確認するには、やはり女子風呂を覗くしかない」

結局は、そこに落ち着いた雄二とムッツリーニの実行者達。

「けどどうすんだ？　教師の警備を突破なんて、お前らだけじゃ不可能だろ？」
「そうじゃのう。風呂までの廊下はただの広い一本道じゃから、正面突破しかないと思うぞい」
「だったら手伝えといいたいが……まあ、ない物ねだりをしても仕方がない。それに関しては、もう手配はしてある。そろそろ来るころだ」

雄二がそう言うと、そこでノックが聞こえて来た

「坂本、俺たちに話って何だ？」

「……成程、そう言う事か」

須川をはじめ、Ｆクラスの男子全員がぞろぞろと入ってくるのを見て、光一は納得したように頷いた。
正面突破しかないなら、戦力を揃えればいいだけの話。
つまりは、数で上回れば勝機がある。

「よく来てくれた。実は皆に提案がある」
「提案？」
「今度はなんだよ？　正直疲れて何もやりたくないんだけど」
「早く部屋に戻ってダラダラしてぇな～」

入りきらずにいる面々を含め、勉強疲れでうんざりしているだけに全員が文句を言っていた。
そこで、或る程度治まってから雄二が一言。

「皆、女子風呂の覗きに興味はないか？」
『『『詳しく聞かせろ！』』』

一気に声がシンクロした。
そこから離れたところで、明久と光一、秀吉の不参加組は一言。

「……この人数でここまで一致するなど、聞いた事もないぞい」
「でも、嫌いじゃないよ僕は」
「……どうでも良いけどな」

と、それぞれの感想を口にした。

「昨夜俺とムッツリーニは女子風呂の覗きに向かったんだが、そこで卑劣にも待ち伏せをしていた教師陣の妨害を受けたんだ」
『ふむ、それで？』
当然だが、卑劣なのは雄二達の方である。
だが、Ｆクラスの面々は特に気にする事はなかった。
「そこで、風呂の時間になったら女子風呂警備部隊の排除に協力してもらいたい。報酬はそのあとに得られる理想郷……アガルタの光景だ。どうだ？」
『『『乗った！』』』
坂本雄二はＦクラス４３名の戦力を手に入れた。
「ムッツリーニ。今の時間は？」
「……２０時１０分」
「よし、丁度良い時間帯だ！　いいか、俺達の目的は１つ。理想郷への到達だ！　途中何があろうとも、己が神気を四肢に込め、目的地まで着き進め！　神魔必滅・見敵必殺！　ここが我らが行く末の分水嶺と思え！」
『『『おおおおおおおっ！』』』
「んじゃ、頑張って来いよ」
という光一の言葉で、Ｆクラス全員が耳を疑った。
見てみると、明久と秀吉もやる気ゼロの体勢。
「おい、吉井と久遠は不参加か？」
「ちょっと待て！　Ｆクラスの切り込み隊長コンビが不参加って、大丈夫なのかよ？」

「気にするな。俺達ならできる、試召戦争を勝ち抜いてきた俺達の根性と体力さえあれば、光一と明久に頼らずとも必ずや理想郷へとたどり着ける！　全員気合を入れろ！　Ｆクラス、出陣るぞ！」

『『『おっしゃぁあーっ！』』』

「ねえ光一、どうなると思う？」

「無理だろ。向こうには鉄人が居る訳だし、何より昨日の事があってこのまま何もないとは思えん」

「となると、やはり失敗じゃの」

第三十六問

問題　以下の英文を訳しなさい

『Although Jhon tried to take the airplane for Japan with his wife's handmake lunch, he noticed that he forgot the passport on the way.』

姫路瑞希の答え

『ジョンは妻の手作りの弁当を持って日本行きの飛行機に乗ろうとしていたが、途中でパスポートを忘れている事に気がついた』

久遠光一の答え

『ジョンは妻の手作り弁当を手に日本行きの飛行機に乗ろうとしたが、途中パスポートを忘れた事に気がついた』

教師のコメント

はい、正解です。久遠君は得意科目では模範的解答を出すので、生活態度も改めて欲しいところです

土屋康太の答え

『ジャンは』

教師のコメント

ジョンです

木下秀吉の答え
『ジョンは飛行機に乗ろうとしていたが、パスポートを忘れている事に気がついた』

教師のコメント
所々抜けていますが、久遠君との勉強は身になっているようですね

吉井明久の答え
『ジョンは手作りのパスポートを持って日本行きの飛行機に乗ろうとしたが、途中で妻の弁当を忘れている事に気がついた』

教師のコメント
手作りパスポートという言葉の意味をもう一度よく考えてみてください。
ですが、一応久遠君との勉強の成果はささやかながら出ているようなので、それだけは幸いだと思っておきます。

「西村先生。流石に今日は彼らも現れないのでは？　昨日あれほど指導をした事ですし」
「布施先生。彼らを侮ってはいけません。彼らは生粋のバカです。あの程度で懲りるようであれば今頃は模範的な生徒になっている筈ですから。それに、吉井と久遠が現れなかった事にも不安があります」
「そうでしょうか？　幾らなんでも、そこまでバカでは……あ、アレは！？」

――ドドドドド！

布施教諭の視線の先には、男子生徒の団体。
それが怒号をあげ押し寄せて来た。

「おおおおおっ！　障害は排除だーっ！」
「邪魔するヤツは誰であれブチ殺せーっ！」
「サーチ＆デェース！」

しかも、全員が殺気だった状態で。

「に、西村先生！　大変です！　変態が編隊を組んでやってきました！」
「まさか、懲りるどころか数を増やしてくるとは。コレだからあの連中は……！　布施先生、警備部隊全員に連絡を！　１人として通しては……ん？」

先陣を切っているのは、昨日の実行犯である雄二とムッツリーニ。
こういう場合、先陣を切る筈の2人の姿がまた見えない事に疑問が浮かび上がる鉄人。

「……吉井と久遠が、居ないだと？」
「西村先生、どうかされましたか？」
「いえ……とにかく、1人として通してはいけません！　私は定位置につきます！」
「は、はいっ！」

「武藤のC班が布施と接触し、ムッツリーニがそこを通過した！」
「ああ。よし、俺たちも行くぞ！」

雄二の分隊は、ムッツリーニの分隊に続き一気に階段を駆け降りた。
布施教諭も途中まで追い掛けて来たが、ある程度まで来たら顔をゆがませて足を止めた。

召喚フィールドには“干渉”というものがあり、教師の展開するフィールド同士がぶつかると打ち消し合ってしまう性質がある。
フィールドが消えれば残るのは教師の身1つとなってしまう為、力尽くで来られては勝ち目がない。

「坂本、いけそうだな」
「ああ。このまま無事にたどり着け……何だと！？」

階段を駆け下り、いざ女子風呂までの廊下というところで出迎えた光景は……

「そこまでです、薄汚いブタ共！　この先は男子禁制の場所！　大人しく引き返しなさい！」

清水美春を主とした、多数の女子による召喚獣部隊。
しかも軽く見積もっても2クラス分はあり、明らかに数で負けていた。

その中から……

「やっほー、ムッツリーニ君。何を見に来たのかな？　ボクを覗きに来てくれたのならうれしいんだけど♪」
「……工藤愛子！」
「……浮気は許さない」
「げっ！　しょっ、翔子！？」

“雄二の婚約者”である霧島翔子と、“重要参考人候補”である工藤愛子。
そして、姫路瑞希に島田美波、木下優子が出て来た。

「さて……覚悟はいいかしら、光一？」
「今降参するなら、石畳1枚で勘弁してあげてもいいわよアキ？」
「明久君、覗きは立派な犯罪なんですよ？　みっちりおしおきしてあげますから、覚悟してくださいね」

と、3人は対峙する男子勢力に対して宣告した。
……が。

「あれ……？　どうして、光一が居ないの？」
「言われてみると、アキまで……？」
「いつもなら、久遠君と一緒に先陣を切ってくる筈なのに……？」

「なんだと……？　何故吉井と久遠が今日も居ないのだ！？」

定位置についていた筈の鉄人まで、女子防衛部隊の前に出てきて現れた男子勢力を見回す。

だが、吉井明久と久遠光一の姿は、依然と見えない。

「吉井と久遠なら不参加で、今頃木下と一緒に部屋でくつろいでる筈だが？」

須川の言葉で、３人＋鉄人は驚きの顔を見せた。

「どういう事だ！？　奴らが不参加など、一体何を企んでいる！？」

「いや、俺たちに言われても……」

「直接本人に確認すれば良いだろ？」

鉄人は即座に携帯を取り出し、連絡を入れ始める。

「……ええ、そうです。高橋先生と竹中先生は、直ちに確認をお願いします」

「古典担当と高橋女史を向かわせるとは、用意周到だな」

「まあ吉井と久遠だったら、仕方ないと言えば仕方ないな。あいつらタッグ組むとＡクラスどころか、教師すら圧倒しそうだし」

光一にとって、古典は鬼門科目である。

それに加え、高橋教諭は総合で７８００点弱、単科で融合召喚獣の腕輪クラスの点がとれる才女である。

さらには光一を手玉に取れる程の召喚獣の操作技術を持つ事は、既にＦクラスでも知られていた。

「まあ良いか、高橋女史が出てこないだけでも……」
「幸運だと思うか？」

ボキリと拳を鳴らす鉄人に、Ｆクラス全員が顔を青ざめた。
その傍らでは、既に雄二が翔子による処刑の餌食となっている。
しかも先程の騒ぎで、すっかり周りは女子に囲まれていた。

「……一体どういう事？　アキと久遠が不参加だなんて」
「やっぱりあの2人、そういう仲なのでしょうか？　明久君と久遠君がお互いを随分と気に掛けているのは、もしかして……」
「……姫路さん、フッておいてなんだけど、アタシ光一に告白されてるのよ？」
「あっ……ごっごめんなさい。そう言えば久遠君、まだ木下さんの事諦め切れてないんでしたね」
「うっ……けど、一体どうしたのかしら？　何だか今日、様子が変だったし」

所変わって、明久達に割り当てられた部屋にて。

「竹中先生に高橋女史まで、どうしたんですか？　しかも召喚フィールドなんて展開して」

ノックがあった為開けてみれば、そこには2人の教師の姿が。
しかも古典の竹中教諭による召喚フィールドまで展開されていた。

「貴方達がここにいるかの確認に来ました」
「態々学年主任がですか？」

普通に考えれば、そんな事を学年主任がやる事じゃない。
……が、相手が相手ゆえの事である。

「吉井君と久遠君が相手ですから、普通に当たっては危険だという西村先生の意向です。西村先生には現在、覗き犯４５名の監督をしてもらっていますから」
「それでわざわざ……ですか？　まあ俺と明久のコンビを取り押さえられると言えば、確かに鉄人……じゃなかった。えっと」
「西村先生じゃ」
「そうそう。確かに西村先生以外じゃ、高橋女史しかいませんね」

光一の古典、化学、日本史、世界史の壊滅科目の補習を担当してるのは、高橋女史である。
光一の脱走はことごとく失敗しており、召喚獣バトルでも未だ攻撃を見切る事すらできていなかった。

「しかも俺の鬼門科目の古典教諭までとは、用意周到ですね……で、そろそろいいですか？」
「そうですね。入浴時間も終わりますし、これで失礼します」

といって、戸が閉められた。

「やっぱり駄目だったみたいだな」
「高橋先生と竹中先生を差し向けるなんて、鉄人も随分と僕達を警戒してるね」
「それもそうじゃろ」

学園の破壊および、かなりの所業をこの２人は行っている。
だからこそ、それを追い続けた鉄人はよく理解していた。

「明日からはどうなるのかな？」
「大方、竹中先生に布施先生、福原先生でも監視に付けたりして？」
「古典に化学に歴史じゃな？　確かにそれなら、光一では手も足も出せんじゃろうな」

明久ももはや、自分の評価に対しては吹っ切れていた。
というより、光一が気にするなと言っているからが主な理由である。

「別にどうだっていいだろ？　やましいことしてる訳でもないし、堂々としてれば」
「……そうだね。それにFクラス男子全員は鉄人の補習を受け慣れてるし、まあ明日には回復してるよね」
「いささか不便になるの。いや、お主らを責めておる訳ではないのじゃが……」

そして朝。

「夢オチ！？　がっかりだよ畜生！」
「……いきなりなんだよ明久」

朝となり、明久が目を覚ますと寝てる秀吉が目の前にいて、衝動で口付けしようとして……。
という生殺しな夢を見たショックで挙げた大声に、光一が目を覚ます。

「いや、ちょっと……今の光一みたいな状況になってる夢を見て」

光一がふと布団以外の感触に気付き、そこに目を向けるとそこには

秀吉がのしかかる様に眠っていた。

「ん？　……なんだ、また潜り込んだのか？」
「またって……秀吉が潜り込んでるのって、今が初めてじゃないの？」
「ああ。何度か……それより、あんま動かん方が良いぞ？」

と、光一がある方向に目を向け、明久も自分の近くにいる存在に気がつく。
そこには……

「ぐう……」
「……最悪だ」

雄二がいた。

「光一が羨ましい……」
「絵的に気味悪いから、そのゴリラさっさと蹴りだせよ。２人まとめて大惨事になる前に」
「そうだね……雄二！　起きろコラぁっ！」
「ぐふぁっ！」

大声を伴い、雄二をけりだす。
その痛みに悶絶している間に、秀吉とムッツリーニが目を覚ました。

「んむ？　……なんじゃ？　雄二はまた自分の布団から離れた場所で寝ておったのか？」
「お前もだ」
「光一……？　またお主の布団にもぐりこんでしまったか？　すまぬのう」

ムッツリーニがそれを見て、カメラを即座に構えようとする。
光一はマシンガンを取り出しムッツリーニに撃ち出すも、しっかりとシャッターを切られてしまった。

「……侮れない」

自身のカメラ速度に対応された事に、ムッツリーニは舌打ちをした。

「秀吉、またってどういう事？」
「いや、別に大したことではないのじゃが……雄二は寝像が大層悪い様でのう。明け方はワシの布団の中に入ってきておって……やめるのじゃ明久！　花瓶を振りかざしてどうするつもりなのじゃ！？」
「殴る！　コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける！」

ガチャッ！

「おいお前ら！　起床の時間だ……ぞ……？」
「死ね雄二！　死んで詫びるんだ！　あるいは法廷に出頭するんだ！」
「何だ！？　朝からいきなり明久がキまっているぞ！？　持病か！？」
「良いから死ぬか言う通りにするか、とっとと逃げるなりしろ！」
「光一、余計な事を言うでない！　明久も落ち着くのじゃ！　西村先生、すまぬがこやつを取り押さえるのを手伝って頂きたい！」
「……！（コクコク）」
「……お前らは朝から何をやっているんだ」

花瓶を雄二にたたきつけようとする明久と、それを取り押さえようとする光一と秀吉とムッツリーニ。

その光景に、朝から呆れてものが言えなくなった鉄人だった。

騒動も終えて、朝食中。

「で、何か進展はあったのか？」

話題の種にはなるだろうと、光一が昨日の事を聞いてみた。
秀吉に明久も、気になっていた為に耳を傾ける。

「いや、特には……」
「……工藤が“脱衣所にまだ見つかっていないカメラが1台残っている”と言っていた」
「何だと？」

ソレを聞いて、忙しく動いていた雄二の端の動きが止まる。

「それ、怪しくない？　そんな事知ってるなんて」
「いや、そうとも限らんじゃろ。それならわざわざ怪しまれる様な事を言うとは思えん」
「まあそれもそうだな。でも、それなら話は早い。そのカメラとやらを取りに行けばいいだろ？　そのカメラに撮影されてる可能性は高いから、入浴してない女子の確認ができる」
「……隠し場所なら、5秒で見つける自信がある」

光一の提案に、ムッツリーニが名乗り出る。
……が、釈然としない部分はあった。

「けど、本当にそんなカメラがあるのも怪しいよ？」
「いや、そうでもないさ。考えてみれば、盗聴や盗撮に長けた犯人

が仕掛けたカメラが素人に見つかる方がおかしいんだ。だから、最初に見つかったカメラはカムフラージュだった可能性が高い」

「用意周到じゃな……光一よ、落ち着くのじゃ」

そのカムフラージュで酷い目にあわされた事を思い出し、少々光一の機嫌が損なわれ始める。

それに気付いた明久と秀吉が、宥め始めた。

「けど、それならお風呂の時間をさけてカメラを取りに行けば解決ってことだね」

「……それは無理」

「時間外だと確か、脱衣所は厳重に施錠されてるんだったな？　何もかもが裏目に出てるな」

「諦めて今まで通りの方法を貫けって事だ……だから光一、その為にもお前と明久の力が必要なんだ。頼むから協力してくれ」

「断る！」

珍しく頭を下げる雄二だったが、光一はバッサリと斬り捨てた。

そして自習時間。

雄二は光一達の説得は諦め、他のクラスを味方につける事を優先させることにした。

現在明久と秀吉、光一は3人でトイレへと向かっていた。

「けど、どうも釈然としないな」

「何がじゃ？」

「う～ん。なんか、その作戦がいつものやり方と違う感じがして何だか……ほら、向こうの戦力が大きいからってこっちの戦力を増や

すって言うのが、イマイチ雄二らしくないというか……」
「へぇっ、それに気付くとは明久も頭が回るようになってきたな。あのやり方の目的は正面突破だけじゃなくて、あいつらの保身もあるんだろ？」

唯一雄二の意図を見抜いていた光一は、明久の疑問に答える事に。

「保身？　誰から？」
「決まってるだろ。今のところ未遂で終わってるから大した問題じゃないけど、覗きは立派な犯罪だ。作戦が成功して女子風呂に至ったとしても、例の真犯人が見つからない限りは処分を受ける事になる」
「成程のう。じゃが雄二とムッツリーニの顔は既にわれておるのじゃ」
「そこで、文月学園の弱点……世論に弱い部分を利用するってことだ」

文月学園は世界中から注目を集めている試験校である。
だからこそ、そんな不祥事があった場合ひた隠しにするかきっちり処分するかのどちらかしか選べない。
中途半端に一部を罰する事があれば、ただでさえ叩かれている“クラス間の扱いの差”について、マイナス要因をふやすだけである。

「そっか。じゃあ雄二はＦクラス所属を利用して“出来の悪いＦクラスだけが処分を受けて、他の優秀なクラスは手心を加えられている”なんてバッシングの元を避けるだろうって、見当つけてるんだね？」
「だろうな。汚い事を考えさせれば、右に出る物は居ない雄二の事だ。まあ、そんなところだろ」

その予想は正解だったのだが、光一はそう辺りを付けて納得する事に。
彼にとってどうでも良い事である以上、あまり手間をかける気はないのである。

「でも、一体誰なんだろうね？　例の真犯人」
「さあな？　けど、霧島も霧島だよ。盗聴や盗撮に長けた相手と取引してまでなんて、幾らなんでもやり過ぎだ」
「そうじゃの。元はと言えば、それが原因でそうなっておるのじゃから、とんだ災難じゃの」

ぽつりと明久が言い出した言葉に、２人はそれぞれの意見を口にした。

「だよね。雄二のプロポーズ偽装犯が僕達の覗き疑惑の原因になった訳で、結局ムッツリーニが掴んだ“お尻に火傷のある女子”って特徴しかわからないから、こうなってる訳なんだし」
「……考えてみたら、どうして女が脱衣所の盗撮なんてやるんだ？　既にそこで矛盾してる気がする」
「そうじゃの。もしかしたら真犯人は、同性愛趣味という可能性があるのう」
「そうか。同性……ん？」

同性愛……というところで、３人の脳裏にある人物が浮かんだ。
光一の“融合召喚型”の腕輪を狙い、明久を抹殺対象とし、島田美波に好意を寄せるある人物の姿が。

「……まさか、清水さん……なんて事はないよね？」
「いや、あいつならやりかねん。考えてみたら、お前が姫路と島田に無理やり連れて行かれてるデートって、全部嗅ぎつけられてんだ

ろ？」
「そうじゃの。確かにその手に長けておってもおかしくないの」
「まあ、容疑者の候補として後で雄二にでも教えてやろうか。俺たちにとって、今更覗き疑惑なんてどうだっていい事だしな」

そこから少し離れた地点にて。

「代表が盗聴がどうとかって……？」
「坂本のプロポーズ偽装犯って、どういう事？」
「冗談を言っている様には聞こえませんよ？」

瑞希、美波、優子はたまたま明久達が会話している所に通りかかり、身を隠してそのまま盗み聞きをしていた。
昨日から様子がおかしい事や、覗き騒ぎに参加しなかった事に疑問を感じていたからである。

「思い返してみれば、お主らもそのとばっちりの濡れ衣であんな事になったのじゃから、災難じゃの？」
「災難といえば、確かにね……でも普段の僕を考えれば、姫路さんや美波にあそこまで嫌われてたって仕方ないかなって思えるし、気にする事もないよ」
「俺は別にいいよ。元々優子には繋がりどころか、存在そのものを否定される様なフラれ方をしてた訳だし、今回の事はいい機会だ。おかげですっかり愛想も尽きたしな」

「「「っ！」」」

「って秀吉はあっちでしょ？」
「こっちであっておるのじゃ！」

明久達がトイレへと入っていったと同時に、3人は状況を整理し始める。

「坂本君のプロポーズって、もしかして準決勝のあの時？　……それを代表が盗聴してたって事？」

「坂本君達が覗きをしようとしてるのは、“お尻に火傷がある真犯人”を特定する為？」

「じゃああのカメラ、アキたちのしでかした事じゃなかったって事？」

情報が少なすぎて、結論を出すには至らない。

もっと情報が欲しいと思う物の、事によっては顔を合し難いことゆえに尻込みをする。

「それじゃ、俺達は俺達でこの合宿を有意義にするか」

「そうじゃの。ワシは忘れ物があるから、一旦部屋に戻るぞい」

「じゃあ先に行ってるね？」

と、秀吉と別れた光一と明久は、一路学習室へ。

そして秀吉は……

「さて……んむ？　どうしたのじゃ姫路に島田、姉上まで」

「……さっきの話について聞きたいんだけど」

第三十七問（前書き）

ＰＶ５００００００突破！

これもすべては、ひとえに読んでくださる皆さんのおかげです。
これからもがんばりますので、これからもよろしくお願いします。

第三十七問

土屋康太の日誌
『前略　（※　坂本雄二に続く）』

教師のコメント
今度はリレー形式ですか。次から次へと良く思いつく物です

坂本雄二の日誌
『そして翔子が俺の前で浴衣の帯を緩めようとした。俺はあわててその手を押さえつけ、思いとどまる様に説得した。ところが、隣では島田と姫路が明久に、工藤と木下優子が光一に迫っていて妙な雰囲気となっており（※　久遠光一に続く）』

教師のコメント
君たちに一体何があったのですか？　土屋君が略した部分がとても気になります。

久遠光一の日誌
『工藤に取り押さえられたまま、優子の泣きながら俺に謝る姿を見て、俺には何もかもがわからなかった。明久に姫路と島田が泣きながら自分の気持ちをぶつけていて、何となく俺がやった事は余計なことだったんじゃないかと思え、あんな事を言った事を謝りたい気持ちに駆られるも（※　吉井明久に続く）』

教師のコメント
不健全な空気が感じられますが、君達の間では随分と色々な事が起

こっている様ですね

吉井明久の日誌
『光一が木下さんと工藤さんに、雄二が霧島さんに迫られていて、何故か僕は姫路さんと美波に迫られるという状況。最初は息の根を止めに来たのかと思ったけど、何故2人ともが泣いているのか僕にはわからなかった。何故僕に泣きながら謝る必要があるんだろう？
僕は別に2人に謝られる様な事はしてないし、むしろ僕が謝るべきなのに……2人が僕をどう思っているのかがわからない。嫌われてる？　それとも……』

教師のコメント
君達は、意外と言っては失礼ですが女性に縁があるのですね。
でしたら彼女たちの気持ちに報いるべく、生活態度は改めるべきだと思います

「秀吉遅いな？」
「うん。なんか、姫路さんに美波に木下さんの姿も見えないし、何かあったのかな？」
「どうでも良いだろ。まあもうちょっとしたら探しに行くとして、

俺達は先に始めるか」
「そうだね」

と、今日は物理を。
光一は銃の弾道計算にかかわる事でもある為、最も得意な科目としていた。

「その辺りに、光一の百発百中の秘密があるんだね？」
「まあな」
「おや、吉井君に久遠光一か。また一緒かい？」

そこで、ある人物に声をかけられた。
光一はその人物を確認するや否や、明久にスタンガン（２０万ボルト）を手渡し、エアガンを取り出す。

「……いきなり何だい？　まるで僕を危険対象として見る様な扱いじゃないか」
「そうだよ光一、幾らなんでも失礼じゃない？」
「そうか？　……それより、何か用か久保？」

話しかけて来たのは、久保利光である。

「先程坂本君から、ある誘いがあってね」
「誘い？　ああ、あの件か」

多分参加していたら、明久がやらされていた役目だろうとあたりをつける光一。

「君達Ｆクラスは何を考えているんだ？　人の集まりにはルールがあり、それを守る事で社会は形成される。人として間違った事をし

ようとするなんて、社会に不適合な人間だと言えるだろう」
「いや、俺達不参加なんだけど」
という光一の言葉に明久が頷くと、久保はこほんと咳払い。
「そうなのか？　それはすまなかったね……しかし、どういう風の吹きまわしだい？　坂本君が絡んでるなら、君達も一枚噛んでいると思ったのだが」
「あいつらにはあいつらの理由があるんだけど、俺たちにとってはどうだっていい事だ」
「そうか。まあそれなら良い」
と、いつもにしてはどうも機嫌が良すぎると感知した光一。
「？　なんかいい事でもあったのか？」
「いや、別に……」
パラっ……
「ん？　なんか落ちたよ？」
と、明久が拾い上げたのは2枚の写真。
1枚は、光一にしなだれかかって口をふさごうとする秀吉。
で、もう1枚は今朝の光一にのしかかるように眠っている秀吉の写真。
「……どこでこれを手に入れた？」
「Fクラスのとある人から譲って貰っただけだ。ではこれで失礼するよ」
「そうか……」

元々機嫌が悪いのが災いし、あるターゲットへの殺意を充填し始める光一。
明久も流石にまずいと思い、それを宥め始める。

「まあまあ落ち着いて光一……あの様子じゃ、Aクラスは無理みたいだね」
「だろうな……まあ説得程度で協力を得られるのは、精々Dクラスとの2クラス位だろ。Bは代表が代表だからまとまりなんかないだろうし、Cの代表はあのヒステリーだから男子連中は尻込みする筈だ。協力するとは思えない」
「そうだね……なんだか、ドンドン大きな話になってない？」
「まあ雄二が旗頭だから、必然ではあるだろ」

たかが覗きといえど、クラス単位ともなれば流石にすごい物である。

「でも、ここまで大きな騒ぎになったら、女子の入浴自体が中止になったりしないのかな？」
「それはないだろ。教師側にもプライドがあるだろうし、“覗きが阻止できないかもしれないから入浴は控えてください”なんて言えると思うか？」
「ああ、そっか」

そんな事を言えば、教師の面目は丸つぶれである。
それに勢力的にも勝っている事も、その要因であると言える。

「それとこれは憶測だけど、教師側はこの事態を好ましく思ってる可能性もある」
「え？　雄二達の覗きを？」
「正確には、覗く為に頑張る事をじゃないか？　この合宿の趣旨を

考えると、その方が適切だ」

“生徒の学習意欲の向上”が、この合宿の目的である。
だからこそ、目的が何であれ召喚獣を使って戦闘するには勉強をせざるを得ない。
男子は覗く為に、女子は自衛の為に召喚獣が不可欠である以上は、それは必然。

「そっか。だから雄二達は、未だに拘束されたりしないんだね？」
「まあ警戒はしてるみたいだがな」

監督の鉄人が、じろりと光一と明久の2人や雄二達を見据えていた。
ちなみに今は物理の勉強をしてるふりをしながら話している為、特におとがめはない。

「僕たち参加してないのに……」
「向こうにしてみれば、参加しない事自体が怪しいんだろ？　何せ俺たちは観察処分者と過激派筆頭だ」
「考えてみればそうだね……それより、秀吉遅いね？」
「ああ。ちょっと心配になってきたし、ちょっと鉄人に断って……」
「すまぬ。遅くなったの」

そこで、丁度勉強道具を抱えた秀吉がやってきた。

「どうしたんだよ？　偉く遅かったけど」
「ちょっと、手間取っての」
「ふーん。じゃあ今日は物理を教えてやるから、さっさとしろよ」

そして、昼食時

「のう、光一よ」

現在5人での昼食にて。
ムッツリーニにとあることへの尋問をしてる最中、秀吉が神妙な顔で何かを言いあぐねる。

「なんだよ？」
「姉上の事じゃ」
「……木下がどうしたんだ？」

以前の様な気さくな感じはなくなり、他人の名を呼ぶように言い放つ光一。
その目にはもう興味のかけら程度も感じられない。

「……姉上とて、悪気はなかったと思うのじゃ」
「そんなことわかってるし、俺じゃそう思われても文句は言えない事だって理解してるから別に怒ってやしないよ。ただ、今回の事で踏ん切りがついたのは確かだけどな」
「……光一」
「全部俺の自業自得なんだから、秀吉が気に病む事でもないだろ？ちょっとお冷取ってくる」

と、光一は立ち上がって去って行った。
その姿を見送った後、雄二はハァッとため息をつく

「……あいつもうすっかり、木下優子に愛想尽かしてるな。あんなにショック受けてた時が嘘みたいだ」
「……無理もない」
「おのれ、真犯人……俺の人生を脅かし、光一の純情を踏みにじっ

たその所業、全く持って許し難し！」
「……必ずや、捕らえて見せる」
改めて、真犯人を突き止める決意を固める雄二とムッツリーニ。
「（で、雄二達の方はどうなのさ？）」
と、明久がアイコンタクトで雄二に問いかける。
「（午前の間にD・Eクラスの連中の協力をこぎつける事は出来た。次はB・Cクラスだ）」
「（ふーん。じゃあ光一の予想通りってことか）」
「（光一も頭の回転はお前と違って早い方だからな。俺の意図をある程度理解は出来ると思っていた）」
だからこそ、雄二は光一を試召戦争で切り込み隊長として信頼していた。
もっとも、普段こそ相容れない性質を具現したような間柄だが。
「（でも、大丈夫？　Aクラスは久保君が懐柔できそうにもないし、B・Cクラスは光一も言ってたけど、代表が代表だから説得で動くと思えないよ？）」
「（だったら明久、お前だけでも協力しろ。最難関である鉄人と戦えるのは“観察処分者”であるお前だけだ。せめてお前だけでも居れば、状況は違ってくる！）」
「（……僕は、光一が参加しないならしないよ）」
断られる事は予想はしていた物の、流石にその言い分だけは予想外だった。

「おい明久、一体どうしたんだ？　お前らしくもない」
「……僕は、考えてみれば疑われても仕方ないって思えるし、今更どうこう言っても仕方がないよ。だからせめて、光一を裏切りたくない」
「くっ……まあ良い、ならお前には頼らん。行くぞムッツリーニ」
「……！（コク）」

食事を終えた雄二とムッツリーニは、一路Ｂ・Ｃクラスの元へ。
残った明久と秀吉は、そのまま食事を続ける

「明久よ、お主随分と自分を過小評価しておらぬか？」
「そうかな？　妥当だと思うけど？」
「……良いか明久よ。お主は自分が思っておるよりもじゃな？」

言い様のない感情に苛まれた秀吉は、ゆっくりと明久を説得し始めた。

一方そのころ。

「なんだ、姫路に島田？」

お冷を貰おうとした所で、２人に声をかけられて外へ。
２人の神妙そうな態度に、光一は疑問符を浮かべる

「木下から聞いたわ。あのカメラだけど、アンタ達じゃないんだってね？」
「……なんだ、その事か？」
「……誤解だったら、謝らないといけませんから」
「はぁっ？　何を言うかと思えば……くだらねえ」

顔をしかめると、興味なさそうにそっぽを向いて食堂に戻り始める光一。

「ちょっ、待ちなさいよ！」

「お前らの大根臭い三文芝居に付き合ってやる義理はねえよ」

その言い分に美波は腹を立て、瑞希も心外だと抗議し始める。

「そんな言い方ないでしょ！」

「そうです！　確かに怒ってもしょうがないかもしれませんが、どうしてそこまで言うんですか！？」

「大事な相棒を所有物かオモチャとしか思ってない奴らには、破格な対応だと思うが？」

「「そんなこと思ってません（ない）！」」

呆れた様にため息をつくと、光一は不機嫌さを隠す事をやめたかのように2人をにらみつける。

「風評だけでFクラスをバカ呼ばわりする奴等と一緒になって拷問しといて、か？」

「あっ……」

「そっそれは……」

瑞希も美波も、その指摘で勢いを完全に殺され縮こまってしまった。

瑞希にとって、かつて親にバカぞろいのFクラスにいるのは悪影響だと決めつけられ、転校を勧められた原因でもあるが故に。

「お前ら今まで明久の何を見て来た？　特に姫路、振り分け試験の時途中退席の無得点扱いに抗議したり、雄二を焚きつけて試召戦争

を提案したり、Bクラス戦で根本のクソヤローから大切なものを取り戻したのが誰かを忘れたのか？　島田も、学園祭で誰よりも必死になってた事も、チンピラにお前らがさらわれた時真っ先に動いたのも全部あいつだろ！」

2人のそういう態度が、光一が最近不機嫌である大きな理由だった。明久の事が好きだという素振りを見せて居ながら、まるで明久を自分の所有物の様に扱う事に。

「そう言えばお前ら、以前言ってたよな？　俺と自分達でどうして差があるのかって……そりゃあいつを信じてるか信じてないかの差だ」

「「……」」

「良いこと教えてやるよ。俺があいつを相棒にしたいって思ったのはな、あいつのそう言う人の為に必死になれるってところを尊敬してるからだ」

「「っ！？」」

「悪いけど、俺はアイツほど甘くない。謝る位で何事もなかった事にしようなんて、絶対に許さん」

光一は言いたい事をすべて言うと、興味なさそうにその場を去って行った。

その間、2人はずっと俯き続けている。

「……負けて、当たり前……ですね」

「そうね……」

一方そのころ。

「そう……」

明久と秀吉の方には、優子が顔を出していた。

「多分、ああなるともう光一は変わらないよ。木下さんの事、完全に愛想尽かした風だったし」

「……良いわよ別に、あんな奴」

「姉上。そう意地を張るの、いい加減やめた方が良いのじゃ」

そう言われて、優子は顔を赤らめた。

「……だって、アタシは」

「ねえ秀吉、もしかして……」

「そのまさかじゃ。姉上は意地っ張りじゃからのう」

真実に喜ぶべきかもしれないが、現状を考えるとどうも複雑な明久。光一はもう愛想尽かしており、優子も内心ではどうにかしたいと願っている。

ここは光一の相棒として何かしてやりたいが……。

「……どうしようか？」

結局、特に妙案も思いつかなかった。

「真犯人が見つかれば、あるいは何とかなるやもしれんがの」

「ああ、例の“お尻に火傷がある女子”の事ね？　わかったわ。アタシの方でも探しておくから」

「うん、お願い。後、雄二達の事だけど……」

「アタシ達の決め付けが火種だから、多少の手加減くらいはしてあ

げるわ。ただし坂本君と土屋君限定で、他の純粋な覗き魔達は別だけど」

それぱかりは、明久と秀吉も擁護のしようがなかった。
特にFクラスのバカ共は、雄二の覗き発言だけであっさり賛同してるだけに。

「それじゃ、お願いするよ木下さん。僕は光一をなんとか宥めてみるから」
「ありがとう……こんな事言えた義理じゃないけど、あの時は覗き魔扱いしたりしてごめんなさい」
「ううん、良いよ。疑われてもしょうがない事してるし、光一の容疑が晴れるだけでも幸いだから」
「光一が気に入るの、なんとなくわかる気がするわ……それじゃアタシは心当たり探してみるから」

と、優子が去って数分後に、光一が戻ってきた。

「悪い、遅くなった」
「ううん。気にしてないから良いよ……それより、なんか更に機嫌が悪くなってない？」
「光一よ、いい加減落ち着くのじゃ」
「……悪い」

先程の事に、多少私情が入っていたとはいえ酷い事を言ったなと、内心少し罪悪感を感じる光一。
その光一を、いかにして宥めようか悩む明久と秀吉。

こうして時は過ぎ、今日もまた男子ＶＳ女子＋教師連合軍の戦いが幕を開ける。

第三十八問

問題　以下の問いに答えなさい
『観測者Ａが速度Ａで走っていると、正面から周波数Ｆの音を発し速度ｖ，で走行してくる救急車がやってきた。音速をＶとした時、観測者にどのような事が起きるのかを書きなさい。また、その現象の名称も併せて答えなさい』

姫路瑞希の答え
『観測者Ａには、車が発する音の周波数がｆＶ＋ｖ／Ｖ－ｖ，となって聞こえる。
　現象の名称……ドップラー効果』

教師のコメント
Ｆ１マシンが通過する時もコレと同様の現象が起こっていますね。物理現象は一見難しい様に思われますが、意外と身近に存在するものです。

久遠光一の答え
『観測者Ａには、車が発する音の周波数がｆＶ＋ｖ／Ｖ－ｖ，となって聞こえる。
　現象の名称……ドップラー効果』

『観測者Ａが速度ｖ，＋ｖで撥ねられる。
　現象の名称……交通事故』

教師のコメント
きちんと相対速度を補正してまで余計な事は書かなくて良いです。

吉井明久の答え
『観測者Ａが速度ｖ，＋ｖで撥ねられる。
現象の名称……交通事故』

教師のコメント
久遠君との勉強を変な方向に活かさないように。

「さてムッツリーニ。作戦開始時刻と集合場所は、両クラスに通達して来たか？」
「……問題ない」

作戦開始は２０１０時、集合場所は一階の大食堂。
脱衣を終え、大体のころ合いを見計らって攻撃を仕掛ける予定である。

「……で、光一はどう見てるの？」
「今回も失敗する」
「生憎だが、今回はそうはいかない。そろそろ向こうも隠密行動に出るだろうと考える筈だから……」

バンッ！

「坂本っ！　大変だ！」

突然ドアが開かれ、血相を変えた須川が飛び込んできた。

「須川、どうした？」

「やられた！　大食堂で敵が待ち伏せをしていたんだ！　今は戦力が分断されて各階に散り散りになってる！」

「何だと！？　まさか……」

「……情報が漏れる事はない」

雄二の疑問を払拭する様に断言するムッツリーニ。

ソレを見て、光一は予想通りという風に頷いた。

「光一、どういう事？」

「向こうには霧島が居るんだ。召喚大会の時と同様に、雄二の作戦を読まれてもおかしくはない」

「ぐっ……」

男子勢にとって、雄二の考える常識はずれな作戦が頼みの綱だった。

それだけに、作戦が筒抜けである現状の打破は厳しい。

「で、どうする気だ？　総指揮官どの」

「どうするもこうするも、こうなっては作戦なんて殆どない様なものだ！　一旦分断された戦力を編成し直すしかない！　ムッツリーニ、須川、出るぞ！！」

雄二は２人を伴い、扉を開く。

「このスケベ共！　大人しくお縄につきなさい！」
「覗きなんてさせないからね！」
「くそぉっ！　どうしてこんなところに女子が！？」
「知るか！　とにかく応戦しろ！」

外は既に戦場となっていて、所々で男子対女子の戦いが起こっている。
しかし戦力を分断された揚句、不意打ちもあってか状況は不利で、一方的な展開が繰り広げられていた。

「なんか、とことん状況は不利になる一方だね」
「当然だろ。作戦が読まれる上に戦力に差があるなら、明らかに雄二達が不利だ」
「光一と明久が居れば、話は別なのじゃろうが……」

そこへ女子の1人が召喚獣を伴い、部屋に乱入して来た。
それも、光一と明久にとって見たくもない顔が。

「げっ！　清水美春！？」
「ふふふっ、美春の獲物が2人大人しくしてくれるなんて、好都合です」
「好都合？　……そうか。この乱戦なら、幾らでも事実をでっち上げられるな」
「ええ。ブタ共の覗きなんて嫌悪しますが、この騒動だけは感謝します。お姉さまを誑かす吉井明久を抹殺し、私の望みを叶える腕輪を奪うには絶好のチャンスです！」

明久と光一に対し殺気を含んだ睨みを利かせ、目は光一の右手につけられている腕輪を見据える。

ソレを見てトリップし始めたのか、よだれを垂らして何かを妄想し始めた。

「ああっ……その腕輪さえあれば、美春の召喚獣はお姉さまとの愛の結晶に生まれ変わる……」

「本人が了承しないと無理だけどな」

「お姉さまでしたら、美春の愛を拒む事はありません！」

「どうかな？　俺には心の底から“嫌われてる”ようにしか見えないが」

空間にひびが入った。

「ちょっ、ちょっと光一！　何でそんな事言うの！？」

「何か問題あるのか？　“本当の事”を言った位で」

「……殺します」

と、何やらどす黒いオーラを纏い始めた美春。

3人もそれを見て、流石に顔を青ざめた。

「お姉さま、オネエサマ……ミハルはオネエサマとのアイのタメ、このブタをチマツリにアゲテミセマス。ウデワ……ウデワ……オネエサマトユウゴウ……ケタケタケタケタ」

「……ねえ光一」

「すまん……正直、思いっきり後悔してる」

「……人の領域を超越する等、鉄人以外にありえんと思っておったのじゃが」

秀吉の台詞に、2人は心から頷いた。

「……とりあえず、召喚獣だけでも使えなくするか。後は本人を明久の召喚獣で動けなくすれば良い」
「うっ、うむ……光一よ、助太刀するぞ」
「そっそうだね……」

光一と秀吉は召喚獣を呼び出し、融合体勢に入る。
キーワードが告げられ、光一の召喚獣は道着の様な着こなしのジャケット、自動拳銃2丁を両手にという装備に。

『Fクラス　久遠光一（＋木下秀吉）　化学４点＋６１点』
VS
『Dクラス　清水美春（だった何か）　化学９９点

「腕輪……ウデワ……美春ト……オネエサマとの……アイのケッシヨウ……ウデワ……ウバ……ウ……ウバウウバウウバウウバウウバウウバウウバウウバウバウ」

召喚獣が融合していく光景を見て、美春だった者は殺気を増大させ更に異形に変貌していく。

「融合召喚獣初陣だけど……こんなに戦いたくないなんて思ったの、初めてだ」
「光一、それは無理からぬことじゃ。ワシも正直、やりたくないぞい」
「コロ……す……ウバ……ウ……」

融合召喚獣が銃を構え、美春の召喚獣に撃ち出そうと……

「なっ！？」
「コロします……オネエサマとのカガヤカシイミライをハバムノデ

アレバ、コロシマス！」

した所で、美春本人が光一めがけて襲いかかった。

「危ない光一！　サモン！」

そこで明久が、召喚獣を駆使してそれを弾く。

『Ｆクラス　吉井明久　化学５９点』

「ヨシイアキヒサ……オネエサマをタブラカスガイチュウ……クジョスル。クジョクジョクジョクジョ」

「なっなんか、さっきよりまずい事になってるよ！？」

「ええい、こうなれば！！」

と、スタンガンを取り出し投擲。

だが、美春だったものは難なく回避し、光一に襲いかかった。

「ケケケケケケ！」

「あっ、島田が男に襲いかかられてる」

「オネエサマ！？」

「隙あり」

手に４０万ボルトを構え、そのまま最大出力で押し付ける光一。

秀吉に明久もそれに便乗し、光一から投げ渡されたスタンガンを最大出力で押し付け、その数分後何とか鎮圧。

「……ふぅっ、やっと一安心だね」

「ああ……ある意味鉄人より性質が悪い」

手足を縛り、トイレに放り込んだところで一息つく明久と光一。

「うむっ、頼むぞい」

と、光一の携帯で連絡を取っていた秀吉はソレを終えた。

「誰に電話してたんだ？」

「姉上と姫路と島田じゃ。清水を引き取って貰わねばの。それに、確認すべき事があるじゃろ？」

「確認？　あっ！」

「そうか、お尻に火傷！」

自分達で調べてもいいのだが、もし間違ってた上にそんな事が知られたら、確実に言い逃れは出来ない。

そもそも雄二達のやり方もイチバチであり、その辺りを考慮して数を増やす方法をとったのである。

「……悪いけど俺、席外すわ」

「じゃったら、もう寝ると良かろう」

「ああ。そうだな」

一方、自習室にて。

「何故吉井と久遠が一向に現れない！？」

ＤＥＦクラスの全員の反省文を監督する鉄人の、全員を確認し終えて。

懸念していた２人の人物が、またもや居ない事が火に油を注いでいた。

「おっ、落ち着いてください西村先生。騒ぎを起こさないならそれに越した事は……」
「いいえ、あいつらに限ってそんな事はありません！　坂本、奴等はどこだ!?　一体何を企んでいる!?」
「知るか！　こっちだってあいつらの不参加の所為で大変な目にあってんだよ!」
ソレを筆頭に、所々で抗議が上がった。
「そうだ！　何であいつらが不参加なんだよ!?」
「過激派筆頭の久遠と観察処分者の吉井が、何で奮い立たないんだ!?」
「少なくともあいつらが居れば、少しはマシだったかもしれないのに!」
と、半ば暴動でも起きそうな勢いだが、鉄人の一喝で黙らされた。
「この連中の雰囲気からして、本当に不参加なのか……？　いや、まさかそんな筈は」
「ですから西村先生、幾らなんでも来てないのにその扱いは……」
「大島先生。あの切り込み隊長コンビに油断は命取りです！　あいつらが参加しない等、必ずや何かがあるに違いないのですから！」
「（鉄人の集中力が乱れてるのは、ある意味好都合だな……だが鉄人と高橋女史を打倒するには、やはり光一と明久が必要だ）」
「（……でも、光一が首を縦に振らない事には）」
「（全く、いらん手間をかけさせやがって……まあ良い、A～Cもどうせ必要だから、手間は同じ）」

「よし、全員書き終えたら帰ってシャワーを浴びて眠ってよし」

一方、明久達の部屋にて。

「確認できました。清水さんのお尻には火傷の痕があります」
「ええ。さっき清水さんの荷物確認したけど、カメラやマイクも見つけたわ。間違いないわね」
「そうじゃったか。脅迫犯も分かった事じゃし、これで問題は解決じゃな」
「全く、この子ったら……二度とやらないように念は入れとくからね」

確認し終えた3人は、美春を抱えて入口に立っている。
美波も流石に美春のしでかした事に呆れており、頭を抱えていた。

「ごめんね、手間をかけて」
「ううん……あのねアキ」
「明久君……あの」

2人が何か言いそうになっているのを、明久は謝ろうとしていると見当を付けた。

「気にしなくて良いよ。僕じゃ疑われても仕方ない事普段からやってるし、謝る事じゃないよ」
「明久君……」
「それじゃ、態々ありがとう。3人ともお休み」

と、戸を閉めると同時に、瑞希と美波は俯いた。
明久は予想通りにあっさりと許した物の、光一から言われた事がず

っと重くのしかかっている為に。

「……ねえ瑞希」

「……美波ちゃんも、ですか？」

「光一……もう、戻れないのかな？」

「あれ？　優子に姫路さん達じゃない。そんなところで何してるの？　夜這の下見？」

そこへ通りかかった工藤愛子が、３人を茶化した。

「え！？　なっ何言ってるのよ愛……そうね。このままじゃどうせ話なんて聞いてくれそうにないし」

「そうですね……私、やっぱりちゃんと明久君に謝りたいです」

「そうね。ウチも釈然としないし、いっそここで一気に行かないと」

そして、明久達の部屋にて。

「さて、これで問題は解決したのう」

「そうでもないよ。今の騒動が雄二達が抜けた位で治まるかな？」

「……そうじゃったの」

明久の懸念は、覗き騒動の方である。

雄二の問題は解決したものの、それ以外の全ての男子は純粋に覗こうとしている者たち。

それ故に“今更やめます”なんて言われても、特にＦクラスの連中が黙ってはしないだろう。

「どうしようか？　雄二がもう何かの策を使った可能性だってあるかもしれないし」
「策略では、光一に頼るしかないのう。ワシ等だけではどうにも……」
ガチャッ！
そこで雄二たちが戻ってきた。
明久と秀吉は、すぐさま事情説明に。
「そうか。清水がか……しかし、どうやって？」
「さっきの騒動のどさくさにまぎれて、清水さんが押し掛けて来たんだよ」
「その時にか？　お前随分……」
「ちっ違うよ！　姫路さん達を呼んでたしかめて貰ったんだよ！」
雄二は目的が達成された事に喜びを見せる……が。
「となると、まずいな……」
「やはりすでに何かしたのじゃな？」
「ああ。ムッツリーニの隠し撮り厳選を男子生徒に配って回ったところだ」
ムッツリーニの技術をもってすれば、劣情を煽る写真を撮るなど造作もない。
ソレをいましがた、配り終えたばかりである。
「……それ、確実に不味くない？」
「どうするのじゃ？　そんなものが出回れば、おそらくＡＢＣクラスからも参加者は出る筈じゃ！」

「こんな裏道で目的が達成されるとは思わなかったからな……もう止めようもないだろ」

結局、雄二達の必死の思考もむなしく、解決策は特におもいつくことはなかった。

「で、光一はもう寝てるのか？」

「木下さん達が来るって聞いてからすぐね。何とかしてあげたいけど……」

「仕方ない、問題解決もしたし、光一も明日には機嫌を直すだろうから相談してみるか」

第三十九問

問題　以下の問いの（　）を埋めなさい。

江戸幕府八代将軍は（　）である

姫路瑞希の答え
『徳川吉宗』

教師のコメント
正解です。

吉井明久の答え
『暴れん坊将軍』

教師のコメント
ある意味正解ですが、名前を答えてください

土屋康太の答え
『きかんぼう将軍』

教師のコメント
どういう将軍なのですか

久遠光一の答え
『サンフランシスコ・ザビエル』

教師のコメント
この回答について、西村先生と高橋先生を交えた場での説明をするように。

夜も更け、皆が寝静まった頃。

「……なんだかドキドキするね。夜這なんて初めてだよ」
「……何で愛子まで。しかもいつの間に代表も来てるの？」
「……夫婦の思い出の為」
「……霧島さん、大胆です」
「……瑞希、ウチらの目的忘れちゃダメよ？　そんな事しに来たんじゃないんだから」

明久達の部屋に、侵入して来た5人の影。
それぞれ、2：2：1の割合でそれぞれの目的の人物にゆっくりと近寄り始める。

「……何で愛子も光一に近寄るのよ？」
「……ボクもある意味過激派だから、同じ過激派同士興味があっちゃいけない？　んじゃ、早速」

「あっ、愛子！？」
「んっ……なっ！？　何で工藤ときのしむぐぅっ！」

愛子と優子は、光一の元へ。
愛子は楽しそうに光一に馬乗りをし始め、そこで起きた光一の口をふさいだ。

「ダメだよ、大声出しちゃ」

と、しーっという風に指を口元に上げる愛子を見て、うんうんと頷く光一。
ソレを見て愛子はゆっくりと手を口から離した。

「……何でここにいる？　しかもどうして俺に馬乗りになってんだよ？」
「この状況でだせる結論って、１つしかないと思うけど？」
「俺みたいな危険人物相手に、物好きな事……ん？」
「まっ待て。まあひとまず落ち着こうじゃないか。まずは浴衣をだな？」
「どっどうしてむぐっ！」

ふと聞こえた声に顔を向けると、翔子に迫られる雄二と美波と瑞希に口をふさがれる明久。

「……姫路に島田まで」
「ちょっと待て光一、今さりげに俺を無視しただろ？」
「いや、そこだけは納得ができるから」

普段の行動や手段を選ばない辺りを考えると、それ位しない方がおかしいと考えられる。

美波に拘束を解かれた明久が、困惑した状態で光一に質問する。

「……ねえ光一、この状況は一体？」

「いや、俺に聞かれても……」

「坂本さんが雄二に、工藤さんが光一に迫ってるのはともかく、木下さんが光一に、姫路さんに美波が僕に迫ってくる理由が全然わからないんだけど……？」

「勝手に翔子を入籍させるな！」

「「静かにしろ。鉄人が来るだろ（じゃない）」」

2人は声を揃えて、雄二をそっちのけにした。

それより今は自分達の置かれてる状態の方が優先されている。

「どうしてって、こんな時間に女子が薄着で男子の寝室に来る理由なんて、1つしかないでしょ？」

「……ああ、そう言う事か」

明久がそう言うと、ふぅっ……と息を吐いた。

そして、ゆっくりと目をつむって……。

「……僕も男だから、覚悟を決めるべきだよね」

「アキ……ありがとう。わかって貰えて嬉しいわ」

「とうとう、この時が来たんですね……明久君」

明久の言葉に、漸く伝わったんだと感極まる美波と瑞希。

「……まあここまでやれば、流石に明久も気付くよな」

「……雄二も吉井を見習うべき」

「翔子、見習ってもお前にやる事は一つもないし、される事もないぞ！」

珍しく明久に感心した様子を見せる雄二と、負けじと雄二に迫る翔子。

「あの、1つだけ、お願いしてもいいかな？」
「？　はい、何でしょうか？」
「今なら、何でも聞いてあげられるわよ？」

美波と瑞希が、明久からの要求を今か今かと待ちわびる。
告白か、あるいは自分から……という答えを、内心期待していた。
……が。

「……苦しまないよう、一撃で仕留めてほしいんだ」
「お前はこの状況に対して暗殺と言う結論が出るのか！？」

返ってきたのは、期待はずれどころか最悪の誤解をしていることを認識させる言葉だった。

「で、工藤はよくわかったけど、木下は何の用だ？」
「あれ、どうして優子を名字で呼んでるの？　それになんか冷たい印象あるけど」
「ああ、ソイツこの前の騒ぎで木下に愛想尽かしたらしくてな」
「踏ん切りがついたと言え」

元々フラれてる為、そう言うのが妥当という所。
ソレを聞いて、成程という顔をする愛子。

「成程ね。それで優子の様子がおかしいと思った」
「？　良くわからんが、まあいい。それで、何しに来たんだよ？」
「……謝りに来たのよ。最初のカメラの事……無実だったから」

光一はソレを聞いてため息をついた。
そして呆れた様子で一言……

「そんなの明日で良いだろ？　別にこんな危険を冒してまで……」
「あるよ……あの時、光一に酷い事言ったから」
「別にどうだっていいよ。罵倒されるのも今更だし、俺の言葉なんて意味がないなんて言って……え？」

反論しようとして、優子の顔を見て止まった。
暗がりで見えなかったものの、微かに見た優子の顔には……

「……愛想尽かされて当然よね。アタシ、アンタの気持ちをずっと足蹴にしてたんだから」
「なっ、何で泣くんだよ？　あの……！？」
「私たちもです……明久君はそんな人じゃないってわかってたのに、私達証拠もないのにあんな事……」
「ウチも、やったのはアキに違いないって一方的に決めつけてた……チンピラにさらわれた時、真っ先に出てきてくれたのに……」

明久の方も同様で、自分を押し倒して涙を流しながら謝る2人に動揺する明久。

「みっ美波……姫路さん……ねえ、どういうことなの？」
「いや、俺に聞かれても……」

光一と明久は、何故泣きながら謝られてるのかが全く分からない。
翔子と雄二もその光景に、少し動きを止めて目を奪われる。

「あいつら……」

「……」

ドバンッ！！

「お姉さま！　ご無事ですか！？」

「げっ！　清水美春！？」

そこへ最悪の来客が現れた。

「お姉さま、なぜ泣いて……そこのブタ野郎。お姉さまを泣かしましたね！？」

「ちっ違うよ！　僕は何も……」

「コロします……殺します……コロシマス……コロコロコロコロコロ！」

またもや変貌していく姿に、雄二達は悪寒を感じ瑞希達は悲鳴を上げそうになる。

解放された明久も顔を恐怖で染まらせ、同じく解放された光一も顔をしかめる。

「ああもう、面倒な！」

「キシャアアアッ！」

明久にとびかかろうとしたのを、光一がスタンガンを最大出力にして投擲。

命中した所で更に両手にスタンガンを構え、ソレを押し付ける。

「明久、手伝え！」

「うっ、うん！　ごめん清水さん」

その数分後。

「ふうっ……やっと一安心だ」
「だね……なんだか今日は異様に疲れるよ」
先程と同じように手足を縛ってトイレに放りこみ終え、一息つく明久と光一。
「……人の領域を超えるなんて、鉄人位だと思っていたんだが」
「んむっ……どうかしたかの？　って、何故島田達がおるのじゃ？」
と、今頃秀吉が目を覚ました。
「……とりあえず、もう帰ってくれないか？　話なら明日聞くから」
「そうはいかないよ」
愛子に腕を掴まれたと思ったら、光一はあっさりと押し倒される形となった。
「折角危険を冒してまで来たんだから、何か収穫位ないと割に合わないよ」
「ちょっ、ちょっと待て。まあとりあえず落ち着こうじゃないか工藤？」
「ちょっと愛子！　……だったらアタシも混ざるわよ？」
「なっ!?　何で優子まで!?」
それは大きな波紋を呼ぶ事になる。
「そうですね。このままでは帰れません！」
「確かにそうね。瑞希、ここはどっちがなんて言わず、半分こで良いわね？」

「え？　え？　あの、まっ待って！　言う事なら聞けるって言ったよね！？」

明久の事を問答無用といわんばかりに、２人で押し倒し始める瑞希と美波。

「……雄二」

「まっ待て！　俺はまだ人生を終えたくねえ！」

「大丈夫、これから第２の人生の始まり」

そのまま覆いかぶさった状態で、続きを始める翔子

「……（パシャパシャ！）」

「さて、ワシはもうひと眠りするかの」

「「いや、助けろ（て）よ！」」

と、カメラのシャッターを切り続けるムッツリーニと、何も見なかった事にして寝なおす秀吉。

それに突っ込みを３人は入れた。

ドバンッ！！

「何事だ！？　吉井、久遠、坂本、一体何を……し……て……？」

そこへ、再度乱入者が現れた。

目の前には、女子に押し倒されてる男子３人。

それを交互に見ていて、全員何も言えずに固まっている。

「てっ鉄人！？」

「ちっ違うんだ！　これは、その、何かの間違いで！！」

「ううっ……今から補習室か……」

そこで、咳払いをして一言。

「……そうか。吉井と久遠が覗きに参加しないのは、そう言う事だったんだな」

「「は？」」

「まあ、その、なんだ……すまなかったな」

いきなり謝られた事に、動揺を隠せない面々。

男3人が女子に、しかも明久と光一は2人もの女子に押し倒されている光景には、流石に鉄人も動揺している。

「あの……鉄人？」

「吉井、久遠、坂本、まさかお前らにそう言う相手がいるとは思わなかったが、夜中にそう言う不純な行為をする事は感心せんな」

「「「「……すみません」」」」

女子一同が一斉に謝った。

「まあ今回だけは見逃してやる。姫路、島田、工藤、木下、今後も吉井と久遠の手綱をしっかりと握っておいてくれ。この覗き騒動の様にな」

と言って、戸を閉めて去って行った。

「……何だったんだ？」

「さあ……？　それより、流石にちょっとさめちゃったね。今日は帰ろうか？」

と、愛子の提案で女子は美春を抱え、自身の部屋へとこっそり帰って行った。

「……ねえ、光一。一体なんだったの？」

「とりあえず、姫路と島田が夜這をかけに来た夢を見たとでも思っとけ」

第四十問（前書き）

ＰＶ６０万達成！
これからもよろしくお願いします。

追伸　博徒様の感想を手違いで消してしまったため、この場を借りてお詫びいたします。光一の女装に関しては、明久とムッツリーニの中間くらいと考えていただければ

第四十問

問題　次に示す四字熟語の漢字を答え、適切な例文を作りなさい。
『あいまいもこ』

姫路瑞希の答え
『漢字：曖昧模糊
例文：責任の所在が曖昧模糊としていた』

教師のコメント
『あやふやではっきりしないさま』を現す四字熟語ですね。読める人は多いのですが、書ける人はそう多くはありません。良く出来ました。

吉井明久の答え
『漢字：合間妹子』

教師のコメント
なんとかこたえようと言う気持ちだけは伝わってきました。

土屋康太の答え
『例文：小野小町・小野妹子・合間妹子の日本三大美女は遣隋使として旅立った』

教師のコメント
一命男性が混ざっているので気を付けてください

久遠光一の答え
『漢字：唖夷魔慰喪孤』

教師のコメント
色々と言いたい事はありますが、せめて４文字にしてください

夜が明け、昨晩の事を離しつつ明久、光一、秀吉は洗面所へ。
男子トイレをはじめとして、男子区画では所々で朝っぱらから活気に満ちていた。

「なんか、朝っぱらからテンションが異様に高くないか？」
「多分、雄二達の策による物じゃないかな？」
「じゃろうな……」

身支度を終えて、３人が出向いた食堂でも同様だった。

「……なんか、Ａクラスの奴までテンション高いな」
「……流石にこれは予想外だったぞい。ムッツリーニは一体、どのような写真をまわしたのじゃ？」
「まあムッツリーニだったら、造作もないだろうけど」

ムッツリーニは盗撮写真を使っての商売を行っていた。
明久もその常連である。

「後で焼き増しして貰ってみてみようか？」
「やめとけ、姫路達に知られたら俺達は卯月高原の土にされるぞ？」
「……そうだね。下手に刺激しないように気を付けないと」
「明久よ、一体昨晩何があったのじゃ？」

その後、遅れて来た雄二達と合流しての一言。

「どうすんだよ？　コレじゃちょっとやそっとじゃ止められないぞ？」
「わかっている。元々これ位の勢いを狙っていたんだ」

流石に雄二も、目的を達成した以上は覗きをやる理由はない。
だからこそ、頭を悩ませていた。

「目的が目的だから、急を要する事だったんだ。だから単純で魅力的な目的の方が動かしやすかった」
「……確かにな。Ｆの面々は全員が覗きの一言だけで簡単に引っかかってたし」

須川をはじめとして、大半がそうだった事を3人は思い出す。

「あっ、おはようアキ」
「おっ、おはようございます。明久君」
「ひっ！　……おっ、おはよう、姫路さんに美波」

そこへ、昨日夜這に来た女子４人が通りかかった。

その中で顔を赤くした瑞希と美波の姿を見た明久は、顔を青ざめる。

「ちょっと、何よその反応？」

「もう１つの誤解を解いてないからだろ？」

「……そうでしたね」

結局昨晩の事を、明久は暗殺に来たんだと結論付けていた。

「全く、夜這かけた女子の顔見て青ざめるとか、どういう神経してるんだおまえは？」

「夜這を掛けられたのは雄二と光一じゃないか。人が命の危険に晒されてるそばで、羨ましい」

「……お前、本当に羨ましいと思ってるのか？」

事情を察した秀吉をはじめ、その場全員が呆れた。

光一も明久の思考回路に納得はしている物の、どうにも呆れを隠せずにいた。

「……ウチ達の危険を冒しての行動って、一体なんだったのかしら？」

「……そうですね。謝れはしたものの、明久君に暗殺未遂の現行犯と見られるだなんて」

「……ホント、どういう思考回路してるのかしら？」

「ドンマイ、２人とも」

それから、食堂にて。

朝から異様にテンションが高い男子を見て疑問に思った４人が問い詰め、光一と明久があっさり白状

「アンタ達って何かバカやらないと気が済まないの？」

「元はと言えば、お前らが証拠もなしに一方的に決めつけて拷問するからだろ。こっちばっか悪いように言ってんじゃねえ」
「……それはまあ、悪かったわよ。けど、ここまで大騒ぎにしたのはそっちでしょ？」
「正確には雄二のバカの単独による犯行だ。俺達は今回一切関与してない事は秀吉が証言してくれる」

その当人は、さして表情を変える事なく忙しく箸を動かしている。
光一も話に参加している物の、特に興味なさげに食事をしながらの会話。

「どうにか止められないの？」
「無理だ。雄二は純粋に覗きが目的としか言ってないから、そんなの知ったこっちゃないで済まされる」
「まあ、そうだよね。全く、雄二の所為でとんだ騒動だよ」
「全くだ。雄二ももっと落ち着いて事を構えれば、こんな事にならなかったろうに」
「黙れ“学園デストロイヤーズ”」

明久による壁の破壊と、光一による教頭室爆破。
それにより“Fクラス切り込み隊長コンビ”とは別に、“学園デストロイヤーズ”とも呼ばれていた。

「……否定は出来ないけど、やっぱりやだな」
「ああ。名称がかっこいいのが、せめてもの救いか。何でこんな雄二（ゴリラ）まで同一視してるかが疑問だ」
「こっちの台詞だ！」
「「「……（メンチの切り合い）」」」
「食事が冷めるぞい」

と、秀吉の仲裁で、3人はしぶしぶと食事に戻る。

「雄二のバカめ。これじゃ俺達が参加しなかったら大変な事になるじゃねえか」
「大変な事？」
「決まってんだろ、全員のテンションがマックス状態でただ2人がその気0だと、そっち系に思われる」
「だろうな。その辺りも狙っての作戦だ」

事もなげにそう言う雄二。

「……つくづく最低な野郎だなおまえは」
「だよね。まあ汚い事を考えさせたら天下一品の雄二だから、納得はするけど」
「知略に富んでいるといえ」
「わかった。つくづく“汚い”知略に富んでる奴だなおまえは」
「だよね。まあ“腹黒い”知略に富んだ雄二だから、納得はするけど」
「テメェ等……」

覗きの士気を挙げる為ならば、この作戦は完璧である。
……だが、目的を達した今となっては、完璧すぎて手に付けられない。

「確かに代表も代表で清水さんも清水さんだけど、坂本君も坂本君だわ」
「だよね。確かに代表も清水さんもやり過ぎだけど、坂本君もだよ。大体代表のどこが不満なのさ？」
「そうだぞ雄二、考えてみれば覗き騒動の発端はお前が霧島から逃げ回るから、向こうだって必死になっての結果だと考えられるぞ」

「そうだよ。大体あんな美人に言い寄られてどこが不満なのさ？」
「うるさい黙れ！！」

テーブルを思いきりたたいての講義に、食堂中の視線が集中した。
雄二はそれに気付いても、特に表情を隠す事もなく水を一口。

「……とにかくだ。参加しなければ“ホンモノ”の烙印を押される事になる」
「「このゲス野郎！！」」
「この3日お前らが参加しなかったせいで大変だったんだから、その分の苦しみを味わえ」

と、再度忙しく箸を動かし始める雄二。
女子の侮蔑の視線もどこ吹く風と、全く気にしていない。

「なんて野郎だ……矯正にはやっぱ霧島が必要だな」
「そうだね。そうだ、霧島さんにウエディングドレスのパンフでもプレゼントしてみようか？」
「じゃあ俺は式場のパンフ、プランの内容込みで贈ろう」
「何気に恐ろしい計画立ててんじゃねえええ！！！」

こうして、４日目の朝食は怒鳴り声の響く食事となった。

そして、自習時間。

「……あの、どうして姫路さんと美波が、僕の両方をガードしてるの？」
「……俺の方も、どうして優……木下と工藤が？」

光一と明久、秀吉という3人でのいつもの勉強の筈が、今日は4人の参加者があった。

「アンタ達が妙な事をしないようによ」

「そうだね。西村先生のお墨付きも貰った以上は、みっちりと監視してあげるからそのつもりで」

「そうです。このまま野放しにはできません」

「という訳でアキ、今日はじっくりと一緒にお勉強するわよ？」

光一は複雑そうだが、ちょっと嬉しそうに。

そして明久は……

「ちょっと待ってくれない？　遺書を書く時間が肘がねじ切れちゃううううう！！」

「その評価、絶対に改めてやるんだから！」

「おーい島田。そう言う事するから明久がそういう評価をするんだと、明久の相棒は思うんだが？」

「うっ……」

光一の進言に、美波はゆっくりと関節技を解いた。

「……まさかあいつら、今まで覗きに参加しなかったのは」

「……よもや、異端者であるが故か？」

「……しかし、あの吉井と久遠だぞ？　久遠に至っては、フラれた木下優子もついているから、一概には」

「……だが、念入りな監視であるとも、考えられるぞ？」

「……うむ。では妙な動きがあれば、即刻異端審問にかけようぞ」

ソレを見て、とある男子達は不穏な言葉を口にしていた。

「まあとにかく、英語、物理と来たから、今日は数学やるつもりだけど？」
「数学ならウチは得意よ？　最近久遠には負けつつあるけど」

『Ｆクラス　島田美波　数学１７８点』
『Ｆクラス　久遠光一　数学１９８点』

「古典じゃまだ負けてるけどな」

『Ｆクラス　島田美波　古典９点』
『Ｆクラス　久遠光一　古典３点』

「本当にダメな教科はダメなんだね。物理だと学年首席どころか教師クラスなのに」
「しかも光一は苦手科目じゃ、てんで的外れな珍回答もするからね。特に歴史なんか酷いわよ？」

光一はその事で教師に呼びだされる事が多かった。

「じゃあ久遠君の為に、ボクが教えてあげるよ」
「そりゃありがたいけど、良いのか？」
「うん。それで、お昼前に出す問題に答えられたら……スパッツをこの場で脱いであげよっか？」

『うおぉおおおおおおおっ！！！』

小声での会話の筈なのに、何故か教室中（特にＦクラス男子）が大声をあげて沸いた。

「ひっ姫路さん！？　目が！　目に指が食いこんでる！！」

「明久君、いやらしい想像をしちゃダメです！」
「そっそうよアキ！　妙な事考えたら許さないんだからね！！」
その一角で、瑞希に目を覆いつくすように潰されている明久。
「ぐぁああがっ！！　目が、目がああああ！！」
「……雄二は見ちゃダメ」
そして、いつものごとく翔子に目を潰されてのた打ち回る雄二。
「……（ダバダバ）」
また、鼻血を吹き出し出血多量で倒れているムッツリーニの姿があった。
「まっ待て優子！　俺は賛同しては……あれ？」
いつもなら、話題が出た時点で折檻される筈が、一向に優子は動かない。
それどころか、平然と問題を解いていた。
「あれ？　何で優子、冷静なの？」
「ねえ光一、室町幕府三代目将軍は？」
「ナポレオン」
場の空気が凍った。
「別に怒る理由がないから」
「そうだね……でも、日本史でナポレオンは流石に酷くない？」

と、事もなげに言った優子に、確かにと全員の女子が頷いた。
そして光一に対し、憐みの視線を集中させる。

そこで、凍ってた空気が爆発した。

「ふざけんなゴミ！！」
「真面目にやれカス！！」
「間違えやがったらぶっ殺すぞクズ！！」
「というか今すぐ代われクソ野郎！！」

主に男子によるものだが、元々テンションが最高値だっただけに怒号は教室を包み込んだ。

「うるさいぞ！！」

……が、鉄人の一喝によりあっさりと鎮圧した。

「やれやれ、助かった」
「あははっ、やっぱりFクラスは面白いね」

愛子の様子を見ると、優子や翔子といったAクラスの面々より自分達に近い印象を光一は感じていた。
何となくだが、仲良くやれそうな気も……。

「それじゃ久遠君、早速始めようか」
「そうだな。折角だし、頑張ってみようかなってあの、何故に俺の腕をとるのですか？」
「逃げないようによ？」

「それでは明久君、早速始めましょう」

「幸い数学はウチの得意科目だから、教えてあげられるわよ？」
「……だから、せめて遺書位」
「「必要ないわよ（ありません）！」」

「……雄二、夫婦として負けてられない」
「だから、お前と夫婦になった覚えはないだだだだだだだだ！！

と、それぞれに勉強を開始する3人2組が2つ
雄二も翔子のアイアンクローにつかまり、そのまま一緒に勉強。

「ふむっ……やはりそう言う相手がいれば、吉井達も大人しくなるか」
「「「感心して見てないで助けろ（てください）よ！」」」

そして、昼食の少し前。

「このゴミ野郎！！」
「くたばれバイキンが！！」
「Fクラスの恥さらし！！」
「死ねこの裏切り者が！！」

光一にFクラス男子から罵倒がプレゼントされた。

第四十一問

木下優子の特別日本史試験

『６０７年、遣隋使として隋に向かった人物の名称を答えなさい』

吉井明久の答え

『小野妹子』

木下優子のコメント

正解。最近日本史が伸びてるそうだから、これ位は出来て当然ね

久遠光一の答え

『聖徳太子』

木下優子のコメント

……多少の補正は出来たと考えておくわ。

「あーっ、疲れた」

「エアガン、スタンガンの扱いもそうじゃが、よもや姉上の関節技をああも使いこなすとは」
「俺が何度喰らってると思ってんだ？　それに最近は黒金の腕輪を狙ってくる奴もいるから、護身術位身につけないと身が持たん」
「……光一も苦労してるんだね」
「何でウチを見て言うのよ！？」

エアガン、スタンガン、優子流サブミッションを使い、襲いかかってきたバカ軍団鎮圧後の食堂。
現在明久、光一、秀吉は、瑞希、美波、優子、愛子の４人と楽しく食事中。

「全くあのゴリラめ……流石に同性愛主義なんてレッテル貼られちゃたまらないぞ」
「だよね……何だか理不尽だよ」
「そうじゃの……流石にワシもまた男扱いから遠ざかるじゃろうから、良い迷惑じゃ」

その場で、光一、明久、秀吉は３人で雄二のしでかした事を愚痴っていた。
全体の士気が高い所為で、不参加＝同性愛主義と言えるような状況故、自分たちも参加せざるを得ない。

増して秀吉は普段から男扱いされない事が多く、参加しなかったらそれが一層深まってしまう。

「アンタ達も大変ね。光一の場合、吉井君との仲が妙な方向に囁かれてるんだっけ？」
「しかも優子の弟君とも、こんな写真が出回ってるくらいだからね」
「一体どこまで出回っておるのじゃそれは！？」

「ムッツリーニの野郎……」

公園で光一にしなだれかかっている秀吉の写真と、光一にのしかかるように眠っている秀吉の写真。
裏面には、しっかりと木下秀吉と書かれている。

「久遠君、やっぱり……」
「アンタやっぱり、ウチ等の最大の敵だわ！」
「……ねえ姫路さんに美波、どうして僕と光一を交互に見てそんな事言うの？」
「おい姫路に島田、やっぱりって何だやっぱりって！」

光一と言えど、やはりそのような方向に見られるのは嫌な為、明久は抗議。
光一は“優子にフラれた事”を何度も説明してるのに、忘れられてる事の怒りが溜まっていた。

「やれやれ、明久も災難じゃの」
「……だからあの2人、光一がアタシに告白してるの忘れてない？なんだか、覗きをさせた方が良い様な気がして来たわね」
「だよね。あの2人随分と思い込み激しい様だし、吉井君もある意味災難かもね」

優子と愛子は瑞希と美波の暴走振りに、明久への同情でいっぱいになった。

「まあとにかく、今更問題児だの学園デストロイヤーだのはどうでも良い。だけど清水と同じ、同性愛主義のレッテルは嫌だ」
「だよね。覗き魔の方がまだマシな気がするし……ここは出るしかないよね」

「そうじゃの……ワシもいい加減、姉上と光一以外からも男として見て貰いたいぞい」

光一と明久、秀吉は覗き騒動に参加する事に。

……が、やはり気は重かった。

「……何だか2人とも可哀想だね」

「そうね……姫路さんに美波、吉井君への気持ちはよくわかったから、せめて性別の違いを些細な事の様に考えるのはやめてあげて。可哀想だから」

と、優子も愛子も2人を宥め、覗きをやるというのに3人に同情の視線を向けていた。

そして、食後の廊下にて。

「……とはいえ、このままあのゴリラの手の上で踊るのもな」

「そうだね……何かカウンターパンチが欲しいよ。霧島さんの御仕置きよりダメージになる事とか」

「お主らが黙っておる訳がないとは思ったが、そんなものあるのかの？」

流石に2人とも、雄二の策略にただ乗るだけのつもりなど更々ない。だからこそと、光一と明久は何か仕返しを企む事に。

「ウチ等の宣告に大人しく従うとか？」

「易々と敵の言う事に乗ったりしたら、それこそ総スカンの上にホモ疑惑も払拭できん。ソレに手抜きしても同様だし……どうしたもんか？」

切り込み隊長コンビとなると、そう易々とやられてはならない。むしろ、簡単にやられれば疑われてしまう。

「それに覗き疑惑でドツかれた借りもあるし、特にCのヒステリーとEの筋肉に一発ギャフンと言わせにゃ気がすまん」

ちなみに優子の関節技の最中、この2人が踏みつけてきてたりする。それを光一は、しっかり覚えていた。

「……光一って結構、根に持つタイプなんだね。けどそれじゃ、どっちかの目的が果たせないよ?」

「そうでもないさ。目的すり替えてやればショック受ける筈だ。そうすれば、俺たちもやる気になる」

早い話が、雄二達が目的が果たせずにがっかりさせるのが目的である。

余談だが、雄二は最早本気で覗きに興じるつもりになっていた。

「向こうの狙いは入浴中の女子を覗く事だ。だからこそ、向こうの大半は行動している」

「まあ、そうだよね」

「しかし、目的の場所に誰も居なかったら……」

「そっか。なんじゃそりゃーって感じになるね。ソレ良いと思う」

「じゃが、空の場所を守るというのも変じゃぞい」

何かを守るためだからこそ、人は頑張る事が出来るのだから最もである

「まあそれだけじゃ女子側の士気に関わるし、何より雄二のバカへ

のカウンターパンチにはならん」
「じゃあどうするの？」
「見せてやればいいさ。ただし、アイツらの目を壊す程の物……たとえば、鉄人の入浴シーンみたいな」
と、光一は迷いもなくそう言った。
「もうすでに、人としての情という概念は消えうせておる様じゃな……」
「酷い作戦ね……」
「幾ら無理やり参加せざるを得ない状況にされたとはいえ、光一ったら……」
傍から見れば失礼だが、もし女子風呂を覗いてみればそこでは筋骨隆々の中年が……。
確かに、目が壊されるだろう。
「そっか。霧島さんが釘バット持って立ってたり、船越女史が入ってたりとか？」
「そうだ。理解が早くて助かる」
「何故明久はこういう時だけ頭の回転が速いのじゃ！？」
雄二に何かと酷い目にあわされてる為、明久には容赦や情等持ち合わせていない。
だからこそ、光一の提案に真っ先に賛同していた。
「でも、もっとインパクトが欲しいよ」
「そうだな……さて、どうしたものかな？」
「……一体どういう間柄なのよ、あの３人は」

「容赦がないを通り越してるよね……」
「まあ人の事は言えんが、雄二は明久にろくでもない目にばかりあわせておるからのう」
と、良からぬ事を相談し合いながら、自習室へ戻ろうとする。
その途中の曲がり角にて……。

「おや、奇遇だねクソガキども」
「うわっ！　ばっ、化け物!?」
「出会いがしらに罵倒かい!?　全く、本当に礼儀知らずなガキだね！」

そこには妖怪事（失礼）、藤堂カヲル学園長がいた。
当然光一のバケモノ呼ばわりに顔をしかめながら。

「光一、失礼じゃぞ。出会いがしらにバケモノ等と」
「だって、いきなりあんな奇怪なバケモノが目の前にいたら驚くだろ、普通に」
「光一、それは良くわかるけど、学園長だって好きでバケモノみたいな姿で居る訳じゃないんだよ?」
「……アンタ達コンビには一度、学園の最高権力者が誰かという事を教えてやった方がよさそうだね」
「「「「「……すみません」」」」」

女子４人と秀吉が、揃って頭を下げた。

「フン。だいたい、アンタらにだけは容姿についてとやかく言われたくないね。常夏コンビの２年生バージョン風情共が」
「「なんて事言いやがんだこのクソババァ！！」」
「わからんでもないが、落ち着くのじゃ２人とも！」

人生最悪クラスの修辞に声が揃うが、2人は秀吉になだめられて一先ず落ち着く事に。

「で、何でこんなところにいるんです？」
「視察に来たんだよ。折角だから、ひとっ風呂浴びるつもりさ」

視察の意図が、光一達には透けて見えていた。

「そう言えばここの大浴場、温泉から引いてるって話を聞きましたね。老体にはさぞや効きそうだ」
「おや、温泉なんて言葉を知ってたのかい？」

光一が懐からスタンガンを取り出そうとしたのを、優子と秀吉に取り押さえられた

「所であんた達、まさか妙な騒動を起こしてないだろうね？」
「起こしてない。大体こんなのどかな所なんだから、俺たちだってのんびりとした時を過ごしたい」
「だよね。僕達だって騒ぎばかりじゃないですよ、学園長」

似合わないセリフだとわかっていたが、事実ではある。
ソレを聞いて、吐き捨てるように学園長の台詞。

「フン、アンタらテロリストどもがほざけるセリフかい？」
「否定は出来ないですが、テロリストなんて酷いじゃないですかババァ長！」
「その呼び方は今までで一番ひどいさね！」

勢い余って、おかしな呼び方が出てきてしまった明久。

「まあまあ、落ち着いてくださいよババァ長？」
「落ち着かせたいならもっと態度に気を使いなクソジャリ！」
光一は“ババァ長”という呼び方が気に入ったご様子。
「……まあこんな事しても更に疲れがたまるだけだから、ここまでにするかね。この前の教頭室爆破以来学園の評判が落ち気味だから、学園のイメージアップの為の会議に駆り出されることが多くてねえ」
「「うっ……」」
光一と明久は、即座に目をそらした。
「さて、とんだ無駄な時間を過ごしたね。さてバカ共、きっちりと勉強するんだよ」
「「わかりました、ババァ長」」
「……まずは礼儀という物をね！」
そう言って、学園長は去って行った。
2人はポリポリと頭をかいて一言。
「やれやれ、痛いところ突かれたな」
「だよね……ねえ光一」
「……ああ、多分明久と同じ事考えてた」
明久と光一が顔を見合わせて、にやりと笑みを浮かべる。
「お主ら、まさかとは思うが……」
「これも全女生徒の純潔を、薄汚い悪漢達の魔の手から護るためだ。それに教育者の立場なら、生徒の為に身を賭するのは当たり前だろ

？」
「そうそう。全部僕達を脅して、覗きなんて事を加担させた雄二が悪いんだから」
「……学園長も間が悪かったね」
「……しかもあいつら、絶対さっきの悪口の仕返しも含んでるわよね」
「……光一もそうだけど、吉井君に人としての情という物はないのかしら？」
「あっ、あははっ……」
そして、自習室。
「ねえ、ちょっと良いかな？」
「ん？　何だよ？」
愛子が光一の腕輪を見て一言。
「ボク（の召喚獣）ともう一度合体してみない？」
「いや、ちょっと待て！　大事な主語の後半抜かすな！」
『『『殺せえええ！！！』』』
殺意を具現化させた４５名分のカッターナイフが、光一めがけて投擲された。
……が。
「甘い！」

懐から2丁のエアガンを取り出し、両手に構えその1本1本を残さず撃ち落とした。

「はっ！　俺に遠距離攻撃が通用すると思うか！？」
「おのれ、総員武器を取れ！」
「さっきのでいい加減懲りろこのバカ共が！！」

と、それぞれ鈍器等を手に取り、光一もスタンガンを取り出し臨戦態勢を取った。

そして数分後。

「おっ、おのれ……久遠光一……我等……異端、審問会は、必ずや……よみがえ……」
「くたばれ」
「ぎゃぴっ！！」

スタンガン（４０万ボルト）により、リーダー格である須川の鎮圧完了。

「ふぅっ……」
「御苦労さま」
「ホントすごいよね。特に４０本以上あるカッターを、エアガンで1本残らず撃ち落としちゃうなんて」
「俺の射撃の腕と空間認識能力をもってすれば、この程度造作もない」

この場を借りて説明させていただきますが、光一の空間認識能力は一般人よりもかなり優れています。

「それより、合体ってこっちだよな？」

と、光一は呆れたように右手の腕輪を愛子に見せると、そうだよと頷いた。

雄二はまだ来てない為、秀吉が“フィールド形成（教科指定不可）”の腕輪を取り出す。

「そう言えば、ワシはあまり腕輪を使う事がないの」

「雄二の方が教科指定ができる分、便利だからな。その代り、秀吉のと違って召喚獣が呼べないけど」

雄二と秀吉の持つ腕輪は2つともが、召喚フィールド形成型。

ただし、雄二の持つ白金の腕輪は、教科指定ができる物の自身の召喚は出来ない。

しかし秀吉の持つ黒金の腕輪は、教科指定ができない代わりに自身の召喚ができるという差がある。

「では、アウェイクン！」

というと、秀吉を中心に召喚フィールドが形成。

科目は物理。

「それじゃ、サモン！」

「サモン！　……そして、ユニゾン！」

『Ｆクラス　久遠光一（＋工藤愛子）　物理６０９点＋２５８点』

装備はシャツが無くなっただけのジャケット姿に、両手にバズーカ砲を構えた召喚獣。

その腕には、腕輪の存在が主張されていた。

「あっ、そう言えば融合召喚獣って、８００点以上にならないと腕輪使えないんだったよね？」

「ああ。以前ムッツリーニで試してみたけど、俺の“爆発”の腕輪ともムッツリーニの“加速”の腕輪とも、全く別物の腕輪になってた」

「ふーん……ねえ、このボクとの融合召喚獣はどんなかな？」

と、興味をそそられて試してみる事に。

「でも出来れば、実戦で試してみたいな」

「でしたら、私がお相手いたします」

「あっ、じゃあお願いするよ、美穂」

そう言って名乗り出たのは、Ａクラス戦で優子と、召喚大会で愛子と組んで対峙した事もある佐藤美穂。

その次には、鎖鎌と和式の衣服をまとった召喚獣が現れた。

『Ｆクラス　久遠光一（＋工藤愛子）　物理６０９点＋２５８点』

ＶＳ

『Ａクラス　佐藤美穂　物理３９９点』

「けど、バズーカ砲か……小回りが利きそうにないな」

大型兵器の弱点である。

「では、まいります」

先手必勝と言わんばかりに、佐藤の召喚獣が突進。

融合召喚獣が、すかさずバズーカを構える。
それと同時に、腕輪が光りその砲身を電気が覆い始めた。

「え？」

光一の召喚獣は、その引き金を引くとそのまますごい勢いで砲弾が発射。
敵召喚獣はいつ命中したのか、上半身が消し飛びそのまま消滅。

「……すげえな。さしずめ“電磁砲”か？」
「確かボクの腕輪は電気付加で、久遠君のが爆発だから、ありえない事じゃないよね？」
「必ずしも元の腕輪の影響がないわけじゃないってことか……」

３００点オーバーを一撃粉砕。
とんでもない能力だと実感するも……

「でも考えてみたら、俺Ｆクラスで工藤はＡクラスだから、試召戦争では使えないな」
「あーっ、そうだね。ちょっと残念」

と、２人してちょっと残念がっていた。

「？　あの、どうしたんですか明久君？」
「ちょっと、顔が青いわよ？　先生呼んでこようか？」
「……いや、ちょっと、ね？」

先程消し飛んだ召喚獣を見て、光一が味方で本当に良かったと明久は心の底から思ったとか。

「姉上よ、このままで良いのかの？」
「秀吉！　……だって」
「姉上も意地っ張りというか……待つのじゃ姉上、そこはまがらな……」

こうして、午後の時間は少し騒がしく過ぎて言った。

そして、時は過ぎ……

「……雄二のクソ野郎が、俺達まで巻き込みやがって！」
「姫路さん達に抹殺されたら、絶対に化けて出てやる！！」
「無駄口叩くな！　ここまで来た以上後戻りはできない……ならば、思う存分覗いてやるまで！」
「霧島が聞いたら八つ裂きだぞ……まあ精々、同性愛主義の汚名をかぶらない程度には頑張るか」

今、最後の聖戦が今始まろうとしていた。

第四十二問

この強化合宿全体についてのまとめを書きなさい

姫路瑞希のまとめ
『他のクラスの人と勉強する事で良い刺激が得られました。伸び悩んでいた科目についての学習方法や使い易い参考書についても教えて貰う事が出来たので、今後もさらに頑張っていきたいと思います。夜はいつもの様に騒ぎがありましたが、これはこれで私達の学校らしいと思います。ただ、ある人からの評価がとても悪い事がわかって、それだけがとても残念です』

教師のコメント
姫路さんは全体的にそつなくこなしている様子だったので、伸び悩んで居る科目があったと言う事には驚きました。本来なら先生が気付くべきなので申し訳ないです。ですが、無事に解決できそうなので何よりです。やはり姫路さんにはAクラスで学習する方が良い影響がありそうですね。次回の振り分け試験ではぜひともがんばってください。それと、バカ騒ぎについては悪影響を受けないように気を付けてください。
しかし、姫路さんに対しての評価が悪い人……ですか？　にわかに信じられませんね

島田美波のまとめ
『気になってるアイツが、ウチや瑞希は自分を殺したい程嫌ってるんだと思ってるだなんて、ショックだった……けど去年からずっと抱いてた気持ちだから、やっぱり諦められないし瑞希だって同じ気持ちの筈。だから何としてでもそのイメージを払拭させられるよう

に頑張らなきゃ！』

教師のコメント
一体何があったのでしょうか？　普段一体どういう事をしているのかが気になるところです。
良かったら先生に話してみてください。一応あなた方よりも長く生きているので少しは力になれる筈です。ただ、気持ちと書いてあると言う事は恋愛の話でしょうか？
それなら先生のいえる事は１つです。自分が後から思いだして後悔することのない様に行動するのが一番です。色々と悩んで立派な大人になるのが学生の仕事ですよ

久遠光一のまとめ
『初っ端から覗き疑惑をかけられて優子に一方的に拷問されて、正直出だしは嫌な合宿だった。けれど明久や秀吉のスキルアップや、自分の得意な物理、英語、数学が人に教えられる程度の実力だって事の確認は出来たのは有意義だったと思う。ただ優子とは初日の騒動でこじれたままだから仲直りをしたいところだし、姫路や島田もちょっとはあの時俺の言った事をちゃんと考えて、明久に対しての乱暴な行動を改めてほしいと思う。明久も親友としてもっと自信を持ってほしい所。まあとにかく、色々と嫌な事もあったけどそれなりに意義があった合宿だった』

教師のコメント
確かに君は英語、数学、物理は優秀ですから、人に教えられると言うのは素晴らしい事だと思います。
ですが、あまり穏やかな気分で過ごせたと言う訳ではない様ですね。
ですが、ケンカをしたなら仲直りを早めにしておいてくださいね。
しかし、姫路さんが乱暴……ですか？　にわかに信じられない事で

すね。

吉井明久のまとめ
『あまりに多くのトラブルがあって驚いた。初日はいきなり意識を失って宿泊所に運ばれたので記憶がない。そのあとは覗き犯の疑いをかけられて、自分に対する周りの目について悩まされた。勉強について、光一のおかげで数学、英語、物理についての実力アップが出来たと思う。姫路さんや美波からもそうだけど、僕は周りにすごく嫌われているから、光一にはいつも助けられてばかり。相棒って呼ばれてても僕に何ができるかがわからないし、色々と考えさせられる強化合宿になったと思う』

教師のコメント
君の実力アップというのは、喜ばしい事だと思っておきます。
ですが、そういう悩みを持つことが大事です。人間、与えられる事に慣れてしまってはダメですからね。
久遠君に何かを返したいと思うのなら、真剣に考えてみてください。
きっとそれは久遠君にとっても喜ばしい事だと思います

「いたわっ！　主犯格よ！」

「やっぱり出たわね、学園デストロイヤーズ！」
部屋を出てすぐのところに、長谷川教諭率いる女子部隊が展開。
「やれやれ、長谷川と言えば数学か。舐めてくれるな」
「景気づけだ。やるぞ……サモン！」
「わかった……サモン！」
先行して来た女子２名に対し、光一と雄二が召喚獣を展開。
メリケンサックと拳銃を構え、戦闘態勢
『Ｅクラス　古川あゆみ＆源涼香　数学８３点＆７７点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一＆坂本雄二　数学２０１点＆２２４点』
「げっ、ゴリラ相手に数学で負けた！？」
「どういう意味だコラ！！」
「「きゃぁああーっ！」」
雄二の召喚獣が拳を、光一の召喚獣がライフルの弾丸を叩きこみ、一撃で決着がついた。
「坂本君、久遠君！　待ちなさい！」
「長谷川先生、残念ながらここは通しませんよ！　吉井、久遠、坂本！　ここは任せて先に行け！　サモン！」
「「「サモン！」」」
遅れて到着した長谷川教諭を、須川達が阻止し壁を作る様に召喚獣を並べる。
背中を須川達にたくした明久一行の後ろから、一歩も退かない勇士

たちの怒号が。

「翔子たん！　翔子たん！　はぁはぁはぁはぁはぁああっ！！」
「島田のぺったんこぉぉーーっ」
「姫路さん結婚しましょおーっ」
「木下さん愛してるぅぅーーっ」
「工藤のスパッツの下あぁーっ」

「……全員やられちまえ」
「ん？　何か言ったか？」
「いや、何も……むっ！」

光一達の進路の先に、１人の女子が立ちはだかっていた。
その女子は、Ｅクラス代表の中林宏美。

「やっぱり出て来たわね、久遠光一！」
「丁度良い、あんとき踏みつけやがった借りを返してやる。覚悟しろ筋肉女！　サモン！」
「誰が筋肉女よ！？　覚悟するのはそっちよ！　サモン！」

『Ｆクラス　久遠光一　現代国語４５点』
ＶＳ
『Ｅクラス　中林宏美　現代国語９８点』

「貧弱な点ね。貰ったわ！」

と、中林の召喚獣はバットを振り上げてとびかかる。

「んじゃ、とりあえず……」

光一の召喚獣はそれをかわし、ライフルの銃口を中林の召喚獣の口に突っ込んで……

「むごく死んでくれ」

そのまま引き金を引いた。

「Eクラス代表討ち取った！」

「「「おおおーーっ！！！」」」

光一の勝利宣言で、E・Fクラス男子が沸いた。

そして女子の軍勢を呑みこみ、教師すらも圧倒し始める。

「やはり光一が居ると違うな」

「そりゃどうも」

Eクラス代表が討ち取った事で、男子軍の士気は向上。

もはや3階の制圧は決まったも同然。

「流石だね光一」

「へへっ。さて、ここからが勝負だ……Dだけかc参戦か。次はあのヒステリーを討ち取る」

「頼むぞ」

広めの階段を5人で駆け下り、2段飛ばしで進む。

踊り場を曲がって見えた先には……

「俺達の覗きの邪魔はさせない！　サモン！」

「先生、覚悟して貰います！」

「き、君たちまで参加していようとは……！」

『化学教師　布施文博　化学６６３点』
ＶＳ
『Ｃクラス　黒崎トオル＆野口一心　化学１４４点＆１３２点』

「Ｃクラス！　来ていたか！」
「Ｃクラス・Ｄクラスの野郎ども、協力に感謝する！」

雄二がＣ・Ｄクラスを鼓舞する様に声高に叫んだ。

「協力なんざ、ったりめぇだ！」
「女子風呂覗かなくて何の為の男でぇっ！」
「てめぇらこそ、しくじるんじゃねぇぞ！」

士気が高すぎて、べらんめぇ口調となっていた。
ふと、光一はあたりを見回す。

「よし、俺がＣクラス代表を“軽く”捻ってやるから、お前らは２階の制圧を頼むぞ！」
「舐めてくれるわね！！」

まるでイノシシの様に猛りながら姿を現したのは、Ｃクラス代表小山友香。
にやりと笑みを浮かべながら、更に貶し始める光一。

「態々俺にけちょんけちょんにのされに来てくれるとは、探す手間が省けた」
「Ｆクラスの分際で言ってくれるじゃない！」
「じゃあこれからその分際以下にしてやるよ」

耳に手をやり、キィィイ！　という喚き声を受け流す光一。

「絶対後悔させてやるわ！！　サモン！！」

『Ｆクラス　久遠光一　英語Ｗ２３６点』
ＶＳ
『Ｃクラス　小山友香　英語Ｗ１６８点』

「なっ！？」

「絶対……何をさせてくれるって？」

光一は当然、英語フィールドであった事を知った上で、挑発していた。

「んじゃ、くたばれ」

両手両足をライフルで撃ち抜き、今度は顔を拳銃で執拗に攻撃。
完全に一方的な結果で、敵召喚獣は消え去って行った。

「Ｃクラス代表小山友香、討ち取った！」

「「「おおおーっ！！」」」

Ｃ・Ｄクラスの面々が声高に勝鬨の声を挙げ、いざ続かんと猛攻撃。

「あのさ、こういうのってすごく嬉しいよね」

「そうじゃな。仲間が増えていく喜びとでも言うべきじゃろうかの」

「その分、仲間だった女子が敵だがな」

「そこは気にしない方向で。でも光一のおかげで２、３階は制圧完了だね」

次は一階。
更に階段を下り、一階に近づく

「……護してくれ……」
「……メだ！　……倒的過ぎる……！」

一階では既に戦闘が行われていた……が。

「よしっ！　これで１階の制圧もうまく……」
「いや、違う！　様子がおかしいぞ！」

踊り場で折り返し、階下の様子を見回す５人。
するとそこには、教師女子連合軍に圧されているＢクラス男子達の姿。

『Ａクラス　霧島翔子＆木下優子　総合科目４７６２点＆３８９３点
　Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目４４２２点』
　　ＶＳ
『Ｂクラス　加西真一　総合科目１６９２点』

「どうやら、Ａクラス男子の参加はない様だな」
「オマケに随分と用心深い布陣だな、くそっ！

階段の真ん中に高橋女史が立っており、そこを動く気配を見せない。
その周囲を翔子、瑞希、優子を筆頭に、他のＡクラスの女子も何人かが立っている。

「……雄二、悪戯はここまで」
「明久君、ここは通しませんよ」

「光一、覚悟しなさい」

Ｂクラスの大半は途中にいる物理の木村教諭と英語の遠藤教諭に手間取っていた。
そこで、Ｂクラスの女子がこちらに駆け出す。

「光一、僕達も行こう！」
「わかった！　サモン！　そして、ユニゾン！」

『Ｆクラス　久遠光一（＋吉井明久）　英語Ｗ２２１点＋８８点』
ＶＳ
『Ｂクラス　真田由香　英語Ｗ１７８点』

融合召喚獣が両手のガンブレードを構え、怒涛の勢いで連射。
武器を弾き、腕と脚を撃ち抜かれ、そのあと切り刻み敵召喚獣は消え去った。

「よし、俺達に続……」
「させない！」
「ぐっ……！」

『Ａクラス　木下優子＆佐藤美穂　英語Ｗ３１２点＆２９９点
Ｂクラス　岩下律子＆菊入真由美　英語Ｗ１６７点＆１７１点
Ｆクラス　姫路瑞希　英語Ｗ４３９点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一（＋吉井明久）　英語Ｗ　２２１点＋８８点』

「雄二よ、光一と明久が！」
「わかっている！　すぐ援護に……」
「……雄二。お仕置き」

「くっ！　根元バリアーっ！」
「さ、坂本っ！　折角の協力者にその扱いはあんまりじゃないか！？」

『Ａクラス　霧島翔子　総合科目４７６２点』
ＶＳ
『Ｂクラス　根元恭二　総合科目１９３１点』

翔子の召喚獣の一撃が根元の召喚獣を葬り去り、翔子は雄二を追い詰め始める。

「明久君、大人しく降参してください」
「嫌だ！　ダブル！！」

キーワードを腕輪が受け取り、起動。
融合召喚獣と全く同じ装備の明久の召喚獣が姿を現した。

「え！？　おい、ダブルが使えるのか！？」
「ああ。俺と明久の点数で二分して、俺と明久がそれぞれ操作する召喚獣ができるって寸法だ」
「絶対に諦めるもんか！　もうこれ以上、僕が同性愛が似合う男だなんて言わせない為に！！」

明久の叫びが場を支配した。

「僕は……僕は受けなんかじゃない！　純粋に女の子が好きなんだ！！　それを証明する為にも、僕はここで倒れる訳にはいかないんだ！！」
「明久……よっぽど辛かったんだな」
「当たり前だよ！　そう言う風に見られる日々はもう嫌だ！！　雄

二は論外だし、光一とは親友であって、そっち系じゃないんだ！！」

魂の叫びが場を支配する。

そして、雄二が……。

「そうだ！　俺達は純粋に女子に興味がある事を証明する為に、ここにいるんだ！！」

「立つんだ皆！　僕達は男であり、女子に欲情する生物だ！　今ここで生物としての証を示すんだ！！」

「「「おおぉおお！！」」」

Bクラスが奮い立ち、教師を押し始めた。

「……とまあ、そう言う訳だ」

「確かにたまったものではないでしょうが、それとこれとは話は別です。行きますよ、優子」

「……えっ、ええ、そうね……ごめん、吉井君」

……明久の主張に、何故か優子をはじめ大半の女子の士気が削られた事を、誰も知らない。

「どいて姫路さん。僕が同性愛主義じゃない事を証明する為にも、覗きが必要なんだ！」

「明久君。そこまでして私じゃなくて美波ちゃんのお風呂を覗きたいんですね……！　もう許しません！　覗きは犯罪なんですからねっ！」

「僕は僕であり、他の誰でもない僕自身の生き様を証明してみせる！　世間のルールなんて関係ない！」

突進してくる瑞希の召喚獣を迎え撃つべく、明久は召喚獣に構えを

取らせる。
……そこへ。

「良く言った、吉井明久君！」

そこで、何者かの声が廊下に響き渡った。

「だ、誰ですか！？」
「待たせたね、吉井君。君の主張は、確かにこの僕が聞き届けた！」
「久保君！」

そこには、Ａクラスの久保利通をはじめ、Ａクラス男子達。

「到着が遅れてしまってすまない。踏ん切りがつかず、準備しながらもずっと迷っていたんだが……さっきの君の言葉を聞いて決心がついたよ」
「決心がついたって……」
「ああ。今この時より、Ａクラス男子総勢２４名が君たちの覗きに力を貸そう！」
「よし、全員召喚を開始して明久を鉄人の、光一を高橋女史の前に連れて行ってくれ！」
「「「おおおーーっ！！」」」

雄二の指示で、Ａクラス男子が召喚を開始。
所々で衝突が始まった。

「久保君、まさか協力してくれるだなんて……」
「いや、感謝するのは僕の方だよ。そうさ、君が言った通り、僕は僕なんだ。だからこそ、世間には許されない思いであろうとも、僕はその生き様を示すだけなんだ……！」

その言葉を聞いて、明久は背に悪寒を感じた。

「やれやれ、結局学年全員が参加か……ちょっと心苦しいな」

「ん？　何か言ったか？」

「いや、何も。それより優子達が足止めされてる以上、俺達は俺達の役目を果たさないと」

「そうだな。明久、ムッツリーニ！　階段へ向かって走れっ！」

明久とムッツリーニ、雄二と光一と秀吉は、高橋女史の前に駆け出した。

「まさかＡクラスの皆まで協力するとは思いませんでしたが、問題はありません。ここは誰であろうと通しませんから……サモン！」

掛け声と同時に姿を現すは、軍服姿に鞭を持った高橋女史の召喚獣。

光一にとっては、何度も手玉に取られた忌むべき相手。

「高橋女史！　悪いが、ここは通させて貰うぜ！　行くぞ……アウェイクン！」

雄二の掛け声を受け、白金の腕輪が起動。

物理フィールドを展開し、総合科目フィールドとぶつかり……。

「干渉ですか……！　やってくれましたね、坂本君……！」

「いけ明久っ！　鉄人を倒して、俺達を理想郷へと導いてくれ！」

「任せておけ！」

明久とムッツリーニが高橋女史の脇を駆け抜けた。

召喚獣がないとなれば、相手は生身の女性であり造作もない事。

「「「吉井達に続けー！」」」

明久に続いて、他の男子達も走りだす……が。

「く……吉井君と土屋君は逃しましたが、貴方達まで通しません！」

高橋女史が自身のフィールドを消し、腕輪の物理フィールドを使って召喚獣を呼びだす。

「流石、判断が早いですね……全員、階段を死守しろ！　行くぞ秀吉！」

「承知した！　サモン！」

「ユニゾン！」

光一が腕輪を起動し、秀吉との融合召喚獣が姿を現す。

「大人しくしていると思っていたのに、最後の最後で加担するとは……」

「雄二のバカが参加しないと“同性愛主義”決定な状況作ってなかったら、今日ものんびり過ごしてたはずなんですけどね」

と、光一と秀吉は雄二を睨みつける。

……が、雄二は特に表情を動かさない。

「まあ良いじゃないか。ここで勝てば女子風呂の光景が報酬だ」

「黙れ！！　……まあ良い。やると決めた以上は絶対に勝つ。そして雄二達にこの先（の地獄）を見せてやろうじゃないか！」

「随分と歪んだ友情ですね」

『学年主任　高橋洋子　物理８３２点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一（＋木下秀吉）　物理６１２点＋９９点』

「たった１人で、融合召喚獣の腕輪クラスじゃと！？」
「融合召喚ですら、１００点以上の差かよ……流石、学年主任で才女と呼び名が高い高橋女史だ」
「久遠君、君ならば私と戦う事がどれだけ無謀な事か、わかっている筈です」
「ええ……けど、だからと言って逃げてたら、可能性は本当に０です」

融合召喚獣が両手の自動拳銃を構え、高橋女史の召喚獣が鞭を構える。

「……その姿勢だけは買いますが、勝負は気迫や意地だけで勝てる物ではありません」
「その気迫と意地だけで、無理を成し遂げ続けたバカを俺は知ってます……そのバカに見習って、俺は今ここでアンタを倒す！」
「……良いでしょう。教師として、君に現実という物を教えてあげます」

そして、浴場前の廊下にて。

「……来たか、吉井」
「ムッツリーニ君、待ってたよ。もしかしたら来ないんじゃないかと思ったよ」

そこには、鉄人を後方に控え、保健体育の大島教諭と工藤愛子が立

ち塞がっていた。

「……明久、いけ」

「え？」

「……工藤愛子と大島先生は、俺が倒す」

「良かろう……吉井、こっちへ来い」

鉄人の言葉を受け、大島教諭と愛子は明久に道をあけた。

「……良いの？　殆ど脅されての参加なのに、ここまでやるなんて」

「……良いよ。僕はどうあっても、雄二達にこの先（の地獄）を見せたいんだ」

「そう……なら、ボクからは何も言わないよ」

明久は歩を進め、鉄人と相対。

「事情は工藤から聞いた……全く坂本の奴は」

「済んだ事は良いでしょう？　……僕には僕の目的があります。雄二達にこの先（の地獄）を見せる為に。そして僕は……今日ここでアンタを超える！」

「……そうか」

明久が召喚獣を展開し、鉄人は静かに構えをとる。

「光一は高橋先生を打倒する。だから僕も、光一の相棒として負けられないんだ！」

「信じ合う絆か……良かろう。ならば教師として、全力をもって応えてやる！」

「勝負だ鉄人！　この僕の本当の力を見せてやる！」

第四十三問

問題　種子島と呼ばれる火縄銃の日本伝来は何年かを答えなさい。

姫路瑞希の答え
『１５４３年」

教師のコメント
正解です

久遠光一の答え
『１５４３年。伝わってきたのは、１５世紀ヨーロッパで開発されたと考えられる、マッチロック式銃。方式としては瞬発式火縄銃と援発士気火縄銃とがある。マッチロック式はこれまでと比べ、命中精度と射程距離の向上など性能を大きく向上させた。その一方で……」

教師のコメント
君は本当に銃が好きだと言う事が良くわかりました。

吉井明久の答え
『１５４３年」

教師のコメント
正解です。吉井君は歴史の点数が尻上がりになってますね

「くっ！」

ヒュンッ！　ビシッ！

「私の攻撃をここまで耐えきるとは……君を少々甘く見ていた様ですね」

『学年主任　高橋洋子　物理７２１点』

ＶＳ

『Ｆクラス　久遠光一（＋木下秀吉）　物理５２１点＋６５点』

縦横無尽に襲いかかる鞭を銃ではじき、その隙を狙っての攻撃はすべてかわされる。

秀吉との融合召喚獣は幸い小回りと連射性に長けており、威力でこそ向こうが上だが連射で何とか対応していた。

「まさか融合召喚獣とはいえ、2年生で私と互角に渡り合うとは思いませんでした」

「俺が何度あなたの鞭を喰らってると思ってるんです？」

「補習の度に逃げ出していますからね」

苦手科目の補習だけならまだしも、何が悲しくて小学生の基礎からやり直さにゃならんのだ！

と光一は主張したものの、成績や珍回答により却下。

それで逃げ出すと言う手を使っている物の、あっさりと捕縛される日々を送っていた。

「何が悲しくて小学生の教科書開かにゃならんのですか！？（日本史＋世界史＝3点）」

「いや、お主では無理ないと思うのじゃが……」

「全くです。正解がある事自体が奇跡の様な酷い答案を出しておいて、良くそんな事が言えますね」

合同で自習をしていたAクラスの面々および、雄二と瑞希はふと午前の珍回答を思い出す。

そして……

「何で一斉に頷くんだ！？　……って、シリアスなバトルの筈なのに、なんでそんな話になるんです！」

「そうでしたね」

右手の自動拳銃を突きつけ、数発発射。

しかし腕や足に命中する筈のそれは、わずかな動きですべてかわさ

れた。

「君は腕や足を先に狙う傾向がある事は確認済みです。それに君の正確さを考慮すれば、この位造作もありません」

「だったら……！」

両手の銃を構え、それを連射。

高橋女史の召喚獣は、鞭でそれらを弾こうと……。

「融合解除！」

「なっ！？」

“爆発”！」

光一は融合解除と同時に、キーワードを叫ぶ。

すると撃ちだされたいくつもの弾丸が、一斉に大爆発を起こした。

「俺の召喚獣の腕輪は、撃ち出した弾丸を“爆発”させる。あれだけの量の弾丸の爆発なら、高橋女史の召喚獣と言えど耐えきれる物じゃない」

「くっ……やってくれますね、久遠君！」

『学年主任　高橋洋子　物理２６点』

ＶＳ

『Ｆクラス　久遠光一　物理８９点』

「ラストぉっ！！」

光一の召喚獣がライフルを撃ちだし……

「……“爆発”！」

その弾丸を中心に起こした爆発が、高橋女史の召喚獣を呑みこんだ。

「……私の負けです」
「光一、やったぞい！」
「ああ……学年主任高橋洋子、討ち取ったあぁっ！！」
「「「っ！　うぉおおおおっ！！！」」」

階段前を死守していた男子軍が咆哮し、敵側の最高戦力打倒により士気も最高潮に。

「そっそんな……高橋先生が！？」
「ウソでしょ……？」
「よし、総員突撃！　今のうちに倒すんだ！」

最強戦力が敗れた事にショックを受け、教師・女子の連合軍はそのまま鎮圧。
1～3階、制圧完了。

「はぁっ……はぁっ……」

壁に寄りかかり、そのまま床に座り込む光一。
そこへ秀吉が心配そうに駆け寄る

「お疲れさまじゃ、光一」
「ああ……これで俺達の役目は終わりだ。後は明久だな」
「うむっ」

一方、明久対鉄人は……

『学年主任高橋洋子、討ち取ったあぁっ！！』
『うぉぉおおおおお！！』

「なっ、何だと！？　高橋先生が、久遠にやられたのか……！？」
「やったね光一……なら僕も、ここで負けてられるかァッ！！」

1階からの声を聞き、鉄人は予想外の事態に驚きを見せる。
そして明久は相棒の勝利を得て、士気を高めた。

「……でも、どうする？」

拳、蹴り、木刀を駆使して鉄人を攻撃するも、全然ダメージを与えられずにいる。
ダブルを使っても、頭部や鳩尾などの最低限の個所のみ防御し、その他は頑強な肉体で弾き返す。

「……アンタ本当に人間なのか！？」
「鍛えているんだ。この程度は当然の事！」
「いえ、全然当然じゃないです！」

『吉井明久　総合科目１０９６点』

「……どうする？　ダブルでこのまま続けたって、いつまでも持つ物じゃない」

現実として、明久は優勢ではあったものの、事実上は劣勢だった。
2体の召喚獣の動きを同時に考える必要があり、放たれた攻撃をよけるのが主従か副獣か、ソレを判断して行動。
2人分の行動を1人で処理するなんて、いつまでも続けられない。

「うあっ！」

そこで、右腕に鈍い衝撃が走った。
それはどちらが受けたのかと躊躇した所を狙い、鉄人の拳が副獣の鳩尾に直撃。

「ぐ、ふぅっ……っ！」

痛みに耐えかね、廊下に背中から倒れ込んでしまう明久。

「所詮、下心の為の集中力などそんなものだ」
「……集中？　そうだ！」
「ほう……まだやるのか？　根性だけは人一倍だな」

明久の姿を見て、どこか楽しげに口元をゆがめる鉄人。

「鉄人、感謝するよ。今アンタは僕にヒントをくれた」
「ヒントだと？」
「集中だ……狙いを絞る。拳、蹴り、木刀、主獣、副獣、今から放つ攻撃をすべて……」

2体にそれぞれ支持を出すから混乱し、攻撃を別の個所に分散させるから威力が出ない。
だから……何度も同じ場所を攻撃する。
その全ての攻撃は……

「鉄人、アンタの股間に集中させる！」
「き、キサマ！　なんて恐ろしい事を考えるんだ！？」
「流石にあんたもそこだけは鍛えようがない筈だ！　行くぞ鉄人！」

狙いは全て股間と決まってからは、全ての攻撃に別の処狙いと見せての急所攻撃。
とにかく股間を狙い続け、向こうは防御に手いっぱい。

「こ、これほど執拗な急所攻撃をする奴は初めてだ……！」
「悶絶しろ鉄人！」
「くっ……」

副獣が力をためて大きく拳を振るうのを見て、股間のガードを固める。

「なんて、ウソです」

その瞬間、主獣が副獣を踏み台に鉄人の背後へ飛ぶ。

「しまっ……」
「もらったぁぁーっ！！」

召喚獣が手刀をふるい、それが鉄人の首に吸い込まれ……

「僕の勝ちだ、鉄人！」
「ぐぅっ……っ！　よ、吉井、キサマ……」

ドサリ、と重い音を立てて、鉄人はゆっくりと床に倒れ伏した。

「ぐっ……はぁっ……はぁっ……うっ……うおぉぉおおお！！」

明久は勝利の咆哮をあげると同時に、その場に倒れ伏した。

「明久……お前」
「……立派な、最後だった」

そこへ、雄二を始めとする各クラス男子の面々が到着。
倒れる鉄人と明久を見て、よほどの死闘が繰り広げられていたのだと確信。

「吉井……お前の事は忘れない」
「安らかに眠れ……お前の分も、しっかりと楽しんでやるからな」
「さて、さっさと行くぞ。明久はそこらにでも放り投げとけ」

雄二の宣言で、全員が脱衣所に歩を進める。
その雄二はというと、珍しく顔をほころばせており、今か今かと待ち望んだ光景を楽しみにしていた。

「皆！　これだけの人数が居れば、人物の特定もできないし邪魔も排除できる！　停学や退学の処分もないから、思う存分楽しんでくれ！
『『『おーっ！』』』

廊下を揺るがすような返事が響き渡った。
確かに学年全体分の人数が居れば、誰が参加してるかなんて覚えきれる訳がない。
つまり処分の心配がない以上は、全員が楽しむつもりでいた

「……やれやれ、雄二の薄情さにこんな所で助けられるとはね」

……本当に放り投げられた約1名が、こっそり抜け出している事に気付かない程に。

「全員、心して見ろ！　これが俺達の勝ちとった栄光だ！」

背中から聞こえた来る雄二の声に、痛む身体に鞭をうって駆け出す。
そして、雄二が女子風呂の扉を開けると同時に明久は階段を駆け上った。

「おおっ、戻ってきたか明久よ」
「光一、秀吉、上手くいったよ」
「おうっ、御苦労さん」

『な、なんだいアンタ達は!?　雁首そろえて老人の裸見に来たのかい!?』
『割にあわねぇーーっ!!』

下の階から、絶望の悲鳴が響き渡った。

「ぷっ……あーっはははははは！」

光一は耐えきれず、大笑いを始めた。

「……貴方達、もしや知っていたのですか？」
「まさか。何となく嫌な予感がしたってだけですよ」

もちろん大？である。
学園長がこの時間風呂に入ると言う情報は、ちゃんとつかんでいた。

「光一、真顔で大ウソをつかないの！　ちゃんと知ってた上でやったでしょ？」
「そう怒鳴るなよ優子。どうせ俺達停学なんだから」

内容がどうあれ、覗きが成功してしまった以上は処分が必要。
そして全員固まっている事も予想され、リスト作成は十分可能。

「……あの、高橋先生。僕たちは覗いてないですし、無罪は無理でも少しくらい……」
「却下します。処分はきっちりと行いますので、覚悟しておくように」
「あっ、やっぱり……」

明久、光一、秀吉はハァッとため息をついた。

第四十四問　強化合宿編　エピローグ

―　処分通知　―

文月学園第２学年全男子生徒総勢１４９名
上記の者達全員を１週間の停学処分とする

文月学園学園長　藤堂カヲル

ついムラッと来てやった。
今は心の底から後悔している

～　とある生徒の反省文より抜粋　～

「あー、やっと終わった」

説教および反省文、そして停学処分通知。
あらゆる地獄を終えて、全員が部屋へと戻った。

「……畜生、畜生、畜生、畜生」
「……悪霊退散、悪霊退散、悪霊退散」

ちなみに明久、光一、秀吉以外の男子は全員が壊れており、ずっとこの調子。
中には自殺をしようとした者や、奇声を挙げ続ける者も。

現在雄二とムッツリーニは、吐いては呟き吐いては呟きを繰り返している。

「……よほどすさまじい光景だったんだね」
「じゃろうのう。全員がほぼ等しく真っ白に固まっておった上に、目が覚めればこの状態じゃ」
「反動もあるだろうな。女子の裸体が連なる理想郷かと思えば、妖怪が行水してる地獄の一丁目じゃ」
天と地どころか、宇宙の直径の差があるだろう。

「しかし光一と明久は、またその名が轟くのじゃな」
教師を1対1で破ったのは、この2人とムッツリーニ。
鉄人も生身とはいえ、そのバケモノじみた強さを考えれば十分功績に値する。

「僕より光一だよ。高橋先生倒しちゃうなんて、やっぱり凄い」
「単科目だし、融合召喚だけどな」
「じゃがそれでも１００点以上の差があったのじゃから、十分光一の実力と言えるぞい」
「……なんか照れくさいな」

特に光一は、教師の中でも別格ともいえる学年主任こと、高橋女史の撃破。
単科目でさえ担当教師を上回る点数を保持している彼女は、そう簡単に勝てる相手ではない。

「やっぱり凄いな、光一は……」
「何暗くなってんだよ？　召喚大会で俺に勝ってるくせして」
「あれは総合科目での話でしょ？」
「でも勝ちは勝ちだ。もっと自信持てよ明久」

と、光一はバンッ！　と明久の背を叩いた。
明久はそうだねと微かに呟き、笑いかける。

「それにしても、停学か……覚悟してたとは言え、やっぱりきついね」
「俺はどうでも良いよ。筋肉とヒステリーに借りは返したし、あの通りだし、結果としては上々だ」
「じゃろうな。まあワシとしても、気が晴れたからとやかくは言わんぞい」

ターゲットとしていたEクラス代表中林宏美と、Cクラス代表小山友香
その2名には覗き疑惑時の木下優子による拷問中に、散々蹴られた屈辱があり絶対打倒を決めていた。

それだけに、かなり表情が晴れやかである。

「話は変わるけど、この調子のままで試召戦争解禁になったら、どこが相手でも楽勝じゃないかな？」
「そうじゃの。光一が居ればどこが相手でも勝てる気がしてきたぞい」
「買い被り過ぎだって。それに苦手科目となると明久と秀吉がどうしても必要なんだから、言うなら俺達がだろ？」

それもそうだと、3人は笑いあった。
ひとしきり笑い終わった後、時間を見て一言。

「さ、さっさと寝るか」
「……そうだね。長生きの為にも、戸締りはきっちりしなきゃ」
「お主はまだそんなことをいっておるのか？」

「雄二も霧島が黙ってそうに無いし、しっかりとカギは掛けといてやるか」

と、固まってる2人を置いておいて、3人は布団を敷いて寝る体制を整える。
そして雄二とムッツリーニを促して、3人は床についた。

「んじゃ、電気消すぞ？」

明久と秀吉が頷いたのを見て、光一は電気を消す。
そして自身も床についた。

「……ねえ光一」
「ん？」
「木下さんとのことだけど、良いの？」

と言われ、少々複雑そうにする光一。
だが、暗がりで特に表情は見えないだろうと辺りをつけた。

「心配しなくても、謝るつもりだよ。筋肉とヒステリーへの恨み晴らして、スッキリしたしな」
「そう……良かった」
「俺よりお前だよ明久」

と言われ、明久は疑問符を頭に浮かべる。

「姫路と島田の事」
「え？　どっどうして姫路さんと美波が……？」

怯えたように言う明久に、光一と秀吉はため息。

「……まだ昨日の晩の事、暗殺だと思ってるのかよ？」
「だっ、だって、証拠もないのに覗き現行犯扱いして拷問する程なんだよ？　そこまで嫌ってるんだから、暗殺って言った方が合うと思うんだけど？」
「……何故じゃろうな？　ソレを聞くと、明久の鈍感さに呆れておったのが不思議に思えてくるぞい」

秀吉も流石に、ソレを聞いては否定が出来なかった。
光一も被害に遭っただけに、少々呆れを2人に対して感じる。

「まっ、まああれはあれで、姫路と島田の愛情表現とも……」
「ラブレター騒動の時、危うく殺されかけたんだけど？　しかも姫路さん暴行前提で話してたし」
「……とれないな、確かに」

秀吉はソレを聞いて、あーっという顔になる。
ちなみにその時光一は瑞希の“気合の入った”弁当を食べて、2日ほど入院していた。

「美波はともかく、姫路さんにそこまで嫌われる事したかな？　……覗き疑惑は解消した筈なのに」
「……もう寝ろ。疲れてるんだよお前は」
「そっそうじゃな？　光一も明久も、激戦を潜り抜けておるのじゃから疲れておるじゃろ？」
「そうだね。じゃあお休み、光一に秀吉」

と、明久は布団をかぶってしまった。
そこで、光一の隣の布団に居る秀吉が一言。

「……のう、光一よ。明久には、もう少し優しくしてやるべきかのう？」
「……何でいきなりそんな事言いだすんだよ？」
「ちっ違うのじゃ。明久からの話を聞いて、少々ぞんざい過ぎたかのと反省しておる位で……」
幼馴染の奇妙な一面に混乱する光一だった。
ふと、とあるメガネの青年を思い出すと同時に、疑問が晴れてしまう事もまた。

「……秀吉、頼むから俺に敵意を持ってくれるなよ？」
「だっだから、違うのじゃ！」
「ん？　どうしたの秀吉？」
「なっ、何でもないのじゃ」
こうして、合宿４日目の夜は平和（？）にふけて言った。

そして、帰り。
美波と瑞希とは別に、明久、光一、秀吉、雄二、ムッツリーニだけでの帰宅。
その後、停学処分が開始となる。

「自宅謹慎の上に、課題がたっぷりだよ……やだなあ」
「全くだ。しかもどうして主犯でもない俺に、高橋女史からの特別課題が追加されるんだ？」
「お主を矯正しようと言う腹積もりじゃなかろうかの？」
学年主任が問題児に負けた等、確かに汚点にしかならない。

「勘弁してほしいよ。俺の補習は何故か高橋女史が担当してるんだぞ？」
「お主は出来る教科は出来るが、出来ない教科は明久未満じゃからのう。個人での方が効率が良いぞい」
「それに光一を取り押さえられる人と言えば、確かに鉄人とあの人しかいないからね」

教師の召喚獣は物質干渉能力を持ち、高橋女史は操作技術においてもトップクラス。
なので鉄人以外で光一を取り押さえる事が出来る、貴重な人物でもあった。

その証拠に、これまで事あるごとに脱走を企てては、悉く失敗している。

「……次は必ずや逃げきってやる」
「同じ教室だったら手伝えるんだけど……」
「……いい加減態度を改めた方が良いと思うのは、ワシだけじゃろうか？」

その考えがあるなら、当に模範的生徒となっていると言うのは鉄人の弁。

「それより、結局優子と仲直りができなかったな……」
「だよね。その原因の清水さんには処分は下されなかったし、良い迷惑だよ」
「全くじゃ」

結局、美春については教師に報告されておらず、カメラをすべて回収という美波の処分だけで済んだ。

……という訳でもない。

「まあ、俺個人で島田に今後“清水さん”としか呼ばない様頼んだ（明久の暗殺疑惑緩和を条件に）」
「……お主、存外に鬼畜じゃな」
「絶交を言い渡さんだけ寛大だと思えよ」

余談だが本日、泣きすがる美春と問答無用を貫く美波の姿があった。

「それより、停学が明けるとしばらくは荒れるだろうな」
「そうだよね。結局学年全体での覗き騒動になっちゃったんだし、女子のみんな怒ってるよね」
「じゃろうな。明久と光一、ワシは参加せざるを得ない事になったのは、姉上達も理解しておるじゃろうが」

それでも当然、納得できない者も数多く存在する。
その辺りは、仕方ないと思いつつも懸念せざるを得ない事があった。

「それに覗きの主犯は雄二とムッツリーニで、目立つ戦果をあげた俺と明久と秀吉。それが全員Fクラスだ。だから、妙な事を企む奴が居ないかと不安になってな」
「あっ、そっか。Cクラス代表の小山さんやEクラス代表の中林さん、光一を嫌ってるんだったよね？」
「それに、高橋女史を破ったことも大きいぞい」

私怨による何かを企むだろう、女子が代表のクラス。
そして高橋女史を打倒した光一の功績を利用し、自身の汚名を払拭しようと企むだろう、男子が代表のクラス。
どちらにしろ、しばらく荒れる事を光一は懸念していた。

「……まあ、今は気にしてもしょうがないか」
「……そうだね」

こうして、強化合宿は終わり、2年男子全員の停学生活がスタートした。

停学処分1日目、文月学園学園長室。

「あのクソガキ共め！　やっぱり騒ぎを起こしてたじゃないか！！」
「いえ、彼らは坂本君の策略で無理やり参加させられたものだと証言が……」
「どうでも良いさね！！　全く……吉井明久の校舎の壁の破壊に、久遠光一の教頭室爆破に続いて、今度は坂本雄二主犯の学年全体での覗きとは、あいつらは何かバカやらないと気が済まないのかね！？」

すごく不機嫌の学園長と、ソレを宥める高橋女史。
それもその筈である。

「全く……まあ、もうすぐ学会に試験召喚システムのお披露目がある訳だし、ここで何とか挽回したいねえ」
「……心中お察しします」
「そう言う意味じゃ、停学処分にして正解だったよ。あのバカ共が居る校舎内でのお披露目だなんて……」

ヴィーッ！　ヴィーッ！

「何事ですか！？」

「……何かあった様だね」
「っ！　フィールドが！？」
「やれやれ、バカ共なしでもトラブルは等しくやってくるか」

第四十五問　召喚獣補完計画編　プロローグ（前書き）

アニメオリジナル、召喚獣補完計画編です。

ＰＶ７５００００、ユニーク５５０００突破！

これからもがんばります、よろしくお願いします。

第四十五問　召喚獣補完計画編　プロローグ

問題　時に食用できる地下茎を持つ、英語で“ｌｉｌｙ”という名の植物を答えなさい。

姫路瑞希の答え
『ユリ』

教師のコメント
正解です。流石ですね、姫路さん。
地下茎は鱗茎と呼ばれ、養分を蓄えて熱くなった葉で、ネギやラッキョウなども鱗茎に含まれます

吉井明久の答え
『ヤマイモ！　ジャガイモ！　サツマイモ！』

教師のコメント
“食用”以外にも注意を向けてください。

久遠光一の答え
『清水美春』

教師のコメント
嫌々書いた感が滲み出ていますので、嫌なら最初から真面目に解答してください

停学処分1日目の学園にて。

「美波ちゃん、おはようございます」
「あ、瑞希。おはよ」
「……やっぱり、不安ですか？」
「うん……久遠がああは言ってくれたけど、やっぱり不安だわ」

2人はある事を懸念していた。
しばらく“清水さん”としか呼ばない事を条件に、光一から明久の暗殺疑惑の緩和の取引。

少なくとも、明久が今現在最も信頼している相手だけに、それ以外

に頼む術は2人にはなかった。
……が。

「だってもし、あいつらが愛し合ってたとしたら……」
「余計にこじれてる可能性も……」
「……2人とも、だから光一はアタシに告白してるって事忘れてない？」

と、程良く暴走してる所へ、優子のツッコミが。

「あっ、おはようございます。木下さん」
「おはよう。久遠とは仲直りできた？」
「ううん。あれから結局機会がなかったから……まあ、アタシの自業自得だから無理ないけどね」

今更ながら、一方的に決めつけての拷問は流石にやり過ぎたと、優子は反省していた。
正直、愛想尽かされたと言われて、それも無理もないかなと思う位に。

「こっちも久遠に怒られたり、アキに暗殺実行犯とみられたりと、散々だったわね」
「そうですね……明久君を信用できなかった私達の自業自得でしょうけど、踏んだり蹴ったりです」
「そうね……一概に清水さんばかりを責められないわ」
「まあとにかく、あいつらが停学から明けたらしっかり弁解しましょ」
「そうですね」

文月学園第2学年男子、全員の停学処分。

その1日目は穏やかに始まった。

タッタッタッタッタッ！

「……学園祭での目論見は潰された物の、校舎の破壊に爆破、そして学年全体の覗きとくれば評判は下落の一途。ここで召喚システムに問題を起こせば、学園長の失脚は確実になる」

1人の男が、サーバールームを目指し駆け出していた。

「さて、パスワードは……」

厳重な電子ロックが解除され、サーバールームの扉が開く。
そしてその中に入り……

「くそっ、手間をかけさせてくれるじゃないか」

中枢の端末を操作し始めるが、そこでパスワード認証画面が。

「っ！　またセキュリティか。パスワードは……」

軽快な手さばきで入力するが、次の瞬間エラー画面が。
ソレを受けて警報が鳴り響き、その男はその場を走り去ろうと……。

パキンッ！

した所で、ケーブルに足を引っ掛けてしまい、それが外れてしまう。
男はそれに構わず、その場を立ち去ると同時にサーバールームの扉

が閉まる。

「……作戦は失敗か」

そこで、召喚フィールドが学園全体を覆い尽くした。

学園長室にて。

「……で、停学中の俺達をいきなり呼びだしたのとこの状況に、どんな関連性が？」

いきなりの呼び出しで学園長室へと訪れたのは、５名の男子生徒。
吉井明久、久遠光一、坂本雄二、木下秀吉、土屋康太。

「見ての通り、問題が発生したからあんた達に働いて貰おうって事さね」

「まずは状況を説明してください」

「わかりました」

と、一歩前に出たのは高橋女史。

「実は先程、学園内に侵入者があったのです」

「侵入者！？」

「まさか、召喚システムのデータでも盗みに来たのか？」

「いーや、そうじゃないさね。実は２度にわたる校舎破壊にこの前の覗き騒ぎで、学園の評判がガタ落ちでね」

その言葉に、４人は目をそらした。

ついでに言うと、学園長も４人を刺す様な眼で見ている。

「だからその汚名返上として、学会に召喚システムのお披露目をする事になってたのさ」
「イメージアップ戦略か。明久と光一のしりぬぐいとは、涙ぐましいな」
「それに輪をかけたのはお前だろうが覗き魔！　巻き添えにして停学にしやがったくせして、その言いようはなんだよ！？」
「うるせえ！　こっちだってあんなおぞましく気持ち悪い物体を見せられた上に、停学なんて納得できる訳がねえ処分受けてんだよ！！」
「……このガキにも1度、この学園の最高権力者が誰かという事を、教えてやる必要がある様だねえ」

見た挙句に、おぞましく気持ち悪い物体呼ばわりされて、機嫌が悪くなる学園長。
その様子を、秀吉と高橋女史は呆れるように雄二を見とがめる。

「でも雄二、見たのは事実じゃないか。覗きは犯罪なんだよ？」
「逆に慰謝料が欲しい位だ！！　そもそも明久や光一じゃあるまいし、あんな気持ち悪いもん見せられて喜ぶ訳あるか！！」
「いつ誰がこんなバケモノを見て喜んだ！！？」
「それを見たがってたのは雄二じゃないか！　僕達も危うく、このババァの風呂なんておぞましい地獄の一丁目を目の当たりにするところだったんだ！！」
「……このガキ共、停学期間を増やしてほしいみたいだね！」

学園長は高橋女史になだめられて話に戻る。

「それでは、話に戻りますよ？」
「「「……はい」」」

キラリとメガネを光らせ、睨みつける高橋女史。
それには流石に3人も肯定をもって応えるほかなかった。

「じゃあこの状況は、その学会のお披露目を狙った奴の仕業ってことか？」
「えーっと、どういう事？」
「学会にシステムのお披露目をして、イメージアップを謀ろうってのがババァ長の……」
「久遠君？」
「……学園長の狙いってことだから、それを邪魔しようって奴等が居るってことだろ。学園祭の時の様に」

学園祭において、腕輪の暴走を一般観衆の前で引き起こし、文月学園存続を脅かそうという動きがあった。
……が、明久達4人の活躍によって、それは免れたが。

「じゃあこの状況は、その侵入者の仕業って事ですか？」
「そうさね。まあシステム自体は問題はないが、ハードの方に問題が発生したようでね」
「じゃあ修理すれば元に戻るって事じゃないか。何で俺達を呼び付けるんだよ？」
「サーバールームの防犯システムにアクセス出来なくて、扉が開かないんだよ。電源を落とそうにも、無停電電源装置があるから1月は機能するさね」

となると、壁を壊して中に入るしかない……が。

「その学会のお披露目とやらがあるから、派手な事は無理ってわけだ」

「壁に穴があいてるなんて、いくらなんでも非常識だよね」
「だから、その修理の為にアンタ達を呼んだのさ。システムのコアに近い教師用召喚獣は、完全にフリーズしていて召喚ができず、生徒の召喚獣も暴走状態だ」
「ですから、吉井君と久遠君に頼むしかないのです」
明久と光一が、顔を見合わせる。
その他の3人も、疑問符を浮かべた。

「観察処分者、そして融合召喚のベース召喚獣はシステムの別領域で走ってるから、他の生徒と違って暴走の影響を受けないんだよ」
「じゃあ、現状で唯一召喚獣を使える俺達に召喚システムの修理をやれってことか？」
「その通りさ。融合召喚と同時召喚の腕輪を使えば、アンタの召喚獣も物理干渉能力を持つ事が出来る。そして、不具合のある教師フィールドじゃまともに召喚は出来ないから……」
「自前のフィールドを持っているワシと雄二の出番じゃな」
と、雄二と秀吉は腕輪を見せた。

「その通りさ。アンタ達が下げてくれた評判の分、しっかり働いて貰うからそのつもりで！」
「その前に、回復試験を受けさせてもらえますか？　俺達覗き騒動で点数消費したままです」
「では、こちらへ」

明久と光一は、高橋女史に連れられ外へ。
そして、空き教室へと向かう途中。

「あっ！　明久君に、久遠君！」

「あっ、姫路さん。美波も」
「あれ、アキ！　それに久遠も、なんで居るのよ？」

普通に考えれば、２年の男子は全員停学処分。
無論、２人がここにいる訳がない。

「ババァ長に……」
「久遠君？」
「……学園長に呼び付けられたんだよ。詳しくはそっちから聞いてくれ」
「それじゃ、僕たちは回復試験受けないといけないから、これで」

と、高橋女史に伴なわれて去る２人

「……ねえ、瑞希」
「はい……ああは言いましたけど、やっぱり誤解はすぐ解きたいです」
「じゃあ、優子も呼んでから学園長室に行こうか」

２人を見送った瑞希と美波は、一路Ａクラスへと駈けだした。

一方、学園長室にて。

「それでババァ。侵入者の処分はどうするんだ？」
「アンタ達がしでかした不祥事の事があるから、内密に処理するしかないよ。セキュリティの問題まで暴露されたら、お披露目以前の問題さね」
「内通者がいるかもしれないからか？」

雄二の進言に、学園長は表情を変えた。

「召喚システムのサーバールームは学園の中枢同然だ。なのにどうして侵入者が、誰にも見つからずにサーバールーム内部に入れた？　しかもお披露目とやらが控えた時期と重なっている辺り、手際があまりにも良過ぎる」

「……本当にアンタは頭が回るねえ」

どの道、密告者の存在自体もスキャンダルとしては十分。ただでさえ評判が悪いのだから、これ以上は勘弁というのが学園長の内心。

「となると、急いだ方が良いな。内通者が居るとしたら、この状況は格好の餌食だ」

「そうさね。まああの切り込み隊長コンビなら、上手く行くんだろ？」

「ああ。明久と光一のコンビなら、上手くいく。断言しても良い」

そして、作戦が始まった。

第四十六問（前書き）

総合評価ポイント１０００Ｐ突破！

これからもよろしくお願いします

第四十六問

問題　以下の問いに答えなさい

家計の消費脂質の中で、食費が占める割合を何と呼ぶでしょう。

姫路瑞希の答え
『エンゲル係数』

教師のコメント
正解です。流石ですね、姫路さん。
一般に、エンゲル係数が高い程、生活基準は低いとされています。

吉井明久の答え
『今週は塩と水だけです』

教師のコメント
食事の内訳は聞いていません

久遠光一の答え
『朝：食パン　昼：カロリーメイト　夜：野菜炒め』

教師のコメント
食事の献立も聞いてません。

サーバールーム前にて。
補充テストが終わり、明久と光一、雄二と秀吉が配置につく。

「さて、行くか」
「ああ。指定物理で、アウェイクン！」

雄二のキーワードを受けて、白金の腕輪が起動。
ソレを中心に、物理科目の召喚フィールドが展開される。

「さて、行くぞ明久！　サモン！」
「うん！　サモン！」

融合召喚の腕輪を起動するには、ある条件がある。
召喚獣同士が手をつなぎ、相手の召喚者が同意である事。

「ユニゾン！」

『Ｆクラス　久遠光一（＋吉井明久）　物理６０２点＋８７点』

その条件が満たされ、雄二の物理フィールドにて明久との融合召喚獣が姿を現す。

明久がそれを確認すると、雄二のフィールドから離れた。

「ならば、ワシも行くかの。アウェイクン！」

「うん。それじゃ、ダブル！」

次は秀吉が、ランダムで選ばれた数学の召喚フィールドを展開。

そこで明久が、自身の白金の腕輪を起動し、副獣を呼びだした。

『Ｆクラス　吉井明久（＋久遠光一）　数学６８点＋２３４点』

「よし、上手く行ったな」

「じゃ、行くぞ」

作戦内容は、システム冷却用の通気口を伝っての侵入。

それから、故障個所を探しての修復という、単純な作業……だが。

「っ！」

召喚フィールド内に、突如召喚獣が数体現れた。

『Ｅクラス　中林宏美　物理９９点

Ｃクラス　小山友香　物理１７１点』

ＶＳ

『久遠光一（＋吉井明久）　物理６０２点＋８７点』

『Ｂクラス　菊入真由美＆岩下律子　数学１７９点＆１６３点』

ＶＳ

『Ｆクラス　吉井明久（＋久遠光一）　数学７８点＋２３４点』

「どうやらシステムの方としては、中に入って欲しくないらしいな」

「みたいだね」

２本のガンブレードを両手に構え、暴走召喚獣と相対する明久と光一の召喚獣。

「けど、何でかな？　全く気にならないよ」

「俺もだ」

明久の召喚獣が駆け出し、光一の召喚獣も銃として構え相対する。

「だって」

「ああ」

「「俺（僕）達のコンビは最強だ！」」

明久の召喚獣が２体を真っ二つに切り裂き、光一の召喚獣が２体の顔面を撃ち抜く。

点数こそ二分されている物の、相手が相手だけにそれで十分。

「やったね光一」

「へえっ、あの召喚獣の親って確かＢクラスだったよな？　２体とも一撃とは」

「光一の得点があればこそだろ。大体お前だってＥとＣの代表を一撃じゃないか」

「物理だったら当たり前だ。あの筋肉にヒステリーの召喚獣じゃ、腕ならしにもなる訳ないだろ」
「光一よ、この様子は中継されておるのじゃぞ？」
「え？」

Eクラスの教室にて。

「殴らせて！！　あの男を一度でいいから殴らせて！！」
「待って中林さん！　クラスとしてあんな人を敵にしたくない！！」

Cクラスの教室にて。

「あの男は、あの男だけは許せない！！」
「落ち着いて代表！　高橋先生に勝つような人に私達で勝てる訳ないよ！！」

光一の悪評がさらに広まった瞬間だった。

「高橋女史に勝ってなかったら、停学明けはお前の所為で試召戦争騒動だぞ？　少しは発言を考えろ！」
「お前にだけは言われたくねえ！」
「何だと！？」
「何だよ！？」
「落ち着くのじゃ２人とも！　次が来たぞ！！」

秀吉の言うように、また新たな召喚獣が展開される。

『Ａクラス　佐藤美穂　物理３９５点

Ｄクラス　玉野美紀　物理１１３点
Ｅクラス　古河あゆみ　物理１０１点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一（＋吉井明久）　物理６０１点＋８５点』

『Ｂクラス　金田一祐子　数学１６２点
Ｃクラス　入江真美　数学１４６点
Ｅクラス　源涼香　数学９４点』
ＶＳ
『Ｆクラス　吉井明久（＋久遠光一）　数学７６点＋２３０点』

「ちぃっ、コレじゃキリがねえな。明久、一旦突っ切って中に入るぞ！」
「うん！　サーバールームで落ち合おう！」

明久と光一の召喚獣は、それぞれの追手を振り切って通気口の中へ。
それを追う暴走召喚獣達だが、ガンブレードによる射撃で追い払われた。
明久と光一は、ムッツリーニの用意したカメラの映像受信装置を装着し、起動。

「さて、ナビを頼むぞ？」
『ん、りょうかーい！』
『任せなさいよ』

光一の通信機器から聞こえてくるのは、工藤愛子と木下優子の声
光一のナビゲートはこの２名で、明久のは……

『よろしくお願いします』
『折角ナビゲートしてあげるんだから、しっかりしなさいよアキ？』

「もちろんだよ」

瑞希と美波であった。

「やれやれ、前途多難だねえ」

「やはり、あの2人に任せるのはどうかと……彼等は観察処分者とその候補、問題児です」

「任せるしかないよ。現状でどうにか出来るのも、腕輪を使えるのも、あのバカ共だけなんだからね」

そして……

『Fクラス　久遠光一（＋吉井明久）　物理３４２点＋５９点』
VS
『Aクラス　佐藤美穂　物理３５４点』

『Fクラス　吉井明久（＋久遠光一）　数学５６点＋１５６点』
VS
『Aクラス　森兵恵　数学２９５点』

たった2体で全暴走召喚獣と戦う様な状況だけに、少しずつ点数も体力も消耗していた。

カメラを通しての戦い、観察処分者の処理によるフィードバック。

明久は慣れはしている物の、光一はフィードバックによる疲労にはまだ慣れてはいない。

今までと全く違う感覚内での戦いの分も、疲労も蓄積されていく。

「ふぅっ……」

「大丈夫、光一？」
「ああ……フィードバックって、こんなにきついのか」
点数こそ勝っていた物の、徐々に精度も落ちていた。
「これで霧島や姫路のが出たら、勝てる自信ないぞ？　融合召喚のダブルはやられたらアウトだし」
同時召喚と融合召喚は、組み合わせて使えるがその分リスクはあった。
どっちかが敗れれば、もう片方も戦死扱いとなる。
「あっ、僕の召喚獣はもうすぐサーバールームだ」
「じゃあ俺も……何！？」
『Ａクラス　霧島翔子＆木下優子＆工藤愛子　物理４３２点＆３９８点＆３１２点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一（＋吉井明久）　物理２９２点＋５６点』
「しょっ、翔子！？　それに、木下に工藤の召喚獣との、３体同時だと！？」
「よりにも寄って、こんなところで！」
暴走召喚獣が刀とランス、大斧を構え突進。
迎え撃つべく銃を撃つが……。
ザクッ！
「ぐあっ！」

全部を耐えきられ、そのまま射程内を許してしまう。
召喚獣の腕が刺し貫かれ、光一の腕にフィードバックが。

「光一！？」
「明久よ！　こちらもじゃ！」
「え！？」

『Ｆクラス　姫路瑞希＆島田美波　数学４１３点＆１７９点』
ＶＳ
『Ｆクラス　吉井明久（＋久遠光一）　数学５１点＋１４５点』

「ひっ、姫路さんに、美波……」
「姉上、どうにか出来んのか！？」
『ダメ！　コントロールできない！』
「そっそんな……」

美波の召喚獣が突進し、明久の召喚獣の腕を弾く。
姫路の召喚獣がソレを狙って、大剣で腹を刺し貫いた。

「ぐあああああっ！！」
『明久君！？』

ソレをそのまま地面にたたきつけて、そのまま顔面を思いきり踏みつける。
そしてそれに続く様に、美波の召喚獣がレイピアでめった刺し。

「うああっ！　ぐっ、あああああ！！」
「明久！　うぐっ！？」

大斧で突かれ、そのまま壁に叩きつけられる光一の召喚獣。
続く様に両手をランスと刀で突き刺され、身動きが取れなくなった所を優子の召喚獣が斧の上に乗り、顔面を殴りつけ始めた。

「……姉上、姫路、島田、本当にコントロール出来んのか？」
『ちょっと木下、何でウチ等を疑うのよ！？』
『そうです！　私達はあんな酷い事なんてしません！！』
『そうよ秀吉！　心外にも程があるわ！！』
「……思いきり普段の光景とデジャヴがあり過ぎるぞい」
「……確かに」

雄二ですら、暴走召喚獣の行動にデジャヴを感じ取っていた。

ドサッ！

「こっ光一！？」
「やべえ、すぐに保健室へ！！」

フィードバックに耐えきれず、その場で崩れ落ちる光一。
そして明久も……

『あれって、瑞希の腕輪！？」
『明久君！　逃げてください！！」

瑞希の召喚獣が腕輪をつけた手を掲げ、明久の召喚獣を狙う。
腕輪が輝き熱線が放たれ、明久の召喚獣を消し飛ばした。

「うっ……ああ……」

０点になると同時に、意識を手放した。

「……作戦失敗、ですね」
「……やれやれ、仕切りなおしだね」

第四十七問

問題　以下の問いに答えなさい。

地図と方位磁石を頼りに、チェックポイントを辿るスポーツを何と呼ぶでしょう。

姫路瑞希の答え
『オリエンテーリング』

教師のコメント
正解です。流石ですね、姫路さん
長い距離を歩くスポーツで、上り下りのある山道で行われる事もあります。
身体の弱い姫路さんには大変かもしれませんが、体力作りの為にも頑張って参加してください

吉井明久の答え
『ロールプレイングゲーム』

久遠光一の答え
『サバイバルゲーム』

教師のコメント
そう答えると思っていました

試験召喚システム暴走阻止作戦
第一次出陣、暴走召喚獣の妨害により失敗

久遠光一、吉井明久の融合召喚獣の同時召喚２体による撃破数、４３体
内訳は、Ａクラス５名、Ｂクラス９名、Ｃクラス１２名、Ｄクラス９名、Ｅクラス８名で、その内代表２名。

「以上が、第一次作戦の結果報告です」
「ああ……しかしあのバカ共、たった２人でよくここまで出来たね。しかもＡクラスまで５人も」
「恐らくですが、条件を限定すれば１クラスは簡単に制圧できるで

しょうね」

撃破した暴走召喚獣の名簿を見て、呆れつつも感心する学園長。
高橋女史も、そのスコアに多少満足そうな表情を見せる。

「で、あのガキ共は？」
「久遠君も吉井君も、まだ意識を取り戻してはいません」
「その辺りは無理ないさね。あれを見ればね」

揃いもそろって、Ａクラス級のリンチともいえる猛攻を受けた以上、そのフィードバックで多々で済む訳がない。
増して明久は、フィードバックに慣れてるとは言え、腕輪での攻撃を受けているだけに尚更だった。

「……しかし暴走してたとは思えないほど、個人を狙ったかのような猛攻だったねえ」
「……見ていて痛々しい事この上ありませんでした」
「やれやれ……延期して貰う為の言い訳でも考えておくかね」

時は放課後、学会へのお披露目は明日の午後１：００
修理の時間を考慮した場合を考えると、タイムリミットは刻一刻と迫っていた。

所変わって、保健室。

「うっ……」
「あっ、気がついたアキ？」
「よかった……心配してたんですよ？　明久君」

明久が気がつくと、看病していた美波と瑞希が安著の声を挙げる。
そこで、何があったかを思い出した明久は……。

「うっ、うん。ありがとう……」
「……予想してたとは言え、やっぱりこうなるのね」
「……何だか強化合宿から、明久君の私達への評価は酷くなる一方です」

暗殺疑惑も手伝って、2人を畏怖の対象として完全に認識していた。
すぐにベッドから降りるや否や、2人から距離を取り始める。

「おう、目が覚めたか明久」
「光一！　大丈夫だった？」
「……お前と同じで、しばらく優子がトラウマになりそうだ。しかし、フィードバックがあんなにきついとは」

今までフィードバックが直接影響を受ける様な状況がなかった故に、その分のダメージがかなりきつかった。
というのが、光一の弁。

「なにはともあれ、目が覚めて良かったぞい。光一は不慣れなフィードバックのダメージ、しかも姉上の点数でのタコ殴りじゃからの」
「吉井君も、どういう訳かトドメが腕輪での攻撃だからね」
「……何故かアタシともども、本当にコントロール出来ないのか疑われたのが釈然としないけど」
「……いくらなんでも、暴走してるにしては不自然な事だから仕方ない」

元々3人して、明久や光一をそう言う目にあわせる印象がある。
だが疑われた優子達にしてみれば、不本意この上なかった。

「さて、寝起きですぐはきついだろうが、回復試験受けるぞ？　さっきババァ長に聞いたけど、学会へのお披露目とやらは明日の午後1時からしい」
「じゃあ、それまでに何とかしないと」
「ああ。ババァは最悪ドタキャンも考えてるだろうが、そんな事すれば評判は更にガタ落ちだ」
「最悪、ワシ等全員が転校という事になるじゃろうな」

事が事だけに、全員が深刻な表情となる。
特に主な原因となった3名も、流石に罪悪感が沸いてきた。

「でも、どうしようか？　敵側の召喚獣もまだたくさん居る訳だし、また消耗しきった処でさっきの布陣で来られたら……」
「確かに数が違い過ぎる上に、霧島達の点数もあんま削れなかったしな」
「それにワシの腕輪はランダムじゃ。次も光一の得意科目に当たるとは思えんし、明久が高得点を出せる科目は世界史や日本史じゃ。光一との融合召喚前提である以上戦力になるとは思えんぞい」

光一は日本史と世界史では珍回答を出す事は、強化合宿で知れ渡っていた。

「それなら明久限定でだが、いい方法があるぞ」

そして、視聴覚室にて。

「次お願いします！」

明久はわんこそばを食べるかのように、さらさらと問題を解いて行く。
その問題の内容は……。

「成程ね。アキでも解ける小学生レベルの問題なら、点が取れる訳ね？」
「光一は壊滅科目だと、小学生レベルですらも解けんからな」
「ご心配なく。停学期間が明け次第、しっかりと教育してあげます」
「うえっ！　テメ雄二！！」

光一は数学と物理の試験（こちらは普通の）を解答中。
こちらも物理は今の明久並にすらすらと解いていた

「良かったじゃないか光一、高橋女史につきっきりで指導してもらえんだぞ？」

と、にやにやとする雄二にむかっ腹が立った光一だが、或る人物を見て一言。

「なんだ、羨ましいのか？」
「そんなの当たり前に……はっ！」

恐る恐る振り向く雄二の視線の先には、黒いオーラに包まれた翔子。
その目はまるで血の色を思わせるかのように、紅く輝いている。

「光一！　テメ、謀りやがったな！？」
「……雄二、浮気は許さない」
「まっ待て！　鉄人と高橋女史だったらどう考えぎゃあああああ！！！」

断末魔に構う事なく、光一と明久は問題を解いて行く。

「さて、どうやって補習から逃げた物か」
「……西村先生が手を焼く理由が良く分かります」

そして、テスト終了

『Ｆクラス　久遠光一　物理５６５点　数学１６１点』
『Ｆクラス　吉井明久　総合科目８９２６点』

「寝起きだからあんま調子が出なかったな」
「それでも物理が教師並の点数取れてるのじゃから、すごいのう」
「それはさておき、これなら大丈夫だろ」

元々光一の物理の点は教師クラス。
そして明久も問題が問題だけに、高橋女史の総合を上回る点を出していた。

「そうだね。光一の方は僕との融合召喚獣の腕輪も使えるだろうし」
「そう言えばそうだな。多様は出来んが、さっきの様にはいかんだろ」
「問題は、明久が姫路や島田の、光一が木下の暴走召喚獣を見ても、平気かどうかって事だな」
「「うっ……」」

……見る人が見れば、情けないとも思うだろう。
しかし本人たちにしてみれば、死活問題ともいえる事だった。

「……私達、どんどん救い難い状況になってる気がします」
「……暗殺実行犯にトラウマって、ウチ等どんだけ酷い女と見られ

てるのよ？」
「……否定できない要素がたくさんあるとはいえ、いくらなんでも酷過ぎない？」
状況が状況だけに仕方ないかもしれないが、あまりにも理不尽な評価に流石にショックを受ける３人だった。
そして、行動開始！
「物理フィールドっと……アウェイクン！」
雄二の腕輪が、召喚フィールドを展開。
そこで、再度光一と明久が召喚獣を融合させ、明久はフィールドから離れる。
そして秀吉のフィールドに入り、ダブルを展開。
『Ｆクラス　久遠光一（＋吉井明久）　物理５６５点＋９１０点』
『Ｆクラス　吉井明久（＋久遠光一）　現代国語８７３点＋３６点』
「さて、行くぞ」
「うん！　早速きたみたい」
『３－Ａ　夏川俊平　物理４１２点』
ＶＳ
『２－Ｆ　久遠光一（＋吉井明久）　物理５６５点＋９１０点』
『３－Ａ　常村勇作　現代国語２３２点』
ＶＳ
『２－Ｆ　吉井明久（＋久遠光一）　現代国語８７３点＋３６点』

「あれ？　なんか見おぼえがある様な……誰だっけ？」
「もしかして、常夏コンビじゃないかな？　ほら、光一と秀吉に大会の準決勝で負けた」
「ああっ、あの時の坊主とモヒカンか。そう言えばいたなそんなの」
「ワシもすっかり忘れておったぞい」
４人はそれぞれの感想を口にした。

一方、３－Ａにて

「あいつらいい度胸してるじゃねえか！！」
「落ち着け夏川。今あいつらと騒動を起こしても面倒になるだけだ！」
「畜生！　暴走状態じゃなかったら！！」
画面の中では、光一の召喚獣がモヒカン頭の召喚獣を撃ち抜き、明久の召喚獣が坊主の召喚獣を斬り裂いた。

『なんだ、折角だから腕輪の機能を確かめればよかったな』
『でも光一、こんなのに腕輪なんてもったいないよ』
『そうじゃよ光一、ワシもこの２人には正直嫌悪しておるからの。腕輪などもったいないのじゃ』
『珍しいな。秀吉が罵倒するなんて』

「好き放題言いやがって！！」
「……嫌悪して……うっ……うぅっ……」
「おっ、おい、どうした常村！？」

そんな事も露知らず、４人は作戦を実行。

「そう言えば雄二、さっきからムッツリーニの姿が見えないが、何かやらせてるのか？」

「ん？　ああ、ちょっとな」

「そうか。じゃあ俺達は集中が出来るな」

『３－Ａ　堀田雅俊＆金田一真之介　物理３４３点＋３２１点
ＶＳ
『２－Ｆ　久遠光一（＋吉井明久）　物理５４５点＋８９９点』

「よし、腕輪はどんなかなっと？」

腕輪が輝くと同時に、召喚獣の姿が少しぶれた。

そして……。

「何！？」

次の瞬間、敵召喚獣を囲う数体の光一の召喚獣。

「これは……分身か？」

とりあえず、自身の召喚獣を操作し、敵召喚獣に撃ちだす。

その周りが一斉に撃ちだし、敵召喚獣の眉間が撃ち貫かれた。

「実体があるのはオリジナルだけか？」

「みたいだな」

光一は能力を気に言ったご様子。

「敵になったらと考えると、恐ろしい能力だ」
「まあ、明久とだからな」
「成程。発動条件が難しいからこそ、それほどの能力になったって事か。それなら納得が出来る」

自分の点数と明久の実力を考えても、否定する要素がどこにもなかった。

「さて、そろそろサーバールームだ」
「うん。こっちの準備は出来てるよ？」
「ああ。こっちもだ……あれ、出てこなかったな？」

ここまで来るのに、倒したのは2年女子と3年の召喚獣のみ。
その中に美波や瑞希、優子や愛子、翔子の召喚獣は来なかった。

「……サーバールームの中か？」
「かもね……行こう、光一」
「ああ」

通気口の蓋を外し、光一と明久の召喚獣はサーバールームへ。
そして、周りを見回す。

「えーっと……雄二のフィールドの方みたいだよ」
「ああ。えーっと……あっ、あった！」

光一の通信機器に、外れているケーブルが映し出された、

『ソレを繋いでおくれ』
「了解」

光一の召喚獣がそれに駆け寄り、それに手を伸ばそうと……

「危ない光一！」

「え？」

光一の召喚獣めがけて、大斧とランスが投げつけられた。

「うわっ！」

腹と肩にフィードバックが影響し、光一は膝をつく

『Ａクラス　霧島翔子＆木下優子＆工藤愛子　物理４１３点＆３８３点＆２９９点』

ＶＳ

『Ｆクラス　久遠光一（＋吉井明久）　物理４２０点＋６８０点』

「来たな。さっきの借りは返してやる！」

「待って！　今ダブルを解除するから、そっちも融合を解除して合流を……」

「待つのじゃ明久！」

『Ｆクラス　姫路瑞希＆島田美波　現代国語４３２点＆３４点』

ＶＳ

『Ｆクラス　吉井明久（＋久遠光一）　現代国語５２１点＋２４点』

「やっぱりここで来たね、姫路さんに美波」

「どうするのじゃ？　戦いながらの融合や同時召喚の解除は無理じゃぞい！」

「だったら……これしかないね、光一」

「ああ」

光一と明久は、互いの目を見て頷きあう。

「「ここで今、こいつらをぶっ倒すのみ！」」

第四十八問

問題　以下の問いに答えなさい

水泳の個人メドレーの種目を答えなさい

姫路瑞希の答え

『1．バタフライ　2．背泳ぎ　3．平泳ぎ　4．自由形』

教師のコメント

正解です。流石ですね、姫路さん

解答はあっていますが、姫路さんは実際に泳ぐのが苦手なようですね。

水泳は全身運動で心肺能力を鍛えることにも役立ちます。

苦手だからといって尻込みせず、積極的に水泳に参加しましょう

久遠光一の答え

『バタフライ、背泳ぎ、平泳ぎ、クロール』

教師のコメント

正しくは“バタフライ、背泳ぎ、平泳ぎ、自由形”なのですが、自由形で先の3つの泳法で泳ぐと失格となりますので、正解にしておきます。

吉井明久の答え

『アニソンメドレー、懐メロメドレー、鳩サブレー』

教師のコメント
鳩サブレーは先生も好きです

文月学園、試験召喚システム・サーバールーム。
その中で展開される2つの召喚フィールド内では、召喚獣による死闘が繰り広げられていた。

物理科目フィールドにて。

「3対1はやっぱきついな」
「学年でも指折りのヤツならなおさらだろ」

翔子、優子、愛子の召喚獣との接戦。
射撃に比べると錬度が劣る接近戦に持ち込まれ、じわじわと追い詰められていた。

「で、どうするんだ？」
「決まってるだろ」
多数対１の場合の鉄則、それは……
「まずは一番強い奴を叩く！」
『Ａクラス　霧島翔子　物理３９９点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一（＋吉井明久）　物理４０１点＋５０１点』
光一の召喚獣は真っ先に翔子の召喚獣に斬りかかった。
右手のガンブレードと日本刀がぶつかると同時に、左手のガンブレードが翔子の召喚獣を突き上げる。
「よし！」
そのまま突き上げたまま壁に突進しつつ、トリガーを何度も引き続ける。
そして、壁に叩きつけ……
「終わりだ！」
右のガンブレードで、翔子の召喚獣を一閃。
点数が無くなり、消滅していった。
「よし、次だ！」
既にこちらにとびかかってくる、優子と愛子の召喚獣。

ソレを迎え撃つべく、光一の召喚獣はガンブレードを構え、弾丸を撃ちだし応戦。

ただ、またもや優子の召喚獣がそれを耐えきり、光一の召喚獣に怒涛の攻撃を仕掛けて来る。

「だからどうして優子の召喚獣だけ行動がおかしいんだよ！？」

『知らないわよ！』

「本当にコントロールが出来ないんだろうな！？」

『失礼ね！　どうしてこうなってるのかこっちが聞きたい位よ！！』

ランスをかわしてもパンチやらキックやらが矢継ぎ早に飛んでくるため、防戦一方だった

防御にも点数は削られる為、徐々に点数が削られていく。

そこに愛子の召喚獣が、援護程度に攻撃……というか、援護程度しか出来ていない。

「ああもう！　やっぱり優子のから倒すべきだった！！」

その言葉に、約1名を除いて学園全員が頷いた。

「光一はまだいいよ！　こっちは2人してそうなんだから！！」

一方、現国フィールド

点数的には勝ってる筈なのに、何故か美波の召喚獣は点数から想像の出来ないスピードでの猛攻を。

瑞希の召喚獣も大剣を駆使して、まるで痛めつけるように明久の召喚獣に迫っていた。

「ぐあうっ！」

瑞希の召喚獣の大剣が明久の召喚獣をとらえ、胴をなぎ払い壁に叩きつけた。
そのフィードバックで、胃液が食道まで逆流する感覚が込み上げる明久。

「げほっ！」
「明久！」

『Ｆクラス　吉井明久（＋久遠光一）　現代国語３５１点＋１点』

よろよろと起き上る明久の召喚獣だが、そこへ美波の召喚獣がマウントポジションをとってパンチの嵐。

『明久君！　大丈夫ですか！？』
『アキ！　大丈夫！？』
「心配する位なら止めてよ！！」
『だから、違うって言ってるでしょ！？』

もはや暴走の所為だと、明久も光一も思っていなかった。

「……ある意味一番の被害者は、姫路と島田と姉上じゃな」
「……全くだ」

２人は同情するも、流石にマウントパンチをする美波の召喚獣を見ては否定が出来なかった。
そこへ瑞希の召喚獣が大剣を振り上げ、まるでギロチンを思わせるかのように首へと狙いを定める。

「くそっ！　ここまでか……！？」

明久の抵抗も空しく、振り下ろされようと……

『お姉さまーーーー！』

した時、明久と光一にとって聞きたくない声が。
それと同時に、サーバールーム内に召喚獣が１体展開される。

『たとえ召喚獣といえど、ブタに抱きつくなんて許せません！　抱くならこの私のを抱いてください！』

その召喚獣が美波の召喚獣に抱きつき、その体制を崩した事で明久の召喚獣は脱出成功。

「よし、美波の召喚獣が動けないなら今がチャンスだ！　御免、姫路さん！」
『ちょっ、誰か助けて！　清水さん、いい加減にして！』
『美春と呼んでください！』

振り下ろした隙を狙って、明久の召喚獣が突撃し一撃。
瑞希の召喚獣が吹き飛び、壁に叩きつけられる。

「ダブル解除！　光一！」
「ああ、融合解除！」

『Ｆクラス　久遠光一　物理４１０点』
『Ｆクラス　吉井明久　物理３１０点』

融合が解除されるなり光一の召喚獣は優子の召喚獣を殴り飛ばし、

ライフルを構えて弾丸を撃ちだす。
そして……

「“爆発”！」

腕輪を発動させ、愛子と優子の召喚獣諸共に吹き飛ばした。

「よし、明久！」
「うん！」

明久が今のうちにと、外れてるケーブルへと駈けだす。
そこへ……

「なっ！」

『Ｆクラス　姫路瑞希　物理３３２点』

瑞希の召喚獣が展開され、装備が悪魔の様な装飾へと禍々しく変貌していく。
剣が禍々しく変貌し、尻尾も黒く鋭利な武器を思わせる様相。

「……なんか、ヤバそうなんだけど？」
「よし、援護に……何ィっ！？」

優子も、それは同様だった。
まるでカラスを思わせる様な黒い翼を背に、禍々しい形に変貌したランス。
左手の小手が、禍々しい爪へと変わっていく。

「……どうやら、お互いにここが正念場みたいだな」

「うん……」

やむ負えず、光一と明久は融合と同時召喚の腕輪を起動。
改めて光一は優子と、明久は瑞希の召喚獣と対峙。

瑞希の召喚獣の尻尾が明久の、優子の召喚獣のワイヤー爪が光一の召喚獣に襲いかかり２人をとらえる。
瑞希と優子の召喚獣は思いきりぶん回して、２体を正面衝突。

「「ぐあっ！！」」

フィードバックの痛みで、２人は背中から倒れ込んだ。
その隙を逃さず、それぞれが大剣とランスで突き上げそのまま地面にたたきつけ、そして殴り付ける。

「ぐふっ！」
「ごぶっ！」
「光一！　明久！」

それぞれの召喚獣がガンブレードを杖に、よろよろと立ちあがる。

『Ａクラス　木下優子　物理３４５点
Ｆクラス　姫路瑞希　物理３１０点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一（＋吉井明久）　物理１９０点＋１９９点』

「あと……少しなのに」
『これ以上はもう無理です！　やめさせましょう！』

通信機器を通して、高橋女史の声が。

それに対し、学園長は何一つ答えない。

『生徒に無益な苦痛を与えるのは、教育者として……』

「まだだ！　まだ僕も光一も、点数は残ってる！」

高橋女史の言葉を遮る明久。

その言葉に、諦め等微塵も感じられない。

「まだ、勝負は終わってない……そうでしょ、光一？」

「明久……ああ、その通りだ！　まだ可能性は残ってる！」

『その点数差では勝ち目は……！』

「点数差がなんだ！」

高橋女史の言葉を、光一が遮った。

「その点数差があるあんたに、俺は勝ったんだ！」

「そうだよ！　光一の言う通り、点数が全てじゃ……点数？」

ふと、明久が何かを思いついたかのように、呟く。

「そうだ！」

「っ！　どうした明久？」

「姫路さん、木下さん、すぐに物理の回復試験を受けて！」

「回復試験！？　おい明久、一体……そうか！　姫路、優子！　すぐに受けてくれ！」

光一も意をくみ取ったのか、賛同した。

『正気ですか！？　今２人が点数をあげたら……』

「違う！　名前を書いて出せばいい！」

『名前を……っ！　わかりました、すぐに！』
『姫路さん、急ぐわよ！』

2人が意をくみ取ったのを確認すると、光一と明久はすぐに敵召喚獣を見据える。
それぞれの突進を、2本のガンブレードでそれぞれ食い止め、ギリギリと鍔迫り合い。
そのままの体勢で、時間稼ぎを始める。

「光一、大丈夫？」
「当然だ。明久もそうだろ？」
「うん……大丈夫」

光一と明久が、ゴツっと拳をぶつけあった。

『『採点、お願いします！』』

「「よし来たあ！！」」

明久の召喚獣が瑞希の召喚獣を蹴り飛ばし、突進。
そしてガンブレードを突き出し、瑞希の召喚獣と交差。

光一の召喚獣はガンブレードを手放し、相手の体勢が崩れた所で優子の召喚獣にパンチをぶち込む。
そのまま相対し、そのまま互いに同じタイミングで突進し、パンチが交差。

『姫路瑞希、木下優子、0点！』

その宣告と同時に、瑞希の召喚獣をガンブレードが

優子の召喚獣を光一の召喚獣の腕が打ち貫き、消滅していった。

第四十九問　召喚獣補完計画編　エピローグ

問題　次の薬品の化学式を答えなさい。

（１）水酸化ナトリウム水溶液
（２）塩酸
（３）アンモニア

姫路瑞希の答え
（１）ＮａＯＨ
（２）ＨＣｌ
（３）ＮＨ３

教師のコメント
正解です、簡単でしたね

久遠光一の答え
（１）Ｃ３Ｈ５（ＯＮＯ２）３
（２）Ｃ７Ｈ５Ｎ３Ｏ６
（３）ＮＨ４ＮＯ３

教師のコメント
知ってる化学式を並べただけだとわかる解答なのはともかく、何故全部爆発物の化学式なのですか

吉井明久の答え
（１）
（２）ＮａＯＨ

（3）ＨＣＬ
　　ＮＨ３

教師のコメント
珍しく正解なのに、回答欄がずれてました

優子と瑞希の撃破を経て、ケーブルの接続が完了。
そこで学園長が防犯システムの主導権を取り戻し、扉が開かれた。

「お疲れ様」
「ご苦労さん」

ゆっくりと出て来た召喚獣を、労うように手を差し伸べる明久と光一。
そこで、学園全体を覆っていたフィールドが解除されていき、召喚獣は消え去った。

「やれやれ、これで一安心だね」
「ああ……一先ずはな」
『さて、すぐに修理に入るとするかね』

そこで通信が入り、学園長はどこかへ連絡を。
そしてそれが終わり次第、光一が真っ先に確認すべき事があった。

「で、ババァ長」
『久遠君？』
「……学園長、アイツから連絡はありましたか？」
『今そっちに向かってるとのことだよ』
「そうですか」

光一は雄二に目配せをすると、雄二が頷く。
明久と秀吉だけが、ソレをみて疑問符を浮かべていた。

そして……

「吉井、久遠、まさかお前達を褒める日が来るとは思わなかった」

鉄人をはじめとする教師陣と、試験召喚システム開発技術者達のご到着。

「そう思うなら、補習を免除してくれると嬉しいんですが」
「それとこれとは話は別だ。まあ今回の功績をたたえ、お前達は特別に停学と課題を免除するそうだがな」

ソレを聞いて、多少だが４人は報われた様な顔をした。
自宅謹慎の上に山ほどの課題がある為、それらに関しては手を焼いていたのである。

「なにはともあれ、良くやってくれた」

フィードバックによる疲労とダメージで座り込んでる光一と明久の頭に、鉄人は手を置き乱暴に撫でまわす。

「……なんか、変な感じだな」

「うん……いつも怒鳴られてばかりだから、なんだか新鮮な感じというか」

だが、満更でもない感じの2人。

「さて、後は俺達の仕事だ」

という発言を受けて、周りの教師と開発メンバーたちが動きを見せる。

いざ修理にと……

「ちょっと待て！」

入ろうとしたところで、雄二が遮った。

「どうした坂本？」

「ちょっと腑に落ちない事があるんでな。それをハッキリさせるまで、ここに誰かを入れる訳にはいかない」

それを受けて、教師陣も開発陣もどよめく。

鉄人も雄二を止めようとした者の、その真剣そのものの顔を見て黙る事に。

「……どういう事だ？」

「まず、この騒ぎの根本からだ。この騒ぎは侵入者によるものだと聞いている」

「その通りだ」
「だが、おかしいと思わないか？　学会発表を控えたこの日に、しかも学園の心臓部ともいえるサーバールームに、誰にも気づかれず侵入者が入るなんて、幾らなんでも手際が良すぎる」
その通りだと、大半が頷いた。
そして、ある結論にたどり着く。
「坂本君は私達の中に、手引きした内通者がいるかもしれないと言うのですか！？」
「そうだ。ウチの学園の醜聞なんて、近隣の私立校にとっては格好の餌だ。当然、それを利用してのお小遣い稼ぎをしようなんて企む奴がいてもおかしくないだろ？」
「……そう言う事」
その声に、その場全員がその音源を見る。
そこには、１人の教師の背にスタンガンを構えるムッツリーニの姿が。
「土屋！　キサマ、何を……」
「証拠は揃ったのか？」
「……（コク）」
ムッツリーニがとＭＰ３プレイヤーと写真を取り出し、光一に投げ渡した。
光一はそれを再生する。
『……りま……た。では……はい』
多少音質の悪く、ノイズ交じりの声。

しかし、それが鮮明になっていき……

『ええ。このままいけば確実に学園長は失脚、文月学園は信用をなくすでしょう。では、礼金はいつも通りの口座によろしくお願いします』

ハッキリと、その教師の声でそう告げられた。

「……香川先生、これは一体どういう事ですかな？」

鉄人がずいっと前に出て、その教師に問いかける。

「でっ、でたらめです！」

「コレを見ても、そう言えるのか？」

光一が、ムッツリーニから渡された写真をつき付けた。

そこには、裏門で見知らぬ男を中に誘うその教師の姿が。

『さっき侵入者をとらえたと連絡があった。そいつの証言からも、間違いないね』

「……残念です。では、少々大人しくして貰います」

「くっ……サモン！」

追い詰められ、その教師はフィールドと共に召喚獣を展開。

ムッツリーニも流石に深追いはせず、さっさとその教師から離れた。

「あっ！　召喚フィールド！？」

「よりによって、物理かよ！？　くそっ、騒動後じゃなかったら！」

「吉井、久遠、下がっていろ！」

威風堂々と立ちふさがる鉄人。

「ちょっ、待った鉄人！　幾らあんたでも、教師クラスの召喚獣相手に生身は……」

「ふん、テストは既に受けてあるわ、バカ者が！　サモン！」

『補習教師　西村宗一　物理７２８点』

ＶＳ

『物理教師　香川義明　物理５４８点』

「「「「……は？」」」」

鉄人の召喚獣は、一方的に敵召喚獣を葬り去った。

その光景に、明久と光一、雄二と秀吉はあっけにとられる。

「うっ、？！？　鉄人って、あんなに頭いいの！？」

「まっ、マジか！？　高橋女史以外で、俺以上の点数出せる教師がいたなんて！？」

「あのヤロ、バケモンか！？」

「さっ、流石にこれは意外だったぞい」

その後、無意味にも駆け出し逃げようとしたが、鉄人の体力にかなう訳もなく捕縛。

問題は完全解決となり、試験召喚システムもお披露目には間に合うとのこと。

「ま、これで万事解決だな」

「そうだね。何だか今日は疲れちゃったよ」

「そうだな。さて、さっさと帰るか。予期せぬ停学明けだ」

「うむっ。今日はしっかりと休む事にしようかの」

これで、文月学園の危機は解決した

「明久君、ちょっとお話が……」

「アキ、今日はこれから……」

「ねえ光一、今日何だけど……」

サァァァッ……！　×　２　（光一と明久の血の気が引く音）

ダッ！　×　２　（光一と明久が必死で駆け出す音）

……２人の少年と３人の少女達との間に、大きな溝を遺して。

「ちょっ、待ってよアキ！　だから、あれは違うって言ってるでしょ！？」

「あれは違うんです！　私達は本当に酷い事をしようとした訳じゃないんです！！」

「まっ、待ってよ光一！」

「あの３人には悪いが、こりゃしばらくは面白くなりそうだな」

「今回は流石に両方に同情の余地があるから、何とも言えんぞい」

「……不運な事故」

「……雄二が観察処分者や融合召喚の腕輪持ちじゃなくてよかった」

「これなんだか、面白そうではあるけど大変そうだね」

一方学園長室において

「Ｆクラスの、それも問題児コンビにこんな大切な事を任せるだなんて、危険な賭けでしたが……」

「あたしは別に賭けだなんて思っちゃいないよ」
「は？」
「なんだい、あんたは自分が負けた理由がわかってないのかい？　少なくとも戦いの技術や点数じゃ、あの２人は測れやしないさね」
「……では、一体何なのですか？」
「ま、あんたにもそのうちわかるさね。バカとの付き合い方が」

そして、次の日。

「あーもう！　何でよりにも寄ってこのタイミングで！！」
「こっちの台詞だ！！」

光一は高橋女史の、明久と雄二は鉄人の補習から逃げ出して、たまたま鉢合わせ。
３人は２人の教師という追手から逃れるべく、校舎の廊下を疾風迅雷のごとく駆け回っていた。

「またんか吉井！　坂本！」
「久遠君、いい加減にして下さい！」

召喚フィールドが展開。
それと同時に高橋女史の召喚獣が展開され……。

「うあっ！」

あっさりと鞭で捕縛されてしまった。

「っ！　光一！？」
「あっ、バカ！」

それに気を取られ、鉄人に首根っこをつかまれた明久。
好機とみて2人を見捨て逃げ出す雄二も、鉄人の体力にかなわず捕まってしまう。

「全く、手間をかけさせるな！」
「では久遠君、戻りますよ」

と、そのまま捕縛された状態で、個別自習室へと連行されていく光一。
そして、鉄人に担がれてFクラスの教室へと連行される、明久と雄二。

「「「次は絶対逃げ切ってやる！」」」
「「その執念を補習に向けてください（んかバカ者ども）！」」

「……学園長、やはり私にはわかりません」

第五十問　間話

思わぬ停学免除により、明久、光一、雄二、秀吉、ムッツリーニは学園生活復帰。

学会へのお披露目は終了し、好評だったとは学園長の弁。
まあそれでも世間からの評判は悪い物の、少しは改善されただろうと多少嬉しそうにしていた。

「これでしばらくは静かになるじゃろ」
「お前ら2人が問題を起こさなかったらな」
「「お前もだババァ趣味の覗き魔！」」
「んだとコラァッ！！」

文月学園は、今日“は”平和だった。

Fクラス教室にて。

「このボロ教室も、人が居ないと静かなんだな」
「そうだね。ボロだから余計に寂しさがあるよ」
「……（コクコク）」

Fの場合、女子は2名で残り男子。
明久達5人が戻ったとしても、教室には7人しかいない。

「2人だけで少しさびしかったです」
「そうよね。特にFクラスはウチ等2人しかいないから、時々Aクラスに遊びに行ったりしてたわ」

とは、Ｆクラスの女子２人の弁。

「……そっそうなんだ」
「ねえアキ、何もしないから距離を取ろうとしないで」
「そうです。私達は何もしませんよ」
「……ごめん。雄二にそう言われてだまされた事が何度もあるから、信用が出来ない」

強化合宿での一夜の事と、召喚獣暴走事件での暴走召喚獣の異常行動。
それらにより、瑞希と美波に本能レベルで近寄れなくなった明久だった。

「２人も気の毒にな」
「……そう思うなら久遠、何とかしてくれない？　強化合宿の覗きで疑ったのは反省してるから」
「……お願いします。このまま明久君に暗殺実行犯だと思われ続けるなんて嫌です」
「……善処するとしか言えないな」

一応自分も暴走召喚獣の異常行動の被害者の為、あまり乗り気になれない光一。

「それにしても、ここって人が居ないと広く感じるよね」
「そうだな。こうして見ると、居心地は良い」
「……（コクコク）」

と、壁際の席に陣取り、そのまま壁に背を預ける雄二。
畳なので、殆ど寝っ転がるような体勢である。

「人が居ないと、の話だろ？　ここヤローばっかで息をするのもキツい上に、鉄人が担任だからな」
「光一はまだマシだろうが。１人だけ高橋女史のマンツーマン補習になりやがって！」
「妻帯者のくせして羨ましがるなよ」
「誰が妻帯者だこの負け犬野郎！！」
「「……（ガンのくれあい）」」

得意科目では模範的解答が出せるのに、壊滅科目（特に歴史関連）のテストでは珍回答を出す光一。
その為、小学生レベルからやり直した方が良いとのことで、個別指導にする事に。

ただし簡単に逃げられない様、彼を取り押さえられる人物と言う事で高橋女史が就く事に。

「落ち着くのじゃ２人とも。それより、もうすぐ解禁される試召戦争のプランを考えるべきじゃ」

試験召喚戦争は、負けたクラスには３ヶ月の宣戦布告禁止期間が課せられる。
これは負けたクラスが再度宣戦布告をして、泥沼化させないための措置である。

「……そうだな。雄二、また前みたいなヘマはするなよ。負ければみかん箱と莫蓙に逆戻りで、学園祭みたいな行事はこの先にはない。そうなれば、姫路は今度こそ転校してしまう」
「……わかっている。学力が全てじゃないという証明と、“俺の人生と自由を取り戻す”為にも！」

もう手遅れだと思うのだが、もう何も言わない事にした明久達だった。
自分達としてもAクラスの設備は欲しいし、一応やる気がないとことん無関心の雄二だけに尚更。

「となると、ワシ等は霧島の恋路を邪魔する立場という事じゃな。どうも気が進まんのう」
「だよね。馬に蹴られて三途の川って、流石に嫌だな」
「俺もだ。霧島も雄二との交際に必死なのは知ってるし、やりにくい事この上ない」
「俺の意思はどうでもいいのか！？」

明久と光一にしてみれば、どうでもよかった。
……が、一応試験召喚戦争にはそれぞれ目的がある為、やむ負えず同意。

明久は姫路瑞希の身体を気遣って、本来彼女に与えられるべき高度な設備を。
光一は相棒である明久の手伝いと、過激派らしく試召戦争という戦いへの渇望の為に。

「冗談だって。俺達にはそれぞれ試召戦争に対して目的があるんだし、それを見失ったりしないさ」
「そうだよ。雄二が心配しなくても、僕たちは手を抜いたりしないって」
「……なら良い」

若干不安は残る物の、ならばと雄二も頷いた。

「雄二も気合い入れろよ？　最悪設備のランクダウンを、そのまま

霧島に御持ち帰りでお召し上がりくださいって感じで売って回避するから、そのつもりで」
「成程、それなら僕達に被害は来ないね」
ソレを聞いて、雄二は全身から汗が噴き出した。
「あっ、明久に光一、お前ら友人を売る気か！？」
「え？　雄二お前、俺や明久を友人だと思ってたのか？」
「ふざけんな、お前らなんかを友人だと認める訳ない……あっ！」
殆ど条件反射で返してしまった雄二。
「じゃあ決定という事で、本題に入るぞ」
「そうだね。友達じゃないんなら、別にどうでもいいもんね」
「いや、決定するな！！」
「もうすぐ俺達の試験召喚戦争解禁が近いとはいえ、俺達以外の男子の停学明けにおける問題は山積みだ。覗き騒ぎの後遺症ともいえる事がな」
光一は合宿明けからずっと、そのことを懸念していた。
元々恨みを買っている事も知ってはいるが、覗き騒ぎともなれば女子たちはいい感情を持たない。
「じゃろうな。主犯の雄二とムッツリーニ、功労者の光一と明久は揃ってＦクラスじゃぞい」
「それに光一は評判が悪いからな。特にＥＣＢの代表に」
「お互い様だろ、主犯格が」
Ｅクラスの中林は召喚大会、Ｃクラスの小山は覗き騒動、Ｂクラスの根元は試験召喚戦争にて。

それぞれ、光一に苦渋を舐めさせられた経験がある。

「それなら、あまり心配はいらないんじゃない？　Ｅクラスでそういう話が出たらしいけど、ほぼ全員があんた達切り込み隊長コンビを、特に久遠を怖がってるらしいから」

「はい。Ｃクラスも私たち同様に解禁が近いですけど、大半が久遠君を怖がっていました」

という女子２人の進言に、成程と頷く雄二。

「じゃあ大丈夫だな。幾ら“覗き騒ぎの主犯であるＦクラスを粛正する”って名目があるとはいえ、光一と明久の切り込み隊長コンビの悪名や功績、持っている腕輪を考えれば、まともにやりあえるのはＡとＢクラスだけだ。それ以外でケンカ売ると言えば、清水位だろ」

「……あの迷惑女か」

「……何だか、複雑だな」

光一の融合召喚型の腕輪は、他者の召喚獣を自身の召喚獣と融合させ、１体の召喚獣とする。

教科によっては最強にも最弱にもなる光一だが、この腕輪でそれは解決できていた。

ただし、融合召喚獣限定でのルールが召喚大会後に制定。

相手によっては簡単に決着がついてしまう為、融合召喚獣による代表格への攻撃は禁止。

「となると、懸念すべきはＢクラスだけだな」

「Ｂクラスといえば、根元君だね？　でも個人的な仕返しだけで、クラスが動かせるかな？」

「確かにあいつは元から人望が皆無な上に、俺達との試召戦争じゃ卑怯な手を使っても俺たちに勝てなかった事があって、クラスでの立場は危うい事になったって聞いてる。それに覗き騒ぎの件もあるからBクラスでもう居場所はないだろうし、試召戦争を起こせる訳がない」

普通に考えればそうだろう。

だが、現状がキーワードとなれば、あるいはという可能性はあった。

「でも、そう簡単にいくかな？　皆光一を怖がってるらしいし」

「クソヤローの手腕次第では、試召戦争は実現するだろうな。向こうにしてみれば自分の恨みも晴らせる上に、Fクラスを完全に打倒する事で発言権を取り戻せるだろうから、望まない訳がない」

「それが出来なくても、光一を打倒すればそれだけで十分功績になるだろうしな」

教師の中でも別格である、高橋女史を打倒したと言う功績。

最近はそれが、光一の悪名をよりとどろかせている原動力でもあった。

「だとすると厄介だな。Bは文系が多いから、苦手科目で来られたら勝ち目がない」

「ムッツリーニ、Bへの警戒を頼めるか？」

「……（コク）」

ガラッ！

「よーし、席につけ」

「ま、その辺りはまた昼に考えるか」

「そうだな」

こうして、7人だけのFクラスの授業が始まった。

そして、昼休み。

「……雄二、お昼」

授業が終わって、弁当やパンを広げる中での来客。
その手には、2つの包みが握られていた。

「なんだ、愛妻弁当か。じゃあ雄二、しっかり楽しんで来い」
「断る！」
「じゃあ一緒に食うか。霧島はそれで良いか？」
「……雄二が一緒なら、どこでも良い」

雄二の抗議を聞き流しながら、光一は翔子を招き入れた。

「別に一緒に飯食う位良いだろ。恋人じゃなくても、友達でもやる位だし」
「お前は翔子の弁当がどれだけ危険かを知らんから……」
「……雄二、あーん」

そこで翔子が、お弁当から卵焼きをつまんで雄二の口元に運ぼうとする。
男の憧れである、あーんである……が。

「その前に翔子、黄色である筈の卵焼きが何故緑色なんだ？」
「……すりおろしたホウレン草を混ぜてみた。じゃあこっちの海老フライを」

「それだけじゃこんな不自然なまでに緑色にならないだろ！　それに海老フライがどうして衣がきつね色じゃなくて真っ赤なんだ！？」

翔子が持ってきた弁当は、何故かほぼすべてが不自然な色どりのおかずが満載だった。

その光景の傍らで、明久は総菜パンを、光一は鞄から包みを取り出す。

「あれ、今日は光一弁当なの？」

「ああ。ちょっと腕をふるってみた」

光一は過激派で知られているが、世話焼き気質でもある為結構家事などは得意なのである。

とあるズボラな優等生の身の回りとか。

「光一の料理は美味いぞい。家に遊びに来た時は、大抵腕をふるって貰っておるからの」

「え？　そうなんだ」

「……やっぱり久遠は侮れないわ」

「……私も、負けてられません！」

微かな言葉だったが、それはほぼ全員に戦慄を走らせた。

「ねえアキ、今日お弁当作って」

「私もです！　是非これを食べ」

ダッ！　（明久が駆け出す音）

ガラッ！　（明久が窓を開く音）

バッ！　（明久が窓から脱出する音）

「来たんだけど、良かったら……あっ、ちょっとアキ！　せめて最後まで言わせてよ！」
「てください！　……あっ、明久君！？　待ってください！」
2人が声をかけるや否や、明久はその場を脱出していった。
「明久も、本能レベルで2人を怖がっておるのう」
「あんな事が立て続けにあった訳だし、無理も……」
ガラッ！
「やっほー、久遠君達」
「ん？　よう工藤に……」
「ねえ光一、お昼」
ダッ！　（光一が駆け出す音）
バッ！　（光一が窓から飛び出す音）
シュッ！　ガキンッ！　（光一がカギ縄を投げ、屋上の柵にひっかけた音）
「一緒にどう？　って、ちょっと！」
「まるで忍者みたい」
優子が言葉を言い終える前に、光一は弁当を抱えてその場から逃げ去った。
「おーおー、完全に2人して天敵認識してやがるな」
「……何故2人して咄嗟の行動であんな事が出来るのじゃろうか？」
「……無理もない」
「……気の毒」

第五十一問　間話

「……全クラス、依然変わりなし」

7人だけのFクラスの教室にて。

覗きの主犯であるFクラスは、他のクラスの情報収集にいそしんでいた。

「点数補充は、僕達だけは完了はしたけど……」

「所詮は7人だけだ。この状態がいつまで持つかは全くわからん」

他のクラスは半分以上が女子に対し、Fは48人が男子。

そのうち5人が点数補充を終えてる状態。

「とはいえ、やはりワシは戦力にならぬのう」

「だったら俺や明久と一緒にいればいいさ。融合召喚には召喚者との相性もあるから、秀吉と明久の場合だと相性が良い」

「ふむっ、以前の試召戦争では大抵裏方じゃったから、そう言って貰えると嬉しいぞい」

パシャっ！

「テメッ！　またか!?」

「……ナイスショット」

秀吉と光一のツーショットは、一部では人気だった。

その所為で最近では、明久と秀吉の二股というジャンルも出始めていた。

「いい加減にしろ！　悪党だ過激派だ危険物だはどうでも良いが、変態だホモだは勘弁だ！」
「……売れ筋のトップクラス」
「お前の所為で妙な噂が最近立ってんだぞ！」
「……おかげで売れ行きはウナギ登り」

ムッツリ商会、それはムッツリーニ事土屋康太の隠し撮り写真商売である。
それだけではなく、手広く抱き枕カバーなども取り扱い中。

「絶対ムッツリ商会を潰してやる！」
「……そうはさせない」

光一はムッツリ商会謹製の品々に興味を持っていない為、迷惑でしかなかった。

「それはさておき、Ａクラス相手となると明久との融合召喚は必須になる」
「僕との？」
「俺の狙いの傾向がもう知られてるの知ってるだろ？」

光一が腕や足を先に狙う傾向にある事は、既に知られていた。
光一の速射もありＢクラス級なら知ってても無意味だが、Ａクラスの召喚獣ともなると反応速度も速く、よけられる事が多い。

「流石に現時点で手っ取り早くこれ以上早くとなると、観察処分者のフィードバックが必要になる」
「そうか……じゃあ明久とのコンビはやはり必須になるか。しかし、翔子相手には流石に無理だな」

融合召喚獣は試召戦争において、代表格への攻撃は禁止されている。

「それまでには対応できなくするさ」
「そうか。頼むぞ、切り込み隊長」

ガラッ！

「では、席についてください」

英語の遠藤教諭が入ってきて、授業開始。

そして、昼休みの屋上にて。

「……Ｂクラスの女子の点数」

情報収集に勤しむムッツリーニの、新たな情報。
現在最も懸念すべき、Ｂクラスの点数である。

「やっぱり総合科目だときついな」
「当然だろ。だが、ソレを何とかするのが俺の役目だ」

雄二はパシッと拳を手のひらに打ちこんだ。

「単科目だと、やっぱり皆僕の３、４倍は軽くあるね」
「けどそれを補って余りある操作技術があるだろ？　どんな攻撃だって、当たらなきゃ何でもない」

明久は観察処分者の利点である、召喚獣操作においての熟練度は学年１。

だから、Ａクラス相手でもあまり苦にはならない。

「雄二、総合はどうだった？」

「Ｂクラス相手なら、どうという事はない」

『坂本雄二　総合科目３１６７点』

Ａクラス試召戦争敗北以来、霧島翔子との交際返上の為勉学に励むようになった。

かつて小学生レベルのテストで５３点をとったバカの面影は、テストには既に存在しない。

「じゃ、恒例のあれと行くか」

「ああ」

秀吉と雄二が距離を取り、まず秀吉が腕輪を付けた腕を掲げる。

「アウェイクン！」

秀吉を中心にランダムで選ばれた数学フィールドが形成。

それを見て雄二は、フィールドを保健体育に設定。

「アウェイクン！」

そして、保健体育フィールドを形成し、光一とムッツリーニを招き入れる。

「さて……今日こそは仕留めてやるぞ、ムッツリーニ」

「……返り討ち」

『Ｆクラス　久遠光一　保健体育１２１点』
ＶＳ
『Ｆクラス　土屋康太　保健体育５６９点』

数学フィールドには、明久と瑞希と美波が。

「あの、明久君」
「ねえアキ」
「じゃっ、じゃあ秀吉、今日もやろうか！」
「心得た」

秀吉の召喚フィールド形成の腕輪は、科目がランダムになる代わりに自身も召喚が出来る。
その為、光一と融合召喚の相性がいい者同士でやる事に。

『Ｆクラス　木下秀吉　数学８７点』
ＶＳ
『Ｆクラス　吉井明久　数学８９点』

「……そして、ウチと瑞希ね」
「……いつまで誤解されたままでいればいいんでしょうか？」

『Ｆクラス　姫路瑞希　数学３９８点』
ＶＳ
『Ｆクラス　島田美波　数学１８７点』

「はてさて、俺たちだけが順調だが、どこまで出来るか……」

ただ１人炙れてると言うか、腕輪の特性上傍観に徹する坂本雄二。
ムッツリーニからの情報をまとめつつ、これからの事に頭を悩ませ

る。

「……この前の騒ぎと、光一の高橋女史打倒が牽制になってるとは言え、いつまで持つかな？」

Aクラスにて。

「どうだった？」

「やっぱりどこもかしこもで尻ごみはしてるけど、試召戦争の話で持ちきりだよ」

「となると、停学明けは暫くは荒れるわね……Aは、アタシ達が事情説明してるから静かだけど」

「知らない側からすれば、許せない事ではあるからね。特にCとEは代表が久遠君を嫌ってるから」

「もう、光一ったら……高橋先生に勝ったとはいえ、大丈夫かな？」

Cクラスにて。

「……全く忌々しいわ、久遠光一！！」

「でも代表、彼は高橋先生に勝つような人だよ？　私達じゃ勝てる訳ないよ」

「照準は手足が優先で、弱点科目は日本史と世界史と化学と古典！　それも四捨五入しても2桁にもならない学年どころか学園最低！！　これだけアイツの欠点がわかってるのに、どうして皆そう消極的なの！！？」

「狙いって、Aクラスの点数じゃないとよけきれないし、弱点科目だって融合召喚の腕輪があるから」

「キイィィイイッ！！」

Dクラスにて

「あのブタ共をこれ以上のさばらせてはいけません！　男子禁制の神聖なる場所を汚したその報いを、その身を持って知らしめてやるのです！！」

「けっけど……」

「今こそ立ち上がるんです！　覗き主犯のブタ共駆逐と、融合召喚の腕輪を美春の手にする為に！！」

「清水さん、使命と私欲が一緒に出てるよ？　でも切り込み隊長コンビが居る訳だし……」

「殺します……吉井明久と久遠光一、絶対に殺して見せます……殺します……コロします……コロコロコロコロ」

Eクラスにて。

「バカのくせに、バカのくせに！」

「でも、真正面からぶつかっても勝てないよ。特に代表、覗き騒ぎのとき現国で負けた訳だし……」

「それは言わないで！　久遠光一、絶対に許さない！！」

「でも、切り込み隊長コンビを相手にするには、私達じゃ……」

「くっ……ああもう！　あのモヤシ、ギッタンギッタンにした上でサラダにしてやりたい！！」

所々で不満が満ちていたが、どこもかしこもが大半尻込みしていた。

そして、放課後

「あら、西村先生もですか？」
「おおっ、高橋先生。そちらもまたですか？」
「ええ。まさか問題児１人の相手だけでも、ここまで大変だとは……」
「理解して貰えて何よりです」

ちらほらと下校する生徒が居る廊下、２人の男子を担ぐ鉄人と、１人の男子を連行する高橋女史。
その男子生徒の腕は後ろ手で、召喚獣の鞭で縛られていた。

「なんだ、お前らもまた捕まったのか？」
「明久のバカがドジ踏んでなけりゃ、逃げ切れたはずなんだ！」
「雄二が物音立てるから見つかったんだろ！　いつも僕に責任なすりつけるなこのクズ野郎！！」

今日も文月学園は、平和だった。

第五十二問　間話

文月学園の昼休み

ドバンッ！！

派手な音を立ててFクラスの戸が開かれ、まずは2人の少年が飛び出す。
それに続くのは、2人分の弁当の包みを持った3人の少女。

「明久君、待ってください！　ただ暴走時のお詫びがしたいだけッて言ってるじゃないですか！」
「ただ一緒にお弁当食べようって言ってるだけじゃない！　何もしないから待ってよ！」
「あの時の事は悪かったし、あれは誤解だって言ってるでしょ光一！」

姫路瑞希と島田美波、この2人の追撃者から必死で逃げ回る少年、吉井明久。
そして木下優子から逃げるのは、明久の相棒である久遠光一。

「なんだ、またか？　姫路たちも気の毒に」
「光一も明久も、完全に天敵認識しておるからのう。無理もないとは思うが」
「……（コク）」

雄二、秀吉、ムッツリーニの3人は、その様子を眺めた後に自分たちも食事に移る。
元々明久の不幸は日常茶飯事の為、さして助けようとも思っていな

い。

「あああもう！　姫路さんも美波も、そんなに僕を殺したいのかあっ！？」

「明久、今は無駄口叩いてないで走れ！」

2人にしてみれば命の危険に他ならず、まるで鉄人に追われるときの様な勢い。

そこへ、それを遮る者が。

「げっ！　清水美春」

「ここであったが１００年目！　今日という今日は、吉井明久の首とその腕輪を美春の手に！」

「いい加減学習ってモンをしろ！　だから島田に嫌われるんだよ！！」

「それもこれも全部貴方達の所為です！」

「全部自業自得だろうが！　まあいい、こっちも今日という今日は引導を渡してやる！」

両手に文房具（殺傷力あり）を構える美春に対し、光一もエアガンとスタンガンを構える。

「貴方達、何をやっているんですか！？」

そこへ、英語の遠藤教諭が通りかかる。

些細なことなら見逃してくれる寛大な性格で、光一や明久達は重宝していた。

「遠藤先生、模擬試召戦争の許可をください！」

「お願いします。このブタ野郎には鉄槌を与えなければ気が済みま

せん！！」
「だったら、私たちも参加させて貰うわよ！」
そこに割り込んできたのは、Ｃクラス代表小山とＥクラス代表中林。
そしてそれに続く、光一と明久に敵意を向ける各クラスの試召戦争開戦派の女子連合。
「覗き騒ぎの主犯、Ｆクラスの切り込み隊長コンビ。あんた達に引導を渡す為に模擬試召戦争を申し込むわ！」
「ちょっと待て！　俺達は功労者ではあっても、主犯格じゃない！」
「同じよ！　戦力なら、引導を渡す理由は十分にあるわ！」
敵意がギラギラ光らせる代表格２名を見て、光一はハァッとため息。
元々の行動と彼女たちの性格を考えて、説得は無理だなと悟った。
「まあいいや。幸い良くてＢみたいだし、今居るのは遠藤先生だ。英語なら融合召喚なしでも充分だろ」
「Ｆクラスのクズのくせに、舐めてくれるわね！」
「そのクズにやられたからって、大勢率いるクズ以下にだけは言われたくない」
ギリギリと歯軋りをさせて睨みつける代表格２名。
「言ってくれるわね！　もう許さない！！　木下さん、姫路さん、島田さん、やるわよ！」
「え？　ちょっと待ちなさいよ中林さん！　どうしてアタシ達まで！？」
「やっぱりか……そんなに俺が嫌いなら他人のふりしろよ！」
光一がそれを聞いて、優子に対して戦闘態勢を取った。

そして明久の方も……。

「やっぱり姫路さん達は僕達の敵か！」

「ちっ違います！　私達はそんなつもりはありません！　信じてください！」

「そっそうよアキ！　ウチ達は……」

「さあ観念しなさいブタ野郎！　さあお姉さま、私達の愛でその存在諸共に消し去ってやりましょう！」

「ちょっ、美春!?」

美春の所為で、溝が余計に深まった。

「先生、召喚許可を！」

「出来ません」

その言葉を受けて、召喚を開始しようとして……耳を疑った。

「は？　どういう事です？」

「これから話す所だったのですが、これから試験召喚システムの大規模メンテをするそうなので」

そこでふと思い出すのは、この前の暴走騒動。

学会へのお披露目は終わった物の、偶然の要素も組み込まれているシステムでもある為、念入りにメンテが行われる事となった。

「大規模メンテ？　この前の騒動の後遺症か何かですか？」

「さあ？　詳しくは知らされてませんが、そうではないかと」

そこで光一は思案顔になり、ふと何かを閃いた。

「じゃあ明久、早速聞きに行くぞ」
「そうだね。試験召喚システムは僕たちにとっても重要なものだから、何かあったなら知る必要があるよね」
「そういう事なら、俺も行くぞ」

そこに、雄二がやってきた。
実は雄二は、あれから騒動を聞き付けてこっそり見に来ていた。

「それじゃ、思い立ったが吉日、善は急げって事で」

明久、光一、雄二は集団から抜け出して、一路学園長室へ。

「あっ！　どさくさにまぎれて逃げたわよ！！」
「光一！　気付かれたよ！」
「ええい、走れ明久！　学園長室に逃げ込めばこっちのモンだ！」

ダッシュで階段を駆け下り始めた。
それに続く様に、女子の集団は3人を追い始める。

「待ちなさいこの核弾頭トリオ！」
「何で俺までこんな危険人物どもと一緒にされるんだ！？」
「「黙れこのババァ趣味の覗き魔が！！」」

そして、学園長室にて。

ドバンッ！　バタン！

「なっ、何事だい！？」

端末を操作していた学園長が、突然に轟音に顔を向ける。
そこには扉の前で息を切らせる、例の問題児3人組の姿が。

「……またあんた達かい。今度は何の騒ぎを起こした？」
「僕達の顔を見るなり云う事はですか？」
「仕方ないだろ、学園デストロイヤーズがそろい踏みなんだ。ババァだって警戒するに決まってるだろ」
「他人事のように言ってんじゃねえよ、覗き主犯が！」

切らした息を整えると、ふと明久が扉に目を向ける。
外では追手がどよどよとしている物の、一向に入ってくる気配がない。

「ねえ、鍵かけなくて大丈夫？」
「いらないだろ。場所が場所だけに、突入なんて出来る訳がない」
「そうだぞ明久、学園長室に怒鳴りこむなんて非常識な奴がいると思うか？」
「アタシの目の前に居る3人のクソガキども以外には、今まで1人として居ないさね」

学園長のツッコミを軽く流して、3人は自身の目的を思いだす。
そしてつかつかと歩み寄り、雄二がバンとテーブルに手をついた。

「んで、大規模なメンテやるって言うのはどういう事なんだ、学え……ババァ」
「教えてください、学え……ババァ長」
「さっさと言え、ババ……クソババァ長」
「……どうしてアンタたちは、アタシを素直に学園長と呼べないのかねぇ？　後そこの犯罪者臭いクソジャリ、お前はより酷い呼び名を勝手につけるんじゃないよ！」

3人して問い詰め始めるや否や、それに対し学園長は呆れるように溜息をつく。

「そんな事より、試験召喚システムの異常があるって事は、文月学園の存続にもかかわる事だろ？　気にならないという方がおかしい」

「そんな大層な事じゃないさ。多少の不具合は生じた物の、それももう改善はされてるし、暴走時のデータが取れたからもうあんな事はない筈さね」

科学とオカルトと偶然の要素が混ざり合ってのシステムが、試験召喚システムである。

まだ試作品も同然のシステムの為、こういった暴走時のデータもありがたい物なのだろう。

「ただね、アンタ達の所為で下がった評判の事もあるから、システムの調整は万全を期さないといけないのさ」

「だそうだ、反省しろ明久に光一」

「お前もだ！　学年全体の覗きの主犯が偉そうに言うな！」

「学園長、少なくとも僕たちは自覚してる分、雄二なんかよりずっとマシです！」

「……そうみたいだね」

いい加減、この3人の漫才じみたやり取りにも慣れて来た学園長だった。

「ところで、システムはちゃんと復旧するのか？」

「ああ。まあ元々がこの前の暴走騒動のちょっとしたエラーが原因だからね。そう長くはかからないさ」

「そうか」

と、納得したように頷く3人。

「ただ、しばらく試召戦争といった大規模な事は厳禁だね。そもそもが学会へのお披露目に備えての、その場しのぎの応急処置状態なんだ」

「あー、ひやひやしたって鉄人や高橋女史に聞いたな」

「だから、しばらくは休止させて完全な修理を……と思ってるのに、またろくでもない事が起ころうとしてるって話を聞いてねえ」

それは流石に、3人は覚えがあり過ぎた。

覗きの一件による、私怨目的の試召戦争を仕掛けようと言う各クラスの動きである。

「俺達ばっかが悪い訳じゃないっての。大体……ん？」

ふと、足元に1枚の種類がある事に気付いた光一。

「なんだよこれ？」

「ああ、それかい？　学園のイメージアップ戦略の書類さね」

「涙ぐましいな」

「あんた達がどんどん評判を下げてくれるからねえ、コッチだって苦労してるさ」

ソレを覗き見る雄二が、ふと何かを思いついたような顔をする。

「おいババァ、調整はいつ終わる？」

「男子の停学明けには終わるさね」

「そうか。じゃあ調整が終わり次第、声をかけてくれ」

「？　構わないが、何をするつもりさね？」

「イメージアップを兼ねた、ちょっとしたイベントさ。さて明久、光一、そろそろ授業だ。戻るぞ」

それに頷くと、3人は外へ向かう。

ソレを見て、学園長は一言。

「……何故あんた達は出ていくと言ってから、そろいもそろって窓に向かえるさね？」

「そこは大して問題じゃありません」

「それじゃババァ、調整しっかり頼むぞ」

「それでは、失礼しました」

窓がひらかれ、3人は出ていくと同時に閉められた。

その次の日。

「……学園長。コレはなんですか？」

「そう非難がましい目をするんじゃないよ西村先生。ちょっとシステムの調整に失敗しただけじゃないか」

「……これのどこがちょっとですか？」

「ちょっと見てくれが悪いだけさね」

「ほほぅ。そうですか」

「ああそうさ」

「「……」」

「……もうすぐ、夏、だねぇ」

「学園長、遠い目をしても無駄です」

「はいはい、わかってるよ。それじゃ、あのクソジャリ共に気付かれる前にさっさと……」

ドバンッ！

「おいババァ！　これは一体……」

「ババァ長、召喚獣が……」

「クソババァ長、しっかりと説明……」

「「「げっ！　鉄人！？」」」

「貴様等、無断入室の上に学園長をババァよばわりか？　いい度胸だな」

第五十三問　オカルト編　プロローグ

特別企画　バカと過激派と美少女トリオの実際にあった怖い話紹介。

「というわけで、ここでは僕、吉井明久と」
「この俺、久遠光一」
「並びにこのワシ、木下秀吉を含めた3人が、皆から寄せられた“実際にあった怖い話”を紹介させていただく」
「胡散臭い企画だな」
「そういう事は思ってても口に出さないのが礼儀だよ光一」
「明久よ、そのセリフで本音がばれておるぞ。それでは明久、最初のメールを紹介してくれ」
「了解。最初はＨＮ“オレはシブヤ最強のＡ－Ｂｏｙ”さんからのメールです」
「色々とツッコミ所と言いたい事があるが、とりあえずＢ－Ｂｏｙを名乗るか場所をアキバに変えるか、どっちかにしろ」
「えっと……メールの文章が何だかヒップホップ調なんだけど。やっぱりそれっぽく読んだ方が良いかな？」
「？　良くわからんが、そうした方が良いんじゃないか？」
「わかった。それじゃいくよ……“Ｙｅａｈ！　オレはシブヤ最強のＡ－Ｂｏｙ！　常に進むぜ栄光に！　あまり行かないぜ予備校に！”」
「栄光に向かって進みたいのなら、予備校をサボるでない」
「“オレのｔｈｉｓを聞け！　そして振り向け！”」
「ｔｈｉｓとｄｉｓを間違えるな。予備校をサボるからそういう事になるんだ」
「“誰の言う事も聞きゃしねぇ！　泣かせた女は数知れねぇ！”」
「泣いた女は、おそらくお主の母上じゃな」
「“オレのラップ、音高く響かせ！　近所のジャップ、恐怖で叫ば

せ！”」
「ん？　ラップ……？　ああ、そういう事か。明久、そのメールはもう読まなくていいぞ」
「“恐れるヤツぁマジ”……え？　良いの？　怖い話がまだ出てきてないけど？」
「そうじゃぞ光一よ」
「そのメールにラップ音とラップの違いを書いて返信してやれ」
「……ああ、そういう事じゃな？」
「へ？　……あ、そっか……読まなきゃよかったね、このメール」
「……俺も……なんというか、自分が悪くもないのに妙に申し訳ない気分だ」
「……そうじゃな」

事の発端は、雄二と秀吉の腕輪によるフィールドでの、朝一番の召喚獣操作訓練から。

「ねえ、大丈夫かな？」

「大丈夫大丈夫。腕輪は俺達のなんだし、使えなかったら使えないで良いさ」
「そうだ。さて、始めるか……アウェイクン！」
「アウェイクン！」

まずは雄二の保健体育フィールド。
続いて秀吉が、ランダムで現代国語のフィールドを展開。

「それじゃ、サモン！」

真っ先に秀吉のフィールドに入った明久が、召喚獣を呼びだす。
そして……

「え？」

現れた召喚獣に、全員が目を疑った。
いつもなら学ランに木刀と言った装備の、デフォルメされた明久。

その筈なのに、白銀の甲冑に身を包んだ、一振りの大剣を携えた騎士が姿を現した。
それもデフォルメではなく、殆ど召喚者と変わらない姿と大きさで。

「おいおい……明久のくせに、妙に贅沢な装備じゃないか？　それに随分とでかいな。試召戦争が本物の戦争みたいになりそうじゃないか」
「そうじゃな。これならば、本物の人間とさして変わらんからの」
「けど、所詮は明久だな。こんなブサイクじゃ、甲冑に着られてるもいい所だ」
「あ痛っ！」

パコン、と雄二が明久の召喚獣の頭を小突いた。
すると、その叩かれた頭は首から離れ、ゆっくりと重力に従って地面に落下。
胴体から離れた首が転がり、何度も回転した後に動きを止めた。

「きゃぁぁぁあああーっ！？」
「えぇぇっ！？　な、何コレ！？　僕の召喚獣がいきなりお茶の間にお見せ出来ない姿になってるんだけど！？」
「ん？　ああ、すまん。そんなに強く叩いたつもりはなかったんだが……待ってろ、今ホチキス持ってくる」
「いや、そういう問題じゃないだろ。あれ？」

ふと、召喚獣を見ると一向に消える様子を見せない。
戦闘不能になったら、さっさと消滅してしまう筈のそれは未だに顕在していた。

「明久、ちょっと召喚獣を動かしてみろ」
「え？　あっ、戦闘不能って訳じゃないみたいだね」
「どうやら首は外れる物の、戦闘不能という訳ではない様じゃの」
「だろうな。ちょっと俺のも試してみよう。サモン！」

ドンっ！　（死神登場）

「これは……死神か？」

その手に握られるは、命を刈り取ると言うにふさわしい大きく禍々しい刃の大鎌。
そして全身を黒いマントでつつみ、その背を巨大な掌が掴んで居る様な様相。

「背の巨大ゲンコツは操作できるみたいだ」
「しかも光一らしく、鎌の刃がついてない方がショットガンになってる」

ふと見てみると、確かに鎌はショットガンにもなっていた。
ソレを見て、光一は少し満足げに頷く。

「うーん……これ多分だけど、試験召喚システムって確か、科学技術とオカルトと偶然で成り立ってる訳だろ？　だから、多分調整に失敗でもしてオカルト的な要素が色濃く出てるんだと思う」
「成程な。じゃあ今呼びだされる召喚獣は、妖怪の類になってるって事か
「妖怪？　……そっか。じゃあ僕のはデュラハンか。でもどういうチョイスなんだろ？」

日本ではなじみのない妖怪だけに、明久も光一も首を傾げる。

「召喚者の本質や特徴が影響してるんじゃないか？　光一が死神、明久がデュラハンだと言うのを考えれば、納得は出来る」
「じゃあ僕の場合、騎士道精神が……」
「そんな訳がないじゃろ。頭がない、つまりバカという方が妥当じゃ」

試験召喚システムにまで“バカ”認定された明久は、どこか遠い目をしていた。

「んで、俺はやっぱり“狙った獲物を外さない”ってところか？」
「いや、“残虐”じゃないか？　お前気に入らない相手と戦う時、なぶる事があるだろ」

Eクラスの中林、Cクラスの小山と戦った時の事を思い出し、雄二がふとそう言った。
それは流石に否定が出来ず、光一が不機嫌そうに雄二を睨みつける

「とうとう試験召喚システムにまで……けどそれなら秀吉だって、座敷童とかの可愛い召喚獣が出てくるに決まってる！」
「明久よ、それは仕返しのつもりかの？　それ以上にワシの本質や特徴といえば、演劇にきまっておるのじゃ。妖怪ではないが、オペラ座の怪人等が妥当じゃろ。どれ、サモン！」

ポンっ！　（猫又登場）

「出たな、明久の予告通りに可愛い召喚獣が」
「とうとうワシは……明久よ、先程はわるかったの」
「わかってくれればいいよ。それより僕も言い過ぎたから、ごめん」

同じ試験召喚システムにぞんざいに扱われた者同士、理解が出来たご様子。

「……時に光一、お前はどう思ってるんだ？」
「……本気だと言うなら、俺に敵意を向けるな以外に何も言わないよ」

瑞希に美波、久保と大抵が光一を煙たがっているだけに、心からそう思っていた。

「ううっ……木下ってば、ウチ等が誤解で敬遠されてる間に！」
「美波ちゃん！　こうなったら、木下君よりも可愛い召喚獣を出して挽回しましょう！　サモン！」

……ボンッ！　（サキュバス登場）

「きゃぁあああっ！」

「くぺっ！」

瑞希の召喚獣が明らかになった途端、明久は首を１８０度まわされた。

そして急いでフィールドから大急ぎで脱出し、召喚獣の姿が消えたのを確認すると速足で戻る。

「おーい明久、生きてるか？」

「あっ！　あああああっ！　あっ、明久君！？」

「……姫路、１つ聞きたいんだが、本当に誤解なのか？」

「誤解です！　お願いですから、久遠君までそんな誤解を持たないでください！」

また誤解が（光一含めて）深まった瞬間だった。

「で、どういうチョイスなんだろ？」

「胸がでかいってことじゃないのか？」

「うわあああああん！」

雄二が何のためらいもなく言ってのけた。

「いや、サキュバスだから……“大胆”じゃないか？　時々姫路って、とんでもない事を天然で言うし」

「そう言えば、公園でも明久を押し倒しておったの」

「ちっ違います！　あ、あれはその……」

真っ赤になって恥ずかしそうにうつむく瑞希。

ソレを見て、美波が得意そうに笑みを浮かべた。

「じゃあ次は島田か？　戦乙女や雪女みたいなのが出てきたりして」

「あー、確かに美波って割と好戦的だからね。そう言った戦闘タイプの可愛いのが出てきそう」

「じゃあアキ、楽しみにしてなさい……サモン！」

……ゴゴゴゴゴ！　（ぬりかべ登場）

「……さて、ムッツリーニはどうなんだ？」

「……そうだね、呼んでみてよ」

「……サモン」

ムッツリーニの近くに、血色の悪いマント姿の少年が現れた。

その姿から察するに、ヴァンパイア。

「成程、確かにいつも血を欲してるイメージがあるからな」

「若い女が好きという点も酷似してるよね」

「ねえアキ……」

目をそらしてきた現実から、催促が来たらしい。

「なっ、何かな？」

「……この召喚獣、ウチに何を言いたいのかしらね？」

「……まあ、必ずしも本質や特徴が現れるなんて事はないって、証明にはなったな」

「そっそうだね。だって、ぬりかべと美波に共通点なんて……ないよね」

光一のフォローに感謝する明久だった。

「で、雄二はどうなのかな？」
「雄二の場合、鬼とかジェイソンとか、そんなじゃないか？」
「そうだね。光一が死神だったんだから、雄二だってきっとそんなところだよね」

ついでだが、明久は鬼が出てくると予想していた。
雄二が頷き、フィールドを解除すると秀吉の召喚フィールドへ。

「サモン！」

雄二の呼び声に答え、現れる召喚獣。
鍛え上げられた肉体を露わにした、下にズボンをはいてるだけの姿。
そして……。

「また手ぶらじゃないかぁー！」

どうやら今回も、ゲンコツという攻撃方法らしい。

「で、一体何の妖怪なんだこれは？　ズボンだけっていう、今までより退化してる装備なのはともかくとして、これじゃ暑苦しいだけの原始人だ」
「そうだね。それだけで妖怪ッて感じがするよ」
「おい光一、明久、ちょっとツラ貸せや」
「まあまあ落ち着くのじゃ」

そこで、雄二の召喚獣がぶるぶると身ぶるいを始めた。
その口が大きく裂け、全身からすごい勢いで毛が生えてくる。

「「きゃあああああーっ！！」」

「あー、そういう事か。こりゃ狼男だ。じゃあ雄二の特徴は野性だな」
「でっでも、満月でもないのに変身って、おかしくないですか？」
「それはあれじゃないか？」
召喚獣の目線を辿ると、そこには未だほったらかしの明久の召喚獣の首が転がっていた。
「さて、あらかたの検証は済んだ事だし、学園長室に行くぞ」
「そうだね」
そして、今に至る。
聞きに来た3人は、先程の無礼の罰を受けて、頭に大きなこぶができていた。
「で、復旧するんですか？　幾らなんでもこれじゃ、妖怪大戦争になってしまいますよ？」
「はぁ？　復旧？　何を言っているんだい、クソジャリども。それだとまるで召喚システムに欠陥があるみたいじゃないか」
「さっきクソジャリ共にバレる前にって会話が聞こえたんだが？」
「いいや、これはあれさ。ちょっとした遊び心さね」
通販番組の外人みたいに首を振る学園長。
3人の後ろでは、鉄人が呆れた様にそれを見ている。
「遊び心？」
「そうさね、もうすぐ夏だから、肝試しにはもってこいの季節が近いじゃないか」
「つまり、その為に召喚獣を妖怪仕様にカスタマイズしたと言いた

い訳ですか？」
「その通りさね。今日あたりサプライズとして知らせようと思ってたんだよ。さっきの会話はそれさね」
つじつまは合っていた為、一応は3人は頷いた。
「そういう事なら、お言葉に甘えさせて貰うか。どうやら“調整失敗”ってわけじゃなさそうなんだし」
「そうだな。もし失敗だとしたら、また文月学園のイメージが傷つくだろうし」
「……お前達は」
鉄人が呆れたように2人を見ている。
元々叩かれてる以上、変な世論が出回る前の打開策である。
ここにきてのシステムの不調など、マイナス要素にしかならない。
「じゃあ早速肝試しの企画をまとめるか。召喚獣らしく、点数を使っての勝負を盛り込んだ企画も含めて」
「そうだな。点数勝負があるんなら、私怨目的の試験召喚戦争も多少は緩和するだろうし」
「でも、本格的なのは来週からになりそうじゃないかな？　男手は僕達しかいない訳だし」
「そういう事は教室でやりなクソジャリ共」
「へーい」
今日は追われてる訳ではない為、3人ともきちんとドアから出て行った。
ソレを見送り、一息つく学園長。

「ケガの功名だね。あいつらの提案次第で、私怨目的の試召戦争が避けられるかもしれないとは、幸いだよ」
「でしょうな。ただでさえあの3人の所為で叩かれているのですから、これ以上は避けたいところでしょう」
「かといって、表立ってあのバカ共をかばったりも出来ないからねえ……ん？　そうさね。朝礼が終わったら、恒例のイメージアップ戦略の職員会議と行こうじゃないか」
「はい」

第五十四問

特別企画　バカと過激派と美少女トリオの実際にあった怖い話紹介。

「それじゃ、次のメール。ＨＮ“悩める弟”さんからです」
「今度はきちんと怖い話だと良いがの」
“はじめまして御三方。突然ですが僕の怖い実体験をお話します”」
「おお、普通の出だしだな。はじめまして」
“実は僕には兄がいます。真面目で勉強のできる自慢の兄です”」
「ふむ、それは立派な兄上じゃの」
“所がその兄が、学校の合宿から帰って以来急に人が変わってしまいました」
「変わった？　憑き物とか、そういう類か？」
“何故か妙にはればれとした顔で『学校１のバカと称される男友達』について、熱く語ってくるのです”」
「……は？」
“そして夜になると、『学校１の過激派と称される男友達』の名前を、まるで呪いをかける様に叫ぶ恐ろしい声が部屋から響き渡ってきます”」
「……まさか」
“あまりに様子がおかしいので、怖くなってこっそりと部屋をチェックして見たのですが”」
「あっ、ああ……」
“同い年位の２人の男の写真が１人ずつ机の引き出しに入ってて、その内１枚が惨く切り刻まれてました”」
「「……」」
“それ以来、僕は怖くて兄の顔をまっすぐ見られません”」
「「……」」

「“きっと兄は、合宿で何か恐ろしい世界へ足を踏み入れてしまったのだと思います”」
「「……」」
「以上、ＨＮ久保義光……じゃなくて、“悩める弟”さんからのメールでした」
「……どうして明久関連でさえ、秀吉以外皆俺に敵意を向けるんだよ？」
「なっ、何故ワシを出すのじゃ！？」
「心配するな、お前が本気だっていうなら応援してやるから、お前だけは敵意を向けてくれるなよ？」
「だから違うのじゃ！！」
「相変わらず仲が良いね、光一と秀吉は」

「よし、この案をうまくまとめれば、試召戦争騒動は回避できそうだ」
「その代り、個人での模擬戦争は避けれないみたいだがな……」
「と言う訳で、頑張れ光一」

学園長により、召喚獣の仕様の変更のお知らせ。
それと同時に、妖怪仕様の場合では負担が大きい為に試験召喚戦争は暫く禁止。
ただし、個人レベルでの模擬試験召喚は許可。

「俺かよ……確かに雄二なんか倒しても自慢にゃならんのはわかるが、他人事みたいに扱うなよ！」
「他人事だからな」

元はと言えば、雄二が（正確には清水が）原因なのにと、内心苛ついた光一。
そこで、ポケットに手を入れて或る物を操作。

「まあそれは良いとしても、まさか霧島からババァに鞍替えしようとするなんてな」
「明久やお前じゃあるまいし、ババァに欲情なんてするか！　大体翔子を出すんじゃねえ！」
「バケモノ趣味はねえ！！　それよりも雄二、霧島になびかないって事はどっちかと言うとババァみたいだな」
「引き合いに出す時点で間違いだ！　ババァもそうだが、翔子なんざに興味はねえ！」
「……詳しく聞かせて」

そこには、黒いオーラを放ちながら手に携帯を持つ翔子の姿。
それに合わせて、ポケットからゆっくりと携帯を取り出し、雄二に見せる光一。

「テメッ！　またハメやがったな！？」
「うるさい。死なば諸共だ」
「まっ、まあ待て！　一先ず落ち着いてだな？」

雄二の断末魔を聞いてから、光一は窓際の席（逃走を考慮して）に陣取った。

「さて、どうしたものかな？」

学園１の過激派、危険人物ランキング１位、召喚大会準優勝、学園破壊魔、高橋女史を打倒した男。
それらの悪名とそれに見合う功績をあげ、嫌悪と畏怖の対象となっている事はよく理解はしていた。

「おい久遠、学園長からの伝言だ。企画がまとまり次第、すぐ報告をとの事だ」
「え？　ああ、わかりました。けど、時間かかりますよ？　明久はこういうの向かないし、雄二はああだし……」

ガラッ！

「久遠光一！　Ｅクラス代表中林宏美、アンタに模擬試召戦争を申し込むわ！」

……が、正直迷惑もしていた。

「俺はこうですからね」
「わかった。学園長にはそう伝えておこう」

覗き騒動以来、光一を恐れつつも嫌悪する女子は数多い。
Ｅクラス代表の中林もそうであり、アンチ久遠派と呼ばれる女子達の筆頭の１人でもある。

「とはいえ、勝負なら受けないと。鉄人、召喚許可をください」
「西村先生と呼べ、バカ者が！　まあいい、科目はなんだ？」
ちなみに鉄人、科目のフィールドは全部指定可能である。
「古典でお願いします！」
「は？　おいおい、代表ともあろうものが、Ｆクラス相手に弱点を突くのかよ？　随分と器小さいな」
「なっ！」
「まあ良いけどね。これで負けたって、俺にとっては特に何ともないし」
壊滅科目で勝っても何の自慢にもならない。
「言ってくれるわね！！　じゃあ保健体育で勝負よ！」
と、光一の口車に乗せられて、あっさりと別教科に変更。
『Ｆクラス　久遠光一　保健体育１２２点』
ＶＳ
『Ｅクラス　中林宏美　保健体育１１１点』
光一が死神に対し、中林は背に大きな袋を持った鬼、風神である。
「成程、風神と言えば吹き荒れる風、つまり無鉄砲ってところか」
「一々うるさいわね！」
風神が殴りかかってくるのを、死神が鎌の柄のショットガンを構える。
狙いを定め引き金を引き、手足を撃ち抜いた。

「なっ！　また!?」
「相変わらず進歩がないな。んじゃ、バイバイえーっと……三上、いや、古河だっけ?」
「中林よ!　中林宏美!!」
「ああそうそう、それじゃバイバイ、中林さん」

ゆっくりと近づいて鎌を振り上げ、その首を刈り取った瞬間、０点となった。

「勝負あり!　さあ中林、戦死者は補習だ!」
「そっそんな!　模擬ですよ!?」
「模擬とはいえ、試召戦争で敗れた以上は戦死扱いとなる!　さあ、さっさと来い負け犬が!」
「くぅっ……覚えてなさい久遠光一!　この恨み、必ず晴らしてやる!!」

中林が鉄人に連行されるのを見届けて、光一は頭をポリポリと掻いた。
その場に座って、んーっと背を伸ばすとそこへ秀吉と明久が歩み寄った。

「相変わらず人気者じゃの」
「逆の意味でだろ。全く、迷惑この上ないっつーの」
「僕もさっき、Ｄの女子に戦いを挑まれたよ……何とか倒せたけど」

アンチ久遠派は、当然その相棒でもある明久も敵対対象としていた。
基本アンチ久遠派と言うより、アンチ切り込み隊長コンビと言ったところだが。

「仕方ないじゃろ。クラス単位での試召戦争が仕掛けられぬ現状では、こうして個人でかかるしかないのじゃ」
「けどコレじゃ、雪ダルマならぬ恨みダルマだな……」
「だよね……停学明けも根本君の事もあるでしょ？」

当然だが、男子も大人しくしているという保証は全くない。
根元の様にFクラスに反感を持っている男子もいる可能性は、否定できない。

「張本人の清水、もっと痛めつけとけばよかった」
「物騒な事を言うでない。気持ちはわからぬでもないがの」
「はぁっ……」

明久も何度も美春に酷い目にあわされてるため、光一の意見にはやや同調気味だった。

「Fクラス久遠光一！」

またかと思い、光一は声の発信源に身構える。

「遊びに来たよ」

そこには刺客ではなく、Aクラスの工藤愛子がフレンドリーな笑顔を浮かべて立っていた。

「なんだ、脅かすなよ」
「あはは、ごめんごめん。あっ、吉井君に優子の弟君も、元気そうだね」

と、3人の処に歩み寄って、卓袱台を囲うように座る。

最近女子には酷い目にあわされてばかりだったが、愛子だけは別。
覗き騒ぎ以降、明久にしてみれば敵意の対象にばかりされてるため、フレンドリーな彼女の対応はありがたい。

「ねえ、もう召喚獣は見た？」
「みたと言うより、早速それ使って戦ったばっかだけどな」
「だよね」

確認したのは朝一番で、戦ったのはついさっき。
普通に考えれば、ハイペースである。

「で、ボクも見てみたいんだよね。ねえ弟君、フィールド出して」
「むっ、良いぞ。アウェイクン！」

秀吉を中心に、召喚フィールド（保健体育）が展開。
早速明久と光一が、召喚獣を展開する。

「へえっ、久遠君が死神で、吉井君はえーっと……騎士？」
「……デュラハンだよ」

頭がない＝バカの図式に少々うんざりしてる明久だった。

「で、ボクは……サモン！」

そう言って現れたのは、のっぺらぼうだった。

「あっ、のっぺらぼうなんだ」
「でもどうしてのっぺらぼう？」
「顔がない、つまり素顔を見せない所があるとか？」

光一と明久は、ふと真面目な考えに陥る。
素顔を見せない、それつまり自分を隠す事にあると言う事に

「（……ねえ光一。素顔を見せないって事は、工藤さんの本質は自分を隠す事にあるんじゃ？）」
「（かもしれないな。もしかしたら、普段のセクハラ発言とかは彼女のポーズだとか？）」
「（ありえるね……全然考えた事なかったよ。こんなに明るい人なのは、過去に辛い事があったとか？）」
「（もしくは、いま家庭に何か大変な事があるか……かもな。聞けば一年の終わり位に転入してきた訳だし、その辺りに関係があるかもしれないな）」

「そう言えば、ワシは前に演劇の題目の候補として怪談話を探しておったのじゃが、その中にのっぺらぼうの尻目と言う物があっての」
「「尻目？」」

光一と明久が互いに顔を見合わせ、疑問符を浮かべる

「うむ。そののっぺらぼうは何でも、人に出会うと全裸になったそうじゃ」
「「……」」

恐ろしい程納得は出来たが、心配を返してほしいと思う2人だった。

「じゃあボクの召喚獣は、それが影響してるんだね」
「……やれやれ」

あっけらかんとした態度に、光一は頭を押さえた。

「ん？　そう言えば、腕輪ってどうなってんだろ？」

腕輪と言うのは、４００点オーバーの召喚獣にのみ与えられる特殊能力である。

現時点でわかっているのは、光一とムッツリーニ、瑞希と愛子の４人のみ。

「それじゃ、ボクとムッツリーニ君ので見てみようか？」

「そうだな。おーい、ムッツリーニ！」

「……何？」

音もなく表れた、文月学園の忍者こと土屋康太。

幸い召喚フィールドは保健体育である。

「ちょっと工藤と召喚獣バトルをしてみてくれ。特殊能力を見てみたい」

「……サモン」

『Ｆクラス　土屋康太　保健体育５７６点』

ＶＳ

『Ａクラス　工藤愛子　保健体育４６５点』

「それじゃ行くよ、ムッツリーニ君！」

「……返り討ち」

瞬きすら許さない一瞬の刹那、のっぺらぼうの身体に引っかき傷が。

そしてヴァンパイアの方には殴った様な跡が現れ、ムッツリーニがダラダラと鼻血を垂らしていた。

「なっ、何!?　何が起こったの!?」
「ヴァンパイアの方は、一瞬で狼に変身して爪で切り裂いた」
「みっ、見えたの!?」

光一は動体視力にも相応の自信はあった。

「んで、のっぺらぼうは」
「一瞬で全裸になって殴った後、また服を着ていた」
「……その通り、流石だな雄二」

雄二の台詞に、光一が頷いた。

「……どうして服を脱ぐ必要が?」
「わからん。しかしムッツリーニは当然反応してたみたいだぞ?」

光一が指差した方向では、確かにムッツリーニが輸血作業を開始していた。

「……雄二。浮気の現行犯」
「な!?　ち、ちが……っ!?　工藤の召喚獣は見ようとした訳じゃないから不可抗りょぎゃあああああっ!!」
「……浮気は許さない」

近くで行われてるリアル肝試しを無視して、今度は光一の召喚獣の能力を見てみたいと言う話に。
ただし光一は、物理でなければ使えない。

「ならば、雄二の方が適任じゃろ。ワシの腕輪はランダムじゃからの」
「そうだな。じゃあ雄二、物理フィールドを……」

バンッ！

「Ｃクラス代表小山友香！　Ｆクラス久遠光一に、模擬試召戦争を申し込みます！」

「またか……雄二、頼む」

「お前は……まあ良い。アウェイクン！」

雄二を中心に、物理フィールドが展開。

光一の死神と、小山が……

「雷神か……成程、ヒステリーだけに雷か」

「誰がヒステリーよ！？」

ギリギリと歯軋りさせながら、光一を睨みつける。

『Ｃクラス　小山友香　物理１７８点』

ＶＳ

『Ｆクラス　久遠光一　物理６３４点』

「んじゃ、始めるか」

召喚獣の巨大ゲンコツが開き、その指先が粘土の様にグニュグニュと蠢く。

ある程度の処で型が取られ始め……。

「え？　わっ私の顔！？」

小指から順に、中林、清水（ダークネスバージョン）、小山、根本、夏川。

と、それぞれの顔に変貌していた。

「こっこれって……光一が今まで倒したことある人の顔じゃない？」
「そう言えば……中林（きんにく）に清水（ぼうそう）、小山（ヒステリー）に根元（クソヤロー）、そして変態（なつかわ）と、倒した記憶がある」
「光一よ、約1名おかしな物があったぞい」

巨大ゲンコツの指の顔が悲鳴の様な金切り声をあげ、小山の雷神に襲いかかった。
それぞれが四肢と頭にかみつき、ギリギリと引き裂こうと引っ張り上げ、そのまま引き裂いて終了。

「戦死者は補習！！」

そこへ鉄人が音もなく表れ、小山を連行。
流石に光景が光景だけに、小山は吐きそうになっていた。

「……どうして光一の能力って、つくづく僕にとって相棒で良かったって心から思える物ばかりなんだろ？」
「……そうじゃな。“爆発”と言い、あんな能力のダメージなど想像するだけで寒気がするぞい」
「あっ……あはは……」

もうすぐ男子生徒の停学明け。
その時まで、中林、清水、小山を中心に、この2人は女子達の襲撃を受けては、返り討ちに。

そして……

「待ってよアキ！　何もしないって何度言えばわかってくれるの！？」

「何度言われてもわからないよ！　そっちだって、僕はまだ死にたくないって何度言えばわかってくれるの!?」
「だから誤解なんです！　お願いですから、まずは話を聞いてください！」
「姫路さん！　僕がバカだからと言って、殺されるとわかってて止まる程バカだと思うなんてあんまりだ!!」
明久は未だ抹殺者の（認定してる）２人に追い回され、２人は何とか誤解を解こうと必死に追いかける。
そして光一もまた……
「待ってよ光一！　あれは誤解だって言ってるでしょ!?」
「絶対ウソだ！　暴走で何であんな行動が出来るんだよ!?　お前絶対暴走を理由にして俺を殺すつもりだったとしか思えないんだよ!!」
優子に追われていた。
「だから違うって言ってるでしょ！　まずは話を聞きなさい!!」
「いや、ちょっと待て！　じゃあ何でいつの間にか軍勢を率いてるんだよ!?」
「え?」
ふと、光一を追いかける優子が後ろを見ると……
「久遠を潰すなら手伝うわよ、木下さん」
「え!?　ちょっ、ちょっと待って！　アタシは別にそんな事しようと……」
「久遠の天敵、木下さんがついてくれれば百人力ね」
「だっだから……」

と、アンチ久遠派の女子連合が追い掛けていた。
しかも全員が、優子を旗頭の様に扱っている。

「優子！　お前いつから問題児とはいえ、平気で人を騙そうとする女になった！？」
「だっ、だから違うわよ！！」
「信じれるかそんなもん！！」

その様子を見て、明久は一言。

「あーあ……もう光一に優子さんラブの面影はもう見えないね。優子さんもかわいそうに」

ヒュン！

「ひぃっ！」
「お姉さま、あのブタのせん滅でしたら協力します」
「しっ清水さん！　違うわよ、お願いだからもうウチに関わらないで！！」

と、明久と光一は、事実上天敵と化した少女達に追われる日々を送っていた。

第五十五問

特別企画　バカと過激派と美少女トリオの実際にあった怖い話紹介。

「さて、次はＨＮ“受験まっしぐら”さんから」
「次はちゃんと怖い話だと良いんだが」
「先程のはある意味怖い話だったがの……さて明久よ、内容はなんじゃ？」
「えーっと“私の怖い実体験を御話ししましょう”」
「実体験？　幽霊を見たとか、そんなのかな？
“私には親友がいて、何をやるのも一緒です”」
「ふむふむ」
“ですが、ある出来事を境に彼の様子がおかしくなってしまいました」
「？　ある出来事？」
“ある大会で、いけすかない後輩コンビと当たり、敗れて以来の事です”」
「ふーん、そりゃおし……ん？　大会？　いけすかない後輩コンビ？」
“親友はどこか上の空となり、事あるごとに空を見つめてはため息をついてばかりです”」
「……まさか」
“そしてある日、アイツの机の中から女生徒の様な男の後輩の写真が出てきました”」
「……やっぱりあいつだ」
“それと同時に、その後輩と仲が良いという過激派の後輩の写真を張り付け、全身が五寸釘でハリネズミとかしたわら人形が出てきました”」
「……またかよ」

「“親友は一体どうしてしまったのでしょうか？　気になって夜も眠れません”以上です」
「……のう、光一に明久よ。メールを読み始めてから、何故か寒気が止まらんのじゃ」
「気にするな秀吉。悪い夢を見たと思っておけ……あと、コレを渡しとく」

スタンガン（４０万ボルト）
催涙スプレー

「……思いきり不安になったのじゃが？」
「気の所為だ。というか何である意味怖い話ばっかで、定番的な怪談話が来ないんだよ！？」

男子停学明けの日。
光一と秀吉、停学免除組は特に感慨を感じる事なく、学園への道を歩く。

「そういえば、今日だったな。男子の停学明け」
「うむっ、ワシらも本来は今日からの筈なのじゃがな」

明久と光一をはじめ、雄二と秀吉とムッツリーニは、システム暴走事件解決の功績により停学免除。
それ故に、他の男子より早く復学していた。

「あっ、おはよう秀吉に光一！」
「むっ、おはようじゃ明久」
「よう明久」

そこへ、2人の友人である明久が合流。

「今日は血色が良いな。朝飯でも食ったのか？」
「うん。今月は特に欲しいゲームも漫画もないからね、ちなみに今日はお弁当を作ってきたよ」
「ほうっ、明久は料理が出来たのかの？」
「うん。料理だけは得意中の得意だよ、今度食べにこない？」

2人はだったらと頷いた。

「おい久遠に吉井！　朝から見せつけてんじゃねぇぞコラぁ！」
「全くもって、そちらの先輩の仰る通りだ！　特に久遠光一、幾ら木下さんにフラれたからと言って、キミには節操と言う物がないのか！？」

そこへ、登校中の常夏コンビの片割れと、2学年次席が注意して来た。

「あれ、モヒカン先輩に久保君？　見せつけるとか節操とか、意味

がわからないけど？」
「全くじゃ。お主らも含めて、この場には男しかおらんぞい」
当人たちはそれがわからず反論するが、光一は頭を押さえていた。
一応、常村と久保の対象が誰かと言う事を理解しては居る為である。
「あーもう……秀吉、明久、お前らだけは変わってくれるなよ？」
「「？」」
言葉の意味が理解は出来なかったが、明久と秀吉は頷いた。
「……どうして明久だけじゃなくて、秀吉がらみでも嫌われるんだよ俺は？」
友人絡みでさえも嫌われてばかりには、うんざりし始めていた。
そして教室では、光一に勝負を挑む者があらわれていた。
覗き騒動による女子の不満の矛先もそうだが、その騒動の際に高橋女史を打倒した功績。
ソレを狙い自信への嫌悪を晴らそうとする男子も、打倒久遠光一を掲げ始める。
「覚悟しろ久遠！　お前を倒して、汚名挽回だ！」
「お前さえ倒せば、確実に名誉返上する近道だ！」
「色々言いたい事はあるが、正しくは汚名返上と名誉挽回だバカ共。あとお前らクラスメイトだろうが！」
……そして、Ｆクラスの面々までも。

「悪く思うな。お前さえ倒せば、反久遠派の女子とお付き合いできるかもしれないんだ」
「そうだ。覗き疑惑払拭と俺達の輝かしき幸せの為に、鬼の補習を受けてくれ！」
その言葉に、一切の迷いはなかった。
「こいつらは……それで、科目は？」
「「化学で行きます、サモン！」」
ズズズズ！　×２　（ゾンビ登場）
「なっ、何故だ！？　どうして俺の召喚獣がゾンビなんだ！？」
「どうしてってお前、明らかに“腐った根性”の持ち主だからだろ」
「俺はジェントルマンだぞ！？　こんなの何かの間違いに決まってる！！」
「自分の幸せの為にクラスメイト売ろうとする行為のどこがジェントルマンだ！？」
『Ｆクラス　近藤吉宗＆須川亮　化学４９点＆５５点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一　化学４点』
「それに弱点攻める時点でアウトだろ。しかも２人してゾンビって、明久より酷いじゃねえか」
「うっ、うるさい！　勝負において卑怯汚いは敗者の戯言、最後に勝てばいいんだ！」
「そうだ、それに吉井みたいにバカが本質じゃないだけまだマシだ！」
「思いっきり“腐った根性”丸出しじゃねえか」

2体のゾンビが死神めがけて、全速力で襲いかかる。
が、光一の召喚獣がゆっくりと進路上に、鎌の刃を構えて……

「え？　あっ、ああっ！　ストップ！」

飛び出すな、ゾンビ……もとい、車は急に止まれない。
と言わんばかりに、全力で鎌の刃に突っ込んでしまい、2体の召喚獣は真っ二つとなった。

「壊滅科目で負けたバカ雑魚決定だな」

冷たく言い放つ光一。
それに続く様に……

「戦死者は補習！！」

お馴染み、鉄人の一喝であった。

「このクソ野郎！　仲間を鬼の補習の餌食にするとはなんてやつだ！！」

「陰湿だ！　最低なクソヤローだ！！」

「陰湿で最低なクソヤローはお前らだ！！　とっとと墓場に還れゾンビども！」

2人が引きずられていくと同時に、周りの男子達もこぞって光一に勝負を……。

ジャキンッ！

……申し込もうとしたが、光一自慢のコレクションを取り出し武装をしたのを見ると全員が目をそらした。

「もはや団結もなにもあったもんじゃないのう……」

「だよね……これから一体どうなるんだろ？」

明久と秀吉のつぶやきが、むなしく響き渡った。

そして、休み時間

ドドドドドド！

「とまれ切り込み隊長コンビ！！」

「お前らを倒して、覗きの汚名を払拭するんだ！」

停学明けのテスト終了した男子勢に、追われる2人組。

その全員が覗き騒動で失墜した自身の立場回復の為、2人の打倒を誓う集団である。

ちなみにその集団を統率するのは、Bクラス代表根本恭二。

「あのクソヤローめ、よりにも寄って他のクラスの男子まで扇動しやがって！！

「どうするの光一！？　このままじゃ……」

「止まりなさい！」

進路上には、女子の集団。

先頭に立つのは、中林、清水、小山を中心とするアンチ久遠派。

「ここまでだな切り込み隊長コンビ」

男子勢から、根本がいやらしい笑みを浮かべながら登場。

「ちっ……予想通りにしかけやがったか」

「当たり前だ。ここでお前をぶちのめせば、俺は晴れてBクラス代表として返り咲ける。過程はどうあれど、その事実に何ら変わりはねえさ」

「そういう根性じゃまた同じに決まってるだろ。底が浅い小悪党だな」

「けっ！　まあいい、言いたいだけ言わせてやるよ。全員かかれ！」

根本の指令で、全員が雄たけびを上げた。

明久と光一は、あのクソヤローだけはと駈けだそうと……。

「おやめこのバカ共！！」

した所で、とある人物の一喝が割りこんだ。

「あっ、学園長！」

「全く、どうして個人での模擬戦争許可でここまでの騒動になるんだい！？」

不機嫌さを隠しもしないで、学園長はそう怒鳴った。

「全くだ。たった2人にここまでやるか普通？」

「黙りなさいブタ野郎！」

「あなたが観念しないからこうなるのよ！」

「そうよ！　あんたが大人しくやられてればこうはならないわよ！」

主導の3人の主張で、女子の軍勢がそうだそうだと異議を申し立てる。
覗かれはしてない物の、実際やった事に変わりはない以上許せない事なのは事実。

「そうだ！　大体坂本を含めたこいつ等核弾頭トリオの所為で学園の評判が落ちてるんだから、ここらでぶちのめして反省させるべきじゃないですか！！」

ソレを利用して根本がそう宣言すると、同時に男子の軍勢もそうだそうだとわいた。
しかし光一にしてみれば、悪いとは思ってはいるけどここまでとなると既に謝る気も失せていた。

「集団にならないとケンカも売れない奴等が偉そうに言っても説得力ねえよ」
「「「何だと！！」」」
「「「何よ！！」」」
「だからおやめと言ってるんだよ、そこのクソガキも煽るんじゃない！　まったく……そういう態度で来るなら、こっちにも考えがあるよ！」

全員が静まり、視線が学園長へと向いた。

「騒動をやめる気がないのなら、召喚獣に痛みのフィードバックするようにしてやるさね。召喚獣をケンカや騒動の道具にした罰だ！」
「え？　それって、僕と同じような設定になるって事ですか？」
「その通りさね。模擬戦争がしたけりゃするがいいさね、ただし痛みを受ける覚悟の上でね！」

と言って、学園長は去って行った。
ソレを受けて、大半の男子と女子が戦意を喪失。
召喚獣のフィードバック自体は、明久もそうだが光一も経験済み。
特にＡクラス級のタコ殴りを受け、未だトラウマになってる側にしてみれば顔をしかめる事だった。

「皆、何を戸惑っているのですか！？　これは吉井明久だけでなく、久遠光一にも直接的なダメージを与えるチャンスです！」

ガラッ！　（窓が開く音）

「では久遠光一、吉井明久、この清水美春が引導を……あれ？」

そこには、窓があいている事と2人の姿が消えてるだけの、ポツンとした廊下だった。

そして、Ｆクラス教室にて。

「久遠くーん、お昼一緒にどう？」

ザザッ！

愛子の御誘いがあるや否や、光一は覆面の一団に取り囲まれた（ムッツリーニ込み）。

（※　この作品の明久はＦＦＦ団には加盟してません）

「これより、異端審問会を始める」

「……なんだＦＦＦ団、やる気か？」
「罪状、危険人物Ｎｏ．１の分際でありながら我らが血の盟約にそむき、自分１人だけ工藤愛子と一緒にお昼を食おうという大罪を犯した……被告、言い残す事があるなら聞いておこう」
「その前に俺はお前らの血の盟約とやらに同意した覚えはないぞ？
あくまで取引先という接点しかない筈だ」

久遠光一はＦＦＦ団に、武器の供給と言う名目でエアガンのレンタルを行っていた（有料制）
壊したりした場合は、弁償をムッツリ商会に請求する（私怨目的）と言う取引条件で。

「諸君、ここは我らが目的は？」
「「「神聖なる学び屋の風紀維持だ！」」」
「異端者には？」
「「「死の鉄槌を！」」」
「男とは？」
「「「愛を捨て、哀に生きるもの！」」」
「よろしい。異端者久遠光一が判決、有罪につき死刑を執行する！」

全員が武器を構え、光一に狙いを定める。
そこで、光一がふとある事を思いついた。

「ちょっと待て、その血の盟約とやらだが……」
「なんだ？　我らが血の盟約に関する事ならば、一先ずは聞いてやろう」
「須川に近藤、お前ら俺を売って女子に取り入ろうとしたよな？」

ギロリと周りが２人を睨みつける。

「しかも堂々と“お前さえ倒せば、反久遠派の女子とお付き合いできるかもしれないんだ”と宣言してたが、これは異端の証じゃないのか？」
「確かにその通りだ。須川会長、近藤１級審問官、その件については一体どういう事かね？」
「よもや久遠の功績を利用し、自分達だけ良い思いをしようとしたと？」
「ちっ、違う！　俺はただ、Ｆクラスの名誉を思って……」
「「「問答無用！」」」

と、光一そっちのけで２人を処刑し始めた。

「さて、今のうちに……っ！」

ヒュッ！　（文房具が投げられる音）
カッ！　（エアガンでそれが弾かれる音）

「やはり来たか、ムッツリーニ」
「……異端者に死を」

両手にスタンガンを構え、倒すべき敵を睨みつけるムッツリーニ。
光一も両手にエアガンを持ち、構える。

「丁度良い、秀吉や明久の関連でのお前の所業は許しがたい……ここで決着を付けよう」
「……望むところ」

互いににらみ合い、硬直状態へ入る。
その間では、愛子が何が起こるかとわくわくした様子。

「何だか面白そう。２人とも、ボクの為に争わないで！　みたいな？」
「だったら工藤の為にムッツリーニ、お前を倒す！　ってな感じで行くか」
「あははっ、久遠君ノリが良いね。ますます気に入っちゃったよ」
「……抹殺」
「「いや、滅殺だ！！　寧ろ殺す事すら生温い！！」」」

そこへ、２人の処刑が完了したＦＦＦ団の面々が詰め寄っていた。

「なんだ、もう片付けたのか」
「当然だ。須川と近藤が不在の為、この武藤啓太が臨時に指揮を執る」
「そうか……じゃあ、対ＦＦＦ団戦秘密兵器を使う時が来たな」

その言葉に、全員がどよめき光一から一歩距離を取った。
光一がおもむろに懐に懐に手を入れ、或る物を取り出す。

……それは。

「……紙の束？　バカにしとんのかキサマ！？」
「してるけどそういう事はコレを受けてからほざけ！」

集団の中心に放物線を描くように投げ、ソレをエアガンで狙い撃つ。
くくってあったゴムが千切れ、紙の束が散乱した。

「よし、逃げるぞ工藤！」
「え？　うん！」

光一はソレを見届けると、愛子の手を取り逃げ出した。

「逃がす……むっ！　これは!?」
「おっ、お宝画像のプリント!?　拾え拾え!!」
「テメ、欲張ってんじゃねえ!　寄越せやコラ!!」
「いてて、何しやんだクソボケ!!」
「離せやコラ!　これはオレんだクズ野郎!!」

異端審問はどことやら。
あっさりと光一の秘密兵器の餌食となり、同士討ちを始めたＦＦＦ団だった。

「……醜いのう」
「……そうだね。さて、僕もお弁当食べようかな?」
「ふむっ、そう言えばお主も弁当を作ったと言っておったな。どれ、どんなものかの?」

明久はゆっくりと鞄の中の包みを取り出し、卓袱台の上で広げた。

「ふむっ、美味そうじゃな」
「久々だから自信はないけど、良かったら秀吉も食べてみる?」
「ならば相伴に預からせて……」

ゴゴゴゴゴゴッ!

「……ねえアキ、そのお弁当だけど」
「……もしかして、木下君のお手製ですか?」
「え?　ちっ違うよ。今日は余裕があったから、僕が……」
「成程、白を切るつもりですか。でしたらこのサンドイッチを」

ダッ!　×2　（明久と秀吉が駆け出す音）

「お2人に食べ比べて……あっ！　明久君に木下君、どこへ行くんですか！？」
「木下！　この状況を利用して抜け駆けなんて卑怯よ！！」

「ああもう！　何でお弁当作ってきただけでこうなるの！？」
「何故ワシが姫路と島田に怨敵にされねばならんのじゃ！？」

一方、Ａクラスにて

「で、いきなり連れ込むなりリクライニングシートに縛り付けて、何をする気だ？」
「……雄二、あーん」
「だから話を聞け！　それにとんかつがどうして青いんだ！？」

今日も今日とて、文月学園は平和だった。

第五十六問

問題　以下の問いに答えなさい
『西暦１４９２年、アメリカ大陸を発見した人物の名前をフルネームで答えなさい』

姫路瑞希の答え
『クリストファー・コロンブス』

教師のコメント
正解です。卵の逸話で有名な偉人ですね。
コロンブスという名前は有名ですが、意外とファーストネームが知られていない事が有名です。
意地悪問題のつもりでしたが、姫路さんには関係なかったようですね。良く出来ました

清水美春の答え
『コロン・ブス』

教師のコメント
フルネームはわかりませんでしたか。
コロンブスは一語でファミリーネームであって、コロン・ブスでフルネームと言う訳ではありません。気を付けましょう

島田美波の答え
『ブス』

教師のコメント
過去の偉人になんて事を

久遠光一の答え
『鑑真』

教師のコメント
進歩が全く見られないので、高橋先生に補習の強化を申請しておきます。

ＦＦＦ団と言う追手から逃げる光一と愛子。
だが彼の敵は、それだけではなかった。

「見つけましたわ久遠光一！　今日こそはその首と腕輪を美春の手に！」
「なんだ、またやられに来たのか？　懲りないな」
「今日と言う今日は。美春を侮辱し続けて来た罪を償って貰います！！」
「そうか。じゃあ木村先生、お願いします」
「え？」

『Ｄクラス　清水美春　物理１１８点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一　物理６３５点』

光一が死神を展開し、美春はそれに対し迷い神を召喚。
死神の背の巨大ゲンコツが開かれ、指先がグニュグニュと蠢き、人の顔をかたどり始める。

「汚らしいです！　よりにも寄って、美春の顔をブタの召喚獣の能力に使うだなんて！」
「俺だってお前みたいな悪趣味なつら願い下げだ！」

指の顔、中林、ダークネス清水、小山、根元、夏川の顔が金切り声をあげ、迷い神の四肢と喉にかみついた。
その痛みが、フィードバックとなり美春に響く。

「うあっ！　あああっ！！」
「本当ならもちっと痛めつけたいが、時間がない。あばよイカレ女」

四肢と喉が食い千切られ、そのまま鎌が振り下ろされ点数が０に。

「戦死者は補習！」

地響きを上げ駆け付けたのは、補習室の番人事鉄人。

「おっ、覚えてなさい久遠光一！　あなたを倒して、必ずやその腕輪を美春の手に！！」
「清水、いい加減にしろ。あの腕輪は召喚大会準優勝者である久遠以外が使う事は出来ん」
「美春のお姉さまへの愛があれば、そんな事何の問題もありません

！」

「そうだとしても、使用は学園長の許可がなければだめだ！　とにかく大人しくしろ、戦死者は補習だ！」

鉄人に担がれ去っていく美春を見届けて、まずは一息。

「居たぞ、久遠だ！」

「工藤を確保しろ、久遠を殺せ！」

「サーチアンドデス！」

……と言う訳にもいかなかった。

「ちっ、面倒な！」

「あーあ、また大騒ぎだね」

「やれやれ……コレを付けて耳をふさいでくれ。口は少し開けてな」

光一は愛子にサングラスを手渡し、自身もそれを掛けて耳栓を。

異端審問会の連中が押し寄せようとするや否や、或る物を投げつけ……。

ボンッ！

その廊下で、強い光があふれた。

そして、Ａクラス教室にて。

「ここまでくれば大丈夫だね」

「ああ……あー、しんど」

ＦＦＦ団から逃げた光一と愛子が逃げ込んだのは、Ｆクラスの宿敵事Ａクラスの教室。
ここは愛子及び、光一の天敵こと木下優子の所属するクラス。
それゆえ、目を欺けるだろうと言うイチバチの賭けだった。

「よう光一、随分と仲睦まじい登場だな」
「ん？　なんだ、ここにいたのか雄二。奥さんにあーんとはＦＦＦ団が見たら大激怒な光景だな」
「……良い響き」
「誰が誰の奥さんだ！？　そしてお前はこの縄が見えないのか！？」
「いつもの事だろ？　アイアンクローで頭潰されてないだけ、まだマシだと思うが？」

Ｆクラスにおいて、クラス代表は一体どういう恋人生活を満喫しているのだろうか？
Ａクラスの面々は心から疑問に思った。

「で、仲睦まじいと言うのは？」
「手をつないでの登場を仲睦まじい以外にどう表現が出来るんだ？」
「え？」

ふと、光一は手を見てみると、確かに手を繋いでいた。

「あっ、わっ悪い」
「ううん、気にしないで。何ならもっとすごい事でも……」
「あっ、光一に工藤さんも、ここに逃げて来たの？」

愛子の言葉を遮ったのは、明久と秀吉。
瑞希の弁当と言うあの世への階段から逃げ込んだせいか、２人とも息を切らせている。

「なんだ、明久に秀吉じゃないか。どうしたんだ？」
「姫路さんと美波が僕のお弁当を見て激怒してさ」
「それで危うく、ワシ諸共に姫路の弁当を食わされそうになったのじゃ」
「……危なかったなそれは」

身を持って威力を知る光一と雄二は、顔を青くして頷いた。
一応、瑞希の料理の腕を知ってる愛子も、苦笑いだった。

「それで、今の僕達が外部で頼れるのは坂本さんだけだから」
「明久、だから翔子を勝手に入籍させるな！」
「うむっ。それでかくまって貰えないかと思っての」
「その辺りの狙いは俺と同じだな」

周りは敵ばかりの現状で、可能性があるのは誤解が蔓延していないＡクラスのみ。
一応、Ａクラスの面々も明久と光一、秀吉が状況が状況ゆえに無理やり参加させられたと知ってるため、３人には特に敵意を持っていない。

「……吉井と木下、久遠には世話になってるから、お安いご用」

如月グランドパークの一件だけでなく、雄二（には内緒）関連で何度か協力をした事がある。

「それにしても、どうして僕達ばっかり……」
「お前らの日ごろの行いが悪いからだ」
「雄二のバカの所為だ！」

本人はどこ吹く風と、全く気にしたような様子がない。
そこへ、翔子が一歩前に出て抗議。

「……久遠、バカを雄二扱いするなんて、失礼にも程がある」
「ちょっと待て！　俺とバカを言う順番場逆だろ、それじゃバカを擁護してる様じゃねえか！！」
「確かに、それはバカに失礼だったな」
「だよね。雄二はバカじゃなくて雄二だもんね。失礼にも程があるか」
「お前らの方が失礼だ！」

Ｆクラス名物、核弾頭トリオのバカ漫才。
普通に見てる分には面白いので、Ａクラスの面々も遠目にだが見ていた。

「まあまあ、これでも呑んで落ち着いて」

そこへ愛子が、４人分の御茶を持ってやってきた。
先程のやり取りの間に、汲んで来たらしい

「あっ、どうも」
「ありがとう」
「ありがたく頂戴するぞい」

愛子からお茶を受け取って、一口。
そして雄二の分は……

「……雄二、たくさんのんで」
「待て！　湯気が立ってあつつ！　熱い！！」

翔子自らが呑ませてあげていた。

「それで雄二、例のプランだが」
「ん？　ああ、まとまったのか」
「お前がのんびりと奥さんといちゃついてる間に、追い回されつつもな」
「誰が奥さんで何時いちゃついたって？」

大半が光一と明久を敵視している為、雄二はほとんどノーマークだった。
それもその筈、功績をあげてるのは主に明久と光一だからである。

「……吉井と久遠も大変」
「そう言って貰えて何よりだ。霧島、これを見せてあげてくれ」

光一は常備してるボストンバッグ（エアガン入れ）から、紙の束を取り出す。
それを受け取った翔子は、１枚１枚雄二に見せる。

「ねえ久遠君、一体どんな企画を？」
「それは公表されてからのお楽しみって事で」
「えー？　教えてくれてもいいでしょ？」

光一にしなだれかかる愛子。

「やっぱり工藤さんって、光一の事……」
「明久よ、何故お主は人の恋愛事だとあっさりと理解するのじゃ？」
「え？　何でって、見ればわかるじゃない。って、何で呆れたように僕を見るの？」

秀吉は心から明久の鈍感さに呆れ果てた。

「……久遠光一を工藤さんが、か」

……約一名、それをよしと思っている人物もいた。

「成程な。安直だが、いいアイディアじゃないか？　細かなルールは後で決めればいいとして、これならあのババァも納得するだろ」

「じゃあ早速学園長の所に行こうよ」

「そうだな。まあババァ長も、イメージアップにもつながる企画だけに賛同するだろ」

明久の扱いから、ババァと言うのが誰かと言うのが瞬時に分かったAクラス面々。

当然、“なんて怖いもの知らずな”と思ったとか。

「久遠光一は工藤愛子と、吉井明久は木下秀吉と逃避行という大罪人！　我等異端審問会の名に賭けて、必ずや処刑してくれる！！」

「本当なんでしょうね、新校舎の方に逃げて来たっていうのは？」

「お姉さま、愛してます」

「フィードバックの所為で大半が抜けちゃったけど、Fクラスのバカ集団が味方になっただけでも好都合ね。それより本当なのかしら？　久遠がAクラスの工藤と逃避行だなんて」

「久遠のヤツ、俺が友香と別れる原因作っておいてよくも自分だけぬけぬけと！」

そこへ廊下から、B～Fの代表格の声が響き渡る。

それに続く様な数十人の足音、アンチ久遠派の集団である。

「明久君、どこですか！？　私の作ったサンドイッチを食べて欲し

いだけなのに、どうして逃げるんですか！？」
「木下！　アキのウチ等への誤解を利用するなんて、絶対に許さないんだから！！」

そこへ、瑞希と美波の叫び声。
ソレを受けて、大半が（主に）明久と秀吉に目を向ける

「オノレ吉井明久！　木下だけでは飽き足らず、よもや姫路さんからお弁当を作って貰うとは許すまじ！！」

ちなみにソレを受けた異端審問会が、明久への殺意を増幅していた。

「まだ探してたの！？」
「なっ、なんて事を叫んでおるのじゃ！？」
「それで、どうするの？　代表格は皆問答無用の姿勢だし、このままじゃ……」
「仕方ない」

光一は常備してるボストンバッグから、カギ縄を取り出した。

「逃げるぞ」
「……久遠君、どうしてそんなものを持ち歩いてるの？」
「それは気にしない方向で。今はとにかく逃げないと」
「そうじゃな。どうやら異端審問会とアンチ久遠派の連中が組んだ様じゃし、工藤もここに居ては危ないぞい？」

と、４人は一路窓へ。

「じゃあ雄二、俺達は学園長室に向かうから」
「ちょっと待て。俺も……」

「企画書はまとまってんだから、後は報告だけで良いだろ。心配しなくて大丈夫だ」
「いや、そういう意味じゃない！　あっ、待て！」
と、窓から去っていく4人。
そして雄二は、光一と愛子の2人に向けて一言。
「……意外とお似合いのカップルやもしれんな、あいつら」
そう呟いた。
「雄二、続き」
「いや、待て！　その妙な匂いがする御飯をどうする気だ！？」
そして、学園長室にて。
「……あんた達は一体どこから入って来てるんだい？　しかもそのロープは何さね？」
「ようやく案がまとまったから、届けに来ました」
「なんだい、まだ追手があるのかい？　全く、バカはあんた達だけにしてほしいねえ」
「ほっとけ。それで読むのか読まないのかはっきりしろクソババァ長」
横柄な態度の光一に、愛子も秀吉も苦笑いだった。
呆れたように光一を見ると、報告書を受け取る学園長。
「ふむふむ……よし、良いだろう。学園側として、援助してやろうじゃないか」

「イメージアップとしては平凡だが、いいアイディアだろ？」
「まあね。さて、早速発表してやるか。こう何度も小競り合いされたら、また評判に傷がつくからね」
「俺達ばっかりが悪い訳じゃないってのの」

こうして、ちょっと一風変わった試験召喚戦争が、幕を開ける事となった。

第五十七問

問題　次の言葉を正しい英語に直しなさい
『ハートフル　ラブストーリー』

姫路瑞希の答え
『ｈｅａｒｔｆｕｌｌ　ｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙ』

久遠光一の答え
『ｈｅａｒｔｆｕｌｌ　ｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙ』

教師のコメント
正解です。映画や本の謳い文句によく見かける単語ですが、たまにｈｅａｒｔの部分を間違える人がいます。
身近にある英語なのですが、意外とわかりづらい様ですね。
ちなみに日本語に訳すと、“愛に満ちた物語”となります。是非そのような青春を過ごして貰いたいと思います。
特に久遠君はＡクラスの工藤さんと親しいと言う話を聞きましたので、コレを機に生活態度を改めてください。

吉井明久の答え
『ｈｅａｒｔｆｕｌｌ　ｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙ』

木下秀吉の答え
『ｈｅａｒｔｆｕｌｌ　ｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙ』

教師のコメント
正解です。強化合宿での久遠君との勉強は身になっているようです

ね。
特に吉井君は、久遠君と色々な意味で名コンビだと先生も思いますので、せめて良い部分だけを影響しあってください。

島田美波の答え
『ｈｕｒｔ　ｆｕｌｌ　ｒｏｕｇｈ　ｓｔｏｒｙ』

教師のコメント
ｈｕｒｔ……ケガ
ｆｕｌｌ……いっぱいの
ｒｏｕｇｈ……荒っぽい
ｓｔｏｒｙ……物語
意図的に間違えたのではないかと思う程綺麗に間違えてますね。
そのようなハートフルストーリーを演じるのは、貴女だけだと思います。

霧島翔子の答え
『ｈｕｒｔ　ｆｕｌｌ　ｒｏｕｇｈ　ｓｔｏｒｙ』

木下優子の答え
『ｈｕｒｔ　ｆｕｌｌ　ｒｏｕｇｈ　ｓｔｏｒｙ

教師のコメント
まさかもう2人いるとは。

次の日の全校集会にて。
光一提案の肝試しの設営及び、一般開放案の広報。
ならびにその設営には2年を総動員し、クラスごとのお化け屋敷を作る事に。

「それに合わせて、試召戦争は模擬も含めてしばらく禁止にする」

それに反対したのは、当然アンチ久遠派の連合陣。

「納得ができません！　模擬まで禁止だなんて、どう考えてもあいつらを庇う為じゃないですか！！」
「そうです！　あのブタ共には痛い目あわせないと気が済みません！！」
「そもそもあいつらの所為で何度も大騒ぎが起きているんだから、ここらでガツンと痛い目あわせるべきじゃないんですか！？」
「その通り！　そもそもこの案だって、あの核弾頭トリオの所為で落ちた評判の為でしょう！？　またあいつらが何かしでかせば、それだけでアウトじゃないですか！！」

特に筆頭である中林、清水、小山、根元は特に反対意見を示していた。
４人ともそれぞれ、個人的な恨みもある為である。

「黙りなクソガキ共！」

……が、学園長の一喝でしんと静まった。

「召喚獣はケンカの道具じゃないんだよ！　確かにあいつらのしで

かした事の所為で評判が下がってるのは事実だが、だからと言って大騒ぎを起こして良いってわけじゃない！！　……と言った処で、どうせ納得しやしないんだろ？　だから、勝負の要素も組み込んであるさね」

「勝負の要素、ですか？」

「個人を大勢で追い回すなんて大事がある以上、ちゃんとした勝負をやらせた方が良いという配慮さね。バカがあの3人だけじゃない以上、そうでもしないと治まりそうにないからね」

明久達と同類扱いに腹は立てたが、相手が相手の為に自重する代表格。

それを見て、頷く学園長。

「それに、ちゃんとした結果が出ないから納得しないんだろう？　それを踏まえてさね」

「……まあ、そういう事なら」

完全禁止されるよりはと、全員が頷いた。

その後、Fクラス教室にて。

「これが、光一の策略？」

「そうだよ。まあ脅かされる側なのは……」

「準備なんて面倒臭いだけだからな」

このあたりは、楽をする為に雄二が提案した事である。

「それに所詮は肝試しだし、勝負に勝とうが負けようが特にメリットやデメリットはない」

「勝とうが負けようが、それで向こうの気が済むならって所だな。これは光一の案だが」

いい加減うんざりして来たため、ハッキリした結果が出れば多少は治まるだろう。
という狙いを含めてのことだった。

「本当なら奥さんといちゃいちゃしてた、どこぞの雄二野郎に丸投げしたかったがな」
「でもどこぞの雄二みたいな誰かだと、ろくでもない事企みそうだからね」
「おいコラ、何気に人の名前その物を悪口扱いするんじゃない！それと光一、勝手に所帯持ち扱いするな！」
「もはや決定事項じゃろ。清涼祭の後、霧島が意気揚々と婚姻届を持って市役所に向かっておったぞい」

そこへ秀吉が参加して来た。

「え？　確か、男性の結婚年齢は１８だったよね？」
「ああ、確かそうだったよな。じゃあ結婚は無理だけど、事実上は婚約者扱いとなった訳か」
「事実危なかった……何としてでも、試験召喚戦争解禁になった暁には交際返上してやる！！」

気持ち新たに燃え上がる雄二だった。
往生際が悪いなと思う明久、光一、秀吉の３人。

「所で、その婚姻届とやらは今どうなってるんだ？　知ってて黙ってるなんて思えんぞ？」
「……弁護士に預けてあるらしい。だから何としてでも勝たないと、

俺の立場がいつまでたっても変わらない！」

3人は呆れたように雄二を見る。

「勝っても変わらないんじゃないかな？」

「その通りじゃ。もう籍を入れるべきじゃ」

「大体覗き騒動の主犯と交際を続けようって女、普通居ないぞ？もっと大切にしてやれよ」

普通、毛嫌いされても文句は言えない処遇である。

……が、翔子は雄二に対し、特に変わらない接し方であった。

「ぐっ……お前達はどうなんだモヤシにバカが！　木下と姫路に島田と未だに険悪じゃないか！」

「モヤシ言うなゴリラ！　俺は良いんだよ。もう今更どうこうしようって言う気はないし」

「え？　でも……」

「明久、俺は確かに仲直りはしたいと言った。けど吹っ切れた事に何ら変わりはないんだよ」

無理もないとはいえ、少々複雑な顔をする秀吉。

「元々フラれてる訳だし、そういう意味じゃ結果オーライだ。それより明久、お前どうなんだよ？」

「え？　いや、僕に聞かれても……むしろ、僕の方が許してほしい位なんだけど？」

「は？　……ああ、暗殺されそうになった（と解釈してる）んだったな？」

秀吉と雄二が、思いきりあきれ顔になった。

ふと暗殺疑惑の原因となった、あの時の事を聞いてみる事に。

「それなんだが、どうしてお前はあれを暗殺だと結論付けれるんだ？」

「え？　違うんだったら……脅迫材料を手に入れる為とか、変なクスリで錯乱でもしてたのかな？」

「……何故普通に夜這をかけに来たと考えんのじゃ？」

「やだな秀吉。幾ら僕がバカだからって、そんな非現実的な発想が出る程バカじゃないよ？　大体そんな解釈、２人に失礼じゃないか」

「いや待て！　色々とツッコミ所が多すぎるが、まず暗殺やクスリの方が非現実的だろ！？　それに暗殺犯の方がよっぽど失礼だ！」

病気ともいえる様な的外れな発想に、３人も流石に戦慄を覚えた。

「そうかな？　僕が死んで悲しむ人なんて光一と葉月ちゃん位しか思い浮かばないし、むしろ誰もが褒め称える様な物だと思うけど？」

明久はあっけらかんと、迷いもなく言い切った。

「……真っ先に俺でその次が小学生って、どんだけ自信ないんだよ明久は？」

「……光一が真っ先に挙げられるのはまだ分かるが、ワシ等は小学生より信用されておらんどころか、名前すら挙げられぬのか？」

「……時々こいつは、俺の予想を遥か彼方まで上回るから不思議だ」

それに度肝を抜かれた３人。

そして……。

「……私達って久遠君どころか、葉月ちゃんより信用されてないんですか？」

「……木下も挙がらなかった事がせめてもの幸いだけど、何でこんな事になるのよ？」
「……同情」

ソレを聞いていた瑞希と美波は、信用で小学生にも劣ることにショックを受ける。
近くに居たムッツリーニは、２人に対し同情の意を隠せずにいた。

「え？　どうしたの？」
「……いや、気にするな。まあそれより、肝試しだよ肝試し！」
「そっそうだな。さて、ルールはまだ決まってない訳だし、負けたら罰ゲームとか言い出しかねないしな」
「うむっ。それに勝負の要素があるのじゃから、テストも受けねばならぬしの」
「？　よくわかんないけど、そうだね」

Ｅクラスにて

「じゃあ、この案と配置で決定ね、それじゃ代表」
「ええ。あの核弾頭トリオやＦクラスのバカ共に、目にものを見せてやるわ！」
「けどその前に、俺達Ｅクラスであいつら倒せるのか？」
「うるさいわね！　あんなバカと過激派モヤシのコンビに、これ以上好き勝手されてたまるもんですか！！」
「落ち着いて代表、勝負じゃ分が悪いのは事実なんだから」
「ぐっ……」

Ｄクラスにて

「試召戦争での敗北を払拭する機会です！　何としてでも、あのブタ共に目にものを見せてやるのです！！」
「「「おー！」」」
「「「……おっ、おー」」」
「それでは美春達女子はテストを受けますから、貴方達ブタ共はさっさと準備しなさい！」
「……代表は俺なんだけど」

Cクラスにて

「試召戦争ではないけど、クラスで戦う場が出来た以上全力であのバカ共を倒すのよ！」
「だっ、代表、落ち着いて！」
「久遠光一、あのモヤシ絶対にギャフンと言わせてサラダにしてやる！！」

Bクラスにて

「覗き主犯のFクラスを粛正する絶好の機会だ！」
「けど切り込み隊長コンビ相手に、どうやって戦う気だよ？」
「確かに、物理で来られたら勝ち目はないから、狙い目は世界史……といいたいところだが、数学と英語を狙う」
「？　数学と英語だったら、久遠はAクラス並だぞ？」
「まあ見てろ。久遠、お前の功績はこの俺がより良く利用してやる。覚悟しておけ」

Aクラスにて

「え？　お化け屋敷のセッティングはしないの？」
「ええ。代表の意向で、私達はモニターに回る事になったのよ
「……先生に許可は貰った。そもそも私達には、Fクラスと争う理由がない」
「それはそうだけど……ああ、成程ね。じゃあボクも久遠君と回ろうかな？」
「え？　ちょっ、ちょっと愛子！？」
「何で優子が動揺するの？　フッてるんだから、ボクが久遠君にアプローチしても問題ないんじゃない？」
「うっ……」

それぞれのクラスでは、それぞれの思惑が交差。
そして、時は過ぎて肝試し当日。

「随分と良く出来てるじゃないか」
「あれ、学園長？　参加する訳でもないのに、仮装に偉く気合入ってますね？」
「確かこれ、ウチの学園で確認された妖怪“藤堂カヲル”だっけ？　ババァ長もやる気満々だな」
「ぷっ！　……おい明久に光一、失礼……ぷっくく……失礼だろ？」
「そろいもそろって無礼を体現してるクソガキ共だねえ！」

怖いもの知らず3人による、ある意味怖い場面があったとか。

第五十八問

問題　次の熟語の正しい読みを答え、コレを用いた例文を作りなさい

『相殺』

姫路瑞希の答え
『読み……そうさい
例文……取引の利益で借金を相殺する』

教師のコメント
そうですね。差し引いて帳消しにする、という意味なので貸し借りなどに使われる言葉です。

吉井明久の答え
『読み……そうさつ
例文……パンチにパンチをぶつけて威力を相殺した』

久遠光一の答え
『読み……そうさつ
例文……撃ち出された銃弾に銃弾をぶつけ威力を相殺した』

教師のコメント
惜しいですが間違いです。“そうさつ”という読みも一応ありますが、その場合の意味は“互いに殺し合う事”という物です。この場合の吉井君と久遠君の例文では、互いに打ち消し合うという意味なので、読みとしては“そうさい”が正解となります。

島田美波の答え
『読み……あいさつ
例文……のどかな朝。私は友達と相殺した』

教師のコメント
その朝は決してのどかではないでしょう。

肝試し当日、待機所となるFクラス教室にて。
AとFによる、B～Eの設営したお化け屋敷のモニター。

「態々俺達側につくなんて、霧島も物好きだな」
「……夫の補佐は妻の役目」
「待て翔子、誰が夫で誰が妻だ!?　後当然の様に言い放つな、バカ共が俺を狙ってる！　光一、アレ全部お前のコレクションじゃねえか!!」

雄二を狙い、異端審問会が久遠コレクションを手に攻撃準備を整えていた。

「おーい、後にしろ。それより今から提出するルール確認だ」

・2人1組での行動が必須、1人だけになった場合のチェックポイント通過は認めない。
（1人になっても失格ではない）
・2人の内、どちらかが悲鳴を上げれば両者とも失格。
・チェックポイントは、各クラス2つずつ合計8か所。
・チェックポイントでは、ポイントを守る代表者2名（クラス代表でなくても可）と召喚獣で勝負。撃破でチェックポイント通過扱いとなる。
・一組でもチェックポイントを全て通過出来れば脅かされる側、通過者を1組も出さなければ脅かす側の勝利。
・脅かす側の一般生徒は、召喚獣でのバトルを認めない。あくまで脅かすだけとする。
・償還時に必要となる教師は各クラスに1名ずつ配置する。
・通過の確認用として脅かされる側はカメラを携帯する。
・設備への手出しは禁止（一般公開する為）

「一応Aクラスには面倒だが、入ったクラスに合わせて点数に抑えて貰う」
「そっか。Aクラスの点数だと、簡単にチェックポイントを通過されちゃうからね」

教科は古典、現代国語、英語W、数学、物理、化学、保健体育、世界史。
それぞれを配置する事となっている

Eクラス　化学、現代国語
Dクラス　古典、英語W
Cクラス　世界史、保健体育
Bクラス　数学、物理

「……解せないな」
「何が？」
「Bだよ。何で俺の得意科目がこのクラスに集中してるんだ？」
両方が光一の得意科目であり、特に物理は教師クラス
光一に来て下さいと言わんばかりの内容に、2人は首を傾げていた。
「確かBは文系が多い筈なのに……明らかに光一を誘ってやがる」
「あのクソヤローの事だから、どうせ何か罠でも仕掛けてあるんだろうな」
まあここで考えても仕方がないと言わんばかりに、後回しに。
「じゃあ後は組み合わせだな。盛り上がる様に、男女ペアにしよう」
「ん？　珍しいな、雄二がそんな提案するなんて」
「別に良いだろ。元々勝負というより、向こうの気を治める為の物なんだ。それに学園公認で授業をサボれるんだし、大した問題もない」
ふーんと、光一と明久は頷く。
そして……。
「で、本音は？」
「翔子にペアを組むよう脅された腹いせに、全員を巻き込んでやろうと思った」
「うん、実にわかりやすい答えだ」
雄二の思惑がどうあれ、こういうイベントは男女出回るのが王道。
別に気にする事もないと、光一と明久は頷きあう。

「……美波ちゃん。ここで何とか、汚名を返上しましょう」
「……そうね。じゃあどっちがペアを組んでも、恨みっこなしで行きましょ？」
「……アタシもいい加減、素直になるべき、よね」
「……久遠光一に工藤さんが興味を持っている今が千載一遇のチャンスだ。待っててくれ、吉井君」

ソレを利用しようとする者たちもまた、動き始める。

「光一はペアどうするの？」
「そうだな……勝負の要素があるなら負ける気はないし、融合召喚の相性がいい人が良いかな？」

光一の所有する“融合召喚型”の腕輪。
光一も何度か融合召喚を展開する事で、人それぞれ相性という物を確認済み。
そういう意味では考慮すべきと、雄二も頷いた……が。

「融合召喚と言えば、現状になってからお前試したのか？」
「え？　ああ、そう言えばこの状態になってからは、まだやってないな」
「じゃあボクとやってみる？」

融合召喚に関しては、最初も愛子が相手だったりする。
早速秀吉が、召喚フィールドを展開。

「そうだな。じゃあ……」
「「「異端者に死を！」」」

ソレを嗅ぎつけない程甘くはない。
それがＦＦＦ団こと、異端審問会のメンバーである。

光一が呆れた様に周りを見回して、ポケットからある紙の束を取り出しそれを突きつける。

「むっ！　そっそれは！？」
「それじゃ……取って来い！」

紙の束を思いきり窓の外にブン投げると、異端審問会は我こそがと窓から去って行った。
ソレを見送り、唖然とするＡクラス達。

「さて、これで一安心だな」
「……なんかすごいね」
「言うな、疲れるから。じゃあ早速、サモン！」

光一が死神を呼び出し、愛子もそれに続く様にのっぺらぼうを召喚。
そして、いつもの様に召喚獣に手を繋がせて……

「ユニゾン！」

いつものキーワードを。

「……あれ？」

……しかし召喚獣をうんともすんとも言わず、死神とのっぺらぼうのまま。

「……何も起きないね？」

「おっかしいな……？」

右手につけられた腕輪と、召喚獣を見比べる光一。
ふと、死神の背の巨大ゲンコツが大きく開かれてるのを見て、雄二が疑問に思う。

「おい光一、背の巨大ゲンコツをどうして開いてるんだ？」
「え？　いや、別に操作して……ん？　もしかして」

光一は背の巨大ゲンコツを操作して、愛子の召喚獣をそれで掴んだ。

「え？　あの……」
「ユニゾン！」

背の巨大ゲンコツがのっぺらぼうに溶けていく感じで、融合が始まった。
そして巨大ゲンコツの代わりに、上半身だけののっぺらぼうが背から生えてる様な姿に変貌。
のっぺらぼうの方も、素手の筈がいつの間にかグローブが装備されている。

「成程、こういう風になるのか」
「背に人の上半身がはえてるって、随分とシュールな光景だね」
「あっ、でもボクの召喚獣の方は、ボクが操作するみたいだよ？」

愛子に言われて召喚獣を操作して見ると、確かに愛子の部分は操作ができない。

「相性もそうだけど、コンビネーションも必要って事か」
「ならばやはり組むならワシか明久、工藤と言った処じゃな」

「じゃあ光一が工藤さんとだから……ねえ秀吉、誰か一緒に行く宛てある？」
「んむ？　いや、特には……」
「……木下君、これ以上明久君の誤解を利用するなんて、許しません」
「……アキの誤解を解くまで、これ以上の進展なんて絶対に許さないわよ」
「……思わぬ伏兵か！？」
すさまじい殺意をこめた眼で秀吉を見つめる2人（＋その他）がいた。
「だから何故ワシが姫路と島田に目の敵にされるのじゃ？　明久よ、何とかしてくれ！」
「何だかよくわからないけど、ごめん秀吉」
「良いこと教えてやるよ。とある人が言いました、“誤解される方が悪い”と」
優子がそれを聞いて、思いきり顔をそらした。
瑞希と美波も、覚えがあるのか同様に顔をそらす。
「……お前、容赦ないな」
「伊達に学園1の過激派なんて呼ばれてねえ。それに俺はお人よしの明久と違って、根に持つ方なんだ」
「ある意味正反対のコンビだな」
雄二の言葉に、大半が頷いた。
「そういう事だったら……」

コンッ！

「……吉井明久よ、よもや異端者ではあるまいな？」
「ん？　なんだ、もう戻ってきたのか？」

それでも、異端審問会が黙ってはいなかった。

「おいおい、折角Ａクラスが来てるんだから、他人の邪魔してないでお前らも誘えば良いだろ？　こういうイベントなんだから、異端とか抜きにして楽しむ事を考えるべきじゃないのか？　まあ自信がないなら別だが」
「自信ならある！」
「俺なら出来る！　むしろ、出来なきゃおかしい！」
「そうだ！　よし、やるぞー！」

光一の言葉で全員が活気に溢れ、いざＡクラス女子へ。
その様子を見て、一言。

「単純な奴等。じゃあ俺は工藤と組むか」
「じゃあ秀吉、よろしくね」
「うむっ、よろしくじゃ」

「……」
「……優子、本当にいいの？」
「……良いわよ、別に」

その数分後。

「判決、羨ましいから殺す！」

血の涙を流した異端審問会が、明久と光一と雄二を狙っていた。

「なんだ、皆して失敗したのか？」

呆れたように言う光一に、全員が焦りながら反論。

「ちっ違う！　他はどうか知らんが、向こうには向こうの都合があったんだ。決して俺がモテない訳じゃない！」

「俺だってそうだ、決して俺がモテない訳じゃない！」

「いや、都合云々じゃなくて、そんなもん見える様にポケットに入れた奴と組みたがる女子が居るか」

全員のポケットから、先程光一が放り投げた１８禁指定のお宝写真が微かに存在を主張していた。

「「「じゃあお前の所為だ！！」」」

「文句言うなら返せ！」

「本日異端審問会は休止だ（このお宝画像は手放したくない）」

「「「了解！（思考の一品だ！）」」」

全員の声と思惑が一致していた。

「さて、ペアどうするかな？」

「ボクと組むって話でしょ？　ボクそういうの気にしないから」

「そうか？　……助かるよ」

以前光一は、優子にその手の物を見られて殺されかけた経験があった。

それ故に、光一はしきりに優子の方向を気にしてる（生命的な意味で）

「……雄二、肝試しなんて怖い」
「ウソつけ。怖がってると言うのは、ああいうのを言うんだ」

「……でもやっぱり、肝試しなんて怖いです」
「……うっ、ウチは別に、怖くなんて」

雄二の指差した方向には、これからやる事を思い出して震えてる女子2人。

「……成程。ゆっ、雄二、私、怖い」
「思いっきり棒読みじゃねえがぎゃあああああっ！！！」

「何よ、騒々しいわね」
「準備ができたから、来て良いわよ」

そこへ、来訪者が現れた。
Eクラス代表の中林と、Cクラス代表小山である。

「何だ、態々教えに来てくれたのか？　小指に中指……じゃなかった、小山に中林」
「誰が小指と中指よ！？」
「そう言えば、あんたの所為で私達はクラスで化け物呼ばわりよ！　どうしてくれるのよ！？」

光一のオカルト召喚獣は、背の巨大ゲンコツの指先に倒した敵の顔を投影し、それを敵に噛みつかせる特殊能力を持っている。
巨大ゲンコツの指は、それぞれE～Aを小指から親指までで現して

おり、それらに中林、清水、小山、根元、夏川の顔が現在投影。
それにより、この5人はクラスで怖がられていた。

「とにかく、覚悟しなさい久遠光一！」
「あんたは絶対ギャフンと言わせてやる！」
「はいはい。楽しみにしておくからとっとと戻れ」

こうして、クラス間肝試し勝負が幕を開けた。

第五十九問

問題　以下の英文の（　）に単語を入れて正しい文章を作り、訳しなさい

『Ｓｈｅ　（　）　ａ　ｂｕｓ』

姫路瑞希の答え

『Ｓｈｅ（ｔｏｏｋ）ａ　ｂｕｓ

訳：彼女はバスに乗りました』

久遠光一の答え

『Ｓｈｅ（ｇｏｔ）ａ　ｂｕｓ

訳：彼女はバスに乗った』

教師のコメント

正解です。２人の解答はいつもながら見事です。

吉井明久の答え

『Ｓｈｅ（ｉｓ）ａ　ｂｕｓ』

教師のコメント

何と訳すのでしょうか。一見文章として正しく見えそうですが、明らかに間違いです。日本語として訳せないような文章を書くようではまだまだ……

土屋康太の答え

『訳：彼女はブスです』

教師のコメント
……目から鱗が落ちました

Aクラスの点数制限試験を終えて、現在は待機場所である体育館。
使用するのは、校庭に設置された4つのプレハブ小屋（大きさとグレードはクラスごとに差異あり）
設置してる間に運動部の部活は、近くのスポーツセンターにて行われていた。

「お金掛けてるね」
「召喚獣を用いた肝試しなんて、そこらのお化け屋敷じゃ比較にならんからだろ」
「システムの宣伝にもなるし、あのババァ長にしてみれば調整失敗さまさまって所……」
「聞き捨てならないセリフだねえ」

そこへ割り込んできた声。
ふと、３人が振り向くと……

「なんだ？　誰の召喚獣だこれ？」
「光一、見間違えるのも無理もないがこれはババァだ。失礼だろ」
「雄二も失礼だよ。学園長だって好きで妖怪みたいな姿をしてる訳じゃないんだから」
「３人とも失礼だよクソジャリ共！！」
「「「「「……すみません、学園長」」」」」

３人の漫才に怒る学園長に、瑞希と美波、優子と愛子、翔子が揃って謝った。
Ａクラス全員が、堂々と学園長を妖怪扱いする核弾頭トリオに畏怖の視線を向けて、秀吉も苦笑い。

「で、どうしたんです？」
「様子を見に来たのさ。Ｂ～Ｅまで揃いも揃って、血の気が多いみたいだからね」
「すまないな。このバカ共の所為で」

厚顔無恥の雄二に、流石に学園長も何も言えなくなった。
少し腹が立った光一は、ある包みを翔子に差し出す。

「霧島、プレゼントだ」
「ん？　なんだ、翔子に贈り物か？」
「ああ、俺の気持ちだ。是非受け取って欲しい」

その光一のセリフに、優子と愛子が光一に驚きの視線を向ける。
明久達Ｆクラスの面々も、光一が今までやってきた事は知ってるため、驚愕の視線を向けた。

「ちょっと久遠！　幾らなんでも、人の彼女に手を出すなんてエチケット違反にも程があるわ！！」
「そうです！　そんなの霧島さんが受け取る訳ないじゃないですか！！」

当然、翔子の気持ちを知ってるＡクラスおよび、Ｆクラスの女子達は猛然と光一に抗議。
その当人は、その包みを見て何か気付いた素振りを見せると……。

「……ありがとう」

とても嬉しそうに、その包みを受け取った。

「え？　……そっそうか、良かったな翔子！」

少々動揺しつつも、自由の身になれるかもしれない事に喜ぶ雄二。

「だっ、代表！？」
「……だって」

翔子が包みを開け、取りだした物は……

「……これ、欲しかったから」

スタンガン（５０万ボルト）
手錠＆首輪（雄二の名前入りタグ付き）
犬のしつけ方

「光一ィィィィイ！！」

「喜んでもらえてうれしいよ。それじゃそれを使って、雄二と幸せな家庭を築き上げてくれ」
「どんな幸せだぎゃあああああ！！」

復讐完了と言わんばかりに、明久に向けてVサイン。
明久も良い笑みを浮かべ、それを返す

「さて、そろそろ始めるか」
「……アンタ達は一体、どんな間柄なんだい？」
「それは気にしない方向でお願いします。それで光一、どうする？」

順番はEから順に、1つずつ攻略していく設定。
その中で、E～Bまでが仕掛けを作り、2つあるチェックポイントでの召喚獣バトル。

「んじゃま様子見って事で、とりあえずFクラス男子勢で行ってみようか」
「「「任せておけ！」」」

とりあえず、3組ほどEクラスに先行させる事に。
ちなみに現在、プレハブ小屋に近いと言う事で、体育館である。
その様子は、Aクラスから運び出されたプラズマディスプレイにて表示される事に。

「肝試しなんて久しぶりだねえ。アタシの若い頃なんか、墓場を通ってのチェックポイントに……」
「ババァ長、人類の歴史を語ってないでこっち来てください」
「まだ半世紀しか経ってないよ！！」

いざ、肝試し開始

『ね、ねぇ……あの角、怪しくない……？』
『そ、そうだな……何かでてきそうだよな……』

設置したモニターから、先兵として出撃したＡクラス男女ペアの送ってくる映像と音声が流れてくる。
演出の為に光量が絞られていて、ボヤけた感じのその画は、体育館で見ていても結構なスリルがあった。

『そ、それじゃ、俺が先に行くから』
『うん……』

カメラが見るからに怪しい曲がり角を中心に、周囲を映していく。
カメラを構えた2人は、入念な警戒態勢を取りながらそちらへと歩を進めていった。

「み、美波ちゃん……あの影、何かいる様に見えませんか？」
「きき気の所為よ瑞希。何も映ってないわ」

美波と瑞希が、手を取り合ってモニターを遠目から見ている。
そして、カメラが曲がり角の向こう側を映し出し、身構える面々。
しかしカメラには、その先に続くただの道を映し出しただけだった。

……が

『『ギャアアアアっ！！』』
「「きゃあああああっ！！」」

その次の瞬間、向こうから大きな悲鳴が響き美波と瑞希が同時に悲

鳴を上げる。
それに合わせて、Ａクラス面々の女子も悲鳴を上げた。
「……失格」
ムッツリーニが用意してある機材を指差して呟く。
『ち、血まみれの生首が、壁から突然出てきやがった……』
『後ろにいきなり口裂け女が居るなんて……』
そんなつぶやきが聞こえてくる。
「ふーむ……どうやら、向こうもカメラを通じてこちらの様子が見えてるらしいな」
「え？　そうなの？」
復活した雄二がそう呟くのに、明久が疑問を投げかける。
それに光一も参加しての談議が始まった。
「じゃなかったら、カメラの使用なんて俺達にとって有利だろ。少なくとも、何があるかが俺たち後発組に自然にわかる」
「向こうも見ていたとしたら、標的がどの位置でどの辺に注意を払ってるかが分かるからな。向こう側としてもタイミングが取りやすい上に、視覚から襲いかかるのも簡単だ」
「あっ、そっか。おまけに僕以外の召喚獣は物に触れないから、障害物を通り抜けて急襲掛けられるね」
「成程のう。何台も固定カメラを設置しなくとも、ワシ等自身が情報を与えておるのか。それは向こうもさぞかしやりやすいじゃろうな」

モニターでは既に、2、3組目の悲鳴が上がり、失格となった。
最初のEからこれでは、勝負の先が思いやられる。

「でもだからと言って、Aクラスの面々が失格になり過ぎるとチェックポイントが辛いぞ？」
「確かにね。点数が抑えられてるとは言え、それでも単科目は代表格以上はみんな取ってる訳だし」
「だったら、コッチも手を打つか。須川&福村ペア、朝倉&有働ペア、出番だ！」

雄二がその場に座ったまま声をあげると、しばらくしてFクラスの見慣れた顔がモニターに。

『行ってくるぜ！』
『カメラは俺が持つぞ！』

時間をずらして突入する為、朝倉&有働ペアは待機。
須川&福村ペアがカメラを構え、2人は何の躊躇もなくスタスタと歩を進めていく

「あ、こうやって何でもないかのように映して貰うと、さっきよりも怖くなくて助かります」
「そうね。これならまだマシよね」

普通に警戒してる人のカメラワークより、こうやって無警戒でどんどん進んでいく方が怖くない。
それにこうやってずんずん進まれると、脅かす側もタイミングが取りづらい。

『おっ、あそこだったか？　何かでるって場所』

『だな』

立て続けに3ペアがやられた曲がり角を映し出す。
2人がカメラを構えたまま曲がり角を曲がり、何気なく横を移すと
……

「「きゃあああああーっ！」」

そこには、血みどろの生首が浮いていた。
そしてそのままカメラはさらに動き、背後を映し出す。
そこに居たのは、耳まで口が裂けているキミが悪い女のひと。

「「きゃあああああっ！　きゃあああああっ！！」」

美波と瑞希だけでなく、Aクラスのほぼ全員が悲鳴をあげていた。
けれど……。

『おっ、この人少し口は大きいけど美人じゃないか？』
『いやいや、こっちの方が美人だろ。首から下がないからスタイルはわからないけど、血を洗い流したらきれいな筈だ』

冷静に相手を見定めている2人だった。

「やっぱりね」
「な、なんでアイツらあんなに平気そうなのよ！？　アキ達も！怖くないの！？」
「いや、だって……」

明久は光一と雄二、秀吉とムッツリーニに目配せをして頷く。
それにこたえる様に、4人は頷いた。

「別に命の危険がある訳じゃないからね」
「姫路と島田が明久にしてる拷問とか、優子にやられてる折檻に比べればまだ可愛いもんだ」
「全くじゃ。光一が姉上の着替えに出くわしてボロボロにされた時など、あの程度の比ではないぞい」
「グロい物はFクラスで散々見慣れてるしな」
「……あの程度、殺されかけている明久に比べれば大したことはない」

今更流血程度で驚くような繊細な神経の持ち主など、存在しないからである。
それからも悲鳴をあがる中で、須川&福村ペア、続いて入った朝倉&有働ペアも、かなり先へと進む。
井戸から現れるろくろ首、一つ目小僧がいきなり浮き出てきたりなどのさまざまな演出があった。

が、破竹の勢いでそれを通過し、Eクラス女子2人の待ちうける開けた場所に到達。
その中心では、化学教諭である布施先生の姿があった。

『おお、チェックポイントか。楽勝だったな』

特に怯える事もなく、2組はEクラスチェックポイントへ到達。

『じゃあまずは俺たちからだな』
『では、行くぞ！』
『『『サモン！』』』

『Eクラス　源涼香&古河あゆみ　化学９９点&１０１点』

ＶＳ

『Ｆクラス　須川亮＆福村幸平　化学５４点＆４９点』

須川＆福村ペアは試召戦争、覗き騒動で慣れた操作技術を使い、慣れていない２人を圧倒。

一度撃破したチェックポイントはそのまま終了の為、そのチェックポイントは引き払われた。

「須川たちもやるもんだ」

と、光一が感心したようにつぶやく。

『あー、畜生。何でこの俺が須川なんかと……』

『お前がモテないから悪いんだろ』

モニターから、不快そうな会話が響いてくる。

まあ普通は女子と楽しむべき肝試しが、よりにも寄ってＦクラス男子と組む羽目になったら不満だろう。

『なんだと須川……？　お前だって声かけて全滅してただろうが』

『ち、違う！　あれは別に断られた訳じゃない！　向こうには向こうの事情があったんだ！　俺がモテない訳じゃない！　上手くいけば、久遠の様に声を掛けられてる筈なんだ！』

『俺だってそうだ！　俺はモテない訳じゃない！　タイミングが悪いだけなんだ！』

「……失格」

「アイツらは何をやってるんだ……？」

「……感心して損した」

アトラクションに驚く事もなく、化学のチェックポイントを撃破した2人はあっさりと失格。
……それも、頭の悪い言いあいにより。

「けどまあ、朝倉と有働がまだいるんだし、次のチェックポイントまでの仕掛けはわかるだろ」
「そうだな。それが終わったら、明久と秀吉に行って貰う」
「え？　僕と秀吉？」
「まあ妥当だろ。態々Ａクラスの戦力を使う必要もないしな」

『Ｅクラス　中林宏美＆三上美子　現代国語１０９点＆９９点』
ＶＳ
『Ｆクラス　朝倉正弘＆有働住吉　現代国語４４点＆４９点』

その話し合いをしてる間、モニターでは朝倉＆有働ペアがチェックポイントに至り、やられていた。

「それじゃ、行こうか秀吉」
「うむっ」

「……木下君ばかり、ずるいです」
「……誤解さえされてなかったら」
「……僕にも可愛さがあれば」

明久と秀吉ペアが出ていく時、怨念の視線が集中していた。

そして、チェックポイント

「あら、久遠の腰巾着コンビじゃない」

「アタシ達相手じゃ、腰巻着で十分って事！？」

到達した明久と秀吉を出迎えたのは、不快そうな視線を向ける中林＆三上ペア。

「僕達、光一の腰巻着だって？」

「……酷い扱いじゃのう」

「まあいいわ。アンタ達をさっさと倒して、すぐにアイツを引きずり出してやるんだから！」

『Ｅクラス　中林宏美＆三上美子　現代国語１０１点＆９５点』

ＶＳ

『Ｆクラス　吉井明久＆木下秀吉　現代国語６８点＆６５点

Ｅクラスの風神＆魔女のペアに対し、デュラハンと猫又のコンビ。

魔女が杖を振り上げ秀吉の猫又に、風神が拳を振り上げデュラハンに襲いかかる。

……が。

「っ！？」

「攻撃が、当たらない！？」

杖も拳も悉くよけられ、時折来る爪や剣でじわじわと削られていく点数。

「一応、試召戦争や召喚大会、覗き騒動と召喚獣を扱う機会が多いからね。Ｅクラスみたいに試召戦争に興味がない相手に負ける事はないよ」

「うむっ。それにワシ等には腕輪があるのじゃ、練習もやっておる

からの」

デュラハンが剣を振り上げ、風神を一閃。
猫又が爪で魔女を切り裂いて、チェックポイントは通過確定。

「やったね秀吉」
「うむっ」

明久と秀吉は笑顔でハイタッチをした。

「じゃあ次は……っ！？」
「んむ？　どうしたのじゃ？　明久よ」
「……今、ものすっごい悪寒が背を走った様な」

「吉井明久……オネエサマを誑かすガイチュウ……殺します……コロシマス……ころします……コロコロ……」
「……しっ清水さん、怖い」
「……何でこんな事に？」

第六十問

問題　以下の状況を想像して質問に答えてください

『貴女は大好きな彼と2人きりで旅行に行く事になりました。ところが、飛行機に乗っていざ出発、というところで忘れものに気がつきます。さて、あなたは一体何を忘れて来たでしょう」

姫路瑞希の答え
『頭痛薬や胃薬などの医薬品」

教師のコメント
これは『貴女が好きな人に何を求めているか』について分かる心理テストです。忘れ物は貴方に欠けている物を現し、忘れても気がつかずに出発してしまったと言う事は、一緒にいる彼がそれを補ってくれるとあなたが考えているからなのです。どうやら姫路さんは、好きな人に安らぎを求めているようですね

木下優子の答え
『拘束具』

霧島翔子の答え
『手錠』

教師のコメント
忘れ物の前に、持っていこうとする時点で間違っています。

工藤愛子の答え
『下着をはいて行く事』

教師のコメント
貴女は好きな人に何を求めているのですか

Eクラス攻略完了。
一旦待機所に戻った明久と秀吉をくわえ、次のDクラスに向けての作戦会議が始まった。

「さて、Dクラスだが……」
「明久、行って来い」
「いっ、嫌だよ！　何故かEクラスを攻略してから寒気が止まらないんだから！」

雄二の指示に、明久は断固拒否という姿勢だった。
光一はソレを見て、うんうんと頷く。

「気持ちはわかるよ。俺だってあんなのに関わりたくない」
「けどお前の場合、エサがあるからな」

光一は右手につけられた“融合召喚型”の腕輪をみてため息をついた。

「何だい？　その腕輪はパーソナルデータの登録が必要だから、アンタ以外に使えないって話してないのかい？」
「言っても聞かないんだよ。“お姉さまと美春の愛を持ってすれば、そんな事何の障害にもなりません！”　つってな。おかげでいっつもカッターやら持って追い回される日々だ」
「……バカはあんた達だけじゃないのかい」

犯罪が起こりかねない爆弾を抱えてる事に、ため息をつく学園長。
少なくとも、迷惑してる側にしてみれば覆いに賛同だった。

「さて、Dクラスだけど……」
「「「俺たちに任せとけ！」」」
「一応そのつもりだ。１つ目のチェックポイントさえなくなれば、Dなんか敵じゃない」

Eは化学、Dは古典のチェックポイントがある為、迂闊に踏み出せない光一。
そのあとの英語のチェックポイントならば、Aクラス点数保持の為、Dでは相手にならない。
ただし、それはあくまで英語の場合である。

「化学も古典も明久未満だからなおまえは」
「ほっとけ！（化学３点　古典４点）」
「否定できないでしょ、アンタどういう訳か苦手科目じゃ小学生レ

ベルも……って待ちなさい、どうしてアタシの姿を見るなり距離を取ろうとするのよ？」
「軽くトラウマになってんだよ！」
明久同様に、暴走騒動の傷は未だ癒えていない光一だった。
「文月学園１の過激派と名高い男が、よもや女１人に怯えるとはな」
「人の事言えるのかお前が！？」
「どうでも良いがガキ共、次行かなくて良いのかい？」
そうだったと２人は気を取り直し、早速先遣隊の編成に。
Ａクラスは基本、日ごろ勉強ばかりで体力も使わないどころか、荒事やこの手の事に慣れていない。
少なくとも、こういった事に関してはＦクラスに断然劣っている。
「要するにＦクラスは光一を始めとして奇人変人が多いから、この手の事に動じる人がいないってだけでしょ？」
最もである。
「ちょっと待て！　俺は奇人変人の筆頭かよ！？」
「常にエアガン持ち歩いてる過激派が何言ってるのよ？」
「このゾンビ集団と一緒どころか、別格扱いするな！」
Ｆクラス生徒の内４３人は、全員の召喚獣がゾンビだった。
ちなみに光一の死神の場合、本質は残虐である。
「ちっ違う！　俺の場合は何かの間違いなんだ！」
「少なくとも、吉井みたいにバカが影響してないだけまだマシだ！」
「大体久遠の場合は残虐じゃないか！　そんな社会不適合者だった

ら筆頭で当たり前だ！」

そのいい訳の嵐に優子は一言。

「成程、ゾンビが出て当たり前ね」

ため息交じりの言葉だった。

そして、Dクラスのお化け屋敷にて。

「わぁっ、結構作りこまれてるね」

「画面越しに見るものとは違って、結構雰囲気あるな」

話し合いの結果、出る事になったのは久遠光一と工藤愛子。

というより、とっととクリアさせようという狙いである。

「それにしても久遠君、全然動じてないね？」

「別に命の危険がある訳じゃないからな」

常日頃から、優子には散々痛い目をあわされてるからである。

実を言うと、その辺りは明久と共感する部分でもあった。

「工藤もあんまり動じてないな？　……期待してた事も起こりそうにないのが残念」

「ん？　期待してたって……ああ、そういう事？」

いらずらっぽい笑みを浮かべるや否や、光一の背後に回る。

そして……

「きゃ～こわ～い♪」
「おっとと……あっ、あの？」
「これが望みだったんでしょ？」

一方、体育館にて。

「愛子ったら……」
「……だから言ったのに」

その様子を見て、愛子に呆れた視線を向ける優子に、翔子がツッコミを入れる。

「よしよし、良いぞ……このまま工藤さんが久遠光一と交際という事になれば、最大の障害が無くなる」
「工藤さん、大胆です……どうかそのまま行って下さい」
「ちょっと複雑だけど、これで良いわよね。最大の敵の久遠にそういう人が出来れば、可能性は段違いだから」

ちなみにソレを見て嬉しそうにしてるのは、明久がらみで光一を嫌う面々。
そっち系で明久と噂されてるだけに最大の敵と思われており、そういう話は大歓迎の姿勢だった。

「坂本、次は俺に行かせろ。久遠に本物の敵はクラスに居るって事を教えてやる」

ただしそれはあくまでＦクラス女子２人＋αだけであって、他にしてみれば舌打ち物。

「待てよ近藤。ここは“安心確実仲間殺し”の異名を持つこの俺、武藤啓太の出番だろう」
「いやいや。“逆恨み清算します”がキャッチコピーの、この原田信孝に任せておくべきだ」
「なら俺達の怨念ものせて奴に鉄槌を下してくれ」

特にFクラス異端審問会にしてみれば、死刑ものだったりする。
その中でもまだ失格になってない者たちは、失格になった4人の激励もあって殺る気満々である。

「おいおいお前ら……ちょっと落ち着けよ」

肩をすくめながら、呆れたように全員を止める雄二。

「光一相手である事もそうだが、そういう事はクラス全員でやるべきだ」

はびこる悪事は見逃せど、他人の幸福を許しはしない。
それが2－Fの結束力であった。

「……大丈夫かな、光一？」
「……光一ならば大丈夫とは思うがの」

その中で明久と秀吉だけが、その様子を見て光一を心配している。
基本彼等は、常識的にまともな友情関係を築き上げているのである。

「……いやな結束力ですね」
「……代表も、こんな人のどこが良いのかしら？」
「全く、このクソガキ共は……」

ソレを見ていたＡクラス女子達と妖怪……もとい学園長は、揃って呆れていた。

「あっ、チェックポイントに到着したみたいだよ？」

『Ｄクラス　小野寺優子＆山田美香　古典１３１点＆１２５点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一（＋工藤愛子）　古典４点＋１４０点』

『やっぱり鬼門科目だとこんなものなんだね』
『試召戦争なら、融合召喚が出来る限りは問題じゃない』

メデューサとてけてけに対し、死神とのっぺらぼう。
死神の背の巨大ゲンコツが開かれ、のっぺらぼうを捕まえると……

『ユニゾン』

即座に融合召喚を行い、背の巨大ゲンコツに溶けるかの様にのっぺらぼうは死神の同化。
背にのっぺらぼうの上半身が生えたような姿の死神が、鎌を構えて立っている。

『それじゃ、さっさと済ませるか』

死神が鎌の柄のショットガンを構え、２人の間に撃ち出す。
２人はソレを大げさによけると、まずメデューサに向かって駆け出す。

『えっ！？』
『面倒だから、さっさと終わらせるぞ』

鎌を振り上げる体制となり、メデューサは身構える。
そこでのっぺらぼうの正面になるように体をひねらせて、のっぺらぼうがメデューサを捕まえた。
メデューサを捕まえたまま、死神はてけてけの方に駆け出して、身体を思いきり回転させてメデューサをてけてけめがけてブン投げる。

『えっ？　ええっ！？』

咄嗟の事で対応しきれず、てけてけとメデューサは対応しきれず正面衝突。
すかさず駆け出して、死神の鎌が2体の首をとらえ……

『ハイ、終了』

古典チェックポイント通過。

「ふむっ、この仕様での融合召喚はああいう形態なのかい？　成程ね」

ちなみに研究者として、融合召喚のデータも欠かさずチェックしていたとあるババァの姿があった。

「即席コンビにしてはすごいのう」
「うん。僕たちがやってもあんなこと出来るかな？」
「難しいじゃろうな。そう言えば、ワシ等の融合はまだじゃったの」
「どんなのになるんだろうね？」

ソレを見て、融合相性のいい明久と秀吉も、感心したように声をあげた。

ついでだが、自分達の融合時にはどうなるかにも興味がわいてきている。

「……やっぱり明久君と木下君は」
「久遠と木下は、やっぱりウチ等の敵だわ」
「おのれ久遠光一」

当然だが、それを見てとある2人の女子＋αは、その渦中ともいえる人物をあらためて敵視していた。

『あっ、もうチェックポイントだよ?』
『さて、そろそろ……っ!』

そこから何本かのシャーペンやカッターが光一めがけて投擲。
光一はスタンガン（警棒型）を取り出し、それを弾く。

『いきなりずいぶんな挨拶だな』

警棒型スタンガン（３０万ボルト）を両手に構え、チェックポイントを睨みつける光一。
そこには、両手にカッターを構えた少女、清水美春の姿があった。

『来ましたね久遠光一。今日こそはあなたを抹殺し、その腕輪を美春の手に』
『いい加減うっとおしいな。やってもいいけど、コレまだ買ったばっかだから扱い慣れていないんだ』
『あなたがさっさとその腕輪を渡さないから悪いのです』
『身勝手な事で』
『2人とも、召喚獣勝負をする場なのですよ?』

チェックポイント担当の遠藤教諭の注意で、一先ずは2人は武器を納める。

『よし、決めた。この勝負、お前が勝ったら腕輪はやる』
『最初からそういう態度に出ればいいのです』
『その代り、お前が負けたら腕輪は諦めて貰うぞ？　もう二度とこの腕輪を狙うな』
『何故私がブタ野郎と約束をしなければならないのですか？　そもそもブタのくせに取引等……』
『じゃあこの腕輪壊そうかな？』

ソレを聞いて、美春は光一を睨みつけギリっと歯軋りをさせる。
腕輪が壊れてしまえば、自身の目的は達成が出来ない。

『……わかりました。ですが、ちゃんと守るんでしょうね？』
『ああ、Fクラスの面々が証人だ。無論、お前の大好きなお姉さまとやらもな』
『良いでしょう。お姉さま、美春の雄姿を見ててください！　久遠光一、殺します……ころします……コロシマス……ころし殺しコロしころコロコロ……』

光一に怨念の言葉を吐きながら、美春はどす黒いオーラを発し始める。
待機所及び、そのお化け屋敷中から悲鳴が上がった。

「うわっ……やっぱりこうなるんだね」
「……光一よ、せめて生きていてくれ」

明久と秀吉は、信頼しつつもどこかあえなくなるかも……という予感を感じつつ、それを見ていた。

『やれやれ……工藤と、そこのＤクラスの女子、悪いけど下がってくれ』
『はっ、はい！』
『そっそうだね……久遠君、生きてたらデートしようね？』
『……縁起でもない事言わないでくれ』

『Ｄクラス　元・清水美春　英語Ｗ１５３点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一　英語Ｗ２５８点』

『クオンコウイチ……そのクビとウデワをササゲナサイ』
『やれやれ……』

第六十一問

問題　以下の文章の（　）に入る正しい単語を答えなさい。
『分子で構成された固体や液体の状態にある物質において、分子を結集させている力の事を（　）力という』

姫路瑞希の答え
『（ファンデルワールス）力』

教師のコメント
正解です。別名、分子間力とも言います。ファンデルワールス力は、イオン結合の間に発生するクーロン力と間違えやすいので注意してください。

土屋康太の答え
『（ワンダーフォーゲル）力』

教師のコメント
何となく互換で覚えていたのだと言う事は伝わってきました。惜しむらくは、その答えが分子の間ではなく登山家の間で働く力だったと言う事です

吉井明久の答え
『（努）力』

教師のコメント
先生この解答は嫌いじゃありません。

久遠光一の答え
『（重）力』

教師のコメント
確かに万物に働く力ではありますが、これは分子の間でのみ働く力を問う問題です。

Dクラスお化け屋敷
英語Wチェックポイントにて

『Dクラス　元・清水美春　英語W158点』
VS
『Fクラス　久遠光一　英語W258点』

「コロシマス……コロシマス……コロコロコロコロ……」
「……最早人間じゃねえな」

異形に変貌した美春を見て、光一はある種の恐怖を感じていた。

召喚獣である迷い神の方も影響を受けてるのか、凄まじい形相だった。

「なっ、何でこんな事に……」

「久遠君、大丈夫かな？」

ペアのDクラス女子、玉野美紀はクラスメイトの変貌した姿に明らかに恐れを抱いていた。

工藤愛子もまた、標的にされている光一の身を案じつつも手出しができず。

ついでだが、お化け屋敷中から脅かし側の人間の悲鳴が木霊しており、大半失神していた。

「あんときも思った事だけど、戦いたくねえな」

「キシャアアアアア！！」

「なっ！？」

召喚獣と同時に、美春自身も両手にカッターを構え光一に襲いかかってきた。

死神が迷い神を迎え撃ち、光一も咄嗟に警棒型スタンガンで迎え撃つ。

「清水さん！　これは召喚獣による勝負ですよ！？」

「コロシマス……クオンコウイチ、ソノクビヲオネエサマヘノササゲモノトスルタメ、コロシマス！」

「ちぃっ」

警棒型スタンガンで美春の腕を受け流し、その隙を狙いもう片方のスタンガンを押し付ける。

それから一旦距離をとり、召喚獣を見るとそこでは迷い神の翻弄される死神の姿。

「ヒィーッ……フゥーッ……コロスコロスウバウウバウ」

「……マジか？　これ３０万ボルトなんだけど」

さして効いてる様に見えない姿に、戦慄が走った。

「しかも操作と両立までしてんのかよ？」

「オネエサマヘノアイヲモッテスレバ、ゾウサモアリマセン！」

左手に隠し持っていたベアリングで指弾を放つも、美春だった物は難なくそれを回避。

その隙を狙って、召喚獣は鎌を逆手に持ちショットガンを構える。

「カンネンシテクビトウデワヲワタシナサイ！」

「……召喚獣だけでも行動不能にするか」

召喚獣がショットガンで、迷い神の両足を撃ち抜いた。

迷い神が倒れると同時に、今度は両腕をも撃ち抜く。

「キシャアアアッ！！！」

美春が襲いかかってくると同時に、光一は警棒型スタンガンでそれを受け流し召喚獣を操作。

死神が大鎌を振り上げ、迷い神の脳天めがけ振り下ろし……。

「勝者、Ｆクラス久遠光一！」

勝鬨の声が遠藤教諭により挙げられた。

「おい、勝負ありだ」
「コロス……コロスコロスコロスコロス！！」
「ってダメ……ん？」

ドドドドド！

そこへ、鉄人が現れて元・清水美春を担ぎあげる。
じたばたと抵抗するも、びくともせず。

「ハナシテ！　アノブタヲコロセマセン！！」
「これは召喚獣による勝負だ。よって負けた以上先程久遠と交えた条件に従い、今後久遠への手出しは禁ずる！」
「アレハアンナブタデハナク、ミハルガ、ミハルガモツベキモノ！　オネエサマトアイノケッショウヲウミダスタメニツクラレタモノ！！　アレハミハルノモノデス！！」
「いい加減にしろ清水！　大人しく補習を受けるんだ！！」
「クオンコウイチ！　コロシマス！　コロシマス！！　コロスコロスコロコロコロコロ！！！」

この肝試しでも、負ければ補習は決定事項である。
鉄人に連れられ、呪詛の言葉を吐き続ける美春に、光一も怖気を感じずには居られなかった。

「……恐ろしい相手だった。ある意味高橋女史や鉄人よりも」

ソレを見送っての、光一の一言。
それはDクラスお化け屋敷内の全員、そして待機所である体育館内の失神してない者全員が全く同時に頷いた

「……ねえ、Dクラス制覇って事で良いかな？」
「……はい」

美春の合い方である玉野美紀の敗北宣言で、Dクラス制覇が決定した。
とりあえず、彼女は暫くDクラスからは怖気関連の視線で見られる事になるだろう。

所変わって、体育館にて。

「……何とか、勝てたね」
「ああ……一時はどうなるかと思ったが、流石は光一だ」
「うむ……ここで光一に倒れて貰っては、後々困るからのう」

Aクラスどころか、Fクラスの面々も流石に恐怖する場面。
体育館どころかお化け屋敷でも失神者が出ており、精神攻撃という意味では最悪の相手だったともいえる。

「さて、次はCクラスだが……どうしたものか？」

失神者も大勢出てるAクラスの面々を除けば、まともに行けるのはFクラス男子。
以前Bクラスを倒した事があるとはいえ、Fクラスの面々では流石に不安が残る相手。

「そうだね。流石にあんな相手の後連戦というのも、光一にかなり負担を掛ける事になるからね」
「そういう事だ。Aクラスの面々は今の清水を見て大半が失神してるし……っておい！」

雄二がふと見ると、そこには覆面をかぶりＦＦＦ団スタイルを固めたＦクラスの面々。
全員が武器を構えており、異端審問会の始まりを今か今かと待ちわびている状態だった。

「おいおい待て！　今光一を殺されたら、この先がきついだろ！」
「坂本、止めてくれるな！　清水に勝利し、工藤とデート確約と言う大罪を犯した異端者、久遠光一！　異端審問会の名に賭けて、奴の首を我等のシンボルとせねばならんのだ！！」
「「「うおおおおおっ！！！」」」

全員が賛同の怒声をあげ、止めることは不可能と悟る雄二達。
そこへ、光一と愛子が戻ってきた。

「諸君、ここはどこだ？」
「「「最後の審判を下す法廷だ！」」」
「異端者には？」
「「「死の鉄槌を！」」」
「男とは？」
「「「愛を捨て、哀に生きる者！」」」
「宜しい。それではこれより、２－Ｆ異端審問会を開始する！」
「やっぱり来たか……よっと」

そう宣言すると同時に、異端審問会は光一めがけて突撃。
それと同時に、ホースを手にした光一に水をぶっかけられた。

「なっ！？」
「ちぃっ！　この程度……で？」
「じゃあな」

「「「ぎゃあああああああっ！！！！」」」

電源を入れっぱにしたスタンガンを放り投げ、異端審問会は大半が戦闘不能に。
生き残りは……

「ムッツリーニと須川だけか」
「ちぃっ、流石は久遠光一。我らが精鋭たちを卑劣な罠にはめるとは」
「……裏切り者に死を」

エアガンを取り出し、構える光一。
ムッツリーニも両手に文房具（殺傷力あり）を構え、須川もどこから取り出したのか木刀を構えていた。

「悪く思うな！　これも俺のしあわ……もとい、我等異端審問会の血の盟約の為！」
「おいコラ須川。お前まだ俺を売る気だったのか！？　ある意味俺より性質悪い異端者だろうが！」
「ちっ違う！　我らが異端審問会の功績とするんだ！　そうすれば皆ハッピーな作戦じゃないか！！」
「ハッピーなのはお前の頭の中だけだ！」

当然、失神してない女子達は全員が須川に白い目を向けていた。

「とにかく、くたばれ久遠！」
「……抹殺」

投擲される文房具を回避し、木刀を振り上げ突進する須川にすれ違いざまにスタンガンで突き上げ戦闘不能に。

そして警棒型スタンガンとエアガンを構え直し、ムッツリーニと相対。

「やはりお前が残ったな、ムッツリーニ」

「……抹殺」

「なんだ、そんなに工藤が俺に興味を持ってる事が面白くないのか？」

「……！（ブンブン！）」

ムッツリである事を指摘されたとき以上に素早く首を振るムッツリーニ。

光一に知れ見ればカマを掛けたつもりだったのだが、その予想外の反応にあっけにとられた。

「……え？　何？　本当だったのか？」

「……！！（ブンブンブンブン！！）」

先程より必死に首を振り否定の意を示そうとする。

「え？　そうだったの？　ごめんねムッツリーニ君、気付いてあげられなくて」

「……！！！（ブンブンブンブンブン！！！）」

「だとしたら、悪かったな」

「……！！！！（ブンブンブンブンブンブンブン！！！！）」

まるで首が千切れてもかまわないと言わんばかりに、更にスピードアップするムッツリーニ。

「そうだったのか。ムッツリーニがなあ……」

「保健体育が得意な者同士だし、話が合う人って事で惹かれてもおかしくないよね？」
「そうじゃのう」

雄二、明久、秀吉もそれをみてハッキリと確信した。
そして女性陣も……

「土屋君が、工藤さんの事を……」
「意外……でもないわよね」
「趣味が合う物同士っぽいし、案外似合いそう」
「……うん」

瑞希、美波、優子、翔子の順に、割と納得した意見を出していた。

「……！？！？！？！？」

その状況について行けなくなったのか、顔を真っ赤にして逃走していくムッツリーニ。
ソレを見送った光一は一言。

「……俺の勝ちだ（すまんな、ムッツリーニ）」
「……久遠君、本音と建前が逆に出てるよ？」
「さて、次はCクラスだけどどうする？」

ソレを誤魔化すつもりで、話題を変えてはぐらかそうとする光一

「あっ、そっそうだね。えーっと、確かCクラスが世界史と保健体育だから……」
「おい、ムッツリーニが不可欠なんだが？」

雄二が責めるような目で光一を見る。
が、光一は特に問題ないと言わんばかりに頷いた。

「何とか出来るのか？」
「出来るさ。秀吉、ちょっと今すぐ体操着に着替えてくれ」
「ワシが？　それは良いが、どうする気じゃ？」
「良いから」

疑問符を浮かべながら、秀吉は服に手を掛け始める。
ソレを見て異端審問会のメンバーは全員復活し、明久は……

「ぎゃあああっ！！　目が、目がああああ！！！！」
「明久君は見ちゃだめです！」
「アキの目には毒よ！」
「こっちの方が毒だよぉォおぉおおおおおお！！」

瑞希と美波の２人分の目潰しを受けて、悶絶していた。
ついでだが、余計誤解が深まった瞬間でもあったりする。

「……雄二？」
「俺は何も見てないからな？」
「……それなら良い」

ちなみに雄二は、話を聞くなり目をそむけていた為無傷である。
無論、黒いオーラを放つ翔子に睨まれつつだが。

「ちょっ、ちょっと光一！」
「後にしろ。えーっと……そこだ！」

光一はボストンバッグから狙撃用ライフルを取り出すと、流れる様

なスピードである方向に構えて狙撃。
狙撃先のカーテン部分からバッ！　と飛び出す、カメラをもった影。

「お前なら必ず感知すると思ってたぞ、ムッツリーニ」
「……不覚」
「さっきは悪かったから戻って来い。次は保健体育がチェックポイントだから、お前の出番だ」
「……わかってもらえればいい」

とりあえず、一件落着。

「おい光一、最初は世界史だぞ？　お前ほどじゃないが、ムッツリーニも通常科目じゃ明久以下だ」
「明久はEクラスでもう使ったから一休みさせたいし……」
「じゃあボクが行ってあげようか？　さっきは結局何もできなかったし」
「だそうだ、良かったなムッツリーニ」
「……！（ブンブン！）」
「あはは、ボクって罪作りな女だね」

と、ムッツリーニは工藤愛子とペアを組む事に。
一応ペアの変更はダメというルールはないため、問題はない。

「そうだ。もしCクラス代表にあったら……（ごにょごにょ）……って言ってもらえるかな？」
「え？　良いけど、良いの？」
「あんなヒステリーにどう思われようが知るか。けど念には念を入れて、先駆けに雄二と霧島に出て貰うかな？」
「おいコラテメ！　それは俺に対してケンカ売ってでででででで！　肘がねじ切れる！！」

光一の言葉を受けるや否や、雄二の関節を極めて仲睦まじいカップル気分の翔子が嬉しそうに立っている。

「なあ霧島、もしCクラス代表にあったら……（ごにょごにょ）……って言ってくれるか？」

「……あまり気は進まないけど、プレゼントのお返しとしてならお安いご用。行ってくる」

「光一、いつかキサマをぶち殺す！！」

雄二をつれだって、いざCクラスのお化け屋敷に出向く翔子。

光一はBクラスお化け屋敷攻略に向けて、一旦一休み。

「ねえ光一、大丈夫かな？」

「大丈夫だろ。雄二や霧島がちょっとやそっとで悲鳴上げる訳がないし、世界史どころか保健体育も」

「いや、そうじゃなくて」

『さて、とっとと入るぞ……光一の野郎、戻ったら覚えてやがれ』

『……雄二。怖かったら、私に抱きついても良い』

『断る。そしてお前は怖くても1人で何とかしろ』

『……無理。私は怖い物がすごく苦手だから、ずっと雄二にくっついている』

『今度、俺を攻撃している時のお前の顔を見せてやる。本物の鬼がみられるぞ』

『……きゃあ、こわい』

『うぐぉおっ！？　か、関節が！？』

『……コホン、コホン。きゃぁ、きゃあ……？　いやぁ……？』

『お前今悲鳴の練習をしてるだろ！？　くそっ！　俺は絶対騙されなぎゃぁああ！』

『……そっか。ぎゃぁああ、と……』

「関節技で失格、なんて事になるのが心配なんだけど」
「だな……明久、念のために行ってくれるか？」
「それは良いけど……」

明久はちらりと、ある方向に目を向けた。
その先は、体育用具室。

「あんたはなんて事してくれるのよ！？」
「まっ、待つのじゃ姉上！　あれは光一の指示で、あっ、その関節はそっちに……」

グギミシボキッ！！

「すまん……さて、どうしようか？　世界史じゃ俺は戦力にならんが？（1点）」
「そうだなあ……」

光一がそうつぶやくと同時に、我こそはと動いたのは……

「アキ！　世界史じゃ戦力にはなれないけど、ペアが居ないんなら仕方ないから組んであげるわ！」
「制覇を考えるなら私と組むべきです！　私とペアを組んでください！！」

今が好機と、怖いのを我慢しつつ折角の機会を逃すまいと必死に明久に迫る2人。
だがその必死さが仇となり、誤解によってその必死さが湾曲して明久に伝わってしまう。

“２人はこの闇に乗じて僕を殺すつもりだ”と

「ちょっちょちょちょちょちょっと待って！　お化け屋敷はこの後一般開放するんだよ！？」

「何でそんなこと気にするんですか！？」

「そうよ！　あんたは何も考えなくて良いの！」

「えええ！？　それはつまり、僕の死体の処理方法はもう考えてるって事！？」

「「だからそれは誤解だって言ってるでしょ（じゃないですか）！！」」

ガチャッ！

「ごめん、秀吉ちょっと気分が悪くなったから保健室に……ってどうしたの？」

「それが……（かくかくしかじか）……という訳で」

「成程……ねえ吉井君、姉の責任としてアタシが行ってあげようか？」

「「「「え？」」」」

その言葉に、４人は目を丸くした。

そして２人が猛然と抗議。

「ちょっと優子、どういう事よ！？」

「そうです！　姉妹揃って誤解を利用しようなんて酷いです！！」

「勘違いしないで！　２人の誤解を解いてあげるつもりで言ったのよ。ほら、行くわよ吉井君」

「あっ、うん」

剣幕に押されて、ついつい従ってしまう明久。
突入は雄二・翔子ペア、ムッツリーニ・愛子ペア、明久・優子ペア。

「そして雄二が不在の為、臨時だが指揮は俺が取るけど良いか？」

試召戦争において、前線指揮官としても優秀な働きをしていた事は知ってるため、全員が頷いた。

「まああの中指のヒステリー女が代表だから、程度は知れてるだろうがな」

「……久遠君、嫌いな相手にはとことん容赦しないですね」

「……流石は文月学園過激派？1だけあるわ」

軽口をたたきつつも、雄二の座っていた席に座るとノートを開きペンを握る。
目は過小も過大もせずに罠を見据えるつもりだと物語っている程にカメラを見据えていた。

「時にクソジャリ。アンタの空間認識能力だけど、一般人と比べると随分と優れてるという話を聞いたが？」

「ん？　ああ、一応な。その気になれば銃だけじゃなくて、遠隔操作系の武器も使える筈だ」

「たいそうな自信だねえ。まああのバケモノじみたガキの攻撃を悉くよけてた辺りからも伺えるがね（これは良い情報が手に入ったよ）」

「……バケモノがバケモノねえ」

「何か言ったかいクソジャリ？」

「いえいえ何も。さて、Ｃクラス代表小山友香。名前だけの代表だろうがそれなりの物を見せてくれよ？」

「いい？　あのバカ共をこれ以上のさばらせる訳にはいかないわ！！」
「「「はっはい！！」」」
「特に久遠光一！　アイツだけは絶対に許す訳にはいかない！！」
「「「……無理な相談だと思う」」」
「何か言った！！？」
「「「いっ、いえ！」」」
「みてなさい久遠光一！　散々ヒステリー呼ばわりしてコケにしてくれた恨み、今日こそ晴らしてやるわ！！」
「「「（……いや、そういう事言ってるからヒステリー呼ばわりされるんだと）」」」

第六十二問

問題　以下の状況を想像して質問に答えてください

『あなたは今、独りで森の中で道に迷っています。明かりもなく暗い森の中を進むと、あなたは湖のほとりに小さな小屋を見つけました。これ幸いと中に入るあなた。すると、そこにはイスとベッドと肖像画が。さて、その肖像画に描かれている人物の特徴は？　頭に浮かんだものを3つ挙げてください』

姫路瑞希の答え
『1．楽しげな表情
2．優しい瞳
3．明るい雰囲気』

教師のコメント
これは“あなたの好きな人の特徴”についてわかる心理テストです。位森は貴方の不安を現し、そんな時に見つけた小屋の中にある肖像画は“あなたの心を支えてくれる伴侶”を表します。どうやら姫路さんの好きな人は、温和で明るくて楽しい人の様ですね。

工藤愛子の答え
『1．銃を持った手
2．意志の強い瞳
3．スマート過ぎる身体』

木下優子の答え
『1．銃を持った手

2．貧弱な体
3．意外と頼りがいがある雰囲気』

教師のコメント
最初の1つで2人の好きな人が誰かが一瞬でわかってしまいました。

清水美春の答え
『1．気の強そうな目
2．男らしい胸
3．ポニーテール』

教師のコメント
最後の1つがおかしい気がします

島田美波の答え
『1．折れた指
2．捻じ曲げられた膝
3．外された手首』

教師のコメント
全部おかしい気がします

「肝試し……困ったわね。アタシ、あまりこういうの得意じゃないのに」
「姫路さんや美波に比べたらずっとマシだと思うけどね」
「まあ、そうよね。それにさっきの清水さんに比べたら、こんな仕掛け子供だましだわ」

それには流石に明久も頷いた。
画面越しでも恐怖を感じたのだから、実際に目の当たりにしたDクラスの面々。
特に戦った光一の精神的負担はかなりの物だろう。

「はぁっ……僕も何でかわからないけど、あれに襲われる可能性があるんだよね」
「……それは御愁傷様。でも吉井君がハッキリしないからでもあるのよ？」
「ハッキリ？」

見紛う事無き、わからないと言う顔で明久が問いかける。
優子は呆れたように頭を押さえ、ため息をついた。

「あっ、ムッツリーニに工藤さん」

そこには先行したムッツリーニ＆工藤ペア。

「……珍しい組み合わせ」
「本当だね」
「まあ、そうだよね。ところで、こんなところで何してるの？」
「……（スッ）」

ムッツリーニが指を刺した方向には、世界史の田中教諭を中心とする召喚フィールド。
１つ目のチェックポイントである。

「「「「サモン」」」」

『Ｃクラス　黒崎トオル＆野口一心　世界史１５３点＆１４９点』
ＶＳ
『Ｆクラス　坂本雄二　世界史２６７点
Ａクラス　霧島翔子　世界史１５０点』

「あれ？　男子が出るなんて初めてじゃない？」
「あの覗き騒動で、Ｂ～Ｅまでの男子は発言力も立場も失ったも同然だから、てっきり裏方だと思ったけど」
「本気で勝ちに来てるんじゃない？　だってあの２人、結構コンビネーション良いよ？」
「……（コクコク）」

現れたのは、敵側がジェイソンと鎧武者。
対するは、狼男と……翔子その物の着物を纏った美人だが、その着物の下からは蜘蛛の足が。

「あれって、蜘蛛女？」
「……違う。あれは絡新婦」

「それってどんな妖怪なの、ムッツリーニ君？」
「……齢４００年の蜘蛛が妖力を持ち、美しい女に化けて男を惑わせ喰らう妖怪」
「……納得できるのが余計に恐ろしいわ、代表」

妖怪の事なれど、性的欲求への追求は欠かさない。
それが土屋康太こと、ムッツリーニである。

そうこうしている間に、雄二の狼男が鎧武者を殴り飛ばし、翔子の絡新婦が琵琶を取り出し殴りつけ終了。

「何で琵琶？」
「……絡新婦はその容姿と琵琶の音色で男を惑わせ、その隙に喰らう妖怪」
「……なにはともあれ、世界史のチェックポイント制覇ね」
「それじゃ、さっさと行きましょ」

あくまでマイペースな４人だった。
そして、チェックポイントを通過後

「きゃっ！」

優子がちょっとした悲鳴を上げた。

「なっ、何？　今、何かヌルってしたものが……」
「大丈夫？　木下さん」
「どうやら、刺激する感覚を触覚に変えてきやがったらしいな。散々視覚を刺激された以上、急に感覚にかえられたらついて行けない筈だ」
「となると、さっきの木下さんのは定番だとコンニャクとかかな？」

「……玩具の爬虫類もあるみたい」

そこへ翔子が、自分に触れただろう玩具の蛇をもって差し出した。
美女と蛇、妖しい組み合わせである。

「これでも刺激するには十分だから、Cクラスも考えてるね」
「でもおかしくない？　Cクラス代表は、確か光一に散々ヒステリー呼ばわりされて、いつも模擬試召戦争を仕掛けては適当にあしらわれてる、あの小山さんでしょ？　どう見ても感情に流されるタイプよ？」
「恐らく根元辺りに入れ知恵でもされたんだろ。召喚大会以来別れたって話だが、今はFクラスを目の敵にする者同士で利害は一致してる。どうやら根元の狙いには、小山とよりを戻す事も含まれてるらしいな」
「ホント、典型的な小悪党ね」

卑怯者の根元の事は、優子たちも聞き及んで居る。
最近は試召戦争敗北以来、すっかり影をひそめていた事も。

「待たせたな。援軍だ」
「久遠からお前達の突破口を開けってな」

そこへ、光一が指示したらしい援軍の４ペアが到着した。
全員がFクラスである。

「へぇっ、光一も良い仕事するな」
「けど、流血沙汰に慣れてるとは言え、少しやり難そうだけど？」
「やれやれ、だから吉井はバカなんだ」

その内の1人が、呆れたように首を振った。

「？　何か策でもあるの？」
「おう。とっておきの方法だ」

自信満々という様に胸を張る、Ｆクラス男子生徒。
雄二も流石に興味をひかれたのか、聞いてみたい衝動にかられた。

「良いか？　突然触ってくる物が怖くなって悲鳴をあげるのは、それが何だかよくわからない気持ち悪い物だからだ」
「うん、それで？」
「だから、その触れてくる物を“俺の事が好きで手を繋ぎたいけど、恥ずかしいからそこらの物を使ってしまう美少女”に脳内変換してやればいい。そうしたら、怖いどころか嬉しい接触に早変わりだ」
「な、なんだと……！？　それはあまりに妙案過ぎる……！　武藤、俺はお前の頭脳が恐ろしいぜ……！」
「へっ。よせやい」

当然、６人はソレを呆れたように見ていた。
体育館でも、光一は人選間違えたかと頭を押さえている。

「ねぇ雄二。あの２人、会話がモニター越しに皆に伝わっている事を知らないのかな？」
「わからん。何せ、恐ろしい頭脳の持ち主たちだからな」
「確かに恐ろしいね。じゃあ武藤君達、早く行ってきなよ」
「「任せろ」」
「ああ、行くのはお前達だけだ。残りはここで少し待て」

そのまま２人は歩いて行く。
そしてしばらくして……

「「ふおぉおーっ！！　たまんねぇーっ！！」」

脳内変換でトリップしたバカな声が2人分響き渡った。

「……あの声量なら、間違いなく失格」

「おい光一、あの2人が戻ってきたら始末しておいてくれ」

雄二がカメラに向かってそう言うと、6人は見なかった事にして3ペアを前に出し一路先へ。

一方、体育館にて。

「ん、了解」

とりあえず、スタンガンを取り出す光一。

「こっ、このクラスは、見てるだけならそんなに怖くないので助かります」

「そうね。これならウチも大丈夫かも」

「さーて、根元のクソヤローが関与してるなら、何が出るか？」

Cクラスは感情優先の代表だから、さして手の込んだのは出てこないと思っていた。

だが、根元が手を貸してるとわかった以上は、光一も本腰入れてノートに記入。

『ヴォオオっ！！』

突然備え付けられた棺がバンッと開き、そこからミイラ男が現れる

仕掛け。

『あかない……よぉっ……』

壊れた公衆トイレの方からの呼び声。

『ワタシ……キレイ……？』

ゆっくりと歩み寄る顔にスカーフを巻いた女性が、スカーフをとってその裂けた口を披露したり。

等の仕掛けの合間に、コンニャクなどの触覚を刺激するパターンが続く。

「意外と普通だな……」

「あっ、もうすぐチェックポイントみたいですよ？　何とか……」

「いや、油断できん。恐らく……」

『『『『『ふぉおおおおおっ！！』』』』』

突如、先行していた6人の悲鳴が響き渡った。

全員のメーターが赤を指しており、失格。

「なんだ？　何があった！？」

カメラを確認すると、その先にあったのは……。

「きっ、木下の、着替え写真……」

「何であんなのがCクラスに……って、すぐわかるか」

ムッツリ商会謹製

「大変だ！　坂本達が危険だ！　助けに行ってくる！」
「1人じゃ危険だ！　俺も行く！」
「待て！　俺だって坂本達が心配だ！」
「俺も行くぜ！　仲間を見捨てるわけにはいかないからな！」

ソレを見てなのか、Fクラスの面々は独断専行を始めていた。

「なっ！　ちょっ、待て！！」

光一の制止を無視し、全員が体育館を後に。
そしてカメラから……

『『『うぉおおおぉぉっ！　秀吉の着替えーーっっ！！』』』

叫び声が響き、当然失格となった。
Fクラス男子、総勢42名全員リタイア決定。

「なんでうちの学校の男どもってこうもバカだらけなのかしらね……？」
「どうして覗き騒ぎが起きたのかが良くわかる気がします……」

Aクラスの女子達が、うんうんと頷いた。

「今回ばかりは向こうの策を褒めても良いな。これであのヒステリーの水着だのが出てきたら精々悲鳴が上がる程度だが、これなら連動暴走も狙える。まさに一石二鳥だ」
「あんた何気に酷いわね」
「事実を言ってるまでだ。んで、明久達はというと……」

『なんだ？　どうして目隠しして進まなきゃいけないんだ？』
『さっき秀吉の着替えがどうとかって叫び声と、何か関係があるの？』
『……理解不能』
聞こえてくる会話から、どうやら相方に目を塞がれて進んでいるらしい。
「成程、考えたな。さて、そろそろチェックポイントだ」
「ねえ、そう言えばさっき霧島さんと工藤さんに、何か頼んでたけどあれはなんだったの？」
「すぐわかるだろ」
カメラで保健体育の大島教諭の姿が確認され、身構えたらしい面々。
『久遠光一はどこ！？』
雄二達を見るなり、そう怒鳴り散らすＣクラス代表。
『……あなたの金切り声が不快だからと、今は待機所で観戦』
『相変わらず人をなめてくれるわねあのモヤシ！　まあ良いわ、男子は揃いも揃ってＦクラスのクズ揃い。女子はＡだけどＣクラス並に落としてるなら、十分勝てるわ！』
『なんか嫌な人だね。“彼女にしてた根元の気が知れない”って久遠君が言ってたの、わかる気がする』
翔子と愛子が光一に吹き込まれた事を言ったおかげで、ギリギリと歯軋りをさせながらキィィとヒステリックな声をあげる小山代表。
モニター側では、光一が楽しそうに声をあげて笑っていた。

『大体どうしてAクラスは揃いも揃って、Fクラスのクズ共と仲良くやってるのよ!?　覗き主犯のクズ共を粛正しようって言う気はないの!!?』

『……彼らにはもう罰は下されたはず。態々ソレを蒸し返す必要性が全く感じられない』

『たかが停学ごときで納得できる訳ないでしょ!?』

『それはそうだけど、でも私怨目的の試召戦争を提案したり、模擬試召戦争で何度も突っかかったり、それで勝てないからと個人に集団で襲いかかったりと、幾らなんでも度が過ぎてるわ』

『うんうん、たった1人や2人にそこまでやる事の方がずっと非常識だよね。逆にかわいそうって思えちゃうよ』

揃いも揃って、正論とも言える事を突きつけていくAクラス女子上位トリオ。

言い負かされる中で、ブチンと何かが切れる小山代表。

『もう良いわ！　聞こえてるわね久遠光一、アンタを絶対に引きずり出してやるんだから!!』

「はいはい」

当人はというと、既にBクラス攻略の案を練り始めていた。

「マイペースだねえ」

「あいつらならやれると信じてるからこそだよ。だから俺は俺の成すべき事に集中できる」

「成程。あんた達もただのバカじゃないって事さね？」

「まあそんなところだ。アンタもただのよう……ババァじゃないな」

「……いい加減あんた達の口汚さにも慣れて来たねえ

第六十三問

問題　以下の英文を正しい日本語に訳しなさい
『Die Musik gefallt Leuten und bereichert auch den Verstand.』

島田美波の答え
『音楽は人々を楽しませる上に、心を豊かにします
※これは英語ではなくドイツ語だと思います』

坂本雄二の答え
『出題が英語ではなくドイツ語になっている為に解答不可

久遠光一の答え
『英語じゃない為解答不可』

教師のコメント
申し訳ありません。先生のミスで違う問題が混入してしまいました。日本語訳は島田さんの回答で正解です。ただ、今回はこちらの手落ちなので無記入の人も含め、全員正解にしたいと……

土屋康太の答え
『　　↑あぶりだし』

吉井明久の答え
『　　↑バカには見えない答え』

教師のコメント
……と思っていたのですが、君達２人だけは例外として無得点にしておきます

『Ｃクラス　小山友香＆田中明子　保健体育１６０点＆１３９点』
ＶＳ
『Ｆクラス　吉井明久　保健体育６９点
Ａクラス　木下優子　保健体育１５０点』

Ｃクラス側は、雷神とハーピー
そして明久と優子は、デュラハンと……

「コレって、秀吉と同じ猫？　……じゃないか。キツネ？」
「尻尾が９本もあるわ」

九尾の狐である。

「さあ、覚悟しなさい！　吉井明久！」
「え？　ぼっ僕！？」
「決まってるでしょ！　久遠の相棒のアンタを倒した方がアイツを引きずり出せるからよ！！」
「だそうだ」

雷神が勇猛果敢というより、猪突猛進の勢いでデュラハンに襲いかかる。
デュラハンが首を抱え直し、ソレを大剣で受け流して一撃。

「でも、勝てそうだよ？」
「ああ。まるで闘牛を見てるみたいだ」
「……的を得ていると言うより、事実その物」
「……（コクコク）

相手は弱点とも言えるデュラハンの首を落とさせようと躍起になるが、明久は今まで培った操作技術と光一から教わった見切りを駆使し、ソレをかわしては攻撃。
一応現在はデュラハンの首は外しており、左手に抱えてマントをくわえさせている。

ただひたすら力押しで向かうには、操作技術に長けた明久は相性が悪すぎる相手。

「……練習の成果が出てる」
「ああ。ダテに観察処分者なんて呼ばれてない上に、光一が何か仕込んでた様だからな」

『Ｃクラス　小山友香　保健体育３４点』

ＶＳ

『Ｆクラス　吉井明久　保険体育５６点』

「何であたらないのよ！？」

「無駄だよ。光一から生身で散々仕込まれたから、そんな攻撃当たらない」

「アイツに！？　ならなおさら、あんなクズ相手に負けるなんて！！」

雷神がいきり立って襲いかかるのを、大剣を構えたデュラハンが待ち構える。

「そう言って何度も負けたじゃないか」

「認めるもんですか！　学園最底辺のクズに負けただなんて！！」

「だったら……」

クロスカウンターの要領で、デュラハンが大剣を突き出し……。

「僕の勝利をもって、認めさせてやるまでだ」

『Ｃクラス　小山友香　保健体育０点』

「ちっ……明久の野郎、カッコいいじゃねえか。なんかムカつくな」

「……大丈夫、私にとっては雄二の方がずっとカッコいい」

「いや、そういう……おっ、木下の方も終わったか。長居は無用だ、帰るぞ明久」

今妙な事を口出せば、関節技の餌食となり失格となる。

次が根元の率いるＢクラスである以上、雄二としてそれだけは絶対に避けたい事だった。

「絶対に認めない！　久遠どころか、腰巾着にも負けるなんて！！」
「……あなたは感情に流され過ぎ」
「それに吉井君、召喚大会決勝で光一に勝ってるんだよ？　総合科目だったけど」

召喚大会準優勝。
その時吉井明久は久遠光一と対峙し、勝利していた。

「そう言えばそうだったな」
「だからこそ、僕だってそう簡単に負ける訳にはいかない」

鉄人が現れ、小山を連れ去って行った。

「ふぅっ……いたっ！」

一息つくと、雄二がパコンと明久の頭をはたいた。

「何するんだよ雄二？」
「なんかムカついた。しかし、お前も意外と言うんだな？」
「いつまでも光一に頼ってばかりいられないよ。所で雄二、次だけど……」

明久も、Ｂクラスには懸念していた。
不自然に光一の得意科目が集中してるだけでなく、根元の所属するクラス。

「言われなくてもわかっている。光一は物理で高橋女史を打倒したって言うのに、不自然にも程がある」
「点数こそ負けてたけどね」

「余計な事は言うな。増してBクラスは文系主体、普通なら得意科目で責めてくる筈だ」
「となると、光一を確実に倒せる何かをつかんだという所かしら？」
でなければ、こんな不自然におびき出そうと言う組み立てはあり得ない。
「まあここで考えてもしょうがないよ。それに光一の性格考えれば……」
「嬉々として飛び込んでいくでしょうね。光一はそういう奴だから」
「……（コクコク）」
「ダテに切り込み隊長なんて呼ばれてないもんね」
「……ありえる」
「まあとにかく、一旦は戻って作戦会議だ。あいつは頭が回るから、その辺りはちゃんと理解はするだろ」
そして、体育館にて。
「これでCクラスは制覇だな」
「アンタもつくづく嫌われてるねえ」
「それは別にどうでも良い」
本当に興味なさげな態度に、学園長も呆れつつも納得。
「けどなんか嫌な感じ」
「木下さんが言う様に、幾らなんでも度が過ぎてます。覗きが許せないからって」
「それだけじゃなさそうだがな」

ぽつりと漏らした光一の言葉。

「それってどういう事よ？」

「俺達が色々と騒動起こす事を面白くないって考えも含まれてる筈だからだよ

感心したように学園長が目を丸くした。

光一はそれに構わず、２人に説明。

「考えても見ろ。俺達Ｆクラスは学力最低クラス、だからクズの集まりだと見てる奴が多い」

「それは違います！」

「姫路の意見はそうかもしれないし、俺だってＦクラスはバカだがどこよりも楽しいクラスだと思ってる。けど、そう見てるやつが多いのも事実だ。実際姫路の父親もそうだったろ」

ソレを聞いて、瑞希も流石に二の句を告げられなかった。

「そんな奴等が騒動起こしたり、好き勝手ふるまう事を快く思ってないんだよ」

「けど、そんなの放っておけば……」

「その好き勝手で、俺は高橋女史を打倒したのを忘れたか？」

光一が恐れられつつも、今なお狙われ続ける大きな原因の１つ。

それが、学年主任の高橋女史を打倒した事。

「だからこのままのさばらせておけば、いずれ来るＦクラス試験召喚戦争解禁で自分達に矛先を向けられ設備を奪われるどころか、自分達がクズ以下のレッテルを貼られるかもしれない……だから俺を今の内に排除して、クズのレッテルと一緒にゴミ箱に放り投げたい

って考えもあるってことだ」
「……どうしてわかってくれないんでしょうか？　勉強や成績なんかよりもずっと大切なものだってたくさんあって、明久君や久遠君、坂本君達だってとても優しくていい人なのに」
その言葉には、光一も嬉しいとは思っていた……が。
「事実がどうあるかじゃない。周りがどう思っているかの方が大事だって考えが一般的にあるんだよ。この学園がそうであるようにな」
文月学園において、注目されている代償として世論に弱い。
だから中身で結果が認められていても、世の中に認められなければ意味がない。
それが世の中という物である事を、光一は理解してる。
「ま、でもそう言ってくれる奴がいるってだけでも、嬉しいもんだな」
「え？」
「後で明久にも言ってやれよ。あいつ喜ぶだろうから……おっ、戻ってきたな」
それから、雄二達が戻っての作戦会議。
そのさい、先遣隊のメンバーの編成において……
「Ｆクラスが俺達以外全滅だと！？」
「ああ。さっきの仕掛けの中に秀吉の着替え写真があってな」
「秀吉の着替え写真！？」
「明久、一先ず落ち着け。それを見て全員が昂ったまま突入しやがってな……まあ粛清はすませておいた」

光一がちらりと視線を動かした先には、関節外されたりスタンガンの餌食になったりの死体の山があった。
光一の手は現在、そのさい電池切れになったスタンガンの電池の取り換えをしている。

「だから先遣と言っても、驚かずにチェックポイントを通過となると……」
「……任せて」
「ぐっ……」

身の安全も大事だが、光一の戦歴に傷を付けてはこの先に支障が出る。
雄二にとって、どちらをとるかが頭の悩ませどころだった。

「まあとにかく、雄二と霧島を主導にAクラス全員を投入。そのあとは……」
「うぅっ、酷い目にあったぞい」
「おおっ、戻ったか秀吉。丁度良いから木下姉妹、切り込み隊長コンビ、姫路と島田のペアで6人1組で動く」
「待つのじゃ光一！　今木下姉“妹”と言わんかったか！？」

秀吉の抗議をスルーし、光一は優子に目配せ。
それに気付くと、優子は頷いた。

「それじゃ明久、俺たちはゆっくりと4人をエスコートしてやるか」
「……うん、わかった」
「だから光一よ、その4人にワシをカウントするでない！」

Bクラス攻略が始まる。

Bクラス待機所にて。

「大丈夫だったか？」

「ええ……それより、ちゃんと勝てるんでしょうね？　よりにもよって、物理で久遠と戦うなんて」

「これで負けたらBクラスどころか、2年に居場所なんてないわよ根元君？」

小山、中林は最後の砦である根元の元へ訪れていた。

ちなみに清水は現在、暴走中につき拘束されている

「勝算はあるさ。でなきゃこんな危険なマネはしない」

「だったら任せるわ。物理で久遠を負かす……私達にとっては理想とも言える事だから」

「任せろ中林。それよりも、約束は覚えているか？」

「ええ。勝ったらよりを戻してあげるわ」

「上等……見てろよ久遠。高橋女史打倒の功績、俺がよりよく使ってやる」

第六十四問

問題　以下の問いに答えなさい

『国連環境開発会議について説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『１９９２年にリオデジャネイロで開催された国際連合主催の会議の事。環境や開発について各国の首脳が集まって話し合う物で、地球環境サミットとも呼ばれる。この会議においてリオ宣言やアジェンダ２１、森林原則声明が合意された』

教師のコメント

その通りです。地球環境に対する取り組みが各国で盛んに協議されている中で執り行われた重要な会議の１つです。この会議は姫路さんの挙げた２つの名称の他に、リオ・サミットという名前でも呼ばれます。覚えておくと良いでしょう

土屋康太の答え

『一言で説明するのは難しい』

教師のコメント

わかりました。後で職員室で時間をかけてじっくりと聞かせて貰います

吉井明久の答え

『　　※　環境の事を考えて、この解答は着色料を使用し

ておりません』

教師のコメント
貴方は環境や法律の事以上に、自分の卒業の可否についてよく考えましょう。

久遠光一の答え
『どうでも良い』

教師のコメント
西村先生と高橋先生を交えてじっくり話したい事がありますので、土屋君と一緒に職員室へ来るように。

Cクラス攻略班、帰り道にて。

「吉井君、つぎのBクラスだけど」
「うん、気をつけなきゃいけないよね？」
「そうだけど、次は姫路さんか美波を……って、どうしていきなり土下座するの？」

2人の名を出すや否や、明久は即座に優子に土下座していた。
周りは呆れた目で明久を見ている。

「あの、何か殺されて当然って事、木下さんにしたかな？」
「……せめて理由を聞いてからしなさいよ」

普段一体どういう生活を送ってるんだと、つくづく優子はFクラスの常識を疑った。

「姫路に島田も、明久の鈍感の所為で気の毒にな」
「……気の毒」
「……遺書書いてくる」

普段が普段だけに、2人にしてみれば自分の命より2人の気分の方が大事だと思った明久。
立ち去ろうとするのを、優子が止める。

「待ちなさい、遺書なんて必要ないわよ」
「木下さんまで……わかった。考えてみれば僕の死体の処理方法は考えてあるみたいだし、行方不明で済むよね」
「そこまで飛躍してるのか！？」

その話をしてる時に場に居なかった雄二が、それを聞いて流石に驚いた。

「……暗殺だと考えずに、別の可能性を考えなさい」
「え？　じゃあやっぱり罠にはめる為か、クスリでも飲んで錯乱してたかかな？」
「だからどうして普通の発想が出来ないの！？」

朴念仁を通り越した鈍さに、流石に優子も驚いた。
明久にして見れば、思いつく限りの可能性を提示したのみであって、

驚かれる事に疑問符を浮かべる。

「とにかく、次は一緒に行きなさい！　大丈夫、何かあったらアタシが責任とるから！」

「せっ責任って言われても、死んじゃったら責任も何も……」

「良いから！！」

「……はい」

ほぼ力尽くで決定された。

明久は内心、どうして光一はこの人を好きになったんだろうと疑問に思っていた。

そして今に至る。

カメラの数の都合上、何組かは待機所で待機。

無論、光一達もまたしかり。

「さて、Bクラスの根元君は一体どんな手段で来るのかな？」

「さてね。でもあのクソヤローの事だから、俺に直接恥をかかせなきゃ気が済まない筈だ」

「それは光一だって確認された場合、楽に通過出来る物という考えかしら？」

「そうじゃないか？　じゃなきゃ、物理で戦おうなんて奴がいると思うか？」

危険人物と名高い光一の事は、当然学園中に知れ渡っている。

当然、得意科目から苦手科目まで。

「ではあなたに確実に勝てる方法を、根元君は用意していると……そう思っていると言う事ですか？」

そう言って話に割り込んできたのは、Ａクラス所属の佐藤美穂。

「そういう事。えーっと……誰？」

「佐藤です、佐藤美穂！　あなたとは何度か対峙した事がある筈ですが？」

対Ａクラス試召戦争、召喚大会、覗き騒動。

実は彼女は、Ａクラスで最も久遠光一相手に戦った回数が多い人物である。

「そうだっけ？　ごめん、影が薄いから全然覚えてない」

「ちょっと光一！」

「だってあんな奴等ばっかりのクラスに居るんだぞ？」

光一は今にも自分にとびかからんとする怪しい覆面集団、ＦＦＦ団の面々を指差した。

「……異様に説得力あるわね」

「だろ？　さて……今度は何だ？」

「キサマどれだけ我らが血の盟約を踏みにじれば気が済む？」

佐藤美穂が加わった事がお気に召さないと言わんばかりに、先頭に立つ須川は鎌を光一に向かって突き付けた。

光一はさも気にする様子もなく、ただ画面を見ながらノートに記し続ける。

「もう許せん！　裏切り者に死を！！」

「「裏切り者に死を！！」」

光一は対ＦＦ団専用兵器、お宝画像（？）の束を取り出す。

「「「おおっ！！」」」
「これが欲しいなら大人しくしてろ」
「「「了解しました！！」」」

ほぼ全員の秘蔵クラスの為、光一に大人しく従うＦＦ団。

「……光一、アンタね」
「……あの、一体どれだけそんないやらしい写真を持って来てるんです？」

ただし、優子と佐藤が白い目で見てくるという代償あり。

「だってどこぞのムッツリ野郎の所為でまた変な噂が広まってるんだから、そっち系だと思われるよりマシだ」

久遠光一、吉井明久と木下秀吉とのデルタフォース。
最近の新しいジャンルだった。

「あなたも色々と苦労してるんですね……ん？　どうしました、優子？」
「え？　えーっと……そっそうね。光一も大変よね」

挙動不審の優子に、佐藤は首を傾げ光一は頭を押さえた。
一緒に育った以上、優子の好みや好物、趣味もあらかた把握しているためである。

「話に戻るけど、Ｂクラスはどう出るやら？」
「光一はどう読んでるの？」

チェックポイントの教科を見ればわかる様に、２つとも光一の得意科目。
特に最後が、物理である事が余計に疑問を招く。

「簡単な話だ。公衆の面前で俺を、しかも得意科目の物理でブチのめしたいんだろ」
「単純に考えれば、高橋先生と戦った時は物理でしたからね。普通に考えれば、それで教師も手を焼く問題児であり、学園でも名高い過激派であり危険人物であるあなたを破れば、確かに功績にはなります」
「けどそれって、並大抵の事じゃないわよ？」

『Ｆクラス　久遠光一　物理６１３点』

「そうでもないさ。根元お得意のカンニングを使って物理に集中すれば、４００点近くには行く筈。俺の特殊能力や狙撃の傾向は知ってるだろうから……」
「策と能力次第では、負ける可能性もある訳ね？」
「でなきゃ、こんなあからさまな餌なんて用意しないだろ」

もっともな話である。

「それに個人的な恨みもある訳だしな」
「個人的な恨み？」
「以前根元が女装してＡクラスに来た事あったろ？」

そう言われて、Ａクラスの面々は以前の様子を思い浮かべる。
２人の男子に付き添われ、卑怯者と名高き男が丈の短いスカートの女子制服を纏い、乗り込んで来た時の事。

そこで幼馴染であり、彼の事は秀吉と同じ位によく理解してる優子はそれだけで確信した。

「……まさかあれ、アンタの仕業なの？」

「あいつには散々好き勝手やって貰ったから、その仕返しと個人的な恨みも兼ねてな。いやー、傑作だったな。提案しただけでＢクラスの面々ノリノリでさ」

「……よーく理解出来たわ」

その所為でＢクラス内での立場が危うくなったどころか、彼女にすらフラれるきっかけでもある。

原因となった光一を恨むのも、無理からぬ話。

『きゃっ！』

『うわっ！』

そうこうしてるうちに、２組が失格。

その様子を見て、一言。

「成程、迷路になってるのか。しかもカメラによって、進む方向がまるで違ってる」

「可動式の迷路と言った所かしら？　確かにこれなら、カメラの予習でどうにかなる事じゃないわね」

しかも、パターンも念入りに変えてある。

その中で、雄二と翔子は悲鳴を上げることなく、ゆっくりと進んでいた。

「まあ、坂本夫妻の点数なら大丈夫だろうがな」

『Ｂクラス　岩下律子＆菊入真由美　数学１８７点＆１７６点』
ＶＳ
『Ｆクラス　坂本雄二　数学２８８点
Ａクラス　霧島翔子　数学１９０点』

「ほらね」
「じゃあ後は最後のチェックポイントへ一直線ね。代表に坂本君なら、楽勝だわ」
「……このままで済めばいいがな」

相手が根元であり、物理を選択している以上楽観視はできない。
どんな卑怯な手を用意しているかわからない事だけではなく、カンニングもやりようによっては４００点オーバーも十分可能。

「さて、出るか」
「え？　出るって？」
「可動式の迷路なら、多分雄二達が到着する事はないだろ。根元の野郎なら、確実に勝つために情報を与えたがらないだろうし。それじゃ、木下姉妹と切り込み隊長コンビ、そしてＦクラス紅二点の３ペアで出るぞ」
「だから待つのじゃ光一！　何故お主までワシを女扱いしておるのじゃ！？」

姉妹という表現に、流石に秀吉も黙っては居られなかった。
他ならともかく、幼馴染として長い付き合いの光一相手だから余計に。

「おいおい、ほんの冗談でどうしてそこまで過剰反応するんだよ？」
「幼馴染のお主じゃから、冗談でも許せんのじゃ！　そもそも子供

のころからこの前まで、共に何度も風呂に入った間柄じゃろう!?」
「あっ、バカ!」

「「「おのれ久遠光一!　よもや誰もが踏み入れる事の許されぬ遥か遠き聖域までも汚していたとは!!」」」

止めようとするも、既に時遅し。
異端審問会のボルテージマックス。

ちなみに最後に一緒に入ったのは、ちょっと前に秀吉が姉秘蔵のお菓子を間違って食べてしまい、かくまって欲しいと頼まれた時のことである。

「何でよりにも寄ってこんな場所でそんな事言うんだ!?　しかもお前から無理やり入って来たのに!!」
「お主が悪いのじゃろ!?　ワシが女扱いされる事を嫌がっておるのを知っておるのに!!」
「ああもう!」

光一はさっさと逃げ去り、覆面集団がそれを追う。

「ダメだよ秀吉、年頃なんだからそんなことしちゃ」
「ワシは男じゃから問題ないのじゃ!」
「秀吉の場合可愛いから、一緒に入るなんて戸惑うに決まってるじゃないか」
「まっ、真顔でそんな事言うでない!」

秀吉は顔を真っ赤にして明久に背を向けた。

「……秀吉、アンタまさか本当に?」

弟の意外な行動に、ショックを受ける姉。
しかし言葉とは裏腹に、何故かその顔は紅くはなっていた物の別の意味での高揚感が浮かんでいた。

「木下と一緒に……不味いわ、このままじゃ」
「はい……明久君がそれに加わる前に、何としてでも誤解を解かないと！」

そしておなじみ、変な方向へと意識が暴走している2人。

第六十五問

問題　次の文章を読み、（　）の部分の理由として（誤っている物）を選びなさい

若くして夫婦となったジムとデラは、貧しくも互いを愛して暮らしていました。
ジムの宝物は代々伝わる金の時計、デラの宝物はその美しい髪でした。
クリスマスの前日、デラは愛する夫にプレゼントを買う為、自慢の美しい髪を切ってかつら屋に売ってしまいます。
そしてそのお金で、ジムの金の時計につけるプラチナの鎖を買ったのでした。
ジムは家に帰ると、デラの姿を見て……怒りでも、驚きでも、不満でも、恐怖でもない、（複雑な表情）をしました。
ジムがデラに用意したプレゼントは、デラが憧れていた美しいくしだったのです。

（ア）買って来たプレゼントが、デラにとって必要のない物になってしまったから
（イ）デラが自分を想っていてくれた事が嬉しいから
（ウ）美しいデラが髪を失ってみすぼらしい姿になり、がっかりしたから
（エ）デラからのプレゼントを付ける筈の時計を売ってしまっていたから

霧島翔子の答え
（ウ）

教師のコメント
正解です。これはクリスマスにまつわる有名な話の１つですね。
お互いに買って来た物は役に立たなくなってしまったけれども、相手を想う気持ちが伝わってくるという心温まるお話です。
是非とも皆さんにはそういった家庭を築いてほしいと思います

工藤愛子の答え
（ウ）　※　ショートヘアだって可愛いですよ！

久遠光一の答え
（ウ）　※　ショートの方が好みです

教師のコメント
正解ですが、どこか求めている答えと違う気がしますし、好みは聞いてません。
ともあれ（誤っている物の選択）という問題に対しては（ウ）という解答なので、一応正解です。

須川亮の答え
（ク）リスマスはキリストの生誕を祝う日であり、男女が乳繰り合っとる事自体が間違っとるんじゃぁーっ！！

教師のコメント
選択肢に（ク）はありません

数十分後

「はぁっ……はぁっ……」

息を切らせ、ボロボロになった光一の帰還。
元々モヤシである彼は、体力的には核弾頭トリオで最も劣っている為、疲れ切っていた。

「随分手間取っておったの？」
「嫉妬のボルテージで戦闘力が変わる集団なんだから、秀吉と風呂なんて手間取るに決まってるだろ！」
「そうだよね。相手が光一じゃなかったら僕だって……」

ゴゴゴゴゴッ！

「……それより、ちょっと休憩した方が良いんじゃない？　召喚獣バトルもある事だし、万全で行かないと」

明確な殺意を感じ取り、明久は即座に意見を変えた。
木下さん、僕の命の保証は本当にあるの？　と内心ドキドキしつつ。

「光一はモヤシじゃから、その方が良いと思うぞい」
「モヤシ言うな男の娘！」

「そこは“男の子”じゃろ！」

自覚があるとはいえ、モヤシと呼ばれる事は不快でしかない光一だった。

明久がバカ、秀吉が女と呼ばれる時の様な物である。

「女物の服着なれてる上に、優子よりウエスト細くて雰囲気が女らしいならいっそ女だろうが！」

ピキッ！

「ウエストならモヤシの光一の方が細いじゃろ！　体重とてワシや姉上より軽いではないか！」

ピキキッ！！

「だからモヤシ言うな！　大体……っ！（まずい、逃げるぞ秀吉）」

「？　……っ！　（うっ、うむ、一時休戦じゃ）」

ふと感じられた殺気と、自身達の会話を瞬時に思い出す2人。

そこで自分達のしでかした事を悟り、即座に逃げ出そうとするも……

「ねえ、ちょーっと来てくれる？」

「……出来れば拒否したぎゃうっ！」

あっさりつかまった上に、光一はスタンガンを奪われ制圧。

その後に体育館裏で、2人分の断末魔が響いた。

数十分後。

「……大丈夫か秀吉？」
「うむっ」

ようやく回復したころには、未だ迷ってる雄二達を除き数ペアが失格になっていた。

「……どうして光一が僕に優しくしてくれるのか、何となくわかった気がするよ」

その姿にデジャブを感じ、ハッキリとした親近感を持った明久だった。

「でも不思議よね。異端審問会を悉く退けてる久遠が、優子の前じゃてんで無力なんだから」
「それはそうよ。光一は武器がないとただのモヤシなんだから、普通にケンカしたら秀吉にも勝てないわよ」
「モヤシ言うなって言ってるのに！」

ぶっちゃけ攻撃をかわす事は得意だが、直接的な攻撃力と耐久性はてんでなく単純な殴り合いでは絶対勝てない。
だからこそ、元々は自分より強い相手と戦う事前提に作られた道具、武器がないと危険人物という異名からは学園1程遠い人物である。

「……それじゃ、さっさと行くぞ」

不機嫌そうにそう言って、先陣を切る光一。
彼はあまり我慢強い方ではなく、根に持つタイプである。

そして、お化け屋敷にて。

「ううっ……」

「みっ美波ちゃん……てっ、手を離さないでくださいね」

明久が手を繋ぐのを嫌がったため、美波と瑞希が身を寄せ合ってふるえながら進む。

「吉井君、幾らなんでも手を繋ぐのを嫌がる事はないんじゃない？」

「そっそう……だね。ちょっと行ってくる」

「あっ、おい。あの状態で迂闊なことしたら……」

優子に言われ、しぶしぶと2人に近寄る明久。

そこで壁から、ヌゥッとミイラ男が現れた。

「ひっ！」

「え？」

美波が明久を掴むと、そのままミイラ男めがけ明久を投げ飛ばした。

幸い明久は何があったか一瞬理解できず、壁に激突するまで悲鳴を上げる事はなく気絶。

「余計誤解が深まるだけなのに」

「……大丈夫、吉井君？」

気付けをしてやり、優子が明久に謝った後に再出発。

光一、明久が先頭に立ち、秀吉と優子が2人をなだめつつ、進む事に。

キィッ！

「ん？」

ふと何かが動く物音がしたと同時に、光一は後ろを振り向いた。
自分達が進んでいたルートがふさがり、後ろには別のルートが開かれている。

「あれ？　通路が、ふさがってる？」
「あっ、くそ。やられた」

駆け寄って壁に手をやるも、びくともせず。

「秀吉、優子、姫路、島田、居るか？」

失格にならない様声量に気をつけつつ、壁に向かって声を掛ける光一。

「光一、そっちに居るの？　秀吉は一緒に居る？」
「何じゃ？　姉上と光一は一緒ではないのか？」

即座に返事が返ってきたが、どうやら一緒ではないらしい。

「姫路と島田は？」
「アタシの方には姫路さんが居るわ」
「ワシの方は島田じゃ。となると……」
「うん、僕は光一と一緒だよ」
「成程な」

光一がこの状況に納得したように頷くのを見て、明久は疑問に思う

「どうやらあのクソヤロー、随分と俺を倒せる自信があるらしい」
「え？　どういう事？」
「今の会話から、組み合わせはわかるだろ？」
優子と瑞希、秀吉と美波。
そして自分と光一。
「それがどうかした？」
「はぁっ……明久、少しは自分で考えてくれ」
ここまで言えばわかると思っていたが、そこは明久。
バカの異名はダテではない。
「この先のチェックポイントは物理だ。なのにどうして俺に怖がりの姫路と島田をもってきてないと思うんだ？」
「え？　……あっ、そうだったね。普通はここで光一を脱落させたがるはずだし」
「秘策か、はたまた特殊能力か……」
振り向いた先には、一直線の道。
光一にはそれが、チェックポイントへの一本道に見えてしょうがなかった。
「仕方ない、それぞれで行動するぞ」
「そうね。気をつけなさいよ光一、根元君の狙いはアンタなんだから」
「ドジ踏まんようにするよ」
カメラを構えつつ、共に駆け出す光一と明久。
途中で召喚獣の出現どころか、仕掛けも動くことなく進んでいく。

「ん？　なんだ、光一が居るのか？」

別の方向から、聞き慣れた声が。

「ん？　雄二か。まだ残ってたんだな？」

「ああ。全く、さっきから同じ道を行ったり来たりでうんざりだ」

「そりゃそうだろうな。まあ待ってろ、すぐ……いや、時間かけてでも終わらせて来るから、じっくり楽しめ」

「……わかった。雄二、じっくりと楽しむ」

「おい待て光一、今何故言いなおした？　頼むから早く終わら……翔子、俺の腕はそっちにはまがらないぞ？」

そして……

「よお、久遠に吉井」

あっさりと開けた場所に到着し、そこには物理担当の木村教諭。

そしてＢクラスの男子と代表である根元恭二の姿が。

「よう根元君、すっかり落ちぶれたって聞いたが元気そうだな」

「誰の所為だと思ってんだ危険物が！」

目が血走り、今にもとびかからんとする雰囲気の根元。

試召戦争で敗れて以来すっかり落ちぶれてしまい、代表としての立場は最早無きに等しい。

それどころか付き合っていた女性に見放された上に、覗き騒動もありＢクラスで既に居場所などなくなっていた。

それ故に全ての元凶である目の前の光一を、親の仇を見る様な目で

睨みつけている

「誰の所為かなんて、今関係あるのか？」
「……それもそうだな。とっととお前をぶった押して、積りに積った恨み晴らしてやる！」
「「「サモン」」」

『Ｆクラス　久遠光一＆吉井明久　物理６１３点＆１２１点』
ＶＳ
『Ｂクラス　根元恭二＆加西真一　物理４４２点＆１９１点』

「どうせカンニングだろうな（立派な数字だ事で）」
「……光一、建て前と本音が逆に出てるよ？」

死神とデュラハンが姿を現し、敵側は……

「え？　根元君は、大蛇？　……意外だ」
「ああ……歯磨きのポスターに出る虫歯菌みたいな悪魔が出てくるとばかり思ってた」

お化け屋敷内及び、体育館で大爆笑が起こった。
ちなみに相方の方は、全身を鎧で覆い隠した騎士である。

「言ってくれるじゃねえか！」

激昂した根元が、大蛇の尻尾をぶん回し鞭のように叩きつける。
死神はそれを難なくかわした後に、背の巨大ゲンコツを開く。

「え？　いきなりそれ使うの？」
「根元の策に一々付き合ってられるか。何があるかわからない以上、

即決でしとめる」

ゲンコツの指先がグニュグニュと蠢き、人の形をかたどり始める。
お馴染みの中林、ダークネス清水、小山、根元、夏川の顔へと変化し、それぞれが悲鳴をあげ大蛇を睨みつける。

「折角だから、小山の顔でとどめ刺してやるか」
「けっ！」

根元がポケットから何かを取り出し、操作。

『光一、覚悟しなさい！』

「っ！？」
「かかった！」

優子の声で動揺した隙を狙って、大蛇が死神に絡みつき首に噛み付いた。
その首から、徐々に紫色へと変貌していく。

『Ｆクラス　久遠光一　物理５１８点　↓　５０１点』

「え？　１００点以上差があるのに、どうしていきなり？　それも、どんどん減って来てる」

『Ｆクラス　久遠光一　物理４９８点　↓　４７８点』

「それがお前の召喚獣の特殊能力か」

徐々に広がって行き、完全に紫に染まった左腕が全く動かなくなっ

た。

「一度受けたら最後、どんどん点数は減っていくぜ？　締め付けてるこの状態なら、後は確実に広がっていくのを待つだけでお前の負けだ」

「だったら」

侵されていない背の巨大ゲンコツの顔が、大蛇にかみついた。

大蛇の様な毒性はないが、それでも６００点オーバーだけにパワーは死神の方が上。

指の顔を大蛇に食い付かせ、所々を食い千切っていく。

『Ｆクラス　久遠光一　物理４５６点」

ＶＳ

『Ｂクラス　根元恭二　物理３１２点」

「根競べと行くか」

「そんな事予測しないとでも思うのか？　おい、援護しろ」

鎧騎士が斧を振り上げて死神に襲いかかるのを、デュラハンが大剣で横に薙いで阻止。

「あのさ、さっきから僕を無視しないでくれない？」

「ちっ！　観察処分者ごときに何手間取ってやがる！」

「狙いは良かったが、俺と組ませる人選を間違えたな。明久、そっちは任せる」

「オッケー」

それぞれの召喚獣の噛みつかせる力、締め付ける力を強め、根競べが始まった。

第六十六問　オカルト編エピローグ

問題　日本国憲法第７６条“裁判官の職権の独立”について、以下の（　）に正しい語句を記入しなさい

『全ての裁判官は、その（　）に従ひ（　）してその（　）を行ひ、この（　）及び（　）にのみ拘束される』

姫路瑞希の答え
『全ての裁判官は、その（良心）に従ひ（独立）してその（職権）を行ひ、この（憲法）及び（法律）にのみ拘束される』

教師のコメント
大変良く出来ました。これは日本国憲法における重要な条文の一つですね。裁判官の権限の行使に当たっては、政治的権力や裁判所の上級者からの指示に拘束されない事が憲法上保障され、それによって独立して職務を執行できると言う事です。この内容には裁判官の身分保障なども含まれていますね。豆知識として覚えておくとよいでしょう。

吉井明久の答え
『全ての裁判官は、その（“ピー”）に従ひ（“ピー”）してその（“ピー”）を行ひ、この（“ピー”）及び（“ピー”）にのみ拘束される』

教師のコメント
剣法第７６条が大変な事に

土屋康太の答え
『全ての裁判官は、その（本能）に従ひ（脱衣）してその（全裸体操）を行ひ、この（現行犯により警察の手が）及び（手錠）にのみ拘束される』

教師のコメント
全ての裁判官の皆様に対しての誠意ある謝罪文を要求します

久遠光一の答え
『全ての裁判官は、その（指令）に従ひ（銃を手に）してその（任務）を行ひ、この（失敗）及び（制裁）にのみ拘束される』

教師のコメント
君ならこう書くと思っていました。

『Ｆクラス　久遠光一　物理２５２点』
ＶＳ
『Ｂクラス　根元恭二　物理１９８点』

大蛇と死神の喰らい合いが始まって数分が経過。

大蛇の下半身と右肩より先は大半が食い千切られ、今もなお５つの顔に食い千切られ続けている。
死神も左半身が既に紫色に侵されており、膝をついていた

「喰らい喰らわれ、か。お前なんかとじゃ、気持ち悪い事この上ないな」
「同感だ。おい、何雑魚に手間取ってんだ！？」

『Ｆクラス　吉井明久　物理１０５点』
ＶＳ
『Ｂクラス　加西真一　物理９５点』

斧を持った鎧騎士が、デュラハンに完全にやり込められていた。
光一流の見切りと、観察処分者特有の操作技術により、ちゃくちゃくと敵は点数を削られていく。

「ちぃっ、この役立たず……ぐっ！」

根元がポケットに手を入れ、何かを出そうとしたところでその手の痛みに顔をゆがめた。
光一がカメラの死角になるよう、ベアリングを根元の腕を狙い弾き飛ばしたからである。

「よそ見してんじゃねえよ」
「なっ、何でお前はそんな平然と出来るんだ！？」

死神は既に上半身の大半を紫色に侵され、かろうじて動くのは鎌を持った右腕のみ。

点数で差があるとはいえ、少しも焦りを見せていない。

「俺がやられたところで後は明久が何とかしてくれるからだ。ここまで点数へってりゃ、十分だろ」

「そうだね。ここまで減ってれば僕なら何とか出来る」

『Ｆクラス　久遠光一　物理１１４点』

ＶＳ

『Ｂクラス　根元恭二　物理６８点』

「ぐぅぅっ！　おい、何ちんたらしてやがる！！」

「だからよそ見してんじゃねえ」

注意を疎かにしたせいで、大蛇の締め付けに緩みが生じた。

ソレを狙い、死神はかろうじて動く右腕で鎌を逆手に持ち、ショットガンの銃口を大蛇の額に押しつけ……。

「……Ｏｐｅｎ　ｆｉｒｅ」

弾丸が大蛇の頭を撃ち抜き、解放された死神。

しかし既にほぼ全身を侵されており、立つ事すらもままならない状態。

「いっ、今だ！」

それをみて死神めがけ、斧を振り上げる鎧騎士。

当然のごとくデュラハンに阻まれ、距離をとられた。

「明久」

「うん！」

「ユニゾン」

まだ侵されていない巨大ゲンコツがデュラハンを掴み、そのまま融合。

デュラハンの頭は死神の右手に掴まれており、その両手にはクロスボウが握られている。

「なっ！？」

「ボウガンか……明久、そのまま撃て」

「了解」

身体を捻り、死神の肩からボウガンを突き付け撃ちだす。

鎧騎士が撃ち抜かれ、０点となる。

「さて、終わりだな根元」

『Ｆクラス　久遠光一（＋吉井明久）　物理６５点＋７８点』

ＶＳ

『Ｂクラス　根元恭二　物理１８点』

デュラハンの首を抱え直し、ショットガンを構える死神。

その肩ではデュラハンのクロスボウが狙いを定めていた。

大蛇の方は大半が食い千切られ、もはや移動すらままならない状態。

その狙いから逃れられる術はなかった。

「じゃあな、卑怯者」

「うっ、うわあああああっ！！」

ショットガンとクロスボウに撃ち抜かれ、大蛇は０点となり戦死

Bクラス攻略完了。

「さて、これで終わりだな」
「そうだ……危ない！」
「この……このぉおおおお！！」

根元が半狂乱となり、光一に近くにあった角材を振りかぶって襲いかかった。
それは難なくかわされ、首筋にスタンガンを押し付けられ昏倒。

「どこまでも底の浅い悪党だな」

ハァッと息を吐いて、やれやれと言わんばかりに首を振った。

「……もう終わってる」
「テメ、光一！　さっきはよくも！」

そこへ雄二と翔子のペアが到達。
先程の恨みか、雄二は視線で射殺さんと言わんばかりに睨みつける。

「後にしろよ。これからがお楽しみだっつーのに」
「お楽しみ？」
「ムッツリーニ、居るなら来てくれ」
「ああ、そう言う事か」

ムッツリーニという言葉だけで、雄二は光一の意図を完全に理解した。
その顔は先程の光一同様、めっちゃ良い笑顔。

「あら、終わったの？」

「無事じゃったか」

そこで木下姉弟と瑞希と美波が到着。
ちなみに融合召喚獣はまだ消えておらず。

「……やっぱりアキと融合してる」
「……どうして召喚大会で私達はあれを手に入れられなかったんでしょうか？」

光一は友人がらみでも嫌われる性分。
理解はしてる物の、そっち系には流石にうんざりだと言わんばかりに額を抑えた。

「とりあえず、無事だったんだな」
「ええ。そっちは終わった様ね？」
「ちと危なかったがな」

『Ｆクラス　久遠光一　物理５３点』

「ここまで減らされたの！？」

６００点代がここまで減って居るなど、流石に優子も驚いた。

「腕輪の特殊能力と俺の弱点をついた、見事な策だった」
「という事は、木下の怒声でも録音されてたのか？」
「……まあとにかくだ」
「図星かよ」

木下優子は久遠光一の天敵である。
実はこれ、２年の共通認識だったりする。

「それよりも、さっさと始めるぞ！」
「何を？」
「根元恭二写真集“生まれ変わった私を見て”に続く第2弾、“私の全てを見て”の作成準備だ」
「“私の全てを見て”？……あの、もしかして」
明久が恐る恐る聞くと、光一はそれはもう良い笑顔で頷いた。
「もう2度とこんな真似が出来ないようにな。そこのえーっと、加西だっけ？　悪いが協力してくれ」
「ああっ、わかった」
散々勝利が確定してると言わんばかりの態度の上、役立たず呼ばわりされてた為にあっさり見限った。
「じゃあすぐに運びだそう」
「カメラの準備を早くしろ！」
「場所はBクラスで良いな？」
と、お化け屋敷から撮影準備と騒がしくなるBクラス面々。
今回の事で、完全に根元の立場は地に落ちるどころか、めり込み地底の遥か深くとなった事が伺える光景である。
「それじゃ、撮影は頼んだぞ？　写真集事態は俺が作るから」
「ああ、わかった」
「とりあえず、3冊作るか」
「3冊？」
1冊は自己保管用として、残り2冊は？

と全員が首を傾げた

「とある小指と中指へのプレゼント」
「……流石は学園1の過激派だな。それは俺も予想は出来なかった」
「完全にセクハラじゃない」
「別にあんな女ボディビルダーに使い古しに興味はないから」

とりあえず、これにて一件落着。

「やっほー。久遠君」
「うわっ！」

そこで愛子が飛びついて、そのままベシャリと押し倒されてしまう。

「あれ？　そこまで強くしてないんだけど？」
「いきなりだから驚くよ。よい……しょ？」

愛子を背負って立ちあがろうとするも、びくともせず。
そのまま粘りに粘って、数分後

「……工藤、悪いけど先に立ってくれない？」
「女の体重も支えられんのか！？」

あまりの虚弱さに、雄二たちも流石に驚きを隠せなかった。

「とても過激派だの危険人物だのって呼ばれる奴の姿じゃないわね」
「でも久遠君はえーっと……すごくスリムですから、あまり力というイメージはありませんよ」
「“アタシより虚弱な上に問題ばっかり起こす男なんて、彼氏にしたい訳ないでしょ！”と姉上がフッた時の言葉を思い出すのう」

「……木下さん、そんな事言ったの？」
「……それは幾らなんでも酷過ぎる」
「……今でも後悔してるわよ。だから吉井君、お願いだからどうして好きになったんだろうって目で見ないで」

第六十七問　幕間　とある教師たちの憂鬱

問題　次の漢字の読みを答えなさい
『抹殺対象』

姫路瑞希の答え
『まっさつたいしょう』

教師のコメント
正解です、簡単すぎましたね

吉井明久の答え
『坂本雄二』

久遠光一の答え
『坂本雄二』

坂本雄二の答え
『吉井明久、久遠光一』

教師のコメント
時々君たちの間柄がわからなくなります

根元恭二の答え
『吉井明久、久遠光一』

小山友香の答え

『吉井明久、久遠光一』

清水美春の答え

『吉井明久、久遠光一』

中林宏美の答え

『吉井明久、久遠光一』

教師のコメント

これ以上騒ぎを起こさないように。

「みなさん、おはようございます。それでは、朝のＨＲを始めます」

Ａクラスにおける朝のＨＲにて。

いつものようにビシッと気を引き締め、担任の業務である出席確認と連絡事項。

「それでは、今日も１日勉学に励んでください」

疲れ気味ではあるものの、表に出さないように努めながら教室を出て行った。

……が、Ａクラスともなれば勘の良い者もいる。

「最近高橋先生、疲れがたまってるみたいだね」

「……久遠の補習を担当するようになってから、ずっとあの調子」

通称核弾頭トリオの１人であり、文月学園１の過激派という称号を持つ少年、久遠光一。

彼は出来る科目では教師やＡクラス並に出来るが、ダメな科目は小学生レベルですらない。

そのダメな科目を強化すべく、放課後Ｆクラスに課せられている補習では彼女、高橋女史による個人補習が課せられていた。

「しかし何故、久遠光一の個別補習を高橋先生が受け持っているんだ？」

「単純に彼を取り押さえられる人となると、西村先生を除くと高橋先生しかいないからだそうです」

しかし補習は逃げ出す上に、成果はまるで上がっておらず。

その事で頭を悩ませる日々が続いている為、彼女は疲労を隠しきれずＡクラスでも心配されていた。

「木下さん、どうにかならないんですか？」

「どうしてアタシに言うの！？」

「君は彼の幼馴染で天敵でもあるんだから、彼の行動をコントロールできるだろう？　このままでは授業に影響が出る、何とかしてくれ」

「ちょっと待って、アタシいつの間にあいつの天敵認定されてるの！？」

光一と優子のやり取りは既に知れ渡ってるからである。

「……でもどの道、彼を大人しくさせない限りはあのまま」
「それこそ無理よ。あいつ昔から言って聞く様な奴じゃないから」
「どうにかならない物ですかね？　彼等3人には」

「待たんか吉井、久遠、坂本！」
「あっ、見つかったよ！」
「ええいっ、勘のいい！」
「とにかく逃げるぞ！」

「……無理だと思うわよ」

優子がぽつりと言った言葉は、全員の首を縦に振らせた。

そして放課後。

「テメ雄二！　よくも俺達を売りやがったな！！」
「そうだよ雄二！　大体どうしてあそこであくびなんかするんだ！」
「うるさいモヤシ！　明久がのろくさやってるからだろうが！！」
「モヤシ言うな！！」

お馴染み、鉄人に担がれた明久に雄二と、高橋女史の召喚獣に捕らえられている光一。
その口喧嘩にうんざりしつつ、連行する2人の教師。

「高橋先生、大丈夫ですか？　最近お疲れの様ですが」
「いえ、1人相手ですからどうという事はありません」

元々この3人をまとめて相手にしていたこの人に比べれば、弱音

を吐く様子を見せない。

「では、私達はこちらですので」

「はい、では失礼します。では久遠君、戻ったらテストの続きです」

「うえっ……」

心底嫌そうにする光一に、ため息をつく高橋女史。

物理や数学、英語なら呑み込みが早いが、苦手科目となると学年どころか学園１のバカ。

自信の教育者としての誇りにかけ、それを改善してみせると意気込んでいたのだが……

『Ｆクラス　久遠光一　化学１点　古典２点　世界史１点　日本史１点』

点数無制限のテストの筈なのに、未だに視力検査の様な点数が連なっているのが現状である。

『Ｆクラス　久遠光一　物理６０５点　数学２５４点　英語２７９点』

余談だが、これ以外は大半が明久の平均点も取れていない。

「出来る科目ではＡクラス並に出来るのだから、見込みはある筈なのですが……」

「え？　何か言いました？」

「いえ、何でもありません」

そして補習室にて。

コロコロ……！

「2っと……」

「久遠君、それはやめなさいと言った筈です」

苦手科目となると必ずやる、明久命名“ストライカーシグマV”による恩恵が、いつものように見咎められた。

苦手科目でも世界史や日本史が特に苦手で、未だ一桁の枠どころか、四捨五入の枠からも出ていない。

ちなみに化学や古典は、たまに2桁（と言っても、良くて12点）になるだけに、なお頭を悩ませていた。

「英語が出来るのだから、暗記が出来ないと言う訳でもないと言うのに……」

「悟りだ……最早ニルヴァーナの極地に至るしか、この状況を打破する手はない」

「……テスト中に変な事をしてないで、ちゃんと考えてください」

当然点数は、例にもれず1点。

こんな感じでいつも補習は行われていた。

その次の日の昼休み。

「……ふぅっ」

「お疲れのようですな、高橋先生」

気付かれないようにしつつも、やはり気付く人間には気付かれてし

まう物である。
その苦労を知っている人間には、特に。

「いえ、そのような事は……」
「いえいえ、わかりますよ。1人減って楽になりましたが、それでも大変な事に変わりはありません」

鉄人事、西村教諭は高橋女史が久遠担当になるまで、3人まとめて相手をしていた。
だからこそ、1人とはいえ相手をしているからこそ、その気苦労は理解できる。

「ですが、多少はバカでも、学生は元気なのが一番です」
「それには同意します。そう言う意味では、あの3人は良い傾向にあると思います」
「全くですな」

ドドドドド！

「「「異端者久遠光一！　木下優子に工藤愛子と2人もの女子と一緒に昼飯食った大罪、死をもって償え！！」」」
「「「殺せ！　殺せ！　殺せ！」」」

「やれやれ、またか。確か異端審問会と、アンチ久遠派だったか？　強化合宿以来、生徒の間では妙な派閥が出来て問題を起こしてくれるのですから困ったものです」
「……せめてもう少し大人しくなってくれればよいのですが」

そんな教師たちの憂鬱。

第六十八問　幕間　とある幼馴染の憂鬱

ラブラブ！　坂本夫妻のマル秘恋愛テクニック講座　その２

「……ここは私達夫婦が、吉井と久遠のアシスタントの元で恋愛の秘訣を皆に教えるコーナー」

「“の”以外全部嘘の事しか書いてないタイトルのコーナーを続けるな！　しかも今回もバカと過激派のコンビがアシスタントかよ！？」

「じゃあはがきはこちらです。坂本翔子さん、お願いします」

「明久、勝手に翔子を入籍させるな！！」

「……“突然ですが、仲良し夫婦のお二人に相談です”」

ドンドンパフパフ～♪　（効果音）

「はがきの差出人よ、良く聞いてくれ。俺は今、手足を縛られて床に転がされている。コイツが本当に恋愛相談の相手にふさわしいか、もう一度考えてみてほしい」

「それ以前も言ったよな？」

「……“私には好きな人がいるのですが、その人はとても鈍感で私と私のライバルの気持ちに気付いてくれないどころか、暗殺実行犯と勘違いされてしまい、遠ざけられています。どうしたらいいでしょうか？”」

「おい姫路か島田！　こんなコーナーを聞いてる暇があるなら、本人に誤解を解きに行け本人に！」

「え？　なんで雄二、文章だけで姫路さんと美波ってわかるの？」

「わからんのはお前だけだ！」

「……その気持ちはよくわかる。交際の話を断られてばかりだった頃を思い出すと、他人事とは思えない」

「頼むから他人事だと思ってくれ！」
「……だから、私の考えた気持ちを届ける方法を教えてあげる」
「ほうっ、それは面白そうだ」
「そんな悠長にしてて良いのか？　お前の身に降りかかるかもしれないのに」
「……多少の事には目をつむろう！」
「……用意する物は３つ」

ガラガラガラ！　（明久の手で３つの幕の掛けられた台車が押される音）

「？　ここでも道具が必要なのか？」
「明久、幕を」
「あっ、うん！」
「……１つ目は」

ドロロロロロロ！　（ドラムロール　ｂｙ光一）

「１つ目は？」

バサッ！　（１つ目の幕がはぎ取られる音）

「“黒魔術入門”」
「翔子、ちょっと待て！」
「待った霧島！」
「……どうしたの、久遠？」
「俺は無視するのに光一は聞き入れるのか！？」
「白魔術も一緒に勉強しような？」
「……わかった」
「いや、そっちじゃねえ！！　だから……」

「……2つ目は」

ドロロロロロロ！　（ドラムロール　by光一）

「やっぱり聞いてないな。んで、2つ目は？」

バサッ！　（2つ目の幕がはぎ取られる音）

「“料理”」

「ちょっと待ってくれ。料理って何だ料理って！？」

「あっ、おいしそう」

「おい明久、悠長にしてる場合じゃないだろ！！」

「……そして、3つ目は」

ドロロロロロロ！　（ドラムロール　by光一）

「3つ目は？」

バサッ！　（3つ目の幕がはぎ取られる音）

「“クスリの材料と調合器具一式”」

「キサマ俺に一体何を食わせるつもりだ！？　今まで俺に出した料理に一体何を入れてたんだ！？」

「……その3つを用意して、真心を相手の脳髄にまで刻み込むと良い」

「……ねえ光一。何故か悪寒が止まらないんだけど？」

「多分それは間違ってないと思う」

「はっはっは。俺も今回ばかりはこのコーナーに感謝出来そうに」

「……以上、“ウサギの髪留め”さんからのおハガキでした」

「ないぞコラ！　おい翔子、それじゃ料理を食わせる以前の問題じ

ゃないか！」

「おい明久、今日はウチ泊まりに来るか？」
「え？　良いの？」
「ああ。秀吉も来るし、いっそ3人で夜更かしでゲームでもしよう」
「じゃあ準備してから行くよ」
「出来るだけ早くな」
「？　うん、わかった」

美波と瑞希は、悩んでいた。

強化合宿最後の夜において、盗撮犯と決めつけ拷問してしまった事を謝る事を目的とした、深夜の男子部屋訪問。
それを当人の明久はよりにもよって暗殺と間違えてしまい、天敵認識している事について。

そして……。

「明久よ、お主料理が上手いのじゃな？　相伴に与れて嬉しいぞい」
「そう言って貰えてうれしいよ」

それが影響してるのか、最近秀吉と仲が良い事。

「くぅぅっ！　あの様子じゃアレはアキの手料理で間違いないみたい！」

「ずるいです！　私だって明久君の手料理を食べてみたいです！」

それが尚、焦燥感を募らせていた。

その様子を眺めてるのは、雄二とムッツリーニ、そして光一。

「明久のヤツ、随分と秀吉と仲良くなってるな」

「姫路と島田が自分を暗殺しようとしてるって認識、未だに薄れてない様子だからな。だからおのずと危険のない秀吉に惹かれてるって所じゃないか？」

「……気の毒」

ムッツリーニの言葉は、当然2人に向けられての物である。

だがあまり説得力を感じないのは、Fクラスならではのクォリティ。

「やっぱり、ウチらじゃダメなの？　久遠や木下の方が良いの？」

「木下君も久遠君もずるいです」

「いい加減にしろ！」

参加してないのに話題の種にされる。

これには流石に光一も腹を立てた（というか、元々性格的に腹を立てやすい）。

「お前も大変だな」

「笑顔で言うんじゃねえ！　そもそも俺は同性愛なんかクソ喰らえだってのに！！」

「同性愛の何がいけないと言うんですか！？」

その言葉に激高しながら現れたのは、同性愛の体現者でありアンチ久遠派筆頭の１人である清水美春。
ちなみにお化け屋敷以来、周りから怖がられている存在となっていた。

「別にいけないと思ってやしねえよ、そもそも個人の趣味をどうこう言える趣味を持ってないしな。ただ……」
「ただ……？」
「実害こうむってる上に、お前が同性愛趣味だからだ！」
「前者はともかく、後者が思いっきり“坊主憎けりゃ袈裟まで憎い”の体現じゃねえか！」

美春が激昂し、両手にボールペンなどを構え戦闘態勢に。
負けじと光一も警棒型スタンガンと自動拳銃（エアガン）を構え相対。

「美春の愛を侮辱するなど、万死に値します！」
「知るか！　んなもん踏み倒してやるまでだ！！」

両手にボールペンが投擲され、光一に襲いかかる。
……が、ここで補足すると、光一の空間認識能力はずば抜けており、尚且つ瞬間的な判断力も高い。
それ故に……

「学習できんのか？　俺に遠距離攻撃は効かねえっていい加減わかれ！」

持ってるエアガンで全て撃ち落とし、美春にソレを撃つ。

「ちぃっ！」

やむ負えず、両手にカッターを構え襲いかかる美春。
カッターを突きたてようと右手を突き出すと、光一は警棒型スタンガンを逆手に持ってソレを受け流し……。

ガチャッ！

「え？」

足首に手錠（ロープつき）を付ける事に成功。
コレを事前に天井にとりつけてあったフックに引っかけ、よしと頷いた。

「よし、完成」
「何が完成ですか？　力で最弱の貴方が、まさかこれだけで美春をとらえたと思ってるんですか？」
「おーい皆、コレを引っ張ってみたいと思わないか？」

問うてみたのは、Ｆクラス男子達。
そこで（ろくでもない事にしか使わない）頭脳がフル回転。

美春の足についた手錠　↓　手錠にはロープがついている　↓　そのロープは天井に支点がある　↓　引っ張れば……

「「「オーエス！　オーエス！　オーエス！」」」

皆ハッピー（男子視点）

「キャッ！　ちょっ、やめなさいブタ共！！」

「じゃあ俺はＡクラスに行ってくるわ」

その言葉を聞いて、ギラリと光一を睨みつける男子達。

「現状のお膳立てしてやったんだからこれ位見逃してくれ。それともロープ切って外に逃げようか？」

「「「……オーエス！　オーエス！　オーエス！」」」

ＦＦＦ団思考回路

欲望　＞　嫉妬

「久遠光一！　この恨み必ずや忘れません！！」

「え？　恨み？　何の事？」

それだけ言うと、さっさと上履きはいて窓をつたってＡクラスへ。外を普通に出歩くと、それだけでアンチ久遠派の騒動が起きる為である。

「ぐあああああっ！　めっ眼が！　眼がああああ！！」

「ちょっ、待って！　僕は何も見てない、見てないから！！」

そんな悲鳴を聞きながら、一言。

「……すまん、明久」

「俺への謝罪はないのか！！？」

その叫びは無視して、一路安全地帯（？）のＡクラスにて。

「よっこらしょっと」

突然の窓からの来訪者に、Aクラスは流石に度肝を抜かれていた。
普通ドアから入る物で、しかもここ3階なのにである。

「どこから入って来てるのよアンタは!?」
「? ノックはしたし、返事は待ったぞ?」
「そうじゃなくて、ちゃんとドアから入ってきなさいって言ってるの!」

出迎えたのは優子は、幼馴染のいきなりの非常識な行動に頭を痛めていた。

「だって普通に出歩くとアンチ久遠派の連中がうるさいから」
「だからってここ何階だと思ってるの!?」
「3階だけど、それがどうかしたか? ……ってあれ? どうして皆して優子に“苦労してるな”って視線向けてるんだ?」

その次に、光一にあきれる様な視線を集中させたAクラス面々。
そのあまりにも模範的過ぎる水と油、問題児と優等生の間柄に。

「全く、相も変わらず非常識な男だな君は」
「この程度、明久も良くやる事だぞ?」
「ごほん! ……全く、相も変わらず“少し”非常識な男だな」
「わかりやすい奴だな、お前って」

その言葉には、流石にAクラスの面々も頷かざるを得なかった。
ただ、女子の中にはショックを受けてる者から黄色い声をあげる物まで、さまざまな反応があったが。

「それよりアンチ久遠派の場合、アンタが余計な事したからでしょう?」

「あいつらの代表格に親善の証として、プレゼントを贈ってやっただけだぞ？」
「そのプレゼントが問題だって言うのわかってお願いだから！」
根本恭二写真集第２弾“私の全てを見て”（ヌ●ド写真集）
「全然隠せてない！」
ちなみに根本、とある代表２人に汚物扱いされる事となっていた。
さらに言うと、Ｂクラスでは既に存在そのものが無きに等しいものになっているとか……。
「俺がやたらと追い回されてる事に腹立ててないとでも思ってたのか？」
「……そうよね。あんたはそう言う奴だったわよね」
「それに加えて根本はＢクラスにおいて発言力も立場も完全に失った訳だし、代表がその有様じゃＢクラスにまとまりは見込めない。だからＡクラスにとって、試召戦争の手間がかかる可能性が減った訳だが？」
「どうせまたあんた達が仕掛けるんでしょ？」
さす様な視線で光一を見つめる優子。
「どうだか？　あくまで１員でしかない俺が……」
「坂本君の態度と最近の成績を見ればわかるわよ。でなきゃ小学生レベルで１００点とれない人が、こんな短期間でＡクラス並の点数がとれるようになる訳ないじゃない」
完全に読まれていた。
というより、わかりやすいとも表現できるが。

「まったく、代表のどこが不満……なのかしら？」
「わからんでもないが、そこで間をつくるなよ。まあ良い、それじゃ……あれ？　工藤は？」
「更衣室に忘れ物があったって言って出てるわよ？」
「何？　……悪い、用事思い出したから帰る。邪魔したな」

ガシッ！

「あの、優子？　どこへ連れていくつもりで？」

ガラッ！

「ただいま。あれ、どうしたの皆？」

ゴキッ！　メキメキメキッ！！

「ギャアアァッ！！！」

「え？　今の、久遠君の悲鳴？」
「……彼の悲鳴を聞ける時点で、Ａクラスも余所のクラスと大差ないかもしれませんね」

またもや全員が頷いた

一方そのころ。

「……今日は何とか、生きることを許して貰えたのかな？」
「お主はまだそんな事言っておるのか？」

「いい加減気付けバカ野郎！」
「……鈍感」
「え？　……ああっ、そっか。楽に死なせてもらえる訳がないよね」
「「「……」」」

第六十九問　幕間　とあるクラスの日常会話

文月新聞

最上級　－　最下級クラス両代表の婚約を発表

～　試召戦争の遺恨残さず　～

近頃オープンしたと言う如月グランドパークにて、文月学園第２学年Ａクラス代表の霧島翔子さん（１６）と同Ｆクラス代表の坂本雄二氏（１６）の婚約写真が開示された。

両氏は本年度開始直後に勃発した試召戦争の対戦クラス代表同士であり、両クラスの級友間には遺恨もあった筈だが、この婚約によって完全に両クラスの和議が成立したと言える。

尚、最上級クラスと最下級クラスの代表同士の婚姻は文月学園創設以来初の出来事。

疑問の残る終戦処理に、情報開示の呼び声も

一方で、文月学園第２学年の生徒間ではこの婚姻に裏があると言う噂も流れている。

これは学年最優秀生徒でありながら見目麗しくスポーツ万能、由緒正しい家柄の霧島翔子さんに対して、成績不良、ブサイク、学習態度最低で通称“核弾頭トリオ”の１人に数えられる問題児である坂本雄二氏が釣り合っていないと言う点が原因の様だ。

また彼らが第１学年の頃から言われている“霧島さんは女子生徒に興味があり、男は嫌いである”という話もこの噂に一役買っているのだろう。

しかしＦクラスのＫ遠Ｋ一氏から“それは一途に坂本君を想っていたが故であり、女子生徒に興味があると言う噂はただ単に、坂本

君の近くに居る女性を警戒していた事を誤解されての物だ。実際は霧島自身が婚姻届が受理されるのを今か今かと待ちわびてて、嬉しそうに式には是非呼ぶと言ってくれた”とのコメントが。

また、同Fクラスの Y井A久氏からも“霧島さんがあんなに嬉しそうにしてるのなら、坂本君の親友としても1人の男性としてもこのカップル……いえ、夫婦を応援してあげたい”と、友情に溢れるコメントがあった。

事実関係に関しては、親しい友人2名のコメントによりもはや間違いないと言えるだろうが、それでも調査は進めていく予定。

ただ、Fクラス異端審問会の間では、日々坂本雄二氏の処刑方法が議論されている等の話も出ているが、それでも某過激派の打倒を巡っての騒動が続く現状において、学年の平穏に一役買う事になるかもしれない。

「Fクラスって、名物コンビやトリオが多いよね?」

Fクラスに遊びに（光一に会いに）来た愛子が、ふと漏らした言葉。

真っ先に反応したのは明久だった。

「その中でも代表的なのはやっぱり、僕と光一の“切り込み隊長コンビ”だね」
「また名を“学園デストロイヤーズ”」
「それに雄二を加えると“核弾頭トリオ”だ」

雄二がにやにやしながら言ったのを、やり返すように光一が追加。
余談だが、“核弾頭トリオ”が最も有名な名物トリオである。

「召喚大会で言えば、明久と雄二で“文月学園最低コンビ”」
「……姫路と島田で“ゴミ溜めに咲く花コンビ”」
「秀吉と光一で“美少女と危険物コンビ”とかな」
「何故男のコンビで美少女という名称がつくのじゃ！？」
「危険物って所は否定しないのな？」

光一も過激派だの危険物だのは否定しないが、それでも気分が良いものではない。
秀吉もいい加減男扱いから遠ざかる一方の現状で、焦り気味だった。

「後は……雄二と霧島で坂本夫妻」
「俺は独身だ！」
「でももうその呼び方が広まってるよ？」
「何ィッ！！？」

文月新聞（今回巻頭参照）にて、既に学園中に広まっていた。
ついでだが、その事でＦＦＦ団に加入してボコろうとする人間が出始めてるとか。

「良かったな雄二、これなら卒業式と結婚式が同じ日に……」
「なるか！　こうなったらもうすぐ解禁の試召戦争に勝って、何と

してでも交際返上してやる！！」

1人雄二は、自身の自由と人生を賭けての戦いに燃えていた。

「で、後は“木下姉妹”だな」

「光一よ、今日は泊まりに行ってよいか？　久々に共に風呂に入ったり同じ布団で寝たりしたいのじゃ」

「いや、待て！　俺がそう言ってるんじゃなくて、この学園の間での認識がそうなんだよ！」

ＦＦＦ団、異端審問会開始！

攻撃対象：久遠光一　罪状：木下秀吉との“ピー”な交遊未遂

「諸君、ここはどこだ？」

「「「最後の審判を下す法廷だ！」」」

「異端者には？」

「「「死の鉄槌を！」」」

「男とは？」

「「「愛を捨て、哀に生きる者！」」」

「宜しい。これより……２－Ｆ異端審問会を始める」

そのちゃぶ台を武装した異端審問会が取り囲んでいた。

光一は頭を押さえて一言。

「面倒な事になったじゃないか！」

「お主が変な事言うからじゃろ！」

「周りがそう呼んでるって言っただけだろ！　……おい須川、取引をする気はないか？」

「バカを言うな。神聖なる異端審問会を物ごときで回避しようなど笑止千万！」

と言った審問会長に、一枚の写真を突きつけた。
それに映っていたのは、１人の可愛らしい少女（少年）。

「お前、そんな趣味あったのか？」
「アホ！　良く見ろ」
「むっ、これは小学校の頃のワシではないか」
「「何ィッ！！？」」」

幼馴染で親しいだけあって、そう言う写真の１枚や２枚は持っている物。
驚愕の声が上がった処で、写真をポケットにしまった。

「何故しまう！？」
「いや、取引に応じないんだろ？　だったら……」
「わっ、わかった。取引に応じよう！」
「もう遅い。取引に応じなかったんなら、写真見せる必要もない」

ソレを受けて、須川以外のＦＦＦ団面々の心は一つになった。

「「「須川をやれえええ！！」」」

といいだし、逃げ出した須川を追い教室を出て行った。

「……ふぅっ」
「で、話の続きだが……」
「……お前は本当の意味で大物になれる奴だよ」

雄二の厚顔無恥はいつものことなので、気にするだけ無駄だと自分も気持ちを切り替える事にした光一。

「後は、ないな」
「そうだな。作れるとしたら、小指と中指で“風神雷神コンビ”かな？」
「そのまんまじゃねえか」

小指こと中林、中指こと小山のオカルト召喚獣は、それぞれが風神と雷神。

「他に何か作れるかな？」
「……光一と雄二で、“はぐれ武闘派コンビ”」
「まあ妥当じゃないか？　光一は武器さえあれば強いからな」

雄二は中学時代、悪鬼羅刹の呼び名で名をはせた不良。
並びに光一も、武器さえあればそれに引けを取らないため、今でも恐れられている。

「まあ、こんなもんかな？」
「ん～、ボクもそう言うコンビ名欲しいな」
「じゃあムッツリーニとで“保健体育の静動コンビ”とか？」
「それも良いけど、ボクのベッド上の実技は結構過激だからね。久遠君との“超過激派コンビ”なんてどうかな？」
「べっ、ベッド上の……ごくっ……」

ガシッ！　×2

「え？　あの、待って！　僕まだ死にたく……」

明久が生唾を飲み込んだのを聞き付け、美波と瑞希は拷問を開始。
ちなみに鼻血を流してる者と、目を抑えてる者が1人ずつのた打ち

回っていた。

「……これしきの、事で」

「目がっ、眼があぁぁぁああ！！」

「……雄二、他の子で変な想像をしないように」

ちなみに光一はというと……

「異端者の中の異端者、久遠光一よ……学園１の過激派であり危険人物の分際で、よくも我等の血の盟約を悉く踏み躙ってくれたな？」

ＦＦＦ団の面々に取り囲まれていた。

めんどくさそうに、先程取り出した写真（秀吉少女？　時代）を取り出した。

「うっ！」

「どうする？」

「……かっ構うな！　捕らえて奪い取れば！」

「成程、そう来るか」

光一が冷静にポケットに手を入れると、異端審問会は警戒。

悉く自分達を退けた過激派である以上、それなりに強力な道具の筈！

という予想がされる中、とりだされたのは……

「ライター？　よし、かかれ！」

「良いのか？」

「なっ！？」

スイッチを入れればすぐに燃える位置まで写真を移動。

これはある種の賭けであったが、光一は既に勝利を確信していた

なぜなら……

「ばっ、バカを言うな！　そんな脅しが通用するとでも思うのか！？（土下座）」

「そうだそうだ！　異端審問会を舐めるな！（土下座）」

「そんなの、燃やす前に奪い取ればいいだけじゃないか！（土下座）」

「……言葉と行動が伴っておらぬぞい」

「それじゃ、この写真はまたしまわせて貰うぞ。文句なら取引を足蹴にした会長を恨むんだな」

先程と同じように、須川が大量の覆面集団に追われながら逃げて行った。

「おおっ、そうじゃ。姉上と光一ではどうかの？」

「凸凹コンビだろ」

「……納得じゃ」

「っておーい姫路に島田、明久の顔が土気色になってるぞ！」

第七十問　幕間　とある融合召喚の一騒動

～文月新聞　特別コラム～

鉄拳人生相談

「このコーナーは鉄拳先生こと、この私西村宗一が諸君の悩みに“出来るだけ”応えるものだ！」

「あれ？　いつも堂々としてる鉄人にしては、偉く弱気だね」

「無理もないだろ、前回が前回だから。まあアシスタントを務めてる俺たちから見れば、逃げ出さんだけまだマシじゃないか？」

「バカなことを言うな吉井に久遠！　俺達教師は生徒の模範となるべき存在なんだ。それが逃げ出してどう生徒を教育できると言うんだ！？」

「その気概が続けばいいですけどね」

「……久遠、頼むから不安にさせんでくれ」

「じゃあまずはこれから」

2年生　H路M希さんのご相談

『鉄拳先生、私の悩みを聞いてください。私にはその人を見るだけで温かな気持ちになれる位に好きな人が居ます。ですがその人に、友達で同じ彼の事が好きなS田M波ちゃんと一緒にある事から暗殺実行犯と誤解されてしまい、遠ざけられていて夜も眠れません。どうすれば誤解が解けるのかを教えてください』

「……何故高校生で暗殺という単語が出てくるんだ？」

「もう少し周りに目を向けた方が良いですよ？」

「お前達を野放しにする事自体が危険なんだ！　全く……私から言

える事はただ一つ。まず誠意をもって接して見る事だ。その気持ちが本物なら、必ずや相手に届きそんな誤解は解ける！」
「おおっ、まともだ」
「当たり前だ！」
「では次は……はいどうぞ」

2年生　K島S子さんのご相談

『幼いころからの念願がかない、私は今S本Y二君と付き合っています。ですが最近周りが彼の事を悪く言うばかりか、“釣り合わない”とか“あんなのと居たら不幸になる”とか、彼の事をよく知りもせず好き勝手に別れた方が良いと一方的に言ってきて困っています。どうすればいいでしょう？』

「ふむっ……こう言っては何だが、ようやくまともな悩みが来たな」
「無粋な奴らだな。こういうのは本人の意思が大事だっていうのに」
「全くだよ。そもそも幼いころからずっと好きだなんて、すごく素晴らしい事だって思うのに」
「同感だな。まあ相手が相手だけに否定できる要素はないが」
「おいコラ教師！」
「だがだからと言って、本人の意思を無視する事はいただけんな。君に別れる気がないと言うのなら、その意思を示す事だ。そうすれば周りも分かってくれるのではないか？」
「へぇっ、良いセリフだな……えーっと。じゃあこれ」

2年生　K下Y子さんのご相談

『私にはいつも問題を起こしてばかりの幼馴染が居ます。でも最近彼の事が好きだと言う女子が現れて以来、胸が張り裂けそうになります。その気持ちがどういう物かは理解はしてますが、以前にフッ

てしまった事もあり色々と後ろめたい気持ちもあります。どうすればいいのでしょうか？』

「あれ？　なんか他人事とは思えない内容だな」
「問題を起こしてばかりの幼馴染って所が尚更だよね」
「私から言える事はただ１つ。後に悔む事ないように、だ。過去は代えられないが、学ぶ事は出来る。諦められないと言うのなら、いっそ気持ちを伝えてはどうだろうか？　やらずにダメよりも、やってダメという方がスッキリする筈だ」
「あっ、そろそろ時間だよ」
「はい。これにて鉄拳人生相談コーナーは以上となります」
「では諸君、これからも“出来れば普通の”悩みを送ってくれ。私がその悩みに“出来るだけ”応えよう！　さて……ん？」
「あっ、不味い！　気付かれたよ光一！」
「くそっ、走れ明久！」
「あっ、待たんかコラ！！　まだ片づけがあるんだぞ！！」

「ちょっと良いかいクソガキ？」
「おや、誰かと思えばババァ長じゃないか。どうしてこんなところに発生してるんだよ？」
「カビの様に扱うんじゃないよ！　アンタに用があって来たんだよ」

普通は学園長なんだから、呼びつければいいだけの話。
だが問題児である光一だから、無視する可能性が非常に高いどころか絶対に無視する故の行動である。

「俺は拳銃マニアであって、妖怪マニアじゃないぞ？」
「……アンタとはじっくりと話をする必要がある様だね」

光一とてその理由は当然理解してたが、折角なので場を掻きまわす事に。

「じょっ、冗談じゃないぞ。俺は普通に人間の女にしか興味がない！」
「いい加減黙りなクソガキ！　あたしが言いたいのは融合召喚についてだよ！！」
「あっ、やっぱりそうか」
「……前言を撤回するよ。アンタとは西村先生と高橋先生を交えて、じっくりと話をする必要がある様だねえ」

藪蛇だったが、逃げればいいかと光一は気にしない事に。
それが彼等Ｆクラスの核弾頭トリオの考え方である。

「今の妖怪仕様になって、融合召喚にも影響が出てる事はわかったからね。今のところ、工藤と吉井しか融合してないだろ？　だから他の生徒とも融合召喚をやってデータをとって欲しいさね」
「それは構わないけど……」
「まあタダとは言わないよ。召喚システムのオカルト仕様でのお化け屋敷が好評でね」

Ｂ～Ｅが用意したお化け屋敷は土日解放となっており、ボランティ

ア参加の生徒や教師により経営されていた。
ソレを受けて、如月グループで是非使用したいと言う声がかかっている。

「その事で如月グループからプレミアムチケットが贈られたから、それが褒美さね」
「随分太っ腹だな。元々俺らの所為で評判落ちたのに」
「アンタ達の所為なのも事実だが、助けられたのも事実だからね。それにアンタ、最近Ａクラスの女子と良い仲になってるって噂じゃないか」

異端審問会が覆面を纏い、武装をし始めた。

「そう言う事なら……本音は？」
「アンタもそう言う相手が出来れば、少しは大人しくなると予想してさね」
「ああそうかい……ってちょっと待て！」

以前召喚大会において、優勝賞品に如月グランドパークのプレミアムチケットがあった。
そのチケットで来たカップルを、結婚までコーディネートすると言う如月グループの壮大な計画。

雄二と翔子が未遂で済んだ事で、光一にはそれは同様の狙いがある様な気がしてならない。

「心配しなくても、妙な事はありはしないよ」
「どうだか？　アンタの場合……まあ良いか」

変な噂を聞き付けた場合、それを雄二に押し付ければいいだけの話。

そう納得したうえで、話を受ける事に。

「けどどうしたものかな？　俺評判が根本程じゃないけど悪いから、他クラスで融合なんて無理だ」

「その辺はアタシの知ったこっちゃないよ。それじゃ頼むよ」

「無責任なクソババァだ事で。どの道経営破たんしてたんじゃないか？」

「黙りなクソガキ！！」

学園長が去って行くと、光一の周りが異端審問会に取り囲まれた。

「異端者久遠光一よ、汝は罪を認め裁きを受ける気はあるか？」

「いや、裁きを下さんでも、融合召喚の邪魔すれば良いだけなんじゃ？」

「「「……（ポンっ！）」」」

全員がほぼ同じタイミングで手をポンと叩く動作をした。

「何？　何の騒ぎ？」

「全く、相変わらず騒がしいクラスね」

そこへＡクラスの愛子と優子がやってきた。

説明すること数分。

「成程ね。だから異端審問会だっけ？　その人たちが殺気立ってるのね」

「いつもの召喚獣もそうだけど、オカルト仕様の融合召喚も結構面白いよね」

通常使用の召喚獣は、ベースの装備が変わるだけの仕様。

だがオカルト仕様の召喚獣の場合、背に融合した召喚獣の上半身の身が露出した状態になる。
ちなみに相手は、例としてのっぺらぼうにグラブ追加、デュラハンの剣がクロスボウに変更されるなど、装備がグレードアップされる。

「どこぞのムッツリ野郎の所為で、また変な本が出回ってる事を除けばな」

新しく買ったらしいカメラをチェックする怨敵を睨みつける光一。
ついでに、とある2人の女子が光一を睨んでいる。

「う～っ……やっぱりあの腕輪、アキとそうなる為に手に入れたのね」
「久遠君、不潔です！」

本気で見限って秀吉を応援しようかと考える光一。

「工藤と明久しかまだ融合召喚してないのか？」

そこへ雄二が割り込む。

「融合する機会なんてなかったからな。明久の場合もぶっつけ本番だったし」
「ならば、ワシの場合を試してみるかの。アウェイクン！　そして、サモン！」

腕輪を使用し、フィールドを展開したと同時に猫又を召喚。
ランダムで選ばれたフィールドは、古典。

「おのれ！　止めろ！！」

「遅いわ。サモン！　そして、ユニゾン！」

死神が呼び出され、背の巨大ゲンコツが猫又を掴む。
そのゲンコツが猫又に溶ける様に浸透していき、死神の背に猫又の上半身が露出した姿に。

『Ｆクラス　久遠光一（＋木下秀吉）　古典１点＋５６点』

「あれ、大して変化がないな？」
「そうだね。爪が多少長くなった程度……ん？　サモン！」

何かに気付いた愛子が、のっぺらぼうを召喚。
猫又に近づいて、その着物に手をかけ……

「ああ、そう言うこと」
「？　なんだ、どこがグレードアップしてるんだ？」
「これ多分姫路さんほどじゃないにしろ、代表位あるんじゃない？」
「ごめん、サッパリわからない」

猫又の着物を直し、愛子は召喚フィールドから脱出。
改めて近づいて、ある一点を指差した。

「「「眼福じゃあああああっ！！」」」

異端審問会が揃って声をあげた。

「何故よりにもよって胸がグレードアップするのじゃ！？」
「……こりゃ確かにでかいな」
「流石は秀吉だよ。やっぱり僕の目に間違いはなかったんだ！」
「……（パシャパシャパシャ！）　（ドクドクドクドク

！）」

ゴゴゴゴゴゴッ！

「……雄二。浮気の現行犯」

「アキってば、女の子の胸を凝視するなんていけない子ね」

「はい。そんな悪い子には、お仕置きが必要ですよね」

殺意を帯びて登場した翔子と、同様に明久を追い詰め始める瑞希と美波。

流石に自分が引き金だけに、光一は助け船を出す事に

「姫路に島田、明久に女に興味があるって証明になるだろ。それに今手を出したら……っておい聞けよ！」

「最早本能の様じゃの」

「明久……死ぬなよ」

明久の断末魔が響き渡った。

「霧島も落ち着け。霧島位のサイズで見とれたんだから、雄二の好みの大きさがわかっただろ？」

「……成程」

翔子が納得したように頷くと、雄二が猛然と抗議。

「待て光一！　お前よりによってなんて事を！！」

「……雄二」

「待て翔子！　顔を赤らめて近づくな！！」

まあアイアンクローよりはマシだと判断づけて、融合解除を……

「あっ、姉上、待つのじゃ！　その関節はそっちにはまがらな……」

しようとしたところで、秀吉の悲鳴が外から聞こえて来た。

「ちょっとトイレに行ってくる」
「それでどうして窓に向かうの？」
「今日は天気が良いからね」

ガシッ！

「どこに行く気かしら？　光一」
「いや、ちょっとトイレに……まっ、待て！　その関節はそっちに曲がらな……」

そして、数分後。

「……大丈夫か、秀吉？」
「何とかの……じゃが、理不尽じゃ」
「……同感だよ」

優子の折檻を受け、ボロボロになって倒れる2人。
そのそばには、2人の拷問から何とか生還した明久が横たわっていた。

「ねえ優子、ボクがこんな事言うのもなんだけどさ。久遠君も久遠君だけど、優子もそんなだから上手くいかないんじゃない？　実際久遠君だってゾッコンだったのに、もったいない」
「……返す言葉もないわ」

「あれ？　珍しいね、優子が久遠君絡みで素直になるなんて……これ、余裕なんて持ってられないかも」

その様子をみての愛子と優子のやり取りは、幸い誰一人として耳に入らなかった。

「……ん？　もしかしたら」
「どうしました？　美波ちゃん」

美波がふと何かを思いついた顔に。
よしっと覚悟を決めると、一路光一の元へ。

「ねえ久遠、ウチとの融合召喚試してみない？」
「え？」
「もしかしたら胸が……じゃなくて、ウチの召喚獣がどうなるか見てみたいのよ」
「……島田の召喚獣はぬりかべだろ？」

美波の召喚獣はぬりかべ。
少なくとも、女性型ではない為可能性としては低いと思われる。

「……木下、アンタもやっぱりうちの敵よ！！」
「ワシにとっては踏んだり蹴ったりの結果なのに、何故更に敵視されねばならんのじゃ！？」
「当たり前でしょ！　弟のくせに、弟のくせに、弟のくせに！！」
「姉上まで……光一よ、どうしてくれるのじゃ！？」
「お前から言って来たんだろ！　大体こんなもん誰が予想出来るって……」

ドバンッ！

「久遠光一、オネエサマト融合死ヨウト死マ死タネ！　殺死コロ死ころ死コロ死死死死死死……」
「諸君、今こそが最大の異端者久遠光一の首を取る時だ！！　Ａ班はアンチ久遠派に連絡、ＢとＣは逃走ルートを塞げ！　残りは清水に続けええ！！」
「「「おおおーーっ！！」」」
「ちょっ、マジかよ！？　くそっ！！」

「おいクソババァ、１人分だがデータ持って来たぞ」
「いきなり随分と横柄な……一体どうしたんだい？」
「……アンタの所為だよバケモノ。チケットだけじゃなくて治療費と慰謝料もよこせ！！」
「？」

データを届けに来た光一は、ボロボロの様相だった。

第七十一問　バカと過激派と神童の出会い（前篇）

物語が始まる1年前

文月学園において、入学式が終わり新入生は今年1年過ごすクラスへ移動
そして、自己紹介。

「シマダミナミでス。よろシくお願いしマす」

気の強そうな目とポニーテールが印象的な女子が前に出て、黒板に名前を書いて自己紹介。
片言である事と、書かれてる文字が“島田美波”となるべき所が“島田美彼”となっている事に、周りは目を丸くした。

「島田さんはドイツからの帰国子女だそうです。日本にはつい最近帰国したばかりなので、皆さん色々と助けてあげてください」

その後些細なトラブルはあったが、割愛。
次の人は、荒っぽい雰囲気を持ったが体の良い男子生徒。

「神無月中学出身、坂本雄二だ」

短くそう自己紹介をして、席に戻って行った。

「アイツ、例の神無月中の……」
「悪鬼羅刹って噂の……」
「かなりヤるやつらしいぞ……」

そんなざわめきが起こるが、当の本人はつまらなそうに鼻を鳴らす。

「木下秀吉じゃ。よろしく頼む」

次は、男子生徒の制服を着た女子……ではなく、男子。

「どう見ても女子だけど、れっきとした男なので勘違いしてやらないでくださいね？」

「いきなり何を言い出すのじゃ光一！？」

「幼馴染としての気遣いだ。この前だって……」

その次に紹介する事になってる、どう見ても制服に着られてる感の強い貧弱な体躯の少年が、囃し立てる様に割り込んだ。

その口を塞ごうとして…

「はいそこ、仲が良いのは結構ですが責めて周りを気にしてくださいね」

と、周りに悪い意味で目立ってしまった。

「全く、冗談でここまで」

ゴトッ！

「やる……あっ！」

その少年の懐から落ちた物……銃に、全員がざわめいた。

慌ててその少年はそれを拾い懐に隠すも、既に手遅れだった。

「……えーっと」

「久遠光一、趣味はモデルガン集め！　木下秀吉とは幼馴染です。ハイ次！！」

その場をごまかす様にさっと早口でそう言いきり、次へ流す。
あっけにとられた教師はそれに何も言わず、流されてしまった。

「……土屋康太。趣味は、とうさ……何もない。特技はとうちょ……特にない」

その次の少年は呟くようにそう言うが、全員が盗聴と盗撮と言おうとしたのがわかった。
しかもポケットから、デジタルカメラとボイスレコーダーが顔をのぞかせている。

「長月中学出身の吉井明久です。よろしくお願いします」

次は当たり障りのない、普通の自己紹介
……上だけセーラー服という格好を除けば。

そして、休み時間。

「さて、帰るか」
「ワシは演劇部の見学に行ってくるぞい」
「ああ」

光一は秀吉と別れ、帰りの準備に。
ちなみに彼は秀吉との騒動で注目を浴びていたが、先程の銃騒動により誰一人近づく者はいなかった。

「ま、良いけどね」

いつものことと、少年は気にする事もなく帰り支度をし、出入り口へ。

ふと、セーラー服の少年が帰国子女の少女に声をかけているのが見えた。

「おーい、島田と吉井だったか？　出入り口ふさいでないで通してくれないか？」

「え？　……ひっ！」

「あっ、確かえっと……久遠君だったっけ？」

声をかけた2人目に少女は期待したように振り向くが、その顔を見て軽く悲鳴を上げた。

もう片方は先ほどの騒動があったというのに、普通に接してきた事に光一は少し驚く。

「お前、俺を怖がらないのか？」

「え？　何かあったの？」

「……何があったかわかってねえのかよ」

その神経の太さに関心と呆れを感じるが、まあ良いかと気を取り直した。

「ん？　あー……Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｓｐｅａｋ　Ｅｎｇｌｉｓｈ（英語話せるか？）」

「？　……Ｙｅｓ，ｉｆ　ｔｈｅｒｅ　ｉｓ　ｆｅｗ　ｉｔ（はい、少しなら）」

「Ｔｈａｔ　ｉｓ　ａ　ｍｏｄｅｌ　ｇｕｎ．　Ｍｙ　ｈｏｂｂｙ　ｉｓ　ｃｏｌｌｅｃｔｉｎｇ　ｍｏｄｅｌ　ｇｕｎｓ（あれはモ

デルガンだ。俺の趣味はモデルガン集めなんだ）」

そこまで言うと、少女は多少戸惑いつつも頷いた。
それでも普通、銃を持ち歩くなんて非常識であるが故に警戒は変わらず。

「へぇっ、久遠君って英語話せるんだ？」
「一応な……所で吉井、お前その格好」

少女にもわかりやすくゆっくりと、光一は明久に格好について問いかけた。

「え？　ああ、この格好？　えっと、この格好はその……今朝、寝坊してあわててたから……」
「……どう慌てればセーラー服になるんだ？　その辺ご教授願いたいんだが？」

「おいそこのモヤシにバカの変人コンビ、出入り口ふさいで頭の悪い会話してんじゃねぇ」

そこで1人の生徒が乱入して来た。

「おいコラ、いきなりモヤシとは随分じゃねえかゴリラ野郎」
「やめなよ坂本君。人の体躯をモヤシ呼ばわりしたり、まだ日本に慣れてない人をバカ呼ばわりなんて」
「バカはオマエの事を言ってんだよ吉井。後誰がゴリラだモヤシ野郎！？」

割り込んできた生徒、坂本雄二に2人して睨みつける明久と光一。
その様子を見て、戸惑いつつも何を離してるのかわかっていない美

波。

「む……！　僕のどこがバカだっていうのさ!?　そもそもひとくくりに変人だなんて失礼だろ！」

「お前はその格好と言動。そっちのモヤシはいきなりバカップルぶりを一般披露してたじゃねえか」

「誰がバカップルだ!?　お前だってさっき、随分な美人に声かけられてたのに無視してたじゃねえか」

「あっ、アイツの事はテメェにゃ関係ねえだろこのモヤシ野郎！」

「んだと!?」

3人はヒートアップし、テンションが上がっていた。

すっかり置いてけぼりにされてる美波は、どうしたらいいのかおろおろしていた。

「だいたい、テメェらは今朝最初にあった時からずっと気にくわねぇんだ！　特にそのバカ面と武器を持ち歩く軟弱さ！　もうちょい男らしくしゃきっとしやがれ！」

「それはこっちの台詞だ！　いきなり初対面の人をバカ呼ばわりするなんて、この礼儀知らず！」

「入学式にセーラー服着てくる男に礼儀云々なんて言われる筋合いはねえぞ！」

「まあ気に食わねえってんならお互い様だ、何ならここでやるか悪鬼羅刹?」

「はぁっ?　……ん?　そう言えばお前、久遠っつったな?　武器を使わせれば負け知らずとか言う……良いぜ、やってやろうじゃねえか」

「ジャ、じゃあ、サヨウナラ！」

関わるとろくな目に遭わないと判断し、美波は逃げて行った。

その日の夜。

「ぷっ、あっはははは！　また勘違いされたのか!?　ひぃっ、ひぃっ……ぶわはははははは!!」

「そんなに笑うでない!!」

所は光一の部屋。

現在秀吉が泊まりに来ており、2人で今日あった事を話していた。

「それにしても、だから言ったのじゃ。銃を持ち歩くのはやめておくようにと……姉上もカンカンじゃったぞ?」

「優子がカンカンだったのは、お前が男子トイレ乱入したからだろ?」

「乱入ではないのじゃ！　しかし、光一を怖がらぬ男など久方ぶりじゃの」

「ま、あの悪鬼羅刹を前にメンチ切る位だからな。あいつの場合、知らないからかもしれないが」

「確か、吉井じゃったかの?　ワシも話してみようかの?」

「ああ。俺もちょっと興味湧いたしな」

第七十二問　バカと過激派と神童の出会い（後編）

「……あり・おり・はべり・いまそかりと行って、これらの活用は」

入学式から十日もたてば、授業も本格的に始まる。

一部真面目に聞いている者もいれば、めんどくさいと言わんばかりに居眠りする者も。

「では吉井君、この場合の“はべり”の活用形は？」

「えっと……“はんなり”です」

「古語の活用形を聞いているのに帰って来たのが京都弁とは、清々しい程明後日の方向の解答ですね」

「え？　あ、あれ？」

古語辞典を片手に、おかしなことを言って笑われる少年。

彼は今まであてられてまともな答えをした事は、１度もない。

「残念ながら“はんなり”は間違いです。では久遠君、答えてみてください」

「え！？　えーっと……ハングリー？」

「古語の授業で英語を聞く日が来るとは思いませんでした」

「あっ、やっぱダメか」

それに次いで、苦手科目では彼よりもひどい答えを出す生徒が１人。

彼は得意科目が異様に際立ってるため、ある意味吉井明久よりも目立っていた。

「残念ながら、２人とも間違いです。正解は……」

解答の説明が始まり、ある程度の処でチャイムが鳴った。

「ではこれで、授業を終わります」

本日最後の授業が終わり、教室で喧騒が。
これから寄り道をする者、部活に出向く者などに別れての行動となる。

「あーっ、やっと終わった」

未だ制服に着られてる感の強い貧弱な体を捻り、ぽきぽきと心地いい音を鳴らす光一。
普段ごきごきという音を鳴らしてるのとは違い、身体が多少ほぐれているのを感じてると……

「また清々しい程に明後日の回答じゃったの」

「うっせ」

秀吉が笑いながら歩み寄ってきた。

「なんだ、またイチャついてんのかよ？」

そう言って茶々を入れて来たのは、悪鬼羅刹こと坂本雄二。
初日以来何かと突っかかる事が多くなり、２人の争いはクラス災害として恐れられていた。

「いちゃつく以前に、俺は誰かと付き合った覚えはねえ」

「そうじゃ。そもそもワシは男じゃ」

「なんだ、そっち系の趣味があったのか」

「一々茶々入れんな。これやるからあっち行け」

光一が鞄からバナナを1本取り出し、雄二に挑発するように差し出す。
雄二の頭の中で、何かが思いっきり引き千切れる音が響く。

「相変わらずいい度胸してんじゃねえか。モヤシ炒めにでもしてやろうか！？」
「ゴリラの分際で人間の言葉喋んな。お前こそサーカスや見世物小屋にぶち込んでやろうか！？」
「「……」」

悪鬼羅刹と危険人物のガンのくれあいを見て、周りは巻き添えを恐れて離れて行った。
今にも爆発しかねない雰囲気もあり、シンと静まる……。

「「表に出ろコ「ワタシ、帰ル！」ラ……あ？」」

と思いきや、1人の女子生徒の怒声がその雰囲気を壊した。
渦中の2人は、何事かと思いその怒声の元へと目を向ける。

「なっ、何だ？」
「なんだ、あのバカが怒らせたのか？」

明久と何か話してたらしい美波が、おそらく怒らせる様な事を言われたのか怒鳴っていた。
そして乱暴に鞄をひっつかむと、まだＨＲも終わってないのに帰っていく。

「おかしいな……何がいけなかったんだろ？」

その言葉だけが、その場に偉く響き渡った。

「何だ？　何やったんだ吉井？」

「どうせまたバカ言って怒らせたんじゃねえか？」

「失礼な！　……また調べ直さないと」

明久はポケットから、ある1枚の紙を取り出してそう呟いた。

「なんだそりゃ？　おい、見せろ」

「あっ、ちょっと坂本君！」

雄二に紙を取り上げられ、それを取り戻そうとする明久。

だが既に遅く、紙は雄二の目にさらされる事に。

“Tu ne boudrais pas debenir mon amie”

「？　なんて書いてあんだコレ？」

「返してよ！」

雄二の手からそれをひったくる明久。

「今の、なんて書いてあったんだ？」

「えーっと、“ちゅうぬぶどれぱどぶにいるもなみ”って読む……と思う」

「自信がなさそうなのは、それでさっき島田を怒らせたからか？」

光一がそう問うと、明久は力なく頷いた。

事情を察して、明久と雄二を廊下へと促しての事情確認。

「おい吉井、もしかして島田の出身国の言葉かこれ？」
「うん。この前からクラスに馴染めてないみたいだから」
「お前全科目珍回答の常連だろ？　態々こんな手間がかかる事して何になるんだよ？」
雄二が呆れたように言うと、明久は。
「その手間がかかる事で、島田さんは苦労してるんだよ？」
雄二と光一が、その言葉にあっけにとられた。
そして……
「……お前、バカだな」
「ああ、バカだ」
「なっ！？」
雄二と光一の言葉を、心外ともいえる顔で抗議しようとした。
……が。
「けど、面白い奴だな……なあ、明久って呼んでいいか？　俺の事も光一で良いから」
「お前も物好きだな……ま、面白いってのは同感だ」
「え？　え？」
呆気にとられる明久。
「光一よ、そろそろ先生が来るころじゃぞ」
「そうか？　悪いな」
そこで秀吉の乱入。

「お前は良いな。こうやって世話焼いてくれる彼女が居て」
「だから俺は……」
「イィッシャァァぁああっ！！」
「うわっ！」

突如明久が奇声をあげ、光一にハイキックを繰り出した。
それを難なく回避し、距離をとる。

「いっ、いきなり何すんだよ！？」
「君は良い人だと信じてたのに……なのに、こんな可愛い子と付き合ってるだなんて！」
「おいおい落ちつうわっ！」

彼の勘が危険を察知し、近くにあった雄二の手を掴みソレを盾に。
その腕には、シャーペンやボールペンなどが幸い服のみを貫いた。

「お前、確か土屋だったか？　お前までいきなりなんだよ」
「……彼女持ち、許すまじ」
「だからちょっと落ち着け。俺は……」
「テメ、俺を盾にしやがったな！？　ぶち殺す！！」

これが1年後、学園を騒がす試験召喚戦争の中心人物たちの始まり。
そして……その少し先の日。

「それにしても、ドイツ語なんて初めて見たから新鮮だな」
「え？　ドイツ語？　光一、これフランス語だよ？」
「は……？　あいつはドイツからの帰国子女だから、これじゃ通じる訳ないだろ！」
「そっそんな……」

「やれやれ……明久、俺も手伝ってやるから調べるぞ。ついでに“ごめんなさい”もな」
「そっそうだね」
「ヨシイ！」
「え？　な、なに島田さん？」
「ア・ノ・ね、ヨ・シ・イ」
「う、うん」
「ワ・タ・シ・は」
「わっ、“Ｗｈａｔ　ａ　ｓｈｉｔ”？　ごめん。また僕何か怒らせるような事を……？」
「違イマス。ワタシは……アノね、ヨシイ。ウチは……」
１人のバカを巡る三角関係のプロローグが始まった。

第七十三問　アタシと愚弟とクラス交換（前編）（前書き）

気付けば総合２０００Ｐ突破
これもすべては皆さんのおかげです。

これからもよろしくお願いします。

第七十三問　アタシと愚弟とクラス交換（前編）

文月新聞

来たれ若人！　ＦＦＦ団員募集！！
君の若い力を学校平和の為に役立ててみないか？

我々ＦＦＦ団は、Ｆクラスの……文月学園全体の秩序を守るため、若い力を募集しています。
この学園の平和を保つという崇高な目的へと、共に遇進して行きませんか？

・業務内容
自らの強い思いや感情を鈍器（訂正）真心に乗せて相手にたたき付ける。
また、銃器（訂正）真心を相手にぶつけるだけの簡単なお仕事です。
使用する業務機器の種類も豊富、勿論持ち込みも大歓迎！
初心者の方もご安心、優しい先輩が懇切丁寧に指導します。

・給与
月給：１ＡＰ（現物支給）
なんと、５ＡＰで１ＨＰと交換可能！
さらに能力に応じた歩合給及び、ブラックリスト入りの任務完遂には追加給金も！

・ブラックリスト一部抜粋
２－Ｆ　久遠光一　　ＨＰ厳選コレクション１０点セット　＋　抱き枕カバー３枚セット
２－Ｆ　吉井明久　　抱き枕カバー（ＨＰプリント：チャイナ、水

着、体操着より選択）

２－Ｆ　坂本雄二　　ＨＰ厳選コレクション５点セット

詳しくは実際にお問い合わせください。

※　ＡＰ：Ａｋｉｃｈａｎ　Ｐｈｏｔｏｇｒａｐｈ

ＨＰ：Ｈｉｄｅｙｏｓｈｉ　Ｐｈｏｔｏｇｒａｐｈ

２４時間受付中！　ご連絡は２－Ｆ須川亮まで

携帯番号：０８０－●●●●－●●●●

協賛　～いつもあなたの真後ろに～　ムッツリ商会

～打倒　久遠光一！～　アンチ久遠派

「おい妖怪、データ持ってきて……あれ？　優子に高橋女史？」

融合召喚のデータを手に、学園長室へと赴く光一。

そこで何か話をしてる優子と高橋女史を見つけた。

「光一、アンタね……」

「久遠君、ここは学園長室ですよ？」

「良いさね。このクソガキに礼儀なんて高度すぎて理解出来やしないだろ」

「悪かったなバケモノ」
「とうとうアタシを人間扱いしなくなった様だね」
横柄な態度で近づいて、学園長の前にデータファイルを提出。
ふと目に入った資料を手に、軽く読んでみる。
「プロモーションムービーの撮影？」
「そうさね。またどこぞのバカ３匹が騒ぎを起こさないって保証は、どこにもありはしないからねえ」
「耳が痛いな……成程、だから優子がここに居るのか」
「アンタと坂本はバカのくせしてどうしてこう頭の回転速いかね？」
」
優子なら納得はできると、光一は頷いた。
基本Ａクラスから選別する事は妥当だが、自分の知る限りでは……
「まあ霧島や久保は愛想に欠ける部分があるし、優子なら本性がバレ……」
「光一？」
「……性格的にも成績的にも、学園のイメージアップにピッタリだから納得はできるな」
「おや、意外と女に頭が上がらないんだねこのガキ」
意外とも言える弱点の発見に、少々驚きを見せる妖怪こと学園長。
「そう言う事でしたら、お引き受けします。幼馴染がバカやった謝罪もありますから」
「すまないね。それでだ、ウチの学校の合唱部は人数が少ないから、校歌斉唱の中心にもなってもらいたいのさ」
「え……？」

内心動揺した事にも関わらず、それを高橋女史が相槌を打つ。

「それは大丈夫でしょう。双子の弟の木下秀吉君は演劇部でオペラをこなせる程ですので」

「いや、それ無理ですよ。だって優子はおん……」

グギッ！！

「やらせていただきます！」

「そっそうかい？　助かるよ……所で今そのガキが何か言いかけてたが？」

「気のせいです！　ほら、行くわよ光一！　失礼しました」

ズルズルと光一を引きずりつつ、外へと出ていく優子。

扉を閉じると、大きくため息をついた。

「……どうしよう」

「いや、俺に言われても……」

口封じでやられた首を摩りつつ、光一は優子にツッコミを入れる。

「光一、協力しなさい！」

「協力って、ちょっ、待て！　自分で歩くから、待てっておい！！」

「あっ、見ろよ。また久遠が木下につかまってるぞ」

「危険人物筆頭も、奥さんにだけは頭が上がらないってところか？」

「え？　ちょっと待て、あいつ確か工藤とじゃなかったか？」

「もしかして、公認の二股とかか？　木下って意外と懐深いのかな？」

ソレを見て、周りは好き勝手に噂をし始めていた。

その日の木下家

「で、久々の木下家で、何故縛られなきゃならないんだよ？」
「アンタが逃げようとするからでしょ」
「この家に来たら大抵ろくでもない目にあわされるからだ（主にお前に）」

ある時は着替え、もしくは下着姿でうろついてる所に出くわし、関節技を掛けられ……
ある時はＢＬ本を見つけて、関節技を掛けられ……

「まあ人の趣味にとやかく言える趣味じゃないから、どうとは言わないけど」
「アンタこの前同性愛なんかクソ喰らえって言ってなかった？」
「同性愛趣味の所為で実害喰らってるからだよ！」

主に秀吉がらみで。

「まっまあそれよりも、このピンチをどう切り抜けるかが問題ね」
「お前が軽々しくＯＫサインなんか出すからだろ」
「うるさいわね。アンタの天敵って言う事を除けば、折角今まで何でも出来る優等生を演じて来たのに、この程度の事でギブアップなんて冗談じゃないわ！」
「その性格は理解してるから、納得はできる。けどお前のオンチが練習してどうにかなるもんでもないだだだだだだ！」

光一の指摘に、優子は憂鬱な気分が再発。
右手だけはしっかりと光一の頬をつねり上げていたが……

「お前ら兄妹……もとい姉弟はどういう訳か、片方が出来る事が出来ないからな」
「そうなのよね……声質は悪くないと思うんだけど、カラオケとかじゃもっぱら手を叩くだけだから」
「じゃあどうにもできないだろ。だからいい加減開放し……」

「ただいま帰ったぞい。んむ？　珍しいのう、光一が姉上と2人きりなど」
「ああ秀吉、丁度良い所に……助けて」
「……何があったのじゃ？」

そこへ、部活を終えて帰って来た秀吉が、縛られてる光一を見てびっくりしていた。
事情説明をすると……

「成程のう……姉上の見栄っ張りも筋金入りじゃな」
「木下の血みたいなもんでしょ。アンタは舞台で役を演じ、アタシは日常生活で優等生を演じるってね」
「そう考えると、外見だけじゃなくて本質もそっくりだな」
「認めたくはないけど、そうかもしれな……（じーっ）」

光一の一言に何か考えるそぶりを見せると、秀吉の顔をじっと見始めた。

「……アンタ、物マネとか得意よね？」
「出来れば演技と行って欲しいのじゃが……」

そのやり取りだけで、光一は優子の意図を察知した。

「おい優子、まさか……」

「そのまさかよ。光一相手ならともかく、アタシの制服を着て胸に詰め物でもしたら、よほどの事がない限りバレないでしょ？」

「別に詰め物なんていらないだろ」

「そうじゃ姉上、その程度のサイズであればそんな物なくとも……あ、姉上！　ちが……っ！　その関節はそっちにはまがらな……っ！」

縛られてる光一は置いておいて、秀吉に関節技をかけ始める優子。

「秀吉に光一。アタシね、すっっっごく困っているの。お姉ちゃんで幼馴染のお願い、聞いて貰えないかなあ？」

「俺たちも今すごく困ってるんだが？」

「じゃあ、お互いさまよね？　そもそも光一もこうなった原因に一枚噛んでる訳でもあるんだし、仲良く助けあわないと」

「いや、明らかにその理屈はおかしいと……痛たたたっ！　りょ、了解じゃ！　喜んで姉上の代役を務めよう！」

その言葉に満足して“今は”腕を折るのを我慢する事にした優子。決まったならもう用済みと言わんばかりに、光一の縄をほどき始める。

「じゃあ明日の体育用具室あたりで待ち合わせて、お互いの服を交換しよっか」

「明日の放課後は、Ｆクラス恒例の補習があるぞ？　出ないと留年の階段を１段上る事確実だ」

「まぁ、そう言う事なら仕方がないわ。そっちはアタシが出席しておいてあげる」

「じゃあ俺はそのフォローだな」

光一のフォローという言葉に、優子はむっとする。

歌以外で秀吉に出来て優子に出来ない事はない筈だし、そこまで不器用でもないし特徴は理解し合ってる。

「それどういう意味よ？」

「いや、そう言う意味じゃねえ。Ｆクラスで入れ替わってるときに中身が女だとばれたら……」

「バレたら？」

「「明日からは秀吉（ワシ）は本物の女だ（じゃ）と言われてしまうだろう（じゃろう）……」」

声を揃えてのその言葉に、優子は流石に呆れを隠せなかった。

「……アタシと入れ替わってるとは考えないで、アンタが実は女だったって考えるんだ……流石はＦクラスね」

「じゃなきゃ優等生って言う近寄りがたい雰囲気を差し引いても、優子よりも男からの評判が良い訳が……あっ、ちょっ、待って。その関節はそっちに……」

「そう言う事なら、わかったわ。そっちも絶対にばれないようにね。うまくいったら、今度何かお礼をするから」

「わかったのじゃ」

そして、次の日。

「ホント、アンタってアタシそっくりよね」

「双子じゃからな。似ておっても不思議はあるまい」

「二卵性なんだから、ここまで似てなくても良いと思うんだけど」

着替え終わり、外に出て見張りを頼んだ光一にＯＫサインを出す。

「じゃあ行くか優子」

「そうね。あ、待って秀吉。コレを持って行きなさい」

「んむ？　何じゃこれは？」

秀吉を呼び止め、優子は小さな機械を手渡す。

ソレを不思議そうに見る秀吉。

「盗聴器よ」

「……さっきムッツリーニに写真と交換してたの、これだったのか」

「まったく、あやつは……」

「いいから、それを身につけて行動しなさい。アタシはそれでアンタの行動をチェックするからね」

心外と言わんばかりに、秀吉が抗議し始めた。

「監視なんぞせんでも、きちんと姉上を演じきって見せると言うに……」

「アンタの“きちんと”は全然信用できないのよ」

「まあ良いだろ秀吉。自信があるならそれに越した事はないし、それだけで安心するっていうなら」

「それもそうじゃの」

タイの裏に盗聴器を付け、秀吉はＡクラスの教室へ。

それから優子は光一と共に、Ｆクラスへ。

「さて、行きましょ光一」

「おいおい、そんな言葉づかいでどうするんだ。秀吉」

「あっ、そう……じゃったの。行くかの、光一」
「ああ」

Fクラス教室にて。

『しまった！　須川が窓をつたって隣の教室に逃げたぞ！』
『あのブタ野郎……！　異端審問会の血の掟に背いて、Dクラスの玉野さんにケータイの番号交換を迫っていたと言う噂は本当だったのか……！　いいか！　今この時より奴は会長ではなく反逆者だ！　見つけ出して始末するんだ！』
『『『了解！　指示を！』』』
『A～E部隊は奴を捕らえ次第異端審問会にかけろ！　携帯電話のメモリー削除を忘れるな！　番号交換に成功していた可能性もある！　F～G部隊はあらゆる手段を用いてヤツの悪評を流せ！　特にDクラスには念入りにだ！　H部隊は船越先生（４６歳♀独身）のところへ向かえ！　あの裏切り者に人生の墓場という物を教えてやるんだ！』
『『『了解ッ！』』』

「……やれやれ、またか」
「……いつもながら、ホントに何やってんのコイツら？　まるで武闘派宗教団体ね」

こうして、優子のFクラス訪問が始まった。

第七十四問　アタシと愚弟とクラス交換（中編）

「あ、秀吉に光一」

2人が教室へ入ろうとしている所へ、明久が息を切らせながら声をかけた。

「なんだ、また姫路と島田に追い回されてたのか？」
「いい加減諦めてほしいよ……何を勘違いされたのか、異端審問会でブラックリスト認定されるし」
「……まだ誤解されてたんだ」

苦労しはしたが、ちゃんと詫びて以前の関係に戻れた優子。
未だに誤解されてる2人に同情しつつも、あんな組織のブラックリスト入りとなった事には流石に気の毒という感情があふれてくる。

「……ん？　あれ？　何だろ？」
「な、なに……ごとじゃ、明久」

明久が秀吉の顔を覗き込むように見始める。
なによ、と言ってしまいそうな所を辛うじて取り繕う優子。

「なんかいつもと違うみたいだけど……」
「え？　そうか？」
「き、気の所為じゃ！　ワシはいつもこんな感じじゃ」

光一はさも何でもない様に、優子は少々焦りつつ取り繕う。
身内でも区別がつかなくなる事もあると言うのに、こんな短時間で気がつく事に優子は驚きを見せる。

「そうかな……？　でも、いつもはもっとこう……なんて言うか、女の子らしくて可愛かったと思うんだけど」
「!?　きっ、気のせいだ。俺にはいつも通りにしか見えないけど!?」
「そう？　……まあ、秀吉と付き合いが長い光一がそういうのなら、気の所為なんだろうけど」

光一が慌てて取り繕い、優子の様子を恐る恐る見てみる。
その雰囲気が明久の頸動脈を掻っ切りたいと物語っていた

「それより明久、補習はどうなった？」
「あ、うん。補習なら、さっき鉄人が来て古典のプリントを置いて行ったよ。それをやった後で解説授業をするってさ」
「なるほど。それで皆が自由に動き回っていると言うワケじゃな？」
「後で鉄人が来るまでは自習みたいなもんだからね。ねえ光一、秀吉だけど雰囲気だけじゃなくて声もちょっと高くない？　もしかして風邪でも……」

「明久君、出てきてください！　本当にケーキを作ったから食べてほしいだけなんです！」
「毒なんか入れてないから、お願いだから食べてよアキ！」

2人の声を聞きつけ、周りの異端審問会が明久にギロリと視線を集中させる。

「さらばだっ！」
「コレ持ってけ明久」

ソレを受けた瞬間、脱兎のごとく窓から脱出する所で光一がスタン

ガン（４０万ボルト）を投げ渡した。

「逃がすな！　予備戦力で追撃隊を組織しろ！　これ以上ヤツの横行を許すな！」

「２人もの女子からケーキを作ってもらうだと！？　許すまじ！」

覆面集団が出て行って、雄二が居眠りしてるのを除けば人気のなくなったＦクラス教室。

Ｆクラスの９割がＦＦＦ団に加入しているためである。

「ホントこのクラスってバカだらけ」

「静かになったな……さて、秀吉の様子でも確認して見るか？」

「そうね。じゃあ早速……」

優子がラジオみたいな機械を取り出し、イヤホンをとりつけてスイッチを入れる。

光一も何やってるのか興味があるため、片方を受け取り耳につける。

「さて、どんな面白げふげふっ！！　会話してるのかな？」

「アンタ、帰ったら覚えてなさいよ？」

「あっ、しっ！」

ジェスチャーも交え、優子に黙るように促す。

イヤホンから聞こえる音がクリアとなり、会話が聞こえて来た。

『……下さん。ありがとう』

『え？　アタシ、久保君に何かお礼を言われる様な事をしたっけ？』

『ああ。君のおかげで勇気が出て来たよ。クラスメイトに同士が居ると知る事が出来ただけでも心強い』

『同士？』

優子が疑問符を浮かべるも、光一は感づいた。
優子の趣味の事と、久保の趣味……それは。

『それにしても、まさか木下さんに同性愛の趣味があるとは驚いたよ』

「……やっぱり」

その件で目の敵にされてるだけに、頷ける要素が満載だった

『出来れば君には久遠光一を抑えて貰いたかったのだが、それは工藤さんに期待するとしよう。良かったら、キミの好きな人の名前を教えてもらえないだろうか？　僕に出来る事なら幾らでも協力しよう』

『え？　あっ、あの……』

「やれやれ、久保も必死ぐふっ！？」

光一のタイをひっつかみ、そのまま引っ張りながらFクラス教室を飛び出し、全力疾走。
Aクラスの扉を勢いよく開け放つ。

「あら秀吉……に、光一？　どうかしたの？」
「姉上、ちょ～っと宜しいかの？　向こうで光一と共に話したい事があるのじゃ」
「あの、秀吉？　その前に光一が……」
「良いから来てほしいのじゃ！」
「？　よくわからないけど、いいわよ。それじゃ久保君、ちょっと失礼」

優子の殺気に気付く事なく、秀吉はタイを掴まれ窒息状態にある光一を心配しつつ優子について行く。
人気のない踊り場までつくと光一をその場に捨て、秀吉の手首と肘をギュっと抱え込みながらにこやかに質問し始めた。

「……アンタ、久保君と何を話していたのかしら？」
「んむ？　他愛もない雑談をしておったのじゃが、その際に好みの異性の話になっての」
「うんうん……それで？」
「姉上の気持ちは知っておるが、勝手に答えては姉上にとっては色々と面倒じゃろ？」

それに優子は答えられなかった。
少々真っ赤になりつつも、先を促す事に。

「……それでどうしたのよ？」
「じゃから姉上の思考を読み、“現実の男に興味がない”というニュアンスを伝えようと思ったのじゃが、どうも言葉の選択を誤ったようでの。久保は“異性に興味がない”と言う意味に受け取って同性愛者だと勘違いしたようで……あ、姉上っ！　ちが……っ！　その関節はそっちにはまがらな……っ！」
「このバカ！　それじゃ光一に興味があるって言った方がまだマシじゃない！　ただアタシは乙女小説が好きなだけなんだから、誤解を招く様な事は言わないでよ！」
「りょ、了解じゃ！　……あの、姉上よ。そろそろ光一を蘇生させるべきではないかの？」
「あっ……」

タイを引っ張られ首を絞められ続けていた光一の顔は、すっかり血

の気を失い土気色となっていた。
優子が焦りながら秀吉を開放し、光一の介抱をした事で何とか命を取り留める。

その後、それぞれの教室に戻って行った。

「……酷い目に遭った」
「だから悪かったって言ってるでしょ？　今度お昼奢ってあげるから」
「……殺しかけた上にほったらかしにした代償がメシってどうなんだ？」

とっとと投げ出して逃げたかったが、元々の原因の一因を担っている為逃げ出せず。
何が起こるか分からないよりはと、教室に戻るなりすぐイヤホンを取りつける。

「今度は落ち着いてくれよ？　そうじゃないと、“対久遠抹殺姉妹”という呼び名が付くぞ？」
「それは嫌……じゃの」

学園１の危険人物の天敵という不名誉な認識に、更に余計な物までつけられてはたまらない。
極力冷静になれるよう深呼吸しながら、イヤホンに集中し始める。

『……優子』
『あ、代表。何？』

イヤホンから会話が聞こえて来た。
相手はＡクラス代表の霧島翔子。

『……そこ。スカート、めくれてる』

「……あのバカは。アタシ達がスカートの時、どれだけ気をつかってると思ってるのよ？」

ツッコみ難い内容の為、光一はダンマリを決め込む事に。

内心、秀吉が余計な事を言わないようにと願いつつ。

『心配してくれてありがとね、代表。でも、大丈夫なの』

『……大丈夫って？』

『見られても大丈夫って事』

『……でも、スカートがめくれたら』

『ううん、そのくらい平気なの。だって』

『……だって？』

しかし、人の願い程脆く崩れやすい物はなく……。

『だって……今日は、キチンと下着を穿いているもの』

ガシッ！　ドドドドド！！

「げほげほっ！　ぜぇっ……ぜぇっ……」

今度はタイではなく、襟をひっつかまれての連行の為ダメージはさしてナシ。

少々呼吸困難になった程度なので、今度はキチンと意識はあった。

「アンタ何て事を言ってくれてんのよ！？　あれだとまるでいつもアタシがノーパンみたいでしょ！？」

「いつもと違ってスカートの下にスパッツを穿いているから大丈夫と言う意味じゃったのじゃが」
「全然そう聞こえなかった……というより、どうして俺まで来なきゃならない！？」
「考えてみたらそうね」

光一は本気で逃げ出したかったが（以下省略）
痛む頭を押さえつつ、いきり立つ幼馴染を懸命になだめる。

「とにかく、ああいう迂闊な発言は2度としない様に！　あと、スカートの裾には気をつけなさい！」
「だから優子、落ち着けって。秀吉も、そう言う所も徹底しろよ」
「むぅ……姉上のスカートは丈が短すぎるしウエストは緩いし、動きにくくて困るのじゃ……」
「頼むからそう言う事を言うな。俺共々始末されるだろ！」

優子の殺気に怯えつつ、秀吉の能天気さを本気で恨む光一。

「とにかく、動きにも気を付けてくれ。“俺の命”と優子の評判の為にも」
「了解じゃ。流石にワシの不注意で光一を死なせる訳にもいかんし、気をつけよう」
「くれぐれも頼んだからね！」

秀吉が解放され、Ａクラスへと戻って行く。
光一になだめられつつ、イヤホンを装着しながら戻る事にした優子。

「大丈夫かな……？　流石にこれ以上窒息は勘弁何だが」
「静かにするのじゃ！」
「え？」

また何かあったのかとうんざりしつつ、イヤホンを受け取って聞いてみる。

『き、木下さんっ！』
『？　何？　えっと……』
『Ｆクラスの横溝浩二です。実は、えっと、その……』

「横溝？　……おいおい」
「あれ？　知ってるのかの？」
「同じＦクラスだからな」

名前を聞いただけで、ある程度この先を理解できた。
優子はどちらかというと、雰囲気でだが。

『じ、実は僕、木下さんの事が好きなんですっ！　付き合って下さいっ！』

「良かったな、ファンが居たぞ？」
「そっそうじゃの……でも、不運じゃのう。よりによって、秀吉と入れ替わってる時に……まさか、入れ替わってるから……なんて事、ないじゃろうの？」

それはさておき、優子としては気持ちは嬉しいが相手の事も良く知らない。
だから断らせて貰いたいと思っていた。

『あの……気持ちは嬉しいんだけど……』
『そ、そんな……！』
『ごめんなさい』

「へぇっ、やればできるのう」
「そうだな……（主に男に結構告白されてるみたいだから）」
「何か言った？」
「いや、何も」

『それなら、木下さんの好みのタイプを教えてくださいっ！　僕、頑張って木下さん好みの男になるから、そうしたら……』

なおも食い下がる声が聞こえて来た。
……それと同時に、光一は何やら悪い予感を感じていた。

『それでも……ごめんなさい』
『ど、どうして……？』

そして総じて、そう言う予感は現実になりやすい。

『だって、アタシは……12歳以下の美少年にしか、興味がないから……』

ダッ！　（光一が駆け出す音）
ガシッ！　（優子が光一の足をひっつかむ音）」
ドドドドドッ！　（優子が光一を引きずりながら駆けだす音）

「殺すわよ」
「秀吉、俺は何かやったのか？　殺されてもしょうがない事をやったのか!?」
「あの、光一よ？　何故引きずりまわされたかのようにボロボロになっておる上に、姉上共々いきり立っておるのじゃ？　とりあえず落ち着くのじゃ」

「落ち着いていられる訳ないでしょ！？　何でよりにも寄ってショタなのよ！」

同性愛者、ショタコン、ノーパン解放主義。
既に優等生と呼ぶにはあまりにも酷過ぎる状態となっていた。

「もう素直に断った方が良かったんじゃないか？」
「……今更だけど、そう思うわ。なんか、趣味で遠ざけられてる光一の気持ちがわかる気がする」
「個人としては嬉しいが、素直に喜べないな……」

光一は既に慣れてるから平気だが、優子はなまじ評判があるからこそダメージも大きかった。

「ワシなりに、姉上の好みを分析したのじゃが？」
「分析って……秀吉、お前まさか、自宅での優子をイメージして演技してないか？」
「む……言われてみればそうじゃの。すまぬ姉上」
「……アンタ達にとって、家に居るアタシってそういうイメージなんだ？」

自分ではもう少しまともだと思っていただけに、ショックを受ける優子。
常々趣味やら普段の行動やらでとやかく言われる側というのは、こういうものなのだろうと理解した瞬間でもあった。

「で、横溝以外に聞かれてやしなかっただろうな？　１２歳以下の美少年って所」
「そうよ。あんな話がもし聞かれてたら、ソイツを光一に消して貰わないと」

「ちょっと待て、俺を始末屋か何かの様に扱うな！　まあ横溝は何とかしとくけど」
「目撃者はわからんが、演技の方はもう心配無用じゃ。今からはキチンと外に居る時の姉上の演技を徹底しよう」
「色々と手遅れじゃないか？　もう」

早くプロモーションムービーの撮影を終わらせてほしい。
そう心から切に願う光一と優子だった。

「……俺は保健室によってくから」
「あっ……わっワシが手当てするのじゃ」

流石に引きずりまわしたのはやり過ぎたと思った優子だった。

第七十五問　アタシと愚弟とクラス交換（後編）

「あれ？　秀吉に……光一どうしたの、そのケガ？　あ、スタンガンありがとう」
「ああ、ちょっと災難に出くわしてな……お前こそ、もう逃げなくていいのか？」
「うん。逃げてる途中で、横溝君が木下さんに告白したって情報が入ったらしいからね」
「情報はええな！」

光一が明久と話をしてる間、秀吉になりすましてる優子は横溝に対して申し訳ない気持ちで一杯だった。
多分、今回の件で自分の次に可哀想な被害者だと思う位。

「横溝君もバカだよね。先週抜け駆けして秀吉をデートに誘って粛清されたばかりなのに、ダメだったら今度はお姉さんってどうなんだろ？」
「え？　そんな事あったのか？」

光一は本当に知らなかったため、面食らうと同時にある殺気に気付いてしまう。
恐る恐る横を見てみると、光一に対してすっごく綺麗な笑顔を向けていた

“横溝とか云うヤツ始末しなきゃアンタを殺す”
そう言わんばかりのその笑顔には、光一も頷かざるを得なかった。

「あ、そうだ。木下さんと言えば」
「あっ、姉上がどうかしたかの？」

「？　何慌ててるのさ？」
「どうでも良いだろ？　それより、優子がどうしたのか？」
「さっき聞いたんだけど、学園の宣伝用ビデオに出るんだってね？」
優子は先程の事があり、入れ替わりがばれたのかと驚いたが杞憂に終わった事に安心。
そして光一のフォローに感謝する、
「ああ、聞いてる。優子は結構やる気出してたが」
「そうなんだ。じゃあ折角の自習だし、様子を見に行ってみない？」
「そうだな。退屈だし、幼馴染の勇姿でも拝みに行くのも悪くないか」
「そっ、そうじゃな。確かに気になるしのう」
あくまで自然に出来る光一に内心感心するも、様子を見に行く優子。
このまま続けてバレる可能性に怯えるより、その方が良いと踏んだうえで。
怒号が飛び交う教室を後にし、３人は一路Ａクラス目指して廊下をのんびり歩く。
「でも、秀吉のお姉さんってすごいよね」
「？　何がじゃ？」
「だって、可愛いし勉強も運動もできるし、今日はカメラの前で合唱だってやるんでしょ？　ただ、光一の天敵だって言う所が怖いけど、何でも出来てすごいよね」
「そ、そうじゃな……やっぱりそこが汚点なのね」
明久の無垢な瞳の所為で、一瞬言葉に詰まる優子。
本当は音痴で、カメラの前で合唱なんて出来ないから、弟に代役を

頼むと言う裏技を使っているだけに。

「まあアイツ意地っ張りの上にプライドが高いから、出来ないとかそういうのが大嫌いなんだよ。だから努力したりもしてる」
「へぇっ、詳しいね」
「5年10年の付き合いじゃないからな。小学校の時俺に九九のスピードが負けて痛え!!」

明久が疑問符を浮かべる陰で、優子は明久に見えない様に光一の指を掴んでへし折ろうとしていた。

「？　どうかした光一？　それに秀吉も珍しく怖い顔なんかして、まるでお姉さんみたいだよ？」
「あ、い、いや。何でもない……裏技とは恐ろしい真似を」
「そうじゃ、気にするでない。それより、何故怖い顔だと姉上になるのじゃ？」
「え？　だって怒るイメージはどっちかと言うと、光一絡みのお姉さんだから」

自分って知らない人から見れば、そんなに怒ってるイメージあるのだろうか？
と、内心ショックを受けていた。

「おっ、どうも始まってるみたいだな」

光一の声で、2人は耳を澄ませてみた。

「コレって校歌かな？　先に校歌斉唱から撮っているみたいだね」
「うむ。その様じゃな」

Aクラスにおかれたグランドピアノが伴奏を奏で、２０人程度の歌声がそのメロディーの上に重なっている。
校歌だから区分もなく、あくまで主旋律だけの簡単な曲。

「合唱部とAクラスの合同か」
「みたいだね。あ、あそこ、お姉さんが真ん中で歌ってるよ」

優子に扮した秀吉のポジションは、一番目立つセンター。
その場所で堂々とその歌声を披露していた。

「ん？　なんだ、羨ましいのか？」
「それは……まあの。良い顔してると思うぞい」
「人間誰でも、本当にやりたい事を一生懸命やってる時の顔って、不思議な魅力で溢れてるもんだからな。まあ俺がそうかまでは自信ないが」

秀吉は演技、光一は銃の取り扱い。
自分の本当にやりたい事に打ち込める事に、少し羨ましいと思う優子。

「やっぱり、秀吉のお姉さんもすごく綺麗だね」
「そ、そうじゃろ？」

やっぱり、と言って貰える事に少しだけ救われた優子だった。

「だからその分、残念だよね……」
「え？　何が？」
「さっきさ、逃げ回っている途中で偶然聞こえたんだけど……」
「……まさか」

優子と光一に、嫌な予感がよぎった。
当然、その手の予感は現実になりやすく……

「……秀吉のお姉さんっていつもはノーパンで、女の子か小さな男の子しか興味ないって」

これもまた例外ではなかった。

「あっ、やっぱり……ッておい秀吉、落ち着け！」
「忘れなさいぃぃぃぃっ！！」
「あがぁっ！　なに秀吉!?　どうしたの!?　どうして突然僕に関節技を!?」
「良いからすべて忘れなさい！　この痛みで全部記憶を書き換えてあげるから！」
「ひ、秀吉！　良くわからないけど胸が！　微かに柔らかい感触が僕の腕にあがぁっ！」
「“微か”って何よ！　一応あるにはあるんだから！」
「なっ！　だからやめろ秀吉、落ち着け！　明久、それはデマだ！　優子の人気を妬むヤツの罠だから、早く忘れろ！　そしてそれ誰に聞いたか教えてくれ！！」
「何!?　どうして僕がこんな目にあってるのさーっ!?」
「俺もどうしてこんな目に遭わなきゃならないんだよーっ!?」

そして時は過ぎ……

「……姉上よ」
「……なによ、秀吉」
「最近クラスの連中の間で、“久遠光一抹殺姉妹”などと言う呼び名と共に、どうにもワシの胸が成長しているらしいという噂が流れ

ておるのじゃが……」
「奇遇ね。実はアタシもクラスメイトの間で、木下優子はいつも下着を身に着けずに、可愛い女子か幼い男の子を物色してる上に、久遠光一に敵対者を排除して回らせてるらしいって噂が流れてるのよね……」
「「……」」
「姉上どうしてくれるのじゃ！？　こうなってはワシまで危険人物認定される上に、もう明久達と一緒に風呂はおろか体育の更衣室にも行けぬではないか！？」
「アンタは前者に関してはともかく、後者は大して今までと変わらないから良いじゃない！　アタシなんて優等生から一転して三重苦の変態の上に、光一の天敵から一転して文月学園影の首領（ドン）なんて呼ばれてるのよ！？　責任とりなさいよ！」
「姉上が入れ替わりなぞ言い出すから悪いのじゃ！　その所為で最近は島田までもがワシの胸を親の敵の様に凝視するのじゃぞ！？　おまけに光一を散々引きずりまわしてボロボロにした物じゃから、妙な連中がもう一度やってくれとたのみこんでくる始末じゃ！」
「自業自得よ！　アンタがおかしな演技ばかりするからじゃない！」
「いいや、姉上が原因じゃ！」
「いいえ、アンタよ」
「「……」」
「まぁ、こうなっては仕方がないから放っておくかの……」
「それもそうね……気にしたって仕方がないし……」
「「すこし待てばもっとすごい話題が出て、こんな話は忘れられるだろうから（の）」」

第七十六問　デートと異端審問会と暗躍と（前編）

問題　次の（　）に正しい単語を入れなさい

『ロシアの作家ドストエフスキーは著書『（？）の兄弟』や『（？）と罰』の中で、信仰心を失った近代人の虚無主義的な姿を描いた』

姫路瑞希の答え
『？（カラマーゾフ）の兄弟　？（罪）と罰』

教師のコメント
正解です。この2作品と“白痴”、“悪霊”、“未成年”は、ドストエフスキー5大長編と呼ばれる名作ですので、興味があればそれらを読んでみるのも良いでしょう

久遠光一の答え
『？（エルリック）の兄弟　？（真理）と罰』

教師のコメント
先生も鋼の錬金術師は好きです
しかし、珍しく極端すぎない的外れな珍回答ですね。

土屋康太の答え
『？（マーゾ）の兄弟』

教師のコメント
なんてところをピンポイントで覚えているんですか。

吉井明久の答え
『？（ムチ）と罰』

教師のコメント
マーゾの兄弟大喜び

学園長室にて。
光一の手には、如月グランドパークのプレミアムチケットが握られていた。

「しかし、良いのか妖怪？」
「構わないさね。アンタが落ち着きってものを持ってくれれば、騒ぎの起こる回数も減るだろうし」
「彼女……いや、妻帯者が騒ぎの一角になってるんだが？」
「ああっ、Ａクラス代表との婚姻関係にあるって話があったね？」

第六十九問巻頭参照。

「雄二も素直に……あっ、そうだ妖怪。確認したい事があるんだけ

ど……」
「人にものを頼む態度かいそれが？」
「わかりました。学園長、少々確認したい事がございますが」
「……やっぱり今までどおりでいい。アンタの敬語はバカにされてるようで不快さね」
「自分で言っといてなんだよクソ妖怪が……まあいい。それで、チケットなんだけど……」

時は過ぎ、週末の朝

「……すまん翔子。何を言ってるのか全然わからない」

坂本家の雄二君の部屋にて。
目覚めたばかりの雄二の傍で、気合を入れた服装の翔子が手に持っている物を見せて

「……だから、如月グランドパークのプレミアムチケットが手に入ったから、一緒に行こうと」
「そう言う意味じゃない！　確かそれは光一しか持ってない筈のチケットで、本人が使う気満々だと言うのを知っている！　なのに、どうしてお前がソレを持っている！？」

融合召喚のデータ収集でそのチケットが報酬である事は、雄二も当然知っていた。
……しかし本人、使う気満々だった事だけが引っ掛かっていた。

「……久遠は今回は関係ない」
「何？　じゃあ、誰が？」
「……私達の記念の新聞を読んだ学園長が善意でくれた」

「思いっきり関係あるじゃねえか！」

雄二は携帯を取り出し、光一の番号を発信。
前回の事で、騙し撃ちはてんで通用しない事は承知の為、堂々と直接勝負に出る事に。

『どうした雄二？』
「どうしたじゃねえ！　テメエはいつもいつも、俺の人生をなんだと思ってやがる！？」
『すまん、話が見えない』
「テメエと明久がフザけたコメントしやがった、あの新聞だ！　その所為で俺は今日今から翔子とデートさせられそうなんだよ！！」
『なんだ、惚け話か？　悪いがまた今度にしてくれ、俺は忙しいんだ』
ブツッ！　ツーツーツー……
「あのモヤシ野郎……！」

ミシミシと、雄二の手にある携帯が嫌な音を出し始めた。

「さっ、行こう。雄二」
「嫌だ！」
「お義母さんから、お金は預かってる」

その後、結局無力さ故になし崩しに行く事に決定。
ただ一言、俺は無力だ……と、雄二は呟いた。

そして、グランドパークへと向かう途中の電車にて。

「あれ？　雄二に霧島？」
「奇遇だね、代表に坂本君」

気合の入った服装の光一と愛子の２人と遭遇。
光一の姿を見るなり、いきり立つ雄二が胸ぐらをつかんだ。

「光一！　テメ！！」
「ちょっ、おい。公共の場だぞ？」
「知るかんなの！　テメエがあの新聞に余計な事をほざきやがったせいで……」
「俺は“霧島に関しての”事実を話しただけだ」

事実である。

「まあとにかく落ち着けよ。俺たちはある意味運命共同体なんだから」
「運命共同体？」
「周り見てみな？」

雄二が周りを見てみると、とある４人組が目に入った。
明らかに不自然な帽子のかぶり方やつけひげ、そして懐に見えるスタンガン。
そして極め付けが、骨伝導マイクとヘッドホンを装備していた事。

「……久遠光一を補足。並びに、坂本雄二が合流した」
『了解、引き続き監視を続行せよ。尚異端者に不穏な動きがあれば即座に殺せ』
「……了解。異端者に死を」

そしてかすかに聞こえる会話。
異端者というキーワードで、それが何を意味するかを雄二は即座に見抜いた。

「……ちっ」

異端審問会が動いている以上、少しでも生存率を上げる必要が出来た。
それ故に、光一の存在は不可欠と悟り、手を離す。

「賢明な判断だ。流石は雄二」
「テメ、いつか殺してやる」
「やってみろよクソゴリラ」

「……この2人、トリオと呼ばれてる割にあまり仲が良いとは言えないよね」
「……元々出会いからして、最悪だったらしいから」

ガンのくれあいは程ほどにして、2人は現状の確認。

「何人だ？」
「今わかってるだけじゃあの4人1組だけ。だがすぐに飛びかかれない配置と扉の配置を考えても……隣の車両に同様の人数が待ち受けてる筈だ」
「となると……挟み撃ちが狙いか」

密室でもある電車において、いかに追い詰めるかが前提。

「じゃあ刺激する事は控え……」
「られんと思うぞ？　ほれ」

光一が指差した先を見てみると、そこは到着した駅。
窓から見えるのは、かなりの人数の乗客。

人数過多　↓　そして自分達は立ち乗り　↓　車両は鮨詰め

「こういう事か！」
「そう言う事だ」

力がない光一はそのまま人の波にのまれるように、反対側のドアに愛子と共に押されていく。
そして雄二も流石に耐えられる訳もなく、光一と同様に翔子と共に押されていった。

「……雄二」
「いや、待て翔子。何故顔を赤らめる？　そして何故俺の背に手を回す！？」

ソレをチャンスと言わんばかりに、翔子は雄二に抱き付き始めた。
ちなみに光一達の方は、同様にしている。

「おーおー、やってるやってる……は良いけど、無事に出れるかな？」
「大丈夫じゃない？　ほら」

愛子が指差した先では……

「ちょっ、すみません。通してください！」
「え？　いえ、出るんじゃなくて……」
「あっ、まって！　俺たちは……」

「だから違うって！」

降りると勘違いされた周りに外へと追いやられていた。
余談だが、報告を受けた隣でも同様に外へと追いやられている。

「おおっ、やった。でかした霧島」
「ケガの巧妙か……だから待て翔子！　俺の胸に顔を埋めるな」
「まあ次の駅まででせいぜい楽しめや」

所変わって……。

『ターゲット、ロストしました！』
「バカ者！　何をやっとるか！？」
『もっ、申し訳ありません！』
「……まあ良い。ここで何としてでも、久遠光一と坂本雄二の首をとる！」
『了解！　異端者に死を！』

会長である須川が、異端審問会メンバーを前に堂々たる姿を披露。
深呼吸し、号令。

「諸君、我等の使命は何だ！？」
「「「学園の平和の維持だ！」」」
「異端者には！？」
「「「死の鉄槌を！」」」
「男とは！？」
「「「愛を捨て、哀に生きる者！」」」
「宜しい……では２－Ｆ異端審問会、出陣るぞ！！」

全員が異端審問会の証たる覆面を装着し、声高らかに咆哮。
２－Ｆ異端審問会、今ここに始動。

「ママー、あれ何ー？」
「しっ！　見ちゃいけません！」
「何だ？　新手の新興宗教か？」

ちなみに場所は、如月グランドパーク前の広場。

一方、その様子を監視カメラで見ている面々があった。

「やっぱり……」
「どうやらまだ４人は無事の様じゃが、それもいつまで持つ事か……」
「とにかく、あのバカ共なんとかしないと」
「そうですね」
「ホント、Ｆクラスってバカだらけ」

明久、秀吉、美波、瑞希、優子は現在、グランドパークのスタッフとして潜り込んでいた。
その理由は……

「なんだって？　あのガキ共のデートを妨害しようとしてる奴等が居るって！？」
「はい。ウチのクラスにはそういう集団があって、見つかったら即座にボコられます」
「冗談じゃないよ！　スポンサーの経営するテーマパークでそんな事されたら、ウチの学園の信用にも経営にも大打撃さね！」
「でも言って聞く様な集団じゃないですから、僕たちで何とか援護

しようと……」
「まったく……じゃあ頼むよ。以前の様に口ききはしておくから」
という経緯があってである。

「吉井君にはなかったの？　チケットの話」
「一緒に行くあてなんてないから、売ってお金にしたよ」
「……姫路さんか美波と一緒に行こうって気はないの？」
「あの、木下さん？　僕はまだ生きていたいからね？」

相変わらず、抹殺者認定されてる事に落ち込む瑞希と美波。
秀吉も内心呆れつつ、２人を慰めていた。

「今はそれより、異端審問会を何とかしないと」
「そうじゃの……文月学園生徒が如月グランドパークで集団暴行など致命的じゃ」
「けどどうすんのよ？　今こうしてるだけでも警察沙汰になりそうだって言うのに」
「……外で見ると、すごく異様な光景ですね」
「は？　……あっ、あの、姫路さん？　外でも中でも、異様だってことに気付いてお願いだから」

覆面をかぶった集団が、鞭やら蝋燭やらを手に抹殺だの粛正だのと大声で叫んでいる光景。
ソレを普通の事のようにとらえてる瑞希の言葉に、一瞬言葉を失った優子。

「あの、何やら妙な集団が集会をやっていると聞いたのですが、警察には？」

その5人に声をかけたのは、以前明久達が世話になったスタッフ。
雄二で言う、エセ外人スタッフである。

「それは絶対にやめてください。何とかしますんで……あの、例の物は配備出来ました？」
「え？　ええ。急な話でしたが、ゲートには配備出来ました」
「姉上、例の物とはなんじゃ？」
「あの連中の武力を削ぐための物よ。あと、例の4人の姿が確認出来たら、警備員を向かわせて下さい。とにかく4人を優先するように。園内に入れればこちらの物です」
「わかりました」

いつもなら光一と雄二が指揮官を務めているが、今は2人してターゲット。
その為現在は、優子が指揮をとっていた。

「流石木下さんだね。以前の試召戦争じゃ、霧島さんに代わってクラス間交渉務めるだけあるよ」
「昔から優等生で通っておるから、クラスをまとめる立場である事も多かったからの」
「私達では、あんなふうには行きませんね」
「以前は久遠に全部まかせっきりだったからね。来て貰ってよかったわ」

余談だが、以前の作戦時には光一が指揮をとっていた。

「でもよいのかの？　姉上」
「別に光一が誰とデートしようが知った事じゃ……」

パラっ……！

「ないわよ」
「あれ？　これって、プレミアムチケットじゃない？」
「成程、そう言う事じゃったか……あの、姉上？　どこに連れて行くのじゃ？」
「まっ、待って木下さん。今はそれどころじゃ……あっ！　光一達が来たよ！」

こうして、２組のデートと文月学園存続を巡って、５人と異端審問会の戦いは始まった。

第七十七問　デートと異端審問会と暗躍と（中編）

問題　次の単語を英訳しなさい
『スペイン語』

姫路瑞希の答え
『Ｓｐａｎｉｓｈ』

久遠光一の答え
『Ｓｐａｎｉｓｈ』

教師のコメント
基礎英単語の１つですね。たまに頭文字のＳが大文字になるのを忘れてしまう人がいます。そのようなケアレスミスには十分に注意しましょう。

土屋康太の答え
『ｓｐｅｉｎｅｓ－－』

教師のコメント
“Ｊａｐａｎｅｓｅ”と同じような形で“Ｓｐａｉｎｅｓｅ”とでも書きたかったのでしょうか。残念ながら間違いです

吉井明久の答え
『Ｓｐａｇｅｔ－－』

教師のコメント

どう解釈してもスパゲッティと書こうとしたようにしか見えません

「……よもや、またここに来る事になるとは」

「如月グランドパークだけど、お前らの婚姻もあって“男女の関係が進展する憩いの場”としても展開されてくらしいぞ？　それも地域経済の活性化につながるとして、付近の住人も協力する構えがあるって」

「へえっ。じゃあ代表と坂本君の婚姻って、地域からも祝福されてるんだね」

翔子はそれを聞き、珍しく本和歌とした笑顔を見せる。

だが約1名、それに納得していない者もいた。

「どいつもこいつも、俺の人生をなんだと思ってやがる！？」

「霧島にお前に対しての行為を除いて文句をつけられる部分がある

か？」
「ぐっ……」
成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗、実家は金持ちのお嬢様。
問題があるとすれば、雄二の扱いに関してだが……。
「雄二の自業自得と認識されてるから、誰も何も言わないんだよな」
「傍から見ればそうだよね。坂本君もいい加減観念すれば良いのに」
「黙れ！！　くそっ……今思い出したんだが光一、明久はどうしたんだ？」
「明久？　家でゲームでもやってるんじゃないか？　チケット貰ったとしても、どうせ売って金にするだろうし」
「あのバカ、まだ誤解してんのかよ？」
「誤解というか……今余所を気にする余裕ないだろ？」
2人の視線の先には、覆面集団である異端審問会。
ゲートの前で自分達を探してあちこち見まわしており、周囲には人影はあれど近づけずにいた。
「あのバカ共、完全に営業妨害だ」
「はぁっ……翔子、あれじゃ近づけと言うのが無理な話だから」
「……ダメ。私達の記念の写真を見に行く」
「坂本君。往生際が悪いよ？」
霧島翔子の願いは3つ。
雄二とのデートと、自分達の記念の写真が飾られている写真館へ行く事。
そして今回催されている、あるイベントである。
「けどな……ん？」

ふと光一が見ると、異端審問会に警備員の集団が駆け寄りその集団に注意し始めるのを確認。

「んー……これはチャンスだな。よし、行くぞ」
「何だかアクション映画みたいだね」
「それじゃ気を付けでででで！　わかった、わかったから離せ！」

その隙を狙い、光一は愛子の手をとり、雄二は翔子にアイアンクローの刑に処されながらダッシュ。
異端審問会はその姿を確認するなりとびかかろうとするも、警備員の集団に阻まれ身動きが取れず。

「来たぞ！　くそっ、どいてくれ！！」
「くそっ、動ける団員はあいつらを追え！　何としてでも阻止するんだ！！」

数人が包囲網を抜け出し、光一達めがけて襲いかかるが……

「雄二、貸し1だ」

光一は懐から1つの袋を取り出し、中身をぶちまけた。

「うわっ！」
「どわっ！？」

その中身は光一の隠し武器の1つ、ベアリング。
足を取られ、その場に転んでしまう異端審問会面々。

「よし、今……！」

ポケットに手を入れ指弾を飛ばし、飛来するボールペンやシャーペンを弾き落とす。
その視線の先には、両手に文房具を構えた少年、ムッツリーニ。

「……裏切り者に、死を」
「ムッツリーニ君……そんなにまでボクが好きなの？　気持ちは嬉しいけど」
「……そんな事実はない」
「よーし、ここで決着を……といいたいところだが、時間がないんだ」

左手に持つ紙の束を、ムッツリーニめがけて投げ付ける。
よけようとしたところで、彼の本能がそれを察知し手で受け止めソレを見ると……

ブシャアアアッ！！

大出血を起こし、その場に倒れた。

「よし、行くぞ」
「……時々お前の趣味が恐ろしい」
「見たいんなら見せてやろうか？　霧島経由で」
「……頑張る」
「いや、何を頑張る気だ！？」

復活する前に駆け出し、入口へ。

「いらっシャいまセー。オヤ、あなたガタは……」
「げっ！　あの時のエセ外人！？」

「2組で、このチケットでお願いします」
雄二が戸惑ってる間に、光一と翔子がチケットを手渡した。
「エー、ハイ、わかりまシタ。では、こちらへドウゾ」
スタッフの案内で、無事グランドパーク入場完了。
後ろの方では……
ピーっ！　ピーッ！
「すみませんが、荷物検査をさせていただきます」
「ちっ違う！　俺たちはただ、あいつらを捕まえに……」
「危険物を所持している方を入場させる訳にはいきません！」
金属探知機が用意されてるゲートに引っかかり、足止めを食っていた。
「何で遊園地に金属探知機が設置されてるんだ？　空港じゃあるまいし」
「ババァの手引き……じゃあないよな。如月グループはスポンサーだから、そんな事すれば学園の評判にも響くだろうしいでででで！」
「ほら、2人とも。そんな難しい顔してないで、楽しもうよ」
「……雄二。久遠達に模範を示すべき」
と、愛子が光一の手をとり、雄二は翔子に関節を極められ進んで行った。
「オヤオヤ、あいカワらずナカガよろしいようで」
「貴様は一度眼医者に行け！！」

「そんなわかりきってる事はどうでも良いとして、どこに向かってるんです？」
「わかりきるな！！　って、そう言えばどこに向かってるんだ？　考えてみたら、前回はお化け屋敷とレストランしか行ってなかったからわからんが」
「とてもステキなバショデス」

一方、暗躍者たちは……

「上手くいったね」
「やはりムッツリーニは向こう側じゃったか」
「流石は久遠君ですね」
「けどどうするの？　足止めは出来ても、見つかったらアウトよ？」
「心配しなくても、ちゃんと考えてあるわ」

優子はそう言うと、携帯を取り出し連絡。
それから少しの間をあけ……。

「アタシです。予定通り事が進んだ事は確認しましたので、予定通りの地点に向かってください」
『了解。確実に仕留めます』
『おい待てコラ！　なんだその不穏当な会話は！？』

雄二の叫び声を無視し、優子は携帯の通話を切り監視カメラの映像を確認。
その行先は、写真館。

「確かあの４人が入った後に、写真館は一旦休業の表示を出すんでしたね？」

「それならゆっくりできるわね。それじゃ、後は……あれ？　どうしたのよアキ？」
「ごめん、何か大切な事を忘れてる様な……何だろ？」
「明久の物忘れはいつもの事じゃろ？」
「ソレ酷いよ秀吉……あっ！　そうだよ、向こうにはムッツリーニが居たんだ！」

所変わって……

「……場所はつかめた。ターゲットは写真館」
「よし、気取られない様に一旦部隊ごとに分かれて写真館を包囲する」
「「了解」」

盗聴器から送られた情報をもとに、それぞれ分隊ごとに別れていく。
須川率いる部隊は、ゆっくりとだが直接写真館へと向かっていた

「スタッフがグルだった事も驚きだが、よもや木下優子や吉井達が糸を引いていたとは……」
「……明久は光一に敵対行動を取る事はない」
「姫路と島田と木下姉妹は、女子だからこそ向こうの味方をする……だが、所詮は我等の敵ではない」
「……（コクリ）」

更に所変わって、写真館。

「あっ、ホントに代表と坂本君だ」
「ホントに展示されてるよ……」

４人の目の前にあったのは、光一も関与していたあの写真。
翔子の後頭部と折檻に悶える雄二。
２人を囲う様なハートマークと、“私達、結婚します”という文字。
その周りを、未来を祝福する様に天使が飛びまわると言う構図の写真。

写真館に展示されてるその写真は、メインとして煌びやかな額に入れられ展示されていた。

「……雄二、私達の思い出がメイン展示されてる」
「どうしてこの写真がメイン何だ!?」
「じゃあ撮り直して貰えよ。キスでもしてさ」
「今なんて言ったんだ？　モヤシ語か……待て翔子、何故俺の腕を抑えるように抱きついて目を閉じる!?」

モヤシと言われた事に腹を立てた光一は、そのまま見捨てるどころか加速させる事に。

「係員さん、撮り直しって出来るか？」
「ハイ。ではトリますヨー」
「だー!!　待て待て待て!!」
「ん？」

ふと光一が、或る違和感に気付いた。
人気のない筈の写真館に、まるで誰かが侵入したかのような違和感。

その場にある窓に駆け寄り、そっと外を見てみると……。

「あれ？　どうしたの、久遠君？」
「マズい、写真館が包囲されてる」
「何！？」

隠れながらの光一の視線の先には、Ｆクラス生徒による４人１組の部隊。
そして敵ばかりの環境で培った第六感が、既に侵入している物の存在も感知。

「アノ……アナタたちデートにキタハズ、デスヨね？」
「はい、その筈なんですが……」
「……迷惑この上ない」

現状について行けないスタッフが、困った様に女性２人に声をかける。
愛子はちょっとワクワクしつつも、デートの邪魔の為に態々ここまでやる事に正直呆れを通り越し感心していた。
翔子も常日頃から考え直せだの散々言われてる為、デートの邪魔など不快感しかわかない。

「チッ……係員さん、ここの出口って」
「……チカにヒジョウヨウのデグチがありマス」
「もうデートって雰囲気じゃないよね」

第七十八問　デートと異端審問会と暗躍と（後編）

地下通路から逃げ出す事、数分。

「しかし、ナゼピンポイントに？」

「大方、盗聴でもされてたんだろ？　多分俺たちだけじゃなく、優子達辺りに」

雄二は同感という様に、頷いた。

「なんだ、雄二も気付いてたのか？」

「当たり前だ。あいつらの動きを察知できる人間で、俺たちのデートを支援するのは明久達しかいないが、メンバー的に作戦立案は無理だ。だから余所のクラスで俺たちを嫌悪せず、作戦立案ができる人間と言えば……」

「……優子しかいない」

簡単な消去法だった。

「うーん……」

「？　どうかしたか工藤？」

「え？　ううん、何でもないよ？」

ただ1人、優子の名前を聞いてから疑問符を浮かべる愛子。

翔子はいつもの事と、素直になれない友人に内心ため息をつく。

「さて、どうしたものかな？　迂闊に行動すれば筒抜けだぞ？」

「デシタラ、少々早いデスがある場所へ向かいまショウ」

所変わって、暗躍者達。

「まいったね。まさか出し抜かれるだなんて」
「何せ、ムッツリーニが向こう側じゃからの。ワシ等にはソレを防ぐ手立てはないのじゃ」
「そうですね」
「それで、どうするのよ？」

優子は地図をまくり、カメラで異端審問会の動向を探り始める。
まだ目的地はわかっていない状態なのか、各地に散らばり始めたのを見て一言。

「……とりあえず、観覧車にでも乗せようかしら？」

“一旦黙っておいて”と書いた紙を４人に見せて、ぽそりと呟くとまずメール転送。
それから携帯で付き添いのスタッフに連絡し、観覧車に乗せるように促す。

「さて……」

異端審問会の動きが流れ、全員が徐々にだが観覧車に向かい始めていた。
優子はメモを書き始め、４人に見せる。

“やっぱりアタシ達が盗聴されてる事に間違いはないみたい”

「けどどうする？　このままじゃ、光一達が捕まるのも時間の問題だよ」

「確かにの。筒抜けである事がわかった以上、迂闊な事は出来んぞい」
「なら、それを逆手にとればいいわ」
“さ、アタシ達も行くわよ”
その数分後、作戦司令部はもぬけの殻となった。

所変わって、異端審問会面々。
「どうだ、ムッツリーニ？」
「……（フルフル）」
「流石は木下優子、と言ったところか……吉井も気付いたまでは良かったが、所詮はバカだな」
「……（コクリ）」

優子の思惑通り、観覧車に集まり待ち伏せしている面々。
その中心では、須川とムッツリーニによる作戦立案が行われている。

「ママー、あれ何ー？」
「しっ！　見ちゃいけません！」
「また居るよあいつら……邪魔だな」

「しかし、俺たち注目を浴びてないか？」
「それはいかに崇高なる集団かを分かってるからではないか？」
「そうだな。俺たちは風紀維持と乙女の純潔を守るために戦う集団だ。さぞやカッコよく見えるだろう」

注目を浴びてるのは、異端審問会の制服とも言える覆面をかぶっているからである。
そして集中する視線に尊敬や畏敬など含まれてはなく、迷惑と嫌悪と畏怖が主だったのだが……

「諸君、我々はなんだ？」
「「「神聖なる学舎の風紀維持だ！」」」
「異端者には？」
「「「死の鉄槌を！」」」
「男とは？」
「「「愛を捨て、哀に生きる者！」」」
「そう！　我等は崇高なる異端審問会！　我らこそ正義なのだ！！」
「「「うおおおおおおっ！！！」」」

誰一人として気付く者はいなかった。
なぜなら彼らは“バカ”なのだから。

所変わって、如月グランドホテル“鳳凰の間”　通称“サバの味噌煮”

「ここナラバ！　盗聴妨害などのセキュリティも完備されてマスので、安全カト」
「盗聴妨害までって、どんだけ頑丈なセキュリティなんだよ？」
「気にするな雄二。ここはまず助かった事を喜ぶべきだ」

事実である為、何も言えなくなる雄二。
翔子と愛子も、流石にここまで来るとは思えない為、安著の息を漏らす。

「これでゆっくりとデートを楽しめるね。このホテル内限定だけど」
「……ホテル」

ゾクリと雄二の背に、何かの予感がよぎった。

「……追い詰められただけの様な気が」
「まあ落ち着け。俺たちが一緒に居る限り、妙な事にはならんだろ（万が一見つかった時の生贄が居なくなるのも痛手だし）」
「……そうだな。今回ばかりは感謝する（なんて言うと思ってんのかモヤシめ。どうせ万が一見つかった時の生贄だと思ってんだろうが、そうは行くか！）」

ゴゴゴゴゴゴッ！

「良いってことよ。俺たちは言うなれば運命共同体なんだから（いつでも斬り捨て可能な、な）」
「それもそうだな（いつまでもやられっぱなしだと思うなよモヤシ野郎が）」

「……相変わらず、殺伐としたムードだね」
「……元々が相いれない性質だから、無理もない」

笑顔で相対しつつも、２人の間には険悪なムードが漂っていた。
こんな２人は仲良しコンビ。

「デハ、いきなりデスが、スペシャルイベントデス」
「スペシャルイベント？」
「現在ちょっトしたイベントをやってマシて、こちらへ」

ムードブレイクされた４人は、スタッフに連れられとある場所に。

そこは……

「衣装室？」

「ハイ。記念に色々な衣装を纏っての記念撮影企画をヤッテおりマス」

見渡す限り、衣装、衣装、衣装。

早い話が、衣装室。

「へえっ、面白そうだな。えーっと、戦隊物に特攻服、へぇっ、西部劇の服まで」

「やめとけ、憧れはあこがれのままで終わらせるべきだ」

「それもそうだな。じゃあお前はこれでも着て本能を思い出せ」

光一が西部劇の服を手に取ろうとしたところに茶々を入れる雄二。

その仕返しに、ゴリラの着ぐるみを雄二に差し出した。

「「……（メンチの切り合い）」」

「2人とも、ケンカしてないで衣装を見て回ろうよ」

「……雄二、久遠じゃなくて私と見つめ合うべき」

「「こんなゴリラ（モヤシ）と見つめ合って楽しい訳あるか！！」」

こんな彼らは仲良しコンビ？

「へぇっ、ウエディングドレスまであるのか」

「ん？　なんかサイズがおかしいのもないか？」

「最近、男子高校生で女装が流行ってルという情報ガありマシテ」

2人の脳裏に、その情報源ウチじゃないだろうな？　そんな事がよぎった。

そこで、2人にそれぞれ1着の衣装が押しつけられる。

「それじゃ、ボク達はボク達で衣装選ぶから、ちょっとそれ着てみてね」

「……言ってくる」

2人の言葉を無視し、愛子と翔子はあるコーナーへと歩を進めていった。

「なんか偉く気合入ってたな？」

「……光一、俺は逃げるからな？」

「霧島に最新のスタンガン贈っても良いならな？」

「キサマ絶対いつか殺してやる！」

「やってみろよゴリラ」

2人は押し付けられた白のタキシードを手に、それぞれ更衣室へ。

そして出てきて、雄二が一言。

「似合ってねえな」

「ほっとけ！」

雄二は以前着た事があって、それなりに様にはなっていた。

だが光一は始めての上に貧弱な体躯もあり、タキシードに着られてる感の方が強かった。

「考えてみれば、去年初めて会った時も制服に着られてる感があったからな」

「うるせえな……ってあれ？」

ふと見た光一の視線の先には、瑞希と美波に無理やりタキシードを

押し付けられてる明久が。

「待って！　光一達もいるんだから、騒ぎはマズイよ！」
「だったら大人しくこれを着なさい！」
「服を着代える事でまで暗殺の可能性考えないでください！」

「何やってんだあいつら？」
「大方、異端審問会が余所に行ったのをいい事に、自分達も楽しもうって腹積もりなんだろ？」
「やれやれ……」

まあこれ位なら良いだろ、という感じで光一は視線をそらす。

「あっ、終わった？」
「……こっちも準備できた」

2人が纏っていたのは、ウエディングドレス。
Aラインと呼ばれる、最も基本的なスタイルのウエディングドレス。

「ほぅっ……」
「へえっ……」

翔子のウエディングドレスは2人して見たことある物の、それでも似合う事に変わりはない。
愛子も元が良い為、光一が見惚れるには十分。

「ウエディングドレスなんて初めてだけど、どうかな？」
「え？　あっああ、そうだな。うん、似合ってる」
「まあ代表には劣るけどね？」

それは仕方がないとも思えるが、そうでもないとも光一は思っていた。

「デハ、記念撮影を行いマスので、コチラへ」
「何!?」
「おいおい、記念撮影位良いだろ？　別に何か危険がある訳でもあるまいし」
「それはお前だけだろ！　俺にはダダだあダダだ!!」

結局翔子に力尽くで引きずられ、仕方なく基本の並びでパシャっと写真を撮る事に。
光一も愛子に伴なわれ、こっちは抵抗もなく写真を撮る体勢に。

「ねえ優子、そんな所で隠れてないで出てきなよ？」
「はっ？」
「うっ……」

愛子が声をかけた先には、これまたウエディングドレスを纏った優子。
それは身体に密着するスレンダー型で、飾り気を排してはいる物の一旦肩口から別れた袖は手首に向かう程に大きく、レースが大量にあしらわれている。

「やっぱ来てたのか……で、何でお前まで」
「いっ、良いでしょ別に！」
「あははっ、優子も素直じゃないね。それじゃ……」

愛子が優子の手をとり、引っ張って並ぶように配置。
呆気に取られてる間に、愛子は光一に抱きついてカメラマンに写真を促して撮影。

そして出来た写真を見て一言。

「……まさか一度に2人のウエディングドレスを纏った女と写真を撮るとは思わなかった」

「そうよね。吉井君じゃあるまいし」

その後明久も、無理やりウエディングドレスを纏った2人と写真を撮って、本日のデートは終了。

そして次の日。

「待てコラァっ！　これ以上霧島を冒涜するなんて許せるか！！」

「工藤に木下の2人とウエディング写真だと！？　ぶち殺す！！」

「バカの分際で姫路に島田とウエディング写真とはいい度胸だ！！」

「オネエサマをボウトクしたツミ、シヲモッテツグナイナサイ！！」

異端審問会及び、それぞれのファンに追いかけられる核弾頭トリオの姿があった。

「コレが狙いだったのか！？」

「お前は……」

「いや、この際仕方ないだろ。結果としてはそうなる訳だし……という訳で雄二、これをやる」

光一はポケットから紙の束（お宝写真）を全員に見せる様に雄二に手渡した。

「じゃ、頼むぞ」

「テメ！　光一！！」

「雄二、君の事は忘れない」
「明久！！」

今日も文月学園は平和だった。

第七十九問　幕間　審査と狙撃と女装コンテスト

＜文月学園主催・女装コンテスト＞

文月学園の、おそらく体育館。
まるでファッションショーでも行うかのようなステージの周りは、満員御礼。

「さて、始まりました。文月学園らしい企画。時期はいつなのか？　目的はなんなのか？　場所はどこなのか？　そう言った細かい事はすべて無視していきましょう。解説を努めますのは、私、放送部の新野すみれと」
「学年主任の高橋洋子です」
「「よろしくお願いします」」

女装コンテスト。
解説の新野嬢の言う様に、時期や目的が一切不明の文月学園らしい企画。

「審査員席の久遠さん、準備はよろしいですか？」
「いつでも」

光一からの返事を受け、女装コンテストが始まった。

「では、エントリーナンバー１番！」

実況が流され、１人の女子生徒……いや。

「卑怯・変態・女装趣味と、三拍子揃った外道。２Ｂ代表、根本恭

二さんです！」

女子制服を纏った男子生徒が、威風堂々と言う態度で登場。
その達振る舞いは自信に充ち溢れ堂々としていたが、一言で言えば
……

「いやぁ、これは思った以上に汚い絵ですね～。初っ端から誰得～な企画かわからなくなってきました」
「そんな事言ってはいけませんよ新野さん。彼の変態としてのプライドを傷つけてしまってはかわいそうです」
「変態としてのプライドなんて物はむしろズタズタにされるべきだと思いますが、気にしないで行きましょう」

バチーーン！　×４

「ぐわっ！？」

「なお審査員は点数をつける代わりに、出場者を“久遠光一さんに”強制的に退場させる権限を持ちます」
「今のは暴徒鎮圧用のゴム弾ですね？　銃が命と豪語しているだけあって、見事な手際ですね」
「黒いサザンクロスが出来る辺り、彼の腕のレベルが伺えます」

遠く離れた審査員席では、工藤愛子、木下優子、佐藤美穂の３名がテーブルに。
その少し上の台で、狙撃ライフルを構える光一。
ちなみに方式は、３名がこれ以上見るに堪えないと思ったらボタンを押す。
その数と光一自身の退場権を足した数の弾丸を、出場者に撃ちだすと言う物。

ちなみに今のは、全員だったため黒いサザンクロス発動と考えてください。

「流石は久遠君だね」
「寸分狂わない狙いというのは、この事かも知れませんね」
「まあ、光一ならあり得る話だわ」

愛子、佐藤嬢、優子は、光一の腕前に関心の声を。
それに構う事なく、銃を撃った感覚にジーンとひたる様に光一は弾丸の装填を。

「久遠君、嬉しそうですね」
「銃が命ってキャラなのに、攻撃がスタンガンメインでしょ？　だからこういう役どころが嬉しいのよ」
「異端審問会相手だと、エアガンじゃ攻撃力弱い印象があるからね」

「では続きまして、エントリーナンバー2番」

登場したのは、髪飾りをつけ花柄の浴衣を纏ったガタイの良い男子生徒。
そのガタイは明らかに場違いで、ある意味先程の根元より酷い。

「Fクラス代表、坂本雄二さんです」

ビシッ！！

「ぐわっ！」

折り返しをする前に、雄二の顔にバッテンマークがついた。

「テメ、光一！！」
「うるさいな。さっさと退場させてやったんだからありがたく思え」
「ぐっ……ならせめて狙いを外せモヤシ！！」
「それこそふざけんな！　って、またモヤシって言ったなゴリラ！！」

「流石は相性が悪いと名高き“はぐれ武闘派コンビ”、。それはさておき、これは厳しい評価。ターンすらさせてもらえませんでしたね」
「坂本君は中央、つまり平均点に届かずに終わってしまったようですね」
「そうなりますね」

眼鏡を光らせ、今の事を言及し始める高橋女史。
雄二は何か嫌な予感を感じ、顔をゆがませる。

「平均点以下、つまり赤点という事は、補習の必要があるかもしれませんね」
「何ィッ！！？」

死の宣告に、雄二が声をあげた。

「いえ、そんな補習必要ないと思います」
「そっ、そうだろ！」
「坂本君、その格好のまま後で職員室に着てください。どこが悪かったのか、一緒に考えましょう」

雄二の顔が、某画家の“叫び”となった。

「これほど余計なお世話という言葉を体現しているセリフを、私は聞いた事がありません」

審査員席の４人が同時に頷いた。

「テメ、光一！！」

「……すまなかった。今度霧島から逃げる時には“多分”協力する」

「多分か！？　まあいい、今すぐ逃げ……」

「戦死者は……もとい、脱走者は補習！！」

逃げようとするも、あっさりとつかまり連行されていった。

「ではエントリーナンバー３番！」

「切り替えはええな！？」

「本日は撮る側ではなく撮られる側。ムッツリ商会の若き経営者、土屋康太こと ムッツリーニさんです」

銀のトレイを持った、ウエイトレス姿。

観客も声援をあげ始める。

「これはレベルが高い。普通に可愛いです」

「土屋君は小柄で無口ですからね。雰囲気も出ていたのでしょうか？」

「歩ききりましたねー」

「審査員も、これなら見ていられると思ったのでしょう」

「まあこれなら、な」

光一も銃を下して、楽な姿勢でソレを見ていた。

「続いてエントリーナンバー４番。文月学園を代表するバカにして久遠光一の相棒、吉井明久さんです」

白と黒の、胸元のあいたゴスロリ服。
その姿は、異様に様となっていた。

「吉井くぅぅーーん！！」

そこへまさかの乱入者。
学年次席の久保利光氏が、ルパンダイブで明久に襲いかかろうと……

ビシッ！！

「ぐはっ！！」

した所を、ゴム弾で鎮圧された。

「おっ……おのれ久遠光一！！」

という言葉を残し、久保利光は意識を手放した。

「意外です。よもや女装コンテストで乱入者があるとは」
「ですが発射された以上、吉井君は失格となります」
「それ以上に意外であるのが、よもや学年次席がこのような行動をとった事ですね」
「それは私としても意外ですが、久遠君の行動が速かった事も意外ですね。まるで見越してたかのようでした」

「まあ、予想はできてたな……まあ、多少の用心程度だったんだけど」

狙撃ライフルを下ろし、エントリー票を見てみる。
光一はこれならと、銃を持たず楽な姿勢で見始めた。

「それでは、最後のお1人、エントリーナンバー5番」

次もスタンダードに、女子制服。
しかしその立ち振る舞いは他に追随を許さず、誰もが女装コンテストと思えない程に見惚れていた。

「本命中の本命と言われ」

ビシッ！！　×4

「優勝、候補……」

観客が視線を向けた先には、撃った筈の光一が呆気にとられた様に横を見ている姿。
その横では、息を切らせながら狙撃用のライフルを構える優子が。

「はい、それではこれで文月学園女装コンテストを終了します。皆さま、またの機会にお会いしましょう。さようならー」

「俺が呼ばれた意味あったのかな？」
「何？　女装したかったの？」
「絶対いやだ！　それより、秀吉介抱しないと」

第八十問　幕間　とある死神の能力考察

文月学園の平穏とは、騒音と書いて平穏と読む。

「ホントに……お前ら一体何度やられれば諦めてくれる？」
「アンタにギャフンと言わせるまでよ！」
「あなたの所為で美春の召喚獣をお姉さまとの愛の結晶とする事が絶望的になったのです！　死んで詫びさせなければ気が治まりません！」
「今日と言う今日は、アンタをクズの烙印ごとゴミ箱に捨ててギャフンと言わせてやるわ！」

今日も光一の打倒を胸に、小山、清水、中林がＦクラスに押し入っていた。

「ギャフン！　これで良いか？」
「「良くない！！」」
「やれやれ……あっ、木内先生だ。丁度良い、召喚許可お願いします」

『Ｃクラス　小山友香　数学１７１点
Ｄクラス　清水美春　数学７８点
Ｅクラス　中林宏美　数学９９点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一　数学４９０点』

「「「え？」」」

数学の点を見て、３人は驚きの声をあげた。

光一は数学は得意としていたが、確か２００点代半ばだった筈。

「今回のテスト、ベクトルの問題メインだったからな」

弾道計算が得意な光一にとっては、造作もない問題。

早速死神の背の巨大ゲンコツの指先がグニュグニュとうごめき、人の顔を模る。

「さあ、餌の時間だ」

雷神、迷い神、風神に5本の指の顔、中林、清水、小山、根元、夏川の顔が噛みついた。

流石に3体いるので、２：１：２という割合で噛みつかせ、そのまま上に引っ張り上げる。。

「んじゃ、補習室へご案内」

死神が鎌を振り上げ、そのまま3体の首を刈り取った。

「戦死者は補習!!」

そこへ鉄人事、西村教諭が現れあっという間に3人を担ぎあげて行った。

「……今日も、襲撃？」

そこへ坂本雄二の奥さん事、坂本翔子がやってきた。

「今何か不快な物を感じたんだが？」

「気のせいだろ」

「……久遠も大変」
「その心配を少しは俺の扱いに向けてくれ頼むから」
雄二の主張だが、当然通らない。

「そう言えば光一。お前の死神のあの顔だが」
「ん？　あれがどうかしたのか？」
「どういう基準で選ばれてるんだ？」

小指が中林、薬指がダークネス清水、中指が小山、人差し指が根元、親指が夏川。
それぞれがE、D、C、B、Aを露わしている事は既に理解している。
だが、何故この5人なのかはまだ不明。

「言われてみれば、何でだろ？　DとAはクラス代表を倒した覚えはないから……」
「倒した奴の中で、クラス単位で一番の好成績者を、か？」
「でもそれだと、親指が不自然じゃない？」

明久の指摘に、光一も雄二も頷いた。
光一はAクラスの相手も何人か倒した事があるため、それで常夏コンビの片割れが出てくる事が不可解である。

「明久にしてはさえてるじゃないか」
「だって常夏コンビの変態の方だよ？　光一って確か工藤さん倒したことあるし」
「不自然この上ないな」
「うむっ。それならば工藤が出ないのはおかしな話じゃぞい」

「へっくし！」
「ん？　どうした夏川、風邪か？」
「っかしいな。冷房効き過ぎてやしねえってのに」
「……私と勝負して見る？」
ソレを聞いて雄二は顔を青ざめた。
光一のオカルト召喚獣の能力は、背の巨大ゲンコツの指先に倒した相手の顔を投影しそれを噛みつかせる物。
もし翔子の顔がそれに混じったら……
「それはやめろ！　絶対夢に出てしまう！！」
「そのつもりにきまってんだろ。霧島の顔がアレに交じるなんて流石に気の毒過ぎる」
翔子の顔が夏川の代わりに入るのを想像して、流石に光一も可哀想に思う。
ちなみに元々の顔に関しては、元々恨み持ってるので何とも思ってない。
「でも一体どういう基準何だろ？」
「大方、光一の嫌いな者順ではないか？　中林も清水も小山も根元も、この……常夏の、何じゃったかの？」
「とりあえず頭にブラ付けてた奴だし、変態とでも呼んどけ」
「そうじゃの。その変態も、光一とは嫌いあっておるのじゃ」
それぞれの顔には、光一自身因縁があった。
小指から人差し指までは言わずもがなで、親指も清涼祭時に因縁が

ある。

「でも、確実とは言えないぞ？　案外……いや、本当に予想外にも点が良い可能性もあるし」

「それはないだろ。じゃあ実際試してみるか？」

「……わかった」

そう言って、翔子が一歩前に出たのを雄二に止められる。

「いや、翔子はダメだ！　工藤より高い点数なら、木下優子相手に……」

「実験内容知られたら俺が生首にされるわ！」

「となると……」

所変わってＡクラス

「それで僕に白羽の矢が立ったと、そう言う訳なのですか代表？」

「……そう」

翔子が説明をして、納得したように頷く久保。

「構わないよ。僕としても、久遠光一とは一戦交えたいと思っていた所だ」

「じゃあお互い互角の勝負をと言う事で、英語フィールドで勝負だ」

「良いだろう」

雄二が腕輪をつけ、腕をかかげキーワードを紡ぐ。

「アウェイクン！」

腕輪を中心にフィールドが展開され、２人はそこで相対。

「さあ久遠光一、君に土を付けるのはこの僕だ！」

「やる気満々だな……まあ良い。その方が楽しめる」

『Ａクラス　久保利光　英語Ｗ３７８点』

ＶＳ

『Ｆクラス　久遠光一　英語Ｗ３０９点』

「やっぱり調子良かったとはいえ、学年次席相手だと劣るか……しかし」

光一は久保の展開した召喚獣を見て、思いきり嫌そうな顔をした。

いつも襲撃を仕掛けてくる同性愛主義の、暴走女のオカルト召喚獣

迷い神

それと全く同じ“迷い神”なのだから。

「なんで久保君の召喚獣が、清水さんと同じ迷い神？」

「……明久、お前は知らない方が良い」

「……その通りじゃ明久よ」

「……（コクコク）」

ちなみにギャラリーの中では、珍しく明久に優しい３人組がいたとか。

「さあ行くぞ、久遠光一！　君を倒し、雌雄を決する！」

「何のだ……？」

呆れる様に鎌を逆手に構え、銃口を迷い神の手足に向け撃ち出す。
迷い神はそれをよけ、そのまま距離を詰め殴りかかる。

「点数が近いってのに……！」

やむ負えず殴る手をそのまま鎌で受け流し、巨大ゲンコツで掴みソレを放り投げる。
そのまま宙に放り投げられ身動きが取れない処を、両腕両足を撃ち抜きそのまま首を刈り取った。

「さて、戦死者は補習だ」
「わかりました。では行きましょう」

久保はそのまま連行される事なく、自力で補習室へと向かって行った。
学年次席らしい態度である。

「……どう？」
「いや、物理フィールドじゃないとちょっと……」
「なら、アウェイクン！」

雄二が英語フィールドを解除し、物理フィールドを展開。

『Ｆクラス　久遠光一　物理６７８点』

「あれ？　お前また点数上がってないか？」
「女王の補習の恩恵だ。もうちょっとで鉄人の点数に届く」
「次は鉄人を打倒する気かお前は？」
「それも良いな」

光一は物理に関しては学年1の為、彼女の指導で伸びていた。
ちなみに最早光一の補習は全部彼女持ちと言う事になっています。

「さて、サモン！」

再度死神が現れ、背の巨大ゲンコツが開かれる。
その指先がグニュグニュと蠢き、人の顔をかたどった。

「あれ？　いつもと同じだ」
「と言う事は、やっぱり光一が嫌いな順みたいだね」
「じゃろうの。常夏の片割れが久保より優秀などとはとても思えんぞい」
「秀吉も言う様になったな……」

「へっきし！」
「おい汚いだろ」
「ああっ、悪い……おい常村、何か写真が落ち……」
「いや、これはだな？　えーっと……」
「……常村、何があっても親友だからな？」

「……！？」
「？　どうした秀吉？」
「……何か今、怖気が全身をくまなく襲った様な気がするぞい」

第八十一問　僕とホンネと召喚獣編（前書き）

気付いたら、評価者数１００人突破。
感無量ですが、何名かは満点を出してくれてはいないようです。
何が自分に欠けているのかを模索し解決する事が現在の課題となります。

第八十一問　僕とホンネと召喚獣編

問題　次の元素記号を原子量の小さい順に並べ、その名称を書きなさい

『Ｎｅ　Ｇａ　Ｈ　Ｏ　Ｐｏ　Ｉ　Ｎｅ』

姫路瑞希の答え
『Ｈ：水素　Ｏ：酸素　Ｎｅ：ネオン　Ｎａ：ナトリウム　Ｇａ：ガリウム　Ｉ：ヨウ素　Ｐｏ：ポロニウム』

教師のコメント
正解です。ＧａやＰｏは中々出てこない元素なので難しいかと思ったのですが、流石は姫路さんですね。

久遠光一の答え
『Ｇａ：Ｇ　Ｈ：Ｈ　Ｉ：Ｉ　Ｎａ：Ｎ　Ｎｅ：Ｎ　Ｏ：Ｏ　Ｐｏ：Ｐ』

教師のコメント
これは原子量ではなく、アルファベッド順に並べただけです。問題をよく読んでください。

土屋康太の答え
『Ｈ：Ｈ　Ｎａ：な　Ｏ：お　ＮＥ：ね　Ｇａ：が　Ｉ：い　Ｐｏ：ポッ（※／▽／※）

教師のコメント
『こんな解答なのに、ナトリウム以外の並び順があっているのが腹立たしいです。

「「「召喚獣の試運転？」」」
「ああ。そいつをアンタらにやってもらいたいのさ」

いつものごとく、休日のFクラス特別補習。
それが終わってから全員が帰った後にいつものメンバーで雑談していると、そこへ学園長がやってきてそんな事を言った。

「どうしてウチらなんですか？」
「どうしても何も、アンタらが適任だからさ。アンタらなら点数が高すぎず、召喚獣の扱いにも慣れているだろう？　それに……」
「それに？」
「……補習から脱走しようとしたバカ共への罰にもなるからね」
「「「……（サッ）！」」」

水を向けられ、咄嗟に目をそらす核弾頭トリオ。

「あの。試運転って、具体的にはどのような事をするんですか？」
「特にこれと言ったテスト項目はないさね。呼び出して、適当に動き回らせるだけで良いさ。何の動きもさせないのはテストにならないから困るけどね」
「あ、それだけで良いんですか。それなら私でも出来そうです」

瑞希が安心したように胸の前で手を合わせる。
……が、例の核弾頭トリオだけは妙なきな臭さを感じていた。
学園長がそんな簡単な事を脱走の罰としてやらせる訳がない、何か裏がある……と。

「おい妖怪、本当にそれだけなんだろうな？」
「それだけさね」
「……変な事になってやしないだろうな？」
「変な事にならない為の実験さね」
「まあまあ久遠君、そう人を疑う物ではありませんよ。それでしたら、私もお手伝いします学園長」
「……私も」

光一の勘繰りを遮り、瑞希と翔子は自主的に協力を申し出る。

「いや、アンタらはダメだね。点数が高すぎる」

が、即座に断った。

そこで3人と秀吉は、ふと自分達の腕につけられてる腕輪を見る。
“点数が高すぎると暴走が……”という事を思い出し、それに納得する。

「そういうワケで、試運転は科目を古典にして、まず始めに久遠、

それから吉井、坂本、島田、土屋、木下に頼むよ」
「いや、ちょっと待て妖怪！　何で俺から名前を出すんだ！？（１点）」
「そうですよババァ長！　僕や光一がこのメンツと同じだなんて納得できません！（１４点）」
「そうです学園長！　ウチをこんなバカ達と一緒にしないでください！（６点）」
「……不本意極まりない……っ！（９点）」

そのメンバーのうち４人が、猛然と抗議を始める。

「……アンタらのその自信はどこから湧いてくるのかねぇ」
「４人合わせても、姫路や霧島の十分の一以下じゃと言うのに……」

その様子を見て、学園長と秀吉は呆れていた。

「ちょっと待てババァ。光一や明久はともかく、俺は結構点数が取れていた筈だが」
「暴走が起きたらどうなるかのデータ収集が選考理由じゃないのか？　お前頑丈だし」
「それは良い考えだから、そうしようかね？　選考理由はこのガキには何かが起こっても構わないからだったんだが、使える者はきっちり使わないと」
「それが教育者の言葉かっ！　それと光一、テメ後で覚えてやがれ！！」

光一の仮説に頷いた明久が、学園長の言葉に嬉しそうにした。

それから軽く試運転の説明に。
今から１時間、試運転用に召喚フィールドは学校全体に展開され、

教室からは出ない様に。

「うまくやってくれたら……そうさね。学食の食券か図書券くらいは進呈してやろうじゃないか」

「「「おおーっ」」」

「じゃあ頼んだからね。報酬を出すんだから……絶対に、途中で投げ出すんじゃないよ」

そう言い残して、学園長は教室から出て行った。

美波達が嬉しそうに話をしてる傍らで、何かを感づいている3人は互いに頷きあう。

「ますます怪しい。あのババァが提案する事にしては簡単過ぎる」

「なんだ、明久も気付いてたのか」

「まあ、当然っちゃ当然だな。あの妖怪が態々お礼を用意してまで、こんな簡単な事させるなんて……」

「じゃあ、さっさと始めちゃいましょ」

「そうじゃな。こうしておっても始まらん」

「……了解」

そうやって3人が考え込んでる間に、既に召喚を始めようとする3人。

「あっ、待て！」

「「「サモンっ！」」」

光一が止めるより早く、キーワードを言ってしまった。

そして毎度おなじみの幾何学模様が足元に浮かび上がり、徐々に姿を現す召喚獣。

「あれ、元のサイズに戻ってる？」
「でも、武器も何も持ってないし、服も学校の制服だよ？」
「恐らく、一旦リセットしたんじゃないか？　以前のは明らかに調整失敗だからな」

現れたのは、通常仕様の小サイズ。
手には何も持っておらず、服も学園指定制服姿。

「多分これが、装備設定されてない時のデフォルトなんだろうな」
「一応、今のところおかしな部分は見当たらないね」
「安心するのはまだ早いぞ明久。さっきのババァの話だと、変更したのは操作性の部分らしいからな。動かしてからが本番だろ」
「ふむ。ならば、早速動かしてみようかの」

＜では、明久に飛びついて驚かせてみるのじゃ＞

「「「へ？」」」

見た目の確認を追え、秀吉が召喚獣に指示を出そうとすると、子供の様な高い声が教室に響き渡った。

「なっ、何だ今の？」
「さあ……子供どころか、僕ら以外の人の姿なんてどこもないよ？」
「ちょっと静かにしてろ。今のは……」

＜今の声はどこから聞こえて来たんじゃろうか？＞

「わかった！」
「え？　……あっ、そうか。“みるのじゃ”や“じゃろうか”だか

ら、秀吉？」
「いや。ワシは何もしゃべっておらんぞ？」
「秀吉じゃない。これは……」
光一は気付いたのか、それを否定した。
その正体を聞こうと明久が一歩前に出ると……
＜な、何……？　お化け……？　うぅ……怖いぃ……っ！＞
＜……この声、変声期前の児童の物＞
「あっ、あの、久遠君？　ど、どこかにスピーカーでも隠してあるとか……そういうのですよね？」
「そっそうよ。そうよね久遠、早く正体を言って」
「正体はこれだ」
光一が指差した先には……
＜それにしても、困ったのじゃ。今朝の事はどうしたらいいじゃろうか……＞
＜怖い怖い～！　お化けとか、ウチ本当に嫌なのに～！＞
＜……この視点の低さ、悪くない＞
「これは召喚獣がしゃべってるんだ」
「ほ、ホントだ！　召喚獣がしゃべってる！」
「へぇ～。こりゃ面白いな」
まじまじと召喚獣を眺め始める3人。
召喚獣達はそれぞれ腕を組んだり、頭を抱えてしゃがみこんだり、低い体勢から見上げてみたり。
思い思いの行動をとっていた。

「何か指示してるのか？」
「……特に何もやらせていない」
「ワシも、あの様な動作をさせてはおらんの」
「となると、操作性の向上と言うよりは、自動化って感じか？　しかし……」

＜お化けじゃなくて良かったぁ……危うく前の肝試しの時みたいに、また眠れなくなって葉月と一緒に寝なきゃいけなくなるところだったわ……＞
＜まさかまた近所の男子中学生に告白されるとは……こんな話が明久達や光一にばれてしまえば、ワシはさらに女扱いされてしまう上に、からかわれてしまう。何とか秘密裏に断らねば……＞
＜……この視点の低さなら、いつでもスカートの中を見られる……！＞

「美波……今召喚獣が言ってた話、本当なの？」
「秀吉、お前また……」
「ムッツリーニ……は、いつも通りだな」

召喚獣が言いだした事に対し、それぞれが問いかけると3人は否定の姿勢をとり始めた。

「な、何言ってるのよアキ！　召喚獣が勝手に全く思ってもいない事をしゃべってるだけよ！　ウチがお化けを怖がるとか、そんなのありえない物！」
＜寝るときだけじゃなくて、最近はお風呂も一緒かな。だって、髪洗う時怖いんだもん＞
「島田の言う通りじゃ。いくらなんでも、男のワシが近所の男子中学生に告白されるなぞ、嘘にも程があるぞい」

＜今月はこれで3人目じゃ＞
「……スカートの中に興味なんかない」
＜……スカートの中にはロマンや夢や希望があり興味は尽きない。タイト・ミニ・ロング・フレア。プリーツなど様々なスカートがありどれにも異なった魅力があるが、キュロットだけはスカートを名乗るべきではないと思う。あれにはあれで独特の魅力はある物の、防御力が高すぎて……＞
「……語るに落ちるとは、まさにこの事だな」

光一がぽつりと漏らした言葉に、全員が頷いた。
そこで美波の召喚獣が、明久に飛びついた。

「ひっ！　なっ何!?　まさか、召喚獣まで僕を殺そうと!?」
「あれ？　島田の召喚獣、明久に触ってないか？」
「へ？　あっ、そう言えば……！」

本来召喚獣は、ホログラフの様な存在の為に物や人には触れない。
なのに美波の召喚獣は、しっかりと明久の足にしがみついていた。

「この様子だと、また調整に失敗したんだな」
「変な所でいい加減だね……それより光一、助けて」
「だからウチは何もしないって言ってるのに！」
「……どの口がそんな戯言ほざくのやら」

今までを思い返し、そう吐き捨てるようにつぶやく光一。
まるで猛獣に抱きつかれてるようにおびえる明久。

＜だっこ＞
「へ？」

しかし、次の言葉でその恐怖は失われた。

＜アキ、だっこ＞

「ちょっ、ちょっと！　何言いだすのよ！？　アキ、今すぐその子をよこしなさい！」

＜やっ！　ウチはアキの所に居るっ！＞

そう言って、離れようとしない美波の召喚獣。

そこで、ある問題が浮上した。

「え？　今、召喚者の意思に逆らいませんでした？」

「無意識領域の一部を読み取るって話だから、体面より欲求に従った行動をとるってことだろ」

「えーっと……ねえ、光一？」

「こいつらは幼児程度の行動原理をもってて自我があるって事。早い話が、本音をしゃべる自分自身の子供の姿ってわけだ」

「本音をしゃべる……ですか」

光一の説明を聞いた瑞希が、紙とペンを取り出しせかせかと漢字を書き始めた。

「あの、明久君。これ、なんて読みますか？」

「えっと、“格差”」

「あっ、待て明久！」

「問題”かな？」

ポンっ！

明久の召喚獣登場。

「しまったぁぁあああっ！！」
「おい姫路……」
「ごめんなさい明久君っ！　でも、どうしても本音で効きたい事があるんですっ！」
「ナイスよ瑞希！」
被害を受けた美波は、仲間が増えた事を喜んだ。
「相変わらずバカだな明久」
「……雄二。“法の精神”を書いた人は？」
“モンテスキュー”だろ？　お前はいきなり何を言って……」
ポンっ！
雄二の召喚獣登場。
「しまったぁあああーっ！！」
「……お前、人の事言えないだろ」
「……雄二、私の事をどう思っているのか、聞かせてほしい」
そんな願いを込めて、翔子は雄二の召喚獣に視線を向ける。
その視線の先では……
＜バカ明久！　お前の名前の所為で呼びだしちまっただろうが！＞
＜アホ雄二！　人の不幸を笑うからそんな目に遭うんだ！＞
召喚獣達は取っ組み合いのけんかを始めていた。
「明久！　テメェの名前の所為で召喚されちまったじゃねぇか！」

「何を言ってるのさ！　元はと言えば雄二が脱走に失敗するからこんな事になったんだろ！」

ちなみに、本人同士もケンカしています。

＜むきー！　雄二のアホー！＞
＜うぎー！　明久のボケー！＞
「くたばれ雄二！　責任を取れ！」
「死ぬのはお前だ明久！　地獄に落ちろ！」

「あれじゃ無理だ。というか姫路に島田は、そう言う事は誤解といてからやれ」
「「うっ……」」
「……2人とも気の毒」

落ち込む2人を翔子が慰め始める。

「ちょっと、何の騒ぎ？」
「あれ、なになにー？　何か面白そうな事やってるねっ。ボクも混ぜてよ」

部活を終えた愛子と、自習を終わらせた優子が遅れて合流して来た。
不幸はまだ、始まったばかり。

第八十二問

問題　１～４の説明に当てはまる元素記号を次から選び、それぞれ正しい名称を書きなさい
『Ｍｎ　Ｏ　Ｓ　Ｎａ　Ｉ　Ｐｂ　Ｎｅ』

１．耐震立方構造で、水と激しく反応する。炎色反応では黄色を呈する
２．沸点１８４．２５℃、融点１１３．７５℃。コレの溶液にデンプンを加えると反応を起こし藍色を呈する
３．原子量５４、過酸化水素の水と酸素への分解反応に御家、コレの酸化物が触媒として用いられる。
４．希ガス族・第２周期、空気を液化、分留してつくられる

姫路瑞希の答え
１．Ｎａ：ナトリウム　２．Ｉ：ヨウ素　３．Ｍｎ：マンガン　４．Ｎｅ：ネオン

教師のコメント
正解です。それぞれの特徴を覚えておくと、化学反応の説明などにもつながります。基礎的な特徴はしっかりと覚えておきましょう。

島田美波の答え
『書きたくありません』

木下優子の答え
『書きたくありません』

教師のコメント

どうしましたか。テストのボイコットとは感心しませんね。島田さんと木下さんはまじめで良い子だと思っていたのに、先生はがっかりです。わからないのであればまだしも、書きたくないと言うのは理由にもなっていません。そう言った姿勢は、学力以前に人としての考え方において問題があります。今後はそのような態度を改めていかないと、いずれ社会に出た時に苦労を……

土屋康太の答え
『1．Ｎａ：ナ　2．Ｉ：イ　3．ＭＮ：ム　4．Ｎｅ：ネ』

教師のコメント
島田さんと木下さんに謝ってきます。

「へぇ～っ。本音をしゃべる召喚獣か～。面白そうだね」
「「「全然面白くないっ！」」」

事情を聞いた愛子は、楽しげにそう言った。
蚊帳の外なら楽しい事ではあるが、自分がそうなれば笑いごとではない。

「じゃあ、ホントに本音をしゃべるのか、確かめてみようかな～…
…ってあれ、久遠君は召喚してないの？」
「お生憎さま」

ターゲットにと向けた先には、召喚していないために余裕持って座
布団の上であぐらをかく光一。
しかし召喚していないとわかると、少々不機嫌になる。

「ねえ、久遠君」
「断る」
「まだ何も言ってないよ？」
「この状況で何を頼まれるかがわからん訳ないだろ」

流石に秀吉、美波、ムッツリーニの召喚獣による現状把握ができた
以上、召喚する気は微塵もない。
しかし愛子は何としてでもと、召喚させる気になっていた。

「ねえねえ久遠君」
「ん？　どうかしたあっ！？」

愛子は光一の目の前に立ち、スカートの裾をぴらぴらと上げ下げし
始めた。

「この先見たい？」
「いや、ダメ！　これだけは絶対！」

首をそらすも、即座に光一の視界に入るように移動してスカートの
裾の上げ下げ。
スパッツはいてる事は知ってても、流石に目の前でそんな事をされ
てはたまった物じゃない。

「工藤さん、あそこまでして＜良いなあ光一、羨ましいよ＞何が聞きたいのかな？」
「さあな？　まあ大方の＜全くだな畜生が、良い思いしやがって＞予想はつくがな」

「アキ。ちょっとこっち来て」
「明久君。お話があります」
「……雄二、おいで」

「……美波と姫路さん、あの疑いは解けたの？」
「だーいだだだ！！　まだ解けてねえよ！　それよりお前が今解くべきは俺にかけてる関節技だ！！」

連行されていく明久と雄二を、光一に関節技を掛けながら見送る優子。
その少し後、２人分の断末魔が響き渡った。

～～～　しばらくお待ちください　～～～

「まったく、覗き騒動で少しは懲りなさいよね！」
「そうです！　いやらしい事を考えるのはダメです！」
「……雄二、浮気は許さない」
「そう言う事ばっかり考えるから問題になるっていうの、いい加減わかりなさい！」
「「「肝に銘じておきます」」」

ボロボロになった身体で、ぺこぺこと額を畳にすりつけて謝る３人

「本当に本音をしゃべるんだね」

「いや、他人事のように言うな。てか、召喚してないのにどうしてこんな目に……」
「ごめんね久遠君にムッツリーニ君、吉井君に坂本君。ちょっとやりすぎちゃった」
そんな彼らに、愛子が手を合わせて謝った。
「俺の自業自得もあるけど、幾らなんでも酷いだろ」
「本当だよ、酷いよ工藤さん」
「ちょっとは自重してくれ」
「……全くもって、不健全」
「「「＜＜お前が言うな！＞＞」」」
3人＋召喚獣2体の声が、一斉に重なった。
それはさておき、光一は関節技の痛みが抜けない身体を少しひねる。
「でも久遠君、どうしても召喚してくれないの？」
「嫌です。だからそう言うのは……」
「召喚してくれたら、スパッツここで脱ごうかな」
「っ！？　サモ……むぐっ！」
言いかけそうになった処で、必死に手で口を塞ぐ光一。
しかし……。
＜……っ！！（ガタッ）＞
＜……っ！！（ガタッ）＞
＜……っ！！（ガタッ）＞
「「「これは違うんだぁーっ！」」」
「「「いいからこっち来なさい」」」

理不尽にも、許してはくれなかった。

〜〜〜　しばらくお待ちください　〜〜〜

「……いい加減観念しやがれ光一」

「……」

「やめなよ雄二……光一にはもうしゃべる力すらないの、見てわかるじゃない……」

畳に倒れ込んだままで、明久と雄二は会話。

光一は2人程頑丈ではなく、しゃべる気力すらも失われていた。

「……雄二。私はスパッツなんかはいてない」

「アキってば、どうしていっつもそんなにいやらしい事ばかり考えるのよ」

「明久君っ。ちゃんと反省してください」

「あんたもいい加減にしなさいよ光一、そう言ういかがわしい事されるとこっちまで迷惑するのよ！」

倒れてる3人に、女子勢が抗議する。

しかし彼らにしてみれば本能が反応しただけで、理不尽この上なかった。

「……（ぐったり）」

ちなみにもう1人は鼻血で倒れて動かない。

同じようにぐったりと横たわってる光一に、愛子が駆け寄った。

「あの、久遠君大丈夫？」

「……」

しかし光一はしゃべらない。

「ねえ優子、ちょっとやり過ぎなんじゃない？」

「良いのよ、そのバカにはこれ位が丁度良いの！」

「もっと素直になればいいのに……そうだ、優子も召喚して見たら？」

「だっ、誰が！　絶対にサモンなんて……あっ！」

ポンっ！

優子の召喚獣登場

「あああああっ！」

自ら犯したヘマに頭を抱えて叫ぶ優子。

＜ねえ光一、大丈夫？　ごめんね、いつもいつも乱暴な事ばっかりして＞

「ちょっ、なっ、何してるのよ！？　早く離れなさい！！」

＜やっ！　アタシ光一の傍にいる！＞

「……あれなら久遠も愛想を尽かす事はなかった筈」

その様子を見て、ぽつりとつぶやく翔子。

「あっ、そうだ。今朝ボクちょっと寝坊しちゃって、ブラをする時間が……」

「「もう勘弁＜＜＜ブラがどうしたっ！？＞＞＞してくださいっ！」

」

まだしゃべる力も戻っておらず、ぐったりと倒れてる光一は無反応。
しかしある程度頑丈な明久と雄二、そしてムッツリーニは意識でダメだとわかってても無意識が正直に反応。

迫りくる折檻の恐怖の怯える中、まず翔子が雄二に。
3度目ともあり、流石に生きてられないだろうとあたりをつける明久。

「……雄二」
「ち、違うぞ翔子！　これは男として仕方のない反応で」

手をバタバタと振って、無駄な弁解を試み始める雄二。
そんな彼に近づいた彼女がとった行動は……

「……えい」
「んぉっ！？」

いきなり雄二の頭を、胸に中に抱き抱えることだった。

「……嬉しい？」
「ば、バカを言え！　こんなのが嬉しい訳が＜イィィヤッホオォォー！＞あるかぁああーーっ！！」

力の限りに叫び声をあげ、召喚獣の声をかき消そうと試みる雄二。
ソレを聞いて嬉しそうに笑みを浮かべる翔子は、さらにギュっと雄二の頭を抱いた。

「……じゃあ、もう少しこうしててあげる」

「何を言ってやが＜キャッホォオー！＞放せぇえええええええーっ！！」

その腕の中から抜け出そうと暴れる雄二。
しかし翔子の腕はびくともしない。

「なんだ？　……偉く良い雰囲気になってるじゃないか」
「あっ、光一。大丈夫？」
「何とか……」

ようやく喋れるまでに回復した光一。

＜＜ウチ（アタシ）のちっちゃな胸でも喜ぶのかな？＞＞
「「いやぁあああああっ！！」」

「なんだ？」
「さあ？」

しかし2人してまだ立てる程体力は回復していないため、畳につっぷしたままでの会話。

「ボクのちっちゃな胸でも喜ぶのかな？　勿論ノーブラで」
「「……マジで勘弁して＜喜ぶに決まってるじゃないか！＞」」
「明久君、まだ反省が足りないんですか？」

仁王立ちで明久を見下ろす瑞希。
その様子にハァッ、とため息をはく光一。

「姫路」
「何ですか？　今は明久君のおしおきをしないと……」

「誤解解いたのか？」
「誤解……？　あっ！」

ソレを思い出し、萎縮し始める瑞希。
やっぱり本能だったかと、光一は完全に呆れていた。

「お前な……っとと」
「ねえ、召喚してよ？　今なら代表のまねしてあげるからさ」
＜良いな良いなー。光一はそんな事して貰えて＞
「美波ちゃん、殺りますよ！」

火に油……と言わんばかりに、瑞希は美波を呼びつけ明久の拷問を開始。

「いや、だからぎゃふっ！！」

突如頭を踏みぬかれ、それで気絶してしまう光一。
その足の主は、木下優子。

「もう、愛子！　いい加減にして！」
＜やっぱりこう言うのが喜ばれるのね。じゃあアタシも……＞
「きゃあああっ！！」
＜きゃあああっ！！＞

優子は召喚獣を捕まえ、壁に投げつけた。

「はぁっ……はぁっ……」
「あの、優子？　久遠君気絶してるんだけど？」

しかし、彼らの不幸はまだまだ終わらない

人物紹介　追記＋（前書き）

いまさらですが、ちょっと久遠光一君の人物紹介をしようと思います。

他の作品読んでみても、やっぱりこう言う事ははっきりさせといた方が良いと思いまして。
それにこの作品独特の要素などもある訳ですので、その辺りの説明もしておいた方がいいとも思いました。

人物紹介　追記＋

久遠（くおん）　光一（こういち）　ＣＶ：鳥海　浩輔

文月学園高等部２年Ｆクラスに所属する、エアガン集めやそれによる射撃を趣味とする過激派として有名な少年。
銃をこよなく愛し、いつか海外で本物を撃つ事が夢だと豪語している。
物理で上位の教師クラス、数学と英語はＡクラス以上の成績を持つが、他は明久の平均点以下で、特に日本史、世界史、化学、古典が一桁台の常連で、小学生レベルすら解けない
その為個人補習として学年主任の高橋洋子による“女王の補習”がＦクラス放課後補習として課せられている。
（追記）なお坂本翔子との取引の際、薬品を扱ってほしいとの要望の代償として化学の勉強を教えて貰った事で、２００点台へと成長した。

それを踏まえて、現在光一の総合科目はＢクラス級。

身長は１７６ｃｍで体重は４１ｋｇと、モヤシと呼ばれる程貧弱な体躯で体力は２人に格段に劣り、秀吉と素手での殴り合いをしても負ける程。
しかしそれを補うかのように頭の回転が速く、反射神経や空間認識能力、空間把握能力等の感覚に優れており、武器を使用してのケンカだったら負け知らず。
特にエアガンの扱いや投擲では抜群の命中率を誇り、幼馴染の秀吉も光一がコレらで的を外すのを殆どと言って良い程に見た事がない。
常日頃からボストンバッグを持っており、中には自慢のコレクションであるエアガンやスタンガンが入れられており、その事で危険人

物として恐れられている。
性格も過激派の名に恥じない程好戦的で、敵対する者に対してはとことん容赦しないが、基本的に自分に対して好意的な人間にはとことん優しい（こちらの対象は明久、秀吉、優子、愛子、翔子など）。

対ＦＦＦ団及び清水美春用武器リスト

・スタンガン（特注品）６本
・ゴム弾入りショットガン、自動拳銃
・麻酔銃（対清水美春用：ゾウに使う麻酔、対一般襲撃者用：通常の麻酔）
・ムチ
・催涙ガス
・炭素繊維ロープ
・改造バルカン砲（近日出品予定）

＜友人関係＞
・Ｆクラス
明久：バカ正直で真っ直ぐな所を気にいっていて、Ｆクラス内では例外の様に明久に対して優しく、コンビとして互いに信頼し合っている。
（光一＆明久　切り込み隊長コンビｏｒ学園デストロイヤーズ）
（光一＆明久＆雄二　核弾頭トリオ）
（光一＆明久＆秀吉　バカと過激派と美少女トリオ）

雄二：内心では認め合っている物の、出会いが最悪な上に体躯の事で散々言い合ってる為に折り合いが悪く、何かと衝突しがち。明久をハメようとするのを阻止したり、逆にハメたりとは酷い目にあわせている。

（光一＆雄二　はぐれ武闘派コンビ）
（雄二＆翔子　坂本夫妻）「俺は独身だ！！　ｂｙ雄二」

秀吉：家が隣の幼馴染で、兄妹分（笑）として付き合いが長く、割と周りから恋人と見られる事が多い。最近明久に対しての態度を気にかけてる物の、どうするべきかと悩んでいる。
（光一＆秀吉　危険物と美少女コンビ）
（秀吉＆優子　木下姉妹（笑））「ワシは男じゃ！！　ｂｙ秀吉」

ムッツリーニ：普段こそ仲良くはしている物の、明久や秀吉との同性愛説（？）を助長している為、あまり良い印象を持ってはおらずムッツリ商会打倒を目指している。
（ムッツリーニ＆愛子　保健体育の静動コンビ）

瑞希＆美波：明久の恋路の相手でもあるため応援するつもりはあるのだが、何かと暴走しがちな2人にライバル視されており、その事に嫌気がさし秀吉の事で悩む原因となっている。現在明久に暗殺者と誤解されているが、何とかしようにも本人達の態度が態度で否定できなくなっているため、どうするべきかと考えている。
（瑞希＆美波　ゴミ溜めに咲く花コンビ）

須川：ＦＦＦ団会長にして、異端審問会の議長を務める男。覗き騒動以来、光一を売って彼女を作ろうとする野心をひた隠しにしつつ、異端審問会として光一の命を狙い続ける敵。ただ会長含め全員がバカの為ソレを利用しての作戦で彼は今日も平和に逃げ切っている。

・Ａクラス
翔子：雄二への恋心を友人（笑）として応援し、スタンガンなどの器具を提供しているお得意様。

久保：明久の相棒である光一を良く思っておらず、“おのれ久遠光一！”と常日頃から光一に怨念をぶつけては明久を想う日々を満喫中。

愛子：光一の事を異性として気にいっており、現在絶賛アピール中。光一としてもまんざらでもなく、久保からは応援されているが、ムッツリーニにしてみれば面白くない（ブンブン！）。当然この事は、光一の異端審問会ブラックリスト入りの要因にもなっている。
（追記）アンチ久遠派による騒動後、優子との相談で光一を共有する事に決めた。優子は何番目でもいいと言うスタンスなので立場的には本妻。
（光一＆愛子　超過激派コンビ）

優子：幼馴染で、傍から見れば“蛇に睨まれた蛙”の様な間柄。以前光一は優子に惚れていたが、フラれている上に覗き騒動で一方的に言葉を聞かず拷問を執行したため、愛想を尽かしている。本人は愛子の態度で自身の気持ちに気付いた物の、フッた事や覗き騒動の事を気に病んでおり素直になりきれず。
（追記）アンチ久遠派による騒動後に茫然自失になった光一に対して自分の所為だと後悔し、これまで拘っていた優等生としての立場に名声を捨て、光一に許されるのなら一緒にいたいと元々の気持ちを前面に出す事を決意。これまでフッたこと及び酷い事をし続けてきた罪悪感があるせいか、一緒にいられるのなら何番目でもいいというスタンス。

佐藤：試召戦争、召喚大会、覗き騒動とAクラスで最も光一と交戦する機会が多い。

・Bクラス

根本：試召戦争で光一に討ち取られて以来、女装写真集を撮られるわ彼女にフラれるわで散々な目にあわされ、その原因である光一を憎んでいるＢクラス代表。現在はアンチ久遠派のリーダー格だが、同じく敗れヌ●ド写真集を撮られた上にそれを他のリーダー格にみられ、アンチ久遠派でも居場所をなくしつつある。

（追記）アンチ久遠は壊滅後、観察処分者に認定されクラス内では存在を認識されなくなった。

そのため現在はＦＦＦ団に入団し、一級査問官としてがんばっている。

・Ｃクラス

小山：覗き騒動で光一に攻撃を加えた事により、最終日にその恨みを晴らす為と討ち取られた事で光一を恨むようになるＣクラス代表。現在はアンチ久遠派のリーダー格を務めているが、そのヒステリックで短気な性格から光一の口車と挑発に乗せられ連敗記録を作りあげている。その為Ｃクラスでは対Ａクラス試召戦争のＡ級戦犯という前科も併せ、煙たがられ始めている。

（追記）アンチ久遠派壊滅後は、根拠も証拠も一切ない情報に踊らされたバカ者として、完全にクラス内での発言権も立場も失われた。

・Ｄクラス

美春：光一の持つ融合召喚型の腕輪を狙い、日々光一と明久を抹殺し美波を我が物とする為にアンチ久遠派として活動中。しかし肝試し勝負で負けた事で融合召喚型の腕輪がらみでの騒動を禁じられ、現在はその恨みを晴らす為に光一を狙い続けている。怒りが頂点に達すると人間離れした姿となり、３０万ボルトすら効かなくなる。

（追記）アンチ久遠派壊滅後、観察処分者に認定されＦクラスへの出入りを禁止される。

・Ｅクラス

中林：召喚大会で負けて以来、光一に恨みを持つ様になったEクラス代表。体育会系クラスの代表で、小山に負けず劣らずの勝気な性格のため筋肉女呼ばわりする光一の打倒を目指す。だが元々試召戦争に興味のないクラスである為、余計な騒動は勘弁だと最近では代表としての威厳が失われつつある。
（追記）小山同様、代表としては完全に信頼を失い、発言権も立場もなきに等しくなった。

＜召喚獣＞

・通常仕様
装備：毛皮のジャケット、黒いスラックス、編み上げブーツ
武器：右手にライフル、左手に自動拳銃
腕輪：爆発（撃ちだした銃弾を中心に半径２ｍの爆発を引き起こす。連鎖や誘爆も可能）

・オカルト仕様
装備：マントで身を包み背を巨大ゲンコツで掴まれる様相
武器：大鎌（柄がショットガン仕様）
特殊能力：背の巨大ゲンコツの指先にこれまで倒した相手の顔を投影し、噛みつかせる能力
小指～親指をＥ～Ａで表している（選考基準は不明）
小指が中林、薬指がダークネス清水、中指が小山、人差し指が根本、親指は夏川

・所有腕輪：黒金の腕輪（融合召喚型）
自身の召喚獣をベースとして、他者の召喚獣と融合し

1体の召喚獣とする腕輪。
　融合ベースは腕輪にパーソナルデータを登録する必要があり、基本的に登録できるのは1人だけでそれ以外の人間は使えない。
　発動条件は相手が同意である事と、召喚獣同士が手を繋ぐ事でベース召喚獣と融合し融合相手に合わせて装備を変更する。ただしオカルト召喚獣の場合、背の巨大ゲンコツで掴む事が条件のため強制的に融合が出来るが、死神の背に融合相手の上半身が生えている格好となるため、その部分は融合相手に主導権がある。
　オカルト版の融合召喚の相手の召喚獣は、武器がグレードアップする。
　特殊能力も融合召喚獣ごとに変化するが、2人の合計点が８００点オーバーでなければ発動しない。
　なおこの腕輪は明久の同時召喚型の白金の腕輪と併用する事が出来、明久と光一の点数を足して二分した点数を持ち、それぞれ明久と光一が主導権を持つ2体の召喚獣を召喚できる。

・新ルール
設備を賭けた試験召喚戦争では、代表格の融合召喚による干渉は認めない
（敵の代表格に融合召喚獣での勝負の申し込み、味方の代表との融合召喚など）

＜融合召喚獣＞

・通常仕様
秀吉：ジャケットが道着の様な着こなしに変更、武器は2丁の自動拳銃

明久：籠手が追加、2本のガンブレード
腕輪：分身（幾つかの実体のない分身を作り出し、それらを操る能力）
愛子（シャツが無くなりジャケットの下は素肌、2丁のバズーカ砲）
腕輪：電磁砲（バズーカ砲に電気を作用させ、レールガンと同じ原理に変化させる）

・オカルト仕様
秀吉：猫又の胸の大きさと爪の鋭さが増す
明久：デュラハンの剣が2丁の自動式ボウガンに代わる
愛子：のっぺらぼうの手にグラブが追加される

第八十三問（前書き）

今回は長くなりそうなので、長編使用にしました。
と言っても、召喚獣補完計画編程度だと思いますので。
では、改めてお願いします

ならびに、今確認したのですがＰＶ２５０万、ユニーク２０万突破！
まさか自分の作品がここまで来るとは、正直思ってませんでした。
いつも感想をくれる常連さま方、自分の作品を御贔屓にしてくれる方々にこの感謝の気持ちを伝えるには、やはりこれからも質の高い作品を書く事だと思いますので、これからもよろしくお願いします

第八十三問

問題　次の文章を読み、問いに答えなさい

『１９世紀の終わり、“ドイツの宰相”は世界最初の社会保険制度を創設し、貧困者の救済を図った。また、この救済と同時に、社会主義鎮圧法を制定したために、この政策は「（　）とムチの政策」と呼ばれた。』

？　当時のドイツの宰相の名前を書きなさい
？　（　）に当てはまる単語を答えなさい

姫路瑞希の答え
『？ビスマルク
？（　アメ　）とムチの政策

教師のコメント
正解です。ビスマルクは政策として、社会保険制度をご褒美……つまり“アメ”として民衆に与え、一方で社会主義者鎮圧法と言う“ムチ”で人々を叩いたと言う訳です。甘やかすだけでもなく、叩くだけでもない。政治のみならず、様々な場面で用いられる手法ですね。

久遠光一の答え
『？高橋洋子
？（　召喚獣　）とムチの政策

教師のコメント
高橋先生から“授業が終わり次第、生徒指導室で話があります”と伝言を受けていますので、くれぐれも脱走を企てたりしない様に。

土屋康太の答え
『？エリザベス』

教師のコメント
ムチ　↓　女王様　↓　エリザベス女王
最近君の考えが理解できるようになって、先生はとても複雑な気分です。

吉井明久の答え
『？ビスマルク
？（ムチ）とムチの政策

教師のコメント
宰相の名は正解ですが、叩き過ぎです。

「ううっ……」
「……大丈夫、光一？」
「……明久が5人に見える」
「あーっ……」

つっぷした状態で、優子に踏み抜かれた頭のダメージに苦しむ光一。
拷問あがりの明久も、自分と違って物理的な防御力がない光一の発言に顔をゆがませた。

「ごめんね久遠君、まさかここまでになるとは思わなかったから……」

愛子が濡らしたハンカチを手にし、それを光一の頭の上に乗せる。

＜良いなあ光一。優しくしてくれる女子がいて……僕なんて女子に暗殺されかけてるっていうのに＞
「「だからそれは誤解です（よ）！」」
「……お前ら説得力ってものを知ってるか？」

まだ立てない身体に鞭うって、愛子の手を借りて壁に寄り掛かる。

「久遠君って、予想以上に軽いんだね？」
「モヤシもここに極まれりね」
「モヤシ言う……！　ううっ……」

大声がダメージ残る頭に響いたのか、頭を抱えて俯いた。

「なによ、だらしないわね」
「お前らの拷問癖につき合わされてる明久と一緒にするな」
「「誰が拷問癖なんて持ってるんですか（のよ）！？」」

「いっ……騒ぐな、頭に響く……」

再度頭抱えて呻く光一。

愛子が持って来た鞄からスポーツドリンクいりのペットボトルをとり、光一に手渡す。

「……コレ終わったら病院行った方が良いんじゃない？　ボクもつき添うからさ」

「そうだな。あの妖怪に治療費請求してから行くか」

「……だから学園長を妖怪呼ばわりするのは」

＜光一を病院に連れて行くのはアタシが＞

「やった事なんだから、責任持つのが普通よね！！」

召喚獣の声をかき消すかのように、優子が大声をあげる。

至近距離でそんな大声を受けたため、光一が再度頭抱える。

「それよりも明久君、ちょっと聞きたい事があります」

「え！？　なっ……何かな？」

＜殺さないで殺さないで殺さないで殺さないで殺さないで＞

瑞希の突然の質問に、一瞬尻込みする明久。

その近くで、ガタガタと震えながら“殺さないで”と呟き続ける召喚獣。

「……どうしてこんな事に」

「……そんな風にふるまえる事の方が俺には不思議だ」

あんな事をしておいて、どうして意外そうに出来るのかが光一には不思議でならなかった。

いや、普通に考えれば不思議だろう。

「……そっそれよりも、その、突然ですけど……あ、明久君は……好きな人はいますかっ！？」

「ほぇっ？　急にどうしたの？」

＜……もしかして最後に僕の好きな人に想いを伝えてあげるから、大人しく安らかに眠れって事かな？＞

「あの……そんな優しさが一応あるんなら、何歩か譲って許してくれても……」

「……どうしてこの質問が死の宣告になるんですか？」

重ね重ね言うが、今の瑞希は明久にとっては暗殺未遂の現行犯である。

「おーい明久、答えてやれよ」

「＜どっどうして！？＞　……っ！　わかったよ。光一がそう言うなら」

光一の意図をアイコンタクトで読んだ明久は、即座に答える事に。その反応にずずいっと身を乗り出す瑞希。

＜アキの好きな人！？　聞きたい聞きたい！＞

「こらあっ！　あんたは黙ってなさい！！」

その余波を受けて、美波は召喚獣相手に接戦を繰り広げていた。

「……雄二、雄二はどう？　私の事、好き？」

「ふん、くだらねぇ。そんな質問に答える義務は……」

＜俺？　俺はもちろん……＞

「呻れ俺のハリケーンシュート！」

＜みぎゃあーっ！＞
「……雄二、酷い」

当然、その影響は他にも及んでいた。
雄二のシュートで吹っ飛んだ召喚獣を見て、翔子はしょんぼりとする。

「えっと、僕の好きな人はね」
「は、はいっ。明久君の好きな人は……」
「……Gクラスに居る左門さん、かな？」

明久はそうやってもったいつけて、ハッキリとその名前を告げた。

「……え？　さ、左門さん？　誰ですか？　そんな人、聞いた事も……それに、Gクラスなんてうちの学校には……あっ！」

ポンっ！

瑞希の召喚獣登場。

「……流石は姫路、見事なまでにあっさりと騙されたな」

瑞希が振り向いた先には、ようやく立ち上がれるほどに回復した光一の姿が。
頭を押さえる素振りもない。

「もっ、もしかして、久遠君の差し金ですか！？」
「気にするな。ほんのしかえし……もとい、相棒への援護だ」
「今しかえしって言いましたよね！？　明久君の誤解といい、私が一体何をしたんですか！？」

「待て、何でそこでそんな発言が出来るんだ!?　むしろそっちの方が疑問だよ!」

むぅっと呻ると、瑞希は先程明久にしたように紙に何かを書き始める。

「久遠君、これは何と読みますか?」

「……あのな、既に使われた手がそう何度も通用する訳ないだろ」

＜そもそも光一は雄二より上手だからね＞

＜忌々しいな畜生が!　こうなったら何としてでも光一をはめてやる!＞

明久の召喚獣がそう呟くと、それに反応した雄二の召喚獣が怒鳴る。

先程の様に頭を押さえる光一。

「面倒な事になったな……そう思わないか明久?」

「うん、そうだよね」

「っ!　おい光一、栗を使ったケーキをなんて言う?」

「それならモンブランじゃないのか?　それと雄二、さっきも言ったが既に使われた手がそう何度も通用する訳ないだろ」

サモンと繋がる様に言っただけでも呼びだされる。

ソレを狙っての発言だったが、見事光一には見破られていた。

「諦めなよ雄二、光一には散々やり込められてるって言うのに」

＜見てる分には楽しいけどね＞

「＜うるさい!　こうなったらあいつも巻き込まんと気が済まねえ!!＞」

召喚獣と声のタイミングから大きさまで全て重なる雄二。

いざ光一をはめるべく、一歩前に出るが……。

「おい光一、この前だが……」

「そんな事より雄二、霧島に迫られた時の感想は？」

＜そりゃ当然「目指せ、ワールドカップ！」ふぎゃあああっ！！＞

その出鼻から挫かれていた。

「……光一、往生際が悪い」

ゴソゴソ……ピシッ！（懐から取り出した写真をムッツリーニに向けて弾き飛ばす音）

「……っ！？（ブシャアアアっ！！）」

＜……っ！？（ブシャアアアっ！！）＞

続いて出たムッツリーニも、あっさりと光一の策略にはまり召喚獣諸共に大出血。

「ちょっと久遠！　あんたも男なら……」

「そう言えば学校でやってるお化け屋敷って、カップルの穴場になってるって話だったな？」

＜うんうん、怖いけどアキと行けばどさくさに……＞

「きゃあああああっ！！」

そして見かねた美波が抗議するも、こちらもあっさりと返り討ちに遭ってしまった。

「……ダメね。完全に光一の方が上手だわ」

「あれ？　あの、愛子ちゃんは参加しないんですか？」

「え？　そうだね……召喚して貰って聞きたい事はあるけど、久遠君に吉井君たち程の頑丈さはないみたいだし、あまり死にかけにするのもどうかと思うから」
「……（ササッ）」

愛子の申し訳なさそうな発言に、優子が顔をそらした。
実際火種は愛子とは言え、実行したのは優子の方である。

＜はぁ～っ、愛子が羨ましい。やっぱりアタシもそう言う事に……＞
「ちょっと焼却炉に行ってくるわ！」
「ダッダメですよ！　いくら自分の召喚獣とはいえ、そんな事は！」

優子が自身の召喚獣をひっ捕まえ、教室の外へ出て行こうとするのを瑞希が慌てて捕まえる。

＜うぅっ……やっぱり姫路さん、胸が大きくて羨ましい＞
＜木下さんスリムで羨ましいです＞
「「いやぁあああっ！！」」

それと同時に、召喚獣の台詞をかき消すかのように悲鳴を上げた。

「光一、テメ！」
「1人だけ逃げようったってそうはいかないんだから！」

暴れる召喚獣を取り押さえつつ、雄二と美波が光一に詰め寄る。
それに対し、特に動揺する事もなく……。

「隠し事」

と言うキーワードを紡いだ。

＜隠し事？　隠し事というと、水槽の……＞
＜ウチはね、ぬいぐるみと机の上にあいつの写真を飾ってあってね」
「猛れ俺のネオハリケーンシュート！！」
「ゴミ箱の中へ消えなさい！」

その影響を受けた召喚獣を、２人がゴミ箱向けて蹴り飛ばした。
その様子を見て、光一が一言。

「……おかしいな？」
「なにがよ！？」
「雄二ならともかく、島田の点数ならそろそろ戦死してもおかしくないのに」
「そう言えば……くそっ、コレもあのババァの罠か！？」
「じゃあこの召喚獣、やっぱり時間が来ないと消えないって事！？」

新たな要素発覚に、頭を抱える雄二と美波。

「あのさ、問題が解決するまで大人しく」

ポンっ！

光一の召喚獣登場。

「するのが賢明……あっ！！」
「バカが、気を抜きやがったな」
「……１人だけ逃げようなんて、甘過ぎにも程がある」
「ふふっ、ようこそ久遠。さあ存分に本音で語り合いましょ？」

ついに出そろったＦクラス主要メンバーの召喚獣。

しかし、彼らの受難はまだ終わらない。

第八十四問

みんなのうた

空色のペンを買ってこよう
今日という日を記念日にしよう
カレンダーに空色の丸をつけて、僕らの思い出を増やしていこう
理由は何でもいい
ただ今を生きている
それだけで、僕らは今日というかけがえのない1日を記念日にできるのだから

カレンダーについている空の色は、僕らにとって思い出の……

タイトル「臨死体験生還記念日」

作：吉井明久

「おい明久、このカレンダーなんで空色の丸で埋め尽くされてるんだ？」
「それはね、僕にとっての記念日だから」

「遠い目でいう記念日って……ああ、なるほどな」
「ねえ光一、僕達って幸せだよね？」
「ああ。少なくとも、今こうして生きてられるのは幸せだ……確か秀吉の見たがってた映画は」
「？　どうかしたの光一？」
「いや、なんでもない」

「くそっ、マヌケやった」

つい気を抜いてしまい、召喚してしまった光一。
周りでは意地の悪い笑みを浮かべる雄二と美波、ムッツリーニ。

「さて、どうしてくれようか？」
「そうね。あんたには散々やられた訳だから」
「……覚悟」

＜くっ、まずい……どうしたものか？＞

早速考えてる事を、光一の召喚獣が呟く。

「って、なんか冷静じゃない？」
「考えてみれば、俺特に知られて困る様な事ってないし……」

明久の指摘に、あっけらかんと答える光一。

「好きな人は？」

＜今は特に＞

「優子の事は？」

＜幼馴染＞

美波の質問に本人は顔色変えることなく、召喚獣が淡々と質問を返す。

「……」

＜そうよね……やっぱり、そうなるわよね＞

「まあまあ、久遠君だって考え直す可能性も……」

その傍らでは、ショックを受ける優子を瑞希が慰めていた。

本人特に気付くことなく。

＜まあ好きな人で思い当たると言えば、真っ先には……＞

「あっ、こら！」

光一が召喚獣の口を塞ぐや否や、召喚獣は暴れ出しその拘束から力任せに逃れようとする。

流石にそんな事をしても……。

「ぶっ！」

あっさり逃げられてしまった。

「……お前、１点の召喚獣に簡単に逃げられるなよ」

＜所詮はモヤシか。武器がなきゃ何もできやしねえ＞

＜黙れゴリラモドキ、霧島にバナナでも貰ってろ＞
「だったらこうだ！」

ボストンバッグから1丁のショットガンを取り出すと、召喚獣に向けて狙いを定める。
そして引き金を引くとその弾丸が召喚獣に襲いかかり……

ビシッ！

＜ふぎゃあああああっ！！＞

命中と同時に大きな音を立て、そのまま召喚獣を壁まで吹き飛ばした。

「ちょっと待て、今撃ちだした弾は一体何だ！？」
「対清水美春用に用意した暴徒鎮圧用のゴム弾だ。あたりゃヘビー級パンチの威力がある」
「……どうやって手に入れたんだ？」

そこは気にしない方向で。
というのが、バカテスでの常識です。

「……これは是非とも聞きたいかな？」

と、興味津々にそう言うのは愛子。
それを妬ましげに見る男が1人。

「……殺したい程妬ましい」
＜……俺も工藤にそんな事言ってほしい＞
「……っ！（バシバシ）」

＜……叩かないでほしい＞

召喚獣とドツき漫才をしながらのため、コミカルな光景でしかないが。

「よし、追求していくわよ！」

「待て島田、ここは……光一、Ａと言えば？」

「＜Ａクラスだろ、それがどうかしたか？＞」

光一は何のことかさっぱり分からなかった。

無論、その場にいる全員がそうだろう。

「じゃあＡカップは？」

「は？　いきなり何を＜木下優子！＞言いだすんだよ？」

「そうだよ雄二、こん＜島田美波！＞な場面で何聞いてるのさ？」

メキメキメキ！

「「ぎゃあああああっ！！」」

いつの間にか光一が優子にタワーブリッジに、明久が美波にパロスペシャルに固められていた。

ソレを見た雄二は、満足げにニヤニヤしながらそれを傍観し始める。

「よし、復讐完了だ」

「雄二、霧島の胸の抱き心地はどうだった！？」

「何を言いだ＜そりゃ最＞ぬおぉおおりゃぁぁぁあああああっ！！」

雄二は召喚獣を捕まえるや否や、ゴミ箱にダンクシュートを極めた。

「最低に決まってんだろ！　俺は翔子の胸に微塵も興味はねえ！！」
「……それは困る」
「ちょっ、待て！　何故また抱きかかえようとする！？」
薄れゆく意識の中で、それは流石に面白くないとやり取りを見る光一。
そして……

「成程、姫路位なきゃダメとかか？」
「……浮気は許さない」

～～～　しばらくお待ちください　～～～

「……結局こうなるのかよ」
「……僕達ってどうしてこう、女子に対して命の危険を感じないといけないのかな？」
「……今回ばかりは同感だ。しかし光一、俺のはテメエのせいだろうが」

またもや3人して、畳の上で突っ伏すハメに。

「……雄二、大きい胸が良いなら言ってくれれば努力する」
「ウチだって成長してるんだからね！　＜サイズ的には、全然変わってないけど＞こらあっ！　何余計な事言ってるのよアンタは！！」
「光一、セクハラも大概に＜やっぱり豊胸マッサージをもっとした方が＞きゃあああああっ！！」

召喚獣をそれぞれ、壁に叩きつける美波と優子。

「あっ、あの……」
「やめときなよ、瑞希ちゃん。今出ていくと藪蛇なだけだから……
それより」
愛子がいたずらっぽい笑みを浮かべると、光一達に近づいて……
「あっ！」
3人の召喚獣を抱き上げ、離れてしまった。
ガバっと立ち上がり、ソレを奪い取ろうとするも……
「……ダメ」
「させないわよ！」
「観念なさい！」
それぞれ優子、美波、翔子に止められてしまった。
「あの、愛子ちゃん。明久君の召喚獣は私に」
「ん、良いよ。はい……それじゃ、早速だけど」
＜おっぱいが柔らかくて気持ちいい＞
明久の召喚獣が、突然そんな事を言い出した。
「わあああああっ！　お願い、すぐ返しぎゃあああああっ！！」
「アキ！　アンタはまた！！」
捕まえてた美波に拷問され始める明久。
「フィードバック、この状態でも＜今だけはそれが無性に羨ましい
＞ちゃんと機能しギャアアアア！！」

「今回ばかりは、その良し悪しが＜全くだ畜生が＞出まくってギャアアア！！」

本人を捕まえてる優子と翔子が、揃って2人を痛めつける。

光一と雄二の召喚獣は、現在愛子が確保してる為である。

～～～　しばらくお待ちください　～～～

「やべえ……意識が朦朧としてきた……」

「まずいね……僕も指先が少し震えて来たよ……」

「……（しゃべる力もない）」

ぐったりと横たわる光一の横で、突っ伏しながら会話をする明久と雄二。

起き上がれる程の（約一名喋れる程の）体力が回復するには、時間がかかる状態。

「光一、アンタ何考えてるのよ！」

「召喚獣を利用していやらしい事をするなんて最低！」

「……雄二、浮気は許さないと何度言えばわかるの？」

3人して、痛めつけてもなおも治まらぬ大激怒。

「くっ……」

喋れるまでに体力回復した光一が、ふとムッツリーニを見ると……

「……エロなんて興味ない」

＜……興味津々＞

「……スカートなんてどうでもいい」

＜……どうでもよくない、すごく大事＞
「……どうでも良いんだ……っっ！」
＜……違う、大好き＞

鼻血から召喚獣にリアクションが変わっただけで、大して変わりがない。
その姿にムカついたので、光一は……

「ムッツリーニ、想像して見ろ」
「……？」
「誰もいない廊下、遠くに見えるのは浴場への扉、そしてその先は女湯、そして……」
「＜……＞」
「ババァの裸」
「「＜＜◎◆▽×■△＞＞」」

脳神経を壊す想像を、ムッツリーニ＋1にもたらした。
召喚獣諸共、2人して頭を抱え苦しみ悶えている。

「……よっぽど苦しい光景だったんだね」
「ああ、見てないの俺と明久と秀吉……ってあれ？　そう言えば。さっきから秀吉の召喚獣の声が全然聞こえてこないな？」
「え？　そう言えばそうだね。不公平じゃないかな？」

「んむ？　何じゃ2人とも、ワシを呼んだかの？」

彼らの受難は、まだ終わらない。

第八十五問

みんなのうた

『太陽と向日葵』　作：常村勇作

気がつけばいつも
お前の姿を追っている。
思い出せばいつも
お前の笑顔を求めてる

木下秀吉

例えるならば俺は向日葵で
お前は俺を照らす太陽だ
お前の輝きを追い掛けて
俺は大輪の花を咲かせよう
この気持ちをうまく表す言葉を知らないが
それでもお前に伝えたい

好きだ木下お前の事が
ＭＡＪＩでＺＯＫＫＯＮ　ＬＯＶＥしてる
（たいへん気持ち悪くできました）

「よし、出来たぞ！」
「何がだ？」
「いや、何でもない……後は、いつコレを聞かせるか、だ」

「……！！？」
「ん？　どうした秀吉？」
「……今、言い様のない悪寒が背を襲ったのじゃ」
「なんだ、風邪か？　じゃあ保健室付き添ってやるよ」
「すまぬの」
「待て久遠！　木下を保健室へ連れて行くのは俺だ！！」
「何言ってやがる！　俺が木下の看病をするんだ！！」
「いーや、俺がだ！　俺が木下の汗を拭いてやるんだ！！」
「だったら俺は木下を着替えさせる！！」
「んだとコラ！？　木下は俺んだ！！　死ねやコラ！！」

「……さっさと行くか」
「……そうじゃの」

騒動の場から少し離れた場所にて。
そこでは秀吉とその召喚獣が静かに座禅を組んでいた。

「木下君、寝てたの？」
「いや、流石にこんな中では幾らワシでも寝られんぞ、工藤」
「そんな事より、どうして秀吉の召喚獣が静かなんだ？」

秀吉の召喚獣は、本人の隣でちょこんと座禅を組んで目を閉じてる。

「妙な事を口走られては困るからの。修行僧になった気持ちで、瞑想して気分を落ち着かせておったのじゃ」
＜……＞
「成程、意識を読み取って行動する訳だから、ソレをなくせば……」

「明久君、好きな人はいないですか？」
「久遠君、さっき好きな人で強いて言うならって所は誰の事？」
「……雄二。本当の気持ちは？」

「っ！？　まずい！」

瑞希、愛子、翔子の３人はそれぞれに質問。
本人達はかたくなに口を閉ざしているが……。

＜＜＜好きな人？　それは……＞＞＞

その意思に反し、召喚獣達が答えようとしていた。
3人は大急ぎで座禅を組み、瞑想し始める……と

＜＜＜……＞＞＞
「あれ？　吉井君に久遠君？」
「……雄二、返事は？」
＜黙ってないで答えてください！　私と両おも……＞
「きゃあああああっ！！」

召喚獣は口を噤み、座禅をその場で組み始めた。
沈黙を保ち、これならばと3人はそのまま座禅を続ける。

「どうやら、瞑想したら大丈夫な様ね？」
「ホント！？　じゃあウチらもマネしましょ！」
「そっそうですね！」

召喚獣を呼びだした3人の女子も、同様に瞑想を始めた。
その様子を、3人は目を閉じつつも気配で感じ取る。
そうか、3人も座禅を……と言う所で

＜スカートで座禅っ、見たいっ、見たいっ！＞
「しまったぁああーっ！　邪念がぁあああーっ！！」

明久の本能が刺激された。

＜何っ！　どこだ！？　誰がやってる！？＞
＜何だとっ！　スカートで座禅だと！？＞
＜……俺も見る……っ＞
「「「邪念がぁあーっ！！」」」

それが呼び水となり、光一、雄二、ムッツリーニの召喚獣がそう叫んだ。

「あ、明久君……？」

「アキ……アンタ、またそうやっていやらしい事を！」

「ち、違うんだ！　誤解だよ！　そうじゃなくて僕は＜何だー。２人とも座禅じゃなくて正座じゃないかー＞ごめんなさい！　いやらしい事を考えてました！」

本音が駄々漏れのため、謝らざるを得ない明久。

「光一、アンタね！！」

「いや、だから＜男が女に興味持つのは当然の話だろ。優子の趣味の方がよっぽど＞まっ、待て！　これは……」

禁忌をバラしかけ、オーラを放ちながら仁王立ちする優子に怯える光一。

「……雄二。浮気は許さない」

「ち、違うぞ翔子！　俺は別に＜スカートで座禅なんて言われたら反応するのが男の本能だよなー＞ぐおぉおおっ！　明久ぁあああっ！　テメェが余計な事を言うから連想しちまっただろうがぁあああっ！！」

些細な邪念が命取りになると言う事を、全員に知らしめた事だった。

それは男子だけではなく……

＜んっと、今日の私の下着はピンクだったよね？＞

＜ウチはみずいろだよ～＞

＜アタシは白よ＞
「「「いやぁあああああっ！！」」」
女子とて例外ではなかった。

「全員静かにしろ、今優先すべき事は＜成程、ピンクにみずいろに白か＞邪念を取り払う事だ！」
「……久遠、説得力がまるでない」
「確かにそうじゃが、そこは賛成じゃ。皆も今優先すべき事は何かを見失うでない」

しばらくすると、全員が落ち着きを取り戻し静寂が訪れた。

「ねぇねぇ、久遠君」
「……」

外界の情報を遮断する……と言わんばかりに、全員は瞑想状態を維持。
安全地帯の2人は、少し不満げに全員を見回す。

「ん～、なんだか静かになっちゃったね」
「……困る。雄二の気持ち、聞きたいのに」

全員はただひたすら、タイムアップを目指し瞑想。
しかしそれが何事もなく許される程、彼らの運は良くはない。

「あ。そう言えばボク、さっきこの教室に入る前、学園長先生に会ったんだけど」
「……うん」
「その時、全員の動きが無くなったら使うようにって渡されたもの

があったんだよね」
「……渡されたもの？」
「そ。この箱なんだけど、なんかここから1枚ずつ取り出して、ソレを読み上げなさいって」

明久と光一が薄目を開けてみてみると、愛子が小さな箱を4つ取り出した。
その中の1つから3枚のカードを取り出し、首を傾げる。

「……連想ゲーム？」
「よくわかんないけど、そういうことかなぁ。まぁとりあえずやってみよっか。えっと、まず1枚目。はい」
「……“しましま”？」
「はい、2枚目」
「……“ピンク”」
「はい、3枚目」
「……“みずいろ“」
「この3つから連想される物か～……なんだろうね？」

＜＜＜＜パンツ！！＞＞＞＞

男子勢の召喚獣が真っ先に反応した。
成程ねと愛子が頷くと、2つ目の箱に手を伸ばす。

「じゃあ、次行くね。1枚目はこれだよ」
「……“浴衣”」
「2枚目はこれね」
「……“メイド服”」
「それで3枚目」
「……“セーラー服”」

＜＜＜＜木下秀吉＞＞＞＞
＜＜＜＜吉井明久＞＞＞＞
「待って！　どうしてその連想で僕と秀吉が同数なの！？」
納得いかないと言わんばかりに、明久が抗議の声をあげた。
「秀吉は、僕と光一と雄二とムッツリーニだろうから……どうして女子は皆僕を連想したの！？」
「待つのじゃ明久！　何故ワシまで女子に含める！？」
秀吉の言葉を遮り、２人はある写真を取り出した。
そこに映っていたのは、メイド服やらゴスロリ服を纏った明久。
「ウチの宝物よ」
「そうです。許可があれば、今すぐパソコンに取り込んで世界中に送信したい位ですよ」
＜まさか僕を社会的にまで抹殺する気なの！？　しかもそれが、宝物！？＞
「いくらなんでもあんまりだよ！」
「「何でそうなるんですか（のよ）！？」」
いい加減ツッコミを入れるのに疲れた光一は、ハァッとため息をつく。
＜やっぱり秀吉とくっつけた方が明久のためな気がする＞
「ちょっ、ちょっと光一！　アンタ一体何を言ってるのよ！？」
「そうじゃ光一、ワシは＜実に嬉し＞わあああああっ！！」
珍しく取りみだした秀吉が、召喚獣の口を塞いだ。

それには流石に光一と優子もあっけにとられる。

「ううっ……塩と水だけの生活に戻る事になるのかな？」
「だから何で脅迫になるのよ？」
「私達の正直な気持ちを言っただけなのに……」
「＜お前ら誤解に飲み込まれてしまえ＞」

召喚獣と声がシンクロした光一だった。
それに突っ込みを入れようとした優子と秀吉だが……

「それとまさか、木下姉妹まで僕をそう言う目で？」

明久の問いでそれは遮られた。

「んむ？　何を言っておるのじゃ明久。ワシが友人をそんな目で＜女装と言えば明久しかおらんのじゃ＞見ておる筈がなかろう」
「そうよ。大体そんな不純な目で人を見るなんて＜女装した吉井君って結構可愛いからね＞アタシがする訳ないじゃない」

表情どころか顔色一つ変えず、２人は堂々とウソを言いはなった。

＜違うよ秀吉に木下さん。さっきので僕が連想したのは女装じゃなくて、秀吉の私服だよ＞
＜ソレ納得だ。演劇の衣装姿で出くわす事も珍しくないし＞
「明久よ、お主ワシをどんな目で見ておるのじゃ……？」
「秀吉、さっきの光一の言った事について、後でゆっくりお話しましょ？」

秀吉の不幸が確約したにもかかわらず、まだまだ受難は続く。
愛子と翔子が３つ目の箱から、カードを取り出す。

「さらにもう1回。はい」
「……“いやらしい事”」
「2枚目ね」
「……“囁きかける”」
「3枚目っと」
「……“吉井と久遠に”」
「「どうして僕（俺）達!!?」」

それに抗議をあげるが、すぐに冷静さを取り戻し瞑想。
2人にそっと愛子が歩み寄り、まず明久の耳元に口を寄せると、小さく息を吸って囁きかける。

「ねぇ、吉井君」

ノリノリで何かを連想させる様な、妙に艶のある声。
しかし彼は耐える事に集中し、自分の命がかかっていると自己暗示を……

＜明久君っ。愛子ちゃんにいやらしい事を考えちゃだめですからねっ！＞
＜アキっ。おかしな反応したら、許さないからね！＞

かける必要がなくなった。
実際に命が懸っていると言う事でひたすら時間の経過を待つ。

そんな抵抗を楽しむかのようにたっぷりと真を撮ると、愛子は明久の耳元で息がかかるように……。

「……○▲×□の……△●※■」

と、呟いた。

「へ？」

＜？？？＞

聞き慣れない単語に、明久は首を傾げる召喚獣諸共に疑問の声を出す。

「＜……○▲×□の……△●※■だと……っ！（ブシャァアアアアッ）＞」

ちなみにどこぞのムッツリは、召喚獣と一緒になって鼻血を噴いていた。

その様子から明久はよっぽどのいやらしい単語だと理解するも、意味がわからず何ともない。

「あれ？　吉井君、なんともないの？」

＜？　意味が分かんないよ＞

「……むーっ……」

そんなリアクションが気に入らないのか、平然とする召喚獣を前にむくれる愛子。

実践派としてのプライドを傷つけられ、面白くないと言わんばかり。

それを肌で感じ取り、安心する明久。

「……ふーっ」

「ひぁあああああああっ！？！？！？」

その隙をつく様に、愛子が明久の耳に息を吹きかけた。

「工藤さん!?　今もしかして僕の耳に息を」

＜なんか、耳や背中が変な感じ＞

「さぁっ。なんだろね～?」

おどけたように言う愛子。

「あ、愛子ちゃん!　ダメですよっ!　明久君にそう言う事をするのは＜さっきの明久君の声、可愛かったです＞きゃぁあーっ!」

「そうよっ!　そう言うのはアキじゃなくて久遠に＜アキって耳や首が弱いのかな＞いやぁあーっ!」

「ほらほら皆。そんなことより瞑想しなくていいのカナ～?」

「「「ぅぐっ」」」

召喚獣が何か言いだしそうだったため、3人は慌てて眼を閉じて心を落ち着かせる。

……が。

＜……（ひしっ）＞

＜……（ひしっ）＞

美波と瑞希の召喚獣が明久の頭に両側からしがみついていた。

集中しにくい上に、明久にとっては最悪の状態。

＜殺さないで殺さないで殺さないで＞

「……どうして違うって言ってるのを分かってくれないんですか?」

「……久遠まで見離そうとしてるみたいだし、どうしてよ?」

召喚獣の呪詛の様な“殺さないで”コールに、傷ついた瑞希と美波

だった。

「うん、これでスッとしたかな。じゃあ次は久遠君だね」
「……うん。頑張って」
「はーい。じゃあ……」

明久以上にノリノリで光一に歩み寄る愛子。
先程の明久と同様に、自身の命をかけた攻防戦が今か今かと待ち構える。

＜光一、いやらしい真似したらどうなるかわかるわよね？＞

その声は予想はしてた為、大して反応はない。
少しばかり間を開けた後、愛子はそっと光一の耳元に顔を近づけ……

「ねえ、久遠君……ボクね」

そっと、光一にだけ聞こえる音量で……

＜なっ、スパッツの下に!?　それは是非確認を!!＞

グギミシボキっ!!

「＜ギャアアアアアアアアッ!!!＞」

何かをつぶやき、光一の召喚獣が反応するや否や、召喚獣諸共に優子のキャメルクラッチの餌食となった。
メキメキと背骨が危ない音を出し始めると……

＜そんなにスパッツが良いならアタシも＞

「きゃあああああっ！！」

召喚獣の声を塞ぐかのように、優子は召喚獣を捕まえ黒板にたたき付けた。

その場にくてっと倒れた光一は、痛みで身体が痙攣していた。

「あっちゃー……ちょっとやり過ぎたかな？」

「……愛子。あまり優子を刺激しない」

「はーい。じゃあ、最後にもう一回やって終わろっかな？」

４つ目の箱を取り出すと、そこからカードを取り出した。

「はい１枚目」

「……“あなたの”」

「はい２枚目」

「……“本当に”」

「３枚目」

「……“好きな人”」

＜＜＜えっと、それは＞＞＞

「「どぉりゃぁあああーっっ！！」」

男性陣はおろか、女性陣及び秀吉までも耐えきれず、自身の召喚獣をゴミ箱にたたきこんだ。

ただし……。

「そこだ！」

光一はそれができないため、暴徒鎮圧用ゴム弾入りのショットガンで召喚獣を吹っ飛ばした。

彼らの受難は、まだ終わらない。

第八十六問　幕間　『くじと波乱と王様ゲーム』（前書き）

総合Ｐｔ３０００突破
まさかここまで来るとは思いませんでした。

皆さんに感謝の証として、王様ゲーム編を書きました。

第八十六問　幕間　『くじと波乱と王様ゲーム』

２年Ｆクラスの教室内にて。
カーテンが閉め切られ、明かりもなく暗い室内。
そこで１つの卓袱台を真剣な顔で囲う、１０人の男女。

「王様ゲーム！」
「「「イェー！」」」

その内の１人、坂本雄二の宣言で全員のテンションが上昇。
彼らの囲う卓袱台には、９枚の紙が入った１つのかごがのっていた。

「明久、ルールの説明を頼む！」
「オーケー！　ここに、１～９までの数字と、“王”と書かれたクジがあります」

明久が目配せを舌先では、その王と書かれたクジを持つ光一。
かごの中では既に半分に折りたたまれた９枚のくじがあり、光一はその中に王のクジを投じ掻き混ぜる。

「王様のクジを引いた人は、他の番号を引いた人に命令が出来ます。たとえば、１番が王の肩をもむとか、２番が３番にしっぺをするとか」
「さらに言えば、それに対する拒否権はない……何故なら、王様の命令は」
「「「絶対！」」」

全員が一斉に声を揃えた。

「それじゃあ、始めるぞ！？」

雄二が言ったと同時に、一斉に皆が手を伸ばしクジを引く。

「さて、覚悟は良いか？」

光一の確認に、全員が頷いた。

「いくぞ、せーのっ！」

「「「王様だーれだ！！？」」」

「よっしゃーーっ！」

雄二がガッツポーズをとり、他は落ち込む者うなだれる者など阿鼻叫喚。

ソレを見て、雄二が手に持つ王のクジを見せびらかすよう、堂々と突き出す。

「それじゃあ命令だ。そうだな……5番と6番が」

自身の番号を宣言され、身構える明久とムッツリーニ。

「鉄人に。そして7番」

雄二はその番号を口にした途端、ある人物が反応した事を見逃さなかった。

当然それは、雄二の顔をにやりと歪ませる。

「7番は高橋女史に、“好きです、付き合って下さい”と、告って

来い！」

5番である明久、6番であるムッツリーニはがっくりとひざまずく。
そして……

「何ィッ！？」

7番である光一が、顔を青ざめてショックを受けたかのように声をあげた。

「「「キサマーー！！」」」
「なんて事命令しやがんだ！！　よりにもよって高橋女史だと！！？」
「光一はまだ良いよ！　そんなことしたら、完全に誤解されるじゃないか！？」
「……不名誉な！」

3人して雄二にくってかかった。
それは当然の話だろう。

「ダメよアキ。さっき自分で説明したばかりでしょうが！？」
「そうだよ3人とも」
「ぐっ……明久、ムッツリーニ、ここは我慢だ」

血の涙を流す光一の目を、2人は見逃さなかった。
その目を見て、光一の復讐プランを読み取ると……

「……そうだね」
「……やむ負えない」

ここは我慢と、3人はのろのろと教室を出て行った。

～～～　しばらくお待ちください　～～～

数分後

「「「……ただいま」」」
「あっ、お帰り」

『私は教師をからかった事を反省しています』
と書かれたプラカードを3人は首から下げ、約1名はボロボロになって帰ってきた。

「……高橋女史って、やっぱ人気あるんだな」
「ごめんね光一、さっきあんな事言って」
「いや、良いんだ……さて、2回戦だ」
「「「……（コク）」」」

力なくそう言う光一に頷く2人。

「せーのっ！」
「「「王様だーれだ！！？」」」
「あ、ボクだね」

満面の笑みを浮かべながら、王のクジを見せる愛子。
先程の様に、全員が悔しそうに思い思いの行動をとる。

「それじゃあ、2番が4番の！　そして1番……」

愛子はちらりと、光一に目を向け……

「1番が王様の、ほっぺにチュウで」

可愛らしくポーズをとり、そう宣言した。

「本当ですかー!?」

と、表情も声も大喜びを表すには十分な瑞希。
その傍らで……。

「ほら久遠君、命令だよ?」
「え?」
「ちょっと光一、何ニヤけてるのよ?」

愛子の発言に疑問を感じると同時に、刺す様な優子の視線に怯む。

「いや、その前に何で1番が俺だと……!」

ヒュッ!　(カッターが投げられる音)
カカカッ!　(警棒型スタンガンで全て弾かれる音。
ダッ!　×2　(2人が距離をとる音)

「……異端者に死を」
「正直に“お前の大好きな工藤に手を出す奴に死を”と言ったらどうだ?」
「……そんな事実はない」
「ウソをつくな。じゃあどうして俺だけに集中して攻撃を仕掛ける?」

それもそのはず、傍らでは瑞希が嬉しそうに明久に番号を問いかけている。
その様子は、明らかに異端審問会の範疇に引っかかる代物。

「……明久なんていつでも殺せる」
「待ってムッツリーニ！　今とんでもない事言わなかった!?」
「それよりいいの？　こうしてる間にも王様ゲームやる時間減ってくよ？」

時間は有限とはよく言った物で。
折角のチャンスを減らす事に躊躇したのか、ムッツリーニも大人しく引き下がった。

……その目に静かな殺意を湛えつつ

「さっさとやったら？」
「何で俺が責められるんだよ？　……なんか理不尽だな」
「それじゃ、はい」

頬を向ける愛子に少し動揺しつつ、明久の方を見てみると……

「へっ……？」

3番のクジを持つ明久と、呆然とする瑞希。
そして、その瑞希の肩をポンポンと叩く……

「……いらっしゃい、瑞希」

2番のクジを持つ美波。

～～～　しばらくお待ちください　～～～

「……今一番このゲームで割食ってるの、絶対に俺だよな？」

今の処、２回とも光一は皆勤賞。
慣れない事をした上に、ムッツリーニと優子から刺す様な視線が集中で、うんざりとしてた。

ちなみに愛子は、頬に残ってる感触に浸ってる。

「……わかりました。そう言うエッチなのもオーケーなんですね。それなら私だって、容赦しません！」
「普通女の子はいやらしい罰ゲームを嫌がるものなんじゃが……」
「やめとけ秀吉、気にするだけ無駄だ」
「行きますよ！　せーのっ！」
「「「王様だーれだ！？」」」

異様に迫力にあふれる瑞希の号令で、３回戦が始まった。
そして王様は……

「俺だ」

あくまでも冷静に、かつ不敵な笑みを浮かべ王のクジを見せる光一。
ここで、光一の頭の中ではめまぐるしく思考が渦巻く。

「そうだな……Ｄクラスの教室へ行って、３番！　……が４番！　……を伴い、８番！　……に」

と言った処で光一は紙とペンを取り出し、何かを簡単に書き始める。
書き終えると、3番のクジを持つ雄二に折りたたんだ状態で差し出す。

「この紙に書いてある通りの事を言え」

雄二がその紙を受け取り、それを開くと……

サァァッ……！　（雄二の顔から血の気が引く音）

「……コレをこのメンツを伴い、Dクラスで言えと？」
「ああ、そうだ」

光一が視線をそらした先には、4番のクジを持つ翔子。
そして、8番のクジを持つ……

「？　どうしたのよ坂本、さっさとDクラスに行くわよ」
「……雄二、早く済ませる」
「ちょっと待て！　俺はあだだだだっ！　やめ、わかった！　自分で歩く、自分で歩くから！！」

翔子が雄二を引きずり、美波がそれを追う形で3人はDクラスへ。
ソレを見送った後、光一はねっ転がった。

「で、何を書いたの？」
「直にわかる」
「え？　それって……」

『殺します！　オネエサマをタブラかすガイチュウ、コロシマス！！』
『……浮気は許さない』
『まっ、待て翔子！　清水も、これは光一の差し金なんだ！！』

「……始めて雄二に同情しそうだよ（１００万ドルの笑顔で親指を立てている）」
「……不幸極まりない（１００万ドルの笑顔で親指を立てている）」
「吉井君に土屋君、言葉と行動が伴ってないわよ？」
「気持ちは分からなくもないけど……」

～～～　しばらくお待ちください　～～～

「おうお帰り」
「……ただで済むと思うなよキサマ」
「そう、それがさっき俺達が思った事だ。それじゃ４回戦だ、せーの……」

ボロボロになった雄二と、少し顔の赤い美波。
少々不機嫌さを隠しきれない翔子が席に着くと、光一は何事もなかったかのように開始宣言

「「「王様だーれだ！？」」」
「あ、アタシね。じゃあ３番が４番に、そして９番が１番に抱きついて」
「あれ、意外と普通の出したな？」

「アンタ達が異常なだけよ！」

最もである。

「えーっと、３番は誰？」

「んむ？　４番は明久か」

「さあおいで秀吉！」

３番のクジを手に持つ明久に、４番のクジを持つ秀吉が“嬉しそうに”少し近づく。

明久が幸運をかみしめると同時に、迎えるかのように手を広げると……

グギッ！！　×２

「ぎゃあああああっ！！　腕が、腕がぁぁあああああっ！！！」

その広げた両腕が瑞希と美波によってへし折られた。

「木下！　アンタ一体どこまでウチ等をバカにすれば気が済むのよ！？」

「不潔です！　よりにもよって見せつけようだなんて！！」

「これは王様ゲームじゃぞ？　ワシに文句を言われても困るぞい」

２人に問い詰められ、たじろぐ秀吉。

いつもなら光一が仲裁に入る所だが……

「……またかよ」

その光一の手には１番のクジがあり、それどころではなかった。

「皆勤賞は更新だな」
「腹が減ったなら霧島にバナナでも食わせてもらえクソゴリラ。で、9番誰だ？」
「ボクだよ」
そう言ったのは、9番のクジを持つ愛子。
「……許すまじ！」
「アンタどれだけいやらしいことしたら気が済むのよ！？」
「だから俺が命令した訳でもないのに何で責められるんだよ！？しかも命令した本人まで！」
～～～　しばらくお待ちください　～～～
明久は光一に助けて貰うまで放置され、その光一も優子とムッツリーニの殺意の的。
愛子にキスしたり抱きついたりと役得はあった物の、疲弊しきっていた。
「……やっぱりこのゲームで1番割食ってるの俺だよな」
「良い気味だ」
「自分がカミさんに甘えられないからって……」
「誰にカミさんがいるって？」
「やるぞ！　せーの！」
「「王様だーれだ！？」
全員がクジを見やり、静寂のひと時が訪れる。

王が名乗りを上げることなく、ただ時は過ぎていく。
その中で、雄二がふと見た先では……

「……」

クールな……いや、クールを通り越し吹雪を思わせる雰囲気で、翔子はクジを見せつける。
そこに書かれていたのは“王”の文字。

「……！？　すまんが急用が！！」
「「「逃がすかぁ！！」」」
「ぐわあっ！！」

雄二が脱走を企てるや否や、明久とムッツリーニがそれに飛びつく。
2人が動きを止めたと同時に、雄二の背に光一の撃ったゴム弾が襲いかかった。

「さあ王様、ご命令を！」
「うぐぐっ、やっやめろ！　離しやがれえぇぇ！」
「……うん」

明久とムッツリーニが両腕を抑え、背後から光一がショットガン（ゴム弾装填済み）を押し付ける。
それでも雄二は、振り払おうと抵抗し続ける。

「いっ、嫌だ！　嫌だ！！　やめろ！！」
「……じゃあ、雄二は今から私に何をされても、抵抗しちゃダメ」
「待てお前！　俺に何をする気なんだ！？」

「……そんなの」

そこで区切り、顔を赤らめて雄二から顔をそらす。

「……恥ずかしくて、言えない」

「コイツ変態だ！！」

「いや、普通だろ。夫婦のやりとりなんて夫婦の数だけある物だし」

「俺は独身だ！！」

泣きながら抵抗し続ける雄二の傍で、翔子の言葉で鼻血を吹くムッツリーニ。

しかしそこで、雄二に救いの手が。

「じゃが霧島よ、さきの命令は残念ながら向こうじゃ」

「あっ、そうか。番号で宣言しないとルール違反になっちまう」

「わかったらさっさと離しやがれ！」

「いや、お前もとっとと気付けよ。まあ結果は見えてるが」

光一のツッコミと同時に、明久とムッツリーニが不満げに拘束を解く。

雄二は余裕綽々と、制服を直し始める……が。

「……じゃあ、４番」

……

……

……

……

ダッ！

ガシッ！　×2
ビシッ！

～～～　しばらくお待ちください　～～～

「一体何があったのじゃろうか？」
「まるで拷問の後見たいね」

雄二はロープで（特殊な形に）縛られており、猿轡と言う状態その近くでは、翔子が口をハンカチでぬぐっていた。

「それじゃそろそろラストだ」
「そうだね。せーの！」
「「「王様だーれだ！？」」」
「よし、僕だ！」

珍しく当たりを引いて嬉しいのか、明久は飛び跳ねた。

「それじゃ、1番から9番までの全員は」

ニヒルな笑みを浮かべ、王のクジを掲げる明久。
その命令は……

「隠し持ってる僕等の女装写真をデータ諸共に焼き捨てる～♪」
「「「そっ、そんな～っ！！」」」
「それは名案じゃな！」
「っておーい優子、お前は反応しちゃダメだろ」

明久の命令に悲鳴を上げる様にショックを受ける瑞希と美波、優子。
それに賛同する秀吉と、約1名に突っ込みを入れる光一。

「そんなの酷いです！　あんまりです！」
「そうよアキ！　しかもそれだと、木下の写真まで燃やす事になるのよ！？」
「……多少の苦しみは我慢するよ。今はそれよりも、社会的な抹殺を防ぐ事が優先だ！」
「良かったじゃないか、これで少しは暗殺実行犯の疑いが晴れるぞ？」

明久の主張に加え、それにフォローを入れる光一。
しかし2人にしてみれば、誤解が誤解を招いた不幸以外の何物でもない。

「いっ、嫌です！　これは私達の宝物です！」
「そうよ、手放すどころかもう二度と手に入らなくなるなんて、絶対に嫌よ！」
「だが断る！　そんなのがもし出回ったら、僕の人生は破滅なんだ！！　さあ、大人しく……」
「まあ待て明久」

2人に迫ろうとする明久を、光一が優しく制した。
その様子を見て、ホッとする女子2人。

「教室の中で処分したら火事になっちまうだろ？　こんな事もあろうかと七輪を用意したから、屋上で写真を焼きつつバーベキューしよう」
「それは良いのう。では早速屋上へ赴くのじゃ」
「「いやあぁぁーっ！！」」

それから屋上にて。

「いやあああああっ！！」
「あっ、あああああっ！！」
「まっ、待って光一！　その写真だけはあああああああっ！！」

光一の手により写真に火がつけられ、種火として放り込まれる。
どんどん写真が灰へと変わっていき、その上の網では明久と秀吉により焼き肉が始まる。

「たまにはいい物じゃな」
「そうだね」

のんびりと焼き肉を楽しむ明久と秀吉と、着火作業に勤しむ光一。
その作業を悲鳴を上げながら見る瑞希と美波と優子。

「……雄二、焼き肉なんて楽しみ」
「むっ、むう～！！」

焼けるまでの間、縛られてる雄二の膝枕で眠る翔子。

「……」

秀吉の過激な写真が目に入り、鼻血の海に沈むムッツリーニ。

「あはは……」
「ん？　工藤、焼き肉嫌いか？」
「ううん。そうじゃなくて、その……なんか、すごい光景だねぇ…

…」

「気にしたら負けだ。ほら、焼けたけど食べるか？」

「うん。折角だから、食べさせてくれると嬉しいな」

「んじゃその前に……」

「「「解散！」」」

こうして、王様ゲームは幕を閉じた。

第八十七問　僕とホンネと召喚獣編　エピローグ

「それはそうと姫路に島田、お前らは優先させる順に間違ってないか？」

未だダメージが抜けきらず、畳に突っ伏してる光一がふと問いかけた。

「何がですか？」

「そうよ。アキの好きな人を把握したいって思って何が悪いの？」

「……＜こいつら本当に誤解解きたいと思ってるのか？＞」

ぼそりと召喚獣共々に言った言葉は、２人には届かなかった。

とりあえず光一はショットガン片手にのそのそと這って、壁によりかかる。

「明久、今何分たった？」

「……まだ言われた時間の半分も経ってないよ」

全員がげんなりした。

そこで愛子が、ふと聞いてみたい事を聞いてみる事に。

「ねえねえ久遠君、久遠君はボクの事どう思ってる？」

「可愛い女の子だと思ってる」

＜こんな嫌われ者のモヤシを気にいってくれて嬉しいと持ってる＞

「あははっ、両方とも嬉しい事言ってくれるね」

光一の特に何か困る様子もない態度の言葉に、愛子は嬉しそうに笑

みを浮かべた。

「……許すまじ」

＜……羨ましい、俺も工藤にあんな＞

「……！（ベシベシ！）」

＜……叩かないでほしい＞

ソレを怨念をこめた表情で（漫才しつつ）見る少年が1人。

その傍らで、うんうんと頷く秀吉。

「まあそうじゃの。光一は昔からワシと姉上以外に嫌われてばかりじゃから、そう言う好意自体嬉しいのじゃろうな」

「そうよね。光一はいじめられたり嫌われたりで、私達以外に友達っていないから」

「「＜＜＜嫌われてたはともかく、いじめられてたって言うの絶対？だろ（でしょ）（ですよね）？＞＞＞」」

「……気持ちはわからないでもないけど、光一武器がないとてんで弱いでしょ？」

お化け屋敷時、あっさり工藤に押し倒された時の光一の姿を想像して……。

＜＜＜そう言えばそうだったな（ね）（ですね）＞＞＞

「全員納得！？」

その事に光一はショックを受けた。

「諦めるのじゃ光一、お主に力強さは絶対に似合わぬ」

「＜秀吉が男らしくする事が無理な様にか？＞」

「召喚獣と声を合わせて酷い事を言うでない！」

互いに気分を害した所で、２人は言葉をきった。
これ以上は互いに傷つけあうだけで、無意味と悟った上で。

「けどお前がいじめられっ子か……」
＜まあ過激派だの危険人物だのと言われてても、所詮はひょろひょろのモヤシだからな。ありえない話でもないか＞

雄二が楽しそうに召喚獣共々、今の感想を言葉にした。

「黙れゴリラ。そうだよ、俺は昔からずっと周りに嫌われてばっかだったんだ」
＜こんな体躯だからいじめの格好の的で、それが嫌だから武器の扱いを覚えて反撃すりゃ反則だっつって大人が取り上げた途端、またいじめの的。けど俺のこんな細腕じゃ腕力なんて鍛えてもたかが知れる＞
「……で結局は、過激派だ危険人物だって呼ばれるようになったんだ」

光一が苦々しい顔で吐き捨てるようにそう言うと、意外そうな顔をする面々。

「アンタもいろいろ大変だったのね」
「人間誰だって落ちぶれたくはないもんだからな。わかりやすく言うと、そうだな……」
＜今のB、C、Eクラスの能なし代表どもの現状、と言えばわかるか？＞
＜＜＜あー、成程＞＞＞

上記の代表、根本、小山、中林の３名。

度重なる光一との模擬戦争での敗北により、クラス内ではすっかり評判が落ちており代表としての発言力は既に失われていた。

特に根本は試召戦争の敗北、覗き騒動加担により居場所をなくしてた所へさらに光一に敗れ、代表どころか存在そのものがなきに等しくなっていた。

「結局違う意味で、秀吉と優子以外から遠ざけられちまったけどな」

＜成程な。それで木下姉にゾッコンだったのか？＞

＜う～ん、それも（ビシッ！）ふぎゃあああっ！＞

雄二の召喚獣の質問に光一の召喚獣が答えようとするや否や、光一の召喚獣にゴム弾が叩きこまれた。

「俺より雄二はどうなんだよ？　神童とか何とか呼ばれて華々しい人生送ってたくせして、こんなゴリラの皮かぶった外道になり下がったお前は！？」

「誰がゴリラの皮をかぶった外道だ！？　んなもん誰が……」

＜俺の所為で翔子が「轟け俺の超必殺ビッグバンシュート！！」ふぎゃあああああっ！！＞

召喚獣を蹴飛ばすが、時遅し。

翔子が顔を赤らめ、女性陣は黄色い声をあげ、明久と光一は……

「「翔子が……何だ？　言ってみろ（て）よ？」」

＜＜霧島　（さん）のためだとしたら、頷ける要素がたっぷりあるからなあ（ねえ）＞＞

「おい明久、お前誰のために試験召喚戦争提案したんだっけ？」

「何言って＜それはもちろんひ＞とんでけボールの様に！　それより雄二、もしかして学力だけが全てじゃないって証明したいって理

由、まさか霧島さんのためだとか！？」
「はっ、流石は明久。とんだ＜まさかこんな的を＞おら、ぶっとべ！！」

そして数分後。

「やめよう……この騒動はあまりにも不毛だ」

銃で攻撃してる光一と違い、周りは肉弾戦での召喚獣を黙らせると言う荒業。
それは当然、全員が既に息を切らせていた。

「そうだね……フィードバックで体中が痛い……」
「俺も、こんなに疲れたのは久々だ……」
「……キツい……」
「流石にワシも疲れたぞい……」
「ホント……まさか実体化した召喚獣の相手が、こんなにも大変だなんて」
「はぅ……このままだと、いずれへんな勢いで告白する羽目になっちゃいます……」
「ウチも、こんな事で告白するなんて、絶対に嫌なのに……」

全員の口から弱音が漏れ始める。
後半2名に対し、光一は呆れのため息をついたのは誰一人気付く者はいなかった。

「そもそもどうして俺達が……あっ、そうだ！」
「？　どうしたの、光一？」

決意をするや否や、光一はよろよろと立ちあがる。

「全員聞け！」

「は？　何をだ？」

「いいか、想像して見ろ……白髪頭で、口と顔が人間の枠から外れる程悪く、俺達にこうなるとわかってて召喚させた挙句、ソレを煽って俺達を苦しった諸悪の根源である妖怪の姿を」

＜＜＜……＞＞＞

ガラッ！　ザッザッザッザッ！

光一の言葉が終わるや否や、光一の召喚獣がドアに向かい始める。その数秒の後に全員の召喚獣がそれに続く様にドアへ向かい、ドアが開くや否や教室から出て行った。

「よし、上手く行ったか」

「成程な。まぁ、そりゃそうだよな」

「人を実験台にしておいて、自分だけ無事で居ようなんて言うのが甘いよね」

「因果応報じゃな」

「……当然の報い」

「ま、そう簡単に許せる事じゃないわよね」

「というか、もっと早く思いついてほしかったわ」

皆でうんうんとうなずき合った。

その数分後、階下からしわがれた悲鳴が響き渡るが、それは全員が無視をした。

「システムの暴走が原因なんだから、俺達に非はありゃしねえよ」

ちゃんちゃん♪

（おまけ）

「あーーーっ！」

召喚フィールドが解除され、現在下校中。
瑞希がふとある事に気付き、悲鳴に近い声をあげた。

「ん？　どうしたのよ瑞希？」
「召喚獣が本音をしゃべるんだったら、私達の誤解を解くの……」
「え？　……あーーーっ！！」

「……あいつら、今頃気づきやがったのかよ」
「まあまあ。それより光一よ、手伝わんでいいのかの？」

呆れたように言う光一に、秀吉がそれをなだめつつ質問。

「いいよもう……なんか秀吉応援した方が明久のための様な気がするし」
「なっ！　何を言うのじゃ光一！？」
「心配するなって。俺はどんなになっても秀吉の兄貴分だから」
「まるで遠くに行く様な眼で見るでない！！」

優しい瞳でそう言う光一に突っかかる秀吉。

「やれやれ、アイツもいい具合に壊れてんな」
「……融合召喚の事で、色々と光一は苦労してた」
「ソレ確か、ムッツリーニ君も一枚噛んでるよね？」
「……ココは姉として、どういう反応をすればいいのかしら？」
「……彼らがそう決めた事なら、私達にとやかく言う権利はない」
それを見る外野陣は、少し同情の視線を光一に向けていた。

第八十七問　僕とホンネと召喚獣編　エピローグ（後書き）

はい、僕とホンネと召喚獣編終了です。

そろそろ戦闘描写が書きたいので、本編のオカルト編を元にオリストーリーを書こうかなと考察中。

といっても色々と原作無視しまくってるツケか、もう完全にオリジナル展開になりまくってますが、それでもいいという方はどうかよろしくお願いします。

第八十八問　幕間　昼食と交渉と化学の試験と（前書き）

お気に入り件数１０００突破！
それを記念しての短編です

ちゃんとオリストーリーも作ってますので、頑張ります。

第八十八問　幕間　昼食と交渉と化学の試験と

問題
次の問いに答えなさい。
『日本の民法における結婚適齢は何歳かを答えなさい』

姫路瑞希の答え
『男性は１８歳、女性は１６歳』

教師のコメント
正解です。流石ですね、姫路さん。
２００９年の法制審議会で男女ともに１８歳に統一すべきとの最終答申が報告されており、政府方針として改正する方向の様です。改正されると、姫路さんの結婚できる日が先伸ばしになってしまうかもしれませんね

吉井明久の答え
『愛があれば、年の差は関係ありませんよ』

教師のコメント
夢と希望をありがとうございます

清水美春の答え
『愛があれば、性別の違いは関係ありません！』

教師のコメント

関係あると思うのですが、深く追求はしない事にします。

久遠光一の答え

『俺の手で明久と秀吉の幸せをコーディネートして見せる！』

教師のコメント

随分と疲れている様ですので、すぐに保健室……いえ、病院で点滴をうって休んでください。

ＦＦＦ団ブラックリスト　（協賛：ムッツリ商会）

２－Ｆ　久遠光一　抱き枕カバー１０枚セット、厳選写真５０点セット（総額６万円）

「総額６万？　安いな……ムッツリ商会にまで不況の煽りがきてんのか？」

昼休みのＦクラス教室にて。

自身の首にかけられている懸賞の総額を見て、光一は不満げにそうぼやいた。

「光一よ、普通男子高校生に懸賞金などかからんぞ？　西部時代や江戸時代ではあるまいし」

「しかも何で普通に出来るの！？」

ソレを聞いた驚く明久と呆れる秀吉は、それぞれの意見を口にした。

「別に嫌われるのは今に始まった事じゃないからな」

「それは納得できるがのう……」

それに対し光一は、達観したような意見を。

右手に持つゴム弾入りショットガンを不意に……

ビシッ！

「ぐわっ！」

背後に撃つや否や、その背後を狙っていたＦＦＦ団員が吹き飛んだ。

「さて、そろそろ行くか」

「？　何か用事？」

「ちょっと商談にな」

ボストンバッグと、それとは別のバッグを手に光一は窓へ。

明久と秀吉はそれを気にする事もなく、２人して昼食。

「余所と言う事は、相手は霧島さんかな？」

「そうじゃの。アンチ久遠派の連中もそうじゃが、ブラックリスト

の一件で異端審問会の連中もしつこく光一を狙っておるから、そこしかないじゃろ」

「結局あの勝負に意味ってあったのかな？　……もう、どうしてこの学園の人たちってこう、思い込んだら大暴走で人の話を全く聞かない人達ばかりなんだろ？」

「……お主もその1人ではあるがの」

何度言っても自分を男と認めようとしない明久のその発言に、秀吉は半ばあきれていた。

それと同時に、一応その被害を光一と同じ位に受けてる明久に、同情ももちつつ。

「……確かに、姫路や島田よりはマシだと思うが、しかしワシは」

「？　どうかした秀吉？」

「んむ？　いや、何でもないぞ明久……まったく、光一が変な事を言うから」

「うぅっ……木下君とあんなに自然に親しく」

「最近アキったら、ウチ等の顔見た途端顔を青ざめる様になったから近寄れないって言うのに」

その2人の様子を羨ましげに見ている2人の少女がいた。

そしてさらにその様子を見る2人の男子生徒も。

「最近明久と秀吉、偉く仲良くなってないか？」

「……光一が色々と御膳立てしてる」

「あいつマジで明久と秀吉をくっつける気か！？　……まあアイツにしてみれば相棒と弟分に当たる訳だから、応援したいと思うのは当然かも知れんが、アイツ同性愛を嫌ってたはずだろ？」

「……光一も色々と壊れ始めてる様」

「あー……ところで、異端審問会はどうして動かないんだ？」

ふと、雄二があの光景を見て疑問に思った事をつぶやいた。
ソレを聞いてムッツリーニは、或る写真を取り出した。

「なんだそれ？」

「……木下姉妹の小学校時代の写真。これで異端審問会全員に明久と秀吉の昼食を保障させた」

「全員！？　……あいつが余所のクラスの代表じゃなくてよかったと心から思ったぞ今」

異端審問会を懐柔させるほどの交渉力と駆け引き。
それは雄二に戦慄を覚えさせるには十分だった。

「ん？　ところで、その光一はどうしたんだ？」

「……さっき窓から出て行った」

「窓から？　……まさかまたＡクラスに出向いてないだろうな？」

翔子の雄二捕獲用の道具および、スタンガンなどの道具はすべて光一経由。
ちなみに光一本人も、その商談で得た利益により自身の武器を充実させていた。

「冗談じゃねえぞ！　あの野郎、武器のために俺の将来を危機に晒しやがって！！」

雄二は猛りながら商談を阻止すべく、一路Ａクラスへ
ムッツリーニはそれを見送った後、貰った写真を使用しての商品を企画し始めた。

Aクラスにて。

「よっこらしょっと」
「きゃっ！　……まっ、またですか久遠君!?」
「ん？　ああ、驚かせて済まなかったな、鈴木」
「佐藤です。いい加減覚えてください」

ショートボブの眼鏡娘、佐藤美穂が窓から入ってきた光一に驚き抗議。
ソレを聞き付け、優子がやってきた。

「……だからどこから入って来てるのよ毎度毎度」
「俺にとっては廊下からの方が時間かかるんだよ」

未だ騒ぎをやめようとしないアンチ久遠派を思い出し、優子はため息をついた。
それと光一の手にある愛用のボストンバッグをみて一言。

「その荷物、また代表に用事？」
「ああ、頼まれた接着剤が手に入ったから」

何に使うのだろうと思ったが、やめる事にした優子。

「……久遠、来てたの？」
「ああ。これ、この前頼まれた接着剤」
「……そこに座って。今コーヒー煎れてくる」

この交渉時には色々と危ない話が出る為、Aクラスの面々は離れる事が暗黙の了解だった。

「……代表、坂本君とどういうお付き合いをしてるんでしょうか？」
「代表、子供のころから坂本君の事が好きだったらしいから、この前の試召戦争での約束で歯止めが外れたんじゃないかな？」
「坂本君も何が……不満なのでしょうか？　確かに代表はやり過ぎと考えられますが」
「色々とあるんでしょ。幼馴染な訳だし……」

自身も幼馴染持ちなだけに、その言葉に重みがある優子。
相手の佐藤嬢も、その辺りをくみ取って深くは追求しない事に。

「あれ、久遠君来てるんだ」
「あら愛子、部活の集まりはもう終わったの？」
「うん、簡単なミーティングだけだったから。そう言えばさっきさか……」

ガラッ！

「光一居るか！？」
「もとくんが……って、ココに用だったんだ」

乱暴に開け放ち、ずかずかと入り込むや否や光一の胸ぐらをつかむ雄二。

「おい光一、今度は何を翔子に渡しやがった！？」
「別に指輪渡してる訳じゃないんだが？」
「……私は浮気なんてしない」
「いや、指輪ならだいかんげいでででで！　ちょっ、待て！　左手の薬指がねじ切れる！！」

左手の指を掴まれ、ねじられ悲鳴を上げる雄二。
ふと、テーブルの上に置かれてる物が目に入った。

「おい、なんだそれは？」
「接着剤。霧島がある物の修理に使いたいって言うから」
「ある物の修理？」
「……私の家にある雄二の部屋の補修」

ピキッと教室の空気が凍った。

「雄二の部屋？　……そう言えば以前商談で家に招待された時に、鉄格子のついた部屋があったな？」
「……そう、そこが雄二の部屋。雄二が暴れるから鉄格子が壊れそう」
「あれは部屋じゃなく牢屋と言うんだ！　てか、それはあの部屋の補強か！？　よこぎゃあああっ！！」

アイアンクローに処されるのを見届け、光一は一路窓へ。
そこでいったん止まって一言。

「それじゃ、金はいつもの口座に頼む」
「……わかった。次の注文だけど、今度は薬品類が欲しい」
「えっ？　悪いけど薬品は……」
「……何なら私が教える」
「え？　そりゃ助かるけど……」
「……次から割り増しで買っても言い」
「努力します」

その一週間後。

『Ｆクラス　久遠光一　化学１１６点』

「たっ、大変だ！　久遠が化学でＥクラス並の点数を叩きだしたぞ！！」

「なっ！　何！？　何かの前触れか！？」

「ミサイルか！？　核ミサイルか！？　ロンギヌスか！？」

その日、Ｆクラスどころか学年中がパニックに陥った。

「……そこまで言う事ないだろ」

第八十九問　冷笑と急襲と最終決戦編　プロローグ（前書き）

はい、オリストーリー編開幕です。

今回はまだですが、久々に戦闘描写も書くのでお楽しみに。

最近忙しいので遅筆ですが、何卒よろしくお願いします

第八十九問　冷笑と急襲と最終決戦編　プロローグ

問題　次の問いに答えなさい

『世界三大美女を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『クレオパトラ　楊貴妃　ヘレネ』

教師のコメント

正解です。日本ではヘレネの代わりに小野小町が多いと言われています。基本的には、歴史の流れを彼女たち自身の男性を魅了する美貌で代えた事が、美人たる所以となっています。

土屋康太の答え

『クレオパトラ7世、楊貴妃、ヘレネまたは小野小町、これらにエリザベートを加えると世界４大美女とも呼ばれる。しかし（以下省略）』

教師のコメント

それだけ詳しいのなら、他の問題にもっと力を入れてください。

久遠光一の答え

『木下秀吉（訂正）　工藤愛子　木下優子　霧島翔子』

教師のコメント

それは文月学園3大美少女ですが、木下君を訂正して工藤さんを入れる辺りに贔屓目もある気がします。
と言うか君はFクラスなのですから、もっとクラス内の女子を大切にしましょう

吉井明久の答え
『木下秀吉（訂正）　姫路瑞希さんと島田美波さんに並ぶ美女はいません』

坂本雄二の答え
『霧島翔子さんに並ぶ美女はいません』

教師のコメント
答案が血まみれである事とテスト中に聞こえた断末魔に免じて、今回だけは点をあげます。

根本恭二

Bクラス代表にして、アンチ久遠派のリーダー格。
カンニング常習犯、ケンカに刃物はデフォ装備、球技大会で一服盛

った。
そういった悪評絶えない人物であり、２年となってからはその報いと言わんばかりに立場が悪くなっていた。

１学期でいきなりのＦクラスとの試召戦争。
点数上では勝っている上に卑怯な手を駆使するも、久遠光一に討ち取られ敗北。
それからが、彼の運命の分かれ目だった。

女装写真集を撮られ、付き合っていた彼女に別れを持ちかけられ、クラス内では立場も発言力もなくなって……
さらには学力強化合宿での覗き騒動に加担した事により、完全にＢクラス内で居場所は失われる事に。

しかし、彼とてまだチャンスはあった。
それはその覗き騒動で、久遠光一が学年主任を打倒したと言う事である。

停学明けに覗き騒動の汚名を払拭すべく、自身の転落人生のきっかけであ久遠光一の打倒を決意。
自身と同じく汚名返上を狙う男子達をまとめ上げ、同じく彼を嫌う女子達と提携し“アンチ久遠派”を結成。
しかしその初陣は、あえなく敗北。
ヌ●ド写真集を撮られた揚句、それを他のリーダー格に見られアンチ久遠派でも居場所をなくしつつあった。

「くそっ！！」

そんな彼は、ＬＨＲ後の人気のない廊下で１人怒りに震えていた。
最早Ｂクラスにまとまりなどある訳もなく、１つの物事を決める事

すらもごちゃごちゃと意見が混雑。
まとめようにも、彼の言葉など何の意味もない。

「久遠光一……あいつさえいなけりゃ！！」

因果応報と言う言葉がある。
悪事にはそれ相応の報いがあり、それをやるからにはソレを覚悟する必要がある……と言う意味の言葉。

しかし彼の場合、ソレを覚悟をしていない小物であった。

「だが、どうする？　試召戦争は無理、模擬ももう権限を失った俺には……ん？

「まったくよ、吉井に久遠、坂本だったか？　あいつら迷惑極まりねえな」
「全くだ。確かに最近は評判は回復したが、あいつらがいる限り

その会話を聞きとったと同時に、根本は走りだした。
会話を聞く限りでは、彼らは自身と同じく久遠を憎んで居ると言う事。

そして彼らは、2年の顔ではなく……。，

「ちょっと、いいですか？」

「文月学園、最近評判が回復したらしいな」

光一がふと、そんな事を漏らした。

「らしいな。暴走騒動の後で開かれた学会のお披露目とやらは、好印象だったらしいし」

「うむっ。離れてたスポンサーも戻ってきたという話じゃし、試験召喚システムを用いたお化け屋敷が好評で行列ができておる程らしいのう」

「おまけにプロモーションムービーもあちこちで評判らしいから、木下さんちょっとしたアイドルだね」

「……最近の売上はトップクラス」

文月学園は世論に弱い。

校舎の破壊、教頭室の爆破、学年全体での覗きという不祥事が大きなマイナス要素となっていた。

しかし、召喚システムのお披露目、プロモーションムービー、召喚システムを使用してのお化け屋敷。

それらの成果が実り、徐々にだが評判は回復していた。

「後は大きな騒動さえ起こらなきゃ大丈夫だろ。アンチ久遠派の連中、最近クラス内で疎まれてるらしいし」

「みたいだな。中林や小山はクラス内で発言力が失われたらしいし、最近じゃクラス内の出入りすら制限付けられたらしいぞ？」

「……脱退者も多く、弱体化が進んでる」

「ならしばらくは平和になりそう……」

ガラッ！

「久遠光一、吉井明久！　そのクビもらいます！！」

「……でもないか」

痛む頭を押さえつつ、対清水美春用に用意したゴム弾を装填したショットガンを取り出す。
かの独眼竜の様にカッターを指の間ではさみ、爪の様にして襲いかかる美春に……

「ぐふっ！」

撃ち出すと、外にまでふっとんだ。
それに構う事なく、光一はポンプアクションを行い次の装填を完了させる。

「しばらくはこれをメインに防衛すっか？」
「お前がエアガンを使ってた時期が懐かしいぞ？」
「アンチ久遠派の勢いが衰えたとはいえ、俺を狙う奴が居ない訳じゃないからな」

アンチ久遠派の同盟集団、ＦＦＦ団こと異端審問会。
彼らは評判悪い上にバカだからそれに気付かないので、組織の運営自体に何の影響もなかった。

「まったく、おちおち明久と秀吉のデートプランも練れやしねえ」
「あの、光一？　今僕と秀吉のって……」
「ああ、そう言った」
「……お前、本気……なのか？」

明久が戸惑う様な質問に堂々と答えた光一に、雄二は顔をしかめた。

「光一よ、お主は一体何をやっておるのじゃ？」
「なんだ、嫌なのか？」

「……そう言う問題ではなくてじゃのう」

パシャっ！

「……高く売れる」

顔を赤くし、もじもじとする秀吉をカメラにおさめるムッツリーニ。

「……なあムッツリーニ、この前頼んだ根本の動きの調査はどうなんだ？」

「根本君？　……今更何かができると思えないよ？」

「そりゃそうだが、逆におかしいだろ。アンチ久遠派を結成させた奴が、あの肝試し勝負以来表立った動きをみせようともしないなんて」

「そうだな……あいつの事だから、光一への復讐をそう簡単に諦める訳がない。何か企んでやがるのか？」

ガラッ！！

「おいっ、吉井と久遠、坂本はいるか！？」

乱暴に戸を開け放ち、２人の男子生徒が入ってきた。

その顔は２年で見る顔ではなく……

「変た……変態先輩でしたっけ？」

「おい、今言いなおそうとしたのに、俺達の顔を確認して言いなおすのをやめただろ！？」

「これは失礼しました、親指先輩」

「誰が親指だコラアッ！　俺は夏川だ！！」

そう、清涼祭でFクラスに営業妨害を仕掛け、召喚大会で光一と秀吉のペアに負けた常夏コンビ。
彼ら自体、どうでも良い事のためすっかり忘れていた。

「ああっ、そう言えばそんな名前だっけ？　まあそんなどうでも良い事より、受験シーズン真っ盛りの先輩方が俺達に何の用だ？」
「どうでも良いだあ！？」
「まあ待て夏川。お前らの所為で起こってる迷惑極まりない騒動を黙らせに来たんだ！」
「学園祭の喫茶店に営業妨害をしてくる様な人が迷惑を理由に怒鳴りこむなんて、世も末だね」
「へえ、明久にしては上出来じゃないか」
「て、テメエ坂本ぉ！！」

火に油を注いだ雄二は、そのまま夏川の怒り心頭ぶりににやりとした。
光一はその意図をよんでた為、呆れを見せる。

「だっ、大体テメエら2年には出来の悪すぎる奴が多すぎるんだよ！　バカの代名詞である“観察処分者”だって2年にしかいねえし、2年男子全員が停学になった騒ぎの主犯や学園を爆破したのも、テメエ等クズトリオじゃねえか！」
「成程、明久と光一が気に入らないと言うのはわかった」
「テメエもだ！　覗きの主犯が何他人顔してやがる！？」

自分のやってる事を主に明久の所為にする雄二は、自分のしでかしてる事に自覚はない。

「おい親指、俺と明久は一応しでかした事に対して自覚はあるからな？　このゴリラと一緒にだけはするな！」

「親指と呼ぶな！　まあそこは認めてやるが……」
「だがテメエらが騒ぎの主格である事に変わりはねえだろ！」
「じゃが最近は騒ぎと呼べる騒ぎは起こしておらんぞ？」

そこへ秀吉が割り込んできた。
その姿を見て、１人が明らかに様子を変える。

「まっ、まあそれもそうだが……なあ、木下よお」

熱のこもった視線を秀吉に投げかけ、ごそごそとポケットを探り始める。
秀吉は妙な寒気を感じるや否や、明久の背に隠れてしまった。

「え？　どっ、どうしたの秀吉？」
「よっ、良くわからぬが、嫌な寒気を感じたのじゃ」

ピキッ！

「……上等じゃねえか。吉井、テメエだけは絶対許さねえ！　覚悟しやがれ！！」
「えっ、ええっ！？　どっ、どうして僕が！？　しかも血の涙まで流して！！？」
「……おい親指、あのモヒカンまさか」
「親指言うなって言ってんだろ！　久遠、覚悟しやがれ！！」

「おや、これはちょうどいい所へ出くわした物だな」

その声に振り向いた先には……。

「根本！？　……成程、そう言う事か」

「耐え忍んだかいがあったな。こんなチャンスが巡ってくるとはよ」

第九十問

問題　以下の問いに答えなさい

『世界三大恐妻家を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『ピョートル三世　マルクス・アントニウス　豊臣秀吉』

教師のコメント

正解です、流石です姫路さん

坂本雄二の答え

『吉井明久　久遠光一　根本恭二』

根本恭二の答え

『吉井明久　久遠光一　坂本雄二』

教師のコメント

これは文月学園４大恐妻家ですが、世界……いえ、宇宙も狙えるかもしれません。

吉井明久の答え

『坂本雄二　根本恭二　久遠光一（過去形。今は工藤さんと仲が良いみたいだから、応援してます）』

久遠光一の答え

『坂本雄二　根本恭二　吉井明久（俺の手で秀吉とくっつける為、除外予定）』

教師のコメント
込められた互いへの友情が良くわかる答えですが、残念ながら点はあげられません。

須川亮の答え
『恐妻だろうがなんだろうが、異端者に変わりはないんじゃー！！』

教師のコメント
久遠君を巡っての騒動が鎮静化しているこの時期に、余計な騒ぎを起こさない様に。

「よう久遠、元気そうで何よりだ」

底意地の悪い笑みを浮かべる、今や権力失墜したＢクラス代表、根本恭二。
それが物理の木村教諭を連れ、光一を見据えていた。

「落ちぶれてべそかいてると思ったら、やってくれやがって……」
「べそかくのはお前だよ。たった今からな」
根本が目配せをすると、常夏の2人は頷いた。

「久遠、お前物理が得意だったな？」
「俺達も物理が得意なんだ。吉井ともども、切り込み隊長コンビとやらを粛正してやるよ」
「随分な自信だな。まあいい、受けて立ってやるよ」
「うん。やろう光一」
「模擬試召戦争、承認します！」

物理フィールドが展開され、それぞれ光一が夏川、明久が常村と対峙。
そして一斉に召喚が行われ……

「馬頭と牛頭？　成程、こいつらにはぴったりの汚い召喚獣だ」
「うわっ、弱い者いじめが本質って最低」
「「頭がないバカな召喚獣と、悪趣味な巨大ゲンコツつきの死神にだけは言われたくねえ！！」」
「どっちもどっちだな」
「「黙れゴリラ！！」」

坂本雄二の挑発で双方ヒートアップ。
なお光一は後で、翔子に麻酔と媚薬を格安で譲ることを画策。

「木下……必ずや勝って、その勝利をお前にささげてやる」
「あっ、明久よ！　頑張って早くその者たちを補習室送りにしてくれ！！」
「……吉井、テメエだけは絶対この手でブチ殺す！！」

「ええっ!?　なっ、何で秀吉の応援で敵意アップ!?」

秀吉の応援を受け、常村はその対象である明久に敵意アップ。

「……頑張れよ明久。俺もこの親指さっさと片づけたらすぐ援護に行くから」

「親指と呼ぶなっつってんだろ!!」

「ああ、すまないな変態」

「違う!　だからと言って変態と呼ぶ事を許可した訳じゃない!!　それに先輩に対してため口をきくな!!」

「ふむっ……それはすみませんでした。変指先輩」

「親指と変態を混ぜて斬新な名前を付けんなああっ!!　久遠、テメエ絶対殺す!!」

片や夏川も、光一の挑発で頭に血が上りまくっていた。

そして、双方の点数が表示される。

『３－Ａ　夏川俊平＆常村勇作　物理４０９点＆４１２点』

ＶＳ

『２－Ｆ　久遠光一＆吉井明久　物理６９８点＆２０１点』

「「「……」」」

「さて、始めると……」

「待てやコラ」

「ん?　なんだ、何か不都合な物でも?」

「なにかって、不都合な物しか見えねえよ!　おい、７００点近くなんてどうやったら取れるんだ!?　そして吉井、コレお前の点数じゃねえだろ!!」

簡単に言えば、この２人の点数アップにはちゃんと理由がある。

光一は高橋女史に教わって、明久は秀吉と共に光一に教わったためである。

「いや、俺高橋女史に個人補習して貰ってるから。それに明久なら、俺が教えたんだよ」

「ウソをつけ！　ちょっとやそっと教えた位でこんな点取れる訳ねえだろ！」

「どうせカンニングでもしたんだろ？　まったく、これだからFクラスのクズ共は」

「どこぞの落ちぶれ変態代表じゃあるまいし、観察処分者がカンニングなんて出来る訳ないだろ」

「誰が落ちぶれ変態代表だ！！」

「卑怯、変態、女装趣味と来て、露出趣味まであるんだ。確かに変態外道と言っても過言じゃないな」

雄二がちらりと根本を見て、そう茶々を入れる。

ちなみに露出趣味とは、肝試し勝負で光一が作り上げた根本恭二写真集第2弾“私のすべてを見て”からきております。

「良いからとっとと来いよ。怖いんなら手加減してやろうか？」

「ふざけんな！　誰が2年ごとき怖がるか！！」

牛頭が大槌を振り上げ、死神に襲いかかる。

それに対し死神は鎌を構えて突撃し、大槌と鎌がぶつかり合う寸前……

「引っ掛かったなマヌケ」

大槌を鎌が受け流すと同時に死神の巨大ゲンコツが開き、その指先がグニュグニュと蠢き形を変える。

それが人の顔を模ったと同時に、それぞれが金切り声をあげ牛頭に噛み付いた。

「どうだ、美味いか？（夏川に向けて話しかけてる）」
「どっちに話しかけてんだコラ！！
「ああっ、悪い悪い……ってあれ、なんか急にハンサムになったな？（親指の顔に話しかけてる）」
「テメエ、ワザとだろ！！」

夏川が光一の挑発に気をとられてる間に、それぞれの指の顔が牛頭の四肢と喉笛を食い千切る。
それにより、点数は0となった。

「よし、明久。融合召喚行くぞ」
「ん、了解」

馬頭の槍と剣戟を行っていたデュラハンは、振り下ろされる槍を横に薙いでバックステップ。
死神の巨大ゲンコツがデュラハンを掴み、光一が腕輪を起動。
ゲンコツとデュラハンが同化していき、やがて死神の背からデュラハンの上半身のみが露出した姿に。
その手に握られていた大剣は、2丁のボウガンへと変わっていた。

「へっ！　ちょっと耐えきればいいだけだ！　吉井と融合って事は、久遠にフィードバックが……」
「考えが甘い」

鎌を逆手に構え、ショットガンの銃口を向ける……フリをして。

「明久、悪いが覚悟しろよ！」

「ＯＫ！」
「なっ！？」

鎌を落とし、デュラハンの腕をつかみ融合解除。
馬頭めがけてブン投げ、デュラハンは妖怪ロケットと化し剣を構え直撃した。

「勝負あり、だな。明久、大丈夫か？」
「うっ、うん……なんとか」

馬頭がクッションになった物の、壁に直撃したフィードバックで両腕を抑えよろめく明久。、

「……まあ、こんな所か」

ソレを傍観していた根本は、さして顔色一つ変えることなく帰って行った、
鉄人に連行された常夏コンビもまた、さして捨て台詞を言う事なく大人しく連れ去られ、それを見て光一はため息をついた。

「……さて、ここからが問題だ」
「え？　問題って、あの根本君と常夏が大人しく去って行ったのが？」
「ああ。俺が根本なら、ここでは出来れば勝ちたいが負けても特に問題がないな。この負けは足がかりにできる」
「その様子ならお前も気付いてるみたいだが、大丈夫か光一？　もし俺とおまえが考えてる事が同じだとしたら、根本の狙いは……」
「負けてやる気はねえよ」

「ご苦労様です、先輩」
「ったく、先輩をこき使いやがって！」
「俺達に恥をかかせた貸しは、ちゃんと払うんだろうな？」
「ええ、勿論。これもまた、俺達の目的達成のための必要なステップです。では行きましょうか」
「ああ。口添えはしてやるよ」
「ちっ……2年にこき使われるとはよ」

第九十一問（前書き）

最近他の作家さんのオリ主とのコラボが最近流行ってるようで。
なので、ちょっとその波に乗ってみようと思います。

なので光一を出したいという方、あるいは自分のキャラを書いてほしい。
というご要望があれば、感想と共に出していただければと思います。
もちろんその作品を読んで感想を書かせてもらったうえで、全力を尽くします。

第九十一問

問題　以下の問いに答えなさい

『世界三大悪妻を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『クサンティッペ、コンスタンツェ・モーツァルト、ソフィア・トルストイ』

教師のコメント

正解です、流石ですね姫路さん。

久遠光一の答え

『姫路瑞希、島田美波、小山友香』

教師のコメント

私怨でこういう答えをかかない様に

吉井明久の答え

『秀吉を嫁に（訂正）姫路瑞希さんか島田美波さんが妻じゃなかったら、僕にとってはどんな女性も悪妻です』

坂本雄二の答え

『霧島翔子さんが妻じゃなかったら、私にとってどんな女性も悪妻です』

教師のコメント
一応強制された答えの様ですので点はあげますが、解答用紙を血で汚さないでください

須川亮の答え
『悪妻だろうがなんだろうが、妻という存在が欲しいんじゃー！！』

教師のコメント
でしたらＦＦＦ団を解散することから始めてはどうでしょうか？

『３年Ａクラス、アンチ久遠派への参加を表明』

「やっぱりな」

文月新聞の見出し。
予想通りの展開に、頭を押さえる光一。

「３年までって、どうして……？」
「俺達が今までしでかした事で迷惑を被ってるからだろ」

光一は頭をかきながら、否定できない要素を思い返す。
明久の校舎の壁の破壊、自身の投擲ミスによる教頭室爆破、最後に雄二主導による学年全体での風呂覗き。
これらの所為で文月学園の評判は悪く、学園長は日々評判回復の案を考案する日々。

「えっと、どういう事？」
「３年は今受験シーズン。俺達のしでかした事の所為で文月学園が評判が悪い」
「うんうん」
「つまり、俺達の所為で３年までバカだと思われてる事が不快なんだ」

特に覗き騒ぎは２年男子全員が停学になった事もあって、文月学園の評判に著しく傷をつけていた。

「そしてそれを利用して、力を蓄える事が根本の狙いだった。あの野郎常夏コンビと結託して、３年の戦力を手に入れる為にワザと俺に戦いを挑ませたんだよ」
「それで、どうして？」
「大方、騒ぎの中心である俺達に注意したところ、逆切れして反撃を受けた……とでも知らせたんだろ」

吐き捨てる様にそう言った光一を見て、明久は複雑な気分だった。

光一は核弾頭トリオと呼ばれる３人の問題児で最も過激思想及び戦果の持ち主であり、内外ともに評判が悪い。
明久の見る限り、これまで光一が完全な形で好意的に接しているのを見たのは、自身を除けば幼馴染である秀吉と優子、そして愛子と翔子のみ。

優子は確かに乱暴な面もあるが、あれがこの2人流のスキンシップだと言う事は理解できていた。

雄二とは何かと衝突がちで、ムッツリーニとも同性愛疑惑の張本人および愛子の事で。

女子である瑞希と美波も、光一の事を疎んじている節がある（これは明久と結びつきが最も強いため）。

そしてＦＦＦ団も、光一を売って自身の彼女ゲットという目的と異端審問会として。

余所のクラスでも、アンチ久遠派と呼ばれる勢力がある程。

「……光一は、皆が言うような人じゃないのに」

「そう言ってくれんのは嬉しいが、俺みたいな悪党が良く思われる訳もないだろ？」

「……今サラリと自分を悪党って言ったね？」

「自分から望んでそうなったわけだしな……殆ど強制だったが」

最後の吐き捨てる様に言ったセリフは、明久の耳には届かなかった。

Ｆクラス教室。

「年貢の納め時だ、久遠光一」

ＦＦＦ団が異端審問会の覆面を纏い、鈍器や木刀など様々な武器を装備。

名実ともに邪教の武装集団と化した一団が、光一と明久に照準を定めていた。

「……ったく、最近静かだったのに」

「「「キサマを倒し、我が伴侶の獲得……もとい、ＦＦＦ団の栄光ある一歩を踏み出す為だ」」」
「全員一字一句狂わず本音が漏れてんぞ！　しかも抜け駆けを企ててんのまで同じかよ！？」

「諸君、我らが目的は！？」
「「「学園の風紀と乙女の純潔を守る事だ！」」」
「異端者には？」
「「「死の鉄槌を！」」」
「男とは？」
「「「愛を捨て、哀に生きる物！」」」

「うわっ、数の暴力で話そらしやがった」
「そっそれより早く逃げないと！」
「明久、コレかぶれ」

愛用のボストンバッグからある物を２つ取りだし、１つを明久に手渡す。
それにビックリしたが、最近の光一の成績を思い出したのか明久はすぐにそれをかぶった。

「宜しい。ではこれより、異端者であり我らがシンボルとして相応しき首、久遠光一の処刑を……」
「おい須川、プレゼントだ」

光一がそう言うと同時に、スプレー缶の様な物が放り投げられた。

「何だこりゃ？　それに吉井と一緒に何でガスマスクなんて……」

ブシーっ！！

「うわっ、何だ!?　うっ、げほげほっ!」
「なっ、くそ!　催涙ガスか!?」

ＦＦＦ団が混乱する中、光一は明久を伴いＦクラス教室を脱出。
ガスが届かなくなったのを確認すると、明久はガスマスクを脱いで
驚愕の表情でＦクラス教室をちらりと見た。

「霧島の個人授業に感謝しないと（化学　２０１点）」
「こんな物まで用意してたの?　しかもなんか点数がまた増えてるし!」
「根本の野郎が大人しいなんて、何もないと思う方がおかしいだろ。
それよりどこか隠れる所を……」
「いらないわよそんなの」

２人の前に、男女混合の集団が立ちふさがった。
先頭に居るのは、３人の女子。

「ようやく年貢の納め時ね、Ｆクラス切り込み隊長コンビ」
「今日という今日は、あなたたちの首をお姉さまに捧げてやります!」
「アンタ達の所為で散々な目にあわされた屈辱、倍にして返してやるわ!」

いつも通りに清水美春。
そしてＥクラス代表中林と、Ｃクラス代表小山。

「ＣとＥの無能代表!?　くそ、勢力盛り返した影響が早速出やがったか!」
「えっと……それって、小指さんと中指さんも立場回復したって事

？」

「「誰が無能代表よ！！　あとそこのバカ、誰が小指と中指よ！！」

「お前ら以外誰が居るんだよ？　仕方ない、階段に……」

「逃げられると思ってるのか？」

階段から、昨日打倒した坊主とモヒカンのコンビを筆頭に、３年の集団が降りて来た。

「夏川に常村、こいつらが吉井と久遠か？」

「随分と舐めた真似してくれたそうだな。覚悟しろよ」

明らかに敵意の込められた姿勢で、明久と光一を見定める面々。

階段がふさがれたとわかった以上は、一旦元来た道を……

「見つけたぞ、吉井と久遠だ！」

「さっきはよくもやってくれたな！！」

と思うと同時に、復活したＦＦＦが押し寄せて来た。

「良い様だな」

そこへいやらしい笑みを浮かべた根本が、２年集団の中から現れた。

「根本、テメやってくれたな！」

「何の事かな？　コレもお前らの日ごろの行いが悪いからだろ」

「お前にだけは言われたくねえよ。この騒動片づけたら絶対表を歩けなくしてやる」

「この状況でそんな事ほざけるなんて、コレだからバカは嫌だね」

前は２年アンチ久遠派、階段を３年、後ろをＦＦＦ団に塞がれ、ま

さに四面楚歌。
明久が窓に目を向けようとするが、2重錠が厳重かつ頑丈に閉められていた。

「（どうしよう光一？）」
「（明久、俺が合図したら目と耳をつぶれ）」
「（うん、わかった）」

2人は気付かれないよう、腹話術の様に最小限勝つ小さな声で逃げる算段を始めた。
鉄人に目をつけられている人間にとって、快適な学園生活を送る上での必須技術である。

「まいったな、今回ばかりは流石に手の打ちようがない」
「へっ、天下の久遠光一が弱音とは、珍しいねえ」
「そりゃあ……（パチン！）」

光一が指を鳴らすや否や、明久は耳を塞ぎ目を閉じる。
全員が光一の指に注意を向ける中で、光一は小さな球を口からプッと出した。

ボンッ！

その球が地面に着くと同時に、炸裂音と共に強い閃光を放つ。
全員が困惑するなかで2人は窓のかぎを開け、そのまま脱出。
回復する頃には、2人の姿は消えていた。

「くそっ、逃げやがったか！！」
「探せ！　何としてでも捕まえろ！！」

旧校舎の空き教室にて。

「油断させるためだからな」

「……危なかったね」

「一先ずはな……けど早いうちに何とかしないと。向こうにＡクラス級の戦力がついた以上、数で来られたら勝ち目がない」

「じゃあどうするの？　このままじゃ僕達、３年が卒業するまで逃亡生活だよ？」

「手がない訳じゃないさ」

光一の言葉に、明久は一抹の希望を見出した。

流石光一だと、尊敬の念を込めるのを忘れずに。

「いいか？　組織はリーダーがいて、それがまとめ上げることで機能する物だ。だったら」

「えーっと……だったら？」

「……もっと考えような？　つまりリーダーを打倒する事が出来れば、戦力は瓦解するまでいかなくても混乱を引き起こす事は出来る」

「え？　でも根本君達はもうとっくに……」

「誰があんな無能どもをやると言った？　やるのは……」

キーンコーンカーンコーン！

「え！？　……それって難しくない？」

「成さない限り俺達は逃亡生活か、敗れて試召戦争騒動の日々になるかの２択しかないんだ。やるしかないんだよ、どの道な」

「……わかった。僕は光一を信じるよ」

「上等。そろそろＨＲだ、戻るぞ」

「うん」

コツッと拳をうちあって、２人は空き教室から出て行った。

「やろう。３年Ａクラス代表打倒、僕と光一だけの試験召喚戦争を！」

コラボ問題　第一問『バカと過激派と歪んだ愛情表現？』（前書き）

と言う訳で、初コラボです。
初のコラボを書いていただいたお礼として、まあさんの“僕と歪んだ愛情表現？”の吉井深秋さんの登場です。

初なので至らぬ点はあると思いますが、それでも全力は尽くしたつもりです。
では、楽しんでいただけたらと思い、どうぞ。

コラボ問題　第一問『バカと過激派と歪んだ愛情表現？』

「アキ兄、今日もスキンシップしよ？」
「まってみあ！　それでどうして布団に引き込もうとするの！？」
「だっていつものことでしょ？」
「いつもやってないから！！」

今日も深秋のブラコンはチェンジの領域。
初日に作った布団へと、実の兄である明久を引きずり込もうとしていた。

「「「吉井を殺せぇぇぇえっ！！」」」

そこへＦＦＦ団登場。
全員が木刀や鈍器を構え、明久を殺そうと……

「野暮な事してんじゃねえ」

バチバチっ！！
バチーンッ！！

「「「ぎゃあああああっ！！！」」」

した所で、全員が放電される音と鈍い音と同時に、悲鳴をあげて倒れた。

「全く、いらん手間かけやがって……」

右手にかの独眼竜の爪のごとく、指の間に挟むようにして持った３

本の警棒型スタンガン。
左手には、暴徒鎮圧用特殊ゴム弾が装填されたショットガン。
文月学園を代表する過激派にして、吉井明久の親友兼相棒の久遠光一。

「たっ、助かったよ光一」
「良いって事よ。しかし、相変わらず仲良いなお前ら兄妹」
「そんな、ラブラブだなんて……」
「いや、そこまで言ってない」

顔をひきつらせながら、腕を振り否定を示す。
それを見てピンッと何かひらめいた深秋。

「ねえくおんくん、お礼にこの布団使って良いよ？」
「はっ？　いや、別に使う事なんて……」
「あるじゃない？　ゆうちゃんとあいちゃんとで。なんならボクとアキ兄もまざろうか？」
「お前いきなり何言いだす！？」

ゴゴゴゴゴッ！

「……ねえ光一、アンタ何の話をしてるの？」
「げっ、ゆっ、優子！？　何でここにってその前に何で怒って……？」
「くおんくんがゆうちゃんにあいちゃんも含めて、ボク達のスキンシップに混ぜてほしいって」
「待てみあ！　そんな事一言も……まっ、まあ待とうな優子？　みあの暴走癖はお前も知ってるだろ？　だから本気に腕をとって何をする気で！？」

数分後。

「やっぱりくおんくん、ご自慢の黒くて硬い物がないとよわっちいね」

「みあ、変な表現使わないで！」

「……（声も出せない）」

「……ごめん光一」

畳の上に突っ伏し、優子の関節技により声も出せない状態に陥った光一に謝る明久。

優子は不機嫌そうにふんっと鼻を鳴らす。

「なになに？　何の騒ぎ……ってあれ、また久遠君優子に折檻されたの？」

「そうなんだよ。ボクが布団を使って良いって言ったら、くおんくんを動けなくしちゃって」

「誤解を招く言い方しないで！」

「え？　何々？　優子ってば、意外と大胆！？」

「愛子！　絶対わかっててワザと言ってるでしょ！？」

けらけらと笑いながらの愛子に、優子は顔を赤くして詰め寄った。

無駄だと悟ると、深秋の方に。

「みあも、ブラコンも結構だけど堂々と……」

「え～、だってアキ兄の事好きなの隠したくないもん。だいたいゆうちゃんだって素直になってれば、あいちゃんをライバルにする事なんてなかったでしょ？」

「うっ……」

図星をつかれ、苦虫をかみつぶした顔になる優子。
この隙に、明久は逃げ出そうと……。

「みあ！？　いつの間にベルトを抜き取って僕の足を縛ったの！？」
「それにその気になれば、既成事実くらい簡単に作れるじゃない？　くおんくんよわっちいし、腕も足もウエストもこんなに細いもん……ちょっとうらやましいな」
「そうだよね。ボクも簡単に押し倒せた位だもんね。でもホント細いね、うらやましいかも」
「あのねみあに愛子、光一が武器がないと虚弱で脆弱で貧弱で最弱なのは事実だけど、そう言う事を大声で言わないで！」
「……木下さん、そう言う事も大声で言う事じゃないよ？」

光一にどんよりとした空気がまとわり始めたのが、視覚的に見えた気がした明久。

「じゃあいいもん、くおんくんはゆうちゃんが動けなくしてくれたから、あいちゃんと４人で仲良くお布団でスキンシップするもん」
「あっ、それも良いかも。４Ｐっていうのも、それはそれで面白そう」
「「「それは断じて許さん！！！」」」

先程光一の手で片付けられたＦＦＦ団の面々復活。
光一現在戦闘不能。

「諸君、ただちに久遠光一と吉井明久の首を獲れ！　奴等の首を我らが象徴とするのだ！！」
「「「了解！！」」」
「諸君、ここはどこだ！？」

「「「最後の審判をくだす場だ！」」」
「異端者には！？」
「「「死の鉄槌を！」」」
「男とは？」
「「「愛を捨て、哀に生きる物！」」」

異端審問会テンションアップ、明久の血の気ダウン。
光一の体力、未だ回復せず。

深秋は光一のボストンバッグをごそごそと探ってる。

「あっ、あったあった」
「ではこれより」
「うるさいなあ。ボクとアキ兄のスキンシップの邪魔をするなら……」

深秋は光一のボストンバッグから、１つのある物をとりだし放り投げる。
ソレを見て須川は危険を察知し、それをキャッチすると窓の外に……。

「捨てちゃいや」

と、涙目で上目づかいに懇願した。

ブシーっ！！

「ぶわっ！　げほげほっ、かっ、会長！　何で捨てねえんだよ！？」
「みあちゃんの上目づかいでお願いを断れるゲホゲホっ！！」

結局催涙ガスの餌食となり、それが晴れた頃には全員の姿が消えていた。

その数時間、明久と光一、深秋はFクラスの教室に戻ってくる事はなかった。

コラボ問題　第二問『過激派とちっさい幼馴染のとある会話』（前書き）

はい、今回はレフェルさんの“僕とちっさい幼馴染と召喚獣”より、雨宮つぐみと神埼深紅とのコラボです。

今回は戦闘シーンもあります。
個人的な解釈がありますし、京都弁が難しかったですが。
でもこれなら大丈夫だと自信をもったうえで出しました。

コラボ問題　第二問『過激派とちっさい幼馴染のとある会話』

文月学園、屋上。
召喚フィールドが展開されてるとある一角で、男子生徒と女子生徒が対峙していた。

『Ｆクラス　久遠光一　英語Ｗ　４０１点』
ＶＳ
『Ｆクラス　神崎深紅　英語Ｗ　４３５点』

「さて……そろそろ決着付けようか、深紅」
「そやねぇ。物理やったら流石に勝てへんけど、条件が近い英語や数学やったらそんな差はあらへん」
「ああ。戦闘技術は過激派としての経験上俺の方が上」
「操作技術やったら、観察処分者のわっちが上や」

ジャケットにスラックスを纏い、右手にライフルと左手に自動拳銃を持った光一の召喚獣。
赤いドレスを纏い、歪な剣を持った深紅の召喚獣。

「今日は記念すべき３０戦目。引き分け続きのこの勝負に俺の勝利が刻まれる、何ともめでたい日だ」
「その言葉、そのままそっくり返しますえ」

光一が高揚を抑えきれず笑みを浮かべると、深紅の目は鋭くなった。

まず先手は光一の召喚獣が、左手の自動拳銃を発砲。
深紅の召喚獣は動揺することなく、剣でソレを弾きつつ駆け出す。
至近距離まで到達すると、深紅の召喚獣は剣を突き出しくし刺しに

しようとするも……

「甘い」

光一がライフルでその突きを受け流し、体勢を崩した所で自動拳銃で足を狙い発砲。

深紅の召喚獣が膝をつくが、剣を振り回し『花散る天幕（ロサ・イクトゥス）』を繰り出そうとする。

「っ！　爆発！」

光一が召喚獣の腕輪の能力を発動させ、撃ち出した銃弾が一斉に爆発を引き起こす。

その爆発で吹っ飛んだ光一の召喚獣が地面にたたきつけられ、深紅の召喚獣もボロボロに。

『Ｆクラス　久遠光一　英語Ｗ　１２８点』

ＶＳ

『Ｆクラス　神崎深紅　英語Ｗ　７６点』

「なんて無茶なかわし方や、いたた……」

「あの距離であのタイミングじゃ、普通に逃げた所で『花散る天幕（ロサ・イクトゥス）』の餌食だ」

「流石やなぁ、一筋縄でいかん相手とはまさにあんさんの事え」

フィードバックに顔をしかめる深紅と、内心上手く行った事にホッとする光一。

そのまま間髪おかず光一の召喚獣は自動拳銃を発砲し、ソレを弾き再度距離を詰めるべく駆け出す深紅の召喚獣。

ココで決着を付ける言わんばかりに光一の召喚獣も駆け出し……。

「……引き分けだ」
「……そうやな」

召喚獣は互いに剣とライフルを顔面につき付けたまま止まり、そこで2人は戦闘態勢を解いた。

「今日こそはと思ったんだがな」
「わっちもや。高橋先生を破った男は一味違うえ」

その言葉を皮切りに、フィールドを解除。
それまでフィールドを形成していた雄二が、珍しく拍手を送る。

「2学年最強王座決定は、また次回に持ち越しだな」
「なんだよそれ？」
「高得点で尚且つ観察処分者の深紅と、点数的にも戦闘においても互角なんだ。そう言っても過言じゃない」

戦闘なら明久も候補だが、点数的に不利のため除外。

「点数って所を除けば、明久も候補なんだがな」
「そうだよ、久遠君は召喚大会でアキ君に負けたんだから！　最強はアキ君だよ！」
「つっ、つぐみ、アレはまぐれだよ」

謙遜する様に否定する明久に、光一はため息をついて肩に腕をかける。

「何言ってやがる？　まぐれなんかで負けなんて、俺の今まで否定された様で傷つくぞ？」

「そうだよ、アキ君はもっと自信持っていいんだよ？」
「……ありがとうつぐみ」
笑顔でそう言う明久を見て、光一はふとにやけた顔をして距離をとった。
明久とつぐみは疑問符を浮かべ、深紅と雄二は光一の意図に気付いたのか同様にニヤけ始める。

「え？　何？　どうしたの？」
「いや、俺邪魔かなって気がして」
「そうやねえ、久遠君邪魔やね」
「なっ！？」

光一のからかいに深紅が便乗し、つぐみは顔を赤くした。

「ちょっ、何言ってるのよ久遠！」
「深紅ちゃんも便乗しないでください！」
「……むぅっ、この言い様のない不快感は一体何なのじゃ？」
「……妬ましい」

それに抗議する女子2人と、言い様のない感情に包まれる女子（？）に、明久に殺意を向ける男子。

「何言ってるのさ、僕がどうして光一を邪魔だなんて思わないといけないの？」
「……」
「「「「……はぁっ」」」」
「え？　何！？　どうして皆して呆れたように溜息つくの！？　それにつぐみはどうしてしょんぼりとするの！？　僕一体何したの！？」

「……つぐみには悪いけど、バカで良かった」
「……私も美波ちゃんと同じ意見です」
「……何故ワシまで複雑な気分なのじゃ？」

明久の鈍感ぶりに呆れはてるも、発端は自分のためつぐみに罪悪感を感じる光一
周りに気付かれないようちょいちょいとつぐみの肩を叩き、有無を言わせる前に手を差し出す。
つぐみは光一の意図を察したのか、その手に触れて接触感応（サイコメトリー）を。

『すまなかったな、俺の所為で』
『気にしなくて良いよ』
『それでだ、詫びに俺がデートを手配する。無論ＦＦＦ団や邪魔ものは俺が一掃する』

接触感応（サイコメトリー）と精神感応（テレパス）を駆使し、会話を進める２人。
光一はさして隠す様な事を持っていないし、そこまで深読みしないと信じてるので接触感応（サイコメトリー）を嫌がらない。

『そんな、良いよ。瑞希ちゃんに悪いから』
『良いから、騙されたと思って行って来いよ』
『だから！』
『それで本当に後悔しないのか？』

接触感応から流れた情報に、つぐみは戸惑ったけれど、それはある事で払拭される。

『あたしは久遠君とは違うよ。木下さんのお姉さんにフラれてすごく傷ついて、今まで通りの関係にはなれなくなったじゃない？　…

…あたしは久遠君見たいに強くないからそれが怖いよ』

『違う、俺は誰よりも弱い……だから後悔しない様、即決で決断するしかなかったんだ。悪党になり下がったのも、優子と一緒に居たいって思った事も、明久と親友になりたいと思った事もな。だからこそ、明久と相棒として信頼しあえてるし、皆とこうして笑い合ってる。お前はどうなんだ?』

学園1の過激派と呼ばれ、敵も多い立場
そんな人間とは思えない程彼は貧弱で、もしかしたら自分でも勝てるんじゃないかと思う程。

明久と瑞希の幸せを邪魔はしたくない。
けれど、その2人と一緒に笑い合う事が出来ない……?

「吉井、久遠、坂本!　ここかぁっ!?」
「げっ、鉄人!?」
「マズイ、悪戯がばれたか!?」
「くそっ、逃げるぞ!!」

つぐみの手を離し、光一は明久に雄二と合流して逃走。
鉄人はそれを追い、猛ダッシュ。

「あいつらまた西村先生に何かやったの?」
「あっ、あはは……」
「あやつ等もこりんのう」

ただ1人、つぐみだけはそれを冷静に見ていた。
光一は必死ながらも、どこか楽しそうな印象を感じ、明久も同じ。
あんなふうに笑い合えたら……。

そして、放課後。

「ねえ久遠くん、お昼の話だけど……」

コラボ問題　第二問『過激派とちっさい幼馴染のとある会話』（後書き）

つぐみについては、光一がいたら多分変わってたかな？　と言う感じです。
深紅に関しては、ちょっと光一のライバルみたいな？
そんな印象で出してみました。

コラボ問題　第三問『過激派と発明のミッションインポッシブル・バカ＋』（前

はい、お気に入り件数１１００件突破！

と言う訳で、今回はヒョウガさんの“バカと発明召喚獣”より、海谷陸とマーナのコラボです。
上手くキャラを出せたらと思ってます。

「おい、何やってんだ2人して？」

何かの仕様書と、どこかの建物の設計図とにらめっこしてる光一と陸。

その様子を見て、彼の悪友である坂本雄二は暇つぶしになるなと、2人に駆け寄った。

「セキュリティ設置を頼まれたから、間取りととりつける機器を検討してる」

「それで俺は、その取り付ける器具の調達だ」

「光一さんはとても詳しいし、設営地点もとても合理的ですから私の出番がありません」

「お前は元々だ」

「酷いです」

マーナが役目なしに不服なのか、文句を言っていた。

「お前、そんな所まで精通してるのかよ？」

「ダテに過激派なんて呼ばれてやしない。それにこういうのを上手く利用して、警備会社を立ち上げるのも悪くないって思ってるしな」

「ふむっ、その時は俺も協力しよう」

「契約はお任せください」

「史上最凶最悪の警備会社になるな絶対」

光一は雄二をしのぐ頭の回転の速さと、こちらは雄二ほどではないが統率力もある。

それに交渉力も行動力も、一組織の長として別クラスの代表でなく

てよかったと何度も思った程。

「で、そのセキュリティの設置は誰に頼まれたんだ？」
「お前の奥さん」
「俺は独身だ！　ってどこかで見た間取りだと思ったら、やっぱり翔子の家か！！」
「落ち着け。お前の脱走阻止設置だったら、お前の前でやる訳ないだろ」

それもそうかと引き下がる雄二。
が、疑問が１つ

「じゃあ何の為に？」
「最近妙な気配を感じるらしいから、セキュリティを強化したいって」
「妙な気配？」

事が事故、流石に雄二も真剣な表情に

「ああ。人気のない所を歩いてる時、妙な視線を感じたりとか」
「ストーカーか？」
「その可能性もあるから用心のためにって、セキュリティの設置を依頼して来たんだ」

それならばと納得する雄二。

「霧島は美人だし、ストーカーがついてもおかしくはないからな」
「その通り。それに万が一にもＦクラスだとしたら……」
「妙な行動に出てもおかしくはないな」

雄二もFクラスと言うのがどういう物なのか、十分に理解していた。
光一達も仕様書を見つつ、セキュリティの設置地点設定の続きに。

「翔子の部屋は随分厳重じゃないか？」
「目的が霧島だとしたら、これ位当たり前だろ。詳しくは聞いてないけど、盗られたら困る物もあるらしいし」
「なんだそりゃ？」
「そこまで聞いてないけど、案外お前との婚姻届けだったりしてな？　ははは」

光一は笑い話の様に言うが、ソレを聞くなり雄二は何か思案し始めた。
その様子を見て、思惑通りと言う顔になる光一と陸。

「……確認する必要はあるな」
「？　何がだ？」
「いや、何でもない。それより、そう言う事なら不安だな」
「なんだかんだいってても、結局霧島が大事なんだな」
「んな訳あるか！　俺はただ単に幼馴染として心配してるだけだ！」

憤慨しながら、雄二は辺りを見回すとムッツリーニの席へと向かった。

「……計画第一段階終了」
「だな」

2人は互いにサムズアップをし合った。

そして、ムッツリーニの席にて。

「という訳だ。光一が絡んでるって事は、恐らく翔子がセキュリティを導入した真の目的は婚姻届の筈。それでだムッツリーニ」
「……拒否する」
「まだ何も言ってないだろ！？」
「……あの2人がてがけたセキュリティなんて、命がいくつあっても足りない」

過激派として知られる光一と、マッドの気がある天災科学者の陸というコンビ。
コレはある意味、文月学園最悪コンビだった。

「わかってる。報酬は俺のお宝本１０冊に加え、秘蔵を5冊……」
「……秘蔵は３０冊。これが最大限の譲歩」
「くっ……わかった。ただし成功報酬だ、前金で１０冊」
「……任務了解」

そして、その日の夜。

「おっ、来た来た」
「ムッツリーニだけか？」
「いや、雄二もちゃんと」

今日あたりくるだろうと辺りを付けた光一と陸は、今は霧島家に現在は仮管制室。

「……大丈夫？」

そこへ、家主である霧島翔子。
何せ彼らの狙いは、自身にとって将来を結ぶ絆とも言える婚姻届。

「なあに、ここに呼び寄せたのは罠の完成度を見る為だ。それに下調べもなくあれを持ち出すなんて不可能だよ」
「その通りだ。まあ見てろ」
「あっ、地点Ａに到達します」

一方雄二達は、翔子宅に既に侵入。
ムッツリーニのピッキングで、今入ったばかり。

「今日翔子は工藤の家に泊まると言っていたからな」
「……事実確認もとれてる」
「しかし、妙だな……都合がよすぎる気が」

カチッ！

「ん？」

ドバンッ！　（床が勢いよく跳ねあがる音）
ガンッ！　（雄二が天井に激突する音）
ドサッ！　（雄二が地面に落下した音）
ボムッ！　（仕掛けが爆発した音）

「ぐわっ！」
「……既にトラップは仕掛けられてる様子」
「くそっ！　あいつら手際よ過ぎだろ！！」
「……大声厳禁」
「っとと……さて、翔子の部屋は確かあっちだ」

ゴゴゴッ！

「ん？　何だ？」
「……っ！　走れ！」
「え？」

ブシューっ！！

「ぶわっ、げほげほっ！　くっ、催涙ガスか！？」
「……さっきのトラップが発動キーだった」
「くそぉっ、甘かった！　あの2人がこの程度で終わる訳がなかった！」

一方、管制室にて。

「どうやら、第一は問題ないか」
「だな。後はもう少し頑張って貰いたい」
「ターゲットは第2地点へ向かってますぅ」
「……2人は性格が悪い」

2人は楽しみつつ、データまとめ。

時は過ぎ、翔子の部屋の前。

「ゼー……ゼー……ようやく……翔子の部屋に……」
「……5分くれ」

ピッキングにとりかかるムッツリーニ。
大半罠のダメージを受けてる雄二は、顔にはゴム弾の跡や体中に打撲跡。
服は電流と爆発のダメージで、少し焦げていた。

「これで何もなかったら、あいつらぶっ殺してやる」
「……あいた」

慌てず、ゆっくりと部屋に入る雄二とムッツリーニ。
まずは罠の有無と、目標物の確認。

ブシャアっ！！

「っ！？　何だ、どうしたムッツリーニ！？」
「……恐ろしいトラップが」
「何！？　それは一体……。

ムッツリーニが指差した先には、綺麗にたたまれた女性物の下着。
場所から言って、それは翔子の物。

「入れ忘れか？　いや、そんな筈は……っ！　あれは！」

罠の確認もせず、雄二はズカズカと目標へ。
そこにあったのは……

「やっぱりあった！　クッ……強化ガラスか！　何か、何か壊す道具は！？」

陸が開発を手掛けた、分厚い新型の強化ガラスでコーティングされた目標物。

それを壊そうと、躍起になり始める雄二。

「翔子のヤツ、弁護士に預けたなんて嘘を教えやがって……！　光一も陸も、この事知って協力しやがったな！？」

「……（ぐったり）」

「起きろムッツリーニ、これさえ壊せば……」

ビーッ！　ビーッ！　ビーッ！

「っ！　けっ、警報！？」

「……恐らく、誰か来る」

「くそっ……コレを目の前にして退却しなけりゃならんとは！」

一方、管制室にて。

「データはとれました」

「それじゃ陸、第2段階といこう」

「そうだな。光一、お前の視点から見た今回の意見をくれ」

「……出来ればもう、私の部屋に近づけないようにしてほしい」

「「任せとけ」」

雄二とムッツリーニの挑戦は、まだ続く（？）

コラボ問題　第三問『過激派と発明のミッションインポッシブル・バカ＋』（後

次回“バカとテストと優等生?”より、グレートレンジャーと来牙と絵梨のコラボを予定。

それが終わったら、ぼちぼち本編再開する予定です。
後、コラボの申し出（キャラの貸し出し借り入れ）は歓迎しますので、いつでもどうぞ。

コラボ問題　第四問『過激派と挑戦？とグレートレンジャー』（前書き）

今回はバカとテストと優等生？　より宮永来牙と宮永絵梨。
そして、色もの集団グレートレンジャーのコラボです。

グレートレンジャーはある意味冒険なうえに、吉井深秋より書き難かったので
少々不安はありますが、納得はしたうえで出しました。

コラボ問題　第四問『過激派と挑戦？とグレートレンジャー』

グレートレンジャーという集団があった。
彼らは三輪車で公道を駆け抜け、女性にセクハラをし、はたまた子供じみたケンカを所々で行う。
そんな迷惑な集団。

「違うのじゃ！　これはワシらの行動が正義を妬む連中によって捻じ曲げられたでっち上げじゃ！」
「イエース！　コンナモノウソロッピャクにキマッテルゼッ！」
「バカか！　ソレを言うなら？九百だ！」
「拙者達はサーキットに出場する為の練習をしており、女性と仲良くなるべくスキンシップをお願いする事。そして我等が親睦を深める活動を捻じ曲げられた結果でござる！」
「こうなればじゃ、ワシ等が正義である事を世に示す為にも、この小僧を懲らしめるのじゃ！」

そう言って、自称グレートレンジャーのリーダー事、宮永源蔵は１人の少年の写真を取り出した。
その写真に写っていたのは……。

時と場所は変わり、文月学園から少し離れた繁華街。

「すまないな光一、これで絵梨との約束を果たせる」
「良いって事よ。１人や２人増えた所で、なんら変わりはねえしな。それにちゃんと金はもらってるんだし」

文月学園の制服を纏う、２人の少年。
１人は学園で過激派と呼ばれる少年、久遠光一。
そしてもう１人は、優秀だがトある事情でＦクラス入りの宮永来牙。

光一は明久に雄二と一緒になってバカやってる上に、学園内では評判がかなり悪い。
が、どちらかと言えば（趣味を除けば）良識人なので、それなりに来牙も仲良くはしていた。

「お前には助かる。Ｆクラスはバカ揃いだから、こんな話をすれば面倒だからな」
「俺の手掛けてる明久と秀吉の幸せな人生設計の副産物なんだから、そう気にするなって」
「……お前も大概壊れてるな」

来牙は光一の右手につけられてる腕輪、融合召喚の腕輪を見ながら同情の視線を向ける。

「あっ、来牙くーん！」
「おっ、いとしい妹さんのご登場だな？」

「そこまでじゃ！　来牙、お主は性懲りもなく、また絵梨に手を出しおったか！」

絵梨が来牙に抱きつこうとした所で、ソレを止める声があった。
そこには……。

「あっ、お父さんにグレートレンジャーの人たちだ」
「お父さん？　……おい来牙、お前って養子とかか？」
「絵梨はそうだが、俺は正真正銘あの爺さんの孫だ」

「……成程、突然変異か」
「突然変異はあっちの方だ！」

光一はすまんと謝ってから、改めて来牙の祖父という人物を見る。
……いや、正確にはその周りの人物を。

「……何なんだこいつら？　仮面ライダーのコスプレに、オウムのかぶり物、果ては鉄人モドキって。しかもおまえのじーさん、なんでくの一のコスプレなんだよ？」
「よくぞ聞いてくれた！　ワシ等こそが宇宙の平和を守る正義の勇者、グレートレンジャーじゃ！」

４人がそれぞれポーズを決めた。
話に戻るが、ココは繁華街である。

「来牙、お主は性懲りもなく絵梨に手を出しおったな！？」
「落ち着け、まずはターゲットを探さねば！」
「そうでござる。今はグレートレンジャーの名誉返上の為、久遠光一という小僧を懲らしめるのが先でござる」
「ふむっ、そうじゃな。久遠光一という悪ガキを懲らしめ、汚名挽回すれば来牙ごときなどたやすい」
「イエース！」

奇怪な集団から自身の名があげられた事に嫌悪する光一。
来牙と絵梨に、そのしかめた顔を向ける。

「……あの、何で俺の名があんな連中に？　しかも名誉挽回と汚名返上を間違ってるし」
「わからん……お前の様子から見て、会うのは初めての様だから俺にもサッパリ」

「あっ、もしかしてこれってこういう感じの大道芸か何かで、お前のじいさん大道芸人なのか？」
「……そうであって欲しいとなら言える」
「だったらおひねり投げないと」
光一が財布から１０円を取り出すと、それを４人の前に軽く投げた。
チャリーンという音に敏感に反応した４人は……。
「おおっ、１０円玉じゃ！」
「グレイト！　ガムガカエルゼ！」
「寄越すでござる！　これは拙者が飴を買う為の金でござる！」
「バカな事言ってんじゃねえ！　俺のチョコの金だ、よこしやがれ！！」
醜い争いをし始めた。
「……行こう、来牙君に久遠君」
「え？　良いのかあれ？」
「……関係者だと思われたくない。それより絵梨、お前の欲しがってたチケットだが、光一が調達してくれた」
「ホント！？　いつもありがとう、久遠君」
「ん？　ああ、構わないよ。それより俺と工藤、明久と秀吉でトリプルデートを提案したいんだが……」
次の日。
「へ～っ、そりゃ残念だったな。そんな面白そうな場面を見逃すとは」
「で、何でそんな変人集団が俺の名前を？」

「ああっ、それならばあさんから聞いたんだが……」
「すまん、ちょっと待ってくれ」

光一は携帯を取り出し、ある所に繋ぎ始める。

「もしもし霧島？　雄二がさっき後輩の女子に声をかけられてて……」
「おい待て！　いきなり何ほざいてんだ！？」

ガラッ！

「……雄二、浮気は許さない」
「待て翔子！　まだ電話繋いで数秒もたってない以前に、これは誤解だギャアアアっ！！」

「さて、邪魔者は消えた事だし、詳しく聞かせてくれ」
「……お前も大概、外道だな」

翔子に引きずられる雄二に見向きする事もなく、光一は来牙に問いかける。

「どうやらあの連中、文月学園でも評判が悪いお前を懲らしめて名をあげようとしてるらしい」
「名をあげようって……俺あくまで学園内での悪ガキだぞ？」
「あの連中にそんな頭があると思うか？」
「……そんな連中がどうして俺の評判を知ってるのかが気になるんだが」

ザザッ！

「これより、異端審問会を始める」

平和な時間が、急きょ混沌の時間となった。

「異端者宮永来牙ならびに久遠光一、罪状は久遠光一の手引きの元でダブルデートを企てると言う大罪を犯した」

「「「死刑だ！　処刑だ！　抹殺だ！！」」」

「来牙、心配はするな」

「っ！　ああ、わかった」

光一が軽く卓袱台を叩くと、勢いよく卓袱台の下からガスが噴出。ただの煙幕の為、２人は即座にその隙をついて教室を脱出。

「二手に別れるがいいか？」

「ああ。その方がいい」

「逃げたぞ、追え！」

「あの野郎、絶対ぶっ殺して俺が代わりに絵梨ちゃんとデートしてやる！」

「……光一は俺がしとめる」

その少し後、学園のとある廊下にて……

「なっ、何をするんじゃ！？　ワシ等は正義の味方じゃぞ！？」

「ユーアークレイジーね！」

「くそうっ、この様なチンパンジーに後れを撮るとは一生の不覚でござる！」

「おのれキサマ！　このような事をしてただで済むと思ってるのか！？」

「黙らんかこの不審者共が！」

打倒光一を掲げ、文月学園への潜入をこころみる……が、あっさりと鉄人につかまり、現在補習室に連行されるグレートレンジャーの面々。

「ワシ等はただ正義の味方として、この学園に居る久遠光一という悪ガキを懲らしめに来ただけじゃぞ！」

「久遠？　貴様ら、久遠の知り合いか？」

「イエース！　ドンナニンゲンカハシラナイガ、レッキトシタシリアイダ」

「どんな人間かもしらん知り合いなどあるか！　久遠め、あいつは一体何をしておるのだ！？」

バチバチっ！

ビシッ！

ドガッ！

「「「ぎゃあああああっ！！」」」

「むっ、またＦＦＦ団が久遠と交戦したな？　やれやれ……」

「久遠じゃと！？　どこじゃ！？　ワシ等の名誉返上のカギはどこじゃ！？」

「ノー！　コウイウトキハオメイバンカイ言うね！」

「名誉挽回と汚名返上だ不審者共が！！」

「あれ、鉄人？」

「むっ、お主は昨日のモヤシ小僧ではないか？」

「モヤシ言うな！　それでその変人集団、どこで拾ったんだ？」

「お前を倒すとかわけのわからん事を抜かしながら侵入してきおっ

たのだ」

そこで４人は反応した。

つまりは、この少年が自分達の目的であると言う事。

「ユーガクオンコウイチカ？」

「おおっ、お主が！？　ならば話は早いのじゃ！

「俺達の金のなる木、ようやく見つけたぜ！」

「では、いざ尋常に……」

と、全員が光一の後ろの光景に唖然となった。

覆面をかぶった集団が、黒こげから十字の打撲跡まで、様々なやられっぷりで横たわっている。

ちなみに光一の手には、スタンガンとショットガンが握られており、肩にかけてあるボストンバッグには銃が満載なのが丸見えだった。

「全く、貴様は……」

「文句はこのバカ共に言えっての！　で、そこの変人集団は俺に何の用だ？」

４人は冷や汗をだーっと掻きながら……

「はて……朝ご飯はまだかいのう？」

「オーノー、ワタシニホンゴワーカリマセーン？」

「拙者、通りすがりのコスプレマニアでござる」

「ホーホケキョ！」

ボケたふりをし始めた。

「よくわからないが、もう行って良いか？」

「ああ。俺はこの不審者共に補習をせねばならんのでな」
「そうか。んじゃ」
その日、補習室から４人分のしわがれた悲鳴が響き渡った。

コラボ問題　第四問『過激派と挑戦？とグレートレンジャー』（後書き）

今回は思った以上に早く出来た感がありました。
でも個人としては面白くはできたつもりなので。
後、来牙と絵梨に個人としての意見を聞いてみたい（要望）

次はそろそろ本編の更新に戻ります。
書いてみたいネタが出来次第、作者さんにお願いする予定ですので。
これを読んでくださってる作家の方々、どうぞよろしくお願いします。

また、久遠光一を使いたいという要望も受け付けておりますので。

第九十二問

問題　以下の問いに答えなさい。

『パンがなければお菓子を食べれば良い』と発言したことで有名な人物を答えなさい

姫路瑞希の答え

『マリー・アントワネット』

教師のコメント

正解です、流石ですね姫路さん。

吉井明久の答え

『マリー・アントワネット』

教師のコメント

最近は意外でもなくなった正解です。

久遠光一の答え

『平頼朝』

教師のコメント

名前が混ざっている上に国時代性別身分全て間違っています

朝のＨＲ。

「以上、欠席遅刻はなしだな。では次に報告だが」

Ｆクラスといえどもは静かな物だが、今日は別だった。

殺気を抑えきれない面々が、中央に座る光一と明久に今にもとびかからんとしている。

「試験召喚システムは今日から通常仕様に戻す」

「え？」

が、その言葉で全員の注意が鉄人に向いた。

「どうしていきなり？」

「学園長が言うには、オカルト仕様と通常仕様の切り替えが可能になったそうだ。それでお化け屋敷を経営しない時間帯は通常仕様、経営開始時にはオカルト仕様と切り替える方針らしい」

「じゃあちゃんと制御できるようになったんだな」

「久遠、そういう事を堂々と言うんじゃない。では以上だ、今日も真面目に勉学に励むように」

鉄人が教室を出ていくと同時に、男子生徒の全員が立ち上がり……

「久遠と吉井を殺せえええええ！！」

「「うおおおおおおおおおっ！！」」」

ＦＦＦ団に早変わりして、光一と明久に襲いかかる。

光一が上履きを脱いでその中の煙玉で煙幕を張ると、即座に天井裏へと脱出。

「あのブタ野郎、どこだ、どこいった！？」

「探せ！　あいつらの首を他のクラスより先に手に入れるんだ！」

「サーチ＆デェース！！」

「ふぅっ……一先ず、どうするかな？」

３階の天井裏で、下と周囲を見回す光一。

「どうするって、３年の教室に行こうよ。代表を倒せば」

「その前に俺達は、３年のＡクラス代表が誰かを知らないだろ」

「あっ……」

普通試験召喚戦争は学年別に行う故に、他の学年の代表の事など知る必要はない。

「じゃあどうするの？　顔も知らない相手を倒せなんて無理だよ」

「とりあえず、Ａクラスに出向くか……根本の手がまだ及んでないと良いんだけど」

「？」

光一が根本の介入を気にしてる事に、疑問符を浮かべる明久。
足音を立てぬよう慎重に、2人は新校舎へと潜り込みAクラスへ。

「天井裏が繋がってて助かったね」
「けどそう何度も使えないぞ？　さて……っ！」

光一が息をひそめ、Aクラスの中を覗き見始めた。

「……何度来られても同じ。Aクラスはあなたたちとの同盟を拒否する」
「おいおい、そう邪険にする事はないだろ？」
「いい加減にしなさいよ、アンタ達がやってるのは逆恨みと八つ当たりじゃない！　何度来られても同じよ、Aクラスはそんなくだらない集団と手を組む気はないわ！」
「やれやれ……」

そこでは、優子を伴った翔子が根本と何かを話していた。
いや、正確には根本からの同盟の申し入れを、翔子と優子が断固として拒否するという姿勢。

「ごちゃごちゃ言ってねえで従え！　俺は同盟を結びに来たんじゃねえ、従えと命令しに来てんだよ！！」

本性を現した根本は、Aクラスに対して侮辱とも言える暴言を堂々と大声で発した。
Aクラス全体が根本に対し、敵意をこめた視線をぶつけるも根本は意にも介さず。

「随分な言い様ね。すっかり落ちぶれた名だけの代表が」

「はっ！　お前ら学園新聞読んでねえのか？　３年のＡクラスとは仲良くさせて貰う事になったんだ」
「それがどうしたのよ？　試召戦争は学年別と限定されてる筈よ？」
「確かにそうだが、模擬戦争はそうじゃねえだろ？」
優子は根本の意図を察し、ギリっと歯軋りする程食い縛った。
根本の意図は、３年のＡクラスにこのクラスを攻め込ませ、弱った処を叩くと言う物。
同じＡクラス同士がぶつかれば、どちらもただでは済まないがそのあとでＢクラスとの戦争となると……
「……卑怯な！」
「はっ、勝てば官軍って言葉知らねえのかよ？　俺に従いたくなきゃ、勝てばいいだろ？　３年Ａクラスと俺達Ｂクラスに……いや、ＣからＥまでもか」
「この……」
「まあ俺も寛大だから、昼までは待ってやる。感謝しろ、ははははは！」
まるで悪代官の様な態度で、根本は教室を出て行った。
「どうするんです代表？」
「俺は嫌だ、あんな奴に従うだなんて！」
「けどどうするんですか？　現状じゃ勝ち目なんてありません」
「けどあんな奴の言いなりになるなんて！」
これ以上ない危機に、Ａクラスは動揺し始めた。
あんな暴言を吐かれた以上、Ａクラスにとっては根本は敵。
だが現状根本の背後に３年のＡクラスが付いている以上、戦力的に

劣っている。

「やれやれ、まさかあそこまで増長するとはな」
「いくらなんでも、やり過ぎだよ」

そこへ、渦中である人物の声が。

「光一！　それに、吉井君まで」
「……その様子じゃ、襲撃を受けた？」
「ああ。それよりすまないな、まさかＡクラスまで巻き込む騒動に発展するとは……」
「……久遠の所為じゃない」

頭を下げた光一に、翔子は冷静に言葉を返す。
Ａクラス全員、根本の態度で完全に光一達の味方をする事にしており、全員がそうだと続く。

ガラッ！

「失礼するぞい」

扉が開いて、光一はスタンガンを取り出し投擲の姿勢をとるが、秀吉とわかりそれを下す。

「どうしたのよ秀吉？」
「光一と明久が今出向ける場所は、ココ位しかないじゃろ？　それにこの状態で光一が打倒されてしまえば、とんでもない事になるのじゃ」
「？　どういう事だ？」
「それがじゃの、根本は３年Ａクラスの後ろ盾を得た事をいい事に、

やりたい放題し始めておるのじゃ」
「……詳しく聞かせろ」

秀吉達は自分の調べた限りの根本の行動を、光一たちに説明した。
アンチ久遠派内では、最早風前の灯だった勢力を3年Aクラスを引きこむことで立てなおした事で、リーダー格へと返り咲く。
その勢いを利用し、Bクラス代表としての権限や発言力も取り戻す事に成功。

だが、ソレを良い事に今までのうっ憤を晴らすかのように、根本はやりたい放題をし始めた。
後ろ盾を利用しての先程のAクラスに対する暴言や、各クラス内におけるアンチ久遠派への反対者の粛正。
そして唯一代表が中立であるDクラスまで、無条件で降伏せざるを得ない状況に追い込み、屈服。

ソレを聞いて、光一は呆れるかのように頭を押さえる。

「まったく、典型的な小悪党だな。後ろ盾を得た途端に強気かよ」
「ホント、なんだか平氏みたいな事言いそう」
「平氏？　……えーっと、“パンがないならお菓子を食べれば良い”だっけ？」

Aクラス全員がずっこけた。
明久もさすがに苦笑いで、秀吉もため息をついた。

「……光一、ある意味合ってるけど、時代も国も全然違うよ。“平氏でなければ人でない”の方」
「へーっ、そうなんだ。成程、今回の事にピッタリだ」
「……光一よ、コレ小学生の問題じゃぞ？」

「もうっ、相変わらず出来ない科目じゃ全然できないんだから！」
優子は呆れと怒りを混ぜた様な複雑な表情。
「でも出来る科目は出来るだろ？　……多分だけど、今回の発端の1つだろうな」
「え？　どういう事？」

『Fクラス　久遠光一　総合科目１９３１点』

「あっ、そっか。光一もう総合じゃBクラス並だったよね」
「物理は７００点代近くで、最近は数学も英語も４００点オーバーが出始めたからのう。それに加え、化学の点数も3ケタが取れるようになっておる」
「その大半がたった5科目なのがすごいわ……じゃあ総合でこれ以上になる前に、とでも思ったのかしら？」
「だろうな。この学園のシステム、上位クラスの差別意識も強めてるんだから」

基本試験召喚システムと試験召喚戦争は、学生の学習意欲の向上が目的であり、下剋上がこの学園の風潮。
それは大いに結構なのだが、このシステムには大きな問題もある。
上位クラスが下位クラスを見下し、いじめの増加を担うんじゃないかとの意見もある

実はここ最近の光一打倒を巡っての騒動も、文月学園のイメージに傷をつけている事はまだ公になって居ない。

「あの妖怪なら、いじめられる方が悪いとでも抜かすんだろうがな」
「……お願いだから、そう言う発言はやめて。妖怪と言われて学園

長を連想出来たのが痛いから」
「でもまあ、これではっきりしたな」
「え？　どういう事？」

今度は呆れの視線がＡクラスから明久に集中した。

「……明久、根本が偉ぶってるのは3年のＡクラスが背後に居るから。それは今のを見てわかってるだろ？」
「あっ、そっか。じゃあ後ろ盾さえ瓦解すれば、根本君は……」
「まあ目的は変わらないって事。3年Ａクラスの代表を打倒する事にな」
「……それは並大抵のことじゃない」

2年の代表である翔子の言葉に、光一は頷き返す。
最上位のＡクラスの代表という事は、学年首席を意味する。

「なに、逆境なんて今まで何度も経験してきたんだ。ただ、規模が規模だけに今回はきついがな」
「……力になれなくてごめん」
「気にするな。あんたはこのクラスの大将なんだ」

ガラッ！

「おう、やっぱりここに……」

ビシッ！

「ぐわっ！」
「明久！」
「了解！」

「まっ、待て！　俺はギャアアアっ！！」

数分後

「さて、不安要素の１つは排除した」
「そして霧島さんへのお詫びの品もゲットしたし、幸先はよさそうだよ」
「待て！　折角協力しようというのに、どういう扱いしてるんだ！？」
「見くびるな、そんなウソに騙される僕達じゃない！」

やってきた雄二をリクライニングシートに縛り付け、霧島への贈り物にし始める明久と光一。
贈り物の体裁を取り繕う為のリボンが、異様に様になって居ない。

「……ホント、どういう間柄なんでしょうか？」
「……あれでなんであの３人の絡みが話題になるのかな？」

そのやりとりは何度見ても慣れない、Ａクラスの面々だった。

「霧島、どんな手を使ってもいいから絶対にあらゆる意味で逃げられない様にしてくれ。俺が許す」
「……わかった」
「なに勝手な約束してやがる！　翔子、おまえもわかったじゃねえ！！　光一に明久、テメエ等どんだけ俺を不幸のどん底に落とせば気が済む！？」
「アホ抜かせ、誰がお前の不幸ごときの為に労力を費やすか！　俺はただ友達である霧島の幸せを手助けする“ついでに！”お前の不幸を楽しんでるだけだ」

「おぉいっ！！　今普通にムカっときたぞ！　俺の幸せが大嫌いだと言われるよりムカっと来たぞ！！」

キーンコーンカーンコーン！

「時間か……とりあえず、秀吉が仲間になった事と雄二の排除、そして現状把握ができただけでも良しとするか」

「待って久遠君、ボクも仲間になるよ」

「……私からもお願い。クラスで動けない以上、信用できる仲間を提供するしか」

「いや、十分だ。工藤もありがとう、よろしく頼む」

と言って、愛子と握手。

「ねえ、光一。アタシも……」

「悪いけど、信用できる相手だけを仲間にしたい」

「っ！　それってどういう事よ！？　まさかまだ根に持って……」

「この戦いで負ければ、学園中から総スカンだからだよ」

それだけで何を言いたいかを分かり、優子は二の句を言えなくなった。

「明久、秀吉、戻るぞ」

「うっ、うん……」

「そっそうじゃの……のう光一、姫路と島田には？」

「却下だ。暗殺実行犯どもをひきいれてどうすんだよ？」

3人がそう言って出て行くのを、優子は俯きながら見送って……

「光一のバカ！！」

不機嫌そうにそう叫ぶと、自分の席へ戻って行った。

第九十三問

問題　有害な生物により発生する災害を何と呼ぶか答えなさい

姫路瑞希の答え
『生物災害、あるいはバイオハザード』

教師のコメント
正解です、流石ですね姫路さん。
主にウィルスなどによる災害の総称であり、インフルエンザやサルモネラなどもコレらに該当します。

久遠光一の答え
『清水美春』

教師のコメント
否定はできませんが、間違いです。

吉井明久の答え
『坂本雄二、鉄人、姫路瑞希、島田美波、清水美春、ＦＦＦ団、ババァ長（訂正）学園長……』

教師のコメント
君の周りは災害だらけなのですか

坂本雄二の答え

『霧島翔子』

教師のコメント
君はいい加減観念しなさい

時は過ぎて昼、屋上にて。

「ねえ光一、木下さんの事だけど……」
「あのな明久、今の俺達に余裕なんてありゃしない。だから少しでも不信感を持ちたくないんだよ」
「それは……けど」
「何が言いたいかはこの際おいとくけど、今はそんな事よりこれからだ」

明久はどうにも複雑な気持ちを抱えつつも、確かに今はと黙る事に。
明久はムッツリーニの盗聴を（Ａクラスは工藤が全て排除してある）警戒し、アイコンタクトを。

『Ａクラスの方は？』
『表向きは協力するよう頼んどいた。今ヘタに行動してＡクラスが破れたりすれば、それこそ根本達の天下だ』

『まあ、仕方ないよね。秀吉と工藤さんは？』
『演劇部と水泳部経由で、ちょっとクーデターの勃発阻止を頼んでる』

根本のやりたい放題には、午前だけでも各クラスで不満が募っていた。
特にAクラスとDクラスでの反発が強く、今にも試召戦争をという声もある程に。
3年でも、常夏コンビが設備のランクを下げられたくなければと脅され、大半が協力を強いられていた。

だからと協力してクーデターをという声が、ひそかに囁かれている。

『でもどうして？　僕達にしてみれば……』
『まだ駄目だ。3年は元々の原因である俺達を恨んでるだろうし、2年だって根本に反発はしつつも俺達を嫌悪してる奴も多い。いざって時に邪魔をされたらそれこそおしまいだし、クーデターが潰されたりしたら根本達を余計に調子づかせるだけだ』
『うぅっ……あの覗きは元々清水さんが原因なのに』
『心配するな。そっちはもう手をうってある』

ガチャッ！

「居たわ！」
「ちっ、見つかったか！」

小山を始めとするCクラスの女子数人と、数学の長谷川教諭その女子達を率いるのは……

「ん？　見覚えのない顔だな……3年か？」

「雰囲気的には、霧島さんに近いよね？」

その見慣れない女子が、小山が前に出ようとしたのを制した
そして一歩前に踏み出すと……

「あなた方が、通称切り込み隊長コンビですか？」
「ああ、そうだ。で、俺がアンタ達が倒したがってる久遠光一だ」
「そうですか。私3年の小暮葵と申します」
「へぇっ……これはご丁寧にどうも」

光一は珍しく、礼儀をわきまえたふるまいでそれを返した。

「あら？　後輩の小山さんからは、粗野で下品なデリカシーのない、クズの見本だとお聞きしてましたのに」
「確かに過激派と呼ばれてる以上、その言い方は否定しようがありませんね。でも俺は誰彼噛みつく気はありませんよ。どこぞの指どもと違ってね」
「アンタ好き放題言ってくれるじゃない！！」
「やめなさい、それが彼の思うつぼだとどうしてわからないのですか？」

小山は小暮の言葉に委縮し、一歩下がった。
その様子で光一は、小暮に関心を持った。

「へぇっ、成程ね……じゃあそちらの要件はわかってるから、手っ取り早く行きましょうか」
「そうですね。あなたに恨みはございませんが、これも代表の指示なので」
「その代表だが、一体何考えてんだ？　幾ら学園の評判を下げまくってる張本人である俺達を黙らす為とはいえ、外に漏れたら余計に

評判下げる騒動に参加するなんて」
「私達には私たちの事情があると言う事です。では、サモン！」
「ちっ、だからと言って手は抜かねえぜ！　サモン！」

『２－Ｆ　久遠光一　数学４１１点』
ＶＳ
『３－Ａ　小暮葵　数学３１１点』

数学フィールド内に現れたのは、毛皮のジャケットにスラックスを纏い、手にはライフルと自動拳銃を持った光一の通常召喚獣。
そして相手方は、着物にたすきを巻いて、なぎなたを持った召喚獣。

「明久、お前数学なんぼ取れた？」
「え？　えっと、１２０点位？」
「じゃああいつら任せたから、倒しといてくれ」
「うん、わかった。サモン！」

『２－Ｆ　吉井明久　数学１２１点』
ＶＳ
『２－Ｃ　小山友香　数学１６３点
２－Ｃ　江崎倶理子　数学１３１点
２－Ｃ　浅田真子　数学１４８点』

「久遠、アンタ舐めてるの！？」
「なんだ、今頃気づいたのか？」
「キィィィーっ！！　良いわ、観察処分者なら直接いたぶれるんだから！　恨むんならあんな奴の相棒になったあんたのバカさと、あたし達を怒らせた不運を恨むことね！！」

３人の召喚獣が一斉に明久の召喚獣にとびかかった。

一方、光一と小暮の方は……。

「どうやら口が上手の様ですね？」

「こんななりで狡猾でもなけりゃ、過激派筆頭なんて呼ばれてやしないさ」

光一の召喚獣が自動拳銃を発砲すると、難なく小暮の召喚獣の足を撃ち抜いた。

「っ、くっ。やはり、うまく行かない？」

「思わぬ幸運だな。オカルト召喚獣は等身大と違って、通常はデフォルメ。上手く行かなくて当たり前か」

「まだです！」

小暮の召喚獣が突進し、なぎなたを突き出すのをライフルで受け流し、そのライフルで小暮の召喚獣の腹を撃ち抜いた。

一旦距離をとり、ライフルを発砲して……

「爆発」

腕輪の能力を発動させ、発生した爆発で小暮の召喚獣は戦死。

一方の明久も、3対1を苦にする事なく撃破。

「流石、学年主任の高橋先生を破っただけはありますね」

「悪党になり下がってまで、過激派筆頭と呼ばれるまで駆け上がって来たんだ。これ位やれなくてどうする？

「成程、強い訳ですね……気に入りました。では、ご武運を」

そのまま小暮を始め、1部隊は鉄人の手で補習室に。

一先ずの危機回避に2人はハイタッチ。

「でもどうするの？　このままじゃじり貧だよ？」

「手がない訳じゃないさ。まあここは俺に……」

「見つけました、ブタ野郎ども！」

「清水さん、約束は守ってね？」

続いて現れたのは、Dクラス女子部隊。

率いるのは清水美春と……

「げっ！　確か優子の友人の玉野！？」

「？　知ってるの？」

「……あの生物災害（しみずみはる）の次位に顔を合わせたくない女だ」

改めて、率いるのは清水美春と玉野美紀。

「何だかわからないけど、どうする？」

「冗談じゃない、あんな暴走変態コンビなんか相手にできるか！」

「え？　まさか、清水さんと同類！？」

「ある意味な！」

光一が煙玉を取り出し、煙幕を張り逃走。

しかし……

「逃が死マセン！　狂コソハコロ死ナブリツブ死ネジリヒキサキキキキキキキ！！」

「だーもう！　明らかに自然災害（ハザード）がかわいく見えるよ！　この清水（バイオ）美春は！！」

右手の指に挟む様ににして持ったスタンガン（3本とも特注品）と、
左手のゴム弾の装填されたショットガン
これらを構え、文月の生物災害（バイオハザード）事、清水美春と対峙する光一。

一方では……。

「さあアキちゃん、ここで捕まって！」
「その前にアキちゃんはやめて！」
「今ならゴシックロリータ……ううん、メイド服にウエイトレスから巫女服に……何を選べばいいか迷っちゃう」
「……光一がいやがる理由がわかったよ」
「さあアキちゃん、お着替えの時間ですよ～」

明久が悪寒を感じつつ、手をワキワキさせながら歩み寄る玉野美紀から後ずさりをしていた。
彼らの悪夢が、はじまる。

第九十四問（前書き）

今回はバカテストはお休みです。

さて、今年最後の投稿にして、１００話目です。
ここまで続けられた事や、応援してくれた皆さま。

この場を借りて、感謝を申し上げます。

第九十四問

「ねっ、ねえ……どうする？」
「どうするって……私が聞きたいよ。それにしても、良くあんな人外と戦えるよね久遠君」
「……やっぱりヤダよ。設備は惜しいけど、根本君なんかの指示で人外とも戦える様な危なっかしい人と戦うだなんて」

「……いつもの事だが、なんか好き放題言われてるな」
「ギャジャアアアアア！！」
「と、よそ見してる場合じゃないか」

ショットガンで美春の攻撃をいなし、右手に指で挟むように持った3本のスタンガンを押し付ける。
そのあとショットガンを一発放ち、距離を取る。

「くぅふぅ～っ……くぅふぅ～っ……」

まるで何ともないと言わんばかりに、難なく立ち上がる清水美春
ちなみに光一のスタンガンは、3本とも対清水美春用に用意した光一の特注品で、ゴリラ（文月生息にあらず）も昏倒させるレベル。

「特注ですら効かないって……コイツ人間どころか地球上の生物かすら疑わしいだろ！？」
「殺死殺死殺死殺死殺死殺死殺死」
「……仕方ない、こうなりゃ奥の手だ」
「キシャアアアア！！！！」

奇声をあげながら飛びかかる清水美春

それに対し、光一は右手のスタンガンと左手のショットガンを構える。

「オネエサマ、イマコノモヤシブタヲキリキザミ、オネエサマノクモツトシマス！！」

「ったく……誰かを大切に思う事は立派だが、いき過ぎると最早害悪だな」

「ミハルノオモイヲブジョクシマシタネ！！？」

突き出された右手を回避し、そのまま清水だった物の後頭部に直接銃口を当て、ショットガンを撃つ。

ゴム弾の衝撃で顔面を地面に打ち付けるが、光一はそれに構わず最大出力でスタンガンを当ててからショットガンをおとし、別の銃を取り出す。

「効いてくれよ頼むから」

スタンガンを離したと同時に、取り出した麻酔銃を撃ちだす。

光一は急いでショットガンを拾い、距離をとって臨戦態勢をとった。

少しずつ距離を詰め麻酔が効いている事を確認し、（特注の）手錠とロープを取り出し手足を拘束。

それから（教育上よろしくない縛り方で）全身を縛ってから、その辺りに捨てておいた。

「……ふぅっ」

「あの……ひっ！」

光一は警戒態勢をまだ解くに至ってなかった為、声をかけて来た女子にショットガンを突き出した。

その怯えた様相を見て、光一はショットガンをしまう。

「あっ、悪かった。で、何だ？」

「しっ、清水さんに……何をやったんですか？」

「なあに、ただゾウに使う麻酔入りの麻酔銃を使っただけだ。この前ゴリラ用（文月生息にあらず）が効かなかったから用意したんだが……」

高かったんだよなと呟く光一を見て、どうやって用意したんだろうと2人は恐れつつも疑問に思う。

一方

『Fクラス　吉井明久　数学１０９点』

VS

『Dクラス　玉野美紀　数学１１１点』

「アキちゃん、大丈夫よ。私が捉えたらその処分の決定権は私にくれるって話だから」

「それって相手は根本君だよね？　それに処分って何さ！？」

「アキちゃんを私の物にして、これからたくさん可愛い服を一緒に……」

「お断りします！！」

明久の召喚獣が駆け出し、玉野の召喚獣がそれを迎え撃つ。

弓を引き絞り、狙いを定めるが……。

「遅いよ！」

放たれた矢は木刀で斬り払われ、距離を詰めると同時に木刀で滅多切り。
距離をとろうとする相手の脚を払い、そのまま……

「えっ！？」

トドメという所で、召喚獣が消え去った。
明久が疑問に思い玉野を見ると、その位置は召喚フィールドの外。
その隙を狙って、玉野が明久にとびかかった。

「なっ！？」
「ふふっ、ふふふっ……アキちゃんだ、アキちゃんだ……」
「たっ、玉野さん！？　やめて、どうして服を脱がせるの！？」

興奮を通り越した玉野は明久の服に手をかけ、脱がそうとしていた。
明久は必死に抵抗するも、その勢いに気押され普段の力が出せない。

「もう根本君との約束なんてどうでも良い、勝負もどうでも良い。このままアキちゃんを……」
「ちょっ、待って！　僕をどうするつもり！？」
「大丈夫、ちょっと服を脱いで貰うだけだから。アキちゃんの全てを……」

ブスリッ！　（麻酔銃が命中する音）
バタッ！　（玉野が倒れる音）

「大丈夫か明久？」
「うっ、うん。助かったよ、ありがとう光一……武器増やしたの、催涙ガスだけじゃなかったんだね？」

状況が光一をより一層過激派へと変えていく。
なんとなくだが、昔光一がいじめられてたと言う事が事実かもしれないと実感した明久だった。

「それにしても明久って、ごく一部を除くとつくづく変な女ばっかり群がってくるな……こりゃあの計画を急いだ方がいいか」
「群がるって、どういう事？　それと今何か計画とか言わなかった？」
「大丈夫。雄二じゃあるまいし、俺がお前の不利益をする訳ないだろ？」
「それもそうだね」

納得した明久は、ふとまだ敵がいる事を思い出し周囲を見回す。

「他の人たちは？」
「逃げた。まあDクラスの部隊の様だし、士気が低いのも当たり前だな」
「そっか……でもどうするの？　クーデターがダメだとすると、このままじゃ目的を探す事も難しいよ？　せめてムッツリーニでも居てくれればなあ……」

はぁっ、とため息をつく明久。

「……呼んだ？」
「っ！」

声がしたと同時に光一は距離を取り、ショットガンとスタンガンを流れる様な動作で取り出し、臨戦態勢に。
その声の主、ムッツリーニは待てと言うように手を突き出す。

「……勘違いするな。今回ばかりは光一の味方」
「？　どういう事だ？」
「……根本許すまじ！」

普段からは想像できない程怒りに震えており、彼の背後にメラメラと炎がたぎるのが見えた

「成程、根本のやりたい放題の余波が来たんだな。で、何があった？」

ムッツリ商会の経営中。
根本が女子の1人をひきつれ、ムッツリーニの前でその女子のスカートを強引にまくり上げた。
それで鼻血の海に沈んでる間に、売り上げと商品を全部強奪されたとのこと。

無論ムッツリ商会は学園の規則に反する営業の為、事の全てを公にも出来ない。

「酷い……その女子もそうだけど、ムッツリ商会が表ざたに出来ない事をいい事に！」
「成程な。それで俺達に協力する気になったと？」
「……（コク）」

「おおっ、無事じゃったか！」
「お待たせ！　ってあれ、ムッツリーニ君？」

そこへ役目を終えた秀吉と愛子が合流。
事の顛末を話し終えると……

「根本め、幾ら何でもやり過ぎじゃ！」
「全くだよ、公にできないのと立場をいい事にやりたい放題だなんて！」
2人も流石に激怒した。
「……だから、これ以上根本の暴挙を許す訳にはいかない」
「まあ工藤もこっちにいる訳だしな」
「……どうでも良い」
ぷいっとそっぽを向くムッツリーニ。
だが内心ではホッとしてるのを見逃す程、光一は甘くない。
「素直に……といつもなら言うが、今回は別だ。協力に感謝する」
「……今回ばかりは協力せざるを得ない」
「そんなに俺が工藤に興味持たれてるのが気に入らんなら、お前もデートに誘うとかしろよ」
「え？　何々？　ムッツリーニ君ボクをデートに誘ってくれるの？」
「……そんな事実はない」
悪ふざけは程ほどにして、光一が手を差し出すとムッツリーニも握手。
「ムッツリーニ君がこっち側についてくれたなら、色々と助かるね」
「そうだね。3年の代表が誰かも調べる事が出来るし、ＦＦＦ団側だから誰にも……」
「っ！」
光一が会話を遮ると、咄嗟にショットガンをドア狙って撃ち出した。

それと同時に駆け出してドアを開け放つも……

「ちっ、逃げられたか……」

「え？　じゃあ……」

「ああ。ムッツリーニどころか、秀吉と工藤もこっち側だとバレた……まずいな。もしクーデターを促されでもしたら、俺達にとっても困難になる」

「え？　待ってよ光一。根本君だって、学園規模のクーデターを抑えられるなんて」

「いや、工藤がこっち側にいる事を利用すれば十分可能だ。こりゃ急いだ方がいいな……ムッツリーニ、頼みたい事がある」

一方、Ａクラスにて。

「困るなあ霧島代表、クラスの管理はきっちりやって貰わないと」

「……元々が理不尽な要求。反対者が出るのも無理もない話」

「けっ！　勉強は出来ても代表としては無能なんだな。これしきの事を納得させられないとはよ」

「ちょっと根本君！」

「言ってるだろ？　大事なのは過程なんてくだらねえもんじゃねえ。つまり結果が出せなきゃ無能、そんな事も分からねえのか？」

ギリっと歯を食いしばる優子。

翔子も普段見せない怒りをたぎらせるように根本を睨みつけている。

「まあそんな事よりもだ。下位クラスが目論んでるクーデターの鎮圧で、誠意を見せて貰いたいもんだねえ」

「アンタのやりたい放題の尻拭いをやれって言うの！？」

「成功したらそうだな……工藤愛子を捕らえた際には、アンタ達に罰の決定権を与えてやろうか？」
「こ……の……」
「良い結果を期待してるぜ？　盟友さんがた」
Ａクラス中からの嫌悪の視線を気にもかけず、根本は立ち去って行った。

「まさか愛子の協力が仇になるなんて……どうするの代表？」
「……久遠は出来る限り従えと言っていた。雄二はどう思う？」
「出来れば鎖をはずしてほしいんだが、どうせ聞かないんだろうな？」
翔子の個室スペースから、リクライニングシートに鎖で雁字搦めにされてる雄二が運び出された。

「従う他ないだろう」
「けど鎮圧を成功させたりしたら、それこそ根本君を調子づかせるだけよ！？」
「それを光一も見逃す訳がない。それに学年規模となれば、確実に３年のＡクラスも出張る筈だ」
「その隙に３年の代表を見つけ出すって言うの！？」
「現状こうなっちまった以上は、そうするしかない筈だ。それで、光一達はどうなってるんだ？　ムッツリーニさえいれば話は別だろうが……」
「……そうときまれば。皆、試召戦争の準備に入る」

Ａクラスはしぶしぶと、試験召喚戦争の準備に。
それから優子は、自分の個室スペースに出向いて……。

「さて、話は聞いたわね？　２人とも終わるまでこのままココで大人しくしてて」
「だからどうしてですか！？　明久君達がピンチなら、助けに行かないと！」
「そうよ！　優子だって信用できないって久遠に言われたんでしょ！？　見返してやりたいと思わないの！？」

根本の手が及ばないうちにＡクラスへと連れて来た、瑞希と美波に事の顛末を告げた。

「アタシが光一に信用されてない事はもう良いわ。それよりも２人が根本君の口車に乗せられて吉井君の敵になるのを阻止した方が、よっぽど効率的だと思うから」
「待ってください！　それだと私達が、明久君の敵になるに違いないと言ってる様な物じゃないですか！」
「そうよ！　ウチ等はそんなことしないわよ！！」
「……光一が秀吉を吉井君とくっつけようとする理由、わかる気がするわ」

第九十四問（後書き）

では皆様、少し早いですが良いお年を

コラボ問題　第四問（2）　『バカと過激派と優等生？　のトリプルデート

あけましておめでとうございます。
去年はお世話になりました、今年も頑張ってより良い作品の為精進しますので、よろしくお願いします。

新年第一弾は、親善の意味も込めた“バカとテストと優等生？”とのコラボです。
前回と多少絡めてますので、前回を読んで頂ければ。
では、どうぞ

コラボ問題　第四問（2）　『バカと過激派と優等生？　のトリプルデート

文月学園、屋上。

「よっ」

「くっ……！」

伸縮型の警棒を振るう来牙と、両手にスタンガンを持つ光一
（正確には右手に警棒型スタンガン、左手に3本の携帯型スタンガンを挟むようにして持っている）

「どうした？　もうギブアップか？」

「冗談！」

その2人が今対峙し、警棒で打ちあっていた。
彼らは鍛錬として、同じ武器使い同士での打ち合いを日課としている。

「よーし、はったはった！」

「オッズは来牙君と久遠君で1：9だよ！」

その外野では、翔と愛子の仕切るFクラスによる賭けが行われていた。

「明久、お前もやっぱり光一か？」

「当然。武器を使えば光一に勝てる奴なんて居ないよ！」

「そうじゃの。来牙も強いが、武器を手にした光一に勝てる者など鉄人しか思いつかんのじゃ」

「……確実な勝利」

「来牙には悪いけど、武器と言えばやっぱり久遠よね」
「そうですね」

しかし来牙と光一では光一の方が強い為、オッズは偏る。

「いけー宮永！！」
「お前に昼飯代賭けてんだ！」
「久遠なんてぶっ殺せー！！」

……筈なのだが、ＦＦＦ団のメンバーはバカなので全員来牙に賭けていた。
なので賭けが成り立つのである。

「よーし久遠、勝てよ！　お前が勝てば俺様や愛子、吉井達の懐が肥やされるんだ！」
「久遠君がんばってー！　勝ったらたっぷり保健体育の実習やってあげるねー？」

ちなみに2人は冗談で言っただけなのだが、あっさりと了承された事で完全に胴元となっていた。

「宮永！　そんな奴ぶっ殺しちまえ！！」
「そのモヤシ野郎の脳天叩き割れ！！」
「いや、股間を狙って使えなくしろ！！」
「手ぬるいわ！　いっそ勝負が決まったと同時にぶち殺してくれる！！」

愛子の言葉を受けて、覆面を纏い始めるＦＦＦ団
距離を取って相手の出方をうかがっていた2人が、同時に嫌な顔をした。

「あいつら……」
「おい、どうするんだ？　あんな奴等の肥やしになりたくないんだが」
「じゃあ……やるか？」
互いに頷くと、武器を握る手に力を込めて……
「なっ！？」
「来牙、ＦＦＦ団狩りで勝負だ」
「良いぜ！」
２人はＦＦＦ団に突っ込んだ。
数分後。
「何人倒した？」
「俺が２８人で、来牙が１４人。俺の勝ちだ」
「１４人と言っても、大半がお前に注意言ってたから出来た様なものだな……さて」
２人は頷いて、翔と愛子の元へ。
２人はビクッと身体を震わせ、逃げようとするが……。
「まあ待て、何もしないぞ翔」
「そうそう。俺達はただ、明久達の勝ち金を引いた分を貰いに来ただけだ」
「え？　そっ、そんな！　俺様のカツ三昧の資金が！！」
「図々しいにもほどがあるわ！」

「翔、光一が優しいうちに出した方がいいぞ？　お前だって人外クラスに対抗できる光一相手に」
「ああわかったよ！　くそぅっ」
翔が断腸の思いだと言わんばかりに、賭け金入りの袋を光一に投げ渡した。

「すまねえ、俺様のカツ達……俺様の胃袋に納められなくて」
「やれやれ……」
光一はボストンバッグからある物を取り出し、翔の肩をちょいちょいと叩く。
振り向いた先に、一枚の光一手製のとんかつ。
「うおおおおっ！　カツカツカァーツ！！」
「うるさい黙れがっつくな。まずは待て！」
「カツカツカァーツ！」
バヂッ！
「ぐあっ！！」
「やらんとは言ってないだろ？　まずは待て、そんで座れ」
「おいコラ！　俺様は犬じゃ……わかったよ」
光一がカツを食べようとしたのを見て、しぶしぶ従う翔。
「よし、良くできました。んじゃ……」
「うおおおっ！　カツカ……うぅっ……いただきます」
「よろしい」

「……なんか、調教師みたいだね。久遠君」
「ああ。まさか翔を手懐けるとは……」

事が終わったと言わんばかりに、光一は明久達に出す金と自分と来牙で分け始める。

「いやあ、一時はどうなるかと思ったよ。」
「全くじゃ」
「やれやれ、これでＭＰ３プレイヤーに新譜入れられる」
「……新しい機材の資金」
「ねえ瑞希、今日帰りにケーキ食べていかない？」
「それは良いですね」

金を渡し終えると、光一は来牙に目配せ。
頷くのを確認すると、例の計画実行に

「おい明久、ちょっと待て。この前借りたゲームでつまった処があってな」
「秀吉、この前見たいって言ってた劇団のチケットで話がある。工藤も欲しがってたＣＤ手に入ったから」
「え？　どこで？」
「おおっ、あれか。待ちわびたぞい」
「あっ、そうなの？　ありがと久遠君」

皆が帰って行く中で、光一と来牙は明久と秀吉、愛子を呼び止めた。
そして皆が帰り、静まった屋上。

「……誰も残ってないな」
「ああ、盗聴器も全部無効化しといた」
「？　ねえ光一に来牙、何でゲームやチケットやＣＤの話でそこま

で警戒するの？」
「そんなもんウソにきまってるだろ。俺の計画してる俺と工藤、来牙と絵梨、明久と秀吉のトリプルデートを妨害されない為の処置だ」
明久と秀吉は耳を疑ったが、愛子はパァッと笑顔を浮かべる。
「え？　久遠君ボクをデートに誘ってくれるの？」
「トリプルでだけど良いか？」
「うん、大歓迎」
愛子が光一に抱き付いて、その勢いに耐えられず背中から倒れた。
「△？　@＊＆％＄＃￥？（え？　一体どういう事？）」
「光一、お前はもっと体鍛えろ。そして明久、ココは地球だ」
「その前に何故ワシが明久とデートする事に誰ひとり突っ込まんのじゃ？」
それから数分後。
「という訳で、絵梨と来牙がデートする事になった訳だが」
「折角だからと光一の提案で、トリプルデートをする事にしたんだ。無論絵梨も賛同だ」
「へぇっ。でもなんだか面白そうだね」
愛子はノリノリだったが、明久と秀吉だけは複雑な顔だった。
「でもどうして僕と秀吉？」
「なんだ、嫌なのか明久？」
「それは僕じゃなくて、秀吉に聞く事だよ。秀吉みたいな美少女が

僕みたいなのとデートだなんて……」
「色々と突っ込みたい所はあるのじゃが、ワシも聞きたい」
来牙と絵梨のデートはいつもの事で、光一と愛子もデートの1つや2つはしてもおかしくはない。
それに何故自分達も一緒に、と思う2人。
「答えは簡単、明久にそういう相手を作ってあの2人を黙らせる為だ」
「あの2人って、瑞希ちゃんと美波ちゃん？」
「そう！　あのバカ共の所為で、俺が明久に秀吉の二股と言うろくでもない噂が加速してんだよ！」
光一は過激派筆頭と呼ばれており、学園内ではすこぶる評判が悪い。
本人は気にもかけてない上に自覚してる為、それらについてはどうでも良いと思っている。
……が、同性愛関連でとある2名に明久を擁護する事を勘違いされて騒がれたり、とある生物災害（しみずみはる）につけ狙われたり、とある学年次席に目の敵にされたり。
以上、何かと理不尽な災難が降りかかる事が多い為、同性愛が大嫌い。
（ただし明久と秀吉に関しては、第3の性別“秀吉”だから問題ないと無理やり納得してます）
「あー……確かに瑞希ちゃんも美波ちゃんも、思いこみが激し過ぎる所あるからね」
「どうして2人とも僕と光一をそっち系にしたがるんだろ？」
「おまけにあんな人外につけ狙われる原因でもある訳だから、わからんでもないな」

「この学園は何故かそういうおかしな話ばかりが蔓延するからのう。じゃがそれで何故ワシなのじゃ？」
「明久の身近で、唯一危害を加えないから」
来牙がうんうんと頷く。
性別はどうとかいう話は、この場では出ていない。

「まあ無理やりと言う気はない。秀吉が嫌だったら、この話は葉月ちゃんにでも持っていくつもりだ」
「おい待て光一、小学生は犯罪だろ！」
「先行予約と思えば良い。それに来牙にだけは言われたくない」
光一は以前来牙と絵梨のシークレットシーンを偶然見てしまった事があった。
無論光一は来牙を明久や秀吉と同じで、友達だと思ってる為秘密を守る約束をしている。

「？　どういう事？」
「いや、こっちの話……それよりだ秀吉、お前が望むなら俺はどんな手を使ってでも成就させるつもりだ。資金は霧島との取引で充実してるし、ＦＦＦ団のバカ共や姫路に島田は俺が駆逐する」
「……そこまでやるか？」
「やるんなら徹底的にやるんだよ。そもそも明久と融合召喚した日にゃあいつらが散々喚き散らしやがったせいで、俺が余所でどういう目で見られどういう嫌な噂を立てられたか……」
「まあ落ち着け。気持ちは痛いほど伝わったから」

多少壊れ始めてる光一を宥め始める来牙。
融合召喚が原因でそういう系の騒ぎが絶えなかった時期があった為、同情の意は持っていた。

何より光一には、絵梨とのデート関連での借りもある。

「……すまんな。で、どうするんだ？」

「あっ、あのさ秀吉、無理はしなくていいよ？　秀吉だって、僕とデートなんて……」

「うむっ、わかったぞい」

「そっか。そうだよね、秀吉は……ゑ？」

鳩が豆鉄砲を喰らった。

それを体現する様な顔で、秀吉を見る明久。

「むっ、何じゃその顔は？　もしや嫌なのかの？」

「〇、◆＆$@＋：＊！（約：そ、そうじゃなくて！）

「明久、ココは地球だ。それじゃ成立だな、来牙」

「そうだな。まあ明久もそういう相手が出来ればそれなりに態度も改まるだろうし、俺としても文句なしだ」

「なんだか今から楽しみだね」

その日の夕方。

「へえっ、じゃあトリプルデートは成立したんだ？」

「ああ。光一も骨を折った甲斐があったって喜んでたぞ」

「そうなんだ。まあ久遠君と工藤さんは以前から一緒にデートはしてたけど、吉井君は木下君と付き合ったら少しはバカな行動を改めてくれるかな？」

「どうだかな……それよりも絵梨、よそでは気をつけろよ？」

「あっ、そうだね。姫路さんに島田さんもそうだけど、あのＦＦＦ団に邪魔されるの嫌だから気をつけるよ。久遠君にはいつも来牙君とのデートで世話になってるし、迷惑掛けたくないからね」

人気のない道を歩く2人。

「……久遠光一、吉井明久、宮永来牙の計三名が異端者であることを確認。目標日時を確認後、再度連絡する。異端者に死を」

しかしその2人は、破滅の音に気付かない。

コラボ問題　第四問（3）　『バカと過激派と優等生？　のトリプルデート（中

ちょっと長くなりそうなので、前中後編にしました
ちゃんと本編も書いてますので、お待ちの方はすみません。

コラボ問題　第四問（3）　『バカと過激派と優等生？　のトリプルデート（中

時は過ぎ、いよいよ光一の企画実行。

「今日は晴れてよかったね」
「うむっ、絶好の行楽日和じゃ」

トリプルデート如月グランドパークへと向かう6人。
現在は電車の中。

「楽しみだね、来牙君」
「そうだな。しかし油断は禁物だ」
「大丈夫じゃないかな？　ボク達、あの人たちに感づかれる事なんてしてないでしょ？」
「いーや、ムッツリーニが向こう側だからな。油断はできん」

明らかに狙われる物の会話だが、彼らはデートに向かってるのである。
ふと来牙が、光一の持って来てる愛用のボストンバッグに目を向ける。

「それ、また持って来てるのか？」
「攻撃態勢のＦＦＦ団相手じゃ、手持ちだけだと火力不足何でな。あんま大がかりな武器が使えないから、限定はされてるが」
「……学園では使うのにな」
「あの学園は明らかに治外法権だろ？　ＦＦＦ団の活動やら姫路や島田、霧島の拷問が黙認されてる辺り」

（注：これは作者の個人的な解釈であり、実際とは一切関係ありま

せん）

「それを言われると否定はできんな」
「だろ？　……っ！　ちっ、きやがったか」
「えっ！？」

明久と来牙、絵梨が周囲を見回す。
しかし中はがらんとしており、外は現在停車しようとしている駅。

「？　どこ？」
「外だ。俺達の乗ってるこの車両とは別の車両が底流する地点に、Ｆクラスの奴が４人小隊ほど見えた」
「外！？　お前、良く見えたな？」
「俺の動体視力を甘く見るな」

光一は身体能力が常人に比べると格段に劣るが、動体視力や空間認識能力などの感覚に優れている。
その動体視力が、妨害者の姿を捉えたのである。

「じゃあ、どこかで漏れてたの！？」
「だろうな。仕方ない」

光一は駅に停車すると、乗客が全員乗り込んだのを確認してから皆に駅に降りる様に促す。
そして電車が発車し、動き出した電車内に自分達の姿を見て驚く妨害者小隊に手を振った。

「さて、別ルートで行くぞ。えーっとバスは」
「……用意周到だな？」
「当たり前だ。この案件は俺の手掛けた、無二の相棒である明久と

可愛い妹分の秀吉の、幸せな人生設計プランの成否、そして俺の二股同性愛疑惑払拭が懸ってるんだからな。誰にも邪魔させんぞ、どんな手を使ってでも……ふふっ、ふはははははは！」

「えっと、落ち着こうね光一？　どうどう」

「大丈夫じゃ、ワシ等は光一を信じておるし、感謝しておるからの」

壊れた様に笑う光一を、恐る恐る明久と秀吉が宥める。

周りはそれを奇妙な物を見る目で見ていた。

「……久遠君は趣味以外まともだと思ってたのに」

「わかってやれ絵梨。あの2人と“融合召喚の腕輪”の所為で、多少はああなってもおかしくない程の目にあわされ続けたんだろう」

「いや、あれもうサイコの領域じゃない？　……そういう事なら、一緒に久遠君と楽しまないと」

その様子を見て若干引き気味の絵梨だったが、来牙の説得で納得する。

愛子もツッコミを入れる内心、今日は有意義にしようと意気込む

「おい光一、壊れてないでどうするか説明してくれ」

「あっ、すまんな。えーっと……」

時は過ぎ、現在如月グランドパーク前。

「なんとか無事に来れたね」

「流石に電車以外は頭が回らなかったんだろうな」

一応電車以外の交通ルートも把握していたが、無駄になったと光一はぼやく。

だが、目の前の楽しみの前に、そんな事はさっさと消え去った。

「さて、ようやくトリプルデートの始まり……っ！」

光一がポケットに手を入れ、ベアリングを取り出すと来牙の後ろに向けて指弾を撃ちだす。

絵梨が光一に対して攻撃姿勢を取ると同時に、鉄パイプを手に来牙を狙っていた武藤が目を抑えのた打ち回るのが目に入った。

「これ、確かＦＦＦ団の一員だよね？」

「ああ。丁度良い、自白剤で向こうの戦力を吐かせよう」

「何でそんなもん持ってるんだよお前は！？」

「霧島に頼まれてな。一応実験台が欲しかったんだよね♪」

光一は楽しそうに口に薬を放り込み、明久に頭の上下を持って揺さぶらせる。

ごくんと音がしたのを聞き取り、尋問し始めた。

「……流石は過激派筆頭だな」

「どうでも良いよ、ＦＦＦ団相手なら」

「絵梨ちゃんもすっかり順応してるね」

「全くじゃ」

メモを取り終えた２人が、武藤の手足縛ってゴミ箱にすててから４人のもとへ。

ふと４人は明久の顔に血の気がない事を疑問に思った

「案の定ＦＦＦ団全員。それと雄二と姫路に島田、あと優子も協力してるとよ」

「Ｆクラス全員集合……ん？　すまん、最後の処なんつった？」

「優子だ、木下優子。俺の幼馴染で秀吉の姉」

（注：こちらでの優子です。向こうの優子では光一とは嫌い合う関係以外の何物にもなりそうにないので）

「優子まで！？　……瑞希ちゃんと美波ちゃんに、無理やり参加させられたのかな？」

「あの２人、恋愛をなんだと思ってるんだろ？」

あの２人と違って、こういう事を力任せにしない事を知ってる愛子は、そう結論付けた。

絵梨もそれに賛同し、同情の意を隠せずにいた。

「何言ってるかはわからんが、その姫路に島田に至っては明久の名前を呟きながら釘バットを作ってたらしい」

光一は頭にいくつも青筋を浮かべながら、呆れたように溜息をついた。

それで明久の顔に血の気がないのか、と４人は納得した。

そして、秀吉に向けて３人が……

「木下君、吉井君との事頑張ってね？　久遠君があそこまで壊れたサイコさんになるの、わかる気がするから」

「……そうだな。俺も今回ばかりはそう思わざるをえない」

「うん、ボクもその方がよさそうな気がしてきた」

秀吉に向けて、エールを送った。

「……何故皆はワシが男じゃと言う事を無視するのじゃ？」

「だって木下君って、時々吉井君にそれっぽい態度取る事多いもん。

久遠君だって木下君の気持ちを理解してるからこそ、あそこまで壊れてるとは言え無理やりはしないんだと思うよ？」

「う～む……」

嬉しくもありちょっとだけ複雑な秀吉だった。

ちなみにその複雑な気持ちは、壊れつつも強制はしなかった兄貴分に対する感謝で大半無くなっていた。

「さて、話は終わりだ。行くぞ」

「「「そうだ、地獄へ行くがいい！」」」

突如現れたのは、Ｆクラス男子２０人。

その姿は異端審問会の覆面ではなく、それぞれ私服である。

「なんだ、珍しいな？　お前らがあの怪しげな覆面かぶらずやってくるなんて」

「怪しげとは失礼な！」

「あれをかぶると何故か警備員が警察を呼ぼうとするから、仕方なく脱いだんだ！」

「そうだ！　神聖なるＦＦＦ団の正装なのに！！」

「それよりもだ！　吉井明久、久遠光一、宮永来牙！　今日と言う今日は貴様らの蛮行、断じて許さん！！」

それぞれが木刀、鉄パイプ、スタンガンを構え、総攻撃態勢を取り始めた。

絵梨が拳を握りしめ構えるのを、光一が遮り前に出てボストンバッグを探り始める。

「まあ待て絵梨、時間のロスは少なめに。そして労力は効率を考え最小でな？」

「大丈夫だよ久遠君、こんな奴等数分で……」
「分？　それじゃあダメだ。やるんなら……」

光一はボストンバッグからスプレー缶の様な物を数本取り出し、ＦＦ団に放り投げた。

「なんだ、催涙ガスか？」
「ふんっ、そんな使い古された……っ！　秀吉の写真が貼られてるぞ！！」
「「「うおおおおっ！　俺んだ俺んだ！！」」」

それに全員が群がると同時に、それが破裂し全員が中身で水浸しに。

「なっ、何だこりゃ水？」
「なんか、しょっぱいぞ？　塩水？」

ポイっ！　（スタンガンが放られる音）
バヂバヂッ！！　（スタンガンが着弾する音）

「「「ギャアアアアっ！！」」」

「秒で片さないと」

全員が倒れたのを確認すると、光一はスタンガンの電源を落としひろう。
それから携帯を取り出し、どこかにメールを送り始めると……。

「さて、行くぞ」

つかつかと何事もなくその場を去り、６人分のフリーパスを購入し

た。

「……あたし、久遠君を敵にしたくないな」

絵梨のつぶやきは、全員が納得していた。

一方、その頃。

「ちっ……坂本、どうやら前線部隊は久遠にやられた様だ。しかも武藤に自白剤を使って、こちらの戦力も把握したらしい」

「流石は光一、一筋縄ではいかないな」

「……だからこそ、その首は我ら異端審問会のシンボルに相応しい」

「久遠君、私達に何の許可もなしにこんな事を企てるだなんて……許せません！」

「そうね瑞希。二度とこんな事を企まない様、乙女心を傷つけた罪をアキと久遠に思い知らせないと！」

トリプルデートの妨害者は、それぞれの思惑を胸に次の手を考えていた。

そして……

「許せん……許せんぞ来牙、よもやワシ等の宿敵久遠光一と共謀し、絵梨をワシから奪おうなどとは！　どうせこの後（ピーっ！）で（ピーッ！）な事をするつもりじゃろうが、そうはいかんのじゃ！！」

「シカシ、クオンコウイチにヨモヤステディがいるとはオドロキＤＡ」

「コレをうまく利用し、奴を倒せば拙者達グレートレンジャーの汚名挽回も夢ではないでござる」

「ああ。そしてあの子たちは俺達の強さにメロメロって寸法だ。まさに一酸化炭素！」

外部協力者のグレートレンジャー達も、ターゲットへの殺意を胸に今か今かと気をうかがっていた。

そして、忘れてはいけないのが……

「優子ちゃん、がんばりましょう！」

「そうよ優子。ウチ等に無断でこんな事を企んだ久遠に、目にものを見せてやりましょ！」

「あのさ2人とも、そういう事をするから光一が2人を嫌がるんじゃ……」

「美波ちゃん、明久君と久遠君へのお仕置き道具の準備はよろしいですか？」

「ええ、大丈夫よ。さあアキ、覚悟しなさい」

「ちょっ、待って2人とも!?　釘バットを持ってる時点でお仕置きじゃなくて抹殺じゃない！　大体そんな物で吉井君と光一をどうする気なの!?」

「大丈夫ですよ、優子ちゃんの分も用意してあります」

「お願いだから話を聞いてー！！」

コラボ問題　第四問（４）　『バカと過激派と優等生？のトリプルデート　（後

「さて、何する？」

ＦＦＦ団前線部隊撃破。

始まりから幸先の良い（？）スタートのトリプルデートは、ようやく本当の意味で始まった。

「襲撃のない安全な物が良いかな？　ホラ、折角のデートなんだから」

「もうっ！　いつもいつも、迷惑ったらありゃしない！」

「何故こうも面倒事ばかりがワシ等のまわりには起こるのじゃろうか……？」

折角だから楽しく遊びたい愛子と、毎度毎度来牙とのデートを邪魔しに来るＦＦＦ団に怒りを覚える絵梨。

そして良識人に分類される秀吉も、こう何度も起こる騒動に呆れの一言。

「ふっふっふ、俺の手掛けた計画と誤解払拭の邪魔しようたあいい度胸だ。見てろよ、後悔なんてさせる事すらもったいない。こうなればあんな手やこんな手いや、そんな手なんてのも……ふふっ、ふはははははははは！！」

「おい光一、こんな所で壊れるな。周りの視線が痛い！」

「落ち着いて光一、ほら、どうどう」

その傍らで、再度壊れる光一を宥める来牙と明久。

訂正、あまり幸先がよくないスタートだった。

数分後。

「さて、行くか」

光一が地図とフリーパスを手に、まず何にするかを検討し始める。
皆で楽しめて、尚且つデートらしく。
というコンセプトの元で、色々と検討。

「早速だけど、お化けやしき行くか？」
「あっ、なんかデートっぽいね」
「来牙君に思いっきり抱き付けそう」

女子2人は乗り気だった。

「おい光一、暗闇は絶好の暗殺スポットだぞ？」
「そうだよ。向こうにはムッツリーニが……」
「大丈夫。俺がなんの策もなく、こんなことすると思うか？」

幾度となく、神童雄二の策略をはねのけて来た光一の言葉に、2人は頷いた。
そして一行はお化け屋敷に。

「でも久遠君も、モヤシにしては太っ腹だね。あたし達6人分のデート費用全部受け持つなんて」
「今回も取引が成功して大儲けしたからな。今回は特注品の手錠で、なんでも……」
「いや、もう良い。その先を言うな」

面倒が待ってる気がしたので、話を遮った来牙。

それと同時に今が雄二の犠牲の上に成り立っていると知り、あまり喜べなくなった。

「久遠君は、坂本君を気の毒に思わないの？
「以前アイツの処遇を気の毒に思って、その改善を相談した直後に脱走しやがったからな」
「……自業自得が多少混ざってるんだな」
「そもそも雄二が勝手に約束して勝手に負けたんだから、同情の余地自体ありゃしねえよ。俺にしてみれば効果ない雄二の援護なんかより、利益のある霧島との取引の方がやりがいがある。それだけだ」

その武器によりＦＦＦ団との抗争で助けられた事もあり、複雑な顔をする来牙。

「そんな事より、早速きたみたいだぞ？」

光一が指をさした先には、４人の武装した男子。
そして……。

「あっ、お父さんにグレートレンジャーの人たち！」

その指揮を取っていたのは、何故かグレートレンジャーだった。

「おおっ、絵梨よ。無事じゃったか……来牙よ、よもやワシ等の宿敵久遠光一と結託し、嫌がる絵梨を連れ出し無理やりデートとは笑止千万！」
「別にいやがってる素振りないし、最後は言語道断だろ！　それに俺はあんた達の宿敵になった覚えはない！」
「ふんっ、言い訳とはまだまだ赤い証拠だぜ。さて久遠光一、ココであったが千年目！」

「赤じゃなくて青、それと千じゃなくて百年目だ」
「拙者達グレートレンジャー、前回は不覚を取りあと一歩のところで貴様に敗北したでござるが……」
「勝手にボケたふりして逃げたんだろうが」
「フンッ！　イマのウチニイノレ。ココがキサマのサカバニなるのDA！」
「……なんか面倒になってきた」
「オレだけゾンザイにアツカウナ！！」

律儀に1人ずつツッコミを入れていた光一だったが、最後のマッハ吉田でツッコミに疲れた。
そこで来牙と絵梨が、光一の肩をぽんと叩く。

「すまんな、認めたくないが身うちが迷惑をかけて」
「宮永家一同。心からお詫びと同情するよ」
「そう言って貰えて何よりだ。でも折角だからこの前買った“出所不明な”薬のモルモットに……あれ？」

FFF団のメンバーおよび、グレートレンジャーはその場から姿を消していた。
ふぅっ、と一息ついて一言。

「さて、行くか」
「おい、今の出所不明って……」
「ウソにきまってんだろ。大体あんな連中に薬使うなんて、そんな勿体ない事誰がするか」
「……久遠君が言うと、冗談に聞こえないよ」
「絵梨、ハッタリも立派な武器だ」

光一の口の上手さの根源が見えた5人だった。

所変わって、お化け屋敷。

「そうだ。折角だから、ちょっと賭けをしないか？」
「賭け？」

光一の提案に、全員が首を傾げる。

「そう。手を繋いで入って、最後まで手を離さなかったら景品ってね」
「あっ、面白そう。やろうよ来牙君」
「いや、そもそもそれ、決着がつかないんじゃないか？」

来牙の言う事も最もで、驚きで手を離す様な人間はこの場にはいない。

「だから面白いんだろ？」
（それに連中が何か仕掛けてくる可能性が高いし、早めにつぶして楽しみたい）

様は作戦なのだと納得して、６人一緒にお化け屋敷に、そして……

「さて、行ったわね……早く先行組と合流するわよ瑞希、優子」
「はい、行きましょう優子ちゃん」
「……もう嫌」

廃病院を改装したお化け屋敷の中で、足音が響き渡る。

その中で光一は愛子、来牙は絵梨、明久は秀吉と手を繋ぎ、中を歩く。

「結構雰囲気あるな」
「あのオカルト仕様の話を聞いて、試験召喚システムの導入を検討してるらしいぞ？」
「前に雄二がココであった事を思い出すなあ。面白くて」

光一、来牙、明久の順で、それぞれの感想を言い合う。

「役得役得」
「久遠君には感謝しないと。こうして来牙君と手をつなげるんだもん」
「ワシは男なのじゃが……まあ良い、こういう相伴も悪くないかの」

嬉しそうに言う愛子と絵梨に、少々顔がほころんでいる秀吉。
大体を進んだ所で、コツコツと自分達とは別の足音が響く。

「おっ、来たか」

「憎い……憎いぞぉ……彼女連れで……難い！」
「……貴様らも……我らと、共になれ」

全身に包帯を巻き、患者が着る服を纏い木刀を構えた男と、両手にメスを持ったゾンビ医者。
しかしその声には、全員が聞きおぼえがあった。

「……あれって、須川君とムッツリーニだよね？」
「吉井君でもわかるって事は、その須川君にムッツリーニ君で間違いないね」

「賭けはいったん中止。俺がムッツリーニをやるから、来牙は須川をやれ。」
「わかった」
ドドドドドッ！
「ん？」
「「う～ら～め～し～や～～！！」」
手術着を纏い、手に釘バットを持った2人が一斉に後ろの通路から突進して来た。
それも明久めがけて。
「えっ、ええ！？　今度は誰！？」
「こんな場所で女の子と手を繋ぐだなんて、これは酷い病気ね！そんな悪い病気にかかってるアキは今すぐ手術しないと！」
「さあ明久君、今すぐ手術しましょうね～！」
「何やってんだ姫路に島田？」
光一の指摘に、釘バットを2人はピタリと動きを止めた。
「なっ、何の事？　このアトラクションはお化け屋敷なんだから」
「そっそうです。これは脅かす為のアトラクションです！」
「ココに入ってから明久の名前を誰も言ってないし、脅かす為のアトラクションで何で個人を特定する？　ついでに言うと、俺の知ってる限り明久を君づけやアキと呼ぶ人間は、それぞれ1人しかいない！」
ドラマで探偵が犯人を特定するかのように、バンっと効果音が出る

様に指差す光一。
２人は動揺し一歩下がるが……

「ばれたなら仕方ないわ。さあアキに久遠、今すぐデートをやめて頭をこれでカチ割られるか、これで頭をカチ割られてデートが中止になるか、どっちがいいかを選びなさい！」
「待て、せめて生き残る可能性を提示しろ！　それに今俺も含めなかったか！？」
「当然です！　私達に許可もなくこんな事を企てた久遠君には、お仕置きが必要です！」
「待って姫路さん！　僕の幸せを願うだけで抹殺対象って、僕一体どれだけ嫌われてるの！！？」

開き直って、当初の目的を果たすべく釘バットを構えた。
光一も自身がターゲットに含まれた事に顔をゆがめ、明久は誤解を加速させた。

「……久遠が愛想尽かすのも無理ないな」
「……そうだね。あたしも木下君と吉井君を応援したくなってきた」
「……最早何も言わんぞい。いいや、言いたくないのじゃ」
「……だよね。ボクが木下君でもそうなるよ」

４人はその様子を見て、襲撃者に呆れの視線を送りおき、明久と光一に同情の意を示した。
特に光一が推奨してる相手である秀吉は、あの２人よりもふさわしいなと思わざるを得なかった。

「とにかく、勝手に木下とデートをしたアキとそれを企てた久遠にはおしおきよ！」
「おしおきという表現がまるで似合わん装備で普通に宣言するな！」

「さあ明久君、悪い事をしたら罰を受けなきゃいけないんですよ」
「……やっぱり話聞かないんだな」
「どっ、どうする光一？」
「来牙、絵梨、そこの2人を頼む。こいつら引導を渡さにゃわからんらしい」

光一が2人の前に立ち、来牙と絵梨に指示を
それに従い絵梨がムッツリーニに、来牙が須川と対峙。

「さあ優子、久遠にお仕置きよ！」
「一緒に頑張りましょう！」
「くっ！」

光一は優子の名を聞くなり一歩下がり、左手を懐に入れ、右手をボストンバッグの中へ。
……が。

「……あれ？」

一向に誰かが現れる気配はない。

「あれ？　優子？　どこなの？」
「優子ちゃん？　あの、どこですか？　もしかして迷子？」

その頃、優子は

「はい、チーズ」

パシャっ！

「ありがとう、フィーちゃん」
「いいえー、キツネのフィーをこれからもよろしくねー」
「はーい。ふぅっ……やっぱり遊園地に来たんなら遊ばないと。あんなバカな事に付き合いきれないわ」
1人抜け出し、グランドパークのアトラクションを満喫していた。

そして、場所は戻る。

「……どうやら優子はいないみたいだな」
「じゃあ良いわ！　優子の分もウチ等が……」

ビシッ！

「きゃっ！」
「ひゃっ！」

光一が居合抜きの様にボストンバッグから素早く何かを取り出し、それが2人の釘バットを弾き絡め取る。
それが急な事で驚き力を緩め、2人の手から解放された釘バットは光一の持つムチにからめ捕られ、光一の足元に転がった。

「今のうちに退いとく事を進めるぞ？　俺はまだこの武器扱いなれてないんだ」
「アンタ女の子になんて事するのよ！？」
「やれやれ……あのな島田、俺の一番の武器は銃でも姦計に長けてる事でもない。俺のオカルト召喚獣は死神、つまり俺の本質であり最高の武器は“残虐”である事だ」

懐に入れてた手が麻酔銃を取り出し、2人に撃ちだした。
ちなみに麻酔は意識だけ残し、身体を動かす事やしゃべる事は出来なくする物を使用。

「と言う訳で、相応の罰を受けて貰う」
「罰？」
「そう、罰だ」

光一はロープを取り出し、2人を（教育に悪い縛り方で）縛り始めた。

「……！　（ブシャアアアアッ！）」
「ふぉおおおおおおおおっ！！」

それを見たムッツリーニは鼻血を吹きだし倒れ、須川も発狂したかのように声をあげる。
その隙をついて絵梨がムッツリーニに、来牙が須川に一撃を食らわし、勝負は終わった。

「来牙君、絶対見ちゃダメだからね！」
「え？　なんだ？　一体何があったんだ？」
「明久よ、お主も見るでない！」
「何？　一体光一はなにをしたの！？」

それから間もなく、明久を秀吉が、来牙を絵梨が目隠しし始めた。

「久遠君何でそんな縛り方ができるの？」
「もしかして久遠君って、そういう趣味があるの？　……ボクに出来るかなあ？」

絵梨は光一に嫌悪感を示し、愛子も流石に引き気味だった。

「違う！　この縛り方はアンチ久遠派の女連中対策だ。あの連中しつこいったらありゃしねえから」

「……ある意味納得できるのがすごいね。確かにこんな事されたら二度と来たくなくなるけど」

「でも、また変なうわさが広がるよ？」

「同性愛じゃなかったら何でも良い。今更悪党だの過激派だの散々言われまくってるんだから、この程度かゆくもないな！　さて……」

ちらりと須川の方をみて、懐から自白剤と携帯を取り出す。

そして……

所変わって

「須川会長とムッツリーニ達からの連絡が途絶えた」

「ちっ……流石に来牙や絵梨までいると、手札が弱いな。姫路と島田は？」

「それが……」

「そうか」

須川に変わり、雄二が全員の前に堂々と立つ。

「良いか、徒党を組んでいる以上、光一や来牙は諦めざるを得ない！　だが明久は秀吉とデートをしている、コレが許されて良い事か！？」

「「「否！　否！！　否ぁぁぁぁあああっ！！！」」」

「そうだ、アイツの幸せは許されて良い事ではない！！　そのため

にも、俺達はこれより明久に狙いを定めての総攻撃を……」
「……雄二」
「げっ！　翔子!?　何でここに!!?」

雄二の問いに答える事もなく、翔子は雄二に抱き付いた。
それに戸惑う雄二と、その周りでターゲットが変更され始める面々。

「まっ、待て！　何の真似だ!?」
「……優しい人が、雄二がココで私との想い出に浸っていたと教えてくれた」
「なっ！　まっ、まさか光一か!?」

ガチャリッ！

「ん?　なあっ!?　いつの間に手錠が!!?」
「行こう雄二、想い出は一緒に浸る物」

「「「坂本を殺せえええええ!!!」」」

パタンと携帯が閉じられた。

「よし、駆除完了」
「久遠君何したの?」
「ちょっと呪文を使っただけだ。さてと、それじゃ遊ぶか」

その3組のカップルは、その日を有意義に過ごしたとさ。
めでたしめでたし。

その次の日のムッツリ商会では、ある2種類の写真が高値で売られていたが即座に完売したという。

コラボ問題　第四問（４）　『バカと過激派と優等生？のトリプルデート　（後

一先ずここまで。
来牙君や絵梨さんにはご満足いただけましたかな？

さて、そろそろ本編更新します。
一体どういう展開にするかとか、どういう事になるかとか。
ある意味難しいので、色々と考えないと。

第九十五問

問題　原子記号Ｃの元素を答えなさい

姫路瑞希の答え
『炭素』

教師のコメント
正解です、姫路さんには簡単すぎましたね

久遠光一の答え
『カーボン』

教師のコメント
英語読みではありますが、正解には違いありませんね。

吉井明久の答え
『ダイヤモンド』

教師のコメント
確かにダイヤモンドは炭素で構成されていますので、部分点位はあげましょう。

土屋康太の答え
『霧島翔子』

教師のコメント
何故霧島さんなのかは、答案が血まみれである事と何か関係があるのでしょうか？

根本側による、光一の戦力情報の発覚。
それはクーデター勢力の一掃をＡクラスに強いる事に利用された。

「じゃあ、Ｄクラスがクーデターの中心なんだな？」
「うん。あそこはただ清水さんが暴走してるだけだから、根本君のやりたい放題に一番腹を立ててた」
「ワシの方もじゃ。中心人物も平賀で間違いないぞい」

現在４人は移動中。
秀吉が英語Ｗのフィールドを展開しつつ、周りを警戒しながらの移動。

明久がちらりと自身の召喚獣が運んでいる、（教育に悪い方法で）縛られてる美春に目を向ける。

「……何でこんな縛り方なの？」
「あのさ久遠君、幾らボクでもこういうのは遠慮したいかなー？」

「違う！　あの小指に中指どもがしつこいからいやが……もとい、予防策として覚えたんだ！」
「声が大きいぞい。しかしお主も気苦労が絶えんの」
流石の工藤も、こういうのには対応できないらしい。
明久もその扇情的な光景にドキドキすると言うより、いつ清水が起き上るかもしれないとびくびくしていた。
流石に見られたら“明久が”とんでもない事になる為、光一は縛り直すことにした。
「それより大丈夫？　清水さんが起きたりしたら……」
「どうだろうな？　ゾウに使う麻酔を打ったからしばらく目を覚まさない……と信じたいし、清水を縛ってるロープは炭素繊維だから引き千切れやしない……筈」
「偉く弱気じゃのう？　まああの清水では無理もないが」
光一の手にはゴムスタン弾入りの拳銃と、特注のスタンガンが装備されていた。
「今はそれより情報整理だ。クーデターの中心がDクラスって事は当然根本も知ってるだろうし、この後考えられるのは1つだけだ」
「え？　それって……」
「んー……もしおまえが今の根本だとしたら、クーデターに対してどうする？」
そこで明久は考える、。
自分が根本の立場だったら、自分達に敵対する下位勢力をどうするか……

「そうだね……自分達が上のクラスだから、攻撃を仕掛けるかな？」
「半分正解。だが俺達に工藤が付いている事が知られたのはわかるな？　そして今Ａクラスは力尽くとは言え、根本達と同盟関係にある」
「……そっか。協定違反って事で、Ａクラスに文句を言うよね」
「文句では済まされぬのじゃ。もしや根本は、ＡクラスにＤクラスを粛清させようとしておるのか？」
「そっ、そんな！」

自分が原因で、Ａクラスが何の罪もないクラスの設備をランクダウンさせる。
その事は、愛子にショックを与えた。

「その線が強いな。そして準備期間を経て点数は回復させても疲弊したＤクラスは格好の獲物だ」
「まさか根本君は、そこを再度狙うって言うの？」
「見せしめは盛大にやればやる程効果が出る。多分再来週にはＤクラスの机はみかん箱だろうよ」

逆らえば最低の中の最低な設備に変えられる。
それは見せしめとしては、十分なレベル。

「どっ、どうするのさ！？　このままじゃ霧島さん達は根本君の操り人形だよ！」
「今はムッツリーニを信じる事と、今から行く放送室の占拠が重要になる」

光一はムッツリーニに、３年Ａクラスの情報収集を依頼していた。
今は根本を倒した所で意味がなく、本当の意味での勝利は後ろ盾である３年Ａクラスの瓦解。

「そのためにも、清水を逃がさない事が……」
「いたわ！」

そこへ突如の敵対者。
中林率いる、Ｅクラス小隊。

「出たな小指！」
「光一、失礼だよ。でも小山さんって事は、Ｅクラスだね」
「あたしは中林よこの学園１の大バカ！」

呻り声でも挙げるかのように、明久を睨みつける中林。

「？　何かあったのか？　俺より明久優先って感じだが？」
「あんたもよ久遠光一！　Ｆクラスのクズで大バカの分際でＥクラス代表であるアタシに散々恥をかかせてくれたお礼、たっぷりとしてやるんだから！！」

ふと自分より明久をメインにしてる気がするので、気になった光一。
しかし藪蛇だった。

「血の気の多さは体育会系クラス代表らしいと言うか何と言うか……コイツ何部だっけ？」」
「雄二から聞いたけど、ラグビー部のエースだって聞いたよ？」
「へーっ、そうなのか。俺はてっきりウエイトリフティング部だとばかり……」
「それは失礼だよ光一。いくら筋肉女呼ばわりしてるからって」
「あんた達あたしにケンカ売ってるのよね、そうなのよね！！？」

秀吉と愛子は苦笑いで、２人の漫才とそれに猛る中林を見ていた。

「中林さんはテニス部よ。ちなみにエース」
話が進まないので、共に居た三上美子が介入。
他のEクラス女子も、うんうんと頷いた。

「テニス？　……なあ明久、テニスって何だっけ？」
「はっ？　あんたテニス知らないの？　流石はバカね」
「テニスって言うのは、ラケットをつかって打ちあうスポーツだよ。ほら、あそこにテニスコートあるでしょ？」
「はっ……？　あそこ？」

明久が指差した先を見て、光一は驚いた。

「おいおい明久、あそこで行われてるのは優雅なイメージのスポーツだと記憶してるんだが」
「なによ！　あたしに優雅は似合わないって言うの！！？」
「うん」

ブチっ！

「もう許さないわ！！　あんたを今ここでモヤシ炒めにしてやる！！」
「モヤシ言うなっつーの。そもそも許す気ない所か、叫んだり怒ったりする優雅があるかよ」
「お主も人を怒らせるのが好きじゃのう」
「違うぞ秀吉、嫌いな人を怒らせるのが好きなんだ」

あー、と納得する面々。

「丁度召喚フィールドが展開されてる様だし、今日こそあんたをギャフンと言わせてやる！！」
「相変わらず融通がきかんと言うか……」

『Ｆクラス　久遠光一　英語Ｗ４０１点』
ＶＳ
『Ｅクラス　中林宏美　英語Ｗ１１０点』

「なっ！？」
「とりあえず一言いっておくぞ」

光一の召喚獣が距離を詰め、ライフルの銃身を中林の召喚獣の口につっこんで……

「マヌケ」

そのまま引き金を引いたと同時に、中林の召喚獣は戦死。
光一が目を向けた先の女子は、光一が一歩踏み出すと同時に逃げ出した。

「戦死者は補習！」

中林が鉄人に連れ去られるのを見て、再度４人は移動開始。

「さて、急ぐか……」
「そうだね。今他と出くわしたら点数削れるだけだし……特に姫路さんや美波と出くわしたら」
「うむっ。姫路も島田も、敵とすれば脅威じゃからの」
「ねえ久遠君、どうして瑞希ちゃんに美波ちゃんを懐柔しなかったの？」

「どうせ根本の策略に乗せられて敵になるんだったら、骨折り損でしかないからだ」

今までを思いかえして、否定できない3人だった。

「そういえば何で静かなんだ？　あいつらの事だから、殺気を辺りにまいて俺達を探すだろうに」
「やっ、やめてよ光一！」
「確かにその殺気の対象は明久じゃろうの」
「あっ、あははっ……」

ザザッ！

「諸君、ここはどこだ？」
「「「最後の審判を下す法廷だ！」」」
「異端者には？」
「「「死の鉄槌を！」」」
「男とは？」
「「「愛を捨て、哀に生きる者！」」」
「宜しい。それではこれより、２－Ｆ異端審問会を開始する」

そこへ再度の襲撃者。
２－Ｆ異端審問会が武装し、統率のとれた陣形で光一達を狙い始める。

「久遠と吉井、今日と言う今日はキサマラの首を我らがシンボルとしてくれる！」
「あまつさえ秀吉と工藤が味方だと！？　万死に値するわ！！」
「好きじゃ秀吉ぃぃぃぃ！！」
「工藤のスパッツの下がみたいぃぃぃ！！」

「……相変わらずじゃの」
「相変わらず面白いね、Ｆクラスの人たちって」
「あれを面白いで済ませるのか！？　とりあえずほれ」
光一は愛子と秀吉に、ガスマスクを手渡した。
明久も貰ったガスマスクを取り出す。
「さて須川、俺の首が欲しいんだったな？」
「その通りだ！」
「いいだろう、俺の首か地獄行きか……覚悟を決めたやつから来い」

一方、Ａクラスにて。

「じゃあ、ＡクラスはＤクラスに宣戦布告をするんですか？」
「ええ。あのクズの要求を呑むのが、代表の決断だから」
「そんなことしたら、根本達を調子づかせるだけじゃない！」
「わかって美波。代表にはあたし達Ａクラスを守る義務がある以上、苦渋の決断なのよ」

そう言われては、２人には何も言えなかった。
翔子は友達である以前にＡクラス代表、代表である以上はクラスを守る義務がある。

「やっぱりこうしてはいられません！　明久君達を探さないと！」
「落ち着いて。あのクズに見つかったら、それこそあいつに戦力を与えるだけだって言ったでしょ！？」
「どうしてウチ等があんな奴の戦力になるのよ！？」
「強化合宿での事忘れたの！？　あたし達、光一たちの事を微塵も

信用しなかったでしょ！？」

それを言われては、２人も流石に黙らざるを得なかった。
全てはそこからケチのつき始めであり、暗殺実行犯の誤解の原初であり、光一達が学園中からの鼻つまみ者になる原因であり。

「それに今更無理よ。光一は２人を敵と認識してる筈だから、躊躇なく攻撃をするわ。勿論あたしでもね」
「そっ、そんな……」
「アイツは弱いからね。だから武器が必要だったし、冷酷にならなきゃいけなかった。そうしないと、アイツは立つ事が出来なかった……それはわかってたのに」

優子はギュッと拳を握りしめ、俯いた。

「……アタシ、アイツがああなった理由知ってるのに、アイツがずっと苦しんでた事も、アタシに惹かれてた理由だって、ちゃんと理解してたのに」
「あの、優子ちゃん？」
「……どこで間違ったのかな？　アタシなんで光一を邪魔だなんて思ったのかな？　苦しめたいだなんて思ってなかったのに、なんで突き放しちゃったのかな？」

「木下さん、準備が整いました」
「そう。じゃあ２人ともアタシ今からＤクラスへの大使として出向かないと」

佐藤美穂の報告で、優子は表情を引き締めＡクラス教室を後に。
優子が去り、変わりに翔子が２人の元へ。

「……後少しの辛抱」
「……アキ達、大丈夫かな？」
「明久君……」

「やれやれ、明久も罪な男だな。そして光一も、随分と……おい翔子、いい加減俺を解放しろ！！」
「……それは無理。私はカギを持ってない」
「何いっ！！？　……光一！！　テメエ俺を捕らえた理由はコレだったな！！？」

その様子を見ていた雄二を拘束するのはロープではなく、鎖である。
それを繋ぎとめている錠のカギは、現在光一が持っていた。

第九十六問　幕間　”作って楽しい食べて苦しい姫路と坂本の女子ごはん”

“作って楽しい食べて苦しい（訂正）楽しい姫路と坂本の女子ごはん”

「おいコラ！　何だこのタイトルは！？」
「いや、間違ってねーだろ。姫路瑞希と坂本翔子がメインなんだから」
「翔子の名字は霧島だ！！」
「はいはい。じゃあ……」

“作って楽しい食べて苦しい（訂正）楽しい姫路と坂本（訂正）霧島の女子ごはん”

「これでいいか？」
「ああ。後そこのネームプレートをいじるなよ？」
「はいはい（見破りやがったか）。ではどうぞ！」

「「せーの、女子ごはん！」」

テーマ説明

「今日のメニューは、あの人の舌もとろける特性肉じゃがをご紹介します」
「……一度食べたら、もう他の肉じゃがは食べられなくなる」

「……この２人の場合、主にトラウマでな」
「アシスタントの久遠君、何か言いましたか？」
「いや、何も」

試食係

「離せ!!　俺をここから解放しろ!!」
「光一、僕を見捨てるって言うの!!?」

「こちらが生贄……もとい試食係の、霧島雄二さんと吉井明久さんです（俺もできる限り何とかするから）」
「勝手に婿入りさせるな!!（じゃあすぐに何とかしろ!）」
「試食なら雄二でも間に合うじゃないか!!（絶対だよ!?）」

食材説明

「えーっと、じゃがいも４個、玉ねぎ一個、しらたき１玉、牛肉２００グラム、グリーンピース大さじ３、しょうゆ大さじ４、みりん風調味料大さじ３、砂糖大さじ３、食塩小さじ１、水２カップ。以上が、肉じゃがの一般的な材料だ」
「そして今回は、私特性の秘密のレシピを用意しました」
「……私も、あの人の心を鷲掴みする特性レシピを用意して来た」
「一応言っておくが、さっき硫酸やら塩酸やらの薬品類はすべて撤去した」
「ええっ!?　なんて事するんですか!!」
「あんなもんつかった肉じゃが食ったら内臓がダメになるわ!!」

「ナイス光一!」
「いいぞ、今回ばかりは感謝する!」

下拵え

「まずは皮をむいたじゃがいもと玉ねぎ、そして牛肉をそれぞれ適当な大きさに切りわけます」

「……そして油をひいた鍋で、玉ねぎを少し透明になるまで炒める」

「透明になったらじゃがいもと牛肉、そして水をきったしらたきを加えて、さらに炒めます」

「……程良く炒めたら、水、砂糖、しょうゆ、みりん風調味料、塩を入れてよく煮込む」

Ｍｉｚｕｋｉ‘ｓ　Ｐｏｉｎｔ

「ここでＭＰです。全体に煮汁の色が均一になったら、濃硫酸４５ＣＣを……」

「カットカット！　それどっから出した！？」

「なんですか？　ただじゃがいもに含まれるデンプンを加水分解を起こして、甘みを増そうと……」

硫酸（Ｈ２ＳＯ４）＋デンプン（Ｃ６Ｈ１０ＣｎＨ２ｎＯ）＝単糖類（ＣｎＨ２ｎＯ）

「甘みじゃなくて安全性を加えろ！　これは化学じゃなくて料理なんだから！」

「ですが……」

「とにかくこれは没収！」

「……助かったね」

「おい光一！　横を見ろ横を！！　翔子が何か入れてるぞ！！」

「？　霧島、何か入れたか？」
「……何も」
「おい！！」

死上げ（訂正）仕上げ

「……仕上げとして、一煮立ちした所でいったん火を止める」
「そして隠し味に、クロロ酢酸を」
「カットだカット！」

食塩（ＮａＣｌ）＋クロロ酢酸（ＣＨ２ＣｌＣＯＯＨ）＝クロロ酢酸ナトリウム（Ｃ２ＨＣｌＣＯＮ２）＋塩酸（ＨＣｌ）

「この時一緒に、防腐剤として硝酸カリウムを……」
「だからカットだっつってんだろ！！　手を止めろ！！」

硝酸カリウム（ＫＮＯ３）＋硫酸（Ｈ２ＳＯ４）＝硝酸水素カリウム（ＫＨＳＯ４）＋硝酸（ＨＮＯ３）

塩酸＋硝酸＝王水

「だから安全性を考慮しろっつってんだろ！！」
「もう、久遠君！　一体どこがいけないんですか？」
「薬品を使う事だとわかれ！！」

「……アイツより、姫路の方がある意味過激派だな」
「……そうだね」
「っておい光一！　横を見ろ横！！」
「ん？　普通に肉じゃが作ってるだけじゃねーか」

「いや、お前の目を盗んでなんか入れてるんだよ！！」

完成

「あー、つかれた……」
「ありがとう光一、僕光一と友達になれて良かったよ」
「雄二、ご要望通り薬品検査したが何も検出はされなかった。だから色以外は安全（の筈）だ」
「おい、今変な間がなかったか？」

試食

「うん、おいしい！　おいしいよ姫路さん！」
「……秘密のレシピが使えませんでした」
「一生使うな！」

「はい、雄二。あーん」
「いや、待て！　そんな怪しい色の肉じゃがを食わそうとするな！！」

第九十七問

問題　次の（　）に当てはまる答えなさい

４大悲劇の１つと言われるのは、ウィリアム・シェイクスピアの（　）である

姫路瑞希の答え
『ハムレット』

木下秀吉の答え
『ハムレット』

教師のコメント
正解です、流石は姫路さんと演劇部のホープである木下君ですね

土屋康太の答え
『ハムスター』

教師のコメント
可愛いですね

久遠光一の答え
『オムレット』

教師のコメント

先生も甘い物は好きです

吉井明久の答え
『ハムカツサンド』

教師のコメント
先生のお昼もハムカツサンドでした。

『Ｆクラス　久遠光一（＋木下秀吉）　英語Ｗ４０３点＋６７点』
ＶＳ
『Ｂクラス　岩下律子＆菊入真由美　英語Ｗ１７７点＆１６９点』

秀吉との融合召喚獣が両手の自動拳銃を構え、敵の両手両足を撃ち抜いた。
身動きが取れなくなった所で、両の敵召喚獣は眉間を撃ち抜かれ終了。

「悪いな、コレも勝負なんでね」

鉄人に連れられて行く2人を見送り、一行は放送室に到着。

「さてと……」
「こんな所でどうするの光一？」
「思ったより早く清水美春を捕まえられたが幸いだった……とだけ言っておく。それより急ぐぞ、そろそろＡクラスがＤクラスに宣戦布告をする頃だ」

ところかわってＤクラス

「清水さんがいない今が好都合。幾ら久遠を倒すためとはいえ、根本はやり過ぎだ」
「そうよ。あんな奴が好き勝手なんて耐えられないわ！」
「根本を倒せ、自由を俺達に！」
「ではＤクラスはＢクラスに……」

ガラっ！

「その話、待って貰えるかしら？」
「きっ、木下さん！？　じゃあ……」
「いいえ、残念ながら違うわ……我々Ａクラスは、あなたたちＤクラスに宣戦布告をします」

悲痛としか見えない顔で、痛々しそうに優子は宣言した。
Ｄクラスは絶望が入り混じった驚愕の声を上げ、平賀は納得できないと言わんばかりに優子に抗議し始める。

「そっ、そんな！　Ａクラスは何を考えてるんだ！？」
「代表の決断よ。私達には私達の命運を守る義務があるの……悪く思わないで」

「待ってくれ！　今そんなことしたら……」

『っ！　ここは……どこですの？』

『おっ、起きたか清水美春』

『っ！　久遠光一！？　んっ……これは！？』

「え？　今の、清水さんと久遠？」

「光一！？」

Aクラス教室。

『このモヤシブタ！　美春を縛ってどうする気ですか！？』

『どうもしやしねえし、お前なんかどうこうしたくもねえよ。頼まれたって願い下げだ』

『じゃあ今すぐコレを解いて美春に殺されなさい！！』

「……これって、久遠の？」

「成程な、どうやらアイツの目的が見えて来た」

Aクラスがざわめく中、雄二だけが光一の意図を読み取っていた。

『全く、好き放題やってくれやがるよな。強化合宿と言い、これまでの事と言い』

『あなたがその腕輪を大人しく渡さないから悪いんです！！』

『俺は別に、召喚大会で準優勝して正当にこの腕輪の使用権を得たまでだ。準決勝に残れなかったお前が悪いんだろが。それを八つ当たりで散々襲撃してきた上に、強化合宿ではよくもハメやがったな。島田達に聞いたが、あのカメラ仕掛けたのはお前だろうに』

Aクラスでは知れ渡っていたため動揺はなかったが、他のクラスでは動揺していた。
覗き騒動の発端とも言える事で、全員がFクラスの問題児たちだと決めつけたあのカメラ。

『あれはお姉さまの姿をこの手で保存する義務を果たし、そのついでに吉井明久とあなたに美春の愛を邪魔した罰を下したまでです！！』

『それで女子風呂警備隊を率いてとは、随分と図々しいねえ』

『ブタのぶんざいで美春に物良いですか？　生意気です！』

『まあこの学園の女はあの脳筋やヒステリーを中心に、大半が本能優先で理性なんて人間的な物をまるで持ち合わせちゃいない単細胞だらけだから、まんまと引っ掛かった訳だ』

各教室の女性陣からブーイングが木霊した。

『特に姫路と島田なんか常日頃から明久を抹殺したがってるから、これは好機とみてただろうね』

「なっ！　久遠君、なんて事言うんですか！！？」
「ちょっ、ちょっと！　違うって言ったのに！！」
「……アイツ、日頃の恨みも込めてるな絶対」

光一の発言に瑞希と美波は心外だと言わんばかりに抗議するが、当然相手には届かず。
雄二はこれまで光一に対しての2人の仕打ちを知ってるので、この意図も当然よんでいた。

『ですがブタでも根本君は少しは物分かりがいいので、少しは認めてあげますよ』

『根本？　……おい、どういう事だ？』
『彼はあなたと違い物分かりがいいので、美春の事を攻めもせず協力してくれましたから』
『ちょっと待て！　じゃあアイツ、お前がカメラを仕掛けた張本人だと知ってるのか！？』
『はい。コレがバレて困るのはお互い様だと言う事で、あなたを打倒する為の同士として手を組みました』

当然その発言は、全員を憤慨させるには十分だった。
所々で怒声が響き渡り、Ａクラスでも同様だったからだ。

『おいおい、予想外の結果になったな……』
『だからなんだと言うんです？　あなた達ブタの言葉なんて誰が聞くと……』
『お前、ここをどこだと思ってるんだ？』
『え？』

所変わって、Ｄクラス教室。

『みっ、美春を騙しましたね！！？』
『お前が勝手にしゃべったんだろうが。しかしあのカスが事の発端全部知った上でアンチ久遠派立ち上げやがったなんて、幾らなんでも予想は出来なかったぞ？　……さて』
『だとすると、コレってチャンスだよね？』

「っ！　……そうね。平賀君、宣戦布告は撤回。これよりＡクラスは対Ｂクラス戦に備え、Ｄクラスとの同盟を提案します」
「え？　あっ、あの……」
「事実が発覚した以上、根本君に今や実権はない筈よ。代表にはア

タシが話をつけるから」
「ああっ、わかった。皆、DクラスはこれよりAクラスと同盟を結び、Bクラスに宣戦布告をする！！」
「「「おおーーっ！！」」」

『この卑怯者！　外道！　家畜以下のクサレ……ひっ！』

騒ぎに騒いでる美春の声が、急に怯えた様な声をあげた途端に途絶えた。
それが疑問を呼び、スピーカーに注目し始める。

『……くたばれ』

バヂバヂッ！！

『しっ、しびれます！！』

放電の音の前に聞こえた、スピーカー越しでも底冷えするかのような光一の声。
それが学園の背筋を凍らせるに至らせた。

「……まっ、まさか、光一……キレてる？」

唯一無事だった優子だが、その顔は青ざめており身体を震わせていた。

「……いけない！　はやく光一を取り押さえなきゃ！！」

Bクラス教室にて。

「……はっ！　いっ、今のうちに……」
「ん？　あっ！　根本が逃げたぞ！！」
「何！？　逃がすな、久遠のヤツ絶対怒ってるぞ！　俺達に危害が来る前に、速く根本を差し出すんだ！！」
「うっ、うわあああああっ！！」

いち早く意識を取り戻した根本、光一の怒りに恐怖したＢクラス全員に追われながら教室から逃げ出した。
自身の後ろ盾である、３年のＡクラスに向かって。

放送室

「……光一」
「ん？　ムッツリーニか。わかったのか？　……っ！　これ、本当なのか？」
「……（コク）」
「……まさかこんな所で、あのクソ野郎がねえ……さーて行くか」
「こっ、光一よ？　おっ、落ち着いての？　この様子じゃと、根本はもう逃げられぬのじゃ」
「落ち着く？　俺は落ち着いてるぞ？　……あの野郎をこの手で処刑するまではな」

光一の冷たい笑みを浮かべながらのトーンの下がった声を聞いた途端、４人の背に悪寒が走った。
それに構わず、光一は美春を（教育に悪い縛り方で）縛り直し、放送室を後にした。

「……もしかして光一、キレてる？」

「うっ、うむっ。よもやキレた光一を再び見ることになるとは」
「以前にもああなったことあるの!?　ソッそう言えば、久遠君の召喚獣って死神だよね？　まさか、あの部分が関与してるの？」
「……否定、出来んの」
美春の（教育に悪い縛り方で）縛られてる姿に鼻血を流してるムッツリーニの横で、3人はそんな話をしつつ追いかけて行った。

3年Aクラスにて

「で、どうするんだ？　代表よ」
「知れた事。真相はどうあれ、久遠光一を打倒することに変わりはない」
「随分とこだわるじゃねえか？」
「当然だ。これは最上級生主席としてだけではなく、私自身の義務だ。光一に……愚弟に兄として処罰してやるのはな」

第九十七問（後書き）

このたびですが、バカとテストと優等生？　に触発され、ゲストキャラとしての久遠光一の使用を許可する事にしました。
最近は“支倉ひばり”のゲストキャラとしての多様さをみて、他の作家さんが描く光一を見たくなったのもあります。

なので、使用したい方は一報ください。

第九十八問（前書き）

今回ですが、オリキャラ出演。
嫌な性格に設定しております。

名前に関しては絶対中二病だと指摘されるやもしれませんが、そこはご勘弁を。、

第九十八問

問題　料理のさしすせそを答えなさい

吉井明久の答え
『砂糖、塩、お酢、醤油、味噌』

久遠光一の答え
『砂糖、塩、お酢、醤油、味噌』

坂本雄二の答え
『砂糖、塩、お酢、醤油、味噌』

土屋康太の答え
『砂糖、塩、お酢、醤油、味噌』

教師のコメント
正解です、よもや君たちが揃いも揃って正解を出すとは思いませんでした。

姫路瑞希の答え
『酢酸、硝酸、水酸化ナトリウム、石炭酸、ソマトスタチン』

教師のコメント
姫路さんは台所に立たない様にお勧め……いえ、お願いします。

「はっ……はっ……」

2年Bクラス代表であり、ＦＦＦ団と肩を並べる派閥“アンチ久遠派”のリーダー格である根本恭二。
彼はBクラスメンバーに追われながら、3年Aクラスを目指していた。

「畜生、あのイカレ女！　余計なことしやがって！！」

先程の放送で覗き騒動の真犯人が清水美春である事。
それを光一を倒し、恨みを晴らしBクラス代表としての実権を取り戻す為に隠蔽し、協力関係を持った。

その事が公になった事により、再度自身の立場は地に堕ちるどころか光一は激怒。
後ろ盾の力をいい事に好き勝手した事も含め、これまで以上の仕打ちが待っている事は最早確定したも同然。

「最後の頼みだ……頼むぞ、俺の話を聞き入れてくれ」

根本は最後の望みである、盟友である３－Ａを目指していた。

一方、明久達は……

「ムッツリーニよ、３－Ａ代表に間違いないのかの？」
「……（コク）」
「……よもや、このような所で再会するとはの」
「……これをＡクラスに持っていく」

ムッツリーニが去り、３人はムッツリーニが持ってきた３－Ａに関するデータを見続ける。
その代表について書かれた物を見て、秀吉が悲痛と複雑さを交えた表情に。

「？　ねえ秀吉、この人知ってるの？」
「知っておるも何も、光一の兄上じゃ」
「え！　光一にお兄さんが居たの！？」
「待って木下君、この人名字が違うよ？」

ムッツリーニが持ってきた資料には、久遠と言う名は書かれていない。
そこには“大神白夜”という名前が書かれていた。

「光一の両親はワシ等が小学生のころに離婚しておっての。それで兄である白夜殿は父方に、光一は母方に引き取られたのじゃ。本来は大神光一と言う名であったのが、母方の性である久遠になったのじゃ」
「そっか。だから光一、３－Ａの代表がお兄さんだってこと知らなかったんだ」
「だよね。同じ学校に通ってる兄弟なら、知っていておかしくない情報なのに」

そもそも他学年の成績順位など気に賭ける事はない。
普通同じ学校に通っているのなら、互いの成績位は把握している筈。

「でもそれなら、話は早いんじゃない？　久遠君のお兄さんを説得すればいいんだから」
「説得など無理じゃ。それに正直、あの常村と言う先輩より顔を合わせたくないぞい。恐らく姉上もじゃ」

秀吉が人を嫌悪する事は滅多にない。
優子も優等生を心がけている以上、人の好き嫌いを表に出す事は光一以外ではない。

「どういう事？　珍しいね、秀吉が人に対して嫌悪感を持つだなんて」
「好きになれと言う方が無理じゃ。彼は勉学に優れておって、かつて雄二と並び称される神童じゃった」
「雄二と？」

雄二はかつて神童と呼ばれており、学力では現在の学年首席の翔子より上だった。
その彼と並び称されていたと言う事は……

「じゃあもしかして、霧島さんより上って事？」
「恐らくの……ただその能力ゆえか、自分の事を神様か何かに選ばれた存在だと本気で思っておる様での。それで他人を見下す言動が目立っておって、あちこちから恨みを買っておったのじゃ」
「……なんか、嫌うのわかる気がするよ」

自分の事を選ばれた存在だと認識する者。
容易に想像がついた為に、３人はうんうんと頷いた。

「その所為で光一が昔いじめられておって、ワシと姉上も正直あの人は好かんのじゃ」
「え？　じゃあ……光一が過激派筆頭って呼ばれるまでの悪党になった原因って？」
「白夜殿が原因じゃ。正直言うと、離婚して父方に引き取られ遠方に引っ越すと聞いた時は、スカッとしたぞい」

ポーカーフェイスが得意な秀吉が、心底嫌そうな顔を隠せずにいた。よっぽど嫌だったんだなと、納得する2人。

「となると、根本は最早終わっておるの。白夜殿は先程も言った通り、自分を神か何かに選ばれた人間だと本気で思っておる者じゃ」
「……別にあんな奴どうでも良いけど、だとしたらどうして今まで何もしなかったんだろう？」
「大かた、自分が代表を務めるクラスの人間を手に掛けた事に、自分の名誉を傷を付けたとでも腹を立てたのじゃろう。でなければあの常夏コンビを差し引いたとしても、白夜殿が動くとは思えぬ」

……一方、Ａクラスにて

「アイツに兄貴がいたのか！？　しかも、俺と並び称されてた大神白夜ってのは、本当なのか！？」
「ええ。まさかこんな所で再会するだなんて……もう二度と会いたくなかったのに」

Ａクラスに戻ってきた優子は、３－Ａ代表のデータを見て秀吉と同じく悲痛と複雑さと嫌悪の入り混じった顔に。

「それより、光一はどこ？　コッチも気になるけど、今は光一を止めないと！」
「……3－A教室に向かっている」
「……今は仕方ないわね。姫路さんに美波、あなた達は絶対！　外に出ないでね」

再度教室を出ようとした優子だが、ふと何かを思い出したかのように2人に告げた。

「……優子、さっきは念を押すなんてしなかった筈」
「今光一はキレてるから、下手な事すればあたしだって危ないからよ。特にこの2人を出したりすれば、尚更に」
「どっ、どうしてですか！？　私達、久遠君に恨みを買う様な事はしてません！」
「むしろ問い詰めたい事があるのよ！　さっきの事で！！」
「……本気で覚えがないの？　あれだけ同性愛者扱いされるの嫌がってるのに」

流石に優子も、呆れの一言だった。
……が、今回ばかりは話が別。

「やめてお願いだから！　キレた光一は敵意ある人間を無差別に攻撃しかねないのよ。特に最近は清水さんの所為で武装が強化されてるんだから！」
「そう言えば、元々エアガンだのスタンガンだの使ってたのに、最近は催涙ガスやら麻酔銃やらゴムスタン弾やら一層過激になってきてたな」
「……ヘタに敵意を見せれば入院させられる」

武装の強化と言う点では、全員が頷いていた

「それより根本はどうなったんだ？　あの野郎今頃立場なくしてるだろうから、即リンチだろうに」
「多分３－Ａにでも向かってるんじゃない？　だとしたら、どの道おしまいね」

３－Ａにて

「おっ、お願いします！　盟友として援助を……」
「盟友？　何の事だ？」
「え……？」
「まさかＢクラスの分際で、この私と対等に……とでも思っていたのか？　マヌケめ」

ドガッ！！

「あぐっ！」
「さっさとつまみ出せ。目障りだ」
「そっ、そんな！　待って、せめて……」
「おい、誰か布をよこせ。クズを殴ったせいで手が汚れた」

『ひゃあああああああああああっ！！』

「……躊躇も迷いもなしかよ」
「ゴミはゴミ箱に。そんな事も分からんのか？　バカが」
「くっ……」

ガラッ！

「邪魔するぞ」

根本の悲鳴が響き渡って少しの後、乱入者が現れた。

「なっ！　テメ、久遠！」

「きやがったか！　なら……」

ビシッ！　ドカっ！

「ぐあっ！」

「あぐっ！」

「下がって居ろ、衆愚ども」

常村と夏川を殴り、下がらせる。

そしてゆっくりと光一に近づく。

「よう兄貴、久しぶりだな」

「ふんっ、随分と変わった様だな？　まあその虚弱な体は変わらないようだが」

「あんたはそのムカつく態度に磨きがかかってんじゃねえか。相変わらず、私は選ばれた存在なんだ……か？」

「その通りだ」

光一が白夜を睨みつけると、白夜はそれに動じる事もなく見据えていた。

そこへ明久と秀吉、愛子が駆け付ける。

「光一！」

「ほうっ、お前の相方である観察処分者（がくえんのはじさらし）と……ん？　確か、誰だったかな？」
「木下秀吉じゃ」
「……ああっ、そう言えば居たな。隣人に、こんな愚弟を気に欠けるくだらん姉弟が」
「くだらなくない！　大体光一はあんたの弟じゃないか！」
明久を見るなり、プイッとそっぽを向いた。
「くだらん。弱く生まれた人間を、何故私が家族と言うだけで気に掛けねばならんのだ？」
「光一は弱くない！！」
「やめろ明久。言葉で動くようなら、今までガキのままでいられる訳ないだろ」
空間にヒビがはいった。
「……今何と言った？」
「あの頃からずっと変わらないガキだと言ったんだ。引っ叩かれんとわからんなら、十分ガキだろうが」
「そうか、そんなに制裁をされたいか！！」
光一が秀吉に目配せをして、召喚フィールドを起動。
ランダムで選ばれたのは、総合科目
「総合科目とは、やはり運も私を味方する様だな。サモン！」
「とは限らねえぜ！　サモン、ユニゾン！」
『３－Ａ　大神白夜　総合科目５００１点』
ＶＳ

『２－Ｆ　久遠光一（＋吉井明久）　総合科目１９２０点＋１２１０点』

「それがどうした？」

「俺達で教えてやるよ兄貴。あんたが知らない、俺がずっと受け続けて来た物……敗北をな！」

明久との融合召喚獣が、両手のガンブレードを構える。

目の前の、宙に浮かぶ台座の上に座禅を組み、その周りを数本の剣が浮遊する白夜の召喚獣に向けて。

コツッ！

「やろう、光一」

「ああ……俺達の試験召喚戦争、勝って終わるんだ！」

明久と光一が拳をうちつけ合い、融合召喚獣が駆け出した。

第九十九問

問題　京都における世界遺産を、４つ答えなさい

姫路瑞希の答え
『鹿苑寺（金閣寺）、慈照寺（銀閣寺）、清水寺、平等院』

教師のコメント
正解です、修学旅行の行先としてはポピュラーな物ですね。

吉井明久の答え
『金閣寺、銀閣寺、清水寺、法隆寺』

教師のコメント
法隆寺は奈良ですが、吉井君としてはマシな間違いですね

久遠光一の答え
『サグラダ・ファミリア、ストーンヘンジ、自由の女神像、万里の長城』

教師のコメント
せめて日本の建造物にして下さい

土屋康太の答え
『京の島原、江戸の吉原、長崎の丸山、大阪の新町』

教師のコメント
それは江戸時代における日本三大遊郭です。

法服を纏い、宙に浮く台座の上で座禅を組む白夜の召喚獣。
その周りでは、数本の剣が召喚獣を守るかのように浮遊している。

「見下ろす立場……か。良くでてんじゃねえか」
「私も気にいっている」
「だからこそ楽しみだね、そっから引きずりおろされた時のあんたがよ！」

ガンブレードを構えた融合召喚獣が、引き金を引く。
撃ちだされた弾丸が白夜の召喚獣に襲いかかるが、白夜の召喚獣が両の腕を交差させると……

ガキンッ！

「引きずりおろす……か。確かに、良く昇りつめた物よ」

周囲を浮遊していた剣が腕の動きに従うかのように、弾丸を弾いた。

光一が成程ねと頷くと同時に白夜の召喚獣が腕を振り上げ、周囲の剣が一斉に輪を描きながら召喚獣の頭上に。
その腕が振り下ろされると、剣が一斉に融合召喚獣に襲いかかった。

「こっ、光一！」
「黙ってろ明久！」

融合召喚獣を操り、巧みに1本1本よけていく

「今の私では倒せぬだろう、第2学年主任の高橋教諭を単科目とはいえ倒す程に」

白夜の召喚獣がパンと手を叩くと、突き立てられた剣が3本融合召喚獣の頭上に。
残りは融合召喚獣を取り囲むように配置され、腕が突きだされると同時にそれが一斉に襲いかかった。

それを融合召喚獣は飛び上がる事で回避するも、そこを狙い頭上にある数本が襲いかかった。

「舐めんな！」

襲いかかる剣めがけてガンブレードを振ってそれを弾き、その剣の軌道に身体を捻り2本の剣をよけ着地。

「さっきから何のつもりだ！？　遊んでんじゃねえ！」
「ちょっ、待ってよ！　どうしたのさ光一！？　いつも冷静な光一なのに、さっきかららしくないよ！」

明久は必死に宥めようとするが、光一は変わらず歯軋りする程食い

縛りながら白夜の召喚獣を睨みつける。
まるで明久の事など目にも入ってないと言わんばかり。

「ねっ、ねえ、久遠君どうしちゃったの!?　普段は冷静なのに、なんか人が変わっちゃったみたい」
「根本の事が発覚した後で白夜殿との再会じゃからの。幾ら光一とて、無理からぬ話じゃ」

愛子も流石に光一の変貌に驚き、秀吉も何とかしたいとは思っている……が。

「加勢はさせねえぜ」
「そういう事だ、木下」

常夏コンビに阻まれており、加勢に出る事が出来なかった。

「やれやれ……」

指を鳴らし、剣が回転しながら融合召喚獣に襲いかかった。
融合召喚獣はそれをよけつつ突進し、ガンブレードを突き出し……。

ズブリッ！

「がっ……！」

刺さったかと思われたが、膝をついたのは光一。
白夜の召喚獣は無傷で、手に握られた剣が融合召喚獣の腹を貫いていた。

「だが兄に弟は勝てない。よく頑張ったな……私の野望の礎となる

為に」
「ぐっ、ああっ！」

白夜の召喚獣が剣を握る手を捻り、えぐり始めた。

「白夜殿の為、だと？」
「私はただのＡクラス代表で留まる気はない。最初にして最後となる史上最高の学年首席として、文月学園の続く限りにその名を残す……それ位の事をやってのける必要がある」
「とことん自己顕示欲が強い男だよ、アンタはぐあああっ！」

フィードバックで再び苦しみ、うずくまる光一

「何故今まで手を出さなかったと思う？　こちらにはお前達を敵対する理由はごまんとあるのだ。校舎の壁の破壊、教頭室の爆破、学年全体での覗きに、個人への私怨を目的とした試召戦争騒動……お前達の所為で、この文月学園はすこぶる評判が悪いのだ。我等の進学にも響くと言う物」
「……そっそれは。じゃあ、どうして今まで？」
「決まっている。そう簡単に破っては、その功績をまぐれと思われるからだ。正直賭けではあったが、光一は生き残って見せた……そこへ、夏川と常村によるお前達への攻撃の提案だ」
「機を伺っていた……そういう事じゃな？」

口元をゆがめた笑みを浮かべ、肯定の意を示す白夜。

「大事を成すには、それなりの準備と実行する最善の機が必要……まあ私はこの学園の評判などどうでも良ければ、進学においても評判など何の枷にもならん。これでは賭けとは言えぬが、光一の実力を裏付けする要素は既に確立された。これで何の遠慮もなく倒せる

と言う物」
「口の軽い奴は早死するぜ？　まあ悪党程口は軽いのは、古来からきまりきってる事だがな」
腹を貫かれるフィードバックに苦しんでいた光一が、静かにゆっくりと立ち上がる。
融合召喚獣が白夜の召喚獣を殴り飛ばし、ガンブレードを拾うと距離を取る。
「……あーっ、ってえ」
「大丈夫？」
「……じゃねえな」
『３－Ａ　大神白夜　総合科目４７０９点』
ＶＳ
『２－Ｆ　久遠光一（＋吉井明久）　総合科目１６０１点＋１０７５点』
「なんだ、まだやる気か？」
「痛みで頭がさえた……となりゃ、攻略は簡単だ」
「それは頭がさえたのではなく、狂ったと言うのだ」
白夜の召喚獣が手をパンと叩き、剣が浮かび上がる。
腕を広げると掌に沿うように浮遊し、融合召喚獣に切っ先を向ける。
「私の視野から逃れられると思うな」
「逃げる？　はっ！」
「何がおかしい！
右手が付きだされ、それに沿うように浮遊していた剣が襲いかかる。

融合召喚獣が横へ駆け出し、切っ先が自分に向く前に剣の柄を狙い引き金を引く。

パキンッ！

「なっ！」

「やっぱりな」

柄についていた宝石が壊れ、その剣は召喚獣が消えてもいないのに消え去った。

「あれが操作の受信装置だったわけだ」

「たかが1本がどうした？」

「たかが1本でダメなら……」

左手のブレードを突き出し右手のガンブレードを担ぐように構え、周囲を警戒。

先程の事があり、数本程度しか襲いかからない剣を見据え……

「全部へし折ってやる！」

数分後

「さて、後1本」

「……甘く見ていたか」

残った一本を掴み、突きの構えを取る白夜の召喚獣。

そして一気に駆け出そうと……

バキンっ！

「甘い」

した所で、融合召喚獣が足元のこわれた剣を踏み壊して迎え撃った。

「気付かないとでも思ってたのか？」

「フン」

「え？」

……が、別の壊した剣の柄が融合召喚獣の足を払い、体勢を崩す。

そのタイミングに……

ザンッ！

白夜の召喚獣が、融合召喚獣の左腕を切断し、右手のガンブレードを弾いた。

「あぐっ！　うぅっ……」

「バカが、策と言うのは二重にも三重にも張り巡らせる物だ。これで私の勝ちだな！」

左腕を失い、右手のガンブレードは弾かれ、今は丸腰。

それを狙い、白夜の召喚獣が剣を振りかぶった。

「そういう事はな！」

そこで融合召喚獣が右手にガンブレードの弾丸を手にとり、白夜の召喚獣に狙いを付ける。

その次の瞬間……

「なっ！」

融合召喚獣が指弾で弾丸を放った。
指弾で飛ばされた弾丸が白夜の召喚獣の肩を撃ち抜き、その一瞬で剣を奪って首を斬り落とす。

「終わってから言うもんだぜ、兄貴」

『３－Ａ　大神白夜　０点』

「やった……やったよ！　僕達、勝ったんだ！」
「うむっ、やったぞい！」
「やっぱり久遠君すごいよ！」

召喚獣が消え去り、点数も０点になったのを確認取れると、明久達は歓喜の声を。
そして常夏２人をはじめとする、３－Ａのメンバーは。

「ウソだろ！？　あんなクズ共相手に、大神が……！？」

信じられない光景に、唖然としていた。
その中で……

「……」

『けっ！　兄貴がムカつく奴なら、弟は役立たずか』

「……（ギリッ！）」

『お前の兄貴、ちょっと頭が良いからって生意気なんだよ。お前役立たずなら、兄貴の責任取って見せろ』

「……まだだ」

『恨むんなら兄貴を恨めよ、役立たず』

「光一？」

「……まだ、終わりじゃねえ」

ただ1人、静かに佇んでいる白夜を睨みつける光一。
そう呟くと同時に、その次の瞬間左手で白夜の胸ぐらをつかんだ。

「っ！　久遠君、何を！？」

「おい大神白夜、この程度なのか！？　ここで終わりなのか！！？」

「やめるのじゃ光一！」

「この程度なのかよおい！！　違うだろ！？　俺を散々苦しめといて、散々みじめにしといてこれかよ！！　俺は、この程度の奴の所為であんな苦しみを受けてたのか！！？」

発狂したかのように、瞳孔の開いた目で問い詰める光一。
秀吉が止めようとしたが……

「……好きにしろ」

「っ！　……ああ、好きにさせて貰う！！」

白夜のこの言葉で、光一が3本のスタンガンを取り出しそれを挟むように持った事で、一瞬怯んだ。
それを振り上げ、白夜めがけて殴りつけようとした時……

ガシッ！

「っ！」

「はぁっ、はぁっ……間に合ってよかったわ」

「……離せ優子」

息をきらせた優子が、光一の抱きとめる様にして止めた。

「もう勝負はついたじゃない。これ以上は無意味よ！」

「まだだ……まだ、終わりじゃない！」

「光一が苦しんだ事は全部知ってるわよ……けど、だからってこんな事して何になるの？」

「離さねえってんなら！！」

スタンガンを優子めがけて振り下ろす。

優子は反射的に目をつむり、スタンガンの痛みを覚悟した瞬間……

ドガッ！

「あぐっ！」

光一を誰かが殴った。

その衝撃は優子にとってはそれほどではなく、抱きとめたまま。

光一が敵意を持って睨んだ先は……

「……明久？」

「光一……今、木下さんに何をしようとしたの！？」

「俺は……え？　今？　俺は、兄貴を……いや、その前に……優子

？　え？　……あっ、あああっ……あぁあっ……ああ」

ガランッ！

光一がスタンガンをおとし、場は鎮まる。
それを見て秀吉は、本来光一がすべき事を成す為白夜の元へ歩み寄る。

「ワシ等の勝ちじゃ。もう二度とワシ等の前に現れんでくれ」
「負けた以上は拒否権などないな、一時は従ってやる」
「……お主はどこまでも光一を苦しめるのじゃな？」
「私は私の信じる物の為に最善を尽くすまでよ。その為に誰が苦しもうが知った事ではない」
「……そうじゃったな。お主はそういう男じゃから、ワシらも大嫌いだった」

全員が３－Ａの教室を出た先では、根本が２年に袋叩きにされている光景があった。
しかしそれに目をくれる事もなく、光一は教室の戸が閉まったと同時にその場にへたれ込み……。

「ぐうっ、あああああっ、あああっ！　うあああああああああっ！！」
「光一、どうしたの！？」
「落ち着いて、久遠君！」

顔を抑え、狂ったように叫び始める。
床を殴り、頭を打ち付け、ただのた打ち回るかのようにその場でそれらを繰り返し始める。

「はぁっ……はぁっ……」

ぽたっ……ぽたっ……

ひとしきり泣き叫び、ひっかく様に顔から手を離した光一の顔。
額から血が流れており、それが涙と混じり合いまるで血の涙を流しているかの様に。
それが床にしたたり落ち、小さな赤い水たまりを作っていた。

「光一……」

「……ねえ、まずは保健室……だね？」

「うっ、うむ……」

第百問　エピローグ

―　臨時通達　―

2年B組　根本恭二
2年D組　清水美春

上記の者たち2名を文月学園指定〈観察処分者〉に認定する

文月学園　学園長　藤堂カヲル

「根本と清水が観察処分者に、か」
「……例の騒動の事実を隠ぺいした上で、ここまでの騒ぎを起こした以上無理からぬ話」
「だがこれでアンチ久遠派は完全につぶれたな」

事後のAクラス。
騒動が終了した事を察知するや否や、そう急に事の隠ぺいと処分通知。

「……先生たちは動くのが遅すぎる」
「そういうな。下位クラスに負けた逆恨みで襲いかかる集団の存在自体、学園にとっては大きなマイナス要素だ。余所に漏れたりしたら、評判の低下とシステムの風当たりを強くするだけなんだ」
「……それは理解している」

文月学園は風評に弱い。
だからこそ、システムの汚点が引き起こしたも同然のこの騒動を、余所に漏らす訳にはいかなかった。

「それよりもだ……光一、兄貴に勝ったんならいい加減戻って来い！！　いつまで俺を拘束する気だ！！？」
「……大丈夫、雄二の世話は私がするから」
「光一ぃっ、カギをよこせえええええ！！」

雄二はまだ拘束されたままだった。
その教室には、既に姫路と島田の2人の姿はない。

保健室

「？　今、雄二の声が聞こえなかった？」
「恐らく光一が戻らん事に激怒しておるのじゃろ。ほれ、雄二は今」
「今？　……あっ、そうだったね。どうでも良い事だから忘れてたよ」
「お主は……光一よ、どうするのじゃ？」
「ほっとけよ。霧島が世話してるんだから、ちっとばかり遅れても大丈夫だ」

頭と手に包帯を巻き、明久に殴られた右の頬に湿布。

引っかき傷で瞼を痛めた為、眼帯で覆われた右目。
どことなく空虚さを感じさせる声で、光一が秀吉に返した。
「……ねえ、大丈夫久遠君？」
「大丈夫、あのクソ兄貴を倒せただけでも収穫だったし、どことなくスッキリした……かもな」
「茫然自失じゃスッキリし過ぎでしょこのバカ！」
先程まで光一の手当てをしてた優子が、腰に手を当てて光一の頬をぐりぐりと突いた。
「いでっ、いでで！　いたいって！」
「アタシにスタンガン向けた罰よ！」
「うっ……悪かった、よ」
優子に謝ると、顔をそらした。
元々優子に頭が上がらない光一だったが、罪悪感からかまともに顔も見れなくなっていた。
優子もそれ以上何も言えなくなり、謝る様に頬を撫でる。
「……ごめん」
「何で優子が謝るんだよ？」
「もう光一を苦しませる気はなかったのに」
「優子はそんなこと気にするなよ。これは全部俺の……」
「お願いだからやめて！」
優子の有無を言わせない勢いと泣きそうな目に、光一は怯んだ。

「……木下さんにしては、珍しいよね？」
「……うん。ねえ木下君、優子があそこまでになる理由、何か知らないの？」
「……すまぬの工藤、本人に無断で話してもいい事ではないのじゃ」
事情を知っているだけに、光一の今の姿に胸を痛めている秀吉。
そして優子の気持ちを、今最も理解しているのも秀吉、

「ここに居たか、久遠」

そこへ突如の来訪者

「あっ、西村先生」
「ん？　何か御用ですか鉄人こと田中先生」
「久遠、今木下が俺の名前を言っていただろう」

呆れたように溜息をつくと、鉄人は一枚の紙を光一に手渡した。

「どれどれ……良かったな明久、これでお前も楽になるぞ？」
「え？　……根本君達、結局こうなったんだ。けどやだなあ、清水さんと一緒だと襲いかかってきそうだよ」
「これ貸してやるよ」

エアガン&カートリッジ（ゴムスタン弾装填済み）
スタンガン（特注&改造品　対清水美春専用）

「いつも思う事だけど、どうやって仕入れてるのコレ？」
「企業秘密だ」
「まったく……」

女子の観察処分者の仕事内容は変更すべきか、と鉄人は呟いた。

「話は以上だ。しかし久遠、お前大丈夫か？」
「ん？　珍しいですね？　鉄人が俺の心配するなんて」
「茫然自失を心配せん奴があるか。まあとにかく俺はこの騒動の事後処理があるから、寄り道せずに帰る様に」

そう言って、鉄人は去って行った。
ちなみに現在は放課後

「それじゃ、帰ろうか。秀吉、光一の鞄も取りに行こうよ」
「うむっ、そうじゃの」
「じゃあ優子、久遠君の事お願いね？　ボク鞄取りに行くから」
「……お願い」

明久と秀吉は2人で、愛子は優子の意をくみ、自身の教室へと戻って行った。

「ねえ光一」
「ん？」
「ずっと、謝りたかった事があるの」
「謝りたかった？　えーっと……どの事だ？」

謝るにしろ謝られるにしろ、光一には山ほど覚えがあり過ぎてどれかがわからなかった。

「……そう言えばお互い、こういう事ばっかり覚えがあるわね」
「我ながら、何故優子を好きになってたんだろ？」

過去形であった事が、優子を傷つけた。

「……って違う！　そうじゃなくて、今までの事よ。アタシ、光一が好きでそうなったわけじゃないの知ってて、ずっとひどい事を言い続けてたから」
「いや、それ優子の所為じゃないから、謝られても……うわっ！」
優子がいきなり光一の胸ぐらをつかみ、無理やり立たせた。
「“ずっと、優子と一緒に居たい”……思えばこれが、互いのケチのつき始めね」
「っ！？　……お前、覚えてたのかよ？」
「アタシだって恥ずかしいわよ。告白された言葉を言うなんて」
光一と優子の顔が、互いに赤くなっていた。
「……けどお前断ったろ、“絶対にいや”って。立ち直るの結構かかったんだぞ？」
「光一の事、手のかかる幼馴染としか思ってなかったのよ」
「いや、手のかかるのは優子の方だと……」
優子は家ではズボラの為、フラれる前は両親の留守の際に光一が面倒みに行く事が多々あった。
余談だが、その際に着替えや下着姿を見る事は多々あり、この時に優子の腐女子趣味を知った。
「ねえ光一、もしさ……」
グイッと胸ぐらをつかむ手に力をいれて、力尽くで引き寄せる。
その次の瞬間……

「んんっ！」

光一の左目に移ったのは、ドアップの優子の真っ赤な顔。
そして、唇に柔らかな感触と、優子の息がかかる感触。

ほんの一瞬ではあっても、２人には酷く時間がたったように感じていた。

「……あの時こうしてれば、もっと違う顛末だったかな？」
「……そう……かも。っておい、いきなり何すんだよ！？　始めてだったのに！」
「アタシだって始めてよ！　悪い！？　でも愛子を見て気付いたのよ！　あんな事しておいてだなんてわかってるし、もう手遅れなのもわかってるけど、でも……！」

ガタッ！

「「え？」」

２人が振り向いた先は、保健室の入り口。
そこには鞄を持った明久と秀吉、そして……

「あっ、えっ？　優子ちゃんが、久遠君と、きっ、きききき……」
「え？　え？　えーっと……ごめん優子！」
「……優子、意外と大胆」

顔を真っ赤にしてパニック状態の瑞希と美波。
そして翔子も顔を赤くして、動揺している状態。

「久遠君始めてだったの？　それは惜しいなあ」

愛子が残念そうにそう言った。

「ほうっ、成程なあ……」

そして最悪の巡り合わせもあった。

「まさか光一が木下とキスするなんてなあ！！」

『『『なぁあああにぃぃいいいいいいっ！！！』』』

リクライニングシートに縛られたままの雄二がそう大声で言うと、どこぞから怨念と嫉妬の声が。

「ちょっ、坂本君！？」

「すまんな木下。光一なら知ってるだろうが……俺は明久の幸せが大嫌いだ」

「よーっく知ってるが？」

「そして……」

少し間をおいて、一言。

「光一、お前の幸せも大嫌いなんだよ」

「そうか……じゃあ」

光一がゴソゴソとポケットを探り、ある物を取り出す。

それは……

「あっ」

「これはいらないと見ていいな？」

「あっ、あああああっ！　カギ！　おいコラ、カギをよこせ！！」

ポイっ！　（カギが放り投げられる）
ヒューーーっ！　（カギが宙に舞う）
パシッ！　（そのカギを翔子がキャッチ）

「宣言しよう。俺は霧島の幸せを全力で応援する“ついでに”お前の幸せもぶっ壊してやる」
「こっ光一！　雄二なんかの事より速く逃げないと、肩貸すよ！！」
「あっ、ああっ。すまんな」

「天井裏に逃げたぞ！　絶対逃がすんじゃねえ、光一と明久を殺せ！！」
「ああっ、待ってください！　久遠君、さっきの放送を今すぐ何とかしてください！！」
「そうよ！　どうしてくれるのよ、これじゃ学園中から余計な誤解されちゃうじゃない！！」

椅子に縛られたままの雄二が、到着したＦＦＦ団に指示をし始めた。
姫路と美波も、先程の放送の所為で頭に血が上っていた。

「……結局は、こうなるのね。流石Ｆクラス」
「シカシ姉上、随分と大胆な事をしたもんじゃのう？」
「だよね。優子に先越されるだなんて、残念だな」
「うぅっ……」

第百問　エピローグ（後書き）

以上、オリストーリー終了です。

光一にとって、優子にとって
何が最善で何が間違いだったか……は、所詮ＩＦなのでわかりません。

けれど、わからないからこそ人はあがく。
光一も白夜との勝負で、これが正しいか間違いかがわからないからこそ、こういう結果になった
……と言うのでしょうか？　個人として、そう思えます

これから……どうしたものか？

第百一問　幕間　『とある過激派の複雑な一時』

文月新聞

スクープ！　熱愛発覚！
２－Ｆ通称“過激派筆頭”久遠光一と２－Ａ木下優子、無人の保健室で熱いキス！

アンチ久遠派による総攻撃をはねのけ、３－Ａ大神白夜を撃破後の放課後
木下優子さんが久遠光一君に接吻を行うと言う情報が確認された。
元々が幼馴染であり、木下秀吉君とも兄妹分という仲の良さもあり、家も隣と言う間柄。
過激派と優等生の筆頭と言う、対極に位置する立ち位置ながら間柄としてはこの話は納得できるという声も多数。
普段を見ても、久遠君は木下さんに頭が上がらない為、良い夫婦とも言えるだろう。

『久遠光一の首を獲れ！！　ｂｙ　ＦＦＦ団』

しかし先日の騒動が終えても、彼を巡っての争いはまだ終わりではないと言えるだろう。
ご存じの通りＦＦＦ団の活動の事もそうだが、先日の騒動の際に女子に対しての暴言も確認され、彼の評判はすこぶる悪い。
特にＣクラス代表小山友香さんとＥクラス代表中林宏美さんは、彼に散々苦汁をのまされたこともあり彼の打倒を未だに目指しているとのこと。

いまだ火種絶えないこの騒動、一体どうなる事か我々にも判断付きません。

「何で写真まで出回ってるんだよ!?」

朝一番の掲示板。
そこに貼り出された新聞（と言うより、自分たちのキスシーンの写真）を見ての光一の第一声。

「絶対ムッツリーニだよね」
「あの野郎!!　……ってて」

憤慨が頬に響いたのか、右の頬を抑える光一。
一応まだ彼の顔と手には包帯が巻かれ、目には眼帯で頬には湿布という状態。

「ごめんね光一、その頬」
「いや、謝るのは俺だよ。あのまま優子を傷つけてたらと思うと、これ位安い」
「それよりも、大丈夫かの義兄上」
「義兄上と呼ぶな……こんなことよりも、どうすりゃいいんだか?」

「あれ？　光一嬉しくないの？」
「……答えにくい質問やめてくれ。大体吹っ切ってそんな間がないのに実はとか言われても」
光一にとっては複雑な事この上ない問題だった。
元々が好きだったけど、今では吹っ切っている為優子は自分にとって幼馴染でしかない。
……が。
「光一よ、気持ちはわかるし今までを思いかえせば無理ないかもしれぬが、わかってやってくれ。姉上とて理解はしておったのじゃが……」
「わかってるよ、ダテに5年10年の付き合いじゃないんだから」
「じゃあ……」
「それとこれとは別だっての……まさか俺がこういう事で悩む日が来るとは」
「なんだ、贅沢な野郎だな」
光一にとっての不快の種の声が聞こえると、顔をしかめる。
「余計な騒動の火種が何言ってやがる雄……ゴリラ」
「何で言い直した!?　その前に俺の状態をどうして気にもかけない!?」
雄二の手には手錠がかけられており、その手錠から鎖が伸びて鉄球につながっていた。
ちなみにその鎖は、昨日光一が雄二を拘束する際に使った代物である。

「戦国〇A〇A〇Aの武田半兵衛みたいで似合うじゃないか。まあお前の場合穴熊というより穴ゴリラだが」
「光一、ゲームのキャラだったら黒田官兵衛だよ。雄二がゴリラなのは正解だけど」
「超バカの明久に教えられるのはお前位だろうな」
「やかましいわゴリラモドキ。言っとくが俺は合いカギなんて持ってないし、そんな鉄球覚えはない」
「お前の事だからどうせ持ってるんだろ！？」
「はっはっは、合いカギなんて用意したらお前が喜ぶだけだろ？もしカギが壊れたりした時が面白そうだしな」
「「……（ガンのくれ合い）」」
いつものやり取りだった。
「2人ともこんな所でケンカなどせず、教室に行くぞい」
「そうだよ、お互い文字通り枷が付いてるんだから」
明久の言い分にそれもそうかと頷いて、2人はしぶしぶ教室に。

そして教室にて。

「諸君、ここはどこだ！？」
「「「最後の審判を下す法廷だ！！」」」
「異端者には？」
「「「死の鉄槌を！！」」」
「男とは？」
「「「愛を捨て、哀に生きる物！！」」」
FFF団が早速陣を張っていた。

「……罪状を読み上げたまえ」
「はっ、須川会長。えー、被告久遠光一（以下、この者を甲とする）は我が文月学園第2学年Fクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。甲の罪状は強制わいせつ及び背信行為である。昨日未明、甲が第2学年Aクラスの女子生徒である木下優子（以下、この者を乙とする）に対して強制的にわいせつ行為を働いている事が、協力者である坂本雄二氏より報告が確認され、現在に至る。今後、甲と乙の関係に対して十分な調査を行った後、甲に対してしかるべき対応を……」
「御託は良い。結論だけを述べたまえ！」
「キスをしていたので羨ましいであります！」
「うむ。実にわかりやすい報告だ！　それにあの手を見ろ、何があったかは知らんが久遠光一を倒すなら今よ！！」
光一の額と手の包帯と眼帯、頬の湿布を見ての言葉だった。
何より手の包帯により、過激派筆頭の名を支える最大の要素である武器を持てない。
「年貢の納め時だな光一、お前の首が今日からこいつらのシンボルになるんだぞ？」
「でもキスって言うなら、お前だってやったろ？　前霧島から聞いたが、お前おはようのキスを日課にしてるそうじゃないか」
「何！？　ちょっと待て、それはどういう事だ！！？」
「須川会長、坂本雄二は霧島翔子によるおはようのキスを日課にしているとのことです！」
「両名共に学園内引きずりまわしの後に屋上より紐なしバンジーの刑だ！！」
ターゲットに雄二追加。

全員が木刀に蝋燭に鞭と、思い思いの獲物を持ち始める。

「テメ、モヤシ！」
「明久」
「オッケー！」

明久が光一から預かってる閃光弾を取り出し、それをＦＦＦ団に投げつけた。

カッ！！

「「「めっ、目が！！？」」」
「よし、いまだ！」
「おい明久！　使うなら使うといえ！」
「光一よ、大丈夫かの？」
「ああ、何とか」

光一の指示で秀吉は何をするかを察知した為、目を閉じて事なきを得ていた。
雄二だけがそれを察知できず、くらむ目を押さえていた。

Ａクラス教室にて。

「……久遠達も大変」

未だ余所のクラスでは評判が悪い為、４人は唯一理解のあるＡクラスへと避難していた。

「まったく、良い迷惑だ！」

「こっちの台詞だ諸悪の根源が！」
「「……（メンチの切り合い）」」
「だからやめるのじゃ2人とも。今ヘタに体力を消耗させるでない」
しぶしぶと光一と雄二は従った。
だが不機嫌そうなのは、2人して隠しもしていない。

「……久遠、聞きたい事がある」
「？　なんだ？」
「……優子の事。久遠はどうするつもり？」

翔子の台詞で、女子達は色めき立ち男子は驚愕の声をあげていた。
優子は秀吉そっくりの美少女なので、一部では秀吉のスペアの様に扱われているが人気は高い故の事。

「どうって……正直複雑以外の何者でもない」
「なんだ？　お前確か木下の事……」
「いや、もう吹っ切ってるって知ってるだろ？　今更そんな事言われたって」
「……久遠としては無理ないのは理解している。けど、優子だって悩んだり悔んでいた」
「けどなあ……」

いつもの光一なら、恨みがある時点でズバッと斬り捨てる筈の事柄。
現に覗き騒動ではしばらく機嫌が悪く、優子に対してもぞんざいだった。

「けどなあ……なんだ？　言ってみろよ光一」
「……明久、さっき預けた物を鉄球に当てろ」
「なっ！　おい明久、そんなぴぎゃっ！！」

話題が出たときから、ニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべる雄二。
それにムカついた光一が明久に指示して、雄二の手錠から延びる鉄球にスタンガンを当てた。
ちなみに手錠も鎖も炭素加工なので、良く電気を通します。

「……そりゃあ優子は意地っ張りだから、それで納得できる部分は多々あるけどさ」
「なんだかんだで、木下さんに甘いよね光一って」
「明久！　……だからって納得できる程、単純じゃねえよ」
「……久遠の言いたい事はわかる。私も、そうだから」

翔子は遠い目でそう呟いた。

「あれ？　そう言えば当人の優子はどうしたんだ？　確か先に行ってたはずなのに……良く見たら工藤もいないじゃないか。まだ来てないのか？」
「……先程どこかへ行った」
「……修羅場かな？」
「それはどうかの？　今の姉上は色々と複雑そうじゃから、そのような事になるとは思えんぞい。それに工藤はあの通り奔放な性格じゃし、この現状すら楽しみそうな感じがするのじゃ」

全員が納得したように頷いた。

「そう言えば木下さん、色々と複雑そうでしたね？」
「え？　そうなのか佐藤」
「ようやく名前を覚えたんですね……ええ、そうです。来てからずっと、新聞の事を否定すらせず自分の席で憂鬱そうにしてました」

それを聞いて、光一も納得したように頷いた。

いつもの優子なら新聞の事を即座に否定した揚句、光一に対して散々罵倒を喚き散らす筈。

なのに、それすらしないと言う事は……。

「……2人どこ行った？」

「屋上です」

「でもどうするの？　今の光一武器持てないんだよ？」

「そうじゃぞ、武器を持てない光一など世界最弱の貧弱モヤシじゃ。異端審問会に見つかれば、即座にモヤシ炒めにされてしまうぞい」

「……秀吉、お前を怒らせるようなことしたか？」

屋上にて

「ねえ優子、今ボク達がどうこう言ったって、決めるの久遠君でしょ？」

「そうだけど……でもやっぱり、散々光一を傷つけたアタシにそんな資格なんて」

「もう、ボクもビックリな大胆な事しておいて何言ってるの？　しかも学園中に広まってるよ？」

「！！？　……そっ、それは、その」

「ほら優子、今までの事を久遠君に謝ってからだよ？」

その一方

「優子、すごいわね……これは、ウチも負けてられないわ！」

「そうです、私も明久君にこんな……いえ、あんな、いえ、そんな事すれば、きっとわかってくれるはず……でも美波ちゃん、私たちの事全然載ってませんね？」
「そうね。久遠の所為で誤解が学園中に広まるって思ってたのに、意外と静かね……そうよね、あんな現実味のない話を信じる訳ないわよね」
「はい。私達は明久君を抹殺したがるなんて、そんなのありえません」

第百二問　幕間　『接吻と決断と新たな騒動の始まりだ（笑）』

問題　以下の英文を訳しなさい

『Ｉ　ｋｉｓｓｅｄ　ｈｉｍ　ｂｅｆｏｒｅ』

姫路瑞希の答え
『私は、前に彼にキスしました』

教師のコメント
正解です、簡単でしたね。

久遠光一の答え
『いきなりの事でした』

木下優子の答え
『無我夢中でした』

教師のコメント
今朝の文月新聞は読みました

霧島翔子の答え
『おはようのキスが日課』

坂本雄二の答え
『俺が寝ている間に翔子は何をしていたんだ？』

教師のコメント
節度あるお付き合いをして下さい

須川亮の答え
『男女の交わりなんて我等ＦＦＦ団が潰しちゃるんじゃーー！！』

教師のコメント
そんな事をしているから女性に縁がないのだと理解してください

Ｆクラス教室は、今までにない位に静まり返っていた。
それはＦクラスはバカなので、授業に集中せずダベったり早便したり居眠りしたりと、好き勝手するからである。
しかしクラスは授業に集中しているわけではない。

「では須川君、この場合３ｍｏｌのアンモニアを得る為に必要な薬品はなんですか？」
「塩酸を久遠の目に流し込みます！」
「違います。それでは朝倉君」
「塩酸を久遠の鼻に流し込みます！」
「流し込む場所が違うと言う意味ではありません。それでは、有働

君」
「濃硫酸を久遠の目と鼻に流し込みます！」
「「「それだっ！！」」」
「それだ、ではありません。それと答える時は久遠君の方ではなく、先生の方を見る様に」
教室中が光一に対して、静かな怒りを向けていたからである。
光一は何の動揺も見せず、ただのんびりと教科書を読んで居た。
そこへ終了を告げるチャイム。
「えー……今日はここまでにします」
大きなため息をついて、化学担当の布施教諭が教室から出て行った。
「ではこれより、第一回久遠光一処刑方法選別会議を執り行う！」
それと同時に、ＦＦＦ団は本人がいるにもかかわらず妙な会議を始めた。
「本人がいる前でやるかな普通？」
「今の光一では捉えるのは容易いと考えておるのじゃろ」
「ま、今のあいつはただのモヤシだ。さて、俺も一言……いや、その前に面白くなりそうだ」
明久と秀吉がそれを見て呆れる傍で、混ざろうとした雄二が足を止めた
その先にあるのは……。
「久遠君、お話があります！」

「アンタ一体ウチ等に何の恨みがあるのよ！？」

瑞希と美波の２人が光一に詰め寄り始めている光景。
昨日の事があって、光一に対して怒り心頭だった。

「そうだな、今日は晴れてていい天気だ」
「天気の話なんてしてません！」
「ああ、なんか日向ぼっこしたくなるな」
「話をそらさないで！」

光一は知らぬ存ぜぬ、見ざる言わざる聞かざるで通す気だった。
元々自分の話を聞こうともしない事への仕返しも兼ねている。

「どうやら、知らぬ存ぜぬで通す気らしいの」
「……別に知られてどうこうなると思えないけど？」
「お前もいい加減気付いてやれ！」
「……鈍感」

それを見て、秀吉と明久は思い思いの事を
雄二とムッツリーニは、明久に対して呆れを見せていた。

「それに昨日の騒動、どうして私達に声をかけてくれなかったんですか！？」
「そうよ！　アキのピンチにどうして木下だけ仲間にしたのよ！？」
「……ＺＺＺ」
「起きなさい！　アンタウチ等に何か恨みでもあるの！？」
「私達が一体久遠君に何をしたって言うんですか！？」

完全に無視の方向である。

「……恨みと言えば、あるじゃろ普通に」
「……そうだよね。光一、あんなに同性愛者扱いされるの嫌がってるのに」
「つまりお前のせいで、光一はあの2人に八つ当たりしてるって事ぎゃぴっ！！」
「霧島さんに感謝しないとね」
「このやろぐぎゃっ！！」

未だ雄二の腕についてる手錠と、それから延びている鎖と鉄球。
その鉄球に光一から預かったスタンガンを押し付けた明久。

バンッ！

「久遠光一、よくも美春を観察処分者にしてくれましたね！　その腕輪を渡して八つ裂きになりモヤシ炒めになりなさい！！」
「昨日はよくもやってくれたわね！！」
「昨日はよくも散々好き放題言ってくれたお礼を返しに来たわよ！！」
「……また不快な顔ぶれが来やがったよ」

突如の来訪者を見て、心の底から嫌そうな顔を見せた光一だった。

「不快とは何よ不快とは！」
「召喚獣が好物の顔が3つも並べば不快に決まってんだろ。そんなに腹が減ってんなら食堂いけ食堂に」
「好き放題言ってくれるじゃない！　バカのくせに！！」
「いや、俺もう総合成績Bクラス並だ。そう考えるとバカと言うならお前らの方がバカだろ、バーカバーカ」
「もう、久遠君。ダメですよ、女の子にそんな事言ったら」
「そうよ、男の風上にも置けやしない！」

瑞希と美波は、2人して3人を味方し始めた。

「……姫路さん達って、光一の事嫌いだよね？」

「まあ面白くないと思っておる事も事実じゃの……じゃが、今の光一では危ないぞい」

今の光一は両手に包帯を巻いてる為、武器を持つ事が出来ない。

明久と秀吉が心配してる中で……

「「「「「うっ……！」」」」」

5人が一斉に息をつまらせたような顔になり、光一から即座に距離を取った。

「やっと効いて来たか」

光一が懐から、ある袋を取り出した。

「仕方ありません、非難しましょうお姉さま。近くに無人の倉庫がありますから」

「ちょっ、待ちなさい美春！　だっ、誰か助けて！！」

「ばいばーい」

美春に引きずられていく美波に、光一はにこやかに手を振った。

残った3人は改めて、その袋に目をやる。

「何よそれ？」

「女嫌香って言って、女にしか効かない催涙ガスみたいなものって言えばわかるか？」

「この卑怯者！」
「たかが2人に集団で襲いかかってくる奴等にだけは言われたくない」
「ぐっ……おっ、覚えてなさい！」
「お前らの事なんか一々覚えてられん」

3人が逃げ去るのを見送って、ハァッとため息をついた。

「ねえ秀吉、何ともないの？」
「ワシは男じゃ！」
「苦しかったら言ってね？　すぐに保健室に連れて行くから」
「……一応、感謝するぞい」

と言うやり取りを見て、少しばかり疲労が取れた光一だった。

そして昼休み。

「ヤッホー久遠君」
「「「殺せえええええっ！！」」」
「……また例の何とか団？」

意を決してFクラスに来た優子と、その付き添いの愛子。
彼女らが光一を訪ねてきた瞬間、今こそと立ちあがるＦＦＦ団。

「もう許せねえ！！　キサマを殺して木下姉妹をこの手に取り戻す！！」
「俺の木下姉妹との幸せなハーレム計画に汚点を付けやがった罪、今こそ償え！！」
「待ちなさい！　何勝手な計画立ててる上に、こんな事でほぼ全員

が憤慨するの！？　しかも秀吉は男よ！！」
「諸君、木下優子嬢に我等異端審問会の崇高さを見せて差し上げるのだ！」
「「「おおおっっ！！」」」
誰一人として聞いてなかった。

「では近藤２級査問官、罪状を読み上げて差し上げたまえ」
「はっ、須川会長。えー、被告久遠光一（以下、この者を甲とする）は我が文月学園第２学年Ｆクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。甲の罪状は強制わいせつ及び配信行為である。昨日未明、甲が第２学年Ａクラスの女子生徒である木下優子（以下、この者を乙とする）に対して強制的にわいせつ行為を働いている事が、協力者である坂本雄二氏より報告が確認され、現在に至る。今後、甲と乙の関係に対して十分な調査を行った後、甲に対してしかるべき対応を願い上げます！」
「……あのさ、色々とツッコミ所が多いけどそれって」
「はっ！　要約すれば、木下優子嬢とキスをしていたので羨ましいであります！」
優子があきれ顔になり、愛子も苦笑いを浮かべる。

「さて久遠光一、貴様を捕らえ火あぶりをした後に市中引きずりまわしを行い、打ち首獄門。そして屋上からの紐無しバンジーの刑だ！」
須川の宣言で、ＦＦＦ団が沸いた。

「何それ！？　そんな事でそこまでするの！？」
「「「我等異端審問会は人の幸せなど断じて認めん！　異端者には

死あるのみ！！」」」
「こういう事ばっかりしてるからあんた達評判悪いのわからないの！？」
「そっ、そんなことある訳がない！　我等ＦＦＦ団は女子の純潔の守護と悪漢の暴走の駆除を主とする神聖なる組織だ！　そんな俺達が評判悪いなんて、何かの間違いに決まってる！」
「その通りだ！　現に俺達はこうして学園の過激派筆頭久遠光一の打倒を志し、日々秩序を守るべく立ち向かっているんだ！」

「……今がチャンスだね」
「うむっ。では」

カッ！

「「「ぐわっ！」」」

「フムッ……光一が好むのも分かる気がするぞい。こういう物を使うのは、爽快感があるのう」
「でしょ？」

明久は自分では警戒されてるので、自分が預かってる物の１つを事前に秀吉に預けていた。
その間にさっさと３人は優子と愛子を連れ、その場を逃げ出した。

そして屋上にて。

「ふうっ……ん？　どうした優子」
「……ちょっとね。アタシ、光一に今まであの何とか団と同じような事してたんだなって」

「いや、あいつらと比較する事自体間違いだろ！？」

ＦＦＦ団の脅威から逃れて、落ち着いた頃。
優子は自分をＦＦＦ団と重ね合わせてしまい、自己嫌悪に陥っていた。

「そうだよ優子、そもそも優子ってちゃんと悪いって思ってるんでしょ？」
「木下さんはちゃんと反省してるんだし、光一ももう許してるんだからさ」
「明久の言う通りじゃ姉上、そう気にする事でもないぞい」

３人が優子を慰めようとすると、優子はより一層つらそうな顔に。
ただどうしていいのかがわからなくなり、光一も含め動揺する。

「光一、ごめんなさい……アタシ、ずっと光一が苦しんでたのに、何もしなかったどころか苦しめてばかり」
「いや、苦しむのは覚悟の上だったし、優子が気に病む様な……」
「そんな事言わないでよ、このバカ！！」

今度は胸ぐらをつかんで、光一に詰め寄り始めた。

「アンタはいつだってそう！　自分は悪党だから当然、傷つく事は覚悟の上だって言っていつもいつも！！」
「ちょっ、おい優子！？」
「全部知ってるのに、アンタは周りが言う様な人間じゃないって知ってるのに、ただ傷ついて堕ちて行くのを見てるしか出来なくて！」
「いや、だからな？　その……」
「アンタはそれで良いかもしれないけどね！　アタシは……」

ぽたっ……

「あっ……」

「え……？」

「アタシ……は……」

ボロボロと優子は涙を流し、そのまま光一の胸に顔を埋めて泣きだした。

光一は戸惑いつつも優子を抱きしめてやり、泣きやむのを待つしかできず。

「……明久よ」

「え？　あっ、うん。そうだね……あのさ、不謹慎だけど、工藤さんはいいの？」

「瑞希ちゃんや美波ちゃんじゃあるまいし、まだ付き合ってる訳じゃないから良いよ」

「？　そこは霧島さんじゃないかな？」

「明久よ、後にするのじゃ」

明久達も空気を読み、一旦中へ。

それからしばらくの後。

「ごめん……こんな事言うつもりじゃなかったのに」

「いや、俺の方もだな。じゃあさ、もうお互い様って事で決定な？　もうお互い全部水に流そう、全部終わった事なんだから、な？」

「……うん」

泣いてすっきりしたのか、優子から沈んだ雰囲気が消えいつもの物に。

「今更だけど……アタシ、光一が好き」
「それは、嬉しい……のかな？」
「それでいい。光一に許して貰えるんなら、2番目でも3番目でも良いから」

光一の右の眼が点になった。
それと同時に、自分の耳を疑った。

「2番目でも……って、優等生の台詞かソレ？」
「どうでもいいわよそんなの。そんなのに拘ってた所為で光一を苦しめたんだから」
「いや、だから……」
「それに何より、姫路さんや美波みたいになるのだけは嫌だから」
「……納得できるのが恐ろしい」

2人の名前を聞いて、また妙な噂立てられる前に何とかした方がいいなと決意をする光一。

「あーあ、随分と差をあけられちゃったかな？」

そこへようやく出てきてもよさそうだと判断した3人が。
愛子は楽しそうにしつつも、少し不服そう。

「良かったの姉上。弟としては複雑じゃが、また仲良くできそうじゃ」
「うん、僕も安心したよ。やっぱりケンカしたまま終わるより、こういう方がいいよね……それにしても、やっぱり光一が羨ましいたっ！」
「むっ、すまぬ明久。つい……」

親友として明久もホッとして、秀吉もまた3人で仲良くできる事に喜ぶ。
……が、明久のふと漏らした小言に気を悪くした秀吉が、明久の頭を小突いた。

「ねえ優子、さっきの約束」
「わかってるわ」
「そう？　じゃあ遠慮なく」

いつもの笑顔……だが、瞳には肉食系の輝きが静かにたたえていた。
これは何かがあると、過激派筆頭としての勘が囁いたが……。

「えい」
「えっ？」

愛子につかまり、あっさりと押し倒されてしまう光一。
力で勝つことが不可能な彼は、こうなってしまってはどうしようもない。

「あははっ、やっぱり久遠君って武器がないと弱いね」
「あの、工藤？　俺は一体何をされるので？」
「それはね……」
「それは……んっ！？」

それを最後まで聞く前に、光一の口はふさがれた。
それは決して手ではなく……

「へ？」
「なっ！？」

愛子の唇で。

「……えっと、その、すごい、ね？」

「うっ、うむ……あの、姉上よ？」

「良いって言ったでしょ？　それにアタシは2番目でも良いから、愛子が一番でも構わないわ」

「こうして聞くと、すごい選択したよね木下さんって」

「……良いのよ、素直になれなかった上に散々苦しめたアタシが悪いんだから。許して貰えただけでも幸い」

ドバンッ！

「「「久遠光一、その首もら……」」」

そこへ突如の乱入者。

火に油……と言うより、火事場にタンクローリー。

「キ・サ・マーーーー！！　昨日今日で2人目だと！！？　万死……いや、億死に値する！！！」

「「「死刑！　処刑！！！　断罪！！！！　死罪！！！！」」」

異端審問会、ボルテージアップ！

「あっちゃー……ボクのも見られちゃったか」

「工藤、すまんがどいて？」

「あっ、そうだね」

愛子が光一の上から降りると、即座に公務用カッターが光一めがけて投擲された。

「……異端者に死を」
「えーっと……すまん」
「……ならば大人しく死ね」

血の涙を流しながら、光一のやる様に指に挟むように持った3本ずつのスタンガンとカッター。
それも工務用のでかいカッターと、改造品と思われるシロモノ。

「ムッツリーニ、お前の無念はよくわかる！」
「俺も木下姉妹とのハーレムと言う、輝かしき夢を汚されたのだ！」
「諸君、久遠光一を倒し、奴の淫らなる時を我が物……もとい、消し去ってやれ！！」
「「「ガンホー！　ガンホー！　ガンホー！」」」

対して異端審問会も、釘バットや金属バットなど殺傷力の高い代物に装備変更。
スタンガンも最大出力になり、バチバチと音を響かせる

「光一、ホラ捕まって！」
「援護するぞい」
「すまん！　工藤、優子、すまんがまたあとで！」

明久が光一のフックつきロープをつかい、3人の体重を支えながら下へ。
3人を追い、異端審問会はロープを伝う物と階段を下りる物に別れ、追撃開始。

「あーあ、ボクのも見られちゃった」
「……愛子、ありがとう」

「ううん、良いよ。3人でって言うのも悪くないしね」
「……」

翌日
文月新聞に光一と愛子のキスが、当然の様に画像こみで報道。
その際光一に“過激派筆頭”に続いて“淫魔王”の称号がついた

「……普通個人の思い出になる物の筈なのに、どうして俺のはこう学園中に知れ渡るんだろうな？　しかもなんか変な称号までつけられてるし」
「えっと……ご愁傷様、でいいのかな？」
「……すまぬ光一、ワシにもどう声をかけたらよいか」
「まあいっか」
「「いいの（か）！？」」

第百二問　幕間　『接吻と決断と新たな騒動の始まりだ（笑）』（後書き）

とりあえずですが、こんなもんでいかがでしょうか？

一応まだ期末テストが済んでないので、玲さん帰還を予定してます。

……が、融合召喚の新機能による騒動のオリストーリーも思いついてますので

どちらにしようかな？

第百三問　幕間　『戦闘と崩壊と新しい日常の始まりだ（仮）』（前書き）

お気に入り登録件数１２００件突破！
皆さまには感謝いたします
そしてこれからもよろしくお願いします。

第百三問　幕間　『戦闘と崩壊と新しい日常の始まりだ（仮）』

問題　以下の問いに答えなさい

塩酸と硫酸を混ぜ合わせて出来る薬品名と、その比率をその式を述べなさい。

姫路瑞希の答え
『塩酸（３ＨＣｌ）＋硝酸（ＨＮＯ３）＝王水』

久遠光一の答え
『塩酸（３ＨＣＬ）＋硝酸（ＨＮＯ３）＝王水』

教師のコメント
正解です、塩酸が3、硝酸が1の割合で出来る薬品を王水と言います。
ちなみに逆の比率ですと、逆王水と言うそうですので、
姫路さんは当然ですが、久遠君の最近の武器の充実さを考えると複雑です。

吉井明久の答え
『わかりません』

教師のコメント
わからない事を一々書かなくても結構です

Fクラス男子（吉井明久除く）の答え
『塩酸と硝酸を久遠の心臓にぶち込んで掻き混ぜる』

教師のコメント
昨日一昨日の文月新聞を読んだ時点で、こう書く事は予測出来てました。

文月学園２－Ａ教室にて。
当然2日続きでキスシーンを披露した2人は、Ａクラスで注目の的だった。

「……優子も愛子も、大胆」
「そうですね。昨日今日で2人してだなんて」
「えっと……そうね。アタシも色々とスッキリしたし、もう迷いはないわ」
「あははっ、まさかボクのまで知られるとは思わなかったけど」
「……羨ましい」

自分も雄二と……と、内心2人を羨ましいと思った翔子。
一緒に話をしてる佐藤美穂嬢も、女の子らしく顔を赤くして聞きいっていた。

「……話は変わるけど、この状況はどうする？　今久遠は二股かけてるともっぱらの噂。久遠は今更同性愛者関連以外の評判を気にするとは思えないけど」
「アタシも構わないわ。元々アタシが素直になってさえいれば良かった事なんだから、もう許して貰えさえすれば何番目でも良い」
「この通り久遠君も優子も複雑なんだし、それを利用してなんて後味悪いからね。それにこういうのも悪くないって思うから」
「すごい話ですね……でも2人がそれでいいと言うなら、私は止めません」

友人としては、特殊な話題ではあるがごく普通のやり取り。

ドガンッ！！　ドガガガガガっ！！　バヂバヂバヂッ！！　ブシューっ！！

「「「ギャアアアアアっ！！」」」

そこで轟音が響いたと同時に、悲鳴が木霊した。

「……またあの何とか団が光一に突っかかってきたのかな？」
「懲りないよね、本当に」
「そう言えばFクラスには、男女交際を妨害する組織があると言う話でしたね」
「……良い迷惑。ん？　その久遠から電話？」

もう片方はそうでもない状況であり、寧ろ殺伐とした状況だと言うのは軽く想像が出来た4人だった。
しかし光一のみをさほど心配はしていない。

所変わってFクラス

「くっ……やっぱり独眼だときついな」

来て早々にFFF団との戦闘と言う強制イベントが発動した光一。
まだ頭部こそ額に包帯をまき、目には眼帯で頬に湿布（実は頬が一番重症）と、傷だらけではある物の手はもう包帯は巻かれておらず、絆創膏がつけられていた、

なのでスタンガンやゴムスタン弾入り拳銃、硬質ゴム弾入りショットガンや催涙ガス。
最近は高橋女史を相手にし続けた経験上で、使い方を覚えたムチ等を駆使し、会長の須川を始めほぼ全員を撃破。
そして残るは……

「やはりお前か、ムッツリーニ」
「……キサマだけは許さん」

名刀の様に研ぎ澄まされたかのような殺意を静かに放つ、寡黙なる性職者ことムッツリーニ。

「お前には悪いと思ってるが……向かってくる以上は」
「……そこまでだ。俺達にこれ以上言葉はいらない」
「……そうだな」

ふさがっていない左目で、ムッツリーニを見据え拳銃を納め抜き打ちの体制を取る。
ムッツリーニも意をくみ、カッター手に突進の構えを。

「……」
「……」

静かに互いを見据える2人。
黒板からチョークが落ちたその刹那、光一は拳銃を抜きムッツリーニが突進。

引き金が引かれ、カッターが突きだされ……。

ドサッ！

「……ふぅっ。あー疲れた」

光一は頬のかすかな切り傷に唾をつけ、
ムッツリーニが倒れ伏すと、構えを解いた。

「疲れたで済む問題かな？」
「いや、普通はすまぬぞい」

死屍累々と横たわる覆面集団事、異端審問会。

「確か光一って、武器持たなかったら秀吉より弱いんだっけ？」
「うむっ。じゃが持てば一騎当千、しかも昨日一昨日の事で武装を強化したＦＦＦ団でもご覧のあり様じゃ」
「……つくづく光一が友達になってくれてよかったよ」

光一に止められなかったらＦＦＦ団入りしていた筈の明久は、人生で最も賢明な判断をしたと思った。
それを察した秀吉は、ポンポンと宥める様に肩を叩く。

「で、お前はどうする雄二？」

拳銃をしまう（フリをして携帯を操作）と、後ろで指揮していた雄二に問いかける。

苦虫をかみつぶした顔になると、雄二は忌々しいと言わんばかりに舌打ちをし、光一を睨みつける。

「ちっ……モヤシのくせにどうして武器持つとここまで強いんだよ？　しかも俺の作戦悉く潰しやがって」

「モヤシ言うんじゃねえゴリラが。まったく、こいつらにも言える事だが、ここまでするか普通？」

「当たり前だ！　一昨日も言ったがな、俺はお前と明久の幸せが何よりも大嫌いなんだよ！」

「成程な、要約すれば文月学園で唯一のカップルになりたいと、そういう訳か。それは悪かった」

「おいコラ、何勝手な解釈付け加えてやがる？」

良い具合に食い付いたのを確認し、光一はにやりと笑みを浮かべる。

「だってそうだろ？　ＦＦＦ団の活動の所為で、カップルは隠れる様にして付き合わなきゃいけない中、堂々とカップルやれてるのお前と霧島位なんだから」

「ばっ、バカ言え！　俺は……」

「嬉しい」

「なぁっ、翔子！？　光一、テメエまた嵌めやがったな！！？」

こうして、朝は静か（？）に過ぎて行った。

ＦＦＦ団がいかにこの学園の騒音を担っているかが、見て取れる程に。

そして一時間目終了。

「と言う訳だ」
「……やっぱりそうだったのね」
「武器を使ってるとは言え、どうして集団相手に久遠君勝てるの？」
「集団戦ならあきるほどやってるからな。最初こそ確かにぼこぼこにされたけど」

アンチ久遠派は壊滅し、昨日の事があり元リーダー格2人はクラスにより、観察処分者である2名は教師により行動を制限された。
しかしＦＦＦ団はそうはいかず、二股と言う彼らにとって最大級の禁忌中の禁忌を犯した光一は、もっぱら現時点で最大の異端者（ターゲット）。
それから逃れるべく、明久に秀吉と共にＡクラスへと赴いていた。

「ん？　やあ吉井君に木下君。それに……ああっ、久遠光一か。顔の右半分が隠れているからわからなかった」
「その声、久保か。何の用だよ？」
「つくづく君はやってくれるね。騒動が終わったと思いきや、２人もの女性に手を出すなんて」
「何とでも……ああいや、本人たちが良いって言ってるんだから良いだろ。正確には出したじゃなくて出されただけど」

なんとでも言えと言いかけたのを、優子がそういう事を嫌ってると思いだし何とか踏みとどまった。

「まあ君たちがそれでいいなら、僕は何も言わないよ」
「……その方が都合いいだろうからな」
「となると、あの妙な噂はデタラメと言う事になるのか」
「妙な噂？」

またろくでもない噂だと見当をつける光一。
さしずめ、脅迫して関係を強要してるとか、そんな事だろうと思いつつ聞いてみる事に。

「事の発端が明らかになっても、光一未だに評判が悪いからね」
「脅迫して関係を強要してると見る者がいても、おかしくないのじゃ」
「だったら僕も気に掛けないよ。そもそも彼が木下さんに頭が上がらない事は、Aクラスじゃ常識だからね」
「当たり前と言えば当たり前だが……とすると」

ふと、とある可能性が頭に浮かぶ光一。
そこから導き出される噂の予想に、光一は先の雄二以上に苦虫をかみつぶしたような顔になる。

「噂をしていたのは、確かDクラスの玉野さんだったかな？」
「いや、もう良い」

可能性の体現者の名が出され、即座にその先を聞くのを拒絶した。
明久はあーっと言う顔になり、秀吉は何の事かわからず明久に質問。

「？　どうしてだい？」
「ただでさえ色々あり過ぎて大変だってのに、これ以上の要素なんかまっぴらごめんだ」
「ふむ……そうだね。今の事を聞いてはどう考えてもでたらめなんだから、気にする事でもないか」

そう言うと久保は、自分の席へと戻って行きお茶を飲み始めた。

「明久君、工藤さんに変装して久遠君とキスなんて、何でそんな事するんですか!?」
「一昨日のキスは女装した木下だったそうじゃない！　久遠、アンタ何考えてるのよ!?」
「そんなに女の子じゃだめなんですか!?」
「アキってば、そこまで汚れちゃってるの!?」

外からそんな会話が飛び込んできた。

「「どうして僕　（ワシ）が工藤さん（姉上）に変装して光一とキスしなきゃいけないの（じゃ）!?」」

それを聞いての、明久と秀吉の第一声。

「アイツら……」
「美紀もそうだけど、姫路さんに美波ったらもう……」
「もうっ、吉井君はあの時同じ場に居たし、木下君もそうだよ」
「玉野の場合、大方都合のいい様に解釈したんだろ。そもそもこの学園の女子は“Ａクラス以外”理性を持ち合わせてない単細胞だらけなんだから、これ位予測はできる」

隠せない程不機嫌な顔で、吐き捨てる様に暴言を堂々と言い放つ光一。
一応フォローは入っていたが、そういう趣味を持っている女子は即座に光一から目をそらした。

「あれ?　どうして木下さんも目をそらすの?」
「え?　えーっとその……」
「明久よ、今はそれどころではないのじゃ。光一を宥めねば」
「あっ、そうだね」

明久がそれを気付いたが、優先事項が出来た為に後回しに。
暴言はくだけではおさまらないのか、すでに爆発寸前の光一が……。

「だがそれ以上に、どうして明久や秀吉と仲良くしてるってだけで同性愛者にされるんだ!?　俺が優子にフラれた事は何故か学園中に知られた上に、工藤とも何度もデートしてるって言うのに!!　大体工藤に明久が変装って、無理があるだろ!!　それに優子のふりして秀吉が俺にキスなんてどうしてそんな事する必要があるんだ!!?」

「落ち着いて光一！　大丈夫だよ、木下さんや工藤さんはちゃんとわかってくれてるから！」

「そうじゃ光一よ、事実ではないのじゃからそう気にする事でもないのじゃ！」

再度壊れた。

数分後

「……すまん」

「良いよ。僕も何度も光一には助けられてるから、こういう時位は役に立たないと」

「助けられておると言うのならワシもじゃ」

ようやく落ち着いた光一が、明久と秀吉に謝っていた。

「3人とも、今日からお昼はこっちに来て一緒に食べない？　光一にはアタシと愛子でお弁当作るから」

「そうだね。久遠君の為なら、ここはひと肌脱がないと」

「え？　良いの？」
「……代表として許可する」

優子と愛子の提案に、明久は確認を取ると翔子の認可も下りた。
ついでだが、約一名がパアッと傍目から見ても嬉しそうになったのは内緒の話。

「すまんな、つくづく」
「良いのよ。光一にも散々迷惑かけたし、無理言ってるのこっちなんだからこれ位」
「そうそう。それにボク達後悔はしてないからさ」
「……なんかいいな。こういう優しい言葉かけてくれる人がいるって」

その言葉に機嫌を良くした光一に、少しどきっとした優子と愛子。

「それじゃそろそろ戻るか」
「そうだね」

第百三問　幕間　『戦闘と崩壊と新しい日常の始まりだ（仮）』（後書き）

さて、ここで選択です。

・本編５巻
・融合召喚の新技術騒動

次はこの２つにしようと考えてますが、どちらにしようか迷ってます。
皆さんはどちらがいいでしょうか？
出来れば感想と一緒にお願いします。

人物設定　その2　追記＋（前書き）

光一の兄で、今作の最高学年主席である大神白夜の設定です。
設定追加の予定はあります

人物設定　その2　追記＋

大神（おおがみ）　白夜（びゃくや）　ＣＶ　森川智之

文月学園３年Ａクラス代表の最高学年首席で、作中最強キャラ。
光一の実の兄であり、過激派筆頭と呼ばれるようになった原因の張本人。
両親が離婚しており、光一が母方、白夜は父方に引き取られている為、名字は違う。
その際に光一と白夜は互いにやり取りをする事もなく、完全に接点を断った状態だった為、互いに文月学園に居る事をしらなかった。

かつて雄二と並ぶ神童と称され、現在でも総合で五千点台と翔子を上回る成績を保持する上に、身体能力も高校生としては上位、また格闘技術においても鉄人西村を苦戦に追い込む程の天才的な能力の持ち主。
試験召喚戦争においては勝利を最優先とし、綿密な作戦を立てた上で敵を叩く智将タイプだが、必要ならば犠牲を出す事も自分も前線に出る事も厭わない為に、召喚獣の操作は明久にも匹敵する。
また個人の戦闘力自体も天才的に高く、彼一人で戦局を一変させたことも珍しくはなく、彼が出るときには作戦自体が必要ないほど。

評判こそその暴君ぶりと徹底した実力主義、そして制裁には暴力さえいとわないためお世辞にもいいとは言えないが、その能力の高さに心酔しているものは少なくはない。
能力の高さゆえか、自分自身を本気で神に選ばれた存在だと思い込むほど傲慢。
力こそが絶対という考えの持ち主で、弱さを罪というまでに徹底的に嫌っており、自分自身を磨きあげることには一切の妥協を許さず、

卑怯な手を使われても“それを覆せない自分が悪い”と結論付けるほどに、自分にもそれを徹底している。
それ故に“憤怒”と“自信”と“強欲”以外の心を否定し、それ以外の感情自体存在しないかのような振る舞いが目立つ。。
ただその分自分が強者と認めた人間には、周囲の評価など一切気にもかけずに真摯に対応する。

＜召喚獣＞
・通常仕様
装備：裁判官の法服と法冠、浮遊台座の上に座禅を組んで居る。
　基本的に立って歩くことも出来る為、肉弾戦も可能。
武器：遠隔操作型の宝剣
剣の本数は得点によって増減、柄の装飾である宝石が壊れると操作出来なくなる
腕輪：未定

・オカルト仕様
種別：ルシフェル
本質：傲慢
装備：剛著な西洋鎧をまとい、玉座に座っている。
　通常償還と同様に遠隔操作型の武器、水晶玉を使い攻撃する。

人物設定　その2　追記＋（後書き）

現時点で出せるのは以上です。
大神白夜は再登場させる予定はありますので、その際までのお楽しみにと言う事でお願いします。

第百四問　幕間　『チャンスと関係と決意表明』（前書き）

総合点４０００Ｐｔ突破！
皆さんに感謝です。

第百四問　幕間　『チャンスと関係と決意表明』

文月新聞

未だに続く、久遠光一を起点とした騒動

２－Ｆクラス所属、通称“過激派筆頭”久遠光一君に関する騒動は、どうやらまだ終わりではないもよう。

２－Ａクラス所属木下優子さん、同じく２－Ａクラス所属工藤愛子さんと、一日違いでキスをすると言うスクープ騒動に対し、敵意ある噂が一部でささやかれていると調査班がつきとめた。

その噂とは、久遠光一君が２人を脅し、関係を強要しているという噂と、木下さんは弟である２－Ｆ所属の木下秀吉の、工藤さんは２－Ｆクラス所属の吉井明久君の変装だという噂である。

だが前者はまだ可能性としてあり得なくもないが、姉弟である木下優子さんと木下秀吉君はともかく、工藤愛子さんと吉井明久君は明らかに体格が違う為に、どう考えても悪意的に無理やりこじつけた噂に過ぎないと断定。

アンチ久遠派の残党による暗躍か！？

その調査線上で、この噂の発端は２－Ｄ所属玉野美紀さんで、それを大々的に言いふらしていたのは２－Ｆ所属姫路瑞希さんと、同じく２－Ｆ所属島田美波さんであると判明。

此方が掴んだ情報によると、姫路瑞希さん及び島田みなみさん両名とも、久遠光一君とは何かと衝突する事が多いとの事で、それをアンチ久遠派に付け込まれたのではないかという説もある。

しかしとある一説では、彼女たちがアンチ久遠派の影のリーダーで

はないかとも囁かれていると言う情報も。
彼女にしたくない女子ランキング3位の島田美波さんはまだしも、あの姫路瑞希さんがというのは新聞部一同心から信じられない事ではあるが、最近の彼女はFクラスの悪影響の所為か、島田美波さんと共に吉井明久君をいたぶる事が目立つと言う動向から言っても、可能性としては高いと思われる。
一説では、両名が吉井明久君を暗殺する為に邪魔だから、久遠光一君を貶めようとしていると言う噂も確認され、この線が最も強いと新聞部内では結論出されました。

（重要なお知らせ）
なおこの記事に関する問い合わせ、抗議等は一切受け付けません

「まったく、新聞部全員ウチ達を見て逃げ出すって、どういう事よ？」
「あんな酷いでたらめを書くだなんて、酷いです！」
「デタラメを言いふらしておいて、何言ってやがる？」（今回の文月新聞の情報提供者）
朝一番に新聞部への抗議に向かった2人は、即座に門前払い

そこへ通りがかった光一が、銃とスタンガンを手に不機嫌そうな顔で2人に文句を言う。
その後ろには、光一は正真正銘優子に愛子とキスをしたと知り襲撃したＦＦＦ団員が気絶していた。

「あっ、久遠君。まだそのケガ治ってないんですか？」
「アンタまた襲撃されてたの？　大変ね」
「こんなのどうでもいい。それよりも、俺は同性愛者扱いされるのが嫌いだと今まで何度言った？」
「え？　……あっ、そうでしたね。すみまひっ！」

瑞希が悪びれながら謝ろうとして、軽く悲鳴を上げた。
光一が悲鳴をあげさせるほどの絶対零度の空気を纏い、2人を睨みつけていたからである。
それを見た美波も、顔を青ざめながら光一から距離を取る。

余談だが光一はアンチ久遠派騒動時、この状態になった事で清水美春を震え上がらせた。

「……なあ、どうして俺の話を聞かないかな？」

聞く者全てを凍てつかせる様な声で、光一は冷たい笑顔で問いかける。

「べっ、別に、ウチも瑞希も、久遠を陥れようとした訳じゃないのよ？　ただね？」
「それとある事に関してのお前らの意思を確かめたいんだが、お前らは明久を殺したいのか仲良くしたいのかどっちなんだ？」
「仲良くしたいです！」
「そっ、そうよ！」

瑞希が真っ先に示した言葉に、美波も賛同。

「そうか……だがお前ら、あれから何か変わったか？　以前と変わってる様に思えないんだが？」

「それは、アキだって悪いのよ！　いやらしい事ばっかり考えるから」

「そうです！　いやらしいのはよくないと思います」

「まあそうかも知れんが、暗殺実行犯扱いされてる奴のやる事じゃないだろ。俺から見てお前らの行動を省みる限りじゃ、“女に興味を持つな、男じゃないとダメ”って言ってる様なもんなんだけど？」

昨日の事もあるしな、と恨みを込めて光一が吐き捨てる様に言い放った。

怨念を込めて睨みつけ、２人を震わせる。

「全く……俺としてはお前らより秀吉を推奨したいよ」

「なっ！」

「そっ、そんな！」

「秀吉は少なくとも明久に暴力は振るわないし、お前らみたいに一方的な事は一切しないから、俺としても応援がしやすい」

否定しようとした２人だが、それを遮る様に絶対零度の視線を向ける。

「それに何より、人の話をちゃんと聞くからな！」

これまでの恨みと昨日の分の怨念を込めて、再度吐き捨てる様に言い放つ。

２人は光一の絶対零度の視線に怯んで、その先をいえずじまいだっ

た。

「と言う訳で、俺はこれより明久と秀吉をくっつける為に動くつもりだ……と言いたいが、チャンスをやる」

「「えっ!?」」

「近い！　変な誤解が蔓延するだろうが！」

２人は耳を疑うも、即座に光一にすがる様に近づいた。

光一は迷惑そうに、２人から距離を取る。

「今回だけは特別に許してやるし、明久には俺から誤解だったと弁明してやる」

「「ホントですか（なの）！?」」

「昨日の見る限りじゃ野放しにするとろくでもないから、無理矢理でもこれで納得させるまでだ。どうせ失敗するだろうし（俺だって鬼じゃないからな。まあ明久の幸せの為にも、俺としては頑張りたい）」

「……光一、建て前と本音が逆に出てるわよ」

そこへ優子が通りがかり、光一の言葉に呆れていた。

「ん？　よう優子」

「ようじゃないわよ、ああ、おはよう姫路さんに美波」

「あっ、優子ちゃん。おはようございます」

「あの、ごめんね優子？　その……」

「良いわよもう。その様子だと光一に怒られたんでしょ？」

本当は色々と言いたかったが、光一が冷たい雰囲気を纏ってる事から大いに想像がついた優子。

ならこれ以上は流石に酷だと思い、光一に２人をこれからどうする

気なのかを……。

「ヤッホー久遠君」

「え？　わっとぶっ！」

聞こうとした所で、愛子が光一に抱き付いた。

その勢いに耐えきれず、倒れはしなかったものの壁に叩きつけられた。

「何やってるのよ、もう。女の子の体重を支えられないって」

「……面目なし」

「う～ん……久遠君のウエスト、ボクより細いね？」

「そうなのよ、光一ってアタシより細い上に体重軽いから。もうっ、この細さだけは何度羨ましいと思ったか」

「だけかよ！？　ちょっ、おい。この体勢まずくないか！？」

それに優子が近寄り、自分も光一にひっついてウエストのあたりを自分と比較する様に障り始めた。

「あっ、あの……優子ちゃん？」

「何？　姫路さん」

「優子ちゃんは良いんですか？　こんな事」

「そっ、そうよ。大体久遠も久遠よ！　あんな偉そうな事言っておいて！」

2人は当然、二股同然の状況の光一をよく思えなかった。

「アタシは良いわよ。そもそもアタシが無理言ったんだから」

「え？　あの、それって？」

「あのな優子、やっぱり……っ！　誰だ！？」

2人を急に振りほどき、Yシャツの中に手を入れ2丁の自動拳銃を取り出すと、とある方向に撃ち出す。
その撃ち出した先にゴム弾がぶつかり、その衝撃に驚いた物が飛び出した。

「須川！　くそっ、さっきの奴らか！？」
「諸君、同胞たちの死を無駄にするな！　久遠光一の首を我らが手に！」
「「「我らが手に！」」」

ずらりと須川の後ろと、光一達の後ろに並ぶ異端審問会。

「いっ、いつの間に！？」
「今、どこから出て来たの！？」

異端審問会に慣れてない2人は、急な出現に驚いていた。
美波と瑞希は、急な出現は既に慣れている為、特に動じず。

「やっと追い詰めたぞ光一」
「雄二……テメエ」
「これも全部お前が俺をムカつかせたのが悪いんだよ。それにそのお前を倒す絶好の要素を、絶対に逃す訳にゃいかねえんだよ」
「同志坂本雄二よ、協力感謝する。さあ、共に奴の首をこの手に！」

光一の未だ巻かれている額の包帯と右頬の湿布、特に右目の眼帯を指差す雄二。
須川は雄二と握手し、雄二の指揮の元で全員が変態……ではなく、編隊を組んだ。

「ちょっとあんた達！　けが人を集団で襲うなんて恥ずかしくないの！？」
「見ててください木下さん、この勝利をあなたに捧げます！」
「俺は工藤にだ！　スパッツサイコーー！！」
「木下姉妹とのハーレムの為にも！」
「だから人の話を聞きなさい！！　それとハーレムって何よ！？」

優子の講義を応援と勘違いしながら、異端審問会は武装。
光一も左手の拳銃を納めスタンガンを握り、ボストンバッグからショットガンを取り出すと口にくわえる。

「もう……だったら」

無視された事に腹を立てた優子は、すぅ～っと息を吸い込む。
そして……

「キャーーーっ！！」

大きく悲鳴をあげた。

「なっ、何だ？」
「むっ、何だこの騒動は！？　木下、どうした！」
「ああっ、そういう事か」

優子の悲鳴を聞き付け、鉄人が現れた。
それを見て光一は、優子の意図を読み取る。

「先生、いきなりこの変な人たちがアタシ達に変な事をしようと！」
「えっ！？　ちょっ、待ってくれ！　変なことしたのは、寧ろ久遠の方！」

「この変な集団はアタシと愛子に、交際しろとかハーレムの一員になれとかスカートの中を見せろとか、変な事言ってきます！　光一はそれを守ろうとしてくれました」
「「「なあっ！？」」」
「ふむっ、そうか……」
優等生の優子の言葉で納得したのか、鉄人はギロリと異端審問会に目を向ける。
「さてそこのバカ共、覚悟は出来てるか？」
「「「ぬっ、濡れ衣だーーーっ！！」」」
その後、数分もたたないうちに全員つかまり、補習室へと連行された。
「……浮気は許さない」
「待て、誤解だ！　木下のでっちあげだあ！！」
ちなみに雄二は、翔子に制裁されていた。
それを見送り、光一は武器を納める。
「うーん……暴れ損ねたな」
「もうっ、ケガしてるんだから無茶しないで！」
「そうだよ。久遠君ったら、そうやって無茶ばっかりして優子を泣かせちゃったんでしょ？　今度やったらボクも一緒に泣いちゃうよ」
「別に無茶じゃ……そう、だな。悪かったよ」
優子と愛子のとがめる様な視線に、何も言えなくなる光一。
それを見たとある人物が……

「ほうっ……」
「ん？　何見てんだよ鉄人」
「いや、何。二股なんて褒められる事ではないが、お前にとってはいい影響の様だな」
「大きなお世話だっての！　そもそも俺まだ了承した覚えはないってのに……」
「はっはっは、お前も随分とかわいげが出て来たな。木下に工藤、しっかりと手綱をもってやってくれ」

豪快に笑いながら、４０人以上いるＦＦＦ団員を１人で担いで去って行った。
光一は自分には不可能な光景に、唖然としていた。

「「「離せ鉄人！　俺達はすぐにアイツでモヤシ炒めをつくらねばならんのだ！！」」」
「黙らんかバカ者どもが！」

それは嵐の様に騒ぎを起こし、嵐のように去って行った。

「……優子ちゃんと愛子ちゃん、普通に認められましたね」
「そうね……ねえ瑞希、あの２人に倣って共同戦線よ。折角のチャンスだもん、木下に負けられないわ！」
「はい！」

互いに手を取り握手をし……

「「打倒木下よ（君です）！」」

声高らかに、決意表明をした。

一方。

「むっ？」

「ん？　どうしたの秀吉？」

「気のせいか、ワシが何らかのターゲットにされた様な気が……」

「あの常夏コンビのモヒカンの方かな？」

「おっ、恐ろしい事言わんでくれ！　あの先輩やたらとねちっこい視線送ってくるから気味が悪いのじゃ！」

「そう言えば、皆遅いね？　どうしたんだろ？」

Ｆクラス教室は、明久と秀吉だけの２人の空間だった。

第百四問　幕間　『チャンスと関係と決意表明』（後書き）

アンケートのご協力、ありがとうございます。
集計の結果、原作5巻の執筆に決定しました。

では、次もよろしくお願いします

第百五問　幕間　『謀略とムッツリと新しく結ばれる絆』（前書き）

今回ですが、ムッツリーニをかわいそうにしちゃったのでその救済にと書いたものです。

試験編は次回からとなります。

第百五問　幕間　『謀略とムッツリと新しく結ばれる絆』

問題　次の問いに答えなさい

戦国時代において、中国地方を支配下に置いた謀神と名高い戦国大名を答えなさい

姫路瑞希の答え
『毛利元就』

教師のコメント
正解です、流石ですね姫路さん
彼は戦国最高の智将と評されており、世界的にもきわめて有名な稀代の策略家として有名です
ドラマの題材にもなってますので、一度見てはどうでしょうか。

吉井明久の答え
『毛利輝元』

教師のコメント
惜しいですね、毛利輝元は答えである毛利元就の孫にあたりますですが意外とマニアックな間違いでしたので、先生としてはとても嬉しいです

久遠光一の答え
『毛利小五郎』

教師のコメント
本気でも悪ふざけでも、君は高橋先生に今すぐ謝罪をしなさい

「珍しいな、優子が俺達と一緒に登校するなんて」
「こうすれば、秀吉と入れ替わってるだなんて思わないでしょ？
それに光一今片目が塞がってるから心配なの」
「幾ら外見がそっくりとは言え、ワシと姉上を間違えると言う方がおかしい気もするがのう」
「だったらお前も軽々しく女装するな。だから見分けがつかなくなるんだろうが」
「……それを言われては、ワシも何も言えなくなるのじゃ」

光一と秀吉、そして優子という3人で登校。
下校はともかく、3人にしては実に久しぶりである。

「所で光一よ、昨日は随分と明久と何か話しておったが、一体何なのじゃ？」
「明久の姫路と島田に対する誤解を解いてたんだよ。条件付きで」
「んむ？　何じゃ光一、姫路と島田の所為でまた同性愛者扱いが酷くなると怒っておったのに」
「だからこそだよ。野放しにした方がろくでもない事になりやすい

とわかった以上、目の届くように配慮した方がダメージがまだ軽い」
光一が頭を押さえながら、沈痛そうな顔でそう告げた。
優子も秀吉も流石に否定する気はなく、うんうんと頷いた。

「……それで、条件って？」
「姫路と島田は、未だに自分のしでかしてる事に対して自覚がないからな。それを逆手にとって明久にとある保険をかけてある」
「保険って言うと……ヘタなことしたらまた誤解が再発するように？」
「その通り。まあアイツ等は納得できないだろうが、俺にしてみれば誤解を解いた所でハイリスクローリターンだ。だがこれを利用して、アイツ等の性格を矯正する事は出来る」

光一は根に持つ人間なので、気に入らない人間に対して容赦と言う物がない。
例として雄二が挙げられる。

「色々と考えてるのね」
「明久は友達で相棒だからな。だからこそ、大切にしてやりたいんだよ。勿論優子と工藤もだけど」
「なっ！？　……その、ありがとう」

顔を赤くして、素直に礼をいう優子。
その様子を見て、少しむずがゆくなり顔をそらす光一。

「やれやれ、ワシは完全に邪魔じゃの。それはそうと光一、そういう目論見であるならば確かに被害は出ぬじゃろうが、ＦＦＦ団や雄二が黙ってるとは思えんぞい」
「まったく、ああいう事してるからモテないってことわからないの

かしら？　それに坂本君も、幾ら光一に散々痛い目あわされてるとは言え、少しは懲りてほしいわ」
「アイツ等に関しては既に予防位考えてるよ。そもそも行動力が並外れてるってのは、言い換えれば我慢が出来んって事だ。わかりやすく言えばイノシシも集団でかかれば対処し難いが、対処できない訳じゃない」
「つくづく頼もしい限りじゃの」
「ホントね。光一が別のクラスの代表だったらこれ以上怖い物もないわ」

心からの優子の言葉だった。

「しかし何故雄二は執拗に光一を狙うのじゃろうか？　光一が妥当されては、今後に支障が出ると言うのに」
「それは俺が色々と霧島と商売してるからだろ？　スタンガンとか、手錠とか」

そう言って、光一は一枚の紙を取り出す。
それは水族館のペアチケット。

「こんな物とか」
「……確かにお主を野放しにしては、雄二の自由は遠のく一方じゃの」
「どの道もう観念するべきだと思うけどね」

光一がメールを送るのを、少々呆れた目で見る木下姉妹（笑）
ふと光一が、何かを思い出したように優子を見る。

「雄二なんかより懸念すべきは、寧ろあれから何の兆候も見せようとしない兄貴の方だ……とまあ、もう良いだろ？　それより優子、

頼んでたあれの進行状況は？」
「ああっ、あれ？　……アタシも愛子も全然よ。大体無理があるわよ、そもそもが」
「もちっとだけ頑張ってくれないか？　形だけ整いさえすればいいから」
「報酬の愛子と一緒にラ・ペディスのケーキセット1週間分、もう4日分追加ね？」
「わかった……一先ずムッツリーニだけでも何とかするか」

工藤愛子がらみで殺意が増したムッツリーニが、現在光一にとって最重要人物であった。
それを何とかする事で、突破口を開く……のが、現時点での彼の課題。

「けどその前に……えーっと“方法を問わず、旦那を暫くAクラスで預かってください。水族館のペアチケット進呈します”っと。送信完了」
「……ねえ秀吉、光一と坂本君って一体どんな間柄なの？」
「確か、友達……の筈じゃ？」

そしてFクラス教室にて。
まだ襲撃準備が整っていないと見えるFクラスメンバーを余所に、光一はある人物と対峙。

「ムッツリーニ、話がある」
「……用件は？」
「和平の提案だ。まずはお前との」
「……聞こう」

自分を優先させることで、ムッツリーニは疑問に思いつつも話を聞く事に。

「まずは……俺はそろそろ静かに過ごしたいが、お前にとってはそうはいかないんだろ？」

「……（コク）」

「それでだ、女を紹介してやる」

「「「許すか！！」」」

ムッツリーニともども、周りをＦＦＦ団に囲まれた。

「まあまずは正座でもして聞け。今工藤と優子に頼んで、合コンのセッティングを行ってる」

「「「詳しく聞かせてください！！」」」

全員が黒装束を脱ぎ、正座した。

「変わり身はええな！？　今言った通りだ。本当は癪以外何物でもないが」

「「「感謝する！！」」」

「……が、ムッツリーニを優先させる。拒否は全員の権利放棄とみなすからそのつもりで！」

「ふざけ……」

ズドゴメキョッ！！！

「「「続きをどうぞ！」」」

文句を言おうとした横溝をはじめとする一部に、大ぜいが取り囲み

袋叩きにした。
（ＦＦＦ団ほぼ全員の頭脳内：欲望　＞　嫉妬　大事の前の小事）
「……どんな人？」
「サバイバルゲーム愛好会の先輩。お前と同じで保健体育が得意」
「……まずは会わせろ。話はそれから」
「わかった。ついでだから明久に秀吉も来い」
仲間割れを起こす中で、４人はさっさと場を後にした。
所変わって、４階の３年教室。
騒動の余韻冷めぬ時期故に、光一には突き刺さる様な視線が集中していたが、気にすることなく目的地へ。
「よもや光一に姉上以外に女性関係があったとは」
「お前も大概酷いな！」
「ん？　あっ、久遠に吉井！？　テメエ何しに来た！？」
光一のツッコミに気付いたのか、とある２人組が機嫌悪そうに突っかかってきた。
「ん？　なんだ、親指とモヒカンか」
「誰が親指だコラアっ！！」
「ちょっと部活の事で先輩に会いに来ただけだ。いちいち目くじら立てるな」
坊主の方は納得いかなかったが、モヒカンの方に宥められ一先ず引くことに。

「それじゃすぐに終わるから、目障りだったら悪かったよ。じゃあな」
「おい、兄貴の事は聞かないのか？」
「あんな奴にもう興味はねえ」
吐き捨てる様にそう言って、明久達を伴い去って行った。
そうして到着したのは、３年Ｄクラス。
「失礼。島津先輩います？」
全員が視線を向けたと思いきや、光一を見て悲鳴をあげた。
「失礼だな……」
「無理ない」
そうぽつりと言ったのは……
「あっ、おはようございます島津先輩。例のヤツ紹介しに来ました」
「御苦労さま。で、どの子？」
分厚いビン底眼鏡を付けた、小柄でスリムな女子生徒。
その顔は整っているが、感情希薄……と言うより無表情。
淡々としたしゃべり方で、何でもないかのように光一に歩み寄った。
「こいつです。ムッツリーニってご存じでしょ？」
「うん。保健体育が異様に得意なスケベだね」
「……（ブンブン）！」
「別に隠さなくていい。男性が女性に興味を持つのはおかしい話じゃない」

くいっとメガネを直しながら、品定めするようにムッツリーニを見始める

「こちら島津さやか先輩。サバイバル同好会の会長で、サバイバルゲームやる時は総司令」

「久遠君ほどじゃないけど、それなりに頑張ってる」

「光一程頭が回るのであれば、今教室の設備がDクラスなのは不自然じゃろ」

「だよね」

あっけらかんとい言いながら、ムッツリーニの品定めは続く。

「んー……ちょっと2、3質問良い？」

「……？」

「ナースと巫女、どっちがいい？」

「……それぞれに異なる魅力があるから、一概にこれと決められない」

周りが呆然とする中で、ムッツリーニが淡々とそれを返した

「あの、光一？」

「コスプレマニアなんだよこの人。ついでにメカオタクで保健体育も3年で兄貴に次ぐ点数らしい」

「紹介した理由が分かったぞい」

それから2、3の質問の後に、満足したように頷く少女。

「うん、気に行ったよ」

「……そう言って貰えて何より」

「ところで保健体育が得意なんだってね？　折角だから、模擬試召

戦争で勝負してみない？　保健体育で」
「……わかった」

そして、職員室。

「で、俺をわざわざ訪ねた訳か？」
「秀吉の腕輪じゃフィールドの科目設定は出来ないからな。それに今騒動の余韻が治まってないから、俺達がらみじゃアンタでもないと召喚許可が出来そうにない」
「まあ何かの悪だくみじゃない事は確かな様だから、良いだろう」

鉄人こと西村教諭は、補習教師と言う立場上フィールド形成をする事はない。
だが彼は全教科のフィールド形成が可能である。

「「サモン」」

『３－Ｄ　島津さやか　保健体育４１０点』
ＶＳ
『２－Ｆ　土屋康太　保険体育５７８点』

召喚フィールド上に現れたのは、小太刀を持った忍装束のムッツリーニの召喚獣。
そして巫女装束を纏い、手には輪刀を持つ島津の召喚獣。

「あれって確か、輪刀？　戦国○Ａ○Ａ○Ａで毛利元就が持ってる奴」
「いや、俺も始めてみるから」
「そうなの？」

輪刀をフラフープの様に構え、ムッツリーニの召喚獣と対峙する島津の召喚獣。
ムッツリーニは一気に勝負を決めるべく……

「……加速！」

腕輪の能力を使う。
その一瞬で、島津の召喚獣は真っ二つに……

「……っ！？」

なったと思ったら、別の方向に召喚獣がいた。

「どっ、どういう事！？」
「島津先輩の召喚獣の腕を見てみろ」
「え？　あっ、そっか。腕輪がある！　じゃあ、幻があの人の能力？」
「んー……ハズレ」

輪刀を回転させ、その中心をムッツリーニの召喚獣に向けると同時に腕輪が輝き……

「……っ！？」

輪刀から光線が噴出し、ムッツリーニの召喚獣めがけて襲いかかった加速でそれを回避するが、左腕が光線を受け焦げていた。

「成程、光を操る力か」
「ご名答。扱いは難しいけどね」

「……負けられない！」

ムッツリーニが再度加速を遣い、襲いかかる。
再度真っ二つになるも、それは召喚獣ではなく……。

「んー……悪くはないけど」
「……！？」

光を使った幻が消え去り、代わりに召喚獣の輪刀がそこにあった。
それも光の充填完了の状態で。

「得点勝ってるからって力押しじゃ、私に勝てないよ？」

加速を使うまでもなく、輪刀からの光線で戦死するムッツリーニ。
消え去って行く召喚獣を見て、ムッツリーニはがっくりと膝をついた。

「……バカ、な」
「久遠君に色々と教えて貰った身だからね。多少点が負けてるなんて、何ともないよ」
「成程のう。それならば無理もないか」
「それじゃムッツリ君、今週の日曜家に来てよ。新しく買おうと思ってるカメラについて意見欲しいから」

「おっ、良かったなムッツリーニ。好印象だぞ？」
「……どうでもいいけど、カメラなら任せろ」
「素直じゃねえな」

おまけ

「どういう事よ！？　誤解は解くって言ったんじゃないの！？」
「お前らの行動制限の為だ。どうせどうしてこうなったか全然自覚してないだろうから、こうでもしないと危なっかしいんだよ。俺や優子達もな」
「でも、これじゃ木下君が……」
「あのな、贅沢言える身か？　お前らだけじゃ誤解が解けないから、俺に頼むしかないだろ？」
「くっ……」
「別に絶交しろって言ってるんじゃないし、お前らだって意味もわからず嫌われるなんて嫌だろ？　だからこれはその手助けみたいなもんなんだ。それともまた暗殺実行犯とみられたいか？」
「……わかったわよ。アキとまともに話ができないなんて、もう嫌だから」
「そうですね……明久君と普通にお話が出来る方が、ずっと大事です」
「そういう気持ちだけは俺も買ってるんだけどな……ただやり方が間違ってるだけで」

おまけ2

「坂本君も観念しなさいよ。謀略や姦計で光一に勝てないんだから」
「絶対いやだ！　あの野郎が生きてる限り、俺に自由と安息は訪れないんだ！！」
「代表、静かにさせて？　そろそろ期末試験だから、勉強しないと」
「……わかった」
「おい木下！　お前絶対光一の影響受けてるだろ！？　おい待て、

せめてこの鎖をむぐぅぅぅぅう！！」

第百六問　期末試験編　プロローグ（前書き）

はい、期末試験編開始です！
この作品書いて一周年なので、今回特に力を入れたつもりです。
玲さんとの絡みはまだなので、ご了承ください。

第百六問　期末試験編　プロローグ

「……雄二」
「何だ翔子？」
「……携帯電話を見せてほしい」
「どうした？　何でいきなりそんな事を言い出すんだ？」
「……昨日、ＴＶで言ってたから」
「ＴＶで？　何を？」
「……浮気の痕跡は携帯電話に残っている事が多いって」
「ほほぅ」
「……だから、見せて」
「断る」
「……歯を食いしばって欲しい」
「待て！　今途中経過が色々とんだぞ！　いきなりグーか！？　グーで来る気か！？」
「……見せてくれる？」
「あー……いや、それがだな。今日はたまたま家に忘れてぎゃあああっ！　目が、目がぁぁっ！」
「……最初からこうするべきだった」
「結局いつもの目突きじゃねぇか！　歯を食い縛れってのはなんだったんだ！　フェイクだったのか畜生！」
「……雄二、手をどけて。携帯電話がとれない」
「わ、渡さねぇぞ！　やっと直って帰って来たばかりだってのに、お前なんかに奪われてたまるか！」
「……抵抗するなら、ズボンをトランクスごと持っていく」
「トラ……っ！？　百歩譲ってズボンはまだしも、トランクスは関係ないだろ！？　お前は下半身裸の状態で投稿しろと言うのか！？」
「……男の子は裸にＹシャツ１枚だけの格好が大好きって、お義母さんから聞いた」

「違う！　好きだからって自分がなりたい訳じゃねぇ！　そこはかなり大事な所だから間違えんな！」
「……それに、私も雄二のその姿を見てみたい」
「お前は変態か！？」
「……変態じゃない。幼馴染の私には、雄二の成長を確認する義務があると言うだけ」
「ええい、ベルトに手を伸ばすな！　ズボンのホックを外そうとするな！　わかった！　渡す！　携帯電話を渡すから！」
「……そう」
「翔子。何故そこで露骨にがっかりした顔をするんだ？」
「……それじゃあ、携帯電話を見せて」
「やれやれ……頼むから壊してくれるなよ、機械音痴」
「……努力する」
「そうしてくれ」
「……」
「どうだ？　何も面白い物はないだろ？　わかったら大人しく携帯を返し……だから待て！　何故俺のズボンに手をかける！？　携帯はもう渡してあるだろ！？」
「……最近、この須川と言う人からのメールや着信が多い」
「あん？　それがどうかしたのか？　一応言っとくが、須川は男だぞ」
「……つまり、雄二の浮気相手はこの須川と言う人と言う事になる」
「いや、ならないだろ」
「……だから、お仕置き」
「どうして俺のまわりには性別の違いを些細な事と考える連中が多いんだ……？　忌々しいが、光一の気持ちが痛すぎる程にわかる気がする。良いか翔子、メールの内容をよく見てみろ。ただの光一抹殺の為の連絡だ……って待て待て、ズボンに手をかけるな！」
「……久遠はそういう話をすごく嫌がる。その所為で最近発狂する事が多いから、気を付けてあげて」

「話聞いてたか!?　それとその気遣いをどうして俺に向けない!?」

「……私たちの未来を祝福してくれる大事な友達。私たちのデートの下準備は全部彼がしてくれた」

「だからこそだ!　あの野郎が暗躍してる所為で、俺の自由は日々遥か彼方へと遠ざかってるんだ!!　今すぐぶち殺してやらにゃ、俺は試召戦争で勝っても自由にはなれん!!　……ってコラ翔子!　いつの間にか抜き取ったベルトとズボンを返せ!」

「……ダメ。雄二はもっと友達を大切にするべき」

「あんなクズモヤシ誰が友達だと……だーコラ!　せめてトランクスだけは!!」

期末テストがもうすぐの時期の朝。

「ねえ光一に秀吉、もうすぐ期末試験だけど勉強はどう?」

「ん?　まあ去年よりは出来るだろ」

「ワシも、光一に教わった物理に数学、英語は何とか点数がとれそうじゃ」

Aクラスの優等生である優子は、特に焦る様子も見せず気軽にそう問いかけた。

今や総合科目はBクラス並の光一と、その光一に教わりそれなりになった秀吉は、妥当な返答を。

「まあ平和になった事だしのんびりしたいけど、そうもいかないか」
「当然よ。光一には来年Aクラスに入って貰わなきゃいけないんだから」
「やれやれ、ワシはすっかり除け者じゃの。光一を取られた様でさびしいのじゃ」
「異端審問会に聞かれたら危ないからやめろ」

秀吉の気持ちは分かるが、異端審問会をけしかけるも同然の言葉は出来れば避けてほしい。
というのが、光一の弁。

「何言ってるのよ？　アタシ達元々兄弟みたいなものなんだから、気がねする必要ないじゃない」
「そうそう。言い表すなら、長女長男次男……次女ってか？」
「何故言いなおすのじゃ！？」
「冗談だって。秀吉はこれからも俺のかわいい弟分、それに変わりはねえよ」
「うむっ、ワシにとっても光一は大事な兄貴分じゃ。ワシもそれは変わらんぞい」

長年幼馴染であり兄弟分。
それはこれからも変わらない事に、２人して安著の笑みを浮かべる。

「全くもう、そういうの何か羨ましいな」
「姉上もすっかり変わったのう。むっ、あれは雄二では……」
「ん？　ああ、雄二……？」

秀吉と光一は雄二の姿を見て、疑問と嫌悪感をあらわに。
優子は即座に顔をそらした。

「ん？　光一に秀吉に……げっ、木下！？」

光一に秀吉は普通どおりに返すが、女子の優子を見て雄二は鞄で下半身を隠す。
何故か彼の格好は、天下の往来で上半身が制服で下半身がトランクス姿だった。

「……秀吉、優子、こっちだ」
「おい待て！　事情くらい聞こうと思わないのか！？」
「見るな話しかけるな近寄るな息するな変態」
「全部テメエの所為だ、ってか息するなは酷いだろ！！　いや待てコラ、制服をよこせ！！」

まず真っ先に動いた光一は、即座に進路変更。
雄二が近寄ると同時に駆け出し、雄二もそれを必死に追い始める。。

「どうしてズボン履いてない人に追い回されなきゃいけないの！？」
「優子、悲鳴をあげてくれ」
「少しくらい躊躇しなさい！」

優子は光一の容赦のなさにツッコミを入れたが、そうするべきかと思っていた。

「ん？　あれって、久遠と木下姉妹じゃないか？　その後ろ……って、坂本だよな？」
「下半身パンツ一丁で追い回すって、マジかよ……」
「アイツあんな趣味があったのか。しかも久遠のズボンまで狙って

るらしいぞ？」
「やっぱり坂本君が攻め！？　攻めなのね！？」

周りは当然その奇怪な光景を見て、あれこれ話し始めていた。

「誰か助けて！　変態ゴリラが襲ってくる！！」
「木下！　お前まで俺をゴリラ呼ばわりするのか！？　お前絶対光一の影響受けてるだろ！！？」
「いや、この状況で無理もないぞい！」

それを聞いた優子は、迷わず悲鳴をあげ始めた。

そして学園の校舎にて。

「雄二よ、一体何があったのじゃ？」
「こいつの所為で翔子にズボンを奪われたんだ！」
「一体……ぜいっ……俺が……何し……」
「光一、今はしゃべらないで。ほら、深呼吸しなさい」

心配そうな優子に付き添われる息も絶え絶えの光一を、忌々しげに雄二は睨みつける
優子の目に触れたくないから、少し距離を取らざるを得ない為である。

「まったく、仲がよろしい事で」
「そんな事より、いつまでその格好でいるつもり？　ハーフパンツでも穿いてきなさいよ。今度は西村先生を呼ぶわよ？」
「じょっ、冗談じゃねえ！　こんな格好で補習室なんて嫌だぞ！！？」

優子の毒舌に、雄二も流石に驚きを隠せなかった。

「あれ？　今の……坂本君？」
「むっ、工藤か。おはようじゃ」
「あっ、おはよう木下君……ん？」

そこへ通りがかった愛子が、秀吉にあいさつ。
それから……

「え？　どうして久遠君が死にかけてるの？」
「ほら光一、ゆっくりと呼吸しなさい。落ち着いて」
「え？　大丈夫？　えっと、のみかけで良いならはいこれ」
「ほら、ゆっくり飲みなさい」

「……やはりさびしいのじゃ」

秀吉はさびしそうに、愛子と優子に心配そうに付き添われてる光一を見ることしかできなかった。

それからFクラス教室にて。

「成程……てか、お前が俺にケンカ売ってなきゃ避けられた事だろうが。自業自得だ」
「テメエがさっさとぶち殺されねえからだ！」
「まったく、自分以外のカップルが出来るのが嫌だからって」
「俺は独身だ！」

北風と太陽

2人の掛け合いをみて、何となくその作品を思い浮かべた秀吉。

「そんなに嫌なら、“俺は翔子なんか大嫌いだ！”とハッキリ拒絶すりゃいいじゃねえか」

「っ！？」

「自分が嫌われてるとわかれば、霧島だって一旦距離を取ると思うぞ？」

「いや、それは……」

煮え切らない態度の雄二を見て、光一はハァッとため息をつく。

「お前は思った以上にバカだな。人は騙す事は容易くできてはいても、自分を騙す事がまるで出来てない」

「なんだと！？」

「雄二、お前の行動や態度、少なくとも本気でいやがってる様に見えねえ。本気で霧島を遠ざけたいんなら、少なくとも情は捨てた方がいい。そうしないと絶対に今の間柄は切れやしねえ」

「お前、本気で言ってるのか！？」

雄二が激昂し、光一の胸ぐらをつかんだ。

光一は刺して動揺することなく、普段と大して変わらない態度を続ける。

「わからないか？　お前は霧島との関係を嫌がってるフリしてる様にしか見えない。今の関係をやめたいって言うんなら、人ばっかりだましてないで自分をだませ。翔子との関係なんてまっぴら御免だってな」

「この……」

「俺から言う事はそれだけだ。お前がどう思おうと、今霧島は幸せだよ。心から笑えてるんだからな」

光一の言葉に何も言えなくなる雄二。
それと同時に、如月グランドパークからの帰り道……

「……私、やっぱり何も間違ってなかった」

そう、迷いもない笑顔で言う翔子の顔を思い出す。

「……お前の行動原理が時々わからん」
「俺は人に嫌われてばかりだからな。その分友達に幸せになって欲しいだけだ」
「俺はどうなんだ？」
「いつ誰がお前なんかと友達になった？」
「「……（ガンのくれ合い）」」

見直し始めた雄二だったが、即座に前言撤回した。

「おはよー……って雄二、どうしたの？　何で今日はズボンが体育用のハーフパンツになってるの？」
「ん？　よう明久」

そこへ少し憂鬱そうな明久が登校

「光一にトランクス姿での登校を強要されたんだ」
「そっか、また霧島さんの機嫌損なったのを光一の所為にしようとしてるんだね」
「おぉい！　何で明久のくせに察しが良いんだ!?」

少なくとも、現状は明久でもわかる内容だと言う事である。

「まったく、ようやく眼帯取れたんだから少しは静かにしたいよ」
「くそっ……折角のチャンスが」

余談だが、光一はもうケガが治っており、今は頬の湿布のみとなっている。

「それより光一、頼みがあるんだけど良いかな？」
「ん？　なんだ？」
「今日、家に泊めてくれないかな？　ちょっと帰り辛くてさ」

ガラッ……（教室の戸が開く音）

「ウチにはアキの本心がわからないっ！」
「そういう事はもっと大人になってからですっ！」
「不潔だよ吉井君！　おのれ久遠光一！！」

バタンっ！（教室の戸が閉まる音）

「……何、今の？」
「明久、お前は気にしなくていい。まあ別に構わんけど……そうだ秀吉、お前も泊まりに来るか？」
「何故そこでワシに声をかけるのじゃ？」

ガラッ！

「アキ、ちょっとおいで？」
「明久君、お話があります」
「明久、実はこの前“コンナモノ”を」
「「わーーーっ！！」」

光一がある物を取り出そうとすると、瑞希と美波は大声をあげてそれを止めようと駈けだした。

「ごめんなさい、もうしませんから！」
「だからお願い、許して！」
「わかればいい」
「……親友のためとはいえ、流石は過激派筆頭だな」

2人が必死に光一に対して謝ってるのを見ながら、光一が取り出そうとした物に目を向ける。
それで光一がどうやってあの2人をコントロールしてるのかを、瞬時に察した。

「まあ確かに、最近おかしくなる事も多いらしいし、無理ないと言えば無理ないが……それより明久、何があったんだ？　いきなり光一の家に泊まりたいだなんて」
「た、たまにはそういう気分の日もあるんだよ！　それよりチャイムが鳴るよ！　鉄人が来る前に前に席に着かないと！　んじゃ、そういう事でっ！」

そう言って明久はその場を無理やり逃れ、席について授業の準備をし始めた。

「ふむっ……光一、お前どう見る？」
「どうでもいいさ、言いたくないってんなら」
「やれやれ、明久がらみだと面白みがない」
「お前が超がつく悪趣味なだけだ」
「「……（メンチの切り合い）」」

第百七問

問題　次の問いに答えなさい

シェイクスピア作の４大悲劇で、最も壮大な構成の作品との評もある作品を答えなさい

姫路瑞希の答え
『リア王』

木下秀吉の答え
『リア王』

教師のコメント
正解です、流石は姫路さんと演劇部のホープです。
映像やオペラもそうですが、原作に基づく形で試合を組まれたプロレス等もあります。

吉井明久の答え
『クフ王』

教師のコメント
それは最大級のピラミッドに眠るエジプトの王です。

土屋康太の答え
『女王』

教師のコメント
君にはこういう答えしか出せないのですか？

久遠光一の答え
『魔王』

教師のコメント
確かに魔王と言う作品は音楽でも文学でも存在しますが、間違いです。

「吉井、保健室へ行ってきなさい」

午前中の４つの授業にて、その言葉が７回も出て来た。

「全く失礼だな……」
「まあ、無理もないとは思うがな」
「アキ、何かあったの？　朝から様子が変見たいだけど」
「別に何でもないよ、ちょっとまじめに勉強に取り組んでみようと思っただけで……それより昼だよ」

ガラッ！

「吉井、久遠、坂本、木下、この４名はいるか？」
「ん、どうした鉄人？」
「西村先生だ、いい加減覚えろ！　学園長がお呼びだ、直ちに学園長室へ行くように」
「また稼働記録の報告かな？」

腕輪を所持する４人は、日頃稼働記録を提出の義務が課せられていた。
特に光一は自身のコレクション没収もあって、融合召喚には手間取りながらも記録は取っている。

「多分そうだろ。それじゃついでに、学園長室で飯食うか」
「そうだね。ババァ長にはもったいない位に設備整ってるから、丁度良いよね」
「じゃあ行くか。メシ持って」
「お主らは……」
「やれやれ……」

３人の言い分に、秀吉と鉄人が呆れたように溜息をついた。

「あれ？　久遠君たちどこ行くの？」

そこへ愛子と優子が、弁当をもってやってきた。
本日は愛子の番なので、愛子は２つ持ってきている

ちなみに光一は女子よりも小食なので、同じサイズである。

「なんだ、木下に工藤か。光一ババァ室に腕輪の稼働記録提出に行く所だ」
「坂本、貴様ら学園長をババァ呼ばわりか！？」
「失礼な。秀吉はちゃんと学園長と呼んでるし、俺はババァ呼ばわりじゃなくて妖怪呼ばわりだ」
「貴様はなお悪いわバカ者が！！」

光一は鉄人のゲンコツをよけると、そこから続く連続攻撃を回避。
打撃が通じないとわかるや否や、鉄人は鉄拳を繰り出すと同時に紙一重でかわす光一を捕まえ、一本背負い。
バァンと音を立てて背中から叩き付けられるが、受け身を取ってる為に対してダメージはない。

「久遠君すごいね、西村先生の攻撃をひょいひょいかわしてたよ」
「全く、俺の拳を完璧に見切る生徒が現れるとは思わなかったぞ」
「ダテに過激派筆頭なんて呼ばれてねえいでで！！」
「すみません西村先生、アタシの方で厳しく言っておきますんで」

優子が光一の耳を掴み、鉄人に向かって謝罪していた。
優子に頭が上がらない光一を見慣れてる鉄人は、苦笑しながらわかったと言うように頷く。

「やれやれ。やはり久遠には俺の鉄拳より、女房の説教が効果的の様だな」
「にょっ、女房だなんて……」
「じゃあボクは妾かな？」
「どっちかと言うと、アタシの方が妾でしょ。無理言ってるのアタシなんだから」
「……久遠。お前意外と女に流されやすいのだな？」
「ほっとけ！！」

その様子に唖然とした鉄人が気を取り直し、からかうように問いかけると光一も顔を赤くして抗議。

「それより妖怪の呼び出し」

「学園長と呼ばんかバカ者！　お呼びだから急げ、くれぐれも失礼のない様に！！」

そして学園長室にて。

「……昼休みに呼び出したのは悪かったよ。だがね」

学園長は呆れながら、応接用のソファーとテーブルに目を向けると……。

「だからと言って、堂々と学園長室でくつろぐんじゃない！」

そこで弁当を広げて食べてる3人に大声で怒鳴った。

「いーじゃん別に。メシ時に呼び出すんだから、これ位許してくれたってよ」

「そうですよ。僕達学生にとっては、昼休みは貴重なんですから」

「そうだぞババァ。貴重な時間を削る代償位払ってもバチは当たらねえ」

「……アンタ達には学園の最高権力者が誰かと、ここがどこかって言うのを教えてやった方がよさそうだね」

ただ1人、学園長の前で礼儀正しいたたずまいの秀吉も、学園長の態度には同意だった。

やれやれとため息をつくと、４人の腕輪から読み取った稼働記録に目を通す。

「ふむっ……けがの功名と言うか、ここまでデータが得られるとはねえ」

予想以上のデータ量に、学園長も苦笑した。
それもそのはず、彼等は騒動に次ぐ騒動で、かなりの回数腕輪を使用していた。

「ところで妖怪、ちょっといいか？」
「何だいモヤシのクソジャリ？」
「さっき耳に挟んだんだが、試験召喚システムをまた大がかりな調整するそうだな？」
「ん？　ああ、そうさね。オカルトと通常の切り替えができる様になったとは言え、まだまだ調整が必要だからね。心配には及ばないよクソジャリ、夏休みに入る頃にはまた使えるようになる筈さ」

つまり、一学期はもう使えないと言う事。
それが意味する事は……

「じゃあ、もうすぐ解禁される予定のワシ達の試験召喚戦争は？」
「二学期まで待ってろって事さね」
「何だと！？」

試験召喚戦争の敗北クラスには、ペナルティとして“３ヶ月の開戦禁止期間”が存在する。
これは負けたクラスが再度挑戦し、泥沼化させないための処置。
その間我慢し続けて来た雄二にとっては、さらに待たされるのは我慢できない。

明久も誤解が解けた以上、姫路の為に設備の向上を再び目指し始めていた矢先にこれでは立つ瀬がない。

「一応使えない事はないんだがね……使わせる気はさらさらないよ。教職員にも、試召戦争の申し込みがあったら止める様に、と伝えてあるしね」

「使えない訳でもないのに禁止って、まるで意地悪みたいじゃないですか！？」

「みたいじゃなくて、意地悪その物さね。大体理由なんてすぐわかると思うんだがね」

「うっ……あー、そうだったな」

光一と雄二が、納得したようにそう言った。

秀吉も頷き、その様子を見て明久もようやく察した。

「その様子じゃ、気付いた様だね。あんた達が何を勘違いしているのか知らないけどね、この学校……試験召喚システムの本来の目的は“学生の勉学に対するモチベーションの向上”なんだよ？　だと言うのに、アンタ達のやってきた事は何だい？　吉井明久の校舎の壁の破壊に始まり、久遠光一の教頭室爆破、坂本雄二主導による学年全体での覗き騒ぎに、そのあとの私怨による他学年すらも巻き込んだ試召戦争騒ぎ……どれも学生の本分から逸脱どころか、悪い方向に進んでばかりじゃないか。それに加え、学園始まって以来１人も出なかった観察処分者が１学年に３人も出てるんだから、否定できる要素は一切ない筈だよ？」

そのうちの１人を含め、騒ぎの張本人達は揃って目をそらした。

「だが騒ぎを繰り返すうちに、俺達の成績は向上している筈だ。つぶれた授業の為の補習だって受けているしな」

「そ、そうですよ！　キチンとやる事はやっています！　現に光一はBクラス並に、僕だってDクラス並には成長してるんですから！　これだって十分……」
「そういう事じゃないんだろ？　どうせ」
2人の講義を、光一が冷静に止めた。
何が言いたいのか察している様子に、学園長も感心した目を向ける。
「どういうことなの光一？」
「前にも言ったろ？　文月学園は世論に弱い。だから俺達がいくら頑張ろうと、世間が認める様な要素がない限りは意味がないって事だ。まあ考えてみれば、後一週間で期末試験で、そのあとは夏休みだ。特にデメリットもないな」
「その通りだよ。確かに点数自体は伸びているかもしれないが、世間がどういう目で見るかが問題なのさ。それに言いたい事はモヤシのクソジャリが言ってくれたさね」
学園長は憔悴したように、ふかい溜息をついた。
この学園は試験召喚システムの導入により多数のスポンサーが集まっており、学費が非常に安い。
しかし先ほど述べた様に、世論に弱いというデメリットを生んでしまう。
「つまりは、不調を利用しシステムのメンテナンスを世間に対する隠れ蓑に使い、実際には俺達を期末試験に集中させるために禁止する、と言う事か」
「それに加えて血の気が多い奴が多いから、こうでもしない限り集中なんてしないだろうって配慮もあるな」
「相変わらず久遠と坂本は察しが良いねえ」

「えっと……」
「要するに、“試験召喚戦争を禁止するから、その代わりに期末試験頑張れ”ってことだ」
明久は光一に説明で、納得した様な顔になる。
「とはいっても、アンタらみたいなのはどうせそれだけじゃまともに勉強なんてしそうにないしねぇ……成績の向上が見られないようであれば、特別夏期講習でもやろうかね」
「なにぃっ!?　おいババァっ、それはいくらなんでもあんまりだ!!」
「贅沢な事を抜かすクソジャリだねえ。なんなら夏期講習に加えて、試験召喚戦争を三学期まで禁止にして、勉強漬けにしてやってもいいんだよ?」
雄二どころか、明久と光一、秀吉までもが顔をゆがめた。
「おいおい妖怪、そんなことしたら俺たちどころか余所のクラスだって反発するだろ」
「それも考慮してるさね。それにアンタらの言いたい事も分からないでもないからねえ……だから今回は特別に、システムのリセットをおまけにしてやるよ」
「「システムのリセット?」」
明久と秀吉が、疑問符を浮かべながら互いに顔を見合わせた。
「メンテナンスの件もあるし、一旦蓄積されているデータを白紙に戻してやるって言ってるのさ。そうすると、少しはやる気が出てくるんじゃないかい?」
「ほう……それは悪くない話だな」

「ああ。俺はBクラス並に、雄二はAクラス並に総合が上がってるから、期末試験の点数次第で召喚獣の装備がより強力になるって事だからな」
「え！？　それって、召喚獣の装備が期末の点数次第でまともな物になるって事！？」
フィードバックの事があり、明久にとってはありがたい話だった。
「システムのリセットって事は、召喚獣の装備も白紙に戻るって事だからな。けどいいのか？　確か装備の変更は学年末って話なのに」
「ああ、今回は特別にさ。本来は勉強ってのは誰の為でもなく自分の為にやるもんだから、こういうのは間違っていると思うんだけどね……」
「まあ今回は事情が事情だから、か。俺達にとってもありがたい」
珍しく教育者らしい事を言ってる学園長に、光一は少しは敬意を表した
「あと期末試験の間だが、アンタ達の腕輪を一時預からせて貰うよ」
「腕輪を？」
「ケガの功名とでもいうべきだね。あの騒動でアンタ達がかなりの頻度で腕輪を使ってくれたから、かなり膨大なデータが手に入ったのさ。上手く行けば近いうちに新技術のお披露目ができるかもしれないさね」
「ホントケガの巧妙だな」
光一と雄二が、苦笑いしながら頷いた。
「えっと、つまり？」
「あの騒動で俺達全員が結構腕輪使っただろ？　その時の稼働記録

をもとに、俺達の腕輪に新機能が付けられるかもしれないって事だ」
「そっか。じゃあ悪い事ばかりじゃないって事だね」

早速明久が腕輪を外し、学園長に渡す。
そして雄二に光一、秀吉もそれに続いた。

「そういう事なら頑張るか。優子に工藤も勉強手伝ってくれるって話だし」
「え？　そうなの？」
「ああ、来年は同じＡクラスになりたいって言ってな。それに監視役がついて結果を出せば、俺への風当たりも少しは治まるかもって配慮もあるらしい」
「そういやアンタ二股かけてるそうだが、その所為か少し丸くなったんじゃないかい？」

意地の悪い笑みを浮かべながらの学園長のからかいに、光一は顔を赤くしてそっぽを向いた。

「まあそうと決まれば、さっさと……」
「よし、やろう！」
「え？」

光一の発言を遮って、明久が一念発起した様な声をあげた。
その様子を見て、光一はおろか雄二も秀吉もあっけにとられる。

「期末テストで良い点とって、２学期の試験召喚戦争頑張ろう！」
「お、おう。そうだな」
「うっ、うむ」
「ま、やる気が出るってのは良い事か。さ、用事済んだろ？　戻るぞ」

「そうだね。じゃあ期末終わったらまたここに来なジャリ共、さて……早速始めようかね」

学園長が何かの端末をいじり始めるｔドジに、学園長室を出て教室に戻り始める４人。
そこでふと、光一が明久にとい掛ける。

「ところで明久、やっぱり姫路の為か？」
「え？　うん、一応ね。誤解であんな事言い続けてたから、そのおわびかな？　けど、Ａクラスにもお世話になってるし、Ｂクラスにとどめるべきかな？」
「何を言ってる明久！　狙うならＡだ、それ以外認めない！！」
「やれやれ……だったら雄二、Ａクラスと交換する設備はせめてＣクラス並にしてくれよ？」
「ふむっ……良いだろう。なんだかんだでＡクラスには世話になってるから、それ位してやってもいい」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべ、雄二はそれを了承した。
秀吉もその意図を察し、苦笑する。

「なんだかんだで、光一も姉上に甘いの……いや、工藤にもか」
「秀吉もそうだし、親友の明久にもな……後雄二、変な噂ばら撒きやがったら今朝の事を霧島に“少し”捻じ曲げて工藤経由でバラすから」
「お前の少しは絶対当てにならんだろ！　特に工藤相手じゃ絶対俺は破滅だろうが！！」

第百八問

問題　以下の単語の口語訳を答えなさい。

“切に”

姫路瑞希の答え

『ひたすら』

教師のコメント

正解です、流石ですね姫路さん

吉井明久の答え

『切ない』

教師のコメント

吉井君にしては割と普通の間違いの様な気がします

久遠光一の答え

『切る』

教師のコメント

流石は久遠君です、よもやこんな過激な答えが古典で出るとは思いませんでした。

島田美波の答え
『切断』

教師のコメント
久遠君以上に過激な答えがありました

「ようやく戻ってきたか」
「……これに懲りたら、二度と浮気をしない様に」
「浮気じゃねえ！」

学年長室から教室へ戻る途中。
４人は雄二のズボンの為に、Ａクラスへと出向いていた。

「……学園長室で堂々とくつろぐって」
「……ホント、核弾頭トリオの皆は一味違うよね」

そのついでに弁当箱を洗って返すと報告しに来た光一が、優子と愛子に学園長室であった事の説明。

「だとしたら、アンタ達４人にとってはすごく有利な話じゃない？」
「そうだよね。坂本君はＡ、久遠君はＢ、弟君と吉井君は確かＤク

ラス並でしょ？　総合科目」
「まあな。それに加えて、あの騒動でしこたま腕輪使ったからそれなりにデータが溜まったらしいし」
「じゃあもしかしたら、３人融合なんて出来るかも。その時はボクと優子が相手でやってね？」
「そっ、そうだな。その時には、お願いするよ」

不埒な想像がちらりと頭をよぎった為、少し目をそらした光一。
ちなみに男子にも一部そう言う動きを見せた者がいた

「やれやれ、いつもなら光一を木下がいたぶる流れだってのに、つまらねえな……」
「ちょっと坂……ゴリラ君、そんな所でつっ立ってないでさっさと着替えたら？」

言い方が気に入らないのか、優子が雄二に突っかかった。
優子が勝気なのは知られているが、罵倒を交えた事は初めてなのでほぼ全員目を見開く。

「ちょっと待て木下姉！　今何で言いなおした！？」
「いつまで上が制服下がハーフパンツの奇妙な姿でいるつもりなの？」
「おい無視するな！　光一の妾になって以来俺に冷たくないか！？」
「別にＦクラスじゃあるまいし、たかが光一とのキスを大声でばらさて学校全体に知れ渡った位で怒ったりしないわよ」
「「「……いや、絶対根に持ってるよ」」」

教室のほぼ全員が同調した。

「……妾って部分否定しないんだな？」

「無理言ったのアタシなんだから、その程度甘んじて受けるわ」
「……そうか」

堂々とした優子の物言いに呆然としながら、返してもらったズボンをハーフパンツの上から履く雄二。

「なあ光一、お前確かフラれたんじゃなかったのか？」
「いや、その筈なんだけど……」
「なんだかんだでくっつく展開か……どこのラブコメだ！？」

雄二のツッコミに、全員が頷いた。
光一も複雑そうに頬をかく。

「まあ、それは……そのな？」
「……まったく、惚れた女には甘いってか？　過激派筆頭が聞いて呆れる」
「女から逃げ回ってる悪鬼羅刹にだけは言われたくないんだが」
「「……（ガンのくれ合い）」」

「ホントこの2人って犬猿の仲と言うか化学反応と言うか、とことん相性が悪いよね」
「一応周囲からは、悪鬼羅刹と過激派筆頭の2つ名が所以の“はぐれ武闘派コンビ”と呼ばれておるがのう」

ガンのくれ合いを行う2人を見て、愛子と秀吉は顔をひきつらせながらそんな事を話していた。

「でも試召戦争が禁止って言うのはありがたいよね。久遠君たちを狙う人はまだ多いから、少しは静かになるよ」
「まあ、そうだな。俺もそろそろ静かに過ごしたいし」

合宿が明けてから騒ぎも襲撃も絶えない為、光一もいい加減疲れていた。

「そう考えるとつまらんな。光一と明久が追い回される姿を見るのはここ最近の楽しみだと言うのに」

「代表、旦那のしつけはしっかりしてくれない？　今朝パンツ一丁で追い回されたんだけど」

「ああ、俺もズボンをよこせと迫られた」

「待て、変な部分だけを抽出して強調するな！」

だが事実である。

それを聞いて一部は顔を赤らめ、一部はああっと思い出し、約一名は……。

「……雄二、私は雄二に酷い事をしたくない」

「そっ、そうか。それは……」

「……だから、大人しく私にトランクスをちょうだい」

ダッ！！　（雄二、猛ダッシュ！）

「さて、静かになったな」

「そうね」

「あはは、雄二ってばバカだなぁ」

連携を取った2人と明久は、何事もないかのように2人を見送った。

「……優子、最近変わったよね？」

「そう？　変わったとしたら、色々と吹っ切れちゃったからかな？」

「そうじゃな。でなければあの姉上が、光一の妾と言う立場をあっ

さり受け入れられる訳ないの」

秀吉の発言で、ああっと全員が納得した。

「やれやれ、相変わらず騒がしいな」

そこへ眼鏡に手をあてながら、久保がやってきた。
その視線は明久に熱烈な意味を込めて集中させている。

「……何故だろう？　最近久保君に会うと、妙な寒気がする」
「明久よ、気にするでない」

明久を安心させるかのように、秀吉がポンポンと背を叩きながらなだめるようにそう言った。

「なんだ久保か。何か用か？」
「久遠光一、君に聞きたい事があるんだが」
「聞きたい事？」
「君が大神白夜の弟だと言うのは本当……か？」

久保の兄の名を口にした途端、光一の纏う雰囲気が酷く冷たく研磨されたかのような鋭い物に変わった。
秀吉と優子はもちろん、例の騒動時に見たことある明久と愛子は少し動揺するが、周りは光一をみて悲鳴をあげ距離を取り始める。

「……そうだが、それがどうかしたのか？」
「いっ、いや、ただ気になっただけなんだ……あの騒動が終わってすぐ、３年で試召戦争があったからね」
「……ああっ、あれか。俺に負けて弱体化したと甘く見たＢクラスが宣戦布告した奴だろ？」

「なんだ、知ってたのか」

光一により白夜が打倒された次の日。
３－Ａ弱体化という話が広まり、そのすぐに３年Ａクラス対Ｂクラスの試召戦争が勃発。

しかし戦争は一日で終結した。
……大神白夜により、大半の戦力と代表が討ち取られる事で。

「代表が前に出て大半の戦力を壊滅って事！？」
「兄貴ならやりかねねえよ。以前にも言ったけど、アイツは自分の事を神様か何かに選ばれた存在だと本気で思っている様な奴だ。だからこそアイツは自分に欠点や汚点がある事を決して許さない」
「え？　それって……」
「光一の打倒は諦めておらん……そう言う事じゃろ？」

疑問符を浮かべながらの明久の質問に、秀吉が代わりに答える。
光一はそれに対し頷いた。

「けど今はその時じゃない」
「どうして？」
「アイツが指のツラ共と同種じゃない事は、ここ数日を考えればわかる事だ」
「数日……ああっ、そうだね。小指さんに中指さんに清水さんは見たけど、あの人は全く見てない」
「明久よ、お主も指という呼び方が定着しておるぞい」

指のツラ事、小山、中林、清水は勝算もなく勢いと感情任せに光一に攻撃しかけ、あえなく返り討ちに。
その繰り返しで、彼女たちはクラスで立場を失っている。

「アイツは一時のじゃなくて、全体を見通したうえで自分を押し殺して、機をうかがってるって事だよ」
「どうしてそこまで……光一は弟なのに」
「同じ胎から生まれたってだけの赤の他人……いや」
冷たい雰囲気を纏ったまま、口の端をつり上げた笑みを浮かべると……
「同じ場所にはいられない者同士、と言った方がいいか」
そう発した声は、先程以上に研ぎ澄まされたかのような酷く凍てつく雰囲気のある物だった。
その目も静かな怒りが湛えられており、その目を見た数人が悲鳴をあげ怯え始める。
「……始めてみたよ。光一が誰かに対してああもはっきりと敵意を持つ所なんて」
「そっ、そうなの？　……そう言えば久遠君ってケンカ売られて買ったりはするけど、自分から売る事って滅多にないよね？　それにあの何とか団にアンチ久遠派に対しても、邪魔としかいってなかった気がするし」
光一のその様子には、流石の明久に愛子も身体を震わせた。
「……久しぶりじゃの、光一が“凶王”になった姿を見るのは」
「凶王？」
「光一の中学時代の呼び名じゃ。光一は滅多に起こる事がないが、キレてしまえばああなるのじゃ。それを指した呼び名といえばわかるかの？」

「……なんだか、わかる気がするよ」

そこへ秀吉が入り込み、光一のもう一つの呼び名を口にする。

「……光一」

そして優子は、光一が未だ兄への怒りが消えていない事を実感し、自身の胸に手を当てながら光一を見ていた。

……あの時、光一が額と手を傷つけ、まるで血の涙を流すかのような姿を思い出しながら。

一方、その頃

「大神、あんまひやひやさせないでくれよ」

「何を言っている？　まさかお前まで私が弱体化したと……」

「いや、そうじゃねえけど……ぐあっ！」

「なら戯言をほざくな。それに貴様にそのような余裕があるのか？」

「うっ……」

「全ては私に任せれば良い。奴等の事だ、もう一度騒ぎを起こす可能性は高い……恨みなどその時に晴らせばいい。無論失敗などしては意味がないがな」

「1度ならず2度まであんな屑どもに負ける訳がねえだろ！」

「バカめ。そうやって舐めてかかったバカ集団の末路は、お前も知っているだろう？　同じ轍を踏む気ならば、キサマなど奴等程の価値もない」

「ちっ……」

「光一、精々首を洗って待つ事だな。弟が兄に逆らうことの愚かさを、その身をもって教えてくれる」

第百九問

問題　この英単語の正しいアクセントを答えなさい。

“ｉｍａｇｉｎａｔｉｏｎ.”

姫路瑞希の答え

『ｉｍａｇｉｎａ,ｔｉｏｎ.』

久遠光一の答え

『ｉｍａｇｉｎａ,ｔｉｏｎ.』

教師のコメント

正解です。一般的に“――ｔｉｏｎ”と言う単語は“ｔｉｏｎ”の前の母音にアクセントが付きます。

覚えておくと良いでしょう

土屋康太の答え

『ｉ,ｍ,ａ,ｇ,ｉ,ｎ,ａ,ｔ,ｉ,ｏ,ｎ,.』

教師のコメント

数打てば当たると言う物でもありません。

吉井明久の答え

『ｉｍａｇｉｎａｔｉｏｎ!』

教師のコメント
たまに君は天才なんじゃないかと錯覚する事があります

授業が終わり、放課後。
帰り支度をしてる光一に、明久が歩み寄る。

「ねえ光一、頼みがあるんだけど」
「頼み？」
「うん。今日だけどさ、光一の家に泊めてくれない？　一緒に期末テストの勉強しようよ」

ざわっ……

「おい……聞いたか今の……？」
「確かに聞いたぜ。にわかには信じがたい事だが……」
「まさか、アイツらがな……」
「ああ。まさかあの吉井と久遠が……」
「「「期末テストの存在を知って居るなんて……」」」

「あのゴミ共には合コンの話を先に延ばすとして、俺は構わないぞ？　1人より2人でやる方が効率いいしな」

「うん。流石は光一、わかってくれて嬉しいよ」
「ちょっと待て」

明久と光一のやり取りに、雄二が割り込んできた。
今朝からの様子がおかしい事を含め、ハッキリさせたい事が色々とある故に。

「一体どうしたんだ明久？　光一に頼るのはいつもの事だが、どうして家に泊まりたがる？」
「いや、ホラ。昼休みの事があるでしょ？　“試験召喚システムのデータがリセットされる”とか“期末テストの結果が悪いと夏期講習がある”って。木刀と学ランなんて装備は卒業したいし、夏休みも満喫したいし、頑張ってみようかな～なんて」
「……明久らしくない」
「そうね。アキがその程度の理由で勉強をするなんて思えないわね」

そこへいつものメンバーが集まる。
明久の態度に疑問を持ち続けていたが故に、いい加減はっきりさせたいと思っていた。

「無理に聞き出そうとするなよ」
「久遠は気にならないの？」
「明久が嫌がるって言うんなら、無理に聞き出そうとは思わねえよ。寧ろお前らの方が図々しいだろ」

光一の言い分は通らず、全員が明久の家に何があったかに興味を持っていた。
明久のだんまりも通用はせず、雄二が胡散臭そうに目を細める。

「友達に隠し事なんて恥ずかしいと思わないのか？」

「俺も明久もお前を友達だと認めた覚えはないんだが」
「奇遇だな、俺もだ」
「行くぞ明久、時間の無駄だ」
「そうだね」

帰り道にて。

「なんで全員がついて来てるんだ？」
「なんでって、明久の家に行くに決まっているだろう」
「えーっと……」
「携帯取り出してなにする気だ！？」
「ちょっと優子にメール」
「木下経由で翔子にデタラメ言い含める気か！？」

雄二は優子も自由に対する障害であり敵であると、既に認識していた。
光一もそれをわかってるからこそ、そういう行動に出たのだが。

「じゃが、確かに気になるぞい。光一にまで黙っておる辺りが尚更に怪し過ぎるのじゃ」
「あー……考えてみたらそうした方が良かったかな？　それに秀吉だって理解してくれると思うし」
「秀吉？　……成程、そう言う事か」

自分と秀吉の共通点を考えて、光一は成程と頷いた。

「となると、仕方ないな……どうせ言っても聞かないだろうから、妙な事にならんよう俺も一緒に行くか」
「ならワシも行くかの。明久が光一にまで隠したい事となると、流

石に無理にと言うのも気が引けるがの」
「……僕の味方は光一と秀吉だけだよ」
「やっぱり久遠は……」
「じゃあ、優子ちゃんと愛子ちゃんは隠れ蓑……？」

バチバチバチっ！！

「「ひっ！」」
「そういういかがわしい想像は力尽くで止めるからな！！」
「「ごっ、ごめんなさい！！」」

懐から6本のスタンガンを取り出し、威嚇するように電源を入れると2人は震え上がった

「……でも、明久は滅多に隠し事をしないから、何があるか楽しみ」
「そうだな。光一にまで隠す辺り、どんな事があるか……もしや女でも出来た、とかか？」

ドドドドドッ！！

「あ、アキっ！　どういう事！？　説明しなさい！！」
「む、むぅ……明久に伴侶か……友人としては祝うべきなのじゃが、なんだか釈然とせんと言うか、妬ましいと言うか……」
「……裏切り者……っ！」

雄二の一言に、まず美波が明久の胸ぐらをつかみ詰め寄り、秀吉が戸惑い、ムッツリーニが明久を睨む。

「落ち着けって。だったらお前らはともかく、味方の俺に黙ってる

必要がないだろ？」
「そうですよ、明久君が私達に隠れてお付き合いなんて、そんな事をする筈がありません。私は明久君を信じてます。ね、明久君？私達に隠れてそんな人がいたりなんて、シマセンヨネ……？」
「信じてるんならその病気みたいな目はやめろ。子供どころか大人が見ても泣き出しそうだから」

光一は頭痛がする頭を押さえながら、いつもの話を聞かない雰囲気を感じ取る。
仕方ないので、こっそりと秀吉に耳打ち。

「……なあ秀吉、いい加減認めろよ。明らかに明久に彼女が出来たら困る、みたいな態度だったぞ？」
「なっ！　……何を言うのじゃ光一、ワシは男じゃぞ？」
「……でも否定できない要素がありまくりだ」
「うぅっ……」

そして明久の家にて。

「大丈夫か？」
「……考えてみたら光一に話してれば避けられた事かも知れないし、諦めるよ」
「別に気にする事ないのに。霧島雄二じゃあるまいし、話したくない事なら別に責めやしない」
「勝手に俺を婿入りさせるな！」
「……友達ってやっぱりこうだよね。光一がいてくれて本当によかったよ」

明久は光一の優しさに、目が少しうるんで居た。

「本当に彼女がいるのかしら……」
「少々緊張するのう……」
「大丈夫です。そんな事、ありません……っ」

明久が諦めたようにカギを取り出し、玄関のドアを開けた。
そして全員を招き入れ、リビングに入ると同時に……

「いきなりフォローできない証拠がぁーっ!?」

室内に干されているブラジャーと言う光景が飛び込んできた。
明久が慌てて洗濯ものを回収すると、ゆっくりと皆の方に振りかえり……

「……これ以上ない物的証拠ね！」
「そ、そうじゃな……」
「……殺したい程、妬ましい……！！」
「誰1人彼女以外の可能性は思い浮かばんのか!?」

光一は既に察していたが、全員彼女がいて既に同棲していると勝手に決定づけていた。

「それとムッツリーニ、お前島津先輩はどうしたんだ?」
「……なにもない（かぁぁっ！）」
「ああそうかい」

とりあえず場を納める事が先だと、ムッツリーニは無視する事にした光一。
そんな仲、1人落ち着いたままの瑞希が明久に歩み寄る。

「ダメじゃないですか、明久君」
「え？　何が？」
「あのブラ、明久君にはサイズが合っていませんよ？」
「「「コイツ認めない気だ！」」」
光一も流石に予想外の意見の為、全員と一緒になってツッコんだ。
「姫路さん、これは僕のじゃなくて！」
「あら？　これは……ハンペンですね」
「「「ハンペェン！？」」」
明久が弁明しようとすると、瑞希の視線はリビングの卓上に向いていた。
そこに置いてあった化粧用のコットンパフをみて、ハンペンだと言い切った。
「おい光一、お前どうせ何か感づいてるんだろ？　何か言ったらどうだ？」
「感づいてはいるけど、この空気でどうやって言えば良いんだか？……ん？」
そこで光一の目に飛び込んだのは、食卓の上に置かれていた弁当。
内容からして、女性用のヘルシー弁当。
「……」
「ひ、姫路さん……？　どうしたの……？　そのお弁当が何か……？」
「……もう、否定しきれません」
「ちょっと待って！　どうして女物の下着も化粧品もセーフなのに、お弁当でアウトになるの！？」

「やれやれ……なあ明久、さしずめ姉でも帰って来てるんだろ？」
光一の言葉に、明久が驚いたように目を見開いた。
「え！？　うっ、うん。実は姉さんが今仕事の都合で帰って来てるんだけど、良くわかったね？」
「この状況を考えたら、普通真っ先に思いつく筈だがな？　それにさっき俺と秀吉なら理解できるって微かに呟いてたろ？」
光一の言葉を聞くと、全員ようやく納得いく様な顔に。
「そ、そうよね。アキに彼女なんて居る訳ないもんね」
「……早とちりだった」
「ホッとしたぞい」
「そうですか、明久君にはお姉さんがいたんですね。良かったです……」
全員が安著の声をあげるが、光一と雄二は別の疑問に気付く。
「成程な……だがそれだけで何故家に帰るのを嫌がる上に、光一にまでその事を黙ってた？」
「うっ……じっ、実は僕の姉さんは、かなり、その……珍妙な人格をしていると言うか……常識がないと言うか……ある意味光一のお兄さんがまともに思える人だから、一緒に居ると大変で、それで家に帰りたくなくて」
「兄貴がまともに！？」
自分の兄も相当だというのに、それがまともだと言う事に光一が珍しく驚いた

「あ、アキが非常識って言うなんて、どれだけ……？　しかも久遠のお兄さんがまともって……？」
「むぅっ……この上なく恐ろしくはあるが、気になるのう……」
「……恐ろしくはあるけど、是非会ってみたい」
「そうですね。ちょっと怖いですけど、会ってみたいです」

その場全員が明久の姉に興味を持った。
あの大神白夜がまだまともに思えるほどの人と言う事で、怖いもの見たさも働いている。

「あー……なんだ。お前ら、そう言う下世話な興味はよくないぞ。誰にだって、隠したい姉とか兄とか母親とか、そんなもんがいるモンだからな」
「……明日は隕石、いや太陽か？」
「どっ、どうしよう光一、人類滅亡!?　太陽系の危機!?」
「折角の優しさをなんて受け取り方しやがる!?」

ガチャッ！

「あら……？　姉さんが買い物に行っている間に、帰って来ていたのですね。アキ君」
「ん？　どうやら帰ってきたみたいだな」
「うわわわわわっ！　か、帰ってきた！　皆、早く避難を……」
「明久君のお姉さんですか……？　ど、ドキドキします……！」
「う、ウチ、キチンとあいさつ出来るかな……？」

慌てる明久を余所に、全員がリビングの扉を見つめ明久の姉の姿を待つ。
そして扉が開き……

「あら。お客さんですか。ようこそいらっしゃいました。狭いですが、ゆっくりとして行ってくださいね」
「「「お、お邪魔してます……」」」
「……」

ショートヘアーの若い女性が現れ、挨拶したので全員がそれを返す。
そして光一は、その女性をいぶかしげに見ていた。

「失礼しました。自己紹介がまだでしたね、私は吉井玲と言います。皆さん、こんな出来の悪い弟と仲良くしてくれて、どうもありがとうございます」
「ああ、どうも。俺は坂本雄二、明久のクラスメイトです」
「……土屋康太、です」
「……久遠光一だ」
「始めまして、雄二君に康太君に光一君」

光一はまだ疑問の視線を向けていたが、雄二は小声で明久に問いかけ始める。

（おい明久、普通の姉貴じゃないか。これで大神白夜がまともに見えるだなんて、お前はどれだけ贅沢者なんだ。俺なんか、俺なんか……っ！）
（落ち着け雄二、まだそう判断するのは早い）

「ワシは木下秀吉じゃ、よしなに。初対面の者にはよく間違われるのじゃが、ワシは女ではなく……」
「ええ、男の子ですよね？　秀吉君、ようこそいらっしゃいました」
「わ、ワシを一目で男だとわかってくれたのは、主様だけじゃ……！」

相当に嬉しいのか、感動する秀吉。
今までを思いかえすと、確かに秀吉って初対面じゃ絶対女と間違われるなと他人事のように光一は思っていた

「勿論わかりますよ。だってウチのバカで不細工で甲斐性なしの弟に、女の子の友達なんて出来る訳がありませんから」
「酷い判断基準だな！」
「ですから、こちらの2人も男の子ですよね？」

光一の言う事を無視して、あっさりとそういってのけた。

「ちょ、ちょっと姉さん!?　出会い頭になんて失礼な事を云うのさ！　3人ともきちんと女の子だからね!?」
「明久！　ワシは男であっておるぞ!?」
「……女の子、ですか？」

明久の台詞に反応した玲が、ゆっくりと明久に極寒の表情を向ける。

「アキ君はいつの間に家に女の子を連れてくる様な不埒な子になったのですか？」
「あ、あの、姉さん？　これには……」
「辞世の句を詠みなさい」
「待って！　いきなり殺されるの!?」
「不純異性交遊の罰です。大人しくしていれば楽に……」

ブスッ！　バタッ……！

「大丈夫か明久？」
「うっ、うん……ありがとう光一」

麻酔銃をしまうと、光一は痛む頭を押さえる。

「ホントに兄貴より性質悪いな。こりゃ俺にまで知られたくない訳だわ」

「そうだな……すまん明久、さっきは酷い事を言った」

「まさか雄二に優しくして貰う日が来るなんて思わなかったよ」

少し意外そうに雄二を見る光一と明久。

そうこうしてるうちに、倒れていた玲が目を覚ます。

「あら？　いつの間に……」

「明久に辞世の句をって言ってからぶち殺した後、疲れて寝たんですよ」

「そうでしたか。来客がいらっしゃるのに、とんだ無礼をしてしまいましたね」

「ぶち殺したって所に違和感ないのか！？」

冗談で言った事なのに、あっけらかんとそう返された事に光一は驚く

確かにある意味兄より性質が悪いと、再度納得していた。

「えっと、ごめんなさい。話がそれてしまいましたね。貴女方2人の名を伺ってもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。申し遅れてすみません、。私は姫路瑞希と言います、明久君のクラスメイトです」

「ウチは島田美波です。アキとは……友達です」

本当はガールフレンドだとでも言いたかったのだが、そんな事言えばどうなるかはわかっていた。

それとなく光一が懐の物を玲に見えない様、美波に見せていた為でもある。

「しかし、お前も苦労してるんだな」
「わかってくれて嬉しいよ」

疲れた様子の明久に、そっと光一が優しく声をかける。
その様子を見た玲が一言。

「不純な同性との交遊は許可します」
「するなそんな下らん事！！　……ん、待てよ？」

怒鳴り返した所で、ふとある事に気付き冷静になる様に自分を促し始める。
そこでやるべき事をまとめると、即実行。

「ちょっと質問、秀吉はその許可の範囲に入ります？」
「ええ、許可します」
「何で異性がダメで同性がいいのかはこの際おいとくとして、じゃあ色々と話があるんで良いですか？」
「良いですよ。ですがその前に折角皆さんがいらっしゃった事ですし、お夕食を一緒にいかがでしょうか？　大したおもてなしはできませんが」

という玲の提案に、皆賛同。
そこで瑞希と美波が、光一にちょっと離れる様に促す。

「なんだ？」
「アンタまさか、これを利用して木下とアキを……」
「ずるいです！　それなら私達だって……」
「勘違いするな。俺は誤解解いてやるとは言ったが、応援するとは一言も言っていない。ギリギリでも元の関係に戻してやっただけで

もありがたいと思え」

それから光一は、明久に雄二とムッツリーニが台所に立つのと同時に、玲に自身のプランを話し始めた。

第百十問

吉井玲先生の特別英語試験

こちらでは私、吉井玲が学校のテストとは異なる形式の問題を出していきたいと思います。正解が1つに限られる画一的なものではなく、もっと幅広い解答が可能な出題形式です。決して個人的な調査を目的にしているわけではありませんが、質問には正直に答えてください。

問　貴女の今までの威勢のお付き合い経験について、英語で答えてください

姫路瑞希の答え

『Ｉ　ｈａｖｅ　ｎｏ　ａｓｓｏｃｉａｔｅｄ　ｗｉｔｈ　ａ　ｍａｌｅ.』

吉井玲コメント

瑞希さんは今まで男性とお付き合いした事がないのですね？　それは大変結構なことだと思います。

学生の本分は勉強ですからね。

尚、異性と付き合うと言う意味で用いる場合の“ａｓｓｏｃｉａｔｅ”は主に否定的な意味を伴います。

間違いではありませんが、“ｒｏｍａｎｔｉｃ　ｏｖｅｒｔｕｒｅ（男女交際）”等の単語を用いるとさらに良いかと思います。

久遠光一の答え

『Ｉ　ｗａｓ　ｋｉｓｓｅｄ　ｓｕｄｄｅｎｌｙ　ｂｙ　ｔｗｏ

girls.』

坂本雄二の答え
『I was kissed while sleeping.』

吉井玲のコメント
英文としては正解ですが、内容が少々気になります。
寝ている間におよび、2人もの相手に接吻されるだなんて、最近の高校生は進んでいるのですね。
我が家の愚弟がそのようなまねをしていないか、あの子の解答がとても気になります

吉井明久の答え
『I am bullied to a girl almost every day.』

吉井玲のコメント
英文が出来た事及び、解答に安心しました

久遠光一のコメント
この人が本当に明久の家族であり実の姉なのかどうかが実に疑わしい

「へぇっ、じゃあ昨日は吉井君の家で勉強会？　だったら呼んでくれても良かったのに」
「いや、優子が来たら明久がとんでもない目にあうから」
「？」

吉井家訪問の次の日。
いつものように優子と秀吉を伴い、光一は疲れた様子で訪問時の説明。

特に明久の姉である玲の事を話すと……

「……ホントに白夜さんよりタチ悪いわね。異性との交遊は死刑で同性を容認するだなんて」
「そうじゃの。昨日は明久が心身ともにボロボロになるわ、光一がそれを止めようとして疲弊するわで大変だったのじゃ」
「それ以上に驚いたのが、そんな非常識の塊みたいな人がハーバートの卒業生だって事だ」
「ハーバート！？」

流石に優子もそれには驚いた。

「……偉く極端な人なのね」
「収穫は確かにあったが、それ以上に疲れた……」

収穫とは、英語の勉強と秀吉と明久をくっつける為のプラン。
一部重要事項が反対はされたが、何とか説得し今に至る。

「ところで吉井君だけど、そんな人と暮らしてて大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないとは思うが、一応あの人仕事の都合で帰って来てるらしいからな。その仕事が今忙しいらしいから、帰りは遅くなるとの事だ」
「最もそれを喜んだ事を見破られて、殴られておったの？　……明久にこの上ない親近感を感じたのじゃ」
「何か言った？」
「……何も言っておらんぞい？」

秀吉が顔をそらしながら、優子の追求を何とかかわそうと目で光一に助けを求める。
……が、光一はポリポリと頬をかいて顔をそらす。

「……まあ良いけどね」
「むっ、どうしたのじゃ姉上？」
「そんな事してるから、光一に一度愛想尽かされた事位自覚はあるわよ。もうそうなるの嫌だから」
「優子のそういう態度は素直に嬉しいね」

優子が顔を赤らめるのを見ながら、変わらず明久を拷問（おしおき）しようとし、自分を同性愛者扱いするとある疫病神どもにも見習ってほしい。
心からそう思う光一だった。

「アイツ等がアンチ久遠派の影のリーダーだって噂、現実味……ん？　あれから根本どうしたんだ？」

騒動後に観察処分者認定されて以来、光一は彼を見ていない。

「時々Ａクラスに教材を運んでくるのは見るけど」
「最近では話を聞かんの」
「今までが針のムシロだったんだから、もう今頃学校をやめようと

でも……」

「諸君、ここはどこだ!?」
「「「最後の審判を下す法廷だ!!」」」
「異端者には!?」
「「「死の鉄槌を!!」」」
「男とは!?」
「「「愛を捨て、哀に生きる者!!」

校門にたどり着くと同時に、ＦＦＦ団の団訓が響き渡った。
３人はまたかと視線を向けると、そこでは……

「宜しい。ではこれより、Ｂクラス代表である根本恭二２級査問官の１級査問官拝命を執り行う！」
「「「おおおーーっ!!」」」

ＦＦＦ団が何かの集会を行っており、そこには会長である須川に跪く男子生徒が１人。

「……なあ、今の」
「うむ……ワシも、間違いだと思いたいのじゃ」
「そっ、そうよね。幾ら何でも、あんなバカ集団から……」

３人は恐る恐る跪く男子生徒に目を向けると……

「君の役目は何だ?」
「異端者をこの手で殺す事だ」
「異端者とは?」
「男女交際と言う幸せをむさぼる愚か者」
「男とは?」

「愛を捨て、哀に生きる者」
「よろしい。ではこれより、この敬虔なる団員根本恭二２級査問官を1級査問官に任命する」
「ありがたき幸せ！」

その姿は、２－Ｂ代表である根本恭二。
一学期の試験召喚戦争で光一に討ち取られ、覗き騒動で居場所をなくし、アンチ久遠派を率いた男子生徒。

しかし今ではそのアンチ久遠派は壊滅し、彼も観察処分者というバカの代名詞を拝命。
今文月学園で最も落ちぶれた男である。

「……そうか。あいつにはもう、ＦＦＦ団にすがるしかないんだな」
「まああ奴らは来る者は拒まず、じゃからの。根本でも歓迎なのじゃろうて」
「まったく……姫路さん達とは違う意味で、ああはなりたくないものね」

３人は見なかった事にして、その場を通り過ぎようとしていた……が。
そう簡単にすめば、光一は過激派筆頭などとは呼ばれていない。

「あっ、久遠！　それに木下姉妹も！」

根本が３人に気付き声をあげると全員が３人を、特に光一を見て武器を構える。

「……こんな所で何やってんだ？」
「お前に何がわかる！？　友香に改めてフラれた上に、Ｂクラスじ

ゃもう存在すら認識さえされやしねえ！　こうなったら俺にはもう他の幸せをブチ壊すしか残ってねえ、それも全部お前のせいだ！！」
「あの騒動で散々好き勝手やった報いじゃない。自業自得よ」
「うるせえんだよ久遠の妾が！　のこのこと現れやがったんならちょうどいい、異端者を狩るぞ！！」
「「「おーーーっ！！！」」」

根本の号令で全員が武器を構え、光一に狙いを定める。
めんどくさそうに光一がボストンバッグから、ゴム弾入りのショットガンと自動拳銃を取り出す。

「久遠……二股などと言う大罪中の大罪、死を持って償え」
「安心しろ、俺の木下姉妹は大切に愛でてやる」
「はァはァはぁ……木下さんと秀吉とであんなことやこんな事、うへへへへ」

その様子に優子は顔をしかめ、痛む頭を押さえる。
というか何勝手に自分の物にしようとしてるのだと、横溝をはじめとする一部に嫌悪感を示すが伝わらず。

「うおおおっ！　今木下さんから熱っぽい視線が！！」
「何ィッ！？　バカを言え、それは俺の魅力に対してにきまってるだろうが！！」
「いいや俺にだ、今から久遠をぶち殺す俺の勇姿を待ちわびてるんだ！！」

逆に喜ぶ様子を見せる事に、もう嫌だと言わんばかりに……

「すぅっ……キャーーーーっ！！」

思いきり息を吸い込み悲鳴を上げ、武器を持つ光一の背に回って抱き付く。
それを見て異端審問会がボルテージアップ。

「殺せえええ！！」
「「「うおおおおおおっ！！」」」
「ちょっ、優子！？　これじゃ動けな「コルァァアアアアア！！」
ああ、そう言う事か」

そこへ土煙をあげながら、人には到底不可能とも思えるスピードで鉄人が駆け付けて来た。
ボルテージをあげたＦＦ団を本気で怖いと思う優子が、震えながらギュっと光一を抱きしめる力を強める。

「貴様ら何をしておるか！？」
「西村先生、助けてください。この人たち、アタシに変な事をしようと息を荒げて……」

何故かボルテージの高い武装集団、武器を持つ光一、怯えながらその光一の背に抱き付く優子。
構図：武装集団が木下優子を襲おうとして、久遠光一がそれに割り込んだ

「貴様等そこまで堕ちたか！？」
「「「ごっ、誤解だぁあああああ！！」」」
「ええい、１人残らず逃がすか！！」

鉄人がＦＦＦ団を追う姿は、まさに獲物の群れを追う肉食獣がごとし。

「……ふぅっ」
「本当に怖がってたのに、良く頑張ったな」
「だってあんな連中に想像の中とはいえ、変な事されてたのよ？……気持ち悪くもなるわよ」
「だからこそ暴れ損ねたのが不満だ」
「光一……」

優子は名残惜しそうに手を離すと、光一も暴れ損ねた事に少々不満ながら優子の気転を嬉しく思い銃を納める。

「あっ、何々？　朝から随分と甘い雰囲気だね、ボクも混ぜてよ」
「あっ、愛子。おはよう」
「ん？　よう、くど……いや、折角だからやってみるかな？」
「？」

光一が名前を呼ぼうとした所で止めて、思案し始める様子に首を傾げる愛子。
そこでよしと言わんばかりに頷くと、改めて愛子に……

「よう愛子」
「ふぇっ！？　どっ、どうしたのいきなり！？」

名前で呼んでみると、愛子は珍しく顔を赤くして戸惑い始めた。

「え？　まあ一応あんなことした間柄な訳だし、いつまでも名字ってのもおかしいと思って」
「まあ当然ね。でもいつもの愛子なら笑って流すのに、意外と突発的な事に弱いの？」
「もうっ、２人してからかわないでよ！」

「……ワシも早く伴侶をつくった方がよさそうじゃの。完全にワシの兄貴分をとられてしまったのじゃ」

その光景を見ながら、すっかりのけ者の秀吉がさびしそうにそう呟いた。

第百十一問

文月新聞

Fクラス坂本雄二異常行動　下半身に何もはかずに登校

昨日の朝、Fクラス代表坂本雄二君が、下半身に何もはかずに登校。

その際、Aクラス木下優子さんとFクラス木下秀吉君と一緒に登校する同クラス久遠光一君に迫り、ズボンをよこせと叫びながら追い回すと言う光景があった。

その日の午前は体育用のハーフパンツをはいていたが、午後からは普通の姿に。

そのようなファッションが流行っていると言う情報もなく、彼の趣味であるとしたら流石はFクラス代表と言わざるを得ないでしょう。

ましてや男子生徒にズボンをよこせと迫るその姿には鬼気迫るものがあったと目撃者からコメントもあり、彼の彼女であるAクラス代表霧島翔子さんが実に可哀想だと言えるでしょう

「畜生、光一の所為で……それに俺は翔子と付き合ってねえ！」

「……雄二、この新聞について話を聞きたい」

「まっ、待て翔子！　これは全部……」

「んじゃ、入ってくれ」
「「お邪魔しまーす」」

学校から歩く事15分程度。
とある住宅街の一角にある雄二の家にて。

「で、なんで木下姉まで居るんだ？」
「教える側の人間は1人でも多い方がいいでしょ？」
「まあ確かにそうだな」

どうせからかっても意味がない為、雄二はあっさり手を引いた。
昨日のメンバーに木下優子を加えたメンバーは、本日雄二の家にて勉強会。

「なあ雄二、家にはやっぱ誰にも居ないのか？」
「ああ。親父は仕事で、おふくろは高校の同級生と温泉旅行らしい。だから気がねせずゆっくりとしてくれ」
「そうなんだ。そう言えば、前に来た時も雄二の家族は留守だったよね」
「ああ。その方が都合がいいからな。色々と」
「しっ！」

光一が突如会話を遮り、耳をすまし始める。
身体能力こそ光一は学年どころか学園でも最低クラスだが、過激派筆頭としての経験も相まって人の気配を探る等の感覚に関してはずば抜けている。

「どうしたの光一？」
「リビングに誰かいるぞ？　ついでにかすかだがこう……エアパッキンを潰す様な音が」
「そんなことまでわかるの？　って、エアパッキンって何？」
「プチプチの事だ」
「っ！？」

雄二が光一の言葉を聞き、先程まで晴れやかな表情の雄二が青ざめた。
光一は当然、雄二を見て手違いでもしたんだなと察した。

「きっ、気のせいに決まってるだろ？　何せ今留守なんだか……」

ガラッ！

「……！！（ぷちぷちぷちぷち）」

バタンっ！

ゆっくりとリビングのドアを開けると、そこには一心不乱にプチプチを潰している女性の姿。
それを見るなり、何も言わずに戸を閉める雄二。

「ゆ、雄二……？　今の、山ほどあるプチプチを潰していた人って……」
「……赤の他人だ」
「今のお前は明らかに見られてはいけない物を見られた、みたいな顔だぞ？」

光一のツッコミに、雄二は滝の様な冷や汗をかき始めた。

「さ、坂本の母親なの……？　なんだか、随分とすごい量を潰していたわよね……」

「う、うむ。あれほどの両、費やした時間はおそらく1時間や2時間ではきくまい」

「……すごい集中力」

「坂本君のお母さんはそういうお仕事をされているのでしょうか？」

「姫路さん、それはいくらなんでも苦し過ぎるわよ？　そんな内職聞いた事ないわ」

様々な憶測が飛び交うが、光一は既に察している為何も言わない。

「成程、今のがお前の母親だな？　温泉旅行に行ったって言うのは、多分日にちを間違えでも……」

「そんなことある訳がない。恐らく、精神に疾患のある患者が何らかの手段でこの家に侵入したに違いない」

「だから、おれにそんな下らなさ過ぎるウソが通用すると思うのか？」

いつでも詐欺師の様に人を騙す雄二にしては、あまりにも苦し過ぎるいい訳。

光一は呆れながら、ため息をついた。

『あら……？　もうこんな時間。さっき雄二を送り出したと思ったのに』

そこへ雄二いわく赤の他人の声が、中から響いてきた。

『続きはお昼を食べてからにしましょう』

「おふくろっ！　何やってんだ！？」

耐えきれず、ついに雄二が踏み込んだ。

「あら雄二、おかえりなさい」

「お帰りじゃねえ！　何で家に居るんだ！？　今日は泊まりで温泉旅行じゃなかったのかよ！？」

「それがね。お母さん日付を間違えちゃったみたいなの。7月と10月って、パッと見ると数字が似ているから困るわね」

「どこが似てるんだ！？　数字の形どころか文字数すらあってないだろ！？」

「コラ雄二。またそうやってお母さんを天然ボケの女子大生扱いしてっ」

「サラッと図々しいセリフを抜かすな！　アンタの黄金期は十年以上前に終わっている筈だ！」

「あら、雄二のお友達かしら？」

「だから人の話を聞けぇ！」

怒涛の応酬に呆気にとられる周囲。

あの雄二が光一の策略や翔子以外に振りまわされる姿が初めての為、その驚きも加わって思考がついて行かない。

「みなさんいらっしゃい。ウチの雄二がいつもお世話になっています。私はこの子の母の雪乃と言います」

柔らかい物腰と微笑で挨拶をする雄二のはは事、雪乃女史。

雄二との血のつながりを疑う様な雰囲気と、その若すぎる容姿に全員が再度驚く。

「さ、坂本の母親って……若過ぎない！？」

「むぅ……とても子を産んでおるとは思えん……」
「……美人」
「まるでお姉さんみたいですね～」
「そっ、そうね。見た目女子大生でも通用しそうじゃない？」

その若すぎる容姿から、母親と言うより少し年の離れた姉と言う感じだった。
実際少なく見積もっても３０代後半の年齢だけに、ショックも大きい。

「成程、この人が霧島のお義母さんになる人なのか」
「おいコラ！　テメエは何をいきなり……」
「あら、翔子ちゃんを知ってるの？　そうなのよ、雄二ったらすなおじゃ……」
「勉強会が目的だろうが！！　さっさと俺の部屋に来い！！」

殆ど強引に光一と雪野女史の会話を止め、雄二の部屋に向かう一向。
そして雄二の案内で通された雄二の部屋は、綺麗に片づけられた男性部屋。

「そういや、久しぶりに雄二の部屋に来たよ」
「そうだな。去年の秋に来て以来だから、かれこれ半年ぶりか？」
「え？　アンタ達は良く来てるんじゃないの？」

付き合いが長いだけに、少し意外そうに美波がそう問いかけた。

「大抵は明久の家に集まっておったからの。じゃから雄二の家だけではなく、ワシや光一、ムッツリーニの家でもあまり遊んだ事はないのじゃ」
「……（コクコク）」

ちょっとした交遊関係が明らかになった。

「場所といい広さと言い、明久の家が都合いいからな」
「家族用マンションに1人暮らしですもんね。贅沢です」
「けど今はあの奇天烈な姉貴が帰って来てるから、明久も苦労してるみたいだがな」
「それはそうと……やっぱりこの人数で俺の部屋は狭すぎるか。まいったな……」

全員で8人となると、流石に個室ではスペースが足りない。
流石にこれでは勉強会にはならないなと、雄二が頭を悩ませる。

「じゃあ俺の家に……と言いたいが、居間で良いんじゃないか？」
「ダメじゃないが、おふくろがいるからな。勉強にならない可能性が高い」
「もうっ、ダメですよ坂本君。お母さんを邪魔者扱いしてっ」
「そうは言うがな姫路、お前はあのおふくろと一緒に暮らしていないからそんな事が言えるんだ。四六時中一緒に居るとツッコミ所が多すぎて……」

Ｐｒｒｒ！　Ｐｒｒｒ！

雄二の反論中に、突然携帯の呼び出し音が響いた。

「あ、ウチの携帯ね。ちょっとごめん」

美波がスカートのポケットから携帯電話を取り出し、通話。

「もしもし？　あ、Ｍｕｔ……お母さん。どうしたの？　……うん

……うん、そう。わかった」

一分もしないうちに通話が終わり、携帯をポケットにしまう美波。

「どうしたんだ？」

「うん……今週は仕事が休みだからって母親が家に居る筈だったんだけど……ちょっと急な仕事が入って家に居られなくなったみたい」

「あ、そうなの？　それじゃ、葉月ちゃんが家に1人って事？」

「そうね。だから悪いけど、ウチは帰るわ。勉強はまた今度ね」

しっかり者の妹とはいえ、美波としては1人にしたくはない。

そんな美波を、雄二が引きとめた。

「待て島田、それなら場所をお前の家に変更しないか？」

「え？　ウチの家？」

「それは言いのう。島田の妹とは全員が顔見知りじゃし、丁度雄二の部屋は手狭だった所じゃしの」

「葉月ちゃんとも会えますしね」

「……なんなら、夕飯を作る」

「そうね。葉月ちゃんって、学園祭の時のあのかわいい子でしょ？　折角だから会いたいわね」

皆が乗り気の上に、提案者の雄二自体が場所を変えたくてしょうがない雰囲気

「美波さえよかったら、どうかな？」

「う……そ、そうね……じゃ、じゃあウチの家にしましょうか……」

「じゃあ決まりだな」

「ただし！　絶対にウチの部屋に入っちゃダメだからね！！」

美波が承諾すると同時に、明久に向けてそう大声で告げた。
当事者は“僕ってそんな図々しい人間に見えるのだろうか”と思っていたため、意図を察する事は出来なかった。

「よしっ！　そうときまれば早速移動だ！　チビッ子も1人じゃさびしいだろうからな！」

雄二がいきり立つかの様に、全員を玄関に追いやる。
その途中で居間に入り、母親に声をかけ始めた。

「おふくろ、ちょっと出かけてくる。夕飯は昨日の残りが冷蔵庫にあるから、それを温めて食べてくれ」
「あら、もう言っちゃうの？　お茶を用意している所なのに」
「悪い、ちょっと事情が変わったんだ……ところで、その麺つゆのボトルを何に使うんだ？」
「麺つゆ？　あらら……てっきり、アイスコーヒーだとばかり……」
「おふくろ……色や匂いで気付いてくれとは言わないから、せめてラベルで気付いてくれ……」

そんな会話が響いて来て、光一が一言。

「坂本一家って名前でバラエティ番組にでも出たら、売れること間違いなしじゃないか？」

全員が刹那も狂わず、同時に頷いた。

所変わって、島田宅

「ただいまー。葉月いる？」

「わわっ、お姉ちゃんですかっ。お、おかえりなさいですっ」

玄関の戸をあけて美波が呼びかけると、廊下に面した部屋から勢いよく飛び出した少女。
島田美波の妹、島田葉月。

「？　葉月、今お姉ちゃんの部屋から出てこなかった？」
「あ、あぅ……実はその……1人でさびしかったから、お姉ちゃんの部屋に行って……」

言いづらそうにしながら、パーカーの大きなポケットに何かを隠す葉月。
光一には葉月の手がパーカーのポケットに隠した物が見え、成程なと頷いた。

「ぬいぐるみでも取ってこようと思ったの？　それ位、お姉ちゃんは別に怒らないのに」
「そ、そうですか？　お姉ちゃん、ありがとです」

2人の会話が落ち着き、葉月の頭をなでる美波。
そこで光一が明久の脇腹を肘でつつき、挨拶するように促す。

「葉月ちゃん、こんにちは」
「よう、元気だった？」
「あっ！　バカなお兄ちゃんに鉄砲のお兄ちゃんっ！」

明久の姿を見るなり、勢い良く抱き付いてそのまま額を明久の腹に当て始めた。
そのおでこが、的確に鳩尾に食い込んでる為、明久は少々苦しそうな顔である。

「ほらほら葉月、アキから離れなさい。皆が中に入れないでしょ？」
「あ、はいです。それじゃバカなお兄ちゃん達、こっちにどうぞ」
葉月に手をひかれる明久に一行がついて行きながら廊下を歩くと、明久と光一はふとその途中のドアのあいた部屋に目を向ける。
所狭しと並べられたぬいぐるみ、中央には如月グランドパークのノインが写真盾を抱えている。
その中に……
「ちょっ、ちょっとアキっっ！？」
「ほぇ？」
明久が振り返ると同時に、脳天・鼻先・下顎の三か所を攻撃され、バランスを崩した所で両手首が一瞬で外される。
「何見てるのよ！？」
「地獄を見てると思うぞ？　てかお前、そう言う事やるから誤解されるんだってわかれよ……おい、しっかりしろ明久」
光一が明久の両手首をはめ、明久の手当てを始める。
「いい？　この部屋は絶っっっ対に、入ったらダメだからねっ！」
美波が大慌てで扉を閉めるのを見て、何となくだが葉月が一体何をやったのかを察した。
……が、この様子では聞き入れる事なんてできないだろうな、と断念する事に。
「とりあえず、適当に座って貰える？　今テーブルを持ってくるか

ら」
「？　お姉ちゃん、テーブルなんて何するです？　トランプですか？」
その様子を見て、事情を知らない葉月が首を傾げていた。
「葉月、今日はお姉ちゃん達はね、うちでテストのお勉強をするの」
「あぅ……テストの勉強ですか……それじゃあ葉月は、自分のお部屋で大人しくしてるです……」
「待って葉月ちゃん。良かったら僕らと一緒にお勉強しよっか？学校の宿題とかさ」
「ああ、それは良いな」
寂しそうに去ろうとする葉月を見かねて、明久がそう提案した。
光一もそれに便乗し、肯定し始める。
「葉月ちゃん、一緒にお勉強しましょうね」
「ワシはあまり教えてやれる事もないかも知れんが、一緒に勉強するのは大歓迎じゃ」
「……保健体育なら教えてあげられる」
「そうね、アタシも歓迎よ。それと土屋君、葉月ちゃんの半径１メートル以内に近寄らないようにね？」
と、皆も肯定し、葉月は軽い音を立ててリビングを出て行った。
「さてと、それじゃテーブル持ってくるんだろ？　手伝うぞ島田」
「あ、大丈夫よ。ウチ１人で」
「そうか。まぁ、誰かの写真でも飾ってあるのなら、ヘタに歩き回られたくないだろうから、無理に手伝おうとは言わないがな」
「ななな何言ってんのよ坂本！　あんたまさか、さっき部屋の中が

見えてたの!?」
「いや、ジョークのつもりだったんだが……」

光一は再度言うべきか言わざるべきかを思案したが、黙っておく事にした。
先程と同じで、どうせ途中で斬られると予想した上でのことである。

「島田は存外乙女じゃな」
「美波って暗殺犯なんて勘違いされたとは思えないほど、意外と可愛い所あるのね」
「……毎度ごひいきにどうも」

話は変わるが、時刻は午後五時。

「ところで、テーブルは良いとして夕食はどうする?」
「……何か作る」
「僕は別にいいけど」
「久々に腕を振るうかな?」

男性陣は皆料理のスキルを持っている為、早速何を作ろうかの相談への流れ。

「今日はピザでも撮りましょ。作る時間がもったいないし」
「そうですね。特に明久君は頑張らないといけませんから、ご飯を作っていちゃだめです」
「そうね。あまり出前に頼りたくはないけど、時間を突き詰める事は大事だわ」

ソレを女性陣が止めた。

「なんじゃ、ワシはてっきり島田が手料理をふるまうのかと思っておったのじゃが」
「昨夜、プライドをうち砕かれたからちょっと、ね……」
「ああ、明久の料理を食ったからか」
「へぇっ、吉井君って料理できるんだ？」
「女尊男卑の激しい家庭らしくてな。小さい頃から父親と一緒に作ってたらしい」

優子も苦笑いをするしかなかった。

「ほら、良いからみんな適当に座ってて。今テーブルを持ってくるから」

美波がリビングを出ると同時に、葉月が両手に勉強道具を抱えて戻ってきた。

「お待たせしましたです」
「葉月ちゃん、やる気いっぱいだね」
「はいですっ。あ、バカなお兄ちゃん、ここへどうぞです」

葉月は勉強道具をリビングテーブルに置くと、カーペットの上にクッションを置く。
そして明久にそこに座れと促し始めた。

「相変わらず仲慎ましいのう」
「姫路に島田に手本にしろと言ってやりたい。ああいう無邪気な好意の方がよっぽど相手に届きやすいんだって」
「そうね、見てて微笑ましいって思うわ」

明久の膝の上に葉月が乗っかるのを見ての光一の言葉に、優子は心

から同意した。
そこへ丁度美波が戻ってきた。

「お待たせ。このテーブルをそっちに……ってコラ葉月っ、何してるのっ」
「えへへー。葉月はここでお勉強するです」
「ダメ。アキのお勉強の邪魔になっちゃうでしょ？」
「美波、僕なら大丈夫だよ。葉月ちゃんなら小柄だし」

姉らしく注意する美波を、明久が遮った。

「それならいいけど……アキ、変な気は持ってないわよね？」
「明久君。万が一変な事をしたら、大変な事になりますからね？」
「はぁっ……明久、実はこいつらこんなものを」
「「ごめんなさい！！」」
「お前ら葉月ちゃんを見習った方がいいぞ？　少なくとも、今のお前らより立ち位置は上だから」

そうやって準備を整えた面々は、葉月を交えて勉強を始めた。
光一はその前から疲れていたが。

それから二時間後

「ん？　もうこんな時間か。そろそろ今日は終わりにするか」

気がつくと時計は九時半を指していてた。
教え役の雄二、瑞希、優子がそれぞれを教える事によって、皆勉強は結構進み時間も忘れるほど。

「なんじゃ、あっという間じゃったな」
「……集中していた」
「ふぅっ、人に教えるのも結構勉強になるわね」
「すっかり暗くなってますね」

雄二の一言に、全員がペンを置いた。

「後はまた今度にするとして、今日は帰ろうぜ」
「そうですね。美波ちゃん、今日はありがとうございました」
「あ、ううん。こっちこそありがと。ほら葉月、お礼を言いなさ…
…葉月？」
「ＺＺＺ……」

明久の膝の上で、いつの間にか葉月は寝息を立てて眠っていた。

「あはは。疲れちゃったみたいだね」
「もう、葉月ってば……アキ、悪いけどこっちに来て貰える？」
「あ、うん。そうしたいんだけど……」
「シャツを握り締めてるから無理だな」
「コラ葉月、起きなさい。アキが帰れないでしょ？」
「んぅ……」

美波が葉月の肩を叩くと、少しだけ目を開ける葉月。

「帰っちゃ、嫌です……」
「葉月。あんまりわがまま言うとお姉ちゃん怒るからね」

そう言ってさらにシャツを握り締める葉月に、少しだけ口調を強くする美波

「……お姉ちゃんには、わからないです……」
「え？　なにが？」
「……お姉ちゃんは、いつも一緒に居られるから良いです……でも葉月は、こういう時しか、バカなお兄ちゃんと一緒に居られないです」
寝ぼけてるからこそ聞けた葉月の本音に、２人は顔を見合わせていた。
「明久、ここは残ってやるべきだろ？」
「うん、そうだね。美波、もしよかったら僕はもう少しここで勉強して行っても良いかな？」
「え？」
「だな。今のチビッ子の台詞を聞いたら、明久は残るべきだよな」
「そうじゃな。明久よ、持てる男はつらいのう」
「……人気者」
光一に促された明久の言葉に、雄二達は明久をからかうが別に嫌そうでもない。
「そ、それじゃあ悪いけど、もう少し葉月に付き合って貰える？」
「うん」
「あっ、あのっ、それなら私も……っ！」
美波からの許可が下り、明久はもう少し勉強を続ける事にしたのを聞き、瑞希が血相を変えて割り込んだ。
「え？　姫路さんはダメだよ。女の子があまり遅い時間に出歩いちゃ危ないからね。雄二か光一にでも送って貰って早く帰らないと」

「姫路、心配せんでもお前が心配する様な事が絶対に起こる訳ないだろ」
「それはそれでウチの女の子としての尊厳に傷がつくからやめて」
「知るかそんなモン。さて、俺は家が隣の優子と秀吉を送るから、雄二かムッツリーニが姫路を送ってやれ」

光一が乱暴に話を切り、誰が送るかの話を切り出す。
それから結局、雄二が瑞希を送る事になった。

「あの、やっぱり私も……っ！」
「いくら言っても、ダメな物はダメだからね姫路さん」
「諦めろ姫路、明久はこうなると考えを変えやしない。それに聞き訳がない女は嫌われるぞ？　今より立場悪くなっても良いのか？」
「うぅっ……」

光一の脅迫じみた口車に、やむ負えず帰る事にした瑞希。
それから明久以外帰り支度を整え、玄関にて。

「態々悪いな」
「別にいいわよ。こっちこそ皆に葉月がお世話になっちゃって」
「じゃあ明久にも礼でも言ってやれよ。一番世話したのあいつなんだから」
「そうね」
「ほら姫路、お前も駄々こねてないでさっさと帰るぞ」
「あ……はい、す、すみません」
「改めて世話になったのじゃ」
「ありがとう。おやすみなさい、美波」
「……お休み」
「うん。あんた達もお休みなさい」

そして、帰り道の光一一行。

「はーっ……疲れた」

「ワシもじゃ……終わってみれば、どっと疲れが来る物じゃのう」

「普段からやらないからそうなるのよ」

常日頃から予習復習に余念がない優等生は、疲れてはいても光一たち程ではない。

優子はふと、ある事を思い出した。

「ところで光一、ちょっと気になってたんだけど」

「ん？　なんだ？」

「ずっと美波に何か言いたそうだったよね？　何だったの？」

「いや、島田の部屋の中が見えたんだけど、その中にオランウータンの写真が飾られててな」

優子と秀吉は目が点になった。

「何故オランウータンの写真が？」

「多分だけど、来たときに葉月ちゃんが何かパーカーのポケットに何か隠したろ？　アレ多分明久の写真で、オランウータンの写真は多分代わりに入れといたもんだと思う」

「……伝えなくて良かったの？」

「あの状態の島田が人の話を聞くと思うか？」

2人して光一から顔をそらした。

ある程度離れた3人に、美波の悲鳴が聞こえた様な気がしたと言う。

第百十二問

文月新聞

S田M波さん熱愛発覚！　お相手は野性味あふれる憎～いアイツ！

最近とある過激派筆頭をメインに何かと話題に上がるFクラスだが、一部の生徒の噂によるとFクラスの数少ない女子であるS田M波さんに好きな相手がいると言う話だ。

校内ランキングの“彼女にしたくない女”ナンバー3に輝く彼女だが、好意を表せずにいるいわゆる“隠れファン”が多いという事実も少なからず認められている。

そんな彼女の真実に我々文月学園新聞部は、彼女をよく知る周囲の人々に話を聞いてみた。

そこで発覚したお相手とは、何と我々の想定を覆す驚きの人物オランウータンさんだった。いつどのように知り合ったかは不明だが、とある筋から自宅に写真を飾ってあったという情報を得ることに成功した為、その気持ちはかなりの物の様。

記者個人としては理解できない気持ちではあるが、同じ学び舎の生徒としてできるだけ彼女を応援したい。

【彼女を知る人々へのインタビュー】

・クラスメイトのY井M久君

「美波がそれでいいと言うのなら、僕からは何も言いません」

・自小恋人のS水M春さん

「絶対に認めません。サルごときにお姉さまを譲るなど言語道断です。そもそも美春と言う恋人がいるのに、その様な疑惑が持ち上が

ると言うだけで憤飯ものです。美春以外の誰がお姉さまのペッタンコに触れると言うのですか」

・オランウータンみたいな人

「貴様等いい度胸だな」

なお1位である小山友香さんと2位の中林宏美さんですが、最近2人で密会していると言う情報を掴みましたが、どうせとある過激派筆頭への意味ない復讐計画でしょうから、割愛します。

「早ええな情報!?」

「うむっ、これにはワシもビックリじゃ……しかし島田も災難じゃのう。完全にオランウータン好きの女子高生と化してしまったのじゃ」

「これには流石に、アタシも同情するわ……」

「姫路さん、昨日は大丈夫だった?」

翌日の昼休み。

皆で卓袱台くっつけて弁当を食べている時、ふと明久が瑞希に問い

かけた。

「それが……すごく怒られてしまいました」

瑞希がしゅんと俯いた

「おかげで週末までの間、学校以外は外出禁止にされてしまいました……」

「あらら。そりゃまた可哀想に」

「自業自得だろ。全く、電話の1つくらい出てやれば姫路の両親だって安心しただろうに」

「その様子じゃ、やっぱり帰るには帰っても駄々こねたんだな？全く……」

雄二のそのセリフだけで、光一は何があったのかを把握した。

明久にとって葉月は可愛い妹みたいな存在で、瑞希と美波はそれ以下の立ち位置だと言うのに何を心配しているのかと、光一は呆れる様にため息をついた。

「光一相手だと話が早くて助かるな」

「でも雄二は大丈夫だったの？」

「ん？　俺の親は何も言わないから大丈夫だぞ？」

「いや、明久が言いたいのはそうじゃないと思うぞ？」

「うん。2日連続で女の子と夜遅くまで出かけている上に、昨日は途中までだけど姫路さんと夜道を2人きりでしょ？　霧島さんは怒らないの？」

雄二の表情が“やってもうた”を表現した様にひきつった。

光一が雄二の後ろの人影に気づくと、雄二に向けて合掌する。

「おい光一、縁起でもないからやめろ！　大丈夫だ。バレなければ何の問題も」
「……雄二。今の話、向こうで詳しく聞かせて」
「しょっ、翔子！？　テメ、光一！！」
「……今日はお弁当を持ってきただけ、久遠は関係ない」

急な翔子の登場に光一を疑うが、翔子は2つの弁当を見せる様にしてそれを否定。
ソレを卓袱台の上に置くと、雄二の首根っこひっつかんで外へと。

「まぁ待て翔子。お前は勘違いしている。お前の考えている様な事は何も起きていないし、そもそもお前に俺が責められるいわれはないと」
「……うん。言い訳は向こうでゆっくりと聞かせて貰う」

雄二と翔子が退場し、教室を静寂が支配した。

Ｐｉｐｉｐｉ！！

のもつかの間、明久の携帯のメール着信音が鳴り響いた、
明久が携帯電話を取り出しメールを開く。

【Ｍｅｓｓａｇｅ　Ｆｒｏｍ　坂本雄二】
たすてけ

Ｐｉｐｉｐｉｐｉ！！

それから間もなく、光一の携帯にもメールの着信音が。

「……助けてとうとうとしたんだな」

とりあえず光一はメールを削除し、何事もなかったかのように携帯をしまった。

「やっほー光一君」

「光一、お昼一緒に食べに来たわよ」

「ん？　なんだ、愛子に優子も来てたのか？」

翔子と一緒に来てたのだが、翔子が先走った為に機を逃していた。そこで瑞希が珍しく、ふとある事に気付いた。

「あれ？　久遠君いつの間に愛子ちゃんと名前で呼びあってるんですか？」

「別におかしなことでもないだろ？　そんな事より、放課後の勉強会は姫路と雄二抜きになるな」

「そうだね。ちょっと厳しくない？」

「そうね。久遠は数学と英語と物理専門だし、優子だけじゃ手間かかるよね」

「……（こくり）」

「そうじゃな。厳しいやもしれぬの」

大半がＦクラス級の点数の為、これでは点数アップにつながる可能性は殆どない。

「だったらボクも参加すれば良いじゃない」

「良いのか？」

「うん。Ｆクラスのみんなといると面白いしね」

と、光一に片目をつむって見せながらそう言った。

ふとある気配を察した光一が、明久の方に視線を向ける。

「どうした霧島？」
「え？　ああっ、居たんだ。どうしたの？」
「……勉強に困ってる？」
「あ、うん。そうなんだよ」

2人は翔子のシャツについてる紅い染みを気にしない様に、話を進める。

「……勉強なら、私も協力する」
「え？　協力って？」
「……週末に、皆で私の家に泊まりに来ると良い」

渡りに船とはまさにこの事だと、全員がそう思った。
何せ学年首席が協力してくれるのだから。

「良いの、霧島さんっ？」
「（こくり）……吉井にはいつかお礼をしたいと思っていた。久遠にもいつも世話になってるから」
「そりゃありがたいな。皆でって事は、秀吉達も良いかな？」
「……勿論」
「週末って事ならウチも行けそうだし、お邪魔しちゃおうかな？瑞希はどう？」
「た、多分大丈夫です。ダメでも、何とか両親を説得しますっ！」
「ならば相伴にあずかろうかの」
「……参加する」

いつものメンツの参加が決定し、優子と愛子も当然参加。

「雄二は参加できるのかな？」

「……大丈夫」
「あ、そうなの？」
「……その頃にはきっと退院してる」
「そっか。それは良かった」
「あっ、やっぱりそう言うことなのね」

光一以外のメンツは皆でにこやかに頷きあった。
ちょっと間を置き、全員が“退院”という言葉に気がついたと言う。

ふと優子が、周りが誰もいない事を不思議に思う。

「そう言えば、他の人たちは？」
「Dクラスでデートしてた奴がいるとかいう話を聞いた途端出て行った」
「また？　……ねえ光一、いい加減やめたいんだけど。頼んだ人たち皆Fクラスのある集団って言った途端、嫌な顔して即答で拒否するから」
「ボクもそうだったよ。ラ・ペディスのケーキセットだけじゃ割に合わないよ」
「やっぱりか……そりゃ悪かった。じゃあ愛子、もう一つ頼んだ事は？」
「ん？　出来てるよ、はい」

愛子がスカートのポケットからある者を取り出し、光一に見せる。

「あっ、それって！」
「光一がただで終わる訳もないとは思っておったが……」
「あいつらにゃこれ位が良い薬だ。さて勉強会だけど……」

そして時は過ぎて。

「ではどうぞ」

「「お邪魔しまーす」」

瑞希と雄二を除き、愛子を加えてのメンバーで光一の家での勉強会に。

優子は久しぶりに、秀吉はたまに泊まりに来るので大体の構造は熟知している。

「ここが光一君の家かぁ」

「やっぱり、光一の家も留守なんだね？」

「そりゃあな。もう知ってると思うけど親が離婚してるから、この家には俺と母さんしか住んでない。その母さんも仕事で家に帰るのは夜遅くだ」

「じゃあ、ずっと1人で？」

「離婚したての頃は、母さんが仕事終えるまでお隣さんに世話になってた。そこで家事を教わったおかげで、高学年に入る頃には半1人暮らしだよ」

「お隣さんって言うと」

現在まだ玄関なので、全員いったん家を出て隣を見やる。

そこには秀吉と優子が暮らす木下家。

「そっ、木下家。まあそれはいいから上がれよ」

光一の案内で通されたリビング。

そこで光一から出された飲み物を一口飲んで、それぞれ勉強道具を開き始める。

「光一はどうするの？」
「俺は……化学と保健体育の点数向上を目指すよ。出来ない科目じゃどうあがいても無駄だから」

Ｆクラス　久遠光一　化学２１１点　保健体育１２１点　他平均３５点

「そうね、光一はどういう訳か昔から出来ない事じゃ出来る様にすらなれないけど、出来る事だと異様なまでに出来るから、その方が効率いいかもね」
「あー、何となくわかるねそれ。久遠君学園単科目最高得点保持者なのに、最低点保持者でもあるからね」

Ｆクラス　久遠光一　物理６８９点　数学４１１点　英語Ｗ４０３点　世界史１点　古典１点

「ねっ、ねえ木下さん、世界史教えてくれない？」
「あれ？　吉井君、得意じゃなかった？」
「僕が出来るのは日本史の方だよ。世界史はまだそんなに良くはないんだ」
「良いわよ、吉井君には借りもあるし」
「あっ、じゃあウチもお願い」

本日明久と美波は、優子に世界史を教えて貰う事に。
そして愛子は……

「ボクに挑戦？　良いよ、受けて立ってあげる」
「……正確には挑戦させてやる」
「随分な余裕だね。今回のテスト、ボクが勝って実践派の実力を思い知らせてあげるよ」

ムッツリーニと共に、保健体育のお勉強。
そして余った光一と秀吉は……。

「光一よ、英語を教えてほしいのじゃ」
「ああ、良いぞ」
「うむっ、よろしく頼むぞい」
「？　なんか嬉しそうだな、どうしたんだ？」
「いや、久しぶりにお主と2人で何かをやるのと思ったらの」
「ははっ、そう言えばそうだな」

兄貴分との時間に、嬉しさを隠しきれない弟分の姿があった。

第百十三問（前書き）

人物紹介に、光一と白夜のＩＣＶを追記しました。

第百十三問

問題　以下の問いに答えなさい

戦国時代において、軍神と称された越後国の武将を答えなさい

姫路瑞希の答え
『上杉謙信』

教師のコメント
正解です、流石姫路さんです。

吉井明久の答え
『ウエケン（訂正）上杉謙信』

教師のコメント
訂正個所が気になりますが、まあ良いでしょう。

島田美波の答え
『サムライ』

教師のコメント
君はまだ日本に慣れてないようですね？

久遠光一の答え

『敵に砂糖を送った誰か』

教師のコメント
上杉謙信が逸話になったのは砂糖ではなく塩です。
高橋先生に報告しておきますので、覚悟するように

「メシ出来たぞー」

自分は夕食時。
光一は秀吉を手伝わせて、夕食を作りそれをテーブルに並べる。

「わあっ、おいしそう。光一君ってさ、意外と家庭的だよね」
「意外とって……まあ否定はしないけどさ。半1人暮らしやって長い訳だし」
「確かに久遠って、モヤシみたいな外見に似合わず大抵の事は1人でこなせる兄貴分って感じよね。木下が久遠の事を兄貴分として慕うのはわかるけど、時々何でアキとコンビ組んでるかがわからないわ」
「モヤシ言うな！」

全員分を並べると、光一と秀吉は食卓に着く。

「時々女としてのプライドが傷つくわ」
「経験の差だから仕方ないだろ。そんな事言う位なら、俺と一緒におばさんに習えばよかったのに」
「うっ……」
光一の家事の師は優子と秀吉の母である。
痛い所を突かれた優子は、顔をそむけた。
「優子の言いたい事はわかるなあ。いくら経験の差とは言え、ね」
「あははっ、光一って愛されてるね」
「明久！　……冷める前に食うぞ」
顔を赤くして無理やり話を切り、食事に移る。
皆がおいしいおいしいと言う光景に少し嬉しくなる光一。
「そういや初めてだな、この家でこんな大勢で何かするなんて」
「？　久遠って、家に友達を呼んだりとかしないの？」
「呼ぶどころか兄貴とこの体躯の所為で、友達なんて秀吉と優子しか居やしなかったよ。兄貴がいなくても元々が人に嫌われやすいから、過激派筆頭なんて呼ばれるようにならなきゃいけなかったし」
「状況が光一をそうさせた……って所なんだね？」
明久の悲しそうな顔につられる様に、皆が光一に同情の視線を向けた。
光一にとっては一応は嬉しい物の……。
「……同情するんなら少しは行動を改めてくれ。明久は別に変わらなくていいけど」
「それどういう意味よ？　まるでウチがアキより非常識な事してる

様な言い方じゃない」
「……不本意この上ない」
「……自覚ないのね、やっぱり」

せめて攻撃態勢を取る事をやめてほしい、と言う願いを込めた抗議。
それに対しての自覚がない2人の対応に、優子は呆れる様に頭を押さえた。
特に美波に対しては、同族嫌悪の様な物もあり距離を取り始めた。

「ねえ優子、最近ウチを避けてる上に冷たくない？」
「ソウ？　フツウダトオモウケド？」
「何で棒読みなの？」

「……寧ろ普通にふるまう訳がないと思うけどな」

自覚がないって恐ろしい。
そう思いながら、優子に適当にあしらわれてる美波を見ていた。

「はい光一君、あーん」
「ん？　あーん」
「……抹殺！」
「お前は島津先輩にやって貰え！」

愛子にアーンをしてもらった光一は、即座にカッターを構えるムッツリーニとスタンガンを持って対峙。

「……アキ、あーん」
「え？　もごっ、むぐおおおおおっ！」
「島田、落ち着くのじゃ。箸が喉に刺さっておる！」
「美波、本当に暗殺しようとしたのって誤解なのかしら？」

結局は騒がしい食卓となった。

その次の日。
とある人気のない場所で、コソコソと密談している2人がいた。

「まったく、根本君にも呆れた物ね。あのバカ集団に入るだなんて」
「ホントね。あんなのと付き合ってただなんて、今更ながら恥だわ」
「それで、あの計画は大丈夫なの？　久遠のバカを陥れる計画、」
「ええ、小暮先輩に頼んで態々練って貰ったんだから」

そう言って、片方がある紙を一枚取り出す。

「これを使えばモヤシで女の敵でバカのくせに、散々上位クラスをコケにしてくれた礼が出来るわ」
「本当でしょうね？　清水さんに頼んで久遠を嫌ってる女子の情報を集めて声はかけてるけど、失敗したらあたし達まで観察処分者よ？」
「大丈夫よ。小暮先輩の立てた作戦なら、あんな奴イチコロよ」
「小暮って言うと、あの騒動の時一緒に居た先輩か？」
「そうそう……ん？」

ふと2人だけの筈なのに、割り込んできた声。
振り向いた先には、当人である久遠光一。

「なんだ、随分と面白そうな話してるな？」
「なっ！　くっ、久遠！？　どうしてここに！？」
「お決まりの台詞を言わせてもらうとだな……お前らごときの考えなどお見通しよ」

「くっ！」

密談していた2人……小山と中林は即座に距離を取った。

「で、こんな所で何してた？」

「何でアンタに言わなきゃいけないのよ！？」

「言え。今や根本程じゃないにしろ、落ちぶれてクラスの1人も動かせんようなお前らが、こんな人気のない所でコソコソ何してる？

それにそれは何だ？」

光一の刺したセリフで、小山は手の紙を背に隠す。

それを見て、成程と頷く光一。

「成程、お前らのやろうとしてるのはこういう事かな？　今までの事は全部水に流して、俺が企画してるFクラスの合コンの為に、態々動いてくれている……違うか？」

「だっ、誰がそんな事するのよ！？」

「違うのか……違うんなら落ちぶれて貰うか」

「落ちぶれて？　笑わせないでよ、あんたの言葉に力があるとでも思ってるの？」

「まあ確かにそうだが、これならどうだ？」

カチっ！

『それで、あの計画は大丈夫なの？　久遠のバカを陥れる計画』

『ええ、小暮先輩に頼んで態々練って貰ったんだから。これを使えばモヤシで女の敵でバカのくせに、散々上位クラスをコケにしてくれた礼が出来るわ』

『本当でしょうね？　清水さんに頼んで久遠を嫌ってる女子の情報を集めて声はかけてるけど、失敗したらあたし達まで観察処分者よ

？』

それを聞いた2人は青ざめ、光一を取り押さえようとする。
……が、光一が即座に2丁の麻酔銃を取り出し、狙いを定めたのを見て踏みとどまった。

「一応傷つけると面倒だから麻酔銃だが、まさか俺に武力行使が通用すると思ってないよな？」

光一の目が本気なのを察すると、2人はしぶしぶと両手をあげた。
その際小山が計画書を落としてしまい、間髪いれずそれを拾うと溜息をつきながら銃を下す光一。

「ＦＦＦ団もそうだが、お前らには我慢と言う概念はないのか？
そもそもケモノだって獲物しとめるのに息を潜めるのに、ケモノに出来る事も出来ないとはな」
「なっ！」
「お前らには今から、Ｆクラスの合コンの参加者を集めて貰う。出来ないならこれらはＡクラス経由で鉄人行き」
「ひっ、卑怯者！」
「やるのか？　やらないのか？　それ以外の返答は拒否とみなす」

時は過ぎて、Ａクラスにて。

「と言う訳だ。心配しなくても、報酬はきちんと支払う」
「そう、良かった。あれだけ苦労しておいてただ働きじゃ、割に合わないから」
「……脅迫に関してはツッコまないの？」
「どうでも良いわよそんなの」

騒動云々に関しては自分には責める資格がない為、それに関しては何も言わない優子。
しかし未だに私怨で光一に攻撃を加えようとした事には、優子も許す気も容赦する気もない。

「けどね……出来るのかな？　ただでさえFクラスの人たち嫌がられてるのに」
「出来ないならこれらが鉄人の所に行くだけだ。まあきちんとやったら返してはやるがな……計画書だけ」
「そう。届けるのアタシがやるから」

そこでチャイムが鳴り、光一は出て行った。
優子が自分の席に戻ろうとした時……

「ねえ優子、最近光一君の様に発想が過激化してない？」
「アタシはもう光一に傷ついて欲しくないの。だからくだらない理由で傷つけようとする人が許せないだけよ……アタシもずっと、傷つけて来たから」
「……なんだかなあ、それ言われると納得出来ちゃう気がするよ」

第百十四問

吉井玲先生の特別化学試験

問題　酢酸の化学式を答えてください。
　また、酢酸を使った料理の一つであるマグロのカルパッチョの簡単な作り方を説明しなさい。

久遠光一の答え

酢酸：ＣＨ３ＣＯＯＨ

カルパッチョ：酢（代わりにレモン果汁でも可）とオリーブオイルと塩を混ぜてソースを作る

吉井玲のコメント

その通りです。ＨＣＯＯＨ（ギ酸）、ＨＣ３ＣＯＯＨ（酢酸）、Ｃ２Ｈ５ＣＯＯＨ（プロピオン酸）と言った具合にカルゴキシル基をもつ化合物の指揮は一定の法則を持っています。一つ一つを覚えていくよりも、法則を理解してすべて並べて覚えると良いでしょう。

吉井明久の答え

カルパッチョ：確かカルパッチョのソースは酢とオリーブオイルと塩を混ぜて作った筈。他にもレモン果汁の身で酸味を出すって言う作り方もあるし……って、この問題は化学にあまり関係がない気がするんだけど？」

吉井玲のコメント

余計な疑問を抱かずに、問題の解答のみを述べてください

姫路瑞希の答え
カルパッチョ：カルパッチョは酸味がある、塩味がある、独特のにおいがすると言う料理だったので、ソースの材料の式はＣＨ３ＣＯＯＨ＋ＮａＣｌ＋ＨＣＮとなります

吉井玲のコメント
その材料であれば、触媒と製法次第ではＨＣｌとＮａＣＮが生成されます。
小皿一盛りで成人男性５０人を死に至らしめる事の出来るカルパッチョが出来上がるかと思うと、流石に恐怖を感じずには居られません。

久遠光一のコメント
お前は絶対台所に入るな。

「ここが代表の家……？」
「俺も初めて来たときには驚いた」
「うむっ、こんな豪邸に足を踏み入れるなど思いもしてなかったのじゃ」

何度か取引関係で出向いた光一の案内で、木下姉妹は始めてみる霧島家に驚いていた。
家が金持ちだとは聞いていた物の、やはり百聞は一見にしかず。
ある程度落ち着いた所で、光一が2人を促して玄関で呼び鈴を鳴らす。

「……久遠、木下、優子、いらっしゃい」
「今日は世話になるな、坂本夫人」
「今日はよろしくね、坂本さん」
「……良い響き」
「雄二が聞いたら激怒するぞい。霧島よ、今日はお世話になるのじゃ」

苦笑いの秀吉のツッコミの後、翔子の案内で家の中へ。

「へぇっ、たくさん部屋があるのね」
「すごいのう。ワシも一度でいいからこんな豪邸に住んでみたいのじゃ」
「全くだな。俺も多少なら教えては貰ったけど、全部把握しきれそうにないからな。たとえばあそこの書斎とかシアタールームとか」

光一が指差して、それぞれの部屋の紹介。
本が並んでるのが書斎で、スクリーンがあるのがシアタールーム。
そして……

「あそこの雄二の部屋とか」
「流石は代表ね。鉄格子は見るからに頑丈そうだし、結婚後の準備も抜かりがないわ」

「……霧島雄二になる日も時間の問題じゃの」
「それで良いのよ、あんなのを野放しにしたら迷惑でしかないわ」
実際Fクラス代表および問題児として、数々の騒動を起こした以上否定はできなかった。
「さて、勉強部屋にでも行こう。皆来てるのか？」
「……後は吉井だけ」
通された勉強部屋では愛子とムッツリーニがしきりに何かを話しており、瑞希と美波がそれを見ていた。
「あっ、久遠君に木下君に優子ちゃん」
まず声をかけたのは、髪型がポニーテールの瑞希。
「？　姫路よ、何故髪型変えておるのじゃ？」
「あ……あの、それは、勉強の……」
「成程、明久の為か」
「邪魔になら……って、早いですよ！」
「全く、そう言う所は素直に認めてやれるってのに……」
素直に明久の好みに答える事をするのに、どうして平然と拷問が出来るんだろう？
と、Fクラスのバカ集団からの影響に頭を痛める光一。
「吉井君って、ポニーテールが好きなの？」
「前明久の家で明久秘蔵の本が、前話した奇天烈姉貴に趣向まで分析されて公にされたからな」
「……ホントに奇天烈ね。そもそも女友達の前でそんなことする普

通？」

「明久が異性との交遊するのが気に入らないらしいからな。言うなればこいつらの性質の悪さ限定バージョンアップ版、とでも言えばわかるか？」

最も、真意は別の所にあるんだろうけど……と光一はつぶやいた。

「ところで姫路、愛子とムッツリーニはなにしてるんだ？」

「さあ？　何でも第二次性徴を実感した出来事っていう議論が講じてああなっちゃったらしくて」

『ムッツリーニ君は頭でものを考え過ぎだよ！　“百聞は一見にしかず”って諺を知らないの？』

『……十分なシミュレーションもなく実践に挑むのは愚の骨頂』

『そうやって考えてばかりだから、すぐに血をふいて倒れちゃうんだよ。そもそも光一君だって知識は実践を介さないと身にならないって考えなんだから』

『……それもまた事実ではある。でも俺は何を言われても信念を曲げる気はない』

そんな話をしてる所で、翔子に連れられた明久がやってきた。

入ってみたら愛子とムッツリーニの熱い議論と言う光景に、呆気にとられたらしく呆然としてる。

「ん？　よう明久」

「明久、やっと来おったな」

「今日は頑張りましょ」

「あ、秀吉に木下さんに光一。あの2人どうしたの？」

「さあ？」

光一自体議題どころか何もかもが理解しきれてないので、無視することにした。

「明久君、こんにちは」
「ん？　ああ、こんにちは姫路さ……」

明久が瑞希のポニーテールを見て、言葉を失った。

「？　どうかしましたか？」
「さあな？　明久、まずは落ち着こうな」
「え？　うっ、うん。そうだね……えっと……今日の姫路さんは死ぬ！」
「えぇぇっ！？」

突然トチ狂った事を言いだした明久に、瑞希は驚いた。
光一は一応何が言いたかったのかは察してる為、ポンポンと明久の背を軽くたたく。

「だから落ち着けって明久。死ぬほど可愛い、もしくは似合いすぎるとでも言いたかったんだな？」
「え？　……うっ、うん。ごめん姫路さん、ちょっと不足の事態に対応しきれなくて……」
「……どうして光一は吉井君のあのセリフからそこまで推測できるのかしら？」
「なんだかんだで理解しておるからの」

それから明久は光一達から離れ、瑞希に美波の3人で話を始めた。
時間が時間なので、そろそろ勉強会を始めようと言う流れになった処で……

「あれ？　ねえ光一、雄二は？」
「雄二？　……そう言えば見てないな。まさか逃げたのか？」
「……雄二を連れて来た」

ドサッ！

絨毯の上に、ロープでぐるぐる巻きの芋虫状態の雄二が転がされた。

「ん？　明久に光一、どうしてお前達がここに居るんだ？」
「……ああ、うん。霧島さんのご好意でね」
「今日はここで勉強会だ。聞いてないのか？」
「ああ、何も聞いてない。いつもの様に気を失って、目が覚めたらここに居ただけだ」

秀吉が雄二のロープを解きながら、会話は進んでいく。

「霧島、雄二の着替えと勉強道具は？」
「……大丈夫、準備は万全」
「流石代表ね」
「感心するな！！」

こうして、少々騒がしくも勉強会は始まった。

明久が瑞希に世界史、秀吉と美波が雄二に古典を教わっていて、愛子とムッツリーニは保健体育の談議。
その中で光一と優子は、物理と数学と英語で模擬テスト勝負をしていた。

『木下優子　物理３５４点　数学３６７点　英語Ｗ３８７点』

『久遠光一　物理６８８点　数学４０９点　英語Ｗ４２３点』

「ダメね。やっぱり得意科目じゃ光一に叶わないわ」
「けど総合だと優子が上だろ。俺の場合はただ単に得意と不得意にばらつきがあるだけだ」
「だったらやっぱり化学と保健体育の点を押し上げるのが重要ね」
「マジで俺をＡクラスに入れる気なのか？」
「当然。３年位は光一と同じクラスになりたいからね。クラスの事を考えても光一の慧眼と指揮官や軍師としての手腕は重要戦力になるし、文句はない筈よ」
「ちゃんとその辺りの事も考えてあるのがすごいな」

Ａクラスにも少なからず光一を嫌う者はいる為の配慮である。
特に愛子と優子の二股同然の関係自体、火種たっぷりなのだから。

「さ、そうときまれば化学の勉強始めるわよ。終わったら愛子に保健体育教えて貰いましょ」
「了解しました」

やる気満々の優子に、苦笑しながら教わる準備を始める光一。
ふと他の様子を見てみると……

『明久君、そこは東洋やインドは別々に考えずに何が起こっていたのかっていう覚え方をするといいですよ』
『それぞれの国で？』
『そうです。例えば紀元前５５０年頃、中国で孔子と言う人が誕生したとき、インドでも有名な人が誕生しているんですよ』
『“孔子”ってどこかで聞いたことあるような気が……？』
『“儒教”って考え方を創始した人です。明久君の好きな三国志に

も大きな影響を与えた人ですね』
『ああ、そう言えば漫画やゲームで出てきたかも』
『その“儒教”の創始者である孔子が生まれた頃、実はインドでも同じく“ジャイナ教”や“仏教”の創始者が生まれているんです』
『仏教の創始者って言うと……お釈迦様？』
『はい、正解です。ゴーダマ・シッダールタと言う人ですね』
『ジャイナ教って方はわからないや』
『ちょっと難しかったでしょうか？　そっちはマハヴィーラという人です』
『う～ん、聞いたことが無いなあ……』
『どちらも歴史上では有名な宗教の創始者なので、覚えておいた方がいいと思います』
『ふむふむ……』
『これって面白いと思いませんか、明久君』
『えっ？　何が？』
『だってこの長い世界の中で、有名な宗教を作った人がほぼ同時期に3人も生まれてるんですよ』
『あっ、確かにそうだね。偶然かな？』
『偶然かも知れませんし、そうじゃないかも知れません。もしかすると、人と言う生物はある程度時間が経つと、同じような思想を持って神様を信じ始めるのかもしれませんね』
『それってすごいなぁ……場所は違っても、人の進化は同じように進んでるってことだよね』
『はい。あるいは……』
『あるいは？』
『もしかしたら本当に神様がこの世界に降り立って、インドや中国を巡って教えを授けたのかもしれませんよ？』
『おおっ、なるほど！　そう考えたら、確かに同時期に宗教が生まれたことに説明が付くし……それにロマンがあるね』
『本当のところはどうだか分からないですけどね』

「へぇっ……」

瑞希に世界史を教わる明久の様子を見て、光一は感嘆の声をあげた。
優子も光一の視線の先の様子を見て、少し羨ましそうに2人を見始めた。

「こうして見るとお似合いなのにね」
「全くだ。Fクラスの空気に侵されてなけりゃ、問題ないんだがな……はぁっ」

明久に対しての攻撃や何かと同性愛者扱いされる事を思いかえし、光一は疲れたように溜息をついた
優子もポンポンと光一の背中を慰めるように軽くたたく。

「姫路さんだけは、少し位応援してあげても良いんじゃない？」
「どうせすぐボロが出るからヤダ。確かにまともな部分もあるにはあるが、他がほとんどFFFのゴミ共や島田と同類になってんだから」
「……自分の行動に全く自覚がないのね？」

ちょっと前同類だった自分を思い出し、自己嫌悪に陥る優子。
そこでふと光一は、雄二に古典を教えて貰ってる美波と秀吉に目を向ける。

『おい島田、世界史の方ばかり気にしていないで集中しろ。お前の国語は明久どころか光一レベルなんだからな。せめて二桁は取れてもらわないと二学期の試召戦争の時に困る』
『う……わっ、わかってるわよ！　でっ、でも……世界史の方も自

信がなくて』

『大丈夫だ、お前の世界史は全体から見れば酷いが光一やFクラスから見たら普通だ。それよりも弱点を強化しろ、お前は問題文さえ読めれば即戦力なんだからな』

『ううっ……ウチは別に畳と卓袱台も嫌いじゃないのに……』

『ワシも同感じゃ。姫路が転校しなくてもいいレベルの設備が維持できれば十分なのじゃから、少しくらい手を抜いても……』

『い～や、ダメだ！　必ずAクラスに、翔子に勝つんだ！　そうしないといつまで経っても俺の立場が変わらないからな！』

『勝っても大して変わらないんじゃないの？　久遠も色々と動いてるんだし、もういい加減諦めたら？』

『その通りじゃ！　もう光一の言う様に男らしく籍を入れるべきじゃ』

『クッ……！　テメエら……！』

「全くよね。そもそも試験召喚戦争で負けたら何でも言う事を聞くって提案呑んだの坂本君なのに、往生際が悪いったら……」

「まあその辺りは俺達で補ってやればいいさ」

「それもそうね」

秀吉と美波に古典を教える雄二を見ながら、２人はそんな事を話していた。

そんな事もつゆ知らず、雄二は２人に怒鳴る様にして……

『まあいい！　次の問題だ！　【はべりの已然型を用いた例文】を書いてみろ』

『『以前食べたケーキはベリーデリシャスでした』』

『お前らちょっとそこに正座しろ！』

「Fクラスのテストだけでバラエティ番組が作れそうね」
「……」
自分もそれなりの為、顔をそらす光一。
『ムッツリーニ君、さすがにこの問題はわからないでしょ？』
『……中一で７０％、中二で８７％、中三で９９％』
『なんでそんなことまで知ってるの！？』
『……一般教養』
『うう……正攻法で勝てる気がしなくなってきたよ……』
『……工藤はまだまだ甘い』
その先では、保健体育の問題を出し合ってる愛子とムッツリーニ。
折角だから自分達も教えて貰おうと言う事で、混ざる事にした光一と優子
「とりあえずだが、混ぜてくれないか？　保健体育勉強してんだろ？」
「あっ、優子に光一君。うん、良いよ」
「考えてみたら学年１と２がいる訳だから、教えて貰わない手もないわね」
「……任せろ」
ドンと胸を叩くムッツリーニ。
数分後
「……優子、何言ってるかわかるか？」
「詳し過ぎると言うか、何と言うか……」

「おいムッツリーニ、少しはまとめろよ！　わかりやすく噛み砕く事が出来てこその理論だろうが！」
「……この程度理解出来て当たり前」
「自分勝手な理論だな！　もう良い、愛子に教わるから。考えてみたら頭の固い奴より柔らかい奴の方が教える側に向いてるし」
一つの事柄に対し、延々と演説の様に理論を連ねるムッツリーニのやり方は、あまりにも不親切なものだった。
「うん、良いよ。どうせなら3人で実践と行く？」
「そんな堂々とって待てムッツリーニ。こんな高価そうな家具の弁償なんて冗談じゃないぞ！？」
愛子の発言にムッツリーニはカッターナイフとスタンガンを取り出し、光一に対して攻撃態勢を取り始めた。
光一は自分より、周りの見るからに高価そうな家具に傷がつく事の方を心配している。
「……そろそろ夕食だから、別の部屋に来て」
「ん？　もうそんな時間か。じゃあ一先ず中断するか」
「そうね。ところで代表の家ってどんな料理が出るのかな？」
「これだけ金持ちなんだから、満漢全席とかフランス料理のフルコースでも出たりしてな。ははっ」
家が家なので、全員楽しみにしながら翔子に続いた。

第百十五問

問題　次の問いに答えなさい
“生まれながらの将軍”と自称した徳川幕府将軍の名を答えなさい。

姫路瑞希の答え
『徳川家光』

吉井明久の答え
『徳川家光』

教師のコメント
正解です、流石は姫路さんです。
そして良く頑張りましたね吉井君。

久遠光一の答え
『徳川蜂光』

教師のコメント
さてと、次の人の採点をしましょう。

「す、すごいっ……！」
「わぁっ……」
「これはまた、贅沢じゃな」

一般家庭でお目にかかれない様なサイズのダイニングテーブル
そこには肉汁滴る北京ダック、贅沢な姿煮のフカヒレ、チンジャオロース、ホイコーロー、発砲際に麻婆豆腐が中央の大皿に盛られていて、それぞれの席にはツバメの巣の入った小さな蓋つき茶碗が置いてある
それらの料理に目を奪われる面々。

「すげえな。まるで有名な中華レストランに来たみたいだ」
「アキがこんなの食べたら、慣れない味でお腹壊しちゃいそうね」
「あははっ、本当だよ」
「ところで、ここで食事を獲るのはワシらだけかの？　霧島の家族はおらんのか？」
「……うん、私達だけ」

部屋の中には勉強会のメンツしかいないが、それはそれで料理を作ったのが誰かはわからないという疑問もある。

「そういや俺も、この家で霧島以外とあった事なんてないな」
「翔子の家はそれぞれが自由に暮らしているからな」
「……うん。だから気兼ねしないで好きに過ごしてほしい」
「成程、それだけ自由なら雄二の部屋がつくられてるのにも納得がいくな」

雄二以外がうんうんと頷いた、
それから適当に座り始め、食事の準備に。

「「「いただきまーす」」」
「これはまた、絶品じゃな……」
「お、おいしいです……！　うぅっ……また食べすぎちゃいます」
「僕の好物のカロリーがこんなにたくさん……っ！」
「ボク中華料理大好きなんだよね」
「ねっ、ねえ光一。はい、あーん」
「ん？　あーん」
「……優子は妾で私は妻。立場の上では負けてられない……雄二、あーん」
「やらないからな！？　それと翔子、何故俺に取り分けた料理だけ毒々しい紫色をしているんだ？」
「ねえ土屋、これは何？」
「……ツバメの巣。おいしい」

滅多に食べられない高級食材の料理を、まるで有名中華料理店を貸切で食事してる様な環境。
そんな中で勉強疲れを癒し、最後に占めとなるデザートの杏仁豆腐を食べてる途中。

「……雄二」
「何だ翔子？」
「……勉強の進み具合はどう？」
「全く持って順調だ。心配はいらねぇ」
「……本当に？」
「ああ。次のテストではお前に勝っちまうかもしれないぞ？」
「……そう」
「そうしたら俺は、晴れて自由の身だな」

楽しげに笑う雄二を見て、翔子の目が細くなった。
光一はそれに感づいていたため、この先の展開が予測できたので黙々と杏仁豆腐を食べている。

「……そこまで言うのなら」
「ん？」
「……勝負、する？」
「勝負だと？」
「……うん。雄二がどの程度できる様になったのか、見てあげる」
「ほほぅっ……随分と上から目線で言ってくれるじゃねえか」

完全に挑発に乗せられてるのを見て、最早光一は自分の予想が当たったなと確信していた。
となると、次に翔子がとるべきは……。

「……わかった。それなら、この後に出題範囲の簡単な復習テストで勝負」
「おうよ！　今までの俺と思うなよ！」
「ホント予想を裏切らないな、このマヌケゴリラめ」

ぼそりと言った光一の言葉に、すかさず反応する雄二。

「それはどういう意味だ二股モヤシ？」
「……それで、私が勝ったら雄二は今夜私と一緒に寝る」
「は？」
「こういう意味だバーカ」

目が点になる雄二に、光一は追い打ちをかけた。
無論、それを聞いて黙ってる訳がない者もいた

「霧島さん、ごめん。杏仁豆腐を食べたいからナイフを貸してくれないかな？　包丁や日本刀でもいいけど」
「やめなさい吉井君。坂本君の自由を一生奪える千載一遇のチャンスなんだから、ここでものにすれば態々罪を犯す必要もないわ」
「おい木下、それはどういう意味だ！？」

明久が早速行動を起こそうとするのを優子が止め、その言い分に抗議する雄二。

「……代わりに雄二が勝ったら、吉井か久遠と一緒に寝るのを許してあげる」
「驚くほど俺のメリットがねぇぞ！？　それと光一、テメエ何麻酔銃を俺に向けてやがる！？」
「雄二、絶対負けろ。そして霧島雄二として覚悟を決めるんだ！俺達の為にも」
「絶対断る！　貴様らの為に犠牲なんて冗談じゃねえ！！」

翔子の言葉を聞くなり、すぐさま雄二から距離を取って麻酔銃を向ける光一。

「いいな～。そういうの、面白そうだね。折角だから……久遠君、ボクと優子の3人で寝る？」
「「はっ？」」

そんな阿鼻叫喚な光景の中で、愛子が楽しそうにそんな事を言いだした。
光一と優子は、揃って目を点にした。

「流石工藤さんだね」

「うむっ。所で明久よ、お主は便乗せぬのか？」
「そうしたいところだけど、僕と一緒に寝たがる人なんて居ないし無理やりなんて良くないからね。それとも秀吉が一緒に寝てくれる？　なーんてね」
「何を言って……いっ、いや、それも悪くはないの。明久よ、何ならワシと寝るかの？」
「へっ？」

自身を男とわからせる為に必要な要素を見込んだ秀吉は、即座に便乗する事にした。
無論、それを聞いて黙らない者たちも

「だ、ダメですそんな事！　明久君にはそう言う事は、えっと、その、まだ早いと思いますっ！」
「おい姫路、いきなり何を言いだす？　秀吉はあくまで同じ部屋で寝ようと言っただけだぞ？」
「明久君の事だから、寝てる木下君を息を荒げて襲うに決まってます！　そしてあんなことやこんな事、果てはそんな事も……もしかしたら、とても私の口から言えない事もするに違いありません！！」
「待て！　お前の中で明久は一体どういう人間で、ムッツリーニじゃあるまいし何故そこまで鮮明な妄想ができるんだ！？」

先程の事を感心してた反動の所為か、急な非常識発想に度肝を抜かれる光一。
そこへそれを好機とみた雄二が、割り込んだ。

「当然だろ。明久は容姿頭脳性格性癖全てが最低だから、姫路の心配は当たり前の発想だ」
「容姿性格性根毒舌が最低中の最低のお前が言うなよ、ゴリラのゆうくん」

「勝手に気持ち悪い愛称つけんな！」
「はいはいそこまで！　男子は男子部屋、女子は女子部屋で寝るでいいじゃない！」

そこで優子が、無理やり場を納めた。
雄二がホッとした顔をしたが、ところがどっこい優子が雄二に対してそんなに優しい訳がなく……

「それじゃ代表、坂本君と今夜一緒に寝る為のテストするんでしょ？」
「おい！　俺は追い詰めるのか！？」
「……じゃあ、まだ開けてない新品の模擬試験を持ってくる」
「待て翔子！　俺はまだ承諾してないぞ！」
「……決定事項。さっき雄二は勝負するって言った、反対意見は認めない」
「ぐっ……！　そっ、そうだが……」

光一は無視を決め込み、杏仁豆腐を再度食べ始めた。
それを察知した雄二は、テーブルに視線を送り翔子と光一に見えない様な覚悟でジュース入りのコップを傾けた。

「っと、すまん翔子！　服にかからなかったか？」
「……大丈夫」
「いや、大丈夫じゃない。お前には見えづらいかもしれないが、服の裾のその辺にかかったみたいだ」
「……それは困るかも」
「悪い。俺の不注意で……」
「……あの薬はこの前久遠から買ったばかりで、繊維を溶かすって話だから」
「待て！　お前は俺の飲み物に一体何を入れたんだ？　そして光一、

お前一体翔子に何を売った!?」

そんなやり取りの傍らで、こぼれたジュースが繊維と反応して煙を出していた。

光一はそれを意にも介さず、杏仁豆腐を食べている。

「……着替えてくる」

「そうした方がいいだろうが……それならちょっと早いが先に風呂にしないか？　腹ごなしも兼ねてな」

「……わかった。それなら先にお風呂にする」

「んじゃ、模擬試験はそのあとだな」

「……うん」

それから男子女子の別れ、着替えの用意の為にそれぞれ割り当てられた部屋へ。

その際光一が優子に耳打ちをした事は、誰一人気付かなかった。

部屋に入って数分後

「さて、行くか」

雄二が立ち上がり、そんな事を言いだした。

「どうせこの後奥さんと初夜だって言うのに、お盛んな事で」

「そうだよ、そんなに奥さんとの時間が待ち遠しいなら態々姫路さん達に迷惑かけないで、個人的に頼めばいいじゃない」

「そうじゃぞ雄二」

「……俺も行く」

ちなみに秀吉は1人で他の部屋に案内された後に、こっそり男子部屋に入ってきていた。

「違うぞバカ共が！　俺が行くのは翔子の部屋だ」
「やっぱり問題用紙盗みに行くのかよ。ホント俺の予想を裏切る事を知らん奴だな、お前は」
「……お前は一度、本気で殺す必要があるな」
「奇遇だな、俺もお前の事は一度殺すべきだと思っていた」
「よし表に出ろ……と言いたいが、今は問題用紙が優先だ。ムッツリーニ、翔子の部屋に入る為に協力しろ。翔子の部屋なら、お前が好みそうな物がきっとある筈だ」
「……わかった」

女性の部屋と言う事で、雄二の囁きにムッツリーニはあっさり協力を申し出て2人で一路翔子の部屋へ。
残された光一と明久、秀吉は……。

「さて、風呂入るぞ」
「あの、止めなくていいの？」
「大丈夫、先手ならうってあるから」
「……光一がAクラスに入ったら、難攻不落も良い所じゃな」

明久と秀吉は一路、光一の案内で風呂に。
入った事はないが、光一はある程度霧島家を案内されて大体は把握している為、場所はわかっていた。

「ねえ光一、お風呂はどんなのかな？　やっぱり健康ランド並の設備があるとかかな？」
「それはわからないけど、霧島の話だと大浴場と露天風呂があるってさ」

「まるで旅館じゃのう」
「しかもちゃんと男湯女湯夫婦湯があるって話だから、まるでじゃなくて旅館そのものだ」
「それもすごい……ってちょっと待って、今夫婦湯って言った？」
「将来雄二との為に態々増築したらしい。まだ出来たばかりで使ってはないらしいけど」
「何故じゃろうな？　卒業と同時に教会直行と言う雄二と霧島の姿が目に浮かんだぞい」

うんうんと頷く光一と明久。
そこで、約一名を除いた女性陣がやってきた。

「あっ、明久君達」
「ん？　ああっ、姫路さん達も今から？」
「うん。大浴場に露天風呂があるって話だから、楽しみだよ。温泉も瑞希ちゃんのコレをじかに見るのもね」
「きゃっ！　あっ愛子ちゃん！　どこを触ってるんですか！？」
「……羨ましい」
「やっ……霧島さんまで……！」
「大きすぎて不公平よね……注射器で吸い取る事とかできないかしら？」
「みっ、美波ちゃん！？　目がとっても怖いですよ！？」

男が場に居ると言うのに、大胆なやり取りを始める女性陣。
その場でポツンと置き去りにされた男性陣は……。

「……ねえ光一、女の子って大胆だよね」
「そうだな……男にしろ女にしろ、体躯で差が出るもんなんだな。はぁっ」
「光一よ、女子のやり取りでなぜお主が落ち込むのじゃ？」

明久が愛子の行動で混乱してる傍らで、持つ者と持たざる者は男女の枠を超える事を実感してため息をつく光一。

「あれ？　久遠君どうもしないの？」
「俺は別に胸がデカかろうが小さかろうが、どうでもいいからな」
「それもそうね。もしモヤシのくせに文句なんてつけたら、一体何さまのつもりだって思うもん」
「だからモヤシ言うなと何度言えばわかる！？」

不機嫌そうな光一を宥める明久が、ふとある事に気付く。
この場に居る女子は、翔子をはじめとして瑞希に美波、愛子の４人。

「明久、優子なら霧島の部屋だ」
「？　霧島さんの？」
「さっき言ったろ？　先手うってるって」

『ちょっ、ちょっと坂本君に土屋君！？　アンタ達代表の部屋でなにしてるのよ！！？』
『げっ！　きっ、木下！？　くっ……こいつを目の前にして退くしかないとは……！』

「……ああっ、そう言う事？」
「後はのんびり風呂にでも入るか。それじゃ女性陣と秀吉、またあとで」
「待つのじゃ光一、さり気にワシをのけるでない！　ワシもお主らと一緒に男湯に入るのじゃ！！」
「えぇっ！？　なっ、何言ってるのさ秀吉！？」
「今日と言う今日は、ワシをキチンと男として見て貰うからの！
とにかく誰が何と言おうが、男同士の裸の付き合いじゃ！！」

「ちょっ、待て秀吉、落ち着けって！　悪かった、悪かったから！！」

兄貴分だけに、秀吉のわがまま……と言うか、不満を解消するには一緒に入る必要がある。

……が、当然光一はそこで計略を働かせ、明久に危害が及ばず一緒に入る方法を模索し始めた。

「わっ、わかった。一緒に入ってやる……頼む明久、俺だけじゃ手に負えないからお前も来てくれ」

「ゑ？」

「ちょっ、ちょっと久遠！　いきなり何言いだすのよ！？」

「そうです、不潔です！　木下君も幾ら久遠君が兄貴分だからって、そんなわがままを言って困らせちゃダメじゃないですか！」

「ワシは当然の権利を主張しておるだけなのじゃ！！　姫路に島田、ワシはお主らが何と言おうと絶対に男湯に入るのじゃ！！」

不満が爆発したらしい秀吉は、珍しく2人に対して一歩も引かない姿勢を取り始める。

光一が頭を押さえながら、一歩前に出る。

「姫路に島田、お前らちょっと黙れ」

「なっ、何でですか！？」

「そうよ！　まさかあんた、また木下に味方する気！？」

「……黙れっつってんのがわかんねえのか？」

絶対零度の視線と声に加え、懐から麻酔銃を取り出し突きつける光一。

流石に2人は委縮してしまい、一歩後ろに下がる。

それを見て光一は顔をこすって元の顔に戻すと、秀吉に向き直る。
「秀吉、俺が悪かった。すまなかったから、ちょっと落ち着いてくれ」
「うっ……いっ、いや、ワシも悪かったのじゃ。つい感情的に……」
「いや、兄貴分としての落ち度だ。だからここは俺に任せろ」

―　閑話休題　―

「と言う訳で、2重にバスタオル着用してなら良いとのことだ」
「それなら、僕も安心だね」
「……釈然とせんが、光一に迷惑をかけた以上これ位は我慢するのじゃ」
「そうと決まればさっさと入るぞ。なんかもう勉強より疲れた」
疲れ切った状態の光一の背を、労う様にポンポンと背中を叩く明久
「んむっ？　何か忘れておる気が……？」

一方その頃……

「……雄二、婚姻届を盗もうとするなんて許せない」
「まっ、待て！　話を聞け！　あれは盗難じゃなくて正当な権利でギャァアアアーっ！！」
「ムッツリーニ君、ほらほら（チラチラ）」
「……！！（ブシャアアア！！）」

「これで潜入者（バカ）の討伐完了ね。さてと、アタシもお風呂に入っちゃおうかな？」

第百十六問

問題　次の問いに答えなさい
“妻妾同居”の意味を答えなさい

久遠光一の答え
『妻と妾が同じ家に住む事』

教師のコメント
正解です。不謹慎ですが、君が正解を答えるのは当たり前だと思ってしまいました。

全女子生徒の答え
『久遠光一』

教師のコメント
正解です、特に問題は……ありました。
確かに久遠君の女性関係は仲がいいですから、当てはまると言えば当てはまりますが不正解です。

A～Eクラス男子生徒の答え
『憧れのシチュエーション』

教師のコメント
覗き騒動で停学になった事を反省していない様ですね

Fクラス男子の答え
『俺の将来』

教師のコメント
君たちは一度自分の行動と評価を思いかえしてください。

「あーっ……生き返るなー」
「本当だね……それにしても、広いよねー」
「うむっ。足をのばして入っても余裕があるとは、何とも快適じゃ」

大浴場に響く3人の声。
身体を軽く流してから、湯船につかる3人。

『木下君、なにもありませんか!?　明久君に襲われてませんか!?』
『アキ、変なことしたら生かして帰さないからね!!』

1分に1回、女湯から響いてくる2人の声。

「……あ奴等には信用と言う概念はないのかの?」
「無視しろ。今アイツ等の事を話すな、頭が痛くなる」

「……すまぬ」

ノイローゼ気味のその様子に、秀吉もいたたまれなくなった。

「ごめん、僕の所為で」

「お前は何も悪くないから気にするな。寧ろお前の女難に同情する位だ、それに2匹もあんな疫病神に憑かれてるんだから」

「既に姫路と島田に温情かける気もない様じゃの」

「そんなモンあったら廃棄処分するわ！！」

「ごはんにかける事もせんのか？」

「そんなメシ不味過ぎて食えるか！！」

光一の激怒寸前にほっとしつつも、これ以上刺激してほしくないという願いが湧きでて来た秀吉。

明久にアイコンタクトで、話題をそらそうと伝えるとそれに頷く。

「ところで光一、話し変わるけど勉強の方はどう？」

「ん？　ああ、化学と保健体育が点数アップ出来そうだ。あとは現代国語も少し、かな？」

「どうやら順調の様じゃの」

秀吉が少しさびしそうにそう言ったのは、明久も光一も気付かなかった。

『木下君、なにもありませんか！？』

『木下、何かあったらすぐ行くからね！』

が、そこで空気をブチ壊す乱入声。

光一が不機嫌さを隠しもせずザバッと立ち上がり、冷水を頭にかぶる。

＜ちょっと何か飲んでくる。バレない様に気をつけてくれ＞
＜ん、了解＞

光一が音を立てない様に脱衣所へ去って行くと、明久と秀吉ははぁっとため息をついた。

「光一にはいつも苦労かけてばっかりだな」
「奇遇じゃの、ワシもそう思っておる」
「……頑張らないとね、試験。名ばかりの相棒だなんて僕は嫌だから」
「うむっ。明久よ、ワシも同じ気持ちじゃ」
「そっか……じゃあ一緒に頑張ろうよ」

2人でひそかに、同じ目的の為に頑張ろうと誓い合う光景。
それをこっそり見る光一は、嬉しそうだった。

「嬉しい事言ってくれるね……っと、そろそろ出るか。雄二は今頃拘束されてるだろうからゆっくりしたいが、あまり霧島を待たせる物じゃないしな」

少し間をおいてから、自身も戻って行った。

その後、結局テストは中止。
普通どおりに勉強の続きをする事に。

「ごめん光一、一足遅かったみたい」
「あー……雄二を舐め過ぎてたか。婚姻届に気を取られて失敗するかと思ってたけど、ムッツリーニがいる時点でまずかったな」

「婚姻って……アンタ知ってたの？」
「当然。だってあの強化ガラスとその取り付けを手配したの、俺なんだから」

今は多少の点数稼ぎの為に、一応普通（とはいっても、明久の平均点以下）の科目の勉強。
少し位果たしにした方がいいと言う優子の主張でもある。

「で、どうだったの？　聞いたけど、秀吉も一緒にお風呂に入ったんだって？」
「ああ。俺にも落ち度があった事は事実だけど、アイツはアイツで女扱いされる事に不満がつのってたからな……当然姫路と島田から、1分に1回は確認の大声が飛んできたが」
「……」

少し前まで同類だっただけに、自分がそれをやる姿が容易に想像できた優子。
そのあとは当然の様に、後悔と不快感と罪悪感が湧きでてくる。

「おい二股モヤシ、妾との勉強は進んでるか？」

そこへ秀吉と美波を翔子に任せた雄二が、ニヤニヤしながら乱入して来た。
が、目だけは笑ってなかった。

「なんだ？　随分と機嫌悪そうだが」
「当たり前だ。今お前達から聞き捨てならん情報が聞こえたからな」
「ちょっと盗み聞きなんて趣味悪いわよ？」
「そんな事はどうでもいい！　あの強化ガラスを手配しやがったのはやっぱりテメエか！？」

光一の胸ぐらをつかみ、血走った眼で睨みつける雄二。
それを意にも介さずポリポリと頬をかき、教科書を手に持って読み続ける光一。

「だって割の良い商談だったし、そんなに大事に保管したいって言うんなら協力もしてやりたいと……」
「テメエはどれだけ俺を追い詰めれば気が済む!?」
「優先すべきは代表の幸せだからでしょ。大体“試召戦争で負けたら何でも1つ言う事を聞く”っていう約束に同意したのも、その戦争でマヌケやって負けたのも坂本君なんだから同情の余地なんてないわよ」
「やれやれ、既に終わった事どうこうだなんて無粋だと思わないのか？
「お前が言えたセリフじゃない……ってゴリラに言っても理解できるわけもないか」

雄二は胸ぐらをつかむ腕に力を込め、光一を殴ろうとした。
ちなみに光一の服装は黒いTシャツと長ズボン（半ズボンが嫌い）で、光一の貧弱な腹があらわに。

「ちょっと坂本君、光一の服を脱がしてどうする気？」
「おい、これのどこを見てそんな……」
「……浮気は許さない」
「げっ！　テメ、木下！　これが狙いか!?　待て翔子、これはただのけんギャアアアア!!」

アイアンクローの刑に処される雄二の傍らで、服を直した光一が再度勉強の続きに。
そして当然の様に、2人はそれを意にも介さない。

「やっほー。久遠君」
「ん？」

ゴンッ！

突然後ろから抱き付いた愛子の勢いに耐えきれず、机に顔面直撃する光一。
それを見て雄二は、ざまあみろという視線を送った。

そして就寝時間。

「木下君、何かあったら大声で叫んでくださいね」
「……これ、防犯ブザーとスタンガン。雄二が何かしそうになったら使って」
「むぅっ……最早ワシの性別を正しく認識しておるのは、光一と姉上と明久の姉上だけということなのじゃろうか……？」
「アキ。わかってると思うけど、万が一にも何かあったら……」
「わ、わかってる！　何もしないよ！」

秀吉自身の希望で、秀吉も男子部屋で寝る事になった。
一応前の強化合宿で何もなかったという実績を考慮しての決定だが……

「ホント明久に対して信用のかけらどころか、概念すらあるかどうかが疑わしいな」
「そうね。今更だけど吉井君のことどう思ってるのかしら？」
「ま、どうでもいいがな。明久がアイツ等以外に気を向ける為と、雄二を陥れるのに利用できるから」

「光一君、ホントそう言うの好きだね。でも吉井君はともかく坂本君はどうして？」
「どうでもいいじゃない、そんなの」
その様子を呆れたように見る、光一と優子。
そしてちょっと面白そうに2人の傍に居る愛子。
「さてと……疲れたからもう寝るな」
「あっ、うん。お休み」
「おやすみなさい」
光一は勉強疲れと瑞希と美波の相手で疲れてるのか、男子部屋に入るなり布団をかぶり寝てしまった。
女子部屋にて。
「そう言えば瑞希って、いつもその髪留めしてるわよね？」
「んっふっふ～、ボクの予想だと好きな人からの贈り物だって感じがするけど」
「いえ、あれ自体は自分で買って来た普通の髪留めです」
「あらら、予想がハズレちゃった」
「確かに思い入れはありますけどね」
「え？　なになに？　面白そう！」
女子部屋では、女子らしい和気藹々な空気の中。
恋バナの気配を漂わせる話題で、盛り上がっていた。
「それはヒミツです。それよりも私は、優子ちゃんと愛子ちゃんのお話が気になります」

「そうね、何せドラマや小説とかでしかお目にかかれない本妻と妾なんて関係だもん。学園じゃそのおかげで久遠が少し大人しくなったから先生の間で承認されてるって話もある位だし」
「ふふっ、そう考えるとボク達って、すごく貴重な間柄だよね」
「……うん。でも意外なのは、それを認めてくれた人がいるって事かな？」

普通に考えて、二股など褒められる様な関係じゃない。
それだけに、一部では受け入れられてる事が意外だった。

「……そもそもキスシーンが新聞で広く知られてるから」
「「……（／／／）」」

その時の事を思い出したのか、2人は顔を赤くした。

「すごかったですよね、まさか優子ちゃんが久遠君とキスした所に出くわした時なんて」
「その明後日に新聞で、愛子が久遠を押し倒してキスしてる写真が出回ってるんだもん」
「……誰も彼もに知られてる間柄、ちょっと羨ましい」

その時を思い出して、2人はより顔を赤くした。

「そっ、それより代表。坂本君とはどうなの？　やっぱり、ご両親に了解は貰えたの？」
「……うん。雄二のお義父さんとお義母さんは、私の事を受け入れて貰えた」
「おめでとう。式は多分光一が手配するだろうから、アタシもその手伝い頑張るわ」
「……ありがとう優子」

一方、男子部屋では……

「……ＺＺＺ」

「なんだ、光一本当に熟睡しやがったのか」

「勉強疲れもあるかもしれないけど、最近アンチ久遠派騒動やお兄さんとの再会、それからも木下さんと工藤さんの関係の変化とかいろいろあった訳だからね」

「うむっ。光一は元々そんな体力がある方ではないからのう」

先に完全熟睡に陥ってる光一を見ながら、それをネタに談笑。

そこで雄二は、ふと時計を見て立ちあがる。

「さてと……」

「ん？　奥さんに夜の催促？」

「違うぞバカの大王。そろそろ寝静まった頃だから、あの部屋に保管されてる婚姻届を取り戻しに行くんだ」

「雄二、いい加減観念しなよ。光一が雄二にどうにかできるような物を用意する訳ないじゃないか」

「うるさい黙れ！　俺がどれだけあれを探してたと思ってる！？」

「ちょっ、声が大きいよ」

雄二が明久の言葉にはっとなり、口を押さえた。

「とにかくだ、何としてでも俺の自由の為にここで婚姻届を取り戻すんだ」

「光一が起きてたら麻酔銃で撃たれてるよね」

「光一は雄二を霧島とくっつけることに賛成しておるからの」

「そのモヤシはいつか殺す」

そう言って、手に持つ先程ムッツリーニから借りた強化ガラス切断用カッターを握り締める。
が、今は婚姻届を優先と自身を抑え、出て行った。

「んっ……？」
「あっ、光一起きた？」
「ああっ……あれ、まだ夜か。雄二は？」
「婚姻届を取り戻しに霧島の部屋じゃ」
「……やっぱりな」

またもや予想してた通りに動く雄二に、呆れはてる光一。

「くぁあ……ちょっとトイレ」
「あっ、うん」

男子部屋を出て、トイレへ向かい用を足し少し顔を洗う。
それから男子部屋に戻ろうと言う所で……

「ん？　よう愛子、何してるんだ？」
「あっ、光一君。丁度よかった、さっき坂本君が代表に部屋に入って行ったから、折角だしボクも夜這かけに行こうかなーって」
「そうか、姿が見えないと思ったら……」

事情は知ってたが、あえてとぼける事にした光一。

「愛子はさ……」
「ん？」
「……いや、何でもない。それじゃお休み」
「あっ、ちょっと待って」

「？」

頭が寝ぼけてたので反応が遅れた光一。
そこへ愛子が光一の首に手をかけて……

ちゅっ

「……へっ？」
「えへへ、それじゃお休み。光一君」

片目をつむって見せてから、愛子は女子部屋へと戻って行った。
家に雄二が翔子に見つかったらしい断末魔が響き渡るまで、光一は惚けながら頬に残ってる柔らかな感触に浸り続けていた。

「あっ、お帰り光一」
「ああっ」
「？　どうかしたの、何だか惚けてるみたいだけど？」
「！？　そっ、そうか？」
「？」

第百十六問（後書き）

ふと思った事ですが、光一がＡクラスに入ってたら……
と言うＩＦストーリーでも作ってみようかな？

第百十七問　エピローグ

問題　以下の文章の（　）にあてはまる正しい年と人名を答えなさい
『紀元前３３４年アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス三世を破った、（　）による（　）が始まる』

姫路瑞希の答え
『紀元前３３４年アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス三世を破った、（アレクサンドロス大王）による（東方遠征）が始まる』

教師のコメント
正解です。ここに出てくるダレイオス三世とアレクサンドロス大王の間の戦争は、いっそスの戦いとあるべらの戦いの２つがあります。両方とも正しく覚えておくと良いでしょう

久遠光一の答え
『紀元前３３４年アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス三世を破った、（ナポレオン）による（応仁の乱）が始まる』

教師のコメント
君の答えを形容する言葉がわかりません

高橋洋子のコメント
どうすれば君の歴史の点数をあげられるかがわかりません

土屋康太の答え

『紀元前３３４年アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス三世を破った、（光の勇者・アーク）による（ファイナルクエスト～国王最後の聖戦～）が始まる』

教師のコメント
“ファイナル”や“最後”という単語があるのに、続編がありそうな気配がするから不思議です

坂本雄二の答え
『紀元前３３４年アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス三世を破った、（アレクサンドロス大王）による（東方遠征）が始まる』

教師のコメント
おや？　坂本君でＦクラスの解答用紙は最後ですか？
まだ吉井君の珍回答を見ていない様な気がするのですが……まさか正解していたのでしょうか？

「さて、と」

泊まりでの勉強会後。
光一は木下姉妹と一緒に帰り、今は自宅。
今日は母親が帰って来てる筈だが……

「……出張で北海道へ、ね」

特に何の感慨もわくことなく、光一はその書き置きを丸めてゴミ箱に投げ入れた。

離婚当時は木下家で世話になってた物の、家事を覚えた小学校高学年には半1人暮らしを始めていた。
当時から寂しいと言う気持ちより、ここに兄がいないという安心感の方が勝っていた為、特に何も思う事もない。
元々兄と体躯の所為で嫌われて1人で過ごす事が多かった光一にとって、気にもならないのだから。

「さてと、メシはどうすっかな？」

光一は冷蔵庫の中を確認。
まずは買い出しだな……と、財布を確認し始めると

Ｐｉｐｉｐｉｐｉ！

「ん？」

そこで携帯が鳴り、取り出して着信画面を確認。
明久の自宅からで、何があったと気にしながら電話に出る。

「もしもし？」

『あっ、久遠君ですか？』
「？　玲さん？　どうしたんです？」
『アキ君はそちらにいらっしゃってませんか？』

話からして、明久が家を飛び出したと容易に想像がついた光一。
それから、何があったかは……

「……何やったんですか？」
『私が何かやったと言うのは決定事項なのですか？』
「この前のやり取り見る限りじゃ、明久からだと思う事自体が無理な話だと思いますが？」
『アキ君と仲がいいとはとても信じられない位に頭がいい子なのですね』
「アンタ弟をなんだと思ってる！？　っと、まあいい。真面目な話、何があったんです？」

それから玲からの事情説明。
帰ってきた明久が夕食の準備をすると言いだしたのを、玲がそれに対し冷たく突き放す様な事を言ったとの事。

アキ君に料理をしてる余裕なんてない、結果出せなかったときの言い訳の判断材料にされたら困る
と言った事に腹を立て、家を飛び出したとのこと。

それを聞いてからの光一は、ため息をついた。

「……成程ね。幾ら明久に自分を見返させるためにやる気をたき付けるためとはいえ、それは幾ら何でも浅はか過ぎだったんじゃないですか？」
『っ！　……気付いてたんですか？』

「俺は嫌われてばかりの人生送ってたんで、人の悪意や敵意には敏感なんですよ。その経験上行動こそ問題だらけだけど、そう言うのは見受けられなかった。それさえわかれば、後は簡単な推理です。少なくとも明久の気持ちも少しは酌んであげれば、こうはならなかったんじゃないですか？　せめて気持ちは嬉しいとでも言えば、そうはならなかっただろうに」

『……』

光一の言葉に、玲は無言になる。

確かに幾らやる気をたき付けるためとはいえ、光一の言う様に気持ちは嬉しいと言えばここまでにはならなかっただろうと。

「とにかく明久が来たら、ウチに泊めますので。目的が目的とはいえやってる事が奇天烈その物である以上、こじれるのも時間の問題だと思ってましたから」

『……わかりました。こればかりは私が軽率だった様です』

「まあ明久も俺の言葉なら聞き入れる筈ですから説得はしますけど、反省するべきところは反省して下さいね？　俺としても、あなたのやった事は気分いい物じゃないですから」

『ありがとうございます、そしてごめんなさい。アキ君は本当に、良いお友達を持ちました』

「明久は嫌われてばかりの中でようやく出会えた、無二の親友ですからね。大切にしたいし、一緒にバカやったり笑いあったりしたいんですよ」

『……アキ君の事を、よろしくお願いします』

電話を切ると、少し待つ事にした光一。

明久が余所を頼るとしたらやはり自分の為、来るとしたらそろそろ……

ピンポーン！

だと思った処で、チャイムが鳴った。
誰だと思いつつ、玄関に出てみると……

「よう、明久」
「ごめんねいきなり。あのさ……」
「まあとにかく上がれよ」

まずは明久を上がらせて、リビングに通す。
それから事情説明の前に、光一はある事を離す。

「姉さんから、電話が来たの？」
「ああ。あの人俺でも真意がわかり難い人だから、こうなるのも無理もないけどな」
「え？　それって……」
「いや、俺から言っていい事じゃないが、ヒント位やるよ。テスト終わったら、冷蔵庫を見てみな？」
「冷蔵庫？　……何の事かわからないけど、わかった」
「まあとにかく、今は落ち着くことからな？　じゃあ俺は今から買い出し行くから、落ち着いたら勉強の続きでもやれよ」
「うん、ありがとう」

光一が家を出て、買い出しにいくと明久は貰った飲み物を飲んで、少し落ち着いたのを見計らって勉強を始めた。
その一方で光一は……

「……姉貴、か」

……ふとある人物の顔を思いかえすと、即座に頭を振ってかき消し

た。
あれは違う、と何度も半濁しながら

「さて、と……何作った物か？」

気持ちを切り替えて、少し楽しそうに夕食の献立を考え始めた。
歪で乱暴で奇天烈ではあっても、肉親に愛情を注がれてる明久にほんの少し羨ましいと思いながら。

時は過ぎ、期末テスト
光一は朝起きて、トーストを2枚焼き牛乳を用意する。

「あっ、おはよう光一」

目の下にクマをつくった明久が、既に支度を整えて出るところだった。

「明久、朝飯位食ってけ。いざって時に何も出来なきゃ話しにならないぞ？」
「うっ、うん。そうだね」

トーストをまる飲みする様にほおばり、牛乳でそれを流し込む。
光一もすでに準備が出来てる為、戸締り。

「で、どうなんだ？」
「うっ、うん。世界史だけど、良い点がとれそうだよ」
「そうか。俺歴史関連が全くダメだから、試召戦争で明久が補ってくれるんなら助かる」

光一は歴史関連が全くダメで、四捨五入しても二桁にならない点を取ることがほとんどだった。

「ねえ、光一。怒らないで聞いてくれる？」
「ん？」
「光一がお兄さんと暮らしてた頃って、どうだったの？」
「兄貴と？　うーん……兄貴は文句言えばすぐ殴るから、まともに会話した記憶がないな」
「そう言えば常夏コンビも、あの時殴られてたよね……けど無関心っていうのが羨ましいよ」
「まあ納得は出来るけどな。けどあの人は兄貴の様に、自分のプライドとかそういうのを基準に行動してる訳じゃないんだ。そこだけはわかってやれ」

まるで姉を擁護してる様な言い方に、疑問に思う明久。
もしかして光一なら、とある可能性に気付く。

「……ねえ、光一は姉さんがなにを考えてるのか、気付いてるの？」
「まあな。けどそれは俺から言っていい事じゃないから、悪いな」
「……ううん、気にしなくていいよ。光一がそう言うんならそれが僕の為なんでしょ？」

ピンポーン！

「おっ、来たか。早く行こう、秀吉と優子が待ってる」
「あっ、うん」

時は過ぎ、Ｆクラス教室に手

「よし、お前ら席に就け。期末テストの一日目だが……」

鉄人事西村教諭がＨＲで連絡事項を伝え、教室を出ていく。
それから自習をしながら試験に備える教室。

「さて、どうなる事やら？」
「んむ？　どうしたのじゃ光一よ？」
「いや、何も……今回総合でＡに届けばいいんだけど」
「大丈夫じゃろ、光一ならばな」

「はい、勉強道具をしまってください。一時間目のテストを始めます」

現代国語

『四面楚歌』の正しい意味を選択肢の中から選びなさい。

？孤立して助けがない事
？歌ばかり歌って何もしない事
？楚という国の様に紙面に伝播しやすい事
？四面のＢＧＭが楚である事

「……まさか実際のテストの選択肢で出るとは」↑（本気で？の解答を模擬試験でやったことあり）
「久遠君、試験中です」
「あっ、はい」

英語Ｒ

“Ｉｔ”の意味する内容を日本語で書きなさい
“Ｉｔ”　ｗｏｎ’ｔ　ｔａｋｅ　ｙｏｕ　ｍｏｒｅ　ｔｈａｎ　ｔｅｎ　ｍｉｎｕｔｅｓ　ｔｏ　ｙｏｕｒ　ｈｏｍｅ.
※　警告　“それ”と書いた生徒は問答無用で職員室への出頭を命じます。

「ぷっ！」
「久遠君、何がおかしいのですか？」
「……いえ、なにも」

そして、世界史の時間

「よし、お前ら。テストを始めるぞ、筆記用具以外は全部しまう様に」

監督の鉄人の宣告が響き、準備が始まる。

「一枚ずつ取って後ろに回す様に。問題用紙はチャイムが鳴るまで伏せておく事。良いな？」

「さて、ここが山場だな」
「明久にとっても光一にとっても、の」
「いや、俺はいいんだよ」
「そこ、私語は慎め！」

そしてテスト終了

「よし、ペンをおけ。解答用紙を後ろの生徒が集めてくる様に」

クラスに大きく息を吐く音が響き、解答用紙

「おい朝倉、往生際が悪いぞ。早く渡せよ」
「ま、待ってくれ！　ここだけ直してから！」
「朝倉！　チャイムは鳴ったぞ！　諦めてペンをおけ！」

「んー……っと。あー、やっぱり出来なかった」
「相も変わらず歴史オンチじゃのう」

壊滅科目のため選択問題が頼りの光一だが、疲れた様にべたっと卓袱台に突っ伏した。
ふと明久を見ると……

「吉井、回収してくぞ」
「あっ！」

「明久？　……まさか」
「……ミスしたのかの？」
「多分な……後でジュースでも差し入れてやるか」

世界史　一学期期末試験

クラス　紀元前
学生番号　３３４年
氏名　アレクサンドロス大王

テスト返却日の夜。

「はいもしもし？」
『あっ、光一？』
「明久か、どうした？」
『お礼を言いたくてね。ほら、泊めてもらった事と、アドバイスに』
「その様子だと、俺の予想は当たってたんだな？」
『うん。冷蔵庫の中に、パエリアの失敗作がたくさんあってね……光一の言うとおりだったよ。姉さんの気持ち、よくわかった』
「そうか」
『それと姉さんも、あの時の事を軽率だったって謝ってくれたんだ』
「それは良かったな」
『うん。これから説教がまだあるけど、これだけはすぐ言いたくてさ』
「ははっ、気にしなくていいさ。だって俺達、無二の親友で相棒なんだからさ」
『うん、ありがとう光一。僕、光一と親友になれてよかった。それじゃ』

そこで通話が切れて、光一は一言

「……俺だって同じだよ、明久」

そう呟いて、光一は中学まで秀吉以外が来る事のなかったリビングを見回す。

「しかし秀吉でも思う事だけど、ここってどうして人がいなくなるとこんな広く感じるかな？」

第百十七問　エピローグ（後書き）

以上、試験編終了です。
ここでは玲さんは仕事の都合で帰ってきてるので、結果の有無関係なく一緒に暮らすのですが……ここでは、原作どおりにいく事にしました。

さて次は、融合召喚の新技術……の前に。
ＧＡＵさんのひばりとクリス、もしくはレフェルさんのつぐみと深紅を借りてちょっとした恋愛もののコラボを作ってみたいなと思ってみたり。
一先ず、ＧＡＵさんとレフェルさん、ご返答をお待ちしてます。

コラボ問題第五問　過激派と雲雀のとある会話（前書き）

今回はＧＡＵさんの“バカと雲雀と召喚獣”より
支倉ひばり、クリスティーナ・ウエストロードをお借りしたコラボです。

どうにも自信はありませんが、それなりの物を作ったつもりです。
ここをこうするべきだ、と言う意見があったらぜひ。

コラボ問題第五問　過激派と雲雀のとある会話

「久遠君はさ……」
「ん？」
武器の手入れをしてる光一を見てるひばりが、ふと口を開いた。
「武器、好きだよね？」
「好きだよ。元々が自分より強い相手と戦う為の道具が武器なんだから」
「……そんなことしてるから、皆久遠君を怖がったり嫌ったりするんじゃないかな？」
「何もしてないのに嫌われるなんて、俺にしてみれば当たり前の事だよ。それに俺から攻撃を仕掛けた事は、一度たりともないんだがな……少なくとも、今の方が納得できる分まだいい」
その辺りは優子から何度も聞いた事だと、ひばりはふと優子と話した時の事を思いかえしていた。
光一は傲慢な兄と細い体躯の所為で、周囲から疎まれいじめられていたと聞いた時の事
ひばりと光一は性格も評判も全然違うが、ある共通点を持っていた。
それは小柄な体躯に似合わない大きな胸、病気と思えるほどに細い体躯と、互いに特異な体躯を持つゆえに嫌な記憶を持っている事。
「……よしっと。なあひばり、明久の事は」
「何度言われても同じ。アキ君に相応しいのはみっちゃんで、あたしじゃない」
「俺から見たら、明久が一番必要なのは……」

「その先は言わないで」

有無を言わせないと言わんばかりに、光一の言葉を遮った。

光一とてその先を言う程野暮ではなく、ポリポリと頭をかいて諦めたように溜息をつく。

「……そうかい」

「でも、久遠君の気持ちは嬉しいよ。ありがとう」

「そうかい。そう思うんなら答えてほしいんだけど、もし明久がひばりに告白したらどうする気だ？」

「え……？」

そう言われたひばりは、その場面を想像した。

真剣な表情で自分を見る明久、そして意を決したかのように口を開いて……

そこで頭をふって、その想像をかき消す。

「なっ、何言ってるの久遠君！？　そんなことある訳……」

「もしって言っただろ？　もしされたら、お前はどうする気だ？」

「そっ、それは……でもやっぱり、アキ君にあたしは相応しくないよ」

「……仕方ないな。じゃあさ、俺が優子に告白した事と、優子が俺の2番目でも3番目でもいいって言ったの、バカな話だと思うか？」

「え？」

光一が優子に振られたのは、Aクラスとの試召戦争以来有名な話だった。

その数ヵ月後に、優子とのキスが新聞で広く知れ渡ってるのも、まだ記憶に新しい。

「あれ以来、身の程知らずだのゴミと黄金だの、好き勝手言われたな……優子は何も言わないけど、きっと何か言われてる筈だ。ひばりもそう思うか？」

「そんな事ないよ。誰かを好きになる事をバカにするなんて、そんなの悲しいよ！　確かに歪だとは思うけど……でも、バカにしてはないよ」

「けど事実だし、俺も自覚があるからどうでもいい……っと、話はそれたな」

「久遠君って、自分の事にはてんで無頓着だよね？」

「やってる事がやってる事だから、いつかは報いを受ける身なんでね。だからこそ、大切な人には笑っていて欲しいんだよ。まあこれ、ひばりや明久と一緒に居るようになってからの考えだけど」

だからこそかもしれないな……と、一息おいてから光一は口を開く

「誰かの為に必死になるって事を出来るひばりと明久に、人一倍惹かれてるのは」

「久遠君……』

「とまあ、堅苦しい話はもうおしまい。という訳で……」

そう言うと、ひばりの両の頬をつねり軽く引っ張り始めた。

ひばりは突然の事で動転して、光一を見据え始める。

「ひょっ、ふおんふん！　ふぁふぃふふほ！？」

「こんなに大切に思ってるんだから、何に悩んでるのか知らないけど少しは俺の意をくんでくれ。お前が本当の笑顔になれるのは明久と一緒に居る時だけなんだから、その笑顔曇らせて勝手にあきらめるなんて事するな。そんなことしたって明久も姫路も島田も、誰１人納得しやしねえ。少なくとも俺はそれを絶対に許さん」

「ふぁんふぇふぉんふんにふぉんふぁふぉふぉいふぁふぇふぁふぁ!!」

「だから俺は勝手に明久とひばりを応援する。心配しなくても、明久の気持ちが固まったらその気持ちを応援してやるから、それまではそうしてやる」

「ふぉおっ！　ふおんふん!!」

ひばりが光一の手を払いのけて、光一にとびかかった。

そのまま背中から倒れた光一の上に、ひばりは馬乗りになって光一に抗議し始める。

「あたしなんかよりみっちゃんを応援してあげてよ！　その方がアキ君の為だよ!」

「それを定義するのはひばりじゃない」

「久遠君でもないよ!」

「その通りだ、でも俺のねざめが悪いからそうしてるんだ」

「アタシの気持ちを無視して、そんな勝手な!」

「ひばりの気持ちを無視してんのは、寧ろひばりだろうが!」

「あーちょっとちょっとそこのお二人さん、なにしてるのかなん?」

「あの、支倉さん?　……何してるの?」

そこで横やりが入ったので、2人が振り向くと……

「ん?　なんだ、クリスに優子か。どうしたんだ?」

「?　どうしてそんなニヤニヤしてるの?」

「いや～、お姉さん野暮だったねい。まさかこういっちゃんとひばりんがそんな関係だたなんてねい♪」

「「?」」

そこで光一とひばりが、ふと自分の状況を確認し始めた。
まず体勢は、光一の上にひばりが馬乗りになってる。
そして取っ組み合いをしてたので、互いに掴みかかった状態。
……結論を出すや否や、ひばりが光一から飛びのいて光一もすぐさま立ちあがる。

「いっ、いや、そうじゃなくてだな？」

―　閑話休題　―

「もうっ、光一。気持ちはわかるけど、ダメじゃない」
「……わかってるよ。ちと言い過ぎた」
「ごめんね支倉さん、光一が乱暴をして」
「ううん、気にしてないから良い」

寧ろ、乱暴したのは自分もなので、罪悪感が沸いて来た。
……が。

「でもこういっちゃん、まさかひばりんにまで負けるなんて」
「うっ……（グッサリ）」

女の子に、それも病弱なひばりに取っ組み合いで負けた事を指摘され、落ち込んで居た。

「えっと……」
「光一は武器がないとてんで弱いからね。もうっ、ちょっと飲み物

でも持ってくるわ」
「あっ、じゃああたしも」
そう言って優子はひばりを伴って出ていき、クリスは……。
「本当に、こういっちゃんは良い友達にも彼女にも恵まれたよ……
そう思わない？　お兄さん」
廊下へ出て、ぽつりとそう言うとそこに居たのは、光一の兄である
大神白夜。
「何故いるとわかった？」
「女の勘」
「ふんっ、まあ良い。久しぶりだなウエストロード、去年の試召戦
争以来か」
「そうだね。元気そうで何よりだよ、びゃくやん」
「その呼び方はやめろと何度言えばわかる？」
白夜の睨みにたじろぎもせず、ひょうひょうとした態度を崩さない
クリス。
それに毒気を抜かれたのか、白夜もため息をついて敵意を納めた。
「で、なんの用なの？　弟のこういっちゃんにリベンジかな？」
「光一は後だ。私がここに来たのは、お前に模擬試召戦争を申し込
む為だ……あの時と同じ、古典でのだ」
「あの時は、びゃくやんの勝ちじゃない？」
「私は私の認めた勝利以外を勝利と認める気はない。ギリギリの僅
差など、もってのほかだ」
「こういっちゃんは嫌ってるけど、大神君のそういうプライドの高
すぎるセリフ、なんからしいよ」

「これが私だ。それ以上でも以下でもない、私たる証明だ」
「それでこそびゃくやんだね……いいよ。じゃあ職員室行こうか。こういっちゃんが気付いたら、勝負ができそうにないから」
光一が未だ落ち込んでるのを見てから、クリスは大神と共に職員室へ。

「びゃくやん、良い弟さんを持ったね？
「良い？　愚かなの間違いだ、バカめ」
「本当に、兄弟仲悪いね」

少し悲しそうに、クリスがぽつりとつぶやいた。

その一方、優子とひばり。
購買で飲み物を買って、戻る途中。

「優子ちゃんは……」
「ん？」
「優子ちゃんは、久遠君との今の関係、後悔してないの？」
「ううん、してない。今のアタシには、これが一番幸せなの」
「……ごめん。納得は、出来そうにないよ」
「わかってる。けど散々酷い事をしたのに、それでも光一は笑って一緒に居てくれる……だから、後悔はないの」
「悪党なんて自称してるのに、久遠君って優しいよね」
「うん」

その笑顔は、ひばりも見惚れる物だった。

それから、Ｆクラス教室にて。

「ねえ、久遠君」
「？　なんだ？」
「優子ちゃんの事、大切にしてあげてね？」
「？　なんかよくわからんけど、わかった。けど大切なのは、それだけじゃないぞ？」
「……少しは、考えるよ」
「やれやれ……」
「どうせこれからも同じなんでしょ？　だったら今はいいじゃない」
「……そうだな」

コラボ問題　第2問（2）　『観察処分者とちっさい幼馴染の波乱万丈デート

レフェルさんの“僕とちっさい幼馴染と召喚獣”より、雨宮つぐみと神埼深紅とのコラボです。
と言っても今回は、深紅と光一メインのバトルストーリーなので、つぐみの本格参加は次となります。
ちなみに前後編となっておりますので、今回は前編です。

「という訳で、明久とつぐみにデートして貰う事にした」

と言って、一枚のチケットを取り出す光一。
場所はAクラスで、目の前に居るのは優子と愛子、それから同伴してここに来た深紅。

「久遠君もええとこあるねえ」
「へぇっ、そうなんだ。良いんじゃないかな？」
「そうね。雨宮さんと吉井君の組み合わせも良いかもしれないし…
…で、どうしてそれで相談がいるの？」
「下準備を手伝ってほしいんだよ。主にゴミ掃除」

ゴミ掃除、という単語で全員がその内容を理解した。

「……ああ、あの何とか団？」
「そうだね。黙ってる訳ないよね」
「ああいう事してはるから、もてへんのやわからんかな？」
「それに姫路に島田、それに霧島雄二もな」

それも納得したように全員が同時に頷いた。
恋愛を宇宙の直径程かけ離れてる位間違えてる2人に、明久と光一の幸せを妨害する為なら労を惜しまない雄二。
それが今回の事を知ればどうなるかなど、あっさり想像がついた。

「そうだね。瑞希ちゃんに美波ちゃんの事だから、知ったら絶対吉井君は無事じゃ済まないよね」
「いや、もう知れ渡ってる筈だ。このチケットを購入する時、ムッ

ツリーニの気配を感じた。ついでにペアチケットを買ったから、雄二なら俺の狙いが明久とつぐみだって事を察する筈」
「なっ！？」
「まあ落ち着け。明久に催涙ガスと閃光弾持たせて、食堂でつぐみと昼を食べる様に言ってあるから、いざとなればそれ使ってAクラスに逃げ込むように言ってある」
「……という事は、ワザと知らせたって所やな？」
深紅の言葉に、光一は笑顔を向けることで肯定の意を示した
「不確定より確定の方がやりやすいからな。それでだ、時間がないから率直に……」

Fクラス教室にて。

「成程な……アイツは木下も工藤も平等に接してるから、2人きりはありえんな。となるとやはり、明久とつぐみのデートを支援するためとみて良いだろう」
「……やはりそうか」
「よし、聞いたな須川？」
「無論だ」

須川が頷くと同時に、その後ろ全員が黒装束をまとい、瑞希と美波がそれに混じった。
２－Ｆ異端審問会始動。

「ではこれより、２－Ｆ異端審問会始動だ！」
「「「うぉおおおおお！！！」」」「はい！　久遠君の横暴を

許す訳にはいきません！」

「そうよ！　アキも久遠にそそのかされるなんて、もう致命的なバカだわ！　脳天から屋上で突き落とすしかないようね！！」

「そうだ！　久遠の振る舞いはもはや許せぬ！！　二股というＳＳＳ級の大罪を公然と行うどころか、異端者を増長させる所業すらも平然と行うとは……奴に人としての情も赤い血が流れてもいない！！」

まともな人間から見れば、寧ろＦＦＦ団の方がそうなのだが……彼等はバカなので気付かない。

「そうだ。明久のバカが幸せになろうだなんて言語道断！　そして光一がいる限り、俺にもお前らにも安息の時はないと言っても良い！」

「そうだ！　異端審問会繁栄の為に、久遠と吉井に無惨になる死を！！」

「久遠君、もう許しませんからね！！」

「久遠、骨の２、３００本ですむと思わないことね！！」

「友達の幸せを願って何が悪いんだよ？」

そこに突如乱入する声。

渦中の１人である光一が腕組みをしながら、“手ぶら”で立っていた。

「あっ、久遠君！　明久君とつぐみちゃんをデートさせるって、どういう事ですか！？　そんなことが許されて良いとでも思ってるんですか！？」

「どうって、そう言う事だが？　ってか、そんな事言っても良いのかお前が？」

「アンタに人としての情はないの！？」
「あるからやってるんだ。そしてお前にだけはそんな事言われる筋合いはない！」

心からの言葉だったが、２人には届かなかった。

「しかしのこのこと手ぶらで来るとは愚かな。ちょうどいい、今ここでお前を殺してチケットを奪う！」
「そのあとで明久をぶち殺せば万事解決だ。さて光一、今まで散々俺をコケにしてくれた代償、今こそ払って貰うぞ！　総員かかれ、光一を討ち取るなら今だ！！」
「「「うぉおおおおお！！」」」

全員が木刀や鈍器を構え、光一向けて突撃を始めた。
光一は腕組みを解こうともせず、ただそれを見据えている。

「……？　っ！　まさか！？」
「ａｌｒｅａｄｙ　ｌａｔｅ……もう遅い」

「召喚許可お願いします！」
「いいだろう、承認！」

雄二が何か感づいたと同時に、召喚フィールドが展開された。
光一に振り下ろされた木刀が、突如何かに弾かれる。

「お待たせや」
「いや、丁度いいタイミングだ」

木刀を弾いたのは、深紅の召喚獣。
その深紅の後ろには、鉄人事西村教諭と優子に愛子。

「やれやれ……教師として複雑だが、彼氏思いな彼女たちを持ったものだな久遠」
「何言ってんだ鉄人？　この関係以前に、俺みたいな奴が良いって言ってる時点で、既に良い彼女たちだって証拠じゃねえか」
「ふむっ……これは一本取られたな。そこまでお前が変わったのなら、吉井にもそれを期待するとしよう」

鉄人西村が仲間になった。

「なっ！？　西村先生、そんな無意味な事の為に私たちの邪魔をするんですか！？」
「そうよ！　アキに彼女なんかできたって、あの致命的なバカが治る訳ないじゃない！！」
「少なくともお前らよりは幸せになるし、変わる事が出来ると断言する！」

光一の台詞に、深紅も優子も愛子もうんうんと頷いた。
光一は表情を引き締め、須川に向けて突き出すように指をさす。

「この戦い、過激派筆頭久遠光一の名において勝利を宣言する！」
「明久とつぐみの幸せの第一歩や。邪魔するなら、わっちと久遠君が駆除したる」
「ええい、木下に工藤ときておいて、見せつけんなコラア！！」

『Ｆクラス　久遠光一＆神崎深紅　物理７０１点＆４３０点』
ＶＳ
『ＦＦＦ団　団員４４名　物理平均７６点』

何故か全員覆面に鎌という装備のＦＦＦ団の召喚獣。

それに相対するは、紅いドレスに歪な剣の深紅の召喚獣に、ジャケットにライフルと拳銃の光一の召喚獣。

その片方では……。

「いいなあ、神崎さん」

「仕方ないわよ、アタシ達の相手はこっちなんだから」

『Ａクラス　木下優子＆工藤愛子　物理３８９点＆３０１点』

ＶＳ

『Ｆクラス　姫路瑞希＆島田美波　物理４０９点＆６７点』

「優子に愛子、そこをどいて！　あいつの性根はウチ等で叩き直してあげるから！」

「光一に手出しするんなら、黙ってる訳にはいかないわ。それにアタシも吉井君には雨宮さんが適任だと思うし、光一のやってる事に問題自体ないわよ」

「そうだね。久遠君はボク達のなんだから、手を出すんならいくら瑞希ちゃん達でも許さないよ？」

「そんな事を言うなんて、もう許しません！　久遠君諸共お仕置きです！」

瑞希の召喚獣が大剣を、美波の召喚獣がレイピアを手にとびかかる。

優子の召喚獣がスピアを、愛子の召喚獣が斧を振りかぶりそれを迎撃……。

『Ｆクラス　久遠光一（＋神崎深紅）　物理６８８点＋４０６点』

ＶＳ

『Ｆクラス　姫路瑞希＆島田美波　物理４０９点＆６７点』

「「え？」」

しようとしたところで、突如割り込んだ光一の召喚獣。
……と思いきや両腕が機械化しており、右腕がロケットランチャーで左腕がバルカン砲となっていた。

「機械化か……こりゃすげえな」
「けどまあ、これはこれで面白いからええやん」
「そうだな」

不意打ちで一気に距離を詰め、ロケットランチャーで瑞希の召喚獣を爆散させ、バルカン砲で美波の召喚獣をハチの巣に。
そこで勝負は決した。

「さあ貴様等、戦死者は補習だ！」
「あっ、待った鉄人」
「ん？　なんだ？」

鉄人の補修という言葉に身体を震わせる面々だが、光一の横やりでホッとした顔になる。
だが彼等は光一が敵対者に容赦ないと言う事を、失念していた。

「明日は幸い土日だから、こいつら全員霧島の家で監……保護して貰おう。補習代わりの課題でも出してさ」
「待って光一君、今監禁って言おうとしなかった？」
「ふむっ……それは構わんが、霧島には了解を取ったのか？」
「これから手土産用意して行く所」
「手土産？　ああ、成程なあ」

からからと笑い合う2人。

ある程度はなし終えると、ただ一人残った雄二に顔を向ける。

「まっ、待て！　手土産ってのは何の事だ!?」
「雄二、俺は友達の幸せの為に苦労を惜しまない……だからこそな、許す訳にはいかないんだよ」
「そやなあ。わっちもこの場全員や坂本のやった事、許せへんで」
「じょっ、冗談じゃねえ!!」

雄二は咄嗟に窓から脱出すべく、窓に手をかけたが……

「雄二、これなーんだ?」
「あん?　なんだそ……」

光一の差し出したラミネート加工されたある紙一枚。
それに書かれてるのは、自身と翔子の名前で実印も押されてるある書類。

「あっ！　そっ、それはまさか……」
「まさか……何かな?」
「よっ、寄越せ!!」

Fクラスの教室を飛び出し、光一にとびかかろうとする雄二。
……が、いきなり顔面わしづかみされた。

「しょっ、翔子!?　離せ、離してくれ!!」
「……雄二、雨宮と吉井の間を引き裂いてどうするつもりだったの?」

「ホント、俺の手の上で踊るのが好きなゴリラだな」
「そやね。このまま一生霧島さんとワルツでも踊ればええんや」

「まったくね」
「でも、何で久遠君がそれもっとるん？」
深紅は翔子の部屋で保管されてる婚姻届の事は、既に知っていた。
光一が持ってるのを疑問に思い、問いかけると深紅にそっと耳打ち。
「……これはコピーだ。奪還された時の保険としてのな」
ああっ、と深紅が頷いた。
「さて霧島、この通り手土産は持参した。明久とつぐみのデートが終わるまで、霧島の家でそこらに転がってるバカ共の監……もとい、保護を頼めるか？　ついでにこれもつけるから」
「……これは？」
「これはだな……」
ごにょごにょと耳打ち。
徐々に翔子の顔が赤くなり、俯きながら光一に向き直る。
「……わかった、ありがたく頂戴する。この人たちの保護は任せて」
「感謝する」
「おい待て！　何で翔子が光一の方を見なくなった!?」
「さてな？　じゃあ雄二、お前の子供の名付け親になる日を楽しみにしてる」
「待て！　今ので何かがわかったぞ！　待て翔子、アイツを殺さなければ俺は一生……」
翔子に連行されていく雄二を見送りながら、１人残らず担いで補習室に連行していく鉄人。
とりあえず課題の説明にと連れ去ってしまった。

「さて、背後は固めた。後は仕上げだ」
「そやね。何やったら、監視でもせえへん？」
「あっ、何だか面白そう」
「ちょっ、悪趣味よ？　……けど、気になるかも」

一方、その頃。

「？　何だか騒がしくなかった？」
「え？　うーん……気の所為じゃないかな？　……ねえアキ君、明日の遊園地楽しみだね」
「うん。２人きりだけど、楽しもうよ。折角光一が手配してくれたんだからさ」
「……そっそうだね」

コラボ問題　第2問（2）　『観察処分者とちっさい幼馴染の波乱万丈デート

今回深紅との融合召喚出してみました。
どうだったかが気になります。

コラボ問題　第2問（3）　『観察処分者とちっさい幼馴染の波乱万丈デート

レフェルさんの“僕とちっさい幼馴染と召喚獣より、雨宮つぐみと神埼深紅とのコラボです。

今回色々とやっちまった感がありますので、一応先に謝罪しときます。

まずはすみません、ではどうぞ

時は過ぎて次の日。
約束の時間の３０分も前に、明久は駅前である人を待っていた。
ちなみに待ち合わせなのは、こういうのは雰囲気が大事だからという光一の（つぐみには優子達の）アドバイス。

「……えーっと、お金は用意したし、服も問題ないよね？　チケットも持ってるし」

その様子は、明らかにデート初心者丸出しだったが、いたしかたないだろう。
彼は瑞希と美波と出かけるときは、デートという認識は全くないのだから。

「それにしても、つぐみとデートか……」

ふと、光一からチケットを渡された時の事を思い出す明久。

「明久もそう言う事を体験して見るのは貴重だと思うぞ？」
「え？　でも……」
「こういうのはダメで元々だ。俺を信じろ、な？」

そう言ってつぐみを誘う様に言われた明久は、ダメでもともとでデートという名目で行こうと言った。
返事はＯＫ

「……何だかドキドキするな。今までもつぐみと一緒に遊びに行った事はあるけど、デートとなるとやっぱり」

デートと言うだけで、明久はいつもの遊びに行くような感覚ではない何かに支配されていた

チリン……！

そこで、いつも耳にするかすかな鈴の音が聞こえると、それは絶頂に達した。

「アキ君、その……おっ、お待たせ」
「え？　えっと……あっ、その……■◎＆％＄＋＊＃（おはようつぐみ）」
「え？　どっ、どうしたのアキ君？」

そこへ自分と同じように緊張した様な雰囲気のつぐみが来て、明久は混乱の極みに立った。
つぐみはいきなり意味不明な言語で問いかけられて、目が点になっていた。

その近くの自販機近くにて。

「吉井君……幾ら何でも緊張し過ぎだよ」
「緊張してるってことは、意識してる証拠だ。良い事じゃないか」

髪をポニーにしてダテ眼鏡を付け、如何にも文学少女という様な地味な服装の優子。
かたや帽子に長そで長ズボン、果ては手袋に日傘と徹底的に日光を

避ける様な服の光一。
2人は変装をして、2人を少し遠くから見守っていた。

「……どうして俺がアルビノって設定なんだ？」
「我慢してよ。モヤシで大荷物って、どう考えてもアンタじゃない」

実際その事を考慮して、大荷物でもおかしくない設定という深紅の提案である。

その別地点では（深紅の手で手直しした）光一の昔の服を纏い、帽子をかぶって男装してる愛子。
そしてふわふわのロングヘアをツインに分け、愛子のコーディネイトで割と薄着の深紅

尾行となれば4人1組では目立つので（増して黒一点）、2人2組で行動していた。

「けどここまでやる必要あるのかしら？」
「そう言うなよ。何かトラブルがあったり、アイツ等の脱走の可能性もある以上油断は禁物だ」
「まったく……成績でのクラス分けの欠点が浮き出過ぎよ」

優子がため息をついて、ダテ眼鏡の位置を直す。
ふと見た先では、落ち着いたらしい明久がつぐみをつれて、駅へと入って行った。

「おっ、動いたみたいだ……こちら“凶皇”、行動を開始する」
『こちら“クリムゾン”、了解や』

トランシーバーを手に報告し合い、光一達は2人を追って駅へと入

って行った。

電車、バスを乗り継ぎ、色々と経て2人の前には如月グランドパークのゲート。

「楽しみだね、アキ君」
「え？　うっ、うん……」
「……？」

先程からそっけないというか、色々と動揺してる様子の明久に首を傾げるつぐみ。
もしかして、意識してるのか本当は嫌だったのか……。

「……アキ君、もしかして嫌だった？」
「え？　そっそんな事ないよ!?　何で嫌がらないといけないのさ!!?」
「でも何だかアキ君、そっけないよ？」
「そっそうかな？　えっと……だったら、デートだから緊張してるのかな？　あはは」
「……！」

改めてデートと認識して、つぐみまで顔が赤くなった。

「はっ、早く行こう……か？」
「そっ、そうだね……？」

初々しさ満点の雰囲気を醸し出しながら、2人はゲートへと歩いて行った。

一方その頃。

「なんや、初々しさ満点やね」
「そうだね、微笑ましいね」

その様子を見てた深紅と愛子は、軽く微笑んで居た。

「ねえ、神崎さんはそう言う相手居ないの？　美人だしスタイル良いし、よりどりみどりなんじゃないの？」
「あははっ、そう言って貰えるのは嬉しいで。でもわっちと気の合う言うと、数がかなり限られるんよ」
「うーん……そうかも」

楽しい事や暗躍が好きで、友達を傷つける奴には容赦はしない。クラスでも姉御肌で、周りからは頼られてもおり慕われてもいる。

そんな相手ととなると、数が限られる。

「何だか神崎さんって、久遠君の女の子バージョンだよね」
「そうやね。何かと嫌われやすいって点を除けば……ん？　そうか、その手もありやな」
「？」

少し顔を赤くしながら、楽しそうにする深紅に愛子は疑問符を浮かべた。

「なあ、物は相談やけど……」

所変わって……。

「はい、笑って笑って……はいチーズ」

つぐみがマスコットのフィーと一緒に、明久に写真を撮って貰っていた。

「ありがとう、フィーちゃん」

「いいえー。それじゃあキツネのフィーをよろしくね」

とてとてと別の子供に駆け寄って行くフィーを見送って、明久の処に戻るつぐみ。

「えーっと、次は何しようか？」

「そろそろお昼だから食事にしようよ」

「それじゃレストランに……」

「おい」

声をかけられたと同時に、バチりと放電音が響き何かを背中に押し付けられる感覚。

明久も何度も聞いた事もある、スタンガンの音だった。

「こんなところでデートとは良い身分じゃねえかよ、吉井」

「ねっ、根本君！？」

「ちょっとツラ貸せ。ここで騒ぎを起こせば、わかってるな？」

一方、その様子を見ていた面々は……。

「根本！？　……しまった、余所のクラスのＦＦＦ団か！？」
「余所のクラスでまで！？」
「アンチ久遠派の崩壊に伴って居場所を失った奴が、根本の様にＦＦＦ団に入ったって話を聞いた事があるが、本当だったとは……」
「もうっ、性質の悪い伝染病じゃあるまいし！　とにかく、急がないと！」
「待て……こちら“凶皇”」

人気のない場所へと連れて行かれた明久とつぐみ。
つぐみも明久も取り押さえられており、それをいやらしい笑みで見る根本。

「アキ君！」
「つぐみ！　くそっ、つぐみを離せ！」
「これより異端審問会だ。お前は血の盟約に背き、雨宮つぐみとデートと言う大罪を犯した……よってＦＦＦ団一級審問官根本恭二の名において、死刑を執行する」

にやりと笑みを浮かべ、根本が明久の顔面をブン殴った。

「アキ君！」
「抵抗するなよ吉井？　大事な彼女を傷つけられたくないだろ？」
「くっ……」
「さあて雨宮、恨むんなら久遠を恨むこったな。あいつがとっととやられないから、相棒なんてなった吉井がこんなとんでもない事に……」
「なるのはお前だ！」

バヂッ！！

「ぎゃふっ！」

突如根本の後頭部に電気の放電音が響いたと同時に、ドサリと音を立てて根本が倒れた。
そこには帽子をとって先程から見かけた服を纏った光一達。

「光一！？　それに、木下さんまで！？」
「悪い明久、抹殺漏れがあったみたいでな……さて、お前ら覚悟はいいか？」

光一が絶対零度の雰囲気を纏い、かの独眼竜の様に6本のスタンガンを構え歩み寄る。
研ぎ澄まされた氷の刃を突きつけられた感覚に陥った集団は、足がすくみ震えあがり始める。

「うっ、動くな！　こいつの……」

ドスッ！

「あぐっ！」

つぐみを取り押さえていた男が深紅の当て身で倒れ、すぐに深紅がつぐみを抱きかかえ光一達の元へ。
優子がつぐみを受け取ると、光一と深紅は集団に目を向ける。

「……深紅、久しぶりに“凶王”になりたい気分なんだが？」
「奇遇やねえ。わっちも久しぶりに本気で怒ったで……凶王になった久遠君、見てみたいわあ」
「そうかい……」

その後、断末魔が数十分にわたり響き渡った。

所変わって、広場にて。
あの連中は見つかれば面倒な上に、学園の評判が悪くならない様にゴミ箱に押しこんである。

「いたた……」
「大丈夫か？」
「うん……けど、助かったよ光一」

根本に殴られた頬を愛子に手当てして貰いながら、明久が笑いながら光一の言葉を返す。
つぐみは優子になだめられているが、未だポロポロと涙を流していた。

「……怖かったよ」
「ごめん、僕がしっかりしてたら……」
「そうじゃないよ。あのままアキ君が、あの人たちに寄ってたかって殴られてたらと思うと……」

明久がその様子におろおろしてると、光一が明久の背中をポンとたたいた。
振り向いた光一とアイコンタクトをとると、何を言われたのか動揺し始める。
光一は良いからやれと言わんばかりに睨みつけると、明久は躊躇いつつも頷いた。

「えっと……ごめんつぐみ！」

明久がやけともいえる勢いで、つぐみを抱きしめた。

「ごめん……嫌だったら念動力で、遠くまで突き放していいから」

「……ううん、そんなことしないよ」

その様子を見てうんうんと光一は頷き……

「さて、俺達の出番は終わりだ」

「引き際を心得とる辺りは、流石やな」

「そうね。これ以上の長いは野暮だわ」

「そうだね。それじゃ、ごゆっくり」

そう言って光一が去って行って、数分後。

「……あのさ、つぐみ」

「……うん」

「僕、わかったんだ。僕の気持ちが」

「……うん」

「つぐみの事、幼馴染でも友達でもなくて、ただ……」

そこで明久が一旦呼吸を止める。

思いっきり深呼吸をして……

「僕はつぐみの事が……」

グランドパーク出口にて。

「大丈夫かな、吉井君達？」
「さあな？　もう俺達が介入して良い事じゃないだろ？」
「そやね……所で久遠君、今回の報酬やけど」
「えっ？　……報酬取るの？　今までそんな事なかったのに」
「たまにはええやん。大丈夫や、簡単な事ですむから」

光一が疑問符を浮かべる傍らで、愛子が優子に耳打ち。
優子が目を思いきり見開いて、深紅を見てあわあわと動揺し始める。

「？　何で優子が動揺してるんだ？」
「それはやね……」

すすっと光一に近寄る深紅。
そして首に手をまわして……

「……なんだか複雑だわ」
「……そうだね。でも良いんじゃない？　そもそもボク達文句言えるような関係じゃないんだしさ」
「それはそうだけど……考えてみたら光一ってこの関係で狙われてる訳だし、神崎さんも一緒だと安心できそう」
「そうだね」

その光景を見てる優子と愛子は、少し複雑でありつつも深紅程の人が自分達の味方にもなる事実に、頼もしさを覚えていた。
大体の処で、深紅が光一の首にまわしている手を解く。

「こういう事や。思った以上に恥ずかしくてうれしい物やな」
「……あの、深紅さん？」
「報酬は、久遠君の恋人の一員に加える事や。こういう関係も楽しそうやしな」

「楽しそうって……」
「言っとくけど、わっちかて気まぐれでこないな事せえへんで？　久遠君……いや、折角やから光一君とでも呼ばせて貰うえ。光一君と一緒に色々やるんはたのしいからなあ」
「そう言って貰えるのは嬉しいけどさ……」
「それじゃ、改めてよろしく頼むで。そや、優子に愛子って呼ばせて貰うで。何か協定みたいなものはあるん？」
「……感覚麻痺してくるな」

別に1人増える位どうという事もない。
そう思った自分に、少し恐怖した光一だった。

そして、“淫魔王”という呼び名を否定できなくなりつつある事にも。

一方、霧島家の翔子の部屋にて。

「……雄二、今日という今日は覚悟を決める」
「待て！　やめろ、やめろ！！　俺はまだ坂本雄二という一人の男でいたいんだ！！」
「……大丈夫、これからは私と二人で一緒に進む。そしてスグに増える」
「増えるか！　待て、それをどうする気だ！？」
「……これをのんで」
「嫌だ！　絶対飲まない！！　くそっ、光一のヤロー翔子に余計なもん渡しやがって！！」
「……聞いて雄二、久遠は私たちの子供に男なら翔二、女なら雄子だってつけるべきだって言った」
「あん？　それがどうした？」

「……私達は良い友達を持った。私たちの手伝いをしてくれる上に、私たちの子供の名付け親にもなってくれる」
「騙されるな！　アイツはただ俺の不幸の為に動いてるだけだ！！」
「……久遠は雄二の不幸はついでだと言っていた。問題はない」
「いや、あるだろ！　それとついで言うな、余計ムカつく！！　ってコラ、待て！　やめろーーー！！」

第百十八問　腕輪と新技術と融合召喚騒動編　プロローグ（前書き）

今回から、以前アンケートを取って惜しくも出せなかった、オリジナルの新技術騒動です。
考えてみたら、こっちを後にした方がよりよく書けました。
そのついでに、以前から指摘のあった融合召喚の制限設定を追加します

では、どうぞ

第百十八問　腕輪と新技術と融合召喚騒動編　プロローグ

問題　以下の日本語を英文にしなさい

『私は動物園でゴリラに餌をあげました』

姫路瑞希の答え

『Ｉ　ｐｕｔ　ｕｐ　ｂａｉｔ　ｔｏ　ａ　ｇｏｒｉｌｌａ　ａｔ　ａ　ｚｏｏ．』

教師のコメント

正解です姫路さん、特に問題はありません

久遠光一の答え

『Ｉ　ｐｕｔ　ｕｐ　ｂａｉｔ　ｔｏ　ａ　Ｙｕｊｉ　Ｓａｋａｍｏｔｏ　ａｔ　ａ　ｚｏｏ．』

吉井明久の答え

『Ｉ　ｐｕｔ　ｕｐ　ｂａｉｔ　ｔｏ　ａ　Ｙｕｊｉ　Ｓａｋａｍｏｔｏ　ａｔ　ａ　ｚｏｏ．』

教師のコメント

君たちならそう答えると思っていました。

木下優子の答え

『Ｉ　ｐｕｔ　ｕｐ　ｂａｉｔ　ｔｏ　ａ　Ｙｕｊｉ　Ｋｉｒｉｓｈｉｍａ　ａｔ　ａ　ｚｏｏ．』

教師のコメント
最近久遠君の影響を受けていると聞きましたが、本当の様ですね。
一応言っておきますが、坂本君を勝手に婿入りさせない様に

坂本雄二の答え
『Ｉ　ｐｕｔ　ｕｐ　ｂａｉｔ　ｔｏ　ａ　ｇｏｒｉｌｌａ　ａｔ　ａ　ｚｏｏ．』
どうせどこかのバカとモヤシとその妾は俺の名前を書いてる筈だ

教師のコメント
あらゆる意味で正解ですが、ちょっとだけ惜しいです。

期末試験終了後

『Ｆクラス　久遠光一　総合科目２１５６点』

「なんとか、Ａクラスの最低ライン程度にはなったかな？」

一応勉強の成果が出ており、光一は点数の底上げ成功。

「壊滅科目は壊滅科目のままで、良くここまで出来たな」
「うん、俺もそう思う」

ただし大半を物理、数学、英語でになっており、その他は化学と保健体育は2、30点アップ。
他は明久の平均点程度に上がった為の結果である。
そして世界史と古典と世界史は、雄二の言う様に壊滅科目のままだった。

「癪な話だが、お前の総合科目が上がってくれたのは助かった。これでお前のとる陣頭指揮と併せて考えれば、Aクラス戦の大きな手札になる」
「お前の手札というのが不快この上ないが、まあそうだろうな……これでまたヘマしやがったら、社会的にも二度と霧島から逃げられんようにしてやるが」
「……テメエ」

雄二が射殺さんとせんばかりに光一を睨みつけるが、当人はどこ吹く風とてんで気にもしていない。

「で、明久と秀吉は？」
「明久は世界史こそ失敗したらしいが、他は問題ねえよ。Dクラス並にはなってる」
「そうか。秀吉はともかく、明久はお前の使い捨て武装位にはなりそうだな」
「どうせならお前を使い捨てにしたいね。あらゆる意味で」

やれやれと言わんばかりに、光一は雄二にそっぽを向いた。
そこでふと、ある事を思い出す。

「そう言えば雄二、あれから腕輪について何か聞いたか？」
「腕輪？　……ああっ、そう言えばあれから何も聞かないな」
「ねえ光一に雄二、何話してるの？」
「腕輪の事だ」
「そう言えば、あれから学園長は研究室にこもりきりらしいのう。一体どんな事になるかが楽しみじゃ」

そこに明久と秀吉も加わった。

この４人には、この４人だけの特別がある。
清涼祭における召喚大会の商品、２対の白金の腕輪と黒金の腕輪
明久の同時召喚、雄二の召喚フィールド形成（科目指定可、召喚不可）の白金の腕輪
光一の融合召喚、秀吉の召喚フィールド形成（科目指定不可、召喚可）の黒金の腕輪。

これらは現在、アンチ久遠派騒動で得られたデータを元に、現在改造が行われていた。
データをもとに、新技術開発を行う為に。

「どんなのになるのかな？」
「さあな。けど機能によっては、俺も作戦が立てやすくなる」
「そうじゃの。特に明久と光一の腕輪は併用ができるのじゃから、これ以上ない戦力増強じゃ」
「そうだな。俺も実際楽しみだ」

それから新技術の予想が始まった。

「この中で一番予想しやすいのは、光一の融合召喚じゃな」

「そうだな。俺の召喚獣を起点として、他の奴と他の奴を融合させるってのも面白いんじゃないか？」
「あっ、そうだね。雄二と霧島さんとか」
「恐ろしい事言うんじゃねえ！！　それ言うなら、明久と秀吉なんてのもあり何じゃないか！？」

ゴゴゴゴゴッ！！

「ねえ瑞希。突然だけど、アキが水のないプールに飛び込む姿とか見てみたくない？」
「奇遇ですね美波ちゃん。実は私も、急に明久君が酸素ボンベなしでスキューバダイビングする姿を見てみたくなっちゃったんです」
「え？　何？　なんで、僕腕を後ろに縛られてるの！？　ねえ、ちょっと！？」

ブスっ！　バタッ！！

「え？　どうしたんです、美波ちゃ……」

ブスっ！　バタッ！！

「……大丈夫か明久？」
「うっ、うん。ありがとう光一」

痛む頭を押さえながら麻酔銃を姉妹、明久の腕を解放する光一。

「……お前、躊躇なく撃ったな？」
「言って聞かん奴等にゃこれで十分の礼儀だ。本当ならゴム弾撃ちたかったんだ、これでも妥協はしてんだよ」
「……そのうち本当に撃ちそうだな」

流石は過激派筆頭と、雄二は内心怖く思った。

「雄二もいい加減にしろよ」

「やなこった。お前と明久の不幸ほど面白い見世物はないからな」

「だったらせめて姫路と島田を余所に誘導しろ。お前の道楽にこいつらを巻き込むな」

「そうしたいのはやまやまだが、アイツ等の気持ちは本気なんだから、俺も尊重したいからな」

「せめてどっちか諦めるか妥協しろよ……どうやろうと両立できる訳ないだろうが」

雄二はそんな事知らんと言わんばかりに、そっぽを向いた。

まあ光一にしてみればどうでもいいから、さして追求するまでもない。

ガラッ！

「邪魔するよクソガキども」

「邪魔するなら帰れ目障りな妖怪」

「来るなり罵倒するんじゃないよ！」

「そこは邪魔したねって一旦去ってから何させるって詰め寄る所だろ？　ユーモアがわからんバーさんだな」

「罵倒を混ぜておいて何がユーモアさね！？」

突如召喚された（笑）学園長に、いつも通りのやり取り

今日も文月学園は平和だった。

「まったく……ほら、腕輪の改修終わったよ」

不機嫌そうに腕輪を取り出すと、それぞれに向かって投げ渡す学園長。
一応作りは頑丈な為、そう簡単には壊れない。

「で、どんな機能が追加されるんだ？」
「まず結論から言って、白金の腕輪には新機能は残念ながら無理だったが、黒金の腕輪は無事成功したさね」
「そうなんですか？　ちょっと残念だな」
「その代わり同時召喚は、融合召喚の新機能に対応できるシステムを積んだよ。坂本の方は、フィールドの拡張かね？」
「随分としみったれた変更だな」
「黙りなクソガキ！」

罵倒に文句をつけ、次に光一達の方を見る。

「まずフィールドの方はフィールド範囲の設定機能を。そして融合召喚には“融合媒介”の機能を追加させた」
「？　フィールドの範囲設定は何となくわかるけど、融合媒介ってのは？」
「早い話が、あんたの召喚獣を介して他人の召喚獣同士を融合させる機能……ん？　どうかしたのかい？」
「……いや、何も」

まさか冗談半分の予想が当たるとは思っていなかった為、面食らっている光一。

「じゃあ例えるなら、俺の召喚獣を介して雄二と霧島の召喚獣をさせられるって事か？」
「そういう事だよ。まあその2人は代表だから、機能はしないけどね」

と言う学園長の言葉に約1名ホッとしたと同時に、教室に邪なオーラが充満した。
それらの話が本当なら、光一を介して

「「……明久君　（アキ）と合体」」
「「「……木下と合体」」」

と、いつの間にか目を覚ました2人および、全員が獲物を見据える肉食獣の様に光一を狙い始めた。

「それと久遠、アンタの腕輪にはリミッターをつけさせて貰ったよ」
「リミッター？」
「そうさね。アンタは物理に関しては桁はずれに得点が高い上に、この腕輪で学年主任と最高学年首席を倒してるんだ。これじゃ勉学に対する意欲が逆にそがれると指摘があってね」

それを聞いて、光一は流石に否定はできなかった。
流石に勉学に対する意欲がそがれる事につながる以上は、何か措置を取らなければ評判にも響く

「だから４００点を超す融合召喚は出来ないようにするよ。それと、回数も制限する」
「じゃあ腕輪はなしか」
「そうさね。腕輪持ちはそうざらにいる訳でもないし、どうせあんたならそれでもうまく立ち回るんだろ？」

となると、物理と英語と数学では出来ない計算になる。
まあ確かに自分なら上手く配分はできるし、特に問題もない。
結局はまあ良いかですませ、ポリポリと頭をかく

「じゃあ早速試してみるか。雄二、古典でフィールドを形成。秀吉、明久、お前ら融合させてみよう」
「「「ちょっと待て（ってください）（ちなさい）！！」」」
教室全員からストップがかかった。
「なんだ？」
「どうして明久君と木下君なんですか！？」
「そうよ！　点数だったら古典なんだし、アキとウチだっていいじゃない！」
「え？　だって点数もそうだけど、この２人俺と融合相性が……あっ」
光一はそこまで言うと、苦虫をかみつぶした顔になった。
２人が明らかに妙な方向に誤解していると確信する程、汚いものを見る目で光一を見ていたから。
「そうでした、明久君と木下君はもう久遠君と合体してたんでした！」
「それで優子や愛子に手を出すなんて、最低！」
「こいつら……いや、もうやめよう。頭が痛くなるだけだ」
痛む頭を押さえ、無視する事に決めた光一。
２人に目もくれず、少し血の上った頭で先に進める事にした。
「おい雄二、まだ展開してないのか？　さっさとしろよこのノロマ！」
「はぁっ？　お前それが人にものを頼む態度か！？」
「お前はゴリラだろうが。おい妖怪、これじゃ融合は出来ないから

リミッターを解除頼めるか？」
「別にかまわないよ？　アタシの携帯で簡単にリミッターは……」
「アウェイクンアウェイクン！！　おら、とっとと召喚してさっさと合体なりなんなりやっちまえ！！」
「ああ、それじゃサモン！」

翔子に嗅ぎつけられる前に、何としてでもと腕輪を起動する雄二。
早速光一達は召喚獣を召喚する。

「おのれ、止めろ！」
「「おおーーっ！！」」」

須川の号令で、ほぼ全員がカッターを投擲。
飛んでくるカッターを畳返しで防ぎ、その下に隠しておいたものを取り出す。
その隠しておいた“バルカン砲”を構え……

「Ｄｅａｄ　ｅｎｄ……くたばれ」
「「「ぎゃあああああああああああっ！！！」」」

一応配慮として瑞希と美波を除き、１人残らずバルカン砲の餌食になった。
そのあと2人は再度麻酔銃で、今度はマヒした状態で横たわる。

「……あの、これって」
「鉛玉じゃの」
「ちょっとした社会勉強で得た知恵だ。改造自体は出演料でやったけど」
「出演料？」
「こっちの話。で、どうすればいい？　それに今は召喚しても大丈

夫か？」

光一の矢継ぎ早の質問に、学園長は待ってましたと言わんばかりに一歩出る。

技術者として、早く新技術のお披露目がしたいのかうずうずしていた。

「あんたの召喚獣が融合させたい召喚獣2体の背に触れて、“クロス”ってキーワードを言うと起動する」

「クロス……わかった」

「ちなみに召喚獣の装備なら、アンタ達4人は腕輪の事があるからもう変更はしてあるよ」

「へぇっ、そりゃ楽しみだな。じゃあ雄二、一旦フィールド解除して新装備お披露目と行こうぜ？　秀吉、フィールドたのむ」

「うむっ」

新技術の前に、まずは光一達4人の新装備をお披露目する事になった。

第百十八問　腕輪と新技術と融合召喚騒動編　プロローグ（後書き）

次回は、この作品での明久達の新装備（もちろん改訂）の披露です。
光一の装備は……これから考えます。

第百十九問

問題　次の問いに答えなさい。

リンゴが落ちたら、で有名なアイザック・ニュートンの発見した法則を答えなさい。

姫路瑞希の答え
『万有引力の法則』

教師のコメント
正解です、有名な法則ですから当然ですね

坂本の答え
『ＦＦＦ団引力の法則』
（文月学園において、男が女にアプローチをしたら）

教師のコメント
余計な要素に置き換えないでください

久遠光一の答え
『（霧島の為に）雄二捕獲の法則』

教師のコメント
先生も坂本君は観念すべきだと思います

吉井明久の答え
『食べられる』

教師のコメント
先生は君たち核弾頭トリオの答えをバカ引力の法則と呼びましょう

「「「「サモン！」」」」

秀吉の召喚フィールド内で、４人が召喚を始めた。

「あっ、また木刀!?　……じゃない？　僕の召喚獣の武器が鉄製になってる！」
「おおっ、新撰組の装備じゃの」

まずは明久と秀吉の装備。
明久のは学ランに代わり、背に龍の刺繍入りのジャケットにジーンズ。
その手には木刀ではなく、白木拵えの刀が握られていた。
秀吉は袴から新撰組の羽織にかわり、手には長刀ではなく刀が。

「んで、俺のはっと」

そして光一は、黒一色で統一されたごついコートを纏い、これまた黒いスラックスに黒いブーツ。
その手にはセミオートライフルとリボルバー拳銃が握られていて、腰に巻かれたベルトには自動拳銃と剣が1本ずつつけられていた。

「何だか殺し屋みたいだね」
「うむっ。前はスラムの不良という感じが、光一らしいれっきとした悪人じみた装備じゃの」
「秀吉も大概俺に容赦ないな!?　で、雄二は……」

それを見て絶句した。

雄二の召喚獣は何故か囚人服で、その手には鉄製の錠が右手につけられていた。
近くに転がる召喚獣サイズの半分位の鉄球から鎖が伸び、右手の錠に繋がっている

「おいババァっ、何で俺のは囚人服と鉄球なんだ!?　総合点が近い光一があんな豪勢になったってのに、幾らなんでも酷過ぎるだろ!!」
「知らないよ。あんたのだけ何故かそうなったんだ（笑）」
「おい、今なんか意図的なものを感じたぞ!?　書き変えろ今すぐ!!」
「落ち着けよ雄二。武器自体は強力なんだから、そういきりたつもんでもないだろ？（笑）」
「そうだよ。それ言ったら僕だって木刀に学ランなんだから、書きかえられるならそうしたかったよ（笑）」

「その方がまだマシだ！！」

光一と明久は、当然その装備を見ながら笑みを隠しきれない顔で雄二をからかった。

「それはさておき、さっさと始めるか」

「そうだね。幸い現代国語だから、僕達皆そんなに点数高くないし」

「じゃの。さて」

明久と秀吉の召喚獣が光一の召喚獣の前に立ち、くるりと背を向けた。

光一の召喚獣も背に手を当て……。

「……雄二、一緒に帰る」

「光一、テストどうだったの？」

「光一君、テスト終わったからどこか遊びに行こうよ」

そこでＡクラスの３人娘が顔を出した。

「あっ、学園長！　どうしてこちらに？」

「見ての通り、このガキどもの腕輪の新技術の実験さね」

「待て！　まだ試してないのかよ！？」

「当たり前だろ？　その腕輪はアンタにしか使えないんだから。これで木下じゃなく坂本を置けば、何かが起こっても問題ない所か、大助かりなんだけどね」

「「「それが教育者の言葉かこの妖怪ババァ！！」」」

関係上ではありえない筈の怒涛の応酬に、３人は苦笑いに。

ふと優子が、召喚されてる４人の召喚獣をみつけた。

「あれ？　もう装備の変更終わったんですか？」
「いや、このガキどもだけだよ。腕輪の事があるから、こいつらだけは終わらせたのさ」
「そうなんですか。皆それなりの物になったのね、光一は何だかカッコ良くなったし」
「俺の召喚獣に対しては何の疑問もないのか！？」
雄二の主張はムナシク教室に響くだけだった。

「それで、新機能ってどんなのなんですか？」
「それは……」
「俺の召喚獣を介して、別の奴を融合させられるって物らしい……ってどうした妖怪？」
「……なんでもないよ。一々腹の立つクソガキさね
見せ場をとられた学園長が、忌々しげに光一を睨みつけた。
本人はどこ吹く風と気にせず、早速明久と秀吉を融合させる事に。

「やっぱり秀吉と吉井君？」
「ああ。俺と相性がいい奴であり、点数も低いからな」

『Ｆクラス　吉井明久＆木下秀吉　現代国語７９点＆６９点』

「その前に学園長、アタシの召喚獣は出せますか？」
「ん？　ああ、まだリセットしたのはＦクラスだけだからね。出せる筈だよ？」
「そう。じゃあ光一」
「ん？　ああ、わかった……の前に」
塩水入りのペットボトルを取り出し、ＦＦＦ団の死骸にばらまき始

める光一。
全員がぬれたのを確認して、スタンガン（対清水美春用の特注品）を最大出力にして投擲

バヂバヂバヂッ！！

「「「ギャアアアアアっ！！！」」」

「さて、サモン！」
「そうね。サモン！」
「……アンタら、お似合いのカップルさね」

平然とする光一と優子を見ての学園長のありがたいお言葉だった。

「えっと、確か手を繋ぐんだっけ？」
「そうそう。それじゃ、ユニゾン！」

『Ｆクラス　久遠光一（＋木下優子）　現代国語　６５点＋３３５点』

光一のキーワードを受け、優子の召喚獣がとける様に光一の召喚獣に吸い込まれていく。
その次の瞬間、両手に小型のガンランスを持ちい軽鎧を纏った、融合召喚獣が姿を現した。

「おっ、ギリギリこえなかったか」
「？　何の事？」
「腕輪にリミッターついたから、合計で４００行くと出来ないんだと」
「じゃあ日本史と世界史、古典じゃないとアタシの場合殆どダメな

んじゃ……」

優子が自分の成績を始めて憎んだ瞬間だった。
翔子は融合召喚獣を、心から羨ましそうに見ていた。

「……それは融合媒介でも同じ事？」
「え？　えーっと……そうなのか妖怪？」
「そうさね。そもそも代表に対しては融合召喚は出来ないよ」
「……そう」

翔子は学園長の言葉を聞いて、心底さびしそうな顔に。
そこで光一が、ふと先程の事を思い出す。

「そのリミッターだけど、アンタの携帯で解除できるんじゃなかったのか？」
「出来るさね。けどゴリラのガキと学年首席だろう？」
「おいババァ、ゴリラとはなんだゴリラとは！」
「事実だろ……ってあれ？」

光一が目を向けた先には、先程まで居た翔子が影も形もなくなっていた。
自信が気付かなかった程とは、と驚きで目を見開いていた。

「まさか、補充試験受けにいったのか？」
「そっ、そうじゃない？　……だって、それ以外考えられないでしょ？」
「……でも光一ですら気付けない程って」

愛子と優子も、翔子の行動力に呆気にとられていた。

「坂本君、いい加減観念しなさいよ」
「そうだよ。代表はあんなに坂本君の事好きなんだから」
「うるさいだまれ！！」

２人の抗議に、雄二は怒鳴って返す。

「さて、そろそろ新機能使うか……準備はいいか？」
「うん」
「いつでもいいのじゃ」

融合を解除した光一の召喚獣が２人の召喚獣の背に触れ、準備完了。

「クロス！」

腕輪が起動し、２人の召喚獣が光一の召喚獣の手に吸いこまれ、その手が合わされる。
それと同時に、その正面には伊達政宗の様な甲冑を纏った二刀流の明久の召喚獣が姿を現す。

『Ｆクラス　吉井明久＋木下秀吉　現代国語７９点＋６９点』

「僕がメインみたいだよ？」
「どうやら、点数が上の方に主導権が行くらしいさね」
「何だか面白そうね。ねえ愛子、アタシ達もやってみない？」
「良いけど、オーバーしちゃうよ？」
「あっ、そっか。つまんないの」

優子も愛子も総合点ではＡクラスでも指折りの為、どうやっても２人では引っかかる。

「……試験受けて来た」
「うわっ！　いっ、いつの間に……」
「光一でも気配が読めなかったの！？」

いつの間にかいた翔子に、光一と優子は驚きの声をあげた。
しかし気を取り直して、雄二の方に目を向ける。

「だそうだが……」
「いやだ！」
「たかが召喚獣の融合だろ？　やってやっても良いじゃないか」
「黙れ、お前みたいに誰かれ入れ食いしてるやつにゃ分らん事だ」
「ほうっ、暴言とはいい度胸だな雄二。お前がいる所はどこで、お前さっき何したか忘れたのか？」
「え？　……あっ！」

光一の言うとおり、未だに雄二も雄二の召喚獣も召喚フィールド内。
今なら取り押さえれば、何とかなるかもしれない。

「じょっ、冗談じゃぐわ！」
「逃がさないよ雄二！」
「よし、でかしたぞ明久！」

逃げようとした雄二の背後から、明久がスタンガンで攻撃。
その隙を狙い光一が雄二を後ろ手にして手錠をかけ、明久が足払いして転ばせる。

「くそっ、せめて！」
「甘いわよ坂本君」

『Ｆクラス　坂本雄二　現代国語２４５点』

ＶＳ

『Ａクラス　木下優子　現代国語３３５点』

フィールドの外へと逃げようとした雄二の召喚獣は、優子の召喚獣につかまり取り押さえられていた。

「妖怪、リミッター解除は？」

「すませたさね」

「さて、始めるか」

「……うん」

「離せ！　離せー！！」

「それじゃ、クロス！」

パスっ！

「あれ？」

「どうやらリミットみたいさね」

「たった２回！？」

「調整が終わったばかりだからね。無茶させて妙な事になっても困るんだよ」

「俺達がどうなっても構わないって言った奴の台詞じゃないよな！？」

ホッとした表情の雄二の傍らで、翔子がしょんぼりとしていて優子がそれを宥めている。

「なんだ、霧島さんも気の毒に」

「だったらとっとと離せ！！」

取り押さえてる明久を、雄二が力尽くで振りほどいた。

その衝撃で、明久は頭をぶつける

「「いたっ！」」

「え？」

と同時にサラウンドの様に重なった声に、光一は何かの違和感を感知した。

「何で秀吉まで？」

「わっ、わからぬ。急に頭に何かぶつかったような痛みが……」

「……秀吉、すまん」

光一が秀吉の腕をとり、軽くしっぺをしてみる。

「えっ！　何今の？　何か軽くしっぺされた様な……？」

「もしかして……明久、秀吉、もう一回召喚して見ろ」

「え？　うん。サモン！」

「わかったのじゃ。サモン！」

光一の指示で2人が召喚。

その光景が、光一の違和感の正体となった。

「何故ワシの召喚獣がでんのじゃ！？」

「あれ？　融合召喚獣のままだよ！？」

「おいババァ、これは仕様か何かか？」

「さて……意識のあるこの場全員、今すぐ学園長室に来るように」

「不具合発生みたいだな」

第百二十問

問題　次の問いに答えなさい

男女、または雄雌の生殖に必要なブイを切除し、主として生殖不能な状態とする事を何と言うか答えなさい

工藤愛子の答え
『去勢』

教師のコメント
正解です、主に家畜やペット等に施される事が多く、攻撃的性質の喪失や不用意な繁殖の防止として行われてる事が多いのです。

土屋康太の答え
『性に対しての許されざる暴挙』

教師のコメント
確かにそうかもしれませんね

Ｆクラス男子（ＦＦＦ団員）の答え
『久遠光一と坂本雄二に処するべき処分』

教師のコメント
むしろ君たちが処されてください

姫路瑞希の答え
『吉井明久君に処するべき処分』

島田美波の答え
『吉井明久に処するべき処分』

教師のコメント
始めて吉井君を気の毒に思いました。

「……どうやら“融合媒介”が、観察処分者の設定に妙な干渉を与えたらしいね」
「つまり観察処分者の融合を考慮しなかったんだな？」
「一々うるさいクソガキさね！！」

当人である光一と明久、秀吉。
そして雄二と翔子、優子に愛子。
意識が一応あった瑞希と美波を一堂に揃え、学園長は解析結果を報告した。

「成程な、光一の融合媒介の干渉が観察処分者の設定に変な影響を与えたらしくて、その影響で明久と秀吉の感覚が融合召喚獣を介し

て同調しちまったって事か？」
「えーっと……？」
「つまり融合召喚のミスで、明久と秀吉の感覚が融合召喚獣を通して繋がっちまったって事。でもなきゃ」
光一が秀吉の頭をくしゃっとなでる。
それに明久が少し驚いた様に、頭を触る。
「こんな事になる訳ないだろ？」
「あっ、そう言う事？」
光一は内心、噛み砕いた説明にもなれたもんだと思っていた。
「……という事は、アキと木下は今一つって事？」
「そんな！　ずるいです、木下君ばかり！」
「何故ワシが責められるのじゃ！？」
「落ち着きなさいよ2人とも、事故なんだから誰が悪いとかある訳ないじゃない」
内容を湾曲して捉えた2人は早速秀吉に抗議し、優子にそれを遮られる。
その一方では……
「で、解決法は？」
「これから調査するさね。ただその間はアンタ達3人はなれない方がいいよ」
「はっ？　明久と秀吉はともかく、俺は何で？」
「アンタが媒介なんだから、離れることでなにか妙な作用が起こるかもしれないからだよ」
「そうか……まあ好都合ではあるな」

組み合わせが組み合わせなだけに、妙な騒動の火種などそれだけで十分だった。
そこへニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる雄二が、頭を押さえる光一にあゆみよる。

「何だ光一、いきなり疲れた顔して？」
「……そう思うんなら大人しくしろ」
「断る」
「お前のそう言う堂々とした姿勢、嫌いじゃあないな……遠慮という物をしなくて済むから」

さて、どうしてやろうかと考えると同時に、これからの予定について。
この様子では離れる事は無理だから……

「となると、今日は俺の家に泊まりだな」
「そうだね。僕が秀吉の家に泊まる訳にもいかないし、僕の家だと姉さんがいるから」
「後者はともかく、前者は納得いかんのじゃ！」
「落ち着けよ秀吉。今日はテスト開けなんだし、俺ら三人で仲良く泊まりで遊ぼうな？」
「「ちょっと待ちなさい（ってください）！」」

そこでストップをかける声。
それは言うまでもなく、瑞希と美波。

「泊まりッてまさか、木下まで一緒って事はないでしょうね！？」
「お前ら何聞いてた？」
「だっ、ダメですそんなの！　不潔です！！」

「姫路の発想の方がよっぽど不潔だ。大体ひき離したら何が起こるかわからん以上、そっちの方が問題だ」

そして当然、ニヤニヤとそれを見つめるモノも、火種を投げ入れた。

「ほうほうっ、こりゃ3人で仲良くって事か」

「霧島、どうやら雄二は俺達とそう言う事がしたくて仕方ないらしい」

「はぁっ？　何言って待て翔子！　俺はただギャアアアっ！！」

「ホント学習しないんだから」

しかしあっさりと光一に撃ち返された。

その様子を見て、ため息をつく優子。

「とにかく、木下がアキと一緒に久遠の家に泊まりなんて絶対に許さないわよ！」

「さて、行くぞ明久に秀吉」

「そうです！　そんな事になるんなら、私も泊まります！」

「服は一旦明久の家に寄ってからかな？　その途中買い物して……だな」

「ちょっと！　何無視してるのよ！？」

「人の話は聞く物ですよ！！」

「2人とも、説得力がまるでない……って、やっぱり聞いてないわね」

優子が目を離したのに感づいた雄二が、この状況を利用する案を思きにやりと笑みを浮かべた。

ただしアイアンクローをかけられた跡の目立つ顔での笑みなので、危ない光景なのはお約束。

「姫路に島田、そいつら絶対逃がすなよ？　きっとそいつら3人きりになったのをいい事に、一般常識に反する事をやるに違いない」
「やっぱりそうなのね！！」
「久遠君、どこまで明久君をそそのかせば気が済むんですか！？」
「姫路さんたちこそ簡単にそそのかされないで！」
「まあまあ待て優子」

どこからどう見ても愛想のいい笑顔その物だが、優子は別の物に見えていた。
それは怒りで煮えくりかえるのを、冷静に爆発させる機をうかがう様な……冷たさと熱さの同伴した様な鋭い目。

「……どうして止めるのよ？」
「だってさ、微笑ましいじゃないか。妻が居ても雄二の為に必死になる姿は。まさに恋する乙女そのものだ」

その場の時が、一瞬とまった。

「待て光一、どうしてそうなる！？」
「えー？　だって俺達は雄二にとっては敵だ。その敵に対しての過剰な敵意、まさにお前の味方だろ？」
「そっか。僕が今までぼこられてたのは、雄二に対する愛情表現だったんだね？」
「えっ！？　なっ、何言ってるのよアキ！？」
「明久君、どうしてそんな結論に！？」

2人が驚いた様に弁解しようとするが、明久はゆっくりと距離をとった。
光一は狙い通りとほくそ笑む。

「お前、なんて事言いやがる!?」
「なんて事ってなんだ？　俺はただ思った事を言っただけだが」
「この野郎!!　姫路たち諸共なんて手で来るとは……」
「ホントはもちっと経ってからのつもりだったが、別にどうという事ないだろ？　考えてみろよ、姫路もしくは島田が明久と望む様な関係になった処で、それをブチ壊そうとする奴なんてお前をはじめとしてごまんといて、喜ぶ人間なんて1人としていないんだから」
「……お前、何気に酷いな？」
「お前にだけは言われたくない。まあともかく姫路に島田を加えての3股人生、精々楽しめや!!」

バンッ!!

「その話は本当か!?」
「おのれ坂本!　霧島翔子と婚姻関係にありながら、姫路と島田をたぶらかしただと!?」
「たかがゴリラモドキの分際で人間様をさしおいて、姫路と島田に手を出すとは神々と万物と我らが許さん!」
「なあっ、お前らいつの間にここに来た!?　その前に俺は独身だし誰1人たぶらかしてねえ!　それと誰だ今ゴリラモドキっつったの!?　……あっ、しまった!　待ちやがれこういぐあっ!!」
「これより異端審問会を始める!!」

した所で、突如乱入したＦＦＦ団に拘束された。
光一はやれやれと言わんばかりにそっぽを向くと、今度は2人が押し寄せて来た。

「どうしてくれるのよ!?　完全にアキにウチ等が坂本の事が隙って誤解されたじゃない!!」
「？　何か問題でも？」

「大ありです！！　一体私達に何の恨みがあるっていうんですか！？」
「あるよたっぷり。それより後ろ何とかした方がいいんじゃないか？」
「「え？」」
瑞希と美波が振り向いた先には、浮気関連（笑）限定で纏うオーラを纏った翔子が居た。
2人を敵視し、今異端審問会を受けてる雄二と2人との直線上に立ち、。
「……2人とも、私を騙したの？」
「ちっ、違います！　翔子ちゃんの旦那さんを獲る気なんて微塵もありません！」
「そうよ！　全部久遠のデタラメよ！」
2人に翔子が詰め寄り始めたその片方では……
「坂本雄二、3股とは久遠光一以上の大罪人……これより坂本雄二を世界一みにくく惨殺するぞ！」
「死刑だ！　断罪だ！！」
「おおおおおねえさまをあああああいいいいじんんんんんんん！！？　八つ裂き八つ裂き……ケタケタ」
「おぉーい！　いつの間に清水が居るんだ！？」
FFF団＋清水美春に取り囲まれ、風前のともしびの雄二。
「一気に手間が省けたな。さて、今のうちに帰るぞ」
「そうだね。ねえ光一、もしかしてはやってるのかな？　愛人関係」
「……吉井君、それ絶対違うと思う」

「でもそれより意外だったね。姫路さんと美波が雄二の事好きだったなんて」

明久の中で、２人の好きな人は雄二と断定された。

「……光一よ、一体どうするつもりなのじゃコレ？」

「どうもしねえよ。雄二の責任なんだ、俺達がどうこうする事じゃない」

「そうね、坂本君があおったりしなきゃいいだけの話だったんだから。それに姫路さん達も、よりにも寄って光一が吉井君をそそのかしてるだなんて、失礼な！」

「そうだね、こればかりはボクも許せないよ」

「……何やら工藤まで染まっておる気がするのじゃ」

少し戦慄しつつも、悪くはないと思う秀吉。

混沌と化した学園長室を、５人はそっと脱出した。

「それで、どうするの？」

「一旦明久の家で着替えやらなんやら出してから、俺の家に行く」

「そっか。光一君と遊びたかったのに、残念」

「じゃあ愛子も優子の家に泊まりで、俺の家に来ればいいだろ？」

「それはいい案ね。それじゃこれから準備して、光一の家で遊びましょうよ」

優子の案に、それはいいと賛同する４人。

それから夕食は優子と愛子がメインで、明久はパジェーラを持ち込んでパエリアをつくる事に。

「俺も何か作ろうか？」

「良いわよ。光一の総合点がＡクラス級に入ったお祝いでもあるん

だから」
「そうそう、今日は楽させてあげるからね」
「……ありが、とう」
頬をかきながら、照れくさそうに顔をそらす光一。
秀吉は最近見る事が多くなった光一のそんな一面に苦笑する。
「光一も可愛い所があるのう」
「秀吉！　……けど、悪くないな。こういうの」
「……じゃろうの」
嫌われてばかりの人生の中で、ようやく光一に人らしい一面が目立つ様になった。
弟分として一番近くに居た秀吉にとっては、嬉しくもあり寂しくもあった。
時は過ぎて、光一の家にて。
「さて、と……」
明久と秀吉の寝床をこしらえてる間に、明久と秀吉は一緒にパエリアをつくり、優子と愛子は木下家で料理。
事情が事情とはいえ、ちょっとしたテスト開けのパーティーみたいな状況に少し楽しみにしていた。
「しばらく平和になりそうだし、前祝いと行くかな……どういう訳か文月学園はこの手の話は広まりやすい上に、感情任せかつ想像力豊かで人の話を聞かないどころか聞こうともしないヤツ揃いだから、もうすぐ夏休みだけどしばらくは雄二が台風の目になる筈。散々頭

痛の種にはなったけど、利用さえできれば楽なもんだな」

少し苦笑しながら、一応雄二に心の中で詫びておく。

……が、雄二が自分達の騒動をニヤニヤしながら高みの見物をしてる姿を思い出し、即座に撤回した。

「……さて、夏休みに入る前に雄二のバカゴリラモドキに俺らの苦しみを味わって貰い、姫路と島田には反省してないどころか、明久をそそのかしたとか濡れ衣着せようとした罰を受けて貰うとして、霧島へのお詫びの品は何にするか？」

一応事が事なので、翔子にはお詫び位はすべきだと光一は思案し始める。

スタンガン、拘束系道具、雄二とのペア系のアクセサリー……ときて、ふと思いついた。

「そうだ。もうすぐ夏休みなんだし、ペアの旅行でも……」

「それって誰の？」

そこで割り込んで来る声に振り向くと、そこには優子と愛子が皿を持って立っていた。

皿を見て顔を明るくした光一が、どうせだし意見を貰う事に。

「坂本夫妻のだよ。さっきは姫路と島田への罰のためとはいえ、あんなことしちまったからな。霧島に何か詫びの品くらいはと思ってかんがえてたとこ」

「だったらいいんじゃない？　代表も坂本君も、たまには2人きりでのんびりさせてあげようよ？」

「賛成。坂本君も財布を取り上げておけば、良く知らない土地で逃げるもなにもあった物じゃないだろうしね」

「って、そう言う意味で言ったんじゃないよボク！？」
「けど逃げ出す可能性は十分あるだろ？　用心に越した事はないと思うけどな？」
「……あっ、あはは」

流石に愛子は否定できなかった。

「あっ、光一。パエリア出来たよ？」
「おうっ、サンキュ」
「良い匂いね。それに自家製のパエリアなんて初めてだから、楽しみだわ」
「そうだね。この前食べた光一君のごはんもおいしかったけど、何だか楽しみだな」

一方その頃……

「光一のヤロウ……良くもやってくれたな。この借りは絶対返してやる！！」
「……雄二。ようやく夫婦湯に入れる」
「入るか！　だからな、俺達はまだ未成年で、しかも夫婦という間柄じゃなく……」
「……雄二は久遠の変な所を見習ってる。だから妻として雄二をきょうせいする義務がある」
「あの二股クズモヤシを見習ってもないし、お前に矯正されるいわれはないと……ん？　何か今違和感があったような……」
「……じゃあ早速きょせいする」
「まて！　今１文字抜けてたぞ！！　違和感の正体がわかったぞ！！」

「……矯正がダメなら、去勢する。二度と悪さが出来ない様に」
「人生か男か、そのどちらかの破滅しか選択肢はないのか！？」

第百二十一問

文月新聞

スクープ、大スキャンダル発覚！
Ｆクラス代表坂本雄二君が、Ａクラス代表霧島翔子さん以外に愛人が２人も！

昨日未明、学園長室にてＦＦＦ団により拘束される坂本雄二君と、その婚約者である霧島翔子さんに詰め寄られている姫路瑞希さんと島田美波さんの姿を、新聞部記者が発見。
近くの生徒に聞いた所“坂本のヤロウ、霧島と婚姻関係だってだけでも許せねえのに、姫路と島田を愛人にしてやがったんだ！”という驚愕の事実が述べられ、早速調査を行いました。
調査によりますと、姫路さんに島田さんの２名は良く坂本君を中心とするグループで行動しており、坂本君とも仲がいいと周りから評されており、時折行われる吉井明久君への拷問（本人談：あれはお仕置きです）にも坂本君が深く関与している事が多いとの情報が得られました。

『まったく、バカはそう言う所までだらしないのかしら！？　これだからＦクラスは嫌なのよ！！』

『恋人にというだけでも許せませんのに、お姉さまをよりにも寄って愛人だなんて、殺しても殺したりませんわ！　お姉さまの恋人たる清水美春の名において、このゴリラブタは必ずや抹殺して見せます！！』

『久遠の二股だけも信じられないのに、まさかそれ以上がＦクラス

にいただなんて、Ｆクラスにはクズしかいないのかしら？　まったく、ゴミはゴミ箱にでもいれば良いのよ』

『許せねえ！　久遠のヤロウもそうだが、坂本も俺が友香と別れる原因作っといて女たらしこむだあ！？　ＦＦＦ団一級審問官の名において、アイツラ絶対粛正してやる！！』

と、あちこちで反論や怒号がこだまする事間違いなしのこの話題。

久遠光一君が木下優子さんと工藤愛子さんの２名との二股が発覚してそんな間がない時期だけに、ＦＦＦ団による騒動が懸念されるこの騒動。

『雄二は絶対渡さない』

『違います、私が好きなのは……えっと、その……とても言えません！』

『違うわよ！　そうじゃなくて、ウチが好きなのは……やっぱり、坂本、なのよ』

坂本君の恋人である霧島翔子さんは、今回の騒動でより一層坂本君との関係に力を入れると豪語するかのような雰囲気で、そうつげてくれました。

一方姫路さんと島田さんは、隠していた事が露呈された事に動揺したのか、しどろもどろでそんなコメントを。

しかしあのモヤシで過激な危険人物が二股を出来たのかもそうですが、こんな素行も成績も不良なゴリラに何故三股……？　という意見も数多く確認されました。

もしかして愛人ブーム到来？　等とも囁かれるこの騒動、一体どうなる事か？

姫路さんに島田さんが一体何を間違えて坂本君の愛人になったの

かは、われわれ新聞部一同理解しきれない気持ちでいっぱいではあるが、木下優子さんが“アタシにとって、十分幸せだから良いの”と供述したと言う情報がある事から、やはり我々には応援するしかないと判断せざるをえません。
　では、心から頑張ってくださいと、新聞部からは送らせていただきます。

「何でもう貼り出されてるんだ!?」
「そんな！　私達そんな関係じゃありません!!」
「もうっ、どうして誰も彼も話をちゃんと聞かないのよ!!?」

『……これより、異端審問会を始める』
『坂本雄二、お姉さまをたぶらか死たツミ、ツグナッテモライマ死ョウ』
『……姫路、島田、雄二は絶対渡さない』

「げっ！　まっ、待て！　これは陰謀だ!」
「しょっ、翔子ちゃん！　まってください、私達本当に坂本君とそう言う事はないんです!」
「そうよ、これは全部久遠の陰謀なの！　お願いだからわかって!」
「くっそぉ、光一の野郎ぉっ！　よりにもよってこんないやらしい手をつかいやがって!!」
「明久君どころか、翔子ちゃんまで話を聞いてくれないなんて……久遠君、私達に一体何の恨みがあってここまで酷い事するんですか!!!?」
「アキをそそのかすだけじゃなくてウチ達までハメるだなんて、もう絶対許さないわよ久遠!!」

「……えーっと」
「……なんだか、ねえ」

5人でかこう食卓にて。
明久作のパエリアを一口後の優子と愛子は、敗北感に包まれていた。

「？　もしかして、口に合わなかった？」
「ううん、とても美味しいわ」
「うん……だからこそ、かな？　なんだか、自信喪失したと言うか」

優子はそれなりに家事はでき、愛子はあまり得意ではない。
……とはいえ、ここまでの味が同年代の、しかも男性に負けたと言うのが少々ショックを受けていた。

「そんなにショックなのかな？」
「つくづく女運がない家系だからこそのスキルだからな。ある意味」
「こうして見ると、運の面では恐ろしいほど似ておるのお主らは」

兄と体躯の所為で、生まれた家のシステム上でという違いはあれど、不幸の度合いでは互いにそっくり。
優子と愛子も、頷かざるを得なかった。

「光一はまだいいよ。木下さんに工藤さんとそう言う関係になって以来、上昇傾向なんだから」
「それは否定はしないが……でも実例があるんだから、明久だっていつかは運が上がる筈だ。心配せんでも、しばらく雄二が不幸傾向にある事は確かだし、な？」
「……そうだね」

明久を慰める光一を見て、愛子がふとつぶやく」

「光一君ってさ、これでどうして異様なまでに嫌われるのかな？」
「愛子？」
「それは、常日頃から武器持ち歩いて、ＦＦＦ団をたった１人で一掃できる過激派筆頭ってふれこみだから、怖い印象はあるけど……でも次男なのに兄貴肌で面倒見も良いし、周りに気を配れる人でケンカも強くて頭も良いから、頼りになるのに」
「ワシもその通りじゃと思うぞい。じゃが光一のそう言う面を見ようとする者など、文月学園に来るまで１人としておらんかったからの」
「まして育った環境が環境だからね。あの通りの体躯だから武器がないととてんで弱いし、裏切られた事だって何度もあるから敵対者に容赦や情けって概念をなくした事が、余計にアイツの悪評を加速させたのよ」

……何もしなかったアタシにも原因はあるけど。
そう、優子は表情を暗くして俯きながらつぶやいた

「過ぎた事はもう良いだろ？　それより夏休みだけど……夏期講習終わったらなにする？」

結局Fクラスは夏期講習（騒動でつぶれた授業の分）をする事になっていた。

「そうだね。夏と言えばイベント満載の時期だもん、色々とお楽しみが期待できることしたいよね」

「じゃあ定番って事で、プールでも行く？」

「おっ、良いな。いっそ遠出して、海とか山とかも良いんじゃないか？」

「それは良いのう」

「じゃあその時には部屋割は坂本君と代表は一緒の部屋ね。今回のお詫びもしないといけないし」

その後、夏休みの予定について。

色々と思案や発案をしつつ、夜は過ぎて行った

そして時は過ぎ……

「ん……」

時間は朝で、目を覚ました光一

周りを見回すと自分の家のリビングで、ふと昨晩の事を思い出す。

「えっと……つい寝ちまったんだっけ？」

寝ぼけた頭で、話はどんどん白熱し、

「……っと、今日学校が、ん？」

そこでふと、自分の両隣りに何かの存在に気がついた。

そっとまずは右、そして左をゆっくり首を動かしてみてみると……

「すぅっ……すぅっ……」

「すぅっ……んっ……」

まず右には、光一のシャツを掴みながら、寄り添う様に眠ってる優子

そして左には、光一の腕に胸を押し付ける様に抱きながら眠ってる

愛子。

「……えーっと」

この2人は寝るのは木下家での筈（ちなみに両親都合よく出張中）

しかし時間を忘れての談議だったから、そのままここで寝る事にな

った……と、光一の頭は弾きだした。

そこで優子が光一に寄り添い、甘える様に顔をこすりつけ始めると

同時に頭が覚めた。

そして左腕に感じる感触と優子に擦り寄られる感触に……

「うぅっ、こそばゆいけどなんか心地いい。それに愛子って、結構

やわらかい……じゃなくて、どうしよ？」

少々混乱するも、気を取り直して打開策思案開始。

襲う……ダメ絶対！！

抜け出す……自分の力じゃびくともしない。

起こす……何か嫌な予感がするが、妥当な方法。

「……優子、優子」

「んっ……えっ！？　どっ、どうして光一が！？」

「周り見ろ」

起こされた直後に光一の顔があって、驚きで頭がさえた優子は周りを見回す。
そして昨日の事を思い出して、現状把握完了。

「……なんだか良い夢が見れた気がするわね」
「えーっと、なんて言えば良いんだ？」
「んっ……」

愛子が身じろぎし、光一の掌が……

むにゅっ

「……へっ？」
「……ねえ光一」
「まあ待とうな優子？　まずは俺の腕を離して、会話をする事から始めるべきだと……」

むにゅっ

「……あの、優子？」
「一応、愛子よりある筈なんだからね？」
「……いや、そうじゃなくて、その」

ガチャッ！

「おはよう光い……」
「おはようなのじゃ、こう……」

そこへちょうど、用意された寝室で寝たらしい明久と秀吉が入ってきた。

「ごっ、ごめん光一！」
「すまぬ、邪魔をした！」

バタンっ！！

「えっ！？　ちょっ、待て！　何か誤解……」
「んっ……何か騒々しい……えっ？　なっ、何してるの光一君！」
「あっ、ちょっ、待て。まずは落ち着いて……」
「光一君だからいいけど、でもボクだって心の準備ってものが……優子だって」
「だからまず落ち着けって」

そして登校中。

「……心地よくはあったけど、心臓には悪い朝だった。ＦＦＦのバカ共に知られないようにしないと」
「……羨ましいな、光一が」
「明久よ、きっとお主にもそう言う相手が現れるのじゃ。まあ光一は特殊ではあるがの」
「そうだね、それを期待するよ」

それを見ていた明久が少し落ち込み、秀吉がそれを慰める。
そこでふと、光一が２人の方を見る。

「？　どうしたの光一？」
「失礼」

光一が明久の額に指をとんと当てた。
明久が少し驚いた様に一歩下がると、秀吉も額を抑える。

「これの解決はどうなったのかな？」
「学園長室に行ってみないと、どうともいえないよね？」
「けど早い所何とかして貰わないと……姫路と島田の足止めだって骨だし、あのバカ共の掃除にしろ武器代だってバカにならないってのに。こりゃ霧島との取引の品のグレードをあげるか？」
「……まるで雪だるまだよね、坂本君の不幸も」
「どうでもいいじゃない、そんな事」

そして学園の掲示板にて

「いつも思う事だけど、情報はええな！？」

掲載されてる文月新聞（上記参照）にて。
そこに掲載された記事は、光一達も知っている昨日の事。

ふと見えるのは、異形の集団と生物に襲われる男子生徒と、周りを女子生徒に囲まれる2人の女子生徒。

「すっかりあの2人、坂本君の愛人認定されちゃったね？」
「同性愛者説が堂々と蔓延する場所だ。それ位簡単だろ？」
「……否定しきれないわね。考えてみればアタシ達の関係も、ごたごたしてはいるけど今や馴染んでるから」
「普通ではどれも考えられんのじゃがの。しかし光一よ、自業自得ではあってもやり過ぎではないかの？」
「そうか？　アイツ等が今まで俺や明久にしでかした事に比べれば、

かなり温情はいってると思うぞ？　少なくとも身体は無傷だし、評判だって俺達のに比べればノミに刺された程度ですらねえよ」

「……ぜっ、全然否定が出来ぬのじゃ」

明久においては身体と評判の両面で、光一の同性愛者説もあの2人が騒ぐ所為で。

それぞれ秀吉も否定できない要素なんてたっぷりだった。

「俺は少なくとも、俺のしでかしてる事に対しては自覚はある。明久もそうだろ？」

「え？　……まあ、そりゃあね」

「まあ雄二もそうは見えないけど、一応は自覚が……ある……筈？」

「それだけ間をあけといて筈を付けるの？　しかも疑問形って……」

「一応は信じてやってるから、俺だって手加減なしでたたきつぶしてやってるんだよ」

光一の言葉に、周りは少し驚いた。

普段から犬猿の仲で、2人のやり取りは“羅刹と凶王の睨みあい”とまで呼ばれる程、傍から見ればとても仲が悪いと言うのに。

「なんだかんだで、坂本君の事は認めてるのね？」

「そりゃあな。でなきゃつるまないし、全力でぶつかったりはしねえよ」

「ぶつかると言うか、光一があしらってる様に見えるわよ？」

「そう、全力であしらうんだ」

「それじゃぶつかり合うじゃなくて、闘牛みたいなものじゃないかな？　光一君」

愛子の的を得た発言に、光一は笑った。

「良い表現だな、それも」

所変わって、学園長室。

ドバン！

「おい、いるか妖怪？」

「……アンタはココを自分の部屋か何かと勘違いしてないかい？」

「「すみません、学園長」」

「まったく、こんなガキが二股なんて……世の中間違ってるさね」

ぶつぶつと文句を言いながら、学園長は端末を操作し調査結果を表示。

一番話が通じるだろう光一を手招きし、端末を見せる。

「調査の結果、融合媒介の干渉はどうやっても観察処分者のデータに干渉するらしくてね。感覚のリンクの解除は無理なのさ」

「？　じゃあ普通に解除すりゃいいのか？」

「ああ。融合媒介による融合解除の機能追加は容量の上で無理だったから省いたけど、事が事だから新しく腕輪をつくってる」

「つまりアンタがいい加減なことしなきゃ、昨日のうちにカタが付いた事かよ」

「……まあ事実は事実だね。すまなかったよ」

光一の横柄な態度良腹は立てていたが、言っていた事は事実の為一応は謝る事に。

それを見た光一も、ならば自分もと謝った。

「で、解除の腕輪の完成は？」
「放課後だよ。後その間、アンタの腕輪を預からせてくれないか？　折角２つにするんだから、融合召喚と融合媒介の機能を見直して効率をあげてみるさね」
「わかった……はぁっ」

腕輪を渡すと同時に、放課後までどうやってアイツ等をまくか……光一にとっては、それが一番深刻な悩みだった。

「で、どうするの？　姫路さん達の事？」
「どうって、適当にあしらうしかないだろ」
「……誤解は解かないの？」
「あのな愛子、アイツ等には散々恨みがあるのに、たった１日でどうにかする程お人よしじゃないよ俺は」
「光一はワシ等には優しく親身になってくれるが、敵対者には容赦という概念はないからのう」
「ねえ光一、誤解って何の事？」

ポンっ！

「お前はただ、姫路と島田を応援してやりさえすればいいんだ……友達として」
「光一……うん、わかったよ」

「……光一君って、結構根に持つタイプだよね？」
「でなきゃ、強化合宿で愛想尽かされかけたりしなかったわよ……本当なら、赤の他人でもおかしくないのよね」
「姉上……」

「話の途中で何だが、アンタ達ココがどこか忘れてないかい？」

第百二十二問

問題　次の問いに答えなさい。

英語でＢｅａｎ　ｓｐｒｏｕｔという、豆を人為的に発芽させた食用出来る新芽を何と言うか答えなさい

姫路瑞希の答え
『モヤシ』

教師のコメント
正解です。モヤシは栄養価が高いものの、細菌が増殖しやすい食品である為、調理は十分に注意してください。

２学年全員（一部除く）の答え
『久遠光一』

教師のコメント
彼の評判の悪さが十分うかがえます。

久遠光一の答え
『答えたくない』

吉井明久の答え
『答えたくありません』

木下秀吉の答え

『答えたくありません』

木下優子の答え

『答えたくありません』

工藤愛子の答え

『答えたくありません』

教師のコメント

君たちの答案の間に強い絆が見えました気がします

「久遠君！！」

「久遠！！」

光一と明久、秀吉がのんびりとくつろいでると、教室に響く2人の声。

光一はさして動じずゆっくりと銃の整備を始めと、ある程度の距離をとって2人が光一に抗議し始めた。

「どうしてくれるのよ、完全にウチ等坂本の愛人扱いじゃない！！」

「どうしてこんな事するんですか！？　久遠君の所為で、翔子ちゃ

んに嫌われたじゃないですか！！」

予想していた通りの答えに、光一はポリポリと頭をかきながら呆れた様に２人を見る。

「……なっ、なんですか？」

「ちょっと、まさか攻撃するつもり？」

いつもと違う雰囲気に一歩後退する２人。

ましてや今は、整備中とはいえ武器が手の内にあるだけに警戒せざるを得ない。

「……」

……が、さして気にすることなく銃の整備を再開した。

「何か言いなさいよ！」

「……なにか」

「そう言う意味じゃありません！　もうっ、話はちゃんと聞く物ですよ！！」

「……」

「なっ、何よその“お前らが言うな”って言ってる様な目は？」

「……成程の、光一はもうまともに話す気はない様じゃ」

「……そうみたいだね」

珍しく自分に被害が来ない明久と、その明久と感覚を共有している為とばっちりを恐れる秀吉。

それにして見れば、この２人を抑えてくれるのは実にありがたい

……のだが。

「テメ、光一！　昨日はよくもやってくれたな！！」

世の中というか、文月学園内は悉く平穏な時間がお嫌いらしい。

「お前が余計な事するからバチがあたったんだ」

「うるせえ！　覚悟は出来てんだろうな！？」

「やめとけ、ケガするぞ？」

ボキボキと指を鳴らしながら、豪快に足音を鳴らし光一に歩み寄る雄二。

ピンッ！（雄二の足に何かが引っ掛かる音）

ガンッ！（雄二の頭に卓袱台が落ちる音）

バタバタッ！（雄二がのた打ち回る音）

「ほら見ろ言わんこっちゃない」

「テメ、罠仕掛けるなんて恥ずかしくないのか！？」

「知るかんなもん」

整備を終えた銃にゴム弾を込め、雄二に狙いをつける。

雄二も流石に武器を持った光一相手では、一歩下がらざるを得なかった。

「まあ今回ばかりは“霧島には”悪いことしたと思ってるから、ペア旅行でもプレゼントしてやる」

「俺に悪いと思わないのか！？　ってか、なんて事しやがる！？」

「思わないし、俺は友達を大切にすると言っただろ？　別にお前がどうなろうと知ったこっちゃない」

キーンコーンカーンコーン！

「ぐっ……」

「とにかく、久遠君！　私たちへのこんな仕打ち、絶対許しません！」

「そうよ！　アンタだけのうのうとするなんて、そうはいかないんだからね！！」

「……俺を何度も裏切っといて、良くそんなこと言えるな。全く」

「えっ？」

光一が吐き捨てるように言ったセリフは、２人に疑問を与えた。

そして休み時間。

「ちょっと久遠、さっきのどういう事？」

「さっきの？　……わからんなら良い。お前らと話す事はない」

「何でですか？」

「お前ら俺や明久の話を聞かないだろうが。そんな相手と話す事はない」

「何よそれ！　そんなの今回とまったく……」

光一がゴム弾入りショットガンを取り出し、美波につき付けた。

その左手にスタンガンを三本指の間に挟むように持ちながら、威嚇するように睨みつける。

「お前らな、ワガママも大概にしろよ？　俺はお前らの召使になった覚えはないんだよ！」

「ちょっ、そこまで怒る事……」

「それだけじゃねえ！　そもそも誤解解いてやったの誰だと思ってる!?　元はと言えば、お前らが清水の策略にはまって明久を拷問しなけりゃ、こんな事にならなかっただろうが!!」
「そっ、それは……」
「そんなに俺達のやることなす事気に入らないんなら近づくな、目障りだ!!」

今にもショットガンを撃ちかねない状態となり、それを見かねた明久と秀吉が光一を取り押さえた。
2人はホッとした顔になるが、光一の視線に当てられ震えていた。

「光一、これはやり過ぎだよ！」
「明久、今回ばかりは聞き入れる訳にはいかないな！」
「落ち着くのじゃ光一、ここで癇癪起こしては……」

秀吉に宥められ、一先ず武器を納める光一。

「とにかく、お前らも話をろくに聞かれない苦しみを味わえ。少なくとも反省の色がない限りは、俺はお前らの味方をする事はない！」
「そっ、そんな！」
「お前らのその肉食動物未満の脳みそを矯正するには、もうこれ位しないとダメだとわかったからな。変なことしやがったら力尽くで排除するからそのつもりで」
「幾らなんでも酷いです！　その間に明久君と木下君が……」
「自業自得だ、ついでに人の勝手に振り回される苦しみも味わえ。それで反省したら許してやるが、反省の色がないんなら俺にも考えはあるからな？　いっそ根本以外の男に近寄れない様に……とか」
「「それはやめて（ください）！」」

雄二でさえ簡単にはめる上に、敵対者に容赦という概念がない光一

なら、十分あり得る。
そう思った2人は、揃って最悪の想像を否定するように受け入れることにした。

「……わかりました」
「……ならその言葉を信用はしてやる。だがこれを裏切ったりしたら、気絶するまでいたぶってやるからそのつもりで！」
「笑顔で外道な事言わないでよ！」
「見捨てないだけありがたいと思え！　それとも本気で二度と誤解解けない様にしてやろうか！？」
「うぅっ……わかりました」

なら良い……そう言って、光一は武器をしまって卓袱台に突っ伏した。

「姫路に島田よ、光一を本気で怒らせたらワシでも止められんぞい？」
「うっ……けっ、けど」
「お主らの行動には、姉上も怒っておるのじゃ。これ以上妙な事をすれば、ワシたちも庇いきれぬ」
「……」

そして昼休みのAクラスにて。

「……というわけで、噂自体は雄二とあの2人に対しての報復のつもりだったんだが、霧島には悪い事をした。だからお詫びに、2人きりの旅行を手配しようと思ってな」
「光一、テメエ！！」
「……わかった。雄二に責任があるのなら、妻として謝罪をする。

でも久遠が折角用意してくれたのなら、それはありがたく頂戴する」
「いただくな！　そして全部そのモヤシが悪いんだろうが！！」

いつもの商談風に、光一は噂の真相の説明と詫びを。
その横では雄二がいつものように、リクライニングシートに縛り付けられていた。

「それじゃ、計画がまとまり次第報告するから。旦那との時間邪魔して悪かったな」
「……わかった」
「翔子は独身だ！　……って待て翔子！　やめろ、その緑色の唐揚げを口に入れようとすもごォおおお！！」」

翔子の手で弁当を（口いっぱいに）食べさせてもらってる雄二を背に、光一は優子と愛子のもとへ。
ちなみに秀吉と明久も、一緒に来ていた。

「さて……はい優子に愛子、いつも作って貰ってる礼だ」
「え？　そんな、気にしなくていいのに」
「でも嬉しいな。ありがとう」

光一の差し出した弁当箱を受け取り、2人は嬉しそうにその包みを解いた。

「ん？　光一、お前料理できたのか？」
「ああっ、一応な。そう言えばお前確か知らなかったっけ？　俺の両親離婚してるから母さんが仕事で家に居ないんで、家の事全部俺がやってるんだよ」
「前光一の家で勉強会やったんだけど、その時ふるまって貰ったんだ。おいしかったよ」

「へぇっ、そうだったのか。まあお前は大抵の事1人でやるイメージあるから、頷けはするがもごごっ」

そこで翔子が、おしゃべりは終わりと言わんばかりに雄二の口に唐揚げを突っ込んだ。

「光一に頼んで台所貸して貰って作ったんだけど、はい」

「んむっ？　明久の弁当か、それは楽しみじゃな」

その傍らでは、明久が光一と一緒に作った弁当を、秀吉に差し出していた。

「それは吉井君の手作り弁当かい！？」

そこへ突如乱入者。

学年次席の久保利光が、秀吉の持ってる弁当を見て息を荒げていた。

「え？　どうしたの久保君？　そうだけど……」

「吉井君の……頼む木下君、そのお弁当を僕に！！」

ブスっ！　バタッ！

「うるさいぞ久保、昼寝でもして落ち着け」

「おっ、おのれ……くお……んこ……うい……ち……」

「え？　光一、どうして久保君に攻撃を？」

「気にするな。さっさと食っちまおうぜ？」

倒れてる久保を気にしつつも、明久は秀吉に弁当を渡して自分のを食べる事に。

「うーん、やっぱりアタシ達より光一の方が料理が上手ね。もっと頑張らないと」
「そうだね。ボクももっと料理の練習した方がいいかな？」
半1人暮らしで、元々大抵の事は自分で出来る光一に、ちょっとした嫉妬を感じる2人。

「頑張ってくれるのは嬉しいね。俺2人の作った料理食うの楽しみだし、味付けも結構好きだからさ」
「「……／／／」」

「「「……二股って最低な筈なのに、偉く模範的な関係に見えるのは何でなの？」」」
その様子を見ていた女子達は、揃って光一の対応を評価した。

「……雄二、私のお弁当はどう？」
「どうと言われても、どう言っていいかむしろ教えてほしい位だ」
「……じゃあ、頑張る」
「いや、頑張らんでくれ。特にこの妙なだだだだだだだだ！！」
「……久遠の良い所を見習ってほしい」
「見習うか！　だが俺が弁当を作る事に関しては賛成だから、そうさせてくれ！！」
「……嬉しいけどダメ。くす……仕込みが出来ない」
「今何言おうとした！？」

翔子は光一の対応が羨ましくなり、雄二にそれを求める
……が、やはり不発に終わった。

「明久の料理はやはり美味しいのじゃ」

「そうだね。上手く味付け出来てるみたいだし、よかったよかった」
「すまぬの明久、味覚までリンクしておるからワシから先に」

その一方で、秀吉が弁当を食べるのを明久は嬉しそうに見ていた。
一緒に食べると味が混ざって変な感じになるため、まずは秀吉から食べて明久は後で食べる事に。

「気にしなくていいよ。秀吉が喜んでくれるだけでも嬉しいから。僕にはこれしか取り柄がないからね」
「これほどならば光一にもひけを取らんし、誇れるのは間違いないの。毎日でも食べたい位じゃ」
「……え……？　毎日でも、だなんて秀吉……皆の前でそんな事言われても、僕はその……」
「まっ、待つのじゃ明久！　今のはお主への遠まわしの告白ではないぞ！？　なに故頬を赤らめておるのじゃ！？」
「えっ！？　そうなの？」
「むぅっ……確かに紛らわしかったかもしれぬが、そうまで落ち込まれるとワシも罪悪感を感じるのじゃ」

文月学園は、今日も平和だった。

第百二十三問

問題、次の問いに答えなさい

“自業自得”という単語を遣い、例文をつくりなさい。

姫路瑞希の答え

『狼少年が信用されなかったのは、普段の行いによる自業自得である』

教師のコメント

流石は姫路さん、的確かつ分かりやすい例文です。

久遠光一の答え

『坂本雄二が奥さんにお仕置きされるのは浮気した事の自業自得である』

吉井明久の答え

『坂本雄二が奥さんにお仕置きされるのは浮気した事の自業自得である』

坂本雄二の答え

『久遠光一と吉井明久の評判が悪いのは普段の行いの悪さによる自業自得である』

教師のコメント

つくづく君たちの間柄が気になります

木下優子の答え
『Ｆクラスの評判が悪いのは、異端審問会とか言う迷惑な集団活動を行っている自業自得である』

教師のコメント
特殊な例えですが、的を得た的確な答えといえるでしょう。
ただしこれは、文月学園でこそ通用する答えですが。

霧島翔子の答え
『坂本雄二が私のお仕置きを受けるのは、浮気した自業自得である』

島田美波の答え
『吉井明久がウチのお仕置きを受けるのは、不純な事をした自業自得である』

教師のコメント
君たちは恋愛という物の根源を見直してください

Ｂクラス生徒全員の答え
『根本恭二が代表に相応しくないのは、卑怯なことばかりやって調子に乗った事の自業自得である』

Ｃクラス生徒全員の答え
『小山友香が代表に相応しくないのは、性懲りもなく久遠光一に挑んでは負けて帰る自業自得である』

Ｅクラス生徒全員の答え

『中林宏美が代表に相応しくないのは、性懲りもなく久遠光一に挑んでは負けて帰る自業自得である』

教師のコメント
この3クラスには既に代表に代表としての立場が機能していないようですね。

Fクラス生徒全員（一部除く）の答え
『我等FFF団の制裁が行われるのは、男女交際などという不純な行いをした自業自得である』

教師のコメント
君達の行いの方がよっぽど不純です。

「……やっぱりもっと練習した方がいいわね」
「そうだね。幾ら何でも、これじゃ女の子の面目丸つぶれだもん…
…ところでこのコロッケ美味しいね」
「光一はコロッケが好きだからね。吉井君のパエリアの様に、良く作ってるのよ」
「へぇっ、そうなんだ。じゃあハードルは高いけど、ボクも作って

あげようかな？　ねえ優子、コロッケのバリエーションって何があったかな？」

光一の弁当を食べながら、２人は明久のパエリアの時の様な敗北感に打ちのめされていた。
だが弁当のコロッケの話題で、そこからその様子を見た男性陣は……。

「やっぱりいいなあ。光一には“美味しい”ご飯作ってくれる人がいて」
「美味しいって……まあ、そうだな。姫路はレシピ通りに作ってくれたらそれでいいのに」
「そうじゃないよ。姉さんの場合、レシピ見ても材料を間違えて酷い事になるから」
「……世の中上には上がいるように、下にも下がいるものじゃのう」

明久の不幸ぶりに、少々空気が重くなっていた。
料理においては、間違った常識は死活問題である。

「……雄二、雄二の好きな物を別個で用意した」
「それは嬉しいが、そんな怪しい色をした者は食べたくないぞ翔子」
「……大丈夫、毒じゃないから問題ない」
「いや、ある！　光一から買っただろう何か入れたのは明白だろうが！！」

こっちはこっちで、平穏な時間を過ごしていた。

「待て！　リクライニングシートに縛り付けられた上に、怪しい色の料理を無理やり食わされるのを平穏と表現するのか！？」
「……雄二、誰に向かって叫んでるの？」

「うっ……っと。ところで光一、お前の所為で起こった騒動ですっかり忘れていたが、明久と秀吉の融合召喚の事はどうなったんだ？」
「それはどういう事だ！？」
明久と秀吉の、という所で突如久保が起き上り雄二に詰め寄った。
「あっ、ああっ。実は融合召喚の新技術でな、光一の召喚獣を介して別の奴同士を融合させられる様に」
「なんだって！？　それならば……吉井君、ぜひとも！」
ブスっ！　バタッ！
「お前は寝てればいいんだよ」
「お前も容赦ないな！？」
「余計な騒動はとっとと潰すに限る」
「なんだ、つまらぴぎゃっ！」
つまらんと言わんばかりにため息をつく雄二に、ムカっときた光一はスタンガンを投げつけた。
「ぐっ、光一てめ……ん？　明久、何でお前今頃食ってんだ？」
「うん。秀吉が食べてる間は、味が混ざって食べにくいからね」
「？　ってことは、感覚のリンクはまだ続いてるのか？」
雄二は明久の台詞から、リンクはまだ続いてると察した。
「ああ。新しく腕輪をつくってるそうだから、放課後までこのままだ」
「しかし感覚のリンクって、味覚までつながってるのか？」
「うん。サラダ食べてるのにパエリアの味がしたり、水飲んでると

きに辛味が来たりでややこしいよ」
「うむっ。今明久食べておるポテトサラダの味じゃが、食べておらぬのに味だけがするなど変な感じじゃの」
食べてもない物の味がする。
想像が出来ないが、複雑なものである事も事実。
「それだけ聞くと面白そうだな」
「だろうな。色々と考えれば、メリットもあればデメリットもあるだろうな」
「どうせならお前と一緒なら明久をぶちのめせば……」
「そう言う事は心の奥底で考えるもんだぜ、このクソ野郎」
再度スタンガンで黙らされた。
「まったく、ろくなこと企まない上に懲りないんだから。代表、旦那はしっかりと捕まえておいてね？　アタシ達も迷惑この上ないんだから」
「……わかった。優子には迷惑をかける」
「……坂本君も坂本君だけど、優子も優子だよね」
そのやり取りをみて翔子に注意する優子を、愛子は苦笑いしながら見ていた。
そこでふと、愛子がさっきの話題でひらめいた。
「そのリンクだけどさ、ダイエットとかで活用できるかも」
「ダイエットで？」
「うん。吉井君と感覚を共有すれば、ダイエットの時ケーキとか我慢しなくて済むかなって」
「それはいい考えね。ダイエットしてる時は無性に食べたくなるか

ら、味が楽しめる分負担も少ないし」
「姫路達だったらそれを良い事に、明久に“自分達の”好きなもんばっかり無理やり食わせて太らせるってオチが見えるな」
優子も愛子も苦笑いを抑えられなかった。
「そう言えば気になってたけど、瑞希ちゃん達は？」
「ん？　ああっ、さっき来たよ？　当然目の敵にしてきたけどな」
「けどさ光一君もやりすぎじゃない？　確かに坂本君にあっさり騙される瑞希ちゃん達も瑞希ちゃんだけど、光一君も吉井君に対して過保護じゃない？」
愛子のツッコミに、光一は驚いた様に目を見開く。
「え？　過保護……なのか？」
「まあ、過保護になるのも無理もないけどね。光一にとってはアタシと秀吉以外では始めて出来た友達だから」
「じゃが傍目から見ても明久に対して過保護じゃ。何と言うか、保護者みたいな印象を受けるぞい」
「うっ……そうだな。匙加減がわからないというか、なんというか……」
少し気まずそうに目をそむける光一。
それに対してニヤついた視線を察知した優子は……。
「ちょっと坂本君、どこ見てるのよいやらしい」
「はっ？　別に木下なんて見てぎゃあああああっ！！」
スカートを押さえながら、雄二を黙らせる呪文を唱えた。

「……そうなのかな？　じゃあ、どうしたらいいんだろ？」
「その辺りは、距離を少しとるとかしてはどうかの？　近すぎるのが問題なのじゃからの」
「そうか？　けどな……どの程度になんだろ？」
「……歴史音痴の次は友達づきあい音痴って、アイツ弱点全部音痴かよ？」

友達付き合いそのものが木下姉妹以外ない為、問題が発覚しても対処が全然わからない光一だった。
その様子を見て、雄二は自分を悉くあしらう光一が些細な事で悩む姿に、唖然としていた。

「うーん……となると、ちと気をつけるかな？」
「そうだね。いつまでも光一に頼ってばかりじゃ申し訳ないし、頼ってもらえるように頑張らないと」
「やれやれ、となるとワシもいつまでも光一に甘えてはおれんの」

そんな昼休みだった。

そして放課後の学園長室。
腕輪持ちの４人一同が、雁首そろえていた。

「で、出来たのかバケモノ」
「相変わらず口の悪いクソガキさね」
「どうでもいいだろ。さっさと出せ世界一の奇怪生物」
「……アンタ一体何さまのつもりだい？」
「これは失礼しました、学園長。では、腕輪の方をお願いします」
「……どうして敬語が一番不快になるんだろうね、このガキは」

疲れた様に学園長が1つのケースを取り出し、光一に差し出す。
ケースを開けると、そこには一対の腕輪が。

「両方とも、俺にか？」
「ああっ。融合召喚と融合媒介は完全に分けて、個々の腕輪にしたよ。分離の機能は媒介の方に加えたさね」
「そうか。結局、解く解かないは俺の意思次第になるのか？」
「そうだよ。自然に解除は出来ないから、アンタにゆだねるよ」
「そうかい。わかった」

早速右手に融合召喚、左手に融合媒介の腕輪を付ける光一。

「さて、明久に秀吉。いくぞ」
「うん！」
「了解じゃ、アウェイクン！」
「「サモン！」」

明久と光一が召喚獣を召喚し、姿を現す。
伊達政宗の甲冑姿の明久の、黒一色のごついコートを纏った光一の召喚獣が姿を現した。

「で、どうするんだ？」
「キーワードは“セパレイション”だ。それを融合召喚獣の背に触れて言うんだ」
「大丈夫なのか？　迂闊に変な事ばっか起きて外にばれたら……」
「データ上では大丈夫だよ。アタシだってアンタ達がどうなろうと構いはしないが、そうなったらおしまいだからねえ」
「そう言う教育者らしからぬセリフも聞かれたら十分おしまいだ！」

やれやれと言わんばかりに光一はため息をつきながらも、言う通り

にするしかないと召喚獣を融合召喚獣の背後に移動させる。
そして……

「セパレイション！」

キーワードを受け腕輪が起動し、融合召喚獣が光り2つに分かれ……

「おっ、戻ったか」

その場に居たのは、龍のジャケットを纏った明久の召喚獣と、新撰組の羽織を纏った秀吉の召喚獣

「えーっといたっ！」
「秀吉、どうだ？」
「何ともないのじゃ」
「そうか……じゃあ」

ドボっ！　ドガっ！　ガスっ！

「ごふっ！　げふっ！　あぐっ！」
「これはどうだ？　これは？　これはぎゃふっ！」
「いい加減にしろ！」

調子に乗って明久をタコ殴りにする雄二に、スタンガンを投げつけた。

「なあ秀吉、俺過保護とは言われたけど、こいつの理不尽な攻撃には対抗して何か悪いかな？」
「うーむ……まあ、光一は光一じゃ。悪いと思ったら変えればよいし、良いと思ったらそのままでよいのではないかの？」

「そうか……でもま、考え直してはみるかな？　言われて見直さないんじゃ、コイツと同類になっちまう」

第百二十四問

問題　次の英文を訳しなさい

『I that a lover talked with a different person and was jealous』

久遠光一の答え

『私は恋人が別の人と話してるのを見て、嫉妬しました』

教師のコメント

正解です、この調子で頑張ってください

姫路瑞希の答え

『私は好きな人が他の人と話してるのを見て、お仕置きしました』

島田美波の答え

『私は好きな人が他の人と話してるのを見て、お仕置きしました』

霧島翔子の答え

『私は好きな人が他の人と話してるのを見て、お仕置きしました』

教師のコメント

お仕置きという単語はありません。

吉井明久の答え

『恋人さん、早く逃げて！』

教師のコメント
何故か正解と思えるほど思いつめた何かを感じました。

Fクラス生徒の答え
『こいつも話してる奴も殺す！』

教師のコメント
いっそ文章の中へと消えさってしまいなさい

工藤愛子の答え
『この程度で嫉妬ですか？』

木下優子の答え
『この程度で嫉妬ですか？』

教師のコメント
君達の関係自体を当たり前の様に考えないでください

融合解除の翌日。
光一は左手にはめられた新しい腕輪を見ながら、明久に秀吉、雄二にムッツリーニというメンバーでいつもの様に卓袱台を囲っていた。
詳しい話を知らなかったムッツリーニは、秀吉と泊まり（優子と愛子が居た事は割愛）の話を聞いて……

「……殺したい程妬ましい」

明久に静かな嫉妬と殺意の入り混じった視線を浴びせていた。

「落ち着け。お前には今度島津先輩と融合させてやるから」
「……！？　（ブシャアアアア！！）」

鼻血を吹きだし倒れたムッツリーニを無視して、話は進む。

「なんだかんだの問題はあったが、便利な能力である事は事実。でも回数制限もついたから、そこは俺の判断力の見せ所だ」
「ああっ。“ムカつくが！”お前はと指揮官や軍師としても優秀だから、“不本意ながら！”頼らせて貰う」
「それはどうも。俺も“胸糞悪いが”お前が代表であるのなら、“嫌々ながら！”お前の指示に従ってしっかり働いてやるよ」

空気が冷え始め、明久と秀吉が距離をとり始める。
光一と雄二が睨みあい始め、さらに険悪なムードを退き寄せ始める。

「言っとくが、ふがいない真似するなよゴリラ。あのときみたいなマネしやがったら、二度と霧島から逃げられない様にしてやるから覚悟しとけ！」
「テメエこそ自意識過剰で良い気になるなよ！　過激派筆頭だか凶

王だか知らねえが、勝手なマネしやがったら見捨てるからな！」
「ゴリラなんざに誰が助けを請うか！　どうせだ、テメエのふがいなさを利用して代表権限奪ってやろうか！？」
「「……（ガンのくれ合い）　……まあいい」」
ガンのくれ合いも程ほどにして、２人は笑いながら元の調子に戻った。

「けどこれの機能をきちんと理解してからじゃないと、危なっかしいぞ？　ただでさえあんなことがあった後何だから、いざって時に変なトラブルってのも笑えねえ」
「そうだな。お前は明久と秀吉が一緒に居る事が多いから、自動的にその２人がメインになる訳だからな！」
「「「殺せえええええ！！」」」
雄二がワザとらしく大声で言うと、当然の様に周りに黒装束の集団が群がった。
ＦＦＦ団こと、異端審問会始動

「久遠君の狙いはこれだったんですね！　あんな事言っておいて騙すだなんて、もう許しません！！」
「アンタの性根、アキ共々みっちりたたき直してやるんだから！！」
そして当然の様に２人も激怒し、光一に詰め寄り始めた。

「あいつらもそうだが、ホント学習しない奴だなお前も」
「学習しないのはお前だ。何度も言っただろ？　俺はお前と明久の幸福はぶっ潰したくなるんだよ」
「いや、そうじゃなくて……アイツ等もお前も、今の自分の状況わかってないだろ？」

呆れる様に言う光一に、雄二が負け惜しみかという様に鼻で笑う。
……が、やれやれと言わんばかりに光一は。

「おい須川、さっき霧島を含めて姫路達と融合させてくれって言われたんだが？」

反撃の呪文を唱えた。

「G級異端者坂本雄二の処刑を最優先とする！！」
「だっ、テメ光一！　くそっ、逃げ……」
「「「られると思うか！？」」」
「坂本君、なんて事を言うんですか！」
「アンタなんで誤解を助長させるのよ、霧島さんがいるって言うのに！」

既に周りを取り囲まれてた為、雄二に逃げ場などなかった。
あっさりと捕縛され、磔にされ始める。

「こういう事だ」
「テメエ！！」
「悪く思うな。利用した相手が悪かった……ただそれだけだ」

中指を立てて挑発してから、明久と秀吉を連れて逃げるようにFクラスを後にした。
雄二の断末魔を背に、３人は一路Ａクラスへ。

そこで秀吉が、明久に聞こえないように耳打ち。

「それよりも光一よ、一体どうする気なのじゃ？　この噂」

「どうもしねえよ。そもそもこんなに広まった噂、俺1人でどうしろってんだ？」
「そんな無責任な……」
「アイツ等の事で責任持つのもアホらしい事この上ないだろ。自分勝手で無責任な雄二に、勝手に暴走しまくる2人に対して、責任持つ事自体が貧乏くじ確定じゃねえか」

否定しようにもできない秀吉だった。
雄二が明久に責任をなすりつける事は日常茶飯事であり、あの2人も以下同文なのだから。

「まあ雄二が“俺は翔子しかいない、他の女なんてどうでもいい”位の事を言えば、話は別だがな」
「それは雄二だけの解決策ではないか？　雄二にしてみれば人生の崩壊へのプロローグそのものじゃが」
「そうなるように仕向ける為の策なんだから。本当は霧島に事前に話してから始める予定だったが、ついつい感情的になっちまった……俺もまだまだだな」
「……最初から姫路たちを巻き込むつもりじゃったのかの？」
「えっ！？」

呆れる様に言う秀吉に、何を言うのかと言わんばかりに光一は驚いた。

「何故そこまで驚くのじゃ？」
「だってこの手の噂をばらまくのに最適な相手じゃないか。別に困る奴がいる訳でもないし、そもそも噂自体疑える要素がどこにあるんだ？　普段から雄二の言う事はすんなり信じて、俺達はてんで信用しないのに」
「いや、さらりととんでもない事を言うお主の方が“えっ！？”な

のじゃが」
「考えてみろよ。仮に姫路と島田、どっちかになったとして誰が喜ぶんだよ？　大方雄二がぶっこわすためにＦＦＦ団をたき付けた挙句、あの両方をそそのかしてボコる毎日になるに決まってるだろ？」
あっさりと予想できただけに、秀吉は二の句を告げられずにいた。
光一もそれを理解してるので、秀吉の肩をぽんと叩いた。

「ねえ、２人で何話してるの？」
「晩飯のメニュー」
「あっ、また今日も泊まるんだ。兄妹分だけに仲が良いよね、光一と秀吉って」
「待つのじゃ明久、今兄妹といったかの？」

Ａクラス教室にて。

「それにしても、その腕輪つくづく騒ぎを引き起こすわね？　主にＦクラス限定で」
「オカルトが関与してるだけに、呪われてんじゃねえかって位だな。考えてみたらコレ手に入れてから、ろくな事になってない気がする」
覗き騒動にアンチ久遠派と、ここ最近の騒動を思いかえして……
全員が笑えなくなった。

「運が悪いのは元々だけど、コレ手に入れてからは尚更だな」
「ホントに呪われてる気がしてくるね。でも光一の場合、良い事だってあるじゃない？　工藤さんと木下さん」
「そうだけど……って、なんかそれだけでどうでもよくなったな」
「ふぇっ!?　なっ。何言ってるの光一君!?」

「……こういう所があるから、

当の本人2人は、顔を赤くした。

「っと、折角だからここで検証しておくか。Fクラスじゃバカ共がうっとおしいし」

「例のごとく、吉井君と秀吉？」

「いつも一緒だし、この方が俺としてもやりやすいんだよ。そもそも活かす事前提だと適任だし」

「ならば、早速じゃの。アウェイクン！

秀吉がフィールドを展開、科目は英語。

早速召喚し、召喚獣が姿を現した。

「あれ？　オカルト召喚獣？」

「お化け屋敷の準備でも始めてるんじゃないか？　けどこれで融合召喚したら、今度は秀吉の身体が女になったりして？」

「縁起でもない事を言うでない！　こういうことではお主の言う事は良く当たるから怖いのじゃ」

「ああっ、悪い悪い。でも幾ら試験召喚システムといえど、人体に直接の影響与える訳もねえって」

「そうじゃの」

光一の死神、明久のデュラハン、秀吉の猫又が配置につく。

まずは通常通りに。

「クロス！」

うんともすんとも言わない。

なので、死神の巨大ゲンコツで2体を掴みもう1度。

「クロス！」

ゲンコツの中で2体がまじりあい、一旦拳が閉じられる。
そこから放り投げられるかのように、一体の召喚獣が姿を現した。

「まるでキメラみたいだな」

『Ｆクラス　木下秀吉＆吉井明久　英語１２９点＆１１０点』

今回のは秀吉の召喚獣がメインで、猫又は軽鎧を纏い爪は鋼鉄製。
そしてそれらは当然……

「だからどうして女性仕様なのじゃ！？」
「予想は出来たけどな。オカルトの場合、融合召喚すると身体は女になる訳だし」
「しかも代表並にスタイルが良くなるおまけつきだしね」
「……秀吉ったら」

秀吉の召喚獣を見て、優子が少々不機嫌そうにぼやく。

「理不尽過ぎるのじゃ！」
「まあいいだろ。お前の身体が女になる訳じゃないんだから」
「他人事じゃと思うて……」
「ははっ、悪い悪い……ん？」

ふと光一は秀吉を見て、違和感を感じた

「んむ？　どうしたのじゃ光一？」
「いや、なんか違和感が……」

「え？　……言われてみれば、そうだよね？　なんだろ？」
「なんだ？　なんか体つきがいつもより丸く感じると言うか……」
「ひゃっ！　光一、くすぐったいのじゃ」
光一が秀吉の身体を肩に背中と名で始め、秀吉が身体を震わせる。
むにゅっ
「ひゃんっ！」
「……ん？」
ふと、ある個所に触れた時、その違和感がハッキリとわかった。
「……秀吉、ちょっとこい。すまん優子、秀吉を身体検査だ」
「はぁっ？　何言って……って光一、まさか」
「……絶対に違うと思いたいとだけは言える」
数分後
「……光一」
「いや、皆まで言うな。その様子で見当ついた……秀吉の身体が女になってるんだろ？」
「……うん」
「……侮れないな、試験召喚システム」
「それにも頷けるけど、光一って本当はエスパーなんじゃ……」
「バカ言え。そんなこと出来たら今までの苦労は一体何だったんだ？　……とりあえず、あの妖怪の所に行くぞ」
「お願いだから学園長を妖怪って呼ぶのやめて」

一方その頃

「祭りだ祭りだ！　火をたけ火をたけ！！
「「うっほほーいうっほほーいうっほほーいほい！」」
「だーっあちいちちちちち！！　まて、やめろ！！」
「……悪い事を言うのはこの口？」
「まっ、待て翔子！　これはこういがぼっ！！」
「……姫路、島田、雄二は絶対に渡さない」
「ですから、違うんです！」
「もうっ、お願いだから話を聞いてよ！！」

第百二十五問

問題　次の問いに答えなさい

中国語で大熊猫という動物を答えなさい

姫路瑞希の答え

『パンダ』

教師のコメント

正解です、簡単でしたね

久遠光一の答え

『おおくまねこ』

吉井明久の答え

『おおくまねこ』

教師のコメント

直訳するとそうですね

土屋康太の答え

『パンツ』

教師のコメント

書き間違いだと信じても良いですか？」

「うぅっ、こんな体ではお婿に行けないのじゃ」
「何言ってるのさ秀吉。秀吉の場合はお嫁じゃないか」
「……どちらにしても、そうなるしかないのかの？」

落ち込む秀吉を慰める？　明久。
改めて自分が男とは程遠い事に、ショックを受ける秀吉だった。

「もうこの腕輪、本気で呪われてるとしか思えんな」
「あっ、あはは……否定できないかも。あれっ、どうしたの優子？　何だか落ち込んでるけど」
「……どうして代表並のスタイルなのよ？　同じ遺伝子の双子なのに、どうして弟に人気からスタイルまで負けなきゃいけないっていうのよ？」

光一が薄気味悪そうに両手の腕輪を見ながらのつぶやきに、愛子は苦笑いで肯定。
その隣で優子は女性に変異した秀吉のスタイルにショックを受け、ぶつぶつと怨念じみた事を呟いていた。

「ところで光一、どうして学園長室に？」

「決まってるだろ？　多分融合解除すれば元に戻るだろうけど、素人が迂闊なまねして変な事になったら、それこそ大惨事だからだよ」
「あっ、そっか。でもあのババァが当てになるのかな？　そもそも昨日の事があったばかりなのに」
「ならないだろうけど、まあ藁にもすがるって奴だよ。一応開発者様だし、責任押し付ける事位出来るだろ」

「……この2人、学園の最高責任者が誰かって知らないのかな？」
「……こういう事に関しても、息ぴったりの仲良しコンビじゃからのう」
「……もうっ、別の意味で変な事にならないかが心配だわ」

光一と明久が何でもない様にとんでもない内容の会話するのを、傍らの3人は苦笑いで見守っていた。

学園長室にて。

「と、言う訳です。学園長、どうかお力添えをお願いします」
「……何で敬語なんだい？　気色悪い」
「気色悪いって、それはいくらなんでも酷くないですか？」
「やめなって言ってるんだよ！　ほら見なよ、鳥肌が立っただろう！！」
「なんで敬語使っただけで、そこまで言われなきゃならないんだよ！？」

袖をまくり、鳥肌が立った腕を見せる学園長。
釈然としない物を感じつつ、光一はポリポリと頭をかく。

「……で、これはどういう事なんだよ文月妖怪藤堂カヲル？」

「だからと言って堂々と妖怪呼ばわりするんじゃないよ！　全く…
…多分昨日と同じさ。詳しい事は解析しないとわからないが、観察
処分者設定への干渉の影響の所為だよ」
「どっちなんだよ……それより観察処分者設定への干渉の影響って、
人体に影響与えるか普通！？」
「元々が与える設定なんだよ。となると……」
「……やっぱり一日様子見なんだな？」

肯定するように頷く学園長。

「ううっ、何の因果でこんな目に……」
「ごめん秀吉、僕の所為で」
「あっ、いや、そう言う意味で言ったのではなく……」

ひそかに不満を呟いた秀吉に、明久が落ち込む。
それに慌てて弁護すると言う光景を見ながら……

「大丈夫なの光一君？　あのＦクラスがこんなこと黙ってるとは思
えないけど」
「言わんでくれ……ああもう、頭が痛い」
「月並みなことしか言えないけど、頑張ってね光一」
「そう思うんならキスの１つくらいして欲しい」

ちゅっ！　×２

「ほっ、ホントにやるのか！？」
「「やるよ　（わよ）？」」
「……つくづく俺にはもったいなさすぎるほどいい女だよ、お前ら
は」

「いちゃつくなら余所でやりなクソガキ共！！」

それからＦクラスにて事情説明

「神は……神は存在したんだ！！」

当然のごとく、男性陣は万歳三唱を始めながらお祭り騒ぎ。
唯一冷静な雄二は、光一に改めて事情を聴き始める。

「おい光一、いくら観察処分者設定への干渉が原因だからって、ありえないだろ？」
「いや、実際なってるんだからあるんだろ」
「……で、今は様子見か？　昨日の様に」
「ああっ。迂闊に分離させて変な事になったら困るんだ……はぁっ」

もっとも、どうせお前が別の意味で変な事にするんだろうけど
そう静かに光一は呟いた。

「言っとくが、変なことしたら許さんからな。今ならお前にＦＦＦ団けしかけるのは容易なんだよ、Ｇ級異端者こと坂本雄二さんよ」
「誰の所為だと思ってやがんだクソモヤシ！！」
「全部テメエの自業自得だクソゴリラ！！」
「「……（ガンのくれ合い）」」

いつものやり取りでのいつものにらみ合い。
そんな彼らは学園１危険な名物コンビ事“はぐれ武闘派コンビ”

「ちょっと久遠、アンタなんて事してくれるのよ！！」
「これは世界の均衡に関わる許されざる暴挙ですよ！！」

「世界のって随分と大げさな話になってるが、明久の幸福の妨害も大概にしろよ雄二の愛人共」
「「誰が愛人よ（ですか）！？　それにいつウチ（私）達がアキ（明久君）の幸福の妨害をしたっていうのよ（んですか）！！？」」
ブーブー文句言う2人を無視して、ふと時計を見る。
「あっ、次体育だったな。早く着替えていくか」
「そうじゃな。では光一よ、行くとするかの」
「ああっ、わか……ったらだめだ今回は！」
文月学園には秀吉専用の施設が設けられており、秀吉はそこを使用している。
……が、1人は嫌だと言う要望により、彼の兄貴分の光一には使用許可が出されていた。
「何故じゃ！？」
「お前今の状況わかってるか！？」
「何を言っておるのじゃ、昨日姉上と工藤にあんなことしておいて」
「わーっ！　バカよせ！！」
「よーし、総員突撃用意！　久遠光一の首を獲れ！！」
雄二の号令が響き渡り、その周りをＦＦＦ団が取り囲んだ。
痛む頭を押さえながら、渦中である雄二に視線を向ける。
「ところで雄二、さっき秀吉を値踏みするような目で見てたな？」
「見てねごふっ！！」
「連れていけ！」
「「了解です！」」」

雄二の蛮行　＞　光一の蛮行

「秀吉、お前俺を殺そうってのかよ？」
「いや、そう言うつもりでは……それに光一ならば、ＦＦＦ団に後れは取らんじゃろ」
「それもそうだけど、言動には気を付けてくれ。疫病神は姫路に島田でたくさんなんだから」
「すまぬ、今回は１人で着替えるのじゃ」

それからＡクラスと合同の体育にて。

「「「……」」」

Ｆクラス男子生徒はほぼ全員視線を向けており、Ａクラス男子生徒は必死に目をそらそうとしている。
その渦中の秀吉は、何かがわからない様に周りを見回す

「なっ、なんじゃ？　何故皆してワシを見るのじゃ？」
「秀吉、やっぱお前見学しろ。もしくは誰か女子からかなにの下着かりてつけろ」
「何故じゃ！？」
「ごめん秀吉、嬉しくはあるけど目のやり場に困るから、そうしてくれない？」
「頼むから今の自分の状況を自覚してくれ！」

体操服なだけに、秀吉の身体は思いきり目立っていた。
再度頭痛で顔をゆがませる光一は、女子達の方に秀吉を連れていき優子に相談。

「もう……こっち来なさい秀吉、代表に下着借してもらえるよう言ってあげるから」
「いっ、嫌じゃ！　女装はともかく、下着は嫌じゃ！」
「なら着替えて見学してくれ頼むから」
「そうだよ、これじゃ体育に集中できないよ」
「……しっ、仕方ないの」

秀吉は心底疲れてる様子の光一を見て、しぶしぶと了承した。

「テメ、吉井に久遠。何勝手な事抜かしてんだ！！」
「そうだ、俺達はそのままでも文句はないぞ！！」
「というかそのままでいてくれ木下！！」
「ノーブラたまんねえ！！」

そこへ当然の様に、Ｆクラス男子が抗議の声をあげた。
Ａクラス男子は距離をとり、女子は全員が嫌悪の視線を向けるが彼等は気にしない……というか気付かない。

「……浮気は許さない」
「だー待て待て待て！！　俺は見てねえ、何も見てねえ！！」

ちなみに雄二は、チラチラと秀吉の胸元を見てた事を感づかれ、折檻されていた。

「……優子、あのバカ共の掃除頼む」
「嫌よ！　それにアンタじゃあるまいし！」
「いや、女子なら簡単に撃破できると思うぞ？　ちょっと耳貸せ」

そう言ってから、優子に耳打ち。
優子は呆れたように、周りのＡクラス女子に事細かに報告し……。

「ほら、早く着替えて来い秀吉……ってどこ行こうとしてんだ明久？」
「え？　ちょっ、ちょっとトイレに」
「後にしろ。今ヘタに動くと、あのバカ共の二の舞より酷い目に遭うぞ？」

光一が指差した先では、Ａクラスの女子達の罵倒に断末魔をあげながら苦しむＦクラス男子。
そして既にぐったりとしながらも、翔子のアイアンクローの餌食となってる雄二。

「……そうだね。流石に命は大事にしないと」
「だろ？　……それにしても、このまま戻らないなんて事はないよな？」
「え？　どうかしたの？」
「いや、秀吉がどんなになっても俺は秀吉の兄貴分だ。そう思っただけだ」
「？」

光一の言葉に、首を傾げる明久だった。
ちなみにその後、体育の大島教諭が明久と秀吉、光一以外のＦクラス男子が無惨に横たわる姿に驚いた事は割愛。

それからその後の休み時間。

「一時間の授業だけでこうだとは……」

光一は痛む頭を押さえながら、卓袱台に突っ伏していた。

そこへ雄二が、機嫌悪そうに近づいて対面側にどっかと座る。

「まったく、何で明久と秀吉を融合召喚させたんだ？　その所為で酷い目に遭った」

「別に、どう使おうが俺の勝手だろ。そもそも胸がみたいんなら奥さんのにしろよ」

「だっ、誰が翔子の胸なんかに……ってなんだその目は？」

「いや、奥さんって所ですんなり霧島の名前が出て来たなー、なんて」

「なっ！？　バカ言うんじゃねえ、誰が！！」

「……嬉しい」

「なぁっ、翔子！！？」

今のうちにとさっさと逃げ、光一は廊下へ。

そこでふと、ある光景が。

「木下、俺と付き合ってくれ！」

「僕はずっと木下の事を見て来たんだ！」

「お願いします、私は真剣なんです！」

秀吉が女になったという話を聞き付け、今こそはと秀吉に告白する集団。

その中心では、秀吉が困った様に断り続けていた。

「おお光一、良い所に。助けてほしいのじゃ」

「相変わらず、すごい人気だな」

「ワシは男じゃと言うのに……」

「今は女だろ。それなら、受けるのか受けないのかハッキリ言えば良いだろ」

「すまぬが、ワシは今誰かと付き合うと言う気はないのじゃ」

全員がショックを受けた様に、ほぼ同時にうなだれた。

「……いつものこととはいえ、罪悪感を感じるのう」

「しかしお前、はっきりと断る割に明久にはそうでないよな？」

「なっ！　何を言うのじゃ光一！！」

「冗談だよ」

頬を膨らませる秀吉を宥め、教室に入ろうと……

「おおっ、木下秀吉。俺の太陽！」

した所での妙なセリフにずっこけた。

「……何やってんだ常夏の片割れ？」

「常村だ、覚えとけ！」

「ヤダよめんどくさい。で、あの変態親指抜きで何やってる？」

「お前な……この嫌な性格、流石は大神の弟だ」

「おい、今聞き捨てならん事言わなかったか？」

光一は刺す様な視線で問いかけた。

「いや、そんな事はどうでもいい。木下秀吉、俺は……」

「ひっ！」

真剣な顔で秀吉を見つめる常村に秀吉が怯え、光一の後ろに隠れてしまう。

ピキッと常村の頭に青筋が立つ。

「おい久遠、そこどけ」

「俺の弟分……いや、今は妹分か。妹分に何の用だ？」
「お前には関係ない。さっさとどけ」
「テメーこそ秀吉が怖がってるから帰れ」
「テメ、先輩に向かって何だその態度は！？」
「前も言っただろ？　敬って欲しいんならそれ相応の器見せてみろってよ！」
「あぁっ！？」

キーンコーンカーンコーン！

「ちっ……まあ良い。ここは退いてやる」
「二度と来るな」
「誰もテメエに用はねえ！　じゃあな、木下秀吉。俺の太陽」

ウインクをして、常村は去って行った。
光一と秀吉は、吐きそうな顔で教室に入って行く。

「どうしたの光一に秀吉？　何だか体調悪そうだけど」
「いや、ちょっとな……」
「光一……ワシは、ワシは早く元に戻りたいのじゃ」
「いや、戻っても同じだと思うぞ？　……てか俺に抱きついてふるえないで？」

「ところで光一、お前確か明久と秀吉くっつけようとしてなかったか？」
「ああ。他だとろくでもないからな……けど今回の事は何がどう作用したかがわからない以上、明久と秀吉に危害が行くかもしれないから利用する気はない」
「何かがわかったら利用すると？」

「本人たちが嫌がるならやらないさ。こういうのは本人達の気持ちが大事なんだから」
「おい、お前が言う事か？」
「お前が素直になればいいだけだろうが。俺が知るか」
「「……（メンチの斬り合い）」」

第百二十六問

問題　次の問いに答えなさい

ドイツにおいて、少々就任後に他政党や党内外の政敵を弾圧し、指導者原理に基づく党と指導者による独裁指導体制を築いた、独裁者の典型とされる人物を答えなさい。

姫路瑞希の答え
『アドルフ・ヒトラー』

教師のコメント
正解です、有名な人物だから当然ですね。

吉井明久の答え
『坂本雄二（訂正）　アドルフ・ヒトラー』

教師のコメント
訂正した箇所が気になります。

久遠光一の答え
『坂本雄二　根本恭二』

教師のコメント
言いたい事は山ほどありますが、まず1人に絞ってください

Fクラス男子の答え。
『坂本雄二、絶対殺す！！』

教師のコメント
そうですか

Bクラス生徒の答え
『根本恭二』

教師のコメント
否定のしようがどこにもありませんね。

「……それは災難だったね。光一もだけど、秀吉も」
「ううっ……まだ吐き気が治まらぬのじゃ」
「何で俺まで……うぅっ」

常村の精神汚染攻撃のダメージに苦しむ秀吉と光一。
光一は痛む頭を押さえながら、襲い来る悪寒と吐き気に悪戦苦闘。
そして秀吉は未だに怯えながら、光一の腕にしがみつき震えていた。

「けどすごいね、秀吉の人気って」
「俺もビックリしたよ。まさか秀吉が女になったってだけで、こんな騒ぎになるだなんて」
「ワシは男なのじゃが……」
「今は女だろ。これを機に告白して、元に戻ろうなんて気が起きないように……なんて魂胆じゃないか？」

実際秀吉は顔は双子である木下優子と瓜二つで、彼女よりも親しみやすく愛らしい雰囲気を纏っている所為か、姉よりも人気が高い。最も（Ｆクラスを除いて）男だという認識はあったので、一歩踏みとどまっていた。

……のだが、女になった事でそれが取り払われた為の騒動でもある。

「……ここだけの話、数多ある俺の嫌われてる理由の１つに、秀吉から兄貴分として慕われてるからってのもあるんだけどな」
「んむっ？　何か言ったかの？」
「いや、何も。それより秀吉、俺達から離れるなよ？　一部変なことしそうな奴が……」

ふと周囲を見回すと、秀吉に抱きつかれてる腕を見て光一に殺意の視線を向けるＦクラス男子勢。

「……うようよいるんだから」
「久遠光一、キサマ木下秀吉までも手にかけるか？」
「あの変態モヒカンから精神汚染攻撃を受けたんだから、秀吉が怯えて当然だろうが」
「ふむっ、それは最もだ」

うんうん、と周りが頷いた。

「しかしだ、木下秀吉の極限まで高まった恐怖心を利用し、わいせつな行為を働くと言う……」
「つまり秀吉に頼られて羨ましいんだろ？」
「うむっ、その通りだ。だがそれ以上に秀吉に抱きつかれ、そのケシカラン感触を帯びているその右腕をズタズタに斬り裂いたうえで、思いきり踏みつけたい！」
「「踏め踏め！　原型無くなるまで踏みつくせ！！」」

そこでふと、光一は今の自分の状況を整理して見る。
光一の背に覚えながら抱きつく秀吉。
そして今の秀吉は、霧島翔子クラスのスタイルを持つ女の子の身体。
その秀吉が抱きつけば……。

「……柔らかくて心地いい」
「こっ、光一！？」
「「まずはそのふざけた右腕をブチ壊す！！」」

2時間目、化学の授業

「……おや、久遠君ケガをしてますね？　これは珍しい」
「……おーい布施教諭、普通先に大丈夫かどうか聞かないか？」
「まあ良いでしょう。それでは授業を始めます」

その次の休み時間。

「……すまぬの光一」
「いや、良い感触に浸らせてもらったから（いつもの事だから良い）

」

「……建て前と本音が逆に出ておるぞい」

多少のダメージはある物の、立ち直った秀吉はＦＦＦ団の襲撃で珍しく負傷した光一に謝罪。

その際光一は本音を漏らしてしまい、秀吉に呆れられる。

「その……すまん」

「……今夜の泊まりは、光一の腕を振るったごちそうを楽しみにするのじゃ」

「うっ……わかったよ」

既にＦＦＦは駆除してあるとはいえ、現在の秀吉が明久と一緒に泊まりに来る。

そんな事を知ったら、間違いなく復活して襲撃される為に迂闊に知られると面倒にしかならない。

「……なあ明久、今何時間目だっけ？」

「２時間目が終わったから３時間目だよ」

後２時間で昼休み。

……今の苦労が、それ以上にやってくるかもしれない。

「あっ、また来てるよ？」

「木下好きだー！」

「つきあってくれー！」

「お前は俺の太陽なんだー！」

Ｆクラス教室前の廊下では、秀吉狙いの男子生徒の集団。

その中には当然の様に、変態モヒカンの姿が。

「うぅっ……もう嫌じゃ。何故ワシがこんな目に遭わねばならぬ？」
「大丈夫秀吉？　その、僕が代わりに断ってこようか？」
「いや、ワシの事で明久に苦労をかける訳にもいかんのじゃ」

「……やれやれ、こういうのは見ててほのぼの……するってのに面倒がきやがったよあのゴリラめ」

ふと見た先で、雄二が瑞希と美波に何かをふきこんでいて、怒り顔で明久の背後に接近。
まーた変なこと吹きこまれてあっさり雄二の手ゴマになってら、と呆れながら……

「明久、座れ」
「え？　うん」

座ると同時に、明久の頭があった個所を2つの拳が空振り。
明久が風圧に気付いて後ろを向くと……

「ひっ、姫路さんに、美波！？」
「明久君、木下君との距離が近すぎです！」
「木下も卑怯よ！　ウチ等が久遠の所為で濡れ衣着せられてる間に！！」
「……性懲りもなくまた雄二にそそのかされといて、濡れ衣もくそもねーだろ」

瑞希と美波、そしてその後ろでニヤニヤと傍観してる雄二を見て、呆れるように溜息をついた。
それからポケットに手を入れ……

「距離が近いって、僕はただ秀吉が疲れてるみたいだから心配して……」

「いーえウソです！　明久君の事だから、それにかこつけて変な事するに違いないって坂本君が言ってました！」

「だから待つのじゃ！　お主らはそんなじゃから雄二の愛人だと言う噂が……」

「どうやらアキは、全身の骨をへし折ってやらないとわからないようね！！」

「……？　どうしたのじゃ光一、何故助けに入らんのじゃ？」

いつもなら間に入る光一が、チラチラと外を見ていて助ける気配を見せていなかった。

雄二はそれに構う事なく、ニヤニヤと明久が追い詰められていくのを楽しそうに見ている。

「どうやら久遠は反省したらしいわね」

「じゃあ明久君もしっかり反省してくださいね。大丈夫ですよ、大人しくしてればそんな酷い事はしませんから」

「そっ、そんな！　たっ、助けて光一！！」

「よーしやれやれ姫路に島田！　明久をぶちのめせ！」

「わかったわ！」

「わかりました！」

美波と瑞希が、明久を捕まえ腕を振り上げ……

パシャっ！！

「「「え？」」」

突然のシャッター音に瑞希と美波は驚いた。
それを見ていた雄二も、何事かと思い外を見てみる。

「見たな？　聞いたな？」
「ええ、スクープの報告ありがとうございます」

そこには光一と笑顔で話してる、カメラを持った一団。
彼等は文月新聞取材班。

『よーしやれやれ、姫路に島田！　明久をぶちのめせ！』
『わかったわ！』
『わかりました！』

「はいこれ」
「これは有力な証拠です。ありがとうございます」

光一に会釈をして、取材班は帰って行った。
それを見た雄二と瑞希と美波は、即座に光一に詰め寄った。

「ちょっ、ちょっと久遠！　誰よあいつら！？」
「ん？　文月新聞の取材担当」
「取材だと！？　おい光一、まさか今……」
「そのまさかだ。雄二と姫路と島田の信頼関係、たっぷりと見て貰った」
「そんな！」

余談だが、光一は文月新聞での被害防止の為、一度新聞部に乗り込んだ事があった。
その際、この部の取材力は雄二をはめる為にも役立つと思い、友好関係を築きあげることにしたと言う経緯あり。

「俺に構うよりあっちいったらどうだ？　今ならまだ記事にする前だから……」
「そっそうだな！　姫路、島田、追うぞ！」
「はい！」
「わかったわ！」

3人はドアに向かって駆け出し……足を止めた。

「……雄二、その2人との関係を詳しく聞かせて」
「しょっ、翔子！？　何でここに！？　いや、ちょっと待ってくれ。今すぐ新聞部をげふっ！」
「……姫路に島田もこっちに来て」
「待ってください、今はそれどころじゃ……」
「そっ、そうよ！　お願いだから話を聞いて！」
「……うん、聞いてあげるからこっちに来て」

光一が前もって呼び出した翔子により、3人はAクラスへと連行。ドアを閉めて、ふぅっと息を吐くと光一はその場に座り直す。

「ホント仲がいいよね、姫路さん達と雄二」
「光一よ、このままにするのかの？」
「ああっ。全部勝手に噂を助長させたあいつらが悪いんだよ」
「……普通は騙すほうが悪いと思うのじゃが、こればかりは騙される方が悪いとしか思えぬの」
「さて、と。どうせだから憂さ晴らしするか、丁度良い生贄もいる訳だしな」

「木下ー、結婚してくれー！」
「好きだ木下ー！」

「愛してるー！」

そう騒いでる面々を駆除すべく、光一はゴム弾入り拳銃とスタンガンを取り出し……

「「「ギャアアアアあああああああああっ！！」」」
「「「ひゃあああああああああああああっ！！」」」
「「「うぼぁあああああああああああああっ！！」」」

絶叫のオーケストラを奏でる指揮者となった。

所変わって、Ａクラスにて。

「……雄二は私という妻がいると言う自覚が足りなさすぎる。よりにも寄って姫路と島田をたぶらかすなんて」
「妻なんて持ってねえし、誰1人たぶらかしてねえ！！」
「そうです、全部久遠君のでっちあげなんです！」
「そうよ！　全部誤解何だから、話を聞いてお願いだから！」
「……信用できない。さっきの息の合い様は普通じゃなかった」

リクライニングシートに縛り付けられる雄二と、床に正座させられてる瑞希と美波。
その3人の眼前では、まるで雪女の様に冷たいオーラを纏った翔子が3人を睨みつけていた。

「……坂本君、また性懲りもなく光一と吉井君に攻撃仕掛けて返り討ちにあったの？」
「うるさい黙れ！　アイツがのうのうとしてるだなんて、納得できねえんだよ！！」

「代表、亭主がうるさいから黙らせてくれる？」
「誰が誰の亭主だがぼっ！？」

翔子が雄二の口に、作ってきたサンドイッチを押し込んだ。

「さて、次の授業の準備を……」
「「ちょっと待ちなさい（ってください）！」」

予想はしてた物の、無視すると後が面倒の為しぶしぶ振り返る。

「何？」
「どうしてウチ等がここに居るかに疑問持たないのよ！？」
「どうせ坂本君の口八丁に丸めこまれて吉井君を攻撃して、光一にはめられたんでしょ？　そう言う事してるから坂本君の愛人なんて呼ばれるのわかりなさいよ」
「全部久遠君の所為です！！　それに攻撃じゃなくてあれはお仕置きです！！」

優子は何となく、普段から光一が頭痛に悩まされてる理由が実感できた

「引き金は確かに光一だけど、アタシから見ても2人は吉井君に対して、坂本君と共謀して攻撃してる様にしか見えないのよ。そんなでそんな事言われても、言い訳にしか聞こえないわよ？」
「そっ、そんな！」
「光一も悪いとは思うけど、あなた達の場合他の人の話をうのみにしすぎるのよ。その辺りは改めてね、出ないと同じ事の繰り返しだから」
「姫路に島田、だまされごふっ！」
「代表、今坂本君に変な目で見られた気がするんだけど」

「……まだ懲りないの？」

「いつ見ても仲が良いカップルですね」

「やっぱり憧れるよね」

「……2人とも、恋愛を根本から間違ってるからね？」

優子は目をきらめかせながら坂本夫妻を見る2人に、呆れ果てていた。

第百二十七問

問題　次の漢字の読みを答えなさい

?:変態　?:負け犬　?:友情　?:敵　?:恋人

姫路瑞希の答え

?:へんたい　?:まけいぬ　?:ゆうじょう　?:てき　?:こいびと

教師のコメント

正解です、まあ気分転換程度の問題ですね。

久遠光一の答え

?:とこなつコンビ　?:さかもとゆうじ　?:よしいあきひさ　?:さかもとゆうじ　?:こいびと

吉井明久の答え

?:とこなつコンビ　?:さかもとゆうじ　?:くおんこういち　?:さかもとゆうじ　?:こいびと

島田美波の答え

?:よしいあきひさ　?:よしいあきひさ　?:ひめじみずき　?:くおんこういち　?:こいびと

坂本雄二の答え

?:よしいあきひさ　?:よしいあきひさ　?:ゆうじょう　?:くおんこういち　?:こいびと

教師のコメント
誰も君たちの認識を聞いてませんし、何故揃いも揃って5番目だけが正解なのですか

霧島翔子の答え
？へんたい　？まけいぬ　？ゆうじょう　？てき　？ゆうじ

木下優子の答え
？へんたい　？まけいぬ　？ゆうじょう　？さかもとゆうじ　？こういち

工藤愛子の答え
？へんたい　？まけいぬ　？ゆうじょう　？てき　？こういちくん

教師のコメント
こちらは揃いも揃って微笑ましい答えですが、残念ながら点数はあげられません。

木下秀吉の答え
？へんたい　？まけいぬ　？ゆうじょう　？てき　？あき（訂正）
こいびと

教師のコメント
何故か5番目だけ何度も訂正した様な跡があるのがきになります。

「あっ、いらっしゃい光一君。何だか疲れてるね？」
「いや、マジで疲れた」

体育に始まり、休み時間の男子生徒の群れによる告白騒動。
その後の3股ゴリラによる襲撃と、そのあとで秀吉ファンの掃討。

それらで光一は気をはり続けており、その結果くたくただった。

「フンッ、良い気味だ」
「縛られながら何言ってんだおまえは？」
「全部お前の所為だ！！」
「責任なすりつける事前提で、後先考えない作戦ばっか立てるからこうなるんだ。それ位理解しろ負けゴリラ」
「テメ、モヤシ！！」

負け犬の遠吠えと斬り捨ててから、光一は鞄からバナナを取り出し翔子に手渡す。

「霧島、雄二に差し入れだ。アーンでもしてやってくれ。何も入れてないから安心しろ」
「……わかった」
「テメ、光一！　翔子待て、やめもごっ！」

バナナを無理やり口につっこまれ、ガチャガチャと縛ってる鎖をきしませながら暴れる雄二。
それに構う事なく、光一は作ってきた弁当を2人に手渡し昼食の準備を始める。

「ホント、いつ見ても光一と霧島君のいざこざって飽きないわね」
「おい光一の妾、勝手に俺を婿入りさせるな!!」
「霧島雄二がしつこい上にしぶといだけだ。退屈しのぎにはなるが、あまりにも予想通り過ぎてつまらん」
「だから勝手に婿入りさせるな! テメ、絶対ぶち殺すからな!!」
「そんな状態で何ができるかが聞いてみたいね」

ガチャガチャと音を鳴らしながら、雄二が光一に掴みかかろうとせんばかりに鎖をきしませる。
鎖はびくともせず、ただ変わりなく雄二を束縛していた。

「それはそうと光一君、今回はちょっとやり過ぎじゃない? 今回の事で新聞部に知られちゃったわけだし、明日には学園中に広まるでしょ?」
「知るかよ。昨日今日で雄二のバカにしても姫路に島田にしても、性懲りもなくそそのかしそそのかされる事自体、既に同情の余地が一切ない筈だが?」
「……否定はできないね」

愛子も流石に苦笑いで、優子は興味なさそうにそっぽを向いた。

「それより秀吉、どうしてさっきから光一の背に隠れてびくびくしてるのよ?」
「秀吉のファンととある変態による、精神汚染攻撃による恐慌状態だ」

「……なにそれ？」

光一は痛む頭を押さえながら、優子に事の次第を説明。
秀吉ファンの来襲および、常夏の常村によるウインクによる精神汚染攻撃について。
断ってもわんさかと繁殖する様に来るそれを、光一が事あるごとに撃退し続けた事。

「もうっ、光一は秀吉を甘やかし過ぎよ！　それに秀吉も、そうやって光一に頼ってばかりだから、男として見られないのよ！」
「うっ……それは、わかっておるのじゃが」
「落ち着けよ優子、今回は仕方ない部分だってあるだろ？　常夏のモヒカンの方……ってわからんか」

何か優子にもわかる様な特徴を……と考えて、ふとある事を思い出した。

「学園祭の時の営業妨害してた坊主とモヒカンってわかるか？　ついでに召喚大会の時、俺と秀吉の準決勝の相手だったんだが」
「営業妨害に、準決勝……？　ああっ、確か片方が光一のオカルト召喚獣の能力で親指の顔になった人で、メイド喫茶で光一達に撃退されて、頭にブラを付けたまま逃げた2人組が居たわね？」
「そうそう、そのもう片方ってわかるか？」
「えーっと……あっ、うん。感じ悪そうな人だったわね？」

ドドドドドドドドっ！！　ガラッ！！

「見つけたぞ木下秀吉！」
「ひぃっ！」

勢いよくAクラスの戸が開き、息を切らせ目の血走った常村が現れた。
秀吉はその姿と血走った目を見て悲鳴を上げ、光一の背に隠れてしまう

「……もしかして、あれ？」
「そう、あれだ。はいはいよしよし、怖いだろうがもちっと我慢しろ、な？」
「テメ、久遠！　木下の兄貴分だからって、良い気になってんじゃねえぞ！！」

光一が震える秀吉をあやしてるのを見て、常村は激昂。
血走った目に加え、呻り声をあげながら光一に詰め寄る。

「アンタも大概しぶといな」
「この気持ち伝えるまでは、地獄だろうが宇宙の果てだろうがどこまででも行くぜ！」
「……ある意味すげえな。それと近寄るな気色悪い」
「あの、先輩？　ウチの弟が怖がってるんでやめてください！」
「ハズレは引っこんでろ！！　それに久遠、テメエは本当に兄貴そっくりのムカつく野郎だな！！」

ビシッ！　ブチっ！

「誰がハズレ……ひっ！」
「木下、お前を想って俺の気持ちの全てを込めたポエムを書いたんだがふっ！」

光一が抜き打ちでゴムスタン弾入り拳銃を撃ち、常村の鳩尾にあてた。

さらにボストンバッグからスタンガンを6本、指に挟むようにして取り出し、常村に殴る様に当てる。

「テメッ、何しやがひっ、ひゃあああああっ！」

「……優子をバカにしたこともそうだが、俺をあのクソ兄貴と同じだ？　……生きて帰れると思うなよ」

数分後

「……」

光一によりスタンガンおよび武器の餌食となり、痙攣しながら横たわる変態こと常村。

優子をハズレ扱いされた事に加えて兄と同じ扱いをされて、珍しく怒りをあらわにし肩で息をして、くいしばった口元から血が垂れていた。

余談だが、光一の怒りに当てられて大半が腰を抜かし、女子では失神者が出ていた。

「……俺が、兄貴と同じだと？」

「光一、落ち着いて。大丈夫よ、そんな事ないから」

「そうだよ、あんな人が光一君と同じなんてある訳ないよ。ボク達が保証するから、ね？」

優子と愛子が懸命に宥める中で、意識あるＡクラス生徒は“凶王”を恐れ、全員がこう思った

「……久遠の前で、絶対大神白夜の話はするまい」

「成程、“凶王”なんて呼ばれる訳だ」

それなりにケンカ慣れしてる雄二さえ、背筋が冷えた様な感覚を味わっていた。

「……ううっ、もう終わったのかの？」

「……&☆、＊$＃@¥＋％＝～―；：＞＜（うん、もう大丈夫だよ秀吉）」

「まずはお前が落ち着け明久。ここは地球だぞ？」

その傍らでは、震える秀吉に抱きつかれて動揺しまくってる明久に、雄二がツッコミを入れた。

「くうっ……久遠光一よりも、木下秀吉がボクの最大の仇敵という事か？」

「……っ！？」

「どっ、どうしたのじゃ明久？」

「……何か、妙な寒気が」

「おーい明久、これ廊下のゴミ箱に捨てるの手伝ってくれ」

「あっ、了かーい！」

「アタシも行くわ」

力仕事がてんでだめな光一は、明久と一緒に変態を廊下に連れ出して辺りを見回す。

廊下に設置してあるポリバケツを見つけそこまで引っ張り、蓋を開けて放り込む。

それから蓋をして、ガムテープで固定し……。

『変態封印中、開けるべからず

開けた者は“凶王”久遠光一による死刑を執行する　木下優子』

「これで良し」
「これなら誰も開けようとしないよね？」
「さ、行きましょ。早く手を消毒しないと」

それからAクラスにて昼食。
秀吉は食が進まず、明久に宥められながら。

「お前本当に兄貴を嫌ってるんだな？　普段滅多に怒らないお前が一気にキレるなんて」
「大嫌いだよ、お前よりもな」
「……もしかして、雄二と仲が悪いのは雄二がお兄さんと並び称された神童だから？」

そこでしんと静まった。

「心配せんでも雄二は雄二、兄貴は兄貴で嫌いだよ」
「どっち道雄二の事は嫌いなんだね？」
「当たり前だろ。こんな嫌がらせばっかしてくる3股ゴリラモドキ、嫌い以外の何物でもない」
「俺もテメエが大嫌いだよ！」

光一の淡々とした言葉に、雄二が声を荒げながらそう返した。

「そうだな、お前が好きなのは霧島と姫路と島田だからな」
「……浮気は許さない」
「だからお前も光一にそそのかされギャアアアっ！！」

雄二がアイアンクローの餌食となる傍らで、光一がある事を思い出しバッグを探り始める。
ふと雄二は、ある作戦を思いついた……が。

「そうだ霧島、頼まれてた水族館のペアチケット手に入ったから、雄二と行ってきな」
「……いつもいつもありがとう」
「言っとくが雄二、俺と同じことをやっても無駄だからな？　俺とお前、霧島に姫路達じゃ行動基準が違うから」
「くそおっ！！」

即座に不可能となった。

「……久遠は怒ったときとそうでない時の差が激しい」
「ん？　まあそうかもな。俺は知っての通り天性の嫌われ者だから、こういう風に普通に接してくれるヤツって、今まで秀吉と優子しかいなかったから」
「じゃが今は違うからの。明久をはじめとして、工藤に霧島と普通に接する者が増えた所為か、光一も感情や表情が豊かになったのじゃ。ワシとしても嬉しいぞい」
「そうね、アタシも感謝してるわ」
「何言ってるのさ、友達なんだから感謝したりされたりが当たり前じゃない。雄二じゃあるまいし、見返りなんて求めやしないよ」
「おいこら明久！　何勝手に悪い例にしてやがる！？」

Aクラスからの帰り。

「光一よ、姫路たちの事じゃが……」
「ん？　全部あいつらのしでかした事が原因だろ。まあ反省したら

助けてはやるがな」
「未だに本当の意味で見捨てんのは何故じゃ？　姉上でさえ、一回で斬り捨てたと言うのに」
「俺の事だから、だよ。俺に関しての事だったら、やった事で被害を受けるのは全部俺だからだ」
秀吉は光一を理解はしていた。

光一は基本、自衛の為にやった事でも周りからはそうは思われない。けど自分がやった事なら後悔はしないし、どう思われようと構わない、という考えも。

「けど考えてみたら、俺も明久に干渉しすぎた印象があるからな……今までは余裕なくて、明久には秀吉がぴったりだって考えが固定してたから、ついつい強引になったけど」
「その辺りは姉上と工藤のおかげじゃな」
「……まあそれはそれとして、結局それだとアイツ等と同じだって気付いた時には自己嫌悪した」
「気付けるだけでも違うとは思うがの」

今日の事を省みる限りは、そう思わざるを得ない秀吉だった。
そこで、光一はふとある気配を感じ取り……口元を軽くゆがめた。

「という訳で、俺は明久の決定を応援する事及び、理不尽な扱いに助け船を出す……その程度に抑えることにした。まあ雄二のバカには適用はしないが」
「雄二ならば、それを利用して良からぬ事を企みそうじゃからの」
「俺も方向性が違うとはいえ、姫路と島田の気持ちだけは認めてはやってるからな。それさえなけりゃ、今頃はそれなりの関係にしてやってたのにな」

「けれど光一よ、それならば今からでも方向性さえ正せば応援はすると？」
「当然。俺の事だったらすぐに切り離しはするけど、明久の事を勝手に決めるのはこれっきりにしたいんでね」
「やはり光一も変わったの」
「友達の為だからな」

ちらりとある方向に目を向けて、光一は何事もなかったかのようにＦクラスに戻って行った。

「……美波ちゃん」
「だっ、騙されちゃだめよ瑞希。あいつの所為でウチ等がどんな目に遭ったか、忘れたの？」
「でも、最初は久遠君も応援してくれたんですよ？　それに優子ちゃんだって……」
「……信用できる訳ないじゃない。だってアイツはウチ等をはめたのよ？　それに、だって、その」

第百二十八問

問題　次の問いに答えなさい

飛鳥時代において推古天皇のもと、蘇我馬子と協調して政治を行った摂政の名を答えなさい。

姫路瑞希の答え
『聖徳太子』

吉井明久の答え
『厩戸皇子』

教師のコメント
正解です、流石姫路さんです。
そして吉井君も、厩戸と書けた事も驚きですが、最近のテストの答えはとても嬉しいです

久遠光一の答え
『イエス・キリスト』

教師のコメント
確かに生まれに関する逸話は同じかも知れませんが、日本史と世界史をごっちゃにしないでください。

土屋康太の答え

『厠戸皇子』

教師のコメント
君は偉大なる先人に謝罪をするべきです。
しかし、君がよく厠なんて書けましたね。

光一による常村制裁による影響か、５時間目の終わりでは誰一人として近寄る事はなかった。
それでもＦクラスはそんな事知らんとばかりに、秀吉にアプローチしていたが。
それだけなら秀吉もいつものことなので、気楽にのらりくらりとかわしていた。

「平和だな」
「平和だね」
「なんだ、つまらんな……」
「ヒマなら女房の所に行け」
「俺は独身だ！」

その傍らで光一と明久は平和を満喫し、雄二は光一と明久をはめる作戦を考えつつ茶化す。

「折角の平和な時間を邪魔するな」
「お前らの平穏は俺にとっては不快なんだ」
「俺はお前が野放しなのが不快だ。首輪でも付けるかオリにでも入ってろ」
「「……（ガンのくれ合い）」」

何かと騒動が絶えない日常の中での要約の平穏を邪魔され、光一はやや不機嫌。
相手がそれを見て楽しんで居た雄二だけに、不機嫌さも9割増し。

「……それよりも姫路達の件、よくもここまでの面倒にしてくれやがったな！」
「お前らが勝手に助長させたんだろうが、俺が知るか」
「お前には責任感はないのか！？　元はと言えばお前がでたらめ言いふらしたんだろうが！！」
「責任についてお前にだけは言われたくねえ！！　大体説得力を持たせたのは全部お前らだろうが！！」
「「……（メンチの斬り合い）」」

「ねえ秀吉。今日の泊まりだけど、何か食べたいものある？」
「んむっ？　今日は明久も腕を振るうのかの？」
「うん。パエリア以外にも腕をふるいたくてね」

明久はついていけなくなったのか、光一と雄二に極力目を向けず秀吉と会話し始めた。
2人はそれに構う事なく、未だにメンチを斬り合い続けていた。

「そんなに3股ゴリラって呼ばれ方が嫌なら、“俺には翔子しかいないんだ”つって、霧島を抱きしめてキスでもすれば万事解決じゃ

ねえか」
「お前はどうしてそんな手しか考えられないんだ!?」
「お前が性懲りもなく適当な良い訳付けて逃げ出すからだよ。絶対に逃げられなくもすれば、ハッキリ拒絶するか受け入れるか、どちらかしかなくなるからな」
「何の権利があってそんなことしやがる!?」
雄二が光一の胸ぐらをつかみ、そのままつかみ上げ壁にたたき付けた。
そのまま腕を振り上げ、光一の顔面めがけて振り下ろされたその拳は……
「……少し位ビビれよ」
「威嚇を見抜けなくて、過激派筆頭が名乗れるかよ」
「今更ながら、ダテじゃねえのな」
鼻先寸前で止まっていた。
振りあげられてからずっと平常心を崩していない光一に、雄二は逆に動揺する。
「権利があるなんて思っちゃいねえよ。俺はただ、友達の幸せを願ってやってるんだ」
「……確かに翔子はお前を差別しないヤツだから、わからんでもないがな」
「それに前にも言っただろ？　本気で嫌なら、ハッキリと拒絶するぐらいやって見せろよ。そしたらやめてやるし、霧島だって距離をとるっていうのに。それが出来ないのはどうしてだ?」
「……何でそれをお前に言わなきゃならねえんだよ?」
「誰も俺に言えとは言ってないだろ？　それに聞くべきは本人だし、そんな野暮するか」

未だに胸ぐらをつかまれ、いつでも雄二が攻撃できると言うのに光一は平常心を崩さない。
寧ろ雄二が、少しずつ崩れ始めていた。

「……2学期の試験召喚戦争で勝てば、そんな必要もなくなる」
「往生際が悪いな……まあ同意した以上は、手抜きは一切なしでやってやるが」
「その言葉を忘れるなよ？」
「条件満たしてたらな」
「そうか……それじゃあ話は終わりにして」

光一が呆れる様にため息をついて機を抜くのを見た雄二が、にやりと笑みを浮かべて拳を振り上げた。

「積りに積もった雪辱を今こそ返してやる！」
「……何度も言うようだけど、お前本当に俺の予想を裏切らないな」
「へっ！　武器を持ったお前は確かに脅威だが、今の捕まえた状態なら……」

ガッ！　（光一が雄二の肘と手首を持つ音）
グギッ！！　（足で反動を付けて光一が思いきり体をひねり、雄二の肘関節を極める音）
バッ！　（雄二の手が緩み、解放された光一が距離をとった音）

「ぐあっ！！」
「捕まえた状態なら……なんだって？」
「テメッ、肉弾戦ダメじゃなかったのか！？」
「苦手なのは事実だけど、全くできないとは言ってないが？」

関節技はてこの原理を用いた技が多い為、光一にも使う事が出来る。
ましてや物理は光一の最得意分野である為、最も効果が出る動きは容易く見抜ける。

「もっとも、鉄人相手じゃこうはいかないがな」
「だろうな。あの野郎にゃ関節狙いといえど、勢い付けてもお前の体重程度でどうにかなるとは思えん」
「という訳で、終わりだ。お前も流石にこれ以上やる気はないだろ？　意味がない」

痛む肘を押さえながら、雄二がしぶしぶ

「姫路と島田はどうする気だ？」
「俺も散々アイツ等には迷惑させられたんだ、しばらく反省させる」
「その辺り容赦ないな」
「何他人事のように言ってるんだか」
「誰の所為だ！？」
「お前がアイツ等を煽る所為だ」

そして学園長室にて

「では、調査結果をお願いします。学園長」
「やめなクソガキ！！」

嫌味を込めた敬語に、学園長は心からの拒絶で返した。
そんな始まりを経て、結果報告。

「やっぱり融合媒介によるデータ干渉が、観察処分者設定に妙な影

響を与えた結果の様だね」
「それだけで体にまで影響が出るんですか？」
「いや、それだけじゃないとは思うが、特に妙なデータは見つかってないんだよ。それを詳しく調べようと思ったら……」
「わかりました。では明久と秀吉を離さないように、今日も俺の家で、ですね？」
「やめなっていってるんだよモヤシのクソジャリ！」

今回は特に被害が多かった為、光一も嫌がらせを込めて敬語で接する。
当然の様に学園長は嫌悪感をあらわにし、手には鳥肌が立っていた。

「……ねえ秀吉、アンタもしかして女になりたかったとか？」
「なっ！　何を言うのじゃ姉上、ワシは男じゃぞ！？」
「別にそこまで言ってないでしょ？　ただ、そういう願望があったのって聞いてるだけよ」
「……そんなこと、ないのじゃ」
「そう？」

優子は以前から気になっており、今回で確信じみた物を感じていただけに聞いてみた。
……が、秀吉は認めない。

「……それならそうで、デートでもさせてやれるんだがね」
「？　学園長にしては珍しいですね」
「アンタアタシを殺す気さね！？」
「……わかった。それはどういう事だ？」
「アンタ達核弾頭トリオで、女がらみの妙な噂がないのは吉井位だろ？　アンタという前例があるんだから、根がお人よしの吉井なら彼女でも出来れば、少しは大人しくなるだろうって期待があるさね」

過激派筆頭が大人しくなってるだけに、否定出来ない前例である。
光一は頬を赤くしながらポリポリと頬をかき、顔をそむける。

「あの、秀吉は男なんですけど？」
「そのガキが男とみられてるのかい？」
「「「……」」」
「何故無言になる上に顔をそむけるのじゃ！？」
「否定、出来ないわね……」
「姉上まで！？」

光一、明久、愛子は揃って顔をそむけ、優子も流石に肯定の意を表した。
秀吉は完全に男として見られてない事に、すっかり傷ついてしまった。

「悪かったよ秀吉……で、明日には何とかなるんだな？」
「恐らく、だがね。何せ原因がわからないことには……」
「こういう時の為の開発者だろ、しっかりしてほしいね」
「どこぞのバカ共が問題起こさなきゃ、そっちに集中できたさね！！」
「それじゃ、帰るか」
「失礼しました！」
「本当に失礼だよアンタ達は！！」

光一と明久が逃げるように出ていき、愛子達もそれを追って去って行った。

「まったく……」

1人残った学園長は、再度調査に取り掛かった。

帰り道

明久の家へ荷物をとりに行って、皆でお買いもの。

「さて、今日は腕ふるうか」

「手伝うよ光一」

「じゃあ折角だし、料理勝負と行くか？　どっちの腕が上かってね」

「あっ、良いね。何だか面白そう」

光一は勝負事が好きであり、明久は光一と競える事に嬉しさを隠しきれない様子での肯定。

特に召喚大会での事もある上に、互いに得意な料理での勝負。

……2人とも勝つ気は満々だった。

「じゃあメニューは、そうだな……」

「光一コロッケ好きでしょ？　だったらそれで行こうよ」

「おっ、俺にコロッケで挑むか？　良いだろう」

光一と明久は二手にわかれて、材料の吟味。

「吉井君と光一の料理勝負ね……何だか楽しみだわ」

「うん。2人して料理上手だから、すごく楽しみ」

「うむっ。特に光一は勝負事を好むから、これはやる気になっておるの。楽しみじゃ」

それを見た優子と愛子、秀吉は今夜の食事は豪勢だと信じて疑わな

かった。

第百二十九問

問題　次の４字熟語の意味を答えなさい

『猪突猛進』

姫路瑞希の答え

『頑固な人が、向こう見ず事を進めること』

教師のコメント

正解です、あまり良い意味でつかわれる事はない単語ですね。

久遠光一の答え

『文月学園の女子（優子と愛子除く）』

教師のコメント

そういう事ばかり言っているから嫌われているんだと理解してください

吉井明久の答え

『坂本雄二』

坂本雄二の答え

『吉井明久』

教師のコメント

君たちを見ているとそうだといえます。

木下優子の答え
『2年Fクラスの異端審問会』

教師のコメント
最近どうも久遠君じみた回答が目立つようになりましたね。

コロッケとは。
ゆでたジャガイモを潰して、俵型や小判形に丸めて、小麦粉に卵、パン粉をまぶして、油で揚げるという、家庭料理でもポピュラーなメニューであり、精肉店でも惣菜として売られている。

「しかしそのじゃがいもに具材を混ぜることや、じゃがいものかわりにカボチャやさつまいもで作るなど、さまざまなバリエーションが存在する。たとえば……」
「……アンタいきなり何言いだすのよ？」
「いや、何となく」

光一と明久は買った材料を手に（光一は秀吉に半分持って貰って）

前回の様に愛子も優子の家に泊まるという設定で、遊びに来ることが決定。

「すっかりこの5人が定着しちゃったね、ボク達」
「まあ、アタシ達の関係が特殊って言うのもあるけど、光一達も仲良し3人組だからね」
「姫路に島田もバカだね。雄二のバカに騙されてなきゃ、今頃この輪に入ってた物を」
「？　光一、何か言った？」
「明久よ、お主は気にする必要ないと思うぞい」

そして今は談笑しながらの帰りである。

「でもあの噂、ちょっとかわいそうじゃない？」
「そうか？　あのゴリラにそそのかされる事自体まずおかしな話だし、そもそも覗き騒動の事全然反省してない訳だから、全部アイツ等の自業自得だろ」
「そうかもしれないけど……」
「良いじゃない愛子、今日も性懲りもなくそそのかされたんだから、同情の余地なんかない筈よ」

言い捨てる様な優子に、愛子は苦笑いに。

「……優子って、最近瑞希ちゃんや美波ちゃんに厳しくない？」
「認めたくはないけど、同族嫌悪じゃないかな？　ちょっと前まで同類だったから……」
「罪悪感はあったんだろ？　それの有無が大きな違いだと思うが」
「……ありがと光一」

心底嬉しいと言わんばかりに、光一の手を握って感謝の意を示した。

「木下さん、どうしたのかな？」
「恐らく明久が気にする事ではないのじゃ」

それから光一の家にて。
光一の家の台所はそんなに広い訳ではないので、明久は秀吉の手伝いで木下家の台所で調理する事に。
ちなみに優子も付き添いで木下家に戻っており、愛子は1人光一の家に来ていて光一の手伝い。

「優子には悪いけど、たまには独り占めもしたくなっちゃうよね」
「……ま、悪くないな」

……という名目で、料理の手を止めた光一の背に抱き付いていた。

「後はあげるだけだから、時間に気をつけさえすれば大丈夫だけど」
「だったらちょっと甘い時間を満喫しない？」
「そうだな。あのバカ共の所為で頭痛い日々が続いたから、こういう時間があるっていうのは救いになる」

愛子の手に軽く手を添えて一旦はなして貰い、光一は正面向いて愛子を抱きしめた。

「やっぱり光一君、細いよね」
「……せめて第一声で言わないでくれ」
「あっ、ごめん」

……が、いきなりムードもへったくれもなかった。

「でも不思議だよね、こんなに細いのにあんなに強いから」
「武器があれば、の話だよ。俺は兄貴みたいなずばぬけた才能はないけど、こういう才能はあるらしいから」
「じゃあ光一君だって立派な天才じゃない」
「俺の場合は極端なだけだよ。出来る事は人一倍出来て、出来ない事だと人一倍出来ないってね」

実際光一は、身体能力は最低ランクではあるが感覚機能などは優れている。
勉強でも出来る科目はトップクラスで、出来ない科目は学園最低クラス。
そして……

「秀吉に言われたけど、頼りになる能力は持ってるのにどういう訳か人に嫌われる所……とか」
「じゃあボクと優子が頼りにしてあげるよ。これからもずっとね」
「……ありが、とう」

今まで言われた事のない言葉に、光一は軽く動揺する。
愛子はつくづく褒められる事に慣れてないんだなと、少し納得しつつも悲しく思った。

「あれ？　そう言えば坂本君の事だけど、放っておいていいの？」
「雄二？」
「うん。木下君が女の子になってるのに光一君の家で泊まりでしょ？」

ずくなくとも、雄二が黙って居る訳がない状況である。

「それに関しては問題ねえよ。今頃姫路に島田を加えて、３人仲良

く（リアル）鬼ごっこしてる所だろ」
「……そうだね、光一君が見逃す訳ないよね」

一方その頃

「……雄二、島田と逃避行なんて許さない！」
「お姉さまぁぁあああああああ！！　今すぐミハルガその類人猿から救い出死て差死上げますわぁぁぁあああああああああああ！！」
「待て翔子、早まるな！　全部あの野郎の罠だ！！」
「美春も聞いてよ！　全部久遠が仕掛けた罠なの！！」

光一の予想通り、光一の家に襲撃を仕掛けようとした雄二と美波は……
翔子と人外化した美春に追い回されていた。

「くそっ、光一の野郎！　既に先手うってやがったとは……」
「やっぱり久遠はウチの敵よ！」
「ん？　島田、姫路はどうしたんだ！？」
「瑞希？　今日は気分悪いからってさっさと帰っちゃったわ」
「何！？　どういう事だ。明久がらみで体調を理由に断るだなんてありえないだろ！？」
「そうだけど……」

ザザッ！

「G級異端者坂本雄二の首を獲れ！」
「「「御意！」」」
「なあっ！？　異端審問会まで！？」

「もうっ、邪魔しないで！　こうしてる間にもアキ達に変な事が起きてるかもしれないのに！」

姫路瑞希がその場に居ない事。
それだけが、光一の予測で唯一外れていた。

場所は戻り、光一の家。

「たまには先制攻撃も悪くはないな」
「……光一君って出来る事だと、やっぱりあの人と兄弟なんだなって思っちゃうよ」

愛子は一度、大神白夜の能力について調べてみた事があった。
現2学年首席を上回る成績に、完全実力主義を通り越し力の狂信者でもある為に、身体能力も高い。
実際に彼の入学時には体育、文化の両方の部からスカウトが殺到したが、悉く拒否されていた。
少なくともあらゆる分野で彼の敗北など、あの騒動での光一による物しか見当たらなかった。

でもあの時相対した時の印象は……。

「でもやっぱり、光一君はあんな人とは違うよね」
「？　何が？」
「ううん。何でも」
「そう？　んじゃ……」

愛子の頬に手を添えて、ゆっくりと顔を近づけ始める。
愛子も何をするのかを理解し、そっと目を閉じ……

ピピピピピっ！

「「っ！？」」

そこで置いてあったキッチンタイマーがなり、光一は慌てて愛子から離れてタイマーと火を止めた。

「あぶねえ、ギリギリだった」

「……あらゆる意味でね」

「でもこれで邪魔は……」

ピンポーン！

「……仕方ない、また次の機会」

ちゅっ！

「……っ！？」

「なんて事はないからね？」

「いや、俺からやりたかったんだよ！」

「こっち方面じゃ、ボクの勝ちだね。もう時間切れだけど」

「……しかたない、じゃあ優子の方に期待をかけるか」

「それずるいよ！」

それから夕食。

料理勝負という事で、光一と明久両名別に分けられた皿が並べられる。

審査員は秀吉に優子、愛子の３名。

「俺のは具材にコーンと肉を混ぜたミートコロッケだ」
「僕のはカニクリームコロッケだよ」

並べられた皿には、出来たてのコロッケが並んでいる。

「光一のもそうだけど、吉井君のも見るからに美味しそうね」
「うむっ。流石は明久に光一じゃの」
「料理が上手な人って良いよね」

それぞれ今日は運がいいな、と思いつつまずは光一の皿のコロッケを一口。

「ホント絶品ね」
「うむっ、いつもの事ながら良い腕じゃ」
「美味しい。これなら毎日でも食べたいよ」

と、順当に好評を貰う事に成功。
明久も流石は光一、と感心しつつも自分の皿に手を伸ばす3人に緊張した面持ちを向ける。

「あっ、これもおいしい。光一のと甲乙つけがたいわね」
「そうじゃの。これは判断に悩みそうじゃ」
「うんっ。本当にどっちもおいしくて、どっちがなんて比べられないよ」

審査員3名が大いに悩み、誰もが甲乙つけがたいと口をそろえる。
それを見て光一と明久は、それぞれの作ったコロッケに手を伸ばす。

「……確かに美味いな」

「……うん」

光一と明久まで、判断に困り始めた。

「なら引き分けね」

「うむっ。上下の判断が出来ぬのなら、それが妥当じゃろうの」

「そうだね。ごちそうさま、美味しかった」

「「……ぷっ！　それもいいな（ね）」」

「……雄二、いい加減止まって。今なら一緒にお風呂に入るだけで許してあげる」

「お姉さまあああああ嗚呼アア嗚呼アアああ嗚呼嗚アア嗚呼ああ！！」

「坂本を殺せええ！！」

「「ガンホー！　ガンホー！　ガンホー！」」

「くそおっ！　光一、絶対殺す！！」

「久遠、覚えてなさいよ！　この仕打ち絶対返してやるんだからね！！」

「？　どうしたの光一？」

「いや、なんか忘れてる様な気がして……でもなんかどうでもいい様な」

「どうでもいい事なら良いんじゃない？　それより吉井君と光一のコロッケ、冷める前に食べないと」

「それもそうだな」

第百三十問（前書き）

今回のバカテストは、グラムサイト2さんの提案を採用させていただきました。
この場を借りてお礼を申し上げます。

第百三十問

問題　動揺の“鯉のぼりの歌”で、母親が出てこないのは何故かを答えなさい。

姫路瑞希の答え
『お酒を飲んで居るから』

教師のコメント
正解です。昔5月5日は年に一度のお母さん達の休みの日だから、家でお酒を飲んで居ると言われてたそうです。

久遠光一の答え
『仕事に出てるから』

教師のコメント
君の家は確か離婚していて、母親が現在仕事に出てるんでしたね？

吉井明久の答え
『立場が高い者として家でのんびりしてるから』

教師のコメント
君の家庭では父親と母親の間柄はどんなものなのですか？

坂本雄二の答え
『エアパッキンを潰してるから』

教師のコメント
何故そうなるのですか？

夕食後

「そう言えば光一よ、ムッツリーニとあの先輩はどうなっておるのじゃ？」
「ん？　別に島津先輩からは変な話聞いてないし、順調なんじゃないか？」
「島津先輩？　ねえ光一、何の話？」
「ムッツリーニ君、あれから静かだったけどその人と何か関係あるの？」

そう言えば2人は知らなかったな、と光一は頷いた。
実際ムッツリーニに紹介した時、付き添ったのは明久と秀吉だけ。

「簡単に言うと、ムッツリーニにサバイバルゲーム同好会の先輩を紹介したんだよ。ちなみに部長」
「そうなんだ。でも大丈夫なの？　あの何とか団の一員で、しかも女子の間じゃ評判が悪いムッツリーニって彼の事なんでしょ？」

「大丈夫だ。その辺り理解あると言うか、無頓着な人だから。保健体育だって得意だしな」
「……何その愛子みたいな人？」
「……優子にとってボクって、そういう印象なんだ？」
「そっ、そう言う訳じゃ……その、ごめん」

失礼な、と言わんばかりに優子にジト目を向ける愛子。
居心地悪そうに縮こまる優子に、助け船を出す事にした光一は……

「んで、その島津先輩から聞いた話だけど……」

とある日の放課後。

「んー……まいどあり」
「……毎度」

放課後のムッツリ商会。
盗撮写真およびグッズを売る男、寡黙なる性職者事ムッツリーニ。
そして……

「それにしても、やっぱりムッツリ商会はすごいねー。まさか女子まで買いに来るなんて」
「……当然のこと」

最近光一に紹介され、一緒に居る事が多くなった3年の女子島津さやか。
分厚いビン底眼鏡がトレードマークの彼女は、いつも通り淡々とした調子で売り上げを見ていた。

「でもムッツリ君、今までよく捕まらなかったね？」
「……？」
「わかってないって顔してるけど、これれっきとした犯罪だよ？その辺りちゃんとわきまえようね？」

心底わかってない顔で、疑問符を浮かべ続けていた。
さやかが呆れたように溜息をつくと、少し離れて参考書を取り出し読み始めた。

「……夫婦経営？」
「らしいな。ムッツリ商会、最近羽振りがいいらしいから」
「何で注意を受けないの？　扱ってる物が犯罪なのに」
「……（以前ムッツリ商会で女装した明久の写真買ったくせに）」
「何か言った？」
「いや、何も。後は……」

そして営業時間後。

「……バイト料」
「あっ、どうも」

ムッツリーニが売上を計算し終え、さやかに本日分を渡す。

「それじゃ……」
「……！！？（ブシャアアアアッ！！）」

さやかが制服に手をかけ、お腹を露わにすると同時にムッツリーニが鼻血を吹き倒れた。

彼女はどちらかというと羞恥心が薄く、着替えに出くわした事は1度や2度ではなかった。

「よいしょっと。はいムッツリ君、今日はナースで……ってあれ？」

「……（ドクドク）」

着替え終わったさやかの前には、鼻血を出して横たわるムッツリーニ。

「また？　もう、しょうがないね。それじゃ手当てを」

「……！！？（ブシャアアアアアアアアアアッ！！！）」

頭を抱きかかえるようにして、鼻にティッシュを詰めようとして……胸が顔に当たる体勢だった為、鼻血の勢いが増した。

「……そのあと輸血して事なき得たらしいがな」

「なんてうらや……じゃなくて、危なっかしい」

「無理もないとは思うがな。あの人霧島の一歩前位にスタイルが良いから」

「となると……今の秀吉に抱えられたのと同じ位？」

「そうなるな。俺としては優子と愛子にやって貰った方が嬉しいけど」

「そうだね、そう言うのって好きな人の方が嬉しさも桁が違うよね」

「「……（／／／）」」

「光一は意外とたらしの才能がある様じゃの」

「何だよいきなり、失礼だな！」

顔を赤くしてる2人を見て、秀吉が呆れる様に呟いた。

当然光一には聞こえており、心外だと抗議した。

「という訳で人知れず仲良くはやってるらしい」

「？　人知れず？」

「ああっ。ＦＦＦ団の情報は全部ムッツリーニ任せだから、アイツが異端者だった場合密告者でも居ない限りはバレやしねえ」

「それずるくない！？　ムッツリーニだけ、すぐばれる心配がまずないってことでしょ！？」

何かとＦＦＦ団の被害に遭ってる明久にしてみれば、不愉快この上ない情報だった。

それ以上にＦＦＦ団に悩まされてる光一も同様だったが……。

「心配するな。俺達が知ってる」

「あっ、そうだったね。それじゃ早速……」

「待て明久、こういうのは焦ったらダメだ。まずは機を見て、それから活かすに最善の時を待つんだよ」

「そっか、いざって時の取引材料だね？　何かリークされた時とか、攻撃を加えて来たりした時とか」

「明久よ、何故こういうときだけ頭の回転速いのじゃ！？」

「……流石は光一が相棒と認めた人ね」

変な所で明久と光一は良いコンビだと納得した優子だった。

「まあそれはそれとして、そろそろ風呂にでも入るか」

「そうじゃの。では光一よ、いつもの様に」

「一緒に入らんからな！？」

光一は秀吉をキチンと男とみなしている数少ない人物である。

それだけに普段は（疲れるけど）、一緒に着替えたり風呂に入った

りなどもする。

更に言うと、学園に設置されてる秀吉専用の施設においては、秀吉の懇願により光一には使用許可が出ていた

「何故じゃ！？」

「お前今の状況わかってないのか！？」

「あっ……」

そう、今秀吉の身体は男ではなく、女性なのである。

「うぅっ……男子と一緒に着替えるのはダメだと言われる中で、光一と裸の付き合いだけが救いじゃと言うのに」

「……実はそれも俺が嫌われてる要因の１つなんだがな」

「んむっ？　何か言ったかの光一？」

「いや、何でも……」

確かに秀吉の気持ちもわからんでもないが、こればかりは受け入れる訳にはいかない。

何とか……という所で、明久を見て閃いた。

「そんなに一緒に入りたいんなら、明久とでも入ればいいだろ？」

「ええっ！　何言ってるのさ光一！？」

「バレた時の責任は俺がとるから頼む」

「もうっ、秀吉！　子供じゃないんだから、そうやって女々しく光一に甘えたり迷惑かけたりしないの！」

「うぅっ……仕方がないの、今回ばかりは諦めるのじゃ」

優子の鶴の一声もそうだが、光一の今にも土下座でもしそうな勢いには、秀吉も流石に何も言えなくなった。

それを見た優子は、ふとある事に気付く。

「でも光一じゃなくて吉井君だったら、もっと嬉しいんじゃないの？」

「うむっ、まあ……って、何を言い出すのじゃ姉上！？」

「アンタが女になった原因だけど、吉井君かアタシ達に光一とられた寂しさかもしれないって、アタシは踏んでるんだけど？」

「っ！？　そっ、そんなことないのじゃ。明久の事は友人で、光一は大事な兄貴分じゃぞ？　そもそも光一にはもう凶王や過激派筆頭としてではなく、今の様に普通……とは言えぬが、幸せな時間を過ごしてほしいと願っておるぞい」

「……そう？」

釈然としないまでも、優子は断念した。

大体女になった処で、風呂や着替えみたいに今までに出来た事が出来なくなったりと、逆に不自由が多い。

やっぱり光一じゃなくて、吉井君からみか……でも光一に関してなら。

「今はどうともいえないだろ？　あの妖怪がそういう結論出した訳でもあるまいし」

「それはそうだけど……」

「でも言われてみれば、今までと比べると秀吉ないがしろにしてたのも事実か。わるかったな」

「いっ、いや。光一が気にする事ではないぞい。ワシもいい加減光一に頼り切りではなく、助ける側になりたいと思っておるのじゃ」

「じゃあ期待させて貰うか。それじゃ先に入らせてもらうぞ？」

そう言って光一が部屋から出ていくと、愛子と優子は木下家へと戻る準備。

愛子が風呂に乱入しようといいだしたが、優子が疲れ切ってるんだから今日はそっとしようと言う進言で、愛子はしぶしぶ断念した。

「もうっ、たまにはいいと思うのにな」
「ダメよ、吉井君や秀吉が居るんだから！」
「はーい」

2人が去り、明久と秀吉は……

「えーっと……オセロでもやる？」
「そっ、そうじゃの」

光一が風呂から出るまで、2人きりで遊ぶことにした。

「……久遠君は、最初は応援してくれるって言ってました……でも今は私達を毛嫌いしてて、木下君と一緒にしたがってます……現に久遠君の応援がある木下君の方が明久君に近くて、私達はずっと遠いままです……明久君、私はずっと好きだったんですよ？　小学校の頃からの、始めての恋なんです……なのに、どうしてこんなに遠くなっちゃったんですか？　……明久君、もっと傍に居たいですよぉ……うっ、うぅっ……」

ちゃぷっ……

「……さて、姫路に島田。今回の事を仕掛けた張本人である以上、俺がお前らにとって疫病神だってのは認める。でもすべては、お前

らの行動の結果だって事だけは否定はさせねえ。俺はお前らの気持ちが本物の“愛”だってのは認めてるが、明らかに方向性がそれを“害”にしちまってる……俺が認めてる間に、早く気付けよ？　その時は明久の事だからどうせ許すだろうし、俺もその意をくんで今回の事のけじめつけるつもりなんだから」

キャラ紹介　その３

島津さやか　　ＣＶ：松岡由貴

３年Ｄクラス所属、サバイバルゲーム同好会長
光一とはサバイバルゲーム同好会繋がりの間柄で、機械の取り扱いと保健体育が得意なコスプレマニア。
羞恥心も希薄で、異性に着替えを見られても一切動じないというか、堂々と着替えられる。

淡々とした口調と分厚いビン底眼鏡が特徴的、近眼で眼鏡を外すと全く見えない。
光一を差別しない数少ない人で、光一に紹介されたムッツリーニを個人的に気にいっている。
それなりに試験召喚戦争での戦いに慣れており、輪刀と腕輪を使用しての知略戦闘でＤクラスの要。
その腕は相性の差があったとは言え、ムッツリーニすら圧倒する程。

スタイルは翔子の一歩手前。
基本的に文月学園の女子としては珍しい暴走傾向はないが、熱中すると周りが見えなくなるタイプ
それでも冷静な時は、光一程ではないがそれなりに鋭い。

召喚獣
巫女装束に輪刀

腕輪：光操作
　光を操作し、それを利用しての幻覚や収束させた光線などを

撃ちだす能力。
　他にもまだまだ応用しての攻撃はあるが、手の内は出来るだけ明かさない。
能力の起点は輪刀で、一定量の光がない所では使えないという制約はある

第百三十一問　間話　『３－Ａ対３－Ｂの実状』

大神白夜

現文月学園最高学年首席で、３－Ａ代表を務める男。
成績は言わずもがな、身体能力もずば抜けており、１００年に１人の天才とまで言われている程。
試験召喚戦争においても、代表としての手腕も策略も他クラスから一線を画しており、難攻不落と言われていた。

……が。

「きゃあっ！」

３－Ａクラス
前線指揮を任されていた女子が殴られ、女子達が悲鳴をあげた。

「誰が勝手な戦略をとれといった？」
「いっ、いえ、それは……あの時は、そうするべきと判断して」
「その判断が部隊の半分を壊滅させた……つまりそれが間違いだったと言う事だ」

３－Ａ対Ｂの試験召喚戦争。
大神白夜が光一に負けたことで、弱体化が囁かれていた頃での戦争中の事。

「……召喚獣を出せ」
「えっ……？」
「召喚獣を出せと言った。言葉でわからんなら……」

「ひぃっ！　さっ、サモン！！」
「……サモン」

言われた通りにその女子生徒は召喚獣を出し、白夜も召喚。
白夜の召喚獣が手を合わせた瞬間、背で回る様に浮いていた剣が一斉にその女子生徒の召喚獣を串刺しにした。

「目障りだ、さっさと出ていけ」
「おっ、おい大神……」
「私の策を狂わす者や、神に選ばれし私の尊厳に泥を塗る者には、相応の罰を下す……何度も言った筈だ。まだわからんのか？」

白夜は徹底した実力主義であり、それにそぐわない者は容赦なく切り捨てる方針。
それ故にAクラスでは、彼の制裁を恐れて試召戦争と勉強においては必死だと言う。

「C部隊、残り3人です！」
「D部隊、硬直状態に入った！」
「大川がやられそうだ、増援を！」

そこで舞い込んで来る、前線での情報。
白夜は表情を崩すことなく、思案し……

「私が出る。近衛部隊、つづけ」
「え？　おい大神、代表がそうノコノコがはっ！」

止めようとした夏川の鳩尾に、白夜の足がめり込んだ。

「私を誰だと思っている？」

「ぐっ、げほげほっ！　けっ、けど、大将が本陣はなれてどうすんだよ？」
「バカが、この私が居る場所が本陣だ。それも分からんなら、そうやって寝ていろ」
吐き捨てるように夏川にそう言うと、白夜は近衛をひきつれ前線へと赴いた。
常村がそれを見送り、鳩尾を抑え膝をつく夏川に駆け寄った。
「夏川、大丈夫か？」
「くっ……あの野郎、幾ら何でも厳し過ぎだぜ。とてもこれ以上ついて行けねえよ」
「けど、アイツの事は認めざるを得ねえよ。あいつのおかげで何度も窮地をひっくり返してきたんだ」
「どうしてあんな野郎に……くそっ、久遠の兄貴だってことが尚更ムカつくぜ」
「奇遇だな、光一が弟である事に腹を立てているのは私もだ」
常村と夏川が凍りつき、ギギッと音を出す様に振り向いた。
そこには腕組みをしながら、刺すような視線を向ける白夜が。
「そんな事を話す暇があったら、少しは戦争に貢献しろ。そんなだからあの観察処分者以下なのだとわかれ」
「なっ！　おい大神、吉井以下ってのは納得できねえぞ！！」
「観察処分者と光一のタッグに負けた、それだけで証明など十分。それよりさっさと補給なりをすませろ」
白夜が去って行くのを、歯軋りする程食い縛りながら夏川と常村は睨みつける。

「意外ですね？」
「何がだ？」
合流した近衛部隊の小暮葵が、意外そうな顔で問いかけた。
「弟さんに負けたことに腹を立てていると思ったら」
「私は神に選ばれた私自身以上に力を尊ぶ。勝負に負けた事を否定しては力に対する冒涜であり、実力主義を掲げる私自身の尊厳にもかかわる。清も濁も受け入れてこその実力主義、美味い所だけにしか目が行かない五流未満共と一緒にするな」
「……それは失礼」
しかし中には、その徹底した手腕とそれに対する堂々とした姿勢、それに自身を例外としない佇まいに心酔する者もいた。
程なくして、前線。
「全員下がれ。後は私がやる！」
白夜の号令でＡクラスメンバーが下がり、Ｂクラスが憤慨した。
「おい大神、俺達相手に１人でやる気かよ！？」
「アリが群がった処で所詮はアリだ。踏みつぶすだけで終わると言う物」
「２年坊主に負けたやつが言ってくれるじゃねえか！！」
人間と認識していない発言に、Ｂクラス前線メンバーが激怒。
全員が白夜に殺到した……が。
『３－Ａ　大神白夜　英語５０５点』

VS

『3－B　Bクラス前線メンバー15名　英語平均198点』

白夜の召喚獣が手を突き出し、飛びかかった3体の召喚獣の顔面に宝剣がつきたてられる。
召喚獣が消滅しないうちに白夜の召喚獣が手を万歳させ、剣が回転しブン投げられその後ろの召喚獣に激突。
それに怯んだ瞬間、ぶつけられた召喚獣の周囲を剣が取り囲み、一斉につきたてられ切り刻まれ、無残な姿で次々と戦死。

「……いつもながら、見事な手腕ですね」
「見事？　フンッ。この程度が容易く出来ずして、どうして神に選ばれたと言える？」
「失礼……」
「Bクラス、この私自らが弱肉強食の意味を身をもって教授してやる。ありがたく思え」

Bクラス教室に足を踏み入れた白夜に、Bクラスで補給を受けていた生徒を含め、近衛部隊が襲いかかった。
Aクラスの近衛隊を手で制し、白夜がそれを迎え撃つ。

「Bクラスごときが、神に選ばれし私の首を獲ろうとする……それが如何に愚かで、無謀で、不可能だと言う事も含めて、思い知らせてやる！」

白夜の召喚獣が手を合わせ、まず飛びかかった3体の首を斬りおとす。
その件の動きに注意をそらされた瞬間、白夜の召喚獣が剣を2本手に取り台座から飛びおりて駆け出し、4、5体の召喚獣をなぎ払った。

それに動揺した近衛部隊が一気に殺到するが、白夜の召喚獣がジャンプし台座の上に戻り座禅を組み、すぐさま手を交差させ剣で一気に串刺しに。

余談として、白夜の召喚獣は浮遊台座の上では移動が出来ないが、浮遊台座の上で座禅を組まなければ剣の遠隔操作はできない。

「害虫駆除の方がまだ歯ごたえがあるな」

補習室へ連行されていくＢクラス生徒たちを見送り、吐き捨てるようにつぶやいた。
Ｂクラス４９名全員補習室連行終了し、残るは……。

「うっ、ううっ……」
「弱者は強者により踏みにじられる。だからこそ人は、力に対しもっと貪欲になるべきだ……わかったな？　授業料は３ヶ月間の設備ランクダウンと、針のむしろ程度では安すぎるが……」

白夜の召喚獣が剣を手に、一歩一歩Ｂクラス代表に歩み寄り……

「感謝しろ、これだけですむ事をな」

白夜の召喚獣が腕を振り上げ、一閃
Ａクラスの勝利で、事は終了した。

戦争終了後、直ちに設備交換。

「……」

白夜に対し、嫌な感情を持つ者は少なくはない。
だがたった1人でBクラスの大半を倒すと言う結果を出している以上、ほぼ全員が閉口。

「お疲れ様です、大神代表」
「バカにするな、この程度苦労の苦の字程度にも入らんな。勝利、名誉、栄華……どれも私にとって容易すぎて、最早価値など感じない」
「……羨ましい、限りです」

「……久遠、光一。私の愚弟……そして、私に敗北を刻みつけた、初の者。この敗北、いずれは返上する。神に選ばれし者として」

「……大神、白夜」
「ねえ光一、もう終わった事なのよ？」
「優子、それはわかってる……わかってるけど、でもあいつの影がまだ消えない」
「……やっぱり、あの人の影は相当深くまで、光一に根づいてるのね」
「兄貴の所為で受けた八つ当たりの痛み全部が、一斉に襲いかかってくるみたいでさ……いっそ狂ってしまえたら、俺の人格そのものが壊れてしまえたらって、本気で何度も願ったな」
「っ！」
「けど今は、狂いたくも壊れたくもねえよ。優子をはじめとして、俺にとっては大事な人が出来過ぎたんだから」
「なら二度と言わないで。アタシは光一が傷つく事が何よりも怖い、

だから……」

「……悪かった」

第百三十二問

坂本雄二、三股スキャンダルにさらなる波紋
姫路瑞希と島田美波、両名との息の合った愛のやり取り！

昨日午前、とある筋より得た情報を元にＦクラスを取材した所、昨日のスクープを決定づける場面に遭遇した。

その場面とは、坂本雄二氏の指示に忠実に従い、Ｙ井Ａ久君に攻撃を仕掛けようとする、姫路瑞希さんと島田美波さん（掲載写真参照）という決定的な物だった。

それでも島田美波さんは、一年生の頃からＹ井Ａ久君にたびたび暴行を加えていたため、この情報の信憑性は極めて低いが、姫路瑞希さんも加わっている事がそれを覆したと言えるだろう。

あの病弱な身体で可憐な印象のある姫路瑞希さんが暴行、とあまりにも信じられない光景である以上、最早信憑性などなければおかしいと断言できます。

とある筋によれば、この両名は事あるごとに坂本雄二氏の指示に従い、Ｙ井Ａ久君やＫ遠Ｋ一君に攻撃を仕掛けては、どこからか聞きかじったかのような根も葉もない悪意ある噂をまきちらすなど、とても一般常識では考えられない様な行動が確認していて、

この学園では有名ですが、坂本雄二氏とＫ遠Ｋ一氏は非常に仲が悪く、事あるごとに衝突を繰り返していることから考えても、もはや間違いないと言えるでしょう。

しかし第２学年首席である霧島翔子さんに続き、どうしてこの両名までもが……

取材班としては、頭を悩ませている事柄です。

「光一、テメエだけは絶対許さねえ！　この俺にこんな濡れ衣着せやがって！！」
「もうウチ、お嫁にも行けなきゃ表も歩けないじゃない！　久遠の所為で何もかもが目茶苦茶よ！！」
光一の策略による恥辱に、人目もはばからず怒声をまきちらしていた。
「島田、こうなった以上俺達にこの噂を食い止める術はねえ。止められるとしたら、あのモヤシ……いや、凶王をブチ殺して無実を主張するんだ！」
「そうよ！　考えてみたら凶王なんて呼ばれてるだけに、全部アイツが元凶じゃない！　ウチの恋路を邪魔してくれた上に、坂本の愛人なんて濡れ衣着せてくれた罪、絶対アイツに償わせてやるんだから！！」
「成程、仲良いな」
「畜生、どうしてあんなゴリラに」
「愛人かあ……それも良いかな？」
「そうね。愛人でもあんなに仲良くできるんなら、それも良いかも」

それを見た周囲は、３股に何の疑いも持たなくなっていた。

当人たちは、当然の様にそれに気付かない。

なぜなら彼らは“自覚なきバカ”なのだから。

ドドドドドドドドドっ！！

「……雄二、いい加減観念して。愛人なんて許さない」

「お姉さまｘａｘぁぁァアアアアア！！　今ぁっ、この美春の愛の力でお姉さまの目を覚まして差し上げますわあぁアぁああ嗚呼！！！」

「待て翔子、これは全部光一の策略だって知ってるだろ！？」

「待ちなさい美春、ウチ達は久遠を……」

光一と明久の頭上に輝いていた凶星は、今や雄二達の頭上で輝いていた。

「姫路はどうしたんだ！？」

「知らないわよそんなの！！　もう……アキ、助けて！！」

時間をさかのぼり、光一宅。

「んっ……」

夜が明け、朝となり、ふと光一が目覚める。

そこで何か布団とは違う柔らかみを帯びた何かが、自身の横に居る事に気付く。

「すぅっ……すぅっ……」
「……また入り込んだのかよ」
光一の視線の先には、眠っている秀吉。
光一にとっては慣れているとはいえ、そろそろやめてほしいのだが……。
「……まあ、良いか。これ位」
なんだかんだで、秀吉等大切な人に対しては甘い光一だった。
……が。
「ってダメだ！」
ふと秀吉が陥っている状態を思い出し、ガバッと上体を起こす。
そこで秀吉をよく見ると、着崩れており胸元がはだけていた。
「げっ！　まっ、まずい。こんな所見られたら……」
寝起きで頭が働かないことと焦りで冷静さをかき、急いで秀吉の胸元を隠そうとして……
ガチャッ！
「おはよーこうい……！？！？！？！？！？」
最悪のタイミングで、優子が入ってきた。
どう見ても、光一が秀吉の服を脱がそうとしてる様にしか見えないというタイミングで

「いや、これはだな？　……って、どう考えても無理か」

久遠家に、小気味よい音が響き渡った

それから時は過ぎ、通学。

「……」
「……ごめん」
「……すまぬのじゃ」

頬の手形が存在感を主張する光一の顔は、ムスッとしていた。
優子もそうだが、原因の秀吉も縮こまっており、ただひたすら平謝り。

「なんだかなあ、木下君に先越されちゃった」
「そう言えば強化合宿でも、光一の布団にもぐりこんでたよね？」
「……まあ良いか。久々に優子らしい勝気な所見れたから」
「そうだね、何だか以前みたいだよ」
「……アタシそんなに暴力的なイメージ持たれてたの？」

釈然としないまでも、考えてみたら否定できない所を吉井君にも見せたっけな……
そう納得し、優子は少し落ち込んだ。

「それより、ワシは元に戻れるのじゃろうか？」
「秀吉は嫌なの？」
「……明久も、今の方がいいと言うのか？　女としてのワシしか、興味がないのかの？」

秀吉が不安そうに明久に問いかけた。

女性になってからという物、男子生徒達はここぞとばかりに押し寄せ告白。

元からそう言う事は会った物の、女性になったと言うだけでそれは勢いを増した。

その事が秀吉に、女性として見られない自分は価値がないのでは…と。

…と。

そんな事が頭によぎっていた。

「？　何を言ってるのかは分からないけど、今も昔も関係ないと思うよ？　だって秀吉はかわいいけど、僕はそれだけでこうやって一緒に居る訳じゃないからね。一緒に遊んだり勉強したりして、秀吉の良い所をいっぱい知ってるから、こうやって一緒に居るんだよ。だから僕は秀吉が可愛いからじゃなくて、秀吉だから一緒に居たいって思うんだよ」

「……っ！！？」

「ん？　どうしたの秀吉？」

「こっ、こっちを見るでないっ！！」

明久の無邪気な笑顔に、秀吉はにげるように顔をそらした。

「……吉井君も、思った以上にたらしなのね。聞いてただけのアタシでもてれるわ」

「待て優子、今“も”っていったか？　その“も”は誰を指してるんだ？」

「どう考えても光一君だと思うんだけど」

「あっ、やっぱり……そうだよな。流されたとはいえ、二股なんてやってる訳だし」

「「自覚なしなところもね」」

光一のつぶやきに、優子と愛子のツッコミがハモった。
ついでに、“つくづく極端すぎる才能だな”と、光一の不幸さにも揃って同情した事は内緒の話。

「明久もやるな。まさかここで秀吉を口説くとは」
「え？　口説く？　いつ僕が秀吉を口説いたの？」
「……まあ良いか」

「……根は似た者同士、なのかもね」
「……だよね。だからこそ信頼し合ってるのかもしれないけど」
「……あの２人は意気投合する事が多い事も、尚更じゃ」

呆れつつも、微笑ましく。
３人が明久と光一を見る目を表現するには、それで十分。

そして学園。

「おーおー、やってるやってる」

光一の視線の先には、ＦＦＦ団および翔子に追われている雄二。
そして人外化した美春が４足歩行で、美波を追いまわしていた。

「……なんだか、すごい事になってるわね」
「どうでもいいだろ。見つかる前にさっさと行くぞ」
「そうね」
「いや、納得しちゃダメでしょ優子！？」

愛子がビックリしたように、優子に待ったをかけた。

「あれ？」

「ん？　どうした明久」

「姫路さんが居ないよ？」

「はあっ？　何をバカな事を……あれ？」

明久に言われて光一は周りを見回す。

自分に対する好奇と畏怖、嫌悪の目を無視して……

「ホントだ、いない……どういう事だ？　昨日うちに襲撃をかけようとして、仕掛けたワナで俺に対して怒ってるだろう姫路が、休む訳がない筈……何があったんだ？」

「……姫路さんが襲撃することは決定なんだ」

「それが裏切られる時は、自分のやり方を反省した時位じゃないの？　……あれ？　じゃあ」

「あの……」

声をかけられて、優子はふと振り向く。

「え？　姫路さん？」

「姫路？」

「あっ、おはようございます久遠君」

普通にあいさつをする瑞希に、光一は疑問符を浮かべる。

いつもなら怒ってるときは問答無用のはずなのに……

「あの、優子ちゃんお借りして良いですか？　ちょっとお話が……」

「？」

いつもとは様子が違い、弱々しい印象の瑞希に、光一はさらに疑問符を浮かべる。

「あっ、光一！　テメ、よくもやってくれやがったな！！」
「どうしてくれるのよ！　アンタの所為でウチの全てが目茶苦茶じゃない！！」

「やばい、見つかった。すまん愛子に優子、昼休みにまたな！」
「援護するよ光一！」

光一が駆け出し、明久がそれに続く。
それを追いかけ、雄二と美波が優子たちの前を通り過ぎ、翔子や美春、ＦＦＦ団が続いた。

「ホント嵐の様な集団ね」
「その嵐の目はボク達の彼氏さんとその親友だけどね」
「あ奴等にも困った物じゃな。光一に明久がケガなく戻ってきてくれれば良いのじゃが……さて、ワシは学園長室に出向くとするかの」

それを見送ってから、秀吉は１人学園長室へ。
残った優子と愛子は、瑞希を伴い落ち着ける場所を探し始めた。

「アタシに話というと……なにかしら？」
「何だか面白そうだね、ボクも参加させてよ」
「あの……明久君に対しての、久遠君の真意が知りたいんです」
「光一？　そんなの、友達の吉井君に幸せになって貰いたい。だけど？」
「……私は久遠君に、明久君の不幸だって認識された。そう言う事なんですか？」

「あのね姫路さん、今までの事を思いかえせば当たり前だと……」

そう言おうとした所で、優子は止めた。

考えてみたら、ＦクラスにはＦＦＦ団が居て、暴力が日常茶飯事の様に行われてると言う話。

ましてや姫路瑞希という人物は、これまでの印象を考慮すると純粋すぎるほど純粋。

だからこそ、あんな狂乱にまみれたクラスに居ては、その影響された認識上では確かに普通かもしれない。

「……ごめん。ちょっと話が長くなりそうだから、お昼休みに来てくれない？　その時の答え次第で、光一に頼んで坂本君の愛人って立場の脱却法を考えて貰うから」

「えっ？　本当ですか！？」

「答え次第でね。もう行きましょ、そろそろ時間だわ」

「はっ、はい」

第百三十三問　腕輪と新技術と融合召喚騒動編　エピローグ

問題　次の問いに答えなさい

仏教にある“六道輪廻”の六道を答えなさい

姫路瑞希の答え

『天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道』

教師のコメント

正解です。また、この輪廻から外れた物を外道といいます。

久遠光一の答え

『俺が進むは修羅の道』

教師のコメント

頑張ってください

吉井明久の答え

『雄二に相応しいのは外道と三悪諏です』

坂本雄二の答え

『明久と光一に相応しいのは三悪趣だ』

教師のコメント

君たちは一度地獄に行った方がいいかもしれません。

「お前らはつくづく学習ってもんが出来ん奴らだな？」
「まったくだよね。仲がいいのはわかるけど、堂々とあんな事すればＦＦＦ団が黙ってる訳ないのに」
「流石明久、良くわかってるじゃないか……程良く誤解してるから助かる」

「……その前に、ここは溜まり場でも尋問室でもないんだがね」
「……つくづく申し訳ない。クラスメイトであり光一の弟分として、謝罪いたす」

光一と明久は学園長室で、ネットで捕縛されてる雄二と美波に呆れた様にそう言い放った。
ちなみにＦＦＦ団などのおまけは、逃走の最中に煙に巻いておいたので、彼等は標的を見失っている。

「うるせえ！　テメーが平穏無事でいるなんて納得いかねえ！！」
「声がでかい。ここに居る事を気付かれて困るのはどっちだ？」
「ぐっ……」

完全に光一が主導権を握っている状態に、ギリギリと歯軋りさせる雄二。

美波も必死に重力に従いまくれるスカートを押さえながら、光一と明久に刺し殺す様な視線を向け続ける。

「全部アンタの所為よ！　アンタがウチ等が坂本の愛人なんてウソを広めたりするから！！」

『お姉さまぁぁあああああああああ！！』

「っ！！？」

外から美春の声が響き、美波がびくっと身体を震わせ口元を手で覆った。

優勢なのは、あくまで光一。

主導権どころか命綱まで握られたと、雄二も美波も敗北感でいっぱいだった。

「お前らは感情のままに突っ走るしかできんのか？　確かに引き金は俺だが、まさか勝手にここまで噂に信憑性持たせるとは流石に予想外だったぞ？」

「うるせえ！　お前が平穏に過ごしてるのが悪いんだよ！」

「アキをそそのかして、木下とくっつけようとしてる奴に言われたくないわよ！」

「明久にとっととそう言う相手が出来ないと、俺が迷惑なんだよ。女たらしは事実だからどうでもいいどころかむしろ歓迎だが、お前らの所為でバイだの両刀使いだの、ろくでもない噂が加速しやがったから俺だって必死なんだ！」

実は優子と愛子とのキスが学園中に知れわたっている事に、同性愛者説などを加えそう言う噂が蔓延していた。

……それを知った瑞希と美波がそれを本気にして、以下省略。

「女たらしだけじゃなくて、全部事実だろうが。男だろうが女だろうが見境なしのクズモヤシが」
「この妖怪の風呂を嬉々として覗いた3股ゴリラにだけは言われたくねえ！」
「誰がこんなババァの風呂なんて覗くか！！　目が腐るかと思ったんだよ！！」

「……このガキどもは」

光一と雄二ががんのくれ合いをする横で、学園長が機嫌悪そうに2人を睨みつけていた。

「つくづく会話が成立しないな、俺達は……ところで雄二に島田、姫路はどうしたんだ？」
「姫路？　俺達の方が聞きてえよ」
「そうよ。何だか昨日から様子が変で、ウチ等がアンタの家にアキのお仕置きしに行くのも不参加だったから」
「不参加！？　マジ！？　おい、一体姫路に何があったんだ！？　何かの天変地異の前触れか！！？　それとも、日本……いや、世界、果ては太陽系存続の危機か！！？」
「そこまで驚くのか！？」

なんだかんだで、光一もすっかりFクラスの日常に染まりきっていた。
というより、日常＝騒動と、明久がらみ＝姫路と島田の暴走、という公式が光一の頭の中にすっかり出来上がっている事も、要因である。

「で、実のところどうなってる？　姫路が策なんて使える訳ないし、お前の策にしてはあまりにも自己犠牲の要素が強すぎるし……それ

以前に明久がらみの姫路が、暴走もせず大人しくしてる事自体ありえん。何があった？」
「お前は姫路をなんだと思ってる！？」
「疫病神でお前の愛人で、恋愛の意味を宇宙の直径程間違えてる上に、脳に末期の異常が発生した暴走女」
「そこまで言うのか！？　……言っとくが、俺達も聞きたい位だ」
「よし、病院連れてくか。妖怪、スポンサーに病院関連いないのか？」
「待て、即決で病院はないだろ！　もしかして、何かあったんじゃないか？　姫路が今に疑問持つような何か」
「んな訳ないだろ。絶対頭をうったか、末期を通り越して逆にハイになったに決まってる。でなきゃそんな事がある訳ないだろうが！」
「断言するのか！？」

数分後

「それで、一体どういう事だよ？　そもそもどうして姫路だけ？島田は全然変わってやしねえってのに」
「アンタの中でウチの評価はどうなってるのよ？」
「姫路と同じ。大体暗殺実行犯の誤解解いてやったの誰だと思ってやがる？　まったく……」
「過去の恩を笠に着るとは、男の風上にも置けないな」
「責任を転嫁か放棄して逃げまくる、風上風下関係なくゴミ捨て場にしか置けない奴が何言ってやがる？　……まあいい、やっぱり病院連れてくか。もしかしたら手術が必要かもしれないし」

全く信用しようとしない光一に、秀吉に雄二や美波は元より、学園長もやや呆れていた。
ただ1人明久だけだが、何の事かよくわかってない。

「……自発的にとは考えないのな」
「当たり前だ。大体お前がそんな人道的で最もらしい発想する時点で怪しいだろ。やっぱ何かの罠か？」
「……お前、絶対ろくな死に方しないぞ」
「お互い様だクソボケ！」

いい加減ツッコミ疲れた雄二が、はァはァと息を切らす。
さっきから蚊帳の外で、何を話してるのか理解出来てない明久が、我慢できず光一に問いかける。

「ねえ光一、さっきから何話してるの？」
「姫路の様子がおかしいから、雄二が何か企んでるかもしれないって話」
「企んでねえ！　明久もどういう神経してやがる！？　光一のデタラメにあっさり騙されやがって！！」
「そうよ！　アキもアキだわ、久遠に騙されてるとも知らないで！！」
「島田や雄二にだけは言われたくないし、騙すなんて失礼な。百歩譲って騙すにしても、何１つ害も傷も与えてやしねえよ。お前らじゃねえんだ」

確かにそうだ。
事情を良く知ってる秀吉と、話に聞いてる学園長はそう思った。

「どっ、どういう事よ！？」
「それがわからんから、暗殺実行犯なんて汚名着せられるんだよ。まあわかってたら雄二の操り人形……いや、愛人になんてなってやしないだろうがな」
「なってないわよ！　全部アンタの所為じゃない！！」

「引き金は確かに俺だが、それを勝手に確定させたのお前らだろうが。お前らの意思はどうあれ、そう周りにうつる様な事をした事まで俺の所為って、幾ら何でも図々し過ぎるぞ？」
「っ！　なによ……なによ！！」

美波が光一を睨みつけながら、泣きだした。
動けなければ駆け出してただろうが、今は動けない。

「そうだ妖怪、なにかわかったか？」
「……女泣かしておいて平然とするって、アンタどういう神経してるんだい？」
「どうでもいいな。全部自覚のない島田が悪いんだよ」
「そこまで言うか？」
「だったら一緒になって俺をせめれば良いだろ？　まあそんな事してどうなるかは……わからんわな」

少しもぶれてない光一に、さしもの雄二も唖然とした。
ただ明久だけが、美波の泣く姿におろおろとしている。

「で、どうなんだ？」
「……ある意味大神白夜と兄弟だと納得さね。さて原因だが、どうも召喚者の精神的な物が作用してる可能性がある……ってことさね」
「精神的な？　……ってちょっと待て、今何か不快な事言っただろ！？」
「観察処分者設定はある意味、召喚者と召喚獣を結びつけてる様な物だからね。要はこのガキには女になる事に対して、何らかの願望か劣等感か……を抱いてる可能性があるってことさね」
「おい、無視すん……まあいい。じゃあ特に問題はないってことか？」
「まあね」

釈然としないまでも、秀吉にさして影響がないとわかり一安心。
実は内心、どういう影響がわからないことに不安を抱いていた。

「わかったんなら一安心だな。要は融合召喚の副産物って考えれば良いんだ」
「んむっ？　光一、心配してくれておったのかの？」
「当たり前だ。元に戻れなくなるだけならまだしも、何かあったらって不安だったよ」
「前者が納得いかぬが、それでも心配してくれて嬉しいのじゃ」
「さて、そろそろ戻るか？　授業もう始まってるぞ？」
「待つのじゃ光一、せめて融合解除してほしいぞい！」

それから時間はすぎ、昼休み。

「……」

美波は卓袱台に突っ伏し、瑞希はずっと上の空。
そして雄二は……

「「「キサマ２人に何をしたぁああ鳴呼ああ！！」」」

その状態を見た異端審問会に追い回されていた。

「何だか静かね？」
「心配になって来てみたんだけど、どうしたの？」
「さあ？」
「あっ、優子ちゃん」

優子に気付いた瑞希が、ゆっくりと駆け寄ってきた。

「あの、お話の続きを」
「じゃあ俺達は席を外すか」
「待ってください！」

女同士の話に入るのは野暮だと、明久を伴い席を外そうとした光一。
それを止めたのは、他でもない姫路瑞希。

「あの、教えてください。私、何が悪かったんですか？」
「あのね姫路さん、光一は最初応援するって言ってたでしょ？　なのにどうして同性愛者扱いしたの？」
「そっ、それは……」
「アタシも人の事言えないけど、姫路さんが吉井君の事を嫌ってるって見えてもおかしくないわ。アタシも姫路さんが吉井君を信用する所は見た事がないし、坂本君にそそのかされてあんなことするんじゃ、光一がしなくても早かれ遅かれそう言う噂が出てたわよ？」
「そっ、そんな！　私はただ……」

バヂッ！

「ひっ！　なっ、何を……」
「光一！？」

光一がスタンガンを取り出し、電源を入れて威圧感ある音を出す。
それを瑞希に向かって振り上げるのを見て、明久がそれを止めようとする。

「……じゃあこれは親愛の証と、そう取れるのか？」
「……」

……が、それはあくまでフリだった。

「お前は気持ちは本物かもしれないけど、方向性が間違ってるんだよ」

「でも、翔子ちゃんに美波ちゃんは……」

「……考えてみたら異端審問会の所為で、まともなカップル殆ど見ないんだっけ？」

「……そうだったわね。それで悪い見本しか残らないから、こうなったのかしら？」

Fクラスの環境を思い出し、つくづく以上だと再認識。

「じゃあ聞くけど、そう言うやり方してるお前と島田と、そう言うやり方してない秀吉で、どうして秀吉の方が明久に近いと思ってる？」

「それは、久遠君が贔屓するからです！」

「それもあるけど、それだけじゃ単なるアドバンテージにすぎないだろ？　挽回することだってできるだろうに、それが出来ないのはやり方が悪かったってことだろ。島田にも言ったけど、今お前と島田が雄二の愛人って噂だって、方向性が正しけりゃ幾ら俺が引き金とはいえこうも蔓延しなかった筈だぜ？」

「……じゃあ私は、明久君じゃなくて坂本君が好きだって思われる事ばかりしてたと、そう言う事なんですか？」

「そう言う事になるな」

瑞希の眼がうるみ始め俯くと、畳にぽたりと水跡が出来た。

明久が慌てて涙をぬぐおうと、ポケットを漁り始める。

「……光一よ、今日は偉く女の子を泣かせるのう？」

「恨みがあるとはいえ、別に何ともない辺り俺も外道だな」
「自覚してるんだからまだマシじゃない。大体こういうのはいずれ誰かがやるべきでしょ？」
「そうだよ。光一君は吉井君と姫路さんの為を思ってやったんでしょ？　だったらボク達は寧ろ褒めてあげる」
「姫路よ、形は異質じゃがああいうのを、信頼し合うと言うのじゃ」
「……」

数分後

「落ち着いたか？　まあ事が事とはいえ、悪かったとは……」
「いえ、明久君にも久遠君にもたくさん迷惑をかけましたから、気にしないでください」
「そうか……それで明久、お前が何言うかはわかってるが、一応聞く。姫路が今までやった事を許すのか？」
「え？　許すも何も、僕は普段の行いが悪いからね。嫌われて当たり前だよ」

明久がそう言うと、瑞希は明久から“自分は姫路瑞希には嫌われてる”という評価だと認識させられた。
グッサリと後悔が突き刺さるが……

「あの、それでも私、明久君にお詫びがしたいです！　でないと明久君もそうですが、散々迷惑をかけた久遠君にも申し訳がありませんし、私の気が済みません！」
「だから僕は……」
「吉井君、優しいのは結構だけど、時には厳しくすることも優しさよ？」

「……わかったよ」
「じゃあ、次同じことしたらもう口も聞かない……で良いだろ？」
「……じゃあ、それで」
「わかりました。もう同じ事はしません！」

その言葉を聞いた光一は、そっと秀吉の背後に立ってスタンガンの音を鳴らす

「わっ！」
「え？」

それに驚いた秀吉が体勢を崩し、近くに居た明久に抱きついた

「っ！？　（ゴゴゴゴゴゴ）」
「ん？　怒るか？　怒るか？」
「……すーはーすーはー……」
「おおっ、耐えきったか」
「今のはずるいです！」
「教えたらテストにならんだろうが。よし、ひとまず合格。となると次は噂の払拭だが……」

そこで、全員が待ったをかけた

「何？」
「そんな事知らないって言ってなかった？」
「どうにかしようはあるぞ？　ただ、反省する気ないだろうから使う事もないと思って」

一方、Ａクラスにて。

「……雄二、女癖の悪さをきょせいする」
「待て！　一字抜けてる、抜けてるから！！」

異端審問会はまいたものの、翔子につかまりＡクラスで追い詰められていた雄二

「坂本君」
「おおっ、姫路！　ちょうどいい所に。すまんが翔子に誤解だと……」
「今まで私を騙してたなんて、酷いです！！」
「え？　まっ、待て！　一体何の……」
「坂本君なんてもう知りません！！」

ゴゴゴゴゴッ！

「……雄二、騙していたってどういうこと？」
「まっ、待て翔子！　俺はなにもギャアアアっ！！」

「よし、あれで姫路の身の潔白は証明されたな。Ａクラスほぼ全体が証人になった」
「……お主もエグい事考えるのう。嘘は何一つ言っておらんが」
「確かに坂本君が煽ったりしなきゃ、こんなことにはならなかったけどさ」
「どうでもいいよ。よくわからないけど、雄二が何かやったんならけじめとらないと」
「そうね。今回の事のけじめつけたって考えれば良いわ」
「じゃあ光一、これで姫路さんの事は……」
「言っとくが明久、お前に厳しくが無理なら俺が厳しくなるからな

？　俺はまだ姫路のやった事許した訳じゃないんだから、アイツが約束破るならわかるな？」

「……ごめん」

第百三十四問　間話　『噂の後始末のその後は』（前書き）

今回はシュレ猫さんの問題です
ありがとうございます。

第百三十四問　間話　『噂の後始末のその後は』

問題　次の問いに答えなさい

南総里見八犬伝の前半部の主人公ともいえる“犬塚信乃”は幼少期女物の着物を着ていましたが、それは何故でしょう
（注：女装趣味と答えた生徒は問答無用で職員室への出頭を命じます）

木下優子の答え
元服まで性別を入れ替えて育てると丈夫に育つという伝承があった為

木下秀吉の答え
元服まで性別を入れ替えて育てると丈夫に育つという伝承があった為

教師のコメント
正解です、信乃の兄弟は早くに亡くなっておりますから、丈夫に育ってほしかったのでしょう。

姫路瑞希の答え
明久君みたいな人だったから

島田美波の答え
アキみたいな人だったから

教師のコメント
君たちにとって吉井君はどういう人なのですか？

秀吉ファンの答え
『木下秀吉の様な人だったから』

教師のコメント
木下君は男の筈です

吉井明久の答え
母か姉が無理やり着せていたから

教師のコメント
君の過去が気になります

久遠光一の答え
自分勝手な女性に玩具にされていたから

教師のコメント
君にとって女性がどういう意味を持つかが気になります

「さて、噂の払拭は終わったし、後は……」
「あの、坂本君の事は……」
「何？　俺や明久には変な噂真に受けて無責任にばらまいておいて、雄二は気にかけるのか？」
「……ごめんなさい」

噂の払拭の為の光一の策の後のやりとり。
光一の有無を言わせない態度に、瑞希もほぼ力尽くで黙らされた。

「ねえ光一、もうちょっと優しく……」
「もうっ、吉井君！　そうやって甘やかすから、姫路さんも美波もつけあがるんじゃない。確かにそう言う所は吉井君の美点でもあるけど、優しさと甘やかす事は違うのよ？」
「でも、だからって……」
「そうやって光一に汚い所を全部任せるつもり！？　名ばかりの相棒って言われても良いの！？」

その傍らでは、煮え切らない態度の明久が優子に説教されていた。

「やはり色々と面倒になったのう。確かに明久はバカみたいに優しいが、それもまた汚点じゃ」
「だよね。実際それで実害こうむってるのは事実なのに、それでも曲げないなんて。まあ傍から見ればお似合いかもしれないけど、色々と変な影響受けやすい2人だから問題も山積みだよね」
「じゃろうの。特に明久は、雄二に島田やＦＦＦ団が黙っておらぬじゃろうしの」

秀吉と愛子は、光一と優子に説教される2人を心配そうに見ていた。
実際にＦクラスという環境の所為で、自分達も色々と苦労しているだけに尚更に。

数分後

「……あの、優子ちゃん？」

「さて、それじゃ女の子同士で話しましょ？」

らちが明かない為、光一と相談し優子は屋上に瑞希を連れて来ていた。

明久と光一は、空き教室で愛子と秀吉が一緒である（玉野による変な噂助長を避けるため）。

「まず聞きたいんだけど、姫路さんは吉井君の事が好きなのよね？」

「はっ、はい……ここだけの話、明久君は、その……小学校から続いてる、私の、初恋の相手なんです」

「そうなの？　……いろんな意味すごいわね。小学校からって、そんな前から」

そんな相手に、やすやすと暴力が震えるようになる事も含めて。

「優子ちゃんは、違うんですか？」

「アタシ？　そうね……そうかも。といってもアタシの場合、身近な男は光一以外が秀吉に興味持ってた所為だって言うのもあるけどね」

「可愛い妹さんがいると大変ですね」

「秀吉は弟だからね！？　後言っておくけど、強化合宿前の関節技でのやり取りはアタシと光一なりの付き合い方であって、姫路さんや美波がやってたのとは違うからね！？　……一応」

確かに私情で色々としでかしてた事は事実だが、一応は互いにスキ

ンシップ的な要素もあった事は認めてる。
……とは思えないほどやり過ぎたこともまた事実だが、その辺りはお互い様という事で納得はしあってます（ここ重要）

「……確かにやり過ぎたと言うか軽率な事して、光一に愛想つかされかけたけど」
「久遠君って優子ちゃんに甘いけど、そう言う所は厳しいですよね」
「アイツは信頼されないからこそ、信頼するって事を大事にするからね。だからそういう裏切りとか、信頼を足蹴にされる事を普通以上に嫌ってるのよ。自慢じゃないけど、アタシでさえ愛想尽かす位に」

そこで瑞希は思い出す。
強がっては居た物の、優子に振られた事をツッコまれた時や、試験召喚戦争時。
中々諦めきれてない程にゾッコンだった光一が、強化合宿時は優子に対して酷く冷たかった事。

「……納得、です」
「恥ずかしい話、光一をフった時に光一はこんな気分だったんだな……って、実感したのよね。つくづくバカなことしたって、今でも後悔してる」
「えーっと……」
「でも姫路さんの場合、そう言うやり取りないでしょ？　告白した訳でもないのに、取ってつけた様な理由や女子と親しくしたってだけで、拷問じみた事してるんだから。秀吉から聞いたけど、光一だって怒ってたらしいわよ？　アタシにフラれたのはなんなんだって」

言われてみればその通りだと、改めて実感した。
光一は堂々と告白して玉砕し、優子にその気持ちを押し付けること

なく忘れようと努力していた。

……それでも諦めきれず、色々とあった訳だが。

「で、どうするの？」

「……久遠君に全部謝って、信用してもらえるように頑張ります」

「それだけじゃなくて、吉井君にも。今の評価は、好意ではなくて嫌悪されてるって認識なのよ？」

「それも絶対、覆して見せます！　木下君に負けられません」

「だから秀吉は男だって言ってるのに……」

一応気持ちは届いた様なので、これで良しとしておく優子だった。

一方その頃。

「明久、お前も突き放すぐらいしろよ。あの手のはそうでもしないとわからないんだから」

「でっ、でもさ、女の子相手に……」

「それがなに？　女だから男である自分は言いなりにならないといけないとでも？」

「そうは言わないよ。でも……」

「そう言ってるよ。実際俺だって優子はああだっただろうが？」

明久に対して、光一も流石にこのままという訳にもいかない。

そう考えて、何とか姫路に厳しい対応をするようにさとそうにも……

やはり難色を示し、どうにも進まなかった。

「それに、僕が悪いときだって……」
「悪くない時の方が多すぎるだろ！　実際些細なことですら話も聞かず拷問って、お前いつか殺されるぞ！？」
「ちょっと光一、それは幾ら何でも……ありそうかな？」
「ありえるだろ普通に。ひもなしバンジーやらされかけといて、良く平然としてるな！？」

光一としては、さっさと縁を切るべきだと主張してるのだが……。
基本女尊男卑の家庭で育った彼には、どうにも出来ないことだった。

「あのな明久、厳しくするのも優しさだ。無条件に優しくなんて、相手をつけあがらせるだけだぜ？　俺だって確かに優子や愛子に甘いのは認めるけど、お前なら知ってるだろ？　強化合宿の時」
「あっ……でも、あれは結局」
「お前もあれ位とまでは言わねえけど、自分の意見主張くらいはしろよ。逆らった位で痛めつける様な奴、縁を切った方が互いの為だ。俺だって優子とはあのまま縁切るつもりだったぜ？　あの事がなければな」

その事だけは明久としては、あまり納得はできなかった。
何せ光一は優子に対して、信じられないほど冷たく接したのだから。

「……俺もお前の決めたことに口出しはしたくないけど、理不尽にあんな目にあわされてるのを黙って見てる訳にもいかないからな。悪いが、これ以上って言うんなら力尽くでも」
「そんな！　そこまで光一がやることじゃ……」
「じゃあお前がやれよ。今のままだと、俺が出しゃばらにゃ不幸になる一方だぜ？」
「……わかったよ。でも、覚悟決めてからね？」
「そうやって先延ばしにしたら怒るからな？」

明久の背筋に氷の柱を入れたかのような悪寒が走った。

「ちょっと待て、そこまで怖がるのか？」

「光一の“怒った”は洒落にならないよ！　……“凶王”が僕を睨みつける様子想像しちゃって、怖くて今日眠れそうにないよ」

「……」

「あの、光一？　そう言う意味じゃないよ！　ただね、光一は滅多に怒る事がないから、凶王が怒ったってイメージが結びついちゃっただけで」

親友の言葉に、ちょっと傷ついた光一だった。

その更に数分後

「という訳で、互いに課題をクリアすることを前提って事で」

「はい」

「うん、わかった」

「よし。じゃあ明久と姫路、融合召喚するから……」

「ほっ、本当ですかーっ！？」

秀吉にフィールドを頼もうとしたところで、瑞希が感極まると言わんばかりに声をあげた。

明久がどうして？　と言わんばかりに首を傾げるのを見て、愛子と優子と秀吉はハァッとため息をついた。

「声がでかい。Ｆクラスのバカ共に聞かれたらどうする？」

「だってだって、明久君と融合できるんですよ！？　はぁ～っ……」

「召喚獣が……ってダメか。聞いてない」

少女がやってはいけない様な顔で、何やら色々とトリップし始める瑞希。
人が来る前に何とかしようと、光一は一計投じた

「はいはい、妙な想像を口に出すのはやめような？」
「……え？　あの、声に出てました！？　明久君の服を脱がせたり、お尻とかさわったりもごもご！！」
「でかい声で言うのはもっとやめような？　……もしかして、余計な頭痛の種が増えただけなんじゃ？」
「？　どうして姫路さん、ボクにそんな事してあんな顔……はっ！　まさか僕を辱めて皆の笑い物に！？」

「……とんでもない誤解がまた、明久の脳内ではじき出されたらしいの」
「……Fクラスのバカだけじゃなくてスケベまで伝染してるって、どんだけ影響されやすいの？」
「あっ、あはは……面白いけど、なんだかその……」

第百三十四問　間話　『噂の後始末のその後は』（後書き）

さて、融合召喚騒動も終わった事ですし。

ここらでまたコラボ書きたいと思ってます。

ので、ここらでまた募集します。

書いてほしいという方は、以前の様に感想と共にお願いします。

ご希望に添えられるかどうかはわかりませんが

コラボ問題　第４問（５）　『過激派と超人とグレートレンジャー総攻撃』（前編）

バカとテストと優等生？　とのコラボです。
ちょっとグダグダ感が強いですが、楽しんで頂けたらと思います。

コラボ問題　第４問（５）　『過激派と超人とグレートレンジャー総攻撃』

「つぶれるでごわすーー！！」

光一が転がってくるデブに、ゴム弾入りショットガン（対清水美春用）を構え、打ち出した。

「何なんだ今日は？　朝っぱらから、ＦＦＦとは違う意味で変な奴等が押し寄せてくるとは……」

通学中、いつものように優子と秀吉を伴い、談笑しながらの登校中。突如現れた変人集団が光一に襲いかかり、それを撃退し続ける事数十分。

「それより、急がないと遅刻よ？」

「ちょっ……くそおっ！！」

所変わって、Ｆクラス教室。

「はぁっ、はぁっ……大丈夫かの光一？」

「……」

教室に着くなり、光一は息を切らしながら卓袱台に突っ伏した。

「何だ光一に秀吉、偉く遅かったな？」

「おおっ、来牙か。何やら変な集団に光一が襲われての。その撃退で大変だったのじゃ」

「変な集団？　ＦＦＦ団か？」

「違う。なんか変な占い師モドキや魔法少女なんて名乗るクソガキ、それにデストローイとか叫んで壊すおっさんとか……って、どうした来牙？」

それらに思いきり覚えがあった来牙だった。

寧ろ思い出したくないと言わんばかりに、頭を押さえる。

「？　なんだ、心当たり……いや、やめよう。俺ももう忘れたいし」

「……察してくれて助かる」

面倒事が嫌いな来牙の心情を察し、聞かない事にした光一。

いい加減この手の騒動には飽き飽きしてた光一も、さっさと頭から消し去りたいと……。

「来牙君、遊びに来たよ」

思っていた所へ、また絵梨が文月の制服を着て紛れ込んできた。

「あのな絵梨、そんなに学校に来たいなら編入試験受けろよ。美味いところどりってのは感心しないぞ？」

「それはわかってるけど……」

「わかってたらやるな……はぁっ」

「どうしたの久遠君？　疲れてるみたいだけど」

「……グレートレンジャーファンクラブに襲われたらしい」

「ん？　今グレートレンジャーとか言わなかったか？」

光一は不快を隠そうともせず、来牙に問いかけた。

グレートレンジャーと言えば、はた迷惑な行動を繰り返す町内一の迷惑集団。

最近ではその名を広めようと、光一打倒を目指したびたび襲撃しては撃退されると言う日々を過ごしていた。

「あんな集団にファンクラブって……あの連中なら、納得できるのが恐ろしいよ」

「……久遠君も災難だね」

「兄貴は神様に愛され、俺は凶兆に愛され……だな。まあ優子と愛子に慰めて貰うから良いけど」

「つくづく思うけど、久遠君の関係ってすごいよね。あたしは軽蔑はしないけど、マネはしたくないな」

絵梨の言う事も最もだと、光一は苦笑する。

ただ言われっぱなしも何なので、光一はそっと絵梨に耳打ち。

「……けど絵梨、わきまえる所をわきまえず暴走するなよ？　この前の映画館や喫茶店のトイレとか、人気のない裏路地とかな」

「っ！！？」

「……言っとくが、たまたま２人で入って行ったのを見ただけだからな？　けど俺でさえ頻繁に出くわすんじゃ、そのうちＦＦＦのバカにもばれるぜ？　来牙は面倒事嫌いなんだから、程ほどにな？」

「……気をつける」

光一が再度卓袱台に突っ伏すと、そこで戸が開かれる。

そこにはグレートレンジャーの４人が勢ぞろいで、光一は持病の頭痛で頭を抱えた。

「見つけたぞ久遠光一……むっ、絵梨ではないか！？　おのれ、ワシ等の攻撃を予期しさらって来たのじゃな！？　何と言う卑劣なモヤシじゃ！！」

「もうっ、お父さん。久遠君が迷惑してるからやめてよ」

「何も言わずとも良いのじゃ絵梨。今助けてやるから、絵梨は今夜ワシと一緒に風呂へ入ることを楽しみにしておればよい」

はぁっ……と、嫌悪感を込めたため息をつきながら、スタンロッドを6本取り出し六爪流の構えを獲る光一。

その怒りのオーラを纏った光一は、竜は竜でも恐竜ならぬ凶竜だったと言う。

「……来牙、絵梨、シバいて良いか？」

「「良いぞ（よ）」」

サモ関係ないと言わんばかりに2人はそう言った。

「翔の奴はなにをしておる？　大神白夜とか言う奴を戦力を引き入れると言いおって、結局は逃げたのではあるまいな？」

爺さんの言葉で、光一が纏う雰囲気が変わった。

「……やっぱり久遠君、お兄さんがらみだと冷静じゃなくなるみたいだね」

「何があったかは知らないが、いつも冷静な光一があなる位だ。よっぽどの事があったんだろう」

「遊佐君大丈夫かな？　久遠君のお兄さんって暴力的なんでしょ？」

一方その頃

「おい、いきなり殴る事ないだろ！」

「下級生の分際で礼儀をわきまえぬ貴様が悪い」

翔は白夜にグレートレンジャーの同盟を持ちかけたが、断られた上に態度が気に入らないと殴られていた。

「光一が嫌うのがよくわかるぜ。もういい、同盟と言わず力尽くで言う事を聞かせてやる！！」

「ほうっ、神に選ばれた存在たるこの私に挑むか？」

「何が神に選ばれた存在だ。テメエをぶっ倒して、神が選んだのはグレートレンジャーだって教えてやる。化学での試召戦争を挑むぜ！」

「よかろう。丁度次は化学で来た所だ」

『３－Ａ　大神白夜　化学５４７点』

ＶＳ

『２－Ａ　遊佐翔　化学４３３点』

「なっ！？　この俺様が、化学でトリプルスコア！？」

「フンッ、何を驚く？　貴様と私、格から言って当然だろう？」

「だったらこうだ！」

翔の召喚獣が、ブローニングＭ２重機関銃に姿を変え、白夜の召喚獣に照準を定める。

「それが貴様の召喚獣の能力か？　そんなちゃちな能力で私に勝とうとは、何かのコントか？」

「言ったな！」

「わかったわかった。構ってやる」

白夜の召喚獣が手をあげ、宝剣が宙に舞い翔の召喚獣に照準を定める

「くらいやがれ！」

ブローニングM2から嵐の様に銃弾が発射され、白夜の召喚獣をハチの巣にしていく。

……と、それを見た誰もがそう思った瞬間。

パンッ！　（白夜の召喚獣が、手を合わせる音）
ガキンッ！！　（宝剣がブローニングM2に殺到し、砲身に突き刺さる音）
ボムっ！！　（ブローニングM2が暴発する音）

「能力にかまけるだけのバカが振るう力等、神の愛の前で無力だ」
「そっ、そんな……この、俺様が」
「貴様と私では、各と言う物が違う……覚えておけ」

所変わって……

「……幾ら俺が目的とはいえ、兄貴が共闘なんてする訳ないだろ」
「バカを言うでないわ。ワシ等の共闘を拒むなど、愚かにも程があるわい」
「まっ、妥当だな」
「そうだね。得なんてないからね」

さっさと終わらせたい光一が一歩踏み出した。
そこへグレートレンジャーの助っ人が。

「まあ大神白夜なんて居なくても、この僕さえいれば十分勝てるさ」
「バカを言うでないわビートルよ、それでなくてもグレートレンジャーに敵などない！　ではゆくぞ久遠光一。皆よ、今こそ決め台詞

を使う時じゃ！」
「「「おう！」」」
「さあ皆、僕に続くんだ。なんやかんやと……」
バヂバヂバヂバヂバヂッ！！！
「「「「「ぎゃあああああああああああああああああっ！！」」」」」
「何遊んでんだ？」
「決め台詞の、とちゅう、で……」
「知るか！」

コラボ問題　第４問（５）　『過激派と超人とグレートレンジャー総攻撃』（後

次回は間話として、ＦＦＦ団の合コン話を出して、それから改めてコラボを書きたいと思います。
ネタが思い浮かび次第なので、順番は不確定ですが。

第百三十五問　間話　とあるバカどもの合コン騒動（前書き）

今回はかずゐさんの問題を採用させていただきました。
ご協力ありがとうございます

第百三十五問　間話　とあるバカどもの合コン騒動

問題　次の諺の意味を答えなさい。

『情けは人の為ならず』

姫路瑞希の答え

『情けは人の為ではなく、いずれは自分に帰って来るから親切にした方がいい』

教師のコメント

正解です。姫路さんはいつも誰かのために一生懸命ですから、きっと皆良い印象を持っていると思います。

坂本雄二の答え

『情けをかける事は、その人の為にならない』

教師のコメント

良く間違えられてますが、違います。

吉井明久の答え

『情けをかける事が人の為にならなくても、僕は人にやさしくする事を悪いことだと思いません』

久遠光一の答え

『情けをかける事が人の為にならなくても、俺は大切な人たちを助

けていきたい』

教師のコメント
不覚にもほろりと来ました

島田美波の答え
『情けをかける事は人の為にならない。だからアキが悪い事をしたら、容赦なくお仕置きしないと』

教師のコメント
久遠君が怒る前にやめておく事をお勧めします

「へえっ、ちゃんと人数分集めたのか。大変だったろうに、ご苦労さん」
「そんな事より、わかってるの？」
「わかってるよ。で、あの事はちゃんと伝えたか？」
「心配しなくてもね。参加者は皆嫌々だったけど、これだけは賛成してくれたわ」
「そうか。ほれ」

光一が合コン参加者のリストを見て満足し、中林と小山を脅すのに使ったＭＰ３プレイヤーを投げ渡す。
それから光一を貶める為の計画書は、ライターを取り出し燃やした。

「……随分とあっさり渡すのね？」
「別にお前ら脅して得なんてこれ以上なさそうだし、お前らも俺にかまける余裕があると思えんしな。聞いたぞ？　代表代理を立てようって動きに実権奪われつつあるってな」
「「うっ！」」

実際ＥクラスとＣクラスでは、代表が頼りにならないだけに代表代理を立てる動きが活発化していた。

「まあそういきり立つなよ。これが上手く行きや、異端審問会のバカ共が変なことしなくなる可能性が上がる訳だし、悪い話じゃない筈だろ？」
「おかげで参加者には嫌われたけどね！」
「観察処分者になるのとどっちが良かったんだ？」

２人が光一を睨みつけた。
呆れる様に光一はため息をつく。

「そもそも俺を恨むのはお門違いだろうが。あの騒動の真犯人は清水だっつーのに、謝罪もなしかよ」
「アンタ達が普段から疑われる様な事してるのが悪いのよ！」
「成程、その理論で行くとお前らの失墜も、立場省みず勝手なことばかりしてるのが悪いと言う事だな」

２人が苦虫をかみつぶした顔になった。

「じゃあ逆恨みでこんなことするより、自分達の立場回復にでも努めろよ。俺だってちょっかい出さない限り何もしねえし、こっちから攻撃仕掛けた事もねえだろうが」
「そっ、それは……」
「それと言っとくけど、これ以上ちょっかい出すようなら……怒っちゃうかもな？」

２人が光一の目を見た途端、軽く悲鳴をあげ腰を抜かした。

「最近騒動に騒動が重なった所為か、自己暗示でキレた状態を意識的に引き起こせる様になってな。こうやっていつでも“凶王”になれるようになったんだよ。で、わかったか？」
「「……（コクコク！！）」」
「そうか……落ち着け、優子と愛子が悲しむ。大事な彼女たちを悲しませたくない……よし」

自己暗示の形で、普段の状態へと戻る。
手鏡を取り出して確認後、改めて２人に向き直る。

「んじゃ、これからは穏便かつ平和に行った方がいいぜ。その方が互いの為、だろ？」
「「……（コクコク）」」
「それじゃ、お元気で」

それからＦクラス教室にて。

「何着て行こうかな？」
「へへっ、俺にもようやく春が来るんだな」
「もうすぐ始まるバラ色の人生……どんな子が俺の隣を歩くんだろ

？」

合コン開催の報告後、Ｆクラスはほのぼのとした空気に包まれていた。

成功することを根拠もなしに完全に確信しながら、未来に思いを寄せていた。

……全員が見てて気持ち悪い笑みを浮かべてるのが、空気を台無しにしていたが。

「ねえ光一、大丈夫なの？」

「んな訳ねーだろ。あのバカ共の事だ、勝手にダメにしてくれるだろうよ」

「……ありえる話じゃの」

卓袱台を囲いながらその様子を見て、明久と光一、秀吉は呆れ果てていた。

「何の話ですか？」

そこへ瑞希が合流。

光一が麻酔銃を取り出すのを見て、少し警戒したように明久の隣に座る。

「ＦＦＦ団の合コンの話だ」

「ダメですよ久遠君。優子ちゃんに愛子ちゃんがいるのに、まだ足りないんですか？」

「あのな姫路、女たらしとして扱ってくれるのは嬉しいが、俺はあのバカ共の一員になった覚えはないし、参加するとは一言も言ってないが？」

「光一よ、女たらし扱いを嬉しいと言うのは問題あるぞい」
「では明久君ですか？　そうならちょっと首を……」
ちゃきっ！
「……明久君は、参加されないのですか？」
「あの、僕もＦＦＦ団に入ってないよ？　そもそも僕が行ったって意味ないだろうからね」
「おいおい……いや、そうかもしれねえな。普通“ただのクラスメイトの女子に”些細なことで殴られたり、関節技掛けられたり、拷問器具で傷めつけたり、釘バット持って襲いかかられたり、なんてされないだろうし」
「……光一も大概に酷いのう」
当然光一の目は刺す様に姫路に向けており、銃撃の様に容赦なく言い放った。
瑞希は光一の視線と口撃に、居心地悪そうに少し下がった。
「まあそれは何とかなるさ。お前はいい奴なんだから、きっといい人が見つかるだろ」
「……そうだと、良いんだけどね。あははっ」
自信なさげに、明久はそう返した。
“久遠君にとってそのいい人とは自分じゃないんだろうな”と、瑞希は少しさびしそうに明久を見て、はぁっとため息をついた。
「で、どうするのじゃ？　このままではＳＳＳ級異端者であるお主が危険じゃぞ？」
「……ま、手は打ってある。気にしなくていい」

それから放課後

「さて諸君、今日は待ちに待った合コンだが……準備はいいか！？」
「「「おーーっ！！」」」

雄二は翔子に、美波が美春に追われ教室の外へ。
そしてムッツリーニは、ムッツリ商会の（夫婦）経営に。

明久と秀吉、瑞希の3名が見守る前で、いつぞやの試召戦争の様にテンションの高いＦクラス。

「では、行って来い！　それと忠告だが、ＦＦＦ団の活動は今日は停止しろ。そうすれば道は開ける！」
「おいおい久遠、何をバカな事言ってるんだ？」
「そうだ。ＦＦＦ団は正義の組織だぞ？　それを活かさないでどうするんだ？」
「やれやれ、久遠もわかってないな」

口々にそれを否定した。
光一は痛む頭を押さえながら、はあっとため息をつく。

「……まあお前らがそうでいいなら止めはしない。どうせ無駄だろうが、俺の所為だとか言うなよ？」
「はっはっは、何をバカな心配をしてる？」
「そうだ。成功するのがわかりきってるのだから、何をお前の所為にしろと？」
「覚悟しろよ、お前の時代も今日で終わりだ」
「どんな時代だよ？　お前の時代も今日で終わりだ」
い……さて、早くしろよ？　女を待たせるもんじゃねえぜ？」

「「「おーっ！！」」」

全員が出て行ったのを見届けて、光一は持病になりつつある頭痛に悩まされながら床に座り込んだ。

「やれやれ、やっとか」

「大丈夫？　光一」

「俺位だろうな。頭痛薬持ち歩いてる高校生なんて」

ポケットから錠剤を取り出して、用意してた水と一緒に飲む。

ため息をついて、ポリポリと頭をかく。

「で、先程言っておった手とは何なのじゃ？」

「簡単な話さ。アイツ等が異端審問会をおっぱじめたら、とことん毛嫌いする様に言っておいた」

「……それだけかの？」

「あのバカ共は聞いての通り、異端審問会を神聖なものだと考えてるらしいからな。だから異端審問会の活動を根本から、それも複数の女性から貶されたら、あいつらだってダメージ受けるだろ」

「上手く行くの？」

「さあ？　こればっかは賭けだ。念のために姫路、お前明日アイツ等に弁当作ってやってくれ」

「え？　はい、わかりました」

そして次の日

「……うーっ、わうわう！！」

「……ほーほけきょ！」

「こけーっ！　こけこっこー！！」

「ぴよぴよぴよ！！　ぴよぴよ！！」

Ｆクラスは動物園と化していた。

「……なにこれ？」

「恐らく、昨日の合コンで光一の策が当たったらしいの……しかし、これは」

「いや、ここまでダメージになるとは思わなかったぞ？　まさか自分が動物と思い込んで現実逃避する程とは」

光一達は偉くひきつった顔で、感想を言い合う。

そこでＦクラス全員が光一の存在に気付き、殺到

「＋＊％＆‘　＄＄Ｅ“　％！！」

「＝￥～＠　～＊＋＜！！」

「＃＄＊“　＋”‘　＠＠＠！！」

「まずは自分が地球の日本にすむ人間という種だと思い出せ」

数分後

「何故だー！！　何故俺の魅力をわかってくれない！？」

「ＦＦＦ団という崇高なる正義の為戦う俺達を、何故誰もかれもが汚い物を見る目で見る！？」

「久遠、お前もっと人を選べよ！　俺達の意思を、正義を理解してくれる女性を呼べ！！」

泣き喚きながら、好き勝手のたまい始めるＦＦＦ団員

涙と鼻水まみれの顔が何人も詰め寄ってくる光景に、光一は顔をしかめながら昨日のうちに仕込んだ策実行。

「まあ落ち着けよ、失敗した時の為に姫路に頼んで慰めの料理を作って貰ったんだが？」
「「「文句言ってごめんなさい！！」」」
「そう言うんなら、遺さず……いや、残さず食えよ」
「「「イエス・サー！！」」」

その数分後。

「はい、どうぞ」

瑞希から一つずつ、可愛らしいサイズの弁当を受け取り、卓袱台につくＦＦＦの面々。
光一と明久、秀吉は廊下で合掌。

「……あの世で素敵な出会いのある事を祈ってやる」
「……君たちの事は忘れない」
「……安らかに眠るのじゃ」

Ｆクラスから学園中に、断末魔の大合唱が響き渡った。

第百三十五問　間話　とあるバカどもの合コン騒動（後書き）

次はＧＡＵさんのひばりとクリス、アキによる融合召喚のコラボを考えてます。
ちなみにそのコラボでは、融合召喚の開発者はアキという事で。

コラボ問題　第5問（2）　『来島アキ博士の融合召喚研究記録　前編』（前書

今回は、前回の予告通りに『バカと雲雀と召喚獣』のコラボでございます。
登場人物は支倉ひばり、クリスティーナ・ウェストロード、来島アキの3名。
この作品上での設定として、融合召喚の開発者はアキとなっております。

思った以上に長くなりそうなので、前後編もしくは前中後編になりました。

「アキえも～ん！」
「……その呼び方はやめて下さいと、何度言えばわかるんですか？」
「じゃあ来島大先生、ちょっとあなた様の開発した融合召喚の検証したいんですが？」
「そう言う大風呂敷もやめてください。まあ融合召喚がらみでしたら構いませんよ？」
「……その前に、ほれ」

やせ細った体躯の少年、久遠光一が常備してるボストンバッグから、一本の栄養ドリンクを取り出した。
目元に隈をつくった少女、来島アキはありがとうと一礼して、それを受け取り軽く飲み干す。

「いつもありがとうございます」
「てか、女子高生が目元に隈なんか作るなよ。どこぞの学園都市の脱ぎ女じゃあるまいし」
「最近忙しい上に積みゲーも多いから無理です。大体あなたの場合、そう言う心配は主に工藤さんと木下さんをメインにするべきでしょう？」
「2人ともアキに相手がいる事知ってるんだから構わんだろ。まあ仕事の時にはその彼氏さんが気にかけてるだろうから、心配いらないだろうが」
「ええ。ですがお心遣い、感謝いたします」

「おやおや、もしかして3人目かなん？　こういっちゃん」

その様子を茶化す様に、クリスティーナ・ウェストロードが2人の

間に割り込んだ。

「茶化すなよ。大体アキは友達、それ以上にも以下にもなる気はないよ」

「私も同じです。久遠さんはいい人ですが、既に心に決めた人がいますので。それより久遠さん、先程融合召喚の記録を」

「あっ、そうだったな。クリス、悪いけど相手頼めるか？」

「んむん？　いいよん。じゃあ早速保健室にベッドの準備を……」

スパンッ！

「なにする気なの！？」

「おおっ、相変わらずほれぼれする太刀筋ならぬハリセン筋だったな。ひばり」

愛ハリセン“小鳥丸”を手にする少女、支倉ひばり。

クリスに光一ですら称賛する様なツッコミを入れた彼女は、顔が真っ赤だった。

その隣では明久と秀吉が、光一とクリスを見比べて同じく顔を赤くしていた。

「……光一、モテるね？」

「……うむっ。弟分としては嬉しいが、どうにもの」

「あのな明久に秀吉。言っとくが、融合召喚の事をクリスが面白がって茶化しただけだからな？」

「おやおや、おねーさんのお誘いはお気に召さないかなん？」

「俺がどうとか以前に、クリスの好みは鉄人だろうが。俺の身体じゃ全然符合しないだろ」

そう言って突き出した腕には、筋肉というより骨というイメージ。

とても鉄人の様な力強さやたくましさなど、微塵も感じられない。

「んーにゃ、確かににしむーみたいなマッチョがおねーさんの好みだよん。でもこういっちゃんは……」

「じゃあ悪ふざけも大概にしろよ。それより融合召喚だけど、丁度良いから3人も手伝ってくれ」

「ん？　いいよ」

「えっと、うん。あたしも良いよ」

「うむっ、承知したぞい」

「んもうっ、こういっちゃんってばいけずだねい。でもそこが素敵だよん」

「はいはい」

クリスの話を無理やり終わらせて、光一は早速召喚を開始。

早速秀吉がフィールドをはって、科目は保健体育

『２－Ｆ　久遠光一　保健体育２３２点』

「これならこのメンツではつまる事はないな」

「あっ、そっか。光一の腕輪ってリミッターが付いたんだっけ？」

腕輪の性質と光一の点数上、試験召喚戦争で用いるにはバランスを著しく損なう為、合計で４００点以上の融合は出来ない設定となっている。

「じゃあおねーさんのと合体させるよん」

「そうだな。じゃ、サモン！」

「サモン！」

早速光一とクリスが召喚し、召喚獣に手を繋がせる。

（注：バカひばではまだである事及び、光一達がフライングで装備変更終えてる為、光一の召喚獣は黒一色のコート等の変更後の装備で、クリスは本編通りの装備です）
そして光一が腕輪をつけた手を掲げ、キーワードを。

「ユニゾン！」

腕輪が起動し、光一の召喚獣にクリスの召喚獣が溶け込むように消えていく。
そして召喚獣が光り、その場には……。

装備は、クリスの装備そのままの光一の召喚獣。
……という訳でもなく、背の翼は蝙蝠の様な形に変貌して手には爪がつけられ、持っている槍の形をしたライフルも、どことなく禍々しい獣をイメージした形に。
そして全体的な色が白ではなく黒くなっていて、そのイメージはまるで……。

早い話が、ス○ロボＯＧのライン・ヴァイスリッターのブラックバージョンである。

「……クリスが天使みたいなイメージだったのに、なんだか悪魔みたいだね」
「良いんじゃねえの？　悪魔は元々天使の“ナレノハテ”みたいなもんなんだ。俺にはちょうどいい」
「もうっ、そうやって久遠君は自分を粗末にする！　優子ちゃんに愛子ちゃんがいるんだから、そう言う事言っちゃダメでしょ！」
「あっ、ああっ。そうだな、軽率だったよ」

ひばりが腰に手を当てて光一に説教し、光一は委縮してしまう。

そこでふと、アキがある事に気がついた。

「っ！　……これは？」
「？　どうかしたか、アキ？」
「召喚獣を見てください」
「？　えーっと……っ！」

アキの様子に疑問符を浮かべた光一がみた先では、融合召喚獣は浮いていた。
召喚獣に飛行能力は備わって居ない為、腕輪の機能でなければ不可能の筈。

「なあアキ？　これはクリスの腕輪の能力が、何らかの形で発動されたってのか？」
「……何かのバグか、はたまたリミッターをつけた事による特殊な発動条件が出来たか、それとも召喚獣のパーソナルデータの関係か」
「おーい、開発者様？」
「はっ！　……すみません。もしかしたら、特別な条件による能力の発動という可能性があります」
「特別な？」
「おねーさんとこういっちゃんの合体が、何か特別な条件を満たしたって事かにゃ？　もしかしたら、こっちの身体の相性もよさそうだねい」

そう言って、しなだれかかる様に光一に抱きつくクリス。
背に当たる柔らかさを堪能するよりも、脆弱な足で踏ん張る事に集中していて赤面はしなかった。

「おねーさんそんなに重くないよん！」
「俺の体力甘く見るなっての……一般的のとは逆の意味で」

「そう言えば光一、工藤さんに抱きつかれると大抵そのまま押し倒されるよね？」
「あの、久遠君。こんな事言いたくないけど、情けないよ？」
ぐっさり！
「……もう良いだろその話は？　それよりも融合召喚だよ。クリスと融合して発動したってんなら、他の奴とも融合してデータ収集した方がいいんじゃないか？」
「そうですね。久遠さんとウエストロードさんは仲がよろしいですから、発動条件が一定以上の信頼という可能性は考えられますし、そう言う意味では木下さんと工藤さんとの融合召喚のデータが欲しいですね。それと融合媒介の方も」
「じゃあ先に融合媒介見ちまおう。丁度明久とひばりが居るんだし、もってこいだ」
「えっ！？」
光一に発言に過剰な反応をしたのは、ひばりの方だった。
何となく言いたい事を察した光一は、ポリポリと頭をかいて……
「あっ、あの、あたしじゃなくてみっちゃんの方が……」
「……そうだな。じゃあまずは姫路と融合させて、それからでいいか？」
「え？　……うっ、うん。それなら」
釈然としない部分はある物の、ひばりは了承。
光一も場合によっては気まずくなるかもしれないと踏んだ為、特に否定することなく妥協。
ガラッ！

「ねえ光一、帰りにラ・ペディスによってかない？」
「新作のケーキが出るから、３人で食べに……ってあれ？　また融合召喚の実験？」
「ああっ。それで今面白い事が起こったから、丁度呼びに行こうって思ってた所だ」
「そうだよん。おねーさんもこういっちゃんの甘いベッドタイムの仲間入りを」

スパンッ！

「だから、そう言う事言っちゃダメだってば！」
「うむむ……ひばりんもやるねい」

ひばりの“小鳥丸”によるツッコミを受けた後、説教を受けるクリス。
ポリポリと頭をかきながら、呆れた様にそれを見る光一。

「まったく、悪ふざけも程ほどにしてもらいたいよ」
「悪ふざけって、アタシには懐いてる様にしか見えないけど？」
「冗談よせよ。クリスの好みは鉄人みたいな奴なのに、どこをどうしたら俺と符合するんだ？　大体優子に愛子の片方だけでも運を一生分使い果たしたかもしれないってのに」
「……そう言ってくれるのは嬉しいけど、真顔で言わないでほしいわ」
「……流石にボクも恥ずかしいよ」
「？　どうかしたのかな？」

優子と愛子が顔を赤くしてどぎまぎしてるのを、光一は疑問符を浮かべながら見ていた。

「それはそうと、姫路はどこだ？」
「え？　はい、呼びましたか？」
「ちょっと明久と融合召喚してくれないか？」
「え！？　あっ、あの。待ってください、今シャワーを……」

スパンッ！

「みっちゃん落ち着いて！　融合召喚って言ってたんだから！」
「……あの、いつになったら始まるんですか？」

ただ1人、ずっと蚊帳の外だったアキがぽつりと寂しそうにつぶやいた。

コラボ問題　第5問（2）　『来島アキ博士の融合召喚研究記録　前編』（後書

近いうち、コラボはコラボで章編成します。

コラボ問題　第5問（3）　『来島アキ先生の融合召喚研究記録　中編』（前書き）

前回の続きで、融合召喚をテーマにした『バカと雲雀と召喚獣』とのコラボです。
結局ですが、前中後編にしました。

「いつも思う事だけど、どうしてたかが……は失礼か。召喚獣の融合を変な風に解釈するのやら？」

「常にいやらしい想像をしているバカだらけだと言う良い証拠じゃないですか。まったく、……幾度となく失敗しても研究に研究を重ねて、その末にようやく作り出せた新技術だと言うのに、誰もかれもがいやらしく解釈するだなんて！」

光一のうんざりと言わんばかりの態度に、むっとした顔のアキがそれに相槌を打った。

アキにしてみれば、自身の努力と英知を重ねて作りあげた自信作ともいえる融合召喚の腕輪。

だと言うのに、それを変な解釈をしたりそう言う目的でやりたがる人間ばかりで、不本意を通り越して怒りを覚えていた。

「いやらしい、ね……」

光一が呆れたように、クリスと瑞希に視線を向ける。

「えぅっ……えっと、その……ごめんなさい」

「ちょっとこういっちゃん。それじゃおねーさんとお姫ちんが、常日頃からいやらしい事ばかり考えてるスケベみたいだよん？　否定できないけどねい」

「出来んのか！？　……ま、自覚してる分まだマシか」

ため息をつきながら、次はFクラスの面々に目を向けた。

「おい久遠、何だその目は？」

「お前まさかとは思うが、俺達が常日頃からいやらしい事ばかり考えてる変態だとでも思ってるのか？」
「失礼な奴だな。工藤と木下姉を騙して二股かけてるお前ならともかく、ＦＦＦ団という正義の元戦うジェントルマンたる俺達に向かって」
「そうだそうだ。名誉侵害も良い所だ！　土下座して工藤と木下を俺に譲り渡すべきだ！！」
「テメ、何勝手ほざいてやがる！？　久遠に土下座させるのは賛成だが、木下と工藤は俺んだ！」

うん、やっぱりこいつらよりはマシだ。
と思いながら、痛む頭を押さえてため息をついて……。

「愛子、パンチラ見せて」
「いいよ。はい」

ダッ！　（Ｆクラスメンバーが駆け出す音）
ザザッ！　（全員が見える位置で伏せる音）
パシャっ！　（それを光一が携帯カメラで撮影する音）

「「……」」
「あっひゃっひゃっひゃっ！　流石だねい、めくったと同時に全員飛び出してたよん」
「あっ、あはは……」
「……もう」
「こやつらは……」

優子とアキが白い目で、クリスは大笑いしながら。
瑞希が苦笑いをし、ひばりと秀吉が呆れたように伏せているバカ共を見ていた。

ちなみに明久は事前に光一がアイコンタクトで知らせてた為、耳をふさいだうえで目をそらしていた。

「で、何か言いたい事はあるか？　変態という名の紳士どころか、紳士の名を騙る変態共」

「ちっ、違う！　これは、その……ペンを落としたんだ！」（卓袱台５つ離れた先に居た）

「ちょっと、コンタクトを落としちゃって……」（視力２．０）

「部活の時のクセで、受け身をとっただけだ」（帰宅部）

「ほふく前進の練習をだな？」（意味不明）

「……久遠さん、目障りで耳障りなので追い出してください」

「はっ、追いだす？　バカ言え、そんな生ぬるい事言わず処分してやる」

数分後

「久遠君はいつもそうやって暴力で事を片づけるよね？」

「いや、今回は非難される筋合いないと思うんだが？」

「……まったく、あんな人たちに私の融合召喚を汚されるだなんて」

バカ集団が光一に処分されてからも、アキは不機嫌さを隠せずにいた。

光一にとっては文字通りに痛い程理解できたため、慰める様にポンポンと肩をたたく

「……私がどれだけ試行錯誤を重ね、何日も徹夜して実験と考察に明け暮れたと思ってるんですか？　そりゃあ、彼と一緒に頑張れたと言ういい思い出もありますが、尚更皆してバカにするなんて許せ

ません」
「うんうん、わかるわかる。大体どうして召喚獣の融合で、同性愛者だの不潔だのバイだの入れ食いだの、散々言われなきゃならないんだか」

「もうっ、姫路さんもウエストロードさんも、ちゃんと謝りなさいよ？」
「……そうですね」
「……うむんっ、おねーさん反省だよん。だからこういっちゃん、あちしを見捨てないでおくれ～！！」
「いや、だからどうして俺！？　ちょっ、コラ抱きつくな。あのバカ共よりかは好印象ではあるから！　ちょっ、当たってる！　当たってるってか、何で抱き上げる！？」
「おねーさん感激だよん。じゃあ早速保健室に……」
スパァアンッ！

「そう言う事ばかり考えてるから、来島さんが怒ってるんでしょ！？」
「あううっ……ひばりん、ツッコミのスピードさえてるねい」
ぷんぷんと表現する様に怒りながら、正座するクリスに説教するひばり。
やれやれとため息つきながら、ふと当初の目的を思い出す光一。

「って、考えてみたら融合召喚のデータ収集する筈なのに、話それまくってるな。これ以上へんな邪魔が入らないうちに、さっさと明久と姫路の融合召喚すませるぞ……なんか疲れた」
「……そうしてください。私もいい加減変な茶々入れられると、冷静でいられる自信はありません」

「そうね。自分が苦労して作り上げた代物が、こうも変な価値観に晒されてばかりじゃ腹も立つわ。アタシも協力するから、早く済ませましょ？」

優子もアキを慰める様に、ポンポンと背を叩いた。

「明久、姫路、とっとと準備。こんな所雄二に見られたら、絶対ろくでもない事になるから」

「はっ、はい。えっと、保健体育は３１５点でしたから、大丈夫です。サモン！」

「僕は、６３点だったから、えっと……合計３７８点だね？　サモン！」

「はい、良くできました。じゃ、始めるぞ。クロス！」

２人の召喚獣の背に手を当て、準備完了。

左手の腕輪を掲げ、キーワードを言うと、２体の召喚獣が光一の召喚獣の手に吸いこまれ召喚獣が手を合わせる。

その次の瞬間……

ハートの装飾がスペードとなり、可愛らしさより凛々しさを優先させたような装飾に。

そして手には、２本の召喚獣の背丈を軽く越した大剣を持った瑞希の召喚獣が姿を現した。

「こりゃ何とも、力強そうになったな。大剣を2本も持ってるなんて」

「明久君と融合させると、こうなるんですね」

「へえっ、たかが明久が融合した位でこうなるのか」

ふと割り込んできた声に、光一はそちらに目をやる。

「ん？　なんだ、居たのかゴリニ」
「ゴリラと雄二を混ぜて斬新な名前をつけるな！　……いや、それよりも随分面白そうな事をしているな？」

ニヤニヤとした笑みを浮かべる雄二を見て、あーこりゃろくでもないこと企んでるな、と瞬時に察した光一。
優子に目配せして、頷いたのを確認して頭に手を当てる。

「なんだ、お前もしたいのか？　言っとくが、ＦＦＦのバカ共はさっき処分したから」
「じゃあ代表呼んで来るわ」
「待て！　俺は融合したいとは一言も言ってないし、増して翔子となんて融合したくねえ！」
「雄二、その言い方じゃ誤解招くぞ？」

ふと雄二が見ると、顔を赤くしてる優子とひばりと瑞希。
そして面白そうと言わんばかりに笑みを浮かべる愛子とクリスと、やれやれとため息をつくアキ。

「だーっ！　待て待て、そう言う意味じゃなくて……いや、そう言う意味でもあるが、融合召喚なんてしたくねえって意味だ！　それ以前に、代表格への融合召喚による干渉は出来ないだろうが！！」
「問題ありませんよ。私ならすぐにその設定は解除できます」
「じょっ、冗談じゃねえ！」

即座に駆け出し、窓から脱出して行った雄二。
光一はその脱出した窓に向かってアッカンベーをして、召喚獣の方に目を向ける。

「えーっと……何か変化がある訳じゃなさそうだな？」
「そうですね。姫路さん、ちょっと動かしてみてください」
「え？　はっ、はい」

熱線を打つ様に腕を振っても、特に影響はなし。
剣を振ってみても、以前より動きに制度を増した位。

「……どうやら観察処分者との融合という事もあるのでしょうが、操作精度が増しているようですね」
「となると……ちょっと失礼」

光一は召喚獣に、軽くデコピンしてみた。

「わっ！」
「きゃっ！」
「やっぱ2人共に影響行くんだな。さてセパレイションっと……さて来島大先生、次はどうする？」
「そうですね。もう少しデータが欲しいので、支倉さんお願いします」
「えっ！？　うっ、うん。わかった。サモン！」

倭刀を持ち、蒼いブレストアーマーに貫頭衣のような装束をまとった、ひばりの召喚獣が姿を現した。
融合召喚獣の融合を解除した光一が、両名の召喚獣の背に手を当てる。

「それじゃ、お二人の門出を祝って、こういっちゃん！」
「もっ、もうっ、クリス。悪ふざけは程ほどにして！」
「ではでは、お二人の融合召喚獣が現れましたら、盛大な拍手をっと。“クロス”！」

「久遠君まで……」
「いやらしい事ではないのですし、いいじゃないですか。さて……」
融合召喚獣に目をやると、そこには蒼いマントと白い装束。
右手には倭刀、左手にはソードブレイカーと呼ばれるナイフが握っている、ひばりの召喚獣が。
倭刀の方も刃が連結式になっており、カッターナイフの様なつなぎ目が見えていた。

「へえっ、ひばりとの場合はこうなるんだね」
「なら前線指揮官の俺としては、大助かりだな。ひばりは全科目バランスよくCクラス級だから、融合させやすい……が、より強い戦力に付加価値が付いた姫路もまた、大助かりだな」
「そっ、そう。そうだよ、あたしよりみっちゃんを優先すべき！」
「状況にもよるから一概これとは言えないぞ？　それに４００点の制約もある訳だから、姫路の場合だとどうしても消耗した時の援護措置って傾向が強くなる」
「あっ、そっか」

どちらにしても、状況により必要な要素が変わる事を否定しきれない。
結局は、その場その場の光一の判断力に任せる事にして、妥協した。

「この場合は仕方ないから久遠君の判断に任せるけど、ひいきはしないでね？」
「しねえよ。戦争は戦争、色恋沙汰は色恋沙汰で折り合いつける事位出来るから、私情挟んだりしねえよ」
「じゃあ信じるからね？」
「任せとけ。さて、そろそろ能力検証と行こうじゃないか」

「やっぱりこういっちゃんは頼りになるねい。あちしの好みどストライクだよん」
「好み？　確かマッチョが好みじゃ……」
「それは外見上の好みだよん。おねーさんは外見より中身を重視するから、こういっちゃんはモヤシでも“頼りになる人”って言う、おねーさん好みの良い男なんだよん。過激派筆頭や凶王って呼ばれてるのだって、裏返せばそう呼ばれる位の能力は持ってるってことだからねい」
「ねえ優子、どうする？」
「どうするって……どうすればいいのよ？」

コラボ問題　第5問（4）　『来島アキ先生の融合召喚研究記録　後編』（前書

バカと雲雀と召喚獣のコラボ、後編です。
何と言うか、光一って他の作家さんのオリ女子に好かれやすいみたいです。
……だからという訳じゃないですが、自分でもびっくりです。

何と言うか、展開的にこういうストーリーの流れを組んでしまった事は、一切後悔してません。

コラボ問題　第５問（４）　『来島アキ先生の融合召喚研究記録　後編』

『Ｆクラス　久遠光一（＋工藤愛子）　保健体育１５６点＋２４３点』

「削るの大変だったけど、良かったのか？」

「良いよ、また受ければ良いんだから」

素肌の上に黒いジャケットを纏い、手には電気を纏ったバズーカ砲を持った愛子との融合召喚獣。

（融合召喚での召喚は、どうやっても光一メインになる）

ひばりと明久の融合召喚獣と戦わせる、という前提での融合召喚

……しかし、それには問題があった。

「……どうやら愛子の場合は、“電磁砲”がデフォ装備になるらしいな」

「これは確か、以前の融合召喚獣の腕輪の能力でしたね？」

「じゃあやめとこう。流石にフィードバックがある以上、これは酷過ぎる」

電磁砲は以前、４００点近くあった召喚獣を一撃で上半身を消し飛ばしている。

それをまともに受ければどうなるかなど、火を見るより明らかだからだ。

明久にひばりも、その時の事を思い出し震えながら云々と頷いている。

「結果から想定するに、やはりどちらでも一定の信頼値を超えると特殊能力が発動する様です」
「成程ねぃ、おねーさんはあいぽん並にこういっちゃんと繋がってるって事だねぃ。いやん、まいっちんぐ」
「喜んでる所悪いけど、ただ単にその一定値以上ってだけだろ。まあそう言う意味じゃ納得はするけど」

体をくねらせて喜ぶクリスに、光一がその喜びに水を差した。
ちょっとだけその表情を曇らせ、すぐにむくれた顔になったクリス。

……光一はその雲った表情を見逃さず、頭にとどめておく事にした。

「むむ～っ、つれないにゃーこういっちゃんは。おねーさんの身体はそんなに気に入らないかなん？」
「何で身体限定なんだよ？　生憎と間に合い過ぎてて……あれ？」
「あいぽんにゅーこりん、おねーさんを仲間に入れとくれぃ。おねーさんも混ぜて４ぴ……」

スパァアンっ！！

「優子ちゃん達を困らせちゃダメでしょ！」
「うぅっ……ひばりん、とめないでおくれ～」

「さてアキ、データまとまったか？」
「はい、今回はここまでにしましょう。そろそろ回数制限のリミットの筈ですから」
「そうだな。融合召喚もまだまだ奥が深い」
「人と人との交わりがテーマですからね。まだまだ改良の余地がある技術です」

クリスとひばりのやり取りそっちのけで、光一はアキと融合召喚についての談議。
ぶーぶー言い始めるクリスの顔は、やはり先程の様な曇りがあった事を光一は見逃さなかった。

それから数分後

「……ま、こんなところかな。姫路は長所が伸びて、ひばりは中距離に加えて武器折りが加わったから、俺としては戦略が立てやすくなって大助かりだよ」
「そだねい。アッキーはやっぱり、お姫ちんとひばりんの二柱と見てよさそうだねい」
「……それは元々わかりきってた事だったろ？　まあ問題は雄二とバカ共の駆逐……って、今は試召戦争関連の話なんだがな？　その意見には賛成だが」
「あっひゃっひゃっひゃ！　やっぱりおねーさんとこういっちゃんは気が合うねい」
「……否定はしない」

融合召喚を用いた戦略の考察をする光一
それにひっついてるクリスは、それに茶々を入れて楽しんで居た。

それだけを聞けば、恋人の語らいやスキンシップなどという表現も出ていたに違いない。

「……それはそうとクリス」
「ん？　なにかにゃ？」
「……抱きつくのはいつもの事だからよしとするけど、頭の上に胸をのっけるのやめてくれないか？」

「のっけてんのよ」
「言うと思ったよ！」

……体勢が背中から、しかも光一の頭に存在感たっぷりの胸を乗っけているのが、それらの表現を潰して扇情的な表現にとって代わられていた。
じたばたとあがいて見せるが、非力な光一にクリスの抱擁を力尽くで逃れると言う事が出来ない。

ちなみに優子と愛子は、光一の頭の上に乗っかってる物を見て、自分のと見比べうなだれていた。

「いやあ、この体勢楽なんだよねい。なにせおねーさんFだから、肩がこっちゃって」
「えっ……！？　いや、何言いだすんだよ！？」
「何って、こういっちゃんのハーレムに加えて貰うべく、おねーさんはプライドと身体をかけたアタックをば」
「プライドはいいが身体はかけるな。少々悪ふざけ過ぎるぞ？」
「よよよ、かなしいにゃー。こんな美人でだいなまいとばでーなおねーさんの精一杯なアピールを、悪ふざけと受け取るだなんて……」

泣き真似をするクリスを見て、女性陣が非難の視線を光一にぶつけるやれやれと言わんばかりに頭をかきながら、ウソ泣きだとわかりつつも（数名気付いてないが）光一は対応。

「アピールって……そんな美人でだいなまいとばでーなおねーさんが、俺みたいな危なっかしい二股男にアピールなんて酔狂なマネする事自体、おかしな話じゃないか？」
「そんなの関係ないよん。そう言わずにもっとこう、おねーさんを抱きしめて“今からお前も俺の物だ、後悔してももう遅いぜ”……

みたいな事言えないのかねい？」
「言えねーよ。てか“も”ってなんだよ？　そう言うんなら離せ」
クリスは腕を解いて光一の口調をマネしての主張し、光一はポリポリと頬をかきながら離れた。
その様子を見て付き合いの長い優子と秀吉の姉弟は、光一の心境を察した。

光一は小さい頃より人からの好意を向けられる事自体なかった為、今でもそう言う事には全然慣れていない。
だから好意を好意だと受け取る認識自体が普通より薄い為、どうにもしっくりとこないでいた。

「クリスよ、わかったぞい。光一にはそういうアピールでは伝わらぬ」
「そうね。考えてみたら小さい頃から白夜さんと比較されては貶されいじめられ続けて、ご両親が離婚されてからもケンカに明け暮れる日々だったから、そう言う好意を向けられる事自体に慣れてないのよ。光一はね」
「あっ、そっか。光一って、秀吉と木下さん以外で初めてできた友達が、僕だったんだよね？」
「……久遠君が、木下君や明久君を何かと気にかける理由、わかる気がします」

いじめられていた事は知ってはいたものの、流石に兄と比較されての事とは知らなかった。
しかも何かと暴力的な部分が目立つ人物である事を思い出し、それだけじゃない事は全員が察した。

「……思った以上に辛い人生送ってきたんだね。光一君って」

「……なんだか悲しいね。久遠君と大神先輩は血を分けた兄弟なのに、生まれ持った物の違いだけでそんな事になるなんて」
「人はどうしても勝手な価値観で人を見てしまいますから、ある種仕方がない部分もあります。そう言った物に晒され続けた結果が、今の久遠さんと大神さんなのかも知れません」

アキの説明に、全員が納得した。
光一が敵対者に対し異様なまでに残酷な面が目立つ事や、白夜が自らを神に選ばれた存在と豪語する程に傲慢な人物であることが、それで説明できてしまうだけに。

「……おーい、何で俺の昔話になってるんだ？」
「こういっちゃんも苦労してたんだねい。ここはおねーさんが慰めてあげよう」
「いや、だからぶっ！」

……クリスの胸で窒息しかけてる本人を置き去りにして。

数分後

「ふむんっ……つまりおねーさんのやり方じゃ、こういっちゃんには届かないってことだねい？」
「……まあ、そうなりますね。でも何番目でもいいとは言いましたが、あまり増えて貰っても複雑です」
「だよね。そりゃあボクも現状に不満はないし、光一君も平等に接してくれてるから居心地いいけど……複雑な事に変わりはないから」

「はーっ、はーっ……あーっ、空気がうまい。なあ明久、さっきから俺そっちのけにされてる気がするんだが、一体何がどうなってる

んだ？」
「……光一、自分の事になるとてんで鈍感なんだね」
「久遠君とアキ君って、色々な意味で共通点多いよね？」

クリスに優子、愛子のやり取りを見ながらの、光一と明久の会話。
それを聞いてのひばりの一言にその他面々は頷いて、光一と明久は文月学園1の名コンビだと実感していた。

「光一よ、よもやクリスまでもとは、お主は何人誘惑すれば気が済むのじゃ？」
「誘惑って……待て秀吉、俺はお前の中で既に女たらし確定なのか!？　すげえ嬉しいじゃねえか」
「「「「「「「嬉しいの（ですか）！！？」」」」」」」

「……そう言えば光一、融合召喚の事で変な噂が付きまとってて、さっきの話とは別の意味で壊れてたのよね」
「……迷惑な話だよね。ボク達の関係でさえ光一君、バイとか入れ食いとか性別すらも節操なしとかばかりで、女たらしなんて言われた事ないみたいだから」
「……それもある意味すごい話だねい。おねーさんも流石に笑えないよん」

したが、予想外の返答に全員がビックリ。
……現状ですら、光一を取り巻く環境は“あらゆる意味で”酷い物だと認識させられただけだった。。

時は過ぎ、文月の屋上にて。
光一はクリスの頼みで、2人でそこに居た。

「で、話って？」

光一がフェンスにもたれかかりながら、同じように光一の隣でフェンスにもたれかかるクリスに問いかける。

「こういっちゃんは、自分をどう思ってるのかなん？」

「自分を？　……さあな。危なっかしいと思われてるヤツって事なら、知ってるけど」

「ホント、自分の事には無頓着だよねい」

「気にした所でどうにかなる物じゃなかったからな。これだけは」

その言葉に重みがある事を、クリスは理解した。

「こういっちゃんは、あちしの知ってる限りでにしむーの次位に頼りになる男だよ？　びゃくやんは頼りになると言うより、苦手意識強いからねい」

「じゃあ鉄人にアピールすれば……」

「……もうフラれてるよ。だからこういっちゃんを代わりに、って言うんじゃないけどね」

無頓着すぎたなと反省するより、今のクリスの雰囲気に目を奪われた。

とてもいつもからは想像できない、清楚で静かな雰囲気。

「……成程、今のクリスが本来のってところか？」

「……気付いてたの？」

「以前島津先輩に聞いた事があってな。１学期における、自分たちの年代で初にして最大級の、ＢクラスとＡクラスの戦争の話。まあ代表の名前までは聞かなかったけど、最後が代表同士の一騎打ちだったって」

「懐かしいな。びゃくやん強くて、負けたときはすごく悔しかったの覚えてるよ」
「……けど、そのＢクラス代表は突然学園に来なくなった」
クリスが光一から、顔をそむけた。
心なしか身体が震えてるのを、光一はあえて見て見ぬふりをする。
「……何があったか、までは聞かねえよ。未だに兄貴の影をぬぐい去れない経験上、踏み込まれたくない事はわかるからな」
「こういっちゃんの傷だらけな心の傷の中で、一番深い傷だけの事はあるんだね」
「傷だらけ、ね……かもしれないな。だとしたら、もう傷つくことに意味がない位に傷だらけってところか」
「……心が傷だらけなのに、それでも自分が選んだ道を駆け抜ける強さを持ってるこういっちゃんは、すごく素敵だって思うよ？　だからゆーこりんもあいぽんも惹かれたんだと思うな……私もね」
クリスは光一の腕をとり、ぎゅっと抱きしめた。
「……ただ単に、立ち止まる事を知らないだけだっての」
「人は勝手な価値観で人を見る……だよ？　そんな強さが欲しかった私から見たら、それを持ってるこういっちゃんが泣きたい位に羨ましい」
「……羨ましい、ね。何となくわかるのが、無性に腹が立つ」
クリスは光一の機嫌を損ねたのかと、慌て始めた。
光一はその様子に疑問符を浮かべるが、ああっ、と頷くと……
「そうじゃねえ。あの兄貴と比べられ続けて来た事、さっき聞いたろ？」

「……そう言う事？」
「神に愛された兄貴、生まれ持った天賦の才……その所為で、兄はたった1回で自転車に乗れた、とか。兄だったらすぐにこんな問題解けた、とか。ずっと兄貴が付いて回ったよ……そのたびに何で兄貴だけなんだって、ずっと思ってた」

ギリッと歯軋りの音が、少しだけその場に響く。
クリスも、抱きかかえてる腕が震え拳を握りしめるのを察し、そっと腕を離した。

「……こうして自分を省みると、何となくわかった。クリスが俺にやたらとひっつく理由」
「っ！？」
「自分を知られても受け入れてくれるかどうかが不安で、それでも頼らずにはいられない……ってところか？　実を言うと、優子に告白したのもんっ！」

その先を言おうとして、それは遮られた。
光一の見開かれた眼には、間近に目を閉じたクリスの顔と唇に感じるやわらかい感触。

「……ぷはっ……またいきなりかよ」
「……ごめんこういっちゃん、今だけはこうさせて」
「はいはい……愛子と優子に怒られる覚悟はしとくか」

その次の日の朝。

「ん？　なんだ？」

光一の存在を人だかりが確認すると、ひそひそと何事か囁き始める女子。
いつものことと流してる光一だが、明らかにいつもとは様子がおかしいので気にかかった。

「……何なんだ一体？」
「あれではないかの？」

秀吉の指差した先には、文月新聞。
そこにデカデカと掲載されてるのは……

「あっ！」

昨日のクリスが光一に抱き付いて、キスをしてる光景の写真だった。

「もう……愛子と相談して、ウェストロード先輩の参加とこれからの事を話しあう必要があるわね」
「……あの、優子さん？」
「あら、これでも怒ってるのよ？　……光一からじゃない事も、アタシにとやかく言う資格がないのも、わかってるんだけど、ね」

笑ってない笑顔から、光一は顔をそらした。
その先には、やれやれと頭を押さえる鉄人。

「全く貴様は、色々な意味で過激派筆頭の名に恥じぬ事をやらかしてくれるな」
「いや、待て鉄人！　どうせ聞かないだろうが、これには理由が……」
「理由はどうあれ、そう決めたのならば何も言わん。ウェストロードのことを大事にしてやれ」

「いや、まあ良いですませるな！　おい待て、今なら鬼の補修でも何でも受けるから！！」
「それは出来んな。お前の女性関係については黙認しろという、学園長からのお達しだ。木下に工藤と付き合い始めてから、お前が問題を起こす可能性が低くなったと言う事が認められた上でのことだ。よかったな」
「完全にありがた迷惑だ！」

「だったら潰してやるよ。お前ごとな」

光一の視界に飛び込んだのは、異端審問会と3年の男子生徒の集団。それを率いるのは、２－Ｆ代表坂本雄二。
集団の中には……

「あっ、変態親指」
「誰が変態親指だ！　テメエ、よりにも寄ってウェストロードをたらし込みやがっただあ！？」
「……そう言えばあんた、クリスの事好きだったそうだな？」
「まともな奴だったら許す！　だがテメエだけは許せねえんだよ！！」

夏川を始め、その集団がうんうんと頷き光一に刺す様な視線を集中。
3年の集団はかつては、クリスに想いを寄せていた集団である。

「おい鉄人、これはいいのか！？」
「久遠、ふりかかる火の粉は自分で払え」
「この学園の暴力に対する認識、絶対おかしいだろ！！」

やむおえず、光一がスタンガンを取り出し威嚇する様に放電。

「あれ？　何の騒ぎ？」
「あっ、あれ久遠君と坂本君ですよ？」
「もうっ、坂本君。また久遠君に何かしてるの？」

そこへ、瑞希とひばりを伴った明久が到着。
それを見た雄二が、ふとある事を思い出しニヤける。

「須川、明久の野郎どうやら支倉に姫路の二股してやがるぞ？」
「えっ！？　ちょっ、何言ってるの雄二！？」
「ほうっ、それはいい情報だ。近藤一級審問官、久遠光一と吉井明久の罪状を“手短に”読み上げたまえ」
「はっ！　吉井明久は我らがリトル・ゴッデス事、支倉ひばりに姫路瑞希を二股かけてて超羨ましいであります。そして久遠光一はクリスティーナ・ウェストロードに木下姉、工藤愛子と3股掛けてて泣きたいほどに目茶苦茶羨ましいであります！！　うぉぉおおおおおんん！！」
「よーし、総員明久と光一を取り囲め！！　今こそ切り込み隊長コンビの栄華を終わらせろ！！」
「「「「うおおおおおおおっ！！」」」」

「ええい。明久、逃げるぞ！！」
「了解！」
「絶対に逃がすんじゃねえ、殺せ！！　特に光一、テメエにこれ以上女を増やされてたまるか！！」

2人が逃げていくのを、行かれる集団が追いかけて行った。
そして取り残されたのは、女子達と秀吉のみ。

「……えーっと、ひばりちゃん？」
「えっ？　えっ？　ちょっ、待ってよ！　あたしは……」

置いてけぼりのひばりと瑞希は、互いに互いを見て慌て始めた。
そこへ、原因ともなる人物のもう1人が。

「んむんっ？　何か騒ぎが起きてたみたいだけど、どうしたのかねい？」
「あっ、ウェストロード先輩。あれの所為よ？」
「あっ……いやん、まいっちんぐ。ごめんねーゆーこりん、こういっちゃんが魅力的過ぎてついー」
「後で色々と話がありますから、それが終わったら改めて光一に告白してくださいね？」
「およ？　あちしもゆーこりんたちの仲間入り？　やったー、うれしー」
「あっ、ちょっ！　……うぅっ、アタシもこれとまでは行かなくても、これの一回りとは言わないけど、三周り下位あれば」

歓喜するクリスに抱きつかれた優子の胸中は、押し付けられてる柔らかな感触に対する羨望でいっぱいだった。

「迷いは晴れた様だな、ウェストロード」
「あら、仲がよろしいようですね。羨ましいですわ」

優子とクリス、そして秀吉にとって聞きおぼえがある声。
3－A代表にして光一の兄の大神白夜と、小暮葵。

「……白夜殿」
「……白夜さん」
「おひさしー、びゃくやん。それともお義兄様って呼ぼうかなん？」
「誰が義兄だ!?　そして私をそんなふざけた愛称で呼ぶなと何度言えばわかる!?」

「まあまあ、落ち着いてください代表。ティナも……いえ、クリスも、少々複雑ではありますが、久しぶりに心からの笑顔に見れた事、私は嬉しく思います」
「えへへっ、ありがとねあおちゃん」

クリスは笑いながら葵に手を差し伸べ、葵も握り返す。
その手が解かれた所で、白夜が一歩前に。

「ウェストロード、改めてお前に再戦を申し込む、今の貴様なら私の通過点として申し分ない」
「おやおや、負けず嫌いというか、意味ある勝利にどん欲だねい。びゃくやんも」
「神の愛を授かったが故の責務だ。その通過点と認められたことを光栄に思え」
「いいよ。でもそれは後で良いかな？　こういっちゃんに激励して貰いたいから」
「よかろう。くだらぬが、それがお前の力の源ならば是非もない。行くぞ小暮」
「はい」

第百三十六問　間話　『とある昼休みの料理談義』（前書き）

今回はキリトさんからの問題
……を元に考えました。

提供していただき、ありがとうございます。

第百三十六問　間話　『とある昼休みの料理談義』

ここでちょっと簡単に質問としましょう。

手の指のそれぞれの呼称を答えなさい

根本恭二、小山友香、清水美春、中林宏美の答え
『答えたくありません』

教師のコメント
おや、応えることへの拒否とは感心しませんね。
……ですが思い当たる節がありますので、今回は良しとします。

久遠光一の答え
『中林、清水、小山、根本、変態』

教師のコメント
それは君の召喚獣の特殊能力である巨大ゲンコツの指に浮き出る顔の本人の名前です。
しかし先輩である夏川君を変態呼ばわりは感心しませんね。

吉井明久の答え
『中林さん、清水さん、小山さん、根本君、変態先輩』

坂本雄二の答え
『中林宏美、清水美春、小山友香、根本恭二、夏川変態』

教師のコメント
だから何故夏川君だけ変態呼ばわりなのですか？
一応先輩なのですから、礼儀をわきまえてください。

２学年全員の答え
『中林宏美、清水美春、小山友香、根本恭二、名前知らない』

完全に久遠君の特殊能力がイメージとして固定しているようですね。
それと親指の顔の人は夏川俊平、３－Ａ所属の君たちの先輩です。

「やっぱり、気落ちするわね」
「……そうだね」

文月学園昼休み。
ローテーションで作る事になった弁当は、本日は光一が弁当の当番。

「？　口に合わなかったか？」
「あうわよ？　寧ろ美味しくて文句のつけようがない位に……」
「うん……だからこそ、気落ちしてるんだよね」

実の所、優子と愛子にとって、自分達の中で光一の弁当が一番美味い事が悩みの種となっていた。
頭では光一は小学校の頃から半1人暮らしをしていた事を知っている為、どう仕様もない程に経験の差がある事は理解はしている……が。
頭では理解しても、というやつである。

「そんなに美味しいんですか？」
「あっ、そっか。姫路さん知らないんだっけ？　光一の家って両親が離婚してて、光一小学校の頃から半1人暮らししてたんだって」
「うむっ、ちなみに光一の家事の師匠は母上じゃ。離婚で光一の母が仕事せねばならんかったし、光一が独立できる様になるまでは、ウチで預かっておったのじゃ」
「え？　じゃあ小学生でもう独立してて、それまで木下君達姉妹と一緒に暮らしてたんですか？」
「姫路よ、姉妹ではなく姉弟じゃ！」

それを傍から見てる明久と秀吉が、光一の許可をもらって同伴してる瑞希に説明。
勉強会に昼休みと、光一の腕前を知る機会が殆どと言っていい程なかった為、瑞希は光一の腕前を知らない

「やっぱり女の子にとって、料理の腕は大事ですね。あの、明久君、今日はお弁当を……」
「それ薬物反応でたら追い出すからな？」
「……と思いましたが、忘れてきちゃったみたいです」

やっぱりか、と頭を押さえながらつぶやく光一。
明久と秀吉はぐっと親指を立て、光一もそれに気付きそう返した。

「“普通のレシピ”通りに作れば喜ばれるんだから、命にかかわるアレンジ加えようとすんな。大体人にくわすもんを味見もせずに出すとか、どういう神経してんだよ？」
「だって、こうした方が（化学式上）美味しくなりますし、それに太っちゃいますから」
「それが人に物を食わす奴の態度か！？　大体毒性がある薬品使う事自体が間違いだとわからんのか！！」
「ひぃっ！　ごっ、ごめんなさい……」

これまでのうっ憤を晴らすかのような態度で、光一が瑞希を怒鳴り散らした。
流石に内容が内容だけに光一の方が正論であり、そもそも“凶王”を恐れて誰1人何も言えなかった。

「まったく……大体俺だってきちっと味見するぜ？　優子と愛子にくわすんだから、美味く食べて貰うって事をより確実にするためにも」
「……久遠君って、大胆ですね？」
「はっ、大胆？」
「え？　自覚ないんですか！？」

光一が疑問符浮かべる横で、愛子と優子が嬉しさで顔を赤くしており、その他も光一に羨望の視線を向けていた。

「まったく、そう言うあたり堂々としてるよな。流石は過激派筆頭」
「お前は堂々としてないからそうなるんだろ。いい加減霧島に食べさせてやるとか、してやったらどうだ？　いつもいつも食わして貰ってばかりじゃなくて」
「この状態でそんな事しろというのか！？」

相も変わらず、雄二はリクライニングシートに鎖で縛りつけられ、翔子に（無理やり）食べさせてもらっていた。
周りももうすっかりなじんでる為、誰1人何も言わなければ見もしない。

「……はい雄二、あーん」
「だーコラ！　だから何で卵焼きが緑色なんだ!?」
「そんなに嫌なら作って来いよ。霧島の分も……大体妙な色をした弁当を作ってこないことを条件に、自分も弁当を作ってくるって事にすりゃいいのに」

元はと言えば全部テメエの所為だ……と言おうとしたが、そこで考える。
……癪だが、こいつの言う通りのプランで動けば、変な飯を食わされずに済む、とはじき出した。

「くっ……なあ翔子、今光一が提案した事を採用してほしい」
「……ダメ。家事全般は妻である私の役目」
「良いじゃねえか。雄二が作ってきたともなれば、流石に渡すまで逃げるわけにもいかないし」
「……わかった。今日からお弁当に薬を入れるのをやめるから、明日から順番で作る事にする。お昼じゃないと受け取らないし、何も食べないから。絶対に」

翔子の眼がウソをいっていないと物語るに十分な程、輝いていた。
雄二は当然として、光一も流石に唖然とする。

「なっ!?　テメ、光一！　これが狙いだったな!!?」
「いっ、いや、まさかここまでとは思わなかったから、それはすまん……でも一途で良いじゃないか、な?」

「な？　じゃねえ！！」
「わあったよ。雄二がどうなろうと構いやしねえが、読みが甘かったのは確かだな。じゃあ落とし前として、薬を売るのはもうやめるから」
「薬だけか！？　いっそ商売自体やめろよ！　てか、薬はもう意味がないだろ！！」
「武器使うのだってタダじゃねえんだよ。どこぞのゴリラが煽ったりするから、余計に金がかかるかかる。それに別に飲ませるだけが薬じゃないし」
「テメエ！！　てか、今のはどういう意味だ！？」

雄二の抗議は無視を決め込む事に。
……そもそも最近は、G級異端者の雄二優先で光一は最近平和だったりする。

「全部テメエの所為だろうが！　最近姫路がお前に逆らえない様子がその証拠じゃねえか！！」
「お前に騙されたと気付いたが故の、罪悪感による行動やもしれんだろうが。いやー、へーわっていーねー」
「光一、テメエ絶対モヤシ炒めにしてやる！！」

雄二が光一たちの平穏を嫌ってるのを知った上で、挑発するように。
そして棒読みであてつけを言い放つ光一に、雄二が憤慨。

「それにしても、Fクラスの男子は料理が出来る人が多いよね？」
「ん？　言われてみればそうだな。俺達は当然として、ムッツリーニや須川もそれなりに出来るし」
「ワシは光一達程は出来ぬのう」
「秀吉、これは男子の話なんだよ？」
「……ワシは男じゃ！」

事故とは言え女になっただけに、秀吉も強くは出れなかった。

「……考えてみれば、こういう所でもワシは光一に頼りきりじゃ」

「泊まりに来た時は大抵俺が作ってるもんな。ま、1人で食う為に作るよりつくりがいはあったが」

「そう言うのはわかるかな？　僕もそうだし」

「そうですね。そう言うのはわかります」

光一の言い分に明久がまず相槌をうち、瑞希も賛同。

優子と愛子も分かる為、云々と頷いた。

「美味い物を食うのは一種の幸せだな……明久と光一はムカつくから横取りしてやるが」

「雄二にはバナナで十分だよ」

「バナナもきょうび安くねえんだ。残飯で十分だろ」

「おいコラ、作りがいあるんじゃなかったのもがっ！？」

「……雄二の食事は私の役目」

雄二の講義を、翔子がおにぎりを口に押し込んでせきとめた。

それにそっぽを向いて、光一は自分の弁当のコロッケをかじる。

「光一君のコロッケ、やっぱり絶品だね」

「そうか？　ありがとう」

「光一、昔からコロッケが好きだったからね……アタシも光一のコロッケ、楽しみにしてるから」

「あっ、それもわかるな。僕もパエリア好きだから、良く作ってたんだよね」

「そうそう、好きな物だからうまく作りたかったってヤツだ。でも作れるようになるまでが大変だったな」

「光一君と吉井君って、相棒って呼びあうだけに意気投合する事が多いよね」
「気の合う者同士じゃし、光一も明久も互いに信用し合っておるからの。性格こそお人よしと過激派の正反対じゃが、これもまた1つの調和だと思うぞい」
「……羨ましいです。私もあんなふうに明久君と意気投合して見たいです」
「妬かない妬かない。アレは男流の友情みたいなものなんだから、アタシ達は女なりの付き合い方で行けばいいのよ。それに姫路さんは今は、光一の信用を得る事が大事でしょ？　そうすれば光一だって、吉井君とのこと全力でバックアップしてくれるわ」
「……がんばります」

明久と光一、仲良く料理の談議。
それをみる女子4人（笑）は、ほのぼのとしながらそれを見ていた。

「でもさ、料理談議だったら大歓迎じゃない？　実は最近、光一君の作るお弁当が楽しみでさ」
「そうね。とても美味しいし、アタシ達の為に作ってくれたのもあるから」
「成程、そう言う考え方もあるんですね」

感心したように声をあげる瑞希に、周りも成程というように頷く。

「餌付けされてるともいえるがな」

ピキッ！

「……餌付け」

「……否定、出来ないかも」
「ん？　どうかしたか？」
「どうして皆、固まってるの？」

教室の空気が凍って居る中、優子と愛子が唖然としてた。
ちなみに明久と光一は、談議に夢中になってた為気付いていない。

「……ねえ愛子、今日から一緒に料理の特訓しない？」
「……そうだね。このままじゃいけないよ、絶対に」
「？　おーい、一体どうなってんだ？」
「……何でもない、雄二がちょっと失礼な事を言っただけ」
「……（ぴくぴく）」

その次の日

「……なあ優子に愛子、何でいきなり合作とはいえ豪勢になってんだ？」
「アタシ達のプライドの為よ！」
「いつまでも光一君に甘えてばかりじゃ、ボク達も申し訳ないもん！　さっ、食べて食べて！」
「いや、だからってお重を用意するか！？　これ俺だけじゃ食いきれねえよ！」
「良いから食べて！　これ全部ボク達のプライドの全てをかけたんだから！！」
「お願い光一！」

第百三十六問　間話　『とある昼休みの料理談義』（後書き）

次回はレフェルさんのつぐみと深紅、亮と真希のコラボを書きたいと思ってます。
許可はまだなので、読んでいてくれたら返答をお願いします。

コラボ問題　第2問　（4）『バカと凶王のちょっとしたほのぼの　前編』（前

ちょっとパソコンのネット回線がバグったらしく、2日ほど来れませんでした。
が、ようやくめどが立ちました。

では、今回はレフェルさんのオリキャラのつぐみと深紅、亮と真希を用いてのコラボ物語です。
補足として、深紅は光一のちょっとした関係の一員であり召喚獣バトルにおけるライバル、明久はつぐみと恋仲となったという設定です。

では、どうぞ

コラボ問題　第2問　（4）『バカと凶王のちょっとしたほのぼの　前編』

文月学園屋上にて。

「ほんま、光一君のコロッケは美味しいわあ」
「そうね。いつ食べても飽きないから」
「うんうん、ボクも最近の楽しみだよ」
「喜んで貰えて何よりだ」

時間は昼休み。

光一に深紅、優子に愛子はもちろんのこと。
明久に秀吉に加え、つぐみに瑞希、亮に真希で、談笑しながらの昼食。

「……それにしても、驚いたね。まさか深紅ちゃんが久遠君の恋愛関係に仲間入りするなんて」
「わっちにもいろいろと思うところがあったんよ。それに悪くないで、こういう関係も」
「アタシも複雑ではあるけど、神崎さんならいろいろと頼りになるからね」
「そうだよね。ボクもあんまり増えてもらっても困るけど、今はあの何とか団のことがあるから神崎さん味方にしたほうが心強くてね」
「は～っ、すごいです」

つぐみがぽつりと言ったことを、深紅に優子、愛子が返し、瑞樹が感心したように声を上げる。
普通に考えればライバルなのに、仲良く共有というマンガみたいな関係で上手くいってることに。

「光一よ、一体どれだけ増やせば気が済むのじゃ？」
「いや、全部俺からじゃないから……考えてみたら、気付いた時にはもう完全に流されてばっかりの様な気が」
「まあ久遠君は、アキ兄等親しい人には甘い所ありますし、木下さんに工藤さん、神崎さんには気を許してますから油断をしててもおかしくはないんですが……」
「ある意味情けない話じゃの」

真希の私見に対しての秀吉の一言が、グッサリと光一に突き刺さった。

「……ちなみにこの間柄は、コラボ問題第４問（３）を見てもらえればわかる筈だ」
「何言ってるの光一？　……それはそれとしても、傍から見れば光一が羨ましいたっ」

ピコっと音が鳴ったその少し後、明久が頭を押さえる。
その明久の横で、つぐみが頬をふくらましながらピコピコハンマーを持っていた。

「迂闊な事は言わない方がいいぞ？　お前ももう所帯持ちなんだから」
「そっ、そうだね。ごめんつぐみ、今のは……」
「今日お買い物して帰るから、荷物持ちお願いね？」
「ははっ、もう尻にしかれてんだな」

ぷんぷんと表現するように怒るつぐみに、平謝りする明久。
傍から見て完全に尻に敷かれてる様にしか見えない光景に、光一を始め他も苦笑しながら見ていた。

「……」

「みぃ姉、ダメですよ。これは明久が決めた事なんですから、僕やみぃ姉にとやかく言う権利はありません」

「そっ、それはわかってます。久遠君に散々お説教されちゃいましたから……」

「説教されないとわからない時点でおかしいですからね！？」

未だ諦めきれていない瑞希が羨ましそうに見ており、亮に止められているのを除けば。

「もうっ、アキ兄。お義姉さんを困らせちゃだめです」

「おっ、お義姉……！？」

「はっ？　……ああっ、そうだったな」

「……久遠君、今の疑問は何に向けてなの？」

ちょっとしたおちゃめのつもりの真希のセリフに、つぐみがあわあわとあわて始める。

それに対しての光一の様子を見て、冷静を取り戻したつぐみがじと目で光一を見始めた。

それをみて我慢の限界に達したのか、深呼吸をしてぐっと決心したかのように胸の前で拳を握りしめ、つぐみにむかって……。

「つぐみちゃん……私、まだ諦めませんから！」

「瑞希ちゃん……うん。でもアキ君は絶対渡さないよ」

つぐみが笑顔で手を差し出すと、瑞希はその手を獲り握手。

「光一、口出ししないんですか？」

「別にいいんじゃねえの？　つぐみにとってはいい刺激だろうしな。それに姫路のあの行動の分岐が今の優子みたいなもんなんだから、俺に否定なんて出来る訳ないだろ」
「……それもそうですね」
「？　何の話？」

光一と亮の会話に、明久が疑問符を浮かべていた。
光一がいずれわかるというと、釈然としないまま引いたが。

「さて……あのゴミ共の処理はどうするかな？　３股になった以上俺もG級異端者に格上げだろうし、明久だってつぐみと付き合ってながら姫路からアプローチだから、ＳＳ級異端者だろうな」
「……つくづく迷惑ですね」
「おまけに雄二のバカも黙ってるわけないだろうし……どうしたもんかね？」
「……これもつくづく思うことですけど、あなたたちの間柄は一体何なんですか？」

余談だが亮もモテる為、異端者ブラックリストに掲載されていた。
そのたびに光一に助けられてる為、それなりに信用もしていれば慕ってもいる。

「そうね。邪魔でしかないわあの集団」
「ホント、いい加減にしてほしいよ」
「良い迷惑や」
「……こんなことしたって、何か変わるわけでもないのに」

優子に愛子は、悉く光一に攻撃を仕掛ける為良く思ってない。
深紅も呆れてて、つぐみは何とかしたいと思っていた。

そこで自然に、この中で一番策略に長けている光一に視線が集中。

「……どうにかしようにも、あいつらが勝手に潰すからなあ。しかもゴミだからそれに全然気付きもしねぇし」

「そうなんだ……そう言えば光一、さっきからバカ共じゃなくてゴミ共って言ってるね？」

「決まってんだろ。俺達も一般的に見ればバカなんだから、同類だと思いたくない……が、まあ手がない訳じゃないな」

「手？」

「ちょっとした知り合いのツテでも借りようと思ってな。確かニューハーフの知り合いがいるって話だから」

……空気が凍った。

「あの、光一？」

「何？」

「それは幾ら何でも……」

「気付かれなきゃすむ話だ」

さらりと迷いも見せない発言は、全員を戦慄させた。

……この人だけは、絶対に敵にしてはいけないと。

「別に気にかける必要もないと思うけどな……まあいいや。さて秀吉、召喚フィールド展開してくれ」

「んむっ？　了解じゃ。アウェイクン！」

「「サモン！」」

フィールドが展開されたと同時に、２人の声が重なった。

深紅もフィールドと聞いた時点で準備を終えており、ほぼ同時の召喚。

『Ｆクラス　久遠光一　英語４２５点』
ＶＳ
『Ｆクラス　神崎深紅　英語４２３点』

「今日こそは俺が勝つぜ」
「ふふっ、わっちも負けへんえ」

阿吽の呼吸のようなやり取りをして、互いに距離をとり戦闘準備。
黒いごつめのコートを纏い、手には細身の剣とライフルを持った光一の召喚獣。
そして赤いドレスに、歪な剣を持った深紅の召喚獣が互いに向き合っていた。

「一足先に装備変更があったけどな」
「構わへん。戦いは武器だけで決まるわけやない」

光一の召喚獣が剣を構え、突撃、
迎え撃った深紅の召喚獣の剣とぶつかり合い、鍔迫り合い

「流石に深紅の召喚獣はパワーあるね」
「光一君の召喚獣も、点数が点数やからそれなりや」
「だろうな」

光一の召喚獣がそっと剣の切っ先をずらし、深紅の召喚獣が前のめりに。
それを狙って光一の召喚獣が剣で突くのを、深紅の召喚獣は前転で回避。
追撃で持っていたライフルを構え打ち出すと、深紅の召喚獣の腹に

命中。

「ひゃっ！　装備が変わっただけで、前とはケタ違いやな」

「武器が俺の要だ、それによって上下したっておかしくない筈だがな。さて、そろそろ決着付けるついでに、あれも試すか」

「？」

「……思い出せ、俺が受けた屈辱、痛み、蔑みを。怒れ、憎め」

ぶつぶつと呟き始め、少しずつ光一が纏う空気が暗く冷たい物へと変わって行く。

顔をあげると、瞳孔の開いた絶対零度の目、静かで研ぎ澄まされたかのように鋭い敵意……

そこには過激派筆頭ではなく、凶王が居た。

「……成程なあ、自己催眠やな？」

「この前兄貴に勝ったことや何かと騒動が多いおかげか、自力でコントロールできる様になった」

「……わっちが怖いと思うやなんてな。だったら出し惜しみなしや！」

深紅の召喚獣が、剣を構え振り始める。

深紅の必殺、花散る天幕（ロサ　イクトゥス）

光一が口元をゆがめる笑みを浮かべ、くわっと目を見開く。

「花散る天幕（ロサ　イクトゥス）、見切った！」

剣を振りぬいたタイミングを狙い、その手首めがけての突き。

深紅の召喚獣の腕が弾かれ、光一の召喚獣が剣を手放しリボルバー

と自動拳銃を構え、連射。

ダメージを受けつつも、体勢を立て直して後ろ飛びで距離をとる。
光一も深追いはせず、リボルバーと自動拳銃に弾丸を装填してベルトにさした後に、ライフルをとり剣を拾う。

「……さすが凶王や。まさか花散る天幕（ロサ　イクトゥス）を見切るやなんて」
「必殺技は何度も見せるもんじゃねーぜ」
「ふふっ、流石に過激派筆頭や」
「余裕の笑みが崩れてない、か。いいねえ、最高だよ深紅。改めて思うわ、お前に勝ってみてえ」
「わっちも、今の光一君倒してみたいわあ」

光一と深紅の召喚獣が剣を構え、突進。
召喚獣の剣と剣がぶつかり合い、深紅の召喚獣が光一の召喚獣の剣に手を添えて地面に切っ先を抑え込む。
その剣めがけて持っている剣を振り下ろし、光一の召喚獣の剣をへし折った。

光一は剣を折られた事に動揺するも、気を取り直しそのまま召喚獣同志を交差させ……
ほぼ同時に振り向いたと同時に、互いの召喚獣の顔面にライフルと剣が突き付けられた。

「……引き分けだな」

光一の召喚獣がライフルを下ろし、光一は先ほどと同じように自己催眠に入る。
終わったと同時に、疲れが来たのかどっかとその場に座り込んだ。

「……これ結構疲れるな。“凶王”をもってしても、まだ決着にはとどかないか」
「そう言わんといて、わっちは今回運が良かっただけや。今の武器折りもとっさやったから、うまく行かんかったら負けとったで」
「運も実力のうちだ。まあ次は深紅の装備変更が終わってからだから、またイーブンになってからだな」
「そうやな」

光一が手の甲を深紅に向けると、深紅は頷いて手の甲を合わせ、ハイタッチ。
それに続く様に、見物していた明久に秀吉、そしてつぐみに亮、瑞希と真希が拍手。

「ホント、高レベルな戦いだったね」
「高得点でこの様な高次元な戦いとなると、流石に迫力があるぞい」
「流石は光一、凶王の名はダテではありませんね」
「やっぱりすごいよね、光一君」
「でもなるならなるって言ってほしかったわね。あんたのあの状態心臓に悪いから」

明久と秀吉、亮の男組に加え、優子と愛子が光一を称賛。

「すごかったよ、深紅ちゃん。凶王になった久遠君と引き分けなんて」
「はい。深紅ちゃんすごかったです」
「でも私には、あの怖くなった久遠君と真正面から向き合ってる事の方がすごいです」

つぐみと瑞希、真希の女組が深紅を称賛していた。

コラボ問題　第2問　（4）『バカと凶王のちょっとしたほのぼの　前編』（後

このコラボが終わったら、夏休み編を書くつもりです。
先出ししたから、いろいろとオリ要素加えようかなと。

さて、どうしたものかな？

コラボ問題　第2問　（5）『バカと凶王のちょっとしたほのぼの　中編』（前編）

ちょっと考えて、今回も全中後編にしました。

やはり本篇もそれなりにいいものですが、コラボというのも楽しいですね。
自分の考えたキャラと、他の作家さんが考えたキャラ。
その混じりあいというのは、書いててとても楽しいですし勉強になります。。

特に驚きなのが、光一って他の作家さんのオリキャラと相性がいいって所ですね。
レフェルさんの深紅、ＧＡＵさんのクリスというように。
実際書いた時はいろいろと不安もありましたが、今では自然に書けるというのが自分としては驚きです。

では、どうぞ。

「なるなら言って欲しかったです」
「あっ、ああっ。そうだな、怖がらせて悪かった」
「それだけじゃありませんよ。知ってるでしょう？　私と義姉さんの能力のことは」
「……うん、久遠君を責めてるわけじゃないけど」
「……悪かったよ」

勝負が終わってそのあと、光一は真希とつぐみから抗議を受けていた。
真希とつぐみは超能力者で精神感応（テレパス）が使えるため、光一の強すぎる憤怒と憎悪が押し寄せるように頭に流れ込んできて、先ほどから頭痛が治まらない状態。

「まあまあ、2人とも。光一だって神崎さん相手にしてたんだから」
「それはわかってますし、久遠君を責めているわけじゃありませんが……」
「でもなるなら言ってほしかったってだけで……」
「……そうだな。気をつけるよ」

精神感応（テレパス）を失念してたわけじゃないが、少々勝負にのめりこむあまり軽率だったと反省。
光一は2人にぺこぺこと頭を下げた。

「ふと思ったことですけど、組み合わせによっていろいろとそれらしい雰囲気ってあるものですね。光一と神崎さん、木下さん、工藤さんというように、それぞれ雰囲気的に違うというか」
「あっ、何となくわかるよ。光一と神崎さんは、見ての通り仲良く

も競い合うライバル、みたいな」
「姉上とは、その2人にはない付き合いの長さで、互いに理解し合ってるという間柄じゃの」
「工藤さんは、一緒にいたずらしたりして笑い合ってるのが自然……ですね」

ふと頭に浮かんだ話で、亮と明久と秀吉は光一の間柄についての談義。
それを聞いた女性陣は……。

「そうですね、組み合わせによって色々な形があるのがよくわかります。私と明久君の場合でも、そうなのでしょうか？」
「そうかもしれないね。私とアキ君はどんな風に見えるのかな？」
「アキ兄とお義姉さんでしたら、たがいに信頼し合っている理想的な間柄ですよ？」

自分たちについて話し始めて、真希の言葉でつぐみが顔を赤らめた。

「ま、そのあたりが島田や姫路と一線を画したといってもいいな。姫路と島田が明久を信用したところなんて見たことがないから、明久とつぐみがくっついたのは必然だ」
「うっ……そうかも、しれませんね」
「……光一厳しいですね？」
「俺はまだ許した訳じゃないんでね。こいつの所為で余計な騒動が引き起こされた事だってあるんだから、攻撃しないだけでもありがたく思ってもらいたい」

実際その通りなだけに、瑞希は何も言えなかった

「そうやね、わっちから見ても当然やと思うわ。根も葉もない噂を

真に受けて加速させたり、応援するつもりを勝手にライバル視して嫌悪するわで、光一君が怒るのも無理ないで」
「うぅっ……ごめんなさい」
「けどまあ、つぐみとのことを認めたっていうのには免じてやるよ。けどこれから次第じゃ二度と近付けんようにしてやるがな」
「……はい、がんばります」

目が笑ってない笑顔での光一の激励と脅しに、瑞希は少々底冷えするような感覚を覚え肯定。
ふと合宿での優子に対してのことを思い出して、本気だと悟った。

「とりあえず、懸念材料はほとんどなくなったな。明久に彼女ができたし、これで同性愛者説も薄れていくはず。あとは雄二と島田とＦＦＦ団と玉野さえ何とかすれば、万事解決だ」
「……随分と多いよね？」
「なあに、対応策は考えてあるから問題はない。それにそろそろＦクラスのごみ集団が、俺と深紅の関係を嗅ぎつけるはずだし……」

ドバンっ！

「見つけたぞ光一に明久！」

そこで異端審問会を引き連れた雄二が、屋上のドアを勢い良く開いた。
光一が流れるような動作で、懐から右手でペン遊びをするようにゴム弾入り（改造）エアガンを取り出し、雄二に狙い定めてかまえた。

「思ったより早かったな。ゴリラの雄ちゃんよ？」
「勝手に妙な愛称つけんな！　光一てめえ、散々俺をコケにしておきながら神崎も加えての３股とは、良い御身分じゃねえか！！」

「……もう嗅ぎつけたのは流石にびっくりやけど、そもそもが坂本が何もしなければそれで済んだ話やろ」

もう嗅ぎつけたことにも驚いたが、深紅もさすがに雄二の執念深さにはあきれていた。

その間に光一はつぐみに手を差し出し、接触感応（サイコメトリー）でつぐみに自分の策を読みとらせた。

明久にもアイコンタクトで送り、光一は雄二に気づかれる前にそっと手を放す。

「うるせえ！　俺に3股の上に姫路をだました外道の濡れ衣着せておいて、のうのうとしやがって！！　神崎を含めた3股、そして明久が雨宮のつきあい、絶対ぶっつぶしてやる！！」

「ちょっと待て、俺はともかく明久のまでつぶすのかよ！？」

「明久の幸せは大嫌いだと言ってるだろうが！　確かに雨宮には悪いと思うが、光一の手引きを経ている以上は潰さにゃ俺の気が治まらねえんだよ！！」

「そんなだから俺に勝てんのだとわかれよ」

光一があきれながらつぶやくと同時に、ＦＦＦの面々が光一達を取り囲んだ。

深紅が脅しをかけようとして……。

「全員ひるむな！　男には命を賭けてでもなさねばならない時がある！！　今こそその時だ！！」

「そうだ！　神崎と木下と工藤を救い出せ！！」

「雨宮は俺んだ！！」

「神崎の姐御、待っていてください。今お助けします！」

雄二の激励がそれを打ち消した。

「流石は腐っても元神童、指揮官としてやるべきことをよく心得てやがるな」

「碌な使い方されてませんけどね」

「されるわけないだろ」

「加勢するで、光一君」

「僕もやるよ。っとと」

深紅と明久が加勢の意思表示を示すと、光一が明久に向けてスタンガンを投げ渡した。

そこでふと、光一が周りを見回す。

「？　おい、島田はどうした？」

「今明久と会いたくないんだとよ」

「会いたくない？　……てっきり真っ先に押し寄せて、つぐみと別れるよう強要しながら屋上から突き落とそうとすると思ったんだが」

「それを期待して声をかけたんだが、相当ショックだったらしい」

意外と純情だったことに驚きつつも、光一はほんのちょっとだけ同情した。

……失恋経験があるとはいえ、散々迷惑なことをされてた為にそういう気になれはしなかった。

「……やっぱりけしかける気だったな？」

「当然だろう。明久を痛めつけるにはうってつけだ」

「だろうな」

「いや、否定しろよ！」

「出来るかアホ！　そもそもそう言うならけしかけんな！！」

光一が悟られないよう視線をずらし、周囲の様子を確認。
もう少し自分に注意を……

「となると、完全に計画が狂ったな。島田が来たらこれを口実に霧島あおって、同棲でも決意させようと……」
「よーし今すぐお前を殺す！　俺の平穏のために！」
「そうだそうだ、霧島と坂本だなんて誰が許すか！！」
「しょうこたんしょうこたん！　あなたの愛する人はお～れ！！」

程よく自分に殺意が向けられてるのを感じながら、そっと視線をずらし……準備完了を確認。
さて、あと一歩は……と、そこで明久にアイコンタクト。
そこで明久がギョッと目を見開いたが、うなづいた。

「深紅、すまん」
「え？　なんや光いんっ……！？」

深紅に声をかけると同時に、光一は深紅の頬に手を添えて強引に唇を重ねた。
その光景に、瑞希につぐみ、秀吉に亮に真希はぎょっと目を見開き顔を真っ赤に。
優子と愛子も同様ではあっても、感情的には驚きよりも羨望の方が強く、ただ顔を赤くしてなすがままの深紅に目が行っていて……。
ＦＦＦ側の方も、普段動じることがない雄二でさえもぎょっと目を見開いていた。

光一がそろそろかと顔を離すと、深紅は呆けたように焦点の合わない目で光一を見ていた。

「「「ぶっ……ぶち殺せーー！！」」」

ボンっ！！

「うわっ！」

光一と深紅に完全に注意が逸らされたと同時に、明久が前もって渡されていた閃光弾を使用。

ＦＦＦ団＋１の視界が晴れた時にはメンバーはおらず、屋上はもぬけの殻となっていた。

「くそっ、やりやがったな！　草の根分けてでも明久と光一をいぶりだせ！！」

「あの野郎、見せつけやがって！　殺す、絶対ぶっ殺す！！」

「あのモヤシ、とっ捕まえてひもなしバンジーだ！！」

「生ぬるい！　モヤシ炒めにして１パック１円で売るんだ！！」

「なら俺は３人もの女性を毒牙にかけたあの口をずたずたにしてやる！！」

「それは名案だ！　１人あの口に１本ずつ五寸釘を打ち込め！！」

場所が変わって、３－Ａ教室

「なんだあ、うるせえな？　……って、またあいつらかよ！？」

「ったく、いつもいつも騒ぎばっかり起こしやがって！　もう許せねえ！！」

「やめんか無能ども。時間を無駄に加えて、バカをうつされる気か」

４０人近くの怒号と地響きが響くと同時に、また２－Ｆが騒動をおこしたことを察知。

あちこちで迷惑そうにため息や文句が響き渡り、常夏コンビがいき

り立ちながら教室から出ようとして、代表の大神に止められた。

「大神！？　なんでだよ、あいつらのせいで学園の評判がた落ちなんだぞ！？　内申に響いて俺達までバカだと思われちまうじゃねえか！！」

「ふんっ、一度後れをとった無能に何ができる？　そうやって観察処分者相手に敗北を重ね、あのアンチ久遠派とかいう無能集団の二の舞となりたいか？」

「なっ！　おい、俺達が久遠はまあ仕方ねえかも知れねえが、吉井にまで負けるってのかよ！？　あんときのまぐれ勝ち位で……」

「だから貴様は無能だというんだ。たかが下位クラス、たかがバカだと敗北してもまぐれだと結論を出し、学習もせず暴走し続けたバカ集団の末路を知らんのか？　獣ですら獲物をしとめるために息を潜めるというのに、それすら出来ん獣以下の分際で偉そうにほざくな！」

「くっ……」

白夜の言うことは正論であり、常夏は否定できず不満タラタラで自分の席へ戻って行った。

それを見て白夜も、やれやれと言わんばかりにため息をついて……

「……だが、そんなに行きたいのなら、無理をさせることもないな」

「？　なんだよ、大神にしてはずいぶん甘い発言だな？」

「整形手術代と顔写真と血液型のメモを用意してからな」

「……負けて帰ったら顔の原型なくなるまで殴るのかよ？」

「心配するな、一撃で済ませてやる」

「余計怖えよ！　……弟が弟なら兄も兄だな。無茶苦茶なところがウリ二つじゃねえか（ぼそっ）」

「夏川、歯を食いしばるなよ？」

「え？」

コラボ問題　第2問　（6）『バカと凶王のちょっとしたほのぼの　後編』（前編）

次はちょっと間話をはさんで、オリストーリーを考えてます。
いや、やっぱ夏休みにしようか……と優柔不断に考えてみたり。

とまあそういうわけで、どうぞ。

「……まだ心臓がバクバク言ってるよ。久遠君と深紅ちゃんのキスだなんて」

「……頬でもなくて、おでこでもなくて、口と口でだなんて。流石アキ兄の相棒です」

「……まさか、いきなりキスシーンを見るなんて思いませんでした。やっぱりあんな風に積極的に行けばよかったんでしょうか？」

「……みぃ姉。異端審問会に嗅ぎつけられたら明久が殺されますから、そのあたりも考慮してください」

上からつぐみ、真希、瑞希、亮が、それぞれいきなりのキスシーンに対しての感想を述べる。

ちなみに光一も今になって恥ずかしさが込み上げたのか、顔を真っ赤にしながら唇に残ってる感触に浸るように手をあてていた。

「……あのさ光一、アンタの狙いが自分が注意ひきつけて吉井君に閃光弾を使わせて、その隙に雨宮さんと吉井さんの瞬間移動（テレポート）で逃げるっていうのは、よくわかったわ。でもだからって、いきなりキスって」

「そんなに欲求不満だったなら、ボクに一言くらい相談してくれてもよかったのに」

「いや、別に作戦だからってだけでやったわけじゃないよ？　ただ優子にしても愛子にしても深紅にしても、おれ一度として自分からやったことなかったから……」

「……言われてみればそうやったね？　じゃあわっちが光一君からしてくれたキスの一番言うわけやね？」

「……改めて言われると、今更ながらすごいことしたんだなーって思えてくるな」

優子と愛子に詰め寄られての発言で、深紅が嬉しそうに柔らかな笑顔を向けると光一は再度顔を赤くした。
さらには深紅が感触を確かめるように、自分の唇を指でなぞるのだから顔が赤を通り越し浅黒くなる。

「光一ってさ、そうなってる割には迷いなく実行したよね？」
「そもそも光一は決断に迷ったりはしないからのう。まあ終わった後でこうなるということはあるがの」
「秀吉！　……それはそれとして、ここどこだ？」

「まずはそこを気にしなクソ餓鬼ども！！」

光一のつぶやきにこたえるような怒声が室内に響き渡った。

「あっ、妖怪？　なんだ、ここ妖怪実験室か」
「勝手にモルモットにするんじゃないよ！　まったく、いきなり出てきたと思ったら外から怒号、さらにはいきなりの罵倒とは……で、今度は一体何やらかしたんだい？」
「深紅とも付き合うことになった事がバレて、雄二たちに追い回されてる」

妖怪こと学園長が光一の言うことがよくわからず、フリーズした。
そして呆れたように溜息をついて、一言。

「……また増やしたのかい？　やれやれ、こんな針金みたいなクソジャリのどこがいいのやら？」
「少なくとも口も見た目も悪い妖怪くずれよりはええと思うで」
「思いっきりお似合いさね！」
「そう言ってもらえて何よりだな。それよりつぐみ、真希、急いで

瞬間移動（テレポート）で向かいたいところがある」

旧校舎、Ｆクラス教室にて。

「……諸君に問いたい。久遠光一と吉井明久、この２人をこのまま生かしていいと思うか！？」

「「「否！　否！！　否！！　否あああああああああ！！」」」

「よし、その怒りを今こそあいつらに思い知らせてやる時だ。殺る気は十分か！？」

「「「うおぉおおぉおおおおおおおお！！！」」」

「さて、作戦会議だ！　当然だがあいつには人望というものがない。それを利用して、神崎を脅して無理やりキスをしでかしたことを全校に放送して、校内全員を味方にする！」

早い話が、デマを言いふらして光一の３股は、外道な所業により成り立っていると認識させた上での制裁。

その際雄二は、自身の３股や瑞希をだましたという自身の濡れ衣（と思い込んでいる）

それはすべて、光一が瑞希と美波まで手に入れるための布石として、自身を利用したと周囲に認識させて潔白を晴らすつもりでもいた。

「さて武藤に君島、お前たちで放送室へ出向き、あいつの所業を（お前たちの主観で）詳しく放送するんだ。そして明久もそれに加担し、雨宮を脅してると加えることを忘れるな？」

「了解！　無理やり弁当を作らせたり、やりたくもない２股で苦しむ２人を解放してみせる！　そして俺は木下姉妹に慕われ、俺のハーレム完成だ！」

「つぐみたん待ってて、今吉井の魔の手から解放してあげるからね。そのあとは……ぐふっ、えへへっ」

「さて、ほかは光一に作戦を気取られないよう、全力で探しまわるんだ」
「うおぉぉおおおおおおおお！！」

武藤と君島に続くように、ＦＦＦの面々はそれぞれ雄二の指示したポイントで探すフリをしに出て行った。
それを見届けた雄二は、その場にごろんと寝転がり捕えられた光一と明久の到着を待つことにする

「さて光一、今日でお前も終わりだ。明久、俺の許可もなしに幸せになろうなんざ、無限にはええんだよ」

所変わって放送室

「……とでも考えてるだろうが、詰めが甘い」

両手の麻酔銃を手遊びで振り回し、懐に収める光一。
その足元には、出向いた君島と横溝が倒れていた。

「光一君、どうやら放送室周囲にはだれもおらんようやで？」
「……どうやら狙いを気取られないように、わざと手薄にしてるらしいな」

厳重にした事から、バレる可能性があることを見越しての指示。
光一と深紅なら突破できる以上、少しでも目を欺くためのものだったが、先読みされている以上裏目に出ていた。

「さて、深紅に優子はやってもらうことがある。愛子と姫路は、今から説明することを霧島に連絡して。明久に秀吉、亮は放送の準備。

つぐみと真希はつかれただろうから、座ってて」

ぴーんぽーんぽーんぽーん！

「ん？　どうやら始まったか」

うとうととしていた所へのスピーカー音に、意識をはっきりさせる雄二。

さてさて、どんな愉快な放送が……。

『あーあー、テステス。えー、皆さんにお伝えしたいことがあります』

「なっ！　かっ、神崎！？」

と思っていた処へ、違う人物の声で驚いた。

そして2人がしくじったことを察知し、急いで教室を……

『坂本雄二君が木下優子さんと工藤愛子さんを狙い、久遠光一君に攻撃を仕掛けております』

出ようとしたところで、手を止めた。

今うかつに出たりしたら、確実にやられるためである。

『実はこの前、坂本君ににやにやした顔で見られて気味が悪かったです』

『そうなんか？　実はわっちも、この前そんな風にみられたことあるで』

『それにアタシが光一と話してるとえらくからんでくるし、事ある

ごとに光一を攻撃したりして、迷惑だわ』
『わっちもそうなんや。仲良く話しただけで光一君に攻撃仕掛けるあたり、わっち狙われてるんやないか思うわ。それにつぐみの事までそういう目で見てる節があるで？』

「なんてでたらめほざいてやがんだあいつら！？」

実際、彼女たちの言うことは間違ってはい合い……が。
にやにやした顔で見てるのは、光一達に不幸が降りかかるんじゃないかと期待した時で。
攻撃したのは光一が幸福だったから、それを妨害するためである。
決して彼女たちの言うようなことではないが、それを（意図的に）歪んだ受け取り方をしての報告。

「坂本、どういうことだ？」
「……雄二、くわしく聞かせて」
「げっ！　いつの間に！？　待て待て、深紅も木下もあっち側だぞ！？」
「「「問答無用！！」」」

所変わって、放送室。

「これでもう雄二も身動き取れなけりゃ、俺達に攻撃もできないだろ。３股に加えて姫路をだました外道なのに、優子と深紅に愛子、つぐみにまで手を出そうとした、となりゃな」
「……光一も容赦ないよね？」
「人の幸せを妨害しようなんて奴には、これくらいが調度良いんだ

よ。霧島には一応事の概要は話しておいて、了承貰ったわけだが」

しれっという光一に、ほぼ全員が絶句した。

「さて、これでこの問題は雄二の逆恨みってことで片付いただろ。俺達は……」

「ここにいたのか、久遠に吉井！」

「いつもいつも騒動ばっかり起こしやがって、おかげで酷え目にあったじゃねえか！！」

府と声をかけられた方向には、通称常夏コンビがいた。

2人して、殴られたかのようにひしゃげていて、女子の中では悲鳴が上がった。

「？　どうしたんだよ変態親指に変態モヒカン、えらくハンサムになったな？」

「誰が変態親指だ！！　そしてどういう意味だ！！？」

「え？　ハンサム？　なら木下、お前に伝えたいことが……」

「そうじゃないだろ常村！！　てめえらが騒動起こしたせいで、大神に殴られたんだよ！！　兄貴のしでかしたことの責任くらいとりやがれ久遠！！」

「兄弟そろってむかつくんだよ。弟は騒動を起こし、兄貴は人を見下し殴るの最低兄弟が！！　こうなりゃ弟のテメエに落とし前つけさせなきゃ気が済まねえ！！」

どう考えても個人的な私怨と、兄への八つ当たりを弟にしようという典型的なセリフだった。

「ムカつくけど懐かしくはあるな。兄貴の八つ当たりで俺に喧嘩売るやつ」

「本当ね。光一が上級生に寄ってたかって、サッカーボールにされてる所に出くわした時のことを思い出すわ」
「そうじゃの……」
当時のことを知っている木下姉妹の表情には、あからさまに2人への嫌悪が浮かんでいた。
光一もその顔は平然とはしていたものの、常夏以外は理解していた。
……その顔の下には、兄や2人に対しての怒りがたぎっていることに。
「……まあいいや。ケンカだっつーんなら、こっちでも模擬試召戦争でも買うぜ先輩方よ？」
光一がスタンガンを取り出し、バチリと威嚇するように電源を入れる。
常村はもとより夏川とて、光一は騒ぎを起こすクズとは見ていても、武器を持たれては兄と同様に勝てる相手じゃないことは理解はしていた。
「くっ……じゃあ試召戦争だ。吉井とお前とでタッグ戦だ！」
「お前みてえな、他人に迷惑かけるしか出来ねえクズ以下だなんて評価をしやがった大神に、二度とそんな事を言わせねえためにもな！！」
「たかが学園祭の喫茶店で営業妨害するような屑にだけは言われる筋合いねえな！　ちょうどいい、兄貴への挑戦状代わりにてめえらにしてやる！！」
「光一落ち着いて。とにかく今は……」
どさっ！！　×2

「え？」

突如２人が、何の前兆もなく倒れた。
その後ろでは、深紅がいつもどおりににこにこした笑みを浮かべながら、たっている。

「はい、終了や」
「……わざわざそんな事しなくても、片づけてやったのに」
「落ち着きや。今の光一君、まるで腹を空かせた野良犬やで？」
「だったらこいつらを喰らって……」

ぱしっ！

「っ！　……何を！？」
「わっちが認めた光一君は、そんな狂犬やないで。もっと自分を大切にしいや、もうあんさんには傷ついて悲しむ人がこんなにもおるんやで？」

深紅は自分と、優子たちを指差した。
光一は深紅にはたかれた頬を押さえながら……。

「……わるかった」

素直に認めて、謝った。

「さて……雄二を生贄にするにも限界はあるだろうから、不定期に偽情報でも流して同士討ちでもさせてかく乱するか」
「……そうだね。皆して感情優先で人の話を聞かないから、内部攪乱で簡単に瓦解しそうだよ」

「瓦解しても簡単に元に戻るのが厄介なところだがな。あいつらはいうなれば積み木で作った城だから」
「……成程。崩し易くても元に戻すのは簡単と」

その場のほぼ全員がうなづいた。

「でもある意味厄介だな……内部瓦解、目標の無効化（彼女をつくる）が意味をなさないとなると」
「もうやめなさいよ光一、あんなバカ集団のこと考えるの。それより今日授業終わったらどうする？」
「あっ、ボクおいしいシュークリーム売ってるお店知ってるから、光一君の家で食べない？」
「そやね。皆ではんなりいきまひょ」
「……今日は１人、ＤＶＤでも見て演劇の研究とでも行くのじゃ」
「僕達はどうする？　つぐみ」
「え？　えーっと……じゃあ、アキ君とお夕食食べたいな」
「でしたら私は、どうしましょうか？」
「あの、うちに来ませんか？　歓迎いたします」
「じゃあお父さんにお母さんには、僕が連絡します」

こうして、彼らは元の穏やかな日常へと戻って行った。
めでたしめでたし

「めでたくねえ！！　だーよせ、やめろーー！！」
「……雄二、今日という今日は許さない。今日は帰ったら夫婦湯に入る」
「入らねえ！！」
「夫婦湯だと！？　諸君、これを許せるか！？」
「「「否！　否！　否！　否あああああ！！」」」

「光一ぃっ！　明久ぁっ！　てめえら、絶対ぶっ殺してやるからな！！」

「無能も極めれば見事ということか」
「いっ、いや、これは不意打ちで……」
「急に後ろから誰かに……」
「言い訳など聞きたくもないな。さて、すぐすませてやるから動くなよ？」

学園に３つの（汚い）断末魔が響き渡った。

第百三十七問　間話　バカと超人のとある会合（前書き）

何回かオリ間話をしてから、夏休み編に入ろうかオリストーリー混ぜるかを考えてます。
考えてみたら、3年のオカルトも出したい気もしますし、どうしようかな？
と、絶賛苦悩中でございます。

第百三十七問　間話　バカと超人のとある会合

とある休日の街中。
明久は光一の家に遊びに行く前に、目当てのゲームを買いに行きつけの店に向かっていた。
その際ちょっとした近道として、街路脇にある人気のない細道を使用している。

「やっぱり買いに行く時と、買って帰る時は至福だよね」

鼻歌でも歌いそうなほどウキウキしてますと言わんばかりに、上機嫌の明久。
買いに行く時はもうすぐ手に入るという、帰る時は手に入ったというある種の達成感。

明久は自然といつもより少し早足になっており、もうすぐというところで……

「うわっ！」

どしゃっ！

突如、ひらけた場所に差し掛かった常呂から人が吹き飛んできて、自身の目の前で横たわった。

「なっ、何？」

恐る恐る倒れた男を見てみると、その顔には殴られた跡があった。

そしてその男が飛んできた方を見ると……。

「……光一の、お兄さん？」

「ん？　……ああっ、観察処分者か」

自身の相棒であり、頼れる親友である光一の兄、大神白夜がそこにいた。

……その足元には数人気絶しており、その手には気絶した男が胸倉を掴まれぐったりとしている。

「あの……何を、やってるんですか？」

「いきなり襲ってきたから返り討ちにした……それだけだ」

「それだけって……これを、たった1人で！？」

ざっと見だけでも10人以上はいることに、明久は眼を見開いた。

光一の様に1対多勢で戦う術を持っていようと、いくらケンカ慣れしていようと出来ることじゃない。

相手がケンカ慣れしていないとみても、数が数だけに明久は底冷えする何かを感じた。

「でも、どうして……？」

「光一に敗北して以来、私の弱体化というバカな噂が蔓延したらしく、こういうバカが最近増えただけだ」

「ああっ、そういえばそういう話ありましたね。確かBクラスがそれを真に受けて宣戦布告して、返り討ちにあったとかっ！？」

ふと明久が、白夜の背後で鉄パイプを振りかぶる男の姿に気づいた。

とっさに声を……

ブンっ！

バギッ！！

「あぶな……え？」

あげようとしたその瞬間のことを、明久は理解できなかった。
自分が気付いて声を上げた時には、白夜の拳が鉄パイプを振りかぶった男の顔面にめり込み、そのまま吹っ飛んで横たわっていた。

「え？　いっ、今の……」

「これくらいで驚くな観察処分者。神に選ばれた存在たる私にとっては、造作もないことだ」

偉ぶる様子も見せず、淡々とごく当たり前のように言う。
よく見れば、あれだけの人数を相手にしていたはずなのに、息ひとつ切らしていない。

彼が神に選ばれし者だと自称するだけの能力……内心では明久も、そう認めざるを得なかった。

「……さて」

「っ！」

白夜が思い出したかのように明久に視線を向けると、明久は即座に距離をとった。
光一と互いに敵視している以上、自分にとっても敵でしかない。

何より明久は学園の評判低下の一端を担っている問題児である以上、敵対する理由は十分ある。
どうやって逃げるか……

「何を警戒している？」
「え？　……あの、僕を、攻撃しないんですか？」
「攻撃？　……観察処分者。私をアンチ久遠派とかいうクズ集団と一緒にするな。私は光一に通過点としての価値が出来たからこそ、攻撃を仕掛けただけ。そこに私怨も何もない」
「でも、そもそもあなたたちにとって僕達は……」
「夏川に常村みたいなクズどもとも一緒にするな。私は望むことはなんだろうと、生まれ持った神の愛とこの能力で全てを叶えてきた。多少の邪魔が入った程度で崩れたなら、それまでだっただけのこと」
その言葉には迷いも不安も一切なく、あるのはただ自分の才能と能力への絶対的な自信。
明久にもわかるくらい、単純にそれだけしかなかった。
この人は違う……何から何まで、自分どころか今まで出会った誰とも。
「……」
「ふんっ、意外そうな顔だな？　まあ私のような人間は総じて、口先だけとみられることが……」
「……だったら、どうして？」
「ん？」
「……そんなすごい人なのに、何で光一を、たった1人の弟を突き放すんですか？」
光一は普段冷静であっても、兄が絡むと異常なまでに怒りをあらわにする。
過去に受けた仕打ちや、その所為で降りかかった災難の所為で……という話を、秀吉から何度も聞いていた。

「なぜ？　……ふんっ、兄弟ならなかよしこよしでいなければならないとでも？　笑わせる」
「っ！」
「あんな愚弟に価値など見出す気も、気にかけるつもりもさらさらなかった。それだけだ」

冷たくいい捨てる白夜に、明久の中で何かが切れた。
ぎりっと拳を握りしめ、白夜に殴りかかろうと……

どがっ！

「がふっ！」

したところで、またも明久が動く前にボディブローを叩き込まれ、胸倉を掴まれ壁に叩きつけられた。
明久がその腕をつかみ、引き離そうとするもびくともしない。

「どうやらお前は、自分よりも人が傷つくことに耐えられない……という人種のようだな」
「ぐっ、ううっ！」
「現実を見ろ、弱者は強者の前では喰われるだけ。お前ごときが私に刃向かったところで、傷１つつけられっ！？」

白夜が突如顔をしかめた。
気付いて引き離そうとした白夜の腕を掴んで、明久が白夜の手首にかみついた。
明久の髪をひっつかみ、引き離そうとしても明久は離すもんかと死に物狂いで腕をつかみ、喰らいつく。

「くっ！」

「がはっ！」

白夜の膝が明久の鳩尾に叩き込まれ、口を離した明久が顔面にパンチを食らい、地に倒れ伏した。
今まで食らったどの打撃よりも重く、正確に急所にヒットした打撃は深く明久にダメージを伝える。

「……ぐっ、はぁっ、はぁっ」

白夜の腕にはしっかりと歯形が残っており、そこから血がにじんでいた。

「……いつ以来だ？　私が傷つくどころか、血を見たのは」
「……僕だって……げほっ、やれば……出来るんだ」
「どうやら、甘く見過ぎていたか……観察処分者、名は？」
「……げほっ！　……吉井……明久」
「そうか……吉井明久、その根性を評価し、先ほどの発言は撤回してやろう。案外貴様にも、私の通過点たる価値があるやもしれんな」

白夜が去っていき、明久は2度も叩き込まれた鳩尾と顔面を抑えて、その場に突っ伏したまま。

「……ちょっと、休んでから行こう」

その少し後。

「っ！　明久!?」
「え？　吉井君!?　どうしたの!?」

部活帰りだろう秀吉に愛子と出くわし、よろよろと路地脇の細道から出てきたことに2人は驚き駆け寄った。

「明久、何があったのじゃ!?」
「なっ、何でもないよ……ちょっと、ケンカに巻き込まれちゃっただけだから」
「だったらすぐに……」
「待って工藤さん。ただの事故だから、気にしないで」
「……そう?」
「ごめん……できれば、知られたくないんだ。特に光一には」

知られたら、きっと自分にとっても光一にとっても最悪のことになる。
そう考えた明久は、2人に念入りに口止めを頼むことにした。

第百三十七問　間話　バカと超人のとある会合（後書き）

そろそろコラボ集として、コラボ系をまとめようと考えてます。
って、前から言った気もしますが、すみません。

第百三十八問　間話　とあるはぐれ武闘派コンビのガチ対話

問題　次の問いに答えなさい

日本で初めて実測で日本地図を書いた人物を答えなさい

姫路瑞希の答え

『伊能忠敬』

吉井明久の答え

『伊能忠敬』

教師のコメント

正解です、流石姫路さんです。

そして吉井君も、先生は実にうれしいです。

久遠光一の答え

『わかりません』

教師のコメント

開き直るくらいなら、最初から白紙で提出してください。

坂本雄二の答え

『翔子から逃げるための地図を作ってほしい』

霧島翔子の答え

『雄二を捕まえるための地図を作ってほしい』

教師のコメント
仲が良いカップルのようで、何よりです。

土屋康太の答え
『学園の見取り図なら、頭にしっかり刻みこんである』

教師のコメント
その意味について、職員室で話を聞かせてもらいます。

明久が白夜と出くわしたその少し前。

「やれやれ、６人分に加えて2日分の買い出しとなると、結構な量になるな」

今日は仲良し5人組に、姫路を加えて光一の家で遊ぶ日。
どうせなので昼食を一緒に食べる約束もしてるため、光一は現在買い出しに出ていた。

量が量のため、非力な光一はキャリーケースでもなければ運びきれないので、それもちで。

「しかし、ちょっと前までは想像できなかったかな？　姫路も参加するなんて」

まだまだ信用はしていないものの、今日1日は様子次第では信用することにしていた。

現在の雄二が姫路がらみで事を起こせば、確実にまた妙な噂が蔓延するような状況であることを考慮しての配慮である。

実を言うと、雄二による瑞希と美波の3股という噂の真の狙いは、その辺りにあった。

雄二が事を起こせば、自動的にカウンターがかかる状況を作り上げる。

あわよくば、自分たちの行動を2人に自覚させるという狙いもあったが、そっちは半分が予想外にも外れた。

「……原始人じゃあるまいし、どうしてうちの学園の女どもは獣でも出来る慎重な行動が出来なくて、力ずくの発想ばっかりやるのかね？」

内心呆れつつ、まだまだ自分の気苦労は終わらないことにため息をついた。

現状ではハメて信用を落としでもしなければ、自分もそうだが明久にも平穏はとても訪れはしない。

それに彼の奇天烈な姉である、玲のこともある。

「さて、どうしたものか……？」

明久にも厳しく接することは決めていても、（雄二と玉野と島田の所為で）1セットで不幸が降りかかることが多い以上、どうやっても自衛が明久の保護につながる。
なのでこれは仕方のないことだ、とほぼ無理やりな納得をして……。

「……まずは漫研潰すことから始めるか。あのバカども、あれだけやったのに性懲りもなく“バカと銃神とバラの世界（明久×光一）”の新刊出しやがるみたいだし、予約の前金奪った上で設備と原稿ダメにしよう。部費の一部の使途ごまかしてカラオケ通いしてる証拠でも突き付けてやれば、何も言えなくなるだろうし」

とりあえず、噂の地盤を破壊することにした。
……兄のことがある以上、公にしないための配慮をした上で。

ちなみに雄二の件は、新聞部にある程度リークしてるため、責任が雄二に向くようになっている。

「事は目立たないよう、静かに迅速に的確にってね」

方針も決まったことで、光一はひとまず頭痛の種から頭を離した。
今日一日次第で、瑞希の監視をやめて普通に接する意味合いも兼ねた今日の事がある以上、こういう考えのまま接しては平等性に欠ける。

「これで少しは気苦労が……ん？」

ふと見た先で、何かこそこそしてるゴリラ……もとい、顔みしりを見つけた。

「何やってんだ雄二？」
「うおっ！　こっ、光一！？　くそっ！！」

ビュッ！！　（雄二がとっさに光一めがけてパンチを繰り出す）
ガンッ！！　（光一がとっさにフライパンを取り出し、雄二のパンチをガードした音）
バタバタバタッ！！　（雄二が拳の痛みにのたうちまわる音）

「いてて、完全には耐えきれなかった……いきなり何すんだよあぶねえな！」
「お前こそフライパンでガードすんな！」
「「……（ガンのくれ合い）」」

ドドドドドドドッ！！

「ん？」
「っ！　まずい！！」

雄二がとっさに路地裏の殻のごみ箱を開け、そこに避難した。
それと同時に、光一の視界にはＦＦ団が押し寄せてくる。

「休日出勤とは、お前らも暇だなー」
「暇なものか！　俺達は正義のために日々戦っているんだ！！」
「それより貴様、そのキャリーケースに詰め込まれている食材はなんだ？　まさか工藤に木下を餌付けして陥落しようと……」
「アホか。今日は安売りだから、しばらくの食材を買い込んだだけ……で、今度は誰を襲ってんだ？」
「Ｇ級異端者坂本雄二だ、奴め霧島翔子嬢を無理矢理教会に連れ込もうとしていたのだ！！」

いや、事実はむしろ絶対逆だろ。
というツッコミはなしにしておいた。

「雄二なら学園の方に逃げてったぞ？」
「そうか、恩にきる！」
「そう思うんなら、異端審問会の１回位は免除してほしいよ」
「それは無理な相談だ」
「だろうな。それよりいいのか？」
「そうだ、行くぞ諸君！　異端者に死を！！」
「「「異端者に死を！！」」」

まるでバッファローの群れのように、ＦＦＦ団は土煙を上げながら文月学園を目指し突進していった。
光一はゆっくりと携帯を取り出し、文月学園につなぐ。
口元を押さえながら、秀吉に教えてもらった声真似で。

「すみません。文月学園ですか？　おたくの生徒らしき妙な集団が、迷惑行為をしながらそちらに向かってます」

匿名の情報提供者のフリをして報告し、即座に通話を切った。
一応番号非通知処理は忘れずに。

「……どういう風の吹きまわしだ？」

光一に疑うような視線をぶつけながら、隠れていたゴミ箱から這い出る雄二。
もともと折り合いが悪い２人だけに、助けることなど疑問を生むだけにすぎない。

「俺のちょっとした都合だよ、ゴミラ」
「ゴミとゴリラを混ぜて斬新な呼び方するな！」
「寄るなゴミ臭い。そんなことより、助けてやったのに感謝の言葉も言えんのかお前は？」
「こうなったのは全部お前のせいなんだよ！！　お前が姫路をだました3股なんて濡れ衣着せやがった所為で、翔子が結婚の予定を早めるべきなんて言い出して無理矢理教会に連れ込まれたんだ！！」
「別に俺は何一つ嘘は言ってないし、軽はずみなことをして噂を勝手に蔓延させたのはお前らだろ。そんなだから俺の手で踊る手乗りゴリラから上にあがれねえんだ」
「「……（メンチの切り合い）」」

ちなみにこのやり取りをしてる間に、周囲には人気がなくなっていた。
巷では悪鬼羅刹と呼ばれる雄二と、凶王と呼ばれる光一のにらみ合いだけに、その度合いは一般人にはとても耐えられる代物ではない。

「いつも思うことだけど、お前は逃げるしか出来んのか？　事の責任は俺達に押し付けようとするわ、霧島の事にしろ責任もろくに取ろうともしねえと、逃げ回ってばかりじゃねえか」
「うっ、うるせえな。大体はお前らがヘマやった所為だし、お前にゃ翔子の事は関係ねえだろ」
「じゃあ聞くけど、お前のその言葉は建て前か本音か、どっちなんだ？」
「っ！　……何のことだ？」

光一の指摘に、雄二は顔をそむけた。

「そうやって責任から逃げ続けて、霧島を不幸にするんだな？」
「……いつもいつも、人を見透かしたかのような事言いやがって。

俺はお前のそういうすかした態度が、お前と明久の幸福よりも大嫌いなんだよ！」
「奇遇だな。俺もお前のそういう逃げ腰を隠してるフリが、お前の自由より大嫌いだ」
「……（ぎりっ！）」

その数十分後、路地裏の人気のない細道にて。

「はぁっ、はぁっ……流石悪鬼羅刹、簡単ってわけにはいかないか」
「くっそぉっ……どこまでもむかつく針金モヤシが」

壁に寄り掛かる雄二と、そこらで拾った棒を杖に肩で息をしながら、脇腹を押える光一。
実はこの2人、こうしてガチで相対することは久々だった。

「……お前の眼から見て、霧島の気持ちは偽物だと思うのか？」
「……思ってねえし、俺じゃなかったら素晴らしいものだとも思ってる。だが！」
「だったら否定なんかするな。何があったかは知らねえが、霧島の気持ちは他の誰でもない霧島だけのものなんだ。受け入れろとは言わないけど、理解だけはしてやれよ」
「っ！　……やっぱりてめえは気に入らねえ！」
「それで結構だ！　俺もそれは否定しねえし、俺だってお前なんか気に入らねえし大嫌いだ！」

殴られた脇腹を抑えながら、雄二に歩み寄り拳を突き出す。
雄二は乱暴に拳をそれに合わせ、強めに合わせた。

「……光一、お前が翔子を理解出来るんなら、お前にもあるんだな

？　まあお前の場合は翔子とは違うベクトルだろう、他の誰でもないお前だけの感情が」
「……ああっ、あるさ。変わる事も消える事もなく、拭うことも出来やしない、他の誰でもない俺だけの感情がな」
「へっ！　精々その感情とお前の兄貴につぶされちまえ。それを見て大笑いしてやるからよ」
「ぬかせ。お前と霧島のガキの名付け親になってやるまで、潰されてたまるか」
「「……（ガンのくれあい）……ふんっ！」」

光一はキャリーケースを手に、よろよろとその場を去っていった。
その場に残された雄二は……

「痛い所突きやがって……わかってんだよ、そんな事……」

吐き捨てるように、そして自身を責めるように、頭をかきむしるようにして顔を手で覆った。

第百三十九問　間話　姫路瑞希の久遠家訪問　（前編）

問題　次の問いに答えなさい

中世において、西ヨーロッパのカトリック教会の諸国が主となり聖地エルサレムの奪還を目的とした、遠征軍の名称を答えなさい。

姫路瑞希の答え
『十字軍』

教師のコメント
正解です、

吉井明久の答え
『クルセード』

教師のコメント
確かに、十字軍はクルセードと呼ばれていたそうですが……
しかし、こんなマニアックな回答が吉井君から出るようになるとは、先生は非常にうれしいです。

土屋康太の答え
『ディバイン・クルセイダーズ』

教師のコメント
先生もスパロボは好きです

久遠光一の答え
『』
教師のコメント
本当に白紙で提出するんですか？

「どっ、どうしたんですか明久君、そのケガ!?」
「え？　えっと、ちょっと転んで……」
「すぐに手当てしないと！」

「またケンカしたの光一!?　もうっ、どうしていつもいつもそういう事ばっかり!!」
「いや、これは……って、そのセリフ聞くの久しぶりだな」
「話を逸らさないで!!」

光一の家で、いつもの仲良し5人組に瑞希を加えて遊ぶという今日。
集まってみれば、光一が雄二にやられた脇腹を痛め、明久は白夜にやられた鳩尾と顔面を痛め、と。
そのことで瑞希は取り乱し、優子は説教を始めた。

「……ねえ木下君、光一君はともかく吉井君の方はコントに見えるの、ボクだけかな？」
「……いや、ワシにもそう見えるぞい。何せ普段あれ以上になる様な事をしておるのじゃから」
愛子と秀吉は、苦笑いをしながらその2つの光景を見ていた。

「ところで光一、姫路さんを呼ぶなんて珍しいね？　お昼だって一緒にやるの嫌々なのに」
「いや、残念な事に予想外にも粘ってくれるもんだからな。そろそろケリつけようと思って」
「……光一よ、少しは本音を隠すのじゃ」

光一の態度は嫌々以外の何物でもなく、それを堂々と言ってのけてるだけに瑞希は笑顔ではいられなかった。
常日頃から周囲に嫌われてる光一は、こんな風に見られてる……と、頭の片隅で考える。

「ねえ光一、もうちょっと穏便に……」
「ダメ。姫路の所為で余計な騒動が起こったことだってあるし、玉野の根も葉もないバカ話を“バカみたいに”真に受けてあちこちに言いふらしたせいで、両刀だのバイだのろくな呼ばれ方されてないんだから」
「でも、だからって……」
「あのな明久、お前が厳しくできないから俺がやってるんだ。それに姫路だってお前が甘やかすから、調子に乗ってお前をストレス発散のオモチャにしてるんだろ！」

「……光一君、絶対瑞希ちゃんに聞こえるようにやってるよね？」

「……光一も限界はとうに通り越しておるからの。少なくとも女たらしを嬉しいというほどまでに」

にこやかに言う光一の額には青筋が浮かんでおり、なおかつ目は全然笑ってはいなかった。

瑞希には光一のセリフがぐさぐさ突き刺さっており、文字どおり針のむしろだった。

「光一、それ位にしなさいよ。吉井君も、光一にやらせたくないなら自分でやりなさい！」

「うぅっ……ごめん光一、木下さん。でもやっぱり、普段から」

「疑われるようなことしてるからって、問答無用で拷問じみたことしていい理由にならんだろ」

優子が光一から顔をそらした。

「俺としてはさっさと縁切って、今すぐ秀吉に告白したほうがお前のためだと思うがな？」

「だからなぜワシなのじゃ？　ワシは男じゃというておるのに」

「だってお前、否定できない要素を散々見せてるだろ？　それにあの変態モヒカンの事があるし」

ぞくっと秀吉の全身をくまなく悪寒が走るどころか、暴走した。

「ううっ……」

「言っとくが姫路、恋愛を原始人の狩猟の様に扱ってるお前にだけは、文句言われる筋合いはないからな？　俺はあくまで、俺の主観でそうした方が明久のためになると思ったことを言ったまでだ。」

「げっ、原始人の……」

「だってそうだろ、そもそも恋愛は互いの意思を尊重するもんだっ

てのに、覗き騒動で真っ先に覗きをやったと決めつけての拷問、そのあとも一切反省せず明久に女がらみの話が出れば即座に攻撃、根も葉もない噂を真に受けて余計な風評の蔓延、挙句の果てには雄二の良い様に利用される手駒って。やってることが現代人じゃなくて、完全に原始人の思考だろうが。これのどこに明久を信用してるって要素があるんだ？」

いつぞやの期末テストで、学園長による糾弾。
それを思い出した明久と秀吉だった。

「言っとくが俺ももう限界通り越してるんでな。ここで裏切るようならお前の両親にこれまでやった事を全部“匿名”で報告して、どこか遠くに転校させるように促す」
「そっ、そんな！」
「俺の“変な方面”での風評のダメージを考えたら、もっと早くそうしたかった位だからな！？　いやならそれ位のケジメ位つけて見せろ、この原始時代のメス乳牛が！！」
「光一、落ち着くのじゃ。ほれ、深呼吸じゃ深呼吸！！」

発作の様に取り乱すことが多くなった光一を、秀吉がなだめながら取り押さえる。
余談だが、光一は秀吉に素手での取っ組み合いに勝ったことがない。

数分後

「とりあえず、取り乱して悪かった」
「いえ、私も……」
「っと、そろそろメシか。さて……」
「ねえ光一、何作るつもりなの？」

「ん？　そうだな、お昼の簡単な定番として、チャーハンかオムライスでも」

メニューを聞いて、優子と愛子が頷きあう。

「じゃあアタシたちが作るわ」

「そうそう、光一君たちはのんびり遊んでていいから」

「？　……あのさ、最近作ってもらってばっかなんだけど、もしかして俺のメシが口に合わなくなったか？」

「え？　ちっ、違うわよ！　ただね、その……」

「ボク達には、僕たちの思うところがあったってだけで……」

実のところ、雄二に“餌付けされてる”と茶化され、普通男性がされてるような状態に陥っている。

そう認識した2人の女としてのプライドに大きな傷がついた、というだけである。

「？　……よくわからんけど、俺のメシがいやになったってわけじゃないんだな？」

「それは勿論！」

「光一君のごはんおいしいもん。ボクだって食べたいよ」

「そっか。じゃあ任せる」

「では私も……」

ガチャリっ！　（瑞希の手に手錠がかけられる音）

「お前はここにいろ。手錠はメシができたらといてやるから」

「え？　でも……」

「こ・こ・に・い・ろ！」

「……はい」

光一の気転に、その場全員がほっと胸をなでおろした。
それから愛子と優子が台所でチャーハンを作り始め、光一達はゲームを始めることに。

「あの、光一？」
「なんだ？」
「……その、ごめん。何から何まで、光一だのみで」
「悪いと思ってるんなら、ちっとでいいから努力してくれ」
「……わかっては、いるんだけどね」

明久は女尊男卑の家庭で育った上に、人格的に厳しくということができない人間である。
最も、雄二に対しては例外であるが。

「姫路も、明久がやさしいからって調子に乗るなよ？　明久が笑って許すからって好き放題やってれば、それって結局明久を利用し裏切ってるってことなんだからな？」
「うぅっ……はい」

こう言っておけばベクトルはともかく、根は正真正銘の本物（あいじょう）なのだから大丈夫……と信じたい。
というのが、光一の本音。

「……そうだね。光一に迷惑かけてたら、相棒として申し訳立たないし、何より僕も光一のお兄さんに」
「ん？　明久、今兄貴がどうとかって言わなかったか？」
「え？　えーっと……あれから光一のお兄さんについて、何も話を聞かないから不安になってただけだよ！」
「……なあ明久、兄貴がらみで何かあったのか？　まさかその傷」

「なっ、ないよ全然！　あれから光一のお兄さんにあったこともないし、そもそも接点なんてないじゃない！」
「……そう、だな。悪い、ちょっとトイレ」
光一がリビングを出て、洗面所に駆け込む。
そして洗面台に顔を突っ込んで、水を目いっぱいかけ乱暴に頭をかきむしる。
「……（ぎりっ）」
明久の様子からみて、鳩尾に顔面への的確な攻撃。
瑞希と美波の度重なる拷問により、普通よりは頑丈である明久にいまだにダメージを残すほどの強い攻撃。
極め付けが、明久の態度。
「……耐えろ。明久は俺がこうなるとわかってたから、隠そうとしてたんだ」
鉄人が休日に体罰をするわけがないし、幾らなんでも鳩尾なんて急所を狙うようなマネはしない。
雄二もＦＦＦ団に追われてる以上は余裕はないだろうし、あったとしてももっと表面的な傷が目立つはず。
そう考えれば、条件がそろう人間などたった1人しかいない。
「……アンタはとことん俺の平穏を脅かすらしいな、兄貴」
ぎりっと歯ぎしりの音が鳴り、握りしめた拳からは血が滴り落ちた。
一方、学園のトレーニングルームにて。

「受験シーズンだというのに、精が出るな大神」
「強靭な肉体を持つ事は、頂点に立つ者の務め。私は“神に選ばれし者”以前に最高学年主席として、成すべき事をしているまで。それに私は平常通りやっていれば、問題はありません」
「確かにお前は“神に選ばれし者”として生まれたことは、否定のしようがない……が、暴力的な行動が多々見られるのが問題点だな」
「身勝手をした者や、クラスの品位を損ねる行為への制裁です。それで結果を出しているのですから、文句はないはずですが？」
「結果が出ているのは事実だが……」
「……それよりも西村先生、吉井明久について教えていただけますか？」
「吉井？　……何があった。他人に興味を持つことがめったにないお前が？」
「ここに来る前に、少し会話をしただけです」
「ふむっ……あいつは正真正銘、生粋のバカだが、根性だけは人一倍ある奴だな。お前の弟と意気投合することが多く、一緒になって問題を起こしている、位だな」
「なるほど……西村先生も根性を評価している、と」
「だが正真正銘、生粋のバカだ。お前が興味を持つような奴じゃあないぞ？」
「そうでもありませんよ。安いプライドに凝り固まった無能どもにも、あの死に物狂いの根性がほしいもの」
「……まさか吉井が、大神に興味を持たせるとはな」

第百四十問　間話　姫路瑞希の久遠家訪問　（後編）

問題　次の元素の名称を答えなさい。

『Ｃａ』

姫路瑞希の答え
『カルシウム』

教師のコメント
正解です、簡単すぎましたね。

久遠光一の答え
『イライラしやすいウチの学園の女子に足りないもの』

教師のコメント
……見なかった事にしておきます。

吉井明久の答え
『カロリー』

教師のコメント
確かに綴り的にはあってますが、間違いです。

土屋康太の答え
『胸のカップ』

教師のコメント
吉井君の回答のほうがまだましでしたね。

「……それで光一君、基本的に何するの？」

昼ごはん中。
ふと愛子が、今日の目的である瑞希の仲間入りのための条件を問いかけた。

もちろん、明久に聞こえない様に

「ん？　秀吉に今日一日明久の恋人を演じてもらって、それに耐えられたら」
「えらく単純だね？」
「シンプルイズベストだ。これ以上ない方法だろ」

愛子もそうだね、とうなづいた。
そして、少し複雑そうな秀吉がそれに介入。

「……光一よ、なぜワシなのじゃ？」

「ほかに適任がいないんだよ。明久も俺ほどじゃないけど評判悪いし、迂闊な事してＦＦＦのバカどもに感知されたらアウトだから。それに今度の演劇は“ロミオとジュリエット”のジュリエット役だろ？　その役作りのためと思え」
「……出来ればロミオをやりたかったのじゃ」
秀吉が心底がっくりとした。
……が、役作りと考え、よしと気合を入れる。
木下秀吉、演劇部のホープであり、演劇に妥協は一切しない少女（笑）
「ねえ光一、それでどうして僕が秀吉の仮定恋人なの？」
一応明久には、今日は一緒に遊ぶついでに秀吉の役作りを目的だと話してある。
「そんなの身近な相手のほうがいいからに決まってるだろ。ある程度の信頼がある相手じゃないと、恋人役は務まらないし」
「じゃろうの。そういう信頼の積み重ねが恋を産む……というのもあるじゃろうし」
「でっ、でも、その……僕なんかでいいの？　僕なんかで恋人役って、秀吉に悪い気がするし、何よりあまりにも釣り合いが取れないような……」
「明久よ、余計な事を考えるでない。こういうのは釣り合い云々ではなく、本人がいいと言っておる事のほうが重要なのじゃ」
「秀吉……ありがとう」
「……（ゴゴゴゴゴ！！）」
「ん？　愛子、緊張ほぐしてやれ」

「んっ、了かーい」

瑞希の身体をどす黒いオーラが包み始めるのを見て、光一は愛子に指示を飛ばしてアイマスクに耳栓を取り出す。

「やんっ！　あっ、愛子ちゃん！？」
「さすが瑞希ちゃん。このずっしり感はクセになりそう」
「……っ！！？（ブシャアアアアアっ！！）」
「あっ、明久！？　ムッツリーニではあるまいし、しっかりするのじゃ！！」

かすかに聞こえるやりとり。
それを無視して、光一はうとうととし始めた。

数分後

「大丈夫か明久？」
「うっ、うん。なんとか……」
「うぅっ……久遠君ひどいです。あんなセクハラを指示するなんて」
「俺は緊張をほぐせと言っただけで、セクハラしろとは言ってない」
「うん、これボクの独断だから」
「……絶対こうなるとわかっててやらせたわね」

瑞希の抗議に、明久の介護をしながらあっけらかんと応え、愛子がそれに続く。
……のを見て、あきれたようにつぶやく優子は、光一に多少軽蔑を含んだ視線を送る。

「出だしからそんなで大丈夫か？」

「あうっ……でっ、でもでも、明久君だって！」
「嫉妬は結構だが、攻撃色を出すなと言ってるんだ。どうする、ここからこれ以上の子とさせるつもりだから、やめるなら今のうちだぞ？」
「やっ、やめません！」

きっと光一を見据えて、ぐっと胸の前でこぶしを握り締める。
はたから見ればけなげな少女の決意、とも取れる姿。

「そうか。じゃあ秀吉、明久にチャーハン食わせてやれよ。恋人の定番の“アレ”で」
「っ！？　……うぅっ、我慢です。我慢です……でもあれくらい私にやらせてくれても」
「……それくらいの嫉妬にとどめとけよ普段から」

その数分後、対戦ゲームにて。

「射撃ゲームで俺に挑もうってのがそもそも間違いだな」
「うっ……」
「では次はワシじゃな。明久よ、その銃のコントローラーを」

と、明久の背にしなだれかかるように、持っているコントローラーに手を伸ばす。

「……」
「姫路さん？」
「我慢です、我慢……」

それを見て瑞希が、もどかしいと言わんばかりに身体を震わせてい

た。

「ちょっとドキドキするけど、慣れると楽しいね。仮想でも恋人なんて」

「そっ、そうじゃな……」

「いっそ現実でこうだったらいいのに。夢ってはかないものなんだね……はぁっ」

「……明久よ、そういうことを言うでない」

明久のスキル“天然たらし”発動。

秀吉にクリティカルヒット、瑞希ヒートアップ。

「うぅっ……明久君、木下君にばかり……」

「あっ、あれは普通に口説き文句よね……真正面から言われたらさすがにドキッときそう」

「おやおや、意外と持ちこたえてるか？」

「……光一君、今回の事って絶対吉井君の天然たらしで、瑞希ちゃんに嫌がらせするためでしょ？」

「まさか。そこまで趣味悪くねえし、さっき言いたいことを言いまくったから多少スッキリしてて、そういう気分じゃない。それに約束した以上はちゃんと果たすさ」

「そういうところキッチリしてるよね」

「雄二じゃあるまいし、決めた以上は私情をはさまずキッチリやるさ」

瑞希が不満を身体から醸し出すように、優子が天然口説きに顔を赤くしながら明久たちを見ている。

それを遠目に、愛子と光一は感心するように見ていた。

「ま、この調子でいけば大丈夫だろ。まだ油断はできんが」
「うーん、ボクとしては頑張ってほしいな」
「俺としても、手間が減ってくれるならそれに越したことはないし、な。今はＦＦＦ以外は身動き取れる状況じゃないけど、騒ぎを起こす上に大神白夜の弟である俺をよく思わない３年が何かしないとも限らないから、ここで１つ減ってほしいところだよ」

ＦＦＦは雄二に女を騙した３股という話があり、そちらにつきっきりではあるが、彼らの行動指針は状況によって左右する。
それが自分たちに向くか、はたまた今のままなのか、別のターゲットが表れてそちらに向かうのか……が、いま一つ判断しづらい。

そのほかは、雄二と美波は今事を起こせば泥沼、という状況。
（もともと光一は雄二を手づまりにする事を前提として、この策を考えた）
他のクラスにしろ、ＡクラスとＤクラス以外は代表代理を立てる動きで内部分裂を起こしており、ヘタな事をすればバランスが崩れる状況。
Ｄクラスにしろ、覗きの真犯人であり騒動のほとんどを引き起こした張本人、清水美春。
彼女が原因で女子の身勝手さが浮き彫りになった状況のため、Ｄクラスには現在女子勢力に発言力は皆無である。

「……つくづく光一君って、本人の責任や理由の有無関係なく嫌われるよね？」
「兄貴の残りカス呼ばわりされた事もあるから、運も兄貴にとられたんだろ。ま、責任が全然ないよりかはマシだけどな。昔は兄貴と兄弟ってだけで、当然のように上級生（兄より年上含む）からいじめられてたから」

「それだけ聞くとあまりにも情けない話だよね。お兄さんに勝てないからって弟に八つ当たりだなんて」

実際その通りである。

「でも納得できるだけの能力が兄貴にはあるし、能力だけは認めざるをえないからな。俺だって兄貴にケンカにしろ模擬試召戦争にしろ、もう一度戦って勝てる自信あんまない」

「……あの何とか団をたった1人で撃退できる光一君でそうなら、西村先生とも互角に戦えそうで怖いんだけど」

「いや、出来るかもしれないぞ？」

光一に知る限りの兄の能力や、この前見た限りでの動き。

それらを考慮しての事だが……それを聞いた愛子は、絶句の一言で言い表せた

「……あの人、本当にボク達と年が変わらない学生なのかな？　もし神様が存在するんなら、あまりにも不平等すぎるよ」

「……不平等だから才能なんだし、愛情だから特定を贔屓したがるもんなんだ」

「えらく達観してるね。光一君って」

「ガキの頃から散々思い知らされ続けたからな。っと、この話はもう終わりにしよう。工藤から見て姫路はもういいと思うか？」

「え？　うーん……大丈夫じゃない？　光一君の罵倒でへこんでるのがかわいそうだけど、それを抜きにしてもよく頑張ってるよ？」

「もともとが努力家だしな。変な影響受けないように気をつけさえすれば、問題はないのはわかってるけど……難しいよな」

Fクラスはバカぞろいであり、個性が強すぎるクラスである。

染まり易い瑞希がそれに影響されない保障など、誰一人できないだ

ろう。

「後は、雄二が玉砕覚悟で姫路に何かする可能性……だな」
「……どんだけ光一君と吉井君の幸福を妨害したいの？」
「それが俺達の間柄だからだ。まあこっちはＦＦＦに、今だ姫路を騙して引き込もうとしてるとでも流せば問題はない。優子、ちょっといいか？」

そして夕方。

「というわけで、俺と愛子と優子で考慮した結果……今日から俺達は仲良し６人組として新しい学園生活を送ることにした」
「ほっ、本当ですかーっ！？」

と、見てわかるように満ち溢れた喜びを雰囲気で表現していた。
ふと光一の視界に入った瑞希のウサギの髪飾りが、表情を変えたように見えたが……

「……気のせい、か？」
「え？　どうかしました？」
「いや、何も……明久に秀吉も、それでいいか？」
「え？　うん、僕はいいよ」
「ワシもじゃ」

明久は当然として、秀吉も頷いた。
ここまでくれば、自分の悲願も達成も同然だなと確信。

「じゃあ後やるべきことは、秀吉と姫路に明久の攻略方の断片を教えてから、雄二をいけにえに矛先をそらして……」

「え？　あの、光一？」
「ん？　なんだ？」
「吉井君の攻略法って……あの吉井君の？」
「……姉上、ワシを入れてる事に疑問はないのかの？　しかし、鈍感の極みである明久を攻略するすべを見つけるとは」
「あのな、明久に彼女ができないと迷惑な話が出回り続ける以上、明久の攻略法の確立は必須なんだよ。相手も秀吉に葉月ちゃんといるわけだし、それだけやれば今の状況からして事を進めるの簡単だしな」
「だから男のワシを入れるでない」

それから光一は、他クラスの現状についての説明。
そしてＦＦＦの矛先をそらす情報も提示。

「久遠君が敵の時は恐ろしい人でしたけど、味方となると本当に頼もしいですね」
「今頃気づいたの？　光一はできる分野だと出来るし、面倒見もいいから秀吉もああも懐いてるのよ」
「そうそう。頼りになるし優しいしで、ボク達から見れば評判悪いことのほうが信じられないよ」
「ふふっ、お２人とも本当に久遠君の事が好きなんですね」
「「っ！！？」」

「……けど、極力水面下でやらないとな。３年の事もあるし」
「ねえ光一、何の話？」
「いや、受験とは言え、あれから3年に動きがない事が気になってな」
「やっぱり、光一のお兄さんとはもう一度ぶつかるのかな？」
「今の状況が続けばあり得るだろ。３年があの騒動に参加したのは、

2年が起こした騒動で学園の評判が落ちて内申に響くからが理由だ。もし騒動を起き続ければ」

「そっか。黙ってるわけないよね」

「けど雄二のバカは、そんなこと気にしないだろうし……どうにか大人しくさせようにも、俺達の不幸のためなら玉砕覚悟で出てもおかしくないからなあ」

「雄二が光一のお兄さんにボコボコにされたらいいのに」

「それが理想っちゃ理想だな」

第百四十一問　間話　姫路瑞希の久遠家訪問　（おまけ）

問題　次の問いに答えなさい

キリスト教における“七つの大罪”を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『傲慢、憤怒、嫉妬、色欲、暴食、強欲、怠惰』

教師のコメント

正解です。

これらが人の罪の原初であるとされています。

久遠光一の答え

『傲慢、嫉妬、自分勝手、逆恨み、裏切り、暴走、同性愛』

教師のコメント

君の答えから尋常ではない何かを感じます。

吉井明久の答え

『坂本雄二』

坂本雄二の答え

『久遠光一、吉井明久』

教師のコメント

嫌いな人をかけとは言ってません

Fクラス男子の答え
『久遠光一と坂本雄二は二股に三股の大罪人じゃー！！』

教師のコメント
暴食以外の大罪を満たしている集団らしいのでしょうか？

夕食時。

光一が暴言のお詫びと瑞希の参加祝いという事で、夕食をふるまうと提案。
木下家は隣で、明久と愛子、瑞希も遅くなると連絡。

「すみません、わざわざ」
「いいよ別に。俺だって言いすぎたし、お前らの無責任で感情任せのやりたい放題に怒ってるんだから。非がない事は別としても、自分の行動には責任は持つよ」
「うぅっ……」
「謝る位なら“汚名挽回”じゃなくて“名誉挽回”をするようにな

？」

それだけ言うと、光一は料理を作りに台所へ。
ほんの微かな音量の鼻歌を歌いながら、料理を作ってる事は全員が完治した。

「言葉で間違えるなら笑える程度で済むけど、行動だとさすがに笑えないよね」
「でも光一が怒るのも無理もないわよ。確かにやりすぎだとは思うし人の事言えないけど、姫路さんに美波も光一に何度も怒られてるのに同じこと繰り返すんだから」
「でっ、でもでも！」
「それのほとんどが根も葉もないデタラメだったでしょ？　……光一は同性愛関連を嫌ってるのに」
「？　あの、優子ちゃん？　どうして目をそらすんですか？」

……ここだけの話、優子は学園腐女子の間で一番人気の“バカと銃神とバラの世界”が大のお気に入り。
（匿名で全シリーズ購入しており、日々の楽しみである）
光一に悪いと思いつつも、わかっちゃいてもやめられない状態で次作も予約を入れていた。

「……人って罪深いものよね」
「？　どうかした、木下さん？」
「え？　うっ、ううん、なんでもない！！」

優子の頭にふと、ある事が思い浮かんだ。

自分は趣味による“強欲”……というか、“色欲”？
白夜は生まれ持った才能による“傲慢”

瑞希は明久に対して行き過ぎた愛情による“嫉妬”。
雄二は普段から寝っ転がってばかりで、責任から逃げ回る“怠惰”
光一は過去に負った傷による“憤怒”
“暴食”は……そういえばお弁当を豪華にしてから、ウエストがきついような……

七つの大罪とはよく言ったものだ、と変な意味で納得した。

「光一、今日は何にするの？」
「ん？　今日は豚肉と鶏肉が安かったから、トンカツにチキンカツでも……明久に秀吉、悪いけど今すぐ家中の戸締りを二重錠まで頼めるか？　ドアにもチェーンロック頼む」
「え？　どうして？」
「いや、なんか出て来そうな気がして……」
「……トンカツに、チキンカツ？」

高カロリーのメニューと聞いて、優子は顔を青ざめた。
さすがに光一の前でダイエットだの、そういう話題は避けたい。

「？　何かまずいか？」
「あっ、あはは……やっぱり、優子もなんだ」
「なにがやっぱり？」
「え？　ううっ、ううん。なんでもない！」

愛子があわてて否定して、顔をそらした。
謀略や姦計に長けては居ても、彼は女性関連の話題や恋愛関係といった物にまだまだ疎いというか、不慣れなのである。

「久遠君、女の子は複雑なんですから」
「お前は複雑というより、反転のほうが正しい気がするんだが……

？」

瑞希が愛子のフォローをするも、光一はある意味失礼な例えで応えた。

「ねえ秀吉、なんか僕ここにきてからずっと、カヤの外のような気がするんだけど？」

「……お主もいい加減気付いてやるべきじゃろ」

それから数分後。

「あっ！　光一、またモヤシのこしてる」

「うっ……」

ご馳走になってばかりではなんなので、優子はいったん家に帰って料理。

それでサラダを作ってきたのだが……

「……モヤシ嫌い」

昔から共食いだなんだと散々からかわれているので、光一はモヤシが（食わず）嫌いだった

「もうっ、食わず嫌いなんだから食べなさいよ。ここには共食いだ何だっていう人なんていないんだから」

「うっ……」

「なんだったらボクが食べさせてあげようか？　口移しで」

「……（ぐらっ）」

「……影響されちゃダメ、影響されちゃダメ。久遠君はあわてずにちょっとずつ、と言ってましたから」
「？　どうかした、姫路さん？」
「いっ、いえ、なんでも。それより久遠君の料理って、本当においしいですね」
「うむっ、腕前は明久と同じくらいじゃからの。２人の料理対決の時は、それはもういい勝負じゃった」

光一の愛子と優子のやりとりを見て、自分も……というのを抑える瑞希
光一による明久の攻略法の断片は、周りに影響されるよりも、ちょっとずつ明久に自分との時間をなじませる事から。
明久は（主に周りのせいで）“自分が女の子から好かれるわけがない”という概念が根付いているのだから、直接的なアタックよりも間接的にじっくり馴染ませるほうが効果的。

と、さっそく教わった事を実践していた。

「へえっ、さっそく実践してるのか？」
「実践？」
「はい。明久君と仲良くするための第一歩です」
「え？　えーっと……そう言ってもらえてうれしい、かな？」

さっそく好印象をもらえた事に、瑞希は感激にふるえるも……。

「一応、友達になってもいいとは、思ってもらえてるんだね？」

……すぐさま自分の立ち位置を思い知らされた。

「我慢しろ姫路。わかってた事だろ？」

「……そうですけど、改めて言われるとやっぱり傷つきます」
「え？　……あの、何かまずい事言った？」
「お前と姫路には、まだまだ時間と勉強が必要だって事だ」

第百四十二問　3年VS2年騒動編　プロローグ（前書き）

いろいろ考えてみて、かなり大がかりな騒動があったのに補習なしは不自然だと思ったので。
旅行編を楽しみにしてたかたはすみません。
ですがこれが終わったら書きますので、ご理解いただけたらと思います。

第百四十二問　3年VS2年騒動編　プロローグ

問題　以下の問いに答えなさい

外気においての高温多湿などが原因となって起こる症状の総称を答えなさい

姫路瑞希の答え
『熱中症』

教師のコメント
正解です、さすがですね姫路さん。
この時期ともなるとニュースで流れる事も多いため、体の弱い姫路さんが心配です。

吉井明久の答え
『風邪』

教師のコメント
……度肝を抜かれました

久遠光一の答え
『Ｈｙｐｅｒｔｈｅｒｍｉａ』

教師のコメント
一応正解にしておきますが、カッコつけて英語で書かないでくださ

い。

「……雄二」
「なんだ翔子？」
「……もうすぐ補習は終わり。だから久遠が手配してくれたペア旅行に行く」
「行かねえ！　くそっ、せっかく一学期が終わったってのに毎日登校なんて、夏休みの意味を知らねえババァの嫌がらせの唯一の利点だってのに」
「……それは仕方ない。元々雄二達Ｆクラスは平常授業が沢山潰れてたし、全体的にあの騒動の事があるから」
「ん？　ああっ、光一と木下がキスしてた日のアレか。確かにあの騒動のせいで全体的に平常授業が潰れて、この特別補習をしなきゃならないわけだからな。そのおかげでＢ～Ｅクラスじゃ、元アンチ久遠派のメンバーは肩身狭い思いをしてるらしいな」
「……でもどの道、雄二がいるなら私も学校に行く」
「またお前はそんな事を……」
「……雄二が学校に行かないなら、私も行かない。補習があってもなくても」
「あー。わかったわかった」
「……雄二が結婚式に行かないなら、私が連れていく。結婚の意思

があってもなくても」
「かっこいいセリフのようだが、それは立派な人権侵害だという事を覚えておけ！　というかそんなことになったら俺は全力で抵抗するからな！」
「……抵抗なんて、無駄。私、がんばるから。応援してくれる友達のためにも」
「応援してくれる友達ってのは、絶対あのバカとモヤシとその妾だよな！？　そもそもなんでそんな事で頑張れるんだよ！　努力と友情の無駄遣いをすんな！」
「……前に」
「ぁん？」
「……前に、瑞希が言っていた」
「なんだ？　姫路が何を言っていたんだ？」
「……『好きな人のためなら頑張れる』って」
「それ違うからな！？　姫路の言おうとした事と意味合いが全然違うからな！？」
「……私も最近、心からそう思った」
「私もじゃないっ！　そんなこと考えんのは、世界中探してもお前だけだ！」
「……雄二とは小細工なしの腕力勝負で結婚して見せる。私たちを支えてくれる友達のためにも」
「だから結婚に腕力は関係ないし、その友達とやらは俺から見れば厄病がぎゃあああああっ！　頭蓋が！　頭蓋がきしむ音が！」
「……結婚、してくれる？」
「しねぇよ！　っていうかできねぇよ！　早すぎるだろ！」
「……あっ……そっか」
「ぜぇ……ぜぇ……わかってくれたか……」
「……うん、気が早かった」
「そうだな。俺はまだ17だからな、結婚なんてしたくても……」
「……この時間じゃ、久遠が調べてくれた式場も市役所も開いてな

い」
「そういう問題じゃないだろ！？　てか光一の野郎、そんな情報まで調べてやがったのか！？」
「……うん。わかってる、冗談」
「……なんつーか、お前。最近どんどんバカになってるよな」
「……ひどい」
「事実だ」
「……ひどい」
「けっ！」
「……でも、雄二」
「んぁ？」
「さっきのセリフ、１８歳になったら私と結婚してくれるってこと？」
「げほげほっ！　な、何を言ってやがる！」
「……私、楽しみにしてるから」
「あのなぁ……お前はいつまでそんな馬鹿な事を言ってるんだよ？　そろそろ現実をだな」
「……大丈夫」
「大丈夫って、何がだよ？」
「……私はいつまでも雄二の事が好きだから」
「げほげほっ！」

時は７月の終盤、普段ならば夏休みで学校に来るのは体育会系の部活所属者。
もしくは夏期講習に参加する生徒位だろう。

……だというのに、文月学園第二学年教室は全員が授業というより補習を受けていた。

それというのも、とある過激派の打倒をめぐって学年総出の騒動とその後始末のせいで、一学期の予定を消化できなかったからである。ちなみにその騒動を引き起こした集団“アンチ久遠派”はすでに壊滅しているが、その元メンバーおよび主要人物はそれぞれのクラスで、肩身狭い思いを続けていた。

そしてその過激派こと、久遠光一が所属するFクラスもまた……

「……逃げたい」

「……まったくだ」

「ん？　何か言ったか吉井に久遠？」

「「いえ、なにも……」」

最悪な設備と、筋骨隆々の鬼教師である鉄人による。

男が殆どという勉強どころか息をするのもきつい環境で、茹だる様な熱気に包まれながら補習を受けていた。

（……しかし姫路、よくこんな状況でまじめにノート取れるよな。化け物か？）

（さすがは実力Aクラスの優等生……と言いたいところだけど、姫路さん体弱いのに大丈夫かな？　最近調子は良さそうだけど、やっぱり心配だよ）

（問題ないさ。姫路には風通しのいい窓際の中でも、柱の影なんてベストポジションだ。鉄人は見てくれはあんなでも、相手に応じた気配りをするからな……まあだからこそ）

明久と光一は会話をしながら、自分たちのポジションを確認する。

日当たり良好で風通し最悪の窓際最後尾で、負担はかなり大きかった。

ちなみに2人は、口が動いている事を気取られない様に腹話術のように口の動きを最小限に抑えた会話という、鉄人に目をつけられている生徒の必須技術を駆使し、会話をしていた。

『ここで元の高さをｈとしたとき、位置エネルギーがすべて運動エネルギーに変換されたとすると、このときの速度Ｖは重力加速度ｇと高さｈのみに依存する式となり』

さらに言うと、鉄人は教科書を読み上げながらも明久と光一、その近くにいる雄二のほうを向いている。
いくら優子たちのおかげで大人しくなったとはいえ、まだまだ信用に足るとは認識されていない。

（……よし、逃げよう。そもそも夏休みだってのに、こんな鉄拳補習フルコースな授業があるなんて事自体が間違ってるんだ）

ふと光一の耳に、雄二のつぶやきが聞こえた。
どうやら彼は脱走計画を思いついたらしい。

（……どうする光一？）
（……やめとけ。補習は3年だってあるんだ、今受験シーズンのこの時期で事を起こすのはまずい）

この時期3年は受験の天王山と言われる時期だけに、ピリピリしている状態。
つまりちょっとした火種でも、点火するには十分な状況である。

（おい坂本、逃げるのか？）
（逃げるなら俺達にも一枚かませろ。こんな地獄には付き合いきれねぇ）

（俺もだ。このままだったら確実に干からびて死んじまう）

そんな光一の危惧など知った事じゃないと言わんばかりに、周囲の席の連中が雄二に話しかけていた。
当然顔は黒板に向いていて、口は小さくしか動いていない。

さらに当然だが、このクラスで鉄人に目をつけられていないのは、女子3人のみである。

（……んむ？　今何か不快な物を感じたのじゃ）

うとうととまどろんでいた秀吉が、ふと目を覚ましたかのように何かを感じ取った。

（……あのバカどもが……あれ？）

恒例の頭痛が光一をむしばみ始めるが、急にぐらりと光一の視界がゆがんだ。

「？　光一、大丈夫？　なんか顔赤いし、今ふらつかなかった？」
「いや、だいじょう……」

どさっ！

「え？　光一！？」
「どうした吉井？　ん？　久遠、どうした！？」

（よし、チャンスだ）
（（（おう））））

光一が頭痛に加えて熱中症にかかったのか、意識を失いその場に倒れた。
それに気を取られた鉄人を見て、チャンスと見た全員が一斉に……

「全員動くなっ！」
「「「っ！！」」」

動き出そうとした瞬間、鉄人が機先を制した。
光一を抱え、そっと日陰で寝かせ終えると……

「吉井、久遠の服を緩めて煽いでやれ。木下、スポーツドリンクを買ってこい」
「え？　はっ、はい」
「うっ、うむっ」
「一応帰りに病院に付き添ってやれ。さて……」

応急処置を終えた鉄人が、じろりと脱走を企てた４５名を見据える。

「貴様ら……脱走とはいい度胸だな。そんなに俺の授業は退屈か？」

脱走を企てたクラスの連中は、誰が最初に鉄拳の餌食になるのかとびくびくしていた。
それに構うことなく、明久は光一の衣服を緩めようとして……。

「不潔よアキ！！」
「ちょっ、美波！　これは医療行為なんだから」
「島田、状況をわきまえるのじゃ！　明久、埒が明かぬからワシが……」
「「「久遠を殺せえええええ！！」」」

つくづく空気の読めないバカどもに邪魔され、光一の処置は滞っていた。

「……吉井、木下、久遠を保健室に連れて行け。埒が明かん」
「そっ、そうですね」
「うむっ……ここでは邪魔が入って処置ができん」
「じゃっ、じゃあウチも！」」
「島田、お前はここにいろ」

あきれながら額に手を当てる鉄人の一喝で、美波はしぶしぶ引き下がった。

「……流されちゃダメ。流されちゃダメ」

瑞希のそんなお経みたいなつぶやきは、幸いにも誰かに気づかれることはなかった。

「さて……お前らにとってつまらない授業をしてしまった以上、侘びと言っては何だが1つ面白い話をしてやろう。吉井、木下、急いで保健室へ迎え。姫路と島田は耳をふさげ」

明久と秀吉は光一に肩を貸すように担ぎあげ、ゆっくりと教室を出て行った。
光一は体重が軽いためすんなりといくが、2人は意識のない光一を気遣い、ゆっくりと揺らさない様に歩く。

「面白い話って何かな？」
「さあのう……」

「「「ギャアアーーッ！！」」」

ある程度離れたところで、Ｆクラスから悲鳴がこだました。
……それを聞いて２人は無言で保健室へと向かい、それ以上の会話はなかった。

一方その頃

「あれは１０年前の夏……俺がブラジル人留学生と、レスリングをやっていた時の事だ」
「「「ギャアアアーーっ！！」」」

Ｆクラスの教室に悲鳴がこだました。
それに構わず鉄人は、途切れることなく昔話を進めていく。

「相手は身長１９５ｃｍ、体重１２０ｋｇの巨漢、ジョルジーニョ・グランシェーロ。腕の太さが女性のウエストくらいありそうな男だった。対する俺も負けはしない。身長１８８ｃｍ、体重９７ｋｇの鍛えに鍛えた肉体でヤツと正面からぶつかり合い……」

「やめろー！　やめてくれぇー！！」
「脳がぁー！　脳が痛えよぉー！！」
「ママーっ！」
「死ぬーっ！　死んでしまうーーっ！！」

Ｆクラスは鉄人の昔話により、阿鼻叫喚以外に表現する事が出来ない地獄絵図へと塗り替わった。
それでも留まることはなく、鉄人は昔話という名の精神攻撃の連射を浴びせる。

「しかし奴はレスリングと柔道を勘違いしていた。腕ひしぎを仕掛けてきたんだ。だが俺の自慢の上腕二頭筋に勝てるわけもない。汗に濡れ、血管を浮かび上がらせながらも俺は腕を伸ばしきることなく、抵抗を続けた。すると相手はすかさず俺の頭上に回り込み、その分厚い大胸筋で俺の顔を圧迫しつつ上四方固めを」

「ぐおおおおお！　いやだ！　目を閉じたくない！　最悪のビジュアルが瞼の裏に張り付いて離れない！」

「起きねぇ！　福村が起きねぇよぅ！！」

「空気を！　新鮮な空気をくれぇ！」

「そして制限時間いっぱいまで使った俺達の寝技の攻防は続き……ん？　もうダウンか？」

昔話に酔っていた鉄人がふと見回すと、全員が先ほどの光一の用に卓袱台の上に突っ伏して気を失っていた。

「やれやれ、仕方ない。十分間だけ休憩を入れるとしよう。脱走なんてくだらないことを考えた自分を反省するように」

ため息をつきながら2人にジェスチャーで耳から手を離すように指示し、教員用のイスに座る鉄人。

そっと周りを見回して、瑞希が鉄人に駆け寄る。

「あの、西村先生？　いったい何を……？」

「ちょっとした昔話を聞かせただけだ。なに、すぐ目を覚ます」

「そうですか……あの、久遠君の様子を見てきていいですか！？」

「それならウチも行くわ。アキが変なことしそうだから」

「……駄目だ。いつもならまだしも、病人のそばで騒ぎを起こすものじゃない」

一応鉄人もその辺りをわきまえてはいるのか、2人の保健室行きを許可はしなかった。

「……鉄人。ちょっといいか？」

「ん？　なんだ、もう気がついたのか？」

「光一の兄貴について聞きたいんだよ」

「……坂本、悪い事は言わん。久遠への仕返しに大神を利用しようというならやめておけ。あいつは」

「そんなんじゃねえよ。ただ俺と並び称された人間がどんなものか、興味を持っただけだ」

「そうか？　……まあいいだろう」

第百四十三問

問題　以下の（　）を埋めなさい

織田信長　『鳴かぬなら（　）ホトトギス』
豊臣秀吉　『鳴かぬなら（　）ホトトギス』
徳川家康　『鳴かぬなら（　）ホトトギス』

姫路瑞希の答え
織田信長　『鳴かぬなら（殺して見せよう）ホトトギス』
豊臣秀吉　『鳴かぬなら（鳴かせて見せよう）ホトトギス』
徳川家康　『鳴かぬなら（鳴くまで待とう）ホトトギス』

吉井明久の答え
織田信長　『鳴かぬなら（殺して見せよう）ホトトギス』
豊臣秀吉　『鳴かぬなら（鳴かせて見せよう）ホトトギス』
徳川家康　『鳴かぬなら（鳴くまで待とう）ホトトギス』

教師のコメント
正解です、さすがは姫路さんと吉井君です。

土屋康太の答え
豊臣秀吉　『鳴かぬなら（啼かせて見せよう）ホトトギス』

教師のコメント
漢字の違いだけでいやらしく感じます。

久遠光一の答え
織田信長　『鳴かぬなら（撃ち殺してやる）ホトトギス』
豊臣秀吉　『鳴かぬなら（泣かせてやろう）ホトトギス』
徳川家康　『鳴かぬなら（ほっといちまえ）ホトトギス』

教師のコメント
全部君のやってる事ですよね？
しかもなぜか徳川家康以外はしっくり来てるのが腹立たしいです。

「うっ、ううっ……」
「あっ、気がついた？」
「まだ起きてはならぬ」

光一が意識を取り戻し、ほっと安心する明久と秀吉。
周囲を見回して、ここが保健室であることとここに来る事になった経緯……状況把握完了。

「あっ、そっか。俺……」
「びっくりしたよ。いきなり倒れるんだから」
「光一は明久と違い、身体自体はそんなに強くはないからの。無理もないのじゃ」

「……で、あのバカどもの脱走はどうしたんだ？　雄二の主導だったら嬉々として、絶対俺が倒れたのを利用して逃げようとしたにきまってるし」
「……つくづくお主らの間柄は、人としての情がかけらもないの」
熱中症は命にも関わるのだから、普通は脱走より救急を心がけるものである。
……が、当然Ｆクラスに友情や命を尊ぶという概念は存在するわけもない
さらに言えば、雄二と光一もしくは明久との間柄には、相手を利用するか貶めるかの２択しかない。
「今何時だ？」
「もうすぐ補習はおわるよ？」
「そっか。じゃあもちっと休んでこう」
「そのほうがいいの。念には念を入れて、帰りには病院に寄っていくのじゃ」
「飲み物は用意してあるよ」
「ありがとう」
秀吉が下敷きで光一を仰ぎ、明久も買ってきたスポーツドリンクを光一に見せた。
にっと笑って、礼を言うと光一は満足そうにふーっと息を吐く。
「なにはともあれ、もう少しで補習も終わるが……このままなら、無事で終わりそうだな」
「？　補習で無事も何もないんじゃない？」
「そうじゃねえよ。あの騒動で授業が潰れたのは３年もだろ？」
「あっ……」

この度の補習は、かのアンチ久遠派による学園単位の騒動により潰れた授業の補習である。
あの騒動には3年もかかわっていた以上、当然3年も夏期講習を兼ねた補習はある。

「あの騒動で清水が原因だと知られたとはいえ、俺の評判がいまだに悪い事は知ってるだろ？」
「え？　うん」
「更に言えば、あの騒動で俺が大神白夜の弟だと学園中に知られた事も、十分火種になる」

そればかりは、明久ですら成程と即座にうなづいた。

“能力は本物だがむかつく”
“女子相手に体罰を与えるサディスト”
“怖い”
“病的なナルシスト”
“厄病神”

明久が聞いた限りの白夜の評判には、１つとして好意的なものが存在しない。
しかし能力を否定するようなものも、１つとしてない。

「かもしれないね。あの人能力はあるかもしれないけど、あまりいい評判を聞かないから」
「昔からそうじゃったぞい。じゃからこそ光一は……」
「やめろ秀吉……そういうわけだから、兄貴に反感を持つ3年が突っかかってくるかもしれないし、それに乗じて元アンチ久遠派のバカどもが逆恨みで攻撃してくるかもしれない」

「……じゃあずっと、光一にとっては綱渡りだったんだ」
「幸いと言えば、3年は騒動が起これば介入する余地はあるかもしれないけど、基本的に3年が優先すべきは勉強だからホイホイ俺たちに構う余裕なんてないところかな」
「そっか。じゃあ騒動さえ起こらなかったら……ごめん、無理かもしれないね」
「……光一が倒れるのも無理もないの」

それもそのはず、第2学年には男女交際を妨害する組織、ＦＦ団の存在がある。
彼らは噂の域ですら嫉妬の対象のため、常日頃から騒動が絶えない。

「……ねえ光一、補習終わったらパーっと遊ぼうよ」
「そうじゃの。光一はずっと気苦労が絶えなかったのじゃから、それくらいしても罰は当たらぬ」
「じゃあ今度、6人でどっか遠出するか？」
「それいいね。そうだ、今度姉さんが海に行こうって話をしてるんだけど、一緒にどう？」
「おっ、いいな……ん？」
「んむっ？　どうしたのじゃ光一？」
「……何か嫌な予感が」

一方その頃、Ｆクラスにて。
雄二は鉄人に光一の兄にして、自分と並び称された天才・大神白夜の話を聞いていた。
興味を持った美波と瑞希が、少し離れて聞いている。

「大神は、知っての通り最高学年首席で、文月学園始まって以来の

天才だといわれている生徒だ」
「聞いた限りじゃ、兄弟そろって評判悪いようだが？」
「あいつは自他ともに厳しく、完璧主義でな。試験召喚戦争では逃走や失敗には男女問わず、体罰を処したのちに召喚獣を戦死させるほどだ」
「アキだったら絶対戦争がある度に殴られては補習室ね」
美波のつぶやきに、雄二と鉄人はだろうなと頷いた。

「確かに不満は数多くあったが、能力自体は本物だ。平均点が我々教師の専門科目級の点数で、試験召喚戦争においても代表でありながら戦闘においても非常に優秀な成績を収めている」
「だからこそ、誰一人逆らえないと？」
「そうだ。結果を出せば認められるのが、文月学園の方針だからな。ついでに言っておくが、一度俺はあいつと柔道で一戦交えて、苦戦を強いられた」
「……はっ？」

言われた事が一瞬分からず固まった雄二は、耳を疑った。
鉄人が苦戦したという言葉には、とても自分たちの１つ上程度で納得できるような事ではない。

「待て鉄人。さっき……とっ、とにかく、俺とそんな変わらない年の奴に苦戦しただと！？」
「奴は目から脳、脳から筋肉への電気信号の速度が０．１１秒という話だ」
「なっ！　確か人間の電気信号は、脳から指先までで０．１８秒はかかるはずだろ！？　それじゃ、見てから動くまでのタイムラグがないも同然じゃねえか！」
「最終的には都合による時間切れで無効試合となったが、今まで戦

った誰よりも苦戦した相手だった……坂本、もういいだろう？　あいつにだけは絶対に手を出すな。これは教師として以前に、１個人としての意見だ。さあ、補習の続きだ」

鉄人が強制的に話を切り、教壇へと戻っていく。
雄二はと言うと……

「……大神白夜、か」

ぶつぶつと何かをつぶやきながら、自分の席へと戻って行った。

「居るものなのね、天才って……信じられる？　ウチ達とそんなに変わらない年の人が、ウチのクラスのバカ達を一度に相手に出来る西村先生と互角だなんて」
「でもあまりいい噂を聞かないというのは……」
「その辺りは久遠のお兄さんなんだし、仕方ないわよ」

ところ変わって、３－Ａ

「……今まで何をしていたこの無能ども。殆どがこの所点数が落ちていくばかりではないか？」

夏期講習において、実力を見るための小テスト。
その点数を見た白夜は、あきれ果てていた。

「けっ、けど大神、仕方ないだろ？　あれからだって２年のバカどもは騒ぎを起こすし……」

ドガっ！

「がふっ！」
「下を見る暇があったら上を見ろ。バカどもを駆逐しても、点数が落ちては本末転倒だとわからんのか！？」
「確かにその通りだが、このままあいつらを野放しにするってのは納得できねえ！」
「やれやれ……既に私の策は動いている。これでも不満か？」

３－Ａの面々がどよめいた。

「策？　……それっていったい？」
「もうすぐわかる事だ……バカとはさみは使いようだというが、こんな無能どもよりも役に立つものだな」
「ん？　何か言ったか？」
「どうでもいいことだ」

「……」
「？　どうしたの光一？」
「いや、何か嫌な予感がして……」
「ではそろそろいいじゃろ。ワシがかばんを……」

がらっ！

「光一、大丈夫！？」
「ちょっと優子、気持ちはわかるけど静かに」
「あっ、優子」
「光一……びっくりしたわよ、いきなり熱中症で倒れたなんて」
「悪かったな、心配掛けて」

第百四十三問（後書き）

白夜については、作中最強キャラに加えてチートになるかならないかの瀬戸際
という前提で考えてるので、いろいろと悩みどころが多くサジ加減が難しいキャラなので、色々と苦労してます

ご指摘やご意見などがありましたら、糧になりますのでぜひお願いします。

第百四十四問

文月新聞

『第３学年において、恋愛シーズン到来?』

近頃第３学年において、告白の成功率が異様に上がったことによる恋愛シーズンが確認されました。

受験シーズンではありますが、やはり高校生として彼氏彼女の存在はほしいところ。

その願いが聞き届けられたのか、３学年においてはＡ～Ｆ問わず恋愛が成就され続けております。

中には信じられない組み合わせも存在しておりますが、これはいったいどうした事でしょうか?

やはり受験シーズンのストレスは、それ相応に重いものなのでしょう。

『しかしそれに合わせての悲劇もあり』

そのカップルも、時折妙な集団に襲われるという事件も多発しております。

なんでも目撃者によりますと、まるで大昔のアニメに出る悪役のような覆面をまとい、“異端者”や“異端審問”などと叫びながら男性の方だけをさらい、病院送りにするという事件が多発しております。

犯人は……言わずともわかるはずです。

とある過激派をめぐる騒動が終わってまだ間もないこの時期。

この事件が火種になるやもしれませんが……いったいどうなるのでしょうか？

夏の日差し強い、７月の終盤のある日。
補習で登校する光一をはじめとする、幼馴染３人。

そこでふと、ある光景を見かけた。

「最近さ、カップルらしき姿をちらほら見かけるな？　全部３年だけど」
「みたいね。まあ受験シーズンともなれば互いに励ましあえる相手がほしいものよ？」
「そりゃわかるけど……大丈夫かな？」
「……ああっ、あの何とか団？」

彼らは規模を広げつつあり、最近ではＦクラスのみならず他のクラスでも活動を行っていた。
さらに言えば、元アンチ久遠派の男子も居場所を求めてそれに参加しているものも少なくはない。

「あ奴らも留まる事を知らぬからの」
「良い迷惑よ。ただでさえ白夜さんの一件もあって、３年で私たち

の学年、特に光一や吉井君を嫌悪してる人は少なくないっていうのに」

「だよなあ。なんかあのとき以上の……ん？」

見かけるようになったのは、この補習のきっかけとなったとある大騒動。

しかも見かけるのは全部3年。

3年と言えば……

「……まさか」

光一の脳裏に、ある最悪な展開が組みあがった。

これが現実となったら……

「まずい、すぐに学校行くぞ！」

「え？　どっ、どうしたの光一！？」

「あのバカどもが行動を起こす前に……あっ」

目の前のカップルの男性のほうが、見慣れた覆面集団に連れ去られ……断末魔が通学路に響いた。

「……遅かった」

「むっ？　何が遅かったのじゃ？」

「カップル連れ、それが全部3年生ってことは……多分兄貴が仕掛けた罠だ」

「えっ！？　……ああっ、そういうこと？」

優子も即座に理解した。

確かにＦＦＦ団を炊き付けるにはうってつけだが、明らかな生贄を

使った方法。
そんなこと平然とできるのは、雄二（光一＆明久限定）と白夜しか優子は知らない。

「……神童って呼ばれる人って、どうしてこう犠牲を払うのが好きなの？」

一応明久と光一も雄二を犠牲にすることを厭わないが、それは雄二の自業自得で片づけている。

「でも待って。となると……」
「今日中には兄貴が、最高学年首席として抗議に来るな」
「……そうね」

優子はそれ以上に、白夜と光一の対面のほうが心配だった。
白夜と光一が兄弟だという事は知れ渡っては居るの、それが致命的なまでに仲が悪い事を知っているのは、木下姉妹に明久、そして愛子と翔子と雄二くらい。
白夜の行動が原因で、また光一にあの時のような事が降りかかるのだけは、優子としては阻止したかった。

「なんだ？　なんか光一が面白くなってやがるな？」
「……私には頭痛で苦しんでるように見える」
「俺にとってはそれが面白いんだよ。今日はいい日になりそうだ」

今度代表に、近場の花火大会で人気のない穴場を紹介してあげよう。
と、人の気も知らずに好き勝手ほざいた雄二に、軽い復讐を誓う優子だった。

時は過ぎ、３－Ａ教室。

「さて、機は熟した」
「え？　……おっ、おい。まさか」
「これで我ら3年側に、2年を制裁する正当な理由ができた……という事だ」

白夜の策とは、2年の行動で3年が被害を被ったという、決定的な証拠を誇示できる状況を作り上げる事。
そのために3年の間で恋愛関連の情報を集め、そこからうまくいくように配慮し、ＦＦＦ団が攻撃するよう手はずを整えた。

それに加え、アンチ久遠派の元リーダー格が起こそうとした騒動についても、証拠は握ってある。
つまり、事を起こすなら今。

「それじゃあ……」
「ただし、お前たち全員テストを受けなおせ。事は万全を持って進めるものだ」
「おいおい、あんなバカどもに……」
「攻撃を仕掛けて返り討ちにされたのはどこのどいつだ？　言っておくが貴様らなどより、吉井明久を手駒としてほしいくらいだ」
「待て！　俺達より吉井のほうが価値あるってのかよ！！？」
「納得いかねえぞ！　俺達があんなバカ以下だなんて！！」
「私は実力主義だと何度も言ったはずだが、まだわからんのか？　悔しいのなら結果を出して覆して見せろ」
「「……（ギリギリギリっ！！）」」

２－Ｆ教室にて

「えっ！　光一のお兄さんが！？」
「……ああっ、間違いなく今日中に仕掛けてくる」
「どっ、どうにか避けられないの！？」
「もう無理だ、十分すぎる証拠がそろってる。考えてみたらあの指どものバカな行動も、兄貴が何かしらしてた可能性が高いし……まだほかにもあるかもしれない」
「……光一のお兄さんって、本当に僕達と同じ人間なの？」

明久は白夜の身体能力というか、ケンカの強さを間近で見て味わった事がある。
だからこそ、それほどの能力の持ち主が同じ人間だという事があまりにも信じられない。

「ん？　なんだ明久？」
「そしてこんなゴリラが本当にあんな人と並び称されてたのかが、不思議でならないよ」
「あっ、それは同感」
「なんかはよくわからんが、ちとツラ貸せやコラ」
「おーい、補習始めるぞー！」

ガラっ！

「このクラスの代表は誰だ？」
「……やっぱきやがったかクソ兄貴め」
「ん？　どうした大神？」
「第3学年で、このクラスのメンバーらしき集団に襲われたという者が多数おります。よって最高学年首席として、抗議に来ました」
「……自分で仕組んどいてよくいうよ」

毒気づいたようにつぶやくと、当然のように聞きつけた白夜がさすような視線を光一に向ける。
光一も当然怒りを隠すことなくあらわにし、白夜を打ち抜くといわんばかりに睨みつける。

「そんな事でわざわざこんなところにとは、受験生さんは随分とお暇なんですねえ」
「本当ならもっと早くに来たかったがな。これでも貴様らクズどもと違って忙しい身だ、お前たちのようなバカをする暇などない」
「そうかい、それは御苦労さま。ならさっさと帰って盆栽でもいじれよロートル」
「ふんっ、失敗は若さゆえの特権とも言うな、クソガキ」

その光景を見たFクラス生徒たちは、そろって2人から距離をとっていた。
光一は“凶王”と化しており、白夜も鉄人のような威圧感を放っていて、とても近づけない。

「ちょっ、待ってよ光一！　それに光一のお兄さんのほうも！」
「おい明久、今お義兄さんって……」
「ウチの代表ならくだらない事をほざくゴリラだ」
「そうか。おいそこの」
「おい！　なんで即座に俺なんだ!?」
「貴様以外にだれがいる？　それより貴様ら、一体どういうつもりで3年に攻撃を仕掛けた？　事と次第によっては、ただではすまさん」

白夜は有無を言わせないという気概をむき出しに、雄二にそう告げた。

それを見て、大体の狙いは自分たちだろうと辺りをつけ、雄二ならそれを察知し迷わず差し出すはず。

「それはすまなかった。侘びとして明久と光一に好きなだけ制裁を……」

「そんなことはどうでもいい」

雄二の光一にとって予想どおりな言葉を遮るかのように、白夜は堂々と言い放った。

それには雄二どころか光一も驚きを隠せず、光一をみた白夜がにやりと笑う。

「私が提示するのは即座にその異端審問会を解散し、そういった行動を一切禁止する事だ。断った場合、我々第3学年は試召戦争による武力行使も辞さない」

第百四十五問（前書き）

今回のバカテストは鉄さん提供によるものです。
ご協力ありがとうございます。

第百四十五問

問題　次の問いに答えなさい

『人を呪わば穴２つ』の意味を答えなさい。

久遠光一の答え

『ＦＦＦ団、アンチ久遠派、坂本雄二』

教師のコメント

例え的には正解ですが、これは意味を答えなさいという問題です。

坂本雄二の答え

『久遠光一』

吉井明久の答え

『坂本雄二』

教師のコメント

だからこれは例えを出す問題ではありません。

第２学年全員の答え

『ＦＦＦ団、アンチ久遠派』

元アンチ久遠派メンバーの答え

『久遠光一』

教師のコメント
……そんなに補習が嫌だったのですか？
そしていい加減逆恨みで久遠君に攻撃するのをやめてください。

「我々異端審問会の解散だと！？　ふざけるな！！」
「何の権利があって正義を否定する！！」
「俺達が解散したら、この学園の秩序はどうなるっていうんだ！！？」

白夜の提示した内容に、当然のように教室中から反感が響いた。
Ｆクラスは実に４４名がＦＦＦ団に加入している。

「正義？　この学校に“恋愛禁止”と言う校則があるのなら、貴様らは自警団と言えるだろう。しかし校則にない以上、貴様らなど所詮負け犬のやっかみ集団よ」

挑発するような口調に、当然全員が激怒。
覆面をかぶり、獲物を手に白夜を取り囲む。

「我らをよりにも寄って、負け犬のやっかみ集団だと！？　万死に値する！！」

「ちょうどいい、弟のＳＳＳ級異端者久遠光一の罪の分もぶつけてやれ！！」
「「「血祭りだ！　血祭りだ！！」」」

「ほうっ、この私を攻撃とはいい度胸だ」
「おい大神、一応言っておくがケガをさせるなよ？」
「この程度そんな時間はかかりません」

ボキリと指を鳴らしたのちに、拳を打ちつけ合う。
光一はポリポリと頭をかきながら……。

「明久、秀吉、姫路、行くぞ」
「え？　あの、久遠君？」
「ちょっ、ちょっと久遠。アレどうにかしなさいよ！　兄弟なんでしょ！？」
「いやだ。目障りなのがつぶしあ……いや、兄貴がつぶすにしろ兆が一に共倒れになるにしろ、好都合だ」
「ええい久遠め、なめやがって！！　さっさと久遠の兄貴を殺してあいつも殺すぞーー！！」

その後、Ｆクラス教室に怒号が響く数秒後に、悲鳴が響き渡った。

時は過ぎて、昼休み。

第３学年の制裁ともなれば学年単位の騒動であるため、Ｆクラス代表の一存ではどうという事も出来ない。
そこで急きょ各クラスの代表を収集し、対談を開くこととなった。

「どうして私たちまで……」

「異端審問会への抗議がメインだが、奴らは解散を拒んだ。だから急きょ予定を早め、第2学年全体への制裁を実行する必要があると判断したが、いきなりというのも納得はできまい？」
「どうして学年単位なんですか！？」
「大体騒ぎを起こしたのは全部Fクラスのバカどもなのに……っ！」
「そっ、それは……」

小山と中林の声が耳障りだと言わんばかりに顔をしかめ、白夜はある者を提示した。
そこには、自分たちが小暮葵と接触し、光一を貶めようとした計画の明確な証拠。

同伴者である鉄人と高橋女史は、いぶかしげにそれを見て呆れたようにため息をついた。

「釣りの方がまだ手ごたえがある位に、簡単にひっかかるとはな……クラス分けは成績ではなく、精神面を考慮すべきだと本気で申請したくなった」
「……お前ら、そんな面白……いや、そんな馬鹿な事たくらんでやがったのかよ？」
「あの騒動は終わったって言うのに、まだやる気だったのか？」
「……納得した」

さすがに雄二をはじめ、Dクラス代表平賀にAクラス代表の翔子もあきれ果てていた。
ちなみにDクラスは美春が同伴することになっており、融合召喚の腕輪を奪い取った（自分視点）光一の兄である白夜に打ち貫かんとせんばかりに、睨みつけている。

「そもそもすべての発端である覗き騒動は、女子の自作自演だと既

に知れ渡っている。それでもなお、騒動を起こそうとする原始人じみた思考の人間がいる以上、我々とて黙っているわけにはいかない」

「そうですね、大神君の言うとおりです」

教師である以上中立である立場の高橋女史も、これには納得以外の行動はできるわけがない。

その隣で座る鉄人西村も、目を伏せながら腕組みという姿勢でうなづいた。

「待ってください。こんな騙すようなやり方で……」

「だからどうした？　貴様らのせいでいらん被害を被った以上、これはいうなれば事前策というものだ。そもそも騒動を引き起こそうとしておいて文句を言うなど、図々しいにもほどがあるぞ。女だから何をやっても許されるとでも思っているなら……」

ヒュンっ！　ヒュンっ！　ヒュンっ！

パシッ！　パシッ！　パシッ！

「……何の真似だ？」

突如ナイフやフォークが、白夜に投擲される。

……が、それはすべて白夜の“右手”の中に収まっていた。

「清水、何をしている！？」

「さっきから聞いていれば、家畜くさいブタの分際で生意気です！　大体あのモヤシブタの兄だというなら、今ここで弟の無礼の数々を死んで侘びさせるべきです！！」

「……（ふむっ、情報通りだな）……ブタは貴様らだ。女という性別に甘え、肥え太った醜いブタが」

「おっ、女の子になんて失礼な！！　やはり男など最低です、八つ

裂きになりなさい！！」

カッターナイフを構え、白夜に突進する美春。
本気で殺そうと言わんばかりにカッターナイフを突き出し……

「貴様こそ無礼にもほどがあるぞ。たかが雑草に等しいクズの分際で……」

その腕を左腕ではじき、腹にひざ蹴りをたたきこむと同時に左手で襟をつかみ、美春を背負い投げ。
何が起こったかもわからないまま、コンクリートの床にたたきつけられ痛みにのたうちまわる美春を、白夜は脇腹を蹴りあげ、その頭を踏みつけて意識を刈り取った。

「神に選ばれしこの私に刃向かうものではない」

一瞬にして行われた、破壊的な攻撃でありながら繊細で流れるような動作。
それを行った白夜自身は、まるで何も特別な事はしていないと言わんばかりにふんと鼻を鳴らし、投げつけられたフォークを2本落とし、手遊びをするように手の上に残ったフォークを回し始めた。

誰もが言葉を失い、唖然としている中でただ1人、喧嘩慣れをしておりかつては並び称された雄二だけが、目で追えなくもその動きのすごさを最も理解していて……
そして最も、自分たちとは生まれ持った物そのものが違う事を理解していた。

「……さて、今のこの私に対する攻撃とみなし、この交渉は決裂だ。この経緯をもって、我々第3学年は第2学年に対し武力行使を行う」

鉄人や高橋女史から見ても、白夜の言い分は十分すぎる正当性を持っている。
はたから見れば、正当な抗議に対して逆ギレして攻撃を仕掛けたと見るには十分。

「……規模が規模である以上、学園長に認可をもらわねばなるまい」
「わかりました。では開始日程が決まり次第、それぞれの学年首席に連絡をお願いします」
「おっ、おい！」
「なんだ？　私が何か間違った事を言っていて、やっているのか？」

確かに雄二から見ても、どうやったところで八方ふさがりであることも、もう明久と光一を差し出して済むような事態ではない事は事実。
そしてすべてが白夜の手の上である……という事実に、雄二はこれまでに白夜が行使したすべてを察し、背を言いようのない悪寒が走った。

今日という時のために、あの騒動からずっと策を行使し情報を集め、この状況を作り上げるための機をうかがい続けてきた。
明久の言っていた、白夜が雄二と並び称されていたことが不思議だ……という事も、今なら雄二には頷けた。

「……あなたは」
「ん？」

そこで翔子が、白夜をにらみつけるように前に出た。

「……あなたは、久遠のお兄さんと聞きました。弟の学年相手にそ

こまでやるのは」

「なぜ兄弟だから仲良しこよしだと、相場が決まっているかがこの私でもわからんな……確かに私は光一に敗れた事は事実であり、今でこそ評価に値はする。だが私にとって光一は弟ではなく失敗作で出来そこない、それ以外の評価もなければ、価値もない」

それは決して冗談でも言っていい事ではないが、白夜の顔には微塵として迷いも躊躇すらない。

あるのはただ、いつも通り変わらぬ自信に満ち溢れた佇まいのみ。

「ちょっ……そこまで言うか！？」

「お前も光一や吉井明久を平然と犠牲にするのに、なぜ驚く？　言っておくが私にとって、心など邪魔以外の何物でもない。必要な心があるとすれば」

手遊びでくるくるとまわし続けるフォークを止め……

「強い力を求め、とことんまで勝利にくらいつく強欲さと」

手のにらに収まったそれに力を込め……

「自分を越えられる者は自分だけであり、自分こそが最強だという徹底した自信……そして」

フォークが白夜の手でひんまがっていき……

「立ち塞がるすべての敵を憎み、蹂躙するための憤怒だけだ」

玉のような形に握りつぶされたフォークは、白夜の手のひらの上に鎮座。

滑るように落とし、気絶した美春の耳元に……

カシャーンッ！

正真正銘の金属の衝突音を鳴らし、転がった。

「妥協の原因はすべて心によるもの……ならば強欲と自信、そして憤怒以外の心などいらん。今まで出会った中では、人のためというばかばかしい理由であれど、勝利にくらいつこうとするという点で吉井明久、立ち塞がる敵すべてを蹂躙する憤怒で光一位だな。一応は認めてやっても良いのは」

「……どういう理屈だよそりゃあ？　いくらなんでも、徹底しすぎだろ」

「それくらいでなければ、神に選ばれし者と自負するか。さて、話はそれたが、貴様らにはどうやら自分の立場と、決して越えられない壁という物を教えてやる必要がある事がよくわかった」

びっと、第2学年首席である翔子を指さし……。

「よって我々第3学年は、貴様ら第2学年に戦線布告を宣言する。以上だ」

そう宣言した白夜は、唖然としている2年代表たちと教師2名に目もくれず、その教室を出て行った。

「……いつもは冷静なすかし野郎の光一が異様に毛嫌いしてた理由、よくわかるぜ」

「……でも雄二、どうするの？」

「どうするも何も、やるしかないだろもう……勝算があるかは、保証できないがな」

戸を閉めると同時に、口元をゆがめる笑みを浮かべ……。

「さて、ここからがこの私のみが知り、誰1人としてその時まで見抜けない真のシナリオの第一歩……私の生まれ持った天賦の才、それを磨きあげ続けたこれまで、そして息を潜めながらも欠かさなかった下積みの見せどころ」

第百四十六問

問題　次の言葉の意味を答えなさい。

『男尊女卑』

姫路瑞希の答え

『社会的な地位が男性の方は高く、女性の方が低いという考え』

教師のコメント

正解です。現在でも国によっては根強く残っている性差別でもあります。

久遠光一の答え

『（B～F限定で）学園の校則に加えてほしい』

教師のコメント

君の希望は聞いてません。

そして気持ちはわかりますが、そういう火種を持ち込まないでください。

清水美春の答え

『人類の恥部』

教師のコメント

この答えだけで何枚も破かないでください

霧島翔子の答え
『私は雄二のためならなんだってやる』

教師のコメント
まさに愛妻の鏡やも知れませんが、何事もほどほどにお願いします。

「以上が、３年と２年の代表間で行われた交渉の結果です」
「……やれやれ。バカはあの３人だけにしてほしかったねえ」
「ですが３年の間で、２年を迷惑がっている生徒も少なくはありません。どの道今回の事がなければ、より大きな事態となる可能性もあった以上、大神の手腕に感謝すべきやも知れません」
「……さすがは１００年に１人の天才にして最高学年首席、大神白夜と言ったところだね」

報告を受けた学園長事、藤堂カヲルはまたしても起こる騒動に頭を抱えていた。
と言っても、内容自体は完全に２年側に非があり、３年がその制裁に乗り出すという内容。

「しかし、手際が良すぎる気もするが……」
「これが仕組まれた事だとしても、既に手遅れです。現に3年の間で2年による被害者が出ており、その抗議に来た代表に攻撃を仕掛けるという事態です。今ヘタに介入をすれば現状が崩れ、以前以上の騒動に発展する可能性もあります」
「だろうね……許可は出そう。事が事ゆえに、致し方ないね」

3－A教室にて。

「以上が経緯だ。よって我らは戦争の許可が下り次第、2年に武力行使を行う」

白夜により交渉の経緯が説明され、ＦＦＦ団に被害を受けた男子生徒、彼氏が被害にあった女子生徒。
そして元より文月学園の評判を傷つけている張本人達を疎む者たち。
それらが大半どころかほぼ全員を占める現状では……

「「「おーーーっ！！！」」」

2年対3年に対する士気は、全体的に高かった。
にやりと笑みを浮かべる白夜に、小暮葵が歩み寄る。

「これが、大神代表の策なのですか？」
「そういう事だ。こちらには2年を攻撃する正当な理由があり、それに反抗して攻撃を仕掛けられたという決定的な証拠を手に入れた以上、元々の不満も相まって士気は最高潮……方や2年は鼻つまみ者のせいで戦争が起こった以上、全体的に士気は低い」
「つまり、今なら手をかけずに2年をたたける……そういう事です

ね？」
「手をかけず？　……バカを言え。私は2倍以上の点差がありながら、詰めを誤り光一に敗れた。だからこそあちらの勝算は０．１％だろうと、根絶やしにして叩き潰す」

白夜がノートパソコンを起動し、学園全体の見取り図を開く。
学年規模、一騎討ち、学年別の同クラス戦争。
それらすべてを想定したうえで、最善かつ１００％勝つための考察。

「その様子ですと、今回で弟さんへの敗北の返上は……」
「……いや、今回の戦争は関わらない可能性の方が高い。考えても見ろ、2年で利用したクズどもは誰と敵対関係にあった？」
「そうでしたね。彼にとっては勝利したところで、デメリットしかない以上は士気も低いでしょう」
「それに光一は今、二股関係を持っている事は知っているだろう？　その内の1人は今も隣に住んでいる光一の幼馴染で、事情は知っている。何よりも調査では、私と光一がぶつかる事を恐れているとの事だ。今回の事を黙っているわけがない」
「……そこまで織り込んでらしたのですか？」
「最高学年首席として優先すべきは、第3学年の勝利だ。その上で脅威になる光一を放っておくわけもなかろう？　先ほども言ったが、勝算は根絶やしにした上で叩き潰す」

にやりと冷たい笑みを浮かべる白夜に、底知れぬ何かに怯えつつも羨望を抱いた。
……この人はやはり、モノが違う。

「……それに私も、この戦争で光一と事を構えるつもりはない」
「やはり何かしらの狙いがあるのですね？」
「それを知るのは私だけでいい。それよりも情報収集とあの2人の

扇動、ご苦労だった」

基本的に白夜は実力主義で、失敗や妥協には容赦がなく体罰も辞さない。

……が、白夜とて力で抑え続けるだけでは誰も従わない事を理解しており、信賞必罰の必要性は心がけていた。

だからこそ、小暮のように白夜に従う者も少なからず存在する。

一方、２－Ａクラス。

「……こいつら、よくＦクラス入りしなかったな」

結果を聞いての光一の第一声だった。

今回ばかりは否定できず、光一を睨みつける事も出来ないままうつむく小山に中林。

現在各クラスの首脳陣がＡクラスに集まり、２－Ａで学年会議が行われていた。

「平賀も、どうして清水なんか連れてったんだ？」

「いや、Ｄクラスじゃ確かに女子の発言力は落ちてても、いまだ反発が根強いんだ」

「はぁっ……クラス方針に男尊女卑とりいれたほうがいいぞ絶対」

「ちょっと久遠！　そんな女の子を差別するシステムを取り入れようだなんてどういう……」

「……なんだ島田？（絶対零度の視線＆凶王モード）」

「……なっ、なんでもない、わよ」

頭痛の種に余計な頭痛を引き起こされ、不機嫌そうに頭痛薬と水を飲み干す。
そのあとは明久と秀吉に宥められ、パタパタと下敷きで扇ぐ。

「で、どうすんだよこれ？　交渉の場で相手に攻撃を仕掛けた以上、勢力の士気から対外面まで全部不利もいいところじゃねえか」
「そんなことわかっている。だが規模が規模だけに勝負方法が未定だから、それによってはどうにかできるやもしれんが……」
「兄貴もそれくらい気付いてないわけもないから、不利な事に変わらないな。ったく、めんどくせえ」
「兄貴が嫌いなんじゃなかったのか？」
「お前とこいつらも嫌いだがな！」

光一（不本意）と雄二がうんうん唸り始めるのを見て、その場のほぼ全員が不安に駆られた。
2年の中で指揮官としての能力が高い2人でさえ、手づまりなのだから。

「……光一に雄二をもってしても、ダメなのかな？」
「無理もなかろう、相手は白夜殿じゃ」
「久遠君のお兄さんって、そんなすごい人なんですか？」
「……これからボク達、どうなっちゃうの？」

それを見た明久たちも、要の光一でもどうにもできない状況に不安に駆られ始めた。

「……」

その中でただ一人、優子だけが静かに無表情で席に座って、静観を決め込んでいた。

優子にしてみればＦＦ団と元アンチ久遠派、敵対者が原因の騒ぎだから関わる気などさらさらない。

「……なあ光一、お前確か兄貴を倒してたよな？」
「おい、まさか俺と兄貴をぶつけようとでも？」
「勝負方法がまだ決まってない以上、今は光一との一騎打ちを優先させる策を立てるしか勝機は……」

バンっ！！

雄二の言葉を遮るように、大きな音が響いた。
音源では優子がシステムデスクに手をついて立ち上がっており、視線を気にすることなく帰り支度。

それから会議の中心に早足で近づいて、光一の手をとって……。

「光一、帰るわよ！」
「え？　ちょっ、いてて！　痛いって、待てよ！」
「おっ、おい！　待て、光一はまだ……」
「どうでもいいわよそんな事！！」

優子の張り上げた声で全員がひるみ、その間に優子は強引に光一の腕を引っ張り教室を出て行った。
秀吉に明久、愛子に瑞希もあわててそれに続き、瑞希が頭を下げて扉を閉めると全員がふと我に返る

「どっ、どうしたんだ、木下は？」
「……無理もない。相手が相手に加えて、優子は久遠が傷つく事を嫌がってるから」
「そんな場合かよ！？　くそっ……」」

優子があの調子では、光一も作戦に応じる可能性は極めて低い。
となると白夜を倒す方法は、他の高得点者とぶつける事だが……

「……ダメだ、あんなの見たあとじゃ、ムッツリーニを当てたとしても勝てる気がしない」

美春を相手にした時の身のこなしや、鉄人から聞いた引き分けに終わったという昔話。
加えて、３－Ｂとの試召戦争における、白夜の功績。

それを考えると、多勢に意味はなく半端な戦力は捨駒どころか、足止めにすらならない。

「……なんとか、木下を説得するしかなさそうだな」
「……無理だと思う」
「やるしかないだろ。現状で勝機はこれしかないんだ」

第百四十七問（前書き）

今回のバカテストは、仮面ライダー△△△さんの提供された問題を参考にしたものです
ご協力ありがとうございます

第百四十七問

問題　次の問いに答えなさい

“糠に釘”ということわざと同じ意味のことわざを答えなさい

姫路瑞希の答え
『のれんに腕押し』

霧島翔子の答え
『とうふにかすがい』

教師のコメント
正解です、学年でも屈指の成績保持者には簡単すぎましたね。

坂本雄二の答え
『明久に辞書』

吉井明久の答え
『雄二に恋愛指南書』

久遠光一の答え
『Ｆクラスにアロマテラピー』

島田美波の答え
『アキに女の子』

教師のコメント
正解です、特に問題は……ありませんね。
身近でこんなに例があるとは思いませんでした。

木下優子の答え
『バカに施す医学』

教師のコメント
久遠君の影響が強くなりすぎてませんか？

「僕は反対だ」

雄二が優子を説得しようと言いだして、真っ先に反発者が出た。
学年次席の久保利光。

「……どうして？」
「今回の事は、明らかに僕たち2年の方が悪い。先輩方に危害を加えたのは事実であり、異端審問会の解散という要求が通りさえすれば、ここまでの騒動になる事はなかったんだ」
「ちょっ、待て！　異端審問会を解散しろなんて、この学園の正義

をないがしろに……」

「君たちが原因である事は事実だろう。もう戦争は止める事が出来ないが、君たちの存在をこのまま放置しておくわけにもいかない」

ＦＦＦ団会長須川の言い分を切って捨て、久保は異端審問会の存在を否定。

「そうよ。なんで異端審問会のせいであたし達が苦労しなきゃいけないのよ！！」

「あんたたちのせいでろくにデートも出来ないうえに、話も出来ないのよ！　どうしてくれるのよ！！」

「さっさと解散しなさいよ！　迷惑この上ない！！」

其れが呼び水となって、異端審問会に女子の抗議が殺到。

仲間同士の罵倒に慣れていても、女子からの罵倒に免疫ない団員は女子からの罵倒雑言（せいとうぼうえい）で、狂ったように騒ぎながら耳をふさごうと必死に。

「それに指どももだ！　まだやる気だったのかよ！！」

「ふざけんな！　ただでさえこいつらのせいで夏休みを補習でつぶされてるってのに、なんで騒動にまで巻き込まれなきゃならねえんだよ！！？」

「いい加減にしろよ！　自作自演で覗き騒動が起こるよう仕向けといて、まだ懲りねえのか！！」

それに便乗してか、中林に小山にも罵倒が投げつけられ始めた。

元々この２つの集団のせいで補習があるうえに、事あるごとに騒動が起こっているのだから当然不満も大きい。

士気どころか、団結も何もあったもんじゃなかった。

「……まずこの騒動を収める事の方が大事」
「くっそぉ……弟が弟なら兄も兄かよ！　そろいもそろっていやらしい手使いやがって！！」
「……大丈夫、私はいつだって雄二の味方であり愛妻」
「「「殺せえええええ！！！」」」
「だー畜生！！　光一が毛嫌いするだけの事はあるいやらしさ満点の策だ！！」

……士気どころか、団結も目的すらもあったもんじゃなかった。

「ほんと、ウチの学年バカぞろいね」
「お姉さまーー！　あのモヤシブタの兄につけられた美春の傷を、どうか手当（なめて）ください！！」
「え！？　ちょっと待ちなさい！　今変な読み方しなかった！？」

……士気どころか団結も目的も、常識すらもあったもんじゃなかった。

「……どうしよう？」

ただ一人残された翔子の言葉は、虚しく響き渡ることなくあちこちで起こる騒動の声にかき消された。

ところ変わって、３－Ａ

「……バカもここまでくれば芸術だな」

さっそく会議という名の騒動を聞きつけた白夜は、呆れてものも言

えなかった。
ちなみに彼は能力の高さゆえか、感心する事よりも呆れる事の方が圧倒的に多い。

「元々不満も高かったわけですからね。そこにこの戦争です」
「さすがに目的を忘れて騒動を起こす事までは、この私にも予期はできなかったがな。バカもあながち捨てたものでもないという事か……これなら光一と吉井明久を遠ざける必要もなかったか？」
「ずいぶんとこだわりますね？」
「私が認めた者たちだ。加えて制限がついたとはいえ、“融合媒介”と言う新機能を搭載した融合召喚もある。高得点者を量産されては、こちらの勝率に響くというもの」

相性があるとはいえ、高得点者の量産は試験召喚戦争にとっては痛手である。
特に光一の場合極端な成績の持ち主だけに、弱点を埋められてはそれこそ難攻不落。

「まあ今回はデメリットしかない上に、先ほど言った幼馴染の妾の事がある以上は光一も参加はしないはずだ。それに吉井明久は行動指針を光一任せにしている以上は、参加することはあるまい」
「おい大神、今の話はどういう事だ！？」
「吉井と久遠が出ないかもしれないだと！？」

白夜と小暮の会話を聞きつけた常夏が、そろって白夜に抗議した。
彼らにしてみれば、明久以下のレッテルをはがそうと躍起になっていた直後の事だけに。

「どうしても何も、吉井明久も光一も異端審問会とやらに所属していなければ、今回の事に一切関与はしていないからだ。おそらく戦

争が終わるまで、どこかに隠れてやり過ごそうとするはず」
「となると……大神、吉井と久遠を探すための部隊を」
「却下だ。今回の事に非がないものをメインにすれば、正当性は危ぶまれる。それに……」

廊下に目を向け、あっちを見ろと促す。
視線の先にあるのは、今はCクラス設備となっているBクラス。

「今奴らをたたいたところで、弱体化したとみなし騒ぎを起こす可能性もある。騒動を抑えるために騒動の火種になっては、あのバカどもと同じだ。今回の目的は異端審問会とやら、そして元アンチ久遠派のバカどもの一掃だ。光一や吉井明久を倒したところで、そいつらがいる限りは騒動が起こる一方」
「けっ、けどよ……」
「現状を作り上げたのは誰だと思っている？　それを台無しにする事がどういうことか、まさか忘れたのか？」

白夜がボキリと指を鳴らして睨みつけただけで、常夏は腰を抜かし必死に後ずさりをした。
つまらんと言いたげに白夜はため息をつき、荷物をまとめ帰り支度。

「正義は我らにある、それを汚すような真似をするな。今日はもう帰っていい」

そう言って白夜は一路、トレーニングルームへと向かっていった。

更にところ変わって、靴箱。

「優子！　痛い、痛いって！！」

「え？　……あっ、ごっごめん」

光一の抗議にようやく気付いた優子が、あわてて光一の手を離した。握られていた手に血を巡らせるように軽く振りながら、あの場から解放された事に少しほっとする。

「どうしたんだよいきなり？　あんな大勢の場で」

「……どうでもいい事をどうでもいいって言って、何が悪いのよ？　これが白夜さんの手で仕組まれた事だとしても、全部あのバカ達や小山さん達の自業自得じゃない。なんで散々攻撃を仕掛けられた光一が、その後始末をしなきゃならないのよ？」

「確かにばかばかしいし、面倒だとは……」

「だったら良いじゃない。今回の事で光一に非があるわけじゃないし、向こうの言い分は“何とか団が3年に危害を及ぼして、それを抗議に来た代表が清水さんに攻撃を加えられた”なんだから、光一が関与してる要素なんて一切ない。何の関与もしてない人をメインにしたりすれば、3年の正当性だって危ぶまれるんだから」

実際正当性があるからこそ、3年側があらゆる面で有利な流れである。

其れをわざわざ崩すような真似をするバカなど……文月学園では大部分であるが、少なくとも白夜がその大部分であるわけもない。

「あっ、いたいた。もうっ、いきなりだからびっくりしたよ優子」

「まあ無理もないの。元は異端審問会や元アンチ久遠派の連中が火種じゃ」

そこへ秀吉たちが合流。

優子の言い分を聞いていただけに、それぞれが工程を示す。

「でっ、でも、皆さんが困ってるのに……」
「何言ってるのよ姫路さん！　全部あのバカどもの自業自得で、あのバカ集団も小山さん達も、事あるごとに光一に攻撃を加えてるのに、どうしてその人たちが原因の騒動につきあわされなきゃいけないのよ？」
「……そうだな。あのバカどもにもウンザリさせられてきたし、兄貴が何たくらんでるか分からないが、これを利用しない手もないしな。考えてみりゃ負けたらどうなるかの条件も提示されてやしないし、今は静観ってことにしとこう」
「でも、条件次第じゃ受けたほうがいいってこと？」
「……その辺りが、兄貴の狙いかもしれねえな。用心に越したことはないし、一応準備だけはしとこう」

光一の言葉に全員がうなづいた。
光一にとっては深い因縁がある以上は、自分たちも避けて通れない事を理解したうえで。

「ん？　……おい、明久はどうした？」
「明久？　……そう言えば、先ほどから姿が見えんの？」
「そういえば、そうだね」
「……明久君は」

ところ変わって……

『２－Ｆ　吉井明久　日本史１７６点』
ＶＳ
『３－Ａ　大神白夜　日本史５９２点』

場所は空き教室。

そこでは騎士甲冑をまとい、大剣と首を持ったデュラハン。
そして威厳と風格を表すような鎧をまとい、背には黒い翼という姿で玉座に座るルシフェル

その2体のオカルト召喚獣が対峙していた

「さあ来い」
「……その前に、僕に近い年の人が取れる点数とは思えないんですが。これじゃ勝負以前の問題です」
「私にしてみれば至極当然の事だ。それに貴様は自分の3～4倍の点数差を苦にしないだろう？　十分許容範囲内だ」
「というか、どうしてオカルト召喚獣まで座ってるんです？　通常で台座、オカルトで玉座って」
「王たる風格を表したものだ。さあ無駄話など後でいいだろう？早く来い」
「……わかりました。行きます！」

第百四十八問（前書き）

今回は鉄さん提供の問題を使用させていただきました。
ご協力ありがとうございます

2006

第百四十八問

問題　次の問いに答えなさい

戦国武将、武田信玄の掲げた『風林火山』のそれぞれが示す意味を答えなさい。
また、更にある『陰』と『雷』についても答えなさい。（こちらは別個問題です）

姫路瑞希の答え
風：疾き事風のごとく
林：静かなる事林のごとく
火：侵略する事火のごとく
山：動かざる事山のごとし
陰：知りがたき事陰のごとく
雷：動く事雷ていのごとし

教師のコメント
正解です、流石は姫路さんです。

吉井明久の答え
風：風の様に早く
林：林の様に静かに
火：火の様に攻め
山：防御は山のように
陰：隠れるは陰の様に
雷：出現は雷の様に突然に

教師のコメント
吉井君が歴史限定とはいえ、最近はまともな答えが出るようになってくれてうれしいです。

久遠光一の答え
風：風の様に早く
林：林の様に潜み
火：火の様に攻め
山：動かざる事山の如し
陰：陰の様に隠れ
雷：出現は雷の様に

教師のコメント
……天変地異でも起こりそうなので、今から防災グッズを買いに行きます。

2008

時はさかのぼり……

「ん？　あれは……」

優子が光一を連れ出し、それを４人で追いかけている時の事。
明久はふと、ある人を見つけた。

……ふと光一の行き先を見て、木下さんが一緒なら大丈夫だよね、と結論付け。

「明久君？」
「ごめん、ちょっと先に行ってて」
「え？　あの人は、確か久遠君の……」

どうすべきかを迷ったが、その間に明久の姿を見失いやむなく瑞希は秀吉と愛子を追う事にした。

「なんだ、吉井明久？」
「え？」

追って姿を確認して早々に、自分の名前を呼ばれた事が少々意外というように声を上げる明久。

「何を驚いている？」
「……僕の名前を覚えてるのが、ちょっと意外だっただけです」
「言ったはずだがな？　“お前にも私の通過点としての価値があるやもしれん”と」
「本気だと思えなかったんですよ。光一ならまだしも、僕みたいな平凡以下の問題児をあなたみたいな人が評価するだなんて」
「人は価値の有無に左右されるが、その価値も絶対的な基準などありえない物だ。だからこそ、世間一般において価値なきお前に価値を見出す人間もいる……私は後者と言うだけの話だ」

トレーニングルームに入る白夜に、明久はゆっくりとそれに続く。
そこでトレーニングウェアに着替え、準備運動をし始める白夜に、明久は疑問符を浮かべた。

「あの……何を、してるんですか？」
「準備運動だ」
「いえ、それは見ればわかりますが……」
「強い肉体を持つ事は頂点に立つ者の務めだ。私ならば通常通りやっていれば、受験も問題はない」

相変わらずの、一片の不安もない自信のみで構成されてる事がわかる立ち振る舞い。
つくづく自分とはモノが違うというか、今まであった誰とも違う事がよくわかる人だと明久は思う。

「それならどうして、こんな事を……」
「言ったはずだ。貴様らのバカ騒ぎでこちらに被害が出た以上、黙っているわけにはいかないとな」
「そうじゃなくて……」
「私が光一に攻撃を加えるためにやってるんじゃないか……そう疑っているのだな？」

……自分って、そんなに考えが読まれやすいのだろうかと明久は思った。

「私を2年の名ばかり代表どもと一緒にするな。代表としての立場を忘れ、私情で動くような真似はせん。だが、今回の標的が目障りで不快である事も事実だがな」
「……まあ、そうですね。男子なら大部分が憧れる覗き騒動はともかく、学園破壊や学園規模の騒動を」

「違う。私は神に選ばれしこの私以上に、力を尊ぶ。だからこそ、光一に負けた事を逆恨みし騒動を起こす負け犬どもや、自分たちのふがいなさに目もくれずエセ正義を語る不届き者どもなど、目障りで不快以外の何物でもない」

……自分たちのふがいなさに目もくれず、エセ正義を語る不届き者。光一がいなければ自分も参加しようとしていただけに、明久の耳に痛かった。

「それに今でこそ評価はしているが、私は光一のように弱く生まれた者に興味もなければ価値を見出す気などない。なぜなら弱い人間には何もできないからだ」

「っ！」

「話は最後まで聞け、ここで騒ぎを起こせば確実に光一に知られるぞ？」

殴りかかろうとした明久だが、白夜のその言葉で踏みとどまった。この事を知れば、確実に光一は兄に対して……。

「ふんっ、人の絆は強くなればなるほど利用しやすいものだな」

白夜が鼻で笑うと、まずはベンチプレスを始めた。

明らかに１００キロ以上はあるバーベルを持ち上げ、明久をびっくりさせたのは別の話。

「……話に戻ろう。どんな事だろうと、最後にモノを言うのは力だ。どんな崇高で誰もが賞賛するような素晴らしい理想を掲げようと、力がなくば踏みにじられる。むろん、力があろうといざという時に使えなくては同じだがな」

「……どうしてそこまで、平然と酷い事を言えるんですか？」

「同情や偽善では救えるものなど何一つなければ、認めるものなど誰一人いない。現に同じ胎から生まれた私と光一とで、なぜこうまで違うのだと思っている？」

これぱかりは否定は一切できなかった。

秀吉や優子から聞いた話、そして現在で聞く白夜の話で、評判こそ悪くても能力に対して否定的な言葉は聞いた事がない。

さらに言えば、白夜の総合点は霧島翔子をも上回っており、運動能力ですらここに来るのが日課である事が明久でもわかる以上は、相当なもの。

方や単科目でこそ最高点を保持していても、苦手科目では最低中の最低。

常に評判が最悪で、謂われなき罪で幾度となく責められ続ける光一。

「……それでも僕は」

「納得できない……という顔だな？　それならば」

ベンチプレスをやめ、白夜はトレーニングウェアから制服に着替える。

「ちょっと来い」

「え？」

行き先もわからぬまま白夜に連れられ、たどり着いたのは職員室。

明久にとっては居心地の悪い場所だが、白夜にとってはそうでもない。

「ん？　なんだ、ずいぶんと珍しい組み合わせだな」

「げっ、鉄人……」

「西村先生と呼ばんか！　それで、どういう事だ？　お前が大神と一緒に居るなど。また何か悪さを……」
「いえ、模擬試召戦争の許可をいただきたくまいりました」
「えっ！？　ぼっ、僕と！？」
「？　なぜ吉井が驚く？　……まあいい、大神相手なら妙な事も出来まい」
「だったら最初から疑わないでください！　でも僕と光一のお兄さんとじゃ……」
「その呼び方はやめろ。お前が勝てばこの戦争の撤回も考慮してやれば、もう光一に関わらないと誓ってやる」
「ん？　あれは、吉井と……久遠の兄貴か？」

そして、今に至る。

「でもいいんですか？」
「構わん。この点数差ならば、それくらいでなければ成り立つまい？　それにあれだけの事を言っておいてそれが守れませんなど通る訳もなかろう？」
「……安心しました」

明久のデュラハンが、首を抱えながら大剣を構える。
対する白夜の召喚獣が頬杖つきながらすっと手を掲げると、玉座の後ろから水晶玉が頭上で回転運動を始めた。

「こっちでも遠隔操作型の武器なんですか？」
「……さて、行くぞ」

押しつぶそうとせんばかりの威圧感を放ちながら、白夜は明久を見

据え思考を戦闘に移行。
傍から見てるのでさえ底冷えするというのに、まともに受けた明久は後ずさりし……パンと自身の頬を張った。

「……ほおっ、持ちこたえたか。大抵はこれで怖気づくというのに」
「僕みたいなバカを、対等だって認めてくれた親友のためです」
「そのまま折れるなよ？　……この私に倒されるその瞬間までな！」

ブンっと音が出るように腕を振り下ろすと、水晶玉が一斉にデュラハンめがけて襲いかかった。
デュラハンがその一個一個を光一に習った見きりで回避しながら、ルシフェルめがけて突進。

「……ああそうだ。言うのを忘れていたが」

間合いに入ったと同時に、デュラハンが突進の力そのものを利用するように大剣を突き出し……

「私にそういう正攻法は通じないぞ？」

ルシフェルの手により、受け止められた。
頬杖を突いていた左腕でデュラハンを薙ぎ払おうとし、其れをバックステップで回避。
そこをすかさず飛んできた水晶玉２つを剣で薙ぎ払って、その勢いのまま回転斬り。

……も、当然のように受け止められた。

「……本当に、見てから動けるんですね」
「なんだ、光一から聞いてたのか？」

「言ってたのは秀吉ですけどね」
「そう言えばお前は、召喚獣で西村先生を生身とはいえ破っていたな。ならばちょうどいい……私はかつて、西村先生と戦い引き分けに終わった」
「へっ？」

明久の目が点になった。
……が、すぐに飛んできた水晶玉に気づき、其れを紙一重で回避。

「この人本当に僕と1つ違いどころか、同じ人間って分類なの！？」
「赤い血も流れていれば、お前と大して変わらん条件で死ぬ人間だ。ただ生まれ持った物と格が違うだけのな」
「生まれ持った物って……ええい、余計な事を考えるな。僕はこの人を倒すって決めたじゃないか！」
「結構だ。私の敵は、腰ぬけごときに務まらん」

第百四十九問

問題　次の問いに答えなさい

事前確認の意味を答えなさい

姫路瑞希の答え

『事前確認とは、旅行の場合なら行き先の状態や何があるかなどを、前もって確認する事』

教師のコメント

正解です。例をつかっての良い答えです

久遠光一の答え

『Fクラスのバカどもと第二学年女子（B～E&島田）が出来ない事』

教師のコメント

木下さんと工藤さん以外の女子にはとことん冷たいですね？

ですが確かに、前もって確認しておけばあの覗き騒動は起きなかったのですから、納得は出来ます。

霧島翔子の答え

『雄二と一緒に過ごすための必須事項』

教師のコメント

ほほえましい答えのはずなのに、なぜか荒々しい何かを感じます。

白夜との戦い
わかりきっていた事だったが、明久は苦戦を強いられていた。

近づけば白夜自身の超反応と、高得点によるパワー。
離れれば遠隔操作による水晶玉で。
それに加えて白夜の放つ威圧感に耐えねばならないという状況で、
明久は完全な劣勢。

「……くっ」
「……確かに根性は合格点だな。まさかここまで粘るとは」

完全に優勢……であるが、白夜は手を緩めない。
現状で光一に召喚獣の勝負で勝っているのは、明久だけなのだから。

「……どうする？」

水晶玉をよけながら、明久は考える。
自分には遠距離攻撃がない、つまり接近戦しかない、だが相手は見てから反応出来るという反則じみた能力の持ち主、正攻法ではまず倒せない。

天才ＶＳ凡人……しかし、これは絶対に負けたくない。

「……でもどうする？　見てから反応されるんじゃ……見てから？」

ふと、明久は思いついた。

白夜の超反応を潜り抜ける方法……ふと、自身の腕に付けられた同時召喚の腕輪をみて。

「何か思いついたか？」

「それは見てのお楽しみ！」

「結構だ！　それを破り、ここで終わらせてくれる！」

白夜のルシフェルが手を突き出し、水晶玉を明久のデュラハンめがけて飛ばした。

明久が先ほどの様に受け流しと見切りを駆使し、接近戦が出来る距離になったところで……

「おおおおおおおおおっ！！」

デュラハンの首を、白夜自身にめがけてブン投げた。

「……ふんっ」

しかし白夜は表情を変える事もなく、足一歩ひいただけでそれをよけ……頭が壁に激突。

それと同時に……

「ダブル！」

「っ！？」

投げたと同時に駆けた主獣デュラハンが、白夜の前に立ち視界を遮った。
一瞬とはいえ、視界を遮られた白夜がすぐさまデュラハンの妨害から脱した時……
ルシフェルの腕が、副獣デュラハンによって斬り飛ばされていた。
「流石に貴方の超反応も、見えなきゃどうしようもない……ですね」
頭を襲うフィードバックの痛みと、威圧感に耐え感覚を研ぎ澄ませ続けた事による疲労で、既に足もがくがくになっている明久。
しかし頭を拾わせた主獣と副獣を下がらせ、白夜を見据える明久の眼には、諦めなど微塵も存在しない。
「良い子だ」
「え？」
「この私を恐れつつ、そこまでになりながらも勝ちをあきらめない……実に良い子だ」
天賦の超人として生まれた白夜にとって、とことんまで向かってくる相手など皆無だった。
能力に差がありすぎて、誰もかなわないと決めつけ諦めていたのだから
しかし目の前の敵には、それが一切ない……白夜は口元をゆがめ、笑みを浮かべる。
彼自身の飽くなき向上心にとっては、とことんまで向かってくる相手こそが理想的。

……ただしそれは怖いもの知らずやバカではなく、恐れてもなお挑んでくる相手に限る。

「……新鮮ですよ。何せ僕をほめてくれるのは、光一だけなんですから」

「私は人をほめる事が滅多にない。光栄に思え」

ルシフェルが残った腕を掲げ、水晶玉を頭上に集め始めた

同時召喚を解除したデュラハンも剣を持ち、首を抱えて突進の準備。

たがいに睨みあい、敵を見据え、飛び出し……

バヂっ！！

「あぐっ！」

スタンガンの音が響き……

ドゴドゴドゴドゴっ！！

「ぎゃあああああああああああああああっ！！」

６００点代の水晶玉攻撃をたたきこまれ、明久の全身を今までで最大級の激痛が走り断末魔を上げた。

それに間髪いれず教室に人がなだれ込み、それが一斉に明久めがけ突進しタコ殴りにして手足を縛り、白夜の目の前に転がした。

白夜はあっけにとられてはおらず、不快を表すように集団を率いていた男……雄二を見る。

「申し訳ありません。第2学年の恥が先走って、先輩にご迷惑をおかけして」
「ゆっ、雄二!?　いきなり何をがふっ!」
「うるさいぞ明久!　まさか大神先輩に攻撃を仕掛けるなんて、この学年の恥さらしが!」
「違うよ!　これはぐへっ!」

言葉を遮るように、脇腹を蹴られた。
その近くには、小山と中林がスカートを気にしながら明久を睨みつけている。

「バカがやる事なんてひとつしかないじゃない!　まったく、学年に迷惑かけるなんて最低!」
「まったくだわ。あんたのせいでいらない苦労をかけさせられるこっちの身にもなりなさいよ!」

周りのＦＦＦ団もそうだそうだと騒ぐ中で、雄二は明久の首根っこをつかみ白夜に差し出す。

「それで今回とこれまでのお詫びとして、このバカを煮るなり焼くなり好きにしてください。それでどうか例の戦争を撤回していただければと……」

……それを腕組みしながら聞いていた大神は、はぁっとため息をついた。
その近くでは、鉄人も同様にため息をついている。

「貴様らは事前確認と言う事が出来んのか?　この私ですらこれは予想出来なかったぞ」
「何を言っているかはわかりませんが、ささ、どうぞ。いたぶるな

りこき使うなりご自由に」
「……まあ良い。西村先生、この勝負は不本意ながら私の勝ちです」
「……そうだな。ならば、戦争の撤回はなかった事でこの勝負は終わりだ」

……場の時が凍った。

「え？　……おい鉄人、そりゃどういう事だ？」
「どうもこうも、これは大神から言い出した事だ。吉井と戦ってみたいから、模擬試験召喚戦争をやりたいと言い出してな。それで点数に差がありすぎるから、吉井が勝ったら戦争の撤回をしてやると条件を付けた上で、勝負することとなった。俺がその証人だ」
「つまりだ、お前たちは勝手に折角のチャンスを台無しにしたというわけだ」
「「「なにぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！？」」」

バカどもが一斉に驚愕の声を上げた。
白夜はそれに構う事なく、雄二を殴り飛ばして明久の腕と脚の縄を引きちぎった。

「所詮は脱落した残りカスか」
「残りカス？」
「私は“弱者”と“怠惰”を最も忌み嫌う。かつては私と並び称された神童も、堕落すればこの通りの価値なきゴミだ。残りカスという表現ほど相応しい物もあるまい」

嫌悪を込めた目で雄二を睨む白夜を見て、明久はふと先ほどのトレーニングの場面を思い出す。
力を尊ぶ、神に選ばれし者、弱者など価値もない……この人は力への狂信者なんだ。

そう思いながら、痛みが治まらぬ身体で起き上がる。

「これでわかっただろう？　心や情など弱さの象徴であり、こういうダニどもの食い物にすぎん。そんなものをその素晴らしき勝利への執念の原動力にするものではない」

「……」

「……光一を倒してからのつもりだったが、これは予定を早めるべきやもしれんな」

素晴らしき、と言うところで明久は不本意ながら揺れ動いた。

それを察した白夜は、口元をにっと釣り上げる。

「吉井明久、心など捨ててしまえ。私に従い、私への忠誠をその執念の原動力としろ……それがお前の最も価値ある最善の道だ」

その外では……

「え？　大神先輩が、吉井君を!?」

「明久がワシらを裏切るなどあり得んのじゃ！」

「そうです！　明久君が私たちを裏切るなんてありません！」

「……」

「大丈夫よ、吉井君が光一を裏切る訳ないじゃない」

第百五十問（前書き）

今回は鉄さん提供の問題を使用させていただきました。
ありがとうございます。

2024

第百五十問

問題　次の問いに答えなさい。

『責任転嫁』を使い、例文を作りなさい。

姫路瑞希の答え

『他人に責任転嫁をするなど、責任者のする事ではない』

教師のコメント

はい、実に姫路さんらしい例文です。

久遠光一の答え

『坂本雄二は責任転嫁や責任放棄ばかりしてるから信用がない』

吉井明久の答え

『坂本雄二は責任転嫁ばかりして、周りに迷惑をかけ続けている』

坂本雄二の答え

『久遠光一と吉井明久は、俺のやることなす事を邪魔しては自業自得だと責任転嫁している』

教師のコメント

相も変わらずの中の悪さですね。

自業自得を使っても例文が作れそうです。

木下優子の答え
『坂本雄二君は、常に責任転嫁ばかりして人に迷惑をかけ続けています。だから責任の意味を理解させるためにも、代表との婚姻を実現させたいです』

教師のコメント
木下さんもすっかり久遠君に染まりきっていますね
というか、いくらあの事があるとはいえいい加減許してあげてください。

「吉井が素晴らしい？　はっ、バカじゃねえかこいぐっ！？」
「吉井なんかに腕1本やられて、何が神に選ばれし者だよ。トイレットペーパーかそこらのチリガミっ！？」

それを聞いた須川と武藤が、白夜をさげすむや否や白夜に首をつかまれ、高々と持ち上げられた。
一瞬の事で2人は自分がどうなったのかが分からず、唖然とした後に呼吸を遮られもがき始める。

「須川！！　武藤！！」
「ぐっ、がふっ……」
「ぎっ、があっ……」

須川と武藤が必死に白夜の手を握り、引き離そうとするがびくともしない。
白夜が手に込める力を強め……

「がっ……（ぶくぶくっ）」
「ごぶっ……（ぶくぶくっ）」

2人は泡を吹いて、意識を手放した。

泡を吐いてる2人を投げ捨て、白夜は周囲を見回す。
白夜の視線にびくりと身体を震わせ、雄二以外全員が腰を抜かしへたり込んでしまった。

「ほかにも居るか？」
「「「……！！（ぶんぶんぶんぶんっ！！）」」」
「ふんっ……やはり弱さは罪だ。何よりも汚く、何よりも愚かで、何よりも忌わしく、何よりも罪深い」

興味が失せ、そっぽを向いた白夜は……

「見ろ、吉井明久。お前を軽々しくさげすむ者たちの哀れな姿を」

タコ殴りにされた明久の腕をつかみ、ぐいっと自分より前に引っ張り出した。、

「あまりにも情けなく、罪深き物だろう？　自分よりも弱い者を虐げ、強者を前にすればいとも簡単に本性を現すもろい心。他をたやすく犠牲にし、集団とならねば強く出る事すらも出来ん。それが弱さの罪だ」

誰もが恐れ、否定する事すら許されない。
白夜の立ち振る舞いは、対峙した者すべてを踏みつぶす……そんな絶対的な力を、明久に感じさせた。
そしてそれは……

「だがお前は違う。私はこんな弱者どもとは違う強さを、お前の中に見出した……私に従え、お前をこんなダニどもの慰み者として埋もれさせるには、あまりにも惜しい」
「……すみませんが」

自分にとっては、ほしいと思える力ではないと……そう認識するに、

「……なぜだ？」
「僕がバカなのは事実だから、どう蔑まれたっていいんです。それに何より、僕は光一を裏切る事だけはしたくない」
「そんな一時の感情で、この私が示す未来を否定するのか？」
「僕は光一にずっと頼りきりだった……だからここで光一を裏切ったら、僕は一生僕自身を許すことなんてできない。そんな後悔にまみれた僕でも、貴方はほしいですか？」

白夜は明久の瞳を見て、成程と頷いた。
そして、自身の力の定義で考えても……

「……ならば仕方あるまい。後悔は足かせである以上、ここでお前を引き入れたところで力への冒涜となる」
「でも、認めてくれた事はうれしいです……ありがとうございます」

明久の言葉に何も返すことなく、次は雄二たちを見回す。

「さて……今のを見る限り、この私率いる第3学年が第2学年に戦争を仕掛ける理由、まったく理解していないようだな？　これでは制裁も意味がない以上、特別に教えてやる」
「なっ、なんだよ？　光一と明久に負けたからじゃねえのかよ？」
「私を異端審問会とかいうエセ正義を振りかざす不届き者集団や、アンチ久遠派の様な人間どころかサルのなり損ないどもの負け犬集団と一緒にするな。勝負は常に勝者が正義だ、敗者に価値もあるものか」

抗議をしようとした異端審問会、小山に中林は白夜に睨まれ即座に口を押さえた。
先ほどの須川と武藤の事もあり、完全に委縮してしまっている。

「ただでさえ校舎の破壊、教頭室爆破、女子の自作自演が発端の学年全体での覗き騒動、私怨目的の試召喚戦争騒動と、文月学園の評判はガタ落ちだ。我らにとっては受験において、貴様らのせいで学園の評判が下がっては進学に響く。そこへ3年に直接の危害を加えられた以上、もはや黙っている事は出来ん」
「……つまりは明久と光一のせいじゃねえか。校舎の破壊は明久の、教頭室の爆破は光一の仕業で、あいつらだって覗き騒動に参加していたし、あいつらがしつこいせいで騒動だって」
「覗き騒動において男子を率いたのは、お前だというのはすでに調査済みだ。当然光一と吉井明久が、異端審問会とやらに所属していなければ、敵対関係にある事もな。それに文月学園は実践主義だ、負けた逆恨みという理由など通る訳もなかろう。残りカスごときの口車に乗るか、バカめ」

相手は明らかに自分より上、言葉の選択を間違えれば自分も須川たちの二の舞
更には騒動の事情が調べつくされており、雄二得意の光一と明久に

罪を押し付ける手段も完全に崩されていた。

「……ずいぶんと念入りだなおい。たかが下級生相手に」

「それが出来ん貴様らからすれば、そうだろうな。だからこそ、私は貴様らの仕置きを優先させることとした。光一と吉井明久よりも、貴様らに“バカの特効薬”を使うほうが学園の評判面では最優先だ」

「バカの特効薬？」

「“恐怖”だ。騒ぎを起こせばどうなるかを、その身に教え込まねばわからんらしいからな……しかしそのためには、今回の事は目をつむってやる必要があるか」

「え？」

「制裁とはいかに無力であるかを思い知らせるかも重要だ。士気が下がりすぎて貰っても困る。せいぜいあがけ、残りカス。この私と並び称されながら、地に堕ちた愚か者よ」

言いたいだけ言い終わると、白夜は教室を去って行った。

唖然とした明久、ようやく解放された恐怖に安著する面々、そして……。

「……大神、白夜」

かつて同等と呼ばれながら、今は大きな差をつけられている存在。

それを目の当たりにして、雄二は……

ガンッと拳を床にたたきつけ、そのまま震えていた。

一方、教室の外にて。

「俺の相棒にずいぶんとご執心だったようじゃねえか。大神白夜さ

んよ」

教室を出てすぐ、白夜は光一たちと出くわした。

「私は力を重んじる。だからこそ、力ある者を優遇するのは当然だ」

「だろうな。あいつは強いよ、俺にもあんたにもない強さがある」

「だが心にとらわれている限り、次にたどり着くことのできない愚かで悲しく惜しい男だ。それはお前もだ光一、凶王などと呼ばれていながら、なぜあのバカどもを再起不能にしない？　それを怠ったからこそ、今に至るんだ」

「必要以上に力を誇示すれば、必ず歪みを生み出すからだよ」

「くだらん、それを踏みつぶしてこその強者だ。だがそれ以上に、そんなくだらんものに敗れた私もまたそれ以下……いや、未満だ。だからこそ」

ぎりっと拳が握られ、歯を食いしばる。

口から赤い線が描かれ始め、手からも滴り落ちる。

「だからこそ、私は何よりも“弱さ”を持った自分自身が、心などに負けた自分が何よりも許せない」

「どうして、そんな事を言うんですか？」

心を否定し続ける白夜に、瑞希が問いかけた。

光一の前に出て、白夜を見据えて。

「心があるから、人は泣いたり笑ったりして、あたたかさを感謝できるんです。それをどうして、くだらないなんて言えるんですか？」

「心があるから罪を犯すこともまた事実だ。人は心を捨ててこそ、余計な物に固執し振り回されることなく次に進める。進む事をやめた先には堕落と腐敗しかない」

「そんなことありません。手をつないで進めば、その先には優しくてあったかい居場所があります！」
「引き離してしまえばそれで終わりだ。弱さを抱える限り、人は次に進む事は出来ん。今のことを見ていたのなら、わかるはずだ。弱者など害悪以外の何物にもならん」
「でも弱いからこそ、人と人のつながりの大切さがわかるんです。心を捨てた強さよりも、人とのつながりを持った弱さの方が、私はずっといい！」

白夜にとっては許せない言葉であり、敵意を持って瑞希を睨みつける。
瑞希はびくりと震えるも、それでもひかない。

「それをお前が言うのか？　繋がりを……まあ良い、お前たちと今事を構えたところで意味はない」
「……この騒動で何を狙ってる？」
「もちろん、バカどもの鎮圧だ。弱者どもの好き勝手、元々不快に思っていた」

それ以外はない、と言い放つようにそういうと、白夜は去って行った。

第百五十一問

問題　次の問いに答えなさい
『性善説』と『性悪説』について答えなさい。

姫路瑞希の答え
性善説：人の本性は基本的に善であるという概念
性悪説：人の本性は基本的に悪であるという概念

教師のコメント
正解です。人と言うのは複雑ですから、いろいろな説が出るものですね。

久遠光一の答え
性善説：木下優子、工藤愛子、吉井明久、木下秀吉、姫路瑞希
性悪説：坂本雄二、ＦＦＦ団、アンチ久遠派

吉井明久の答え
性善説：木下秀吉、久遠光一、木下優子、工藤愛子、姫路瑞希
性悪説：坂本雄二、ＦＦＦ団、アンチ久遠派

坂本雄二の答え
性悪説：吉井明久、久遠光一。

教師のコメント
これは好きな人嫌いな人を上げるアンケートではありません。

ＦＦＦ団の答え
性善説：異端審問会メンバー
性悪説：異端者

アンチ久遠派残党の答え
性善説：同志
性悪説：久遠光一

教師のコメント
（白紙）

「まったく、何やってんだよお前らは？」
「そうだぞ明久、勝手なことしやがって」
「それ以上に怒るべきは、そこで腰抜かしてるバカどもとハンサムになったゴリラだ。事前確認もせずチャンス潰しやがったお前らクソバカ集団だよ」

白夜との会話が終わってすぐ、光一たちは空き教室へ。
実を言うと、行き先がわからなかったが雄二たちの察知して駆けつけ、雄二が白夜に明久を突き出した時に到着していた。

「大丈夫、吉井君？」
「え？　うん、なんとか……それよりごめん、勝手な事して」
「……いいわよ、吉井君なりに何とかしようとしてくれたんでしょ？　でも二度としないで」
「……はい」

タコ殴りにされた明久に、優子が駆け寄った。
優子に心配をかけたともあり、明久は完全に委縮してしまっている。

「……お前らも一緒になってやったのかよ？」
「なによ！　あのバカが大神先輩と接触してるなんて話を聞いたら、あたりまえの行動じゃない！」
「そうよ！　バカがやる事にろくなことはないんだから、それを制裁して何が悪いっていうの！？」
「いや、悪いだろ。結果的に逆効果になってるし、流れが覗き騒動そのもので学習能力の皆無さ丸出しじゃねえか」

光一のあきれながらのセリフに、小山と中林の両名は抗議。
反省のかけらも見当たらない態度である。

ちなみに中林が言ったセリフには、大いに光一も優子も共感はした（明久に対してではなく）。

「ねえ小山さんに中林さん、言動がそこの何とか団と同類になってるわよ？」
「「なんですって！？」」
「うるせえな。腹減ってんならこれやるから黙ってろ」
「「いらないわよ！！」」

呆れたような優子のセリフに2人が猛る。

それを見ての光一が生肉を差し出すと、光一をかみつかんばかりに睨みつけた。

「そんなどうでもいい事より、兄貴の召喚獣の腕を飛ばすだなんて良くやったな。流石は俺が見込んだ男だ」

「……でも、僕は」

「そこの役立たずどもより数倍マシだ」

「「「誰が役立たずだ（よ）！！？」」」

「そこで腰抜かしてるお前らだ」

雄二は腰を抜かしてはいない物の、白夜の威圧感に肝が冷えた状態であり殴り飛ばされたダメージもあって、ふらふらだった。

それ以外は、一人残らず腰を抜かしている。

「ちっ、違う！　これは……ちょっと疲れたから座ってるだけだ！」

「そうだ！　決して吉井ごときを認めるような奴に恐れたわけじゃない！！」

「吉井なんかに不覚とるようなカス野郎に腰抜かすわけねえだろ！！」

「あっ、白夜さん」

「……（土下座）」

「……（土下座）」

「……（土下座）」

ＦＦＦのバカどもの抗議に水をさすように、優子が呪文を唱えた。

その瞬間に、全員土下座に移行

「……と思ったけど、見間違いだったわ」

「……十分腰抜かしておびえてんじゃねえか」

呆れながら、２人は土下座をとくバカ集団に侮蔑の視線を送る。
が、それを好機と見た男がいた。

「光一、もしかしてお前が兄貴に俺達を排除するよう、頼んだんじゃねえのかよ？」

光一が兄である白夜と仲が悪い事を知ってるのは、木下姉妹と明久と愛子、そして翔子と雄二のみ。

「そうだ。でなきゃ３年が出しゃばるなんてある訳ねえ！」
「久遠、てめえやってくれやがったな！！」
「この裏切り者！　くたばれ！！」

それをいいことに、ＦＦＦ団と小山たちはこぞって抗議に出た。
優子が嫌悪感をむき出しに、雄二にくってかかろうと……

「やめろ優子。根拠もない話に流されるのはバカどもの常套だ」
「とめないで光一、今度という今度はもう許せない。坂本君に……」
「やめろっての、所詮兄貴にしり込みしてる腰抜けだ。昔は数だけいた兄貴に勝てないからって俺に八つ当たりする情けないバカの同類、相手にするだけバカらしい」
「……そうね」

光一に止められ、仕方ないと優子は矛を収めた。

「久遠に脅されて妾の立場に収まってるって話、本当だったようね」
「やりたい放題ね。恥ってものがないのかしら？」

それを見て日頃光一を嫌悪してる小山と中林は、女子の間で蔓延し

てる優子を脅して妾にしてるという噂を真実だと言い始めた。

「恥知らずはそっちよ。アタシから見れば名ばかり代表の貴方達より、光一のほうがずっと上だわ」

「「なっ！？」」

「だから構うなって。あいつらには生肉でも放り投げときゃいいんだよ」

「「なんですって！？」」

「それくらいの勢いでかみつけば戦争も楽勝だろ、妖怪肉食人面指ども。それじゃ」

文句がこだまする空き教室から、逃げるように光一たちは出て行った。

「光一君、ああいう炊きつけるような事を……」

「何もしないで嫌われるよりも、何かして嫌われる方が良いよ。理不尽じゃない分、そっちの方がいい」

「……ねえ、光一君は昔からずっと、あんなこと言われ続けてたの？」

「そうだよ。人間の本性ってのは醜く単純なもんだから、強い相手より弱い相手の方がやり易いもんなんだよ。俺は性善説より性悪説が正しいと思ってるクチなんでね」

「……嫌な考え方、ですね」

「素手でライオンやトラに立ち向かう奴が居るか？　それと同じだよ。誰も彼もが自分より強い相手に逆らえるわけじゃないんだ」

光一の吐き捨てるようなセリフに、瑞希は嫌悪感を示す。

……が、否定は出来る要素がなくその先は無言だった。

「……弱さの罪、か」

「？　どうした、明久？」
「え？　……何でもない」

明久は、考えていた。

白夜が掲げるのは、絶対的な力。
弱さに対しての嫌悪感、強さに対してのこだわり。
力を求め、心を弱さの象徴として忌み嫌い、自信に満ち溢れた堂々とした立ち振る舞い。

……それは正しいのかもしれない。
バカで観察処分者の肩書を持つ自分と、最高学年首席で天才の名をほしいままにできる白夜。
どっちが上かなど、聞くまでもなくわかる。

けれど、自分には……。

「ねえ、光一」
「ん？」
「……僕は、光一の相棒として、恥ずかしくないかな？」
「俺は誇れるよ。お前は違うのか？」
「そんなわけないよ……ありがとう」

自分であるから、受け入れてくれる人が居る。
だったら迷う必要なんてないかもしれない。

そう思うと明久は光一と笑いあい、パシッとハイタッチをした。

第百五十二問（前書き）

久しぶりに原作使用の問題です。

第百五十二問

問題　次の元素記号を原子量の小さい順に並べ、その名称を書きなさい

『Ｎｅ、Ｇａ、Ｈ、Ｏ、Ｐｏ、Ｉ、Ｎａ』

姫路瑞希の答え

『Ｈ：水素、Ｏ：酸素、Ｎｅ：ネオン、Ｎａ：ナトリウム、Ｇａ：ガリウム、Ｉ：ヨウ素、Ｐｏ：ポロニウム』

教師のコメント

正解です。ＧａやＰｏはなかなか出てこない元素なので難しいかと思ったのですが、流石は姫路さんですね。

久遠光一の答え

『Ｈ：水素、Ｏ：酸素、Ｎｅ：ネオン、Ｎａ：ナトリウム、Ｉ：ヨウ素、Ｇａ：ガ素　Ｐｏ：ポ素』

教師のコメント

並び的には惜しいですし、ＧａやＰｏはなかなか出てこない元素だから、無理もないのはわかりますが……。

土屋康太の答え

『Ｈ：Ｈ、Ｎａ：な　Ｏ：お、Ｎｅ：ね、Ｇａ：が、Ｉ：い、Ｐｏ：ポッ（＊／▽＼＊）』

教師のコメント
こんな解答なのにナトリウム以外の並び順があっているのが腹立たしいです

「バカにつける薬はない……私は今、その言葉を声高に否定する！」

戦争当日。

「バカにつける薬、それは“恐怖”だ！　校舎の破壊、教頭室の爆破、学年全体によるのぞき騒動、私怨目的の試験召喚戦争……それにより受けた我らの痛みは、生半可なものではない！」

「「「そうだそうだーっ！！」」」

「その思い上がりはとうとう、我ら最高学年に危害を加えるまでに至った！　奴らの暴挙の数々、もはや許す事は出来ん！　今ここで最高学年に逆らうという事がどういう事か、好き勝手な振る舞いをすればどうなるかを思い知らせるのだ！！」

「「「おおーーーっ！！」」」

白夜は3年の各クラス首脳陣をAクラスに集め、演説を行っていた。いかに能力が高かろうが、士気が低くてはその能力も十分に発揮はされない。

万全に万全を喫する、という教訓のもとに。

「ただし、奴らは私の予測をはるかに上回る程のバカだ！　半端では意味がない以上、厳罰はこの私が直々にくだす！！」

「「「……」」」

白夜の処罰

その言葉で、上がっていた士気以上に全員に恐怖がよぎった。

白夜の徹底的ともいえる恐怖政治は、知れ渡ってもいれば畏怖されてもいる。

実際に試召戦争でも、男女問わず体罰の後に召喚獣を戦死させるという、徹底した制裁の現場に出くわした者は少なくはない。

その白夜が半端では意味がないと言っている以上は……

「「「……あいつらも自業自得とは言え、気の毒に」」」

被害にあった身とはいえ、全員がそう思ったとか。

「以上だ。各自クラスに戻り、各々の役割を果たせ！　正義は我らにあり、バカどもに鉄槌を下せ！！」

「「「おーーっ！！」」」

自分たちが正義であるという、白夜の手で均された最高の地盤。

それにより、３年全体の士気は最高潮で決起を迎えた。

「……さて、後は攻め込み、私の手筈通りに事を進めるのみだな。さあ、始めようか」

そう呟いた白夜の手には、一冊のファイルがあった。

一方、２－Ａ教室にて。

「……Ｂクラスは、やっぱダメだった」
「Ｃクラスも同じよ。ほとんど否定的だった」
「Ｄクラスは……女子が最高潮だったよ。清水さんが痛めつけられた件でね」
「Ｅクラスは話もろくに聞いてくれなかったわ」
「くそっ！」

Ａクラスこそ、翔子の必死の頼みで一応は決起はしたものの……。
他のクラスでは、やはり鼻つまみ者たちのせいで引き起こされた騒動であるため、殆どが否定的だった。
例外はＤクラスだが、いまだに男女の軋轢が深く纏まりも何もない状態なのは明白だった。

「……やっぱ駄目か」

雄二は悩みに悩んでいた。

何せ事が、ＦＦＦ団が3年に危害を加えたという事から始まって……その際に白夜の手で、小山と中林が騒動を起こそうとしていた事が暴かれ、それに対して清水が白夜を攻撃。

どう考えたところで、完全に非が2年側にある以上は無理もない事だった。

「……光一はどこ行きやがった!?　明久に秀吉は!?　木下に工藤に姫路まで!!」

唯一の勝機と言えば、以前最高学年首席を破った光一と明久のコンビである。

……が、光一にとっても戦争に参加する事にメリットどころか、デメリットしか存在しない。

なので光一は登校するなり、即座に姿を消していた。

「……無理もないと思う。久遠にしてみれば敵対者が起こした騒動だから、手を貸す理由がない」

「まだ時間はある。須川、ＦＦ団の総力を挙げて開戦までにあいつらを探せ！　そして何としてでも大神白夜にぶつけるんだ!!」

「わかった」

須川が教室を出ていくと、雄二はムッツリーニが調査した大神白夜の点数と、翔子の点を改めて比べてみる。

『３－Ａ　大神白夜　総合科目５２７８点』

『２－Ａ　霧島翔子　総合科目４８５４点』

「……総合科目じゃ、結果は明らか。単科目ですら、平均点がムッツリーニの保健体育並。しかも身体能力すらけた外れで、あの鉄人すら苦戦に追い込むほど。しかも極め付けが、見てから反応出来るなんて完全に反則な能力の持ち主。どうやって攻略しろってんだよ!?」

「……吉井はその人の召喚獣の腕を斬り飛ばしたって聞いた」

……結局、あの騒動は噂となって広まっていた。

最も条件云々まではぼかされていて、召喚大会で光一を破った明久に興味を持った白夜が模擬戦争を仕掛け、あと一歩のところで明久が負けた。

という内容で知られていた。

「明久の野郎、まぐれとはいえそこまで成し遂げておきながら、戦争回避のかかった戦いに無様に負けやがって！！　しかもその責任も取らずに逃げるとは……」

「……雄二、それはいくらなんでも図々しすぎる」

……翔子は一応光一から事情を聴いていたため、雄二の言い分にはさすがに呆れていた。

一方その頃。

「やっぱ事態は、思わしくはないようだな」

光一たちは、不参加を表明してる3年の島津さやかとともに、サバイバルゲーム同好会部室に身を潜めていた。

「大神君が均した地盤は、完璧だからね。一般人なら誰だって悪なんてなりたくない物だよ」

「ですよね。ところで島津先輩はぶはっ！」

戦争に参加しなくてもいいんですか、と明久が問いかけようと振り向いた先には、熱いからと上を脱いださやかの艶姿。

しかもタイミング良く？

スリムな身体に似つかわしくない豊かなサイズがたゆんと揺れ、明

久はその強すぎる刺激に鼻血を吹きだし倒れた。

「気をつけろ明久。気が付いたら下着姿なんてまだ良い方だ」

「……☆、☆☆&$#＋（い、いいほうって）」

「あははっ、面白いねこの子。CからDになって、少しは色気は付いたかな？」

「良いからとっとと上を着ろ。その脱ぎ癖いい加減なおせこの露出狂」

「もうっ、先輩に対して態度悪いよ？」

「……成程、明久君はああいうのが好きなんですね」

……数分後

「だったらさ……（ごにょごにょ）」

「えっ！？　……そっ、そんな事？　でしたら……（ごにょごにょ）」

「わおっ、瑞希ちゃんも意外とやるね」

「おやおや、まだまだお子ちゃまだね2人とも。まああたしもまだだけど、どうせなら……（ごにょごにょ）」

「！？！？！？　そっ、そんな事を！？」

「むっ……これは、意外と強敵？　流石です」

「あたしの事はさやかちゃんって呼んで？　久遠君はドライだから、そう呼んでくれなくてね」

猥談を始めた3人をそっちのけで、光一は状況整理を始めた。

というより、このままでは話が進まないからである。

「島津先輩はムッツリーニの事があるから、この戦争には参加する価値はないんだと」

「そうなの？　でも光一、先輩のクラスの立場とか危うくなるかもしれないわよ？　それに先輩だって進学の事で……」
「父親が電気機器メーカーの社長なんだと。それにクラスでも変りもので知られてるらしいから、今回の事でとやかく言う奴なんていないだろ」
「……ムッツリーニって、もしかして逆タマ？」
「そのムッツリーニはどうしたのじゃ？」
「今は自分の事を隠すために異端審問会に所属してるわけだから、その都合上でなきゃならないらしい」

実のところ、ムッツリーニの関係はあまり知られてはいない
光一が情報操作に手を貸しているからか、一応ムッツリ商会のアルバイトと言う事で知られていた。

「やっぱり、状況的に不利じゃない？」
「そりゃそうだろ。非は完全に2年にある以上、士気が低いのは当たり前だ。無理やりやらせたところで、能力の半分も出せないまま終わるだろうよ。それに戦争内容だって……」

戦争の内容は、学年の総当たり戦争。
互いの学年の代表6人を先にすべて討ち取った方の勝ち。
なお代表が打ち取られたからと言って、残りの戦力は戦死したことにはならない。

勝負後の処理については、3年が勝ったら異端審問会の解散および、アンチ久遠派の残党全員を3年専用の雑用係とする。
そして、二学期に行われる体育祭の準備と後片付けで3年が担う分をすべて2年がやる。
ただし2年が勝てば、3年が被った被害はすべて水に流し、体育祭の準備及び後片付けはすべて3年が担う。

「……こうなんだから、結局士気は低いままだ。それに兄貴が男女問わず体罰を加えることは知られている」
「だよね。体育祭の準備と後片付けは確かにしんどいけど、それだけじゃ士気に影響はしないよ。僕だって光一のお兄さんとそんな理由で戦いたくないし」
「何より異端審問会のしでかした事の上、それを飛躍させたのはアンチ久遠派残党じゃ」
「全部そいつらの自業自得だから、それに付き合わされる側としてはたまったものじゃないわね。特に白夜さんと戦うとなると、反発は当然だわ」
「となれば、後は完全に鎮圧戦だな。その際兄貴が見せしめに何人かを痛めつけるだろうが、どうせ異端審問会かアンチ久遠派の残党程度だ。その程度なら、傍観したって罰はあたりゃしねえよ」
「そうだね。大神君も2年の点数を、特に腕輪もちを調査してたって話だし、これは本気でつぶしに行こうってことだよ？」
「へえっ、腕輪もちをねえ……ん？　腕輪……？」

腕輪と言えば、自分たちの腕輪……ではなく、４００点を超えた際発動する特殊能力の証。
２００点でさえ、学年でも屈指の点数だというのに、その2倍もの点数を出せる者などそうそういない。
確かに敵にすれば厄介だが、腕輪は点数消費も大きい。

「……考えすぎか？」

しかしその分、特殊能力にもさまざまな物があり、何が出るかはわからないとなれば十分脅威に値する。
中には白夜の装備にとって相性の悪いものだってある可能性だって、否定はできない。

「……まあ、今のところ出せる結論は、こんなところか？」

「あっ、時間よ光一」

こうして、２年対３年の戦争の火ぶたは、斬って落とされた。

第百五十三問

問題　次の問いに答えなさい

基本的人権について答えなさい

姫路瑞希の答え

すべての人間が生まれながらにしてもつ、決しておかされる事があってはならない権利。

教師のコメント

正解です。まあ常識ですね

久遠光一の答え

文月学園で意味がない物

吉井明久の答え

文月学園で意味がない物

教師のコメント

……バツを付けるべきなのに、手が勝手に丸をしてしまいます。

坂本雄二の答え

決して侵されてはならない権利

教師のコメント

この答えから気迫のようなものが醸し出されています。

『居たか！？』
『こっちはダメだ。そっちは！？』
『くそっ、久遠に吉井め。どこ隠れやがった！？』
『木下姉妹に工藤、姫路まで連れて……ん？　木下に工藤って事は、まさか久遠の野郎！！』
『吉井もいないってことは、まさか姫路に秀吉と……』
『『『大神白夜の前にあいつらを殺せ！！！』』』

サバイバルゲーム同好会部室の外から、響き渡る怒号。
それは特定の人物の捜索であり、その捜索者といえば……

「やっぱりＦＦＦ団だ、僕達さがしてるみたいだね？」
「あ奴らも懲りぬのう」
「……しかもなんか勝手にヒートアップしてやがるし」
「迷惑この上ないわね」

ヴぃーっ！　ヴぃーっ！

「もしもし？」

『光一、テメこの大変な時に何してやがる！？』
「俺にとってはお前らがどうなろうと構わないからな」
『それが友達のセリフか！！　大体明久のせいで戦争回避が出来なかったんだから、相棒として責任位とりやがれ！！』
「図々しい事言うな。俺は親友や恋人に妾こそいても、友達何ぞ１人もおらん。大体あれは明久のせいじゃなくて、お前らが性懲りもなくバカな行動に出たせいだろ。お前のしりぬぐいなら俺じゃなくて女房にやってもらえ」
『何気にトンデモ……って待て翔子、なんでティッシュを持って俺のズボンに手をかける！？　光一が言ったのはそういう意味じゃ』

プツッ！

「やっぱ雄二の差し金の様だな」
「どうせ僕達を光一のお兄さんとぶつけるためだろうね」
「仕方ないぞい、対抗戦力は光一と明久を除けば霧島だけじゃ。その霧島も得点こそ近い物の、光一や明久と比べれば勝算はずっと低い」

そもそも騒動に巻き込まれまくってる光一や明久と違い、翔子は特に騒動に巻き込まれる事もなく勉強にいそしんでいるため、召喚獣自体使い慣れてはいない。
それで白夜の相手をしろというのは、どう考えても無理があった。

「まあ当然だよね。大神君は私も以前保健体育勝負で負けちゃったから」
「性格こそ最悪でも、能力は本物……ってか、緊張感持ってくださいよ」
「……僕、現実でバニーガールなんて初めて見たよ」

先ほどまで猥談やってたさやかは、現在黒のバニーガールのコスプレをしていた。
その手には3着のバニーガールのスーツがあったが、光一は無視した。

……瑞希と愛子に勧めてる様子も含めて。

「さて、そろそろなんらかの動きがあるころだな」
「ねえ、光一はどうなるって考えてるの？」
「ん？　そうだな……士気が低い最初から一気に攻めるってのが定石だが、明久の件がある以上はあいつらが表現のしようがないバカって事は証明されてる」
「……そうね。あいつらのバカを表現出来る物が存在するなら、ぜひ見てみたい」

本人たちが聞いたら激怒すること間違いなしだった。
最も優子を責めるのは、アンチ久遠派残党のみだが

「だからまずは見せしめに1クラス殲滅して、誰に逆らったかを思い知らせる必要があるって考えるはずだ。となると対象はそうだな……考えられるとしたら、Bは代表がゴミで、D以下だと能力的にも効果は低い」
「じゃあ……」

「あっ、あのー、出来ればボクは遠慮したいかなー……なんて」
「そう？　ねえ瑞希ちゃん、これ着て吉井君だっけ？　彼にご主人様ってすり寄ってみたら喜ぶかもよ？」
「本当ですか！？」

「のう光一に明久よ、何やらすごい事になっておるようじゃが？」
「……頼む秀吉、今はシリアスな展開にさせてくれ」

ところ変わって……

バンっ！

「このクラス、最高学年首席大神白夜が殲滅する。これは決定事項だ、逃亡、降伏、反論は一切認めん」

Cクラスの扉を開くと同時に、白夜はそう宣言した。
“たった1人”で

「……ふざけてるんですか？　いくら学年首席だからって、たった1人でクラスを殲滅しようなんて！」
「ふざけているのは貴様だ。態々こんなゴミ捨て場に出向いてのゴミ掃除ごとき、無駄に戦力の投入など出来るか」

吐き捨てるような暴言に、ピキッと何かにひびが入った。
いくら戦争にやる気がなく、相手が最高学年首席だからと言って、ゴミ掃除などと言われては黙ってはいられなかった。

「粗大、ゴミ……」
「私に言わせれば、Aクラス未満などゴミ捨て場だ。そのゴミ捨て場に居つく者をゴミと呼んで何が悪い？」
「私たちがFクラスと同じだっていうんですか！？」
「自覚なしか……ならば自覚させてやるとしよう。貴様らゴミなどに価値はないとな」

吐き捨てるようなセリフに、教室にブチっという音が響いた。

「きぃぃぃぃぃ！　こいつまぎれもなく久遠の兄だわ！！」

「そうだ、いくら先輩だからってゴミ扱いされて黙ってられるか！！」

「戦争なんて関係ねえ！　発言を撤回させろ！！」

白夜ははぁっとため息をついた。

ちょっと煽ってやれば、簡単に自身の予定通りに行動する浅はかさに。

「もう一度言う。このクラスの殲滅は決定事項だ、降伏も逃亡も反論も一切認めん」

「この涼しい顔を絶対泣かせるわよ！！」

「「「おーーっ！！」」」

「……布施先生、召喚許可を」

にっと笑みを浮かべ、連れてきた布施教諭に召喚許可を申請。

白夜にとって、これは見せしめである。

だからこそ、やる気がないよりあった方がより恐怖をすりこむ事が出来る。

「さて、さっさと終わらせるぞ。サモン！」

召喚獣が姿を現し、すすっと手の動きに従い宝剣が宙を舞う。

（この戦争においては通常召喚獣での戦争）

「全員突撃！　たたきのめしなさい！！」

「「「おーーっ！！」」」

Ｃクラスの召喚獣が一斉に白夜の召喚獣に飛びかかった。
その最初の二体と対峙し……

『３－Ａ　大神白夜　化学５３４点』
ＶＳ
『２－Ｃ　黒崎トオル　化学１３９点
２－Ｃ　野口一心　化学１３２点』

振り下ろす武器の腕をつかみ、もぎ取った。

「なっ！？」
「いっ、いつの間に！？」

その腕を投げ捨て、白夜の召喚獣が２体の召喚獣の頭をつかむ。
それを衝突させ、２体の召喚獣の頭が潰れた。

「気を抜く暇があるなら必死になれ。たかが数で有利だからと気を抜くな」

横から挟むように数体が飛びかかったのを、白夜がまず両腕で２体の召喚獣の頭にゲンコを振り下ろし頭を陥没させる。
その身体を殴り飛ばし、後方の召喚獣に命中させ布陣を崩す。

「……どうした？　まだ武器を使っていないんだが？」
「うっ、ウソでしょ！？　本当に、たった１人で……」
「バカが。ゴミの分際で神に選ばれし者たるこの私を見くびるとはな……さて、そろそろ貴様らに処する制裁の準備でも始めるか」
「ひっ！」

白夜が小山に向けて踏み出すと同時に、指を鳴らした。
男子生徒がそれを見て白夜の恐怖政治の噂を思い出し、逃げようと駆けだす。

がしっ！

「ひっ！　ゆっ、許して！！」
「逃亡も降伏も反論も認めん、そう言ったはずだ」

白夜は自慢の超反応でそれを捕まえ、白夜の召喚獣がその逃げようとした生徒の召喚獣の首を殴り飛ばした。
戦死したと同時に手を離して解放すると、その男子生徒の顔を殴り気絶させる。

「さて、残りは貴様らだ」
「ひっ！　ゆっ、許して……もうっ、もうしませんから！」
「……良い事を教えてやろう。私はな、そういう見苦しい真似は大嫌いだ」

Cクラスに断末魔が響き渡った。

第百五十四問

問題　次の問いに答えなさい

フランス革命期、粛清による恐怖政治で“ルソーの血ぬられた手”と呼ばれた政治家を答えなさい。

姫路瑞希の答え
『マクシミリアン・ロベスピエール』

教師のコメント
正解です、流石です姫路さん。

第二学年生徒の答え
『大神白夜』

教師のコメント
……確かに連想させられる事も事実ですが、間違いです。

久遠光一の答え
『クソ野郎』

教師のコメント
……なぜかこの答えから尋常じゃない何かを感じました。

「……あまりにも情けないな。身の程知らずが軽い挑発に乗っておいて、その様とは」

白夜に圧倒され、腰を抜かしてしまったCクラス面々。
白夜はそれに構わず、小山のタイをつかみ引っ張り上げ……

「ひっ！」
「言え。“私はゴミです、ゴミの分際で迷惑をかけてすみませんでした”と、大きな声で」
「やっ、やめてください。こんなの、女の子にすることじゃ……」

ビシっ！！

「きゃあっ！」
「反論は認めんと言ったはずだ。ふざけた事をぬかすなら、その顎を砕いてやろうか？」
「わっ、私はゴミです！　ゴミの分際でご迷惑をおかけしてすみませんでした！！」

ぎりっと握りしめられた拳を見て、顔を青ざめた小山が必死にそう叫んだ。
白夜はふんとつまらないと言わんばかりに、鼻を鳴らして解放した。

「お前たちもよく覚えておけ。今後同じ真似をすれば、貴様ら全員がこうなるんだ」

何の変哲もない言葉だったが、全員が腰を抜かし二の句を告げられなかった。

「……第一段階終了だな」

Cクラス制圧完了。
その事実は、2年全体に波紋を呼んだ。

2－Aにて。

「たった一人で、クラスを制圧って……ありえない事じゃないのが余計に恐ろしい」
「どうするんだ、坂本君？　久遠光一を引き入れる前に全滅しては、意味がないだろう？」
「くっ……ムッツリーニ、大神白夜の動向と点数はどうなってる！？」
「……もう教室に戻った。点は現在４７８点」

学年単位となれば、クラス単位と違い戦力に差はない。
……が、経験の差がある以上は3年が有利であり、更には飛びぬけた戦力が総大将。

その上今、戦力でも不利となった。

「……各クラスの様子は？」

「Cクラスが全員問答無用で体罰を受けたという事で、殆どが参戦を決意したそうだ」
「文字通りのけがの功名だな。仕方ない、いったん光一たちは諦めてなんとか3年の戦力を削ろう」
「……どうするの？　また久遠のお兄さんが出てきたら」
「いや、大神白夜はしばらく出てこない筈……だが、影響は大きいな。くそっ！」

ところ変わって、３－Ａ教室。

「出だしの策は終了……このままゆっくりと事を進めれば、片はつく」

Cクラス殲滅には、２つの目的があった。
１つは総大将であり、最高戦力である自分自身の最低限の力を誇示し、恐怖心をあおる事。
そしてもう１つは、今後3年に逆らったらどうなるかの文字通りの見せしめ。

「どうして一気に攻めないのですか？」
「小暮、目的を履き違えるな。これはいつもの試召戦争ではなく、奴らに騒動を起こせばどうなるかを思い知らせる戦争だ。私の想定以上の大バカ揃いだとわかった以上、ここで単純に目先の勝利をあげたところで、また騒動が起こり鎮圧の堂々巡りだ」

白夜が示す3年にとっての勝利条件とは、勝つことと恐怖心を植え付ける事。
白夜はそれを両立出来る様策をたて、事を進めていた。

……明久との戦いでの乱入により、当初予定していた策をすべて組みなおした上で。

「さて、これからはそうだな……昼休みまでは、階段に何人か交代で見張りをつけ、不定期に高城の指揮のもとで小隊規模での牽制を仕掛ける。それ以外は各人英気を養い、来るべき時に備えろ」

「え？　あの……」

「私が出てくるやもしれない、そう思わせるだけで今は十分よ。まだまだ始まったばかりだ、我が夜の悪夢から覚めるには早い」

白夜は自身の名を気に入っており、こういう表現が好きな面があった。

恐怖の象徴は闇であり、闇を現すのは夜。

恐怖の夜とは、すなわち悪夢。

白夜の意味こそ、太陽の沈まない夜ではある。

が、闇の中だろうと決して曇りすらしない、と結論付けていた。

「それにこれは殆どが望んでいた事だろう？　バカどもが恐怖におびえる様を……ん？」

ふと白夜は、周囲を見回した。

「おい、あの無能2人はどうした？」

「それが、代表が出ていってすぐにどこかへ行ってしまって」

「……光一と吉井明久を探しに行ったというところか、あのバカどもが。おい、なぜ誰も止めなかった？」

「いくら代表が認めているとはいえ、彼らの一般評価は底辺の問題児です。あんなことを言われればさすがに……」

「これはバカどもへの制裁だというのに、そのバカどもがやっていた負けた逆恨みをさせてどうする？　これでは同族嫌悪と取られても文句はいえん」

あくまでこれは、私怨目的の戦争などを行い学園の評判を貶めた2年への制裁である。

同じ事をやっておいてでは、これからの騒動を戒めるに至らない可能性も十分あった。

結果さえ出せば文句を言わないのが白夜の方針だが、今回は事が事ゆえにすべてが台無しになりかねない以上、黙っているわけも行かない。

「予定変更だ、私はあの無能どもを探しに行く。方針は先ほど言ったとおりだ、決して牽制以上の攻撃はするな」

「わかりました」

ところ変わって……

「……ねえ光一、僕達潜伏中のはず、だよね？」

「……筈じゃなくてその通りだ」

「……それでなぜ外に居るのじゃろうな？」

「……仕方ないでしょ。どういうわけか愛子と姫路さんが一緒に着替えてるんだから」

現在光一と明久、秀吉に優子はサバイバルゲーム同好会部室の外に出ていた。

その理由は、瑞希と愛子が現在さやかの口車に乗せられてバニーガールに着替えてるからで、優子が一緒なのは避難である。

「まあ今なら大丈夫ではあるけどな。俺の予想通りにCクラスが兄貴につぶされた以上、雄二だって俺達探す余裕なんてないだろ」
「驚いたよね？　ムッツリーニから先輩に連絡が来たときは。うまくいってるんだね」
「それはそうじゃろ。鼻血の出血量以外、あの先輩と破綻する理由が見当たらんのじゃ」
「ふふっ。なんだかほほえましいわね」

実際わかりきっていた事だが、ムッツリーニは島津先輩とはうまくいっていた。
その事に少し頬が綻ぶ４人。

「それで光一よ、これから一体どういう流れになるのじゃ？」
「総大将が１クラス余裕でつぶせる事を誇示したのなら、間髪いれずBかDを潰すか、しばらくはちまちま牽制しながら心身ともに消耗させるか、じゃないか？」
「そっか。光一のお兄さんがバックに控えてる以上、いつ出てくるかわからないって怖さがどうしても付きまとうから？」
「おっ、よくわかったな明久」
「……勝負した身だからね」

明久が顔を少し青ざめながら、カタカタと震え始めた。

「さて、周囲警戒しろよ？　まだあのバカどもがうろついてる可能性も高けりゃ……」
「「見つけたぞ吉井に久遠！！」」
「……どさくさまぎれに俺達倒そうとしてるバカが居ても、正直おかしくないからな」
「「「成程」」」

はぁっとため息をつきながら、唸り声でも上げそうな常夏コンビを汚い物を見る目で見つめる。

「居ないと思ったらこんなところに隠れてやがったか！」
「てめえ吉井、覚悟しやがれ……って、何木下に抱きつかれてやがる！！？」
「？　なんじゃ、何やらいつもより敵意が数倍増しじゃぞい」

常村の姿を確認したとたん、明久の背に隠れた秀吉がふとつぶやいた。

「大方、兄貴に明久以下のレッテルでもはられたんだろ」
「そっか。僕一応、光一のお兄さんの腕を斬り飛ばしたから」
「なる程の。それで納得いかず、明久に攻撃というわけじゃな？」
「ホント情けない。こんなのがＡクラスの先輩だなんて」

ブチっ！　×２

「うるせえ！　吉井に久遠、散々俺達をコケにしやがった事後悔させてやる！！」
「兄貴にやられた恨みも含めて、覚悟しやがれ！！」
「っ！　ちょっと先輩、何気に関係ない白夜さんへの逆恨みも含めるって、それが先輩のやる事ですか！？」
「うるせえハズレ女！　こんなゴミクズに何やろうが……」

ガラっ！

「ちょっと、うるさいよ」
「なんだ島津、てめえ……」

いきなり扉を開けて文句を言ったさやかに、突っかかろうとする常夏コンビ。
……だがさやかの後ろでは、光一たちからは死角で見えないが、まだ着替え途中の愛子と瑞希が居た
幸い2人とも大事なところが見られてる訳ではないが……。

「きゃーーーっ!!」
「ひゃっ!!」

流石に着替え中で異性に出くわしては、2人とも悲鳴をあげる以外はない。
夏川と常村も即座に顔をそむけ、優子がさやかを押しのけて扉を閉めた。

「……さて、“ド”変態親指に“ド”変態モヒカン。要するにお前ら、明久と俺に八つ当たりに来たんだな?」
「ドをつけるなドを!! 大体八つ当たりじゃ……」
「お兄さんにやられた分を、弟にぶつけようとしてる時点で八つ当たりですよ、“ド”変指先輩」
「そうですよ。大体白夜さんにやられたなら、本人にぶつけてください。“ド”変態先輩方」
「うむっ、あまりにも情けない“ド”変態たちじゃ」
「ぎゃあああああああああっ!!」

秀吉に変態呼ばわりされた常村が、狂声を上げながらのたうちまわり始めた。

数分後。
結局バニーガールを中止した瑞希と愛子は、それぞれ明久と光一の後ろに隠れて常夏コンビを見ていた。
着替えと常村の目覚めが一致していたため、逃げきれなかったためである。

「とにかくだ、てめえらのせいで被った被害の分、支払ってもらうぞ」
「踏み倒してやるよ。面倒だが」

光一が面倒臭そうに一歩前に出るのを、優子と愛子が遮った。

「光一が相手にする必要ないわよ、こんな人たち」
「そうだよ。ここはボク達に任せて」

そう言って、光一に有無を言わさず2人に対峙。
秀吉が腕輪を起動し、召喚フィールドが展開される。

『３－Ａ　常村勇作＆夏川俊平　世界史１７６点＆１６８点』
ＶＳ
『２－Ａ　木下優子＆工藤愛子　世界史３５４点＆３０２点』

「げっ！　なっ、何だよその点数！？」
「くそっ、ハズレ女のくせに！」

常夏コンビが、優子と愛子の点数を見て驚愕した。
光一の恋人と妾に収まってるだけに、軽く見ていた分も手伝って。

「吉井と久遠をボコる前にとんだ邪魔が入ったな。あのクズ2人よりしんどそうだ」

「あーあ、2年なんざバカだらけだから楽勝だって言ってたの誰だよ？」

「悪かったよ、訂正する。吉井と久遠はクズだが、中にはちょっとはましな奴もいるから注意が必要だ。これで良いか？」

「今更遅ぇよ。やれやれ、この2人とそこの女、掃き溜めに鶴ってやつか？　こんなクズどもとつるんでるなんてもったいない」

常夏コンビが好き勝手言い始めるが、光一と明久は気にしない。というか、さっさと勝負始めればいいのにと思うくらいだった。

「そもそも、こんなクズどもがこの学校に居るから俺達は……」

「光一たちはクズなんかじゃないわ」

「……あ？」

「光一たちはクズなんかじゃないって言ってるのよ」

「そうはいっても、事実は事実だろ。すぐ問題起こすし、教師には目ぇつけられてるし、部活で何か功績をあげてるわけでもなければ成績だって底辺だ。これをクズと呼ばずになんて呼べってんだ？」

明久と光一が顔をしかめるが、それはあくまで“お前らにだけは言われたくない”程度のものだった。

覗き騒動以降、殆ど巻き込まれた被害者の様なものだが、校舎の壁の破壊に教頭室の爆破はまぎれもなく事実なのだから。

「そいつらは本当に学校の面汚しだ。人に迷惑をかける事しかできないんなら、大人しくゴミ溜めにでも埋まってろっての。大体久遠は、大神のイカレ不始末のサンドバッグとして生まれてきた分際で生意気なんだよ」

「そうだ。サンドバッグくらいしか価値がねえってのに逆らいやがって。挙句女脅して二股とか、マジで死ねよお前」

「ちがいねえ。こんな問題ばっか呼びこむような奴が死んだって、

喜ぶ奴ならごまんといても悲しむ奴なんて誰1人いやしねえ。ならこんな厄病神、死んだ方が世の中のためだ」

光一はもとより白夜に散々恨みがある2人は、光一に人を見る目など向けていなかった。

しかし光一にしてみれば、兄に強く出れない奴など視界に入れる気もなければ、聞き入れる言葉もない。

明久もその意をくみとったようで、2人してやれやれと肩を竦めた……が。

「いい加減にしてください！！」

「どうしてそんなひどい事を言うんですか！！」

2人はぎょっとして、常夏に叫んだ優子と瑞希に目を向けた。

「なっ、何だよ？」

「アンタ達に光一の何がわかるっていうのよ！？　別に好きで白夜さんの弟として生まれたわけでもないのに、白夜さんに勝てないからって弟にその矛先向ける事しかできない、あんた達みたいな情けない腰抜けの勝手な八つ当たりのせいで、どれだけ光一が歪められて壊されたか知りもしないで！！」

「そうです！　私にこんなこと言う資格はありませんけど、確かに明久君と久遠君はあまり成績は良くなかったかもしれませんし、いろいろと問題を起こしちゃったかもしれませんし、いろいろと問題を起こしちゃったかもしれません……でもだからって、どうしてそんな酷い事を言うんですか！　何も知らないくせに……」

「っせぇな！　お前こそあいつらがどこまで頭が悪くてクズなのか知らねぇんじゃねぇのか！？　ちょっとあいつらの点数と評判を調べてみりゃわかるだろうが！」

「客観的に見れば醜いものね。そんな数字の上でしか人を見れない

なんて、白夜さんに踏みにじられてあたりまえじゃない」

2人の涙交じりの抗議に、明久と光一は面食らった。
それと同時に……

「……なあ明久」
「何？　光一」
「……俺は別にさ、こいつらが何言おうが知ったこっちゃないし、否定も出来なけりゃする気もない」
「だろうね。僕も一応自分のやってきた事くらい自覚があるから、同じ気持ちかな？」
「……けどさ、それでも俺達の事を認めて、受け入れてくれる人が居るって、うれしいと思わないか？」
「そうだね……そして、その人のためにもここは」
「「黙ってられないだろ（よね）」」

切り込み隊長コンビに火がついた。

第百五十五問

問題　次の文章を読んで次の問いに答えなさい

「定吉はどこに行ったんだ」
次平が尋ねると、太助は肩を竦めて答えた。
「お菊のところだよ。十年来の恋心を得意の和歌にして伝えてくるんだとさ」
それを聞いて次平は眉を顰める。
「恋の和歌と来たか。それなら“結果”は知れたようなものだな」
「違いない。あいつの歌は〈下手の（　）〉だからな」

?（　）に正しい語句を入れて〈　〉部分の慣用句を完成させ、その意味を答えなさい
?“　”部の結果とはどういう結果なのか、次平と太助が予想しているであろう結果を答えなさい

姫路瑞希の答え
?下手の（横好き）
意味：下手であるにもかかわらず、その物事にやたらと熱中している事
?下手な和歌で失敗してしまって、定吉の想いは成就しないという結果

教師のコメント
正解です。この文脈でほかに当てはまる“下手のー”で始まる慣用句としては、“下手の真似好き”という物もあります。どちらの慣用句であろうとも拙い技量を示すため、次平と太助の2人が予想

する結果は失敗であることがわかります。

久遠光一の答え
?下手の（真似好き）
　意味：下手なのにそれに熱中してる事
?下手な和歌でも、懸命にやれば報われるんじゃないかという結果。

吉井明久の答え
?下手の（一念）
　意味：へたくそでも一生懸命頑張る事
?へたくそでも自分のために一生懸命に歌う定吉の姿に、お菊はきっと心を動かされるに違いないという予測

教師のコメント

決して正解とはいえませんが、先生はこの回答を好ましく思います。

「おいド変態親指にド変態モヒカン、狙いは俺と明久だっつってたな？」
「じゃあ僕たちが相手しますよ。親友の大事な恋人たちに、あなた達みたいなド変態コンビの相手させるわけにもいきませんからね」

「ド変態言うんじゃねえ！！　……それよりそんなこと言っていいのか？　歴史オンチの久遠光一君よお？」

実際光一は世界史が苦手どころか壊滅科目で、学年どころか学園最低点だった。

最も得意な物理が教師でも上位の高橋女史クラスだけに、いっそう際立っていたりする。

「その補強策考えてないとでも思ってんのか？　あんたらごときなら簡単に打ち破れる位でなきゃ、策と言えねえよ。なんなら罰ゲームでもつけてやろうか？」

「ごときだあ！？」

「待て夏川。ずいぶんな自信じゃねえか久遠。良いぜ、受けてやろうじゃねえか」

ぎゃははと下品に笑う常村を無視して、光一は優子と愛子の肩に手を置き……。

「というわけで優子、愛子、悪いけど下がってくれ」

「え？　……うん、わかった」

「がんばって、光一君」

その手を信じてるという様に手を添えてから2人は下がり、光一と明久が召喚。

腕輪の都合で一足先に装備変更した、竜のジャケットにジーンズ、そして手には白木拵えの刀を持った明久の召喚獣。

そして黒いごつめのコートをまとい、手にはライフルと自動拳銃、腰のベルトにリボルバーと剣をつけた光一の召喚獣が姿を現した。

「なっ！？」

「悪いな、俺達腕輪の調整の都合で一足先に装備変更してんだよ」
「おかげで僕も鉄製の武器が手に入りました」

『２－Ｆ　久遠光一　世界史１点
２－３３４　アレクサンドロス大王　世界史１６１点』

「「「「「「「……」」」」」」」

「……そう言えば、あれから世界史のテストって受けてなかったっけな？」
「……うん。光一は、いつも通りだよね？」
「……お恥ずかしい限りだがな」

……出だしこそ勇ましかった物の、完全にそれを台無しにしていた。

「……まあいい、常夏ごときなら大丈夫だろ」
「そう？　じゃあ行こうか、光一」
「「待てやコラ！！」」

いざ勝負、と言うところで常夏が声をそろえて止めた。
なんとなく言いたい事は理解してただけに、２人は気まずそうに眼をそらす。

「久遠の歴史オンチぶりも驚きだが、誰だよアレクサンドロス大王って！　しかも３３４クラスなんて学校拡張しすぎだろ！　明らかにこれはお前の点数じゃねえだろうが！！」
「知らないのか？　明久は日本史と世界史ならＢクラス級の点数だ。それと……すまん明久、流石に名前の方はフォローできん」
「ううん、良いよ。笑わないだけうれしいから……」
「余計に腹立ってきやがった！　大神のイカレクソ野郎め、よりに

も寄ってこんなバカ以下のレッテル貼りやがって！！」
「考えてみりゃ、大神は吉井に腕を斬り飛ばされるなんてマヌケやってんだ。ここでこいつらぶっ殺せば、あの野郎も嫌味なんて言えなくなる！」

本人が居たら絶対制裁物のセリフを吐きながら、顔が真っ赤になる程激怒する常夏。
白夜の事をよく知らない瑞希以外、“何て怖い物知らずな……”と内心で思った

「さて明久、融合召喚」
「させるか！」

光一の召喚獣が明久の召喚獣に駆け寄ろうとした所へ、突如常村の召喚獣が割り込んだ。

「へっ！　大方融合召喚でやり過ごそうって腹だろうが、そうはいかねえ！」
「これが策かあ？　はっ、所詮はモヤシの発想だな！！」
「明久」
「うん！」

その割り込んだ召喚獣めがけて、明久の召喚獣が見よう見まねの居合を繰り出す。
背を斬られた常村の召喚獣が、いったん距離をとった。

光一の召喚獣がリボルバーをとりだし、牽制程度に一発。
夏川の召喚獣がそれをよけ、再度融合召喚しようと近づいたのを見て突撃。

「明久」
「オッケー！」

その夏川の召喚獣を明久の召喚獣が迎え撃ち、光一の召喚獣が援護に回ろうとした常村の召喚獣にライフルを一発。
再度距離をとったのをみて……。

「ちっ！」

再度近づこうとする2体に、今度は2体一度に突進。

「明久」
「ダブル！」

明久が同時召喚を起動し、主獣が常村の召喚獣の腕を斬り、副獣が夏川の召喚獣の顔面を蹴飛ばした。
明久の主獣と副獣が夏川と常村の召喚獣を追撃し、光一の召喚獣が自動拳銃で牽制。

「畜生、どういう事だよ！？　なんで2つの召喚獣を一度にここまで操れる！？」
「バカってのはさ、1つの事に夢中になるとそれに対して飛んでもない集中力を発揮するんだよ。空手バカとか剣道バカとか呼ばれる奴ってのは、“物事に集中できる奴”って誉め言葉でもあるんだな」
「何が言いてえんだ久遠！？」
「まあ要するに、俺も明久も優子と姫路を泣かせたときからスイッチ入っちまったんだ……覚悟しろよ、凶王の逆鱗に触れる事がどういう事かを教えてやる」

絶対零度の雰囲気をまとい、くわっと瞳孔の開いた目を見開く。

2体がいったん引き、明久も同時召喚を解除して後退。
いきり立つ夏川をなだめながら、体勢を立て直そうとする常村。

「どうした？　さっきから突撃しては返り討ちの一点張りじゃねえか。俺達にいじめられて楽しむ趣味でもあったのか？」
「テメっ！」

それを許さんと言わんばかりに光一は挑発を交えながら、再度召喚獣を明久の召喚獣に近づける。

「「ああっ、そういう事？」」

それを見てた優子とさやかが、同時に光一の策に気付きうなづいた。

「え？　どういう事ですか？」
「久遠君は融合召喚をちらつかせて、相手から思考の余地を奪ってるの」
「ハッタリも武器の1つだからね。武器を使う光一に勝てる人はそうそういない」

おおーっ、と外野は感心の声を上げる。
しかしそれは当然常夏の耳に入っていた。

「成程、そういう事かよ」
「意図がわかりゃ大した事ねえな」

と、再度近づいた召喚獣を見ても、余裕の姿勢を崩さない

「断言しよう、お前らバカ……いや、超バカだ」

「はっ？」
「ユニゾン！」
「「あっ！」」

融合召喚が起動し、ジャケットに2本のガンブレードを持った融合召喚が姿を現した。
すかさず明久が同時召喚を展開し、同じ装備の明久の召喚獣が姿を現す。

「すべては布石だ。知られた所で、対応策練る位出来るさ」
「これで僕たちの勝ちは決まったね」
「「なめんな！！」」

2体同時に武器を振り上げ、突進する常夏の召喚獣。
明久と光一の召喚獣が同時に受け流し、目配せののちに常夏の召喚獣を蹴飛ばし衝突。
ガンブレードを振り上げ、常夏の召喚獣の首を切り落とした。

「やったな」
「うん！」

明久と光一がハイタッチし……

「「イエーイ！」」

万歳するように両手をあげ、飛び上がった。

「ぐっ……ウソだ、こんなの認めねえ！」
「久遠の壊滅科目で負けたなんて、絶対認めねえぞ！！」

「言い残す事はそれだけか？」

突如乱入してきた声に、常夏がびくりと身体を震わせた。
ギギっと音が鳴らすようにそっと後ろを見ると……。

「「おっ、おっ、おおお大神！？」」

「勝手をするなと言ったはずだがな？　くだらん私怨にとらわれ、私が今日という日のために立てた計画そのものを壊しかねん行動に出た挙句に負けるなど、許すわけにはいかん」

白夜がボキリと指を鳴らすと、２人があたふたと後退。
２人が振り向いて駆けだそうとしたときには、既に白夜に首根っこをひっつかまれていた。

「力こそが絶対だ。勝者こそが正義であり、敗者に価値などない……それが勝負の理だ。それを足蹴にすることは、この私が許さん」

首根っこをつかんだまま、２人の頭を正面衝突させ頬り投げたずざっと地べたに倒れこむ２人を交互に踏みつけ……。

「さて、制裁はまだ……」

「待ってください、そいつらとは負けたら罰ゲームをするって話なんです。だから、姫路さんと木下さんに謝らせてください」

「ん？　そうか……無能ども、意味がわからんとは言わんよな？」

白夜に睨まれた状態でろくに立てないため、土下座で２人は謝った。
謝ったのち、白夜は待つ夏川の脇腹を蹴りあげ、常村の頭を踏みつける。

「あの……」

「なんだ？　私に従う気になったか？」
「違います。僕が聞きたいのは、どうしてそこまで力にこだわるのかです。もしかしたら、光一の境遇がそうさせたんじゃないかって、僕にはそう思えてならないんです」
「光一の……か。そうかもしれんし、そうでないかもしれん」
白夜にしては曖昧な答えに、周囲は驚いた。
自信に溢れ、迷いと縁のない事がイメージとしてあげられる白夜にしては、意外性がたっぷりの事だった。
「意外という顔だが、私は心などとうに捨てた。今の私にはお前の言う様に光一のためだったか、私自身が生まれ持った才能により生じた歪みへの怒りだったか、はたまたそんな人の弱さに絶望したか……もしくはこれ意外だったかも、もう理解することも出来なければ答えを出す事も出来ん。これは欠点やもしれんが、その分得た力もある以上些細な事」
「……そこまでして、どうして？」
「どうして？　……ふんっ。正義や悪など、後付けの理由に過ぎない。すべてを決めるのは力だ、何よりも大事なのはすべてを凌駕する絶対的な力だ。こだわって何が悪い？」
「そのために心を否定してまで、ですか？」
「心は人を侵し、弱さという重罪であり重病をもたらす最悪の毒だ。必要なのは憤怒と強欲と自信のみ、それがわからんからお前はダニどもの食い物にすぎないのだ」
心は毒、弱さは罪。
だとしたら……と、明久は思う。
「……弱い事が、そんなにいけない事なんですか？」
「無力こそが罪だ。文月学園がいい例だろう？　どんなに努力しよ

うが結果を出せねば意味がない。無力な人間に得るものなどなければ価値もない」

「そうかもしれませんけど、でも心を捨ててまで得た力が正しいわけがない！」

「ならば私の手で正しいと証明してやるまでだ。さて、口論は終わりだ。そろそろ戦線に影響が出始める頃でな」

そう言ってそっぽを向き、常村と夏川を引きずりながら去って行った。

正しかろうが間違っていようが関係ない、間違っていると言われようとも自分の力でそれを正しいと証明するするまで。

……明久にとっては、そこまでの自信など最も縁がない物であり、微かに羨ましいと思った。

でも……

「……間違ってはない、よね」

「ん？」

「ううん、何でもない」

少なくとも、後悔はなかった。

「で、どうするの？」

「どうするもこうするも、戦争が終わるまで待つよ。メリットないんだから」

「だよね」

第百五十六問

問題　次の問いに答えなさい。

昔、距離を表す単位として使われていた“一里”が約何ｋｍを表すかを答えなさい。

姫路瑞希の答え
『３．９ｋｍ』

教師のコメント
正解です。

吉井明久の答え
『４ｋｍ』

教師のコメント
少々大雑把ですが、まあ良いでしょう。

久遠光一の答え
『０．００１』

教師のコメント
“一厘”ではなく“一里”です。

場所は２－Ａクラス。
つぶされたＣクラスにＥを待機させ、首脳陣が現在Ａクラスに集結。
そのついでに、Ｆクラスも来ていた。

「くそぉっ、明久と光一のせいで厄介なことになったな」
「……いや、坂本君。どうしてそこで久遠光一と吉井君が出るんだい？」
「何言ってるんだ久保、あいつらが尻尾まいて逃げたせいでＣクラスが潰されたんだろ」
「そういう事ですか。まったく、あのブタコンビに恥という概念はないようですね」

明久と光一が居ないのを良いことに（居ても同じだが）雄二が責任を擦り付け、それに美春が便乗。
彼女の所属するＤクラス代表、平賀源二が頭を抱えていた。

更に言えば、念のために呼ばれた高橋女史もやれやれとため息をついている。

「全くだな。あいつら問題起こすだけ起こして逃げやがって、あの学年の恥さらしが」

「流石は吉井に久遠だ、人の迷惑を一切考えないバカコンビだな」
「そもそも久遠のせいで3年に目を付けられた上に、吉井のせいで戦争が回避できなかったってのに、責任も取らずに逃げやがって。良い迷惑だっての」
「そうそう。そのせいで俺達までバカに見られるなんて、世も末だね」

そして更に便乗するように、ＦＦＦ団が好き勝手ほざき始めた。
お前らが言うなとあちこちから視線が飛ぶが、彼らは一切気付かないなぜなら彼らはバカ……大バカなのだから。

「……それで、どうするんだい坂本君？　たった1人にＣクラスを潰されるという事態が起こった以上、元々だが僕たちは明らかに不利だ」
「それだが、その当人はしばらく出やしねえ筈だ。おそらく向こうの総大将の光一の兄貴は、俺達に騒動を起こせばどうなるかを思い知らせることを前提に行動している」
「それでどうしてＣクラスが潰されるのですか？　悪いのは全部あのブタ野郎のコンビだというのに」

一部あきれたが、雄二はうんうんと頷く。

「おそらくちゃんと事前確認してないんだろ」
「まったく、ブタの兄はブタと言う事ですか。これだから男と言うのは……」

「どこまでも私の予想を上回るバカどもだな」

そこへ乱入する声。

ドアの先には、敵の総大将である大神白夜が、顔のひしゃげた常夏コンビの首根っこをつかんで立っていた。

ちなみに2人して意識を取り戻しており、これから始まる制裁に怯えガタガタ震えていた。

「あっ！　この前のブタ！！　よくも女の子に攻撃をしてくれましたね！！？」

「先に攻撃したのはお前だ」

「言い訳なんて、やはり男なんて最低です！　八つ裂きになりなさ……えっ！？」

「え？　ちょっ、大神！？　何をうわあああああっ！！」

カッターナイフを持って飛びかかった美春めがけて、夏川が投げ飛ばされ激突した。

「いっ……ちょっ、どいてくださいブタ先輩！！　汚らわし……え！？」

「え？　待て大神！　いくらなんでもこれぐはあっ！！

「ひっ！　まっ、待てげぶあっ！！」

更にその上に背負い投げで常村を、自分の体重をかけるように夏川に押し倒されてる美春めがけて投げた。

「くっ、クラスメイトを武器に！？」

「ちょうど勝手をした制裁を加えるところだった。手間が“少し”省けた」

誰がどう見ても、２人に対して人に向ける目をしていない。

というより、躊躇なく迎撃のために人を投げ飛ばし武器にするなど、

普通の神経ではとてもできる事ではない。

さらに言えば“多少”という言葉で、その場にいた2年が殆どおびえ始めた。

「みっ、美春!?　ちょっと先輩、女の子に何てことを!!」

「女なら殺人罪は適用されない、などと言う法が適用されたなど、聞いたこともないがな」

「だからって女の子に暴力をふるうなんて、最低だと思わないんですか!?」

「……成程。2年のバカさ加減に対する私の認識は、まだまだ甘かったようだな」

「ウチをこんなバカ達と一緒にしないでください！　大体なんでウチを見て認識を嫌な方に改めてるんですか!?」

白夜は呆れたように美波の追及に応えた。

「さて……いちいちくだらん擦り付けをやっている辺り、ずいぶんと余裕だな?」

「擦り付け?　はっ、事実をいってるまでだ」

「その言い分で考えても、それに便乗したお前たちも十分迷惑だ。それにこの前の事がある以上、余計にまずはお前たちを潰さねば問題は起こる一方だと判断した。元々私は弱者も弱者の思い上りも大嫌いなのでな」

「……それってつまり、俺達は光一と明久の前哨戦ってところかよ?」

「前哨戦?　……フンっ、湿気た残りカスごときが。そんな価値がある戦いが出来るのなら、是非とも期待させてもらおうか」

雄二に対しての残りカス発言に、翔子がムッとした顔で前に出た。

「……雄二は残りカスなんかじゃない」
「ならばそうじゃない事を示して見せろ。私は価値を証明できない者を評価する気はない」
「……なら、示して見せる」

興味なさそうに翔子からそっぽを向き、美春の頭を踏みつけ常夏の首根っこをつかむ。
そのまま引きずり、Ａクラスから出て行った。

「……どこまでも底しれねえ野郎だな」
「？　どういう事よ、坂本」
「ここは敵陣真っただ中だぞ？　普通単身じゃ近づく事すら出来ねえよ」

連れは居た物の、美春相手の武器に使ったため戦闘不能。
だというのに白夜は平然としていた。

……まるで、敵陣の中ですら生き残れると宣言しているかのように。

「じゃあなんで攻撃しなかったのよ？　これだけの数なら取り囲めば……」
「鉄人が言ってただろ？　あいつは平均点が教師の専門科目級で、見てから反応出来る能力の持ち主だ。なおかつ実際の強さもあの鉄人を苦戦に追い込むほど。ましてや俺達は、あいつの腕輪の能力を知らねえんだぞ？　もし光一の“爆発”みたいな広範囲攻撃だったら、全滅の可能性もある」
「うっ……」
「……それでも普通、敵陣の真っただ中に居れば多少は動揺するってのに。あの野郎以前あった時と全く変わりやしねえって」

改めて、自分達が誰と戦っているか。
その強大さを思い知った瞬間だった。

一方その頃。

「邪魔は入ったけど、やっぱり素材が良いと見栄えいいねー」

サバイバルゲーム同好会部室では、さやかが値踏みするように瑞希と愛子と優子を見ていた。
正確には“バニーガール”となっていた3人を見ていた。

「……あの、恥ずかしいです」
「そっ、そうだね。見てて面白くはあったけど、実際来てみると結構恥ずかしいかも……」
「……なんでアタシまで」
「気にしない気にしない。あたしも気にしないから」

……人前で脱げる人と比較されても。
と、3人はほぼ同時に思った。

「それに瑞希ちゃんは吉井君に、2人は久遠君にご主人様〜って抱きついてあげればいいじゃない。さっきのお礼にってね」
「「「えっ!?」」」
「あははっ、かわいいかわいい。それじゃ呼んでくるから、覚悟してて待っててね。そうだ、あの双子の弟ちゃんにはメイド服を着せてあげないと」

そう言って、顔を真っ赤にしてる3人をバニーガールのまま、外へ

出るさやか。

「入っていいよ？」

「……ワシらは一応、潜伏してる筈なのじゃが？」

「そんなことより可愛いウサちゃん達がお待ちかねだよ？」

「よし、行くぞ明久」

「オッケー光一。僕たちにだって潤いは必要だと思うよ」

「……」

第百五十七問

問題　次の問いに答えなさい

磁束が変動する環境下に存在する導体に電圧が生じる現象を答えなさい

姫路瑞希の答え
『電磁誘導』

教師のコメント
正解です。流石は姫路さんです。

久遠光一の答え
『超電磁砲』

教師のコメント
確かにこの現象を応用した兵器ではありますが、どう反応すべきかわかりません。

吉井明久の答え
『御坂美琴』

教師のコメント
先生も“とあるシリーズ”のファンです

「このまま昼まで戦線を維持、突破した者が居たら高城に潰させろ」
「はい」

教室に戻ってちょっとしたのち、階段の踊り場で戦闘開始。
白夜はすかさずD～Fに指示を飛ばし、防衛戦線を組ませ迎撃。

「誰か、このゴミを西村先生に届けろ」

制裁を受け気絶している常村と夏川を蹴飛ばし、鉄人に引き渡すように指示を飛ばした。
それからパソコンを立ち上げ、学園の見取り図を展開し、現状と用意していた策を照らし合わせ思案し始めた。

「代表、少し休まれては？　まだ午前とはいえ、動き通しです」

そこへ小暮が、白夜に飲み物を差し出す。

「バカにするな。この程度が支障になるほどやわな鍛えはしていない」
「……申し訳ありません」
「無力な人間に価値はない。そしてそれは私とて例外ではない」

白夜はノートを取り出し、そこに書かれていた策に線を引いては書き直し、はたまた完全に消しては新しく書き込みを繰り返し……。

「……少しは骨のある戦いをしたい物だがな」

ノートを閉じ、小暮がデスクの上に置いた飲み物を飲み干す。

「代表にとっては退屈ですか？」

「当然だ。今や残りカスでしかない坂本雄二に、その他大勢は湿気たハエ程度。私にとっては踏みつぶす事は造作もないが、それでは意味がない」

「小山さん達にやった事は聞きました。3年に逆らう事の意味を思い知らせるためとはいえ、あそこまで……」

バシッ！！

「今は戦争中だ。英気を養えとは言ったが、気を緩めろとは言っていない」

「……申し訳、ありません」

「敵に情けをかけるな、戦いが始まったのなら尚更な」

「……はい」」

「天国の門は常にせまく、厳しい門限付きよ。奴らはそれを破った……それだけの話だ」

ところ変わって……。

「……えーっと、その、なんだ。似合ってるというか……ごめん、何て言ったらいいかわからない」

優子は黄色の、愛子はライトグリーンのバニーガールとなっていて、光一は珍しく混乱していた。
2人とも恥ずかしさでもじもじとしていて、それがなおさらに光一を混乱させた。

「ごっ、ご主人様～」
「あっ、あえ……☆％＆@＊＋（ご主人様って）！？（ドクドクドク）」
「大方島津先輩に吹き込まれたんだろ」
「「「何言ったかわかったの（かの）！？」」」
「大体だけどな」

服の上でもわかる程豊かな胸が強調された赤のバニーガール事、姫路瑞希。
彼女のイメージはウサギなので、似合ってる事には似合ってるが……。

「……＋@＊＆、￥＝＆％＄＃＃！＄（ねえ光一、僕死んでもいいかも）（ドクドクドク）」
「いや、気持ちはわからんでもないが、死んでもらっても困るぞ？」
「＜、＋！＃＆。％@＊＋＝（あ、そうだね。ごめん光一）」
「はいはい。ごめんの前に鼻血を止めてから深呼吸な？」

明久には刺激が強すぎたらしく、鼻血を垂らしながら意味不明な会話を光一と行っていた。

「……ねえ優子。光一君に出来ない事って、肉体労働しか思いつかないって光景だよね？」
「……アタシも、世界中どこに行っても光一が居れば大丈夫。そん

な気がしてきたわね」

そんな摩訶不思議な会話を見つつ、愛子と優子は光一に言いようのない頼もしさを感じていた。

「いや～、素材が良いと素晴らしいね～。秀吉君もほら、この通りだよ」

明久が落ちついて少し後。

一仕事終えましたという様に一息ついたさやかが、誇らしげにメイド姿の秀吉を披露した。
ほぼ無理やりのため、少々疲弊した様子があったが。

「へえっ、なかなかじゃないか」
「だよね。やっぱり秀吉は、僕が見込んだ美少女だよ」
「じゃからワシは男じゃ」
「その着こなしぶりで、どこをどう見たら男に見えるかを是非聞きたい」

光一のツッコミで、秀吉が少々ショックを受けた。

「所で光一よ、こんなのんびりほのぼのしておって良いのか？」
「別に構わねえよ。あのバカどもの自業自得で起こった上に、勝手に撤回のチャンス潰しやがってんだから。体育祭の準備と勝手な腰抜け評価がつくくらいで済むなら安いもんだ。どうせ参加したら参加したでろくでもない事になるのは目に見えてるし、勝った所で何か変わる訳でもあるまいし」
「だよね。今頃雄二と皆が好き勝手に、全部僕たちのせいにしてる姿が目に浮かぶよ」

「……一体どういう学年なの？」

時系列としては、現在白夜がちょうど２－Ａに訪れた頃合いである。なので、その予想が当たっていた事は言うまでもない。

ちなみにそれを聞いたさやかは、多少呆れたように疑問を投げかけた。

「光一君は、この後どうなるって読んでるの？」

「ん？　それなら、しばらくは階段での睨みあいになるんじゃないか？　主にＤ～Ｆで」

「Ｄ～Ｆで？」

「３年は何の被害もないけど、２年はＣが殲滅されてんだ。だったらそれ位で充分だし、それで均衡を保ち続ければ時間経つのもすぐだ」

「確かに効果的ね。３年側は大体のところでＣクラス戦力を投入すれば、均衡を崩すのもたやすいわ。それに白夜さんがいつ来るかもわからないと思わせるだけでも、効果的ね」

「その通りだ優子。対して２年側は、Ｂクラス戦力を投入したところで同じだ。向こうもＢクラス戦力を投入されればアウトで、高得点者を出したところで……」

「光一のお兄さんか、それ相応の高得点者が出てくる、だね？」

「まあ雄二がいつもどおりに速攻を仕掛けて、ＥとＦ辺りを潰してれば少しは変わったかもしれないが……」

最早後の祭りである。

「もうっ、坂本君も光一や吉井君にばかり押し付けてないで、少しは責任ってものを自覚してほしいものね。代表のためにも」

「そう言ってやるな優子。霧島に対しては同意見だが、今回に関し

ては同じ神童であり悪鬼羅刹の異名を持つ雄二には、ある意味誰より兄貴と力の差を理解出来たかもしれない」

かつて雄二は、白夜と並び称された神童だった。
そして中学時代は悪鬼羅刹と呼ばれるほどにケンカが強く、だからこそ白夜の力を誰よりも理解が出来るのかもしれない。

「それで、均衡が崩れたらそうだな……兄貴が出てきたら霧島と久保のタッグをぶつけて、その間にほかの代表を打ち取る、かな？有象無象を倒す余裕なんてないだろうから、奇襲でうまく代表格を倒し続ければあるいは勝機があるかもな」
「あのさ光一。霧島さんに久保君に失礼だけど、それで止まるのかな？」
「兄貴の武器は遠隔操作型だぞ？　兄貴の思考速度と状況判断、空間認識を駆使すれば複数の武器の操作に問題はないし、多勢に意味がないどころか逆効果だからやるなら少数精鋭、半端な戦力の投入はむしろ無駄遣いだ。武器を潜り抜けたとしても……」
「……元々が単科目でも５００点代の上に、あの反則な超反応だからね。おかげで僕も大変だったよ」

明久は自分が強いられた苦戦の事を思い出した。
離れれば遠隔操作の水晶玉で、近づいても超反応で攻撃がいなされ高得点のバカ力。

今思い返しても、腕を斬り飛ばした事自体が奇跡に思えていた。

「あの、明久君はどうやって、久遠君のお兄さんの召喚獣の腕を斬り飛ばしたんですか？」
「見てから反応が出来るんなら、見せなければ良いって思って。だからデュラハンの首をお兄さんの方になげつけて、それに加えてダ

ブルで視界をふさいでる間に」
「同時召喚でよくそこまでやれたな？　普通2つの身体をそこまで操作するなんて、俺だって難しいぞ？」
「殆ど必死だったからね。まあそのおかげで、ダブルの操作のコツみたいな物をつかめたような気がするけど」
人間、追いつめられると予想外の力を発揮する物である。

「それはさておき、そろそろぶつかり合いが始まるころだな」
「どうにかなるのかな？」
「やるしかないのが現状だ。今頃情報収集でムッツリーニは大忙しだろうよ」
「そっか。代表格の配置がわからない事には、奇襲なんてできないからね」

ある程度のやり取りをやって……。
2人は少しそわそわとし始めた。

「……というか、バニーガールとメイドに囲まれてる状態でこんな話しても、全然しまらないな」
「……そうだね」
「でもうれしいでしょ？」
「「当然！」」
「……この異様なまでのシンクロ感は何じゃろうな？

一方その頃

「点数が危なくなったら後退しろ！　ここを突破されるな！」

新校舎の階段ではDクラス代表平賀の指揮のもとで、2年は階段で防衛線を展開。
旧校舎は暴走した（Fクラスメンバーのみの）FFF団が戦線を維持していた。
Dクラスもいる以上は真正面からだと、暴走させないと勝てないからである。

ちなみに清水は……

「離しなさいこのブタ野郎!!　美春が一体何をしたというのですか!?」

リクライニングシートに縛り付けられていた（翔子が光一から買った特注の鎖で）

「今ヘタな行動が出来ないんだ。今清水に好き勝手されると困る」
「ちょっと坂本、だからって……」
「……これ以上雄二に近づいちゃダメ」
「だから違うって言ってるでしょ!?」

美春が縛られている事を雄二に抗議する美波が、翔子に遮られているという光景の横で。

「階段は突破できない。窓もおそらくは封じられている……さて、どうしたものか？」

雄二はムッツリーニの集めた情報をもとに、考える。
ひたすらに、この戦況を覆す方法を。

しかしそれを妨げるのは、大神白夜の不敵にして不遜ともいえる行

動。
自分勝手に見えるが、その行動にはすべて意味がある。
自分を最低限の力のみで印象付け、自分の底を決して見せない。
更には自分勝手に行動してるよう印象付けて、いつ表れるのかがわからない事をアピール。

すべては生まれ持った才能と研磨された力、それに対しての自信により裏打ちされた物
だからこそ、神出鬼没に表れるか現れないかに、大きな影響を及ぼす事が出来る。

「……大丈夫」
「翔子？」
「……私は信じてる。雄二ならきっと、久遠のお兄さんを倒せる」
「……っ！？　こっ、こっ恥ずかしい事を平然と言うな！」

顔を真っ赤にしてあせる雄二だが、少しは落ち着いた様子を見せた。
ポリポリと頬をかきながら、翔子の頭をなで……

「……まずは、大神白夜の動向をつかむことから、だな。ムッツリーニ！」

第百五十八問

問題　威風堂々の意味を答えなさい

姫路瑞希の答え
『態度や雰囲気に威厳が満ち溢れ、立派な様子である事』

教師のコメント
正解です、流石は姫路さんです。

一部生徒の答え
『大神白夜』　ｏｒ　『鉄人（西村先生）』

教師のコメント
先生も彼らほど威風堂々を言い表せる人物を知りません。

Ｆクラス生徒の答え
『ＦＦＦ団』

教師のコメント
君たちの場合は“恥知らず”と言うのです。

ＦＦＦ団。
風紀委員を母体として、クラス内の不純異性交遊を制限すべく生まれた組織。

クラス内で異性との関係を持つ者あらば、理不尽な怒りが即座に頂点。
影のごとく現れ、沼の様にとらえ、津波のごとく処罰し、その勢い噴火のごとし。

現在では光一絡みの騒動を経て門戸を広く開門し、学年はおろか学園そのものにまで彼らの異端審問会は及んだ。
“自称”正義の彼らは、自信の正義を信じて疑うことなく進み続ける。

……周りにその活動のせいで煙たがられていても、決して気付かないままに。

「進め！　奴らは異端者にして我らが正義を侮辱した罪人ぞ！　一人残らず駆逐せよ！！」
「「「おーーっ！！」」」

２年対３年、学年単位の試召戦争。
旧校舎の階段にて、彼らＦＦＦ団は防衛線を展開していた。

「くそおっ、何だよこいつらは！？」
「異様な装備と言い空気と言い、やりづらい！！」

当然3年の防衛戦線組には、彼らの被害者がいた。
……が、彼らの異様な雰囲気に押されていて、大半が特攻で葬られる。

異端審問会は決して退かない。
理不尽な怒りの赴くままに、その猛威は鬼の補習すらものともせず進み続ける。
その眼は、腕は、脚は、そのすべてが、異端者を喰らうためだけに。

「「「ゆ～る～さ～ん～！！」」」
「代表、下がって！」
「うっ、くそおっ！！」

一方。

「……自信のふがいなさを棚に上げ騒動を起こし、補習を受け慣れているからこそ編成できる部隊、というところか」
「Fクラス代表が陥落、Eクラスも時間の問題です」
「構わん、想定範囲内だ」

FFF団の特攻で破られた防衛戦線と、３－Fクラス。
現在はEクラスが攻撃されており、特攻で既に陥落も時間の問題

……だが、白夜にしてみればまだ想定範囲内のダメージでしかない。
彼は何食わぬ顔で報告を受け、ノートに目を通し始める。

「小暮」
「はい」

実行する策を決めた彼は、そのキーとなる人物を呼びつけ……

「脱げ」

「……え？」

３－Ｅクラス陥落。

ＦＦＦ団残り３２名。

「よーし、来たぞ来たぞ！　ここで新校舎への道を開けば、我らは明日からヒーローだ！」

「「「うおおおおおおおっ！！」」」

「諸君、我らのバラ色の未来はすぐそこだ！！」

ここで忘れてはならないのが、元はと言えば彼らが３年に攻撃を加えたのがこの戦争の火種である。

……正確には、白夜にそうなる様利用されたにすぎないが、その事実は全く知られてはいない。

しかし彼らはバカなので、自分の都合のいいようにしか考える事が出来ないのである。

「しかし、どうして新校舎と旧校舎の境目にカーテンが？」

「構うな。この先にバラ色の未来が待っている。それで十分だろ」

「それもそう……ん？」

彼らの言うとおり、新校舎と旧校舎の境目にはカーテンが敷かれていた。

そのカーテンをめくり、１人の着物を着た女性が姿を現す

「「「眼福じゃぁぁあーーっ！」」」

ただしその着物は、扇情感を醸し出すかのように少し着崩されていた。

その艶やかさに、ＦＦＦ団は全員が雄叫びの大合唱。

それに動じることもなく、にっこりと笑みを浮かべ……。

「ようこそいらっしゃいました。私、３年Ａ組所属の小暮葵と申します」

「「「こっ、こちらこそ！！」」」

艶っぽい声に濡れた瞳、伏し目がちに頭を下げて挨拶しながら、気崩した着物はそれ以上はだけさせない

当然ＦＦＦ団は、その光景に夢中に……。

「俺、須川亮と言います。是非お友達にがふっ！」

「横溝浩二です。どうかこの戦争が終わったらお食事にぐべっ！」

「近藤吉宗と言います。ランチをご一緒ごはあっ！！」

「君じぐべっ！」

……訂正、暴走した。

我こそはと前に出て、自己紹介し好印象を与えようと押しのけ始め、一気に騒動に発展。

言っておくが今はＦＦＦ団存続にかかわる、２年対３年の大規模試召戦争である。

「どけクズども！　ここからは俺と先輩の１００年物語の幕開けだ

！！」

「うっせえ！　俺はあの先輩に運命を感じたんだ！！」

「何が運命だ！　俺と先輩の出会いが示すように、世界には必然しかありはしねえ！！」

……今はＦＦＦ団存続にかかわる、２年対３年の大規模試召戦争である。

「これは俺の不遇を見かねた神の思し召しだ！！」

「何久遠のイカレ兄貴みたいなこと言ってやがる！？　勝手な事抜かしてんじゃねえ！！」

「そういうんなら下がりやがれ！！」

……のだが、彼らは目の前のエサ（失礼）に気を取られていて、完全に忘れていた。

「……聞きしに勝る醜さですね。代表の弟さんが手を焼くのがわかる気がします」

「「代表の弟！？　って事は久遠か！？　あの野郎、モヤシの分際でモテやがるとはいい度胸だ！！」」

「……何もしていない筈ですのに、この罪悪感は何なのでしょうか？」

一方その頃。

「どうしたの光一？」

「……なんか今また勝手に覚えもない事で恨み買ったような気がする」

「光一君だとあり得ない事じゃないのが怖いよね」

「光一は身体面と信頼面では、神様に嫌われておるどころか踏みつぶされておるとしか思えんからの」
「本当に大神君と久遠君って兄弟なのかな？」
「神様なんて存在が本当にあるのなら、坂本君か代表みたいな人かもしれないですね」
さやかを除く全員が、優子の意見に納得したかのように頷いた。

場所は戻って、新校舎と旧校舎の境目にて。
「……気を取り直して。こう見えてもわたくし、茶道部に所属しておりますので」
「おおっ、成程。可憐な先輩にはぴったりだ」
「まったくだな。オトナな雰囲気にアクセントを添えるかのような、この雅さ……これだ、これこそが大和撫子と言う存在か」
「俺は今まさに感動している。清楚な女性に醸し出されるオトナの魅力……最高だ！」
「というか俺はあの着物を脱がしたい！」
完全に小暮のペースにはまり、デレデレと情けないを通り越し気持ち悪い形相で小暮を見るＦＦＦ団＋変態。
「ふふっ、ありがとうございます」
「「「……俺もう死んでもいいかも」」」
「そして、実はわたくし……」
ゆっくりとはだけられた着ものに手をかけ……
「新体操部にも所属しておりますの」

完全に脱ぎ捨て、レオタード姿となった。

「「「うぉおおおぉぉっ！　新体操ーーっっ！！」」」

バカがケダモノに進化し、突進……

バサッ！！

しようとして、小暮を隔てるかのように紙の幕が下りる。
その幕には（顔のひしゃげた）夏川がプリントされていた。

「「「ぎゃあああああああああああああああああああっ！！」」」

……全身がフリルだらけの、ゴシックロリータファッションで。

「てっ、撤退！　全員撤退！！」
「くそおっ、レオタードはすぐ前だってのに！！」
「バカ、見るな！　目が潰れては、二度と拝む事が出来なくなるぞ！？」
「……無念！」

旧校舎からの攻撃は無理だ。
そう判断し、撤退したＦＦＦ団の前に……

バサッ！

「「「ぎゃあああああああああああああああああああっ！！」」」

またもや紙の幕が下り、撤退を妨げた。
露出過多のミニスカフリルメイド姿の（顔がひしゃげた）常村がプリントされた幕が。

「眼が……眼があっ！！」
「だずげで～！」
「地獄だ……ここは最下層と言われる、無間地獄だ！！」

その叫び声を聞いたE、Fの残党たちは即座に教室のカギを閉めた。
ちなみに不使用の教室は既に鍵がかけられており……

「「「お釈迦様の蜘蛛の糸はどこだーーーー！！？」」」

彼らは抜け出ることはできなくなった。

3－A教室にて

「……あのままにして良いのか？」
「ふんっ、火種に処罰を下して何が悪い？」

ここで補足だが、常村と夏川の写真は先ほどの罰として、演劇部と新聞部のカメラマンを主体として撮影したシロモノ。
それを急ごしらえでプリントし、防衛戦線展開の間に用意した罠である。

「肉体的な制裁しか出来ない……そう思っていたのか？」

新しい情報に合わせ、今ある策を書き直しては消し、新しい策を考

慮する姿に躊躇はない。
その情報を持ってきた生徒は、内心では冷や汗まみれだった。

彼にしてみれば、これは虫を踏みつぶした……その程度ですらない。
理解できていただけに、それが自分に向いたらと想像すると怖くてたまらなくなる。

「何を呆けている？　さっさと旧校舎の境目にバリケードを張るようCクラスに指示を出してこい、いつまでもあんな物で進行が防げるわけがあるか」
「……あっ、ああ」

逃げるように斥候を務める男子生徒が去っていくが、彼は気にも留めない。
ノートを閉じ、くるみを取り出し……

バキッ！！

その殻を握力で壊すと、一つまみ。

「……さてと」

リクライニングシートから立ち上がり、ゴキゴキと身体を鳴らす白夜。
ある地点に視線を向けると、キッと眼を細め……。

「……伝えたいならさっさと伝える事だ」

そう告げ、Ａクラス教室から出て行った。
Ａクラス全員が首をかしげており、互いに顔を見合わせるのみ。

……しかしそれは、教室内に居た人間に向けられた言葉ではない。

「……気付かれていた！？」

第百五十九問（前書き）

今回のは元々は百五十八問として書いたものでしたが。
急きょ予定を変更した代物です。

（追記）　美波のセリフの部分ですが、修正するつもりだったのをすっかり忘れてまして、今修正しました（２０１１／８／１１　２３：３６）

第百五十九問

問題　次の問いに答えなさい

室町幕府三代目将軍を答えなさい

姫路瑞希の答え

『足利義満』

教師のコメント

正解です。有名な功績として、南北朝合一を果たし、金閣寺を剣率して北山文化を開花させるなど、室町時代の最盛期を築いた人物として有名です。

さらに言えば、昔あった“一休さん”と言うアニメの登場人物としても有名です。

吉井明久の答え

『足利尊氏』

教師のコメント

惜しいですね、足利尊氏は初代将軍です。

久遠光一の答え

『源川実光』

教師のコメント

……これは鎌倉幕府と江戸幕府の将軍の名前を混ぜた斬新な名前でしょうか？
歴史音痴もここまで来ると、吉井君どころか土屋君よりもひどい思えます。

新校舎階段における、防衛戦線にて。

「点数が危なくなった者は後退、後ろはそれをカバーするんだ！」

Dクラス代表平賀源二の指揮のもとで、互いに被害は出しつつも均衡が保たれていた。
フィールドは数学で、互いにD～Fクラス級の戦力だから、余ほどでなければ崩れる事はない。

「……清水さんが居ないだけで、こうも違うものなんだな」

最も平賀自体、何かとやっかんでくる清水という目の上のたんこぶが居ない事もあって、何の苦労もなく指揮を飛ばしていた事は大きい。
基本的に彼は突出した能力はなくとも、人を纏める立場としては妥当な評価を受けている。

……他に問題がありすぎると言うだけだが。

「点数補充終わったわ！」

「じゃあ頼む、島田さん！　ここで突破口を……」

「サモン！」

突如聞こえた召喚の声に、平賀は背筋が凍りついたような何かが走った。

即座にＡクラスに駆け込み、襲来を告げようとした瞬間……

「えっ……？」

展開していたフィールド内の召喚獣が、敵味方問わず一斉に宙に舞った。

幾多もの剣とともに。

「ちょろちょろと目障りだ。さっさとどけ」

「だからって……っ！　ごっ、ごめんなさい」

人垣を割って現れたのは、敵勢力の総大将大神白夜。

先ほど宙を舞った剣が、白夜の召喚獣の手の動きに沿ってその背後に戻り、回転するように浮かんでいる。

白夜自身があたりを見回し、平賀を見つけると……

「２年Ｄクラス代表、平賀源二。大神白夜の名において、その首級もらいうける。当然これは決定事項だ。反論、逃亡、降伏は一切認めない」

ゆっくりと自身の名が告げられ、平賀はびくりと身体を震わせた。
目の前の防衛部隊に目もくれず、ゆっくりと平賀に狙いを定め前進
白夜の召喚獣は、台座に座っていると移動はできないため飛び降り、
台座をつかみ前進。

「ちょっと先輩、この軍勢は無視ですか！？」
「いくら先輩だからって！！」
「うるさいぞ虫けらども」

視界に入れてない態度どころか虫けら呼ばわりに激高した女子数人
が、一斉に飛びかかる。
先ほどの遠隔操作の武器がメインであるなら、接近戦はできない筈
……というのが一般的な考え方。
だが、彼女たちはそれを考慮もせず突進。

『３－Ａ　大神白夜　数学５６３点』
ＶＳ
『２－Ｄ　朝倉弘子　数学１２１点
２－Ｄ　神崎遼子　数学１１５点
２－Ｄ　渡辺涼香　数学１０９点
２－Ｅ　薬師寺美都子　数学８９点
２－Ｅ　毒島加奈　数学７６点』

「やれやれ」

飛びかかった1体は白夜の召喚獣が腕で薙ぎ払い、胴体が真っ二つ
にちぎれ吹き飛んだ。
その次の頭をつかみ地面にたたきつけ、その後ろの2体の召喚獣の

頭を正面衝突させ潰し……

「構ってほしいなら遊んではやるが」

その後ろに居た召喚獣の腕と首をつかみ、握りつぶして引っこ抜いた。

それを投げ捨てると同時に、5体は戦死判定がなされ消滅。

「粘土遊びという年でもないのでな。ほどほどに頼む」

瞬く間に5体もの召喚獣が“粘土遊び”感覚でつぶされ、動揺が走る。

「だったら遠距離攻撃だ！」

平賀の指示が飛び、該当する生徒が召喚。

銃、弓矢、ボウガンなど、さまざまな武器を持った召喚獣が白夜に狙いを定める。

白夜はそれでも表情を変えることなく、前進。

「うてー！」

号令がかかり、弾丸や矢が白夜の召喚獣めがけて襲いかかる。

当人はゆっくりと台座から手を離し、両手に剣を持ち……

「甘い」

それらを回避し、はじき落とし、はじき返しを続けながら突進。

至近距離に到達したと同時に、そのすべての召喚獣の首を斬り落と

した。

「うっ、ううっ……」

「３－Ａ代表大神白夜、２－Ｄ代表平賀源二に数学勝負を申し込む」

これで平賀は、召喚獣を出さないわけにはいかなくなった。

その場面に気を向けているのをチャンスとみて、一人の男子生徒が白夜の背後から召喚獣を嗾けようとこっそり召喚。

そーっとゆっくりと、召喚獣さえもゆっくりとした動作で、白夜の召喚獣を攻撃範囲にとらえ、即座に剣を振り上げた。

しかしそこは“白夜自身の視界の範疇”であり……

ズバンっ！！

「えっ？」

超反応で返り討ちにされた。

「不意打ちをとやかく言う気はないが、もう少し機を伺うべきだったな」

「ひっ！」

殴られる……。

咄嗟に身がまえ、震え始める男子生徒。

「不意打ちをとやかく言う気はない……そう言ったはずだが？」

「え……？」

「卑怯汚いは敗者の戯言だ。その程度で負ける方が悪いと、そう言

っているんだ」

呆れるようにそう言った白夜は、その男子生徒から興味が失せそっぽを向いた。

「さて、そろそろ時間も昼休みに差し掛かるな」

「うっ……」

一応昼休みに差し掛かると、その間は一時休戦となる。

そうなる前に、白夜は宣言の事がある以上はさっさとすませたかった。

「サモン！」

そこへ割り込む召喚獣。

『３－Ａ　大神白夜　数学５４４点』

ＶＳ

『２－Ｆ　島田美波　数学２０９点』

「良い点数ではあるが、私には及ばんな」

「そんな反則じみた点数じゃ、あたりまえでしょう！？」

「反則？　勝負には元々反則も卑怯も関係ない。ただ強い者が勝つ、それだけだ」

剣を投げ捨て、ブンっと腕をふるう白夜の召喚獣。

くいくいと、挑発するように手首を往復。

「この点数でも、武器を持たない気ですか？」

「これで負ければ私が間抜けだというだけの話だろう？」

美波の召喚獣がレイピアを突き出すと、白夜の召喚獣がそれに手を添え軌道を曲げた。
その懐に入り、顔面めがけてパンチが来るのを美波の召喚獣が、咄嗟に伏せて回避。
白夜の召喚獣はそれに覆いかぶさり、レイピアを持っていない腕をつかむと引っこ抜き、距離をとった。

白夜の召喚獣が美波の召喚獣の腕を手遊びのようにくるくるとまわし、余裕であることをアピール。

「いっ、いくら何でも、強すぎるじゃない！」
「強すぎる、か……良い響きだ」
「こんな人の腕を、アキは1人で斬り飛ばしたっていうの？　いったいどうやったのよ!?」
「その通りだ。少なくとも、この場にいる誰よりも楽しませてもらった。そしてそれは自分で考えることだな」

それもそのはず、この戦線に来てから白夜の召喚獣は攻撃により点数は減っていても、いまだに傷一つ負っていない。

「わかったらどけ。お前ごときに興味はない」
「弟に負けたからって、ここまでやるんですか？」
「……はぁっ、どいつもこいつも。私はこの戦争の理由に、光一の名を出した覚えはないのだがな？」

美波はもう放っておいて、今度こそ平賀をとろうと……。

「「「サモン！」」」

したところで、またしても乱入者。
文月学園女子制服の上に甲冑をまとい、刀を持った翔子の召喚獣。
そして袴に剣道着、首に数珠をつけ、手には2本の大鎌を持った久保の召喚獣。

その後ろには一足先に装備変更を行い、囚人服をまとい鉄球付きの錠を右手につけた雄二の召喚獣が。
雄二の召喚獣が鉄球を白夜の召喚獣めがけて投げつけたが、それをパンチで弾き飛ばした。

「私とした事が、時間を与えすぎたか」

『３－Ａ　大神白夜　数学５３１点』
ＶＳ
『２－Ａ　霧島翔子　数学４１１点
２－Ａ　久保利光　数学２５４点
２－Ｆ　坂本雄二　数学２３４点』

「っ！　……いや、まだだ。相手は代表、まだ早い」
「？」

翔子の点数を見ての白夜の様子を、雄二は見逃さなかった。
……が、戦闘に集中する事を優先し、それから意識をそらす。

「第二学年首席の霧島翔子に次席の久保利光か。豪華な布陣だな？」
「やっぱ調査済みかよ……アンタ相手にゃそれでも心配だが、あんたに多勢は危険すぎる」
「良い判断だ……が、まだ甘い」

白夜の召喚獣が台座に飛び乗り、まるでオーケストラを指揮するか

の様に手を振り上げる。
先ほどまで地面に転がっていた数本の剣が宙に舞い、白夜の背に後光のように回転運動を始めた。

「坂本雄二、お前は“学力だけがすべてじゃない”と証明するためにここに来た……そうだろう？」
「ああっ。勉強だけがすべてを決めるわけじゃない……それを証明したい」
「だが矛盾しているんだよ、お前はな。それなら私と吉井明久の戦い、あれはうまくいけばそれを証明するには、これ以上なく相応しい代物だったんじゃないのか？」
「明久があんたに勝てるわけないだろ！　大体あのタイミングであんたと戦う事自体が不自然……」
「だが結果として、お前がすべてを台無しにした……一学期の戦争も、この戦いにおいてもな」

白夜の召喚獣が、両の膝を叩いた。
剣が回転運動をやめ、一斉に切っ先を向け始める。

翔子と久保、雄二の召喚獣が構えると同時に、白夜の召喚獣が手を突き出し剣が一斉突撃。

「っ！？」

しかしその剣は、雄二達の召喚獣を無視して突撃し……

ドドドッ！！

「平賀！？」
「宣言した事は、何においても優先させるべきだ。こういう風にな」

幾多もの剣に貫かれ、まるで剣山を思わせるような有様の平賀の召喚獣。
それと同時にチャイムが鳴り、召喚フィールドが解除された。

「前半は終わりだ。お前の無能さのおかげで、ほぼ完全に近い形でこちらの予想通りに事が進んだ」
「くっ……」
「坂本雄二、お前はあまりにも私情を前に出しすぎる。優先すべき物を間違えているから、こういう結果になったのだ。それがわからん限り、お前には何一つなせる事はない……後半は少し位、私の謀を歪めてくれることを期待させてもらう」

第百六十問

問題　次の問いに答えなさい。

フランス革命後、軍事独裁政権を樹立しフランス第一帝政の皇帝となった、軍事カリスマともいえる人物を答えなさい。

姫路瑞希の答え
『ナポレオン・ボナパルト』

教師のコメント
正解です。ナポレオンは軍人として天才的な手腕の持ち主と言われ、その異名を与えられた人物も多数いるほどの人物です。

吉井明久の答え
『ナポレオン』

教師のコメント
君の答案はこの前までは面白い意味ですが、最近はうれしい意味で見るのが楽しみです。

久遠光一の答え
『ナポリタン』

教師のコメント
高橋先生の昼食がナポリタンでした。

久遠光一のコメント
なんで高橋女史の昼飯がコメントに出る？

『……いち』

……やめろ

『……おま……は……だな』

……やめてくれ。

『光一、お前は出来そこないでも弟だ。だから……』

……俺に

『だからこそ、こうやって傷めつけると苦しいんだ』

……思い、出させないで。

『苦しいとか悲しいとかさ、もう邪魔なんだ』

……なん、で

「だからさ、こうやリ続けて苦しくなくなっていけば……』

「……はっ！」

びくっと身体を震わせて、息を荒げながら周囲を見回す光一。
悪い夢でも見たのかと、心配するような視線を向ける明久、愛子、瑞希、さやか。
そして……

「光一、大丈夫？　酷くうなされてたけど、やっぱり……」
「また、あの時を夢に見たのかの？」
「……俺はまだ、兄貴に怯えてんのかよ？」

光一がうなされた理由を知っている秀吉と優子は、何と言っていいかがわからない表情。

「今は、昼休みか……すまん、つい寝ちまった」
「気にしなくていいわよ、光一ずっと気を張り詰めぱなしだったんだから」
「そうそう。ボク達も手伝えればよかったんだけど……」

こういう戦略の手腕においては、完全に光一任せにするしかなかった。

「情報整理の前にシャワー浴びてくる。秀吉、すまんが一緒にシャ

ワー室来てくれねえか？」
「うっ、うむ」
「？　珍しいね、光一が進んで秀吉と一緒にシャワー室使うなんて」
「……そういう気分なんだよ」

ところ変わって、秀吉シャワー室。
光一は一応許可が下りているため、秀吉同伴なら使用できる。

「……いつも悪いな」
「良いのじゃ」

光一はカッターにシャツを乱暴に脱ぎ、上半身をあらわにする。
そのインドア派な印象を醸し出す細身には、いくつもの古傷が付いていた。

かつていじめられていた時の物から、凶王としてケンカに明け暮れた時の物まで。
その中には……

「こればかりは、あまり見られたくないのもわかるからの」

秀吉はそっと、白夜につけられた光一の背にある大きな傷跡に触れた。
明久たちは傷の存在を知っているだけで、事情は事故としか聞いていない。

「……さっさと入ろう。情報整理も急がないといけないしな」
「んむ？　そうじゃの」

２－Ａ教室にて。

「くそっ、よりにも寄って平賀が倒されるだなんて」

普段こそ主に女子の所為でパッとしない印象もあり、突出した能力はない代表である。

しかし落ちついた堅実な指揮を執れる指揮官で、２年でも稀有な存在の平賀が落とされた。

「しかも損害は向こうがＤで多少、Ｅ、Ｆが大半に対して、こっちはＣクラスまるごとに、Ｄ、Ｅ、Ｆで多少。戦死した代表は、こっちはＣとＤ、向こうはＥとＦ……なんとか救出したＦＦＦ団は復活に少々時間がかかる」

「……やはり不利？」

「……畜生！」

白夜が自分を見る目は、同格を見る目ではないどころか雑草とみているかどうかが良い所。

かつては並び称されていたという事を、まるであざ笑うかのような。

「……ねえ坂本、降伏したほうがよくない？　あんな人とこれ以上やりあっても」

「無理だ。元々ＦＦＦ団が向こうを攻撃したのが発端で、しかも向こうの抗議にこちらは攻撃を仕掛けてる。今更ごめんなさいで済む事じゃない」

「じゃあどうするのよ？　あんな人、どうやって倒せって言うのよ！？」

「わかっている。だからこうして打開策を考えているんだ！」

雄二も美波も、冷静ではいられなかった。

先ほどの戦線は決して戦争と呼ぶべき代物ではなく、こう表現するべき物だった。

“強大な力による、圧倒的な蹂躙”と。

「そうだ、アキと久遠を探して……」

「それも無理だ。あいつらにとって元々が敵対者が起こした騒動で、この戦争に勝ってもデメリットしかない。あんな物見せられた後じゃ、無理やり参加させた所で結果は見えている」

あらゆる意味で、八方ふさがりだった。

「じゃあ腕輪もちをぶつければいいじゃない！　そうよ、いつもの戦争じゃなくてAクラスが居るんだから、やり方次第じゃ」

「待て島田、それは余計に危険だ！　あの野郎、翔子の点数を見て妙な反応をしていた。それがこちらにとって良い意味なのか悪い意味なのか、判別できない現状じゃ危険すぎる」

「妙な反応？」

「ああっ。ぶつぶつとしか聞こえなかったが、まだ早すぎるとか何とか……待てよ？　もしかして、俺達を制裁する以外にも何か目的があるんじゃ？」

力任せの策は通用するとは思っていないが、それでも腕輪の能力と使い方次第では何とかなるかもしれない。

そう考えていた雄二には、それすらも困難となっていた。

ところ変わって、３－Ａ教室。

「第２学年、愚かにして恐るるに足らず」

各クラス首脳陣を集めての会議の第一声は、そんな不敵なセリフだった。

「前半戦は終わり、昼休みを挟み後半戦が始まる訳だが……今のところ、私の想定に狂いはない。こちらとあちらの被害数、そして現状、すべてにおいてだ。つまり前半戦は、我々の大勝利と言う事」

おおーっ、と感心した声が上がる。

「ここで諸君に問おう！　前線においてCクラス全体へのしつけに、Dクラス代表及び数名の撃破。そして後方においてはあの暴走部隊の無力化と、諸君に施した指揮……以上が前半戦において、私がはじき出した功績だ。私が総大将である事に不満はあるか！？」

こちらはうって変わって、しんと静まった。

クラス殲滅に不満など唱えられるわけもなく、指揮においても的確でありＦＦＦ団すらもあっさりと無力化して見せた。

「不満がないのならば、私は諸君に約束しよう。くだらん理想論でもなく、口先だけの偽善でもなく、この功績とこれまでの試召戦争において、諸君らを蹂躙し続ける事で証明し続けてきたこの……」

腕を突き出し、ギリっと拳を握りしめ……。

「生まれ持った天賦の才と圧倒的な力をもって、我らの勝利を！！」

一切の迷いなき宣言に全員の背に戦慄が走り、いったん静まる。

そして次の瞬間……

「「「うおおおおおおおおおっ！！」」」

教室に信頼の証を示すかのように、歓声が響き渡った。
それを受け止めるかのように頷くと、白夜は腕を掲げ……

「私についてこい！　弱者の分際で、こちらの平和的解決の歩み寄りを拒絶したバカどもを、存分に後悔させろ！！」
「「「おおおおおおおおおおっ！！！」」」

その歓声を、当然の様に浴びる姿。
一切の迷いも躊躇も、恐れすらないその立ち振る舞い。

白夜はただ、不敵に笑うのみ。

「さて、開戦１０分前にまた集合。後半戦においてのバカどもへの躾を説明する！　各自解散！」

よそのクラスの首脳陣は各自クラスに戻り、白夜は自身の席に戻ると……。
先ほどと同じくパソコンの学園の見取り図と、前半戦における全情報を見比べながら、策略を記したノートを開き午後から使う予定だった策の見直しを始める。

「……あの、代表」
「すぐに終わる」
「……でしたらせめて、ちゃんと食べてください」

白夜は試召戦争においては、常に手抜きどころか休む事も一切せずに動く。
今回も例外ではなく、Ｃクラスの殲滅から3年の全体への指揮、そ

して常夏の制裁にDクラス代表の討伐と、座りはしても休む事は一切していない。

現時点においても、白夜は普段こそ普通に食事はしても、今手元にあるのは簡単につまめるもので、量も女性である小暮から見ても少ない。

いつもならまだしも、今回は学年単位ともあって負担も大きい。

「後だ。空腹時の方が神経を研ぎ澄ませる」

「そんな事を言って、以前まったく食べなかったじゃないですか」

「構わん。これは総大将としてなすべき事だ、それを成さずしてなぜ犠牲となれと言える？」

……のだが、彼自身特に何も感じていないと言い捨てるかのように、ノートに線を引いては書き直しの作業に没頭。

いつもの事なので、小暮ももう何も言わない。

「でしたらこちらを。後で取りに来ますので」

「？　……お前はいつもそうだな。お前が私の身の周りをこだわる理由、理解できん」

「これは私がやりたいからやっている事です。気に入らないなら捨ててください」

そう言って弁当箱を置いて、さっさと自分の席に戻って行った。

それを無視するように作業を進め、終わったころには……。

「……光一が“淫魔王”などと嫌悪されてもなお、手放そうとしない物と同じか？　やはりわからんな」

すべて平らげていた。

「……まあそんな事はどうでもいい。さて、坂本雄二に何かを気取られた雰囲気はあるが、まあ事実には絶対にたどり着くまい。あとは如何に気取られず事を進めるかが問題か」

第百六十一問

問題　次の問いに答えなさい

人間の第六感の身近な例として使われている表現を答えなさい

姫路瑞希の答え
『虫の知らせ』

教師のコメント
正解です。命の危険が迫った際、“虫の知らせが起きた”と認識がされたりしますね。

吉井明久の答え
『久遠光一』

木下秀吉の答え
『久遠光一』

教師のコメント
確かに久遠君は身体能力で劣る分、第六感や思考能力がすごいですからね。

久遠光一の答え
『俺』

教師のコメント
堂々と書く辺りに自信が表れていますね。

場所はサバイバル同好会部室

「じゃあ次は何着せようかな？」
「そこは着てみるって聞くところですよね！？」

同好会長島津さやか、趣味コスプレで現在ムッツリーニと交友している間柄。
グリグリのビン底メガネが特徴の、見た目は美人揃いの文月学園においては地味な印象。

しかしその印象とは裏腹にスタイルは良く、スリムなのに出る所は存在感バッチリなナイスバディである。

「じゃあ吉井君、皆のバニーはどうかな？」
「えーっと……それ今答えなきゃだめですか？」

瑞希が期待に満ちた視線を送ってきて、優子は視線で抗議。
愛子はいたずらっぽく笑みながら明久をみていた。

「ねえねえ吉井君」
「なっ、何？　いくらなんでも、光一の恋人相手に……」
「えいっ（ちらっ）」
「……ごめん光一、僕は最低な相棒だ（ドクドクドクドク）」

愛子がかがんでちらりと胸元を見せると、明久は滝のような勢いで鼻血を垂らし、ここに居ない無二の親友に謝罪を送った。

「もうっ、愛子。吉井君をからかったりしないの」
「あははっ、ごめんごめん。でも、優子はどうかな？」
「えっ！？」

そこで明久は、ふと優子を見る。
確かにスタイル自体は細身で、ボリュームには欠ける印象はある……が。

「……すごくいいと思う。この姿に見惚れるなって方が無理だよ」
「もっ、もう！　セクハラは感心しないわよ！？」
「せっ……そっ、そんな！　僕はただ、光一がそれ位喜んでたのわかる気がするって言いたかっただけで！」
「こっ……うぅっ」

光一の名を出された瞬間、優子は顔を真っ赤にして縮こまった。

「……あっ、そうだ。ねえ吉井君、ちょっとちょっと」
「はい？」
「瑞希ちゃん。そのままでいてね？」
「？」

さやかが瑞希と向き合う形で、明久に声をかけた。
瑞希が疑問符を浮かべながら、さやかの指示に従う。

「えいっ」
「きゃっ！」
「ぶはっ！！　（ブシャアアアアアッ！！）」

さやかがタイミングを計ったように、前に飛んで自身の胸を瑞希の胸に押し付けた。
互いに互いを押しあい、形を変え合い揺れたタイミングが明久の視界に飛び込み、大量の鼻血を吹きだし倒れた。

「作戦成功」
「もっ、もう！　島津先輩！」
「でも喜んでたみたいだよ？」
「あっ、あううっ……」

さやかにうまく丸めこまれ、胸をかばうようにしながら顔を真っ赤にする瑞希。

「……流石は姫路さんに、島津先輩ね」
「うん……ボク達じゃ、ちょっと無理かも」

それを見てた2人は、自分の胸元に目をやると落ち込んだ。

「……あっ、あぁっ」

そして明久は、いつもやられてるのとは違う出血に死を感じながらも、至福を感じていた。
死してなお悔いなし、とはいかないが……

「……こういう死に方なら、この世に未練を残しつつも満足していけそうだよ。ねえ、きっとわかってくれるよね、光一」

満足そうな笑みを浮かべながら、意識を手放した。

一方、秀吉シャワー室。

「っ！」

「？　どうかしたかの？」

「いや……なんか島津先輩辺りが明久に何かしたような気がして」

「……今頃サバ研部室は血まみれかの」

「かもな」

光一の勘は、当然の様にあたっていた。

ちなみに2人は現在シャワーを浴びており、俗にいう裸の付き合い中である。

「これだけ聞くと誤解されそうだな」

「んむっ？」

「いや、こっちの話。それより」

「んむっ？」

「……雄二の奴、何か手を打ったみたいだな」

光一は不快感を隠そうともせず、外に目を向けた。

……人の気配こそないが、光一には分かっていた。

雄二が一体どんな策を使ったのかを。

ところ変わって、３－Ａ

「……小暮、お前はこれが光一のために起こした戦争だと思うか？」
「え？」

白夜は、弁当箱を取りに来た小暮に、唐突に問うてみた。

「あのバカどもはどうも、私が光一の為この戦争を起こしたと思っているらしい」
「無理もありませんよ。代表と久遠君は、兄弟なのですから」
「兄弟愛とでも考えている、という事か……ふんっ、汚らわしい。そんな物で私が動くと考えているだと？　躾を厳しくする必要があるな」

小暮は何も言わない。
白夜は元々弱さを忌み嫌い、心を否定する。

白夜自身も、自身が肯定している憤怒、自信、強欲以外を見せる事は全くなく、必要ならば外道以下の所業も平然と実行する事も、小暮も見た事は少なくはない。
しかし彼は一度たりとも私情をはさまず、後悔も躊躇もしない……いや、元々私情自体が彼には存在しない。

だからこそ、愛情を吐き捨てる様に“汚らわしい”と言う事自体、当然の話だと彼女は思った。

「そう思わないか、小暮」
「……」
「？　どうした？　体調が悪いなら、さっさと保健室に行け。じゃ

……」

「大丈夫です」

「そうか」

邪魔だ……と言われる前に、小暮はそれを遮った。

白夜にとって、自分は認めるに値する力の持ち主という評価であり、それ以上には決してなれない。

彼は力にしか興味がなく、自身も認めるに値しないと認識すれば、躊躇なく簡単に切り捨てる……という立場でしかない。

身近にいるとはいえど、彼は決して親愛の情は示さない。

彼にとっては、認めるべき力の持ち主……という意味以外の信頼関係など存在しない。

だから彼女は、それ以上を望まない。

「……ん？」

「？　どうかされましたか、代表」

「どうやら、坂本雄二が何かをしたらしい。何か湿気の様な黒い何かが、階下から滲み出てくるような……楽しみにさせて貰おう」

心底楽しそうににやりと笑みを浮かべ、ノートを開く。

当然に様に怯えも躊躇も迷いも、一切ない。

心を排し、ただ力のみを求めた男の姿。

「……わかっては、いるんですけどね」

その声すらも、白夜には一切届きはしなかった。

ザッ、ザッ、ザッ、ザッ！

「……諸君、ここはどこだ？」

「「「最後の法廷を下す場だ！！」」」

ザッ、ザッ、ザッ、ザッ！！

「異端者には？」

「「「「「死の鉄槌を！！」」」」」

ザッ、ザッ、ザッ、ザッ！！！

「男とは？」

「「「「「「「愛を捨て、哀に生きる者！！」」」」」」」

ザッ、ザッ、ザッ、ザッ！！！！

「よろしい、これより2年異端審問会を始める！」

「「「「「「「「「おおおおおおおおおっ！！！」」」」」」」」」

2年異端審問会、大集合

第百六十二問

問題　次の四字熟語の意味を答えなさい

『一騎当千』

学園全員の答え（光一、白夜除く）

『大神白夜　久遠光一の兄弟』

教師のコメント

よもや学園全員の答えが一致するとは思いませんでした。

流石は兄弟そろって有名人ですね。

「……報告、です」

「何を躊躇している？　さっさと言え」

ＦＦＦ団は本来、学級の風紀委員を母体にして結成された組織。

本来はＦクラスのみの活動であったが、光一への攻撃を機にその活動を拡大。

それにより学年、そして最高学年に至るまでとなり、現在に至る。

その際、アンチ久遠派崩壊に伴い居場所を失った残党の男子が、居場所を求め入団。

そして彼らの被害にあい彼女と別れる羽目になった男子もまた、この理不尽を抑えきれないままにＦＦＦ団に入団。

と、こうして2年異端審問会は急速に力をつけていくこととなった。

「……成程な」

「代表？」

「性懲りもなく……だから残りカスだというんだ」

彼らは鬼の補習すらも恐れず、咄嗟の行動力や結束力は他の追随を許さない。

見方によっては、彼らは兵としては最高の性質をもった精鋭集団である。

……が、彼らは基本バカなので、コロコロと対象があっさりと変わるという弱点もある。

「こんな汚らわしい集団、偽情報でも流して自滅を促せば早い……が、今回の戦争においてはそれでは意味がない」

「では？」

特攻による自爆は、基本的に相手の点数に関係ない。

彼らはそれを迷いもなく実行し、Ｅ、Ｆを陥落させた。

「各代表に通達。防衛戦線は各教室の出入り口にはり、一対一の状況維持を優先させろ」

「教室で？」

「操作技術ではこちらが上だ、それに奴らの数にも限りがある以上、無駄遣いは出来ん」
「わかった」
伝達係の3人が、それぞれのクラスに向かったのを見送り、白夜は……。
「高城。Aクラスの行動指針だが……」
一方、2年Aクラス
「3年が、教室に!?」
「……出入り口に防衛戦線を敷いている。これはどうも、大神白夜の指示らしい」
「特攻対策ってことか。流石に手が早いな」
特攻は本来広範囲攻撃であり、一回で数人道連れに出来る。
防衛戦線に割かれた人員の排除も念頭に置いていたため、雄二は出鼻をくじかれた。
数に限りがある以上、構造上で1対1の状況になる入り口では、一騎打ちのほうが効率が良い。
「だったら出入り口を高得点者で突破して、FFF団をなだれ込ませて特攻で広範囲を道連れにすればいい」
「大丈夫なの?」
「Aクラスは確かに難しいだろうが、よそは大丈夫だ。それにいくらあいつが化け物じみた戦力だからと言って、配置上BクラスはともかくcやDをカバーまでは……」

「大変だ！」

そこへＥクラスの男子が血相を抱えて飛び込んできた。

「どうした？」

「Ｅクラスに、大神白夜の襲撃が！！」

「何だと！？　ちょっと待て、見張りは何やってた！？」

「それが、旧校舎側から……しかも、平然としてた」

「旧校舎側！？　待てよ、あっちは絶対通行不可のままだろ！？」

生き残りの証言から、どういう物が配置されているかが既に知らされていた。

だからこそ、旧校舎側からは決して攻撃はできない。

「……まさかあの野郎、あの精神汚染攻撃を耐えやがったのかよ？」

「……どこまでも恐ろしい男」

「って、畏怖してる場合じゃねえ！　須川、根本を主体とした分隊に分けて、根本隊を大神白夜にぶつける！　そしてＢ、Ｄに早急に出撃命令、須川隊とともに３年のＢ～Ｄをたたく！！」

「え？　根本に？」

「あいつは明久ほどじゃないが、カスでゴミでクズでブサイクなキノコ野郎だ。捨駒としてこれ以上ない相手も、明久ほどじゃないがいないだろ？」

「坂本君、現状で手を焼いている大神先輩の召喚獣に傷をつけているのは、久遠光一と吉井君だけだ。それを言えば僕たち全員が捨駒程度にもならない事になる」

「ぐっ……！」

否定が出来ないだけに、雄二は苦虫をかみつぶした顔になった。

一方、Ｅクラスにおいて……

「運が悪かった……と言いたいところだが、自業自得だ。なにせ貴様らの認識が“兄弟愛”という汚らわしい物で、私がこの戦争を起こしたと認識してるのだからな」

「どっ……どこが違うって」

ドゴっ！　ギリギリギリ！

「はぐっ！　いっ、痛い痛い痛い！！」

「貴様のこの耳は飾りか？　それとも脳みそ自体が退化しているのか？　私は貴様らが起こした騒動に対しての制裁だと言ったはずだ。いつ光一の名を出した？」

「痛いです！　耳を離して！！」

「この耳引きちぎってやろうか？」

「いっ、言ってません！　すみませんでした！！　お願いですから離してください、あたしが悪かったです！！」

白夜が当然のようにつまらんと言いたげに、中林を解放した。

これでＥクラス（ＦＦＦ団参加者除く）の制裁を終えた白夜は……

「心配しなくても、光一はこれが終わったら潰してやる」

「……え？」

「貴様も名だけとはいえ代表なら、これくらい理解しろ。この戦争はな、貴様らへの制裁がメインだが、光一の打倒においても貴様らは目障りだ。打倒をすれば、それを好機とみて騒動を起こしかねない」

全員がうんうんと頷いた。

「そっ、そんな……」
「のぞき騒動を自作自演で仕組んでおいて、違うとでもいう気か？
あの騒動の所為で学園のイメージに大きく傷がついたんだ。この前の事で何があったかは容易に想像がついた以上、言い訳等通用するかバカが」

自作自演と言っても、清水美春の独断ではある。
この前の騒動というと、確実に事前確認もせず明久が白夜に襲撃をかけたと決めつけ、奇襲をかけた事。
頭が恐怖で冷めた状態の為、中林も感情任せの暴論ができなかった。

「わかったら大人しくしていろ。車椅子……いや、ベッドと生涯一心同体になりたくなければな」

ドドドドドドドっ！！

「ん？　なんだ、やっと来たのか」

「これより、異端審問会を始める。異端者大神白夜、その首を異端審問会のシンボルとし、我らが輝かしき未来の礎となれ」
「成程、目の付け所だけは褒めてやる……だが」

ごっ、と自身の拳と拳を打ちつけ合う。

「賢い選択とはいえないな」

一方、光一は……

「えーっと、データの削除と原稿の回収完了。予約金の回収も終わったし、戻るか」
「……光一よ、これは立派な窃盗じゃぞ？」
「何を言ってる？　俺は俺と明久の人権保護と、予約金の窃盗をしているだけだ。無断で」
「無断である時点で窃盗じゃろ！」

漫研部室で、２学期発売となる“バカと銃神とバラの世界”の新刊。そして最近メジャーになりつつある、自分と白夜のそっち系同人誌の原稿回収と、その慰謝料として予約金の撤収を行っていた。

人、これをコソ泥という。

「じゃあこいつらがやってる事は何なんだ？　立派な人権侵害と風評被害じゃねえか。よりにもよって兄貴との新ジャンル出しやがって……」
「……つくづく命知らずじゃの。よもや光一と白夜殿をそろって敵に回し兼ねん事に手を出すとは。光一はおそらく、それを利用して表ざたに出来んと踏んだのじゃな」

当然、秀吉は顔を青ざめその先を言えなかった。

第百六十二問（後書き）

最近白夜のキャラ設定上、殺伐とした内容ばかりなので
そろそろコラボでも書いてほのぼの系でも出そうと思います。

コラボといっても、ＧＡＵさんの作品でしか思いついてませんが

・クリスと光一のとある一日
・瑞希とひばりとアキがさやかの手でコスプレすることになり、明久を加えてひと騒動

と言うのがあります。
ほのぼの書くんだったら、ひばりたちのほうが書きやすいので。
というわけでＧＡＵさん、どうかコラボの許可を。

コラボ問題　第5問（5）　『とあるハーレムの賑やかな一時』（前書き）

この作品は、ＧＡＵさんのクリスティーナ・ウェストロードが光一のとある関係の一員となったある1日のコラボです。
ＧＡＵさんやファンの方々のお目にかなうよう頑張ったつもりですので、ではどうぞ。

コラボ問題　第5問（5）　『とあるハーレムの賑やかな一時』

「……えーっと」

光一は自分の家の自分の部屋の自分のベッドの上で、ある問題と遭遇していた。

昨晩泊まる事になった、自身のとある関係の1人であるクリスティーナ・ウェストロード。

その彼女が一糸まとわぬ裸体で、腕を枕に寄り添うように眠っている。

「……確か、違う部屋を宛がったはずなんだけど、な？」

昨日の事を思い出しながら、どうしようかとクリスを見ながら考える光一。

そこでいきなり、もぞもぞと光一にのしかかり始めるクリス。

「んんっ……」

徐々に腕をまわし、光一の胸板に頬をすりよせ、胸を押し付け始め……。

「おいクリス、お前寝ぼけたフリしてるだろ？」

「……すぅっ」

「コラ、とぼけるな」

足まで絡めて来た所で、光一はジト目でクリスを見る。

「んにゅう……やっぱり勘が良いねえ。こういっちゃん」
「いや、アプローチ感満載の行動してる時点で丸わかりだ。ベッドに入り込んだ事は置いとくから、一先ずどいて……じゃなくて、服着てくれ」
「んっふふー♪　これはチャンスだよん」
「チャンス？　……あっ」

ここで補足。

光一は武器を持てば中学時代において凶王とまで呼ばれ、現在も過激派筆頭として恐れられている男である。
だが身体機能においては学園でも最低ランクのモヤシで、こういう状況ではクリスから逃れるすべなど全くなかった。

「甘いねい、こういっちゃん。おねーさんこう見えても寝技が大得意なんだよん」
「……いや、どう見ても得意そうだってかまあ良い、望むところだ。少しくらい潤い求めたってバチは当たらねえ……よな？」
「疑問形にしなくても、そうだよん。それじゃ……」

がちゃっ！

「ちょっと光一、いつまで寝て……」

ここで更に補足。

光一の運は明久にも負けない位に酷く、特に人望に関しては手の施しようがないほど最悪。
つまり……兄が神様に愛されてるのとは対照的に、光一はとことんまで神様に忌み嫌われているのである。

その少し後。
ちなみに本日は休日なり

「……」

久遠家リビング。
優子にボロボロにされた光一が、痛む体に鞭打って作った朝食が並べられる。

その傍らでは、服を着たクリスが優子に説教されていた。
一応優子はというか木下家は、光一の母親から家の鍵を預かっていて、何かあったらよろしくお願いしますと頼まれていた。

「もうっ、ウェストロード先輩！」
「うにゅう……ごめんねゆーこりん。ついついこういっちゃんの温かさが恋しくなって」
「……節度は持ってくださいね？　変な事になったら、周囲から非難されるのは絶対光一なんですから」
「絶対をつけるなよ……否定はできないけど」
「光一も、さっきの事は悪かったけど……せめて声くらいかけてね？」
「お前も変わったな！？」

文月学園においては、感情優先で人の話を聞こうとしない奴ぞろいだけに、光一と人望運の最悪さに拍車がかかっていた。
具体的にいえば、クリスとのキスが報道されて以来……

主にＢ～Ｅの女子からは元々がゴミ扱いだったが、最近では害虫扱

いで姿見ただけで悲鳴をあげて逃げだすか、ゴミを投げつけられるかの扱いをうけ……。
異端審問会からは最優先討伐対象として認識し、所構わずの些細な事での襲撃頻度がアップし……。
3年の男子間で光一に対しての評判が悪化し、2年と3年の軋轢をより深めた厄病神として周囲に更に疎まれたり……
それを利用し、根本と雄二が共謀してアンチ久遠派の再結成を企てていたりと……

「俺の身体のどっか、幻想殺し（イマジンブレーカー）にでもなってんのかな？」
「……だったら召喚フィールド壊れるはずでしょ？　あれオカルト要素含んでるんだから」

なんかもう、色々と踏んだり蹴ったりでボロボロなのだった。

「で、なんでウチに？」
「光一が最近大変だから、朝ごはん作ってあげに来たんだけど……」
「それであんな事があったとはいえ、俺に作らせてたら本末転倒だろ！　……まあ俺にも責任があるのは事実だけどさ」

彼、久遠光一は不幸な人間である。

「ゆーこりんってばかわいいねい。それじゃ朝ご飯食べたら、ゆーこりん交えて一緒にやちゃおっかな？」
「えっ！？」
「……いや、またなんかありそうだから遠慮しとく」

優子がバッと音が出そうな勢いで顔をそらした。
彼、久遠光一はとても不幸な人間である。

「そっ、それじゃ今日はアタシがお金出すから、どこか遊びに……」
「ＦＦＦのバカどもと3年とメス猿どもに嗅ぎつけられそうだからやめとく」

彼、久遠光一はとことん不幸な人間である。

「じゃあアッキーに皆で遊べるゲーム持ってきてもらう？」
「明久ならあのキテレツ姉貴がひばりに料理習うってんで、味見に（無理やり）付き合わされるってよ」

彼、久遠光一は最悪なまでに不幸な人間である。

「だから大人しく家で遊ぶ……のも危ないか。ムッツリーニが何かしてる可能性もあるし」
「……土屋君には島津先輩紹介してあげたはずだし、ここアンタしか住んでないでしょ？」
「どうだか？　何せＦクラスだから、それが保障になる保証なんてどこにもありゃしない。それに秀吉がよく遊びに来るから、何かしてない可能性は低いぞ？」

彼、久遠光一は最悪中の最悪に不幸な人間である。

「休みの予定も満足にくめないの！？」
「仕方ないだろ。俺文月においては“過激派筆頭”として元々の評判が悪い上に、“優子達を脅して二股強いてる外道”に加えて、“クリスまで薬で従順にさせてるド外道”だぞ？」
「噂が独り歩きにもほどがあるわよ！！」

もちろん大半が無実の罪なのだが……。
文月学園の生徒は大半感情優先で、人の話を聞かない直情傾向の強

いメンツだらけである。

「じゃあやっぱり、大事なダーリンの不幸払拭の為に一肌脱ぐしかないねい。ゆーこりん」

「脱ぐの部分が現実味を持ってるのが恐ろしいなおい」

「……じゃ愛子も呼びましょう。今日はしっかりと光一の不幸を払拭して、幸運慣れしてもらわないと！」

「へ？」

何か妙な気合の入った優子に、光一があっけにとられた

「じゃあ光一、部屋に行きましょ。予備のシーツある？」

「いや、待て待て！　何か妙な事になってないか！？」

「ああもしもしあいぽん、今からこういっちゃんと（ごにょごにょ）しない？　うんうん、わかった。あいぽんも今から来るよん」

「そっちも待て！　今小さすぎて聞こえなかった個所、何て言った！？」

「えーっと、今日は大丈夫のはずよね？」

「何がだ！？」

「それじゃーこういっちゃんの部屋にれっつごーだよん。ゆーこりん、今日を新しい誕生の日しようじゃないかい？」

「はっ、はい！　がんばります！」

「頼むから話聞いてくれー！」

休み明けの日。

「だーりーん！」

「……クリス元気だな」

心なしか、元々だが（失礼）少々げっそりしてる光一に、クリスが元気よく抱きついた。

「相変わらず仲が良いな、殺してやりたいくらい」

「本物の殺気漂わせてる時点で、殺す気満々じゃねえか。それはそうと雄二、お前最近指どもや根本と会う事多いよな？」

「ああっ。ちょっと面白い事を企画してたんで、混ぜて貰ってたんだ」

光一も当然知っている。

怒れる3年のクリスのファン達を抱き込み、アンチ久遠派の再結成をもくろんでいる事を。

「面白い企画？　なんだよ、根本に雄二でそいつら二股でもする気か？　いや、お前は霧島に島田含めて四股か。ある意味俺よりひでえな」

「おやおや、もっちゃんもやるねい」

「バカめ、その手に食うか。須川達にも立ち会ってもらって、証人になってもらったんだ」

「……雄二、それどういう事？」

ビクッ！　ギギギギギ……

「いや、違うんだ翔子。俺はただ、アンチ久遠派の再結成に乗らせて貰ってただけで……」

「そいつらを利用して、優子と愛子とクリスを俺から奪う腹積もりだって事なんだ」

「光一ぃぃぃぃいいいいいい！！」

「……雄二、その女癖の悪さは妻として見過ごせない」

「「「我らとしても見過ごせない！」」」

前門の翔子、後門のＦＦＦ団。
のがれるすべはなし。

「テメ、光一！！」
「雄二、お前は俺の幸福がこの上なく嫌いだろうが、俺はお前が幸福だろうが不幸だろうがどうでもいい。けどな……」
「なんだよ！？」
「俺はな……お前の自由がこの上なく大嫌いなんだよ！」
「テメエ、それでも友達か！？」
「図々しい事抜かすな。さて、とりあえず……正義は勝つって事で」
「ふざけんぎゃふっ！」

雄二がＦＦＦ団に制裁され始め、光一はそっぽを向き武器の整備を始める。
その光一にクリスは……

「……いい加減それやめてくれない？」
「いやいや、これ楽なんだよねい。嫌かな？」
「ぜんぜ……心地良すぎて癒される」
「光一よ、発言が明久になっておるぞい」

頭の上にその豊満な胸を乗っけるように、背に抱きついていた。

コラボ問題　第5問（5）　『とあるハーレムの賑やかな一時』（後書き）

次回は、同じくＧＡＵさんとのコラボで、島津さやかをメインにしたコスプレ話を書く予定です。
一応何を着せるか決めてますが、感想のほうにどういうのがよさそうなのか意見をもらえればと思います。

まあその際、ひばりと明久に、ひばりにとっては嬉しくも複雑なハプニングが……と予定してます。

コラボ問題　第5問（6）　『とある女子たちのコスプレ会』（前書き）

今回もＧＡＵさんとのコラボでございます。
登場人物は支倉ひばり、クリスティーナ・ウェストロード、来島アキです。

では、どうぞ。

コラボ問題　第5問（6）　『とある女子たちのコスプレ会』

「……ホントお前の女運って、とことん最悪だな？」
「ううっ……」

今朝まで三途の川をさまよったという明久に、光一は顔をしかめた。
というか、そんな状態なのにそれを無視して登校しろという無茶ぶりにも。

「……愛じゃなくて完全に害だな」
「一字違いが大きな違いだね？」
「……薬も過ぎれば毒の良い例だ」

不幸同志のシンパシーというか、そういうのでちょっと光一は後ろめたかった。

「まあそれはそれとして、あの人本当にハーバート出身なのか？ひばりが教えてなんで致死レベルの殺人料理が出来るんだ？」
「……材料をことごとく間違えてたから」
「なら台所に立たせるなよ。努力以前の問題だろそれ」
「……姉さんが僕の話を聞くわけないじゃないか」
「……どうしてお前がらみの女って、ひばり以外お前に害しかなさないのばっかなんだ？」

つくづくいろんな意味で同情を隠しえなかった。
内容的にも、人間として放っておくのはどうかと思える事ばかりである。

「まあちっとは努力しろ。どうしてもだめなら俺も協力するから」

「……ありがとう、その気持ちだけでもうれしいよ。頑張ってみる」
「……それが俺を後悔させない事を祈るよ」
光一の言葉は、あまり笑えるものじゃなかった。
「……それより光一、最近周囲からの扱い更に酷くなってない？」
話変わって、２人は現在サバ研部室目指して世間話？　をしながら廊下を歩いていた。
ひゅーっ！　カンっ！
周囲から飛んでくるゴミと敵意の視線に、２人して少々うんざりしつつ。
「クリスとまでそういう関係になりゃ、男でも女でも面白く思う訳もないだろ。元々俺達は色々と問題起こしては恨み買いまくってるんだから、変な風に広まってもおかしくない」
「……だからって、薬で言いなりにさせてるなんて酷い噂がメインってどうかと思うよ？」
「そんなん無視すりゃ良いんだよ。やってる事が事とはいえ、事実無根の中傷どころか暴行なんて今に始まった事じゃないだろうが」
「……」
事実だけに、明久は何も言えなかった。
いい加減うざったくなった光一は、窓を開け……
「よっと」
懐からカギ爪ロープを取り出し、それをひっかけて明久と一緒に降

りた。

「所で光一、僕達なんで呼ばれたのかな？」
「島津先輩の事だから、ひばり達にコスプレでもさせてんだろ？」
「コスプレって……またバニーガールでも着せてるのかな？」
「だとしたらひばり辺り、トマトみたいに真っ赤になってあたふたしてるだろうよ」
「かもね」

飛んでくるごみもなくなったせいか、和気あいあいとなる2人。

そして、コスプレ会場……もとい、サバ研部室。

「＊@＃％＆（ここは天国）？」
「え？　ここは天国かって？　ああ、そうだろうな」
「……光一君、よくわかるね？」

明久のパニック語に素で返す光一に、ひばりがもじもじしながら話しかける。
……雲雀のきぐるみを着て

「ひばりが雲雀のきぐるみって」
「だってこれが一番まともだったから。ちょっと一部がきついけど」
「一部？　……さて、えーっと」

感づいた光一はひばりから目をそらし、アキの方に向く。

「えらく不健康そうなナースだな」
「第一声がそれですか？」
「てか睡眠くらいキチンととれよ、いつか過労で死ぬぞお前？」

ナース服を着ていたが、目元のクマがある意味台無しにしていた。

「やっほー、こういっちゃん」

「ん？」

声をかけられた先には、バニースーツをまとったクリスと瑞希。

その傍らでは、旧型スク水の愛子とミニスカメイドの優子が居た。

「姫路がまた着てるのは良いとしても、どうしてクリスは着こなしてる感が強いんだ？　てか愛子はなんで水着？　……優子似合うな」

「おねーさんほどのナイスバディだと、何着ても似合っちゃうんだよん。そんな事よりおねーさん今うさちゃんだから、こういっちゃんの温かさがないと死んじゃうよん」

「それ言うならさびしいと死んじゃうだろ」

「ボク水泳部だからね、でもちょっと恥ずかしいかな？」

「……光一を癒してあげるためよ」

「ぜひお願いします」

優子の控え目な発言に、光一はクリスに抱きつかれながら即座に反応した。

もういろいろと大変だったので、癒しの言葉に過敏になってる光一だった。

「えっと、その……どうですか、明久君」

「……☆＆％＄＊@¥＝＆＃@～」

「やっぱり似合うね姫路さん、だとよ」

「……えっと、ありがとうございます」

光一という中継点を介してとはいえ、顔を赤くしながらモジモジと

控え目にいう瑞希。
明久もすっかりガチガチで、今にも煙が出そうだった。

「まず深呼吸してみ？　そのあとでひばりにも感想言ってやれよ」
「すーっ、はーっ……うん、かわいいよ。抱っこしてみたくなる」
「もうっ、アキ君。子供扱いしないで」
「じゃあ抱っこしてみようよ。ほら」

その後ろから、文学少女風セーラー服にガーターベルトのさやかが、ずれるメガネを気にもせずひばりを抱き上げ、明久に押し付け始めた。

「え？　せっ、先輩！？　何するんですか！？」
「何って、抱っこさせてあげようと。って、暴れないで。危ないから」
「おっ、おろしてください！」
「危ないよひばり！　暴れないで！！」

さやかの明久に押し付けるような抱き上げから逃れようと、ジタバタ暴れるひばり。
明久もひばりがこのままでは危ないと、離れるわけにもいかず抱き抱えようと。

「わわっ！」
「え？」

そこでひばりを抱きかかえてるさやかが躓き、明久の方向に倒れこむ形となり……。

ちゅっ！

その勢いでひばりを押し上げてしまい、ひばりと明久の唇が重なった。

「あっ……」
「へっ……？」
「わ～お……」
「わあっ……」
「……えっと」
「……おやおや」
「ひっ、ひばり、ちゃん？」

上から、さやかが気まずそうにし、光一があっけにとられ。
クリスが感嘆の声を上げ、愛子が顔を輝かせ、優子もあっけにとられ、アキが平然と。
そして瑞希が、ぎょっと目を見開いていた。

「「……っ！？！？！？！？！？！？」」

ぷしゅ～っ！×２　ばたっ！！

その当人たちは、ほぼ同時に全身が沸騰したかのように真っ赤になり、明久が後ろ向きに倒れひばりもそれに便乗するかのように折り重なった。

「……おーい明久にひばり、大丈夫か？」
「そんなわけないでしょ。早く冷やしてあげないと」
「そうだな……いや、俺にはちとやるべき事がある」
「やるべき？　……ああっ。手荒なことしちゃダメよ？」
「善処する」

次の日。

「「「根本ぉぉおおおお！　死ねやあぁぁぁあああああ！！」」」
「誤解だあああああ！！」

文月新聞が掲載されたと同時に、根本がＦＦＦ団に追い回され……。

「やっぱり小山さん、なんだかんだで離れられないのね」
「でもそれに中林さんまで……」
「それより意外なのが、清水さんよね。男嫌いなのに」

小山と中林と清水が、根本と噂になったりしていた。

「……やっぱり吉井君と支倉さんのシーン撮られてたのね」
「ああっ。根本達の暗躍の動向を教えるのを条件に、それらのデータは押収したんだ」
「ああっ、確かウェストロード先輩のファン抱き込んで、アンチ久遠派再結成を狙ってるとか？」
「こっちの方が俺にとってはついでだけどな。俺としては、こっちの情報が公にならない事の方がよっぽど重要だから」

そう言って光一は、ポケットからデジカメのメモリーカードを取り出す。

「そうね。支倉さんは吉井君の事絶対好きなのに、なぜかそれを否定してるから」
「ま、この辺りは俺達がどうこう言う事じゃないさ。多分２人して記憶飛んでる筈だから、こんなこと露見してもらったらひばりが潰

れかねない」

そのメモリーカードを、更に取り出したニッパーで真っ二つに。
ついでにぐしゃぐしゃと踏みにじって、完全にダメになったことを確認して掃除。

「というわけで、この件は俺達の胸の奥底に秘めておくって事で」
「そうね。先輩達には話してるの？」
「ああっ」

そんなとある朝の、光一と優子の2人きりの会話。

第百六十三問（前書き）

今回バカテストは、お休みです。

第百六十三問

根本の指揮下の元で、統率された動きで白夜を取り囲むＦＦＦ団。

「ふむっ……」

「ん？」

「行動力と統率力、そしてこの団結力はぜひとも欲しいな……よし。お前たち、ＦＦＦ団など抜けて私に従う気はないか？　今ならお前たちへの制裁も許してやれば、価値ある未来も約束してやる」

「黙れ！！　我らＦＦＦ団、学園の正義と風紀維持と皆平等の精神をもって、貴様を断罪する使命を与えられし正義の使者！　そんな戯言、聞く耳もたん！！」

一応、みるべき所は見て公平に評価するのが、白夜の方針である。最も常夏コンビは、何かと白夜の美学にそぐわない行動ばかりとるため、元々の評価自体が低かった。

「皆平等？　……ふんっ、あり得ないな」

「何？」

「世界の幸福の量は限られている。当然それを私の様に苦もなくつかめるものが居れば、あぶれる者もいる……平等の要素があるとすればそれは不幸のみだが、私は不幸をはねのけることなど造作もない」

「貴様の所為で俺達は不幸という事か！！？　ならば貴様を殺して、その分の幸福を取り戻してやる！」

「この私を殺す、か」

白夜はにこりとさわやかな笑顔を浮かべた。

……見る者すべてに恐怖を与える威圧感を添えて。

「有言実行。吠えたからにはやって見せろ、私は決して逃げも隠れもせん」
「上等だ！」
数人が召喚獣を出し、白夜の召喚獣に飛びかからせた。
白夜の召喚獣がガシッと拳をぶつけ合い、迎え撃とうと……。
「ん？」
した時左右から木刀が白夜に襲いかかり、超反応でそれを片腕ずつで受け止める。
その間に白夜の召喚獣の反応が遅れるも、飛びかかった召喚獣の頭を両手でつかみ握りつぶした。
ひゅっ！　ひゅっ！　ひゅっ！
「ふむっ」
その次の瞬間を狙い、カッターナイフを投擲。
両手につかんだ木刀を床にたたきつけへし折り、両端の団員の首をつかみ……
「「ぎゃあああああああっ！！」」
盾にした。
「成程な」
納得したようにうなづく眼の前では、間髪いれず別の召喚獣が白夜

にハンマーと鉄棍棒を振り下ろそうとしていた。
白夜の召喚獣がそれを片腕ずつで受け止め、無理やり押し返して召喚獣の頭を潰した。

「よく考えた物だな。私と召喚獣に意識を分断させ、その間に仕留める腹積もりとは」
「へっ、超反応はもう調査済みだ。こうでもしないと倒せるわきゃねえ」

動じる様子もなく、白夜は部隊長を務める根本に感心するように話しかけた。
根本は爬虫類を思わせるような笑みを浮かべ、かつて裏切られた恨みを晴らせる絶好の機会をモノにすべく、カッターナイフを構える。

「卑怯な手段で有名……というだけの事はあるな」
「あまり動じてはいねえようだが？」
「力がすべてと公言している身だ。たかがこの程度で怒る程、私は子供ではない」
「へえっ、流石は最高学年首席様だな。そう、結果がすべてだ。つまり過程なんかどうだっていいんだよ」
「勝つために手段を選ばんその姿勢は、確かに大したものだ……が、お前には美学という物がなさすぎる。だから小悪党の領域を出ない」
「あっ？　……おい先輩よ、アンタ今どういう状況かわかってんのか？」

周囲には５０人以上のＦＦＦ団。
そのほとんどが武装しており、白夜自身は丸腰。
召喚獣においても、Ｂ～Ｆとはいえ同様である

「わかっているとも。貴様らを一人残らず叩き潰せば良いだけだ」
「……流石は久遠の兄だ。憎たらしいクソ野郎ぶり、まさにその物だ！」
「あんな出来そこないと同類だというのは心外だが、まあ良いだろう。さて、そろそろ続きを始めるか。時間が惜しい」
「そりゃこっちのセリフだ！　あいつの涼しい顔をぐしゃぐしゃにしてやれ！！」

一方、３年教室階

「総員奮闘しろ！　Ｄ、Ｃ、Ｂクラス代表の首は目の前だ！！」

白夜の留守という好機をモノにすべく、雄二自らが前線に赴き指揮を執っていた。
それぞれＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ教室の入り口には戦線が敷かれ、そこでは１対１の状況が続いている。
それぞれＡクラスが前に立ち、Ｂ、Ｄクラスがそれを援護。
後ろではＦＦＦ団が控え、特攻する時を今か今かと待ちわびていた
（ムッツリ商会謹製写真で抑えている）

「……やっぱりそうだ」

現在Ａクラスでは、佐藤美穂と久保をメインに防衛線を仕掛けていたが、必要以上に攻撃を加える事がない。
まるでこちらからは、攻める気がないと言わんばかりに。

「久保と佐藤は得意科目じゃ４００点近くとってるとはいえ、どうして防戦一方になる？」

3年にも腕輪もちは当然いる。
それを一向に出す気配はなく、全クラスが防戦一方。
B～DもAクラス戦力で今にも突破されそうとなっているというのに、一向に援護に回ろうという動きが見られない。

「……大神白夜の狙いは、腕輪もちと何か関係がある事なのか？いや、そう考えると見越しての罠？」
「坂本、CとDの前線を突破した！　Bの突破ももうすぐだ！」
「……っ！　よし、野郎ども！　生きざまを見せろ！！」
「おおおおおおおおっ！！」

どの道、白夜が戻ってくれば代表の数で圧倒的に不利となる。
現状が雄二から冷静に判断する時間を奪い取り、ただただ流し続けていた。

一方、サバ研部室にて。
光一が漫研での蛮行を優子に怒られ、原稿はともかく金は戻したそのちょっと後。

「これで、全部ですか？」
「うん」

光一はさやかがまとめたムッツリーニからの情報に目を通し、思案しては

「……どうなってるの？」
「良いから寝てろ明久。今ヘタに動くと死ぬぞ」
「話す位なら良いじゃない。それより続き」

少しどころかかなり血色の悪い明久が問うと、光一は心配そうに寝る様に言う。
……が、明久としても気になるのか、続きを促した。

「今は兄貴がEクラスを殲滅して、根本指揮下のFFF団と交戦中。雄二指揮下のA～Dクラス攻略戦が行われている」
「え？　うーん……雄二が出てるなら、CとDは難なく落とせるんじゃない？　Bは難しいかもしれないけど」
「いや、難しくはないはずだ。確か3年のBクラス代表、この前の事でA級戦犯として評価落ちてる筈だから」
「……Bクラス代表の立場って、何か死相でも出てるんじゃない？」
「ただ単に根本と3年のBクラス代表が、そろってマヌケなだけだろ」

本人たちが聞いたら激怒しそうだが、光一は絶対気にしない。

「しかし……腕輪もちのデータを集めて、霧島の点数に反応した、か」

ムッツリーニが雄二から聞いて、疑問に思い光一に伝達した情報。
雄二の事線に引っ掛かった事だけに、光一も見逃せない。

「ねえ、そう言えば光一のお兄さんの腕輪って、どんな能力かな？」
「え？　……先輩、見た事ある？」
「ん？　全然。どういうわけか使わないんだよね。私の時もそうだったし」
「使わない、か……？」

ふと考えてみたら、自分や姫路、ムッツリーニに愛子。

2年でも腕輪もちは相当数が限られる。

「……待てよ？　もし“使えない”のだとしたら？」

「光一？」

「……」

一方、その頃

「誰も彼もが、弱すぎる……この上なく醜く汚らわしいまでに、罪深い」

白夜は勝負という物をした事がなければ、本当の意味での勝利は両手の指で数える程度しかなく、敗北は光一との勝負による1回のみ。なぜなら勝負とは、勝利と敗北が混在するからこそ勝負というからである。

白夜が成してきた事は、すべてが圧倒的な能力差による一方的な弾圧であり蹂躙。

そこには、勝利や敗北という概念が存在するわけがない。

そしてそれは、今回も例外ではない。

「さて、残るはお前だけだな。Bクラス代表根本恭二」

召喚獣も自分自身も無傷。

その傍らでは、召喚獣とともに白夜の手で酷くボロボロにされた、FFF団員

それもまた当然かのように、余裕かつ絶対的な自信に溢れたその佇まいを崩さない。

「……ばっ……バケモノ！！」
「……やれやれ、先ほどの威勢は数で膨らんだ風船だったか。まあいい、召喚獣を出せ」
「……（ふるふる）」

根本が声も出せない程に怯え、否定の意を表すかのように首を振る。
特に動じることもなく、白夜は根本の目の前に……

ドサッ！

先ほどボコボコにしたＦＦＦ団員を突き付け、地面に落とし踏みつけた。

「今ならこれよりかは楽に仕留めてやろう……もう一度だけ言う、召喚獣を出せ」
「……さっ、サモン」

その次の瞬間……Ｅクラス教室に断末魔が響いた。

「戦死者は補習！！」

そこでようやく鉄人西村が来襲。
Ｅクラスのほぼ全員とボコボコになったＦＦＦ団を担ぎ、補習室へ連行。

無人となった教室内で……

「……バケモノ、か。うれしいな、私は人以上に認識されたと、そういう事か……くっくっくっく……あーっはっはっはっはっは！！」

ひとしきり笑い、ふと教室に外へ目を向け……

「……っ！（ダッ！）」

「そんなに慌ててどこへ行く？」

「……っ！？　おっ、俺のスピードに！？」

白夜の視線に気付いたムッツリーニが、逃走しようとして捕まった。

「悪いが、お前という好機を逃がすわけにはいかない」

「……くっ」

第百六十四問

問題　次の問いに答えなさい

キリスト教伝来時、キリスト教徒を示す名称を答えなさい

姫路瑞希に応え
『キリシタン』

教師のコメント
正解です。当時は大名にもキリシタンがいまして、彼らをキリシタン大名と呼びます。

吉井明久の答え
『キシリタン』

教師のコメント
惜しくもニアミスです。

久遠光一の答え
『キシリトール』

教師のコメント
どうして歴史でキシリトールが出るのですか？

土屋康太の答え

『キリギリス』

教師のコメント
虫の名前でもありません。

３年教室前にて。

「ＦＦＦ団ばんざーい！！」
「異端審問会に栄光あれえええええ！！」

Ｄクラス陥落。
３年側、代表撃破、被害多数。
２年側、ＦＦＦ団員４名

「Ｄクラス陥落！」
「Ｃクラスも、あと一歩！！」
「Ｂクラス、ＦＦＦ団員投入！！」
「よし、急げ！　そろそろ戻ってくる頃あいだ！！　……わからん、どういう事だ？」

雄二はこちらに傾く戦局に喜びつつも、３年の意図が全く分からなかった。
Ａクラスでは依然と防衛線に徹していて、決して深追いもせず防衛線を崩さない事が絶対とでもいうかのように。

それはＢ～Ｄの代表格が風前の灯となっていても、決して変わらない。

「大神白夜が戻るまでの時間稼ぎ？　それにしては、動きが……ん？」

ふと雄二が、Ａクラス教室内に目を向けようとするが……

戦線と防衛部隊に邪魔され、中の様子がうかがえない。

「……まさか！」

２－Ｅクラス教室。

『３－Ａ　大神白夜　保健体育５３２点』

ＶＳ

『２－Ｆ　土屋康太　保健体育５７８点』

「……解せない」

「ん？」

「……なぜ俺に、保健体育で挑む？」

「あまりにも湿気たハエばかりで、いい加減あの時邪魔された戦い以降続いているこの不完全燃焼から、解放されたいのでな。吉井明久はよくやってくれたが、お前はどうかな？」

「……加速！」

相手が相手である以上、小手調べは不要。

ムッツリーニは即座に腕輪を起動し……。

ザッ！

「……っ！？」

白夜の召喚獣の脇腹に傷がついた。
腕輪を使ったとはいえ、あまりにも不自然な光景にむしろムッツリーニの方が、驚愕で目を見開いた。
……傷つけられた方の白夜は、気付かない程に軽く口元を歪める。

「……成程な」
「……どういうつもり？」
「お前が知る必要のない事だ。さて、さっさとあの汚らわしい集団のもとに送ってやる」

ところ変わって、サバ研部室。

「光一君、戦線に何か動きがあったみたいだよ？」
「恐らく、３年側のＤ、Ｃ、Ｂクラスが陥落したんじゃろうな」
「じゃあ後は白夜さんだけね」
「俺も同じ考えだけど、３年が有利であることに変わりねえ。兄貴が残ってる事を差し引いてもな」

愛子、秀吉、優子の言い分に対し、光一が肯定を示しつつも現状に変わりないと断言。

「え？　それって、どういう事？」
「明久君、動いちゃだめです」
「今動いたら、いくら明久といえど死ぬぞい」

瑞希とさやかのツープラトン（笑）で瀕死どころか致死寸前の明久が、瑞希と秀吉に看病してもらいながら光一に質問。

「兄貴が何かしてないわけないだろ？　大体あのバカども大集合を感知できないほど鈍い奴なんて、精々姫路位だろうし」

「久遠君ひどいです！」

「でも感知してたんなら、どうして離れたのかな？」

「来るとわかってて尚、何とかする手立てがあるってことだろ。でないと、いくらなんでもあっさりすぎるのが逆に気にかかる」

「えーっと……つまり？」

光一が呆れるように、補足説明……しようとして、やめた。

明久も頭を使わせた方が良いかもしれないと思って。

「明久、突進してくるイノシシの群れがあります。さて、これが来ると予見できた場合、お前ならどうする？」

「逃げる」

「うん、ある意味正解。じゃあ逃げられない理由があったとしたら？」

「その理由を片づけて逃げる」

「……じゃあ言いなおして、雄二だとどうすると思う？」

「僕を囮にして自分だけ逃げる」

「今のは問題の方に問題があった」

「あーもう。２人で漫才なんてしてないで、さっさと先に進めなさいよ！」

優子のツッコミに、２人して頭をポリポリとかいた。

「話に戻るけど“罠を仕掛ける”だ。まあイノシシ、つまりバカども相手なら落とし穴が妥当だな」

「あっ、そっか。でも光一、それだと数がないと意味がなくない？」
「そうだけど、群れは糸口さえあれば瓦解させるのは容易いもんなんだ。まああのバカどもという例外が居るが、組織なんてそんなもんだよ」
「そうですか。でも久遠君、校舎に落とし穴なんて開けたら停学になっちゃいません？」
「比喩表現だ、比・喩・表・現！」

内心、完全に姫路にFクラスのバカがうつってやがる。
と、呆れながら突っ込む光一だった。

「それがなく、あっさりと制圧を許すって事は……B～Dを代表もろとも生贄にしたか」
「光一がいた方が被害は少なかったって断言できるね」
「明久よ。確かにワシもそう思うが、その前提である光一の意見が通るとは思えぬぞい」
「そうよ。どうせ皆して何かの罠だとか、白夜さんと繋がって情報流れてるんじゃないかって、むしろ被害は大きくなってたと思うわ。主に仲間割れで」
「……参加してもしなくても、光一君は中傷されるんだね」
「あっ……あはは……」

全員が苦笑いだった。

「てかお前らはいつまでバニーガールでいる気だ？　みる分にゃうれしいが、こういう空気じゃむしろ削がれるからいい加減着替えてほしいんだが……言っとくけど、この場で着替えるなよ？」
「はいはい。じゃあ看病って事で、ナース服でも着せてみる？　瑞希ちゃんのはサイズがないから胸ぱっつんぱっつんになって、ボタン飛んじゃうかもしれないけど」

「トドメさす気かあんたは!?　ってかナースで人を殺してどうする!!?」

というかどの道、光一は心労が重なる一方だった。

3年教室前防衛戦線。

「Cクラス陥落!」
「Bクラス、やったぞ!」
「やばい、撤退だ!　急げ!!」
「え?」

雄二が真意に気付き、早急に撤退を指示。
しかし……。

「総員突撃!!」

突如Aクラスが防衛線を押し切り、瞬く間に通路を制圧。
そしてトイレなどからも現れ、各クラスに傾れ込み突入部隊に攻撃。

「全員撤退だ!　撤退しろ!!」

突入部隊は既に占拠時に疲弊しているどころか、通路を制圧され逃げ場を失い……
結果、2年側はAクラス戦力に被害が及び、B、Dクラスも大半全滅。

「坂本君、大丈夫かい?」
「あの野郎……1人どころか、残り全部の代表を捨駒にしやがった

のか！？」
「みたいだね。Ａクラス戦力にも被害が出て、ＢとＤの戦力は大半やられた」
「くそっ！　……届かねえのか？」
見抜けない策ではなかったはずなのに見抜けなかった事が、雄二に重くのしかかる。
状況、戦局……そして何よりも、力量の差という物に。

ところ変わって……

「……むっ、無念」
「少しは楽しめた……というところか？　考えてみれば、近い点数差との勝負など初めてだな。感謝する」
鉄人に連行されていくムッツリーニを見送り、見えなくなった所で……。

「……まずは１つ」

第百六十五問（前書き）

今回もバカテストは休みです。

第百六十五問

「最初はえらく積極的かと思いきや、随分と時間をかけるねえ？」
「いえ、先ほどEクラスを大神君が殲滅したという情報が」

学園長室にて。
現在高橋女史の持ってきた情報に目を通し……驚嘆するように目を見開いた。

「……稀代の天才と呼ばれ、神に選ばれし者を名乗るだけの事はあるという事かね？」
「ですが、彼のやり方はあまりにも厳しすぎるという意見も……」
「だが、文月学園においてはそれが許されるさね。敗者は常に勝者の理屈に従うしかないのは、世の常だ。悔しかったら来るべき時までに力をつけて、結果を出して見返してやれっていうのがこの学園の教えである以上、否定する理由はないのさ。大神白夜が最強である限りは誰一人として、ね」

文月学園は実践主義であり、社会に通用する人材を育て上げる事が教育方針である。
学力こそがすべてであり、優等生こそが正義であるからこそ……。
学園最優秀生徒である、大神白夜の方針を誰一人否定できる権限は持ち得なかった。

「それに世は常に不平等で理不尽さね。まあ今回は、あのバカどもの薬になってくれる事を祈るとするかい」
「どうでしょうか？　大神君が久遠君と兄弟である事は既に知れ渡っていますし、2年の間では弟を守るためにこの戦争を仕掛けたの

ではないかと……」
「……本当にバカにつける薬はないもんだね。あの男はその振る舞いと非情さゆえに、観察処分者にという意見が出たほどの男だというのに」
「彼は振る舞いこそ問題はあれど、代表としての手腕や成績などに文句をつけようがありませんからね」

その他にも、天才児がいるという事からスポンサーについた企業だってある。
……早い話が実際にそんな事したら、文月学園のイメージに大きな傷が付いてしまうからである。

「……当人それを知った時には激怒したそうだけどね」
「無理もありませんよ。内心で学園の客寄せパンダ扱いされているなんて、プライドの高い彼からすれば当然です」

ところ変わって……

「なんてこった！　見抜けない策じゃなかったはずなのに、くっそぉ……」
「……雄二」

逃げ帰った雄二は、被害状況をまとめてショックを受けていた。
Ａクラス戦力に被害が出て、Ｂ、Ｄクラスはほぼ致命的。

そんな雄二に、そっと寄り添い軽く抱きしめる翔子。

「いや、坂本君ばかりせめられない。僕たちだって、単独でのクラス殲滅を囮にするどころか、残存戦力の大半を捨駒にするだなんて

予想できなかった」

「あの野郎、正気の沙汰とは思えねえ。単独でのクラス殲滅だけでも無茶だってのに、それを囮に自分以外の代表格まで捨駒にしやがるなんて……」

「だが、嘆いてばかりもいられない。代表の数ではこちらが有利になったが、戦力はＡクラスに被害が出てしまった」

出入り口を利用しての防衛戦線は、構造上どうやっても１対１になる。

だからこそ、ＦＦＦ団得意の特攻は殆ど意味をなさなくなる戦線を敷いた。

……というだけではなく、範囲の狭い戦線を突破するにはＤ、ＣならＢクラス、ＢならＡの様に高火力が必要となる。

そこをついて、白夜は各クラスの出入り口に防衛戦線を敷いて、それをカムフラージュにＡクラス別働隊の存在を隠した。

「ねえ坂本、一体どうするのよ？」

「わかんねえよ！　……くそっ、くそっ……」

「……落ちついて、雄二」

「ダメだ。無理もないとは言え、完全に大神先輩の力に呑まれてしまってる」

最も力量の差が理解できただけに、完全に雄二は呑まれてしまっていた。

一方、３年Ａクラスにて。

「どういう事だよ！？　あの展開、まるで俺達が破られること前提

で動かしてたみたいじゃないか！！」

生き残ったB、C、Dクラスの生徒が、戻ってきた白夜に問い詰めていた。

「だからどうした？　私はお前たちに防衛戦線を組むよう指示を出しただけだ。破られた場合の策を考えないとでも思っていたのか？」

「その策がどうして捨駒みたいな扱いなんだ！？」

「捨駒？　……防衛戦線を破られておいて、まともな扱いを期待でもしていたのか？　指示した事を果たせない役立たずの制裁としては、捨駒扱いなど軽いほうだろう？」

当の本人は抗議に対して、表情一つ変えず涼しい顔のまま抗議に対して淡々と説明。

元々白夜にとっては、防衛線をやぶられようがやぶられまいがどうでもいい。

自分さえいれば、3年に敗北はあり得ないのだから

「まあその先を言いたいのなら、防衛戦線を破られた制裁を受けてもらうが」

「うっ……」

「それにそういう事はな、戦線を破られずに終わってからやる物だ。それなら私も、お前たちを甘く見ていたという事で謝罪はしてやる」

「……くっ」

それらからそっぽを向いて、自分の席に着き……。

「ここからが大詰めだ。これより最終準備に入る、補充が必要な者は早急に行え。私は少し休む」

そこで水を打ったかのように、教室中が鎮まった。

「え？　……大神？」

「大詰めだと言っただろう？　万全を喫するための準備だ」

白夜の点数はそう減ってはいない。

ただ保健体育は、相手が近い点数だったため削れてはいたが、普通の観点で見れば十分すぎるほど点数は残っている

周囲がそれぞれ補充テストに入る中で、リクライニングシートを倒し軽く眼を閉じた。

その脳裏で、イメージトレーニングを行いながら。

一方……

「あれ、鉄人？」

「ん？　久遠に吉井に木下……なんだ、こんなところにいたのか？」

女性陣が着替えてる間、恒例の様に外に出てる光一に明久、秀吉。

待ってる間に、鉄人がそこへ通りがかった。

……白夜との戦いに敗れた、ムッツリーニを担いだままの。

「ムッツリーニ！？　……鉄人、まさか」

「ああっ、お前の兄がやった」

「兄貴が……すまん鉄人、ちょっとだけムッツリーニと話しさせてくれ」

「？　早くしろよ」

首根っこを捕まれたままで、おろされたムッツリーニ
その顔は得意科目で敗れた事で、落ち込んでいた。

「……ムッツリーニの様子からして、保健体育勝負で負けたな？」
「……（コク）」
「となると……お前、加速は使ったか？　攻撃を当てたりとかしたか？」
「……（コク）」
「……兄貴は腕輪を使ったか？」
「……（フルフル）」
「じゃあ、そうだな……お前が腕輪を使った時、妙な反応しなかったか？」
「……（コク）……微かだが当てた時、微かに口元が緩んでいた」
「……そうか、ありがとう」

礼を言うと、鉄人は再度ムッツリーニを担ぎ補習室へ連行していった。

「……となると、まずいな」
「何が？」
「2年か3年か、そのどっちが勝っても俺にとってろくな事にならない流れになった」
「どういう事じゃ？」
「兄貴の目的は、最高学年首席として問題児の制裁……の陰に、恐らくだけど自分の力を蓄える目的を巧妙に隠してたってことだ。色々と手を加える事でな」

開戦のきっかけ、白夜による抗議、各クラス代表を交えての対談、

そして戦線布告。
更には、明久に対して開戦撤回を条件とした勝負を挑んでいる。
その全てにおいて、一応は回避できる可能性は含まれている。

「でも、どうしてそこまで？」
「事が学年単位である以上、私情で動かすには幾らなんでも難し過ぎるからな。それに他クラスも兄貴にこれ以上強くなられると困るだろうし、２年を制裁するという理由にも難癖がつけられる可能性もある」
「そこまでして隠す理由とは、一体何なのじゃ？」
「恐らく召喚獣の腕輪だよ。予想だけど“倒した相手の能力を使える能力”かもしれない」

光一の言葉で、明久と秀吉はゆっくりと目を見開いた。

「え？　……でも確かにそれなら。霧島さんの４００点オーバーの点数を見て様子がおかしくなった事も、島津先輩の時に使わなかったじゃなくて“使えない”じゃないかって、光一が予想した事も説明がつくよね？」
「それに、腕輪もちの情報を集めておった事もじゃ。あれは、自分が効率よく腕輪もちを倒せるようにするためじゃったか」
「だとすると“加速”はもう、兄貴の手に渡ってる事になるから、俺としても黙ってるわけにはいかなくなった。残った２年の勢力に腕輪もちが何人いるかはわからない……が」

そうするためには、３年を倒さなくてはならないという事。
それすなわち、ＦＦＦ団の解散阻止とアンチ久遠派の残党たちを助けるという事になる。

「じゃがこのままでは、その他の腕輪もちが狩られてしまうぞい。そうなれば3年側は光一の不参加に納得いかぬという声も上がるじゃろうし、危ないぞい」
「でも今更参戦しようとしても、目的がどうあれ木下さんが絶対嫌がるよ」

明久と秀吉は困り果てた。
ろくな事にならないとわかってるのに、どちらかをなさねばならない状況に。

「……っ！　よし、この手でいくか」
「え？　何か思いついたの？」
「ああっ、あまりにも難しいがこうするしかなさそうだ。話は優子達が着替え終わってからだけど、乗るか？」
「もちろん」
「光一を疑う理由などないのじゃ」
「上等」

第百六十六問（前書き）

バカテスト、ネタが全然思いつきません。

……以前出してもらったのも、面白い答えが思いつかず断念。

……申し訳ありません。

第百六十六問

普通よりも早く、上手く、正確に出来た。
……始まりは、そんなところから。

勉強ではいつも１００点で、運動会や体育ではいつもヒーロー。
他にも挙げるとキリが無いが、やる事なす事初めてでも普通以上にこなしてきた。
神童、天才、天賦の申し子……大人たちはこぞって、そう呼んだ。

思い出すのは、賞状を手に喜ぶ両親と……。

「……」

自分が成した事を妬む人間にいじめられ、傷だらけの光一。

最初は光一も、純粋に羨望の視線を向けてくれた。
誰よりも自分にあこがれ、純粋に喜びほめてくれた。

だがいつからだろうか？
そんな弟に対しての感情が……。

「……うっとおしいんだよ、光一」
「どっ……どうして？」
「お前は出来そこないでも、弟だ。だから……消えてなくなってしまえ！」

自分にとって、たまらなく不快な物以外の何物でもなくなったのは。

「ん……？」

ふと、白夜は目を覚ました。
おぼろげに周囲を見回すと、補充テストを受けてる生徒や教科書やノートを開いている生徒。

ふと両手が震え、あの時光一の背に……

「……ちっ」

先ほど見た夢を思い出し、舌打ち。
ゆっくりと起き上がり、ボキボキと身体を鳴らす。

「あっ、代表。起きたの？」
「……顔を洗ってくる」
「大丈夫？　随分と寝ざめ悪そうだけど、何か悪い夢でも……」

ギンッ！

「……なんだ？」
「……（ふるふる）」

白夜に怯える女子生徒を無視して、白夜はタオルを手にＡクラス備え付けのトイレに入り、乱暴に顔を洗い、皮膚をはぎとるような勢いで顔をタオルでぬぐい……。

「……捨てた物を振り返るなど、私はまだ甘く、弱く、罪深いか」

白夜はそう言い捨て、タオルを乱暴にポケットに押し込んだ。

自他共に、妥協を認めない……決して。

「さて、そろそろ行くとしよう。その罪は坂本雄二に策の立て方と、代表としての在り方という物を。そしてバカどもには、恐怖を徹底的に教育する」

彼は決して優先順位を間違えず、自分の立場を考え適切な行動をとる。

……早い話が、ＦＦＦ団とは行動指針が全く正反対なのである。

「……それを、私の罪の償いとしよう」

これもあくまで、力を尊ぶ身として当然の事だと考えていた。

順位から言って、代表としての責任の次でしかないが。

一方、サバ研部室

「……アタシは反対！」

光一が事の仔細を説明。

……したが、やはり優子は反対姿勢を崩そうとしなかった。

「でもさ……」

「白夜さんとはもう無関係でいればいいじゃない！　大体あと半年で卒業するんだから、それで縁も切れる！　向こうの気が済むなら、負けの１つくらい渡せばいいわ！！」

優子の言い分ももっともだった。

……が、相手は天賦の超人にして文月学園随一の智将だけに、光一

に言わせれば甘い。

「そうしたいところだけど、それだけで終わる程事はもう甘くない。この戦争に参加してないってだけでも、十分な理由になるだろうしな」

「……それってもしかして、あのバカ達が光一にこの戦争の責任全部押し付けて、騒動の抑止にならない事を利用されるかもしれないって事？」

光一の言いたい事が理解でき、優子は本気で苦虫を百はかみつぶしたような顔をした。

「まさにその通りだ」

痛む頭を押さえながら、光一はうなづいた。

「兄貴の裏の狙いが俺の予想通りだったら、それくらいは当然狙ってるだろうな。それでなくても、俺を排除するための場を整える要素や理由なんてたっぷりある」

「え？　光一、それってどういう事なの？」

「俺の見立てだと、この戦争の発端であるＦＦＦ団による3年カップル襲撃は、兄貴が裏で糸を引いてたって読んでる」

「じゃあ久遠君のお兄さんは、カップルが妬ましくてＦクラスの皆を使ったんですか？」

「違う！　この戦争の火種を得るために、攻撃させるための餌の準備をしていたかもしれないって事だ」

明久がもう1人いた。

というより、白夜の事を知らない明久という感じである。

「でももし久遠君の言う様に、久遠君のお兄さんの狙いが“２年生の腕輪もちの能力を手に入れるため”だとしても、どうしてこんな大掛かりに？」

「正確には“裏の”な？　元々３年は俺達というか、２年の所為で進学に支障が出てるのは事実だから。兄貴の思惑がなくても、３年とはぶつかる事になってたはずだ。それを利用してる以上、兄貴は代表としての立場と役目を優先させなければならないリスクはあるものの、戦争が大がかりになれば“裏の狙い”は完全に隠せる」

「そっか。戦争だと誰が誰とぶつかってもおかしくないから、光一のお兄さんが誰と戦ったかなんて把握はしきれないよ。増してや、C、Eクラスを1人で殲滅してるし……あれ？」

「おっ、明久も感づいたか？　そう、恐らくクラス殲滅にはその狙いもあったはずだ」

それでも実行できるのは認めたくないが、すごいがな。

と、光一は苦々しい顔でそう言い捨てた。

「つまり兄貴の手にかかれば、俺達みたいな核弾頭級の問題児を排除するための場や理由を整える位、造作もないんだよ。それに兄貴は、明久を欲しがってたから……」

「……ううっ、アタシのバカぁっ！　どうして覗き騒動で信用してあげられなかったのよ！？　というかそれ以前に、どうして光一に告白されたとき素直に受け入れなかったのよぉ……！？」

「今更言っても仕方ないだろ？　てか、水に流すって約束だろ」

どうやろうと戦いが避けられない以上は、優子も折れるしかなかった。

「だとしたらどうするのよ？　どっちについたってろくな事にならないなら、一体どうしろって言うの！？」

「だから、それを今から説明すんの。まあそのためには、皆の協力が必要になる……が、当然これからやる事は、不特定多数から多大な恨みを買うというリスクはある」
「不特定多数……？」
そこから明久は……。
「んむっ？　どうしたのじゃ、明久よ？」
「あの、明久君？　どうされました？」
「……秀吉、姫路さん。僕はこの敵ばかりの世界の中心で宣言するよ。僕は君たちを愛してると」
「……いきなり何を言っておるのじゃ？」
「とても、嬉しいです……明久君」
世界中の軍隊に取り囲まれた中心で、秀吉と瑞希を抱きしめ愛を叫ぶ……という、映画みたいで珍妙な場面が展開されていた。
秀吉は呆れつつも頬を赤らめており、瑞希はその突発的な告白に酔っていた。
「おい明久、脳内に敵だらけの世界の中心で2人に愛を叫ぶ場面を展開してないで、とっとと現実に戻ってこい！」
「……吉井君の思考展開にも驚きだけど、それを理解出来たあんたも驚きね。アンタ実はエスパーじゃないの？」
「俺がエスパー？　バカ言え、そんな能力あったらもっと楽な人生送れただろ。いじめっ子から逃げたり、優子の風呂げふげふっ！！　……いじめっ子を撃退したり、優子のすかーいでででで！　ごめんなさいごめんなさい！！」
「ねーねー愛ちゃん、作戦会議どうなったの？」
「あっ……あはは……」

徐々にだが、優子もふだんの調子を取り戻しつつあった。
光一は右関節を取られつつ、今まで感じたどことなくぎこちない態度が軟化している事に……

喜びつつも、複雑だった。

更に一方その頃。

「……こうなったらやむおえん。最終兵器を使う！！」
「最終兵器？」
「そう！　これなら勝てる。いかに大神白夜がずば抜けた力を持っているとはいえ、これに生身で勝てたら奴は最早人間じゃない！」
「……負けたらどうするの？」
「なあに、幾ら奴とて無傷で勝てるわけがない……よし、奴らに動きが出次第作戦実行に移す！！　気合入れろ！！」
「「「おぉおおー！！」」」

第百六十七問（前書き）

バカテスのネタが……。
全然思い浮かびません。

作者の苦労が身にしみます。

第百六十七問

「とまあ、こんなところか」
「……確かに、両方から反感買うわね絶対」
「心配しなくても、スタンガンで脅されてたとでででで！！」

光一の言葉を遮る様に、優子が光一の頬をつねりあげた。
肉の弾力性をあまり感じさせない、引っ張れば伸びる皮の様に簡単に引っ張り上げられた。

「光一、次言ったらこの程度じゃ済まさないわよ？」
「調子が戻ってきたとはいえ、なんか色々と調子狂うな」
「じゃろうの。あの頃は光一に対して、思いやりのかけらもなかったのじゃ」
「……だから、その分の挽回しようとしてるんじゃない！」

優子は優子なりに、過去の清算はするつもりだった。
光一がどう言おうが、これだけは決して譲れないという覚悟で。

「でも、どうしてこんなことを？　久遠君のお兄さんのもう一つの目的が予想できたのなら、早く皆に教えて対策を練ってもらった方が……」
「ダメだ！」

光一が目の笑ってない笑顔で、瑞希の意見を一蹴した。

「現状でそんな事したら、雄二やあのバカどもが黙ってるわけないだろ。それを利用して3年側に抗議どころか、最悪俺と明久が屈託して自分達の安全の為に2年全体と腕輪もちの能力を売り渡した…

…なんて妙な事になりかねない」
「じゃろうな。ただでさえ光一と白夜殿が兄弟である事も問題になっておる以上、どうなるかなど火を見るより明らかじゃ」
「それに加えて、さっきも言ったが3年の俺達に対しての不満は大きい。兄貴の手綱がちぎれたりしたら、それこそ文月学園存続すら危ぶまれる大騒動に発展する可能性だってありえない話じゃない」
「恐らくだけど坂本君たちは、白夜さんの対応策で手いっぱいのはず。そんなこと考える余裕はない……白夜さんの事だから、絶対これも織り込み済みよ」

尻尾をつかむ事が出来ても、引きずり出せば大惨事。
あまり面識のない瑞希も、白夜の手腕に目を丸くした。

「学園が潰れて貰って困るのは、お互い様だろ？　だから最悪の事態を回避するには、こうするしかないの」
「……わかりました」
「わかればよし。“以前と違って”物わかりがよくて助かるよ」
「「……（さっ）」」

光一の嫌味を含めた発言に、瑞希と優子がそろって顔をそらした。

「さて、残存戦力がそろそろ纏まるはずだから、何らかの動きがあれば即開戦だな。後はどこで戦線が展開されるかが問題……ん？」

ふと、光一の不幸とケンカに明け暮れた日々により研ぎ澄まされた第六感が、大きな警鐘を鳴らした。
ＦＦＦ団のどす黒い湿気の様な不快感とも、兄や鉄人の様な圧倒的強者特有の威圧感とも違う、異質で異様で……。
すべてをどん底に引きずり込み、喰らおうというような……そんな、深い闇の様な。

「……また何か察知したの？」

既に光一の直感は、明久たちにとっても最早聞き逃せない重要な予言となっていた。

「……多分だけど雄二が、厄介と愉快の二人三脚大暴走って感じの何かを動かした気がする」

「厄介と愉快の、二人三脚大暴走？」

「この感覚は、恐らく……いや、絶対あいつだ」

ところ変わって、３－Ａ教室。

「ん？」

「？　どうした、大神？」

「何かがここへ来るな」

ドドドドドドドっ！！

「……いや、すぐわかるか」

ガラっ！

「殺死殺死殺死殺死殺死殺死殺死殺死！！」

教室の戸をあけて現れたのは、何かいいようのない異形の生物。

Ａクラスの白夜を除く全員が悲鳴を上げ、ざっと窓側に後ずさった。

「……常識外れに無能な代表に異形集団、そして謎の人外か。２年

のバカどもはどいつもこいつも、常識どころか私の予想を大きく上回ってくれる物だ」

白夜はため息をつき、自分に殺意を向ける異形生物を見据えボキリと指を鳴らした。

「その声、どうやらあの時の蛮人娘か」

「バンジン？　バンジンはアナタデス！　オンナノコニキガイヲクワエルナド、サイテイノキワミ！！」

「私は貴様らの様に、感情任せの暴論で無意味に攻撃を加えた覚えはないが……まあいい。高城、お前はすぐに残存戦力を率いて2年を攻めろ。これは私がやる」

声を出せないのかうんうんと頷き、高城と呼ばれた生徒はすぐに教室内の生徒を率いて出て行った。

「サアブタセンパイ、ミハルノアイノチカラデジゴクニタタキオトシテアゲマショウ！！」

「愛の力？　……ふんっ、そんな汚らわしい物でどうにかなる程、私は崩れやすく生まれた覚えはないのだがな」

そういった瞬間、美春の手からカッターナイフが投擲された。

当然の様に白夜に受け止められ、通用はしない。

「ブジョクシマシタネ？　ミハルノアイヲ、ブジョクシマシタネ！？」

「愛などな、余計な物にすぎないから余計な物や害悪しか生まん。異端審問会とやら然り、貴様然りな。人と人との間柄など、利用価値があるか否か、それだけで良い」

「ヤハリジゴクニオトサネバ、ミハルノキガスミマセン！」

「やってみろ。貴様ごときに出来るのならな」

動作もなく白夜に飛びかかり、白夜はそれを迎え撃つ。
射程距離に入ったとみなした白夜が、拳を突き出すと……

「ケケケケケケっ！！」

途中で軌道を変え、白夜の横からどす黒い妖気の様なものをまとった腕を振り下ろした。
その手が白夜の顔面を捉える寸前……

ドゴっ！

「がふっ！」

十八番の“超反応”で察知した白夜の拳が、美春の鳩尾に食い込んだ。

「……不可解な技が出来る様だが、倒せない相手ではないらしいな。どんなに異形な様相をしていようが、所詮は人間。構造上の弱点までは変わらん」
「……げふっ、げほっ！　キルキルキルキルキルキルキル！！」

せき込みながら、いったん白夜から距離を取ろうと……

「どこへ行く？」

したところを狙い、白夜が足払い。
躓いた所で、首を踏みつけた。

「どうした？　愛の力とは、こうも簡単に踏みいじれる程度か？」
「ギっ……キシャアアアアア！！
「……少々手間取りそうだな」

2年教室階、階段前にて。

「周囲を警戒しろ！　多数で囲んで確実に倒せ！！」

追いつめられている以上、雄二は今回も指揮を執っていた。
ここを押し切られたら、もう勝ち目はない。

この前線で、いかに被害なく美春との戦いで消耗しただろう白夜を倒せるか。
その方法を模索しつつ。

「しかし坂本君もえぐい事をする」
「じゃあどうやってあんな、鉄人でも倒せるかが怪しい超人野郎を倒せってんだよ！？」
「でもだからって、あれはやりすぎじゃ……」
「これでも心配な位だ！」

雄二の言い分は、流石に久保と美波も否定できなかった。
何せ鉄人西村でさえ、彼を倒せるかどうかが怪しい位なのだから。

「……大体こんな苦労させられるのも、全部光一に明久が逃げたりしたせいだ。これが終わったら覚えてやがれ」
「……君もたいがい往生際というか、諦めが悪いね？　というか彼にしてみれば、メリットも何もない上に、木下さんがお兄さんと接触させる事を嫌がってるんだから」

「学年の問題だぞ？　私情は二の次に決まってるだろうが。大体ここで異端審問会が解散になって、アンチ久遠派残党もろとも3年の雑用になったら、俺は誰を利用してあのモヤシを攻撃すればいいってんだ！？」
「それも思い切り私情じゃないかい？」

その戦線の影にて……

「えーっと、大神君はまだみたい。フィールドは……保健体育みたいだね。愛ちゃんとお姫ちゃん、そしてあたしは腕輪が使えるから好都合」
「好都合ではあるけど、愛子と姫路さんは気をつけてね？　先輩はもう奪われてる可能性が高いけど、２人が白夜さんにやられたら本末転倒なんだから」
「わかってるよ、ボクだって光一君を傷つける力として奪われるなんていやだもん。それに大丈夫、光一君の考えた策なんだから。上手くいくよ」
「はい。それに明久君だって頑張るんですから、今度こそ信じたいです」

さやか、優子、愛子、瑞希は光一の策の為に、身を潜めて機会をうかがっていた。

その一方で……。

「さて……後は機会を待つだけだ」
「……僕達が中核、なんだよね？」
「うむっ。緊張するのじゃ」
「いきなり呼び出したかと思えば、今度は何をする気だ？」

「何って、戦争を（俺達にとって）良い形で終わらせるためだ。大体優子達に頼んでる時点で、少しは信じてくれても良いだろうに」

光一、明久、秀吉はとある場所に鉄人を伴って忍び込み、そっと様子をうかがっていた。

第百六十八問（前書き）

バカテストのほうが難儀って、ある意味すごいというか……
作者の手腕に本気で尊敬しちゃいます。

文章作るほうより、バカテストで悩んでる自分です。
なので、ないほうが更新も少々早めです。

第百六十八問

2年と3年の戦いは、意外な事に平行線だった。
Aクラスの人数に差がある3年が有利のはずだが……。
それが大きな要因となって、均衡を保っていた。

「うぉぉおおおお！！」

FFF団の生き残りの特攻を恐れ、数を投入できないという現状。

「よし、このまま押し切って……」

「特に想定外の事は起こっていないようだな」

離れているはずなのに、その声だけは異様に場に響いた。
そして……

「やった！　大神が来たぞ！！」
「よかった。これで勝負は決まったも同然だ！」

3年の士気が急上昇し、勢力図が塗り替えられ始めた。
2年は対照的に、恐怖の大王が降臨したかのように恐れ、士気は低下していく。

その手には、白夜の手で気絶させられた清水美春の首根っこをひっつかみながら……

「静まれ！！」

そう言い放ったとたん、戦場その物が支配されたかのように静まった。

「総員、“今から”私が敵側の代表に進むための道を造れ！　邪魔だと判断した場合、敵味方姦計なく潰す！」

「え？　おい、大神」

「……」

「「「ひいいっ！」」」

3年側が男女問わず、白夜の無言の威圧で涙目の必死な形相で突撃した。

2年側もそれはたまらないと、ＦＦＦ団を中心に迎撃。

「……相変わらず、情け容赦ねえ指揮だな。あれどう聞いても本気だ」

「だがただでさえ数で不利なのに、それで押されたら……」

「けど、道が開けられてるわよ！？」

白夜は待つと言いながら、召喚獣を出し空き始めた道を歩き始める。それに気を取られた2年、苦戦した3年は白夜の宝剣で斬られ貫かれ、完全に力ずくで道を開かれた。

数的に、やられたのは明らかに3年のほうが多いにもかかわらず、白夜はまるで将軍の凱旋の様に歩む。

「私の忠告は、どうやら身にならなかったようだな」

「……テメ、味方も躊躇なしかよ？」

「だからどうした？　私には貴様の様に、趣味で特定を犠牲にして喜ぶ非効率な趣味はない。ただ無駄な犠牲を好まないが、邪魔だと判断した場合は排除するというだけだ」

「……だからって、道筋に立ってたってだけで戦死させるか普通？」
「貴様ならやるだろう？　吉井明久限定でだが」

白夜は当然、２年の情報はキッチリ集めていた。
もちろん、坂本雄二の普段の行動まで。

「だったらどうした？　まぐれでアンタの腕を斬り飛ばしたとはいえ、あんな居ても居なくても戦力にならないような奴、どう使おうが俺の勝手だ」
「それはお前の扱いが悪いからだろう。私から見れば、そこらのバカどもよりよほど使い勝手が良い戦力になる。使えないなら私の手で、優秀な戦力として育ててやるさ」
「……最高学年首席ともあろうお方が、随分とあんなバカにご執心だな？」
「まぐれだろうがなんだろうが、私相手にそこまでやった以上評価して当たり前だ。大体傷一つつけれん分際で何を偉そうにほざく？」

事実である。

「だったら傷一つと言わず、消し飛ばしてやる！！」

背後から須川の召喚獣が、白夜の召喚獣めがけて特攻を仕掛け……。

ザンッ！！

「え？」

その瞬間、須川の召喚獣が脳天から真っ二つに。
そして白夜の召喚獣が、宝剣を振り下ろした体制となっていた。

「とっ……特攻も、通じないのかよ？」
「神に選ばれし者たるこの私が、ゴミの捨て身程度で怯むかバカが」
白夜が雄二達に狙いを定め、雄二たちも召喚獣を出し対峙。
ちなみに戦線の科目は保健体育で、雄二たちが今いる地点は文系の久保がいる事を考慮し、古典フィールド
『３－Ａ　大神白夜　古典５２５点』
ＶＳ
『２－Ａ　久保利光　古典３８８点
２－Ｆ　坂本雄二　古典２４３点
２－Ｆ　島田美波　古典７点』
「さて、第２学年次席久保利光にＦクラス代表坂本雄二、その首級もらいうける」
「ウチは無視ですか！？」
点数差にして、ちょうど７５倍である以上当然である。
「虫けらに用はない」
「虫けらって、それが女の子にいう事ですか！？」
「私にしてみれば弱肉強食以外の差別に意味はない、よって男女差別など好まない。だからこそ、私にとって貴様らの騒動は個人的にも不快この上ない」
「……だからって、ここまでの大騒動を起こします？　幾らなんでも横暴ですよ」
「私は平和的に解決しようと、歩み寄ったはずだがな？　それを足蹴にしたどころか攻撃まで加えておいて、その言い分はあまりにも図々しいぞ」

内心白夜とて、予想していたとはいえあまりにも誤差がなく進んだ事には、驚いていた。
ゆえに美波の言い分には、呆れの一言に尽きた。

「それに私のやり方を横暴だというなら、貴様らはどうなんだ？ただ感情任せに人をいたぶり、あまつさえそれを楽しみ煽る者もいる上に、それで女子の自作自演が発端の覗き騒動という、私たち３年にまで被害が及ぶ騒ぎも起こった」
「あれは、ウチらだってしらなか……」
「知らなかったからなんだ？　カメラが見つかったから問題児がやったに違いないと短絡的に決めつけ、ろくに調査もせず感情任せに攻撃をしておいて、よくそこまで言えるな？」

その言葉に、雄二はぎょっと目を見開いた。
あの事はその場にいた人間しか知らないはずである。

「どっ、どうやって調べたんだ？」
「予想にすぎないが、どうやらあたっていたようだな。やれやれ……」

白夜は呆れたようにため息をついた。
が、すぐ表情を引き締め、バチっと手のひらに拳を打ちつける。

「無駄話はこれまでだ、始めるぞ」
「くっ……」
「……援護する」

『２－Ａ　霧島翔子　古典４２２点』

「……人目があるな。さて、上手くいくか？」
「っ！　……まただ。一体どういう事だ？」

また翔子の点数を見て、表情を変えたのを雄二は見逃さなかった。

「……っ！　まさかこいつ」
「まずは貴様だ、坂本雄二！」

何かに気付いた様子を見せた雄二に、白夜の召喚獣が台座に乗り宝剣を遠隔操作。
数本の宝剣が一斉に雄二に殺到……

「「「「サモン！」」」」

する寸前、突如戦線に乱れが生じた。

『２－Ａ　木下優子　保健体育３８１点
２－Ａ　工藤愛子　保健体育４５４点
２－Ｆ　姫路瑞希　保健体育４１１点
３－Ｄ　島津さやか　保健体育４３３点』

「っ！　あれは、姫路に木下、工藤！？」
「島津……？　まさか！」

雄二と白夜は、そろって戦線で２年３年問わず攻撃を始める４人に気を取られた。
その瞬間、無人のはずのＣクラスの教室が開き……

「アウェイクン！」

突如後ろからの声に振り向くと同時に“干渉”でフィールドが消された。

「鉄人、物理フィールド展開！」

「良いだろう。承認！」

「光一に秀吉!?　それに明久まで、そんなとこに居やがったのか!?」

「……ちっ、感づかれたか。面倒になりそうだな」

『２－Ｆ　久遠光一　物理７０４点
２－Ｆ　吉井明久＋木下秀吉　物理１３３点＋１１２点』

「よう雄二に兄貴。理由はいらねえ……テメエら両方とも潰す！」

第百六十九問（前書き）

うぅっ……バカテスト、全然思いつきません。

今回はちと、内容重めです。
なので警告は出しておきます。

……叩かれる事は覚悟の上です。

第百六十九問

「木下さん!?　それに、工藤さんに姫路さんまで!?」
「理由は言えないけど、アタシ達は皆を倒さないといけないの！
「ごめんね。ボク達にもやむおえない理由があるから」
「どうしても、皆さんには戦死してもらわないといけないんです！」
「おい島津!?」
「いやいや、かわいい後輩の頼みだからね」

突如現れた、４人の女子による無差別攻撃に戦線はてんてこ舞い。
しかも４人して４００点前後という高得点なのだから、次々と２年３年は倒されていった。

そして代表格の所にも……

「テメ、どういうつもりだ!?」

光一たちが、雄二達両陣営に宣戦布告。
この戦争の根源（雄二視点）の予想外の行動に、雄二は激怒して光一に抗議し始めた。

「どうもこうも、俺にとっちゃどっちが勝ってもらっても困るからだ」
「テメエが尻尾巻いて逃げやがったせいで、どれだけ苦労してたと思ってる!?」
「なんだ、そんなに俺達が居なかったのが心細かったのか？　ならそういえば良いのに」
「ざけんな！　学年の危機に先頭きって逃げる腰抜けに誰が期待するか！！」

「……バカが、感情に流されるとは」

光一に手玉に取られる雄二を見て、白夜は所詮自分の敵ではないと確定。

白夜はそっぽを向き、明久の召喚獣に目を向ける。

「？」

ふと、点数を見るとプラス表示がある事に気付く。

「……そういえば、融合召喚の新技術がどうとか、そんな話があったな？」

実際雄二の愛人騒動や、秀吉の女性化騒動で認識はされていない。

……が、当然白夜はゴシップに流される事はない。

「……恐らくだが、他者同士の融合召喚というところか。くくっ、面白い」

状況から言って、秀吉と融合しているらしい事に、白夜は楽しそうに笑みを浮かべる。

……が、今は学年単位の試験召喚戦争の真っ最中であり、勝つ事が大前提。

自分の楽しみなど、二の次。

「……戦線はひっかきまわされているな」

そう自分に言い聞かせつつ、白夜はふと戦線に目を向ける。

光一がこのタイミングで現れ、戦線をひっかきまわす仲間がいる以上、もう1つの目的達成はもはや不可能。
その仲間にしろ、自分が近付けば敵前逃亡になろうと逃げる様、光一にされている筈。

「……やむおえん。ここが潮時だな」

自分は代表であり、最高学年総大将。
裏の目的はあくまで裏で進める物であり、優先すべきは代表としての責務。

となれば、現在最もなさねばならない事は……。

ゴゴゴゴゴゴゴゴっ！！

「ん？」

ふと白夜は、これまで感じた事もない強大な殺意を感知。

「アキ……アンタ、皆が大変だってときに木下と合体なんて、何やってるのよ？」
「え？　ちょっ、待ってよ美波。だからこれは召喚獣の……」
「話はアンタの内臓全部つぶしてから聞いてあげるわ！」
「それ死ぬからね！？」

「……つくづく私の予想を上回ってくれるな」

話を聞く限り、明久が秀吉と融合召喚してる事が逆鱗に触れたらしい。
しかし内容が内容で、しかも今は戦争中にもかかわらずで、白夜は

流石に呆れていた。

「くそっ、融合させたの失敗だったか！」

「……ごめん久遠」

「いや、霧島が気にする事じゃない」

『２－Ｆ　久遠光一　物理７０１点』

ＶＳ

『２－Ａ　霧島翔子　物理４２２点』

光一は（雄二の捨て身の説得による）翔子に足止めを食らっていた。点数的に勝てないわけじゃないが、腕輪の能力と兄を警戒し一気に攻められない状況。

「よし、やれ島田！　戦争回避のかかった戦いで無様に負けておいて、秀吉と（検閲削除）な事をしていたに違いない明久なんて殺してしまえ！」

「わかったわ！！」

更には雄二が明久への復讐として、今は戦争中だというのにそれを煽り始めた。

「大人しくしなさいアキ！」

「内臓潰されたら確実に死ぬから！」

「しょうがないわね。じゃあ特別に心臓だけで許してあげるわ」

「一番潰れちゃいけない内臓だからね！？」

明久めがけてパンチを繰り出したとたん……

「えっ！？　きゃあっ！！」

突如襟首を掴まれ、いきなり引っ張られ尻もちをついた。
美波は尻をさすってすぐスカートを抑え、その引っ張った当人である白夜に抗議。

「なっ、何するんですか！？」
「目障りだ、後にしろ」
「ほらアキ、迷惑になってるじゃない！」

自覚なし。

「……貴様らは私情でしか動けんのか？」
「けっ！　弟の為に学年総動員させるお兄ちゃんにだけは言われたくねえな！！」
「そっ、そうよ！　いくら弟を守るためだからって、ここまでする必要ないじゃないですか！！」
「……」

そこでチャイムが鳴り、本日は終了。
その瞬間ギリっと白夜が拳を握りしめ、その次の瞬間……悲鳴がこだました。

一方、優子達は。

「え？　今の悲鳴、なんですか？」
「向こうからだよ？　……何かな？」
「……急ぎましょ」

優子が胸騒ぎを感じ、人込みをかき分けて悲鳴が上がった地点へと

向かう。
瑞希と愛子もそれに続き、一路光一たちのもとへ。

「優子、どうしたの！？」
「……嫌な予感がする。やっぱり、光一じゃなくてアタシが行くべきだった」

優子は光一を白夜にぶつける事を、最後まで反対していた。
実際この戦争にしろ、優子は光一がもう一度白夜にぶつかる事が確定している以上、参加などさせたくはない。
……もう一度、あの時の様な事があったらと、そう考えたくない一心で。

「ちょっとごめん、どいて！」

ようやく最後の人込みをかき分け、見た光景は……

「なっ……！」
「こっ……光一！？」
「久遠君、明久君！？」

足元に散らばる、スタンガンの残骸。
そして白夜に顔面を掴み上げられ、力なく手足をだらりとさせた光一があった。
その顔面を掴む手を、少しずつ赤く染め上げながら……

「こう、いち……やめ、て……」

更に白夜のもう片腕には、光一をかばおうとし逆にやられてもなお、手を伸ばそうとする明久が。

「ちっ、私とした事が、自分を御しきれなかったか……まだやる段階ではなかったというのに」
「……がっ、我慢？」
「言ったはずだがな？　私は心を否定する。そんな物があるとみられる事自体が不快だ」
「たったそれだけで、そこまでやるか！？」
「やるさ。それに貴様らの認識がそんなでは、このまま続けても意味がない」

白夜はそう言い放つと手を離し、光一が倒れ伏すと背中を踏みつけた。
かつて自分がつけた“古傷”の個所を。

「それにこれは、お前たちが望んでいた光景だろう？　それをかなえてやったんだ、文句を言われる筋合いは何一つあるまい」

何一つ曇りのない笑みを浮かべながら、白夜は光一の背を踏みにじり続ける。
……その手に感じる明久の悲しみなど知った事かと言わんばかりに、迷いも悲しみも怒りも何一つなくただ当然の様に。

第百七十問　（修正）（前書き）

問題提供がありましたが、良い答えが思いつきませんでした。
つくづくすみません。次は出しますので。

第百七十問　（修正）

「そこまでだ」

白夜は一部で“非情な涼鉄仮面”と呼ばれるほど、感情どころかその涼しい表情を変える事はない
その白夜が私情で、しかも実の弟を攻撃した事にあっけにとられた鉄人が我に帰り、光一を踏みつける白夜を羽交い絞めにし、それを遮った。

それを見た愛子と優子と瑞希が、急いで2人に駆け寄り白夜から引き剥がすように距離をとった。

「光一君、大丈夫!?」
「光一、しっかりして!」
「明久君、大丈夫ですか!?」
「「「殺せえええええ!!」」」

生き残りのFクラス面々が、明久と光一めがけて襲いかかろうとして……。

「黙れ」

羽交い絞めされてもなお鉄人級に威圧感溢れる白夜の喝でひるみ、委縮してしまった。

「……西村先生、手間をかけてしまい申し訳ありません」
「ん？　……いや、気にする事はない。流石のお前ですら、このバカ達の聞き分けのなさは手を焼くようだな」

「……いえ、自分を御せなかった私の失態です。確かに2年の、特にFクラスの男女問わずの無能さと思慮の無さと下品さと育ちの悪さと……（以下数十省略）……はあまりにも私の予想外すぎましたが」

「……言いすぎの上に多すぎだろ！？」

流石に雄二も、その言葉に勢いがなかった。

「事実だ。私はお前たちに、この戦争の理由を何度も説明した筈だ。だというのに、お前たちはそれを一切理解しようとすらしないどころか、私を兄弟愛などという汚らわしい物で学年単位の戦争を起こすバカ者と見る。その上、戦争そっちのけで私情優先のバカ合戦など、それ以外どう表現しろと？　まさかここまでやって理解できんとは言わんよな？」

「たかがそれくらいでそこまでやるのか！？」

「私は、始まりから譲歩はしてやっている筈だがな？　それを幾度となく足蹴にしておいて、図々しいにもほどがあるだろう？　いっそお前たちを1人残らずこうしてやろうか？」

その場全員が、白夜にやられた明久と光一に目を向ける。

ＦＦＦ団が再度飛びかかろうとし、白夜に威嚇された事を除けば全員があなってもおかしくないと想像しただけで、身がすくみあがった。

「でっ、でも、幾らなんでもやりすぎじゃないですか！　あなた、久遠のお兄さんなんでしょう！？」

「ああそうだ。こんなのでも同じ胎から生まれたという事実がある以上、兄弟である事は否定できん。弟とはよんではやるが、大切にしてやる義理はないんだよ。だがそれ以前に召喚獣くらいでバカ合戦に興じ、内臓を潰そうとするバカにだけは言われたくない」

「ばっ、バカ合戦って……それは仕方ないんですよ！　アキがいやらしい事するから！！」
「状況をわきまえない時点でバカ合戦だと言ってるんだ。やれやれ、吉井明久も気の毒にな。こんな厄病神にとりつかれて」
「やっ、やく……！？」
美波を無視して、ふとある地点に目を向ける。
横たわる光一の手当てをしている優子に。
「……確か隣に住んでいた光一の幼馴染の木下秀吉、もしくは木下優子だったか？　確か姉の方が、光一の妾という」
「その姉の優子です。それより意外ですね、アタシ達に目もくれなかったあなたが、アタシ達の事覚えてるなんて」
「優秀すぎる頭脳を持つ欠点だ。しかし……」
自分でそこまで言うか？
……とその場全員思ったが、その点数や手腕が否定はできない以上閉口しかできなかった。
「一度は光一をソデにしておきながら、あの騒動の後でのうのうと妾になったというから、どんな尻軽かと思えば……」
「否定はしません」
「成程、義妹……と呼ぶべきか？　そこのバカ達とは違う様だな」
興味を失い、そっぽを向いた白夜は鉄人西村と向き合い……
「西村先生。この戦争、私の不正行為による失格をもって終結とします」
周囲がどよめき、雄二たちは意外そうに白夜を見た。

「え？　どっ、どういう事だ？」
「この戦争はあくまで、貴様らバカどもへの制裁が目的だ。制裁は私情をはさまず、公正の精神でなさねば、そこの蛮人娘の様にただの暴力になり下がる」
「ばっ、ばん……うっ、ウチは！！」
「私情をはさんだ時点で、私の目的は意味をなさなくなる。こいつらと同類に堕ちたくはありませんので」

美波の抗議を遮り、白夜は言葉を斬った。
3年で反対は……意外な事に一切なかった。

「おい大神、納得いかねえぞ！！」
「そうだ、たかがそれくらいでこのバカどもを許すってのかよ！！？」

とある“変態”コンビを除いて。

「制裁に私情をはさめばこいつらと同類だ」
「だから何だってんだよ！？　このバカどもに俺達が受けた分払わせにゃ、俺達のきがすまねがふっ！！」

一瞬で間合いを詰め、夏川の顔面に拳をめり込ませ振り抜いた。
夏川は一瞬の事で何が起こったか理解できず、地面にたたきつけられあっさり意識を手放した。

「恥をさらすな」

他はもとより、白夜のおかげでここまで来れた以上、否定できる訳もなかった。

これを持って、学園史上初の学年単位の戦争は終結……

「はーっ、助かった。これでＦＦＦ団の存続危機は免れたか」
「吉井に久遠がボコられたとこも見れたし、最高だな」
「ああっ、最初からこうしてればよかったぜ。吉井と久遠を生贄にすれば済んだんだから、まさにノーリスクハイリターンだな」
「違いない。何せ学年の害にして恥のクズコンビなんだからな、あははっ！」

しかしそこはＦＦＦ団。
空気読まず、バカ発言を連発し……

「っ！？　おっ、おいバカ！　やめろ！！」
「……待ってください」

優子の堪忍袋を、緒を切るどころか袋そのものをはじけさせたそれに気付いた雄二があわてて止めようとするも、既にとき遅し。

「どうした、木下？」
「攻撃はあくまで2年としてではなく、第三勢力を名乗ったアタシ達が受けた物です。その処分に対しての決定権は、白夜さんではなくアタシ達にある筈です」
「……成程な」

優子の思惑を察知した白夜は、頭をかき優子の茶番に乗ってやることとした。
事情はどうあれ立場や目的の為ではなく、自身が戒めていた私情で攻撃した以上それに従う義務がある。

「で、私にどうしろと？」

「今の戦争終結撤回と、いくつかの条件を呑んでください」
「木下、戦争終結撤回はダメだ。宣言された以上、もう結果として出ている」
「……じゃあ白夜さんにいくつかの要求があります」
「言ってみろ」
「おっ、おい。大神？」
「私の失態だ。責任は私が取る」
「……だったら、３人だけでお願いできますか？」

そこで優子は、解放されたムッツリーニを見つけ手招き。
それからムッツリーニに耳打ちして、ある物を渡すと鼻血を垂らしながら頷く。

優子と白夜が鉄人の立ち合いである教室に入り、３人きりになった所で……。

「おいムッツリーニ、すぐに盗聴を」
「……（ふるふる）」
「……俺の秘蔵を３冊でどうだ？」
「……（ふるふる）」
「……一体何を条件に黙らせたんだ？」

その条件とは、秀吉の寝顔写真とさやかへの（趣味の伝手による）コスプレ案の譲渡。

一方……

「……その様子では、やはり私の裏の目的は気付いているようだな？」

「はい。正確には光一が気付いたんですが、貴方の腕輪の能力は戦った相手の腕輪の能力を奪う事ですよね？」
「正確にいえば、色々と条件はあるがその通りだ」
白夜の腕輪の能力は“強奪”、敵の腕輪の能力を倒す事で奪える能力。
ただし奪うための条件も当然存在する。

・自分と敵の召喚獣が互いに４００点オーバーである事。
・敵召喚獣の腕輪の能力と発動条件を把握する事
・敵召喚獣の腕輪の能力による攻撃を受ける事。
・その戦闘で自分の手でその敵召喚獣に勝利する事。

以上の条件を満たす事で、白夜の召喚獣は敵の腕輪の能力を奪える。
しかし能力を使用するにも、普通以上に厳しい条件も存在する

・点数消費がオリジナルより多い。
・１度につき１つしか能力は使えない。
・能力の切り替えは点数を消費しなければ出来ない。
・腕輪もち自体がそう多くはない為、手に入れられる能力自体が少ない。

「なるほど、裏の目的に関わる事をするな、か？」
「はい。後さっきふざけたこと言ったバカたちを駆逐してください。以上です」
「それだけでいいのか？」
「ええ。この戦争がどうあれ、どうせ2年が変わる事はないでしょう？　３年でも光一を良く思わない人が多い以上、ここで白夜さんに光一に関わるなと言ったところで意味がないどころか、余計に大きな騒動になりかねません」

「賢明な判断だ」

優子に感心しながら白夜が軽く笑みを浮かべ、その場を去ろうとする。

「……最後にもう一つだけ、教えてくれませんか？」

「なんだ？」

「どうしてあの時、光一を傷つけたんですか？　……あの頃はまだ、光一に対してお兄さんらしさがあったはずなのに」

「ああっ。確かに私は光一は出来そこないでも、大事な弟だとは思っていた。だがな、それは私にとっては不快な物だと気付いた」

「不快……？　どうして？」

「もう１つだけ、じゃなかったのか？　……それに聞いたところで、普通とは違う異常な理解観点だ。お前に理解は決してできない」

自分が異常者である。

それに気付いていながらもなお、それを進もうとする事に優子は畏怖を覚えた。

「……アタシは、あなたを決して許せない」

「許せないなら、私をねじ伏せる事だな。力以外で私は止まりはせん」

「……アタシには、あなたに勝てないことくらい理解できます。でもアタシは」

「大事な者のため……か？　理解できんな」

第百七十一問　エピローグ

問題　次の言葉を漢字に直しなさい

『せいこううどく』

姫路瑞希の答え
『晴耕雨読』

教師のコメント
正解です、流石は姫路さんです。
この言葉の意味は、晴れた日は畑を耕し雨の日は書物を読む。
つまり勤勉を表す言葉ですね。

ＦＦＦ団の答え
『性交有毒』

教師のコメント
……君たちがいる限りはそうでしょうね

久遠光一の答え
『成功有徳』

吉井明久の答え
『聖光有徳』

教師のコメント
間違いなのに、偉くありがたみを感じる答えです

土屋康太の答え
『性交万歳』

教師のコメント
“うどく”の部分はどこに行ったのですか？

「というわけだ。だがあくまでそれは、ＦＦＦ団に対しての物……よって、改めて要求する。即刻ＦＦＦ団を解散しろ」
「バカを言うな！　ＦＦＦ団こそが正義だ、解散してはこの学園の正義はどうなる！？」
「……だが、その正義が我らに害となった。その事を理解できんというなら、どの道貴様らの存在ある限り戦争の火種は絶えはせん」

バシッと拳を掌に打ちつけ、表情が戦闘に移行される。
鉄人の様に重量感を感じさせるそれではなく、まるで刃の様に研ぎ澄まされたかのような威圧感を発し、それだけで周囲でヒッと悲鳴が上がる。

「きっ、木下さん？　一体俺達に何の恨みがあるんですか！？」

聞けば提案は、優子からなされた物。
優子も笑顔で肯定していることも然る事ながら、白夜の態度にウソや虚偽を当てはめる事自体不可能であり、どうやっても言い逃れが出来ない。

「恨み？　……そんなのたくさんあるわよ？　主に光一絡みでね」
「久遠がらみって、それで恨まれる理由がわからない！」
「そうだよ。木下さんはあいつに弱みを握られて、仕方なく妾をやらされてるんだろ！？」
「だったらあんなカス、殺した方が木下さんの為じゃないか！！」

優子は笑顔をひきつらせる事なく、バカどもの抗議を聞いていた。
その眼が笑ってはおらず、徐々に頭に血が上り始めている事を白夜意外に悟られないまま。

「……白夜さん、“手早く”処分遂行お願いします」
「よかろう」

断末魔が……響く事はなく、“手早く”事は遂行された。
……全員が一撃でつぶされる事で。

２－Ａクラス教室にて。

「大丈夫、光一？」
「……立てないわ頭がぐらぐらするわで、最悪だ」

優子の席のリクライニングシートで、ダメージ抜けずぐったりと横になっている光一。

その近くでは、秀吉に肩を借りながらよろよろと立つ明久と、先ほどまで光一を手当てしてた愛子が、心配そうに光一を見ている。

「……君は随分と兄を毛嫌いしてたが、兄の方も同じなんだな？」

そこで唐突に、久保が話しかけてきた。

兄弟による惨事は、弟を持つ彼からすればあまりにも信じがたい光景だったがゆえに。

「なんでかはわからねえがな。天才として生まれたが故の狂乱じゃねえの？」

「……しかしそれでも、幾ら問題児だとはいえ」

「そういえば久保には弟がいたんだっけか？　じゃあ本当なら笑いたいこの光景も、笑えはしないってところか？」

「光一、久保君がいくら光一を嫌ってるって言っても、そんな趣味の悪いことする訳ないじゃないか」

明久のその言葉で、久保は内心では感極まっていた事は（明久以外が）傍から見て理解出来た。

「はっはっは、過激派筆頭が無様な姿さらしてるたあ、滑稽だなあおい！」

「……その悪趣味な奴、御到着だ」

ストレスに身体、更に耳障りな声と来て、光一は気が遠くなるような感覚を覚えた。

その声の主、根本恭二は光一がリクライニングシートで横になってる様子を、心の底から楽しそうにじろじろと悪寒を走らせるように見始める。

「なんだよ、そんなに面白いか？」
「ああっ、面白いね。何せ文月学園最悪の過激派筆頭にして、全校生徒の畏怖を受ける凶王様がそんな無様な姿さらしてんだからよ」
ふと外を見ると、アンチ久遠派残党がそれに同調するようにうんうんと頷きながら、楽しげに光一を見ていた。
「暇なバカが多いな」
「まあ俺はそれだけじゃねえがな。へへっ」
根本が薄気味悪い笑みを浮かべて、懐からカイザーナックルを取り出しそれを手に付けた。
「テメエは腹立つクソヤローだが、武器持たせりゃ厄介このうえねえ。そのお前が武器もてないどころか動けない今、こんな千載一遇のチャンス見逃す手もねえのさ」
「うわーっ、わかりやすいな。まったく、典型的な小悪党の典型的な思考での典型的な短絡な行動って、いまどき漫画でもありえん位小さい」
「そろそろくたばれや久遠！！」
カイザーナックルを装着した腕を振り上げ、叩きつけようとして……
ポイッ！（光一が懐から出した“姫路の”クッキーを投げる音）
パクッ！（クッキーが根本の口に入る音）
ブクブクバタッ！！（根本が泡を吹きながら倒れる音）
「……ホント、予想を裏切らないな」
見事に返り討ちにあった。

「というか、光一って実は予知能力あるんじゃない？」
「あったらこんな事になってるわけないだろ……てか、優子はどうしたんだ？」
「お前の妾なら、お前の兄貴に処分を言い渡してるよ。もっとも、鉄人ともなった3人きりだから、何なのかは分からないがな」

そこで雄二が、美波を伴い入ってきた。
明久が嫌そうな顔をするのにもかまわず、雄二は光一に……。

「よう雄二、裏目にでまくりの指揮御苦労さん」
「その、なんだ……すまん」
「気色悪いやめろ」

謝罪をしたとたん、光一が心底嫌そうに突っぱねた。

「……人が悪いと思って謝ってんのに、いきなりそれはないだろ？」
「お前が俺達に悪びれることなんてないだろうが。それを気味悪がって何が悪い？」
「そうだな。お前ならそういうよな？」
「わかってるじゃねえかよ、Ｆクラス代表霧島雄二君よ？」
「「……（ガンのくれ合い）」」

周囲があわてるか、呆れるかの中で……

「……怒ってねえのかよ？」
「怒ってはいる。が、どうせ兄貴に怯えてたんだろ？」
「だっ、誰が……ああそうだよ。あいつの底知れない何かに怖いと思っちまった」
「なら良い。兄貴に怯えてるやつ相手に、いちいちかみつかない事

にしてんだよ。弱い者いじめになっちまうからな」
「嫌な許し方だな！？」

すっかり毒気を抜かれた雄二は、頭をかいて……内心ほっとした。
あの様子じゃ、触れてはいけない物に触れた様な印象があり、光一相手でも流石に罪悪感があったが故に

「ホント、乱暴なやりとりね」
「乱暴でお前にだけは言われたくない」
「どういう意味よ！？　……それより、ウチも悪かったわ。まさかここまでやるなんて思わなくて」
「別にどうでもいい。お前が“雄二以外の”人の話を聞かないの、もう当然の話だ」
「ちょっ、誤解招く言い方しないでよ！　もう、霧島さんに睨まれちゃったじゃない！」
「誤解どころか事実だろうが」

ちょっとどころかかなりの嫌がらせを含め、光一は仕返し執行。
誰だろうとただで許すほど、光一は優しくはない。

「……しかし、お前の兄貴は一体何なんだよ？　いくらなんでも、俺だってここまでやるなんて思わなかったぞ？」
「俺が知るかよ。むしろ俺だってあの時……いや、なんでもない」
「あの時？　ちょっと久遠、まさかあんた前にも」
「美波！」

美波の言葉を遮る様に、ちょうど戻ってきた優子が間に割って入った。
その先は決して触れてはならないと、いわんばかりに。

「……ねえ、明日から夏休みだし、どこか皆で遊ぶ事を考えましょ？」

「そっ、そうだね？　あっ、そうだ皆。あのさ……」

「……優子、明久、わるいな」

「……代表」

「小暮、お前も私を外道と責めるか？　弟を嬉々として痛めつけた、最低の兄として」

「いえ……私はただ、代表につき従うだけですから」

「？　……勝手にしろ。それよりも私の失態で計画はとん挫したが、それでも」

「……2年に影響を残せただけでも、目的は半ば達成はされたという事ですか？」

「その通りだ。あのバカ達を見る限り信憑性は低いが、アンチ久遠派残党たちはこの戦争で更に立場を失った。さらに言えば……」

「……成程、そういう事ですか」

「あの無能どもをはじめとして、大半が2年に対して反感を抱いている以上、代表として黙っているわけにもいかない。奴らへの制裁は終わらん……奴らがバカのままである限り。そしてその障害となるのは」

「弟さんと、吉井明久君ですか？」

「無論。結局この戦争においても、私に傷をつけた者はとある事情を除けば皆無だった。よって現時点で警戒すべきは、やはりこの2人だな」

「……ある意味うらやましい事ですね」

「？　何か言ったか？」

「いえ、何も。それより私たちも受験を控えているのですから」

「私は元々普段通りにやれば問題はない」

第百七十一問　エピローグ（後書き）

次回から海編に入ります。
いや、間話でもやろうかな？　……なんて思ってます。

第百七十二問　夏休みの友好旅行編　プロローグ（前書き）

今回から、海の話に入ります。
閑話は……ネタがまとまらなかったので。

それとついでですが、今回は光一の血縁者が出ます。

第百七十二問　夏休みの友好旅行編　プロローグ

問題　以下の語句を漢字にしなさい

『くらげ』

姫路瑞希の答え
『海月』

霧島翔子の答え
『水母』

教師のコメント
正解です。くらげは水母、または海月と書きます。

吉井明久の答え
『苦羅解』

土屋康太の答え
『九楽下』

教師のコメント
何とかこたえようとする熱意だけは評価します。

久遠光一の答え
『海？』

教師のコメント
それはくらげを使った中国料理です。

学年試験召喚戦争騒動から数日後。
照りつけるような日差しの降り注ぐ青空と入道雲の下で……

「今日は海に行くには最高の天気だな」
「ああっ、絶好の海日和だ」

Tシャツにハーフパンツというラフな格好の雄二。
そして大きめな黒いTシャツにダメージ加工ジーンズ、サングラスの光一がそろってそうつぶやいた。

そう、今日から海に行くのである。

「まったくじゃ。むね……ではなく、心が躍るのう」
「胸は躍らないの？」
「男じゃから踊らないのじゃ！」
「……今に始まった事じゃないんだから、ちょっとは落ち着きなさいよ秀吉」

薄手の白のパーカーと七分丈のパンツを組み合わせている秀吉。
そして薄手の、こちらは黒のパーカーにスカートという優子が、今か今かと待ち構えている。

「……血液パックが痛まないか心配」

ロールアップのジーンズ姿のムッツリーニが、血液パック入りのクーラーボックスを心配そうに抱えながら、そうつぶやいた。
心なしか、島津先輩が今日家の都合で不参加である事もあり、少し表情に陰りが出ている。

そこでTシャツにジーンズの明久が、光一に歩み寄った。

「光一、今日は光一のお母さんが来るんだよね？」
「ああ。場所を教えたら、近場への取材ついでに送るってよ。何せこの人数だからな」
「そうですね。実はちょっと心配してました」

タイトなデニムのスカートとTシャツの上にキャミソールを重ねた瑞希が、旅行鞄を両手に抱えながら話しに入ってきた。

「そうよね。お姉さんを入れたら１１人だから普通免許じゃ大丈夫じゃなさそうだから」
「それについては、姉さんも光一にありがとうって言ってたよ」

ロングの巻きスカートにTシャツという格好の美波が、それに便乗。
光一に対して、明久が礼を言って頭を下げた。

「……自動車の中型免許は１１人以上から」
「ボクも昨夜ネットで調べたけど、普通免許でも車次第で１０人ま

では乗せても大丈夫みたいだよ」

ミニスカートにペールトーンのサマーセーターの翔子と、ショートパンツにキャミソールだけという、露出の激しい恰好の愛子が補足説明。

「ん？　光一君、もしかしてボクのキャミの中気になっちゃうカナ～？」

「ああ。流石水泳部、健康的な日明け後がまぶしいね」

「そうだな。さっきからチラチラ見えてたが、水着の日焼けの跡が……（ブスリ！　ビクンビクン！）」

「……浮気厳禁」

冷静かつ的確に眼つぶしを行った翔子の足元では、痙攣しつつのたうちまわる雄二。

光一は呆れつつも、目薬を取り出し……

「１回５０００円」

「ぼったくりだ！！」

「冗談だよ、ほれ」

「あっ、ああ……ん？　おい光一、さっさとあだだだだだだ！！」

光一が“翔子に”目薬を渡し、雄二を力ずくでねじ伏せて目薬を刺し……もとい、点した。

「ホント、いつまでたっても雄二って成長しないね」

「（ササっ！）え？　なっ、何アキ？」

「待って！　今僕に何しようとしたの！？」

「……今俺も島田の攻撃の気配感じなかったぞ？」

「光一でも！！？」

そんなこんなで、時間を過ごす事……

「……車が来た」

「んむ？　おおっ、そのようじゃな」

マイクロバスほどの大きな車と、ワゴン車がやってきてゆっくりと一行の前に停車。

そこでふと、愛子が光一によりそいつつ……

「所で光一君のお母さんって何してる人なの？」

「ジャーナリスト。マイナー誌だけどな」

「なんだかかっこいいね」

「家に帰ってきたら記事と始末書書いてるようだけどな」

「成程、お前の性格的な問題は母親譲りか」

「俺としては、お前の性格のゆがみは誰譲りかを知りたいね」

「「……（ガンのくれ合い）」」

結局、光一と雄二は犬猿の仲である事は変わらずじまいだった。

それを遮るかのように、大きな車から玲が、ワゴンから若く見ても３０代後半の女性が下りてきた。

「はじめまして、光一の母の久遠ひなたです」

「あっ、吉井明久です。光一にはいつも世話になってます」

「姫路瑞希です。はじめまして」

「島田美波です」

「俺は坂本雄二だ」

「……土屋康太」

「……はじめまして、坂本翔子です」

「ちょっと待て！　お前は霧島だろ（バヂっ！　バタっ！！）」

皆がそれぞれ、光一の母に自己紹介。
その中で愛子が、自分の格好を気にしながら普段に似合わずおずおずと……

「あっ……はっ、はじめまして。ボクは工藤愛子って言います」
「あら、あなたが？　えっと……優子ちゃんから色々と聞いてるわ。複雑ではあるけど」
「あっ、そうでしたか？」

愛子がひなたに自己紹介してる間に……

「はじめまして、翔子さん。私は明久の姉の玲です」
「……はじめまして」

翔子が初対面の玲に挨拶をしていた。

「さて、こうしていても仕方ありませんので、早速向かいましょう」
「そうだな。さて、どういう組み分けにする？」

そして協議の結果……

玲の車：翔子、美波、瑞希、優子、愛子
ひなたの車：光一、雄二、明久、秀吉、ムッツリーニ

均等に男女別という事になった。

「……狭い車内で男だけかよ」
「何言ってるのさ雄二、秀吉が居るじゃない」
「……まったくもって失礼」

「ワシは男じゃ！！」
「んじゃ母さん、さっさと行こう」
「……そっ、そうね」

まるで光一を避けるかのように、そそくさと運転席に向かうひなた。
当然雄二はその様子を不可解に思うも……。

「……やめとくか」

折角の旅行であるうえに、この前の事もあって雄二は追及するのをやめる事にした。
……更に言えば、追及するなと言わんばかりに優子が睨んでるからでもある。

「ねえ秀吉。光一の名前って、もしかしてお母さんの名前からかな？」
「そうじゃ。光一の名はひなたから、光にちなんで名付けられたそうじゃ」
「ちなみ白夜さんはお父さんの名前が影一で、夜にちなんで名づけたそうよ」
「文字通りの光と影かよ」

ちょっとした小話を交えながら、一行は出発。

第百七十三問

問題　次の読みを答えなさい

『牛飲馬食』

姫路瑞希の答え

『ぎゅういんばしょく』

教師のコメント

正解です。同義語に暴飲暴食があります。

吉井明久の答え

『ぎゅうにゅうばさし』

教師のコメント

誰も牛と馬から連想する飲み物と食べ物を聞いてません。

久遠光一の答え

『うしのみうまたべ』

教師のコメント

いい加減さ丸出しの答えありがとうございます。

この件は高橋先生と西村先生に報告しておきますので、覚悟しておくように。

土屋康太の答え
『訂正印』

教師のコメント
解答があまりにも卑猥だったのでこちらで削除しておきました。

運転席に光一の母ひなたと、助手席に乗り物酔いをするムッツリーニ。
その後ろに明久と雄二が座り、後方席には光一と秀吉という順番で、座りながらの出発。

「そういや明久」
「ん？　なに雄二？」

ワゴン車の中で、隣に座ってる明久に雄二が話しかけた。

「お前はこれから行くところにいった事があるんだろ？　どんな所なんだ？」
「え？　ああ、うん。えっと……」
「明久、もしかして覚えてないな？」

雄二の言葉にビクッとする明久。

「まさか、そんなことあるわけないじゃないか」
「ならいつごろ行ったんだ？」
「確か、５～８年前の春か夏か秋の事で」
「範囲広すぎだろ」
「さては全然覚えておらんな？」
「……（コクリ）」

結局図星をつかれ、観念したようにうなづいた。

「つまりはついてからのお楽しみ、というわけじゃな」
「そういう事か……おい光一、１人静かに景色に浸ってないでお前も会話は入れ。本気で似合わねえぞ」
「……ＺＺＺ」

１人静かだった光一は、ぐっすりと眠っていた。
てっきり強化合宿の時の様に、景色に浸ってるとばかり思っていた雄二は面食らう。

「……この前の事があるから、ゆっくりしてあげた方が良いよ」
「……そうだな」
「んむ？　雄二にしては珍しいの？」
「いや……まあ、今回ばかりは、な」

光一と白夜の間柄を甘く見て、トラウマに触れるどころか抉るに至った事につなげたのは事実。
いくら光一が相手といえど、そこまでした以上あまり手を出す気にはなれなかった。

“気色悪いやめろ”と心底嫌そうな光一が目に浮かんだが、無視の方向で。
これはこれで面白そうだと、無意識に思っているとか何とか……。

そこで赤信号となり、車は停車。

「……ねえ秀吉君、光一は学校じゃどう？　あの子どういうわけか二股なんてしてるうえに、最近文月学園はあまり良い噂を聞かないから、ちょっと心配で」
「光一は楽しくやっておるのじゃ。確かに中学の時と同じく色々と騒ぎこそ起こしておる物の、何も心配することなどないぞい。それに姉上達の事はワシから見て、これでよかったと思っておる。」
「……そう。ごめんね秀吉君、いつもいつも」
「ワシも光一には弟分として、何かと世話になっておるのじゃ。これくらいお安いご用、ひなた殿は何もお気になさらず」

その様子に、雄二は当然明久も疑問に思った。
どう聞いても親子間で共有すべき事柄を、どうして幼馴染で弟分とはいえ秀吉に聞くかを。

「？　……あの、光一からは何も聞いてないんですか？」
「……ええ。仕事が忙しくて、あまり時間が取れないのよ」
「でもだったらどうして、光一じゃなくて秀吉なんだ？　親子なんだから……おい秀吉。まさか光一の奴、母親ともうまくいってないのか？」
「え？　……そっ、それはその、ある意味そうじゃが違うのじゃ」

歯切れの悪い秀吉に、いまだに何か躊躇ってる様子の光一の母親。
明久が疑問符をいくつも浮かべる傍らで、雄二はある程度予想が……

「……うぷっ」
「ん？　うぷっ？　って、ムッツリーニ！？　我慢しろよ！？」
つきそうだったが、吐きそうになってるムッツリーニ騒動で、うやむやとなった。

一方、玲の運転する女性陣の乗る車にて。
「……」
「？　どうかしたの、愛子？」
「え？　うん、ちょっとね」
女性陣は、助手席には誰も座らず後部に瑞希、美波、翔子。
そしてその後ろに優子、愛子という順番。

愛子の様子がちょっとおかしい事に気付いた優子が、ふと問いかけた。
「……愛子ちゃんもなんですか？」
「そうよね。今から行くのは海だから水着だし……」
瑞希と美波が、愛子の懸念を察したように話に参加し、視線を運転席の玲に向ける。
それに翔子も視線の意味に気付き、うんうんと頷く。

「……確かに、玲さんは危険」
「だよね～。ボンッ、キュッ、ボンッ！　って感じだから、あまり気にしないボクでも羨ましくなっちゃって……」

「本当に、あの胸がうらやましくて仕方がないわ」
「私はウエストのくびれがうらやましいです」
「……お姉さんの色気、ずるい」
「……って、そうじゃなくて。いや、それも気になってるけどね？」
女子らしい会話だったが、一先ず愛子の言いたい事はそうではなく……。

「ちょっと、光一君のお母さんの事が気になってて」
「久遠の？　ああっ、やっぱり身内へのあいさつって緊張したの？　確かに水着と同じくらい気にしてもしょうがないわね」
「……うん。私もお義母さんに報告する時は、すごく緊張した」
「そうですね。大丈夫ですよ、愛子ちゃんならきっと光一君のお母さんに気に入ってもらえます」
勝手に話に花を咲かせる3人に、まあ旅行だから湿っぽい話はなしだよね。
と、一応は納得して、そのままでごまかす事にした。

「……愛子も気付いたの？」
「うん……まあ、ね。光一君、お母さんと上手くいってないんでしょ？」
「……色々あったのよ。稀代の天才を生んだ家庭ともなればね」
「そう……じゃあさ、沢山楽しい思いで作ってあげないとね」
「そうね。がんばりましょ」

うん、と2人でうなづきあった。
そこで優子が、ふと視線を……

「というわけで美波、今日は妙なことしないでね」

「なんでウチにいうのよ？」
「美波だから言ってるの。この前の事、忘れたとは言わないわよね？」

美波も流石に、兄弟であそこまでとは思わなかっただけに、反省“だけは”していた。
そのせいか、いつもと違い歯切れが悪くなる。

「あっ、あれは……」
「理由はどうあれ、あれがあの事態につながったのは事実でしょ？」
「優子、その辺にしようよ。それよりボク、今日の為に水着気合入れてきたんだ。ちょっと見せてあげるよ」

そう言って、愛子は自分の荷物から水着を取り出そうとして、近くにあるかばんがふと目に入る。

「？　あれ、チャックあいてる？　うーん……閉まりにくいなあ」
「え？　えーっと、これ確か玲さんの鞄？　すみません、ちょっと中身整理していいですか？」
「はい、すみません」

そう断りを入れて、優子は鞄をひとまず開けて……

「「……」」

中から出てきたスクール水着に、あっけにとられた。

「……あの、この水着って？」
「それでしたら、アキ君が露出の少ない水着でお願いと言われたので」

「絶対そういう意味じゃないと思います……ちょっと水着ショップ寄って行きましょう。吉井君絡みだったら、絶対光一にも被害及ぶから」

「？　よくわかりませんが、その水着ではだめなのですか？　わかりました」

優子は早速起こった問題に、はぁっとため息ついた。

「……こんなんで大丈夫なの？」

光一がキテレツ姉貴と評した理由を、身をもって理解した優子だった。

それから車に揺られる事、3時間。

「……いち……こういち……」

「ん……」

ぐっすり寝込んでいた光一が、優子に揺られ眼を覚ます。

「んっ……くあぁっ……ん？　ついたか？」

ガシガシと頭をかいて車を出て、周囲を見回す光一。

緑に囲まれながらも潮の香りが届く、抜群の立地をみて深呼吸。

「ここかぁ……で、これからどうする？」

「荷物置いて、すぐにでも海に向かうか？」

「そうだね。海が見えたら、泳ぎたくて仕方なくなっちゃった。光一は大丈夫？」

「大丈夫、この前の傷ならもうふさがってるよ。海でも問題ない」
「それでは私は取材があるから、これで」
「ん？　ああ、気をつけてな」
「……えっ、ええ」

そっけなく光一はそう返し、ひなたは逃げるように車に乗り去って行った。

「それじゃ、皆荷物部屋に運んで海行こうぜ。時間勿体ないし」

こうして、夏の海で皆仲良くの旅行が始まった。

第百七十四問

アンケート　海で楽しみと言えば何ですか？

久遠光一の答え
『明久や優子、愛子達と楽しく遊ぶ事』

吉井明久の答え
『光一や秀吉たちと目いっぱい遊ぶ事』

教師のコメント
君たちも騒動ばかりというわけではない様ですね。

木下優子の答え
『光一に愛子と沢山の楽しい思い出を作る事』

工藤愛子の答え
『光一君に優子と楽しく遊ぶ事』

教師のコメント
君たちは本当に仲が良いですね。修羅場ほど君たちとは無縁な物もない気がします。

姫路瑞希の答え
『明久君の水着と皆と楽しく遊ぶ事』

霧島翔子の答え

『雄二の水着と皆との思いで』

教師のコメント
……女子でこういう回答が出ると、どうこたえていいかがわかりません。

土屋康太の答え
『女性の水着』

教師のコメント
アンケート用紙が血まみれでよく読めませんが、君ならどう答えたかがすぐわかります。

「しかし光一も、水鉄砲を持ってくるあたり銃が本当に好きじゃの」
「良いじゃん別に。他にも色々と持ってきてるから、楽しみにしてろよ？」

トランクスタイプの水着にパーカーを羽織った光一は、ポンポンと担いでるカバンを叩く。
今回はいつものようにエアガンやスタンガンではなく、水鉄砲や折

りたたまれた浮き輪や空気入れなど、今日の為に用意した遊具がたくさん入っていた。

「お主も今日を楽しみにしておったのじゃな？」

「当然。折角の皆だけで遊ぶという、癒しと安らぎのひと時なんだ。楽しい思い出を作るためには手段は選ばんつもりだ」

「意気込みは伝わったが、色々と台無し寸前じゃぞい。まあ学園のほぼ全体を敵に回しておるお主にとって、そこまで意気込むのも無理ないがの」

確かに2年になってから、騒動を起こしたり巻き込まれたりばかりだと、秀吉は思い返す。

特に兄である白夜との再会や勝負、そしてこの前の……。

「なあ秀吉、こうしてみると色々な水着があるよな？」

「んむっ？」

「だってほら、俺達男物じゃあんま種類はないけど、女ものだとビキニにワンピース、それにトランクスとか、かなりの種類あるから」

「……お主は」

心配した自分がバカだった……と、普通なら思うが、秀吉はちゃんと理解してはいた。

心配かけまいと、バカな事を言ってはぐらかすつもりだと。

「お主はまだ足りぬのか？」

「わかってねえな、秀吉は。まずは前菜で軽めに眼の保養をやってから、メインを拝む事が大事だと思うんだ」

「……それはそれで聞かれたら即座に袋叩き間違いなしじゃの」

「下準備は必要だろ。女性の水着姿でも一番見たいのは、好きな人のなんだから。俺にとってこの光景は、参考資料でしかないよ」

「一途なのか気が多いのか、よくわからぬの」
「……別に二股やってるからって、女好きである理由なんてないと思うが？」

ま、無理もねえかと呟いて、光一はふと周囲を見回して早歩きになった。

「んむ？　どうしたのじゃ光一？」
「……秀吉、今すぐ上を着ろ。俺はお前に離れてくれと言いたくない」
「？　なぜじゃ？」

現在秀吉は、今日こそは皆に男である事を思い知らせるために、“今度は”男物の水着姿。

「待つのじゃ光一、なぜ早足になる？」
「頼むから上を着てくれ、Tシャツ俺ので大丈夫だよな？」

「うわっ！　おっおい……」
「……すげえ、何かのプレイか？」
「あの人に強制されてるのかな？」
「最低、女の子にあんなことさせるなんて」

行く先々で、秀吉と光一に突き刺さる視線
……と言っても、秀吉に刺さる視線は主に男性からの欲望の物で、光一に刺さるのは女性からの軽蔑の視線。

「何をそんなに……んむ。明久たちはあそこじゃな。おーい、おぬしらー！」
「あっ、あなた達っ！　何をしているんですか！？」

「んむ？　なんじゃ、監視員の方じゃな？　そんなに血相を変えてどうしたのじゃ？」
「いや、上を着てないからだ！　ほら、早く着ろ。時間が余計にロスする！」
「？？？　どうして、上を着てないと監視員が来るのじゃ？」
「そちらの方の言う通りです！　とにかく、すぐにそのTシャツを着なさい！」
「まっ、待つのじゃ！　ワシは男じゃからこれで良いのじゃ。光一よ、なんとかこちらにワシが男じゃという事を説明……」
「この様子じゃ聞くわけないだろ。さっきから変質者を見る目であちこちから見られる俺の立場にもなってくれ！」
「話のつじつまが合わんのじゃ！！」

結局秀吉は折れて、光一が持ってきたシャツをしぶしぶ着ることとなった。
どんよりした秀吉を連れてると、今度は光一が何かしたんじゃないかと、男女から刺すような視線を向けられ……

「どっちにしろ敵意向けられるのかよ！？」
「……お主も苦労しておるのう」
「今回はお前の所為だ！」

結局、２人してどんよりとしながら待ち合わせ場所に到着。
結局自分達が最後だった。

「悪い悪い、秀吉が駄々をこねた所為で遅くなった。」
「駄々をこねた？」
「……放っておいてほしいのじゃ」
「すまん、ちょっと色々あってな……それより、何やってんだ？」

ふと光一が見ると、プールの時の水着姿の瑞希と、競泳用水着の美波がどんよりな雰囲気をまとい体育座りで座っていた。
その近くにビキニの玲と、玲の胸を掴んでるこちらもプール時の水着の翔子がいる事から……。

「……成程な。まあいい、それより優子と愛子はどこ？」
「はいはい光一君、貴方の愛子と優子はこっちだよ」

上機嫌で振り向くと、下がジーンズをカットしたパンツの水着を着て、麦わら帽子をかぶった愛子が、アピールするようにポーズをとり。
青いビキニに、パレオを巻いた優子が恥ずかしそうにもじもじとしながら、光一に何か期待する様な視線を向けている。

「……この喜びをどう表現していいかがわからないが、似合いすぎてて嬉しいという事だけは確かだ」
「やったね優子」
「うん、一緒に選んだかいがあった」

優子と愛子が手を取り、喜び合った。

「おーおー、凶王様も形無しだな」
「ほざけ。てかお前、ムッツリーニじゃあるまいし、なに鼻血たらしてんだよ？」
「いや、これは違う。翔子にやられたんだ」

ふと翔子の手を見ると、指先が赤く染まっていた。
成程とうなづいて……。

「お前も内心では動揺しまくりか」

「お前絶対わかっててワザとやってるよな？」
「冗談だよ。で、血と言えばムッツリーニは？」
「連想できるのが怖いが、あっちだ」

雄二が指さした先では、鼻血をボタボタと垂らしながらあちこちの写真を撮っていた。

「へえっ、ムッツリーニも耐性付いたもんだな。島津先輩のおかげか？」
「……そんな事実はないが、鍛えられたのは事実」
「上手くいってるようでなによりだ」
「……感謝はしている」

ぐっと光一にサムズアップ。
それと同時に、玲がムッツリーニの視界に入り……

「……っ！　（ブシャアアアアっ！！）」

いつもの出血量で鼻血を吹きだした。

「……やっぱ島津先輩より上だとこうか」
「あらあら、大丈夫ですか土屋君？」
「……日射病」
「日射病で血は出ねえよ。てかまず何する？　細かい事はもう抜きにして、遊ぼうぜ？」

結局は光一が仕切り、皆で遊び始めた。

ひとしきり遊んだ後、じゃんけんで負けた光一と秀吉がスイカと木

刀を手に、待ち合わせ場所に。

「のう光一よ、ひなた殿は……」

「わかってるよ。あれから俺だって好き勝手やり続けたのも事実だけど、簡単に許せるもんでも割り切れるものでもないのも事実だろ」

「……わかっておる」

「……天才の親ってのが、心地いいもんだってのはわかるから、別に責める気はないけど許す気もない。大体今の状態を変えるったって、どうすればいい？　俺は家族間のやりとりなんて、全くと言っていいほど知らないんだから」

光一は兄がその才能の頭角を現してからという物
それに夢中になった両親から、殆ど見放されたも同然に育ったという、さびしい幼少時代を送っていた。

「……もう良いだろ？　俺達の場合、元の形が元の形なんだから直しようがない。変わるにしても、もう遅すぎだろ。今更仲良し家族なんてどうやればいい？」

「……すまぬ」

「いや、俺も悪かったよ。毎度毎度、すまねえな」

ポリポリと頭をかいて、少し気まずそうになる光一。
そこへ……

「あっ、光一君！」

「光一！」

そこへ優子と愛子が、光一に手を振って駆け寄った。
その近くにはいかにもナンパ目的な男が数人いて、光一は首をかしげる。

「ごめんね～っ。ボク達この人の物だから」
「だからごめんなさい」

普通に考えれば、自分にはもう彼氏がいるから……って事で追い払う作戦だが。
事実とはいえ両手に花だけに、説得力が全く皆無だった

「そんなモヤシより、俺達と遊ぼーぜ」
「そうそう。おいモヤシ君、ケガしたくなかったらとっとと失せろ」
「俺達を怒らせる前に、さっさと消える事を勧めるぜ？」

故にナンパ男たちが見た目弱そうなだけに、光一に脅しをかけてきた。
光一は手のスイカ割りの為に用意した木刀を握りしめ……ようとしてやめ、目元を抑える。

「おいおい、泣いちゃうか？　泣いちゃうのか？」
「なら俺達は優しいから許してやるぜ？　さっさと……ひいぃっ！」

手を離して露わとなった、瞳孔の開いた絶対零度の瞳に全員が悲鳴を上げ逃げて行った。
光一がごしごしと目元をこすり、軽く目元をもむと……

「さて、スイカ割り始めるからいこーぜ？」
「うっ、うん……今の、凶王だよね？」
「……普通にできるようになったんだ」
「……確かにあの目で睨まれて怖気づかん者はおらんの」

なんだかんだで、光一はやはり騒動から逃れられなかった。

第百七十五問（前書き）

今回はバカテスト休みです。
……たびたびすみません。

第百七十五問

「しかし光一、よく木刀なんて持ってたな？」
「中学時代愛用してた木刀だ。何人も病院送りにした愛着のある品だから、せっかくなんで持ってきた」
「そんなのでスイカ割りなんてさせるな！」
「冗談だよ。これはこの前買った物だ、本物は家にある」
「本当にあるのか！？」

光一が用意した木刀とスイカで、皆でスイカ割り
何人かで順番にやって、現在明久の番。

「明久君、もっと右ですよ」
「違うわ、アキ。実は左よ」
「吉井君、もっと前だよー」
「アキ君、そこから左前方３２度、直線距離４．７メートルの距離です」
「吉井君、そのままっすぐ」

皆がデタラメの方向を言ってるため、明久の頭の上にいくつもの疑問符が浮かぶ。
さらに言えば、秀吉が声マネで攪乱してるため誰が誰だか聞き分けられない。

「明久、そのままっすぐだ」
「違うぞ明久、今のは秀吉だ。スイカはもっと右だ」
「え？　え？　どっ、どっち！？」
「全く、明久もまだまだだな……このワシの愛がわからぬとは」

このままでは埒が明かないので、光一が一計を投じた。
自分の声で、あたかも秀吉がそう言ったかのようにして攪乱するために。

ちなみにどっちが言ったかわからないよう、女性陣の死角になるよう立ち位置を配慮したうえで。

「っておい秀吉、俺の声使って何言ってんだよ!?」
「なっ、何を言い出すのじゃ!?　ワシは何も言っておらん!」
「いい加減な事を言うなよ」
「あのー……結局スイカはどっち?」
「あっ、そのまま3歩進んだ先で振り下ろせ」

光一の言う事に従って、そのまま3歩先に進んで振り下ろす。
……が、太刀筋がずれスイカをかすった程度だった。

「あーっ、惜しかったな明久」
「うん、そうだね」

ゴゴゴゴゴゴっ!

「で、さっき言ったのはどっち?」
「そうですね。事と次第によっては、アキ君を海の藻屑としなければなりません」
「おいコラ、島田は全然学習してないな!?　てか玲さん、アンタ秀吉を男と認識してたんじゃないのか!?」
「……ついにワシは、玲殿にまで女扱いされ始めたのか?」

島田も多少懲りたかと思ったが、やはり甘かったと光一は後悔。
で、玲まで秀吉を女扱いし始めた事に、ショックを受ける秀吉。

「はいはい。美波、そこまでよ」
「玲さんも、折角の楽しい旅行にそういう固い事を言わないで」
そこで優子と愛子が助け舟。
「どいて優子、今すぐ問いただしてアキの心臓をブチ破らないと！」
「そうですね。正直に言えば、手足を縛って今日一日海の中で過ごす位で許してあげます」
「「それどう考えても“死ね”って言ってる（ます）からね！？」」
「自業自得とはいえ、俺に平穏は訪れないのか！？」
「なんというか、ごめん光一！」
……それから数分後。
「……あーっ、疲れた」
宥める事数十分、ようやく2人は気を治め現在女性陣は昼食買い出しに。
結局スイカ割りはうやむやとなってしまい、ナイフで切ってみんなで食べた。
「……ごめん」
結局自分の所為で光一に迷惑を被った事で、明久も3人に対して申し訳ない気持ちでいっぱいだった。
「お前も大変だな」
「ああっ、お前が奥さんといちゃついてる間な」

「俺は独身だっつってんだろ！？」
「はいはい。てかお前、今日はえらく大人しいな？」
「……この前の事、悪いと思ってるからだよ。秀吉から聞いたがその背の傷、あの兄貴に付けられたんだろ？」
「っ！」

光一が驚きで眼を見開いて、それから頭に手を当てる。

「……ああっ、そうだよ。秀吉の奴、余計な事を」
「てかお前、一体あの兄貴と何があったんだ？」
「わからねえよ……本当にいきなりだったから。確かめようにも俺この傷が原因でしばらく入院してて、退院した時には兄貴の豹変が原因で離婚してて、父さん兄貴連れて出て行ってたから。この傷付けられた時が兄貴との最後の記憶だ」
「……その、なんだ？　えーっと」
「やめろ気色悪い」

ブチっ！

「テメっ、そんな言い方ないだろ？」
「テメーが素直に謝る事自体がないからだ。大体悪いと思うくらいなら最初からやるな」

雄二がボキリと拳を鳴らし、光一が木刀を手遊びのようにくるりと回し、ブンと一振りし構える。

「ようやくお前らしくもなったな」
「……ちっ」
「ま、今は楽しい旅行中だ。今日くらいは騒動を抑えるためなら、お前の味方位してやるよ。場合によって、だがな」

「……わかった。今回だけはおとなしくすると約束してやる」

にっと笑いあって、２人は座って周囲を見回す。

「それはそうと……意外に女性だけで来てるグループも多いんだね？」

「そりゃそうだ。友達同士出来ている奴らも多いだろうし」

「ナンパする男連中もいるから、ナンパされる女連中もいるってことだ。けど意外といるもんなんだな、ナンパする奴って」

「そうだね。漫画や小説の世界だけの話だと思ってた」

「お待たせしました、みなさん」

雑談してる所に、女性陣が昼飯を持って帰って来た。

「随分と遅かったな。混んでたのか？」

「いや、そこまで混んでいたわけではないのじゃが……」

「またナンパされたのか？」

光一が色々と用意してくれたから、昼は女性陣が用意すると押し切られていた。

「大変だったです」

「ホント、ウチああいうの苦手なのに……」

「……私も、苦手」

「ワシは男じゃというのに……」

「そうね……それより秀吉、なんでアンタはあんなに断りなれてたのよ？」

それぞれ女性陣は、口々に大変だったと言いあう。

光一はポリポリと頭をかき……

「やっぱ俺が一緒に行くべきだったな。中には力ずく、なんて奴が居ないとも限らないし」
「心配しなくても、アタシも愛子も光一以外に興味なんてないし、アンタにこれ以上迷惑かけられないわよ」
「そうそう。大体ここにきてからも光一君苦労してばっかりなんだから、そんな心配しなくて良いの」
「そうか？　けど何もなくてよかったよ」

そう言って、光一は優子と愛子から昼食を受け取った。

「……私も愛子ちゃんと優子ちゃんみたいに、明久君に心配されてみたいです」
「……全くね。というか、アキももっとウチの心配をするべきよ」

光一は人より身体機能が劣る分、空間認識能力など感覚的な機能は人一倍優れている。
無論五感も例外ではなく、光一は基本的に視力聴力など基本的に最高数値を常に記録している。

……早い話が、光一は地獄耳でもあるため、瑞希に美波のつぶやきも当然耳に入っていた。

「……雄二」
「ん？」
「……雄二は久遠の様に、あんな風に私をもっと心配するべき」
「いや、俺なりに心配はしているとあだだだだっ！　ちょっと待て！　お前が俺に何を要求しているのかわからねえ！」
「……わかるまで教えてあげる……身体に」
「ふぐぁあっ！」

「……あーっ、来るなこれ絶対」

……神様は本気で俺の事、大嫌いなんだろうか？
そう思いながらこの先の事を予期し、即座に策を思案。

「……優子、愛子」
「ん？　ああっ、はいはい。何すればいいの？」
「……秀吉と姫路にな（ごにょごにょ）」
「うん、オッケー。その代わり、後でかき氷おごってね？」
「いくらでも」

光一の指示に従い、優子と愛子が周囲に気付かれないように秀吉と姫路に近づいて、光一の策を伝授。
了解とうなづいた所で、美波が明久に……。

「あーあ、ああいうのってどこに居ても出てくるから困るわよね」
「へえっ、そうなんだ。その割には、さっき慣れてないってこと言ってなかった？」
「そっ、それはアキの空耳よ空耳！」

光一から見て、それはあまりにもチグハグすぎる駆け引きモドキだった。
どうせもうすぐ破綻するな、と思ってると……

「まあバカで鈍くて全然モテないアキとは、違うんだからね！」

それと同時に、自分が聞いてもカチンとくる発言が出てきた。

「なっ！　そっ、そんな事ないよ！　僕だってその気になれば、ナ

ンパくらい余裕で……」

ゴゴゴゴゴゴっ！

「アキ？　余裕で、何かしら？」
「アキ君？　まさか、アキ君の分際でナンパが出来ると思っているのですか？」

「……はぁっ、あのバカどもが。駆け引きには忍耐力と冷静さが必要だってのに」

そろそろ策の実行だな。
機を伺っていた光一が、あまりにも予想通りすぎる流れにあきれながら……。

「……雄二も女心が全然わかってない。だからモテない」
「ぐっ……！　言ってくれるじゃねえか……！」

翔子の言った発言を、申し訳なくも思いつつ……。

「おい霧島、その言い方だとお情けで付き合ってやってるって言ってるようなもんだぞ？」

策を実行した。

「……え？」
「いや、だってナンパされたの自慢してるような発言の後でそれは、幾らなんでもそう思われて当たり前だろ」
「……言われてみればそうだな。考えてみりゃ、モテない俺が翔子と釣り合うわけもないし、考えてみりゃ好かれる理由も思い当たら

ない。そっか、お情けか」

光一の意図を理解した雄二は、それを即座に利用。
翔子はまるで胸を刺されたかのようにショックを受け……。

「……違う、私はそんなつもりじゃ」
「っ！　……そう考えたら、モテない俺より誰彼にモテる奴に惹かれるのも時間の問だうわっ！」

ガバッ！

翔子が耐えきれないと言わんばかりに、雄二に抱きついた。

「……違う。モテなくても、私は雄二以外なんて考えたくない」
「っ！　……いや、まあその、なんだ……俺も、悪かった」

上目づかいに、しかも涙目で見られて雄二もたじろぎ、元の鞘に収まった。
それを見た明久は……

「……そうだよね。姉さんにしても美波にしても、お情けでしか僕なんかと一緒にいてくれる訳ないもんね」
「え？　あっ、アキ！？」
「アキ君！？」

そう呟いて、重苦しい雰囲気をまとい始めた。
自分達の意図とは全く別方向に認識され、２人は戸惑い始める。

「まあまあ、落ちつくのじゃ明久」
「そうですよ。モテるモテないは関係ありません。ただ仲良く楽し

く過ごせれば、それで良いじゃないですか」

そこを狙ったかのように、瑞希と秀吉が明久を慰めた。

「……そうだね。うん、ありがとう姫路さん、秀吉。うん、一緒に楽しく遊ぼうよ！」

「ちょっ、ちょっとアキ！」

「じゃあ僕、離れてるよ。僕なんかが近くに居ても邪魔でしょ？」

「アキ君、不純異性交遊は……」

「僕なんかにそんなことあるわけないんじゃなかった？　僕なんかに構わず、姉さんは楽しんでよ」

と言って、瑞希の秀吉に手を引かれ明久は去って行った。

「……よし、かき氷食いに行くか？」

「やった。ボクがあーんしてあげるよ」

「あっ、アタシもやりたい」

「そりゃ楽しみだ」

「待ちなさい！！」

背景に闇魔を背負い、笑顔の美波が玲を連れて光一に問い詰め始めた。

「今の絶対あんたの差し金よね！？」

「いや、勝手に自爆したんだろ」

「美波さんの言う事が事実なら、困りますよ久遠君。アキ君に不純異性交遊を促すようなマネは……」

「俺はあくまで雄二に助け船を出しただけで、その後はあんた達の行動が招いた結果だろ。実際解釈次第じゃそう取れる事言ったのも事実だろうに」

冷静になって考えれば、確かにそう取れても仕方ないと2人は閉口。
美波はともかく、玲の方はそのキテレツさからトンデモ発言が出る事を危惧してたが……

杞憂だった。

「あんた達は余計な物や感情を前に出し過ぎだ、だから余計なもんが付いてくるんだよ……まあ悪いとは思ってるけど、お前らがそんな態度だからこうなるんだ」

といって、光一は優子と愛子を伴い、去って行った。

「ねえ光一君、今回ばっかりはやりすぎじゃない？」
「わかってるよ……けどこの旅行だけは、静かに過ごしたいんだ。どんな手を使ってでも」
「……意気込みは伝わってくるわね」

「おっ、見ろよ。いいカモ発見だ」
「何あいつ？　モヤシの分際で女囲って。よし、脅して……」

ギンッ！

「「ひぃっ！」」

光一はまだ、凶王の眼はなるにしろ戻るにしろ時間がかかる段階である。
目元にてをやり、軽くも見ながら……

「あれ、そう言えばムッツリーニは？」

「あっ、あそこ」

そう言って愛子が指さした先では……。

『キャーッ！　君、写真撮るの天才じゃない！？』
『すごーい！　メチャクチャきれいじゃない！』
『……この程度、一般技能』
『またまた、照れちゃって可愛いっ』

ムッツリーニが逆ナンされていた。

「……良かった、本当に良かった。あのまま進めてこれを見たら、絶対明久と雄二はナンパして見返そうって流れになってたから。よし、これに免じてこの場面は島津先輩には黙っておいてやろう」
「やっぱり気苦労が絶えないわね。光一も」
「だからこそ、ボク達が癒してあげるんじゃない。えーっと、人気のない所は……」
「何をする気よ？」

何とか、楽しい旅行は過ごせそうだ。
そう思いながら、両手に花を楽しみながら売店を目指す光一だった。

第百七十六問（前書き）

バカテストお休みです。

……一度躓くと、立ち直るの難しいです。

第百七十六問

売店にて

「ねえ彼女たち、そんなモヤシより俺達と遊ばない？」
「あっ、ボク達……」
「はい決定、それじゃひっ！」

道中にて

「あっ、ごめーん。手が滑った」
「でも両手に花なんだから、これくらい平気だ……ひぃぃっ！！」

行く先々で、優子と愛子狙いの嫌がらせや脅しで、逐一威嚇して追い払ってるのだが……。

「……目と頭が痛い」
「それになるの、結構負担みたいね？」
「さっきからずっと威嚇ばっかりだからね」

元々キレた状態の光一を“凶王”と称し、中学時代は恐れられていた。
それを自己催眠で無理やりキレた状態に移行させている為、光一自身も負担が大きい。

「まあかき氷買ったんだし、どこか人気のない所で静かにゆっくりと食べればいい。そう、まだチャンスはあるんだ。焦る事はないんだ、あははははっ」
「……そうね。こういう所も良いけど、静かな時間もいいと思う」

「……それじゃ、早速行こうよ」

そう言って、優子と愛子は少し壊れかけてる光一を心配しながら、ちょっと離れた人気のない岩場に……

「あっ……ダメ……」
「んっ、んんっ……」
「ふぅっ……すごい……」

行こうとして、死角になる個所から聞こえてきた声に足をとめた。

「……」
「……なんか本気で気の毒になって来たね」
「……なんで光一って、平穏で静かな時間を許してもらえないのよ？」
「で、どうする？　混ざる？」
「えっ！？　なっ、何言って……その、光一さえよければだけど」
「いや、その……」

そうだな、と紡ごうとして……。

「あれ？　光一じゃないか」
「……優子に愛子も」

雄二と翔子がやってきて、出鼻をくじかれた。
惜しくも安心したようにふぅっと息を吐き、雄二に顔を向ける。

「……雄二か」
「どうしたんだ？　オアシスを見つけたと思ったら、蜃気楼だったとショックを受けた遭難者みたいな顔をして？」

「事実そうだよ。警告しとくが、この先やめとけ。お前にとって良くない事が起こってる」
「この先に？　……よし翔子、光一たちと遊ぼう。光一、確かビーチボール持ってきてたよな！？　2対2でビーチバレーを……」

「……すごい……ああっ」
「やっ……そんな、焦らなくてああっ！」

……手遅れだった。

「……雄二」
「いや、まあ待て翔子。今は……」
「そうだぞ。ここには遊びに来たんだから、そういう事は抜きにしような？」
「……わかった」

雄二はほっとし、一先ずここにいた理由は聞かずにおいた。
そして疲れてる風な光一に、疑問符を浮かべ……

「その様子だと、随分と大変だったようだな？」
「まあな。かき氷食べるだけなのに、売店で絡まれるわ道中嫌がらせされるわ、静かな所に出向いてゆっくりできると思ったら……」
「そりゃきついな。てか、混ざる気はなかったのか？」
「幾らなんでも外でやれるかバカたれ。てか、こんな事霧島に聞かれたらお前は……」
「……すまん」

本当は混ざるつもりではあったのだが、それは表情にも出さない。
知られれば今は大丈夫かもしれないが、後先でどうにもならない事態に発展する事は目に見えていたからである。

まあ自分の危機回避につながった以上、雄二は黙らざるを得ないだろうが。

「あっ、光一に雄二」
「翔子ちゃん達も」
「珍しい組み合わせじゃのう」

かき氷を食べながら集合場所に戻ると、砂で城を造ってる明久たちと合流。
明久が海水を運んで大雑把に形を造って、秀吉と瑞希が細かな調整という役割分担。

「なんだ明久、お前も両手に花かよ」
「いや、雄二よ。そこは姫路がではないかの？」
「へえっ、3人で砂の城か」
「うん。小さい頃は海に来るとよく作ってたから、ちょっと懐かしくなってね」
「懐かしがるほど、精神成長してないだろ」
「雄二うるさい」
「はいはいそこまで。それより城の後ろに立てよ明久に秀吉、姫路も」

光一はせっかくなので、記念撮影をするべく携帯カメラ（防水ケース入り）を取り出した。
それを見た3人は、城の後ろに立ってピースサイン。

「じゃ、とるぞー」

撮影すると同時に、瑞希が明久の手を取り……

パシャっ！

抱きついた形で撮影となった。
いきなりの事で反応しきれなかった明久は、腕に当たる隔てる物が普段より少ない柔らかな感触に鼻血を吹きだす。

「瑞希ちゃんもやるね？」
「はい、以前さやかちゃんに教えて貰いました。撮影時はこうすれば明久君が喜ぶって」
「さやかちゃん？　誰だそれ？」
「俺が入ってるサバ研の部長で、この前ムッツリーニに紹介した女子の先輩」
「へえっ。最近ムッツリ商会にビン底メガネの女子がバイトしてるって話があったけど、それがそのさやかちゃんとやらか？」

正確には夫婦経営である。
実際うまくはいってるし、周囲にはばれていないがそれなりに一緒にいる事が多い。

「てか、姫路に的確なアドバイスしてる所からして、随分と経験豊富か？」
「いや、多分漫画とかそんなとこからの引用だろ。あの人コスプレマニアで脱ぎ癖のある変人で有名だから、それはないと思う」
「……ムッツリーニが輸血パック増やした理由がよくわかるな」
「……雄二」

そこで翔子が話に割り込んできた。
少しぐったりとしてる明久に膝枕をしてる瑞希に、光一の鞄から出したティッシュを花に詰めてやる秀吉に目を向け……

「……私たちも撮影して欲しい」
「ああっ、良いぞ。それじゃならんで」
「いや、ふざけんな！」
「写真ぐらいで嫌がるなよ」
「……ちっ」

しぶしぶと雄二は、さっきの明久や秀吉、瑞希の様に砂の城の後ろに翔子を伴い並ぶ。
ぶすっとした表情の雄二の腕に、そっと腕をからめ……

「いでででで！」

関節を取った。

「ダメよ代表、もっと力緩めないと」
「そうだよ。こうやってね？　こうすれば……」
「おいこら！！」

雄二が腕に翔子の柔らかさを感知したとたん、抗議の声を上げた。

「はい、チーズ」

パシャっ！

が、光一は無視して撮影。
構図としては良いので、文句は……

「大ありだ！」
「いや、関節技よりはいい絵だろ」

「そうかもしれんが……てか、次はお前だな」
「じゃあ頼む。ついでにいっとくが、それ解約してるからカメラ以外機能しないぞ？」
「いや、別に何かするってわけじゃないが……」
そう言って雄二がカメラを構え、光一の両サイドに愛子と優子が抱きついて……。
パシャっ！
特に問題もなく終わった。
「カメラと言えば、ムッツリーニの姿が見えないね？」
「そういえば、みてないな？　おい光一」
「いや、俺も見てない」
ムッツリーニの事がばれて、妙な事にならない保証はない。
「そう言えば、玲さんに美波の姿もないわね？　……何かあるのかしら？」
「姉上よ、ショックを受けたという予想自体はないのかの？」
「ある訳ないだろ。てか、何かしでかす可能性の方がよっぽど高い」
「ちょっと久遠、それは幾らなんでも失礼じゃない」
「そうですよ。私たちなりに、色々と考えてるというのに」
そこで割り込む2人の声。
しかし予想に反して、2人の声色には怒気がない。
「？　どっ、どうしたの2人とも？」

「どうしたって、まあさっきは言いすぎたから謝りに来たんじゃない」
「はい。姉さんも少々言いすぎました、確かに自慢話の後でけなされたらああ見られてもしょうがないと思いまして」
「え？　……そっ、そう？　まあ僕は気にしてないから、それじゃ皆で遊ぼうか？」
明久が戸惑いつつも、2人に友好的に接し2人も嬉しそうに頷く。
「……これで反省してくれたってとこか？　それなら謝らないとん？」
そこでふと光一は、美波の手に握られた1枚の紙が視界に入った。更にチラシ配りをしてる人が目に入り、そこで配られてる紙をもらって内容を見ると……
「……成程な」
確かに感情を抑えて行動をする事を学べたは良いが、根本的に何も変わってない事に内心ため息をつき……。
「だが詰めが甘い」
一応今は安全だと判断し、光一は……。
「おーい、人数がそろったからビーチバレーしないか？」
カバンからビーチボールと空気入れにクジを出し、膨らましながらそう提案した。

第百七十七問（前書き）

コラボ含めて、通算２００話目。
ここまで来れた事に感謝しつつ、これからもがんばります。

すみませんが、バカテストは良いのがいまだに思いつきません。

第百七十七問

「あーっ、楽しかったなー」

日の光が夕焼けの色を帯び始め、人もまばらになり始める時分。
光一は大きめの浮き輪にのって、ゆりかごの様に日光浴と波の感触を味わっていた。

その浮き輪に、先ほどまで雄二と競争していた明久と秀吉が、休憩で捕まっていて。
更にその近くでは、フロートに捕まってゆらゆらと文字通りの海水浴を楽しむ、瑞希と優子と愛子。

ちなみにどちらも、光一が用意したものである。

「そうだね。特に騒動も起らなかったし、僕も痛い思いしなくて済んだし」
「……明久よ、日常生活で痛みが常識になる事はないのじゃ」
「まあ何にせよ、平和に終わって良かったわね。誘ってくれてありがとう、吉井君」
「うん、今日はとっても楽しかった」
「え？　うっ、うん」

愛子と優子に礼を言われて、頬を赤くしてくれる明久。

「それに姫路も、良く流されずに済んだな」
「え？」
「実は懸念してたんだよ。玲さんの影響受けて、以前みたいになるんじゃないかって」

「……それは、さやかちゃんに色々と教えて貰ったからです。ちょっと恥ずかしいけど、その方が明久君が喜んでますから」

……もっと早く紹介しとけばよかった。

心の奥底から光一はそう思った。

「……なんにせよ、心配ごとが一つ減って良かったよ。2学期は1学期の比じゃない位、大変になるだろうから」

「？」

「これまでの騒動、ほぼ全部がFクラス……というか、俺と明久と雄二が台風の目だから、俺達の試召戦争を良く思わない筈。それに……いや、これはいい」

光一が余計な心配をかける必要もないな、と口を紡いだ。

……が、光一が懸念しているという事だけで、明久は何かを勘付く。

「……もしかして、光一のお兄さんの事？」

「……そうだよ。結果的に2年があの戦争に勝っちまった事で、あのバカどもがつけ上がった事は聞いた。だから試召戦争で勝利すればつけ上がるにきまってるし、そうなれば学園の騒動は必然的に規模がでかくなる。なら何かしないわけにはいかないだろ」

受験に影響を及ぼしている以上、2年をよく思わない3年は多い。

白夜があの戦争を起こしていなければ、外部にも漏れる大騒動に発展しかねなかった位に。

「けど幾ら光一のお兄さんでも、もう学年単位の試召戦争なんて起こせないんじゃないかな？　流石に何回もそんな事したら、それこそ致命傷だと思うし」

「別に余所はもう必要ないだろ。3年が上げた戦果は大半どころか、

ほぼ全部が兄貴が上げた物だし、雄二を圧倒するほどの手腕と策略を駆使して１００％以上の確率での敗北に追い込んだんだ。まともな神経持ってたら、刃向かおうなんて思う訳ない」

まともな、という所でほぼ全員が頷いた。
それに加えて、兄に勝てないから弟に八つ当たりする者の存在も、頷けるほどに。

何度もＦＦＦ団を駆逐し続けていた光一を、無傷で圧倒した事も加えて。

「となると……どうやるのかな？」
「……あのな、Ｆクラスから試召戦争の権利を取り上げる事が目的なら、同じ学年の他のクラスを利用してまた３ヶ月の宣戦布告停止期間を課すしかないだろ。Ｆクラス攻略後、上位クラス攻略にも手を貸すって条件付ければいいだけだし」
「あっ、そっか。あの人が後ろ盾になるんなら、乗らない手はないよね。増してＢＣＥの代表格はアンチ久遠派の残党だから、踏んだり蹴ったりだね」
「……吉井君、この場合は至れり尽くせりよ」

少しは頭が回る様になったが、それはあくまで白夜関連の事。
数少ない自分を認めてくれた相手であり、今までの誰よりも強大な相手だからこそである。

「となると、これからＦクラスは光一のお兄さんの脅威にさらされる事になるの？」
「……だろうな。いっとくが、口外はするなよ？　あのバカどもの事だから、絶対俺達の所為にして余計な騒動起こすにきまってるんだから」

「だろうね。ねえ光一」
「言う訳ないだろ」
「雄二に……って、早っ！」
「あのゴリラに一番知られたら困るんだよ。今回の事“は”反省してるかもしれんが、これからもという保証はどこにもない。俺もFクラスの一員である以上その責任は果たしてはやるが、だからって犠牲にまでやるつもりはない」

元より、あのバカどもや雄二の為なんて癪なだけだ、と吐き捨てるように言いながら。

「けど責任果たそうとしてるだけでも立派だよ」
「うむっ。じゃからこそワシも明久も、お主の判断を信じて行動できるのじゃ」
「そうね。アタシも同意見よ」
「うん」
「そうですね。今では明久君が久遠君を信用する理由、わかる気がします」
「やっぱ持つべき物は、“信用できて大切な”友達であり大事な人だな」

夕暮れの日差しと波の感触と潮風。
それに揺られながら、改めて再確認した。

そして……

「あれ……？」

明久は奇妙な場所にいた。

靄のかかった、蓮の咲き乱れ蝶が舞い踊る花畑にたたずみ、目の前には大きな川。

「ここ、どこだろ……？　っかしいなぁ……確か僕、ペンションに帰って皆でおやつを食べてたはずじゃ……？」

「あれ、明久？」

ふと声をかけられた先には、光一が居た。

なぜか恰好は水着でも普段着でも制服でもなく……

良く見たら自分もだが、死装束で。

「光一？　ねえ、ここどこかな？　僕達確か、ペンションでおやつ食べてたはずだよね？」

「……思い出してみろ。玲さんが台所に入って何かしてた様な気がするんだが？」

「待って！　って事は何？　ここ、三途の川!?　って光一、なんでそんな冷静なのさ!?」

「いや、ガキの頃とこの前来た事あるから」

「この前!?　納得はできるけど、あの時光一死にかけてたの!!？」

それも驚きだが、ガキの頃にどうしてそうなったかが、恐ろしくて聞けない明久だった。

『おいでー。おいでー』

『怖がる事はないんだよー。こっちはいいところだよー』

『おいしい物もあるし、楽しい事ばかりだよー』

「ひいぃっ！　呼んでるっ！　って、あれ確か死んだおじいちゃん

!?　それに曾おばあちゃんに、しかも交通事故にあった遠い親戚もいるよ!?」
「落ちつけ。こっちに来て襲いかかる訳じゃないんだ」
『そうだ。怖がる事なんてないぞ明久。ほら、光一も。こっちはこっちで結構良い所だからな」
光一が明久を宥めてる時、聞き覚えのある声が対岸から聞こえてきた。
「って雄二ぃっ！　なんでそっち側で手招きしてるの!?」
「……お前の事は忘れない」
『姿見るなり逃げようとするな！　少しはこっちの話を――キィてクレヨォう……』
「見たから逃げようとしてんだよ！　悪霊化してるんだから、逃げて当たり前だ!」
『っとと、すまんすまん。別にそんな事はないぞ2人とも。こっちは本当にいいところだ、毎日が楽しくて楽しくて……楽しくて楽しくて楽したのたのタノしぃぃぃーーーっ!!」
「さよなら雄二っ！　僕達は君の事は決して忘れない!」
「お前の女房には楽しくやってると伝えてやる!」
光一と明久は川に背を向け、全力ダッシュ。
『……まチヤがレ、ダレがにガすカ！　オマェたチだケたすカるのは、ナッとくイかねェんダよゥ……』
「……僕達、生きてる？　ねえ、生きてるの?」
「みたいだな……俺は後遺症が残ってるが、お前ら平気か?」

「ああっ……よく覚えてないが、リアルに地獄を見ていた気がする」
「お主ら3人のうわごとが繋がった時は、正直もう駄目だと思ったぞい……」
「……よかった。もうっ、心配かけないでよ！」

男子5人＋浴衣姿の優子が、リビングのソファにかけて無事を喜び合う。
聞けば玲が、おやつのフルーツサンドに“お手製のジャム”を加えたという。

「まったく、楽しい旅行の筈がなんで三途の川に行かにゃならんのだか……」
「……雄二がおとなしくしててもこうなんだね」
「いや、俺を厄病神みたいに言うな！　まあ流石に俺もこればっかは楽しめんな」
「普段から楽しまないで！」
「いや、そんな事話してる場合じゃないぞ？　優子、愛子はどうしてる？」
「そろそろだけど、美波に玲さんが準備してた物をすり替えてる筈よ？　やっぱり光一の予想通りだったみたい」
「？　なんだ光一、何かあるのか？」

光一は海で着ていたパーカーのポケットから、一枚のチラシを取り出した。

「？　それがどうかしたの？　これから行く近くの縁日で開催されるみたいだけど？」
「多分だけど、島田が持ってたのと同じ物だ」
「島田が？　……おい、まさか」
「そのまさかだろ。違ってるかも知れんが、用心に越したことはな

い。それに……」

光一がふと、優子に目を向ける。

「ええ、ちゃんと用意してたわ。アタシ達以外にも“５人分”」

「やっぱり」

「待て！　って事は何か、俺たちお前らのとばっちりを受けるかもしれんってことか！？」

「それを防ぐために動いたんだよ。心配しなくても、そう言う流れにはならん」

「……流石は光一だね」

まあな、と呟くように言う。

ポンポンと宥めるように、優子が光一の背中を軽くたたいた。

「でもまあ、すり替えられてるんだったら安心だね」

「だな。光一、今日くらいは素直に感謝してやるよ」

「んじゃ、出発する時間になったら起こしてくれ。俺ちょっと寝るから」

といって、隣に座ってる優子の膝の上に頭を乗せて、スースーと寝息と立て始めた。

「ちょっ、ちょっと光一！？　……もうっ、仕方ないわね」

「じゃあ雄二、邪魔しちゃ悪いから」

「そうだな」

「……妬ましいが、今回は目をつむる」

「ではごゆっくりの」

ニヤニヤとしながら、男子４人？

は、リビングから出て行った。

「……今不快な何かを察知した気がするぞい」

第百七十八問

「ふぁあっ……」
「ちょっと久遠、アンタ寝すぎじゃない？　来る時の車でも寝てたそうよね？」

ガシガシと頭をかきながら、光一は美波の言葉にそうかもなと頷く。
何せ光一は、常に学園では騒動の中心であり、嫌悪対象である。

当然その疲労は、自身も気づかない程浸透していた

「それにしてもぐっすりだったね？　優子の膝枕、そんなに心地よかった？」
「心地よかった。そのおかげか、良い夢見れた気がする……っと、それよりも」

茶化すように言う愛子に普通に反応し、ふと愛子と優子の浴衣に目を向ける。

「浴衣似合うな。いつもとは違う感じがして尚良い
「そうでしょ？　浴衣だと、ボクや優子みたいにおっぱいが大きくなくても恰好がつくでしょ？」
「そうだな。てか、スタイル云々は別に問題じゃないし、関係ない気もするがな」
「久遠君にとってはそうかもしれないけど、気にする人は気にするからね。だから着物って、ボクや優子、島田さんみたいに胸が小さい子には助かるんだよね」
「ふーん。俺としては、良いもの見れたから良しだけどな」

褒められて頬を赤らめる優子に愛子。
それからそっと、愛子に耳打ち。

（所で愛子、アレのすり替え終わったか？　“全員分”）
（それが、玲さん達が用意した着替えの鞄だけど、ロックがかかってて……）
（……じゃあ仕方ない。愛子、これ女子部屋においてもらえるか？）
（これを？　うん、わかった）
「あっ、ボク忘れ物したから、ちょっと戻るね？」

そう言って、愛子はある物を受け取り女子部屋に。

「……雄二。私の浴衣、どう？」
「ん？　まあ、似合ってるんじゃないか？」
「……じゃあ、私と結婚したい？」
「全然」
「……私と婚約を結びたい？」
「微塵も」
「……じゃあ、雄二」
「まっぴらだ！」
「……浴衣、脱いじゃダメ？」
「否定する……ん？」

ごそごそっ！　（翔子が浴衣の帯を緩め始める音）

「だーっ！　待て待て！　今のは違う！！」
「……今日の久遠のあの策略でわかった。恋愛では押すだけじゃなくて、引く事も重要だってことが」
「光一ぃぃぃいいいいいっ！！」
「いや、俺関係ないだろ！　てか、これからは力ずくが少なくなる

から良いじゃないか」
「よくねえ！」
「お2人とも、ケンカはそれまでです」
雄二が光一に突っかかるのを、玲が仲裁に入り終了。
そこにひょっこり顔を出したのは、光一の母のひなた。
「それでは、ひなたさんも取材から戻ってきた事ですし、行きましょう。間に合わなくなってしまいますからね」
「そうですね。間に合わなくなったら大変だもの」
匂わせてどうするのだろうか？
と、内心光一はつくづく詰めが甘いと呆れていた。
「島田、随分と乗り気だな？」
「えっ！？　そっ、そりゃあ、そうよ？　だってウチ、日本のお祭りってこれで二度目だもん。楽しみにきまってるじゃない」
「なんで所々詰まってるんだよ？」
「まあまあ久遠君。ほら、みなさん準備してください」
「はーい……あれ？　車で行くの？」
「はい。海より離れていますし、着替えも持っていきますので車の方がいいでしょう」
そういってせかす玲を見て、光一はそっと……
ガシャーンっ！
携帯を操作し、女子部屋に仕掛けた物を作動させた。
「あら？　何でしょうか？」

「何か落ちたのかな？」
「おいおい、音がしたのは女子部屋からだぞ？　見て来た方がいいな」
というと、女性陣は万が一に備え雄二とムッツリーニを伴い、中へ。
「……えーと、あったあった」
光一は聴診器を取り出しカバンに当て、数字キーをいじくり……。
ガチャっ！
カギを開けると、中に入っていた浴衣やカツラ、メイクなどを取り出し、代わりに車の中にあった雑誌の類を詰め急いで鍵を閉める。
「……どうやって用意したんだ？」
それから見つからず浴衣が汚れないよう、細心の注意を払いながら中に入りリビングの自分のカバンに詰めて……。
「あれ？　何やってるのよ久遠？」
「いや、縁日の後でやるつもりの花火の点検」
「色々と用意してるのね？　今日遊んだ遊具、全部あんたが用意した物じゃない？」
「俺は俺でこのバカンスを楽しむつもりだったからな」
ふーん、と美波は頷いて玄関へ。
そこでそっとミッションコンプリートと呟き、明久を笑いあい音が鳴らない様ハイタッチ。

「ただ単に時計が落ちて壊れただけだってよ（光一、首尾は？）
「そっか。とんだ騒動だったな（問題ない）」
「じゃあ早く行くぞ？　俺かなり腹が減って来たから、さっさと行きたいんだ（そうか、良くやったぞ光一）」

アイコンタクトを交えながらの会話で、雄二もムッツリーニも光一が上手く行った事に安著。
４人は完全にお祭りに気を向けて……

「そう言われると、僕もお腹空いてきちゃった。向こうで何食べようかな？」
「……たこ焼き、焼きそば、お好み焼き」
「祭りでしか食えないというと、綿菓子にりんご飴。ベビーカステラや人形焼きもあるな、光一はあんま食えないだろうがな」
「ほっとけ。それじゃ、海に続いての夏の風物詩を楽しもうぜ？」
「「「おーっ！」」」

「……どうやら、最難関の坂本に久遠は油断してくれてるようですよ？」
「……それは助かりましたね。確かに私たちにも落ち度はありましたが、アキ君の不純異性交遊を促そうという以上、お仕置きが必要ですからね」
「……久遠、見てなさいよ。今まで散々ウチをはめてくれた罪、今日こそ償ってもらうんだから」

既に破綻している事にも気付かず、玲と美波は今か今かと待ちわびていた。

近くの学校の校庭による臨時駐車場に車を2台停め、徒歩で数分。

光一の予想通り、中央ステージで待ち合わせとなり、一時解散。
光一は優子に愛子、秀吉に加えて母のひなた。
「そっ、それでは、今日はよろしくお願いします。その……お義母さん」
「えっ、ええ……よろしく、愛子ちゃん」
「色々と複雑かもしれませんが、これがアタシと愛子が話し合って決めた事なので」
「……ほら、さっさと行こうぜ？」
「そうじゃの」
息子の常識はずれな関係の女性にお義母さんと呼ばれ、困惑するひなた。
光一は依然とそっけなく、先に行くよう促す。
「しかし……ドネルケバブに佐世保バーガーとは、随分と変わった店が増えたのう？」
「そうね。子供のころとは大違い。」
「子供のころと言えば、秀吉が射的が上手くいかずに泣いた事あったよな？」
「そう言えばあったわね。結局光一がとってあげてプレゼントしたら、泣きやんだっけ？」
「なっ！　こっ、光一に姉上！」
過去の恥部を暴露され、顔を赤くしながら光一と優子に詰め寄る秀吉。
そんな幼馴染の光景を、少しうらやましそうに見る愛子と……
「あの、お義母さんは、そう言うのないんですか？」

「……ええ、全くないの。稀代の天才の母親という肩書の心地よさに目がくらんで、光一の事を全く気にもかけてなかったから」
「なんだかなあ……」
白夜を直接見た愛子だから、それは十分に理解出来た。
……が、それにより光一が受けてきた理不尽な中傷、迫害も知っている身としてはどうにも複雑だった。
「でもこういう場だから、興味がそそられるわね。どれか買ってみる？」
そこで、優子達が食べ物の屋台を見回し何か食べようという流れに。
「ねえねえ、ボクドネルケバブ食べてみたいから、食べてみない？」
「それじゃあ私が……」
「すみません、ドネルケバブ５つください」
財布を出そうとしたひなたを遮り、光一が注文して金を払いドネルケバブを購入。
唖然としたひなたにさっさと手渡して、ドネルケバブにかぶりつき
……
「へえっ、美味いな」
「……」
「ちょっと光一君、今のは……」
「ん？　何かいけなかったか？」
さして普段と変わらない態度で、光一はそう返した。
親に蔑ろにされて育った光一にしてみれば、普通の事を普通にやっただけである。

「……なんでもないの。気にしないで光一」
「？　そう」

そっけなく返した光一に、ひなたは悲しげに歩を進める。

「……ねえ優子、光一君の態度だけど、あれって嫌ってるからじゃなくて、あれが普通だって認識してるんじゃないかな？」
「かもしれないわね。来た時に話したけど、おじさんにおばさんが白夜さんに感けてばかりで、光一って殆ど蔑ろにされて育ったから」
「要は、親に甘えるとか頼るとか、そう言う概念を持ってないって事？」
「そうなるわね。実際、光一がいじめられてる事を気にとめてさえ居なくて、気付いたのは光一が白夜さんに……」

優子が愛子に、光一の過去を話してる間……。

「……良い子たちね？」
「俺とこういう関係になってるってだけでわかるだろ」
「光一よ、もう少し普通にできんかの？」

全く成立してない会話を交える親子と、それを心配する秀吉があった

そして、集合場所。

「ん？　何か催し物があるみたいだな？」
「“納涼ミス浴衣コンテスト　町一番の浴衣美人を探せ”だってさ。今日の目玉イベントみたいだよ？」
「へえっ、町興しの一環かな？　てか玲さん、こんな場所を集合場

所にして何があるんです？」
「もちろん出場しようと思いまして。私たち“全員”で。もちろんアキ君たちもです」
周囲が唖然として、光一が頭を押さえた。
「なによ、まさかウチらをはめといてそのままで済むなんて思ってたの？」
「確かに至らない所があった事は事実ですが、アキ君の不純異性交遊を促した以上保護者として黙っているわけにはいきませんので」
「さあ観念しなさい久遠、坂本の愛人なんて不名誉なレッテル貼ってくれた分や、散々ウチの邪魔してくれた分も含めて、たっぷりお仕置きしてやるんだから！」
憤怒のオーラをまとい仁王立ちする美波に、光一は一枚のチラシを突き付けた。
「あっ！　それ、どうしてあんたが持ってるのよ！？」
「海で配られてたのをもらったんだよ。お前が持ってるのを見て、な」
「えっ！？」
「ホント浅はかだな。ついでに言うと、お前らが用意してた俺達の分の着替えはとうにすり替えてある」
背景が闇魔大王のギリっと歯軋りをする美波に、こちらも不動明王が背景の黒い笑顔を浮かべる玲。
それに晒されてもなお、光一は平然とした態度を崩さない。
「てかお前らな、つけいられた時点で間違ってると気付けよ。普通にやってりゃ、俺みたいな第三者がつけいる要素が出来る事って、

まずありえないぞ？」
「なっ、なによ！　第三者のくせに出しゃばるのが悪いんじゃない！」
「そう言う人をはめるマネは感心しませんよ？」
「いや、俺だって悪いとは思ってるよ？　けど玲さんに島田、お前らは自分本位に事を考えすぎてる事に自覚が無さ過ぎる上に、明久に気を払わなさすぎで意思を無視し過ぎだ。目的の為に目的を足蹴にしてるんだよお前らは」
それにお前ら人の話きかないから、こうするしかないんだ。
と、吐き捨てるように言う。
「けど……散々はめた事や、旅行なのに気分を害する事をした事は悪かったな」
それから皆でコンテストを見ることとなった。
「……ねえ、優子ちゃん？　あんなやり取りが、文月学園では行われてるの？」
「……まあ、遠からずも、ですね。すみません、記事にはしないでください」
「それは……まあ、ね」

第百七十九問

『それではいよいよ、今年から始まりました新規格！“第一回・納涼ミス浴衣コンテスト”を開催します！　このコンテストは“浴衣の小畑”の協賛による浴衣を題材としたミスコンテストでありまして、名前の通り浴衣の似合う美人を見つけようという物です！』

「……光一にはほんと感謝してもし足りないよ。もしかしたらあそこにいたかもしれないなんて、考えただけでもこれからが怖くなるよ」

「アキ君ならきっと優勝は間違いありません。姉さんが保障します」

「俺には“社会的に終わってしまえ”としか聞こえんな」

「……姉さんやっぱり僕の事嫌いなんだ」

余計な事言った罰をして、さっき買った佐世保バーガーにかぶりつく。

光一としては、優子と愛子の浴衣以外見る気はあまりなく、このコンテストも時間つぶし程度としか思っていない。

「「……」」

「ん？　どうした2人とも？」

「ううん、光一が女装してあそこに立ってる姿を想像しちゃって……」

「ごめん、かわいいかもって思っちゃった」

「嬉しくないからな！？」

変に感化されてやしないだろうな？

と、内心冷や汗まみれの光一だった。

『では、最初の１０名に登場してもらいましょう！　どうぞ！』

係員の人に促され、ステージに１０名が並ぶ。

「へえっ……やっぱりコンテストに出るだけあって、皆かわいいね」

「そりゃまあそうだろ。後島田に玲さん、そういう行動がつけいる隙なんだと理解してくれ頼むから」

近くにあったブロックと鉄パイプを手に取った2人に、光一が痛む頭を押さえて警告。

「……だって、アキが」

「アキ君が不純異性交遊を……」

「先走り過ぎだってんだ。大体私情優先である時点で、“お仕置き”じゃなくて“攻撃”や“嫌がらせ”というんだよ」

『あー、すみません。そこの方々、静かにしてもらえますか？』

司会に注意され、しぶしぶと黙る3人。

「お前も苦労してるな」

「……ミスコンだからわからないでもないが、ニヤついた顔で言うな」

「……浮気は許さない」

「まっ、待て翔子。ここは公衆の面前で……」

「……なぜ静かにが出来ぬのじゃろうか？」

「あっ、あはは……」

司会を始め、入場してきた参加者どころか、周囲まで光一たちに注

目していた。
蚊帳の外の瑞希と秀吉は、乾いた笑いを浮かべるだけだった。

それからコンテストが始まり……

『どうですか、協賛かつ審査員の小畑さん？』
『携帯番号を教えてくれたら、オジサンが後でお小遣いをあげよう』
『はい。あなたがスポンサーでなければ殴り倒してる所ですが、そうもいかないので質問を返させていただきます』

「……それが目的で開いたんじゃないだろうな？」

光一はツッコミをしつつ、なんだかんだで楽しんでいた。

「「……」」

両サイドを、目が笑ってない笑みを浮かべる愛子と優子に挟まれながら。

『浴衣を提供された尾畑さんは、彼女の着こなしについて何か質問はありませんか？』
『下着を着けているのかどうかをお聞かせ願いたい』
『一周回って心地よくなるような下種な質問をありがとうございます。気の所為か私、さっきから冷や汗が止まりません』

「俺はどうしてアンタが捕まらないのかが聞きたい」
「お前が言う事かよ、光一？」
「うるさい黙れ」

『新婚旅行はカンボジアなんてどうですか？　マイハニー』
『はいわたくしツッコミませんよー。色々言いたい事があっても、相手次第ですべて呑みこんで耐えるのが、司会のプロフェッショナルですよー』

「島田に玲さん。お前らもああいう所を見習え」
「わかりました。アキ君、今日は姉さんと一緒にお風呂に入りましょう」
「アキ、今日は一緒に寝るわよ」
「あの変態審査員じゃなくて、司会の方を見習えっつったんだよ」

『またですかそこの人！　気持ちはわからないでもありませんが、騒がないでください！』

すっかり目を付けられたらしい光一は、指摘され周囲にすみませんと平謝り。

『まったく、人を変態呼ばわりとは躾がなってないクソガキだな』
『貴様が言うなと思うかもしれませんが、幾ら審査員がこんな下種でゴミクズの様な変態オヤジだからと、騒いで台無しにしない様お願いいたします！』

なんだかんだで、結局俺って目をつけられやすいのね。
と、内心ため息をつきながら、優子と愛子に背を撫でられながらうなだれる。

『『『ちっ……』』』

……当然その光景で、周囲の男性客の敵意を買いつつ。

『それでは気を取り直して……エントリーナンバー8番、渡合さんです！』
『渡会美紀です。よろしくお願いします！』
『渡合さんは、地元からのご参加の様です。小畑さん、同じ地元民として聞きたい事は？』
『そうですね……渡合さん、今日はおじさんの部屋に泊まりに来てくれないか？』
『お前1人だけで行け！　二度と戻ってくるな！！』
『なんだ貴様！　スポンサーに向かってその口のきき方は！？』
『今更常識人面か、コルァーっ！　上等だ！　司会なんてこの場でやめてやらぁ！』

「……なんだか、とんでもない事になっちゃったね」
「……愛子、この場合はあの人の忍耐力をほめるべきよ。光一、もうこうなったらあれ！？」
「えっ！？　光一君！？」

ふと優子が光一に声をかけようとして、いつの間にか姿が見えなくなっていた。

「え！？　光一いつの間に！？」
「……気付けなかった」
「あいつ一体どこに……」

『ひぃぃいいいっ！　ちょっ、まっ、待ってくれ！　そんな物振りかぶらないでくれ、金ならいくらでもぎゃあああああっ！！』

「「「「「「「「「「絶対あそこ（だ）（だね）（じゃの）（ね）（ですね）」」」」」」」」」」

結果、関係者の大半が病院か拘置所に入ることとなり、ミスコン終了。
未来永劫、第二回が行われる事がないと、誰もがそう思ったとか。
ちなみに光一は、騒ぎのどさくさにまぎれて雲隠れし、少し離れた場所で皆と合流した。

そして……

「ふぅっ、やっと終わった」

縁日を満喫し、ペンションに戻りバーベキューの準備。
光一は手伝うと言いだした玲を（麻酔で）大人しくさせてから、花火の準備に。

「花火見ながらのバーベキューってのも、良いもんだろうな」
「光一にしては、偉く風流な演出じゃねえか」

打ち上げ花火の配置が終わり、汗で湿ったTシャツとダメージ加工のジーンズ姿のまま、肩にタオルをかけてウーロン茶を一気飲み。
その近くで、雄二が頭にタオルを巻きトングを手に、バーベキューの準備に勤しんでいる。

「食事はうまく食う物なんだよ。それじゃ準備も終わったし、焼きおにぎりでも作るか」
「おっ、良いなそれ。じゃあそこのトウモロコシも焼いといてくれ」
「あいよ。鉄板は用意できてるか？」
「ああっ。ついでに焼きそばも頼む」

光一と雄二、２人の共同作業という珍しい事態のもとで、バーベキューの準備完了。
肉汁と醤油、ソースが焦げる匂いが辺りに広まり、明久たちはそれを嗅いでお腹の虫が騒ぎ始める。

「あれ？　光一と雄二が共同作業なんて珍しいね？」
「ま、今日くらいはな」
「おう明久、ちょうど良く焼けてるぞ。たっぷり食え」
「うん、ありがとう。じゃあはいこれ、雄二の分の飲み物」

合流した明久の紙皿の上に、雄二が焦げたラードを乗せた。
そのお礼に明久は、手に持っていたサラダ油をコップに注いで雄二に渡す。

「「……」」
「だからやめろっての！　ほれ、明久はこれで、雄二はこっち」

光一が仲裁に入り、明久に肉や野菜の乗った紙皿を渡し、雄二にはコーラの入った紙コップを。

「おっ、優子に愛子。ほれ、俺が作った焼きおにぎりだけど、食うか？」
「食べる食べる」
「わあっ、おいしそう」

炭をたしたり風を送ったりと、いくつもの作業をこなしつつ食べる事も並行して行う雄二。
それに光一も食べ物をどんどん焼きながら、焼きおにぎりや焼きそばなどを作ったり、それを周りに勧めたりしつつ食べると、２人で効率よく回していた。

「そろそろだな。雄二、この場任せた」
「おう」

と、光一が雄二にバーベキューを全部任せて、用意した花火に火をつけ始める。
まずは噴出花火が、その場でシュワーっと爽快な音を発しながら、光一が点火した順に次々と火花が噴出し始める。
それから次にロケット花火を打ち上げ、パーンと空で破裂。

「わあっ……花火を見ながらのバーベキューなんて、素敵ですね」
「ホント、久遠も粋な演出してくれるわね」
「……感謝」

女性陣に大好評だった。

「あっ！　テメ雄二！　俺の分食いやがったな!?」
「ああっ、これお前のだったか？　すまんすまん、代わりにほれ」
「なんでモヤシ炒めなんだよ!?」
「こりゃまたすまん。共食いだったな」
「このゴリラ、テメ！　ぶっ殺す!!」

一応用意した木刀を手に、光一は雄二と大喧嘩。

「……光一にも、良い友達が出来たのね」
「はい」

それを見たひなたは、心底安心したかのように笑みを浮かべた。

「……優子ちゃんに、愛子ちゃん。光一を、お願いします」

第百八十問　夏休みの友好旅行編　エピローグ

問題　次の問いに答えなさい

農民出身でありながら天下統一を果たした、日本で最も出世したとも言われる武将の名を答えなさい。

姫路瑞希の答え
『豊臣秀吉』

教師のコメント
正解です、姫路さんには簡単でしたね。
彼は農民出身でありながら、織田信長のもとで成果を上げつつ出世し、敵である明智光秀を討ち後継者の地位を得て、天下統一を果たしたという人物です。

吉井明久の答え
『木下（訂正）豊臣秀吉』

教師のコメント
木下君の名前を書こうとしていた形跡がありますが、正解ですので黙っておきます。

久遠光一の答え
『木下秀吉』

教師のコメント
君にしてはよく頑張ったとほめておきます。

「まったく……子供じゃないんだから、食べ物くらいでケンカしないの！」
「そうだよ。折角のバーベキューなのに」
「……悪かったよ」
「……雄二も。幾ら久遠相手だからって、あつかましい」
「ちっ……」

彼女たちに説教され、縮こまる光一と雄二。
説教後、雄二はバーベキューの続きで、光一は用意した魚介類や肉に野菜を使い、鉄板で焼きそばやお好み焼きなど、ちょっとした本格料理に興じていた。

「まったく、あんた達ホント性懲りもないわね。呆れてモノも言えないわ」
「同族嫌悪って言葉知ってるか？」
「何よそれ？」
「知らんなら良い。細かい事だ」

光一は軽く流してシーフード焼きそばを紙皿にとって、ムッツリーニや秀吉に手渡す。

「っと、そろそろ第2段と行くか」

「まだ用意してたのか？」

「当然。今日は楽しくするって言ったろ？」

「今日はアキ君ともども、光一君にはお世話になってばかりですね」

「……そう思うんなら自重してください、頼みますから」

といって、早速打ち上げ花火に点火すべく……

「ん？」

近づいた所で、そこからちょっと離れた場所にある物を見つけ歩み寄る。

「くぅーん……」

「子犬？　……あーはいはい。“かわいがってください”、ね」

薄暗いちょっと開けた所に、ポツンとある文字の書かれた小さい段ボール。

その中には、生まれてそんな間がない位の小さな体躯の子犬が、ちょこんと鎮座していた。

「……俺もいっそ、こうしてくれれば……っと、何考えてんだか俺は」

周囲を見回すと人影はない。

どうやら、この花火を仕掛けた後で誰かがここに捨てたのだろうと判断。

「……悪いな。俺にはお前を飼う条件も資格も揃ってねえんだ」

そう言って子犬の頭を撫で、踵を返し打ち上げ花火を点火。

小気味良い音を出し、空に打ち上げられ……

パァーンと音を鳴らし、閃光の花が空を飾った。

「どうよ？」

「うむっ、良き物じゃった」

好評に顔をほころばせ、光一は鉄板の上のシーフード焼きそばを取り……

「くぅーん」

「ん？」

ふと聞こえた鳴き声に足元を見ると、先ほどの子犬が光一の足にすり寄っていた。

「わんっ！　わんっ！」

「わあっ、かわいい子犬ですね」

「……うん」

早速女性陣が、光一にすり寄ってる子犬に興味を示し、群がり始め……

光一の後ろに隠れてしまった。

「おいおい、ダメだろついて来ちゃ」

「わんっ！」

「わんじゃねえ。ほら、あっち行け」

光一が追い払おうとシッシとふる手にすり寄り、心地よさそうに泣き声を上げた。

「おい光一、なんだその犬は？」

「さっき捨てられてたのを見つけたんだよ。置いて来た筈なんだけど、戻してくる」

そう言って光一は、子犬を抱きかかえて元の場所に

「わん！」

「……だからダメだっての！」

……戻ってくるのに、そう時間はかからなかった。

「ねえ光一、飼わないの？」

「バカ言え。俺半一人暮らしだぜ？　学校に連れてく訳にもいかねえし、どうやって世話しろってんだよ？」

「「……」」

「？　なんだよ優子に愛子、その眼は？」

「「別に」」

光一がしでかした事を考えると、そう言う普通がちょっと意外な優子と愛子だった。

「……でもその様子だと、とても離れる様な雰囲気じゃない」

「だからって連れて行けないんなら置いてくしかないだろ。大体ここにいる全員、ペット飼える環境にあるのか？」

「俺は無理だな。オフクロに生き物の世話はまず無理だ」

「僕もマンションだから、ペットはダメだよ」
「ウチも同じ」
「私もだめです」
「……以下同文」
「ボクもダメなんだよね」

ほぼ全員が無理だった。

「……」
「……くぅーん」
「……私は大丈夫だけど、これじゃ無理」

子犬は翔子の伸ばした手にそっぽを向いて、光一の足にすり寄った。

「なんだか小さい頃の秀吉みたいね。昔はこんな風に光一に懐いてて、離れようとしなかったから」
「あっ、姉上！」
「へえっ、秀吉ってそんなかわいい女の子だったんだね」
「明久！　ワシは男じゃと何度言えばわかる！？」

ふと優子のつぶやいた言葉で秀吉が真っ赤になり、明久の言葉にツッコミ。
それを見た光一がピンっと閃いて……

「じゃあえっと……子犬版の秀吉だから、光秀って名付けるか」
「光一、お前は秀吉の2代目のつもりで名付けたんだろうが、光秀の名字は明智だ。歴史オンチのくせにカッコつけるな」
「うっ……じゃあ何て名前なんだよ？」
「……豊臣秀吉の子供の名前は秀頼」
「じゃあこいつは秀頼だな」

「わんっ！」

光一から命名された名前に、嬉しそうに吠えた子犬“秀頼”だった。

「……じゃねえ！　飼えないのに名前つけてどうすんだよ！？」

「私で出来る世話なら私でやるわ。それならいいでしょ？」

「え？　母さん？」

「たまには親らしい事をさせて頂戴。仕事なら大丈夫、午前だけなら家で記事を書くくらい出来るわ」

「……ありが、とう」

少々複雑ではあったが、光一は母に礼を言った。

最後に礼を言ったの、何年前……いや、何回目かなと思いながら。

「よし秀頼、俺と一緒に来るか？」

「わんっ！　わんっ！」

「よしよし。じゃあ祝いだ、食え」

「あっ！　おい光一、それ俺のだろうが！？」

「ん？　ああっ、悪い悪い。まあさっきの分だと思ってくれると……」

「思うかボケ！　返せコラぁっ！！」

……そして夜が明けて

「さて、忘れ物はないか？」

ひなた作の朝食を食べ、帰り支度。

皆が車に集まり、最後の点検。

「わんっ！」
「よし、秀頼。この地とおさらばだが、悔いはないか？」
「わんっ！」

こうして、夏休みの旅行は幕を閉じた。

「わんっ！」

たくさんの思い出と、新しい仲間とともに。

「所で光一、その犬メスだろ？それで秀頼ってのも、すごい話じゃないか？」
「何言ってるのさ雄二。それなら秀吉だって」
「ワシは男じゃ！！」

第百八十一問　閑話　『今日のわんこ　久遠さんちの秀頼ちゃん　前篇』

「ありがとうございましたー」

海の旅行が終わって数日。
光一は新しい家族“秀頼”の世話に奮闘していた。

「お待たせ、秀頼」
「きゅーんっ」
「よしよし、じゃあ次は……」

散歩を兼ねた、自分達および秀頼の日用品の買い出し。
ペット飼うのも楽じゃないなと思いつつ、鼻を鳴らして足にすり寄る秀頼を撫でる。

秀頼は“光一の”言う事ならきちんと聞くので、しつけにはあまり手間がかからないのが、せめてもの救いだが。

「……ちょっとした願いの実現ってところかな？」

光一は蔑ろにされて育ったため、家族間のやりとりなどテレビや木下家でしか知らない。
だが秀吉や優子を見る限り、多少手間がかかる方が家族らしいかなとは漠然と思っていた。

……それだけに聞き分けの良い秀頼には、ちょっと残念かなとは思ってはいるモノの。
自分をそれだけ慕ってくれてるのだとわかるだけに、こそばゆかった。

「きゅーんっ」
「さて、帰ってメシにするぞ秀頼」
「わんっ！」

「あっ、鉄砲のお兄ちゃんです！」

秀頼を伴い、帰ろうとした時に聞き覚えのある幼い声。
振り向くと……。

「おっ、葉月ちゃん。元気だった？」
「はいです。今日はバカなお兄ちゃんと一緒じゃないですか？」
「俺だってバカなお兄ちゃんと仲良しだからって、いつも一緒ってわけじゃないよ」
「ちょっと残念です。あっ、かわいいワンちゃんです！」

葉月が秀頼に興味を持ったらしく、しゃがんで頭を撫でようとして……
そっぽを向いて光一の後ろに隠れてしまった。

「ごめんな。この子秀頼って言うんだけど、俺以外に懐かなくて」
「そうですか？　秀頼ちゃん、鉄砲のお兄ちゃんが大好きでしょうがないんですね？」
「みたいだな」
「葉月がバカなお兄ちゃんの事、大好きでしょうがないのと同じです。葉月とそっくりさんです」
「ははっ、違いない」

ここで補足。
秀頼はいまだに光一以外に懐こうともせず、ひなたはもちろん優子

に秀吉にも懐かない。

光一は葉月の幼い恋の例えに、微笑みを隠せずにいた。

「葉月ちゃんはここには？」
「お買い物です」
「そっか。じゃあがんばってね」
「はいです！」

葉月にバイバイと手を振り、秀頼のリードと買った物を入れたキャリーケースを持ち帰宅。
荷物は増えて、光一の肉体的にはかなり負担だが……

「わんっ！」
「秀頼、そんな急がなくても大丈夫だって」

あまり苦にはならなかった。

そして久遠家にて。

「あれ？　秀吉、来てたんだ」
「今日は部活が休みじゃからの。姉上はイベントがあると遊びに出ておって、ひなた殿は先ほど仕事に出たのじゃ」
「そっか」

イベントって言っても、光一に見当は当然付いていた。
少々頭痛がするが、幾らなんでもよそのイベントで自分がらみもないだろうと見当つけ、いったん黙る事に。

「きゅーんっ……はっはっはっ！」
「ん？　ああっ、悪い悪い。秀吉、昼は？」
「んむっ？　まだじゃ」
「じゃあ今から作るから、秀頼のエサ頼めるか？　秀頼、秀吉がエサくれるからそこで待ってな」
「うむっ」
「わんっ！」

秀吉が秀頼のエサ入れにドッグフードを入れてやり、秀頼はクンクンと匂いを嗅いで食べ始めた。

「光一や姉上から見て、昔のワシがこうじゃとは納得いかぬが……やはりかわいいのう」

秀吉が撫でようと手を伸ばすと、よけるように距離を取ってまた食べ始める秀頼。
秀吉は所在なさげにそのままになった腕をひっこめ、残念そうに苦笑。

「相変わらず、光一以外に懐こうともせんのじゃな」
「さっき葉月ちゃんに対してもそうだったよ」
「んむっ？　島田の妹に会ったのかの？」
「さっきスーパーでの買い物帰りに、偶然な」

今日はチャーハンを作り、秀吉と自分のをテーブルに並べる。

「で、あれからひなた殿とは？」
「秀頼がらみでなら話は成立してるよ」
「やはりそう簡単には埋まらぬの」
「蔑ろにし続けたツケの前金払ったかどうか、も怪しい段階なんだ

から仕方ないだろ」

「きゅーん……」

そこで食べ終わった秀頼が、光一に甘えるように足元にすり寄っていた。

「悪い悪い。すぐに問題は片づけて、皆仲良く暮らそうな？」

「わんっ！」

「やれやれ……秀頼、ワシからも頼むぞい。光一とは仲良くしてやってほしいのじゃ」

「わんっ！」

その次の日。

「？　なんだ？」

「何か、あったのかしら？」

「くぅーん？」

光一と優子が秀頼の散歩も兼ねて、最近行きつけになったペットショップに来てみると……。

そこには人だかりが出来ていた。

「すみません、何かあったんですか？」

「いやね。ペットの販売コーナーで乱闘が起きてるらしくて」

「乱闘？　やだ、最悪ね」

「なんだよ、一体どこのバカ共が……」

「離せコラ！　この犬は俺が飼うんだ！！

「ぬかせ、その犬は俺の所に来たがってるじゃねえか！！」
「ええい、俺はこの犬とフィーリングを感じたんだ！！」
「そうはいくか！　女性とお近づきになるに最適な犬、絶対渡すか！！」

……聞き覚えのあるバカ共の声が、店内から響いてきた。

「……俺には聞こえん。なにも聞こえん」
「……まったく、ペットをダシに女の子に近づこうとか、そう言う腐った思考で動物に近づかないでほしいわ」
「きゅーん？」

光一は耳をふさいで、優子は心底呆れたように頭を押さえた。
ただ秀頼は光一にすり寄りながら、何が何だか分からないという風に首をかしげている

「優子、秀頼にバカがうつるからさっさと行こう。ペットＯＫの店は調べてあるから、そこで昼食ってくか？」
「そうね。愛子には悪いけど、２人きりの時間……じゃないけど、こんな時間も欲しいわ」
「わんっ！」

２人は見なかった事にして、秀頼を伴いその場を後にした。
……パトカーのサイレンを背に浴びながら。

第百八十二問　閑話　『今日のわんこ　久遠さんちの秀頼ちゃん　中編』（前書き）

今回は、ちょっとオリ設定つけます。
原作には一切関係ありませんので、ご注意を。

第百八十二問　閑話　『今日のわんこ　久遠さんちの秀頼ちゃん　中編』

「きゅーん……（ぴちゃぴちゃ）」
「ん……ああっ……おはよう秀頼」
「わんっ！」

顔に生温かな感触を感じ、光一は目を覚ます。
起きてみると、秀頼が自分の顔をなめていた。

「……またか」

秀頼は光一の部屋にしつらえた寝床で寝ている。
といっても、光一の枕元ですり寄りながら寝る事が殆どで、意味をなさなかった。

「んー……」

軽く伸びをして、ベッドから降りる。
カーテンを開けて、朝日を浴びてから顔を洗いに洗面所へ。

「わんっ！」

それに秀頼も、尻尾を振りながらついていく。
その途中で、秀頼を抱き上げ……

「……ホントにかわいいな、秀頼は」
「くぅーん？　（ぺろぺろ）」
「ははっ、くすぐったいよ」

ちょっと遅れて、顔を洗い身支度を整えて……。

「あれ、朝食が出来てる？」
「……無理ないのは理解してるけど、いい加減慣れてくれない？」
「仕方ないだろ。元々母さんが料理作る事自体、馴染みが全くないんだから。追々慣れるしかない」
「……今更だけど、本当にごめんね光一」
「今更なら、気にしたってしょうがないさ。ほら秀頼、飯だぞー」
「わんっ！」

最近日課になりつつも、未だ慣れないおふくろの味を満喫。
自分以外が朝食を用意してくれる事に、所帯じみた幸せを感じつつ……。

「ごっそさん。それじゃ、ちょっと出てくる」
「誰と？」
「今日は愛子と」
「迷惑かけちゃだめよ？」
「はいはい」

少し距離が縮まったかなと、正直どうでもよくも……少し安心してる自分が居た。

それから公園にて。

「あれ、久遠じゃないか。お前も犬、飼ってたのか？
「ん？　須川か……って、どうして犬なんて連れてんだよ？」

愛子との待ち合わせ場所に行く途中、ドーベルマンを連れた須川と

鉢合わせた。

「どうしてって、散歩だ」

「てかお前、犬飼ってたんだな？」

ふと思い出すのは、ペットショップでの事。

「ああっ。中学入ったころからずっと一緒の、俺の愛犬だ」

「……」

「ってなんだその眼は！？」

よくよく考えて、須川が連れているのはドーベルマンで、しかも成犬。

女をひっかけるには、かなり無理があるチョイスである。

「……下心はなさそうだな」

「おい、なんで犬連れてるだけで下心だ何だと言われなきゃならない？」

「その様子だと、昨日の騒ぎには参加してないのか？」

「きゃあああああっ！　何この駄犬！？」

すぐ近くで悲鳴が上がり見てみると……。

「……」

「こら、何羨ましい事をやってる！？」

須川の愛犬が近くを通りがかったメス犬に覆いかぶさり（ピーっ！）な状態となっていた。

「……犬は飼い主に似る……いや、あれは飼い主の情念に影響されたっぽいな」
「きゅーん？」
「コラそこ！　何気に失礼な会話するな！！」

数分後

「まったく、酷い目にあった」
「羨ましいなんて声高に公言するからだ」
「きゅーん♪」

顔にくっきり平手跡を付けた須川が、愛犬を連れて戻って来た。
須川の愛犬が秀頼に奇妙な視線を向けたので、光一は現在秀頼を抱きかかえている。

当人……いや、当犬の秀頼はというと、主人に抱きかかえられてるのがうれしくてしょうがないのか、上機嫌で喉を鳴らしながら尻尾を振っていた。

「しかし、全然似合わんな？　お前がそんな子犬連れてるなんて」
「拾ったんだから犬種も子犬や成犬もねえよ。な、秀頼」
「わんっ！」

秀頼が元気に鳴いて返事を返すと、須川が呆気にとられ……。

「……なんで名前が秀頼なんだよ？」
「優子が昔の秀吉そっくりだっていうから」
「よし、その子も俺が飼おう」
「お前、モテないからって犬にまで……」

「下世話な想像するな！」

須川が手を伸ばすと、秀頼が怯え光一の胸に顔を埋め始めた。

「ん？　……まさか、お前にしか懐かないとは言わんよな？」

「そうだけど？」

「……秀吉そっくり。つまりは……異端者めえええええ！！」

ごぉっとどす黒いオーラをまとい、姿がかき消された次の瞬間……

「ゆ～る～さ～ん～～！！」

ＦＦＦ団会長、須川亮。

異端審問会戦闘モード、移行終了！

「ぐるるるるるるる！」

主人につられ、犬の方も唸りながら光一を睨みつけていた。

「マジで情念に影響されてるのかよ！？」

「……くぅーん」

秀頼が怯えたように、震えながら光一の胸にすり寄った。

「おい待て須川、ここは学園じゃなくて公共の……」

「あっ、光一君待った？　お詫びに保健体育の実践してあげるから、それで許して？」

……最悪のタイミングで愛子が合流してきた。

「首をよこせ久遠！！」
「ぐぁおおっ！！」

……数秒後

「きゅーんっ、はっはっはっ！」
「こらこら秀頼、くすぐったいって」
「あははっ、なんだか微笑ましいね。ボクもやってあげようか？」
「是非ともやってほしいが、公衆の面前ではまずいだろ」

須川とその犬を（1人1秒で）撃退し、ゴミ箱に捨てて光一は一安心。
現在はベンチで、抱きあげた秀頼に顔をなめられてる光一。

「やっぱり秀頼ちゃん、かわいいなあ。ボクも抱っこしたい」
「させてあげたいのは山々だけど……」

光一が秀頼を愛子に手渡すが、秀頼はするりと愛子の手をすりぬけて光一の膝の上に。
光一が手を添えると、心地よさそうにすりよった。

「きゅーん♪」
「秀頼、未だに俺以外に懐かないからなあ」
「それが残念だなあ。お義母さんに木下君、優子もダメなんでしょ？」
「ああっ。相変わらずそっぽ向かれてばっかみたいで」

忠犬、と言えば聞こえはいい。
けど光一としては、もう少し周囲に懐いてほしいのが本音である。

……自分だけというのに、少々心地よさを感じてるのは事実だが。

「でも妬けちゃうなあ。秀頼ちゃん、そんなに光一君に甘えられて」

「えっと……悪かったな？」

「わかればいいよ。じゃあ光一君、秀頼ちゃんの散歩に行こうよ」

「悪いな、つき合わせて」

「いいの。たまには静かに二人きりっていうのも、悪くないからね」

「わんっ！　わんっ！」

「2人と1匹、な？」

「はーい。ごめんね、秀頼ちゃん」

第百八十三問　閑話　『今日のわんこ　久遠さんちの秀頼ちゃん　後編』

「……ねえ光一君」
「いや、皆まで言うな」

今日は部活が休みなので、秀頼の散歩につきあう事にした愛子。
現在秀頼のリードは愛子が持っているのだが……

「わんっ、わんっ！」

秀頼自体が光一についていく形でしか歩かないので、リードを持ってる意味がなかった。

「ホントに秀頼ちゃん、光一君ラブな子犬ちゃんだね？」
「小さい頃の秀吉って、ホントこんな感じだったぞ？　何かあったらいつも俺に泣きついてさ、俺だって当時いじめられてて大変だったけど……頼られるのは悪い気がしなくてさ」
「なるほどね。光一君の世話焼きって、そうやって育まれたんだね？」
「……みたいだな。それが嫌だと思った事は一度たりともないけど」

ひとしきり散歩コースを満喫したのち、光一と愛子は……

「秀頼、お手」
「わんっ！」
「秀頼ちゃん、お手」
「……（ぷいっ）」

秀頼に芸を仕込んでいた。

……光一の言う事には素直に従っても、愛子の言う事にはそっぽを向いて。

「秀頼、ダメだろ？」
「くぅーん？」

光一の言う事がよくわからないのか、喉を鳴らしながら首をかしげる秀頼。
愛子が頭撫でようと手を伸ばしても、プイっとそっぽを向いて光一にすり寄り、なでる光一の手に心地よさそうに身をゆだねた。

「きゅーん♪」
「うーん……もちっと、俺以外にも懐いてほしい所だがな」
「でも仕方ないのは、ボクもわかるよ？　光一君はいい人だもん、秀頼ちゃんが光一君以外に目もくれないのわかるよ」
「……そう、かな？　あははっ」
「きゅーん？」

気恥しくなって、光一は愛子から顔をそむけた。
それを見て秀頼は、何が何だか分からない様に首をかしげた。

「あれ？　久遠君に愛子ちゃん」
「あっ、島津先輩」
「ご無沙汰してますー」

そこへビン底メガネに、スタイル以外は地味な印象が目立つ女子。
光一の所属するサバ研の先輩、島津さやかが通りかかった。

「奇遇だね。デート？」
「まあそんな所です」

「あたしはこれからムッツリ君とだよ。服は地味だけど気合入れたし、勝負下着も付けてるし、問題なし」

2人は特に発言にはツッコミを入れなかった。

「あれ？　久遠君、犬飼ってたっけ？」
「この前からです」
「かわいいねー、おいでおいでー」
「……（ぷいっ）」
「あれ？」

秀頼にそっぽを向かれ、さやかは一瞬だけ呆気にとられた後くいっとメガネの位置を直す。
光一と愛子は苦笑しつつ……

「この子、光一君以外に懐かないんですよ」
「そうなの？」
「ええ。おいで秀頼」
「わんっ！」

光一の呼び掛けにはあっさりと従い、飛びついて光一に心地よさそうにすり寄り始めた。
それを見てさやかは……

「……そうだ、犬娘のコスプレもありだね。優子ちゃんと愛子ちゃん専用にも用意して、どうせだから瑞希ちゃんや秀吉君にも」
「はい？」
「……今度それ着て、ムッツリ君に迫ってみるのもありだね」
「なんか先輩のアンテナに触れたらしいな？」
「きゅーん？」

今後の楽しみと、自分のちょっとした願望への算段を立て始めた。
余談だがさやかは最近優子と愛子、瑞希に秀吉をコスプレさせるのが楽しみとなっていた。

「ん？　そろそろ帰るか」
「そうだね。午後からは吉井君達が来るんでしょ？」
「そう？　あっ、あたしも急がないと」
「それでは」

それから、光一の家にて。

「おじゃまします」
「いらっしゃい。どうぞ」

ちょうど仕事に出るひなたに出迎えられて、明久に雄二、秀吉。
そして優子に瑞希、美波に翔子が秀頼を見に光一の家に来ていた。

「あの、光一はどうしたんですか？」
「光一なら、愛子ちゃんとお風呂で……」
「えっ！？　久遠君、愛子ちゃんとそこまで進んでたんですか！？」
「そんな……まさかお母さんが居る家で、そんなことするなんて！」
「……雄二、私たちも負けられない！」
「光一ぃぃぃいいいいいっ！！」

「……ねえ、秀吉君に優子ちゃん？」
「……はい。皆割と思い込みが激しいというか、直情傾向が強い人たちが多くて」
「……じゃが、悪い者たちではないのじゃ。そこだけはわかってあ

げて欲しいのじゃ」
「……そっ、それは、わかるけど」
まだ話の半ばだというのに、勝手にそう結論付けて大騒ぎに発展していた。
ひなたは呆気にとられながら、秀吉と優子にそっと問いかけ……正直ついていけずにいた。
「何勝手な妄想で騒いどんだお前らは！？」
しっかり騒ぎが聞こえていた光一が、怒鳴りながら洗面所から出てきた。
その手にタオルで包んだ秀頼を抱えながら。
「あっ、光一？　それに、秀頼って事は……」
「愛子に秀頼を洗ってもらってただけだ。念の為に言うが、ちゃんと服着たうえでな！」
「でも大変だったよ。秀頼ちゃん、ボクだと嫌がって逃げようとするから」
「つくづくすまんな」
秀頼が自分以外の人間に慣れる為だったが、選択自体が間違っていた。
「おかげで服がぬれちゃったよ」
秀頼が嫌がって逃げようと暴れたせいで、愛子の服はびしょ濡れとまではいかないが濡れていた。
……余談だが、後で光一に服を貸してもらうつもりである。

「ボク今日ノーブラなのに」
「のっ……（ドクドクドクッ）」
「あっ、明久君!?」
「……そっか。アキは小さくても良いんだ」

胸を隠すように腕を交差する愛子の爆弾発言で、明久が鼻血を垂らしながらうつむき……。
瑞希が心配そうに明久に駆け寄り、美波はその発言で明久が鼻血を垂らした事で、自分の胸を見ながら安著の息を吐いた。

「うぎゃあああっ！　眼が、眼がぁぁあああっ！！」
「……雄二は見ちゃダメ。見たいなら後で私が見せてあげる」
「俺はお前の胸なんかに興味はねえ！」
「……雄二、これからの指針の為に聞きたい。毎日の牛乳とダイエット、私はどっちを日課にすればいいの?」
「聞いてどうする気だ!?」

雄二は目を潰されつつ、これからの翔子の指針についての相談を受けていた。

「……まさか文月学園は、ああいう事ばかりなの?」
「「……記事にはしないでください（ほしいのじゃ）」」
「え?　あの……評判が悪いわけね」

なんとなく、光一のこれからが心配なひなただった。

「久しぶりだね秀頼。元気だった?」
「……（くんくんっ）」

回復した明久が秀頼に手を伸ばすと、秀頼はその手に鼻を近づけて

嗅いだ。
……が、それ以上何もせず、光一に甘えるように鼻を鳴らし始めた。
「え？　吉井君だけ、対応違わなくない？」
「そうなの？」
「ワシらじゃとそっぽ向かれるだけで、匂いを嗅ぐ事もしなかったのじゃ」
「自分と同列だと認識したんじゃないのか？」
バンバンと明久の背中を叩きながら、ようやく回復した雄二が笑いながら茶化す。
せっかくなので、自分にはどんな反応するか試そうと手を伸ばすと……。
「うぅ～っ！」
秀頼が唸り始めた。
「なんで俺には唸るんだよ！？」
「主人への害意を感じ取ったんじゃないの？」
明久の指摘に、ほぼ全員がうなづいた。
「ほらほら、落ちつきな秀頼」
「くぅーん」
光一が頭を撫でて宥めると、秀頼は撫でられる事に浸り始め、すり寄り始めた。
甘えるように鼻を鳴らし、尻尾をふりながら眼を細め。

「……とってもかわいいです」
「……見てて癒されるわね」
「……アタシも抱っこしたい」
「……ボクはあんな風にナデナデしたいよ」
「……久遠ばかりずるい」

そんな秀頼に当てられたのか、女性陣5人はトリップし始めた。

「やっぱり女の子って、可愛い物に目がないんだね」
「見てて癒されるのは確かだからな。その分、光一は嫉妬されるんだろうな」
「……言うと思ったが、やはりいうのじゃな」

男性陣は、そんな女性陣を見つつ、それぞれ感想を言い合っていた。

「ところで、ムッツリーニはどうしたんだ？」
「島津先輩とデートだそうじゃ」
「そうか……異端審問会から逃げる時に使えそうだな」

第百八十四問　閑話　『今日のわんこ　久遠さんちの秀頼ちゃん　おまけ』（前）

秀頼の犬種ですが、柴犬という設定で行きます。
個人的に柴犬好きなので

第百八十四問　閑話　『今日のわんこ　久遠さんちの秀頼ちゃん　おまけ』

「わあっ、食べてますよ」
「食べてる姿も可愛いわねー」
「まさに癒しね」
「あーもう秀頼ちゃん、どうしてこんなに可愛いの？」
「……可愛い物は人類の宝」

ドッグフードを食べる秀頼に、すっかり夢中になった女性陣。
あまり近づくと逃げるので、少し距離を取っての見物だったが女性陣は特に気にしない。

余談だが愛子は、濡れた服を今乾かしており、光一の普段着を借りていた。
合わないのは手足と背の丈と、少々両方にショックを与える内容だったが。

「すっかり夢中になってるね」
「無理もないのじゃが……のう、ワシは傍から見れば秀頼なのかの？」
「そりゃ秀吉とずっと一緒で、最も理解してる光一や木下姉がそう言ってるんだから、そうなんだろ？」
「秀頼ほどベッタリじゃあなかったよ」

男性陣は、そんな女性陣を見ながらの談笑。
秀頼は食べ終わると、エサ入れを元おいてあった場所に運んでから、光一に駆け寄る。

「わんっ！」

「よしよし、賢いぞ秀頼」
「へえっ、明久より賢いんじゃないか？」
「言うと思ったよ！」

秀頼は光一の言う事なら、殆どと言っていいほどよく聞く。
それもあって、光一は特に秀頼の躾には困っていなかった。

「でも本当に可愛いですね～。私も久遠君みたいに、秀頼ちゃんに懐いてほしいです」
「秀頼、ちょっと位撫でさせてあげな？」

光一が秀頼を抱き上げ、瑞希に差し出し頭を撫でるように促す。
秀頼は光一の手をすりぬけてそれを避けると、光一の肩に飛びついてペロペロと光一の頬をなめ始めた。

「コラ秀頼、ダメだろ！」
「くぅ～んっ……」

……唯一困っている事は、秀頼が光一以外にてんで懐こうとしない事である。
心地いいのは事実だが、これからを考えるとそうもいかない。

「秀頼はずっとあの調子じゃからの」
「そうね。アタシもそっぽ向かれてばっかり」
「そっか。道理で僕に対しての反応に驚くわけだよ」
「俺のはなぜか納得されたがな」
「ねえ光一、ちょっと良い？」

そう言って、明久は秀頼に手を伸ばした。
秀頼はその手に鼻を近づけて、クンクンと匂いを嗅ぐ。

「やっぱり吉井君だと反応が違うわね？」
「おいでおいで」
「ほら、大丈夫だから」
「……くぅ～ん？」

光一の後押しで、恐る恐る明久の手にすり寄る秀頼。
そして抱き上げ……

「大丈夫、怖くないよ？」
「……くぅ～ん」

不安の色が未だ濃い秀頼。
それに罪悪感を感じた明久は、ゆっくりと秀頼を降ろす。

「ごめん光一、ちょっとこれ以上は……」
「いや、無理言って悪かったな？」

とりあえず、時間をかけないと無理だと判断。

「でも秀頼ちゃん、すっかりこの家になじんでますね？」
「馴染んでると言い難くはあるがな。俺にしか懐いてないんじゃ」
「確かに問題あるわね。今のままだと、学校にもついてきちゃうんじゃない？」
「……どうしたもんかな？」
「きゅ～ん？」

好かれる事が問題になると言う事は、今に始まった事じゃない
……だからと言って、好いてくれる事を悪く言う気もサラサラない
光一。

「コツコツとやるしかないなら、そうするしかないんだよな。ま、頑張るか」
「そうね。心配しなくても、アタシも協力するから」
「そうだね。ボクも部活がない日は協力するよ」
「わっ、私もお手伝いします！」
「ウチもよ」
「……まかせて」

光一の秀頼への心配に、女性陣が協力を一斉に申し出た。
……本心では秀頼に懐いてほしいからなのだが。

「良かったな秀頼、人気者だぞ？」
「くぅ～ん？」
「先は長く大変そうだぞ光一？」
「……そう言うなっての！」
「わんっ！　うぅ～っ！」
「本気で嫌われてんのかよ俺は？」

光一の抗議に続くように、秀頼が雄二に吠え唸り始めた。

「坂本君よりは評価高いみたいだから、アタシ達もなんとかなりそうね」
「おい、妾！」
「……大丈夫、雄二には私が居る」
「いや、いらねえからあだだだだだだっ！！」

そして、夜。

「光一よ、風呂が沸いたぞい？」

本日、久遠家にお泊りの木下秀吉君。

「あいよ。一緒に入るんだろ？」

「当然じゃ。“男同志”裸の付き合いじゃ」

秀吉にとっては、こういう付き合いが出来る光一の存在はありがたかった。

「それじゃ行ってきなさいよ。秀頼は見ててあげるから」

「ああ、頼む」

ちなみに優子は、その間だけ秀頼を見る為に態々残っていた。

「くぅ～ん」

「秀頼、優子の言う事よく聞いて、良い子で待ってろよ？」

「……くぅ～ん」

そう言って秀吉と風呂に入っていく光一。

秀頼は自分のエサ入れを出して、静かにお座りしながら待つ。

「お腹空いたの？」

「……（ぷいっ）」

「本当に、光一の事が大好きなのね？」

「わんっ！」

返事をするように、秀頼が吠えた。

優子はそんな秀頼にそっと近づいて、警戒されない位の位置で腰を下ろす。

「本当に羨ましい位、賢くて素直なのね。だったら、同じ気持ち同士仲良くできないかな？」
「きゅ～ん？」
「そう、光一が大好き同士、仲良くできない？」
「……（くんくん）」

トコトコと秀頼が歩み寄り、優子は手を差し出す。
秀頼は首を傾げながら、その手に鼻先を近づけてクンクンと嗅ぎ始めた。

「今はそれで良いわ。まずは焦らず、ゆっくり仲良くなりましょ？」
「……きゅ～ん？」
「じゃあごはん出してあげるから、ちょっと待ってね？」

光一に教えて貰ったドッグフードの保管場所から、一袋取り出して開けてエサ入れに入れてやる優子。
秀頼は目の前に出されたエサを食べ始め、優子はそれをじっと見つめる。

「ふふっ、やっぱり可愛い」

そんな、ちょっと心が通じ合った時間。

第百八十四問　閑話　『今日のわんこ　久遠さんちの秀頼ちゃん　おまけ』（後）

さて、次からですが……

もう野球編に入ろうか、もちっと閑話入れようか……どっちにしようか？

時期的に夏休みですから、もう少し何か入れたい気もするので。

第百八十五問　激闘！　オカルト召喚大会編　プロローグ（前書き）

マロさんからの提案をもとに、融合媒介と融合召喚メインのオカルト召喚獣バトル編を書いてみようと思います。
提案ありがとうございます。

第百八十五問　激闘！　オカルト召喚大会編　プロローグ

時は盆休み。
ここ、文月学園ではとあるイベントが開かれていた。

・文月学園主催　オカルト召喚獣使用本格おばけ屋敷。
・オカルト召喚大会

「随分と大掛かりだね？」
「そりゃそうだろ。文月学園の評判がガタ落ちな今、ＰＲに力入れないと来年の生徒数が激減なんて事になりかねないから」
「ババァも苦労してるようだな」
「ならばワシらも、生徒として頑張らねばならぬのう」

吉井明久、久遠光一、坂本雄二、木下秀吉。
彼らは現在、オカルト召喚大会のメイン選手として、控室にて時を待っていた。

時を遡る事、学年試験召喚戦争終了の少し後。

「融合媒介のお披露目？」
「そうさね。データも纏まったし、不安はあるがお披露目と行きたいんだ」
「なんでまた急に、騒動の種になりかねない事を？」
「スポンサーからせっつかれてるんだ。学園の性質上、逆らうわけにはいかないさね」

現在文月学園は危うい状況にある。

それというのも、第2学年が主体となって起こしている騒動が原因なのだが……。

「けど融合召喚もそうだけど、融合媒介は融合できる相手が限られてるだろ？」

「まずは出来るって事を証明しない事には、話にならないさね。それに最も有効なのは、吉井の同時召喚と並行して使用し、実践活用できる事のアピールだ」

「となると、自動的に組むのは明久と秀吉じゃないか。今から別の奴探した所で無理そうだが、ＦＦＦのバカ共が余計な騒動起こしかねん組み合わせだぞ？」

「心配しなくても、会場の立ち会いは西村先生に全任するさね」

「こういう時だけは真剣だな」

「評判が悪化の一途をたどってる今、スポンサーまで離れて貰っちゃこの学園はおしまいなんだよ。こっちだって必死さね」

という経緯があっての事である。

形式はトーナメントで、４対４のチーム戦。

一応今回も、このチームが勝ち進んでもらわなければ困る為、科目の配慮は雄二に一任。

優勝者には、トロフィーと賞状、如月グランドパークのゴールドペアチケット。

更には秀吉のフィールド展開（教科指定不可、召喚可）の黒金の腕輪の量産型を１つ。

光一は既に腕輪を２つ持ってるため、融合媒介の腕輪にその機能を追加という話となっていた。

「ワシの腕輪の量産型とはのう」
「この中でコスト低いのは秀吉の腕輪だそうだから、比較的量産しやすいって事だ……が、良いのか雄二？　腕輪まで俺が貰って」
「良いんだよ。俺の腕輪もフィールド形成だし、もう１つだって使う時には隠ぺいにも協力してやる」

雄二としては、ペアチケットを処分出来ればそれでよかった。
……なぜなら。

「……今の、どういう事？」
「……　（ぴたっ！　……ギギギギギギっ！）」

翔子も瑞希、さやか、愛子と組んで、この召喚大会に参加する事になっているからである。
優子は秀頼が慣れ始めてる頃合いの為、今回は秀頼と一緒に応援。

「え？　いつの間に雄二の後ろに？」
「ちょっと待て光一、お前マジで気付かなかったのか？」
「あっ、ああ……」
「……そんな事どうでもいい。雄二、ちょっとＯＨＡＮＡＳＨＩする」
「まあ待て翔子、これには深い訳が……」

ふと見てみると、翔子の後ろには瑞希、愛子、さやかが並んでいた。
ちなみに美波は現在、家族で遠出をしていて召喚大会は出れない。

「いやいや、瑞希ちゃんに愛子ちゃん。誘ってくれてありがとね」
「いいえ、さやかちゃんも」
「うんうん、ようやく馴染んでくれたね」

島津さやか先輩は、気さくな女性である。
故に上下関係は一切気にせず、後輩にもちゃんづけで呼ばせている。
光一はそれには賛同してないが。

「……」
「ん？　どうした、明久？」
「え？　うん、覚悟はしてたとはいえ、ちょっとね」

周囲は明らかに、主に光一と明久に嫌悪の視線を向けていた。
2年にしろ3年にしろ、騒動の中心であり大神白夜の弟である久遠光一と、その相棒として悪名高い吉井明久を、それぞれ良くは思っていない。

更に言えば学年試召戦争で2年3年両方を潰そうとした事もあり、3年でも2年のB～Eクラスでも光一と明久に対して、友好的な印象を持つ者は完全に皆無となっていた。

「おう吉井に久遠、やっぱりお前らも来てたのか？」
「へへっ、この前のまぐれ勝ちのリベンジ果たしに来たぜ？」
「ま、気にする事ねえさ」
「……そうだね」
「「っておい聞けや！！」」

呼びかけられた事に、全く意にも介してなかった明久と光一だった。
仕方なく振り向いた先には……。

「なんだ、親指にモヒカンの常夏コンビか。お前ら暇なのか？」
「誰が親指だ！！　暇じゃねえよ、お前らへのリベンジの為に時間割いたんだ！！」

「いや、こんな事に時間割ける時点で暇でしょ。えーっと、夏……先輩」
「俺は常村で、こっちは夏川だ！　いい加減覚えろ！」
「「いや、どうでもいいから」」
負け犬根性が染み付き始めた所為か、あしらわれていた。
「なんだか落ちぶれたね？」
「うるせえ！　大体なんでお前は久遠と親しんでやがるんだ、島津！！」
「なんでって、あたしと久遠君はサバ研の先輩後輩だもん。別に友好関係までとやかく言わなくて良いじゃない」
「そいつは学園の評判を貶めてる迷惑この上ないクズだぞ！？」
「だからって、突っかかって負けてるんじゃ意味ないじゃない。もう皆知ってるよ？　２人が久遠君の世界史に負けたって」
「「何ぃっ！？」」
……訂正、負け犬根性と負け癖が染み付いた所為か、簡単にあしらわれていた。
「「「……」」」
「おいやめろ、そんな目で見るな！」
「くそぉっ、その眼をやめろ。俺達を見るんじゃねえ！」
アンチ久遠派の残党たちが向ける憐みの視線を、２人は必死になって振り払う。
「あいつらと当たったら確実に勝てる様な気がするな」
「……そんな気がする」
「失礼だけど、もうあんまり強そうに見えないよね？」

「あーあ、すっかり落ちぶれちゃってるね」
「そろそろハンカチの用意したほうが良いかのう？
「皆さん失礼ですよ……否定できませんが」

雄二、翔子、愛子、さやか、秀吉、瑞希がそれぞれそんな様子を見ての一言。
それは幸いにも、２人の耳には届かなかった。

「……本当に落ちぶれてるな？　見てて気の毒な位」
「うん。流石に僕も罪悪感が湧いてきちゃったよ」
「だからうるせえってんだよ！　それもこれも、あの召喚大会で久遠と木下に負けたのがケチのつき始めだ！！」
「あれから大神からの扱いが日に日に悪くなるわ、無能呼ばわりされるわ、吉井以下のレッテル貼られるわで最悪だ！　だがそれも今日で終わりにしたいんだ、今日は出来れば俺達が勝ちたいんだ！！」

光一はもちろん、周囲も呆気にとられていた。

「いや、大声で堂々と負け犬宣言するなよ」
「しかもなんか最後弱気だったね？」
「「「……」」」
「だからやめろ！　やめてくれ！！」
「くっそおっ、覚えてろ！！」

そう叫びながら憐みの視線を腕で振り払いつつ、２人は逃げ去ってしまった。
それを見送りながら、光一はポリポリと頬を掻きながら……。

「……なあ明久、俺達何かしたのかな？」
「……ううん、してない筈だけど？」

勝手に騒いで帰って行った様な印象を持っていた。

所変わって、観客席のペットＯＫ区画。

「……くぅ～ん」

「我慢してね、秀頼。アタシだって寂しいけど、もうすぐ秀頼のご主人様が来るから」

「わんっ！」

最近ようやく気を許し始めた秀頼を傍に、優子は観客席で今か今かと待ちわびていた。

内心、秀頼が今光一の指示で自分と一緒にいるとはいえ、今光一以外で一番気を許してると言う事に、ちょっとした優越感を感じつつ。

「……かわいいな」

「くぅ～ん？」

「やっぱり光一の様にはいかないわね」

第百八十六問

開会式も終わり、光一たちのチームは第一回戦から。

「なんでいきなり僕達？」

「表向きはオカルト召喚獣の宣伝でも、本来のメインはこれのＰＲなんだから当然だろ？」

ふと疑問を漏らした明久に、光一が自分の両手を差し出し腕輪を見せる。

右には赤みを帯びた黒い色の融合召喚、左には漆黒の融合媒介

「それに俺としても、もう一度駆けあがるにゃ良い機会だ」

「だろうな。生身とはいえ、お前の敗北はかなり重い」

「そう思うんなら俺や明久に責任押し付けようとすんなゴリラ！」

「るせえな！

「「……（ガンのくれ合い）」」

海の事があるとはいえ、結局この２人はこの２人のままだった。

「あっ、光一に雄二。対戦相手が来たよ？」

そう言って、２人ずつの男女のチームが姿を現す。

光一の姿を見るなり、ほっと息を吐きながら。

「どうやらやっこさん、光一が弱体化してると思ってるっぽいぞ？」

「別に光一が弱くなった訳じゃないのに」

「負けたという事実の方が重いんじゃろ。勝てるかもしれない、それだけで十分という事じゃろ？　光一」

「だろうな」

光一が頭をかき、表情を引き締め一歩前に。

「……細かい事を一々言う気はねえ。テメエ等潰して先に行く」

「ほざけＦクラスが！」

「静かにせんか！　さて、第一回戦第一試合、始め！」

鉄人の一括のすぐあとに数学科目の召喚フィールド展開。

「「「「サモン！」」」」

「「「「サモン！」」」」

『２－Ｆ　吉井明久　数学１０６点
２－Ｆ　久遠光一　数学４１１点
２－Ｆ　坂本雄二　数学２２５点
２－Ｆ　木下秀吉　数学９９点』

ＶＳ

『２－Ｂ　鈴木弘太郎　数学１９７点
２－Ｂ　杉村花梨　数学２２１点
２－Ｃ　広瀬蓮治　数学１５８点
２－Ｃ　武田美香　数学１６６点

光一の死神、明久のデュラハン、雄二の狼男、秀吉の猫又に対して……

上からスフィンクス、口裂け女、キョンシー、人魚

「えーっと、謎好きに口が軽い、活発に泳ぎが得意ってところかな？」

「だろうな。じゃあそうだな……スフィンクスもらって良いか？」

「ああ。俺はキョンシーやる」
「わかったのじゃ。ワシと明久で融合して、口裂け女と人魚の相手をするぞい」

死神の背の巨大ゲンコツが開き、デュラハンと猫又がそれに飛び込み掴まれ……

「クロス！」

握られたゲンコツの中から、明久のデュラハンが飛び出した。
甲冑をまとい、刀と自身の頭を持って。

「「「おおーっ！」」」

融合媒介がお披露目となり、観客から歓声があがる。
きちんと新技術の宣伝はパンフで出ており、明久たちの戦いにはキチンと付加価値がつけられていた。

「さあ来いよ。エサになるか首になるか、選ぶくらいはさせてやるぜ？」
「ほざけ！」

スフィンクスが前足を振りかぶり、叩きつけようとして……

スパンっ！

「え？」

手の大鎌に切断され、宙に待ったそれが大鎌の柄のショットガンで撃ち砕かれた。

「元々どん底から凶王に這い上がった身でね。負けにショック受ける程ヤワじゃないし、ハングリー精神にゃ自信あんのさ」
「だったらなんだってんだよ！？」
スフィンクスが唸り声をあげ、死神に噛み付こうとし……
「わかってねえな」
大鎌で受け流してスフィンクスの背に飛び乗ると、大鎌をスフィンクスの首にひっかける。
「どっちが上か下か、強いか弱いかなんてな……終わってから言うもんだぜ？」
死神が飛び降りてすぐスフィンクスの胴体が倒れ伏し、死神が上空にショットガンを構え……
引き金を引き、それを撃ち砕くと同時に着地した。
「相変わらず、すかした野郎だぜ」
一方、悪態をつきながらも、雄二の狼男はキョンシーを圧倒していた。
相手はCクラスで、雄二の点数は今やAクラス級。
「呆気ないが、まあ肩慣らしにゃ良いだろ」
キョンシーが飛びはね、その体制のままとび蹴り。
それをパンチで迎え討ち、足がはじけ飛ぶと同時に狼男がキョンシ

ーの顔面にパンチ。

「よしっ！」

一方、明久の融合召喚獣は、人魚と口裂け女との2対1。

「よっと！」

持ち前の操作技術を駆使し、ひょいひょいと回避しつつのヒットアンドアウェイ。

大剣より質量の少ない刀である事で、首を抱えながら身軽に戦っていた。

「2対1なのに！」

「もうっ！　あんなバカに手こずってられないわよ！」

口裂け女が包丁を構え、特攻してきた、

和風デュラハンが自身の首を放り、両手もちで刀を構え……

ザンッ！

口裂け女の包丁を受け流して胴体を真っ二つにし、首をキャッチ。

すぐに人魚に向き直る。

「なんだか弱い者いじめになっちゃうかな？」

「なによ、バカのクセに！」

光一の死神が和風デュラハンと人魚に間に割り込み、人魚に飛びかかった。

「じゃあもらうぜ？　俺なら弱い者いじめって言うより……」

死神の背の巨大ゲンコツが開かれ、指先がグニュグニュとうごめき……

中林、ダークネス清水、小山、根本、夏川の顔をかたどり、奇声を上げ始めた。

「捕食になるから」

人魚に狙いを定め、指の顔が一斉に人魚に殺到。

人魚に食いつき、食い千切っては噛み砕き……。

点数が０になった。

「勝者、久遠チーム！」

それを遮るかのように、立会人の鉄人西村がそう宣言。

ちなみにチームリーダーは（多数決で）光一である。

『『『『『ギシャァァァアアアアアアアアっ！！』』』』』

その宣言に応えるかのように、先ほどまで人魚を咀嚼していた５つの首が咆哮した。

「……久遠光一。我はここに在りってな」

「すかしてんじゃねえ。バカが」

「うっせ！」

その後もどんどん試合は消化され、いよいよ……

「へえっ、格新婦にのっぺらぼうの尻目、それにサキュバスかあ。瑞希ちゃん、折角だからこの衣装作ってあげようか？」
「けっ、結構です！」
「ボクも見てみたいかも。それよりさやかちゃんのは、妖精ですか？」
「そう、妖精パック。影響したの“気まぐれ”だと思うけど、パックは変身能力持ってるからそれもあると思うよ？」
「……可愛いです。それよりも試合」
「あっ、そうだったね。さあみんな、この上から８８・５６・８７のお姉さんに任せなさい」
「すごい数値ですね？　すっごく頼りになりますよ」
「いえ、問題はそこじゃないと思いますよ？　愛子ちゃん」

『２－Ａ　霧島翔子　数学４０９点
２－Ａ　工藤愛子　数学２５６点
２－Ｆ　姫路瑞希　数学４１１点
３－Ｄ　島津さやか　数学８１点』

「「「……えっと」」」
「あっ……あはは……」

島津さやか率いる（？）チームの出番である。

第百八十七問

女性陣のチームは危なげなく勝利。
たださやかは点数で劣る分、元々知略で戦うタイプなので支援に徹していた。

「いやー、ごめんごめん。お役に立てなくて」
「ムッツリーニ君と同じで、一能突出なんですね？」
「そんな気にしないでください。先ほどの援護は助かりました」
「……私も、お礼を言いたい位」

先ほどの戦闘についての談義は、周囲の目を引くには十分なメンバーだった。

「チーム戦って都合上、４回勝てば優勝。で、姫路たちとは決勝でぶつかる訳で」
「決勝は物理だから、僕達の独壇場だね」
「うむっ。ワシらは揃って物理はそれなりじゃからの」
「だが向こうにも知略派が居る以上は、油断はできないな」

そんな彼女たちの近くでは、光一たちがトーナメント表を見ながらの作戦会議。
決して楽観はしてないが、悲観もしていない。

「ねえ、決勝戦の話は良いけど、まだ1回戦終わったばかりだよ？」
「大丈夫だろ明久。２回戦も3回戦も、当たる相手が相手だから問題じゃない」
「じゃろうの。２回戦は根本達で、３回戦はあの常夏のチームじゃ。光一にとってはさして脅威にはならんぞい」

「違いないな。組み合わせに恵まれたってもんだな」
「「「「言ってくれるじゃねえか（じゃない）（ますね）！！」」」」
」
そこに突如乱入してくる、４つの声。
ふと見た先には……。

「なんだ、小指に中指じゃないか。それに根本と清水も」
「「誰が小指（中指）よ！！」」
「失礼、悪かったな小林に中山」
「「絶対ワザとよね！？」」

光一は当然の様に、煽って楽しんでいた。

「また、その組み合わせなんだね」
「同じリーダー格だからだろ。最近は3股なんて噂流れてるらしいけど」
「もうこんな男顔も見たくないけど、目的が同じだからこの方が都合いいのよ」
「こんな男となんて、不本意この上ないけどね」
「美春も、こんなブタが居るなんて不快この上ありません！」
「扱い酷いな！？　唯一頭使える奴なのに」

光一視点から見た根本は、かなりすすけて見えていた。
少なくとも、２学期になれば代表としてそれなりに評価を受けてるだろう平賀とは、雲泥の差が見てとれるほどに。

「で、揃いも揃ってクラス内の立場回復の為か？　大変そうだな」
「お前の暴力兄貴の所為でな！　ったく、兄弟そろって厄病神とは性質悪い」

「まったくです！　あなた達兄弟の所為で、美春は理不尽な目にあわされてばかりです！」
「全部自業自得じゃない。あなた達もそんなだから、根本君とお似合いだなんて噂が流れるんでしょ？」

根本と清水の抗議を遮る様に、優子が秀頼を抱きかかえながら8人分の飲み物入りの袋を持ってきた。
光一の姿を見つけた秀頼が優子の腕から降り、嬉々として光一に飛びつく。

「わんっ！　はっはっはっはっ！」
「よう秀頼、優子とは仲良くできたか？」
「わんっ！」

「あれ、久遠君の飼い犬かな？」
「可愛いわね。人懐っこいのかしら？」
「良いなあ、抱っこしたい」

それを見た参加者の女子生徒が、一斉に光一に甘える秀頼の愛らしさに目を奪われた。
一応言うが、秀頼はメスにも関わらず。

「けっ！　凶王様ともあろう御方が、ワンちゃんと仲良しごっこかよ？」
「犬どころか人に近づいて貰えないくせに」
「んだと！」
「（びくっ！）　……きゅーん」
「ん？　怖かったか、秀頼？」
「「「……」」」
「うっ……！」

周囲の女子生徒たちが、一斉に根本に刺すような視線を向け根本がたじろぐ。
その中で愛子が光一に駆け寄り、秀頼に目線を合わせるがそっぽをむかれた。

「……やっぱり秀頼ちゃん、ボクの事まだ信用してくれないんだ。優子にはちょっとなついたんだっけ？」
「慣れてくれるまで苦労したけど、言う事はちゃんと聞くいい子よ？」
「そうなんだ。まあ光一君以外に懐こうとしない所を除けば、良い子なのわかるけどね」
「「はっ？　久遠　（ブタ）以外に懐かない？」」

それに茶々を入れたのは、当然先ほど指扱いされて機嫌の悪い２人と、色々と光一には因縁がある清水。
３人ともが、先ほど試合を見た観客にドン引きされたのもあって、猶更である。

「ウソでしょ？　どうしてこんな危なっかしいモヤシにしか懐かないのよ？」
「見た目かわいいけど所詮はバカ犬ってことでしょ？」
「ふんっ。見る目がないバカ犬です、所詮人間外でも男なんてゴミです」
「おい、秀頼って名前ではあるがこいつはメスだ。てかＦＦＦ団位にわかりやすいなおい」
「うぅ～っ！　わんっ、わんっ！！」

秀頼が敵意むき出しで、３人に吠え始めた。

「ご主人様をバカにするなって言ってるわよ。大体もうすぐ試合なんだから抑えなさいよ」
「うぅ～っ！」
「……そっ、それもそうね」
「覚えてなさいよ、久遠！　今まで散々バカのクセにバカにしてくれた屈辱、全部払わせてやるんだから！」

可愛い子犬に敵意むき出しで睨まれると言う、ある意味致命的なダメージを負いつつ小山と中林は一時撤退。

「お姉さまに美春の雄姿を見せられないのが残念ですが、まあ良いでしょう。あの暴力兄がしでかした蛮行だけでも、償わせて見せます！」
「はっはっはっはっ！　きゅーん♪」
「秀頼、くすぐったいよ。こら、やめろって」
「……所詮はブタですね！」

秀頼に顔を舐められてて聞いていない事に憤慨するが、まあ良いと清水は踵を返した。

「なんだかんだで、主な光一の敵対者はほとんど参加しておる様じゃの」
「光一を敵対しない奴、探す方が難しいだろ。なにせ……ん？　そう言えば、大神白夜が見えないな？」
「そうだね。でも良く良く思いだすとあの人、清涼祭の召喚大会も参加してなかったよね？」
「それに光一君がこの学校に大神先輩が居る事知ったの、あのアンチ久遠派の崩壊事件の時だよね？　……考えてみたら、おかしくない？」

その辺りは、白夜が必要以上に力を誇示する事や、必要もなく事を起こす事を良しとはしないからである。
彼の目指す物は“頂点”ではなく“完全”であり、必要以上に目立った所で面倒しか舞い込まない以上、無意味でしかない。

そう考えている故に白夜は、普段は不自然にならない程度に出来る限りで、自身を際立たせないよう必要最低限で事を成せるよう配慮し、自身の底を見せないよう徹底している。
最も常夏に関しては、清涼祭での2年への営業妨害や妨害先のクラス所属の光一と秀吉に負けた事で、口で言っても聞かないと判断したうえでの事である。

『これより、第2試合を始めます。選手の生徒は、速やかに所定の場所に集合してください』

「あっ、時間ね。頑張って光一、皆も」
「明久君に皆、頑張ってください」
「……雄二、皆も頑張って」
「頑張ってね皆。ボク達、応援してるから」
「頑張ってね、皆。島津のお姉さんも応援するよ」
「わんわんっ！」

そんな女性陣の声援を受け……

「よーし、皆の期待にこたえるためにも、な？」
「うん！」
「心得た！」
「いや、俺は……」
「よし、行くぞ！」
「おい、無視すんなコラ！！」

彼ら（？）の士気は高かった。

第百八十八問

『２－Ｆ　吉井明久　化学６２点
２－Ｆ　久遠光一　化学２１２点
２－Ｆ　坂本雄二　化学２４５点
２－Ｆ　木下秀吉　化学６７点』
ＶＳ
『２－Ｂ　根本恭二　化学２２０点
２－Ｃ　小山友香　化学１７８点
２－Ｄ　清水美春　化学６８点
２－Ｅ　中林宏美　化学８７点』

「しつこいというか、懲りないというか……あれから同じパターンで４人そろって衰退の一途を辿ってるクセに、良くまあここまでしつこく食い下がれるもんだ」
「けっ！　クズが大人しく埋まってねえのが悪いんだよ！」
「実践主義の文月学園で何寝言ほざいてやがる？　それに俺にとっちゃ、お前らとの事なんざどうでもいいんだがな？」

既に光一としては、眼中にも入れる気はなかった。
当然目線も合わせておらず、億劫そうな雰囲気を隠そうともしてない。

「あんな無様な姿さらしておいて、随分と上から目線で言うわね？」
「お前らと違って否定はしねえよ、無様さらした事は事実である以上はな」
「流石はＦクラスね。恥をさらしても平然としてられるなんて」
「負けたんならまた這い上がりゃ良いだけの話だろ。それもわからず、負けた事にばっか気を取られて勝手に転がり落ちるしか出来ん

お前らなんか、俺の眼中にゃねえんだよ」

ブチっ！　×　４

「カッコいいねえ、凶王様よお……ぶっ殺したい位に！！」

大蛇、雷神、迷い神、風神が召喚者の感情に影響され、雰囲気に怒気が混ざり始めた。

「雄二、手ぇ出すなよ？」

「出さねえよ。お前のやった事ならお前がけじめつけろ」

「自分はけじめつけんクセに言うなよ。まあ良いがな……今は（ちらっ）」

「ん？　おい待て、今何か不吉な事……」

「（こくっ）光一、援護するよ！」

「ってコラ！　おい明久、今示し合わせたよな！？」

雄二の抗議を無視し、光一が右手の融合召喚を掲げ、デュラハンが死神に距離を詰め始める。

「融合する気ね！？」

「させないわ！」

「あっ、待て！」

根本の制止も聞かず、風神と雷神が飛びかかった。

「かかった！」

死神が鎌を、デュラハンが大剣を構え、風神と雷神を迎え討つ。

「え？」
「ちっとは学習しろよ、お前らは……」
死神の鎌が雷神の首に食い込み、デュラハンの大剣が風神の胸部を貫いた。
「光一ってオカルトの時、首狙うの好きだね？」
「だって死神だし、急所ではあるんだから良いだろ？　さて、明久」
「うん！」
「ユニゾン！」
死神の背の巨大ゲンコツがデュラハンを掴み、そのゲンコツにデュラハンが溶け込むように同化し……
上半身のみのクロスボウを持ったデュラハンが、背に生えたかのような姿の死神となった。
ちらりと根本に清水の方を見る。
「根本に清水、今すぐ降伏しろ」
「なっ！」
「お前らフィードバックあるだろ？　俺別に痛めつける趣味ないから、」
ポリポリと頭をかきながら、先ほどの様に億劫そうに言う光一。
その様子に……
「バカにしないでください！　美春はお姉さまへの愛の為に打倒を目指してます！」
「その愛の度合いを考えろってんだよ。手段も選ばず自分の考え押し付けるだけじゃ、愛じゃなくて害になってんだ！　好きだってん

ならまず相手の……」
「美春の愛を侮辱したどころか、害と言いましたね！？」
「だから聞けよ！！」

迷い神が飛びかかり、死神が鎌を構え突き出してくる腕を受け流す。
その受け流した勢いのまま、迷い神の両足を斬り落とし……

柄のショットガンの銃口を迷い神の口に突っ込み、引き金を引いた。

「がっ……かっ！」

両足と喉、そして頭にフィードバックが響き、清水は膝をついた。

「……さて」

清水に目も向けず、根本を見て軽く口元を釣り上げると……

「……こっ、降参だ！　降参する！！」

自分にはあれ以上が来ると認識した根本が、両手をあげて降参をアピールした。
はあっ、とため息をついて、踵を返す。

「光一」
「ああっ」

パシッ！

『勝者、久遠チーム！』

光一と明久のハイタッチの音を皮きりに、勝利を告げられた。

「ねえ光一、次だけど常夏コンビと組んでるモノ好きって、どこの誰なの？」

「え？　……秀吉知ってる？」

「んむっ？　いや、知らぬの」

「案外くせ者かも知れないな。調べてみるか」

「あれが大神の弟に、大神の召喚獣の腕を斬り飛ばしたっていう吉井か」

「ふむっ……実に興味深いですね。代表の弟さんは、腕が立つ上にかなりの策略家という話ですから」

「ああっ。しかし助かったぜ、新田に岩崎。吉井に久遠の所為で俺も夏川もチーム組むどころの話じゃなくてよ」

「これで心おきなく、吉井と久遠にぎゃふんと言わせられるってもんだ」

「バカ言え。あの融合召喚があるとはいえ、１点に負ける様な奴らに任せられるか。大神をこの手で倒す為にもな」

「そうですよ、元々僕達はそのつもりで君たちを組んだのですから。吉井君と久遠君は僕と新田君に任せて、負け犬根性丸出しのお２人はザコの掃除をしていればいいのです」

そして時は過ぎ、女性陣の試合

『２－Ａ　霧島翔子　化学４１１点
２－Ｆ　姫路瑞希　化学４０６点
２－Ａ　工藤愛子　化学２３２点
３－Ｄ　島津さやか　化学７６点』

ＶＳ

『２－Ｃ　黒崎トオル　化学１６６点
２－Ｃ　野口一心　化学１５８点
２－Ｄ　東雲海人　化学１１２点
２－Ｅ　片桐弘太郎　化学７７点

「じゃ愛子ちゃんがトップで、瑞希ちゃんに翔子ちゃんは三角形になる様にたってね？」
「了解でーっす」

さやかの指示が飛び、三角形の陣形を取り始める翔子たち。
妖精がその後ろで、投げナイフを構える。

「じゃあ援護は任せてね」
「はい、頼りにしてます」
「はいはい、安心確実必中で援護するよ。このナイスバディにかけて！」

ポーズをとり、しかも大声で堂々と宣言した。
当然、その顔に恥ずかしさなど微塵も浮かんでいない。

「「「「っ……！」」」」

敵側は全員男子なので、それに目を奪われるか呆気にとられてしまった。

「あっ、チャンスだよ？」

瓢箪から出た駒。
と言わんばかりに、妖精が投げナイフを投擲。

ダメージを受けたと同時に、のっぺらぼうとサキュバス、格新婦がそれぞれの敵を撃破。

「作戦成功♪」

「……意外と強かですね？」

「いやいや、可愛いもんだよ？　それに見られたって減る物じゃないしね」

「……ボクもまだまだ、さやかちゃんと比べると甘いんだなあ」

「……私も、雄二になら見られたって構わない」

「わっ、私だって、明久君になら」

ちなみに現在は、マイクをきっていた。

更に言えば、スポンサーは来賓用の客室での中継を見てるため、（機材の不調を演出して）この場面はカットされている。

……すべて、学園長の配慮で。

第百八十九問

「……」
「？　どうした、雄二？」
「いや、あの先輩ってどんな人なんだ？　ムッツリーニと話が合うと言うのはよくわかったが、どうも何か警告音が聞こえる様な感じがしてな」
「妙な事にはならんだろ。姫路も先輩のおかげで、妙な方向から矯正されつつあるし」
「それは迷惑な話だな。俺の楽しみが一つ減ったという事だから」
「……俺が言えた義理じゃないが、それが姫路の不幸にもなるって事を知りもしないで、良くまあ平然としてられる」

召喚大会選手の控室。
現在2回戦第4試合、つまり女性陣チームの対戦相手を決める試合が行われていて、光一たちは手持ち向沙汰。

控室に来てる女生徒が、優子に抱きかかえられてる秀頼に夢中になってるのを見ながら、他愛のない話をしつつ時を過ぎるのを待っていた。

「しかし、色々といるもんだな？　オカルト召喚獣って」
「そうだね。スフィンクスにキョンシーとか、ポピュラーな物もあればマイナーな物まで。知ってる？　如月グランドパークのお化け屋敷が、オカルト召喚獣を起用したって」
「うむっ。シーズンだけに、人気殺到中との話じゃ」
「色々と涙ぐましい事だな。今ごろ視察に来てるっていう、スポンサーのお偉いさん方に媚でも売ってるんじゃないか？」

「へっくしっ！」
「学園長、風邪ですか？」
「バカ言ってんじゃないよ。どこぞのバカどもじゃあるまいし、夏風邪なんてバカの風邪をひいちゃたまらないさね」
「では来賓の方々がお待ちです……（まさか久遠君が、あんなかわいい子犬を飼っていただなんて）」
「わかってるよ。やれやれ……時に高橋先生、さっき休憩から帰ってからという物、何やら呆けているようだがどうしたんだい？　アンタこそ風邪でも引いたのかい？」
「いえ、そんな事はありません……（はぁっ、抱っこが出来る木下さんが羨ましい）」
「？」

雄二の勘は、当たっていた。
場所は控室に戻る。

「話は変わるが光一。次の対戦相手だが、常夏と組んでんのは同じAクラスらしい」
「……僕達の所為で受験に響くって言ってる癖に、暇なのかな先輩たちって？」
「３－Ａは実力主義、結果さえ出せりゃ問題ないからだろ。常夏は負けに来たようなもんだが、組んでる奴はそういう事じゃないのか？」
「となると、組んでいる者はもしかすると、実力に自信がある者という事じゃな。気を引き締めねばならぬの」
「ああっ、そうだっとと」
「わんっ！」

先ほどまで控室中の女生徒の注目の的だった秀頼が、光一に飛びつ

いた。
あわてて光一が秀頼を抱きかかえてやると、心地よさそうに鼻を鳴らす。

「きゅーん♪」
「本当に秀頼は、光一を好いておるの」
「悪い気はしないけど、このままでも困るよ。まだ優子と明久位だぞ？　心開いてるの」

「良いなあ久遠君。あんなかわいいワンちゃんに、あそこまで懐いてもらえて」
「木下さんには、ああはならなかったわよね？」
「ご主人様ラブなワンちゃん……久遠君が羨ましい」

そんな秀頼の様子に、女生徒は一斉にとりことなった。

「で、どうするの光一？」
「そりゃあ、そうだな……秀頼、お手」
「わんっ！」
「はいもう片方」
「わんっ！」
「はい、せっせっせーのよいよいよい」

光一が考えを纏めるついでに、秀頼の両前足をとり遊び始めた。
主人に遊んでもらえてご機嫌な秀頼に、そんな秀頼を見て和み始める女生徒達。

「ま、大丈夫だろ。常夏がいる事だし」
「そうだな。常夏がいる事だし、そんな気がしてきた」
「そうじゃの。常夏がいる事じゃし、負け犬根性がついておるのじ

ゃからの」
「そうだね。常夏がいる事だし、あんまり怖くないね」
「「テメエらいい度胸じゃねえか！！」」
好き勝手な言いたい放題を聞きつけて、常夏コンビが激怒して突っかかって来た。
「おいクズ共、テメエ等調子乗りすぎじゃねえか？　センパイ達に向かってよお」
「身の程をわきまえるって事を知らねえのか！？」
「いや、その言葉そっくり返してやろうか？　負け犬先輩方よ？」
「んだと！？」
「うぅ～っ！　わんっ！　わんっ！」
光一に掴みかかろうとした夏川に、秀頼が抗議するように吠えた。
「ん？　流石は久遠の犬、躾がなってねえな」
「けっ、このクズ主人を守ろうってのか？　生意気なんだよ、しっし」
夏川が追い払う様に、秀頼に追い払うように手をふる。
その手に秀頼が……
ぴちゃぴちゃぴちゃっ！
「ん？　……わーーっ！」
小便をかけた。

「こっ、このバカ犬が！」
「あっ、秀頼！」

激昂した夏川がテーブルの上の秀頼に掴みかかり、秀頼が飛んで夏川の頭の上に着地。
そこから明久が危ないと出した手に、秀頼が飛びついた。

ガシャーンっ！　ガンッ！

「……楽しいかお前？」
「……俺が明久以下という言葉を、素直に口にする日が来るとは思わなかった」
「……まさか犬にまで負けるとはの」

そして夏川はというと勢い余り“小便つきの”テーブルに突っ込んで、テーブルを巻き込んで“顔面から”地面につっこんだ。
光一は呆れながら、顔を押さえてのたうちまわる夏川に侮蔑の視線を送る。

「大丈夫秀頼？　ありがとう、僕達の為に戦ってくれて」
「わんっ！　わんっ！（ぺろぺろっ）」
「わっ、秀頼！　あははっ、くすぐったいよ」

助けてくれたお礼と言わんばかりに、秀頼が明久の顔をなめ始めた。

「ああっ！　秀頼ちゃん、羨ましいです！」
「「「……」」」
「……あっ、そっそうじゃなくて、明久君が羨ましいです！」
「瑞希ちゃん、犬娘のコスプレ衣装なら用意はしてあるよ？」
「だっ、だから違うんです！」

「……先輩、私にも一着作ってください」
瑞希の問題発言騒動は、幸い（？）明久達の耳には届いてはいなかった。

「テメっ、主人が主人なら犬も犬……」
「常村君、時間の無駄です。その犬以下諸共に、役立たずの無能は引っこんでいなさい」
「そう言う事だ。さっさとどけ、邪魔だ」

メガネの男と巨漢が、それを遮った
人数的に不利と判断した常村は、忌々しそうに下がり夏川に駆け寄る。

「はじめまして、久遠光一君。僕は３－Ａ所属、試召戦争においては中堅部隊長を務めさせて頂いております、岩崎賢二と申します。以後、お見知りおきを」
「俺は３－Ａ、前空手部主将の新田和馬だ。ふむっ……あまり強そうには見えないな」

メガネをかけた細身な男、岩崎が光一に。
そして２ｍはありそうな巨漢、新田が明久に対峙するように自己紹介。

秀頼は光一に優子の所に行くよう促され、しぶしぶと優子の所へ駆けて行った。

「なんだ？　光一に明久が目的か？」
「みたいじゃの。考えてみれば白夜殿が認めた者ともなれば、興味をひかれて当然じゃろ。それに何やら強そうじゃ」

「けどあの常夏がいるせいか、あんま負ける気がしないな」
「そうだね。なんか相殺されてる感じがするからか、あまり怖いと思えないんだよね」

ふむっ……と、明久の言葉を聞いて、新田と岩崎が振り向いた。

「常村、夏川。半径５m以内に近寄るな」
「負け犬……いえ、犬以下ですから畜生ですね。負け畜生根性をうつされては困ります」
「「「……」」」
「畜生、見るなあっ！」
「そんな目で見ないでくれえっ！」

２人に冷たく突き放され、周囲全体から2人へ憐みの視線が集中、それを必死に振り払うのを無視し、新田と岩崎は光一たちと改めて対峙。

「きついなあ……」
「それはそうですよ吉井君。３－Aは久遠君の兄、大神君が掲げる実力主義で成り立っています。冷血無慈悲の暴君である事は事実ですが、彼の圧倒的な力と厳しさがクラスの秩序安泰の地盤である事も事実。僕は彼ほど人を纏めるに相応しい男を知りません」
「吉井の様な観察処分者だろうと、力を示したからこそ高く評価し認める事は知っているだろう？　俺達の様により高みを目指す奴にとって、大神の纏めるクラス程居心地の良い物もないのさ」

岩崎の方がくいっとメガネを直し、新田がガシッと拳をうちつけながらの主張。

「……光一のお兄さんの、賛同者？」

「そりゃそうだろ。でなきゃ幾ら力やカリスマがあったって、代表が務まる訳ない」
「そう言う事ですよ。まあ僕達がこの2人と組み、この大会に出た目的はですね。吉井君と久遠君、君たちが僕達より上の評価をされてしかるべきか確かめる為です。いつか彼を打倒する足掛かりとする為にね」
「俺も岩崎も、大神の考えに賛同してるからこそ、大神打倒を目指している。今俺達がどれだけ大神に近づいてるかを測るのに、これ以上最適な者もいないという事だ」
「え？」

賛同しているのに、打倒を目指す。
そんな矛盾に明久と秀吉、雄二までもが呆気にとられた

「彼は裏切りや反乱など、簡単に鎮圧出来るほどの力を持っています。ですがその彼にとって、僕達の野心は喜ばれるものですからね」
「そう言う反骨精神や上昇志向を持つ事こそが、大神の掲げる実力主義に必要な物。だからこそ俺達は大神に敬意を払い、打倒を掲げている……というわけだ。むっ、そろそろ第4試合が終わるな？」
「ではおしゃべりはここまでにして、昼食にしましょう。では久遠君、試合ではよろしくお願いします」
「吉井、大神の召喚獣の腕を斬り飛ばしたお前との勝負、楽しみにさせて貰おう」

そう言って、常村と夏川を無視して去っていき、2人はそれに気付いてさっさとついていった。
そんなある意味情けない光景を見送りつつ……。

「……もしかして僕、とんでもない事しちゃったのかな？」
「まぐれがとんでもない方向に作用してんな？　気の毒に」

「何ニヤついてんだ？　手玉に取られまくった上に、そのまぐれも起こせなかった分際で」
「「……（メンチの斬り合い）」」
「昼を買ってくるのじゃ。何か食べたい物はあるかの？」

おまけ

「さてと……んむっ？」

「大丈夫だった、三上さん？」
「平賀君……ありがとう」
「大丈夫。この次の試合も霧島さんに姫路さんのチームで強敵だけど、三上さんは俺が守るよ」
「……（ぽ～っ）」

「……見なかった事にしておくかの。しかし平賀も、随分と株が上がった物じゃな」

第百九十問

準決勝第一試合。

『２－Ｆ　吉井明久　保健体育６６点
２－Ｆ　久遠光一　保健体育２２３点
２－Ｆ　坂本雄二　保健体育２２１点
２－Ｆ　木下秀吉　保健体育６４点
ＶＳ
『３－Ａ　岩崎賢二　保健体育３１３点
３－Ａ　新田和馬　保健体育３０１点
３－Ａ　常村勇作　保険体育２１２点
３－Ａ　夏川俊平　保健体育２０９点

科目は保健体育。
流石にＡクラス対Ｆクラスともあり、差は歴然だった。

「あの、さやかちゃん？」
「ん？　なあに瑞希ちゃん？」
「あの、岩崎先輩と新田先輩という方ですが……強いんですか？」
「うん。２人とも、得意分野で大神君と戦って負けた経緯はあるんだけど、３－Ａじゃかなりの実力派だよ？　久遠君達、間違いなく苦戦を強いられるかも」
「そんな人が、光一君と吉井君と戦う為だけに、この大会に？」
「……雄二」

控室では、女性陣が試合を見つつ心配していた。
さやかもあっけらかんと言うが、その表情はビン底メガネに隠れてもまじめその物

「くぅ～ん……」
「大丈夫よ秀頼、ご主人様はきっと勝つから。信じてあげましょ？」
主人を心配する秀頼に、優子は安心させるように撫でながら宥める。

場所は変わって試合会場。
敵意むき出しの常夏を後ろに控え、前に出た2人は点数表示を見て……。

「ふむっ……科目の巡り合わせが良くはありませんね。吉井君、早く融合召喚なりしてください」
「事実上は2対4とはいえ、これでは勝負にならんな」
「「戦力と考えてないのかよ！？」」

剣を持ったアザゼルを使う岩崎が、メガネの位置を直しつつ本当に困った風にそう促した。
樫の棍棒を持ち、ガントレットを付けたサイクロプスを使う新田も、肯定するよう頷く。

ついでに言うが、2人は当然常夏を戦力として考えていなかった。

「……見ていてかわいそうな位、落ちぶれてんな」
「別に君が気に病む必要はありませんよ。落ちぶれるに至る選択をしたのは、他の誰でもない彼らなのですから」
「そう言う事だ。お前を厄病神等と抜かす集団がいたそうだが、すべては奴らの自業自得。お前は自身の選択が、人から恨まれる事を理解しているだろう？」
「……なんか久々に、年上から年上らしい言葉聞いた気がするな。

だからってやっていい事でも、正当化していい事でもないけど」

……とある人物を厄病神扱いしてただけに、少々気まずい光一だった。

「正当化する必要などありませんよ、別に善悪など関係ありません。勝負とは、弱肉強食であればそれで十分なのです」

「そう言う事だ。弱さこそが罪、ただそれだけの話」

「……まあ良い。明久、秀吉」

「うんっ！」

「心得た！」

「なっ！　木下とだと!?　そんな羨ましい事やらせるか!!」

「あっ、常村！」

光一が明久と秀吉に融合媒介を促すと、常村の馬頭が嫉妬全開で突進。

「……雄二」

「……ああっ」

それを狙ってた様に、雄二の狼男がタイミングよく馬頭の腹にひざ蹴り。

体制が崩れた所をすかさず、光一の死神が駆け鎌を馬頭の首めがけて振り、馬頭の身体が倒れ、その宙に舞った“それ”がショットガンで撃ち砕かれた。

「……上には上がある様に、下にも下がある物ですね。相手を見くびり、考えなしで行動するからですよ」

「……全くだな。幾ら大神が寛大とはいえ、これではその内居場所をなくすぞ?」

「……本当に、光一のお兄さんの賛同者なんだね」

味方がやられても何一つ動じないどころか、やられた味方を容赦なく貶すその光景。

Fクラスで慣れてるとはいえ、どことなくFクラスと違う事は明久にも実感できた。

理由は自分の事を棚に上げているか否か、だが。

「では数的にちょうど良くなりましたし、始めましょうか」

「夏川、お前はあの山猿を足止めしていろ。邪魔をしたら潰す、良いな？」

アザゼルが剣をふるうと、連結式の刃がひゅんひゅんとムチの様な軌道を描く。

サイクロプスも樫の棍棒を力強く地面にたたきつけ、ガチンと拳を打ちつけた。

「明久。わかってると思うが、援護は期待するなよ？　今やられたら秀吉にもダメージが行くって事を忘れるな」

「……うん、わかった。光一こそ、しっかり頼むよ？」

「ああっ」

秀吉と融合し、甲冑に刀の和風デュラハンになった明久の融合召喚獣が、首を抱えながらサイクロプスに刀を向ける。

光一も表情を引き締め、アザゼルに集中して死神に鎌を構えた。

「光一がヤバいと直感で感じるほどか……こいつらならもしかしたら」

「おい雄二、裏切ったら霧島に俺らの年でも入籍可能な国を教える

ぞ？」
「やめろ！　そんな事されたら今日中に外国人にされてしまう！」
「甘いな。今日中にあらゆる手配を済ませてやるよ、俺と優子で」
「テメ、絶対いつか殺すからな！！」

雄二が殺意むき出しで、夏川の牛頭と対峙。
してやったと、光一はほくそ笑む。

「余裕ですね？　まあ裏切りを察知したのなら、無理もないやもしれませんが」
「全くだな。不意打ちを仕掛けるとは思わなかったのか？」
「そこの変態どもならまだしも、あんな事言っておいて不意打ちなんてする小物には見えなかった。とだけ言っておきましょうか？」

そう言い終わると同時に、死神の鎌の柄のショットガンの引き金が引かれた。
２人がバラけるのを見計らい、死神がアザゼルに、和風デュラハンがサイクロプスに向けて駆けだす。

「おや、迷いなく僕をですか。では、新田君」
「ああっ。しくじるなよ岩崎」

アザゼルが連結刃の剣をふるい、切っ先が死神に襲いかかる。
その切っ先に鎌をぶつけ、死神は手首を返し勢いをそらした瞬間にショットガンを撃つ。連結刃を繰り弾丸をすべて弾くと同時に、アザゼルが飛びかかりながら剣に戻した連結刃を振りかぶり、鎌とぶつけあう。

「……やっぱ強いな、こいつ」
「やりますね、流石は凶王閣下」

「その呼び方、好きじゃないんでやめてくれ」
「やれやれ……君はもう少し、礼節という物を覚えたほうが良いですよ？」
「はぁっ？　命令に礼節なんて必要なんでしょうかね、先輩？」
「……威勢が良いのは結構ですが、相手は選ぶべきですよ？」

その隣では、サイクロプスが棍棒をデュラハンめがけて振るい、デュラハンはそれを回避。
棍棒に飛び乗りその懐に一突きする瞬間、ガントレットを付けた腕が薙ぎ払うのを伏せて、その腕を切断には至らぬ深さで斬る。

「観察処分者の利点、普通よりも召喚獣の操作に長けている……だけではないな」
「光一に色々仕込んで貰いましたからね。それに鉄人のパンチに比べれば、これ位！」
「ふっ……面白いな。問題児ならではの能力か」
「それに何より、僕が傷つく事は秀吉を傷つける事なんだ。負ける訳にはいかない！」
「あきひしゃ……はっ！　わっ、ワシは男じゃ！！」

にっと笑みを浮かべ、棍棒を構える新田のサイクロプス。
秀吉を守るためという名目もあり、表情を引き締め相手に集中する明久。

宣言に惚け、一瞬出遅れての秀吉のいつものツッコミは、既に手遅れだった。

「完全に試合はあいつらにお株奪われてるな。まあ相手が相手だから仕方ないが」
「坂本ぉっ！　テメエまで俺を眼中に入れねえのか！？」

「現に俺達を見てる観客なんて一人もいないだろ」
「畜生！！」

その外野では、観客の視線をすべて光一と明久に奪われ、注目など一切されていない戦いが繰り広げられていた。

「オノレヨシイ……キノシタヲ、オレノタイヨウヲタブラカスカ！」

その更に外野では、先ほどの負け犬が血の涙を流しつつＦＦＦ団と化しながら、明久に呪詛の声をぶつけていた。

第百九十一問

『２－Ｆ　久遠光一　保健体育１９９点』
ＶＳ
『３－Ａ　岩崎賢二　保健体育２８８点』

『２－Ｆ　吉井明久（十木下秀吉）　保健体育５７点＋５６点』
ＶＳ
『３－Ａ　新田和馬　保健体育２５６点』

「ははっ、楽しいな。今までザコばっかだから、あんた程の相手は嬉しい……ですね。敬意を表します」
「当然ですよ。文月学園は実践主義ですし、大神君は学力だけでは認めてくれません。それに試召戦争では、常に結果を出さなくては即座に補習室に送られてしまいますからね」

ひゅんと空を切る音を鳴らし、連結刃の剣をムチの様に振る。
そのメガネ越しの瞳が、まるで獲物を狙う蛇のごとく光り……

「……それに何より、生き残るためには力が必要であり、弱さなど罪でしかない。それを体現する彼の佇まいに、僕達は心底から心酔しているんですよ。それと同時に、彼を越えてみたいともね」
「……そうしたいならそうしろよ。俺はもう、兄貴とどうこうなんて言う気はない」
「そうはいきませんよ。君も吉井君も、既に後戻りが出来ない所までたどり着いているんです。それに何より、君たちは騒動の張本人の一角を担っている」
「そう言う事だ！」

それを遮る様に、死神めがけて棍棒が投げつけられた。
死神がそれを回避すると同時に、連結刃がそれをからめ捕り……。

「何っ！？」

即席フレイルとして、光一めがけて振り回した。

「くっ！」

死神が身をひねってそれを回避するが、その近くでデュラハンに肉弾戦を仕掛けていたサイクロプスが、それをキャッチし……

「うおらっ！」
「なっ！　まずい！！」

棍棒に絡みついた連結刃をそのままに、アザゼルごと振り回し……。

「がふっ！」
「うあっ！」

アザゼルの蹴りを弾丸とした、即席フレイルで和風デュラハンを攻撃。

『２－Ｆ　吉井明久（＋木下秀吉）　保健体育１９点＋１２点』

「ちっ！　……流石は大神の弟と言ったところか」

サイクロプスは片膝ついた体勢となっており、その膝をついた足は幾つかの弾丸に撃ち抜かれていた。
光一の死神が鎌の柄のショットガンを向けている事で、新田は成程

と頷く。

「げほっ！」

秀吉がフィードバックに耐えきれず膝をつき、腹を抱えながら蹲る。

「ひっ、秀吉!?」

「全く。そんなお嬢ちゃんなどに構っていられるとは、まだまだ余裕があるようですね」

「そう言ってやるな岩崎。俺はこういうのは嫌いでは……」

「何をくだらない事を言っているのです？　弱者などに構う余裕があるのなら……っ！」

メガネの位置を直しながら、明久に対して呆れを示す岩崎の召喚獣に、散弾がいくつか命中。

「余所見してないで、目の前に集中したらどうですかね先輩？」

「それもそうですね。吉井君とじゃなくてよかったですよ、僕は大神君の弱さは罪という考えに特に賛同していますので」

「そうですか。まあそんなどうでもいい事よりも……」

死神が鎌を構えて突進し、アザゼルが連結刃をしならせ切っ先を死神めがけて振り回す。

その切っ先が死神をとらえる寸前、柄のショットガンに絡みつかせるように振り回し……

「っ！」

「俺のかわいい弟分を……」

絡め取られた連結刃の剣を捨て、拳を握り突き出すアザゼル。

それを回転するように回避し、その勢いを利用してアザゼルの首に当てた鎌を思い切り振り抜き……。

「秀吉をけなす奴は誰だろうが許しませんよ。センパイ？」

頭部をなくしたアザゼルの胴体が、ドサッと倒れ伏し消え去って言った。。

「僕が……くっ！」

地面に膝をつき、拳を撃ちつける岩崎。
それと同時に和風デュラハンが、サイクロプスめがけて駆けだした。

「こいっ！」

サイクロプスが構えをとり、抜き打ちの場が整った。
明久は相手の動向に集中する。

相手は自分と違い、格闘技経験者。
点数的にも、まともにぶつかれば勝ち目がない。

ならば……

「ダブル！」

その直前となって、自分の操る主獣と秀吉の操る副獣に同時召喚をし、副獣を突き飛ばして虚をつかれたサイクロプスの拳を……。

「あぐっ！」

左腕一本を犠牲に回避。
その残った右手で刀を握り締めて飛び……。

「でやあああああああああっ！！」

サイクロプスの脳天から、逆手に持った刀をまっすぐにつき下ろした。

「うっ、く……」

左腕を押さえながら、膝をついてサイクロプスが消えていき……。

「……しゃあっ！！」
「やったのじゃ明久！！」

右手を挙げて勝利の方向をする明久に、それに喜びながら秀吉が抱きついた。

「ぎゃあああああああっ！！」

それを見て、悲鳴を上げながら吐血をし、倒れ伏すその他一名。

「ったく、完全に俺を脇役にしやがって」
「勝てたんだから良いだろ？　さて、俺達の勝ちだな」
「全く、明久とお前がヒーローなのが気に入らねえがな」

夏川の牛頭を撃破した雄二が、不満そうに合流。
正直言うと、光一たちに完全にお株を奪われた事は不快だが、内心では光一と明久に“すげえじゃねえか”と褒めてはいた。

「……どうやら、まだまだ大神君には遠い様ですね」
「だが、この負けから学び、再出発だな」
「当然です。ここで終わりなど、決して認めません」
「ああっ」

メガネを直しながら、新田の差し出した拳に自身の拳を討ちつける岩崎。

『久遠チームの勝利です！』

アナウンスが響き渡り、接戦に喚起するかのように観客からエールが殺到。
新田が気絶した常村を担ぎ、岩崎が夏川の頭をはたいて説教しながら、去って行った。

「……またあんな人が、出てくるのかな？」
「可能性としちゃ、あり得なくもないがな」
「なんだ光一、お前随分と楽しそうだな？」
「だって根本や指どもに常夏と違って、ああいう骨のある戦いは楽しかったよ。そう言う意味じゃ、この大会に出て良かった」
「やれやれ、この戦闘狂いめ」
「やかまし、この腰抜け猿が」
「「……（ガンのくれ合い）」」

光一、明久、雄二、秀吉。
４名決勝進出決定！

準決勝第２試合

『２－Ａ　霧島翔子　保健体育４１８点
２－Ｆ　姫路瑞希　保健体育４０９点
２－Ａ　工藤愛子　保健体育４７８点
３－Ｄ　島津さやか　保健体育４８０点』
ＶＳ
『２－Ａ　西園寺紫　保健体育２５６点
２－Ｂ　安西裕太　保健体育１７８点
２－Ｄ　平賀源二　保健体育１２２点
２－Ｅ　三上美子　保健体育９０点』

「降参します！」

翔子、瑞希、愛子、さやか。
戦わずして、決勝進出決定。

そして決勝戦
男と女の戦いが、今始まる！

おまけ

「しっかし秀吉、見せてくれたなさっきは？　明久を惚れなおしたか？」
「そっそれは……ワシは男じゃと言うておろうが！」
「さっき抱きついてたよな？」
「……（かぁ～っ！）」
「いやあ、秀吉も可愛い……ん？」

「三上さん、ごめん」
「ううん、良いの平賀君。別にゴールドチケットじゃなくても、あなたと一緒なら……」
「三上さん……」
「美子って呼んで、ひら……源二君」

「へぇ～っ。あれって確か、Eクラスの三上だろ？　平賀もやるな」
「光一よ、趣味が悪いぞい」
「っと、そうだな。とか言いつつ、お前も興味津々じゃねえか？」
「……っと、行っちまったか」
「……（ぽ～っ！）」
「なんだ。明久とああなる事を想像してるのか？」
「じゃからワシは男じゃ！」

第百九十二問

決勝戦は休憩をはさんで開始。
その休憩時間の間、控室では……。

「はい。あんよが上手、あんよが上手」
「わんっ！　わんっ！」

秀頼が光一と遊んでいるのを見て、和んでいた。

「……って、決勝前の雰囲気じゃないよね？」
「緊張は程よくが一番なんだよ。ありすぎても無さ過ぎても、万全にはならないんだから」
「いや、これ明らかになさすぎでしょ！？」

秀頼に和む女性陣と、不覚にも和んだ雄二に秀吉。
秀頼にそっぽを向かれ、どんよりしてるその他女生徒に極力目を向けない様にしながら、明久は周囲を見回した。

「……それもそうだな」
「きゅ～ん……」
「ごめんね、秀頼。でも僕達、これから大事な試合があるから」
「きゅ～ん？　……わんっ！」

主人との遊びが中断され、さびしそうにする秀頼。
しかし明久の申し訳なさそうな態度に何かを感じたのか、トコトコと優子の所へ駆けて行き、優子に飛びつく。

「それじゃ、まじめな話に入るか。当初の予定通り、こうなったな

？」

科目物理で、光一たちのチームと翔子たちのチーム。
特に雄二は、ゴールドチケットを奪取して光一たちに使わせるべく、奮起していた。

「……久遠」

「悪いが、俺も一応これ目当てでもあるからな。まず愛子か母さんに秀頼を懐かせなきゃいけないけど、せっかくの夏休みなのに優子に愛子と特に進展も何もないから、ここらで一発一大イベントと行きたくて」

「いや、母親に紹介しただろ？　それも結構な一大イベントだと思うが」

「……まさか母さん、認めてくれるとは思わなかったがな」

まだ複雑ではあるが、蔑ろにし続けた事もあり受け入れることにした光一母、ひなた。

「てかお前もそろそろ覚悟決めろよ？　お前んとこの両親だって、もう……」

「うるさい黙れ。何としてでも2学期の試召戦争で翔子に勝って、交際返上したうえで自由の身になってやるんだ！」

「……どこまでも回りくどい男だな。てかチケット、考えてみたら4枚配られるし」

「明久が姫路に秀吉と行けば何の問題もないだろ！？　異端審問会やあの姉貴に対しての隠ぺいには協力してやるから！」

光一の考えを遮る様に、雄二が“必死で”そう提案。
しかも何よりも大嫌いな明久の幸せ絡みの提案に、流石の光一も目を丸くした。

「……必死だな。まさか明久に対してとことんまで外道で、慈悲や人情なんて欠片も示さないお前がそこまで言うなんて」
「俺の人生と貞操を守るためだ、仕方がない」
「それ普通女のセリフだし、少しは否定しろよ……てか信用できるか、終わった後でチクればお前は目的を果たせて楽しめるだろうに」
「……そんな事しない（さっ）」
「顔をそらすな顔を」

さて、いかにしてこいつに気付かれず霧島に渡すか。
……と、内心で謀略を練り始める光一。

「それと雄二、まだ俺達が勝つって決まった訳じゃないだろ？　相手は学年ナンバー1、2が揃ってんだ。そう簡単に勝てる相手じゃない」
「それ以上のバケモノを打ち負かした奴が何ぬかしてやがる？」
「たった一回だけだし、この前負けたがな」
「しっかりしろ、もう一度返り咲く位の根性見せやがれ」
「おい、誰の所為でそうなったか忘れたのか？」
「……すまん」

なんだかんだで、あの事を突っ込まれると弱い雄二だった。
しかしその事に関しては、光一も自分の不甲斐なさの所為でもあるとは認識しているため、あまり使いたくはない。

「まあ良い。今回は利害が一致してる以上、お前を嵌めた所で意味がない。それはお前も同じだってことを忘れるなよ？」
「……わかっている。お前に何かあれば勝機がなくなっちまう以上はな」

さっき裏切ろうとした男のセリフではない。

「それじゃ久遠君、そろそろ作戦会議したいから」

「あっ、そうですね」

そう言って、男女に分かれて離れたテーブルに着く。

「でも大丈夫かな？　霧島さんに姫路さんは言わずもがな、工藤さんだって上位成績者でしょ？　島津先輩の作戦もあれば、崩す事難しいよ？」

「その辺りは策を用意してある。まあ先に言っておくが、その場その場の流れで左右されるって事は理解してくれ」

「流れ？」

明久に秀吉が、首をかしげる。

雄二も何か引っ掛かったが、まずは話を聞いてみる事に。

「そう、流れ。組み合わせだが、点数の関係上俺が姫路と霧島を抑えるから、明久と秀吉は次も融合媒介して愛子を頼む。それと雄二、お前は島津先輩を頼めるか？」

「ああっ。明久に知略の相手は無理だから、妥当だな」

「保健体育じゃなくても、工藤さんの得点もかなり厄介だね……けど大丈夫？　いくら物理じゃ学園最高得点保持者でも、学年ナンバー1、2を一度に相手にするなんて」

「心配するな。やると言った以上はやるさ、何としてでもな」

にっと笑いながら言う光一に、明久もうんと頷きにっと笑う。

「あっ、僕ちょっとトイレ」

それから少しして……

「あっ……」

「おや、吉井君。こんな所で何を？」

その帰りに、帰り支度を終えただろう岩崎と出くわした。

「ちょっと、トイレに行ってきただけです」

「そうですか。では時間を取らせてしまいましたね」

そう言って、去っていく岩崎。

それを見て……

「あの……」

「？　なんですか？」

明久は咄嗟に呼びとめた。

どことなくこの先輩には、新田と呼ばれた巨漢の先輩よりも気になる事があったが故に

「……どうして、光一のお兄さんに、大神先輩に従ってるんですか？」

「簡単な話です。彼の力と堂々とした姿勢に憧れ、彼の考えに同調したからですよ。彼に憧れ、目指したおかげで今の僕がありますから」

「特に弱さが罪という考えに賛同してるのは？」

「情けない話ですが、僕は召喚獣の扱いではそれなりに出来ますが、生身ではケンカなど出来る訳ではありませんからね……早い話が、経験談です」

……この人も、光一の様にいじめられていたのかな？
と、明久は内心で思っていた。

「君は大神君に対して、随分と複雑な物を持っているようですね？」
「え？　……はい。認めてくれた事は純粋に嬉しいですけど」

うつむいた明久に対して、岩崎はメガネの位置を正しながら……

「それでいいのですよ」
「え？」
「問題に直面し、逃げるか向き合うかは人それぞれです。大半は安直な答えに逃げて道を踏み外す物ですが、君は違うようですね」
「……ええっと、つまり？」
「そのまま悩み、自分なりの答えを出しなさい。君はバカかもしれませんが、バカだから価値がない訳ではないのです」

明久は呆気にとられながら、岩崎の方を見た。
少なくとも、自分に対して否定的や侮蔑的な視線など、一切向けていない。

「……そんな、物なのですか？」
「そんな物です。現に大神君はバカの代名詞“観察処分者”である君でも、差別したりしないでしょう？　それにあのＦＦＦ団とかいう怪しげな集団も、団結力と行動力に関しては手駒として欲しいと認めておられましたからね」
「器でかすぎませんかあの人！？」
「力を示した者に対しては、ですよ。いかに力があろうが、それを活かせない人には容赦ありませんから。夏川君と常村君を見ればわかるでしょう？」

「夏……ああっ、常夏コンビか。成程」

明久が思い出す限りで、同じＡクラスであるにもかかわらず、常夏が大神と一緒の時は殴られる場面しか思い出せなかった。

『これより、決勝戦を始めます！　選手の生徒は、速やかに……』

「おや、時間ですね」
「あっ、ごめんなさい。時間とらせて」
「いいえ、後輩を導くのは先輩の務めです」
「ありがとうございます！」

そう言って去っていく明久を見送り、岩崎はメガネを直しながら……。

「……なにより君は、大神君の大事な糧ですからね」

キャラ紹介　ＩＮ久遠家（前書き）

光一の家族の紹介です。

キャラ紹介　ＩＮ久遠家

秀頼（♀）　犬種：柴犬　０歳６ヶ月

光一ラブな久遠家の飼い犬。
夏休みの旅行で光一が拾って以来久遠家で飼っており、今やマスコットとして女性陣に可愛がられている。

光一の言う事なら素直に聞き、エサ箱を決められた場所から出して戻し、常夏の夏川を撃退する位に賢い。
光一以外に懐こうとせず、その愛らしさに惹かれた女性陣にそっぽを向いては、光一ラブ全開で主人に甘えまくっている。

基本的にご主人様大好き犬なので、現時点で懐いてるのは光一と仲が良い明久と優子のみ。
ただし接する時間が多い優子の方が、光一の次くらいに懐かれている。
その次点としては、愛子と秀吉が最近慣れてきたのか、そっぽを向かれる事が無くなった。
光一に敵対心を持ってる相手、主に雄二やＦＦＦ団にはそっぽ向くどころか、敵対心あらわにして唸る。

秀頼「わんっ、わんっ！（ご主人様大好き、ご主人様が大好きな人も好き！）」

久遠ひなた

光一の母で、現在マイナー誌のジャーナリスト。
敏腕として知られているが、事あるごとに問題を起こしては始末書を書かされており、彼女にそっくりだと光一は優子や秀吉に言われる事が多い。

離婚以前は稀代の天才として生まれた白夜につきっきりで、光一の事をそっちのけにし続け、いじめられている事にも全く気付いてはいなかった。
離婚の原因となった白夜の豹変による光一が重体に追い込まれた事件で、初めて光一がいじめられている事に気付き、離婚後に引き取ってなんとか家族として接しようとする物の、光一が家族との接し方を殆ど知らない上に仕事が忙しいなど、色々な事柄が相まって進展がなかった。

現在は秀頼のおかげでそこそこ会話は交えるようになっている
今でも大して変りはしてないが、それなりに素っ気ない家族間のやりとりは続いている。

優子と愛子の両名から“お義母さん”と呼ばれてる事に対しては、いろんな意味で複雑な心境を抱えつつ。

第百九十三問

「なにぃっ！？」

明久が席をはずしてる間に、光一が策の説明。
それを聞いて、雄二が顔を青ざめながら素っ頓狂な声を上げた。

「おい、聞かれるだろ」
「ぐっ……おい、どうしてそうなる？」
「点数と機能の都合上だ。お前ならこれだけでわかるだろ？」
「ああっ、よーくわかるな……まさかと思うが、翔子たちが参加したのはこの恐ろしい策の実行のためじゃないだろうな？」
「だったらバラすか。大体これがあいつらを相手にする上で、効率の良い策だってのがわからんお前じゃないだろ？」

そう言われて、雄二は口をつぐんだ。
……それが自分が対象になる条件が整っているのは事実だが、これを実行できれば勝算はぐっと高くなるのも事実。

翔子とのデート（強制）か、それとも可能性として……

「……テメエ絶対殺す」
「回避する可能性やってるだろ」
「信用できるか！」
「「……（ガンのくれ合い）」」
「……今更ながら、良くこれで決勝まで進めたの？」

そして決勝戦

『２－Ｆ　吉井明久　物理１３２点
２－Ｆ　久遠光一　物理７１２点
２－Ｆ　坂本雄二　物理２４８点
２－Ｆ　木下秀吉　物理１１８点
ＶＳ
『２－Ａ　霧島翔子　物理３９５点
２－Ｆ　姫路瑞希　物理３０４点
２－Ａ　工藤愛子　物理２５８点
３－Ｄ　島津さやか　物理１０２点

「久遠君の物理、やっぱりすごいですね」
「……あの大神先輩を抜いて、堂々の一番」
「それに加えて、光一君は強いから大変だよ」
「じゃあ翔子ちゃん、瑞希ちゃん、手筈通りに。幾ら久遠君でも、絶対無敵ってわけじゃないんだから」

ビン底メガネを、岩崎のマネでくいっと直すさやか。
そして……

「んじゃ、明久と雄二じゃなくて悪いが、お相手して貰うぜ？」
「……私たちこそ、優子と愛子じゃなくてごめん」
「ごめんなさい。翔子ちゃんとの約束があるんで、負けられないんです！」

光一の死神が、翔子の格新婦と瑞希のサキュバスと対峙。
背の巨大ゲンコツが開き、指の先端がそれぞれ人の顔を模り始める。

「姫路は物理苦手なのは知ってたけど、霧島も４００点オーバーじゃないのか」

「……私も全部４００点オーバーというわけじゃない」
「それに、さやかちゃんから策をもらいました！」
「どうせ色仕掛けだろ？」
「……違う（います）」

光一の言葉が聞こえた男性陣（主にとあるクラスの）が、それを聞いてがっかりした。
翔子と瑞希の色仕掛けともなれば、見たいと思うのは男の性。

「あの、さやかちゃんはそうするつもりだったんですけど……」
「……西村先生に２回戦の発言を厳重注意されたから」
「……考えてみたら、スポンサーが見に来るって話だったもんな」

ちなみに、光一たちの３回戦は好評だった。
……その後の不戦勝に関しては、不評ではあったが。

「んー……じゃあ使う前に、決めるか」
「そうはさせません。翔子ちゃん、目薬の準備は？」
「……出来てる」
「喋ってどうする！？」

どうやらウソ泣きで動揺を誘う作戦だったらしい。

「……まあ良いや。んじゃ」
『『『『ギシャアアアアアっ！！』』』』

中林、ダークネス清水、小山、根本、夏川の顔が奇声を上げ始めた。

「ひぅっ！」

それを見て、瑞希が怯えて様に身を縮める。
彼女は基本オカルトが苦手であり、光一の死神の特殊能力はあまりにも刺激が強すぎた

「……大丈夫、瑞希は強い子」
「……はっ、はい」

がくがくと震える瑞希に、そっと手を差し伸べる翔子。
自分に突き刺さる嫌悪の視線をうっとおしく思いつつ、死神に鎌を構えさせる光一。

「さて……」

光一はふと、雄二の方に目を向ける。

「ふはははっ！　無駄無駄あっ！」

どう見ても悪人っぽく、狼男が妖精に拳を連打していた。
妖精も出来る限りガードと回避で耐えていたが……。

びりっ！

「「え？」」

そこで、妖精の服が破れた。

「ぎゃあああああああっ！　目が、目がぁぁあああ！！」
「……私以外の女性の服を破くだなんて、許さない」
「まっ、待て！　そんなつもりじゃなかったんだ！」

とほぼ同時に、翔子が雄二に目潰しを執行。
そしてそれと同時に、ババァ長は客室のカメラの電源をオフ。

「あっ、チャンス」

光一の死神が格新婦に飛びかかり、巨大ゲンコツの顔が一斉に噛み付いた。
それに続くように、至近距離でショットガンを構え撃ちだす。

『２－Ａ　霧島翔子　物理３０２点』

「くそっ、まだか！」
「翔子ちゃん、今助けます！」

サキュバスの攻撃に構わず、巨大ゲンコツの顔を噛み付かせながらポンプアクションを繰り返し、至近距離でショットガンを連発。

『２－Ｆ　久遠光一　物理５１２点』
ＶＳ
『２－Ａ　霧島翔子　物理１８８点』

『２－Ｆ　坂本雄二　物理２０１点』

「よし！」
「ぐっ……なっ！　しっ、しまった！！」

視界が回復した雄二が、翔子の点数と自分の点数を見て焦った。
それを避けるべく、狼男を下がらせようとするも……。

「遅い！」

光一が特殊能力を解除し、巨大ゲンコツで格新婦を掴みながら狼男に接近。
そして回れ右をするように回転し、巨大ゲンコツで狼男を格新婦諸共に捕まえ……

「やっ、やめろーー！！」
「クロス！」

『２－Ｆ　坂本雄二（＋霧島翔子）　物理２０１点＋１８８点』

巨大ゲンコツから解放され、下半身がクモで上半身が狼男の融合召喚獣が姿を現した。

これが光一の策、融合媒介による敵戦力の奪取。

ここで補足だが、融合媒介は点数の高い方に主導権が与えられる。
それに加えて融合媒介は融合召喚と違い、互いの承認を必要とせず融合が出来る……という機能を活かせば、敵戦力の奪取も可能なのである。
……最も、合計が４００点未満とならなければ融合が出来ないから、今回の場合翔子の点数を雄二以下に、それも合計４００点未満になるまで削る事が大前提だが。

「……雄二との合体。夢みたい」
「夢だ……これは夢だ！　夢じゃなかったら嫌だ！！」

翔子は雄二との融合召喚に夢心地となり、雄二は錯乱し頭を抱えてうろたえ始めた。

「……良いなあ、翔子ちゃん」
「そう言ってやるな。クラスが違うんだから、これ位の役得位許してやれ」
「そうですね。あの……」
「すまん。今回は点数の都合上、雄二と霧島しか融合考慮してないんだ」
「そうなんですか？　残念です……」

光一も明久と瑞希のオカルト式融合召喚には興味はあったが、点数と機能上は普通に戦った方が効率いいので断念。
その代わり、賞品の量産型のフィールド展開機能で見るつもりであった。

「み～ずきちゃん。援護に来たよ？」
「あっ、ありがとうございます。じゃあ翔子ちゃんの代わりに、私がんばります！　翔子ちゃんとの約束の為にも！」
「やる気いっぱい元気いっぱい、かあ。それじゃ先輩として、応援してあげないといけないね」
「ＯＫ！　来いよ姫路、島津先輩。そう言うの嫌いじゃねえぜ俺は。Ｃｏｍｅ　ｏｎ！」

さやかが援護に入り、瑞希が奮起するのを見て光一は昂った。
ちなみにさやかの妖精の服は、さっきの間に縛って応急処置を済ませてある。

「光一もこういうの好きだね」
「根っからの戦闘狂じゃが、割とああいうのも好きじゃからの」
「みたいだね。それじゃボク達も」
「そうだね」

のっぺらぼうが拳を、和風デュラハンが刀を構え駆けだした。

「……これは夢だこれは夢だこれは夢だこれは夢だ」

「……これは現実これは現実これは現実これは現実」

……その傍らで、灰となった男子とそれに寄り添う女子が、互いに互いの言葉を打ち消すかのようにぶつぶつと呟き続ける。

現実である事と夢であること、相反するかのように。

第百九十三問（後書き）

うーん、光一は昂ると英語混じりのしゃべり方
……をしたいのですが、元々英語得意ではないのでうまくできない。

一応ツッコミがあると思うので補足ですが
光一の“凶王”はあくまでキレた状態で、ここで言う感情の昂りとは別と考えてください。

第百九十四問　激闘！　オカルト召喚大会編　エピローグ

『２－Ｆ　久遠光一　物理４８６点』
ＶＳ
『２－Ｆ　姫路瑞希　物理２９８点
３－Ｄ　島津さやか　物理３６点』

「さあて……Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？」
「はい、どうぞ！」
「え？　何て言ったの？」

ずるっ！

「アンタ何年生だ！？」
「よし、テンションがやや落ちた」
「ぐっ、俺とした事が……さて、どうしたものか？」

点数で勝っており、しかも特殊能力が使える訳じゃない。
となれば負ける要素はないが、それでも光一は楽観視しない。

「ふむっ……瑞希ちゃん、おっぱい揉ませて」
「えっ！？　なっ、何を！？」
「こうなったら色仕掛けで隙を作るしか！」
「「やめんか！！」」

鉄人と光一のツッコミが同時に炸裂した。
なんだかまじめに考えるのが、実にアホらしくなる……

「隙あり」

「甘い！」

のがさやかの策だが、光一には通用しなかった。
死角を突いた投げナイフを鎌で弾き、ショットガンを構え撃ちだす。

「全く……」

さやかは気まぐれで、常識に関して割と無頓着である。
それを利用し、突発的な行動を仕掛けて隙を突いたり、油断を誘う行動には長けている。

「あららっ、やっぱり駄目だったか」
「そういう常識はずれな行動で隙を作るやり方、常に気を張ってれば問題ないんで」
「島津、そう言う言動は慎めと言ったはずだ。次は失格にするぞ」
「あうっ……」

一部不評が（男性の）観客から出た。

「えいっ！」

サキュバスがパンチを繰り出し、死神がそれを回避。
空振りで体制が崩れた所で、背の巨大ゲンコツの人差し指と親指の顔をかみつかせる。
その隙を見計らい、残った小指と薬指と中指の顔を、妖精に噛みつかせた。

『３－Ｄ　島津さやか　物理０点』

「……自分でやっといてなんだが、絵的になんかすっごい不快な物

があるな」

さやかが噛みつかれたダメージで戦死したのを見て、そう呟く。

光一は特に、根本と夏川の顔を見て顔を歪めた。

きわどい恰好な女の召喚獣だけに、男の顔がかみついてるのは不快感がある。

「ひぅっ！」

ちなみに瑞希は、巨大な手の指に模られた顔に噛みつかれている光景に、びくびくしながら召喚獣に抗わせていた。

「死ねこのクソ野郎！！」

「気持ち悪い物を見せるな！！」

「離しなさいよこのゲテモノ！！」

それに対して、あちこちからブーイングが響き渡った。

「……無理もないか」

悪趣味な能力で美少女をいたぶる男……というのが、今の光一の姿である。

だがもう光一には……

「慣れてるから良いけどね」

既に罵倒など無意味だった。

腹にショットガンの銃口を当て、ポンプアクションを行いゆっくり

と引き金を引いた。

『２－Ｆ　姫路瑞希　０点』

一方。

「あはは……やられちゃった」

「……僕も、強くなった……のかな？」

「明久よ、何やら様子が変じゃな？」

「え？　そっ、そうかな……あっ、あははっ……」

岩崎にいわれた事……それは明久の中で、妙な実感として残っていた。

『勝者、久遠チーム！』

それに加えて、元々自分みたいな人間は、人に褒められる事なんて皆無に等しい。

そんな自分が稀代の天才とまで呼ばれ、一学年をまとめ上げあんな戦争を起こしたカリスマが認めてくれた事自体、実感その物が理解できない。

「……やっぱりわかんないなあ」

「何がだ、吉井？」

「大神先輩、どうして僕なんかを認めてくれたんだろ？　まさかあの時のまぐれが、ここまで大きなことになるだなんて思わなかったなあ……」

「成程な、大神に認められたという事に実感が無さ過ぎて、受け入れきれないと言ったところか？」

「そう……かもね……ん？　あれ、鉄人？　どうしてそれを？」
「お前がそう言ったんだろう？」
「え？　あれ？　……そう、なんですか？」

考え事にふけっていて、どうやら鉄人に無意識に返してたらしい。

「まあ確かに、大神相手に手傷を負わせた事は素直にすごいと認めるがな」
「……え？　何？　ミサイルの雨……いや、隕石群！？」
「人が珍しく褒めているというのに、素直に受け取る事が出来んのか？」
「僕はそれを悩んでるんですが？」
「そうだったな……まあ吉井が人に褒められる事など、天地が割けるよりもありえんから無理もないかも知れんが」
「ええ。それがまさか、あんなすごい人から認めて貰えるなんて」
「お前は今の言葉を当然の様に受け入れるのか！？」

『それでは、授賞式を始めます！』

「あっ、時間だ」
「まったく……吉井、お前には大神が認める何かがあったという事だ。“そこだけ”は自信を持ってもいいと思うぞ？」
「そうなんですか？　……わかりました。てか“そこだけ”ってどういう意味です！？」
「他は見るまでもないという事だ」
「酷い！！」

そして、授賞式

「さて、今回は素直に感謝するよ。あんた達の接戦や、久遠の融合媒介を有効活用した戦術を駆使してくれたおかげで、視察に来たスポンサーの方々も評価は上々だったさね」
「それは光栄ですね、学園長」
「……（我慢だ我慢）……それじゃ、これは賞品だ」
そう言って、学園長は光一たちにトロフィーと賞状を授与。
そして……

「あれ？　どうして俺には2枚も？」
「アンタの場合2枚必要だろう？　決勝での敵戦力の奪取が、上手い使い方だと好評をいただけてね。その礼さ」
「何ぃっ！？」
雄二が驚愕の声を上げ、その後ろで翔子がきらりと目を光らせた。

「落ちつけ雄二、俺は相手がお前だろうが約束は破る真似をしないって。お前のこれは島津先輩にでもプレゼントする」
「光一、恩に着るぞ」
「はいはい。で、賞品の腕輪だけど……」
「ああっ、大方あんたにだろ？　融合召喚の腕輪に機能つけてやるよ。黒金の腕輪の量産型だけあって、範囲は狭いがね」
「十分だ」

こうして、オカルト召喚大会は幕を閉じた。

おまけ　その1

「さて……早速須川に」
「そうなの？　だったら代表、アタシのあげるわ。ねえ秀吉、いっそ皆で行きましょ？」
「……ありがとう、優子」
「ちょっと待て光一の妾！！　何勝手な事しでででででで！！」
「坂本君、アタシね……坂本君が自由だと、とーっても不愉快なの！」
「告白するかのように言うんじゃねえええええええええ！！」
「……まだ根に持っておったのじゃな」

おまけ　その２

「……彼らが、優勝しましたか？」
「別に何の疑問もないでしょう、小暮さん？　元々彼らは召喚大会の優勝、準優勝者のチームなのですから。それで、首尾は？」
「こちらは順調です」
「……ならば僕は受験生らしく勉強に励み、しばらく息を潜め耐える事にしましょう」
「あら岩崎君、いつも思いますが潔いですね？」
「僕は彼の様に高潔でありたいだけですよ。大体２年の能無し代表達じゃあるまいし、大神君は代表としての責任を果たしています。今回の事は許してくれましたが、あまり勝手な事をして彼の顔に泥を塗っては、申し訳が立ちません」
「とても代表の打倒という野心を持つ方のセリフとは思えませんね」
「小暮さんならわかっているでしょう？　僕の野心は、彼の力を崇拝するが故の物です……さて、もう良いでしょう？　僕はこれで」

第百九十五問　閑話　過去と後輩と凶王の憂鬱　前篇（前書き）

今回は、ちょっと光一の過去を出してみます。
過去と言っても白夜がいた頃ではなく、凶王と呼ばれていた中学時代の頃です。

第百九十五問　閑話　過去と後輩と凶王の憂鬱　前篇

「ゆっ、許し……」
「許してほしいか？　……ならくたばれゴミが」
「ひっ……！　ぎゃあああああああっ！！」

時は核弾頭トリオが団結し、試験召喚戦争を起こす3年前。
その1人、過激派筆頭と呼ばれる少年久遠光一が、凶王と呼ばれていた中学二年時の事。

毎日の様にケンカに明け暮れ、時には警察に補導されの毎日だった頃。
そして……光一が何もかもが嫌いだった頃。

「……何度掃除しても、後から後から湧いて出やがって」

自分をバカにする者、貶す者を容赦なく攻撃し、病院送りにする事も一度や二度ではない。
そんな彼を教師や周囲は遠ざけ、いつしか光一は凶王と呼ばれるようになった。

「光一！？　アンタまた！！」
「なんだ優子か」
「優子か、じゃないわよ！　いつもいつもケンカばっかりして！！」
「うるせえな、ゴミ掃除して何が悪いんだブス！」
「ぶっ……アンタまた！！」
「うるせえ！　ギャーギャーわめくなブス！！」

優子とも折り合いが悪く、顔を合わせては口ゲンカの日々。

教師も周囲も、光一に対して抗議出来る優子を重宝し、期待の視線を常に向けていた。

……が。

「あっ、久遠先輩！　ここにいたんですか？」

光一は駆け寄った小動物系の女子に、顔をしかめた。

「朝倉……！？　じゃあな。俺は寝る」
「そう言わずに」
「ちょっ、離せコラ！！」
「じゃあアタシ、秀吉呼んでくるから」

場所は屋上。

「……あのな朝倉、いい加減にしろ。うっとおしんだよ！」
「ひぅっ！」
「抑えるのじゃ光一」
「……ごめんなさいね」
「いえ、良いんです。私の勝手ですから……その、ごはん」

彼女は朝倉歩美、一年生。
とある偶然で知り合った経緯から、光一に対して懐いていた。

その日以来彼女は、光一と光一経由で知り合った優子、そして秀吉に毎日弁当を作っている。
助けてもらった事と、親しくしてくれるお礼として。

「ほら光一よ。今日も美味そうじゃ」
「……ちっ」
「礼くらい言いなさいよ。せっかく作ってきてくれたのに」
「頼んだ覚えはねえし、強制連行されて礼なんか言えるか！」
「あっ、あの。やめてください！」

が、光一としては、あまり信用する気になれなかった。
……というより、なぜ自分なのかが全く理解が出来ない。

「でもどうして光一に？　もっと同年代の友達とかと……」
「私はその、先輩たち以外に、親しいって言える人いなくて……さびしいの嫌なんです」
「さびしいの嫌なんですーって、ウサギじゃあるまいし。てか何年生だよ？」
「光一！」
「るせえな！　なんで寂しがりなガキのお守りなんざ！？」
「だっ、だからやめてください！　気に障ったんなら、謝りますから……ぐすっ！」
「……ごめん」

歩美がぐずり始めたのを見て、優子がしぶしぶと引き下がり光一はフンと鼻を鳴らす。
秀吉も歩美に謝りながら、光一を宥め始める。

「あーあ、うるせーうるせー」
「アンタホント最低ね！」
「今頃気づくなブス！」
「だからやめるのじゃ、姉上も光一も！」

そんなこんなで、昼休み終了。

そして放課後。

「あのクソジジイ、明日覚えて……なんで待ってるんだよお前は？」

昼休みの事で呼び出しを受け、説教を聞き流し続けた光一が、職員室を出てすぐ……

「なんでって、一緒に帰ろうと思いまして」

「思いまして……って。はぁっ」

歩美が笑顔で出迎え、一緒に帰ろうと誘った。

流石にこんな時間まで待っていた以上、とやかく言う気もなくなった光一。

仕方なく一緒に帰る事に。

「……あの、先輩。覚えてます？」

「ここでお前がいじめられてるのを、偶然助けたって事だろ？　……思えばあれが運命の分かれ目だったな」

「はい。運命の出会いです！」

「それ絶対俺が思ってるのと間逆の意味だな」

ある程度進んだ所で、おずおずと歩美が光一に問いかけた。

光一はこの辺りで歩美がいじめられる所に通りがかり、それを助けた経緯があった。

……というのも、光一にしてみればただの気まぐれでしかないが。

「……その気まぐれが、まさかこんな結果になるとは」
「はい？」
「てかまさか、俺を白馬の王子様とでも思ってるのかよ？　……自分で言って気持ち悪くなってきた」
「そっ、そんなまさか！　木下先輩に悪いですよ」
「だから違うっつってんだろ！」

不機嫌そうにムカムカとしながら、無言の帰路につき始める光一とそれに続く歩美。
そしてしばらく進むと……

「あっ、じゃあ私はここで」
「ああっ。出来ればもう二度と会いたくない」
「それではまた明日」
「だから聞けよ！」

笑顔で手を振り、去って行った歩美を見送り、光一はガシガシと頭を掻く。

「……ちっ！」

舌打ちをして、今日の夕食の買い出しの為にスーパーへと歩を進めた。

そして、光一の家にて。

「……ふぅっ、さっぱり」

Ｐｒｒｒｒｒ！

「はいもしもし？」
『あっ、夜分遅くにすみません。久遠先輩のお宅ですか？』
「……どうしてうちの番号知ってる？」
『あっ、先輩ですか？　ちょっとお話がしたくて』
「質問に答えろ」
『木下先輩からです。あの、明日ですけど』
「明日は用事がある」

プツッ！　ツーツーツー……

「……あのブスが！！」

いきり立ちながら電話線を抜いて、ソファーにどっかと寝転び……

「……ＺＺＺ」

寝息を立て始めた。

第百九十六問　閑話　過去と後輩と凶王の憂鬱　中篇

「……またなのかの？」

校舎裏から聞こえた鈍い音と、ケンカの様な罵倒。
部活が終わり、帰り始めていた秀吉はそれに気になって、確認に出てみると……

「ん？　秀吉か」

数人がボコボコになって倒れており、その1人の上に座ってるのは幼馴染の光一。
2発程殴られた跡がある彼の肩には、ほうきの柄に使われていただろうワックスの名残がある棒が。

財布から抜き取った金をポケットに突っ込み、財布は投げ捨てると秀吉に声をかけた。

「……こんな場面で平然と声をかけるでない」
「別に見られて困るもんでもないだろ。大体こいつらの金だって、そこらの奴から巻き上げた金。問題は……」
「問題大ありじゃ！　お主もいい加減にするのじゃ。このままでは」
「うるせえ！」

ケンカで発散させたというのに、自分の頭に熱が昇り始めたのが光一にもわかった。

「光一……」
「ちっ、折角発散させたってのに、気分悪い」

光一が立ち上がり、そこらにおいてあるカバンとボストンバッグを手に。
そして秀吉に帰るぞと促し、帰路に就く。

「……のう光一よ、今日は泊まっても良いかの？」
「なんだ、また優子と何かあったのか？」
「いや、色々と話したい事があるのじゃ」
「……勝手にしろ。帰りスーパー寄ってくぞ」

ところ変わって、行きつけのスーパーにて

「あっ、先輩方！」
「……今日はコンビニで良いか？」
「待つのじゃ。そんなあからさまに逃げるでない」

自分達の姿を見つけ、満面の笑顔で駆け寄った後輩、朝倉歩美。
光一が回れ右するのを、秀吉が肩をひっつかむ。

「どうされたんですか？」
「どうもこうも、夕食の買い出しじゃ。今日はワシは光一の家に泊まるでな」
「そうですか？　そう言えば秀吉先輩って、久遠先輩の弟分なんですよね？」

ちなみにだが、歩美が秀吉と知り合ったのは優子よりも後である。
ただ、優子はどちらかというと優等生と言う感じがして、近寄りがたいイメージがあるため、割と親しみやすい雰囲気の秀吉を名前で呼んでいた。

「あっ、あの。でしたら私も、一緒に泊まっていいですか？」

時が止まった

「……はっ？」

「でっですから、先輩の家に……」

「お前、自分が何言ってるかわかってるのか？」

「でっでも……今日、実はお母さん、親戚の集いで一週間はいないんです」

歩美が1人ぼっちを嫌悪してる事は、光一たちも知っている。

……が。

「却下だ。中学生にもなって……」

「光一！　……ならばウチに泊まると良いのじゃ。今日は両親とも泊まりじゃし、姉上にはワシから話しておくぞい」

「あっ、ありがとうございます！　……なかなか言い出せなくて」

光一としては関わりたくないのだが、優子も秀吉もこぞって歩美に味方をする。

……多数決では勝てない為、しぶしぶという事がほとんどだった。

「……秀吉も優子も」

自分が不幸で救いがないなら、幸福を奪い取って自分で自分を救ってやる。

兄が離婚で居なくなって、自分が凶王の一歩を踏み出した時の決意。

歩美の存在は、それを否定されている様で苛立ちを抑えられない光

一。

「……だったら秀吉、さっさと準備させて優子を説得しろ」
「え？　うっ、うむっ。わかったのじゃ」
「ありがとうございます、先輩！」

秀吉が光一に礼を言う歩美を伴い、歩美の家に向かっていくのを見送り……

「……なんで俺に言うんだか？」

どうにも歩美が理解できない光一は、苛立ちを隠せないまま買い出しを終え帰路に就いた。

そして光一の家。

「光一よ、朝倉は無事了承とれたぞい」
「……メシと風呂は出来てるけど、どうする？」
「興味を示す位してはどうじゃ？」
「お前も優子も朝倉に甘いから、当然だろ。それに朝倉嫌いだからどうでも良い」

どうにも過去を思い出し、不快な気分にさせられるからである。

「ヤキモチかの？」
「ぬかせ」
「……淡泊じゃの」
「今更どうこうする気はねえ」

親に見放されて育ち、周囲も出来損ないと見て光一を突き放してきた。
今でもそう、光一は何もかもが大嫌いだから。

「……のう光一、せめて受け入れてやってはくれぬかの？」
「……？」
「あの子は純粋にお主を慕っておるのじゃ。ワシらはお主の境遇を知っておる以上は、同情が多少混じってしまうが……」
「……」

歩美に対する苛立ち。
それは立つ事が出来ないままの自分を見ているみたいな……そんな自己嫌悪にも似た物

……その苛立ちが自分勝手な物だと言うのは、光一も理解していたそして歩美にその責は微塵もない事も、十分に理解している。

「……先に風呂入るぞ」

秀吉を突き放すようにリビングを出て、乱暴にドアを閉める。
涙が頬を伝い、ギリっと食いしばった口元から血が筋を描き始める。

洗面所に駆け込み、乱暴に服を脱いで……
風呂に入ると同時に、冷水を頭からかぶった。

「……ぐぅっ！」

ずっと消えない痛み、とうに受け入れた痛み。
……受け入れたなのに、それが自分を蝕み始めている。

「……くそっ！！」

理由はわかっている。
自分を初めて、純粋に受け入れてくれた人があるから。

「……どうしてだよ？」

蝕み始めた頃から、答えの出ない問い。

どうして、今なんだ？
どうして諦めた時、その痛みを受け入れた時に、中途半端に救いの手が差し伸べられた？

「……半端過ぎるだろ。どうして今更なんだ？」

風呂から出て……

「……光一？」
「さっさと風呂入れ。俺はもう寝る、飯は作ってあるから自分でやってくれ」
「……わかったのじゃ」

突き放すように秀吉にタオルを押し付け、光一は秀吉の分の布団を用意。
それが終わると、ベッドにもぐりこむ

「……もうたくさんだ」

そして、朝。

「あっ、おはようございます。先輩！」

朝一番に、笑顔で挨拶をしてくる歩美に……。

「……」

光一はそっぽを向いた。

「え？　あの、先輩？」

「……」

「ちょっと光一！」

「うるさい！！」

朝からいきなりの剣幕に、優子も何が何だか分からない。

秀吉に目を向けるも、秀吉自身もさっぱりという様子。

「……ちっ！」

思い切り舌打ちをして、自己嫌悪にも似た何かが湧いてくるのを無理やり抑え込んだ。

「あっ、あの……私、何か先輩の気に障る様な悪い事、しました？」

「……」

「だったら、ごめんなさい」

それも、歩美が心底からの謝罪で溢れ……。

「ぐっ！」

光一はその場を逃げ出した。

「ちょっと！　……秀吉、一体どうしたのよ？」

「それが……ワシにも、さっぱりじゃ」

呆気にとられた木下姉弟。

そして……。

「……はぁっ……はぁっ……やめろ、やめてくれ……」

息を切らし、立ち止まる光一。

そんな錯乱した状態の光一に、何事だと視線を向ける周囲。

「待ってください、先輩！」

「いい加減にしてくれ！！　俺は……え？」

歩美は気付いていないが、今いるのは横断歩道。

しかも信号は、赤。

その次の瞬間……

「え？」

「くそっ！」

「きゃあっ！」

キキィィイイッ！　ドンっ！！

「なっ！」

「こっ、光一！？」

後から追いかけた木下姉弟が見た物は……

光一が必死の形相で、歩美を抱きしめる場面。
そして次の瞬間、2人が宙を舞い……光一がクッションとなり、地面に叩き付けられた。

「……ぱ……せん……」
「……よし……しゃを……く！」
「……い……」

朦朧とした意識の中で、少しすりむいた個所があるだけの歩美を見て……

「……泣く、なよ……きぶん、わりい……な……」

光一は意識を手放した。

第百九十七問　閑話　過去と後輩と凶王の憂鬱　後篇

白い天井が、まず認識した事柄。
そして……

「……そう言えば、俺」

自分の最後の記憶を思い出し、ここは病院だと判断。
自分の状態は、集中治療室で眠る重症患者。
頭と左目が包帯で覆われ、左手足がギプスで固定されていて、背もクッションになった時に痛めただろう痛みを感じる。

「……先輩？」

ふと声がした方を見ると、少しやつれ目にクマも作った後輩が、目を疑う様にこちらを見ていた。
その眼にジワリと涙を浮かべ……。

「せんぱーーーい！！」
「ぎゃあああああああああああああっ！！！！」

断末魔が響き渡った。

それから数分後

「……まったく、心配かけて！」
「……悪かったな」

断末魔で駆け付けた医者から、自分が三日も意識が無かった事。
それから容体についての説明を受け、着替えた所で連絡を受けた優子が入ってきて、現在に至る。

歩美は泣き疲れて眠ってしまい、現在別の病室でお世話になっていた。
その歩美に抱きつかれた所為で、体中が悲鳴をあげるのを我慢し実に久しぶりに謝罪。

「……何年ぶりかしらね？　光一から謝罪の言葉を聞くなんて」
「そう言えば、最近どころかかなりの間謝った記憶がないな」
「……理由知ってても、どうもロボットと話してるような気分。で、あの時のアレどういう事？　いきなり朝倉さんを突き放す様な事して」
「……怖いんだよ」

質問の意味がわからず、優子はきょとんとした。
同年代どころか教師まで暴行を加え、警察沙汰を起こした事も少なくはない。
そんな凶王とまで呼ばれている目の前の男が、怖いと？

「怖いって……」
「あいつは、昔の俺だ……誰かに救いを求める事しか出来ない、そんな弱かった俺だ」
「……それで、無意識のうちに自分と重ね合わせちゃってたって訳？」
「わからないけど、そうかもな……それに俺はもう、救いを諦めたってのになんで今更？」
「つまり、自分に対して救いを求めてる昔の自分に、自分が救われ

るのが怖かったって、そう言う事？」
「よくわからんが、そうだろうな……笑いたきゃ笑え、怒りたきゃ怒れ」
それに対して、優子は笑いも怒りもせず、どことなくほっとした雰囲気。
今度は光一がきょとんとした。
「なんだか初めて、アンタに人間味感じた気がするわ」
「人をロボットか何かみたいに言うなよ」
「だってそうじゃない。例えるなら、今まで憎しみしか知らないからアンタも憎しみ以外の感情しかなくて、そこへ唐突に好意なんてきたから誤作動起こしたって」
「……ならいっそ、スクラップにでもなれば手っ取り早くてよかったよ」
墓穴だった。
「……ごめん」
「いや、別に……俺、間違ってたかな？」
「全部は否定しないわよ。理不尽な罵倒に晒され続けた光一にとって、そうなる必要があった事は紛れもない事実だからね……違うって思ったなら今から直せばいいじゃない。今回の事で、アンタは１人じゃないってわかったでしょ？」
「文字通り、痛いほどにな」
「だったら少しずつでも、変えなさいよ。アタシも秀吉も光一の事は大事に思ってるんだから、協力位惜しまずしてあげるから」
「……なんか惚れちまいそうだ」
「なっ！？　……ばっ、バカ！！」

そして次の日。
光一の病室では、学校が終わってすぐ直行した歩美が、りんごの皮をむいていた。

「……なにはともあれ、悪かったな」
「いえ、良いんです。私が勝手にやってた事だから、怒られても無理ありません」
「そう言える辺り、お前強いな……」
「だとしたら、先輩のおかげです。あの時助けてくれた先輩の雄姿、今も脳裏に焼き付いてますから」
「……偉くメルヘンチックに変換されてそうだな」

光一は顔をしかめつつ、なんか夢見る乙女の様にウルウルとした雰囲気に包まれた歩美を見て、ため息をついた。
誰もが恐れ、恐慌状態に陥らせる悪名高い凶王相手に、良くそこまでの幻想を見れる物だと、正直あきれていた。

「でっでもでも、先輩ってすごく強いですし」
「武器を持てばな」
「それに、カッコいいです！」
「モヤシだがな」
「……えーっと」

光一がくすっと笑った。

「……いや、ありがとな」
「……先輩が笑った所、始めてみました」
「俺も、笑ったの何年ぶりか忘れちまったが、なんか初めて笑った気がする」

光一がリハビリを経て、退院してから。
流石に凶王の復帰ともなれば、戦々恐々とした空気が学校を包んだが……。

ドンっ！

「あっ、わり……ひっ！」
「ん？　悪かったな。大丈夫か？」
「許し……え？」

入院してる間ですっかり丸くなった光一に、毒気を抜かれ杞憂に終わった。

「待て久遠！　キサマまたやったな！？」
「やなこった。逃げるぞ朝倉、秀吉」
「わかったぞい」
「ひゃっ！」

他には暴力沙汰を起こす問題児から、気弱な後輩を連れまわしいたずらばかりの悪ガキに。
優子は変わらず光一達を説教し、光一もそれを言い返しあい、の毎日。

しかしそんな日々も……

「お父さんの、実家へ？」
「はい……お父さんが家業を継ぐ事になっちゃったから」

歩美が両親の都合での引っ越しという形で幕を下ろした。

「大丈夫なの？」

「はい、もう大丈夫です。どんなに離れてても、私はもう1人ぼっちじゃないから」

「ああっ。寂しくなるけど、もう会えないってわけじゃない。相談位なら電話でも……」

ちゅっ！

「はっ？」

「なっ！」

「えっ？」

「……えへへっ。さよなら、木下先輩達。そして私の大好きな久遠先輩！」

始まりは唐突な偶然から。

そして終わりもまた、唐突に訪れた。

「……何ほっぺた抑えてぼーっとしてるのよ光一？」

「え？　ちょっ、何!?　なんで怒ってるんだよ!?」

「なんだかわからないけど、今すぐアンタを八つ裂きにしたくてしょうがないのよ！」

「ちょっ、冗談じゃねえぞ!?」

「やれやれ、姉上も光一も鈍感な上に前途多難じゃのう」

そして、新しい始まりが幕を開け……今に至る。

第百九十八問　閑話　愛子と秀頼の仲良し大作戦！（Ｂｙ　光一）　前篇

「むぅ～っ」

部活を終えて、光一の家に遊びに来た愛子はちょっとご機嫌ななめだった。
その視線はドッグフードを食べてる秀頼と、その傍らに居る……

「秀頼よ、美味いかの？」
「わんっ！」

秀吉に向けられていた。

そう。秀頼が優子に続いて、最近は秀吉にも懐き始めているのである。
その様子にどうにも置いてけぼりにされてるようで、面白くない愛子だった。

「ねえ秀頼ちゃん、おいでおいで～」
「……（くんくん）」

最近はあからさまに逃げる事はなくなっても、それでも秀吉や優子に比べると程遠い。
触れるとビクビクと怯えるのは変わらず、優子や秀吉は一応抱っこは出来るだけに距離は遠い。
更には……。

「愛子、メシ出来たよ」

「わんっ！」
「おっとと。こらこら、秀頼」
声を聞いただけで上機嫌になる程懐かれてる光一が、あまりにも遠く感じた。
今光一の姿を見るなり、秀頼は駆けだして足元をくるくると回り始める。
「むぅっ……」
「？　チャーハン、嫌だった？」
「そうじゃないよ。ただボクって、光一君の本妻の筈だよね？」
「まあ関係上はそうなるな。優子一応妾の立場に当たる訳だし」
本人がそれでいいと言ってるだけに、自動的にではあるが。
「……なのにどうして秀頼ちゃんとの距離が、優子達より遠いのかな？」
「そりゃあ秀吉と優子は家が隣で、しかも愛子部活入ってるし。どうやっても接する時間が少なくなるよ」
「……でもなんだか置いてけぼりみたいで、面白くないよ」
拗ねたように愛子が口をとがらすと、光一は苦笑。
「心配するなよ。秀頼だって愛子の事が嫌いってわけじゃないんだ」
「そりゃあ、最近はそっぽ向かれたりする事はなくなったけど」」
「雄二みたいに唸られたり、常夏みたいに小便かけられてる訳でもないんだから。まああれは笑えたがな」
「かもね。あれは気の毒ではあるけど、ボクもあの人たちあんまり好きじゃないから」

夏川が秀頼に小便かけられた上に、その小便つきのテーブルにダイブして、それごと地面に顔から突っ込んだ場面。
実は召喚大会参加者を通じて、既に物笑いの種にされていた。

「でもこのままじゃ、いつまで経っても秀頼ちゃんに懐いてもらえないよ。ここは光一君の本妻として退けない場面だね」
「ふむっ。愛されておるのう、光一」
「はっはっは、羨ましいか？」
「うむっ、実に堂々とした振る舞いじゃな」
「きゅ～ん？」

既にからかわれることにも慣れていた。
それを見て秀頼は、首をかしげていた。

「それは良いけど、どうすんだ？」
「うーん……じゃあ光一君、しばらく泊めて？」
「うん、率直過ぎる解答だな。でもダメ、母さん今ちょうど出張だし、男の家に……」
「大丈夫。ボクの親は放任主義だから」

奔放な性格が納得できた光一だった。

「それに光一君、宿題とかやってないでしょ？」
「やってるよ？　……ちょっとは」

実は大半やってなかったりする。

「宿泊代として、宿題手伝ってあげるから。ね？」
「……お願いします」

意外とあっさり陥落した。

「立場が強いのか弱いのか、良くわからぬのう」
「お前はどうなんだよ秀吉？」
「……ワシも混ぜてはくれぬかの？」

五十歩百歩だった。

「助かったな。優子が今イベントで泊まりの遠出してるから、どうしようかと」
「居たとしても、手伝うとは思えぬが？」
「……あはは～っ？」
「きゅ～ん？」

実は宿題の事で右往左往してたため、渡りに船な光一と秀吉だった。
そんな苦笑する2人を見て、先ほどから首をかしげてばかりの秀頼。

「じゃあちょっと部屋準備しとくよ。愛子それ食ったら帰って、準備な？」
「そうだね」
「んじゃ“愛子と秀頼の仲良し大作戦”の実行と、そのプラン作成と行くか」
「？　わんっ！」

光一の提案に、何が何だかという様子だった秀頼が、主人に同意する形で吠えた。

「秀頼、お前の仲良しを増やす為の大作戦実行だ。だから協力しろよ？」
「きゅ～ん？」

秀頼を抱っこして、目を合わせてから言い含める様に言う光一。
秀頼は主人に抱っこされて上機嫌だったが、それに首をかしげた。
が、それもすぐに消え去ったのか、身を乗り出して光一の頬を舐める。

「ワシも姉上も、流石にそこまでは好かれておらぬの」
「うーん……まあボクとしては、抱っこ位はさせてほしいな」
「ま、俺としては秀頼が俺以外に懐いてくれれば、それはそれで安心だがな」
「わんっ！」

光一としても、自分に依存ともとれる程懐いてる秀頼は心配の種。
なので何とか自分以外にも懐いて、自立も促したいだけに今回は好機だった。

「ご馳走様。じゃあ準備して来るね？」
「ああっ。それ置いといて良いよ、片づけとくから」
「うん、お願い。お礼に今夜は保健体育の実習するからね？」

と言って、ウィンクしてから帰って行った。
それから今日も泊まる予定の秀吉に向かって……

「秀吉頼む、今日は別の部屋で寝てくれ」
「そんな一生のお願いと言わんばかりに頭を下げんでも……」
「だって夏休みなのに、それっぽい事はあっても進展とか特にないから」
「……お主は色々な意味で、何かとと苦労が絶えぬのう」
「そんなもん今に始まった事じゃないのは、お前と優子なら誰より

理解してるだろ？」
「じゃが……泊まりの事もそうじゃが、姉上が知ったら怒るのではないかの？」

……

「……大丈夫だろ。うん」
「……そんな滝の様な冷や汗を流しておる上に、血の気が全くない顔で言われても」
「えーっと……携帯どこだっけ？」
「許可を取るような事でもないと思うのじゃが……」

燃え盛る炎を背景にした仁王（最悪で闇魔大王）をバックに、怒り狂う優子の姿がすんなりと予想出来た２人だった。

「きゅ～ん」

そんな２人の気も知らず、秀頼は光一の足にすり寄り心地よさそうに鼻を鳴らしていた。

一方、愛子の家にて

「と言う訳だから」
『まあ確かに、秀頼がらみじゃ愛子が不利なのは事実だから、仕方ないけど』
「良いじゃない。そもそもボクが本妻で、優子は妾なんだから」
『……それを言われると痛いわね』
「じゃあそう言う事で。なんなら優子も、帰ったら迫ってみたら？」
『あっ、愛子！？』

光一達の心配は、愛子により既に杞憂となっていた。

第百九十九問　閑話　愛子と秀頼の仲良し大作戦！（Ｂｙ　光一）　中篇

「お待たせ」
「いらっしゃい」
「待っておったぞい」

スポーツバッグを手に、愛子が太陽の様な笑顔を浮かべて御到着。
秀頼を抱えてる光一と秀吉が、笑顔でのお出迎え。

「じゃあまずは、荷物置いてからだな。部屋は用意しといた」
「ありがと。じゃあ光一君の部屋にだね？」
「Ｙｅｓ！　わかってらっしゃ」
「違うじゃろ！」

愛子の発言に光一が同意（冗談で）したところで、秀吉が突っ込み。

「おおっ、ナイスだ秀吉」
「まったく……」
「あははっ。意外と気が合うんだよね、ボクと光一君って」
「それはさておき、随分本気だったように見えたが？」
「何を言ってるのやら？」
「お主はテンションが上がると英語交じりになるじゃろ」

……

「きゅ～ん」
「あっ、秀頼。悪い悪い、散歩の時間だったな」
「……逃げおったな？」
「どうする？」

「ボクも行くよ。じゃあ一旦、荷物はリビングにおいてだね？」
「そうだな」

光一が玄関に備えてるリードを秀頼の首輪に付けてる間、愛子はリビングに荷物を置く。
それからお出かけの準備完了。

「秀吉も来るか？」
「そうじゃの。1人居ても退屈なだけじゃ」
「それじゃ、出発だね」
「わんっ！」

愛子にリードを持たせて、いざ出発。

それから行きつけの公園。

「きゅ～ん……」
「大丈夫だ秀頼、大丈夫。だから、な？」

秀頼を抱っこし、そっと光一は愛子に手渡す。
秀頼が光一に縋る様に鼻を鳴らすが、光一は安心しろと言い聞かせるようにそっと笑みを浮かべる。

「……きゅ～ん」
「あの、秀頼ちゃん？　大丈夫、何もしないから」
「……」

いきなりだから無理もないだろうが、秀頼はびくびくと怯えていた。
光一が秀頼の前足を軽く握ってやると……

「……わんっ！」

あっさりご機嫌になった。

「……」

「まあワシも姉上も、こんな調子が続いたからのう」

「きゅ～ん？」

「先はまだまだ長いみたいだね」

「始まったばっかなんだから、こんなもんだろ」

「最初からラブ全開な光一君に言われてもね」

愛子の拗ねたような発言に、光一は苦笑した。

「なんかかわいいな」

「なっ！？」

「いや、ちょっと言ってみただけ」

「もうっ！」

「……留守番した方が良かったの」

「きゅ～ん？」

そんな甘い空気に、居心地悪そうに秀吉はそう呟いた。

愛子に降ろして貰った秀頼は、そんな秀吉にトコトコと近寄って首を傾げる。

「光一に工藤よ、いちゃつくのは構わぬがそろそろ帰った方が良いぞい？」

「え？　……あっ、そっそうだな。あはは～っ」

そして家にて。

「～♪」

鼻歌を歌いながら、得意で好物なコロッケの仕込みを始める光一。
秀吉はジャガイモの皮むき位はと手伝っている。

「わんっ！　わんっ！」
「あっ、ちょっと！　逃げないで！」

風呂場では愛子が秀頼にシャンプーしており、愛子の悪戦苦闘の声と嫌がる秀頼の鳴き声が、しきりに響いてくる。

「今ではそんなでもないが、シャンプーはワシでも嫌がるからのう」
「優子にはなぜか自然に懐いてたから、苦もなかったようだけどな」
「光一が大好きな者同士、意思疎通でも出来たのじゃろ？」
「……嬉しいっちゃ嬉しいが、どうもこっ恥ずかしいな」
「光一は顔に出ないとはいえ、ワシから見ればわかりやすいのう？」

秀吉は家族以上に光一の傍にいた時間が長く、理解者として最上位である。

「お前が明久がらみで簡単に揺らぎやすい様にか？」
「だからワシは男じゃと言うに！」
「否定出来なくなりつつあるんだとわかれ。俺だって否定はしたいけど、最近のお前の行動見る限りじゃ否定し難くなってんだ」
「うぅっ……」

光一のセリフがグッサリと胸に突き刺さった秀吉。

「じゃったらワシも工藤に倣い、一大決心するのじゃ！　ワシは工藤が泊まっておる間に、何としても“男としての尊厳”を取り戻し、名誉挽回に努めるのじゃ！」
「おおっ、がんばれ。名誉挽回じゃなくて、汚名挽回にならなきゃいいけどな」
「不吉な事を言うでない。常夏コンビや根本達ではあるまいし……」

汚名挽回ｏｒ名誉返上＝常夏コンビ&指の顔軍団。
これ文月学園の常識となりつつあった。

「まあわかったから、手を止めるな」
「うむっ。今日は光一のコロッケとは、楽しみじゃのう」
「ま、今日は馳走を用意しないとな」

「あっ、だから暴れちゃダメだよ！」
「わんっ！　きゃうんっ！！」
「ちょっ、ダメわぷっ！」

光一がくいくいと騒がしい風呂場の方を指さすと、秀吉は納得したように頷いた

「ま、労いのつもりでな。元々俺がやる仕事やって貰ってるんだし」
「利害の一致じゃとは思うがの」
「とりあえず、イモの皮剥けたろ？　だったらリビングに起きっぱになってる愛子の荷物、持ってってやってくれない？　中開けるのもなんだしな」
「わかったのじゃ」

光一はジャガイモを受け取り、秀吉を見送ってコロッケの準備に入り始める。

光一自身も好物の為、上機嫌に鼻歌歌いながら料理に励んでいた。

ガチャっ！

「終わった様じゃ」

「大変だったよ……」

「きゅ～ん……」

カバンを持ったままの秀吉が、濡れた個所が目立つ格好の愛子を伴い入って来た。

愛子の手には、タオルに包まれた秀頼を抱き抱えられている。

「……御苦労さま。服も濡れてるし、風呂入ってきたら？」

「そうするよ……一緒に入る？」

「今飯作って無かったら是非と言いたいがな。部屋は俺の部屋の隣の使ってくれ」

「残念」

挑発するようにウィンクをして、荷物を持って上にあがって行った。

「……さてと、スープ作るかな？（ぐすっ）」

「ベソ掻く位落ち込むでない！」

「いや、これ玉ねぎ！　玉ねぎだから！！」

「コロッケでタマネギなど使ったかの？」

「オニオンスープ作るんだよ」

愛子から受け取った秀頼を拭いてやりながら、ツッコミ入れる秀吉。

光一は少々言い訳臭い事を言いながら、オニオンスープの作成に入った。

第二百問　閑話　愛子と秀頼の仲良し大作戦！（Ｂｙ　光一）　外伝　その頃の

今回で２００問突破！
では、これからもよろしくお願いします！

第二百問　閑話　愛子と秀頼の仲良し大作戦！（Ｂｙ　光一）　外伝　その頃の

光一の家で、愛子が秀頼の世話に奮闘してる頃。

「今回もたっくさんの良い買い物が出来たわね♪」

優子はとあるイベントの為に友人と泊まりで遠出をしてて、その土産を選んでいた。

……遠方とはいえ、人には言えない趣味な上に自身の風評の事もある為、友人以外の知り合いに見られない様サングラスをかけ、軽い変装をした上での参加だが。

「さて……光一達にお土産買わないとね」

折角遠出したのだから土産位はと思い、イベント終了後すぐに近場の繁華街へ。

「何にしようかな？　……キーホルダーとかが定番だけど、Ｔシャツとかも良いかもしれないわね？　そうだ。食べ物買って帰って、光一に調理して貰って皆で食べるのも」

「あれ？　木下先輩？」

そこでふと、聞き覚えのある声が。

「え？　……あっ、朝倉さん？」

「はい、朝倉歩美です！　やっぱり木下先輩だ！」

「そう言えば、この近くだったわね……元気だった？」

「はい！　お久しぶりです」

かつて光一が凶王と呼ばれていた頃、それを変えるきっかけとなった少女、朝倉歩美。
昔と比べ背も雰囲気も成長した感はある少女は、昔と変わらない満面の笑顔で優子に抱きついた。

むにゅっ！

「っ！？」
「あの、どうかされましたか？」
「……そうよね、朝倉さんだって昔のままって訳じゃないわよね」
「？」

抱きつかれた際にあたった、明らかに自分よりも大きい事がわかる柔らかな感触に、大いなる敗北を味わう優子だった。

数分後。

「……ごめん。ちょっと時間の流れの残酷さを感じちゃって」
「？　よくわかりませんが、お元気そうですね」
「ええ。アタシもそうだけど、光一も秀吉も元気よ？」
「そうですか……あの、久遠先輩は？」

期待に満ちてる事がわかる程パァッと表情を輝かせる歩美。
優子はやっぱり変わってはないなあ、と微笑みつつ。

「ごめんね、アタシだけなの。ちょっとこの近くに用事があったから」
「そうなんですか……」

しょんぼりした歩美に、ごめんねと謝る優子。

「まだ光一のこと好きなの？」

「はい！　……えっ？　あっ、あの！？」

「……なんだか羨ましいな。その素直な所」

自分を振り返って、どことなく優子は自嘲気味に苦笑した。

もし朝倉さんが引っ越してなくて、文月学園に入ってたら……。

きっと光一の隣はこの子だけの物で、きっとアタシは嫌悪されてたんだろうな。

そう思いつつ。

「……運がいいのか悪いのか、って言ったらダメね」

「え？」

「ねえ朝倉さん、ちょっと話さない？」

「でしたら、泊まりに来ません？」

「ごめん、宿泊先はもうチェックイン済ませてるから」

その辺りは、仕方ない部分があるのか、歩美もとやかくは言わなかった。

「そうですか……ここにはいつまで？」

「明後日までよ？　でも……折角の夏休みで、しかも久しぶりの再会だもん。予定を伸ばして泊まるのも悪くないわね」

「……じゃあ、準備はしてます！　携帯の番号、教えて貰えますか？」

「ええ、良いわよ？」

そうして、携帯電話の番号を教え合って……。

「じゃあちょっと、付き合ってくれない？　光一達にお土産買って帰りたいから」

「はい！」

小動物チックな後輩の、変わらない可愛らしさ。

そんな歩美を微笑ましくも羨ましく思いつつも、先輩としてしっかりとという責任感。

ちょっと昔に戻った気分だった。

「……一部そうじゃないけどね」

「？　あの、私何か悪い事……」

「気にしないで……アタシが勝手に気にしてる事だから、朝倉さんに罪はないの」

「？？？」

さやかは年上だから仕方なく、瑞希も同年代である以上差があるのは仕方がない。

……が、年下に負けると言うのは流石に優子も釈然としなかった。

それから一時間後

「えっと……」

「まあ、普通に考えたらあり得ない事だってわかってるけどね……」

「その……良いんですか？」

「良いのよ。世の中色々あるし、さっきも言ったようにアタシも負

い目はあるからね……」
「……それは、わかりますが」

今年になってからは、あまり連絡が取り合えなかった為折角だから。と互いに思い色々と話し込みつつ、お土産を買ってからの喫茶店にて。

「ねえ朝倉さん、あなたは光一のどういう所に惹かれたの？」
「えっと……優しくて頼りになる所です。確かに周りは怖い人だって言って凶王何て呼んでたし、何かとケンカばかりで怖い人だと思った事も何度もあります。でもあの時、先輩に助けて貰ってからは、一緒に居るとどこか安心してたんです」
「……ウソをつかないって、一種の才能よね」

気持ちにウソをつかない事。
それが出来る後輩と、出来ないどころか気付きもしなかった自分。

その時の場面を思い出しながら、うっとりとしてる後輩を眩しく感じる優子だった。

「でも木下先輩だって」
「え？」
「あの時、皆が怖がってた久遠先輩に、１人だけ注意してましたよね？」
「え？　ええ、そうね。幼馴染だったし、あいつがああなった事情を知ってただけに、放っておけなかったから」
「それで十分じゃないですか？　私には怒ったりなんて出来なかったですし、久遠先輩を怖いって思った事もありますから……その、そんな事が出来る木下先輩もすごいって、今でも憧れてるんです」

優等生として褒められる事も憧れられる事も、珍しくはないが……。
そう言う事を改めて言われると、優子もどこかこそばゆかった。

「そっそう？　……その、ありがとう」
「あっ、もうこんな時間！」
「え？　あっ！　ごめんなさい」
「いえ、私も楽しかったです。ではまた、改めて！」
「ええ」

歩美が帰って行くのを見送り、自身も荷物を持って宿泊先へと歩を進める。

「今でも、か……」

意外な再会だった。
決して意識してはいなかったが、来てよかったと思う。

……が

「……見られなくてよかった」

ふと、自分の荷物に目を向ける。
そこには本日のイベントの戦利品があり、とてもあんな純真無垢な少女に見られていいものではない。

……内心、歩美に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

第二百一問　閑話　愛子と秀頼の仲良し大作戦！（Ｂｙ　光一）　後篇

「お待たせ」
「……すごい恰好だな？」
「興奮したカナ？」
「もちろん。秀吉がいなかったら今すぐ襲いかかりたい位」
「お主では逆に襲われるだけじゃろ」
「……傷つくなおい」

Ｔシャツに短パンと、目のやり場に困る格好の愛子。
当然の様に光一の発言にツッコミを入れる秀吉に、少々傷ついた光一だった。

「まあいいや……メシは出来てるけど、どうする？」
「じゃあ光一君達、お風呂入ってきたら？　その間、秀頼ちゃんと遊んでるから」
「そうだな。それじゃ……」
「きゅ～ん」

ふと秀頼に目を向けると、エサ入れを咥えて引き摺っていた。
秀頼のお腹空いたの意思表示である。

「ホント賢いね？」
「はっはっはっ！」

エサ入れを置いて、そこでお座りしてねだる様に尻尾を振って光一を見つめる秀頼。

「愛子」

「え？　うん」

愛子がドッグフードの保管場所へ行き、ドッグフードを取り出す。
それからエサ入れに……。

「あっ、ちょっと待って。愛子、何か芸をさせて？」
「え？　うん。秀頼ちゃん、お手」
「……（くんくん）……わんっ！」

愛子が差し出した手の匂いを嗅いで、秀頼は愛子の手に自分の前足を乗せた。
それから愛子の持ってるドッグフードの箱を見て、期待に満ちた目を愛子に向ける。

「なんだか、ちょっと感激かな？　……ご飯が目的なのがちょっとあれだけど」
「ま、そんなもんだろ。可能性がないよりはましだと思うけど？」
「……そうだね」

ザラザラと音をたて、秀頼のエサ入れにドッグフードを入れてやる愛子。
入れ終わったのを見計らって、それに顔を埋め食べ始めた。

「じゃあ愛子、冷蔵庫にアイス入ってるから食べていい。秀吉、一緒に入るか？」
「うむっ。“男同士”裸の付き合いじゃ！」
「？　どうして男同士を強調してるの？」
「秀吉は秀吉で、愛子の一大決心を見習ったってことだよ。さて、風呂入ってくる」

そう言って、光一は秀吉を伴い風呂場へ。
エサをパクついてる秀頼をそっと撫でようと……

「……？　……（がつがつ）」

秀頼がちらりと愛子を見て、再度食べ始めた。
愛子が恐る恐る秀頼の背を撫でてみても、秀頼は構わず食べ続けている。

「……ちょっとは気を許して貰えた、かな？」

些細な事だけど、一歩進めた事に愛子は喜んだ。

一方、風呂場にて。

「のう、光一よ」
「ん？」

現在光一は頭を洗っており、秀吉は湯船につかっていた。
秀吉と一緒に風呂は、最早定番となっていたが……。
どうにも落ちつかない光一だった。

「秀頼と工藤、上手く行くのじゃろうか？」
「行くだろ。愛子もやる気出してるしな」
「ふむっ……」

頭を洗い終え、ざばっと頭に湯をかけ秀吉に交代を促す。

「……てか秀吉、考えたら愛子の後風呂だよなこれ？」
「光一よ、思考が変態じみておるぞ？」
「そうじゃなくて、少しは思う所ないのか？」
「ワシは男らしく見られたいのであって、変態と見られたい訳ではないのじゃ！」

パシっ！

「っ！？」

秀吉がツッコミのつもりで出した手が、光一の背の“傷跡”に当たったとたん、光一が身体をビクンと震わせた。

「あっ！　すっすまぬ光一！　大丈夫かの！？」
「……いっ、いや。大丈夫だ、元々錯覚みたいなもんなんだし」
「……少し深呼吸するのじゃ」

元々光一は傷跡に触れられる事に、嫌悪感を持っていた。
軽く触れる程度なら我慢は出来るが、今の様に直による強い衝撃にはトラウマを掘り起こされたかのような錯覚にとらわれる。

高校に入るころには改善はされていたが、学年試召戦争以来酷くなっていた。

「……どこまでも」
「光一……」
「いや、悪い。」

一方、愛子は……

「ホント賢いね」
「きゅ～ん？」

エサを食べ終わった秀頼は、エサ箱を咥えて元の場所へ戻してしまった。
それから主人が居ないため、トコトコと愛子のそばへ寄ってお座り。

「ちょっとは馴染んでくれたかな？」
「……？」
「あーもう、なんで秀頼ちゃんは動作の一つ一つがこう、可愛いのかな？」

そっと手を秀頼の両脇に差し込むと、ひょいっと抱きあげようとした。
……が、秀頼はするりとそれを抜けて、少し距離をとってしまった。

「……念願の抱っこには、まだまだ遠いのかあ」
「？」

まだまだ欲をかけば身を滅ぼす、の段階だった。

がちゃっ！

「……お待たせ」
「わんっ！」
「わっと」

風呂上がりの光一と秀吉が姿を現すなり、秀頼は光一に駆け寄り足元をくるくると回り始めた。

のぼせたのか、光一はよろよろとソファーに歩み寄り、どっかと寝込んでしまう。

「どうしたの？　のぼせた？」
「……ちょっと考え事しててな」
「ボクの浸かったお風呂だから、興奮したとか？」
「……」
「そこで黙るでない！」
「意識するとこっ恥ずかしいモノなんだよ」

秀吉がやれやれと、冷蔵庫から自分のと光一の飲み物の準備を始める。
一応現在はリビングはクーラーが効いてはいて、光一も少し楽になる。

「きゅ～ん」

そこで秀頼が、ソファーに飛び乗って光一の上に乗り、胸板の上でコロンと横になった。

「良いなあ、光一君」
「じゃの。ワシもそこまで懐いてもらえないのじゃ」
「……復活したら降ろす」
「あっ、ちょっと待って。これは絵に残したいから」

そう言って、いそいそと携帯カメラを取り出して撮影。
……しようとしたら、秀頼は逃げるように下りてしまった。

「あれ？」
「どうやら撮影されるの嫌いらしいな」

「残念……」

光一がゆっくりと起き上がり、秀吉が用意してくれた飲み物を飲む。
それから夕食の準備に入って、お食事。

「今日はコロッケなんだね」
「俺からの労い」
「ありがとう」
「……やれやれ」

第一日目終了。

第二百二問　閑話　とある夏休みの一日

秀吉も愛子も部活で出ていて、現在光一は1人、買い出しに出ていた。

「ふぅっ、たくさん買ったぞ秀頼」
「わんっ！　わんっ！」

3人分ともなれば、作るにしても買うにしても大変だった。
しかし光一としては、テレビしか知らない家族と言う雰囲気に触れているため、苦にならない。
むしろ食事を作るのが楽しかった。

「しかし、あっついな。どっかで涼んでいこうか？」
「わんっ！」

秀頼の了解も経て、いざ出発。
その目的地の最近行きつけになってる、ペットＯＫの喫茶店にて。

「コーラフロート1つ。それとこいつにミルクお願いします」
「わんっ！」
「はい。コーラフロートとミルクですね？」

注文を終えたウエイトレスを見送り、光一は秀頼を抱き上げる。

「飯は帰ってからだけど、良いか？」

「わんっ！」

「あら、久遠君？」

ふと声をかけられた先には……。

「あれ、高橋女史？　どうしてここに？」

「いえ、今日は休みなので、ここで昼食を取ろうと」

恐らく教本や参考書の類だろう、本を入れた紙袋を持った学年主任、高橋洋子。

休みだと言うのに、仕事熱心な事でと光一は内心でねぎらう。

「きゅ～ん？」

「あら？　その子はオカルト召喚大会の時、木下さんが連れていた」

「ええ。ちょっと前から俺が飼ってる犬ですわっ、とっ、コラ秀頼。くすぐったいよ」

「きゅ～ん（ぺろぺろ）」

蔑ろにされてるのが面白くないのか、秀頼が光一の頬をなめ始めた。

その様子を見た高橋女史は……。

「……可愛い」

そんな秀頼に見惚れていた。

「……高橋女史？」

「はっ！　……こほんっ。飼い犬とのスキンシップも結構ですが、休みといえど気を抜かず、勉学に励んでください」

「あっ、はーい」

「それでは、私はこれで。君も、ご主人様にあまり迷惑をかけてはいけませんよ？」

そう言って頭を撫でようとした高橋女史の手から逃げるように、光一の手からすり抜けて光一に胸めがけて飛び込む。

慌てて光一が秀頼を抱きとめ、所在なさげに手をそのままにして唖然とする高橋女史。

「……」

「……あーっ、高橋女史？　すみません、秀頼人に懐かない子なんで」

「あっ、あら。そうだったんですか……」

どことなくほっとした雰囲気だった。

「……あっ、あの、久遠君」

「誰にも言うなってんならわかってますよ？」

「たっ、助かります……ではこれで」

と言って、別テーブルへと去ってしまった。

「……意外、でもないか」

「きゅ～ん？」

「お待たせしました。コーラフロートとミルクです」

注文の品が来たので、光一はコーラフロートを受け取り、秀頼は目の前に出されたミルクに舌を伸ばし始めた。

それから家に帰り、昼食の準備。
愛子と秀吉が帰ってきてからは、昼食後……

「……愛子もタフだな」
「部活のある生徒は皆こうなの」
「やっておらぬワシが言えた義理ではないが、そう言う事じゃ」
「……へーい」

宿題を愛子に見て貰う事に。

「きゅ～ん」

その間秀頼は、相手にしてくれる人が居ないので、ボールで遊んでいた。

時は過ぎ、休憩をはさんでの現在の時間は5時。

「それじゃ、ここまでにしよっか」
「「……（ぐで～っ）」」
「もうっ、だらしないなあ」
「きゅ～ん」

普段勉強なんてしないだけに、秀吉と光一は突っ伏していた。
そこで秀頼がテーブルに飛び乗って、光一に駆け寄り……

「きゅ～ん（ぺろぺろ）」

頬をなめ始めた。

「ん？　ああっ、ありがと秀頼。ちょっと元気出た」
「わんっ！」
「んじゃ、ちょっと秀頼の散歩でも……」
「ワシは風呂の準備しておるから、2人で行ってくるのじゃ。正直居心地悪いぞい」
「あっ……すまん」

それから、散歩での行きつけの公園。

「わんっ！　わんっ！」

退屈だった時間を払拭するように、リードをぐいぐいと引っ張る秀頼。
そんな秀頼を見て、苦笑する光一と愛子。

「秀頼ちゃん元気だね」
「俺としても嬉しいかな？　元気なのが一番……やばっ！」

ふと光一は、ある人物を見つけた途端秀頼を抱きかかえ、愛子に促して隠れた。

「ちょっ、光一君。どうしたの？」
「しーっ」

「……なんで朝からナンパに勤しんで、たった1人も近づかないんだ？」
「お前がモテないクセに、久遠の真似して両手に花なんて狙いやがるからだろ」

ＦＦＦ団会長事、Ｆクラスの須川亮が愛犬のドーベルマンを連れ現れた。
その近くには、Ｆクラスの君島博が悪態をついている
今見つかれば、１００万％ろくな事にならない。

「なんだと君島？　お前だって夏休みに入ってから、何度撃沈したと思ってる！？」
「ちっ、違う！　あれは断られた訳じゃない！　ただタイミングが悪かっただけだ！」
「俺だってそうだ！　決してモテない訳じゃない！」

「きゃあああああああっ！　チェリーちゃんに何するのよこの変態犬！！」

「……今のうちに帰るぞ」
「……うっ、うん」
「きゅ～ん？」

短い散歩だった。

それから……。

「はぁっ？　予定が伸びる！？」

帰ってきてすぐ、優子からの電話。
それは予定が伸びて、帰りが遅くなるとの事だった。

『そうよ』

「お前、そこまでして……」
『違うわよ！　それがね、こっちで……』

「えっ！　朝倉が！？」

その近くで、秀頼と遊んでた愛子は疑問符を浮かべる。

「朝倉じゃと！？」
「ねえ木下君、朝倉って？」
「光一に好意を寄せておった後輩じゃ。ワシにとっても妹の様な存在で、今は遠い所に引っ越してしまったのじゃが……どうやら偶然の再会の様じゃな」
「好意？　妹？　……ねえ、どういう事？」
「あーっ……それは、光一が凶王と呼ばれておった頃何じゃが」

「へえっ、そうなのか。それじゃ、朝倉によろしく言っといてくれ」

期限よさそうに電話を切った光一。

「随分と嬉しそうだね？」
「え？　まあその、な……話さなきゃダメ？」
「……出来れば教えてほしいよ」

光一は自分の過去の話をするのが大嫌いである。
愛子としては無理強いはしたくないが、のけものも面白くはない。

「ごめん」
「いや、良い。朝倉は俺にとっても大きい意味がある子だし、愛子にも知ってもらいたい」
「大きい意味？」

「ああっ……始まりは俺が凶王って呼ばれてた頃に、ケンカのついでで一人の少女を偶然助けた事からだ」

第二百三問　閑話　悪鬼羅刹と超人の会合

ドドドドドドドドドッ！！

「オネエサマァァアアアアアアっ！！」

「……雄二、島田とどこへ行くつもり？」

文月の町内を、釘バットを持った翔子と人外化して四足歩行の美春が、雄二と美波を追っていた。

最初は別々だったのだが、途中で合流した事で妙な流れとなってしまい……

結果として、駆け落ちと追跡者は認識してしまっていた。

「島田、お前はどうして追われてるんだ！？　よりにも寄ってこんな時に！！」

「こっちのセリフよ！　街を歩いてたらいきなり美春が現れて、路地裏に連れて行こうとするから逃げてるのよ！！　大体坂本もいつまで霧島さんから逃げるつもり！？」

「うるせえ！　何としてでも逃げきってやる！！」

「ゴリラアアアアアア！！　ハクセイニシテヤリマスワァァァアアアアアア！！」

「……今日と言う今日は、雄二に自分の立ち位置を理解させる」

数十分後

「オネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサ

マオネエサマ！」
「……雄二、どこなの？」

少しはずれにある森林公園にて。
そこで２人はターゲットを見失い、彷徨っていた。

がさっ……！

「行ったか……」
「……まずは一安心ね」

「何をやっている？」

ふと聞こえた声に、雄二と美波は圧倒的な捕食者の唸り声を聞いたような、そんな悪寒が走った。
そっと声の主に目を向けると……

「……大神、白夜！？」
「久遠の、お兄さん？」

自身達の友人（？）の実の兄に当たり、３年首席として学年試験召喚戦争において２学年を追い詰めた天賦の超人、大神白夜。
その彼が木に背を預け、リンゴを齧りながら読書をしていた。

「確か、２－Ｆの坂本雄二と、あと一人は……確か、坂本雄二の愛人だったか？　人気がないからと言って昼間から盛るな。迷惑だ」
「「違うっ！！」」
「大声を出していいのか？」

白夜のツッコミで、美波と雄二は口を噤んだ。

その様子に呆れたように、白夜は表情は変えないがため息をつく。

「相変わらず、バカ騒ぎを起こすのが好きなのだな？」
「ウチをアキや久遠と一緒にしないでください！」
「そうだ！　あんなバカどもと同類だなんて、誰が認めるか！」
「私から見れば大して変わらん。まあ吉井明久の方が価値があるという点では、最もな話だがな」
「けっ！　あんな使えない捨駒同然のバカ相手に、たかがまぐれ程度で随分な入れ込みようだな」
「ふんっ……まさかここまで矮小な男になり下がっていたとは、思わなかったぞ」

雄二はその物言いに腹を立てるが、白夜はさして気にも留めていないどころか、一向に本から眼を離していない。
雄二も白夜とやりあって勝てるとは思っていない以上は、黙るしかなかった。

「私に言わせればな、本当に使えない者とは捨駒程度にもならない者だ。そう言う意味では、お前は吉井明久を重宝しているという事になるな」
「まあそう言われれば、あのバカは単純だから犠牲にするにはもってこいだ。そう言う意味じゃ、明久にも価値があると言う事か。成程」
「……坂本雄二、口の軽い者は早死するぞ」
「こんな事知られて、何の意味があるってんだ？」
「だと良いがな」

雄二は怪訝に思い白夜の表情を伺うが、その冷血さが漂う鉄仮面からは全く読めない。
白夜はそれに気づいてはいても、伺えるものなら伺って見ろと言わ

んばかりに、手に持っている本に目を向ける。

「……相変わらず、得体のしれない奴だな」

「神に選ばれた存在たるこの私を、堕落した貴様ごときが測れる訳があるか」

「あの、よくそんな事を堂々と言えますね？　恥ずかしくないんですか？」

「否定が出来る要素があるのか？」

翔子を上回る成績、学年試験召喚戦争においてたった1人で2年の大半を壊滅させた実力と手腕、学年をまとめ上げたカリスマ。

そして何より、鉄人と互角以上の戦いを成し遂げた上に、武器を持った光一を無傷で瀕死に追い込んだ強さ。

「私に恥ずべき個所はない」

「……究極のナルシストだな。だが事実だから余計にすごい」

「オネエサマオネエサマオネエサマオネエサマ！！」

「……雄二、雄二、雄二、雄二！」

「「っ！！？」」

雄二と美波がビクッと身体を震わせ、近くの茂みに飛び込んだ。

四足歩行の美春の上に、凍りついたかの表情の翔子が釘バットを持ってまたがっていたが、白夜は気にも留めていない。

その異形の騎兵は、白夜の前を駆けて……通り過ぎて行った。

「……」

白夜はリンゴをかじり、本のページを開く。

「……良く平然としていられるな？」

「ほっ、本当ね？」

「貴様らは本当にバカだな。あの失態と同じ轍を踏むなど、誰がやるか」

たかがあれだけで？　と、雄二と美波は思った。

そこで白夜は本を読み終えたのか、本を閉じて納めると初めて雄二達に気を向ける。

「坂本雄二、先ほど通った者の片方はお前の奥方だったな？」

「俺は独身だ！」

「成程、今の関係に不満があると……ならばなぜ逃げてばかりで、突き放さない？」

「……そんな事、アンタにゃ関係ないだろ！」

白夜は内心で成程なと頷いた。

「情と目的、お前にとってどちらが大事か……よく考える事だな」

「……なんでそんな事を言いやがる？」

「何、かつては並び称された者への賛辞だ。気にする必要がなければ気にしなくていい」

たちあがって本などをしまい、帰り支度を始める白夜。

その白夜を見て雄二は……

「アンタは目的を選んだ……ってわけか？」

「ああ、そうだ」

「……だからって兄弟相手に、あそこまでやります？」

「お前に言われる筋合い等無いが、情に価値など無い。人は人という定義に当てはまろうとするから弱い……だから私は、光一の背に傷を刻んだ。心を捨てるためにな」

こいつは、あの時翔子を見捨てた俺……いや、そう表現する事すら生ぬるい程だ。

……雄二の直感が、そう宣告していた。

「オネエサマオネエサマ～！！」

「……見つけた！」

「げっ、翔子！？」

「みっ、美春！？」

雄二と美波が駆けだし、その少し後突風が引き起こされた。

土埃を払い落とし、雄二達が去った方向を一瞥すると……。

「……どこまでも間抜けな男だな。まさかここまで有益な情報が提供してくれるとは」

第二百四問　閑話　光一と始まりと過去の話（前書き）

ちょっとした近況ですが、久々にゲームセンターに行きました。
そこで翔子のフィギュア（エクストラバニー）が手に入りました。

第二百四問　閑話　光一と始まりと過去の話

出会いは些細な偶然から。

時は光一が中学2年の、とある日の人気のない路地裏の少し開けた場所。

今日も今日とて、ケンカを仕掛けてきた相手を返り討ち。
気絶している相手のポケットから財布を取り出し、金を抜いて財布を捨てる。

「……ちっ」

つまらんと言わんばかりに、気絶してる相手の頭を蹴飛ばした。

「……帰るか」

そう言って、光一は帰り支度を始め……ふと、暗い細道から聞こえてくる声を聞きつけた。
何だと思い、光一はカバンにしまった3本の短い棒を再度取り出して、それをつなげて1本の棒に。
それを右手に持ち、スタンガンを取り出すと……

「あははっ！　ほら、逃げろよ！」
「当たっちゃうよ！　ほらほら！」

手がベルトで縛られている少女に、石を投げている数人の女子に近づく。

「なんか面白そうな事やってんな？」
「あぁっ？　何よ、邪魔なんだけ……あれ？　凶王久遠！」
「……財布とそこの女を俺に渡すのと病院送り、どっちがいい？」
「ひっ！」

光一が睨むと同時に、全員が財布を捨てて逃げ出した。
光一がその財布を拾ってカバンに入れ終えると、ふと手を縛られている少女に目を向ける。

「……」
「ひっ！　……あっ、ああっ……」

光一を見て、少女はボロボロと涙を流し、声にならない声を上げ始めた。
少女も凶王久遠の名は知っており、それが今自分の目の前にいる事が少女を恐怖に陥らせていた。

「……」

その姿を見て、光一は……。

「……」
「ひいっ！　やっ、やめて……許して……」
「静かにしろ」

そう言って辺りを見回し、落ちていたガラス片を手に取った。
あれで切られると思ったのか、少女は必死に逃げようとするが逃げられない。

少女は目をつむり、光一から必死に目をそらそうとする。

ガリガリッ！　ブチっ！

「きゃっ！」

何かを切る音の後に、少女は逃げる勢いのままに倒れ込んだ。
少女は身体の痛みに涙を流すも、ベルトで拘束されていた筈の手に目を向け……。

そのベルトが、切られているのを見て目を見開いた。

「あっ、もうこんな時間か……そろそろ帰るか」
「……あっ、あの」

少女に目もくれず、光一は棒をバラしてスタンガンと一緒にカバンにしまうと、少女に目もくれず帰り始めた。

「……」

その次の日。

「光一！　アンタまたケンカしたでしょ！？」
「うるせえ！　何しようが俺の勝手だっつってんだろうがブス！！」

今日も今日とて、光一と優子は口ゲンカを繰り広げていた。
周囲は巻き添え（と言うより光一）を恐れて、廊下には人っ子一人見えない。

「あっ、あの……」

……筈だった。

「ん？　あれ、お前確か……」

「はい。昨日はその……」

「光一！　アンタまさか下級生に手を出したの！？」

「だから俺が何しようが勝手だっつってんだろうが、内面オバハンのブスが！！」

「なっ！　よりにも寄ってオバハン！？」

時は過ぎ、昼休みの屋上にて。

「……なるほどね。それで、光一にお礼を？」

「はっ、はい……その、先輩のおかげで、あの人たちが近寄らなくなったから」

「へえっ……どういう風の吹きまわしよ？」

「何しようが俺の勝手だっつってんだろ」

「それで、その……」

少女はおずおずと、光一に１つの包みを差し出した。

「？　何これ？」

「お弁当です……私、料理が得意だから」

「……俺に媚売って、いじめられないためか？」

「光一！」

「違います……その、理由はなんでも、助けてくれたお礼です」

「……」

光一はひったくる様にその包みを手に取ると、開いて食べ始めた。

「ちょっと光一！」

「……」

優子を無視して、黙々と食べ続ける光一。

全部食べ終わると、弁当の蓋を閉じて包んで少女に手渡す。

「美味かった」

「あっ、ありがとうございます！　ではその……これからも、作ってもいいですか？」

「はっ？」

「その……先輩は聞いた程悪い人じゃなさそうなので、出来れば仲良くしたいんです」

「……お前、自分が何言ってるかわかってるか？」

「あっ、私は朝倉歩美って言います」

「聞けよおい！！」

「てな感じから」

「それから、ワシを含めて４人で昼の相伴に事となったのじゃな。懐かしいのう」

「ふーん……そうなんだ。光一君、その頃は今からじゃ想像できない位荒れてたんだね？」

「その頃の俺、人を信じたりって事はもう出来なかったからな……誰も助けてくれないなら、自分で自分を救ってやる。不幸なら幸福を奪ってやるって感じで」

「……つくづく思う事だけど、光一君って不遇な人生送ってるよね」

愛子の中では、行動は過激派筆頭の名に恥じない好戦的で活動的。
しかし面倒見は良く、必要もなく人と敵対したり攻撃したりはせず、頼りになる男性。

だったが、その光一がかつてはそこまで荒れてる事に、驚きを隠せなかった。

「まあそうだろうな。誕生日祝ってもらった事ないし、授業参観来た事ないし、俺を忘れて外食にいきやがって、残飯食った事も一度や二度じゃないし、それに……」
「もういい、もういいよ！　……光一君がお兄さんをあそこまで憎んでて、お義母さんに対しても冷たかった理由、なんとなくわかるよ」
「んで、それから……」

閑話休題。

「って訳」
「ふーん……光一君が喜ぶ訳だね」
「光一にとっては、自分を大きく変えた恩人でもあるからの」
「そうなんだ。もしまだその朝倉さんがここに居たらさ、光一君と付き合ってたか、今の関係の一番だったかもね」
「……どうだろうな？」

ＩＦの話でも、あまり想像が出来ない光一だった。

「でもさ、わかった事はやっぱり、人は人と繋がらなきゃ、生きてはいけないって事だな……明久と一緒にバカやるのも、雄二とあれこれ衝突するのも、秀吉の面倒見るのも、ムッツリーニとあれこれ話したりするのも、ＦＦＦのバカどもとやりあうのも、もう今の俺

からは切り離せない大事な要素だ。愛子や優子の事は特にな」
「っ！　……もっ、もう！　不意打ちは反則だよ……」

「……秀頼よ、共に遊ぶのじゃ」
「きゅ～ん？」

秀頼が居て良かった。
心からそう思う秀吉だった。

第二百五問　閑話　如月グランドパークの一時　前編

「いやー、いい天気だな」

優子が帰ってきて、いざ如月グランドパークへと皆で遊びにやって来た。
メンバーは光一に優子に愛子、明久に瑞希に秀吉、そして……

「今日は楽しもうね、ムッツリ君」
「……（コク）」

最近はそれなりに仲良くなった、ムッツリーニと島津さやか。
そしておなじみ、坂本雄二と坂本翔子の坂本夫妻

「俺は独身だ！！」
「いきなり何言ってんだ雄二？」
「いや、何か不本意な事を言われた様な気がして……」
「……私にとっては良い響きな気がする」

それから……

「……秀頼ちゃん、久しぶり」
「お久しぶりです」
「……（ぷいっ）」
「なんだ、連れてきたのか？」
「うぅ～っ！」
「相変わらず可愛げのない犬だなおい」

ケージに入った秀頼である。

翔子と瑞希にそっぽを向いて、雄二に唸るのはお約束。

「それはさておき、チケット配るぞ」

雄二が処分すると大変な上に、明久の場合はペアチケットの存在がバレたら大事なので、全部光一が預かっていた。

「よこせ！」
「はい、代表達の分」
「……ありがとう」
「っておおおいっ！！」

……が、坂本夫妻の分は優子が保管していた。

「すまんな。優子がお前らの分預かるって、無理やり……」
「光一、いつか絶対殺すからな！？」
「はいはい。妾の責任は俺の責任か？　わかりやすい奴だな」
「うぅ～っ！　わんっ！　わんっ！」

怒鳴る雄二に向かって、ケージ入りの秀頼は吠え始めた。

「まあ良い。遊びに来たんだし、もういざこざはなしにしようぜ？　疲れるだけだ」
「……そうだな」
「わんっ！　わんっ！　うぅ～っ、わんっ！！」
「秀頼もやめろ」
「……きゅ～ん」

これ以上のいざこざは無意味だ。
という光一の思惑を読み雄二はしぶしぶ賛同し、秀頼も主人の言う

事ならと従った。

元々光一としては、雄二の自由が嫌いなのであって、幸不幸をとやかく言う気はない。

「で、どうする？　別れて遊ぶか一緒に遊ぶか」

「あっ、あたし達は別行動良いかな？　色々とやりたい事あるし」

「……色々（ぶしゃあああああっ！）」

「なんだかあたしも慣れてきたかな？」

鼻血を吹きだし倒れたムッツリーニに、動じることなくトレードマークのビン底メガネにくいっと手を当てるさやか。

ポケットからティッシュを取り出し、それ手なれた動作でムッツリーニの鼻に詰め、輸血の準備も終わらせる。

体勢的には、さやかの膝枕で。

「完璧に姉さん女房だな」

「……否定が出来なくなりつつある」

「前からだろ。それじゃ、邪魔しちゃ悪いからこれで」

と言って、さやかとムッツリーニは別行動。

……と言うより、ベンチで膝枕となった。

「……」

「まあ待とうな霧島、ここで痛めつけたら遊ぶ時間なくなるぞ？」

「……わかった」

ちなみにそれを羨ましそうに見てた翔子に、光一は予期できた為止めておいた。

「？　なんだ光一、お前にしては珍しい」
「海は結局ごたごたして、優子に愛子と特に進展があった訳じゃないんでね。だから今日こそはという意気込みを込めて援護してやったって訳」
「……わかったよ。利害の一致を提示された以上、今日は何もしねえ」

しぶしぶと言う雄二に、光一は呆れたようにため息をつく。
秀頼入りのケージを愛子に手渡すと……。

「そういう所がお前のつけいる隙なんだよ。大事になる前に直せ、巻き添えはごめんだ」
「けっ！　そういうスカした態度で、敵ばっか作ってる奴にだけは言われたくねえな」
「「……（ガンのくれ合い）」」

「あの、明久君。その……一緒に、メリーゴーランドに乗ってくれませんか？」
「え？　@＊＃$%&%？（どうして僕と？）」
「明久よ、言語が摩訶不思議になっておるぞ。ふむっ……ワシとしては、ジェットコースターなど絶叫系が良いのう。こういうアトラクションは、男としての見せどころ満載じゃ」
「……瑞希も頑張ってる。私も頑張らないと」
「どうしよっかな？　ねえ秀頼ちゃん」
「きゅ～ん？」
「もう、いい加減にしなさいよ2人とも！」

結局は、全員で遊ぶ事になった。

入場をすませ、いざ如月グランドパークへ。

「あの、明久君……その」
「ん？　どうかした、姫路さん？」
「えっと……手を、ですね？　あの……」
「？」

「やれやれ……」
「？　手ぇ出さないのか？　お前の事だから、てっきり明久は別だっつって変な事にすると思ったんだが」
「明久の幸福はムカつくが、流石に頑張る姫路を邪魔する訳にはいかねえよ」
「ウソつけ。姫路利用して明久に攻撃仕掛けるクセして」
「だからやめなさい！」

優子の一括で、光一と雄二はバツが悪そうな顔になる
愛子の手にあるケージでは、その様子を見て秀頼は首を傾げた。

「ん？」
「？　どうした光一？」
「静かに」

光一はふと、何か妙な違和感を感じ辺りを見回す。
一応スタンガンを始め、携帯出来る武器は一通り持ってきてる為、懐に手を入れつつ。

「……？」
「おい光一、まさかＦＦＦ団か？」
「いや……気の所為か？」

と言って、警戒態勢を解いた。

「そう言えばＦＦＦ団じゃが、学年試召戦争のすぐ後に大量脱退があったらしいのじゃ」

脱退した理由としては、大神白夜による弾圧を受けたくないからである。

ちなみに根本もＦＦＦ団を抜け、現在は大神白夜の威光を利用するべく、彼に取り入るために“無意味な”奮闘を続けていた

「……なのにナンパに勤しんでやがったのか、あのバカ共？」

「はっ？」

「いや、こっちの話。いや、ＦＦＦ団じゃねえな……まあ気にするまでもないか」

そうポツリと呟いて、ガイドブックに目を通し始めた。

「で、どうする？」

「でしたらメリー……」

「ここはジェットコースターじゃ！」

瑞希の主張を押しのけて、秀吉が珍しく強引に意見を提案する

「なんだ？　明久の隣にでも座って“きゃーこわーい”とでもやりたいのか？」

「お主絶対わかっててワザと言っておるじゃろ！？」

「冗談だよ。じゃあ秀吉の要望にこたえて、ジェットコースターにするか。席は当然明久の隣で……」

「冗談と言ったのではないのか！？」

一応口ではそう言っていても、内心では秀吉の努力は応援してはいた。
が、流石にやりすぎと思ったのか、謝ろうとして……

「きっ、木下君！　明久君の隣はじゃんけんで決めるべきです！」
「待つのじゃ姫路、ワシは別に……」
「では最初はグーです！」

その機会が潰された。

「じゃあ優子、ボク達もね？」
「そうね。でもじゃんけんで決めるのは、先行後攻にしない？」
「そうだね」

それを見て、愛子と優子もそれに倣って和気藹々とじゃんけんを始めた。
光一はそんな彼女たちに、言い様のない嬉しさを感じている。

「……雄二」
「いやだ！」
「……怖いなら手をつないであげる」
「それは男のセリフだろ！　そうじゃなくて、俺はお前と乗りたくないんだ！」
「……わかった。じゃあパンツを脱いで」
「待て！　なんでそうなる！？」
「……ジェットコースターに乗らないなら、私が雄二の上に乗る」
「それでなぜそうなる！？」
「……待ってて（ぽっ）」
「わかった、乗る！　ジェットコースターに乗るから愛おしげに腹

を撫でるな！！」

こっちは以下同文。

「扱い悪いだろ！」

「さっきから何言ってんだお前？」

「きゅ～ん？」

「……いや、なんとなく」

第二百六問　如月グランドパークの一時　中編

「じゃあお願いします」
「きゅ～ん……」
「大丈夫、すぐ戻るから。な？」

秀頼を係員に預けて、いざジェットコースターに。

席順は光一と愛子が隣となり、結局明久は瑞希と。
後は当然の様に、木下姉妹と坂本夫妻。

「……怖いです」
「☆@＊＋＃¥＝～＆％（落ちついて姫路さん）」
「いや、お前が落ちつけ。腕に姫路の胸が当たって混乱するのは無理もないが」
「……いつもの事だが、良くわかるなお前？」

乗る前から、瑞希は怯えながら明久の腕をひしっと抱きしめ、明久はその腕に当たる柔らかな感触にパニック気味。

「なあ秀吉」
「光一よ、いい加減にせぬと」
「違う。ふと思ったんだが、ジェットコースターでどうやって男らしさを証明する気だ？」
「それはもちろん、堂々とした姿を見せてじゃな……」
「見てなきゃ意味ないだろ。まあ終わった後、“大したことはなかったの”と堂々と言ってのければ、話は別だが」
「成程、感謝するぞい光一」

光一の脳裏には、足がくがくになって明久に支えられるという光景が予想出来ていた。
……が、目の前の秀吉があまりにも喜ぶ為、これは胸の奥底に秘めておく事に。

「ねえ光一君、ボクもやってあげようか？　胸がないから残念かもしれないけど」
「こういうのはやってくれる事の方が大事だろ。喜んでお願いする」
「うん。じゃあ次のアトラクションの時は優子と交代だね」
「そうよ。一緒のときは独り占め厳禁って約束なんだから」

優子と言葉を交わした上で、光一の腕に抱きつく愛子。
なんとなく自分にこういう相手がいるんだなと、今更ながら実感する光一。

「……雄二」
「いでででで！　こら、関節とるな！」
「……じゃあ」
「待て！　なぜ掌を胸に押し付けようとする！？」
「平和な光景だな」
「おい、俺をその光景から外すな！」

平和だった。

そして……

カタン……カタン……

「あっアアアアア明久君！？」

「だっ、大丈夫だよ。ほら、僕のでよかったら手をつないで？」
動揺する瑞希に手を差し伸べる明久。
瑞希は目と一緒に明久の手を握りしめ、目をつむる。

「光一君は、こういうの大丈夫なの？」
「いや、そこまで弱くないって。それに良く窓から飛び降りたりしてるんだから、それに比べたら」
「……よく無事だよね？」
「受け身はもちろん、衝撃逃がす着地の仕方は体得してるからね」

どちらかと言うと、光一は鍛えてもどうにもならない虚弱体質である。
最も、武器を使えばＦＦＦ団を退けるほど強いが……。

「よく言われるけど俺、運動は肉体的には苦手だけど、感覚的にはそうじゃない。まあ単純な身体機能じゃ中……同年代相手じゃ勝てる自信はないけどな」
「……今中学生って言おうとしなかった？」

光一は顔をそらした。

「……雄二」
「お前が動じる姿が想像できない」
「……雄二」
「しつこ……っておい、まさか本当かよ！？　ちっ、しゃあねえ」
「……嬉しい」

震えてる翔子の手を、仕方ないと言わんばかりに握ってやる雄二
震えつつも、翔子は握られた雄二の手に浸り始める証拠。

「いっ、意外と高さがあるのう……」
「男らしさをアピールするんじゃないの？」
「そっそうじゃな。よし、ここは堂々とぉぉおおお！？」
そこでジェットコースターが下りに入り、秀吉は決意をくじかれた。

ジェットコースター終了後。

「わんっ！　わんっ！」
「待たせちまったな、秀頼」
「あははっ、思った以上にすごかったね？　ボクまだ足ガクガクだよ」
「ほっ、本当ね……」

優子と愛子が背にしがみついてる状態で、平然と秀頼を係員から返して貰う光一。
ちなみに周囲は、女性2人にしがみつかれている男1人の光景に、少々顔が引きつっていた。

「……秀吉、大丈夫？」
「なんの、心配いらんのじゃ！」
「……いや、顔は平然としてるけど、足ガクガクだよ？」

そのちょっと離れた先では、腰が抜けた瑞希をおぶりながら秀吉を支える明久が。
いかに演劇部のホープといえど、許容量を超えた動揺を身体的には隠せないらしい。

「ったく、見せつけてくれやがって」
「……じゃあ私たちも見せつける」
「見せつけない！　……が、今だけは我慢してやるよ」
「……嬉しい」
「……ちっ」

ちなみに雄二も、顔色の優れない翔子を支えてやっていた。

「おうおう、見せつけてくれんじゃねえかよ！」

そこへ、1人の男性が乱入

「誰？」
「さあ、雄二の知り合いじゃない？」
「知らねえよ。もしかして光一がさっき感じた違和感って、こいつの事か？」
「忘れてんじゃなねえぞコラ！！」

その男は、雄二に向ってどなった。
そこで光一がふと……。

「……もしかしてウエディング体験の時の、あのバカップルの片割れじゃないか？」
「ああっ、思い出した。あの時のか……」
「あれ、確かもう1人いたはずだよね？」
「そのガキの所為で、別れる羽目になったんだよ！！」

話から察するに、あのウエディング体験の一件で、彼女と別れる事になったらしい。
そこで偶然見つけた雄二達に、八つ当たりをしようと……。

「情けねえな」
「んだとコラ!?」
「……（ぎゅっ）」
「なんだ、あの“お嫁さんになるのが夢なの～”ってバカ女も一緒か」
「なっ！　お前また!?」
「待て明久」

いきり立つ明久を遮り、光一が懐から2本の短い棒を取り出す。
本来それは連結できるが、光一はあえて短いままで両の手に持つ。

「雄二、お前は霧島の傍に居てやれ」
「光一……」
「けっ！　おいモヤシの坊ちゃんよお、そんなオモチャで何する気だ?」
「お前ブチのめすに決まってんだろ。ガラも悪けりゃ頭も悪いか?　ガキに八つ当たりなんて大人げないとっちゃんボーヤよお」
「（ぶちっ!）このクソガキがあっ!!」

2秒後。

「弱いなおい!?」

パンチをかわして、顔面めがけて棒を突き出し頬にめり込ませ……
そのまま体重をかけ、近くの電灯にぶつけた。
ただそれだけで気絶し、昏倒してしまう。

「ねえ光一、そんなの良いからこれからどうする?」

「そうだな。とりあえず明久、こいつゴミ箱に捨てるから手伝え」
「公共の場は綺麗にしないとな。よし、俺も手伝おう」

数分後。
せっかくなので色々見て回ろうと言う事になり、光一たちはふとあるアトラクションの前にたどり着いた。

「あれ？　前来た時、こんなのあったかな？」
「最近出来たらしいよ？　パズルラビリンス。中は迷宮になってて、道中パズル、暗号、ロジックを解いて進むんだって。面白そうだね」
「明久には難しいんじゃないか？」
「失礼な。パズルは得意だよ！　ゲームだけど」
「面白そうだな。ちょっと挑戦してみようぜ？」

一度に入れるのは3人1組、パズルルート、暗号ルート、ロジックルートの3つがある。
なので……。

「自動的にこうなるな」
「断固反対！」
「そうだ！　折角だし、競争しようよ。負けたら罰ゲームとか」
「おっ、そうだな。その方が面白そう」
「聞けよおい！」

いざ、スタート。

パズルルート、明久と瑞希と秀吉。

「えーっと、どれどれ……あっ、なんだ。ここをこうすれば」

ピコーンッ！　ガチャっ！

「開いたよ」

「すごいです！」

「こんな早いのに、どうして明久はバカなのかのう？」

「それはそれ、これはこれだよ。ゲームと勉強では、使ってる個所が違うって事で」

「……納得じゃ」

暗号ルート、光一と優子と愛子

「はい終了」

ピコーンっ！　ガチャっ！

「一瞬で見抜いたの！？」

「初歩中の初歩だろこんなの。さ、行くぞ」

「流石光一ね。アタシ達の出番全くないかも」

ロジックルート

ピコーンッ！　ガチャっ！

「……簡単」

「組み合わせは不満だが、翔子と俺にとっては最良のルートだな」

「……私達の愛が一番だって、証明してみせる」

「愛の力の一番はリボンでもつけてプレゼントしてやるが、この勝負の一番はあダダダダダダ！！」
「……口は災いの元」

ところ変わって……

「ねえムッツリ君、どこ行く？」
「……コス……なんでもない」
「じゃあコスプレしに行こう。ここどんな衣装があるか楽しみだったから、撮影お願い」
「……任せてください（ぐっ！）」

第二百七問　閑話　如月グランドパークの一時　後編

「まさか、同着一位とはな」
「うん、僕も意外だったよ。良くて二位だと思ってたから」
「くそっ、翔子にアイアンクローされまくってなかったら……」
「「どうせ雄二が怒らせる様な事言ったんだろ（でしょ）？」」

結果は何と、全員同着一位。
ちなみに時間内クリアなので、３人には景品があった。

パズルは限定キーホルダー、暗号はバンダナ、ロジックはストラップ。
それぞれ１つずつ、プレゼントとなっていた。

「フィーちゃんのキーホルダー、欲しかったんですよ」
「まあ、こういうのも悪くはないの」

瑞希は早速家のカギを取り付け、大切な思い出の品として使っていくこと決定。
秀吉も折角なので、カギを取り付けていた。

「光一君とおそろいだよ」
「そうね。こういうのって、なんだか良いかも」

優子と愛子は、光一がしてるようにバンダナを右腕に巻きつけていた。

「……私達の記念の品」

翔子はストラップを見て、惚けたように顔を赤らめていた。

「さて……後はどこ見て回ろうかな？」
「んじゃ、回れるだけ回ってみるか？」
「そうだね」
「でしたら……」

ところ変わって……

「ははっ、姫路に霧島も、楽しそうだな」
「光一は楽しくないの？」
「乗るの初めてだけど、この年で乗るのはちとこそばゆいかな？」

現在瑞希の提案で、明久と瑞希、光一と優子、雄二と翔子はメリーゴーランドに乗っていた。
1つに2人が乗れる大型サイズになっており、明久の背に瑞希がしがみつき、雄二は翔子をお姫様だっこしながらの形で。
光一も背に優子がしがみついてる状態である。

「ちょっと子供っぽいかもしれませんが、こういうの夢だったんです」
「……（ぽけ～っ）」

ちなみに明久は、背中に押し付けられてる柔らかな感触に、オーバーヒートを引き起こしていた。

「……幸せ」
「なあ翔子、俺みたいなやつが乗ったって笑い話にしかならないだろ」

「……こうすれば仲睦まじい恋人に見えるから、問題はない」
「大ありだ！」

ほぼ脅迫同然に乗せられた雄二は、既に下りる事も下ろす事も諦めていた。
傍から見れば一応絵になるだけに、今降ろして笑いの的にされるよりはマシだと判断したうえで

「……」
「？　どうかしたの、光一……あっ」

ふと光一が見た先には、家族で遊園地を楽しむ光景が。

光一は家族旅行に出た事は一度もない
普通の外食ですら忘れるのだから、旅行先で忘れられてはたまらないと、光一はそういう時は木下家に逃げていた。

「あっ、悪い悪い」
「もう……ねえ光一」
「？　なんだ？」
「……アタシ、少し大きくなったのよ？」
「っ！！？」
「……ちょっと恥ずかしいけど、湿っぽくなられても迷惑だからね」

「？　なにやら光一から邪なオーラが醸し出され始めておるぞい？」
「ふふっ、ボクの策は通用したみたいだね」
「……ああいうのが男っぽさなのかのう？」
「木下君がやると、なんだかレズっぽくてエッチだと思うよ？」
「……最早なんでもいい。誰かワシに男らしさを享受してくれえ」

それから時刻は夕暮れ。

「あーっ、ここにいたの皆！」
「……探した」

そこでちょうど、ムッツリーニとさやかが合流。
そこは観覧車の前。

「で、皆で観覧車、か」
「……しゃーない。これが最後なら付き合ってやるよ」
「最初からそうしろよ。往生際の悪い」
「うるさい黙れ」

光一、優子、愛子組

「おーっ、高い高い」
「光一君は、乗るの初めてなの？」
「ああっ。実は遊園地も、以前愛子と一緒に行ったのが初めて」

もちろん、遊ぶという意味ではである。

「そうだ光一、朝倉さんだけど」
「ん？　ああっ、元気だった？」
「ええ、元気だったわよ？　背も少し伸びてて大人っぽくなってたけど、中身はあまり変わって無かったわ……中身は、ね」
「？」

優子は友人とイベントに出ていて、その際に偶然朝倉歩美と再会。イベント終了後に何日か泊まった際、当然一緒に風呂にも入っていた為……。

「……白夜さんでわかってはいたけど、神様はどうして不平等なのよ？」

「？　どうしたんだろ？」

「さあ？　もしかしてその朝倉さんが、ナイスバディに成長してたとか？」

「朝倉が？　……あんまり想像できないな。小動物チックな印象が目立つ子だったから」

まさかそうであるとは、光一は微塵も思ってなかった。

「ボクも会ってみたいなあ。そして“愛子お姉ちゃん”なんて呼んでもらってみたいかも」

「ははっ、それもいいな……夏休みも、もうすぐ終わりだな」

「良い思い出、作れた？」

「皆が、特に優子に愛子が一緒なら、それが良い思い出だよ」

「「……（／／／）」」

ついポロっと口に出てしまったが、気恥しくなり顔をそむける光一。恥はかき慣れてはいても、この手の恥ずかしいはまだ慣れていなかった。

「……ねえ愛子、ちょっと相談があるんだけど、良いかな？」

「え？　何々？」

明久、瑞希、秀吉ルート

「今日は楽しかったね」
「うむっ……ワシとしては、あまり喜べん事も会ったがの」
「私は大満足です」

明久と手をつないだり、おんぶして貰ったり、一緒にメリーゴーランドに乗ったり。
実はそれら、さやかと光一の入れ知恵があった。

「でも姫路さん、ああいう事をそうやたらとやっちゃダメだよ？特に僕みたいなのとなんて、変な噂になったら大変だからさ」
「明久よ、そういう事を言う物ではないぞい」
「そうですよ。寧ろ迷惑じゃないかって、思ってるくらいで……」
「そんな事ないよ。むしろ僕が迷惑かけてるんじゃないかって思ってる位で」
「しっかりするのじゃ。お主は白夜殿に認められておるのじゃろ？」

学年試験召喚戦争以来、明久が抱き続けている疑問。
自分がどうして、稀代の天才の眼鏡にかなったのか……。

「……すごすぎる人だからこそ、逆にどうして僕を認めてるのか分かんないよ。ただ相棒って認めてくれた光一の為に、無我夢中になっただけだから実感がわかないと言うか」
「でも認めてる事は事実じゃないですか。もっと自分を誇っていいと思いますよ？」
「姫路さん……」

「やれやれ、ここでも居心地が悪いぞい。しかし……ＦＦＦ団ではあるまいし、なぜ不快感までこみあげてくるのじゃ？」

雄二、翔子組

「……雄二」
「ん？　なんだ翔子」
「……まだ、試験召喚戦争はあきらめないの？」
「当然だ。学力だけが全てじゃないと証明する事を、諦めた覚えはねえ」
「……でも2学期は、1学期の様にはいかない。それに3年の人たちも、この前の事を納得してない人は多いって話を」
「だからこそチャンスでもある」
「……学年試験召喚戦争回避のチャンスを、堂々と潰した人のセリフじゃない」
「ぐっ……もうあんなヘマはしねえ。光一と明久に頼りきりなんざ、まっぴら御免だ」
「……やっぱり雄二はカッコいい」
「げほげほっ！」

ムッツリーニ、さやか組。

「今日は楽しかったね、ムッツリ君」
「……（こくこく）」
「で、どうだった？　さやかお姉さんの８８・５６・８７が彩るコスプレは？」
「……（だらだら）」
「可愛いね、ムッツリ君は」

第二百八問　閑話　二学期と始まりとお帰りなさい　前篇

9月1日。
今日から二学期ともあり、光一は制服を着て身支度を整えていた。
ピンポーン！
「おっ、来たか」
光一はすぐさま玄関に出て、その先の優子と秀吉を出迎え。
「おはようじゃ」
「準備できてる？」
「ああっ、それじゃ行くか」
既に玄関に用意しておいた、通学カバンとボストンバッグを手にいざ……
「ん？」
ふと、ボストンバッグのチャックが開いている事に気付いた。
閉めたはずなのに……と、そこで中身を探ると。
「くぅ～ん」
秀頼が出てきた。
「秀頼チャック開けたのか！？　……じゃなくて、コラ！」
「きゅ～ん……」

「ほら、秀頼ちゃん。おいで」

そこでひなたが出てきて、秀頼はしぶしぶとひなたの方へ。

「それじゃ秀頼頼むよ、母さん。じゃ行って来る」
「行ってらっしゃい」
「わんっ！」

それから、優子と秀吉を伴い、いざ文月学園へ。

「しかし、まさかチャック開けるとは……」
「流石は秀頼、賢いのう」
「何言ってるのよ、アタシ達も気をつけないと」

下手すれば、自分達が秀頼を連れて行ってしまうかもしれない。
気をつけないといけない事が出来た。

それから、文月学園。
優子と別れてから、光一と秀吉はFクラスへ。

「諸君、ここはどこだ！？」
「「「最後の審判を下す場だ！」」」
「異端者には？」
「「「死の鉄槌を！」」」
「男とは？」
「「「愛を捨て、哀に生きる者！」」」

「久しぶりに聞くと、なんか帰って来たって感じがするな」
「……否定が出来ぬ辺り、ワシも馴染んでおるの」

「あの時は色々あって余裕がなかった所為かもな。で、誰だ？　明久か？　雄二か？」

明久だったら助けねば、と光一はスタンガンとゴム弾装填済みの銃を取り出す。
それからそっと、戸を開けようと……

バーンっ！！

した所で窓がブチ破られ、そこから須川が飛び出した。

「須川が？」

ガラっ！

「我ら異端審問会の血の盟約に背き、Ａクラスの佐藤美穂嬢に告白等万死に値する！！」
「今の奴等会長ではなく反逆者だ！　即刻とらえ、異端審問にかけるんだ！！」
「須川を逃がすな！！」

ドドドドドッ！！

「自分で自分の首を絞めるって奴だな」

等と口で言いつつ、なんとなくいつもの日常に戻ったんだな。
と、少し感慨深くなる。

「あっ、おはよう光一に秀吉」
「んむっ？　おはようじゃ明久」

「よう」

そこへ明久も登校。
その後ろでは……。

「離せ翔子！　俺はこっちだ！」
「……Ａクラスに居ても良い様にお願いする」
「代表だからって余所のクラスの奴を居座らせるなんて出来るか！」

雄二が翔子に、Ａクラスへ連れてかれようとしていた。

「立ち話もなんだし、さっさと入るか」
「そうだね」

「おい、絶対気付いてるだろ！？」

それから時間となり、ＨＲ。

「では以上だ。この後は始業式だから、体育館に向かう」

そして……

「……と言う訳だから、今学期は騒ぎを起こすんじゃないよクソガキども」

「相変わらず横柄なバーさんだ事で」
「お主も相当じゃがな」

体育館にて、全校生徒による始業式。

学園長の乱雑さ丸出しのお言葉ののち、お決まりの色々な事柄の説明。
それから夏休みで活躍した部活の表彰。

そして、下校時間。

「あっ、光一。こっち来て！」

いつものメンツで、これから何かするかの相談。
に入ろうとした所で、優子と愛子から直々のお呼び出し。

「？　どうした？」
「良いから」
「え？　ちょっ、なんだよ？　愛子まで！？」
「あっ、こっち来なさい秀吉。坂本君、来たら代表に言いつけるからそのつもりで」

と言って、秀吉も連れて去って行った。
それを見計らうように、雄二が歩を進める。

「やると思ったけどやっぱりやるんだね。絶対返り討ちにあうのに」
「誰が光一の妾の逆恨みに屈するか」
「逆恨みはむしろ雄二の……って、行っちゃった」

結果は何となく見えてた明久だった。

「明久君は、行かないんですか？」
「え？　うーん……気になるけど、明日には話してくれると思うから。さて、これから何しようかな？」

「でっ、でしたらですね。一緒にケーキを食べに……」

ゴゴゴゴゴゴッ！

「ふーん……皆、アキが瑞希とケーキ食べるって！」
「えっ！？」

ザザッ！

「被告、吉井明久。言い残す事があるなら聞こう」
「ちょっ、いきなり！？」
「安心しなさいよ。手足を縛って屋上から突き落とすだけだから」
「こうなったら……姫路さん、目を瞑って！！」

明久は即座に懐から、スタングレネード（光一特性）を取り出し安全ピンを抜く。
全員が明久の言葉で危機を察知し、目を瞑る。

「えっ、きゃあっ！！」

その隙をついて、明久は姫路の手を握って異端審問会の虚を突き、逃げ出した。

「あっ！　くそっ、騙された！？」
「ええい、Ａ班は追跡しろ！　Ｂ班は玄関をふさぐんだ！」
「アキぃっ！　逃がさないわよ！！」

「あっ、明久君！？」
「絶対逃げきるよ！！」

ここで補足。
明久に預けられたスタングレネードは、ちょっとした仕掛けが施してあった。

まず、安全ピンを抜くだけでは作動はしない。

「これでも喰らえ！」
「バカめ、不発弾ごときで何が！」

そこに“衝撃”を加える事で……。

ボンッ！！

「「「ぎゃあああああっ！　目がああああ！！」」」

作動する仕掛けとなっていた。

「このまま玄関まで一直線だよ！」
「はっ、はい！」

所変わって、校庭の隅の人気のない個所にて。

「で、なんだよ？」
「それは……出てきていいわよ」
「はいっ！」

優子が目配せした先には、１人の女子生徒。
文月学園の制服を着た……。

「え？　朝倉！？」
「はいっ！　お久しぶりです、先輩！」

自分にとって、大きな変化をもたらした少女、朝倉歩美。
昔より背も伸びて、雰囲気も大人っぽくなった少女は、昔と変わらない笑顔で光一に抱きついた。

「え？　ちょっ、なんで！？」
「アタシも驚いたわよ。実は文月学園に転入する予定だったって」
「そうじゃったか……」
「っておい！　隠してたのか！？」
「だってこうでもしなきゃ、驚かせないじゃない」
「ボクは聞いてたよ。それで今朝、優子に紹介して貰って顔合わせたって訳」

もっと早く知らせて欲しかった。
光一は心底そう思っていた。

抱きつく歩美の頭を光一が頭を撫でてやると、心地よさそうに顔をほころばせ離れた。

「まあ良い。元気そうだな」
「はい。先輩も、お元気そうで嬉しいです」
「ははっ……しかし、またこれからもっ！」

ふと光一はある気配を察知し、銃を取り出しある地点へと撃ち出した。
そこから影が飛び出し、それに狙いを定める。

「テメエ、良い思いしてんじゃねえか」

「……やっぱり来たのね」
「当たり前だ。光一を不幸にするためなら、俺は手段を選ばん」
「え？　あの、誰ですか？」
「文月に生息する突然変異種のゴリラ“キリシマユージ”だ。顔と性根の悪さはゴリラ種随一で、幼馴染の妻がいるにも関わらずあちこちの女に手を出す無類の女好き」
「この野郎！」

がさっ！

「ここまでくれば、安心だね……」
「はい……」

そこへ息を切らした明久と瑞希までやって来た。

「ほう、明久までも……カモがネギ背負ってとは、まさにこの事だな」
「ついでに言えば、彼女持ちからも奪いとろうと言う欲深さまであわせもつ」
「朝倉さん、あの人が近づいたら悲鳴あげなさい？」
「俺を危険物扱いするな！！」

雄二が怒鳴った事に怯え、歩美は光一の後ろに隠れてしまった。
震えて涙目になっており、それに気付いた優子が慌てて慰め始める。

「バカ野郎、泣かすな！！」
「いや、今のはお前らの……」

「見つけたぞ吉井！」
「観念しなさいアキ！！」

そこへ更にＦＦＦ団乱入

「ん？　久遠、その子は誰だ！？」

「ひうっ！」

覆面の奇怪な集団に更に怯え、光一に震えながらその背にしがみつく。

その光景がもたらす結果

「「「く～お～ん～～！！」」」

ＦＦＦ団嫉妬レベルＵＰ

「ア～キ～！　大人しく脊髄を引きずり出されなさい！！」

更に美波も、元々だが怒りＭＡＸ状態。

「もうっ、折角の感動の再会の場面なのに……」

「まて優子。こいつらの運命だが……」

光一が拳銃をベルトに差し込み、懐から3本の棒を取り出し連結させて一本の棒に。

それから左手に3本のスタンガンを、指にはさむようにして持つ。

「Ｇｏ　ｔｏ　Ｈｅｌｌ！　ＯＫ？」

「ええ。やっちゃいなさい」

「んじゃ……Ｃｏｍｅ　Ｏｎ！　全員叩き潰してやる！！」

「「「上等じゃあああああああっ！！！」」」

数十分後

「ふうっ……」

死屍累々のＦＦＦ団をバックに、手遊びで銃を回しながら懐にしまう光一。
更には棒をひゅんひゅんと振り、まるでカンフーアクションの様な動作ののちに、ばらして片づける。

「……島田と密会だなんて、許さない」
「だーっだだだだだだだっ！　待て翔子、これは光一の妾の陰謀だ！！」
「そっそうよ！　ウチはただ、アキのお仕置きを……」
「……言い訳なんて聞きたくない」

そんなどうでも良い光景を背後に……。

「……しぇんぷぁい」

朝倉はそんな光一に、ぽへ～ッと見惚れていた。

「んじゃ気を取り直して……朝倉」
「……え？　はっはい！」
「お帰り」
「……はい。ただいま、戻りました」

一方その頃。

「……毎度あり」

「毎度どーもー♪」

ムッツリ商会夫婦経営中

第二百九問　閑話　二学期と始まりとお帰りなさい　後篇

場所は喫茶店。（ラ・ペディスにあらず）

「って訳」

光一、明久、瑞希、美波、秀吉、雄二、翔子、優子、愛子。
このメンバーで、朝倉歩美の歓迎会を行っていた。

その際に、光一は歩美と出会うきっかけを語り、そして現在に至る。

「……今からじゃ想像できないね？　光一が木下さんをブス呼ばわりしてたなんて」
「成程な……ちっ、癪だがわからんでもない」
「……私もそうしていれば、雄二は」
「なんだかなあ……何かとアキや木下の世話焼いたりする理由、なんとなくわかるわ」

知らない明久、雄二、翔子、美波はそれぞれの感想を言い合う。
今でもそれなりだが、警察沙汰まで引き起こしてたともなると流石に笑えなかった。

「でも朝倉さんが久遠君の事をあんなに慕うの、わかる気がします」
「そっそうですか？」
「はい。朝倉さんにとって久遠君は、白馬の王子様だったんですね？」
「すまん、本気でやめてくれ」

本気で嫌そうな顔で、光一は瑞希に否定の意を示した。

「……ねえ、歩美ちゃんって呼んでいいカナ？　ボクの事も、愛子お姉ちゃんって呼んでくれると嬉しいんだけど」
「？　はっはい。えっと……愛子、お姉ちゃん」
「ん～っ、可愛い！」

愛子は歩美を気に入ったのか、抱きしめて頭を撫で始めた。
その際……

むにゅっ！

「……え？」
「？　あの、どうかなさいました？　く……愛子、お姉ちゃん？」
「うっ、ううん。なんでもないよ！？」

少し放心した状態で、愛子は優子と向き合い……。

「……ねえ優子、落ち込んでた理由がわかったよ」
「……そうよね。朝倉さんが悪い訳じゃないんだけど、だけど」
「「……流石に年下に負けるのはショックだよ（よね）」」

2人して落ち込んでしまった。

「？　おい、どうし……ん？」
「……久遠、放っておいてあげて？」
「霧島まで、なんか落ち込んでるな？」
「……ごめん。私も放っておいて欲しい」

少し陰りのある翔子の言葉に、光一はさらに疑問に思うも従う事に。
その傍らでは……

「……何よあれ？　本当に年下なの？」
「あれ？　美波まで？」
「あの、美波ちゃん。落ちついてください、成長には個体差があって……」
「でも年下であれは反則じゃない！？」

美波がズーンと今までにないほど落ち込み、唯一平気な瑞希に慰められ……逆に傷ついた。

「何なんだいったい？」
「あの、先輩……私、何か悪いことしたんでしょうか？」
「いや、俺にもさっぱり……」

と言いかけた所で、隣に座る少女のたゆんと揺れる物が目に入った。

「っ！　……ああっ」
「え？　なんですか？」
「……いや、気の所為だ」

身長は秀吉より低いのに……と、内心びっくりはしていた。

「ん？　ああっ、そういう事がダダダダダ！！」
「……雄二、今どこを見て納得したの？」
「いや、今のは偶然だ偶然！　決して意識して見た訳じゃない！！」

勘が良いのも善し悪しだな、と光一は思った。
そこでふと、目の前の惨劇に怯え、朝倉が身を寄せ始めた

「……（びくびくっ）」

やはり外部の人間、特に小動物系少女にはきつい光景なのだろう
光一は苦笑して、宥めるために頭を撫でようとして……

むにゅっ！

……脇腹に当たる柔らかな感触に気付いてしまった。

「いや、その……なんだ？　朝倉、落ちつけ。別に獣がいる訳じゃないんだ」
「……（びくびくっ）」
「？　なんでいきなりどもってるの光一？」
「え？　いや、なんというか……」
「「「「……」」」」
「……ごめんなさい」

それに動揺した光一に感づき、優子、愛子、翔子、美波は刺すような視線を光一に。
視線の針の筵の光一は、居心地悪そうに謝った。

「表情は普通なのにな？」
「俺は顔に出ないんだ」
「あっそう。それはそうと光一の妾、１つ気になる事があるんだが……」
「何よ？」
「朝倉が女である以上、こっそり再会させたかったのはわかる……が、秀吉はともかくどうして工藤まで一緒だった？」
「別にいいじゃない。光一から朝倉さんの事聞いてたみたいだから、会ってみたいって言ってたからよ」
「それだけか？」

雄二は未だ光一に抱きつき、震えてる歩美に目を向ける。
光一が宥め、頭を撫でると顔をほころばせ始める。

「あれを見てそれだけなんて思える訳ないだろ。幾らいじめられてた所を助けて貰ったとはいえ、懐き過ぎだと思うんだが？」
「あのね……そういう下品な発想やめてくれる？　大体朝倉さんはデリケートなんだから、坂本君の思ってるような事になる訳ないじゃない」
「そうだよ。大体ボク達、自分の関係がどういう物かって一応わかってるんだから」
「……そうか？　言われてみれば、あんなおどおどした子があんなモヤシの3人目なんて常識はずれなバカ関係、やる訳ないだだだだだだだ！！」
「常識はずれなバカ関係で悪かったわね？」
「坂本君はもっと後先考えようね？」

余計な事を言った雄二の頬が、笑顔の優子と愛子に引っ張られた。
当然2人して、目が笑っていない。

「……」
「？　どうしたんですか、美波ちゃん？」
「え？　えーっと、そうね……」

「そんなモヤシより俺と遊びに行かない！？」
「いや、パフェでもご馳走するよ！？」
「美味い中華料理店を知ってるんだ！」
「せっ、先輩……何なんですかこの人たち？」

ちょっと席をはずした歩美に、Ｆクラス数名が花束を持って詰め寄

っていた。
ドリンクバーで飲み物を入れていた光一の背に隠れ、びくびくと震えている。

「……よし！」

と一大決心をして……

「熱っ！」

先ほど注文したドリアのまだ熱い皿に、ワザと振れた。

「あれ、どうかした？」

「間違ってドリアの皿に触れちゃって……アキ、痛いよぉ」

と、歩美のマネをして瞳を潤ませ、明久にすり寄った。

「いや、これ位なら……」

「痛いよぉ……」

「……（なんだ？　美波は一体何をしたいんだ？）」

……が、明らかに戦略ミスだった。
今までが今までの為、明久の脳裏には疑念しか湧かない。

「じゃあ、すぐ冷やさないと。えーっと……」

と言って、自分の飲み物から氷を取り出し、美波の指にあてがう。

「大丈夫？」

「うっ、うん……」

ふと、しっかりと自分の手を明久の手が握っているのが見えて……。

「……そうよ。これよ、これこそが！」

「え？　何？」

「え？　ううん、こっちの話。えーっと次は……」

「？　なんでフォークやガラスの器を見てにやりと笑うの？」

変な方向へと思考が暴走し始めた美波だった。

「まったく……」

一方トイレから、少し疲れた風な光一がドリンクバーで待ってた歩美と合流し、戻って来た。

「大丈夫か？」

「はっ、はい……あの、ごめんなさい」

「良いよ別に。それより怖かったろ？」

と言って、光一は歩美の頭を撫でてやると目を細め、心地よさそうにそれに浸る。

「……先輩は」

「ん？」

「先輩は、やっぱり優しいですね」

「そうか？　……ありがとな」

歩美は今、あまり多くを望む気はない

ただ、光一と一緒にいる時間が出来た……今はそれ以上を望む気はない。

「ホント純粋だよね」
「だから光一を変えられたのよ」
そんな様子を見て、愛子と優子は微笑んだ。

キャラ紹介４

朝倉歩美　１－Ｂ所属

光一たちが通ってた中学の後輩で、凶王と呼ばれていた光一を今の光一へと変わるきっかけとなった少女。
肩までの髪をポニーにして、綺麗というよりかわいい系。
内気で人懐っこく、無邪気で素直な性格の小動物系な女の子。
昔はいじめられていて、そこを偶然通りがかった光一の気まぐれで助けられた事から、光一を慕い懐いており、光一に対しては惚ける事がしばしば。
また木下姉妹（笑）とも交友はあり、２人を姉（笑）同然にしたっている。

身長　１４８ｃｍ　８８（Ｅ）・５５・８４

岩崎賢二　３－Ａ所属

３－Ａ所属で、試験召喚戦争においては中堅部隊長を任されている、メガネをかけた青年。
身体は細身のインドア派だが、召喚獣の操作に関しては3年でも屈指の実力者。
白夜の“力こそが全て”という思想に賛同しており、白夜の打倒を目指しつつも心酔していて、彼の強さにある種の狂信めいた物を抱いている。
勉学においては優子と同じ万能タイプで、全科目ぶれも無く３００点代をキープしている。

３－Ａでも頭がキレる方であり、明久が白夜の事で悩んでいる際にもアドバイスをして成長を促すなど、割と常識的に良い人には分類される。

オカルト召喚獣：アザゼル（特徴：知性）

新田和馬

３－Ａ所属の、前空手部主将。
身長２ｍ８ｃｍの巨漢で、白夜と戦い敗れたことから白夜に対し、敬意を持っている。
岩崎ほど心酔はしておらず、割と情を重んじる傾向はあるが基本的に闘いにおいては容赦がない。

オカルト召喚獣：サイクロプス（特徴：力自慢）

第二百十問　召喚獣野球大会編　プロローグ

「西村先生、知的好奇心を育むには具体的な目標が必要だと思わないだろうか？」
「俺達の今は、そう言った先人たちの知的好奇心が育て上げたと言える」
「……」
「古今東西、科学技術の発展の裏側には、必ず戦争の影が存在した。鉄が生まれたのは工業の為ではなく、剣や鎧を作るためであり、馬が飼育されたのは農業の為ではなく、騎兵の生産の為だ」
「そして武器の発展にしても、より遠くの敵を討つため、より効率よく大勢の敵を討つために様々な武器が開発された。そして火薬が世に出た事で爆弾や銃等、これまでを一変させる兵器が開発され、それが戦争に投入された事で戦争もその姿を大きく一変させた。つまり人は、１つの要素で良かれ悪しかれ大きく変わる事が出来るという事」
「……」
「科学技術の発展という明るい結果が生まれる背景には、必ず人間同士の戦争という暗い過程が存在し続けてきた……とまで言うと、流石に言い過ぎかもしれない。しかし戦争という危険だが明確な目的を持つと、その度に科学技術は飛躍的な発展を遂げてきた。これは残念ながら紛れもない事実だ」
「人と戦争は切り離すことは出来ないが、科学技術の発展を育むという恩恵も必ずや存在する……それが正解か不正解かは、誰１人として決断は出来ないかもしれない。だが科学技術が人の命と文化を守るというのも、紛れもない事実」
「……」
「本来、科学技術の発展というのは知的好奇心を原動力として発生する。それは古代だろうと現代だろうとどのような時代であっても

変わりはない」
「そして知的好奇心を持ってこそ、人は人であると言える。人は知的好奇心を糧に探究を続けた事で、沢山の発見や改良と言う偉業を幾つも成し遂げてきた」
「……」
「別にだからと言って戦争が必要だと言っている訳じゃない。戦争というのは多くの死者を出し、それは“同種族を殺す”という生物にとっての最大限のタブーを犯し続ける愚行その物だ」
「そしてどんな物だろうと扱い次第で、人の命を育む事が出来れば不幸に陥れることだって出来る。つまりはどんな事も、扱い方次第で顔も形も変わるという事……それが善だろうが悪だろうが、正しいか間違っているか関係なくだ」
「……」
「だが、それが愚行であってもそこから学び取れる物は少なからず存在する。それは“知的好奇心は具体的な目標を持つ事で、よりよい結果へと繋がり易い”という事実だ」
「それが良かれ悪しかれ、人類の発展を促す要素である事は変わらない……ここまで言えば鉄人、あんたほどの教師なら理解はできるはずだ」

光一と雄二、2人の話を腕を組みながら黙って聞き続けていた教師、鉄人西村。
彼は2人の話が終わると同時に、ゆっくりと口を開く。

「……久遠、坂本。お前たちの言わんとする事は伝わって来た。確かにお前たちの言う通り知的好奇心は、目的の有無を始めとするあらゆる要素が混じりあう事で、そのあり方は変わってくる。それはその通りだ……だが」

組んでいた腕を解き、Fクラスメンバー全員を見てハッキリと……。

「……没収したエロ本の返却は、久遠限定で木下、工藤経由以外の物は認めん」
「「「ちっくしょおおお

光一はとことん、そう言った評判も扱いも悪い男である。

余談だが、今度“ババァ長は男子生徒を格洛し、ハーレムを作ろうとしている”という噂を流してやる。

と、光一は内心で復讐を決意していた。

「というか、なんで光一こんなの持ってきた以前に持ってたの？必要ないはずなのに」

「必要ない言うな。まだ何もやってねえよ」

「まあモヤシじゃＥＤの可能性も否定できねえな」

「お前が言えた義理か妻帯者のクセに」

「「……（ガンのくれ合い）」」

「で、どうして持ってきてたの？」

気を抜けば鉄人に抜けられる。

そう直感で感じた明久は、話を続けるよう促す。

「……昨日部屋の掃除してる時、たまたま優子が秀頼の世話しに来ちまって、処分し忘れたの見つかって怒られてな。それで今日、須川辺りに売りつけようと思って」

「お前も大変だな、久遠」

「同情するなら、せめてキチンと返却か完全没収かにしてください」

「学園長直々のお達しである以上、却下だ」

「教育者が嫌がらせじみた事やる自体間違いだろ！！」

普通に考えれば、光一に比べれば他はまだマシな部類である。

と言わざるを得ない。

『お願いします、西村先生！　僕等にその本を返してください！』

『僕等には……僕等にはその本が必要なんです！』
『お願いです、僕等に保健体育の勉強をさせてください！』
『『『お願いします、先生！』』』
「黙れ。一瞬スポ根ドラマと見紛う程の爽やかさでエロ本の返却を求めるな」

青春ドラマのノリでの返却懇願失敗。
全員がうなだれ……。

「……こうなったら仕方がない。全部光一の物って事にして返却を」
「やめろ！　そんな事されたら俺は2つの意味で破滅するだろ！！」
『『『そんな些細な事、今は問題じゃないどころか望む所だ！！』』』
「てか、俺のとお前らの隔離されてんだからもう無理だろ」
『『『使えねえなおい！』』』
「あらゆる意味で使えないお前らにだけは言われたくねえ！！」

光一の言う様に、光一の没収物と他の没収物は区別されていた。
二学期になっても、相変わらず扱いが悪い光一である。

「それならこう考えて見てはくれませんか？」
「だからなんだ吉井。これ以上無駄な演説や漫才に割く時間はないぞ？」
「あれはエロ本ではなく、保健体育の不足分を補っている参考書だと」
「全員きちんと準備して授業に臨むように。朝のＨＲを終わる」
「ええい！　こうなりゃ実力行使だ！　僕等の大事な参考書（エロほん）と光一の命を守るため、命をかけて戦うんだ！」
『『『おおおおおおおお！！！』』』

Fクラスメンバーが戦闘準備を即座に終わらせ、鉄人を取り囲む。
雄二が召喚フィールドを展開し、ムッツリーニはスタンガンを。
そして光一は対清水美春用に用意した武器を手に、鉄人と対峙する。

「やれやれ……他はともかく久遠、お前もやる気か？」
「優子の処刑（せっきょう）に比べたら、あんたとやりあう事の方がまだマシだ」
「……久遠、せめて処刑をせっきょうと読むのではなく、説教と書いてしょけいと読め」
「……本気で、行くぜ！」

キッと見開かれた、瞳孔の開かれた絶対零度の瞳。
凶王久遠光一、推参

「よし、皆！　光一……ううん、凶王様に続くよ！」
『『『うおおおおおおおおおおっ、凶王久遠様バンザーーイ！！』』』

……しばらくして。

「……げほっ、げほっ！」
「だっ、大丈夫？　光一」
「やめとけ明久。相打ちに持ち込んだとはいえ、鉄人の鉄拳をまともに喰らったんだ。喋れる状態じゃない」
「……光一も強くなってる」

暴徒鎮圧用特殊ゴム弾をバンプアップで弾き飛ばされはしたが、流石の鉄人も凶王相手では手加減できず。
結果的に相打ちに終わった物の、鉄人が遅いと心配になって来た高橋女史により、没収品は持っていかれてしまった。

……明久の召喚獣がかばいクッションとなり、光一自身も受け身は取り衝撃を和らげはしたものの、ダメージは深い召喚獣のフィードバックと肩固めで悶絶させられた明久と、一本背負いで腰を痛めた雄二。
更には奪われたスタンガンで沈んだムッツリーニは、持って行かれた事に落胆していた。

「まあそれよりも、迂闊だったな。よりにも寄って、このタイミングで持ち物検査とは」
「……うっかりしていた」

今日はムッツリ商会主催の“収穫報告祭（夏）”の開催日。
光一は参加するつもりはなかったが、優子の説教により収入目当てに参加……したのが思いっきり裏目に出ていた。

「確かにすごい不意打ちだったわね。ウチも細々とした物を、沢山没収されちゃったわ。ＤＶＤとか、雑誌とか、抱き枕とか……」
「そうですね……私も色々と没収されちゃいました。ＣＤとか、小説とか、抱き枕とか……」
「ワシも、演劇の小道具として使う予定のゲーム機などを没収されたのじゃ。光一は……姉上と工藤経由で返されるエロ本以外は、没収されてはおらぬからの」

一応光一は、融合召喚関係でコレクションであるエアガンや武器の没収は、免除してもらっている。
……が、あくまでそれら限定なので、あしからず。

「ったく、光一が羨ましい……とはいえないが、俺はＭＰ３プレーヤーだ。一昨日出た新譜を入れておいたのに、それも全部パアだ。

くそっ！」

「まあ雄二だと、霧島さん経由になっちゃうからね。もし参考書を見られたりしたら、悪くて墓の下、良くて実技と称して本のマネするんじゃない？」

「どっちも最悪だろそれ！」

「……俺はカメラを始めとした機器一式。データの入ったメモリも全部没収されたから、当分再販も出来ない」

「「「ええっ！？」」」

「……バックアップはあるが、サルベージに時間がかかる」

「そっ、そんな……」

その事実に、Ｆクラス全体に衝撃が走った

一部を除き女性に（自業自得で）縁がないＦクラスにとって、ムッツリ商会というオアシスは学園生活の絶対必須条件なのだから。

「くそっ、これはＦクラス代表として黙る訳にはいかねえ。こんな横暴を許したら今後の学園生活に支障が出る、教師ども……特に鉄人が出払った昼休みに職員室へと忍び込み、俺達の夢と希望を取り戻すんだ」

「……俺を忘れるな」

「ムッツリーニの言う通りだぜ。お前だけを戦わせはしない」

「俺たち仲間だろ？」

「忘れて貰っちゃ困るぜ！」

雄二の決起に、Ｆクラス全体が奮起した。

Ｆクラス男子が、今心を１つにする。

「でも光一なしで何とかなるのかな？」

「大丈夫だ。後明久、お前も来るな。光一が居ないお前なんて邪魔とすら表現する事ももったいない」

「そうだ。久遠なしのお前なんて、ただの人の形をした微生物以下だ」
「大体あの学年単位の戦争回避のかかった戦いで無様に負けといて、どの面下げて学園に入ってきてんだよ？」
「学年の危機に先頭きって逃げだした腰抜け、仲間だなんて誰が思うか」
「というかGクラスでも新設して、お前だけそこ行けよ役立たず」
「酷過ぎだよ！　というかあの戦いは皆が邪魔したせいじゃないか！！」
『『『言い訳すんなこのカス！！』』』
「皆にだけは言われたくないよ！！」

未だに学年試召戦争の遺恨は深かった。

「行くぞお前ら！　とられた物は取り返せ！　俺達のチームワークの見せどころだ！　そこに少しでも希望がある限り、俺達は進み続けるんだ！！」
『『『おおおおおおおおおおおおおおっ！！』』』
「待ってください！　あっ、あの！　やっぱりそう言うのは、良くないと思うんです！」

それを遮る様に、瑞希が声を上げた。
ちなみに秀吉は明久を慰めており、明久の中で秀吉ポイント上昇中。

「なんでだ姫路！？　お前も没収された大事な物を取り返したくないのか？」
「そっ、それはその……帰ってくるなら嬉しいですけど……学校のルールを破っちゃったのは私自身ですから……」
「まぁっ、元々ウチらが校則違反をやっちゃってるのが原因なわけだし、その罰に納得がいかないからって、また問題を起こすのもち

ょっとね」

2人の女性陣の言葉に、動揺が走った。

「あ～……流石にそこまで言われたら、考え直すしかないな」

「わかってくれたんですね？」

「ああ。2人の言いたい事はよくわかった、つまりはこういう事だろう？　……こそこそ忍び込んだりなんかせず、堂々と鉄人を殺って奪い取れ、と」

「全然違いますからね！？」

こうしてFクラス男子（一2）は、昼休みの職員室急襲を決行することとなった。

そして昼休みのAクラス。

「……どうしてこうなっちまうんだろうな？」

「ボク達という物がありながら、そんな本持ってきて騒動に参加した光一君がいえた事じゃないよ。大体そんな本買う位なら、どうしてボク達に一言言わないの？　優子はあれからボクに」

「わーーっ！！　わーーっ！！」

結局優子と愛子に知られ、説教される光一。

秀吉に支えられながら平謝りする様子は、何とも情けないの一言だった。

「あっ、あの。良いじゃないですか、木下先輩に……愛子、お姉ちゃん。私達の年頃の男の人って、そういう事に興味津々って話ですから」

「朝倉さんみたいな子が、理解があるって……なんだかすごいね？」

おどおどとしつつも、歩美は光一をかばい優子と愛子を宥め始めた。

普通嫌悪されるべき事なのに、あんな少女が理解を示している事には流石に明久も驚きを隠せない。

「うーん……まっ、まあ、そう考えると、ああいう本の1冊や2冊。持ってて当たり前ね」

「はっはい……明久君には、ちょっと早い気もしますけど、でも男の子ですからね」

「……姉さんに見つからない様、必死に隠してた品なんだけどね」

そんな様子を見て、瑞希と美波はぎこちなくもそれに肯定。

……文字通りの決死の思いで守り続けたモノだけに、没収された事はいまだ大きい明久だった。

「そうね。まあそれはもう良いとして……光一に吉井君。騒動を懸念してたくせに騒動に参加してどうするの？」

「「……返す言葉もございません」」

「？　騒動を懸念？　何かと騒動起こしてたくせに、どうして懸念してるのよ？」

「お前には関係ない話だ」

「何よそれ！」

突っぱねるような言い方に、美波が怒り出した。

歩美がその怒声にビクッと身体を震わせ、逃げるように光一の背に隠れる。

「……っと。ごめん」

「もう……もうすぐ体育祭だっていうのに」

「体育祭……あっ！」

光一はある事を思い出し、頭を押さえた。

「どうしたのよ？」

「ダメだ、絶対また騒動が起きる……思い返すだけでも、それを起こすだけの理由は“あいつらの視点で”かなりの物があるから」

「そっか……廊下に正座させられたり、補習室に軟禁されたり、聖典（エロほん）を没収されたり、酷い設備の教室に押し籠められたり、学年の男子が全員停学になったり、これは僕達は関係ないけど、学園長（ババアちょう）の裸を見せられたりしたから。そろそろ我慢の限界を通り越してるよ」

「……全部自業自得どころか、我慢そのものをした事なんてじゃない」

「あいつらに自業自得という概念があるか？」

事を全く知らない歩美以外、全員が絶句した。

というか、内容的に最も理解してるのは意外な事に明久であった。

「それと体育祭と、どんな関係があるのよ？」

「教師への復讐。その目的を果たせる種目が、たった1つあるだろ？」

「そっか、教師・生徒交流野球！　となると、狙いは故意に見えないラフプレーだね？」

「そう言う事」

「……なんで吉井君、こういう事だけ理解が早いの？」

「「「……」」」

光一と明久の会話に、Aクラス全体＋Fクラス女子2人＋Fクラス秀吉1人、そして歩美は未だ絶句状態から抜けられない。

「ねえ光一、まさか参加しようなんて思ってないわよね？」
「いや、いくらあの妖怪ババァ長に嫌がらせじみた事をされたとはいえ、流石にそこまでは……しないよ？」
「今の間は何！？」

ところ変わって……

「あいつら、新学期早々騒ぎ起こしやがったのかよ！？」

3年の教室では騒動を聞きつけ、迷惑そうに喧騒が始まった。

「……」

それを他人事のように意にも介さず、大神白夜は図書室で借りた本の読書に勤しんでいた。
いつもは傍に控えている筈の、腹心である小暮葵もいない。

「ねえ葵、昨日と言い今日と言い、代表と距離を取ってるように見えるけど、どうしたの？」
「代表の指示です。しばらくは距離を取れと」
「ふーん……相変わらず、何を考えてるのか全然わからないね。際立ってる割に、目立とうとしない時があるというか、何と言うか」
「誇示する力は最低限で良い、という考えの人ですから。多分今は出来る限り、自分を目立たせない様に配慮しているのかと」
「あー、そう言われればそう見えるよね。葵が居るとどうしても目立っちゃうから」

そんな女子の会話をしつつも、葵の眼は白夜に向けられる。
白夜は歯牙にもかけず、ただ読んでいる本のページをめくるのみ

「……精々後悔のない様、今を楽しむ事だ」

そんな白夜の呟いた言葉は、喧噪にかき消された。

第二百十一問

『連絡事項

文月学園体育祭　親睦協議

生徒・教師交流野球

上記の種目に対し本年は実施要項を変更し、競技に“召喚獣を用いる”ものとする。

文月学園学園長　藤堂カヲル』

秀吉は部活で早出。

珍しく光一と優子の二人きりでの登校にて、掲示板でふと目に入った連絡事項。

「……くそっ、あのクソババァめ！（あー、やっぱりこうなったか）」

「光一、建て前と本音が逆に出てるわよ？　……やっぱり混じって復讐するつもりだったわね？」

「いや、だって……」

「確かに嫌がらせじみた事だから、アタシも学園長の提案はどうかとは思うけど……」

と、優子が説教を始めようとして……。

「ん？　光一、何見て……何ぃっ！？」

「あっ、おはよう光一。そんな所で……ええっ！？」

登校してきた雄二と明久が、掲示板に張られた連絡事項を見て声を

あげた。
なんだかんだで明久も、光一と一緒になって復讐する気満々だった

「良い所に来た、明久に雄二。俺はこの暴挙を許すわけにはいかん！」
「コラ！」
「やっぱり光一は僕の頼れる相棒だよ！　目的は同じだね！？」
「ちょっ、吉井君まで！？」
「よし、行くぞ光一！」

と、核弾頭トリオは去って行った。
ポツンと残された優子は……。

「もうっ！」

1人怒りながら、仕方なく後を追い始めた。

所変わって、学園長室前。

「よし、ここでストップだ」
「なんで！？」
「俺に考えがある。やらせろ」
「？　……良いだろう。やってみろ」

ぐっと雄二が、親指を立てる。
にっと笑うと、光一はゆっくりと学園長室のドアに……

コンコンッ！

「開いてるから入ってきな！」

ガチャっ！

「失礼します」

「っ！？」

「おはようございます、学園長」

爽やかさ１００％の笑顔で、模範的な礼儀で“光一が”入って来た。
青汁でも一気飲みした様な顔で、学園長は呼んでいた資料を落とし吐き気がするかのように口元を押さえた。

「……今朝の掲示で文句でも良いに来たのかい？」

「はい。なぜいきなり今年の……」

「わかった、聞ける範囲でなら聞いてやるからやめな！！」

まるでインフルエンザにでもかかったように、身体を震わせ光一から距離をとる様にのけぞり出す学園長。
ニヤリと笑みを浮かべ、明久と雄二に入室を促そうとして……

「アンタね……！」

「いだだだだだだだだだ！！」

優子に頬をつねりあげられた。

数分後

「それで、どうして今年から急に交流野球で召喚獣を使うなんて言い出すんですか！？　これじゃ教師を痛めつけて復讐が出来ないじ

ゃないですか！」
「……吉井君、今言ったセリフがそのまま、変更の理由になるわよ？」
「この野球大会の為に、Ｆクラスが故意に見えないラフプレーの練習に余念がなかったか、俺が隠し武器に無味無臭の薬品の調達にどれほど苦労したか、クソ妖怪ババァ長は何も知らないから……だからそんな冷たい事が言えるんだ！」
「その努力を別の方向に向けなモヤシのクソガキ！」

なんだかんだで、光一に明久も教師に復讐する気満々だった。
そんな２人に、優子と学園長は呆れたようにため息をつきつつツッコミ。

「けっ。この変更、どうせまた例のごとく召喚システムのＰＲが目的だろうが……肝心のシステムの制御は出来るようになったのか？」
「そうだな。野球ともなれば召喚フィールドの拡張、バットやグローブ等の細かな設定に、ボールっていう仮想体の構築。他にも挙げればキリはないが、これまでの戦闘の様にはいかないだろ？」
「もしかして、ババァが調整に失敗して、偶然野球仕様になったのを都合よく利用しようとしてるんじゃ？」
「バカ言ってんじゃないよ！　さっき久遠が説明したように、それらの事柄は完全に制御できなければ出来ない事で、偶然で制御出来る事じゃないさね！」
「「「いや、試験召喚システムは元々、科学とオカルトと“偶然”で成り立ってる代物だろ（ですよね）？」」」
「……相変わらず可愛げのないクソガキどもさね！」

核弾頭トリオのツッコミに、学園長は青筋を浮かべながら抗議。
優子もなんで普段仲悪いのに、こういう時だけ息が合うんだろう……と呆れていた。

「全く……だが分かっただろう？　今はもう完全に制御は出来てるさね」
「でもそれってつまり、上手く行ったから皆に見せびらかしたかったって事じゃ……」
明久の発言で、学園長の表情が固まった。
「わかりやすいなおい」
「ち、違うさね！　これはあくまで1つの教育機関のおさとして、生徒達と教師の間に心温まる交流を……」
「お言葉ですが学園長、発言がFクラス臭いです（笑）」
「お前ら……もうちょい発言に気を使え。図星突かれてババァが動揺してるどころか、ショックを受けちまったぞ。特に光一が敬語なんて使ったから、気分も悪そうじゃないか」
「……なにかしら？　ここ学園長室のはずなのに、なぜかアタシだけ場違いな雰囲気は」
数分後
「でもそれなら、ルールを戻す事だって可能だよな。何せ変更の理由がこの妖怪の自慢がメインのくだらないモノなんだから」
「そうですね。早速ですが、ルールを元に戻してください。ババァ」
「却下だね。そこまで人をバカにしておきながら、どうして断られないと思ってるんだい！？　それにもうプログラムや来賓用のパンフレットも発注済みなんだ。今更変更は不可能だね」
「何ぃッ！？　テメ、ババァの分際で俺に許可もなしにここまで進めたのか！？」
「アンタ一体何様のつもりだい！？」

いきり立つ光一に、同じように返す学園長。
優子が仕方なく頬をつねり上げ、黙らせることで話は元に戻る。

「確かにそれなら、今から変更ってわけにはいかないだろうが、このままじゃ生徒と教師の間にあまりにも差が出ないか？」
「差っていうのは召喚獣の強さの事かい？　バカ言ってるんじゃないよ。今回は戦闘じゃなくて野球じゃないか。召喚獣の力だけで勝てるっていうのなら、野球選手は皆ボディービルダーになってるよ」
「ですが学園長。幾ら学校行事の一環とはいえ、あまりにも差がありすぎるのはどうかと？」
「優子の言う通りだ。幾らこの学園が実践重視とはいえ、強さに差がありすぎればモチベーションが下がるのも事実だろ？　来賓が来るって言うのにグダグダな試合を見せたら評判下がらないか？」
「その辺りはアンタの実兄に、しっかりと纏めるように頼むさね。寧ろそれが好都合だ」

確かに、科目平均が教師レベルの生徒が居て、しかも恐怖政治でクラスを纏めている以上グダグダな試合になる事はまずない。
しかし一教育機関の長が下すには、あまりにも他人どころか生徒任せな情けない案だった。

「ですが学園長。評判を考えると、単体よりも複数の試合を見せた方が効率が良くありませんか？」
「ふむっ……それは最もではあるね」
「……木下さんと僕達とで、偉く態度が違うよね？」
「ならどうだろう、学園長。俺達のやる気が出るように賞品を用意してくれないだろうか？」

そこを狙い、雄二がそう提案してきた。

光一は成程な、と頷く。

「これはまた、随分とくだらない提案をしてきたもんだね。この前の召喚大会じゃあるまいし、そんなもん急に言われても用意できる訳ないだろう？」

「いや。雄二が言いたいのは、この前の持ち物検査での没収品を返却してもらいたい……って事じゃないか？」

「その通りだ」

「……成程ね。名より実を取ろうって訳かい」

「持ち物検査についてだが、俺の没収品の返却以外は、生徒からも教師からも色々と言われたんじゃないか？　まあその不満を抑えるためとしては、悪い話じゃないとは思えるがな？」

それが光一の今回のモチベーションの原動力だが、今は割愛。

……ぶっちゃけ、光一は隙あらば潰すという方針に切り替えていた。

「そうですね。お言葉ですが学園長、余所の学校では説教ののちに後日返却という方法をとっています。幾ら持ってこなければ良いとは言え、これは流石に……」

「余所は余所、ウチはウチだよ」

「でも不満たらたらで過ごしたまま、来賓の来る学園行事に影響が出ないとも限らないと思うが？」

「ぐっ……」

この持ち物検査で最も被害を被ったのはＦクラスである。

もし暴走でもして来賓に迷惑をかけたら……。

学園長としては見過ごせない事柄だった。

「どうだ、ババァ？」

「お願いします。ババァ」
「是非ご決断を、学園長」
「そうさねえ……どんな事言われたって、これは取引と言うよりあんた達のお願いだからねェ……そんな態度で来られても素直に受けようって気にはならないねえ」
「こっの……！」

明久が逆上しかけ、ぐっと堪える。

「と言うと、どういう事ですか？」
「目上の人間をババァ呼ばわりする様なガキどもの頼みは聞けないって事さね」
「つまり、ババァ呼ばわりが気に入らなかったのか……」

と言うと、３人は頷きあい……

「それは失礼しましたクソ長」
「確かにクソ長の言う通りですね。以後気を付けます」
「言われてみれば失礼でした。申し訳ありません、クソ妖怪長」
「待ちなガキども。アタシはクソババァ長からババァの部分を外せって言ったんじゃないからね。木下、そのガキにみっちり説教してやりな」
「はい」

光一が苦虫をかみつぶした顔になった。
それから光一が優子に説教されてる間は……

『この召喚野球大会に使う教科は、一科目だけにするのか？』
『アタシはそれでも良いんだけどねぇ。アンタらはそれだと困るだろう？』

『ああ。各イニングで仕様科目を変えて貰いたい』
『それ位なら認めてやろうじゃないか。キチンと授業に関わりがあるからね』
『それは助かる。だとしたら“召喚獣を用いて授業内容を云々”と書くよりは、“必ず授業科目の中の1つを用いる事”と書いた方がわかりやすいんじゃないか？』
『ルールを曲げないなら、その辺りは好きにしたらいいさね』

雄二と学園長の交渉が進み、ルールが決まった。

召喚野球大会規則

・各イニングでは必ず授業科目の中から一つ用いて勝負する事
・各試合において同種の科目を別イニングで再び用いる事を認めない
・立ち会いは試合に参加していない教師が務める事。なお、立ち会いの教師が試合中移動してはならない
・召喚フィールド外にボールが飛んだ場合、フェアの場合はホームラン、その他の場合はファールとする
・試合は5回の攻防までとし、同点である場合は7回まで延長。それでも決着がつかない場合は引き分けとする
・事前にメンバー表を提出する事。ここに記載されていない者の試合への介入は一切認めない。なおこれにはベンチ入り人員および立ち会いの教師も含む
・基本構成は各ポジション1名ずつとベンチ入り2名とする
・進行においては体育祭本種目を優先させる。競技が重なりそうなときは事前にメンバー登録の変更を行う事
・2－F久遠光一の融合召喚使用は、融合相手は必ずメンバー内で決め、融合によるメンバー補充は認めない。また、バッターの際には融合召喚獣のアウトは2アウト扱いとし、既に2アウト時での融

合召喚獣の使用は禁止する。
・その他の基本ルールは公認野球規則に準ずる。

交渉を終えて、教室に戻る途中。

「ねえ雄二。さっきの提案ってさ。一件合理的に見えるけど、僕達に勝ち目があればの話だよね？　まあ光一の融合召喚が使えるなら、少しはあるかもしれないけど……」

交渉で決まった事は“勝てば没収品を返却してもらえる”と言うことであり、つまりは“勝たなければ意味がない”という事になる。下手すれば教師人にたどり着く前に潰されかねないのが、今の現状である。

「今度はどんな作戦を考えたのさ？」
「ん？　何の話だ？」
「とぼけんな。あのルール設定、俺達に利がなきゃお前が態々干渉する訳がないだろ？　まあここに優子がいる以上は言えないのはわかるが、そう見ていいんだな？」
「じゃああのルール設定には、僕達が勝つための布石を幾つか置いてあるって事だね？」
「ほうっ。明久にしては上出来だ。そうだ、俺は勝ち目のない勝負をする気はない。学年試験召喚戦争じゃ呑まれちまったが、今度はそうはいかん」
「その勝ち目も、活かさなきゃ意味がないわよ？」
「そう何度も同じ轍を踏んでたまるか」

と言いつつ、４人で談笑。
そこで光一はふと……

「って事は、お前ＭＰ３プレーヤー意外にも没収されたな？」
「何とられたのさ？」
「特急品の写真集を３冊ほど持って行かれた……」
「写真集って……代表の探索の目を良く掻い潜れたわね？」
「後こいつの母親も、その手の探索能力ずば抜けてるらしいからな……優子にそんな能力なくてよかった」
「何か言った？」
「いや、何も」

事あるごとに、翔子と母親に見つかっては“翔子に”処分されていた雄二。
それだけに光一も明久も、果ては優子もどう掻い潜ったのかは興味があった。

「ああ。本棚の下や天井裏、完全防水にして熱帯魚の水槽の底に沈めたりと、色々と工夫したからな」
「それってもう、見たい時に取り出せるレベルじゃないよね？」
「まあそこまでしないと守れないってことはわかるが……」
「手段と目的が入れ替わると言うのは、まさにこの事ね……って、女の子の前でエロ本がどうとかって話をするのもどうかと思うけど」
「そうまでしてでも、守る価値のある一品だったんだ……！」
「……まっまあ、そこまで言われると気持ちはわかるわね」
「うん。そこまでの物なら、僕もぜひ見てみたいなあ」
「なんかそこまで言われると、俺も見てみたくはあるな」
「……私も」

光一と明久と翔子が、互いに頷き合った。
光一としては、没収品に関しては既に知られた以上どうという気もないが……どさくさ紛れで復讐する気は満々だった。

そういう意味での利害は一致してたため、今回は協力するつもりである。

「じゃあ俺達はこれで」
「大丈夫、異端審問会には報告しないから」
「後は代表と夫婦2人で仲良くね？」
「待てお前ら。この状況で俺を1人にするな！」

雄二の手が、光一と明久の肩をがっちりつかんだ。
2人としては、見るに堪えないグロテスクな光景を見せられるだけで、早く逃げたい。

「……雄二を甘く見ていた。今度は水槽や植物鉢、雄二が入浴中の浴槽まで詳しく探す」
「おい待て。最後の1つは確実に捜査が目的じゃないだろ？」
「……私には、雄二の成長を確認する義務があるから」

成程ね……と、光一は頷いた。
明久も、その言い方に……

「ん？　……ねえ霧島さん」
「……何？」
「もしかして、雄二と一緒にお風呂に入った事があったり？」
「……中学に入るまでなら」

そこで光一と優子が互いの目を見据え始めた。。

「よし、既成事実の一つを確保した」
「そうね。代表、これを起点にうまく……」

「待て！　中学になるまでって言っても、高学年になった頃には全く……」
「……私の胸が大きくなってからは、数回しか」
「成程。じゃあ互いに成長を確認し合える間柄であるという事は、紛れもなく事実か」
「お前はどうなんだ！？」
「さあ？　もう入ったかどうかもよく覚えてない」

これはまぎれもない事実だった。
まだ大神光一だった頃は、木下家で世話になっていた事も何回かあり、一緒に風呂に入った事はあるのだが……

基本秀吉と一緒に入る事が圧倒的に多く、幼少の記憶だけに殆ど混同されてしまってよく覚えていなかった。

「でもまあ、まだ良いじゃない。羨ましくはあるけど、ここに異端審問会がいたら」
『誰もが踏み入れる事を許されぬ聖域を汚す異端者め……！　その罪死を持って償うべし。それが……』
「そうそう、そんな感じで……え？」
『『『――我ら、異端審問会の掟！』』』
「なっ、何ぃっ！？」
「ちょっ、ちょっと待て！　お前らいつの間に現れたんだ！？　さっきまで気配すらなかったぞ！？　風呂と言っても別に何かあった訳でもギャアアアっ！」

明久に優子どころか、光一までもが唖然とその光景を見送っていた。
光一ですら、本当に気配が一切感じられなかったのだから、２人にも当然。

「……夏休みの間何があったか知らんが、あいつらも確実にパワーアップしてやがるってことか？」
「……これから気をつけないといけない、のかな？」
「……優子。さっき話していた“野球に勝てば没収品返還”って話、良く聞かせて」
「え？　ええっ、それは……」

第二百十一問（後書き）

次回は久々にレフェルさんとのコラボです。

コラボ問題　第2問　（7）　『決着と妹と憩いの一時』（前書き）

久しぶりにレフェルさんの雨宮つぐみと神埼深紅とのコラボです。

コラボ問題　第2問　（7）　『決着と妹と憩いの一時』

『Fクラス　久遠光一　化学２２３点』
VS
『Fクラス　神崎深紅　化学２４４点』

「よっ！」
「ほいっと」

光一の召喚獣が剣を抜き、深紅の召喚獣に斬りかかる。
深紅の召喚獣が縦斬りを後ろに飛び、そこからの突きをバク転で回避。
そこから駆けだし、深紅の召喚獣が歪な剣をふるい、光一の召喚獣がそれを打ち払う。
その打ち払った勢いを利用し、身体を回転させ渾身の一撃を深紅の召喚獣にたたきこんだ。

「やった！」

応援してた朝倉歩美が、光一の勝利を確信し声をあげた。
……が

「え？」

咄嗟に深紅の召喚獣が花散る天幕（ロサ・イクトゥス）を繰り出し、光一の召喚獣の両手を斬り飛ばした。
両手持ちの剣ごと宙に舞い、光一の召喚獣が一歩下がる。

「ちぃっ！」
「これで終わりや！」
深紅の召喚獣が追い打ちをかけ、突きを繰り出す。
光一の召喚獣が咄嗟に回避し、深紅の召喚獣の顔面に頭突き。
そこで光一の召喚獣がジャンプ。
「貰った！！」
宙に舞っていた剣にくらいつき、それを深紅の召喚獣に突きたてた。
『Ｆクラス　久遠光一　化学２点』
ＶＳ
『Ｆクラス　神崎深紅　化学ＤＥＡＤ』
「ふうっ……」
光一は脱力し、その場に座り込んだ。
「迂闊やったわあっ……」
「ははっ……でもなんか、漸くって感じだな」
「でもここで終わりやない。次はわっちが勝って、もう一度イーブンにしたる」
「望む所だ」
光一がすっと拳を差し出すと、コツっと深紅もそれに合わせる。
「やっぱりすごいです……」
「２年でも屈指の２人、しかもライバル同士の勝負だからね。すご

いに決まってるよ」
「ですよね。やっぱり久遠先輩って、すごいです！　木下先輩も、愛子お姉ちゃんも、そう思いますよね？　……あっ、その、ごめんなさい」

ついつい2人の手を握ってはしゃぎ、喜ぶ歩美。
……だが、自分のやってる事に気付いて、縮こまってしまった。

「なんや、朝倉さん可愛いなあ。わっちもあんな妹ほしかったで」
「なんなら、頼んでみたら？」
「なあなあ朝倉さん、わっちもお姉ちゃんって呼んで欲しいえ」
「って早いな！？」

光一はポリポリと頭を掻いて、ふと楽しそうに話をしてる明久とつぐみに目を向ける。

「おーい、吉井夫妻」
「えっ、ふっふふふ夫妻！？」
「ちょっ、こっこここここけこっこーっ！？」
「あはははっ、かわいいなつぐみは。てか明久、俺の名前呼ぼうとしたんだろうが、それでニワトリのマネは流石にすごいな」

数分後

「光一！」
「悪い悪い。でも別に恥じる事でもないだろ？」
「……まあ確かに、恥じる事じゃないし、つぐみと一緒でそう見られるのは嬉しいけど」
「あっ、アキ君……／／／」
「流石は明久。さらりと普通じゃ言えない事を言えるとは……」

こういう所は、見習うべきだよな……と、内心光一は感心していた。
明久が自分の言った事がどういう事か理解すると、気まずくなって……

「とっ、所で光一、秀頼は元気なの？」

話をそらした。

「ん？　ああっ、元気だよ。家に帰ると飛びついてくる位」
「秀頼ちゃん、久遠君が大好きでしょうがないんだよ」
「ああ。つぐみの精神感応（テレパス）なしでも、“寂しかったよ～”って言ってるのがわかる」

光一は時々、秀頼と話す為につぐみの精神感応（テレパス）に頼る事があった。

「ほ～らお姉ちゃんの抱っこやで～♪」
「ちょっ、みっ、深紅お姉ちゃん!?」
「あっ、神崎サンずるいよ。次ボクがやりたい」
「う～ん……じゃあその次アタシで」

ちなみにその近くでは、深紅が歩美を抱きしめており……
愛子と優子が、その順番待ちをしている所だった。

「光一、助けないの？」
「無茶言うな」
「即答!?」

光一でも、女性の可愛いモノ好きパワーにはかなわない。

「……お互い、強く生きようね？　朝倉さん」
その姿を見て感じる物があったのか、つぐみは歩美に同情の意を示していた。
そんなつぐみに、明久は疑問符を浮かべ、光一はあーっと苦笑いとなる。

そして時は過ぎ……。

「ただいま」
「お邪魔します」
「お邪魔します」
「邪魔するで～」

光一は深紅達を伴い、家に帰って来た。

「わんっ！　わんっ！」
「ただいま秀頼」
「ご主人様大好き～。だって」
「わんっ！　わんっ！（ペロペロ）」
「ちょっ、くすぐったいよ」

光一の姿を見るなり、目を輝かせて飛びつく秀頼。
抱きあげてやると、顔をなめ始めた。

「秀頼ちゃん可愛いなぁ」
「……（くんくん）……（ぷいっ）」
「……相変わらず警戒されとるなあ」
「でも、ちょっとは懐いて欲しいよね」

「……（くんくん）……（ぷいっ）」

つぐみと深紅、2人が手を差し出してもそっぽを向く秀頼。
秀頼を考えると、これでもまだマシになった方である。

「まあまあ、もうちょっと時間かければ何とかなるよ」
「そうだよっとと」
「わんっ！」

明久の姿を見つけると、飛びついてその胸元にすり寄り始めた。

「きゅ～ん！」
「ご主人様のお友達～、だって」
「そう言ってくれて嬉しいな」
「でも羨ましいで。明久は最初からそっぽむかれひんかったし、優子は最初そっぽ向かれても明久より早く抱っこ出来るようになったんやろ？」
「焦るな。事を急いてはし損じるぞ？」

特に秀頼は警戒心が強いので、猶更である。

「でもなんか悔しいで」
「ん～……じゃあさ」

にっといたずらを思いついたように、光一は笑みを浮かべ……

「はっ？」

深紅をだきしめた。

「俺が懐く」
「……いっ、いきなりやな？」
「悪い？」

表情平然と、内心動揺しまくりの光一。
だが、深紅も同じなのでどっこいどっこい。

「……／／／」
「えっと……つぐみ？」
「あっ、あの……アキ君が良かったら……」
「きゅ～ん？」

それを見てた明久とつぐみも、ちょっと当てられてて……。
明久の手の中で、秀頼が首を傾げつつ場違いな鼻を鳴らす音が、場に大きく響いた。

第二百十二問（前書き）

風邪引いて死にかけてました。
皆さんもお気をつけください。

第二百十二問

時は過ぎ、体育祭開催。

「はぁっ……つまらんな」

場所は体育館、３－Ａ対３－Ｂの試合。
鉄仮面と言われる程涼しい表情を崩さない３－Ａ代表大神白夜は、
珍しく不満で顔をしかめながら、不満を口にした。

「おい大神。幾らなんでも試合中に……」
「その試合がつまらなさ過ぎて張合いがないと言っている」

『３－Ａ　１２　ＶＳ　０　３－Ｂ』

「態々点数を落としてやってこれでは、くだらない以外にどう表現しろと言うんだ？」

『３－Ａ　大神白夜　保健体育１５０点』

３－３、３ホーマー。
現在全打席ホームランを記録していた。

「ええいっ、じゃあこれで目を覚まさせてやる！！」

『３－Ｂ　鈴木和男　保健体育　１９８点』
ＶＳ
『３－Ａ　大神白夜　保健体育　１５０点』

「眠気覚ましにもならんな」

カーンっ！

大神白夜、４－４、４ホーマー達成。

それもさも当然のように、ただ堂々とダイヤモンドを歩む白夜。

ホームベースを踏んだ所で試合終了。

「論功行賞を申請した者は集まれ！」

３－Ａの戦後は常に論功行賞が行われ、近衛、中堅、先見、支援部隊の構成及び、その隊長の抜擢はこれに準じている。

功績をあげた者は重宝され、あげられなければ厳罰……つまり白夜の体罰が下る。

なお今回は、学校行事である為申請者限定で行われていた。

「今回も、代表が最高成績ですね……最低限が最高成績というだけでもすごいのに、それを毎回成し遂げると言うのも」

「小暮、私にとってはこの程度は当然の話……ん？　おい、そこの無能ども。どこへ行く？」

「「ひっ！」」

「お前達は論功行賞を申請しただろう？　こっちへ来い」

「「……はい」」

彼らは相次ぐ失態により得た汚名挽回の代名詞を、今回で返上すべく論功行賞を申請している。

「ふむっ……」

「「……（がくがく）」」

……が、正直後悔でいっぱいだった。
白夜はひいきはしないが、評価は厳しい。

2人は死刑囚の気持ちで、白夜の言葉を待っていた。

「……よし、良いだろう。夏川、常村、お前達のこれまでの失態、一先ずは許してやる」
「「……はぁっ」」
「ぼさっとするな、次だ。終わったならさっさとどけ」
「あっ、ああ」
「行くぞ夏川」

白夜の評価にかなったらしい。
2人は成功した事に安心のあまり、その場にへたり込んだ。

「……名前呼びに戻ったな、常村」
「ああっ……無事挽回出来て良かった」
「結果に自信があるなら、堂々とするべきでしょう？　大神君は好き嫌いで評価を上下させはしないのですから」
「お前達の場合は清涼祭以降、身勝手が目立つが故の処分。甘んじて受けるべきだ」

そこへ同様に論功行賞を受け、召喚大会の失態を挽回した岩崎と新田が常夏と合流。

「岩崎に新田か……流石は大神の賛同者、言う事は違うな」
「夏川の言う通りだな……お前らは？」
「何とかお許しをもらえました」

「いずれはぶつけるつもりだったそうだが、それでも例外は作らんのが大神だからな。しかしお前達も、今回は必死だったな？」
「ああっ……俺も常村も、吉井以下のレッテル貼られるわ、散々ぶん殴られるわで最悪続きだっただけにな」
「……挽回のチャンスがある事はありがたいが、死刑宣告みたいで心臓に悪い」

バシッ！！

「ぐあっ！」

そこで殴る音と、倒れ伏した男子生徒。
白夜に殴られたことから、恐らく論功行賞を申請して結果を出す事に失敗したのだと、４人は簡単に予想がついた。

「……堀田の奴、全打席凡退だったからな。無理もないとは言え、やっぱ厳しいぜ」
「夏川君、そう贅沢を言う物ではありませんよ？　彼のおかげでＡクラスの安泰が約束されている事は事実でしょう？」
「それを言われると痛いな……ったく。大神みてえな超人が居やがるなんて、人類ってのは本当に不平等なもんだな」
「だからこそ、クラス代表としてその不平等に屈しない強いクラスにしようとしている。そうは考えられないか？」
「無理無理。たった１人でクラス丸ごと潰せるような奴だから、そんな事言えるんだよ」
「超人の感覚を凡人のそれと一緒にされても困るっての……あれ、大神は？」

常村がふと見ると論功行賞は既に終わっていて、白夜は姿を消していた。

体育館を見回すと、今から２－Ａと２－Ｂが試合をする所。

「さあ？　それより僕は、２－Ａと２－Ｂの偵察と行きましょうか」

「地盤を固めるのは基本だ」

所変わって……

「さて……雄二。組み合わせは？」

「ああっ、まずはお前の嫌いな小指事、中林率いる２－Ｅだ。それに勝てば３年のＥかＦクラスのどちらかで、それに勝てば来るのは確実に……」

「大神先輩率いる、３－Ａだね？　さっき聞いたけど、大神先輩全打席ホームランだったらしいよ？」

「天賦の超人は健在か……あいつに弱点や苦手な事、出来ない事はないのか？」

「あったら“神に選ばれし者”何て豪語すると思うか？　ガキの頃でさえ、あいつが躓いた所なんて見た事ないぞ？」

雄二も流石に、明久にやる物とは違う意味で驚きを隠せなかった。光一にとっては見慣れ聞きなれた事柄ゆえに、さほど不思議ではないが。

「まあ先より今だ。通過点で躓いてちゃ意味ねーぜ？」

「そうだな。まあ俺とお前とで考えた布陣と策だ、心配はない」

「……天変地異の前触れかもしれないって、別の心配はあるけどね？」

「当たり前だろ。誰が好き好んでこんなモヤシと」

「こっちのセリフだクソゴリラ」

「「……（ガンのくれ合い）」」

光一と雄二の普段の仲の悪さは、折り紙どころか金一封つきである。

「それで次だけど、確か光一の大嫌いな中林さんが代表だったよね？　あの小指の顔の」

「ん？　ご心配なく、もうあんな小物相手に怒りどころか嫌悪感も働かねえ。大体Eクラスったって、あんなのが代表が務めるクラスなら、気にしなくても十分勝てるし」

「やめなよ光一、もしこの場にいたら殴りかかって」

ガンッ！

「るんだね」

光一が咄嗟にフライパンを取り出し、振り向いてそれを構えると殴ったような音が響いた。

明久が見ると、そこには拳をさする中林の姿が。

「いきなりあぶねえな」

「アンタこそフライパンでガードするな！　どこから出したのよそれ！？」

「それより何の用だ。腹でも減ったのか？」

「アンタいつもいつもケンカ売ってくれるわね！？」

「お前がいつも絡んで来てんだろうが。クラスで除け者にされるからって、“宏美ちゃん寂しくて死んじゃうから構って～”って」

「なんですって！？」

程良く逆上した所で、雄二に光一がアイコンタクト。

「ところで中林。さっきは聞き忘れたが、先攻・後攻はどうする？」

「知らないわよ！　好きにしたら良いじゃない！」
「そうか。それならこちらは後攻にさせて貰う」
「いいわよ。そんな事より覚えてなさい久遠に吉井！　今まで散々コケにしてくれた恨み、今日こそ晴らしてやるんだからね！！」
そう言い捨てて、ずんずんとEクラス側のベンチに戻っていく

「本当に扱いやすいな」
「全くだ。お前の口車も大概だが、おかげで簡単にこちらの予定通りに事が進んだ」
「……協力したら恐ろしいね、流石は“はぐれ武闘派コンビ”」

そんな経緯を経て、3人はグラウンドへ。
そして召喚獣を呼ぶ準備を行い、古典の向井先生が立会となりフィールド展開。

「んじゃ、サモン！」

幾何学的な文様が浮かび上がり、その中からデフォルメされた召喚者自身が姿を現す。
ただし……

「今回は野球のユニフォームか。態々この試合用に調整するなんて、学園長も変な所で労力割いてるなぁ」
「ま、そうでなけりゃ、見せびらかそうなんてしないだろうがな。なあ雄二、操作の一部は自動らしいってのは？」
「ああっ、さっきそう聞いた。そうでもなけりゃ、野球なんてできないだろうな」

今までの感覚では、狙った所に投げられない人が多いだろう。

そういう面もキチンと考慮はされていた。

「そんな事はさておき、雄二」

「ああっ。おーい、そろそろ守備位置と打順の発表をするぞ。全員聞いてくれ！」

召喚野球大会に参加するクラスメイトに、雄二が呼びかける。

この手の手腕に折り紙付きな雄二と光一が相談し合った上の為、特に誰が文句を言う訳でもなく話を聞く姿勢になる。

『1番　ファースト　木下秀吉
2番　ショート　土屋康太（ムッツリーニ）
3番　ピッチャー　吉井明久
4番　キャッチャー　坂本雄二
5番　ライト　姫路瑞希
6番　サード　島田美波
7番　セカンド　久遠光一
8番　センター　須川亮
9番　レフト　横溝浩二

ベンチ　近藤吉宗
　　君島博』

「ねえ雄二に光一、僕がピッチャーで良いの？」

「良いんだよ、操作技術にたけてるお前が適任なんだ。それに考えてみろ、雄二や姫路が投げてとれるキャッチャー居るか？」

「あっ……そっか。生身の人間と違って、召喚獣って点数によっては十倍の力の差があったりするからね」

「そういう事。まあ姫路も運動得意じゃない（？）し、野球に慣れて貰う意味でもこれが妥当なんだ」

本職ならともかく、クラス交流で、しかも召喚獣を使っているこの大会。
左右への打ち分けは難しい以上、比較的球が飛んで来にくいのがライトである。

「ま、この回は俺の壊滅科目の古典だから、お前と雄二だけどな」
「え？」
「ピッチャーとキャッチャーは基本、俺と明久、光一のローテで行く」

本当は斬り込み隊長コンビでバッテリーを組みたいのが、雄二と光一共通の意見だが……。
光一は科目によって点数のばらつきが大きすぎるため、雄二を加えてのローテでなければ無理なのである。

「俺の得意科目だったら俺と雄二、普通科目だったら俺と明久、苦手科目だったら明久と雄二ってな」
「成程。光一らしい変幻自在の策だね？」
「いや、俺を忘れるな。では以上だ、何か質問は？」

全員を雄二が見まわし、特に質問は出ない。
それから雄二を中心にした円陣が出来上がり、光一がその出来上がりと同時に……。

「よし……それじゃ雄二、ビシっと言ってやれ」
「おう――行くぞテメェ等、覚悟は良いか！」
「「「おうっ！」」」
「Ｅクラス何ざ、俺達にとっちゃただの通過点だ！　こっちの負けはありえねェ！」

「「「おうっ！」」」
「目指すは決勝、仇敵教師チーム！　奴らを蹴散らし、その首を散って行った戦友（えろぼん）にささげてやるのが目的だ！」
「「「おうっ！」」」
「やるぞテメェら！　俺の――俺達の、かけがえのない仲間（えろぼん）の弔い合戦だ！」
「「「おっしゃぁーーっ！！」」」

全員の目に炎が灯り、見据えるは優勝。
気持ちは1つ、教師チームの打倒を目指し、その第一歩が始まる。

「あ、あの、美波ちゃん……こうしていると、なんだか……」
「そうね……ウチらまでそういう本を没収されたみたいよね……」
「時にお前ら。抱き枕没収されたらしいが、絵柄は何だ？」
「「「……（さっ）」」」

2人して一瞬で目をそらした。

「アンタだって乗り気じゃない」
「いや、俺は優勝賞品に興味なんてない。ただ教師連中に一泡ふかせるのが目的だから、雄二達に協力してるだけだ」
「……流石は過激派筆頭ね」
「対明久専用抹殺兵器に言われる筋合いはない」
「なによそれ！」

そして逃げるように、守備位置へ。
光一はセカンド、秀吉はファーストに配置。

「光一よ、それだけではないのじゃろ？」
「なにが？」

「とぼけるでない。復讐を成したいならこんなどさくさ紛れではなく、光一なら直接やる筈じゃ。一体何年の付き合いじゃと思っておる？」

流石秀吉、とにっと笑って肯定。

「今後の為だよ。学年試召戦争じゃ、雄二が責任放棄して俺達に全部押し付けようとしたのは事実だが、俺達も結局責任を放棄したのは事実だからな。その結果があだったから雄二は文句言わなかったが、今後同じ事がないとも限らない。だからある程度の協力体制は作っといた方がいいと思って……もちろん、俺が有利な方向でな」

「光一らしいのう。では今回は……」

「その試しみたいな物。最も、責任放棄しやがったら見捨てるという条件の確約はさせた」

ちなみに大半、翔子関連で脅した上での締結である。

「ちゃっかりしておるのう」

「最も、俺が責任果たさなきゃ意味はないがな。さて、始まるぞ」

「うむっ」

こうして、２－Ｆ対２－Ｅが始まった。

「……未だ燻り続ける、悲愴と憎悪が調和を成し生まれた素晴らしき憤怒、か」

そこから離れた地点の、目立たない個所。

「かつて光一を凶王に駆り立てただろうそれは、かつて私の付けた

傷が生み出したものか、はたまた不条理に晒された運命への呪いか……いずれにせよ、まだ燻っている事は間違いはないな。憤怒があってこそ、お前はお前だ。消えてくれるなよ？」

少し気が晴れたかのような表情となった男は……それを見届けたのち、その場を去った。

第二百十三問

『２－Ｆ　０　－　４　２－Ｅ』

「……やべぇ。いきなり大ピンチだ」

「いやもうピンチと言うか、点数取られまくった後なんだけど……」

「まあ大丈夫だろ。まだ始まったばかりだし、俺達の特色は攻撃力なんだ。こっからガンガン打てばいい」

バッテリーの呼吸が合わず、次々と放たれるホームラン。

初回からの４点ビハインドだが、光一はそれでも表情を崩さない。

「秀吉。さっき言った通りに頼むぞ」

「任せておくのじゃ！」

Ｆクラスの攻撃、まずは秀吉がバッターボックスに向かう。

「木下。まずはアンタを打ち取って波に乗らせてもらうわよ！」

マウンドに上がったのは、闘志を燃やす女事、中林。

「よっしゃ！　秀吉、いきなりのホームランチャンス到来だ！」

ブチっ！

「絶対に打ち取ってやるんだから！！」

「ちょっ、落ちついて中林さん！」

「……アンタ、とことん性格ねじ曲がってるわね？」

「当然だ。俺は1秒たりとも清く正しく生きた覚えはない」
「堂々と最低発言するな！」

光一が美波と漫才している間に、秀吉はボールとストライクのカウントを重ねていく。
光一の指示はフォアボール狙いであり、挑発はその布石だからである。

「思いっきり振ってきなさいよ木下！」
「気に入らないならギャオーって吠えてねえで、さっさと三振取って見せろよ」
「っ！　良いわよ、とってやるわよ！！」

結局、光一の口車で頭に血が上りまくった中林は、秀吉にフォアボールを許した。

「ムッツリーニ。わかってるな？」
「……（コク）」

『Ｅクラス　中林宏美　古典１０５点』
ＶＳ
『Ｆクラス　土屋康太　古典２２点』

手堅くバントで、秀吉を2塁に。

「んじゃ、明久？　さっき言った事、忘れてないよな？」
「当然だよ」
「んじゃ、期待してるぜ？」
「うん」

意気揚々とバッターボックスに入る明久。
それから……

『――フォアボール』

中林は明久の召喚獣の頭めがけて全力投球。
それを得意の回避で、あっさりとフォアボールで一塁へ。

実は光一に狙いは見透かされていた為、明久には既に言い含めていたのだった。

「ちょこまかと逃げてないで潔く当たりなさいよ！」
「無茶苦茶言うな……さて、雄二？」
「わかっている」

『２－Ｅ　中林宏美　古典１０５点』
ＶＳ
『２－Ｆ　坂本雄二　古典１９６点』

「行くわよＦクラス代表！」

現在１アウトランナー１、２塁。
次が次だけに、ランナーをためる訳にはいかない。

「あらよっとぉーっ！」

甲高い音を鳴らし、宙を飛んでいくボール。
それはフェア内でのフィールド外へと飛んでいき……

『２－Ｆ　３　ＶＳ　４　２－Ｅ』

「くっ……！　次からは、坂本にもぶつけるしかないって言うの……！」
「「普通に敬遠しろ！」」
「確か久保にフラれたって話聞いたことあるが、別に明久の所為じゃなくて時間の問題だった気がするな。あんな肉食どころか暴食系女子じゃ」
「久遠！　アンタ絶対刻んでサラダにしてやる！！」
「ん？　あれ、もしかして声に出てた？（棒読み）」
「……光一よ。ワザとらし過ぎるぞい」

それから瑞希がフォアボールで出塁し、美波が併殺打を打ってしまい攻守交代。

「んじゃ、次は数学だから俺と雄二のローテだな」
「うん。それじゃセカンドに入るね？　任せたよ」
「任せろ。んじゃ……」
「待て、お前はキャッチャーだろ！」

『２－Ｆ　久遠光一＆坂本雄二　数学４４２点＆２０４点』

「冗談だ。さて、やるぞ」

この回は、当然のように三者凡退。
そして……

「来たわね久遠、覚悟はできてる！？」
「来たけど……」

『２－Ｆ　久遠光一　数学４４２点』

ＶＳ

『２－Ｅ　中林宏美　数学８６点』

「そっちこそ覚悟はできてるのか？　軽く５倍の差はあるが」

「ぶつければ点数は関係ないわ！」

「うん、超バカ丸出し発言と投球宣言ありがとう」

「なっ！　よりにも寄ってＦクラス以下ですって！？」

「そこまで……いや、事実か」

「覚悟しなさい！」

召喚獣が振りかぶり、第１球……。

「あせーの……」

カーンっ！

『２－Ｆ　４　－　４　２－Ｅ』

大根切りで頭を狙った球を打ち、そのままフィールドの外へと飛んで行った。

ギリギリと歯軋りさせながら、ダイヤモンドをゆっくりと歩く光一を睨みつける中林。

そして３回４回と、特に大きな変化もなく流れは５回へ。

「最後は保健体育か」

「頼んだよ、ムッツリーニ」

「……（コク）」

「あっ、待て。光一、お前点数はどうだった？」

『２－Ｆ　坂本雄二＆吉井明久　保健体育１４３点＆２３点』

「あれ？　なんか２人して点数低いな？」
「いや、それは、その……な？」
「うん……参考書（エロほん）、とられちゃったから」
「アンタは何を使って勉強しようとしてるのよバカ！」
「それより、光一の点数は……」

『Ｆクラス　久遠光一　保健体育４０１点』

「「「……」」」
「……いや、ヤマ張った所が偶然当たってな？（さっ）」
「目をそらすな！　お前夏休みの間に何かあ……まあ良い。今は黙っててやる」

互いに見据えるべきは最後の戦い。
下手な事すれば没収試合にされかねない為、雄二も黙らざるを得なかった。

……何より原因によっては、翔子に知られたら最悪の事態になりかねない。
と言うのが本音である。

「まっまあ、良いじゃない。学園最高ランクのバッテリー実現だからさ」
「……まあそうだな。うん」

それに優先すべきは勝利である。
そして第一打者。

「うっ、打てる訳ないだろ！」

あっさりと三振。
そして第二打者。

「球が……全然見えない」

こちらもあっさり三振。

『２－Ｆ　久遠光一　保健体育４０１点』
ＶＳ
『２－Ｅ　中林宏美　保健体育１１０点』

「まったく、なんで2倍も増えてるのよ？　いやらしいわね」
「妄想激しいな。普段からそういうこと考えてるってか？　でなきゃそんな意見、あっさり出る訳ないしな」
「なっ！」
「おや、図星か？　顔真っ赤だぞやらしー宏美ちゃんよ。まあそれはそれとして、行くぜ」
「絶対モヤシ炒めにしてやる！！」

ズバンッ！　ズバンッ！　ズバンッ！

『ストライーク、バッターアウト！　チェンジ！』

「よし、次だ。秀吉、頼むぞ」
「うむっ、任せるのじゃ！」

ベンチに戻り、光一は秀吉の背を叩き激励。

「頼むぞ、秀吉！　絶対に打ってくれ！」
「秀吉なら出来るよ。頑張って！」
「……期待している」
「木下、石にかじりついてでも打つんだ！」
「気合を入れろ！　お前にかかっているんだ！」
「そうだ！　頑張ってくれ！　そして、何としても打ってくれ」

光一に続くように、周囲も激励を始めた。
その閉めをくくる様に……

「「「俺達のエロ本の為に！」」」
「「……」」

『ストライク！　バッターアウト！』

ほぼ全員からのエールは、見事秀吉のやる気を削いだ。

「……まあ仕方ない。ムッツリーニ、わかってるな？」
「……（コク）」

その後、ムッツリーニは敬遠で塁へ。
それから……

「……加速」

腕輪の能力、加速で盗塁。
そのまま一塁から、一気にホームベースへ。

「……はい、おしまい。次々」

２－Ｅ対２－Ｆ、２－Ｆの勝利。

所変わって、グラウンド

「素晴らしいの一言ですな」

「ええ。最高学年首席でありながら、運動でも他を突き放すとは……」

「最近は騒動が絶えないと聞いて不安だったが、彼がいるなら安心できる」

スポンサーの席から賞賛の声が上がり始め、学園長は満足げな笑顔に。

それを見て白夜は……

「……ふんっ」

興味はない。

そう言わんばかりに視界から外し、１の数字が書かれた旗へと歩を進めた。

「……次は確か、２－Ａとだな。霧島翔子、久保利光に義妹達。奪うべき価値に巡り合えるか、そうでなければ楽しめるか……位は期待しようか」

第二百十四問

「あーっ、疲れたな」
「うむっ。どこかで飲み物を調達して……」
「あっ、あの……」

光一と秀吉がそんな事を話してると、歩美が入って来た。
その手には、ペットボトルを2本あり、それを差し出している。

「こっ、これを……」
「あっ、用意してくれたのかの？」
「ちょうど喉乾いてたんだ、ありがとな」
「はっ、はい……」

光一に礼を言われると、歩美はうつむいてもじもじとし始めた。

「まるで本物の兄妹だね」

そこへ明久が歩み寄って来た。
秀吉はうむっと頷き、そっと光一達から離れる。

「まあワシら姉弟にとっても、朝倉は妹同然じゃからの」
「……光一もさ、あの人とじゃなくて朝倉さんと兄弟だったら、もっと違った人生歩めたんじゃないかな？」
「……やめるのじゃ明久。ワシらとて何度そう思った事か」
「うん……そうだね。そうだ、次はどうなってるのかな？」

自身から切り出した話題を背けるため、野球大会に頭を切り替えた。
今第2グラウンドでは、３－Ｅ対３－Ｆが行われている。

「ああっ、それなら今延長戦だ」

そこへ丁度よく、偵察に出ていた雄二が合流。

「え？　長引いてるの？」

「ああっ。一応オーダーは組んであるが、この分だと不戦勝かもしれない」

「そっか。だとすると……そう言えば、あと少しすれば２－Ａと３－Ａが始まるよ？」

それを聞くと、雄二も顔をしかめた。

決してそれは翔子に対しての物ではなく、その相手の３－Ａを纏める最大の難関に向けての物。

何せかつて自分と並び称された神童であり、学年試召戦争では戦力でも知略でも散々自分を苦しめた、自身の悪友の兄でもある超人じみた男。

「ああ……翔子達には悪いが、あらゆる意味であの超人野郎を止められるとは思えねえ」

「でも雄二、怖いのは大神先輩だけじゃないよ。常夏はどうでも良いけど、新田先輩や岩崎先輩もいるし……ごめん。流石に勝てる気がしないよ」

「そうじゃの。流石にエロ本目当てに戦うには、あまりにも強大過ぎるぞい」

「うっ……」

実際雄二もちらりと思えてきた位である。

特級写真集３冊と、白夜との敵対……。

結論、勝算も全くなければ、釣り合いも取れない。

「……せめて付け入る隙さえ分かれば」

「無理だよね。心や情が大嫌いだし、戦争じゃ簡単に味方すら切り捨てる冷血漢だから」

「だよな……ったく、始末が悪い」

人の事言えるのだろうか、と明久は思った。

「って雄二、次のオーダーは組んであるの？　まだ不戦勝って決まった訳じゃないよ」

「ああっ、体育祭前に光一と相談して骨組みは組んである。次は数学・物理・現国・政経・地理だから、前半のうちに片を付ける。今回ムッツリーニは、保健体育がないから体育祭の競技に回って貰う」

「そっか。数学と物理なら、僕と光一と秀吉の天下だもんね。それに美波が居るから、１回２回のうちに大量得点が期待できるよ」

「後は如何に逃げ切るか、だな。数学と物理、両方に回せるよう光一を１番にして、バントが得意そうな須川を２番。３番は明久で４番は変わらず俺、島田は５番にでも回って貰って……バッテリーの方も、後半は幸い光一と明久の点数差がそんなにない科目だ。まずは俺と光一のローテで、後半は光一と明久で行く。まあ後は、勝者次第で光一と相談していじるつもりだ」

光一と雄二が、ここまで意見を合わせた事ってあっただろうか？

と、明久は思った。

その反面、少し羨ましいとさえ。

「ホント、雄二と光一が揃うととんでもないね……なんだかショッ

クだよ」
「心配無用じゃ。光一に明久が揃ったら、行動力の面でとんでもないからの」
「そう？　悪口でも嬉しいな。ちゃんと光一と肩並べられてるんだって、安心出来るから」
「やれやれ。姫路と島田が聞いたら、光一に嫉妬する事間違いなしのセリフだな」

雄二が肩をすくめながら、やれやれと言ったように苦笑する。
そこへ……

「あ、あのっ！」

「雄二。別に姫路さんも美波も、僕と特別な関係って訳でもなければ、そうなる可能性だってないんだよ。どうして光一が嫉妬されなきゃいけないのさ？」
「あっ、バカ。よせ！」
「「……」」

最悪のタイミングで、瑞希と美波が明久の後ろから問いかけようとして……
発言にショックを受けた。

「？　あっ、姫路さんに美波。どうしたの？　なんだか落ち込んでるみたいだけど」
「……いえ、何も」
「……そうね。何もないわ」
「？　……あれ？　そう言えば皆はどうしたのかな？　朝倉さんが光一に会いに来てるのに、どうして異端審問会もナンパもやらないの？」

「それならあれだ」

雄二がクイクイと指を刺した先では……

『頼む……！　なんとか最高のパートナーを……！』

『良いから早く引けよ。後がつかえてるんだから』

『わかってるから急かすなよ……！　よし……これだ――チクショオォォォッ！』

『『『シャァァッ！　ざまぁみやがれ！』』』

「えっと、あれ何やってるのかな？」

「ん？　あれか？　ただのクジ引きだ」

「いや、それは見たらわかるよ。僕が聞きたいのは、どうして朝倉さんに気付きもしない程にクジ引きに熱中してるのさ？」

「次の二人三脚のペア決めだ」

「ふーん、そうなんだ……あれ？」

どうせ男女別だからと、誰がパートナーになっても気にしない明久。

そこでふと……。

「周りが見えない程って事は……もしかして、男女混合？」

「そうだ。明久もなかなか頭が回る様になったじゃないか」

「いや、流石にわかるでしょ。朝倉さんに気付きもしない程だなんて」

朝倉歩美は美少女で、尚且つスタイルも姫路クラス。

その上優しく小動物チックで、光一に懐くその姿は癒しとなっていた。

……その反面、本人は気にしていないが、光一に対する周囲の敵意

もうなぎ昇り。

「でも姫路さんも美波も、よく男女混合を了承したね？　雄二に言いくるめられたの？」

「バカを言うな。俺は男女別を推奨した位だ」

「え？　なんで――って、ああそっか。下手な事があったら殺されるもんね、それじゃ僕も引いてこようかな？　出来れば安全で嬉しい組み合わせが良いな」

「お前のいう安全で嬉しい組み合わせは何だ？」

「秀吉。嬉しいで言えばやっぱり姫路さんか美波だけどね」

即答だった

「……あれ？　今何か不運が起こりそうな予感がしたけど、なんで何も起こらないの？」

「良いからさっさといけ」

「……私達、安全だと思われてないんですか？」

「……何の因果でこんな目に」

……数分後

「あー、手を焼かされたよ」

結果として、明久とムッツリーニ。

美波と秀吉で、光一は……

「よっ、よろしくお願いします」

姫路とである。
それに激怒した異端審問会を、今片付け終えた所。

「……ああっ、よろしく頼む」
「あれ？　光一、どうして乗り気じゃないのさ？」
「……優子に怒られそうで、気が気でならないんだよ」
「本音は？」
「……没収されたエロ本に、気まぐれで買った巨乳系が1冊あってな。この前朝倉の事があった所為か、優子どころか愛子も怒ってて」
明久はあーっ、と頷いた。
「それは災難だね」
「……処分し損ねた上に、欲を出した俺が悪いのはわかってるけど、どうも理不尽だ」
光一がはぁっとため息をつく。
「……あれ？　雄二は？」
「雄二ならあそこだよ？　霧島さんと一緒」
光一がふと見た先には、翔子が雄二に何か問いかけていた。
「……雄二、お義母さんから何か預かってない？」
「ん？　あれか？　あれなら」
「……あれなら？」
「持ち物検査の日に、お前の持っていた袋に入れておいた」
「……袋って」
「あの催眠術とか黒魔術とかの本が入っていた袋だ」
「……ホントに……？」

「本当だ」
「……ウソじゃ、ない？」
「ウソじゃない」

翔子の様子がおかしい。
そう光一が直感で感じると同時に……。

「……んて……とを……」
「だから、どうしたと――」
「……何て事をしてくれたの……っ！」
「え？　なっ、なんだ一体！？　ちょっとまギャアアアアっ！！」

翔子が雄二にアイアンクローをかけ、１８０はある雄二を持ち上げる。
その様子から明らかに翔子は本気で怒っており、普段のそれとはまったく違う雰囲気に包まれていた。

パキュッ

「……雄二の……バカ……！

嫌な音が響くと同時に雄二は解放され、その場にぐったりと横たわる。
翔子はそれに脇目も向かず、走り去って行った。

「雄二、何やったのさ？」
「あの様子は尋常じゃなかったぞ？」
「ああ……どうも俺の所為で、お袋に預けていた物を没収された雑誌類と一緒に没収されたらしいが……」

血まみれのまま起き上がり、なんでもないかのように返した光一は内心、朝倉が居なくてよかったと安著していた。

「預けてた物、ねえ……随分大事な物みたいだったけど」
「お袋に預けた物って事は……まさか、婚姻届の同意書か！？」
「ああ、そっか。雄二も霧島さんも未成年だもんね。せっかく手に入れた同意書を没収されたんだから、怒るのも当然だよね」
「……本当に、そうかな？」

様子を考慮すると、つじつまが合わない。
光一が思考しようとして……

「危なかった……！　そういう事なら、あの持ち物検査に感謝だな。更に言えば２－Ａの次の相手、あの超人野郎が率いる３－Ａ。いやあ、よかったよかった」
「おい、ちょっと待てよ雄二！　……ったく」
「どうしたの、光一？」
「同意書なんかまた作ればいいだけだろ。あれじゃまるで、代えが効かない何かを没収されたかのような雰囲気だったぞ？」
「え？　……でもそれなら、一体何を？」
「さあ……？　でもそれより心配なのは、雄二が迂闊な事言って霧島を傷つけないかだな」

そして、二人三脚が始まった。

「おい雄二、さっきの事だが、同意書とは……」
「うるさい。惑わそうったって、そうはいかん」
「聞けよ」
「黙れ。騙されてたまるか」

光一と雄二は同じ順番。
何とか違う事を伝えようにも、今までが今までの為断固として聞き入れようとしない。

「俺は忠告したからな。どうなっても知らんぞ？」
「ああっ、構わん。それで不利益を被る理由など俺には無い」
「はぁっ……まあ良い。姫路、1、2で行くぞ？　1で俺は右足出すから、姫路は左足を」
「わかりました。1で右、2で左ですね？」

素直な相手だと助かるな。
そう思い、順番が近付くのを見て足を縛ろうとして……

「「……」」

ふと、2－Aでペアを組んでる優子と愛子が自身を見てる事に気がついた。

「……」
「？　どうかしましたか？　顔色が優れませんが」
「いや……なんでもない」
「けっ、良い気味だ」

優子と愛子の笑ってない笑顔に気付いた雄二は、ニヤニヤと笑いながら吐き捨てるように罵倒。
その傍らでは、須川が嵐の前の静けさの用に、静かな殺意をともしていた。

「……1つの要素であっという間に敵意充満、か」

吐き捨てるようにいった光一の眼前には、明久&ムッツリーニ、秀吉&美波&美春（？）がスタート。

「……ん？」

光一が目をこすり、再度スタートしたチームを見た。

現在トップは明久とムッツリーニ、これは良い。

しかしその次は、秀吉と美波と美春……？

「ってちょっと待て！　なんで1組だけ三人四脚になってる！？」

光一のツッコミは、虚しく体育祭の喧噪にかき消された。

そうこうしてる間に、明久とムッツリーニが1位で、秀吉と美波と美春（？）が2位。

「あっ、久遠君。次は私達の番ですよ？」

「ん？　ああっ、そうだな……なんか競技やった訳でもないのに疲れるな。さて、1位取りに行くぞ」

「え？　あっ、あの、私、そんな足早くないですよ？」

「心配するな、俺もそんな早くない。狙ったって罰は当たらねえよ」

本音は早く終わらせたいからである。

「それでは、行きましょう」

ふにゅっ！

「「「……」」」

「……まあ良い。気にしたってしょうがないのは、いつもの事だ」
「何がですか？」
「気にしなくて良い。寧ろ気にさせないでくれ、頭下げるから」

男子生徒及び、優子と愛子の無言の抗議を身に浴びながら、スタート。
結果は４位、運動が得意ではない瑞希と、身体能力では最低ランクの光一としては、上々ともいえる結果。

「いや、今回は責められる筋合いないぞ？　ただクジ引きで当たっただけだし」
「Ｆ何とか団が黙ってる訳ないわよね？」
「うっ……あっ、そっか。条件反射で返り討ちにしちまったけど、その手があった！」
「光一君？」
「……ごめんなさい」

しかしその後は、情けなかった。

時は過ぎ、場所は体育館
３－Ａ対２－Ａが、今始まろうとしていた。

「ん？　随分とやる気に満ちているじゃないか、第２学年首席」
「……どうしても、負けられない理由が出来た。冷血の暴君相手でも、決して負けられない理由が」
「そうか、流石と言っておこう。さて……」

ふと、付き添いで来ていた優子に目を向ける

「久しぶり……とでも言うべきか？　義妹よ」
「あまりそう呼んで欲しくありませんね。アタシとしては、白夜さんを義兄だなんて思いたくないので」

3年側どころか、2年側からも戦慄が走った。
冷血の暴君相手にその攻撃的な発言とは、流石にもし自分がやったらと思うと、ほぼ全員が生きた心地がしなかった。

「ふっ……私に攻撃的な態度をとる者など、3年にはいないと言うのに。それは怖いもの知らずか、はたまたこの私率いるクラスに勝てると言う自信故か？」
「両方とも違います。アタシはもう、目をそらさないって決めたからです」

白夜は感心したように、頷いた。

「そうか、それは良い事だ。人生は常に挑戦から始まる。バカだろうが賢かろうが、強かろうが弱かろうが、終わりまでに眼を背けた者こそが敗者だ」
「だったら今度は、あなたがアタシから目を背ける番です」
「結構。その野心に敬意を表して、私も全力で相手をしよう」

目を細めキッと敵意をこめる。
所詮は学校行事でしかないが、白夜としては負けるつもりなどない。

整列した全員に……。

「さて……所詮は学校行事だ。ここいらで負けても良い、等と思っている奴はいるか？」

全員が否定の意を表した。
相手は同じAクラスといえど2年であり、負けるなど3年のとしてのプライドが許さない。

「そして……これまで私の出した結果に、文句がある者はいるか？」

これもまた、否定の意を示す。

「ならば私についてこい！　さすればこの天賦の才と力をもって、勝利を約束しよう！」
「「「おーーっ！！」」」

大神が激を飛ばすと、全員が声を揃えて賛同。
扱いこそ厳しいが、彼に従えばクラスの安泰が約束されている事は事実であり、指針としての地盤が確固としているこれ以上の人物はいない。

だからこそ、３－Ａは白夜を中心にまとまっていた。

「とても高校生とは思えない程、自信に満ちた素晴らしい立ち振る舞いとカリスマですな」
「やはり天才と呼ばれるだけの事はある」
「うむっ。先が楽しみだ」

学園長の計らいで身に来た来賓が、白夜の統率に感嘆の声をあげる。
無論彼らだけではなく……

「流石は大神先輩。なんて統率力とカリスマ……」
「実力がそれを裏打ちしているだけに、完璧です」

２－Ａも、その姿に圧倒されていた。
それに対するように、今回は珍しく翔子が前に出る。

「……皆、私には大神先輩ほどの力も点数もカリスマもないけど、このクラスが最高だと信じてる。だから、私に力を貸して。そして優勝する」

「代表……さあみんな、行くわよ！」

「「「おーーっ！！」」」

第二百十五問

カーンっ！

「まあ流石はＡクラス、とだけ言っておくか。点を取られた以上、一応は勝負であったな」

『３－Ａ　１４　－　２　２－Ａ』

前の試合を含め、９連続ホームラン達成。

白夜は表情一つ変える事なく、召喚獣の歩を進めホームベースを踏んだ。

「最も、私を止める、までは期待していなかったがな」

現在最終回。

既に点差は絶望的だった。

「……あっ……ああっ……」

「そっそんな……同じ、Ａクラスなのに」

「……白夜さんの前じゃ、アタシは無力だっていうの？」

翔子はスコアを見て、敗北に刻一刻と近づき始めている事に震え始め……。

愛子は同じＡクラスだと言うのに、ここまで圧倒的に負ける事がにわかに信じきれず……。

優子は白夜との差を実感し、ぎゅっと拳を握りしめる。

「……才能の前じゃ、努力は無意味だっていうのか？」

「……もう、ダメだ。やっぱりあんな人相手に、勝てるわけがなかったんだ」
「……ここまで点数つけられて、どうやって取り返せば良いんだよ？」
それに同調するかのように、２－Ａのメンバーが既に敗色に呑まれる。
「……嫌」
「代表？」
「……あれがもう戻らないなんて、絶対にいや」
３－Ａの攻撃回が終わり、いよいよ２－Ａの攻撃
トップバッターは翔子。
「……ここで流れを変える」
「ふっ……そうだ。そうでなければ、私の前に立ちはだかる資格はない」
キャッチャーは白夜。
ピッチャーの高城にサインを送り、いざ……
『ストライーク！』
「……くっ」
翔子は運動もできるが、それでも白夜ほどではない。
元々野球に詳しい訳でもなく、苦戦は当然の話だった。
『ストライークツー！』

「随分と必死だな？　……この先に何を望む？」
「……優勝賞品」
「優勝賞品？　……ああっ、この前2年で行われたという持ち物検査の没収品か。くだらんな」
「……くだらなくなんかない。あれは私にとって、雄二との大切な思い出の詰まった大事な品。絶対に、手放したくない」
「愛情、か……尚更にくだらん」

これ以上は無意味だな。
そう結論付け、白夜は高城にサインを送る。

「……くだらなくなんか」
「ん？」
「……くだらなくなんか、ない！」

カーンっ！

翔子の渾身の打球は、大きく弧を描きフィールドの外へ。
翔子は召喚獣を操作し、ダイヤモンドを歩ませる。

「ふむっ……見事だ」
「……これは私だけの力じゃない。私を応援してくれた友達のおかげ」
「……私には理解できんな」

わかりきっていた返答だけに、翔子は何も言わず後にした。

その後、いざ反撃……と言う訳にもいかず、優子がヒットで出塁したのみで、２－Ａは虚しく敗北を喫した。

「愛情、か……くだらんが、まあ良い。敬意の証として、覚えておくか」

膝をつき、優子達に宥められてる翔子に白夜は目を向け、すぐさま踵を返した。

「ああいたいた。流石は大神、アンタのおかげでスポンサーの方々も喜んでくれたよ。召喚獣野球も好印象だったし、ホントに天才様々だね。アンタみたいな生徒が学園にいる事は、学園長として鼻が高いってもんさね」

「……それは光栄です」

「それでこの後だが、ちょいと頼みがあるんだよ」

……数分後

「そうか……やはり出てきたな、３－Ａ」

偵察に出ていたムッツリーニから、２－Ａが負けた事の報告を受ける雄二達。

３－Ａに勝てば、教師チーム……だが、立ちはだかる壁はあまりにも高く厚い。

「……よし、望む所だ（ガクガク）」

「あの野郎に目に物見せてやる！（腰抜かしている）」

「俺達の底力、見せてやるぜ！（じょ～っ）」

「全員恐怖で竦み上がってんじゃねえか。あと1人は汚いからとっとと着替えて来い！」

「……完全に蛇に睨まれたカエルね。まあウチも、気持ちは分からなくもないけどさ」

特に学年試召戦争の傷跡も深い今ともなれば、ほぼ全員が竦み上がっていた。

「で、どうするのじゃ？」

「どうもこうも、頭脳も俺達以上とくれば打開策どころか、作戦すら……」

「……待って。１つ良い情報がある」

所変わって……

「え？　ちょっと待て大神、次の試合出ないってどういう事だよ！？」

「どうもこうも、次の競技は絶対に出て欲しいという学園長からのお達しだ。その都合上出られないと、そう言っている」

召喚獣の野球は、スポンサーから好印象をもらっていた。

更に言えば天才の実力を目の当たりにして、来賓からの受けも良い。

ここで更にひと押しと言うのが、学園長の思惑だった。

……白夜としては、不愉快この上なかったが。

「だが次は２－Ｆだ。まさか私がいなければ怖いのか？」

「なっ！　ばっ、バカ言え！　誰が！？」

「さて、お前達がどんな働きをしてくれるかが楽しみだ。吉井明久の価値をあげてくれるか、はたまたそれを覆すか……私の見立てでは、前者の可能性の方が高いがな」

ブチっ！

「絶対勝つぞ！！」
「「「おーーっ！！」」」
興味なさげに踵を返し、グラウンドへ向かう白夜。
その顔は少々不満がにじみ出ていた。
「……予期出来ていたが、まさかこのタイミングでとはな。まあ良い、時はまだある」
所変わって……
「よっしゃ！　あのババァ、良い仕事してくれたぜ！」
「はっはっは、３－Ａ恐るるに足らず！！」
「待ってろよ、俺の可愛いエロ本ちゃん。今この手に取り戻してあげるからね！」
白夜が出ない。
たったそれだけで、フィーバーとも言わんばかりのお祭り騒ぎが始まった。
「……単純ね。確かにウチも野球とはいえ、あんなバケモノじみた超人と戦わなくて済むんなら、はしゃぎたい気持ちだけどさ」
「そうですね……私も直接の面識はありませんが、あまり関わりたくありません」
女子は呆れつつも、気持ちは分かっていた。
「……単純な奴ら。おい雄二、だからって相手がＡクラスである事

は変わらんだろ。まあまだ時間はあるから、早く策を練ろう」
「いや、一応は用意してある。作戦と言えるほどの物じゃないがな……」
「ほうっ、言ってみろ」
「奴らの召喚獣を殺そうと思う」
「最早スポーツマンシップと言う概念は、消え失せておるの……」
「最低の作戦ね……」
「殺す……？　アウトにするって意味ですか？」

女性陣（笑）が、揃って呆れの視線を雄二にぶつける。
しかし光一は……。

「なんだ？　乱闘で再起不能に、もしくはラフプレーでもするってか？　面白そ……いや、まあ予備策程度には使えるか」
「すんなりと理解できるお主もどうなのじゃ！？　後今面白そうと言いかけておらんかったか！？」
「ラフプレーって云うと、デッドボールを狙ったり、タックルしたりだね？　もしくは振りきったバットを相手に投げつけたりとか」
「……クロスプレーで審判に見えない様殴るのもあり」
「お主ら真正の外道じゃな！」
「アンタらねえ……相手に“卑怯だ”って言われても知らないわよ？」

明久達が一斉に肩をすくめ、美波に憐れむような視線を送る。
……が、光一がそれを遮った。

「いや、その心配はない。常夏の変態コンビに召喚大会の時、卑怯な手使われたことある。恐らくあいつらなら、今まで散々俺達にコケにされた仕返しの為に仕掛けるはずだ。増して俺達、特に俺は評判悪いんだから、他にもそう出る奴が居てもおかしくない。兄……

大神が居ないんなら、我慢する必要もないんだ。躊躇したらやられるぞ？」

「あっ、あの。久遠君、ダメですよ。お兄さんにそんな……」

「良いんだよ。考えてみたら、もうあいつを兄だなんて呼んでやる理由はないんだ。どう呼んだって構いやしねえ……話に戻るけど、あいつ等だってそう来る可能性は十分あり得る。仕掛けてきたら仕掛ける、に留めとかないと逆にやられる」

「じゃあ決定だな。こちらからは仕掛けないが、動きを見せたら即実行。次の試合は我慢の勝負になる」

話は終わりとなり、グラウンドに向かうメンバー達。

そこでふと……

「……って、よく考えたら実行される事に変わりないじゃない！？」

「光一にうまく嵌められた様じゃな」

「あっ、あはは……」

第二百十六問

『1番　サード　島田美波
2番　ピッチャー　吉井明久
3番　キャッチャー　久遠光一
4番　センター　坂本雄二
5番　ライト　近藤吉宗
6番　セカンド　土屋康太（ムッツリーニ）
7番　ファースト　君島博
8番　ショート　須川亮
9番　レフト　横溝浩二

控え　姫路瑞希
　　木下秀吉』

現在美波が三振に倒れ、現在明久が打席に。

「どうやらあの超人野郎だけじゃなくて、この前の岩崎先輩と新田先輩も出てないみたいだな。こりゃ多分、隊長格や近衛なんかの上位クラスは1人もいないだろうな」

「ああっ。高城って奴や岩崎先輩がいれば話は別だが、これなら乱闘抜きでもつけいる隙は十分ある。ここからどう崩すか……」

「うわっ！」

ふと、明久の挙げた声で光一と雄二がそっちに目を向ける。

見れば明久の召喚獣が倒れていて、キャッチャーの常村の召喚獣がその後ろでボールをとっていた。

「おっと、すっぽ抜けちまった。悪かったな、へへっ」
「……（こく）……いえいえ、ご心配なく」

どう見ても形だけの謝罪をするピッチャーの夏川。
明久が光一の方を見て頷くと、笑顔でそれに相対。

「やっぱりな」
「となると、お前も危ないんじゃないか？」
「ご心配なく、化学なら常夏ごときに遅れ取らねえよ。敵さんこっちに対して敵意満々に加えて、冷静な判断できそうな奴は1人もいねえ。それを利用して崩せば良い」
「ああっ。そこまで言うなら、乱闘に傾れ込むタイミングはお前に任せるぞ」

『ストライーク！　バッターアウト！』

多少は粘りはしても、最後は三振。
次は光一がバッターボックスに。

「よう久遠。覚悟しやがれ、テメエにゃたっぷり礼をしてやるからよ」

その言葉を無視するように、光一の召喚獣はバットを夏川の召喚獣に突きつけ……
くいっと上にひねった。

「テメエ、ホームラン予告だあ！？」
「……」
「上等だ、打てるもんなら打って見やがれ！！」

『２－Ｆ　久遠光一　化学２３３点』
ＶＳ
『３－Ａ　夏川俊平　化学２４４点』

眼中にもない。
そう言わんばかりの態度で、光一はただ夏川の召喚獣に集中する。

「いつも先輩に向かってスカした態度とりやがって！　覚悟しろ！！」

その態度が気に障ったのか、夏川どころか３－Ａ全体がヒートアップ。
夏川の召喚獣が頭に血が上った状態のまま、召喚獣を操作し第１球……はド真ん中。

カーンっ！

「……Ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ　ｏｆ　ｐｌｅａｓａｎｔ　ｐｕｐｐｅｔ　ｐｌａｙ。俺の手の上で楽しく踊れよ、先輩方」

高々と弧を描き、フィールドの外へ。
光一の召喚獣がダイヤモンドをかけ、ホームベースを踏んで先取点。

「雄二、どうやら点数とプライドだけのマヌケ揃いだと確信した。上位クラスはいない」
「ああっ。じゃあ俺も続くとするか」

その後の雄二も、続くようにホームラン。
しかし次の近藤を打ち取られ、攻守交代。

「やるぞ明久」
「うん！」

コツっと拳を打ちあわせ、明久はマウンド、光一は打席の方に向かう。
この配置は次の教師戦を考慮し、どの程度が勝負出来るかできないかの線引きの為の物である。

「お前らが吉井に大神の弟か……！　まぐれで大神に気に入られて調子に乗ってる様だが、3年に楯ついた事、後悔させてやる……！」

案の定、2人に対し敵意むき出しで打席に入る“頬に殴られた跡がある”トップバッター。

『2－F　吉井明久　化学57点』
VS
『3－A　堀田雅俊　化学217点』

光一は点数とその差を見て、それから打者の構えに注目。
それから明久にサインを出し、頷くと召喚獣がミットを構える。

『ストライク！』

投球コースは外角低めで、空振り。
相手の構えがオープンスタンスなら、手を出しても外野を抜くかどうか……というコース。
それに加えて、相手は冷静さをかいている。

「……さて、今度はバッターボックスで踊って貰うか」

光一は再度サインを出し、明久は頷く。

キンッ！

続く球は、外角高め。

ボールの飛距離は伸びず、セカンドにキャッチされた。

「……成程な。ある程度芯で捉えられなければ、大丈夫な訳だ」

貴重な情報を得て、にっと笑む光一。

そして次は……

「よし、俺の出番だな。サモン！」

ソフトモヒカン事、常村がバッターボックスに立つ。

「さてと、吉井に久遠……！　溜まりに溜まった今までの屈辱と、大神に貼られたお前ら以下のレッテル。キッチリ利子付けて返してやるぜ……！」

いきり立ってやがるな……。

と思いつつ、光一は明久にサインを送り、頷く。

光一の召喚獣が外角、それもバットが届かない位の個所にミットを構える。

そして投げ放たれたボールを、常村の召喚獣がわざとらしく大ぶりして……。

「っと、手が滑った！」

それを振り抜き、キャッチャーの光一の召喚獣に向けて放り投げた。

「……お見通しなんだよ」

しかし光一はボールをキャッチすると同時に前に伏せ、バットをよけた。

常村はそれを見てギリっと歯軋りさせるが、横眼で審判を見て……

「悪いな久遠。ワザとじゃないんだが」

「いえいえ、気にする事はありませんよセンパイ。スポーツに事故はつきものですからね」

光一は爽やかな笑顔で明久にボールを投げ渡し、バットを拾い常村に手渡した。

さて……と光一は考える。

サインを送って、ミットをド真ん中に構える光一の召喚獣。

そして、明久の召喚獣が振りかぶり……。

「なっ!?」

『ストライク!』

再度常村の召喚獣のバットが、光一の召喚獣めがけて投げられる。

しかし光一の召喚獣は、ミットでバットを受け止め、ボールは手でキャッチしていた。

それをみて、再度横目で審判を気にしながらひきつった笑みを浮かべて……。

「っと、悪いな。続けて失敗しちまって」
「いいえ、バットの扱いがヘタクソなら仕方ありませんね」
ピキッと常村の頭に血が上った。
「おい、その舐めた口のきき方は何だ？」
「なんだって、2度も同じ事続いてるんですから、そうじゃないと不自然……！」
光一の言葉を遮る様に、常村が光一の胸ぐらをつかんだ。
「さっきから先輩に向かって舐めた態度とってくれやがって、良い度胸じゃねえか！」
「正当な言い分を切って捨てんのかよ。ガキ臭さと底の浅さが見てとれるな、無能先輩よぉ」
『テメエ、先輩に向かってその口の聞き方は何だ!?　クズの分際で、さっきからなめた事ばっかしてくれるじゃねえか!?』
『何言ってやがる！　そっちが一方的に仕掛けて来てんだろうが！　あの超人が居ないからって、俺達怖さにくだらない手に走りやがって！　器が小せぇぞ先輩！』
『んだと!?　上等だ！　こうなりゃ野球なんて面倒な事やってねエで、直接テメエ等クズどもを掃除してやる!!』
『望む所だ。あの超人野郎におんぶにだっこの分際で、何かと偉そうにするテメエ等3年は気に食わなかったんだ。ここらで一発ぶちのめしてやる！』
「……思った以上に堪忍袋の緒が緩いのかよ。まあ良い」
ベンチから次々と飛び交う怒号。

光一がポケットからクボタンを取り出し、いざ乱闘……

「おやめバカ共っ！」

そこにしわがれた声が割って入った。
光一はその声の主、学園長を見てクボタンを握る手を止め、クボタンを離してポケットから手を抜く。

「やれやれ、つくづく救えないガキどもさね……どうして召喚獣勝負にまでしてやったのに、大人しくできないんだい？」
「なんだババァ。何をしに来たんだ？」
「学園長と呼びなクソガキ。組み合わせを聞いてちょいと様子を見に来たらこの様かい、折角来賓の方々も召喚野球や大神の活躍に満足してくれたんだ。この期に及んであんた達がバカをやって、評判下げるんじゃないよ！」

組み合わせを見て、問題が起きる予感を感じ関しに来たらしい。
……この現状では、良い読みである。

『止めないでください学園長！　２－Ｆのクズどもには、礼儀と常識って奴を叩きこむ必要があるんです！』
『あの超人野郎が居なきゃ、まともに勝負も出来ねえカスの分際で偉そうな事言ってんじゃねえ！　学園長！　この先輩面したカスどもを殺らせてください！』

「だからおやめって言ってるんだよ！　クソガキども！」

学園長が一喝を浴びせ、その場全員が黙りこんだ。
そこで学園長が頭に手をやり、意を決したように……

「……よし、決めたよ。この試合だけ、召喚獣の設定を変えてやろうじゃないか」
「「「は？」」」
こう宣言した。
「今回だけ、全員に痛みがフィードバックする様にしてやるって言ってるんだよ。そうしたら、乱闘なんかせずにまともに試合をするだろう？」
「つまり、今回限りは皆の召喚獣が明久と同じ設定ってことか？」
「そういう事だよ。全員しっかりまじめに野球をやりな。痛い目に遭いたくなかったらね」
そう言って、学園長は後者に向かって歩き去ろうと……。
「待った妖怪。それって疲労もちゃんとフィードバックされるのか？」
「ん？　ああ、そうさね。設定を観察処分者仕様にするから、そうなるね」
「……わかった、ありがとう」
「気持ち悪いからやめな！」
「それじゃちょっとタイム」
光一の礼に吐き気がするかのように口元を押さえ、再度校舎へと向かう学園長。
それを見送り光一がタイムを取って、内野のメンバー全員と雄二がマウンドに集まる。
「さて雄二、お前としてはこれからどうする？」
「問題ないな。こうなったら、こちらの秘密兵器を使うまでだ」

「待て、それはまだ早い。まあ俺と明久に任せろ、悪い様にゃしねえ」
「え？　僕も？」
「ああっ、俺とお前にしか出来ない策でな。それに秘密兵器の投入は3、4回辺りでも遅くはない……そうだろ？」
そこで雄二が考え込み……にっと笑みを浮かべた。
「成程、お前の目論見は理解出来た。面白そうだからやれ」
「お前も良い性格してるよ」
そう言ってそれぞれバラけ、光一が明久にアイコンタクト。
「……成程ね」
「俺とお前にしか出来ない策だ。やれるな？」
「うん！」
力強く頷くと、明久は光一に拳を差し出してコツっとぶつけあう。
「やろう、光一」
「ああっ」

第二百十七問

「やっと来たか。あんまり先輩を待たせるもんじゃねえぜ？」
「ご心配なく。俺は“アホな”アンタを先輩とみなしてないんでね」
「んだと！？」

「君達、処分が下って早々に小競り合いをしない様！」

常村が怒鳴ると、審判が注意。
舌打ちをする常村が、召喚獣にバッティングの構えを取らせ、光一は召喚獣を座らせミットを構える。

「……Ｔｈｅ　ｓｅｃｏｎｄ　ｃｕｒｔａｉｎ　ｏｆ　ａ　ｐｌｅａｓａｎｔ　ｐｕｐｐｅｔ　ｐｌａｙ。さて、始めるか」

光一がサインを出し、明久が頷いた。
と言ってもサイン自体はでたらめで、アイコンタクトで実際のやりとりは行っている。

「おい、聞こえてないとでも思ってんのか？」
「別に聞かれたって損はないから良いんだ」
「吉井じゃあるまいし、何言ってるかわからんとでも思ってんのかよ！？」
「へー。すごいですねー（棒読み）」
「……こいつ絶対殺す」

ニッコリ笑顔の裏でべーっと舌を出す光一。
常村はそんな光一に腹をたて、ボルテージアップ。

「さあ来やがれ吉井！！」

聞いてそれかよ、と内心ツッコミ入れる光一。
それから……

カーンっ！

「ファール！」

ファールでカウントを稼げるコースへ、スローボールとストレートを混同。
強振続きで、少し肩で息をし始めた常村を見て……

「ストライク！　バッターアウト！」

全力投球を指示し、三振。
ギリっと食いしばりながら、どすどすと地面を踏みしめて帰っていく常村。

そして……

「テメエ等覚悟しろよ」
「はいはい、腹減ったんなら商店街のスーパーにでも行けよ。鶏肉の安売りしてる筈だから、たんまり食って来い」
「……（ぎりっ！）」

しれっと発せられた光一の毒舌に、夏川の頭にあっさりと血が上った。
このバッターも、ペース配分を駆使し夏川に体力を使わせ、凡退。

「ちっ……」
「～♪」
「余裕だってかこの野郎！？」

挑発するように鼻歌をワザと聞かせ、光一はベンチへ。
そして攻撃。

『３－Ａ　夏川俊平　数学２５４点』
ＶＳ
『２－Ｆ　土屋康太　数学３３点』

「へっ！　ひでえな。吉井以下じゃねえのか？」
「……」
「おい、とっとと構えろよ」
「……」

夏川はまず第１球
頭に血が上った状態の為、当然全力投球

「……（すっ）」
「っ！」

ムッツリーニの召喚獣がバントを構え、夏川の召喚獣が駆けだす。

「ストライーク！」

しかしムッツリーニは動かない。

「バントも碌に出来ねえのかよ？」
「……」

「言い返す気もねえってか？　腰抜けめ」

それから続いて、第2球目。

「ストライクツー！」

再度バントを構え、夏川の召喚獣が駆けだす。
が、バットにかすらせもしなかった。

スリーバントはないと判断し、第3球目。
ムッツリーニの召喚獣がバットを短く持ち、それをカット。

「ファール！」

手にフィードバックが来たのか、ムッツリーニは顔をしかめ手を振る。

「さて、後はムッツリーニがどれだけ持ってくれるか、だな」

その後、ボール球を除けば8球は粘ったが、あえなく三振。
次の君島は……

「ストラーイク！　バッターアウト！」

ツーストライク行くまでは、バントの構え。
その後は決して凡退はせず、ただひたすらにカウントを稼ぐ事に徹し、最後は三振。
次の須川は……

「ええい、もう騙されるか！」

コンっ！

2回目でバントを当て、それに意表をつかれた夏川が少し遅れて駆けだす。
しかし間に合わず、一塁出塁。

「くっ……くそっ！」

少しずつ、しかし着実に夏川は疲労していた。
キャッチャーで多少は頭の冷えた常村が、ふと夏川の様子と先ほどの光一の発言を照らし合わせ……

「……まさか、久遠の言ってたのはこういう事か？　おい夏川、落ちつけ！」
「うるせえ！　こうなったら次で三振取ってやる！！」
「ちぃっ、無理もねえが完全に頭に血が上ってやがる……いや、もっといい手がある。良いか？」

夏川がいやらしい笑みを浮かべ、次のバッターに目を向ける。
その横溝は……

「ぎゃあああああっ！」

『デッドボール！』

脳天直撃のデッドボールを喰らった。

「やっぱ……もとい、ここで来たか」
「……お前、ワザと教えなかっただろ？」

「さっき優子にちょっか……何の事だ？」
「……まあ良い。塁には出たんだ」

その後、美波は凡退。
続く守備は……

「あれ、今回も僕？」
「そっ。どうせ打たせて取る方針なんだ、ヘタに点数増やすよりも良い」
「ん、了解」

その後もあっさり、光一の挑発を含めたリードで三者凡退。
投球数５。

３回に入り、科目は現代国語。

「で、どうするの？」
「バント。ただしな……」
「ん、了解」

意気揚々とバッターボックスに入る明久。
それを見て、こちらも意気揚々と明久を睨みつける夏川。

「覚悟は良いか吉井？」
「そう簡単に僕等は負けませんよ。変川先輩」
「おい待て、今俺の名前と変態と言う単語を混ぜて斬新な名字を作らなかったか？」
「あっ、すいません。変態先輩」
「違う！　俺は変態に統一しろって言ってるんじゃねェ！　夏川に統一しろって言ってんだよ！」

「すいません。どうにも紛らわしくて」
「紛らわしくねェよ！　“夏川”と“変態”だぞ！？　共通点は文字数くらいじゃねェか！」
うん、狙い通りだと光一はニヤッと笑む。
そして……
「Ｎａｔｓｕｋａｗａ（名）、変態の意、またはそれ相応の人物の総称。“ｆｕｌ”で形容詞。またＴｓｕｎｅｍｕｒａが同意語である」
「おい、久遠！　何辞書に載ってるかのように説明してやがる！？」
「例文として、Ｈｅ　ｉｓ　ｓｏ　Ｎａｔｓｕｋａｗａｆｕｌ……彼はこの上なく変態である、だね？」
「もしくはＨｅ　ｉｓ　ｓｏ　Ｔｓｕｎｅｍｕｒａｆｕｌ……だな。この通り、明久でもわかる簡単な英文だ」
「明久と雄二、満点だ」
雄二と光一が“打ち合わせ通りに”明久とともに貶し、２人はヒートアップ。
「テメエ等はいつもいつも……」
「そう怒らないでくださいよ。夏川変態に常村変態」
「「響きが似てるからって今度は“先輩”と“変態”を間違えんなあ！！」」
そのトドメの一言で、２人は完全に冷静さを失った。
『３－Ａ　夏川俊平　現代国語１７６点』
ＶＳ
『２－Ｆ　吉井明久　現代国語６２点』

「覚悟しやがれ吉井！！」

夏川が吠え、召喚獣が振りかぶり第一球……

ズバンっ！

「ボール」

いきなり脳天へのビーンボールが投げられ、明久の召喚獣は咄嗟にかわす。
続いて第2球。

カーンっ！

「ファール！」

ストライクに来た為、カットしファール。
先ほど攻撃がさっさと終わった為、夏川もそう体力は戻っていない。
集中力が切れかかっており、先ほども明久が打てる程の力しかなかった。

「くっそ……」

フィードバックの疲労が、ずんと夏川にのしかかる。

「おい夏川、大丈夫か？」

「くっ……」

結局、常村と夏川でバッテリー交代。

「よし、秀吉」

「……光一よ、何やら嫌な予感がするのじゃが？」

「明久を……（ごにょごにょ）……と言って応援するだけだから心配するな」

「うっ、うむ……明久、頑張るのじゃ！　ワシがついておるぞ！」

ブチブチっ！！

「吉井、テメエだけは許さねえ！」

……あっさりヒートアップ。

「……お前も大概性格悪いな？」

「褒め言葉だ」

その後、明久は粘りはしたが凡退。

光一に雄二も、カット前提でバッティングを行い、最後は凡退。

「どうする？　俺としてはもちっとデータが欲しい所だが？」

「うーん……続けるか。フィードバックを活かせば、負ける事もないだろ」

「ただし、危なくなったら秘密兵器、姫路の投入な？」

「ああっ……って待て！　秘密兵器ってそれかよ！？」

その後、４、５回と特に変化もなく、２－Ｆクラス勝利。

所変わって……

「大神君。野球ですが、彼らが……」
「そこまでだ。次の試合の話でないなら、聞く必要がない」
「そうですか……それで、罰則は？」
「岩崎、私がいつ“勝利”を期待した？　出来ない事が出来なかった……そんな事で罰を与えるほど、私は愚かではない。元より私は、出来る事を指示はしたが出来ない事を指示した覚えはない」
「……わかりました。ではそう伝えておきます」

第二百十八問

時は過ぎ、現在昼休み。
少し人気のない場所で、３人ずつの男子と３人の女子。
そして１人の秀吉が昼の準備を進めていた。

「……なぜか今、仲間外れにされた気がするのじゃ」
「？　気の所為だろ」

秀吉のつぶやきにツッコミを入れて、光一は用意してた弁当を取り出す

「そう言えば、ムッツリーニは？」
「島津先輩と一緒に昼だとよ」
「最近そればっかりだね？」
「そう言ってやるなよ。ムッツリーニの立場が崩れたら、俺達だって今より危なくなるんだから」

実際ムッツリーニの情報操作のおかげで、光一達も少しは事なきを得ていた。

「？　光一、なんで用意してんだよ？　今日は確か……」
「ああっ、決まってんだろ？」
「お待たせしました」

優子に連れられた歩美が、手にお重を抱えてやって来た。

「朝倉が俺の作った飯食いたいって言ってたんでね」
「成程な」

今日の昼は歩美が用意するとのことで、全員が弁当の持参はなし。
歩美は昔から料理が得意で、光一や優子、秀吉にもよく作ってた経緯は皆知ってるので、楽しみにしていた。

「んじゃほれ、朝倉。頼まれてた物」
「わあっ、ありがとうございます」

パァッと表情を輝かせ、歩美は光一から弁当を受け取った。
そんな光景を横目で見て和みつつ、優子達は歩美の弁当を並べていく。

そして……

「うんっ、おいしい！」
「ああっ、美味いな。良い嫁さんになれるぞこれなら」
「本当です……もっと頑張らないと」
「なんだかなあ……ウチとしては、すっごく複雑」
「そうだよね」

口々に絶賛する明久達。
そして久々に口にする光一達も……。

「へえっ、腕上がったな」
「うむっ」
「そうね、教えてほしい位だわ。ねえ勉強教えてあげるから、今度教えてくれない？」

昔以上の味に、大絶賛だった。

「あっ、ありがとう……ございます……」

口ぐちに褒められ、歩美はすっかり恐縮してしまった。
そしておずおずと光一の弁当に手をかけ、まずはコロッケを……

「わあっ、おいしいです」
「そうか？　良かった。コロッケは俺の得意料理だから」
「この味付け、どうやったんですか？」
「ああっ。隠し味として……」

半1人暮らしを子供の頃から続けてた光一と、趣味が料理の歩美。
割と話はあってたりする。

「ホント、朝倉さんって光一と仲良いよね……そう言えば美波、葉月ちゃんは元気？」
「え？　うん、元気よ。アキに会いたいってウチにせがむけど」
「ふーん。別に会う位は構わないのに」

ちなみに明久は、そんな2人の様子を見て葉月を思い出していた。

「それにしても、すごいよね光一君達。３－Ａを破って堂々と決勝進出だなんて」
「大神がいなかったから、そこにつけいる隙があっただけだ。そっちだって、3点も取っただろ？」
「代表と優子が必死だったからね。ボクは保健体育がなかったから、表立って役には立てなかったけど」
「頑張る姿勢があるだけでも立派だって。それより……」

そこでふと、翔子の様子がおかしかった事を思い出す光一。

「霧島が必死だったってのは本当か？」
「うん。大神先輩相手に、面と向かって負けられないって言ってた位だから」
「……そうか」

やはり、同意書の類ではないなと光一は思う。
あの暴君と名高い男に、面と向かって負けられないと宣言……それも、あの翔子が。

「それで負けちゃった時は、一番落胆してたよ」
「あんな超人相手じゃ無理もないだろうに。翔子らしくもない」
「おい雄二、そのらしくないでわからないか？　普通霧島ほどの優等生なら、大事なものだって鉄人辺りに説明さえすれば、返却してもらえるはずだってのに」
「ふぁあっ……」
「この野郎……」

光一は全く聞きもしてない雄二にイラッときたが、今までが仇になったなと思い直し舌打ち。

「ねえ光一、やっぱりおかしいって思う？」
「あれ、明久も気がついてたのか？」
「だってあの霧島さんが、大神先輩相手にそこまで言ったんだよ？　流石に代えの効く物の為に、そこまでやれる相手じゃないから」

直接対峙したからこそ、明久は簡単な理由で対峙できる相手じゃないと理解できていた。

「でもどうするの？」
「どうもこうも、雄二がこの様じゃどうにもできないだろ。変な事

にならなきゃいいって祈る位で」

そして時は過ぎ……

『これより一年生による応援合戦を行います。一年生の生徒は……』

「学ランなんて久しぶりだなぁ……中学校の時以来だよ」
「なんだ、明久も中学では学ランだったのか」
「……同じく」
「俺達もだな」
「そうなんだ。秀吉はセーラー服だったんだね」
「明久よ……会話が繋がっておらんぞ」

そんな感じで和気藹々。
そこへ美波が、チアガールの衣装を手にこっちにやってくる。

「ねえ木下」
「嫌じゃ」
「うっ……まだ何も言ってないのに……」
「丸わかりだ。無理に誘うなよ」
「だって……瑞希と一緒じゃ、比較されるんだから」

「あっ、美波ちゃん。早く着替えないと時間が無くなっちゃいますよ！」
「あっ、先輩！」

そこへ、チア姿の瑞希がこちらへ来た。
さらには、集合場所へ向かう途中のチア姿の歩美も一緒に。

……その動きに連動するように、豊満な物を上下に揺らしながら。

「……ごめん光一、あれは流石にすごすぎる（どくどく）」

「……姫路はともかく、本当に年下か？」

「……桃源郷（ぴくぴく）」

その姿（と言うか胸）を見て、明久は鼻血をたらし、雄二はあっけにとられ、ムッツリーニは致死寸前

「……うわーん！！」

そして美波は、泣いて去ってしまった。

「あっ、美波ちゃん。待ってください！」

それを追いかけていく瑞希。

「？　あの、どうしたんですか？」

「……知らなくていいんだよ。それより似合うな？」

「そうですか？　ありがとうございます」

光一にドスドスと、抗議の視線が突き刺さる。

しかし光一は全くものともしてないどころか、気にもしてない。

「それじゃ急げよ？」

「あっ、はい」

歩美が駆けて行くのを見送ると、ふと翔子が目に入った。

その様子はやはり落ち込んでおり、いつもの様な落ちついた雰囲気は感じられない。

更に言えば、近くに雄二が居るのに気付きもしないで、歩き去っていこうとしていた。

「おい翔子、どうかしたのか？」

「……あ。雄二……野球、負けちゃった」

「ああ、そうらしいな。まあ３－Ａ相手じゃ仕方ないだろ」

「……でも、私の没収品返して貰えない……」

「没収品ねえ……なあ霧島、その没収品って」

「没収品ってお前な……」

光一のセリフを遮る様に、雄二が呆れたように額を抑えながらそう言った。

「……結婚式まで、大事に保管しておくつもりだったのに」

「結婚式まで？　……なあ、もしかして」

「バカ言うな。あんなもん見つけたら俺が代わりに捨ててやる」

「……え……？」

翔子が驚いたように顔をあげた。

「あっ、よせ。やめろ！」

「いや。“……え……？”じゃないだろ。あんな物没収された程度で、そこまでへこむどころか、あの超人野郎相手に勝とうとするなんて無駄な事するよ」

「……あんなもの、って……」

「つまらない物の為にそこまで必死になる位なら、もっと別の事にだな――」

――パシンッ！

渇いた平手の音が響き渡った。

「……つまらない物なんかじゃない……！」

翔子は平手を振り抜いたままで、今にも涙がこぼれそうな瞳を潤ませ……

「雄二にだけは、そんな事言って欲しくなかった！」

普段からは考えられない程、頭に響く位の大きな声。

その声に3人が気圧されてる間に、翔子はそのまま背を向けて走り去って行った。

「ああもう！　明久、雄二を頼む。おい待てよ霧島、一体どうしたんだ！？」

「え？　うっ、うん！　わかった！」

光一が慌てて翔子を追い、明久はその場に残って雄二に声を……

「……子の奴……！　翔子の奴！　何が“つまらない物なんかじゃない……！”だ！　俺本人が同意してない婚姻届なんか、つまらない物以外の何物でもないじゃねえか！　俺にだけは言われたくないだぁ！？　俺だから言うんじゃねえか！　こっちは何も承諾してないんだぞ！　悪く言うのは当然じゃねえか！」

かけようとした所で、雄二が低く唸り吠えた。

「ちょっ、落ちついてよ雄二！　光一が言ってたけど、まだ婚姻届だと決まった訳じゃ……」

「光一は翔子の味方じゃねえか！　俺を騙そうとしてる可能性の方が高いに決まってるだろうがバカが！！」

怒りがおさまらないのか、雄二は明久に散々当たり散らして去って行った。

そして明久は、散々当たり散らされすっかり疲弊。

「……はぁっ。貧乏くじだなあ」

「何があったかは知らんが、災難だった様だな」

「だよね。雄二ももっと落ち着いて事を……ん？」

ふと周囲を見ると、全員が自分を……正確には自分の方を見て、恐れていた。

明久は恐る恐る振り向くと……。

「……おっ、お久しぶりです大神先輩。こんな所で何を？」

「久しぶりだな、吉井明久。たまたま通りがかった際、騒ぎを聞きつけただけだ」

まるでライオンでも目の前にしてる気分だよ。

と、明久は冷や汗がとまらなかった。

「まあせっかくだ、決勝進出おめでとうと言っておこう」

「……自分のクラス、破ったんですよ？」

「私は実力主義だ。そもそもあんな役立たずどもに後れをとる相手に、この神に選ばれし者たるこの私が不覚をとるか」

「……まぐれだって見られる事が多いんですけど？」

「まぐれも起こせないクズどもの言葉など、聞く方がどうかしている」

……自分のクラスメイトに対してもそうだけど、堂々と暴言ってどうなんだろう？
と明久は思った。

「まだ、僕を欲しいと思ってるんですか？」
「当然だ、お前は育て方次第で良い人材となる。趣味で粗末に扱う者の気がしれん」
「……大神先輩、僕は光一の相棒です。何があっても、それだけは絶対譲れない」
「何があっても……か。しかし、本当に相棒として成すべき事を成せているのか？」
「……どういう、事ですか？」
「今の光一を見て、お前はどう思っている？」

大神の意図がわからず、明久は首を傾げるが……。

「何って、いつもみんなと楽しく……」
「私には血の涙を流し、悲鳴をあげているようにしか見えないな」
「え……？」
「相棒とか名乗っている割に、上辺しか見えていないのだな？」

「白夜殿、明久に何をしておる？」

そこで、遮る様に秀吉が割り込んだ。

「ただ見かけたから声をかけただけだ。なあ？」
「……そうだよ秀吉、何も、ないよ」
「……ならば、去ってくれぬかの？　お主がいたら、周囲が怖がる」
「その様だな」

そう言って白夜が去っていくと、秀吉は……。

「白夜殿に何を言われたのじゃ？」
「え？　そっそんな事……」
「嘘をつくでない。何か惑わすような事を言われたじゃろ？」
「違うよ。ただ……ごめん、何でもないんだ。本当に」

その後、応援合戦直前……

「……」
「ん？　どうかしたか、明久？」
「え？　えっと……きっ、霧島さんは、どうだった？」
「なんとか没収品の事は聞けたけど、とても人前に出られる状態じゃなかった。今は保健室で横になってる」
「そう……ねえ、光一」
「ん？」
「……ごめん、なんでもない」

「……明久」

第二百十九問

『木下は3番だったよな。確か最初の科目は化学だろ？』
『うむ。他の科目の出来がイマイチじゃったからな。化学が回ってくるこの打順が1番都合が良いのじゃ』
『俺もだ。この前の世界史や英語は難しかったからな。勝負にならねえ』

対するは教師チーム
念願の相手であり、かつてない強敵であり、体力以外すべてを上回ると言う不利な状況。

「さて、全員ポジションと打順は確認したな？」

そして現在、指揮を執るのは雄二ではなく光一。
雄二はずっと不機嫌なままで、とても指揮をとれる状況ではなく光一が奮闘。

これまでの事で雄二に信用されてない……その事は理解しているため、何も言わない。

「明久、準備は良いか？」
「え？　……うっ、うん」
「……？　どうしたんだ、さっきから様子がおかしいぞ？」
「明久よ、やはり……」
「なんでもないって！　……ちょっと、緊張してるだけだからさ」

『これより、生徒・教師交流野球決勝戦を始めます。みなさん、整列してください』

「さて……良いかお前ら！　ようやくここまで来たが、負ければすべて終わりだ！」
「「「おうっ！」」」
「俺達の成すべき事はただ一つ……わかっているな！？」
「「「絶対勝つ！！」」」
「よし、Ｈｅ，ｒｅ　ｗｅ　Ｇｏ！！」
「「「Ｙｅａｒ！！」」」

雄二の代わりに光一が鼓舞をとり、全員が整列。
その光景に……

「……やっぱり、僕じゃ」
「明久よ、よもや光一を……」
「そんな事ないよ！　……そうじゃなくて、僕は」
「白夜殿の言う事を気にする事などないのじゃ。光一も明久も、互いに信頼し合っておる。それがお主らの強みじゃろ？」
「……ありがとう秀吉。ちょっとだけ、もやもやが薄れた」
「明久……」

そして、野球の始まり。

『お互いに礼！』
「「「おねっしゃーすっ！！」」」

『１番　キャッチャー　久遠光一
２番　サード　横溝浩二
３番　ファースト　木下秀吉
４番　セカンド　島田美波

5番　レフト　須川亮
6番　ショート　福村幸平
7番　ピッチャー　吉井明久
8番　センター　坂本雄二
9番　ライト　姫路瑞希

控え　近藤吉宗
土屋康太（ムッツリーニ）』

雄二が未だ機嫌が優れないため、ローテは斬り込み隊長コンビ。
光一としては融合召喚を使いたかったが、不安要素を抱えたまま一人減らすのはまずいと判断。

「はは……野球なんて何年ぶりでしょうね。サモン！」

教師チームからは、トップバッターとして化学の布施教諭。

『化学教師　布施文博　化学５０１点』
ＶＳ
『Ｆクラス　吉井明久　化学５７点』

ふと白夜との戦いを思い出した明久だった。
その後は、布施教諭をレフトフライで続く現国教師寺井は、ライト前ヒット。

「……さて、順調だな。次は」
「こうして君とやり合うのは、強化合宿以来ですね。久遠君」
「今回も俺が勝ちますよ。相手が誰だろうと、負ける事を考える気はないんで」

3番打者は、光一の補習を担当しており、学年主任を務める才女事、高橋洋子。

『学年主任　高橋洋子　化学８０１点』
　　ＶＳ
『Ｆクラス　吉井明久　化学５７点』

「「「ぶほぉっ！！」」」
「相変わらずかよ……仕方ないな。鉄人の前にランナーためたく――ん？」

ふと光一が、高橋女史の召喚獣を見て違和感を感じた。
バットを握る手をみて……

「えっ！？」

光一のサインに、明久が動揺を見せた……が、納得したようにうなづいた。

「高橋先生、手が逆だな。それだと打ち難い筈だ」
「ああ、どうりで……アドバイスありがとうございます、西村先生」

ボールを投げる前に、鉄人がアドバイスを飛ばし構えなおす高橋女史。
しかし光一は付け入る隙を見つけ、にやりと笑みを浮かべる。

早速サインを送り直し、明久が頷き投げる。

「ここで、こう……」

高橋女史がバントの構えをとり、バットをボールに当てに行く。
が、ボールは光一のミットの中へ。

「成程な……」

恐らく、高橋女史の狙いはプッシュバント。
プッシュバントは普通のバントと違い、当たった瞬間にバットを押し出すバント。

相手の意表を突く形で取られる事が多い物だが、高橋女史の点数なら十分外野も狙える。

「だったら……」

光一がサインを送り、明久が頷く。
そしてストライクゾーンをはずして、低めにボールを投げる。

「ここで、こう……」

ゴンと言う音がなって、勢いのいい球がサード方面へ。
しかし飛んだ方向は、ショートの福村の真正面。

「任せろ！」
「島田、福村のカバー急げ！」
「え？」

そこで光一が、美波に向かって指示。
しかしサードの美波が、指示の意味がわからず足を止めた。

「ごぶるあっ！」
『『『んだとお！？』』』
球を補給した筈なのに、召喚獣の身体がぶっ飛んだ。
「ああもう！　須川、雄二！　こぼれ球を早く戻せ！！」
光一は世界史や古典が壊滅であり、その科目での戦いの経験上の予測だった。
「高橋先生、あれなら二塁まで行けます！」
「わかりました。二塁ですね？」
教師の誰かが叫び、高橋女史は冷静に頷いて二塁に向かった。
――ピッチャーマウンドを突っ切って。
「「「……は？」」」
グラウンドの誰もが、目を丸くした。
「バッターアウト！」
当然審判がアウトを宣告。
「なぜですか？」
「……ランナーはあっちの一塁、そして二塁、三塁、最後にホームと順に走らないといけないから、今の行為は立派なルール違反です」
「そうでしたか」
光一が呆れながら説明し、納得したように高橋女史はベンチに戻っ

て行った。
そしてその間に……

「えっと……はい、タッチアウトです」
「え？」

呆気にとられ、一・二塁間で立ち尽くしていた寺井教諭からもアウトをもらっていた。

「……どうしてこの学園って、どこかこう変な奴ばっかりなんだろ？」

光一のつぶやきは、誰の耳に聞こえる訳でもなくただ場に響くだけだった。

そして攻撃。

「んじゃ、行ってくる」

最初の科目は科学で、次が世界史なので光一が1番打者。
ピッチャーは科学の布施教諭で、キャッチャーは鉄人。

「高橋女史はライトか……なら」

光一の召喚獣が左打席に入り、バットを振らせる。

「器用だなお前は」
「身体能力で勝てない分、器用さと小賢しさで勝負する性質なんで」

『化学教師　布施文博　化学５０１点』
ＶＳ
『Ｆクラス　久遠光一　化学２３３点』

「それに俺にとっては、別に勝てない点数差じゃない」
「だろうな」

まずは……

「ストライク！」

光一は見送り。
次は……。

カーンっ！

タイミングもバッチリに、ジャストミート。
しかし、センターフライに打ち取られる。

その後、連続三振に取られ交代。

「さぁ来いっ！　今度はさっきまでの様にはいかないはずだっ！」

その次は世界史なので、センターの雄二がキャッチャーに。
キャッチャーの光一がショートとなって、センターには福村の代わりに入った近藤が。

「威勢がいいな吉井」

そしてバッターは鉄人

『補習教師　西村宗一　世界史７４１点』
ＶＳ
『Ｆクラス　吉井明久　世界史１２１点』

「ボール！」

雄二がストライクゾーンの外に構えたミットに、明久が球を投げる。
その球を、鉄人は不機嫌そうに見送った。

「おい雄二！」

光一が雄二に抗議をするが、ワザとらしく無視をした。

「……これは、坂本の指示か？」
「そうだが、なにか？」
「そうか。お前達は勉強が苦手でも、こういった事はわかっている物だと思っていたんだがな……まだまだ教育が必要だと言う事か」
「？　何を言ってるんだ？　敬遠位、勝負の世界じゃ常識だろう。この程度の事で文句を言うとは――」
「いいや、そういう事を言っているんじゃない……良いか、坂本。教師として１つ言っておく――何事も、やるならば徹底的にやれ！」

豪快な音が響き、敬遠球はミットに収まる事なく宙に舞い、フィールド内から姿を消した。

「ほ……ホームラン！」
「……ふん」

鉄人の召喚獣が淡々と描くベースを回っていく。

そして、ホームを踏んだ所で……。

「吉井も何を迷っている？　お前らしくもない」
「え？」
「気付かないとでも思ったのか？　何があったかは知らんが、勝負の最中に余計な事を考えるな」

鉄人がそう告げ、ベンチに戻っていく。
そこで光一がタイムをかけ、マウンドへ行って雄二を呼び寄せる。

「何やってんだよお前は！　それに明久も！」
「ごっ、ごめん」
「けっ！　んなもん、言われなくとても自分でわかってらぁ」
「それがわかってる奴の態度かよ!?」
「だったらお前がやれ！　まあテメエの点数じゃブッ飛ばされるだけだろうがな、歴史オンチのモヤシ野郎が！」
「あっ……？　テメエこそ言ってくれんじゃねえか、ただ逃げ回るだけの腰抜けゴリラ君がよぉっ！」
「ちょっ、やめなよ2人とも！　試合中だよ!?」

明久が仲裁に入り、雄二が舌打ちをして所定の位置に。

「……どうにかして、伝えたい所だがな」
「今までが裏目に出ちゃったね」
「俺も軽率だったな……くそっ」

吐き捨てるようにそう言って、光一は頭を掻きながらショートへ。
力になれない……その事が、明久に大きくのしかかり始めた。

「体育の授業ではなく、召喚銃で生徒と野球をする事になるとは…

…サモン！」

相手は保健体育の大島教諭。
雄二は遅れてサインを出すが……。

「……」
「……？　吉井君？」
「え？　あっ、すっすみません！」

試合はＦクラスにとって、混沌の予感を醸し出していた。

第二百二十問

現在の状況は、０－２で教師チームリードで、現在ツーアウト一・二塁。
保健体育の大島教諭にホームランを打たれ、続く2人をフライで打ち取った物の、シングルヒット1つとフォアボールと言う凄惨な結果。
そして打者は一巡し、化学の布施教諭。

「……」

緊張と迷いが混濁して、明久も冷静になれず。
しかしここでケアを入れなければならない雄二も、動こうともしない。

「あいつらは……」

現在が世界史ともなれば、自分にキャッチャーは不可能。
ここから指示を出そうにも、雄二は自分の言葉など聞こうともしない。

「……まあ良い、やらないよりはマシだ」

光一がタイムをかけようとして、明久が牽制球をファーストへ

「セーフ」
「タイムじゃ」

それと同時に、秀吉は明久のいるマウンドへと近づいていく。
光一は怪訝に思いつつも、任せるかと動かない。

「？　どうかした、秀吉？」
「うむ。実はじゃな……ワシは試合が終わったら――風呂に入りたいのじゃ」
「……そうなの？」
「それだけじゃ。邪魔したの」

何かを企んでいる様な、小悪魔的な笑みを残し守備位置へ戻っていく秀吉。
しかし明久の暗雲は、それでも晴れない。

「プレイ！」

「っと、いけない！　すぐに……あれ？」

ふと見ると、ボールを持ってない。
慌ててボールを捜す明久が……

「タッチアウトじゃ」
「……はい？」

してやったり、と言う秀吉の声が聞こえてきた。
球は秀吉の召喚獣のグローブの中にあり、一塁から離れてリードをとっていた相手にそのグローブを当てていた。

「ランナーアウト、チェンジ！」

審判が攻守交代を告げる。

「木下、ナイス！」
「隠し玉なんて、味な真似しやがって！」
「よくやった秀吉！」
「……グッジョブ」
「これでワシも役に立てた様じゃの」
光一がぽんと秀吉の背を叩き……。
「よくやった」
「うむっ」
と、頷き返した。
「流石は秀吉だね。いきなりお風呂がどうとかって言うからどうしたのかと思ったけど、こういう事だったんだ」
「風呂？　なんだ、一緒に入りたいとでも言われたのか？」
「いや、確かにワシは風呂に入りたいとは言ったが――」
と、そこまで行ってから、急に思い直したかのように意見を翻し始めた。
「い、いやっ。そう言えば言ったの！　そうじゃな！　風呂じゃ！　明久よ、是非ワシと共に男湯へ――くふぅっ」
「あらあら、ダメじゃない木下。お風呂は性別ごとに分かれてはいる物なのよ？」
「そうですよ木下君。お友達と一緒にと言うのなら、お風呂は後で私たちとゆっくり入りましょうね？」
「し、島田に姫路！？　落ちつくのじゃ！　お主ら、ついにワシと風呂に入ると言う事にすら、違和感を覚えなくなっておるのか！？」

にこやかにほほ笑みながら、瑞希と美波は秀吉の腕を抱え込み明久から引き離した。

「……なんだったんだろ？」

「さあ？　……で、明久。大神に何を言われた？」

「何って……え？」

「秀吉から聞いたよ。俺が霧島から話聞いてる間に、大神と話してたんだって？」

「っ！？　……ちょっと、ね。大丈夫、光一が気にする事じゃ」

「あのな……傍から見て大丈夫じゃないから聞いてんだよ。ただでさえ雄二があの有様なんだから、１人悩んで貰っても困るんだ」

雄二が総指揮を務められない以上、他にそれを成せるのは光一しかいない。

ただでさえ雄二との間には不協和音があると言うのに、明久までこんな有様。

光一にとっては、正直手が足りなかった。

「……ごめん、僕が不甲斐ないばっかりに。相棒失格だよ」

「バカ言うなよ。こういう頭脳労働は俺の役目……って、そういう事かよ」

『ストライークバッターアウト！　チェンジ！』

「早いなおい！？」

光一の叫びを皮切りに、守備位置へ着くメンバー達。

科目は物理で、再度光一がキャッチャーに入り、雄二がセンターで

近藤がショートに。

「明久、俺はお前を信じてリードする。だからお前も、出来ればで良いから俺を信じろ」

「僕は元々、光一を信じてるよ」

そう言われた光一は、嬉しそうににっと笑って……。

「上等だ。よし、俺達の力見せてやろう」

と言って、拳を突き出す光一。

血の涙を流し、悲鳴を上げる姿だったら……

「……なんだ、簡単だったんだ」

「？」

「ホント、僕ってバカだよ……大神先輩の言葉に踊らされて、こんな簡単な事にも気付けなかっただなんて」

そう言って思いっきり息を吸い込み、光一の拳にコツっと自分の拳をぶつけて……

「やろう！　僕達斬り込み隊長コンビの力、見せてやるんだ！」

「上等だ！」

しかし虚しく1番の布施がヒットで、2番の寺井がセーフティーバント。

そして……。

「よろしくお願いします」

3番の高橋女史。

「さて……」

光一は考える。

相手は野球に関してはズブの素人だが、頭の切れは随一。

かなり短く持ち、スイングと番との中間くらいで軽く掲げる様な構え

「……よし」

光一がサインを出し、明久が頷く。

そして、アウトコースの高めに少し遅い球を……。

「まぁ、予想どおりですね」

コースを読まれ、あえなくプッシュバントを打たれてしまう。

そしてコースは……

「近藤、とれよ！　外野はダッシュでカバーしろ！！」

光一が指示し、コース上にいる近藤がグローブを構える。

その後ろへ、レフトの須川がダッシュ。

「よし、須川！」

「オッケー！」

近藤がキャッチし、召喚獣は球の勢いで吹っ飛んでしまう。

レフトの須川がカバーに入り、何とか近藤を受け止め……

「「「何いぃいいっ!!?」」」

一緒に吹っ飛ばされた。

「高橋先生！　今度はきちんと一塁から順に回ってください！」

「わかっています。同じミスは、二度と犯しません」

高橋女史の召喚獣が、点数に比例したスピードで一塁ベースを踏み、二塁三塁と順に踏んでいく。

そのスピードは……

「高橋先生……アウト、です……」

「なぜですか？」

早すぎて前の走者を追い越してしまっていた。

「……前のランナーを抜いたらアウトになるってルールがあるんです」

「そうでしたか」

光一が呆れながら説明すると、納得した高橋女史は不満そうな眼を元に戻し、自軍のベンチへと戻って行った。

「えーっと……はい。タッチアウトっす。ほい、島田」

「え？」

「オッケー。それじゃ、こちらもアウトです」

「あ」

そんな奇抜なアクシデントに、またもや呆然とする2名のランナーその間に、トリプルプレイを実行する、サードの横溝とセカンドの美波。

「……3アウト、チェンジ」

力なく、呟くように審判から宣告された3アウト。

「まさかあの高橋先生が、あんなおかしな行動をとるとは……」
「僕、密かに高橋先生に憧れていたんですけどね……」

「……なんとなく身近に感じられるな。ああいうの見ると」

そんな風に、とぼとぼと歩いてベンチへ戻って行く、布施教諭と寺井教諭。
常日頃、職員室でビシッと知的な高橋女史を見ている分、ショックは大きい。

当然補習でマンツーマンでいる光一も、ショックは大きいが親近感が湧いていた。

「っと、さて……良いかお前ら！　この回の科目は物理だ、何としても俺に回してくれ！」
「そうだ、まだ希望は潰えていない！」
「そうだよ、久遠の物理は最強なんだ！」

光一の鼓舞に、全員が湧いた。
何せこの回は物理。一人出れば、確実に光一が打つ事が出来る。

「というか、最初からそうすればよかったのに」

「万が一にも世界史で回ったらおじゃんだろ。さて、７番は確か明久だったな？　よし、可能性は……」

「……期待してるぞ、坂本。吉井じゃ当てにならねえ」

「いざって時に役に立たない吉井より坂本、お前が頼りだ」

「頼む、こんな久遠の名ばかり相棒は当てにならない。ホームランをかっ飛ばしてくれ」

揃って明久をけなしながら、次の雄二に声をかけた。

「……やっぱり僕じゃ」

「あの、明久君。頑張ってくださいね」

そこへ、瑞希からの温かい声援が。

「……はぁっ」

しかしそれも耳に入らない程、明久は落ち込みながら打席に。

先ほど光一に炊きつけられたから元気も、完全に消え失せていた。

「折角上げたモチベーション下げてどうすんだアホ！」

「「「だって吉井だぞ？」」」

「物理だっつっただろうが！」

「「「あっ！」」」

「あじゃねえ！　ああもう、どいつもこいつもいらん手間ばっかかけさせやがって！！」

『化学教師　布施文博　物理２６３点』

ＶＳ

『Ｆクラス　吉井明久　物理１３７点』

点数差こそあった物の、明久にして見れば十分対応できる範囲内。
しかし……。

『デッドボール！』

「いったあああああああっ！」
「す、すいません吉井君……力加減に失敗してしまって……」

何とか塁には出る事が出来た。

「さて、俺の出番か」

ネクストバッターの雄二が打席に。

「雄二、無理に打つな。ここは俺に……」
「黙れ」
「おい！」
「うるせえ！」

雄二が光一の抗議を無視し、打席に入る。

「今度は失投しない様に気をつけなくては……」

ピッチャーの布施教諭の召喚獣が、いざ投球。
さっきデッドボールを出したからか、コースはド真ん中で急速も普通。

「ストライク！」

しかし雄二は、その球を見てぴくっと動き、そのまま見送った。

「……ダメだな。あの野郎、今判断に迷いやがった」

「じゃあ、どうするんですか？」

「……だったら」

次はアウトコース低めの球で、ギリギリストライクゾーン。

「こ……の……っ！」

先ほどと同じように雄二は身体を一瞬震わせ、そこからバットを動かした。

カツッと半端な音を響かせ、ボールがピッチャーの前に転がる。

「ファーストへ！」

しかし明久が既にダッシュしており、セカンドがピッチャーに指示。

光一の指示で、明久はピッチャーが投げる前に盗塁を仕掛けていた。

「……正直賭けだったが、上手く行ったか」

「では、行ってきます」

「姫路、打つなよ？」

「はい！」

モチベーションの下がっている明久では心配だったが、何とか事なきを得てほっと一息つく光一。

しかし……。

「おい、今のは俺が凡退するとみての指示か？」

「だったらどうした？」

「テメエ……」

雄二がぐいっと、光一の胸ぐらをつかみ上げた。

「離せよ」

「お前はよっぽど俺をコケにするのが好きらしいな！？」

「確かに調子に乗ってたのは事実だがな、テメエがいつまでも答え先延ばしにして逃げるのが悪いんだろうが！」

「お前に何がわかる！？」

「やめるのじゃ２人とも！」

ベンチ全員で取り押さえてる間に、瑞希が見送り三振。

そこで光一の打順が回ってきた。

『化学教師　布施文博　物理２６３点』

ＶＳ

『Ｆクラス　久遠光一　物理７０１点』

「さて……ん？」

ふと鉄人の召喚獣を見ると、立ちあがるどころかミットをストライクゾーンに構える。

成程、正々堂々と……か。鉄人らしい。

と、光一は内心で笑みを浮かべる。

そして第１球を……

「ホームラン！」

見事にホームランを打った。

「……ちっ！」

周囲が沸き上がる中、雄二が忌々しげに舌打ちをした。

第二百二十一問

光一の2ランホームランにより、点数は同点。
勝負の均衡は持ち直され、Fクラスにも勝機が見え始めていた。
しかし……。

「……」

先ほどの光一の指示の所為で、雄二の機嫌は悪化の一途をたどっていた。
それに加えてホームランともなれば、光一に対する不信感も増加傾向。

「おい雄二」
「あァ？」
「さっきの盗塁の事は悪かった。だがお前も子供じゃないんなら……」
「黙れ。お前の口車に誰が乗るか！」

雄二が光一の胸ぐらをつかみ、グイっと掴み上げ拳を光一に見せる様に握りしめる。
それを見ても光一は表情一つ変えず、ため息をつき……。

「良いぜ、やれよ」
「……お前の華奢な体で受けたら、どうなると思ってやがる？」
「悪名高き悪鬼羅刹の拳だ。ただじゃ済まないのは確かだな」

それでも、光一は表情一つ変えない。

「知ってて表情変えないって、どういう神経してやがる？」
「俺にも責任があるからこそだ。さあやれよ、お前にはその権利がある」
「……ちぃっ！」
毒気を抜かれ、忌々しげに光一を解放する雄二。
光一に心配する様に歩み寄る明久が、ふと聞いてみる。
「ねえ光一、そろそろ教えてくれない？　婚姻届じゃないっていうんなら、霧島さん一体何を没収されたのさ？」
「そうだな。お前がそこまで言うからには、相応の物なんだろうな？」
「……ヴェールだってよ。如月グランドパークでの、な」
「なっ……！　おい、それは本当か！？」
「ああっ。一応事情は俺の知る限りで話しておいたから、誤解だって理解はしてる。けどショックが強すぎたせいか、今は保健室で寝込んでる」
「え？　あのヴェールですか？」
「あれ、没収されちゃったの？」
そこへ瑞希と美波が聞きつけ、話に割り込んできた。
「前に翔子ちゃんが、嬉しそうにお話してくれました。皆の前で自分の夢を笑われた後で、坂本君が“俺はお前の夢を笑わない”と言いながらプレゼントしてくれた、大事なヴェールだって」
「あ。それ、ウチも聞いたわ。お泊まり会の時に幸せそうに言っていたの、すごく印象的だったもの」
「だとすると、全部が繋がるよ……そんな風に言ってくれた本人が

“つまらない物”だなんて、ああなってもおかしくない」
「……」
瑞希、美波、明久の言葉を受け、目を伏せる雄二。
しかし……
「で、どうするんだ？」
「光一……？」
「俺はごく最近まで、誰かを愛するどころか信じる事も知らなかった。だからこそ、霧島の気持ちは尊重したかったが、その挙句の果てがこの様だ。だから俺は、何としてでも取り戻したい……お前はどうなんだ？」
「……わかりきった事聞くな」
光一がにっと笑い、キッと表情を引き締める。
「なら行くぞ。そろそろお前の策を使う頃合いだろ？」
「ああっ、悪いな。役割全部押し付けた挙句、八つ当たりしちまって」
「貸しが出来たな。さて、これ使うぞ」
と言って、左手の融合媒介の腕輪を掲げて見せた。
今回は野球なので、代表格との融合リミッターは解除済み。
「次は英語Wで、相手は鉄人。抑えるには必要不可欠だ」
「ああっ。次はピッチャー俺で、キャッチャーは光一。そして……明久、融合召喚だ」
「うん」
配置はショートを切り捨て、内野が3人。

光一の召喚獣が明久と雄二の召喚獣の背に手を当て……

「クロス！　さあやるぞ！」
「「おう！」」

『Ｆクラス　坂本雄二（＆吉井明久）　英語Ｗ２８５点＋１１１点』
＆
『Ｆクラス　久遠光一　英語Ｗ４７５点』

「ようやくお前達の本領発揮か」
「もうこれまでの様にはいかねえぜ鉄人」

明久のコントロール主体から一転し、３倍以上の点数による剛速球。
それに手も足も出せず、あえなく教師陣は連続三振。

「やっぱ俺達は、こうじゃないと」
「そうだね」
「けっ。お前達となんて冗談じゃないが……まあ良い」

バシッ！

３人でトライアングルを組み、バシッと手を叩きあう。

「勝つぞ！」
「「おうっ！」」

そして、２－Ｆの攻撃回。

「おっしゃテメェら！　こっちの攻撃はあと２回！　キッチリ点数もぎ取って、俺らのお宝を奪い返すぞ！」

「「「おうっ！」」」
「向こうにや点数は負けてるが、運動能力じゃ決して負けてねェ！　若さってもんを見せてやれ！」
「「「おうっ！」」」
「切り込み隊長コンビが整えた同点の場を活かす為にも、ここから先は俺も全力を出す！　だから……お前らも協力してくれ！　没収された、大事な物を取り戻す為に！　合言葉は――」
「「「Ｇｅｔ　ｂａｃｋ　ＥＲＯ－ＢＯＯＫ！」」」
「反撃、行くぞお前ら！」
「「「っしゃぁーーっ！」」」

雄二も本領発揮。
その所為か、Ｆクラスもいつもの調子に戻り、勝機は出てきた。

「秀吉、島田、須川、作戦だ。良いか？　どうせこのままともにむこうとやり合った所で、勝ち目はねえ。だから、その後の例の作戦に全てをかける。お前らは何とか、時間を稼いでくれ」
「うむっ。了解じゃ」
「その代わり、次の回はしくじらないでよね？」
「エロほ――参考書の為だ。時間稼ぎ位幾らでもやってやるさ」

３人は首を縦に振り、快く作戦を承諾した。

『エロ本、抱き枕、水着写真、シャワーカーテン……』

「さて秀吉、島田。バットは短く持って、当てる事を優先しろ」
「んむっ？　須川には教えぬのかの？」
「いや、あいつには後で“色々と”仕込むつもりだから大丈夫だ」
「……ろくでもない雰囲気満々なんだけど？」

「プレイ！」

反則にならない程度に引き延ばし、バッターボックスに入る秀吉。

「ねえ雄二。仕込みはどう？」

「ばっちりだ。クラスの連中にも、キチンと指示は出してある」

「となると、この回がカギってわけか」

「ああ」

『ストライッ！　バッターアウト！』

「くっ……すまぬ」

粘りに粘った物の、秀吉は三振。

そして島田も打ち取られてしまい、残るは……。

「そろそろ来ても良いと思うんだけど……」

「あと少しで始まる。頑張ってくれ須川……」

「いや、大丈夫だ。仕込みはしておいた」

「「仕込み？」」

「ファール！」

話している間にも試合は続く。

その間須川は、奮起していた。

「……ふっ、ふふふっ……」

邪なオーラを醸し出しながら。

「……お前、何やったんだ？」

「事の詳細がバレただけで、返却はまだなんだよ。俺の没収品」
「……それだけで何したかが一瞬でわかったよ」

カウントは２―１。
向こう側は余裕あるのに対し、こちらはもうミスは出来ない。

「ファール！」

アウトも時間の問題ともあり、ボールが投げ込まれるたびに背がぞっとする。

「……来た」

不意に、ムッツリーニが小さな声で呟いた。

『――ジジ……ジ……』

後者に取り付けられたスピーカーから、ノイズ交じりの声が聞こえてくる。

「来たかっ！」

雄二の嬉しげな声に一瞬遅れ……。

『これより、中央グラウンドに手、借り物競走が始まります。出場選手の皆さんは、所定の場所に――』

「「「来たぁッ！！」」」

クラスの声が重なった。

その直後、須川の打ち上げた球が補給され、アウト宣告。

「どうやら、上手く行ったな」
「ああ！　よくやってくれた、秀吉！　島田！　須川！」
「吉井、久遠、坂本。何を喜んでいるのか知らんが、守備につく準備をしろ」

はしゃいでるＦクラスの面々に近づき、鉄人が準備を促す。

「まあ待てよ。そう焦るもんじゃない」
「？　何を待てと？」
「今にわかりますよ。そろそろ来ますから」

状況を把握しきれてない鉄人に、明久が笑って見せる。
すると、その向こうからこちらに駆けてくる複数の人影。

「遠藤先生、借り物競走です！　すいませんが、一緒に来てくださいっ！」
「えっ？　でも私、今からここでリーディングの立ち会いを」
「良いから来てください！　今日は野球より、体育祭が優先されるんですから！」

先生達が目を見張る間に、立会の遠藤教諭に続き２人の教師が連れて行かれた。

「坂本、これは貴様らの作戦か？」
「さて、どうだろうな」
「とぼけるな。さっきからここにきている生徒は、全員がＦクラスの人間だろうが」
「偶然じゃないか？」

もちろん偶然じゃない。
教師チームのオーダーが判明した際、雄二がクラスメイトに頼み先生を借り出して貰ったのだから。

「これで立会の教師はいなくなったな」
「仕方ない。こうなったらさっきの回の……」
「それはルール違反だ鉄人。同じ科目は二度と使わないって、ちゃんとルールにあったはずだ。なあ雄二？」
「ならばどうしろと言うんだ？　立会の教師は他に居ない。試合に参加している教師は立会が出来ない。久遠の融合召喚で８対８にでもするつもりか？」

鉄人はこれを利用し、融合召喚で有利に事を進めようとしていると睨んだ。
しかし……

「いや、まだあるだろ？　勝負出来る科目がな」
「だから何を言っているんだ久遠」
「そうだね。立会が居なくても、勝負が可能な科目が残ってます」

これが雄二の考えた作戦。
体育祭のプログラムをルールを元に、Ｆクラスが勝つために練り上げた物。

「５回の勝負は、体育祭の……実技で勝負と行きましょう」

授業科目だからと、そのすべてが座学と言う訳じゃない。

「さあ全員、グローブをつけろ！　５回の勝負はハードだぞ！」

雄二が事前に野球部から拝借したグローブを指さす。
野球大会決勝戦最終回。召喚野球と銘打たれたはずだが、たった1回だけの教師と生徒の野球大会が幕を開けた

第二百二十二問　召喚獣野球大会編　エピローグ

「さーて、行くぞ」

ピッチャーマウンドには光一が立ち、キャッチャーには明久が。

「ボール届くのか？」

「雄二、マウンド立つたびに言うな！」

普段Ｆクラスは、授業を抜け出し野球に興じている事が多い。

その際明久が先発で、光一が抑えと言うピッチャー陣を誇っている。

球速とスタミナこそない物の、抜群のコントロールを誇りカーブの切れも明久以上。

何より……

「ストライーク！」

「……ナックル、ですか？」

決め球として、ナックルボールを投げられる。

体力の都合上抑えでしか投げれないため、何か決め球が欲しいと言う事での選択なのだが……。

投げ続けているうちに投げれるようになっていた。

「ストライーク！　バッターアウト！」

「よし、次だ！」

「体力大丈夫か？」

「だからうるせえぞ雄二！　打順が回る事ないなら、ここは俺が抑

える！」

その後、２人に粘られはしたものの、何とか凡退に切って取った。。

「ふぅっ……」

「いや、もう息あがってるのかよ」

「だからうるさい。明久、雄二、こっからはお前らの役目だ」

光一が拳を２人に向かって突き出す。

明久と雄二が、順番にコツっとぶつけ……。

「絶対打て。そして勝つんだ！」

「当然だ！」

「やろう！」

６番が三振に取られ、ここで明久。

「迷いは吹っ切れた様だな？」

「完全に、とはいえませんけどね。今でも気を抜いたら迷いそうですけど、光一が信じてくれるんならそれに応えなきゃいけない」

「良いコンビだお前達は。だがそれでも、こっちも教師としてのプライドがある。そう簡単には譲ってはやれんな」

ピッチャーの大島教諭がセットポジションをとり、モーション。

そしてその後、鉄人のミットにボールが収まる。

「ボール！」

その後……

「ファール！」

カウントは２－３。

「どうした吉井、フォアボール狙いとは随分消極的だな」

「勝つためですよ。それに……」

「なんだ？」

「今日の主役は僕じゃないんです」

『ボール！　フォア！』

「それより先生こそいいんですか？」

「なにがだ？」

「勝負に徹するなら、僕と雄二を敬遠して姫路さんを狙うべきだと思うんですけど」

「ふん。見くびるなよ吉井。以前にも言っただろう、“俺達教師は生徒の模範となる存在だ。向かってくる生徒を正面から受け止めずに何が教えられる”と」

そのまま会話を打ちきり、バットを雄二に渡しに。

「それじゃ、後は任せた」

「わかっている。必ず打つ」

ワンアウト１塁。

カウントは１－２となり、第四球……

「……ここで終わってたまるかよ」

試合は完全に光一任せ。
なのに自分は、勘違いに振り回されて……

「あのモヤシ野郎に借り作ったまま、ダメでしたなんて認めるか！」

キィンッ！

試合は動いた。

雄二のバットが球を芯でとらえ、快音が響くと同時に、で一塁ランナーの明久が次の塁をめがけ疾走。
打ったボールは長打を警戒し、深く守りすぎたセンターの前に落ち、急いで前に走る。

その間明久は2塁ベースを蹴り、3塁へ。
そして……

「「「吉井！？」」」

わき目もふらず、ホームへと向かった。
ここで止まった所で、次が瑞希であり最後が未だ息を切らしている光一。

「任せるって……言ってくれたんだ！」

中継の大島教諭がバックホーム。
ベースに飛び込もうとする明久の前に、キャッチャーの鉄人がブロックの体制で立ちはだかる。

「……！」

明久が歯を食いしばり、耐性を低くして衝突に備える。
同じように腰を落とし、衝突に備える鉄人。

しかし、それと同時に明久は……

「――っ！？」

突然回り込むように、鉄人の前から姿を消した。
腰を落としていた故に俊敏な動きが出来ず、明久はホームベースに手を伸ばす。

土ぼこりが舞い、しばらくの静寂……

「セーーーーフ！」
「「よっしゃあああああああああああああああっ！！！！」」

Ｆクラスが一斉に声をあげた。

「やってくれたな、吉井」
「相手が西村先生だから、いけると思ったんで」
「俺だから？」
「言ったじゃないですか。“教師は生徒を真正面から受け止める”って」
「成程な。ならば、これからはお前への接し方を変えていくとしよう」

『２－Ｆ対教師チーム。３対２で２－Ｆの勝利です。お互いに礼！』
「「「ありがとうございましたーっ！！」」」

こうして、野球は幕を閉じた。

そして野球も終えて、最終種目のクラス対抗リレーの後。

『――体育祭総合優勝、３－Ａ。代表は前へ』

『はいっ』

グラウンドに整列し、優勝クラスの表彰。

総合は３－Ａが白夜の功績により、見事に１位を獲得。

２－Ｆは学年で４位、全体では１３位。

借り物競走での無得点が響いた所為か。良い線は言ってもこの結果となった。

しかし……

『――生徒・教師交流召喚獣野球。優勝、２－Ｆ』

Ｆクラスメンバーにとっては、それ以上にこっちが優先。

これで奪われた宝が帰ってくる……と言う高揚でいっぱい。

『――それでは、これにて文月学園体育祭を終了します』

各競技の優勝クラス発表とババァ長のありがたいお話も終わり、全プログラム終了。

他のクラスの生徒達が帰路に就く中、２－Ｆは……

「さぁ、俺達のお宝を返して貰おうか！」
「俺のＤＶＤ！　俺の写真集！　俺の抱き枕！」
「俺の聖典（エロほん）！　俺の宝物（エロほん）！　俺の参考書（エロほん）！」
「……まぁ、約束は約束だ。没収品は返還しよう」

口々に没収品の返還を要求するＦクラス生徒を見て、鉄人はため息をついて仕方なさげに呟いた。

「では、この紙に没収された品と、名前を書いて提出しろ。一両日中には返還する」
「「「はーい」」」
「おいおい、落ちつけよ。まずは女子からだろ？」
「あっ、そうだったな。レディファーストだ」

光一が落ちつく様に促すと、揃って瑞希と美波と秀吉（笑）に紙を手渡す。

「なぜワシに手渡す!?　しかも今何かバカにされた様な気がするのじゃ！」
「早くしろ。つっかえてるんだから」
「んむっ？　光一は目的はすでに達成されておるじゃろ？」
「ああっ、それなら……」

『え？　ボク達の没収品を？』
『ああっ。俺にとっては賞品自体意味がないから、それならいっそ可愛い優子と愛子の為に使おうと思ってね』
『やったぁっ！　光一君だーい好き！』
『もうっ、光一。そういうズルはよくないわよ？』
『別に他のクラスの没収品がダメってルールはないから良いんだよ。

それとも優子は、俺の気持ちを受け取ってくれない？』
『……バカ』

「と言う訳」
「良いですね。そういう互いを思いあってる間柄って」
「愛し合ってるわね……いっそウチも、そうした方が良いのかな？」
「島田はそうしたほうが互いの為だ。しかし……」

ふと光一は、ある違和感を感じていた。

「？　どうしたの、光一？
「……なんで紙に書いて提出なんだ？」

普通没収品を返すなら、そう手間はかからない筈である。
何せ保管場所に赴いて探せばいいのだから。

「……待てよ？　あのクソババァが素直に返却なんてやるか？」
「え？　まさか……」
「……明久、諦めた方がいいかも知れんぞこれ？」
「え！？　……でっでも、皆ほとんど書き終えてるよ？」

『エロ本エロ本エロ本……』
『写真集写真集写真集……』
『抱き枕抱き枕抱き枕……』

「……どうでも良い気がするが？　それに俺、あくまで“利害の一致”で協力してた訳だし、俺の目的もう達成されてるから意味ないんだが？」
「……そうだね。光一を信じてゲーム類だけ返して貰う事にして、

エロ本は諦めるよ」
「……その方が良いな。俺の予想が当たってたら、お前確実に土の下かもしれないし」
「……冗談に聞こえないからやめて」

光一は優子と愛子の没収品の書いたメモを取り出し、サラサラと紙に書いていく。
ふと、他の書きこまれた項目を見て……

“Hなお姉さんが（ピー）して（ズキューン）してあげちゃう☆”
“お兄ちゃん、（ピー）で（ズキューン）な事教えて”
“（ピー）な悪い子に（ズキューン）なお仕置きをして！”

「……こんなもん平然と書く奴が大勢いるクラスって、世間一般から見てどうなんだ？　絶対朝倉を近づけん様にしないと」

密かに妹同然の少女を守る事への決意を固める光一だった。
用紙を提出して、和気藹々と勝利をかみしめているメンバーに、鉄人が……。

「……さて。それではここに書かれた没収品は」
「で、ちゃんと返してくれるのか？　なんか“今になって（笑）”急に嫌な予感がしてきたんだが？」
「心配するな久遠。後日キチンと“郵送”する」

ほぼ全員の目が点になった。

「宛名はお前達の保護者になる。全員、到着を楽しみにしているんだな」
「「「はぁあああっ！！？」」」

「よかったなお前ら。海外からのゲストも大満足だったようで、学園長は機嫌よく返還を快諾してくれたぞ。“学園としては返還してやるけど、子供として持っていいものかどうかの判断は、アンタらの保護者に一任する”と言ってな」

「「あっ、あのババァーーっ！！」」

「……やっぱりか」

「……光一を信じて良かった」

そこらからクラスメイトの怒号が響く中、光一と明久はほっと息をついた。

秀吉は元々そんな大層な物を持ってきてはいないが……。

「はぅ……まずいです……このままだと、お母さんに抱き枕が見つかっちゃいます……」

「ウチも、どうしよう……抱き枕じゃなくてサンドバッグだって言えば、何とかなるかな……」

「サンド……？　そうですか……美波ちゃんも3度目ですか……実は私も、これで見つかるのは三度目なんです……」

「待って瑞希。勝手にウチまでそっちの世界に引きずり込まないで」

と言う話を女子2人はしていた。

「それではＨＲを終了する。各自、寄り道などせずにまっすぐ帰る様に」

「「「あっ！」」」

言うだけ言うと、さっさと鉄人は校舎へと歩き去って行った。

「さて、帰るか。優子に愛子もお待ちかねだし」

「そうだね。皆……」

「皆、職員室を襲うぞ。俺たちの生きる道はそれしかない」

「良い事を言ったな。俺もそう考えていた所だ」

「実は俺もだ。気が合うな」

「忙しそうだから、僕達も邪魔しないように帰ろうよ」

こうして、体育祭は幕を閉じた。

……幾多ものドラマとコントの入り混じった、多大な思い出を残して。

「……良い気なものだな。毒を拭った程度で落としたつもりとは」

「それで大神君、これからどうするのですか？　体育祭が終われば、Fクラスは確実に試召戦争に動きますよ？　もし彼らが勝てば、絶対につけ上がって学園の評判は……」

「地盤はもうすぐ固め終わる。後は……小暮、お前から見て確かなのか？　吉井明久にあの女、姫路瑞希が好意を寄せていると言うのは」

「ええ。間違いはありません」

「そうか……ならば話は終わりだ」

第二百二十三問　閑話　とある超人の葛藤と探求

大神白夜は、酷く飢えていた。
それは決して身体的な空腹等ではなく……
価値を奪い取り、より強くより完全となりたいという、才能の空腹。

「……誰も彼もが、弱すぎる」

召喚野球大会。

点数を下げ、手を抜いてもなお、全く届かない３－Ｂ。
今更ながら、くだらない事をしたと言う後悔が押し寄せていた。

その後の２－Ａこそそれなりだった物の、自身の才能が喰らうに値する価値は見つける事が出来ず。
そして、特に惜しまれたのが……

「……吉井明久との再戦は、果たせず仕舞か」

白夜の脳裏に浮かぶのは、学園１のバカと呼ばれながら召喚獣勝負で自身の召喚獣の腕を斬り飛ばした、とある少年。
思わぬ価値との遭遇と、勝敗が見え隠れし始めた勝負ともいえる戦い。
それが、乱入により無効となってしまった事。

その事が今も飢えとなり渇きとなり、白夜の脳髄にくすぶり続けていた。
かといって現状で再戦を行った所で、色々と誤差も無理も生じる事

もまた事実。

無責任や自分勝手は、自分だけの失態にあらず。
それを理解し、自身の才能と信念に誇りを持つが故に、自分の失態の尻拭いを人任せにするなど言語道断。

それ故にこの空腹を呑みこみ、耐え続けるしかないのが現状。

「選ばれし者、天才と呼ばれてはいても、所詮は私も人間。出来ない事は当然の様に存在し、出来る事の限界は当然の様に存在する……わかりきってはいた事だがな」

それでも白夜にしてみれば、才能と能力を考慮すれば出来ない事を探す方が難しい。
実際白夜自身が勝敗の混在する勝負など、ごく最近まで全然と言って良いほどした事がないのだから。

「そんな事を言っても仕方がないな……そうだ、西村先生と勝負をするか」

と、早速職員室へと赴く白夜。

「……ん？」

ふと、職員室から怒号と騒音が響いてきた。

「……また２－Ｆか？　体育祭も終わったばかりだと言うのに、揃いも揃って体力が有り余っているとは。ある意味素晴らしき体力と根性、と言うべきか？」

私も見習い、トレーニングをして帰るべきだったな。
そう反省しつつ、職員室へ歩を……

ガタンっ！

「待たんか！」

進めようとして、騒ぎの一端がこちらへと近づいてきた為足を止める。

「くっそぉっ、また待ち伏せかよ！？　教師のクセに、汚え真似を！！」
「正々堂々の正面突破に対して、なんて卑怯な！」
「約束まで破った挙句、この酷過ぎる仕打ち。あいつ等は人間じゃ……んげっ！！」

雄二と近藤、君島の3人が進路方向にいる人物を見て、顔を青ざめた。
目の前にいるのは、冷血の暴君と呼ばれる超人こと大神白夜。
更に追ってくるのは鉄人。

今まさに“前門の超人、後門の鉄人”である。

「くそぉっ！　こうなりゃあの超人野郎ブチのめすしか道はねえ！」
「なっ！　バカ、よせ！！」
「考えてみりゃ、吉井ごときに腕を切り飛ばされてんだ。実は大した事ないってオチの可能性だって……」

雄二の制止も聞かず、近藤と君島が白夜に飛びかかり拳を突き出す。

「……吉井ごとき、か」

メキっ！！　×2

「「ギャアアアアアアアアアアッ！！」」

腕を抑えながらのた打ち回る2人に目もくれず、白夜は鉄人西村を見て歩を進める。

それと同時に、雄二が鉄人に首根っこを掴まれた。

「西村先生。トライアスロンで勝負してもらえますか？」

「トライアスロンだと？」

「……アンタ、トライアスロンも出来るのかよ？」

「神に選ばれし者たるこの私には、現時点では西村先生が最も最適な相手だ」

「だったらどうして明久ごときに興味向けんだよ？」

また“ごとき”か……。

と白夜は思う。

「震えるしか出来ない猩々ごときには、何の関係もない事だ」

「ぐっ……揃いも揃って俺をゴリラ扱いとは、流石は兄弟だな」

「不快だが事実である以上、受け入れるしかあるまい。貴様の様な伴侶を否定し、足蹴にする矮小な器と一緒にされても困るな」

「俺は独身だ！」

「……それで西村先生？」

「明日の午前でいいならな」

白夜は頷くと踵を返し、靴箱へと歩を進めた

「……弱さは罪。つくづく思い知らされるな」

白夜は思う。

自身が光一に負けてすぐ、Bクラスは宣戦布告を仕掛けてきた。
それ以外でも、自身を狙い奇襲や闇討ちを仕掛けてくる者たち。

敗北した事は事実。
それは実力主義を掲げる者として、否定をする訳にはいかない。
しかし……

「なぜそれが私の弱体化につながる？」

四肢や内臓を失った訳でもなく、車椅子が必要となった訳でもなく、病にかかった訳でもなく……。
増してやこの才能も能力も、超反応も陰りを見せるどころか失った訳ではない。

光一には実力で負けた。
吉井明久には、私の腕を斬り飛ばすだけの力がある。

……これはまぎれもない事実だと言うのに。

「……弱者の思考は、私には理解出来んな」

それだけの単純な答えだと言うのに、弱者はまぐれや偶然と言う曖昧な不正解を、無理やり正解としたがる。
先ほど、吉井明久を貶したバカ共がそうである様に、真実を見ようともせずただ目先の戯言にしか目を向けない。

「……くだらないの一言だ」

実践主義と言うのは、そうじゃないだろう。
確かに吉井明久は、頭のねじが緩んでいる行動が目立つやもしれんが、だからと言って可能性に目もくれないと言うのは、どうなんだろうか？

聞けばあの戦いが原因で、吉井明久はクラス内で嫌悪されていると言う話も聞く。

「……やめるか。もうすぐ終わる以上、無駄な思考だ」

吉井明久との戦いで、自身の超反応にも弱点がある事がわかった。
そして条件こそ付くやもしれないが、自身を恐れても尚勝利に喰らいつこうとする貪欲さ。

得る物のある戦いを行い、そして初めて自分に対し最後まで勝とうとした。
自身の手足となろうと、自身の糧となろうと、決して無駄にはならないだろう。

「……まずは西村先生から、だな」

その次の日。

「……僅差か」
「ふふっ……良い勝負でした」

鉄人とのトライアスロンは、僅差で白夜の勝利。

競合ともいえる勝負は、自身を満たすには至らなかったが……

それでも、不完全燃焼を吹き飛ばすほどには満たされていた。

「……ではこれで。私はこれから次を探し出し、成さねばなりませんので」

「俺でもお前を満たすには足りない様だな」

「満たす？　ふふっ、御冗談を……私の目指す、未知なる完全な存在となった私は、まだ影すらも見えはしない」

「……どこまでも、底知れない男だ」

満たされない……いや、満たされてはならない。

目指すべき物……そこに至っても、まだ足りない。

自分でもこれは傲慢な願いだと理解は出来ている。

ならば自分の強欲も力も才能も、憤怒すらもその傲慢の一部でしかない。

「……焦る必要はない。未知なる可能性が生まれては消えていく、この素晴らしき世界に私は存在している。次はどの可能性を……どんな未知なる私を選ぼうか？」

第二百二十四問　閑話　とある少女の願い

とある休日。

優子と一緒に、秀頼の散歩を兼ねた買い出しの帰り。
光一はふと、ある場所につくと足を止めた。

「……」
「？　どうしたのよ、光一？」
「きゅ～ん？」

「いや、ちょっと懐かしい場所が近かったから」
「懐かしい？」
「優子は知らなかったっけ？　この先だよ、俺が朝倉と出会ったのは」
「ああっ、光一が朝倉さんを助けた場所？」

光一が指さしたのは、建物の間の人気のない通り道。
良からぬ事を行うには、最適な薄暗い空間だと優子は思う。

「相変わらず、人気どころか色気もない場所だな」
「でも朝倉さんにとっても光一にとっても、互いを変える大きな意味のある出会いがあった事は事実じゃない。場所の色気なんかより、意味が大事でしょ？」
「言う様になったな」
「一応ね」
「わんっ！」

光一がそっと笑みを浮かべ、その場を後にする。

優子はその顔を見て、ふと後ろを見る。

「……感謝するべきよね。状況的に失礼だけど」

泣く事、怒る事、傷つける事、憎む事、奪う事、貶す事、騙す事。
当時の光一は、本当にただそれだけしか知らなかった。
光一が笑う所も見た事もなければ、光一が楽しいと思っただろう場面も見た事もない。

朝倉歩美と言う少女がいなかったら、今の光一があっただろうか？
そんな光一を見て、自分はいったい何を思っただろうか？

……今以上の後悔があったんじゃないかとさえ、優子は思っていた。

「きゅ～ん？」
「ん？　あっ、ごめんね秀頼」

リードを持ってる優子に、秀頼が“ご主人様に置いてかれてるよ？”と訴えた。
慌てて光一を追いかける優子。

「？　どうした？」
「……なんでもない」

そして、光一の家。
優子は秀頼を抱っこしながら、光一とオセロをしていた。

殆ど黒のオセロ盤に、優子は白で線を結ぶ。

「でもさ、ちょっと不思議だ」
「何が？」
「秀頼がいるけど、優子とウチで２人きりだなんて」
無理もないと、優子は思う。
この家に白夜が居た頃は、光一は自分の家に来る事の方が多かった。居なくなってから来る機会はあったが秀吉同伴が必須で、光一が凶王と呼ばれるようになってからは全く来た事がない。
更に言えば、今の光一になる頃には既に自分達は年頃だった為、気軽に男の１人暮らしの家に行ける訳もない。
まあ歩美は１人が嫌だと言う理由で、何度か光一の家に泊まろうとした事があったが。
「考えてみたら、２人きりの時なんて数える程度しかないわね。凶王様の頃は、色気どころか殺伐としてたんだから」
「本気で優子がうっとおしかったからな、あの頃は」
「仕方ないでしょ。アンタ同級生に先輩どころか先生も病院送りにするわ、警察にお世話になるわで、黙ってろって方がおかしいじゃない」
なまじそうなった事情も知っている為、優子も黙ってはいられなかった。
「……なんだかお互い、謝る事謝られる事ばかりって言うのも、おかしな話ね」
「別に誰の所為って訳でもないどころか、寧ろ誰もが悪いと言うべきか。まあ良くわからんけど、それは水に流すって約束だろ？　……はい、角いただき」

「あっ！　うぅっ……ホント、生きるって難しいわね」
「同感」

記念すべき６００連敗確定と今までに、優子はため息をつく。
手加減しろよとツッコミがあるかもしれないが、以前そうしたら見破られて怒られた事があり、光一も手は抜かない。

「きゅ～ん」
「？　どうしたの、秀頼」

秀頼が優子の腕から逃れると、トコトコととある一角に歩み寄る。
そして自分のエサ入れを咥え、光一達に見せた。

「ああっ、お腹空いたの？　そう言えば、そろそろお昼ね」
「すまん優子、秀頼のメシ頼めるか？　えーっと……優子、スパゲッティにするけど、たらことミートソースどっちが良い？」
「たらこでお願い。秀頼、お座り」
「わんっ！」

ある程度芸をさせた所で、優子がドッグフードを秀頼のエサ入れに入れてやる。
それに顔を埋めて食べ始める秀頼を見ながら、優子はそっと秀頼の背を撫でる。

「のどかな時間ね」

そう呟いても、そんなのは見かけだけだと言う事は理解していた。
表面上は何ともないようにしか見えないが、付き合いが長いだけに優子も秀吉も理解はしている。

「……アタシが言えた義理じゃないのはわかってるけど、どうしたら止むのかな？　光一が白夜さんに傷を刻まれて以来、内心でながし続けてる涙と、上げ続けてる悲鳴は」

白夜が光一を瀕死の重体に追い込んだ。
色々と運命をかえるあの事件に、優子も秀吉も居あわせてはいない。

その事件のすぐ後、光一の両親は離婚し白夜は父親に引き取られ、街を去った。
もう二度と会う事はないと思っていたが……思わぬ場所での思わぬ再会。

けれど、その事件を経て一歩踏み出せた……と言ってはいけないと優子は思う

「出来たぞー？」

光一が湯気をあげるたらこスパゲッティを、テーブルに並べる。
早速優子はテーブルについて、食事の始まり

そして食事の終了後。

「……ＺＺＺ」

光一はソファーで寝息を立てていた。

「本人気付いてないだろうけど、無理続きだったからね。なんとなくだけど、吉井君と気が合うのわかる気がする」

優子が秀頼を抱っこしながらそう呟くと、光一が寝がえりを打った。
……傷のある背を向ける形で、そのまま寝息を立てる。

それを見て優子は、そーっと光一の背に手を当て、優しく撫でる。

「……うぅっ……」

苦しそうな声を上げ始めたのを聞いて、優子は急いで手を離した。
秀頼が優子の手から離れると、光一に寄り添い……

「きゅ～ん（ぺろぺろ）」

光一の頬をなめ始めた。

「……秀頼にも劣るって、どうなんだろ?」

光一は人を頼ると言う事を知らないから、無理やりでも強くなるしかなかった。
それを本当の意味で理解しておらず、結果として優子は白夜と大して変わらない事をしたじゃないかと苦笑。

それに対しての許しが欲しい訳でもなく、今更独占したい訳でもなく……。
ただひたすらに欲しいのは、押し付けがましいわがままな願い

「……好きで居させてくれればそれでいい。虫のいい話だって、理解はしてるけどね」

第二百二十五問　閑話　とある先輩の華麗なる誘惑

「やっほー、ムッツリ君」

とある平日。
ムッツリーニを訪ねてＦクラスにやってきた３年の女性、島津さやか。

ビン底メガネが地味な印象を際立ててる女性だが、スタイルは抜群で本人いわく８８・５６・８７。
美波とは全く正反対の女性と言う声も多々ある。

「……何かしら？　今何か失礼な事言われた様な気が」

「どうしたんです、島津先輩？」
「ムッツリ君にお給料もらいに来たよ。昨日用意できなかったっていうから」

そんな彼女は、ムッツリ商会の助手として日々看板娘として奮闘していた。
ちなみに電気機器メーカーの社長令嬢なのだが、一応２年近い付き合いの光一もそんな風には見ていない。

「……これ」
「ありがとね」

ちなみにＦクラスは大半がムッツリ商会のお得意様であり、さやかの事は周知の事実。
最も、関係自体は隠されてはいるが。

「それにしても、まだまだ暑いね」
「まあ九月も始まったばっかですし、まだまだ残暑が……」
「ふぅっ……」

光一がふと眼を離したすきに、さやかがタイをはずしブラウスを脱いで手で扇ぐ。
その豊満な胸とそれを包む白い下着、そしてきめ細かな肌が露わとなり……

「「「ぶはああっ！！」」」

Fクラス教室内、そして近くの廊下で血の雨が降った。

「脱ぐなと何度言えばわかる！！」
「えー！　だって熱いから」
「とにかく着るのじゃ！」

光一と秀吉が慌ててブラウスを着せる間……

「ぐあああっ、めっ、目がぁぁあああ！！」
「……雄二が見ていいのは私の裸だけ」

Fクラス男子は（1人別の意味で）全滅。

「……」
「あっ、あの、美波ちゃんだって、可愛いですし、足も綺麗ですしスリムですよ？」
「ウチは地味でも良い！　目立たなくても良いから、あの身体が欲しかった！」

「お姉さま、身体でしたら美春が差し上げますわ！　さあ、保健室へ！」
「そういう意味じゃなーい！」

そして1名の女子も精神（と貞操）のダメージに見舞われていた。
更に……

「みっ、見ちゃダメ！！」
「え？　何!?　どうしたの三上さん!?　一体何が……」
「三上さん、それよりこいつ等の掃除手伝って！」

たまたま通りがかった平賀が、三上に目をふさがれていて……
さやかの裸体を目撃し、倒れているEクラス男子の処理に苦労してる中林に、協力をせがまれていた。

ちなみにEクラス女子大半は、その露わになった胸に嫉妬とあこがれの視線を向けていた。

「ろっ、廊下で何をしているんですか!?」
「ん？　どうかされまし……わわっ！　一体何を!?」
「見てはいけません！」

Eの授業の為赴いた英語の遠藤教諭が、Fの授業の為に赴いた布施教諭の目をふさぐ。
そんな教師・生徒が入り混じっての騒動となった休み時間。

そして、昼休み。

「へえっ、そんな事があったんだ」

「あの先輩にも困った物ね」
「……えっと、すっすごい、ですね？」

屋上で皆仲良くお昼ごはん。
光一から“血の雨が降る休み時間”を聞いて、優子と愛子、歩美は苦笑していた。

「それで吉井君達が貧血気味で、美波ちゃんが落ち込んでるんだね」
「そうね。あの先輩地味な印象あるけど、スタイルは抜群だからわからないでもないわ」
「……あの、先輩方？　人前で脱げる事には何もないんですか？」

文月学園に来て以来、どうも非日常っぽい光景に少々怯え気味の歩美だった。

「それはそうと光一、なんでお前はそう平然としてられんだよ？ただ1人冷静に服着ろって怒鳴ってたよな？」
「表現が変だが、俺は顔に出ないし1年以上の付き合いだぞ？　確かに最初こそ動揺はしたけど」
「ある意味すごい話じゃな！？」
「……考えてみたら、確かに」

すっかり慣れてる光一に、全員が呆れていた。
この様子では、特に変な事はなかった事に、優子も愛子も少し安著する。

「お待たせー」

そんな空気に、淡々とした口調の声が割り込んできた。
話題の渦中である、島津さやか本人である。

「あれ？　新メンバー？」
「はっ、はい……あの、はじめまして。朝倉歩美と言います」
「……メイド、癒し系の雰囲気からナースも良いね」
「？」
「あっ、ごめんごめん。あたし島津さやか、３年生だよ」
「……絶対コスプレのモデルにする気だな」
少し呆れる半面、歩美への同情とちょっと見てみたいという興味がせめぎ合ってる光一。
「あっ、ムッツリ君。頬にソースついてるよ？」
「……？」
「ほら、ここ」
ぺろっ！
「「「……はっ？」」」
「……！？（ぶしゃあああああっ！！）」
「きゃっ！」
ほぼ全員がさやかがムッツリーニの頬を舐める事に気を取られた。
それと同時にムッツリーニが鼻血を吹きだし、歩美が驚く。
「あっ、ごめん。直接的な刺激はダメだった？」
「……感無量」
「そう？　それじゃ、いつものようにね？」
手なれた動作でムッツリーニに膝枕をして、鼻にティッシュを詰め

輸血の準備。

「……雄二、どうして顔を拭うの？」
「いや、ムッツリーニの鼻血が付い……って待て！　人の血を舐めてとろうとするな！」

「え？　あの、どうして2人して獲物を見る様な目で、僕ににじり寄るの！？」
「ほっぺにご飯粒がついてるから、とってあげようとしてるだけよ」
「動かないでください。口にソースがついてるから」
「ちょっ、待って！　痛い痛い！　首がもげちゃう！！」

その間に、あっという間に阿鼻叫喚の光景が出来上がり。

「ねえねえ光一君」
「いや、こっちで勘弁して？　はい、あーん」
「ん？　あーん……うん、おいしい」

ちなみに光一は、自分が食べてた唐揚げを愛子に食べさせてあげ、事なきを得ていた。

「……どうしてみなさん、平然としてられるんですか？」
「朝倉さん、深く考えちゃだめよ？　疲れるだけだから」
「うむっ」

数分後

「……トラブルメーカーもここに極まれりだな」
「……そうだね。島津先輩が悪意のない事はよくわかるけど」

ボロボロになった明久と雄二が、揃ってそう呟いた。

「いやいや、ごめんねー」

「……（ペコっ）」

回復したムッツリーニも、同意する様に頷く。

「……一挙手一投足がトラブルを引き起こすってどうなんだろ？」

「あっ、久遠君。そこのペットボトルのジュース、貰って良い？」

「あっ、はい」

ペットボトルのジュースを手に取り、それをさやかに手渡す。

さやかがキャップを開け、呑もうとして……

「あっ」

ぱしゃっ！

手を滑らせ、スカートにジュースがかかった。

「大変です。すぐにふかないと！」

「ああっ、大丈夫大丈夫」

落ちついた雰囲気で立ち上がると……

するっ！

「「「……はっ？」」」

スカートを脱いで、白い下着を露わにした。

「「！！？（ぶしゃあああああっ！）」」

「ぐあああがっ、目が、目がァァァあああ！！」

2人が鼻血を吹きだして倒れ、1人は目を押さえながらのた打ち回る。

「だから脱ぐな！」

「だってしみになったら困るよ」

「脱ぐ方が困るじゃろ！　姉上に工藤、すまぬが後は頼むのじゃ！」

そんなあわただしい昼休み。

第二百二十六問　閑話　とある賑やかで大騒ぎな晩餐　前篇

「え？　今日朝倉の家、誰も居ないのか？」
「はい。お父さんは泊まりで仕事、お母さんも親戚の集まりで」
「じゃあ久しぶりにウチに泊まりに来ない？　ご飯は光一の家で食べればいいし、愛子も誘おうかな？」
「それなら腕ふるうぞ？」
「わあっ！　行きます行きます！」

と言う経緯を経て、３人は行きつけのスーパーとは別の店に買い物に出ていた。
こちらが安売りしてるため、と言う所帯じみた光一の配慮だが。

「結構買ったな。持って帰れるかな？」
「大丈夫なの？」
「大丈夫。この通り、折りたたみ式のキャリーカート持ってるから」

そろそろ歩美が、家に帰って準備をしようと言う流れになった時……。

「あれ？　あそこの列、何でしょう？」
「ん？　あー、あれ福引だってさ。ほら」
「あっ、福引券あるの？　じゃあやって行こうかな？」

そう言って、３人は列に並ぶ。
そして景品の表示を見て……。

『特賞　鎖５０万円分
一等　鎖１０万円分

二等　鎖５万円分
三等　鎖１万円分
四等　鎖５千円分』

「「……」」
「……どうして俺達の行く先々って、どこかこう変なもんばっかりなんだ？」

歩美と優子は絶句し、光一は呆れ気味にそう呟いた。

「あっ、でも見てください。下の商品」

『五等　霜月ホテルペア宿泊券
六等　睦月レストラン無料招待券
七等　高級和牛肉詰め合わせセット
八等　山の幸詰め合わせセット』

「……なんでこれが上位じゃないんだ？」
「まあ良いじゃない。どうする？　やる？」
「やるか。どうせ貰ったんだし」

そして、順番が回る。

「じゃあ１０回で」
「はい、どうぞ」

まずは光一が……

「おめでとうございます！　特賞の鎖５０万円分、大当たりです！」
「大外れの間違いだろ……で、郵送出来ます？　ついでにお中元の

熨斗も」
「はい？」
「いや、疑問符浮かべる位なら出すなよ！」

「……先輩、どちらに送るつもりなんでしょう？」
「大体見当はつくけどね」

それから7回。
鎖１０万円、鎖５万円、鎖５万円、鎖１万円、鎖１万円、鎖１万円、鎖１万円。

「どうして鎖ばっか、しかも上位が優先的に当たるんだよ！？」
「ごめん、光一にやらせたのが間違いだったわ」

光一は運に関してはとことんまで最悪だった。

「まあ良い、お中元として送ればどうとでもなる」
「……お中元で送っていい物なんですか？」
「良い物だから送ってるの。少なくとも、受け取る相手にとってはね」

７４万円分の鎖。
一体どこで使うのだろうと、朝倉は苦笑いだった。

「じゃあ次は優子頼む」
「そうね。まあどうせ鎖だろうけど」

不機嫌な光一に代わって、優子が福引に挑む。
そして……。

「おめでとうございます、高級和牛肉詰め合わせセット大当たりです！」

「……」

「まっ、まあ偶然ってあるものよね？　じゃあ次は、朝倉さん？」

「はっはい！」

「おめでとうございます。山の幸詰め合わせセット大当たりです！」

「……」

「あっ、あの、ごめんなさい！」

「いや、まあ良い。当たりが当たったんだから良いとする！」

「……今日は2人で腕をふるってあげましょ？」

「……そうですね。幸い食べ物の詰め合わせですし――でもこれじゃ、持って帰れませんよ？」

その後、運ぶのにタクシーを使う事にした光一だった。

「ふぅっ……」

「わんっ！」

本日歩美と愛子が来るため、こちらに泊まる秀吉に手伝ってもらい一息。

その足元で、秀頼が御苦労さまと言わんばかりに一吠え

「大変だったの。しかし良いのか？　ワシが一緒で」

「まあ良いだろ。このメニューだと焼き肉になるから多い方が良いだろ？　まあ明久達には今から連絡だけど」

「やれやれ、では皆が来るまで居心地悪くなりそうじゃ」

「じゃあ明久に急ぐよう伝えようか？」
「じゃからどうして明久なのじゃ！？」
「女と居心地悪いなんて、そう見られてもおかしくないだろ！」

「……2人して玄関先で何やってるのよ？」
「相変わらず仲良しですね」
「へえっ。光一君と木下君って、昔からあんな感じだったんだ？」

そんな取っ組み合いモドキに興じる2人を見て、3人の女子はそんな事を話していた。

そして数分後。

「ホットプレート、準備出来たぞ？」
「じゃあ付け合わせで何か作るから、焼いて待ってて？」
「心得た」

光一と秀吉、愛子がホットプレートで焼き肉の準備。
その間優子と歩美が付け合わせに、一品ずつ料理に興じていた。

「で、今日来るのは明久と雄二と霧島だけかの？」
「ああっ。姫路と島田は家族で外食、ムッツリーニは島津先輩の家にお呼ばれだとよ」
「……ムッツリーニ君、先輩といつの間にそんな仲になったの？」
「さあ？　夏休みの間、色々とあったようだけど」

ピンポーン！

「噂をすればなんとやら、だな。ちょっと出てくる」

「うむっ」
「こっちは任せて」

光一は玄関に出て、戸をあけると。

「よっ、いらっしゃい」
「呼んでくれてありがとう、光一」
「明久はわかるが、俺はいったいどういう風の吹きまわしだ？」
「この前の侘びだ。これで借りは無しって事で」
「……んなこったろうと思った」

その少し後……

「……こんばんは」
「なんで翔子が！？　……って、聞くだけ無駄か」
「……久遠も、没収品はまだ戻ってきてない？」
「ああっ。なんか郵送に手間取ってるらしいな、人数も数も多いから仕訳に手間取ってるとか」
「おまけに妨害が入った所為で、没収品は全部どこかの貸倉庫に移動になったらしい……くそっ！」
「……大丈夫。戻って来ても燃やさない、一緒に勉強するための参考書にする」
「よし、赤飯の準備を……」
「進めるな！！」

第二百二十七問　閑話　とある賑やかで大騒ぎな晩餐　後篇

「よかったな。霧島と仲直り出来て」
「……その辺りは感謝してる。お前が色々とフォロー入れたんだろ？」

ホットプレートを温め、歩美と優子が一緒に料理。
そんな傍らで、光一と雄二はオセロをしていた。

「まあその辺りは貸しだな」
「……んなこったろうと思った」
「こっからはシャレにならないからだよ。試召戦争、始めんだろ？」

光一がそういうと、雄二は表情を引き締める。

「当たり前だ。それと何の関係がある？」
「お前の暴走を抑えるカードは、１枚でも欲しいんでね。現状は１学期とは違う事は、わかるだろ？」
「ああっ。２学期ともなれば、格差の均衡は崩れる時期だ。そろそろ余所のクラスも試召戦争を仕掛ける頃合いともなればな。逆にチャンスでもある訳だ」

雄二が角をとりつつ、優越感に浸る。
しかし……

「だがそのチャンスも……活かさにゃ意味がないぜ？　こんな風にな」

光一も負けじと角をとり、数の上でも有利となる。

「だが、余所のクラスが今更脅威になるか？」
「なる可能性はあるだろ。知ってるか？　根本が3年に接触しようとしてるって」
「捨て置いても良いと思うがな？　あんな卑怯なだけの小物ごとき」
「どうだかな？　なまじ手段を選ばない上に現状を考えれば、利用するにはこの上ない奴である事も事実だろ？　切り離す事だって容易だし」
「……となると、マークはしといた方が良いかもな。あの超人野郎か、はたまたその側近が動けば、失墜したあいつでも利用価値はある」

その後一進一退を繰り返し、勝負は光一の勝ち。
数の上では、光一の５６勝５５敗である。

「ゴリラのクセに頭は達者だな」
「身体に行く養分を頭に注いでるモヤシならではだな」
「「……（ガンのくれ合い）」」

終わりはやっぱりこの2人である。

そして……

「あっ！　テメ、俺の育ててた肉！」
「うるせえ、早い者勝ちだ……ってコラ明久！　そりゃ俺んだろうが！！」
「雄二、さっきと言ってる事が全然違うよ！」
「じゃから落ちつくのじゃ！」

男女に分けての食事となったが……。
当然の様にケンカが起こった。

「もう……」
「あっ、あの……いつもみなさん、こんな感じなんですか？」
「こんな感じよ。でもまあ、本当に仲が険悪ってわけじゃないんだけどね。あれはあの3人なりの付き合い方って事」

そうは見えない位罵倒が飛びあってるが、でも歩美から見ても……。

「そうですね。久遠先輩、なんだか楽しそうです」
「ケンカする程仲が良いって、この事ね。本人聞いたら怒るから、言っちゃだめよ？」
「はい」

優子と歩美が、そんな会話をしてると……。

「秀頼ちゃん、おいしい？」
「わんっ！」
「……可愛い。私も撫でてみたい」

愛子に背を撫でられながら、肉に齧りついてる秀頼。
それをちょっと遠目に見る翔子。

「この子、先輩の飼い犬ですか？」
「そうよ、ちょっと前からね。おいで秀頼」
「わんっ！」

優子が呼ぶと、秀頼はご機嫌で肉を咥えながらトコトコと歩み寄る。
それから優子の差し出した手に鼻先をこすりつける。

「可愛いですね」
「光一以外に懐かない子だけどね。こうなるまで苦労したのよ？」
「そうなんですか？」

ダメでもともと。
そんな気持ちで、歩美が秀頼に手を差し伸べてみた。

「く～ん」
「「え？」」

すると秀頼は、差し出された歩美の手にすり寄り、鼻を鳴らした。

「？　どうした？」
「今、秀頼が……」
「秀頼が……え？」

それからの光景は、流石に光一どころか雄二に明久、秀吉も絶句した。
今日会ったばかりの筈の歩美に、あの秀頼がおとなしく抱っこされているのだ。

「ウソ……僕だって、最初触られるのも嫌がってたのに」
「……羨ましい」
「アタシだって、そこまで行くのに大変だったのに」
「え？　えっと……ごっごめんなさい」
「く～ん？」

歩美の胸に溺れそうになりながら、周囲のどんよりした空気に首を傾げる秀頼。

「秀頼、おいで」
「わんっ！」

しかし光一の呼び掛けには劣るらしく、歩美の腕から逃れると光一に飛びついた。

「それでも主人優先な辺りが、少しほっとするわ」
「……私だって」
「……（ぷいっ）」

翔子が秀頼に手を差し出すが、秀頼はそっぽ向いた。

「……私も秀頼を抱っこしたい」
「まあ雄二と比べたら可能性はあるんだから、そう落ち込むなよ」
「坂本先輩と？」
「ああっ。ほら」

光一が秀頼を手で抱え、雄二に差し出すと……。

「うぅ～ッ！　わんっ！　わんっ！！」

雄二を見て唸り、吠え始めた。

「こんな感じだからな。コラ秀頼、やめ……なくて良い！　テメ、どさくさにまぎれて肉大半食いやがったな！？」
「あーっ！　僕達の分ほとんどない！！」
「すまんな秀吉、代わりにこいつ等の分全部……」
「「殺す！」」

「……ホントに上辺だけなんですか？」
「……時々アタシもこいつ等の間柄、わからなくなるからね」

数十分後。

「全く、雄二の所為で飛んだ焼き肉パーティーになっちまった」
「こっちのセリフだ。たかが肉くらいで乱闘起こしやがって」
「やめなさい！」
「……静かにして」

優子のゲンコを受けた光一と、翔子のアイアンクローを受けた雄二が、揃って閉口。

「ふふっ」
「？　どうかしたか、朝倉？」
「いえ、木下先輩をブスって罵倒してた頃からは、予想できないなって思いまして」
「……お前本当に木下の事、一時期とはいえブス呼ばわりしてたのか？」
「ああっ、してた」
「「「……今からじゃ想像できない」」」

何かと優子に頭が上がらない光一が、優子をブスとののしる光景。
どう考えても、その後関節技で黙らされるシーンしか思い浮かばなかった。

「……なんか今、皆して失礼な想像しなかった？」
「「「そんな事ない（よ）（ぞ）（のじゃ）……（ささっ）」」」
「一斉に目を背けないで！」

そんな優子を見て、光一と歩美がぷっと吹き出す。

「もうっ、光一！　朝倉さんまで！」

「ごめんなさい。でも、2人ともすごくいい笑顔です。愛人の立場でも、やっぱり2人は私の憧れなんだなって」

「ほーっ。良かったな光一に妾、常識はずれでも憧れて貰えてな」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべながら、光一と優子を茶化す雄二。

「霧島、雄二ってどんなガキだったんだ？」

「……出会いは小学校からで」

「俺が悪かった」

「へ？」

光一の予想に反し、あっさりと降参した。

「どうしたんだよ？　お前なら無理やり止めようとするはずなのに」

「……どうせとっつかまるんなら意味がないだろ」

よっぽど知られたくないんだな。

そう思い、光一はそれ以上追及はしなかった。

「さて、肉が焼けたな。雄二、お前はそっち食え」

「？　追求しないのか？」

「藪蛇はこの前ので十分だ」

舌打ちしつつも、雄二は一応は感謝の意を示すか。

……そう思ったが、気味悪がられるのがオチの為やめておく事にし

た。

「だからそっちだっつってんだろ！　お前はもう肉食うな！」
「何俺に指図してやがる！？」
「だからやめなさい！」

その数日後。

「……優子。あんなにたくさんの鎖をありがとう」
「良いのよ。福引で当たった物だからね」
「……なんで鎖なんて送ったの？」
「福引で当たったから、折角だし代表が喜ぶと思って光一がね」

「おい光一。昨日翔子の家に運び込まれた、あのおびただしい量の鎖はどういう事だ？」
「何の事だ？」
「翔子にあんなもん送るのはお前しかいないだろうが！」

第二百二十七問　閑話　とある賑やかで大騒ぎな晩餐　後篇（後書き）

追記：ＧＡＵさん、コラボの申請いたします。
出来ればお返事お願いします。

コラボ問題　第5問（7）　『とある2人の密かなやり取り　前篇』（前書き）

今回はＧＡＵさんとのコラボです。
久々なので色々と誤差があるかもしれませんが、ご了承のほど。

コラボ問題　第5問（7）　『とある2人の密かなやり取り　前篇』

「はい、出来た」
「ありがとねん、こういっちゃん」

現在光一の家で、今はクリスと二人きり。
光一の作ったシチューに顔を綻ばせるクリスに、光一は嬉しくなり軽く微笑む。

「おねーさんも腕を振るえたらいいんだけど」
「土日に教えるって約束だろ？」
「じゃあ手とり足とり胸とりお願いねい」
「……取るのは手だけで十分だからな？」

素っ気ないやりとりだが、光一としてはこれがしっくり来ていた。
クリスこそ不満に思っていても、本気で突っぱねてるわけではないと理解している為、何も言わない。

「不満だろうけど、あんまベタベタするのもちょっとな」
「こういっちゃんがそういうなら、我慢はするけどねい。ベッドまでは」
「はいはい」

光一がシチューを置いて、秀頼のエサ入れにドッグフードを入れてやる。

「きゅ～ん」
「お～、よりより～。おいでおいで～」
「わんっ！」

秀頼がクリスに歩み寄って、差し出された手に鼻をこすりつける。

「ようやく慣れて貰えたねい♪」

当然クリスも、最初はそっぽ向かれていた。

今では撫でても嫌がらないが、まだ抱っこは出来ない。

「そりゃ殆ど住んでるも同然な位入り浸ってりゃ、そうなるだろ」

その事で光一は、部屋に備え付けの小型冷蔵庫を買っていた。

中はすべて飲み物（？）である。

「まあいいや。食おう、冷めちまう」

「そだね」

クリスがホクホク顔で、シチューを一口。

「うん、美味しいねい」

「そうか？　口に合った様で何より」

「デザートはこういっちゃんの……」

「今日は泊まりだろ？　我慢しろ」

ブーブー言うクリスを無視して、光一はシチューを啜る。

ピンポーン！

「ちょっと出てくる」

そう言って光一は玄関に出ると……。

「こんばんは」

目にクマを作った不健康さが滲み出る少女。
それと同時に、試験召喚システムのスタッフであり、融合召喚の開発者である天才少女、来島アキ。

「アキか。どうした、こんな時間に？」
「いえ、融合召喚の腕輪のメンテを言い忘れていたので」
「え？　いや、連絡してくれれ……ああっ、アレか？　ちょっと待ってな。おーい秀頼ー！」

呼ばれてきたのは、久遠さんちの秀頼ちゃん。

「……秀頼ちゃん」
「秀頼、あのお姉ちゃんと一緒にいてあげな？」
「わんっ！」

そう言って、光一は自分の部屋へ。
その間、玄関で待ちぼうけのアキと秀頼だが……。

「……秀頼ちゃん」
「……（ぷいっ）」

アキが手を伸ばすと、秀頼はそっぽを向いて距離をとる。
だったらとアキはごそごそと荷物を探り、ある物を取り出す。
秀頼の為に奮発して買った、値の張る犬ガムである。

「えっとですね。これ食べます？」

「……（ぷいっ）」
「あれ？　……あっ、もうご飯食べてたんですか？」
シチューの匂いを感知すると、がっかりと言う様にうなだれるアキ。
しかし秀頼は、手に持ってる犬ガムを見て……。
「……」
「？」
「わんっ」
アキの手に、ポンポンと自身の前足を乗っけた。
「……秀頼ちゃん」
少し感極まった様に目を潤ませるアキは……
「……何をやってるんですか？　久遠さんにウェストロードさん？」
ふと、ニヤニヤと笑みを浮かべるクリス。
そして微笑ましいなあ、と言う様に和む光一に気付き、ジト目で見る。
「いやいや、アキぴょん可愛くってさあ」
「あっ、悪い。つい声かけ難くてさ……あっ、これ」
「……まあ良いでしょう。受け取る物も受け取りましたし、それではこれで」
「どうせだから食ってくか？」
「馬に蹴られたくはありませんので」
そう言って、秀頼に犬ガムを置いて、帰って行った。

「……次こそは必ず」

小声でそう意気込んでいた事は、当然光一の耳に届いていた。
余談だが、光一は地獄耳でもある。

「やれやれ、意地はらなくても良いのに」
「きゅ～ん？」
「秀頼、あのお姉ちゃんは秀頼と仲良くしたくてしょうがないんだってさ。だから今度来たら仲良くしてあげな？　これのお礼もしなきゃ、だろ？」
「？」

主人の言葉に、首を傾げてばかりの秀頼だった。

「でもアキぴょんと会う機会なんて、そうそうないよん？」
「それもそうだけどさ……」

外出する事すらないと断言できそうな、ワーカーホリック。
一応研究者同士の彼氏がいるらしく、共同研究をデートと称しかねないカップル。

……どうやっても、次に会う時には秀頼に忘れられてる程感覚あいてる予想がついてしょうがない。

「あっ、でもゲーム買いにとか……」
「仕事の忙しさで通販とかになりそうだけどな。まあ休日は足伸ばして、アキに会えるよう配慮してみるのもよさそうだ」
「ねーねーこういっちゃん、それよりごはん。食べたら一緒にお風呂……」

「ダメ。風呂は別々」
「うう～っ。こういっちゃんのケチ」
「いや、こうしないと主に俺が大変な事になるからだよ」

その翌朝。

「……こうなるから」

光一はよろよろとおぼつかない足取りで、杖をつきながら登校していた。
……頬に真っ赤な紅葉を咲かせて。

「もうっ、いい加減にしてくださいよ。ウェストロード先輩
「いやいや、ゆーこりんもいい加減慣れよーよ。あの日、一緒にこういっちゃんの……」
「わーっ！　わーっ！」

そんなやりとりもお約束。
周囲もそんな2人に生温かな視線を送るのも、すでにお約束である。

「……おっ、大人のやりとり……先輩って、すごいのかな？」

そんなやりとりに、後輩の朝倉歩美は顔を真っ赤にしながらパニックになっていた。

「女性を囲うのも楽じゃなさそうだね」
「……ノーコメントだ。回答できる自分が恐ろしくなる」

明久のツッコミに、光一は力なくそう返す

秀吉に持って貰ってるボストンバッグから、ドリンク剤を取り出し飲み干す。

「しかしいつも思うのじゃが……」

「くぅぅうたぁぁあばぁぁぁぁあれぇぇえええええっ！！」

ひょいっ！（襲撃者の鉄パイプを避ける音）

がしっ！（光一が身体を回転させ、杖を相手の顔面にたたき込む音）

ドサッ！　とすっ！（襲撃者が倒れ、光一が歩美に抱きとめられた音）

「なぜお主はそんな状態でも苦にならぬのじゃ？」

「もう身体に咄嗟でも何とかなる位、戦いが染み付いてるんだろ。悪いな朝倉」

「いえ、大丈夫です」

歩美に支えられて、何とか身体を持ち直す光一。

ちなみに2人はその際、光一の背に歩美が胸を押し付ける形となっていたが、当人たちは気付いていない。

「「「久遠殺す！！」」」

ただし周囲は気付いていて、主に男子生徒が全員嫉妬の炎を燃やした。

「……光一の事、相棒って言うより師匠って呼んだ方が良いかな？　なーんて」

「「アキ君（明久君）、それはどういう意味で（ですか）？」」

「え？　いや、特に意味はないんだよ？　ただなんとなく、今まで

を思い返して……って、なんか美波が殺意をまきちらしながら拳を握りしめてる!?」

なんとなく冗談交じりのつぶやきを聞かれ、瑞希とひばりに詰め寄られ。

そのさらに、殺意を帯びた美波に追い回される羽目となった明久だった。

「その姿に杖って……首に電極つけてたら、とある学園都市最強ね完全に」

「いきなりだな？　っとと……わっ！」

「んふふ～っ。今度はおねーさんのだよん」

「ちょっ、待って！　せめて天下の往来で……」

「元々だけど、抵抗が抵抗になってないわね」

「……ウェストロード先輩もすごい」

コラボ問題　第5問（7）　『とある2人の密かなやり取り　中篇』（前書き）

今回は、前回の続きでＧＡＵさんとのコラボです。
では、いたらぬ所もあるでしょうが、よろしくお願いします。

コラボ問題　第5問（7）　『とある2人の密かなやり取り　中篇』

「やれやれ、またか」

杖をつき、顔色が少々思わしくない光一。
そして対照的に、つやつやと潤ってるクリス。

鉄人事西村教諭は、そう言いながらため息をついた。

「おっはよーてっちゃーん。今日もこういっちゃんとラブラブ～な夜を過ごしたから、おねーさんご機嫌だよん♪」
「おっはよーじゃない！　久遠、ウェストロード。お前達はまだ高校生だといい加減自覚しろ！　特にウェストロード、お前は発言に気をつけろ！」
「えーっ！　別に隠すよーな事じゃないでしょ？　あちし達の関係皆知ってるんだから～」
「その関係自体が問題だと言う事を分かれ！　まったく……」

鉄人は呆れかえるしかなかった。

「……（ごくごく）」
「お前は他人事のようにドリンク剤を飲むな！」
「……大声出さないで。寝不足の頭に響く」

ひゅーっ！（光一に向かって空き缶が投げつけられる音）
カーンっ！（光一が杖で撃ち返す音）
かんっ！　ぽすっ！（ピッチャー返しが当たった音と、光一が優子に抱きとめられる音）

「……本当に寝不足……だな。１人で立てない辺りで納得はできるが」
「すみません西村先生。アタシの方から厳しく言っておきますんで」
「そんな事言ってー。ゆーこりんってば、一番ノリノリで甘え……」
「わーっ！！　わーっ！！」
「ちょっ、耳元で叫ぶな……」

「……やっぱり師匠っていたたたたたっ！」
「アキ君！　変な所をマネしちゃダメでしょ？」
「明久君！　欲張りはよくありませんよ！」
「ちっ、ちがっ、そういう意味じゃなくて、ただいつかそういう人が出来た時の為に……って、ちょっ、待って美波！　トゲつき鉄球何てどこから持ってきたの！？」

「……一体どういう所なんですか？　この学校」
「朝倉よ、気にしては負けじゃ」

朝っぱらからのカオスに、歩美はぼうぜんと立ち尽くすしか出来なかった

「あれ？　クリスちゃん？」
「おーっ、さややん。おっはよー」
「おはよー。また久遠君と熱い夜過ごしたの？」
「当然。おかげでこーんなにつやつやだよん♪」

そんな事を大声で言わないで欲しい。
そう思う光一だが、気力も体力も殆ど搾り取られていて、既に恥ずかしいと思う事も出来ない。

それでも周囲からの殺気は収まる訳でもないが。

「でもお肌なら、あたしも負けないよ。ほら」

そう言ってさやかはブラウスをはだけ、胸元を露わに。

校庭に血の雨が降った。

「むむっ、ならば勝負！」

「負けないよ、クリスちゃん」

スパぁんッ！　×2

「やめんかい」

「ダメに決まってるでしょ！」

ひばりがクリスに、光一が優子に支えられながら、さやかにハリセンでツッコミ。

その様子に目を背けていた鉄人西村は、周囲を見回し……。

男子が鼻血拭いて倒れ、女子はさやかのスタイルにショックを受け呆然と、死屍累々。

「……はぁっ……吉井、こいつ等を運ぶのを手伝……無理か」

「あっ、明久君。気を確かに！」

「明久、しっかりするのじゃ！」

当然明久もその仲間で、瑞希と秀吉に介抱されていた。

ついでだが、美波もクリスとさやかの2人の勝負に、打ちのめされていた。

「……」
「あっ、おはよー歩美ちゃん……うわっ、何これ！？」
「あっ、愛子お姉ちゃ～ん！」
「え？　ああっ、うんうん。怖かったね？」
色々な意味で限界だった歩美は、愛子を見るなり安著して抱きついた。

時は過ぎ、某所
「皆さま、ようこそお集まりいただきました」
司会進行を務める男、根本恭二が一礼。
「まずはこれを見ていただきたい」
根本がリモコンを操作すると、後ろに優子と愛子、クリスと歩美の写真が映し出される。
ちなみに全部隠し撮りである。
「まず知っての通り、Ａクラスの優等生であり、久遠光一の妾でもある木下優子」
「そして……こちらもＡクラスで、保健体育の実戦派である工藤愛子」
１人１人の説明に、Ｆクラス代表雄二も加わる。
「そしてＦクラスの白銀の堕天使こと、クリスティーナ・ウェストロード！　……この３人が、トある男との許すまじき関係の一員で

ある事は、すでにご存じだろう」
「しかしだ、最近転入してきた少女、朝倉歩美。なんとトある男と過去につながりがあり、当然の様にその男に対してただならぬ感情を抱いている」
怒号が響き渡った。
「そんなクソ野郎がこの男！」
ぱっ！
「「久遠光一！　ぐへっ！」」
ドカドカドカ！！
「このっ！」
「おらっ！」
「死ねっ！」
少女たちの写真が消え、光一の写真が映し出されたとたん写真めがけて物が投げ込まれる。
……雄二と根本を巻き添えにして。
それから落ちついた頃……
「良いか！　こんな奴を生かしておいては、俺達に華やかな未来はない！」
「「「おおぉーーっ！！」」」
「ついでに相棒の明久も、いつ光一の影響を受けて姫路や支倉に手を出さんとも限らん！」

「「殺せえええ！！」」

ゴミと水と傷だらけの根本と雄二が、集まった男子生徒全員に激を飛ばす。
それに賛同する様に、その集会の参加者（全員男）が怒号をあげる。

「そうだ、怒りを燃やせ！　その業火であいつ等を焼き払うんだ！！」
「今日のあいつは衰弱しきっている。やるなら今！」
「「「おおぉーーっ！！」」」
「今ここに、新・アンチ久遠派結成を宣言する！！」

集まったアンチ久遠派残党、ＦＦＦ団、クリスのファンの３年が一斉に賛同の声をあげた。
今ここに、切り込み隊長コンビを討つため。

アンチ久遠派再結成。

「何をやっとるか貴様らは！？」
「げっ、鉄人！　……だけじゃねえ！？」
「高橋女史やその他大勢まで！？」

……は、宣言から数秒で壊滅した。

所変わって……。

「……なんか不自然な位に平和だね？」
「根本が雄二と何か企んでたみたいだから、ちと優子に働いてもらった」

愛子の作った弁当を食べながら、光一は明久がふと漏らした疑問に答える。

「それなら安全だね」
「ああっ。しかし……美味いな」
「そう？　実は歩美ちゃんに色々と教えて貰ったんだ」
「お役にたててうれしいです」

笑顔でそう言い合う歩美と愛子。

「うーみゅ……こういっちゃんに料理を教えて貰う日が待ち遠しいよん」
「その時はアタシも同伴しますからね？」
「そだねい。お礼にゆーこりんの３ぴ……」

スパァァアン！

「だから、そういうのはダメだって！」
「ひっ、ひばりん……」
「支倉先輩、今どうやってそのハリセン出したんですか？」

光一でも驚く早技だけに、歩美もびっくりだった。

「……支倉先輩、ねえ」
「光一君、何か言った？」
「いや、何も？　断じて逆だろと思った訳じゃある……訳じゃあないぞ？」
「言い直してもだめ！　もうっ、子供扱いして！」
「前にも言ったろ？　子供扱いされて怒ってるようじゃ、まだまだ

子供だ」

ぷりぷりと怒りながら、光一に詰め寄るひばり。
光一はそれをひょうひょうとした態度で、のらりくらりと避け続ける。

「平和だね」
「はい、平和ですね」

そんな2人を、明久と瑞希はほほえましいと言う様子で見つめていた。

コラボ問題　第5問（7）　『とある2人の密かなやり取り　中篇』（後書き）

次回ですが、これの続きか
それとも、コラボのちょっとしたＩＦストーリーか。

って考えてます。

コラボ問題　第5問（7）　『とある2人の密かなやり取り　後篇』（前書き）

はい、後編でございます。

ふと思った事ですが。
ＧＡＵさんのひばり、クリス、アキ。
レフェルさんのつぐみ、深紅と絡めると、結構いい作品かけてると
自負できる今日この頃です。

オリキャラの絡みにも相性ってあるんだなと。
そう思えます。

コラボ問題　第5問（7）　『とある2人の密かなやり取り　後篇』

「……で、何が原因だ？」

アンチ久遠派再結成にして、即解散。

それを耳にした3－A代表にして、学年首席の大神白夜は表情を崩すことなく聞き返した。

報告者の小暮葵は、少々苦笑いで……。

「それが……弟さんと、ティー……ウェストロードさんが、その……」

「……？」

基本的にゴシップに興味がない白夜は、光一とクリスの朝の様子を全く知らない。

増してや基本的に嫌っている弟など、好き好んで会いに行く訳もない。

「――大まかに言えば、光一とウェストロードが仲良くしているのが気に入らんと……そういう事か？」

「はい。大まかにはですが……本当はそれ以上の事もあるんですけど」

――余談だが、日によっては愛子と優子もクリス同様の状態になっていたりする。

その分、光一が衰弱しているのはお約束。

「何があったかは知らんが、ウェストロードも変わった物だ」

「はい……ですが、弟さんと一緒になってからは、割と昔に近くなったと言いますか」
「どうでもいい事だ……それより、その参加者のバカ共はどうした？」
「今、補習室です」
「今日の授業が終わるまで出てくるな。これは学年首席命令だと、そう伝えておけ」
「……はい」
「全く……どいつもこいつも。眠る様に静かに、そして夜の様に無心に時を過ごすと言う事がなぜ出来ん？　どうやら3年にも躾が必要の様だな」

所変わって……

「久しぶりですね、ウェストロードさん。去年の試召戦争以来です」
「ああっ。覚えているかはわからんが……」
「あっ、お久しぶり～。元気だったかな？　いわりんににたっち」

クリスのそんな返答に……。

「……随分と変わりましたね？」
「……ああっ。まるで別人だ」

1年の頃に同じクラスだった岩崎と新田は、苦笑いしつつ唖然とした。

「まあ良いでしょう。人の事情にとやかく言う気はありませんし、その為に来た訳ではありませんので」
「？　どういう事？」

「今のあなたを直接確かめに来ただけですよ。顔見知りではありますし、今流れている噂には信じられない部分が多々ありますからね」
「……まあ、そうかも、ねい」

クリスが憂いを醸し出したと同時に、岩崎も新田も顔を見合わせ……

「まあ何にせよ、こうして戻ってこれたのならよかった」
「そうですね。今は今で満たされている事は、聞いた話もそうですが今の貴女をみて十分推測できます」
「でしょ？　こういっちゃんは良い男だからねい♪」

憂いもどこやら。
そんな感じで、満面な笑顔になるクリス。

「ですが程々にしてくださいね？　ウェストロードさんには未だに3年の間で、ファンが多いのですから」
「先ほどアンチ久遠派とか言うバカ共が検挙されたのは知っているか？　あれには大半の3年が居たそうで、大神も学年全体の制裁を計画し始めていた」
「びゃくやんらしいというか、やり過ぎな気もするねい」

苦笑しながらそういうクリスに……。

「彼は自分の立場に対して真摯なだけですよ。論功行賞を布いているのだって、大神君の威光に隠れて甘い汁を啜ろうとするダニの排除の為です」
「大神のやる事は常に、Ａクラスの安泰に繋がっており、尚且つやると決めた事はやり遂げる凄みもある。でなければ俺達だって賛同はしない」

岩崎と新田は、揃ってそう返す

「流石びゃくやん。神に選ばれし者を名乗るだけあって、立ち振る舞いも一級品だねい」

「人の上に立つと言う事は、そういう事だ……そうだろう？　唯一Ａクラスと勝負と言える戦争を繰り広げたクラス代表」

「やめてよ……もう、昔の事だから」

陰りを見せたクリスに、失言だったと謝る新田。

そこでチャイム。

「そろそろ時間ですね、ではこれで。あと貴方達の関係に関して、貴方達が決めた事である以上とやかくは言いませんが、まぐわりも程々にしてくださいね？」

「それは無理な相談だよん。こういっちゃんと肌を重ね合わせるの、心地よくってさあ」

「……女性がそういう事を堂々と言わない様に」

「……随分と仲が良い様だな。やれやれ、馬に蹴られそうだ」

呆れるようにそう呟く岩崎と新田を背に、クリスはクラスへと戻って行った。

そして……

「だーりーん♪」

「ん？　ああ、お帰り」

卓袱台に突っ伏して寝てた光一は、背中から抱きつかれ頭の上に柔らかな果実を乗っけられた感触で目を覚ます。

既に慣れきっている事に、本人ではなく周囲が唖然とする。

「……」

「みっちゃん？」

それを見ていた瑞希が……

ぽよんっ！

「ん？　頭の上に何か……」

「あっ、あの……どうですか、明久君？」

「みっ、みっちゃん!?　何クリスのマネしてるの！」

「クリスの……!!?（ブシャアアアアっ！）」

クリスに匹敵する不意打ちに、鼻血を吹きだした明久。

それを慌てて開放する瑞希とひばり。

「……くぅぅっ！」

ちなみにそれが出来ない美波は、出来そうな瑞希とひばりに嫉妬の視線をぶつけていた。

「やれやれ……はっ！　不穏な気配!?」

雄二が振り返り後ろに飛ぼうと……。

むぎゅっ！

「むぐっ!?」

「……失敗……でもない」

したが、雄二にとっては振り返った事自体が逆効果だった。
今の雄二は翔子に抱き締められ、胸に顔を埋めている状態となっている。

「もーごーっ！　むんべぼびびばばぶー！？（翔子ーっ！　なんでここに居やがるーっ！？）」
「……私、少し胸大きくなった。どう？」
「ぶーっ！！」

必死に引き剥がそうとするが、びくともしない。

「……ＦＦＦ団が居なくてよかったの」
「……（どくどく）」

現在大半の男子生徒が、補習室とそのほかの教室に監禁されていた。
ちなみにムッツリーニは、さやかと約束があり結成の瞬間には立ち会っておらず、現在そんな３人の光景に鼻血を流し横たわっていた。

「しかし光一よ、そんなで大丈夫なのかの？　確か休日はクリスに料理を教える約束じゃろ？」
「……優子と愛子が一緒に来るから、問題はない――と信じたい」
「まあ大丈夫じゃろ。姉上に工藤も、鉄人に色々と言われておった様じゃし」
「だと良いがな」

その次の日。

「……木下、工藤」

「「ごめんなさい！」」
「……どうして監視する様に頼んだ休日の明けがこうなんだ？」
クリスを始めとして、愛子、優子までつやつやと潤っていて……。
逆に光一は秀吉と明久に肩をかして貰いつつ、点滴をうっていると言う光景。
愛子と優子が必死に頭を下げていて、鉄人は頭を押さえていた。
「……姉上も変わったのう」
「……」
そんな様子に秀吉は苦笑し、光一はぐったりと。
「……女の子ってすごい」
「……アキ君、それ絶対違うからね？」
明久がぽつりとつぶやいた事に、ひばりがツッコミを入れて。
「……木下先輩　（どきどき）」
「ちょっ、朝倉さん？　大丈夫？」
「……やっぱりあんな風に、大胆に行くべきですよね」
「瑞希！？」
その片方では、顔を真っ赤にパニック気味な朝倉と、トリップしてる瑞希。
そんな2人を美波が必死に宥めていた。

コラボ問題　第5問（7）　『とある2人の密かなやり取り　後篇』（後書き）

一先ずこの話は終了。
先に進めようかな……と思ってるのですが。
本編を進めるのは１０巻が出て、落ち着いてからの予定です。

なので、それまではコラボや閑話をはさみながら進めようと思ってます。

ＧＡＵさん、次もコラボお願いします
ひばりメインのＩＦストーリーで予定してますので、よろしければ許可を
ダメなら少々閑話をはさんで、再度申請させていただきます。

コラボ問題　第５問ＩＦ　『凶王と雲雀と始まりと終わり』（前書き）

ＧＡＵさんのオリキャラ、支倉ひばりをメインに据えたコラボです。

ＧＡＵさんに確認を取った上で行ってます。

そのうえで、このストーリーでは光一は独身です。

以上を踏まえたうえで、読んでいただけたらと思います。

コラボ問題　第5問ＩＦ　『凶王と雲雀と始まりと終わり』

「明久君、明日なんですけど」
「アキ。明日一緒にクレープ食べにいかない？」
瑞希と美波による、明久とのデート争奪合戦。
それを遠目に見ながら……

「……ひばり、お前は良いのか？」
「何が？」

光一はひばりに問いかけてみた。

「何がって……はぁっ」
「どうしてため息なんてつくの？」
「誰かを思う気持ちにはすごい力がある。そんな簡単に消えたりはせず、呪いの様に人を縛ってしまう……お前が以前言ってた事だけど、そのお前見てるとその通りだって思う」
「……何、言ってるの？」

ひばりが光一から眼を背けると、光一はガシガシと頭を掻く。

「――いや、言ってみただけ。明久、うまく行くと良いな」
「うん」

ひばりは屈託ない笑顔で、そう返した。
……光一はそうは見ていなかったが。

「……なあひばり、明日空いてるか？」

「明日？」
「ああっ。明日暇だから、一緒に遊ばないか？　秀吉は部活があるって言うから」
「？　うん、良いよ」

そして翌日。

「よっ」

待ち合わせの３０分前。
光一とひばりは示し合わせたかのように、ぴったりと顔合わせ。

「早いね？」
「まあな。んじゃ、予定してた映画はまだ時間あるから……本屋でも行くか？」
「うん」

２人は一緒に近くの本屋へ。
光一が漫画雑誌に手を伸ばす間に、ひばりは料理関係の雑誌を手に取る。

「やっぱり料理か」
「うん。将来はそういう仕事に就きたいって思ってるから」
「ふーん……ちびこい見た目の割に、しっかりしてるね」
「ちびこいは余計！」

どんっ！

「あっ、ごめんなさい」

「いてえなコラ」
「ひっ！」

見るからにガラの悪そうな男が、ひばりに絡んできた。

「おい、ぶつかった位でいちゃもんつけんな」
「あっ？　なんだこの……」

光一が間に入り、男がガンをくれ……少しずつ真っ青になる。

「あれ？　どっかで……」
「ひいっ！　こっ、これで勘弁してください！！」
「あっ、おい！」

男は光一に財布を押し付け、逃げて行った。
その場に残った2人はと言うと、ぽかんとその走り去った男を見ていた。

「……また無意識のうちにカツアゲしてしまった」
「ねえ、光一君……今の人、知り合いなの？」
「いや……けど金を置いてくって事は、多分凶王時代にボコった奴だと思う」

光一が凶王から今の姿になってからも、凶王の名は根強かった。
顔を見るなり財布を差し出して逃げるなど、今でも頻繁にある。

「どうするのそれ？」
「いや……どうするも何も」

ごそっ！（光一が財布をポケットに入れる音）

スパァァアンッ！（ひばりが小鳥丸で光一にツッコミを入れる音）

「そうじゃないでしょ！」

「ほんの冗談なのに……」

「まさかと思うけど、光一君がやたらとお金持ってるのは……」

「いや、違う違う！　霧島との商売とネット株で儲けた金だよ！」

その後、財布は警察へと届ける事になった（当然）

「なんかいきなりハプニングだったね」

「ハプニング？　……ああっ、そう言われればそうかもな」

「待って。光一君、一体どういう日常送ってたの？」

「知らん方が良い」

結局うやむやのまま、映画館へ。

そこでは……

「あれ？　雄二達か。奇遇だな」

「ああっ……珍しい組み合わせだな？」

「丁度皆予定埋まってたから、折角だし2人で遊ぼうと思って」

「へーっ、木下の次は支倉か」

「相変わらず原始的な頭だな？　流石は文月ゴリラ坂本雄二」

「「……（ガンのくれ合い）」」

早速いつもの光景が展開された。

「……支倉もデート？」

「え？　うーん……そうかな？　でも光一君とは、そういう間柄じゃないし」

「……でも珍しい組み合わせ」

「言われてみれば、そうかな？」

その傍らでは、翔子とひばりが仲良さそうに談笑。

「もうっ、２人ともそこまでにして。光一君、何見たいの？」
「俺はあっちの見たいんだけど、ひばりは見たいのある？」
「え？　うーん……あたしは特にないかな？　じゃあ光一君のみたいの見ようよ」

「翔子、せめてあんな風に……」
「……じゃあ、罪と罰を見に行く」
「話聞いてたか！？」

その後……

「面白かった？」
「うん。たまにはああいうのも良いね」
「じゃあ次は……」

時間は昼。
そろそろ昼食時である。

「昼でも食うか？　おごるよ」
「え？　良いよ。お金なら持ってきてるから」
「いや、見た目的にひばりに金出させるのまずいからな？」
「ダメ。あたしの分くらいは出すからね？」

傍から見れば、大の男が小学生に金を出して貰ってる構図である。
……が、ひばりも頑固なので聞き入れない。

「まあ一先ず俺が払うって事で決定な？　ひばりはお子様ランチでも……」
「こ・う・い・ち・君？」
「やばい、逃げろ」

結局はうやむやにされ、食事代は光一が支払う事になった。

そして昼食。
ひばりは日替わりセットで、光一はコロッケセット。

「光一君、コロッケ好きだよね？」
「ガキの頃、秀吉んとこのおばさんが作ってくれたのがうまかったから、それ以来かな？」

そこは普通お母さんが、だよね？
そう言おうとしたひばりだが、光一の家庭事情を思い出しやめる事にした。

食べ終わると光一がコーヒーを頼み……。

「ひばりもコーヒー飲んでみる？」
「え？　うーん……じゃあ、お願い」
「じゃあエスプレッソ1つと、カプチーノ1つで」

ひばりもそれに便乗する事にした。
そして……

「……苦い」
「あれっ、まだ苦かった？　やっぱラテが良かったか」

「そうかも……光一君、よく飲めるね？」
「まだまだ子供だね、ひばりは」
「うぅっ……」

コーヒーにはどうも大人なイメージがある為、どうも否定できないひばりだった。
ちなみにひばりのコーヒーは、砂糖を入れて味を調節して呑んだ。

「さて次は……ん？」

ドドドドドドドッ！！

「待ちなさいブタ野郎！！」
「ああもうっ、どうしていつもいつも！！」

「……またか」

地響きのような音が響く方向では、美春に終われる明久達３人。
光一が頭を掻きながら、手持ちのカバンから３本スタンガンを取り出してベルトにさし、更に３本の組み立て式の仕込み杖を取り出し、それをつなげ一本の棒にして構える。

「こっち来い明久達！」
「あっ、光一！　ごめん、助かるよ！！」
「また邪魔をしますか久遠光一！　人の恋路を邪魔するブタは、馬に蹴られて三途の川を通り越し地獄へ行きなさい！！」

光一が駆けだし、美春と対峙。
フォークを手に飛びかかる美春を、棒で受け流し……

「え？」

勢いを利用し、そのまま地面にたたきつけた。
それから抜き打ちの様に、ベルトに刺した3本のスタンガンを指にはさむように持ち……

バヂバヂバヂバヂッ！！

「ふぎゃあああああっ！！」

最大出力を押し付けた。

「……はい、鎮圧完了」
「はぁっ、はぁっ……ごめん光一。助かったよ」
「なあに。お安い御用だよ」

光一が仕込杖をばらし、スタンガンと一緒にカバンに詰める。

「あれ？　ひばりちゃん、今日は久遠君と一緒ですか？」
「え？　うん。ちょっと一緒に遊びに誘われて」
「へーっ、久遠がひばりをデートに？」
「だから違うよ。あたしなんて……」

「……」
「？　どうかしたの、光一？」
「いや……別に」

その後、明久達と別れて現在は公園。

「いやー、映画に昼飯と、まさか立て続けに知り合いと会うなんてなー」
「ちょっとびっくりだよね。なんだかここでも誰かと会いそうな予感」
「んじゃ、その前に大事な話と行くか」
「？」
光一は深呼吸をして、意を決したように……
「あのさひばり、俺と……付き合ってくれないかな？」

コラボ問題　第５問ＩＦ　『凶王と雲雀と始まりと終わり』（後書き）

以上、光一がひばりに惹かれたらのＩＦストーリーです。
……賛否両論でそうですが、覚悟の上です。

第二百二十八問　閑話　久遠さんちの秀頼ちゃんの1日

久遠家にて。
朝日が昇り、一日が始まる時分

「……ＺＺＺ」

久遠光一はベッドで眠っていた。
その傍らには……

「く～ん」

愛犬秀頼の姿があった。
朝日が昇り、秀頼は目を覚ますと同時に、主人に寄り添い……。

「きゅ～ん（ぺろぺろ）」

顔をなめ始めた。

「ん……ああっ、おはよ秀頼」
「わんっ！」

秀頼になめられ、少しべとべとする顔をそのままに、起き上がって洗面所へ。
それにつき従う様に、秀頼はトコトコとついていく。

それから光一が顔を洗って歯を磨いて、髪形を整える。
部屋に戻って着替えて……

「んじゃ、行くか」
「わんっ！」

秀頼の朝の散歩。
そんな距離はないが、散歩コースでは……

「あっ、鉄人」
「ん？　久遠か」

たまにランニングをしている鉄人と遭遇する事もある。

「……（びくびく）」
「……相変わらず、怖がられているな？」

そうなると、秀頼は光一の後ろに隠れてびくびくと震えていた。

「仕方ないだろ。元々人見知りが激しいし、まだ子犬の秀頼にアンタの威圧感はきつい」
「むっ……」

流石にそれに応えたのか、鉄人は委縮した。

「んじゃ、そういう事で」
「遅刻するなよ！」
「はいはい」

いつも気になってるが、そのまま直で行くのか？
そう思いつつ、光一は秀頼を連れて散歩コースへと戻って行く。

「ただいま」

家に帰ると、光一は制服に着替えて台所へ。
最近は母のひなたが朝食を作る為、さして手間もかからなくなった。
……光一自身、まだ慣れてはいないが。

「……まだ、慣れない？」
「当たり前だろ」

おざなりにされ続け、更には空白期間。
……未だに光一にとって、目の前の女性は母親と言うより、顔見知り程度でしかなかった。

「きゅ～ん」
「ん？　ああっ、悪い悪い」

光一がドッグフードを秀頼のエサ入れに注いでやり、秀頼ががつがつと食べ始めた。
無言のまま時間が過ぎ……

「……ご馳走さま」

光一が食べ終わると、カバンを持って登校。

「……はぁっ」
「きゅ～ん？」

ひなたはため息をついて、自身の書斎へと歩いていく。
秀頼はただ首を傾げ、それを眺めながら近くにあるボールで遊び始めた。

そして昼時。

コンコンッ！

「きゅ～ん」

「あら、お腹空いたの秀頼ちゃん？　……ああっ、もうこんな時間？」

ひなたが時計を見ると、既に１２時。

熱中していて、時間が過ぎるのを忘れていたらしい。

エサ入れを引きずり、ドアを叩いていた秀頼を撫でて、一路台所へ。

「はい」

「わんっ！」

ドッグフードをがっつく秀頼を微笑ましく見つめた後、ひなたは……。

カップラーメンを食べ、取材へと出て行った。

それから夕方。

「おじゃましまーす」

光一は補習があるので、帰るまでは優子が秀頼の面倒を見に来ていた。

秀頼は優子を見るや否や、ご機嫌で優子に飛びつく。

「きゅーん」
「あら秀頼、寂しかったの？」
「わんっ！」
「でもごめんね。秀頼の主人は、まだ帰ってこないの」
「きゅ～ん……」

それを聞いて、秀頼はしゅんと落ち込んだ。
優子は苦笑しながら……。

「それじゃ、散歩にいこっか？」
「わんっ！」

優子は秀頼の首輪にリードを付け、スコップと袋を取り出しいざ出発。
散歩コースは、一緒に行く事も多いのですでに把握済み。

「わんっ！　わんっ！」
「コラ秀頼、あまりはしゃがないの」

家で退屈してた秀頼はご機嫌そのもので、あっちこっちへ駆けまわる幸い子犬なのでそんなパワーはないが、優子はそれでも元気いっぱいな秀頼に振り回されがち。

特に……。

「あー……しんど」
「相変わらず歴史オンチじゃのう」
「うるせー……大体なんで延々と小学生のテストせにゃならんのだ？　１１９２創ろう平安京だの、８９４に戻した鎌倉幕府だの、７

９４ウグイス遣唐使だの」
「……光一よ。そんな事言っておるからじゃと思うぞい」

「わんっ！　わんっ！」
「ちょっ、落ちつきなさい秀頼！」

主人を見つけた秀頼のはしゃぎようときたら、手におえなかった。

「あっ、優子。悪いな、秀頼の散歩」
「良いのよ。それより早くない？」
「急用だからっつって、補習が短縮されたんだよ。それじゃ途中からだが、一緒に散歩するか」
「わんっ！」

秀頼が超ご機嫌で返事する様に吠えた。
優子はそんな秀頼を見て、ふふっと笑い……。

「はい。秀頼も大好きなご主人様に持って貰った方が良いでしょ？」
「きゅ～ん」
「あら、アタシが持っててても良いの？　ありがと」

リードを光一に渡そうとして、やめた。

それから、散歩が終わって光一は……

「熱くないか？」
「わんっ！」

秀頼のシャンプー。
終わったら吹いて乾かして……次は自分の風呂。

「では一緒に入るのじゃ」

ちなみに本日秀吉がお泊りである。

「秀吉は秀頼の相手してくれないか？」

「んむっ？　そうじゃの」

「わんっ！」

その間、秀吉と遊んだり、ドッグフードを食べさせて貰ったり。

光一が出てからは、夕食を作る光一に甘えたりと……

「きゅ～ん」

「コラ秀頼、俺達のメシつくってるんだから」

「きゅ～ん……」

「よしよし、後で遊んでやるからな？」

「わんっ！」

その後、光一たちが食べ終わると同時に秀頼が光一の足にすり寄る。

光一が秀吉と一緒に秀頼と遊んであげたりで、自分は既に寝る時間。

「んじゃ、お休み」

「お休みじゃ」

「わんっ！」

2人と一匹は、仲良く一緒の部屋で眠りました。

「……きゅ～ん」

明日も大好きな主人と一緒に。

そんな期待を持ちながら、秀頼は眠りましたとさ。

第二百二十九問　閑話　それぞれの一時

「うん、美味しいです」

朝倉歩美。

小動物チックな純粋少女で、つい最近文月学園に転入した一年生。

料理が得意な彼女は、今日木下家にて優子と愛子に料理を教えていた。

「一応練習はしたつもりなんだけど……」

「やっぱり朝倉さんとじゃ、大人と子供ね」

「そっ、そんな事ありませんよ。たまたま私は、早く始めただけで……」

元々光一に料理では負けてて、“ごく一部で”餌付けされたんじゃないかと言う不名誉この上ない噂が出ている2人。

（光一による脅迫や詐欺と言う見解が主流なので、本当にごく一部でしかない）

男なら割と聞く話でも、女でそれは流石にシャレにならない。

との事で、2人は女としてのプライドに火がつき、こうして花嫁修業同然の様に料理の勉強と練習を行っていた。

「それでも、良い事だと思いますよ？」

歩美も女の子なので、あまり気分の良い噂ではない事は十分理解していた。

「あーんもう、歩美ちゃん可愛すぎだよ」
「きゃっ、あっ、愛子おねえちゃ……やっ！」
「しかもこんなおっきいし、もう光一君に触らせたりとかしたの？」
「そっ、そんな恥ずかしきゃうっ！」
「やめなさい愛子！」

……数分後。

「ごっごめんね歩美ちゃん。つい調子にのっちゃって……」
「えっ、えううっ……」

調子に乗った事で歩美に泣かれ、愛子はぺこぺこと平謝り。

「もうっ……」
「いっ、いえ。意地悪じゃない事はよくわかりますから、大丈夫です」

歩美も光一に出会うまで、周囲にいじめられていた経緯があった。
光一とあってからは、どこからか凶王の私物と言うレッテルが張られた所為か、そう言った狙いの者が近寄る事はない。
引っ越してからは、それなりに周囲は良い人が多かった為、いじめに遭わずにすんでいた。

「背が伸びても、気弱な所は変わらないわね」
「先輩たちともう一度一緒だから、少し気が緩んだのかもしれません」
「なんだかなあ……ちょっとやけちゃう」

割と最近の付き合いの愛子は、仲間はずれの様で寂しかった。

「あっ、そろそろお昼ね。光一に家に持っていかないと」
「あっ、そうだね……ねえ優子、そう言えば光一君っていつから料理やってたの？」
「小学３年生からよ。ウチのお母さんに教わってね」
「そんなに早くから？」
「そうよ。その頃に光一の両親が離婚してね……その事でトラブルが起こってたのよ。ひなたさん側の親戚一同が、白夜さんと光一の親権の事で納得がいかないって」
「……原因、なんとなくわかるね」

確かにそれなら、１０代にも満たない上に白夜の豹変で傷を付けられた光一を、同席させる訳にはいかない。

「……才能って怖いですね」
「だから光一はあんな風になったのよ……いつの間にかその人達と同類になってた、アタシが言えた義理じゃないけどね」

親族の取り合いと押し付け合い。
必要とされる者とされない者。

あんな風にはなりたくないと思ってたはずなのに、いつの間にかそうなっていた事。

「それじゃ、そろそろ持って行こうよ。冷めちゃうよ？」
「あっ、そうですね。すぐに詰めないと」
「今から喜んでくれるのが楽しみね」

そう言って、３人は和気藹々と弁当箱に作った料理を詰め始めた。

所変わって、光一の家。

「……」

光一はふと、思い出していた。

豹変した白夜の手で、自身の背に大きな傷を付けられ意識を失い……。

目が覚めた時、まるで悪い夢でも見ていたかのように、兄は両親の離婚で遠くへと言ってしまいもう会わずに済むようになった。

家に帰ってその事実を確認して、嬉しくなった事は今でも覚えている。

……ただ、親戚一同が兄を取り合い、自分を押し付け合っている事にさえ目をつむれば。

「……人をなんだと思ってやがんだか」

それが原因で、事情を知る木下家に一時期世話になっていた事。

と言っても、何度か世話になっていたので今更感はあったが、それでも……

もう信じれるのは自分だけだ。

そういう概念が蔑ろにされ続けた影響で身についた光一は、料理や洗濯など、家事全般を木下母に教わり、１０歳にはもう独立できていた。

「なあ秀吉」

「んむっ？」

本を読んでいた秀吉が手を止め、視線を光一に向ける。
光一は胸板で寝転がってる秀頼を撫でながら……。

「昔じゃ想像できないよな。今の俺」
「そうじゃの」

秀吉は時に幼馴染であり、時に家族であり、時に兄弟。
光一の最も近くにいたのは、秀吉である。

「この家で複数で騒ぐ事も」
「そうじゃの」
「飯作ってくれるのも」
「そうじゃの」
「……こうして、家族が出来た事も」
「そうじゃの」
「きゅ～ん？」

そっと、自分の胸板で寝ころぶ秀頼を抱き上げ、高く掲げる。
何の事かわからないと首を傾げる秀頼を見て……。

「……秀吉」
「なんじゃ？」
「俺って人間なのかな？」
「……いきなり明久以上に唐突な質問じゃな？　人間じゃろ」
「いや、すまん」

どうにも感覚がおかしくなっていた。

「光一よ。どうやら疲れておるのじゃな？」

「……みたいだな」
「そろそろ姉上達が昼食を持ってくるのじゃ。それを食べたら、寝た方が良い」
「そうする」

所変わって……。

「静かだな……」

大神白夜は1人、森林公園を歩いていた。

白夜は光を拒みはせず、闇も受け入れる。
白夜は集団の理を拒みはせず、孤独も受け入れる。
白夜は最高の知識をもってはいるが、バカな考えも持ち合わせている。
白夜は静寂を好むが、だからと言って騒乱を嫌悪すると言う訳ではない。

白夜にとっては、清も濁も、善も悪も、バカも賢者も。そのすべてが意味を成さない。

「……さて、Fクラスはもうすぐ動きだす筈」

Fクラスが起こす試験召喚戦争に関して、個人としては賛成だった。
戦争は武器やパワーだけで決まる訳ではないのだから、勝てると判断したなら存分に挑めばいい。
そうすれば上位も負けじと、迎え討とうと必死になる。
争乱と喧噪、そして戦いは常に人を研磨し、強者へと変えていくの

だから。

しかし代表としては、Fクラスの素行の所為で自身のクラスにも悪影響を及ぼす。
そんな連中がつけ上がらせる訳にもいかない以上、阻止しなければならない。

「……やはり、これが良いか」

白夜は考える事を止めない。
自身が成すべき事が最善かどうかを、見極め続けるために。

白夜は求める事を止めない。
自身に進化の可能性がある以上、それを手放すなどあり得ないが故に。

白夜は代表の立場を軽視しない。
集団の一員である以上、代表でも一員でも成すべき事を成さねば集団は機能しない事を、十分に理解しているが故に。

白夜は……

「……さて、この戦争で私は誰から何を奪える？」

周囲がどうあろうが、決して止まらない。
己が立場を全うし、自身をより強くするために。

第二百三十問　閑話　昼休みの憩いの一時

場所は屋上。

「最近本妻と妾ばっかで、光一が弁当作ってくる事、なくなってきてないか？」
「餌付けされてるって噂が気に入らないんだとよ」
「大半が光一の脅迫と詐欺って“面白い”噂が主流なのにか？」
「男ならともかく、女が餌付け事態良い印象がある訳ないからだろ。ま、俺から見れば役得その物だけど」

と、ご機嫌で優子達のお手製料理を食べる光一。
ちなみに雄二は、“普通の”翔子のお手製弁当を食べていた。

「それに最近は朝倉が教えてるらしいから、腕上がってて楽しみになってるしな」
「見方によっては、もうお前の妾2号じゃないのか？」
「下品だぞ雄二。そんなだから霧島にいつまで経っても信用されないんだ」
「大半はお前がそそのかしてるからだろうが！」
「その大半の全部がお前の自業自得だろ！」
「「……（がんのくれ合い）」」

「ホント、相変わらずね」
「だよね。みてて面白くはあるけど」
「……ケンカするほど仲が良い。本人たちの前じゃ禁句だけど」
「……」

そんな2人の様子を見る優子と愛子、翔子はいつもの事と苦笑。

ただ歩美も理解はしていても、マジな雰囲気には怯えていた。

「平和だね」
「平和ですね」
「平和じゃの」
「平和ね」
「……平和」
「平和だよね

明久、瑞希、秀吉、美波、ムッツリーニ、さやかも同意見だった。

昼食後。
ちょっと時間が空いた為、それぞれが憩いの時間を過ごす。

「……お昼寝にはちょうどいい」
「だからと言って、鎖で手足を雁字搦めにするのはどうかと思うぞ？」

翔子が雄二に膝枕してあげたり……。

「どうどうムッツリ君？　今日のコスプレは堕天使エロメイドだよ」
「……（どくどく）」

さやかがムッツリーニに新作コスプレを披露したり……
（当然着替えは此処で堂々と）

「歩美ちゃん可愛いよね～」
「やっ、愛子お姉ちゃん」
「愛子、次はアタシよ？」

歩美が優子と愛子のスキンシップで目を回してたり……
等、色々と憩いの光景（？）が展開されていた

パチっ……

「あー……また負けた」

そんな中、明久と光一は将棋をうっていた。
飛車角抜きでも、未だ明久は光一に連敗を喫している。

「やっぱり光一に勝てないよ」
「まあそう言うな。俺の相方だからこそ、指揮取ることだってある。だからこうやってレクチャーしてやってるんだろ？」
「うーん……確かにそうだけど」

一学期に試召戦争で負けて以来、光一は色々と明久に仕込んでいた。
将棋による指揮の取り方や、実践で活かせるように木刀での打ち込み（手加減なし）等、色々やってるわけだが……。

「それに心配しなくても、ちゃんと成長はしてるよ。香車に桂馬なしじゃ流石に勝てなくなったからさ」
「そう言われると、僕もちょっとは成長してるのかな？」
「ほんのちょっとだけどな」

そこで雄二が茶々を入れた。
……未だに手足を縛られ、翔子に膝枕と言う形のまま。

「雄二も成長したじゃないか。甘んじて膝枕をしてもらってるなんて」
「これを見てそう見えるのか！？」

「「見える」」

ちなみに雄二の手足は後ろで縛られてるため、2人の位置からは見えなかった。

雄二が体制を変えて、縛られてる手足を見せると……

「なんだ、いつもの事だね」

「そうだな。いつもの事だ」

「お前ら絶対殺すからな！？」

そんなやりとりを経て、将棋盤を片付けようとすると……

「あっ、あの、明久君。私もやりたいんですけど」

「ウチもやりたいな」

瑞希と美波が割り込んできた。

ちなみに瑞希と美波も、明久と遊びたいがために将棋のルールは覚えている。

「じゃあ2人で打つと良いよ。光一、僕達はどうしよっか？」

「……じゃあこっちやるか？」

「うん」

光一が仕込み杖を取り出すと、明久は頷いて投げ渡されたそれを受け取る。

2人が光一にうらみがましい視線を向けると……

「勝った方が明久とやる、で良いんじゃないか？」

「絶対に負けませんからね！」

「望む所よ！」

光一の発言であっさりと勝負に興じ始めた。

「それじゃ、やろうか？」

「そうだな」

光一と明久が、仕込杖を剣の様に構え対峙。

光一はライフルに見立てて、短めの物を左手に持った二刀流

「光一と明久も、あんな面倒な事よくやるな」

「2人は2人で、試験召喚戦争に向けて頑張っておるのじゃ」

「そりゃ結構なことだな。俺の自由の為に」

「……なんか急にだるくなってきたよ」

「俺もだ。バカバカしくてやってられなくなった」

「おい！　変わり身早すぎだろ！！」

と言う、漫才な光景があった。

「なんだかんだで、良いコンビだなお前ら？」

「お前が言うな気色悪い」

「折角褒めてやってんのにその言いぐさは何だ？」

「お前が褒めるなんてあり得んからだ！　何か企んでそうで」

「……！？（ぶしゃあああああっ！！）」

「「「ん？」」」

光一がふと見た先では……。

「ほ～ら、ムッツリ君。今度は精霊チラメイドだよ？」
「……死してなお、悔いなし」

ムッツリーニが明らかに貧血状態にもかかわらず、必死にシャッターを切っていた。
当然の様にここで着替えをやってた為、ムッツリーニはグロッキー状態である。

「ムッツリーニ、死んだりしないかな？」
「大丈夫だろ……多分」
「光一も大概、すごいのと知り合ったな？」
「言うな……しかし、これまたすごい衣装だな」
「「あっ、それには同感ギャアアアアッ！！」」

断末魔に振り返った光一が見た者は、雄二が翔子にアイアンクローをかけられ、明久が美波にプロレス技をかけられていた。

「おーい。そんな事しなくても、島津先輩に借りたり作ったりしてもらえばいいだろ？」
「「……作ってくれるの？」」
「ああっ。あの人、人にコスプレさせるのも……」

「すみませんさやかちゃん、ボク達にもそれ作ってください。優子は堕天使エロメイドで」
「なっ、なんでアタシがエロメイドの方なのよ！？」
「でしたら、私もお願いします！」

「って早っ！？」

光一の言葉の途中で、優子、愛子、瑞希が既にさやかに頼んでいた。

「まっ、まあそういう事……あれ？」

振り返った先には、既に翔子と美波は影も形もなくなっていた。

辺りを見回すと……。

「……私にもお願いします」

「うっ、ウチにもお願いします！」

既にさやか相手に、交渉を行っていた。

「……俺でさえ反応出来なかったとは。てか、一般の女性像が最近薄れていく気が」

「……先輩は、ああいうのが好きなんですか？」

「朝倉、お前はそのままでいてくれ。俺はそのままの朝倉が好きだから」

「すっ……！？　あうあうあうっ！？」

「あれ？　……あっ。いや、そういう意味じゃなくてだな！？」

「光一もすっかり明久の相棒らしくなってんな」

「それ、あまり良い意味じゃないでしょ？　……まあ僕にとっては、嬉しくはあるけどさ」

第二百三十一問　閑話　秀吉と秀頼の騒がしくものどかな散歩

「良い天気じゃの、秀頼」
「わんっ！」

とある休日の公園。
久遠さんちの秀頼ちゃんは、現在秀吉が散歩に連れて来ていた。
その役目を担うはずの主人の光一は……

「雄二が？　はいはい、わかったよ」
「どうしたのじゃ？」
「霧島から、雄二がデートの約束ほっぽって逃げたって」
「無理やりではなかったのかの？」
「いや、ちゃんと約束した上でだと。多分雄二の事だから、また軽々しく約束したんだろうな。つーわけで、秀頼頼めるか？」

と言う訳である。

「まあ、秀頼と一緒というのも悪くはないの」
「わんっ！　わんっ！」
「おおっ、元気じゃの秀頼」
「わんっ！」

秀吉も、秀頼と一緒には初めてなので、ちょっと新鮮な気分での散歩である。
秀頼も主人じゃないが、秀吉にもそれなりに懐いてるためご機嫌。

「それにしても、ちょっと前までは懐かず大変じゃったが」

「わんっ！　わんっ！」
「こう慣れてくれると、猶更に可愛い物じゃのう」

「あっ、みて。あそこ」
「おっ、子犬と美少女が遊んでる」
「絵になるなあ。美少女と戯れる子犬って」

「何故じゃ！？」
「きゅ～ん？」

周囲から不本意な評価を受ける秀吉だった。

少し時間は過ぎ……。

「おおっ、木下秀吉！　俺の太陽！」

偶然出くわした常村が、突然目を輝かせてそんなセリフをほざいた。

「おっ、お主は！？　……誰じゃったかの？」
「ぐはっ！」

お約束の展開に、血反吐を吐くはめになった。

「まっ、まあ良い。木下秀吉、俺は……」
「うぅ～っ！」
「あっ、久遠の飼い犬！？　って、なんで一緒何だ？」
「光一に散歩を頼まれたのじゃ」
「うぅ～っ！　わんっ！　わんっ！

敵意むき出しで常村に吠える秀吉。
そんな様子に……

「なんだ？　不審者か？」
「おい、アレ警察呼んだ方が良くないか？」
「もしかして、襲おうとしてるのか？」

周囲は常村に不穏な視線を向け始めた。

「ぐっ……仕方ねえ。さらばだ木下秀吉、俺の太陽！」

バチっとウインクをして、去って行った。
……当然、秀吉は顔を真っ青にし、よろよろと散歩の続きに。

「きゅ～ん……」
「大丈夫じゃ秀頼……ちょっと倒れそうなだけじゃ」

精神的なダメージは深かった。

「あれ？　どうしたの秀吉？」
「んむっ？　おおっ、明久か」
「わんっ！　わんっ！」
「あっ、秀頼」

そこへ明久が通りがかり、その姿を見るなり秀頼が足元にすり寄った。

「元気そうだね」
「きゅ～ん」

明久が頭を撫でると、心地よさそうに鼻を鳴らす。
そこでふと辺りを見回し……

「あれ、光一は？」
「霧島から呼び出されて、今は恐らく雄二の追跡じゃ」
「また？　雄二もホント懲りないね。ねー秀頼？」
「わんっ！」

すっかり明久と仲良しな秀頼だった。

「それじゃまた明日ね？」
「うむっ」
「わんっ！」

明久と別れ、秀吉は散歩の続きに。
少々精神的ダメージで足元がおぼつかないが、秀頼がゆっくりと歩いてるため苦にならなかった。

「秀頼よ、お主も仲良しが増えたの？」
「わんっ！　わんっ！　きゅ～ん」

秀吉の言葉に賛同する様に吠え、鼻を鳴らして秀吉の足にすり寄る秀頼。
その様子が、“秀吉も仲良し！”って言ってるように思え……。

「ふふっ。やはり秀頼は可愛いのう」
「わんっ！」

嬉しくなった秀吉だった。

「あっ、なんか柄になるわね」
「そうね。美少女と子犬って」
「ふふっ、可愛いわ」

「……なぜじゃ？」
「きゅ～ん？」

本日二度目だった。

散歩終了後。

「ぷっ……あっはははははは！」
「笑うでない！」
「いや、すまん……ひーっ、ひーっ……くくっ」

その事を聞いた光一は、笑いを抑えきれなかった。

「確かに美少女が子犬と戯れるのは絵になるけど……」
「じゃからワシは男じゃ！」
「だから面白いんだよ……くくっ」
「光一！」

頬を膨らませて、腹を抱える光一に詰め寄る秀吉。

「はー……笑えた」
「光一などもう嫌いじゃ！」
「あっ、悪い悪い。調子に乗った」
「ふんっ！」

「きゅ～ん？」

そんな一時。

第二百三十二問　閑話　帰路と寄り道とゴシップ満載な一時

「あれ？　確かＤクラス代表の平賀君に、Ｅクラスの三上さんじゃない？」

部活帰りの愛子と補習を終えた光一が、途中で買い物に出てた歩美と一緒に帰宅。
その途中、仲良さげな平賀と三上を見つける愛子。

「ん？　ああ、なんかオカルト召喚大会でみたけど、仲良さそうだったな」
「もしかして付き合ってるのかな？」
「そうじゃないか？　あれがそう見えないとおかしいし」
「わあっ、良いなあ」

見るからに甘々な空気だった。

「と言うか、いいのかな？」
「良いだろ別に。最近ＦＦＦ団って、活動どころじゃないらしいし」
「ＦＦＦ団って、あの奇妙な集団ですか？」
「そう」

学年試召戦争の影響か、Ｂ～Ｅの団員が抜けたことでＦＦＦ団は弱体化していた。
と言うより初期状態に戻っただけだが、最早クラス内でしか猛威を振るえない。

理由は大神白夜が怖いから。

「恋話でふと思った事だけど、代表格って目立つ所為かそういう話ばっかだな？」
「あっ、言われてみればそうだよね。ウチの代表と坂本君とか、根本君と小山さんとか」
「……あれは恋愛なんですか？」
普通にあれを恋愛と取られる事に、難色を示す歩美。
「根本はフラれてるけどな。その流れだと、平賀ってえーっと……小林だっけ？」
「中林さんね？」
「そうそう。それとかもって噂が流れたことあるけど、平賀はああだし中林も久保にフラれて、見事代表で唯一恋愛関係不成立になった訳だし、所詮噂は噂だな」
「先輩、ダメですよそんな事言っちゃ」
本人が聞いたら１００％激怒しそうである。
「でもこう考えると面白そうだよね。でも変化球で言えば、久保君は吉井君が……」
「愛子、シュークリーム買ってやるからその手のはやめような？」
「はーいっと」
光一は同性愛関係が大嫌いである。
増してや歩美にそっち系を聞かせたくはなかった。
「……けどなぜか明久の場合、そういう話結構あるよな。俺の知ってる限り（男で言えば俺に雄二に久保、女だと）姫路に島田に葉月ちゃんに秀吉……これは冗談だ」
「……」

「光一君、もっと考えようよ？」
「いや、つい自然に出て……今のマジで冗談だからな？」
その後、立ち直るのに少々時間のかかった歩美だった。

数分後

「……色々とすごい学校ですね？」
「すぐ慣れるよ。まあ複雑かも……」
「……慣れたら、先輩とそういう関係になっても」
「え？　朝倉？」
「いっいえ、なんでもないです」
光一がぽかんとしてる間に……

「なんだ、歩美ちゃんなら歓迎してあげるのに」
「そっ、そんな……ちょっと受け入れにくいです」

そんなやりとりがあった。
そのちょっと後、シュークリームを買って近くの公園に。

光一はカスタード、愛子がストロベリークリームで、歩美がチョコ。
自販機で光一がブラックコーヒーを買って、近くの公園のベンチに座り……

「あっ、美味しい」
「チョコもおいしいです」
「ホント？　ちょっと良い？」

一口食べ、愛子と歩美は食べっこを始めた。
光一は自販機で買ったブラックコーヒーを飲みつつ食べながら、そんな光景を微笑ましそうに見ていた

「光一君食べてみる？」
「遠慮しとく。俺甘い物好きじゃないから」
「そうなんですか？　こんなにおいしいのに」
「俺どっちかって言うと、モカとかブラックチョコの方が好きだし」
「わおっ、大人だね」
「好みの差だろ。大人でも甘いの好きな奴や辛いのダメって奴いるだろうし、子供で逆ってのも案外あり得るかも……ん？」

「あの、平賀君？　そっち、食べてみても良いかな？」
「え？　うっ、うん……じゃあ、俺も食べていいかな？」

ふと見ると、少し人目につかない場所でシュークリームを食べあいっこしてる、トある2人が目に入った。

「おーおー、仲良しだねえ」
「わあっ……」
「あははっ、お熱いね」

そんな光景をそれぞれ、からかう様に、顔を赤くして、微笑ましく見ていた。

それから歩美と愛子と別れて、一路帰宅。

「と言う訳で、はい土産」
「ありがと」

秀頼の世話で仲間外れになった優子に、光一はブルーベリークリームのシュークリームを手渡し料理に入る。
ちなみに今日は木下家は両親が留守の為、光一の家で一緒に食べる事になっていた。

優子は秀頼を抱っこしながら、シュークリームにぱくつく。

「でも三上さんと平賀君って、付き合ってたんだ。しかもそこまで進展してたなんて」
「まあ納得は出来るの。オカルト召喚大会でもそれなりじゃったから」
「へえっ、秀吉知ってたの？」
「うむっ。最初に見つけたのワシじゃからの」

文月学園では、（普通の）恋愛関係のゴシップ自体がとある集団の所為で、殆ど出ない
出たとしても、主に光一や雄二関係の物が主流である。

「でも意外でもないな。最近はＦＦＦ団の弱体化に伴って、その手のゴシップはちょくちょく聞く様になったから」
「それでも少なくはあるわね。メインがアタシ達と代表たちだから」
「目立つ人間のゴシップの方が話題性があるからじゃろ。特に光一の場合、関係自体が話題性たっぷりじゃからの」
「お前と明久だったら尚更だろうな」
「じゃからワシは男じゃ！　……確かに話題性はたっぷりじゃろうが」

どの道目立つことには変わりない。

「でも明久の場合、雄二の所為で噂以外にも大事になるだろうな」
「……思いっきり鮮明に想像できるわね。助ける為に光一が坂本君をハメるのもね」
「いや、折角だから明久にハメさせるのも面白そうだ」
「確かに激怒しそうじゃの」

“お前の所為で楽しみが潰れたじゃねえか！”
そう言って光一に掴みかかる姿が、秀吉には目に浮かんだ。

「きゅ～ん」
「？　どうしたの秀頼？」

秀頼が優子から飛び降りると、トコトコとエサ入れのある場所に歩いて行って。
エサ入れを咥えて、優子達に差し出した。

「んむっ？　お腹が空いた様じゃの」
「あっ、あたしがやるわ。ちょっと待ってて？」

そう言って優子が秀頼のエサ入れに、ドッグフードを入れ始めた。

「こんなやりとりも、一種のゴシップだな」
「じゃの。まるで家族じゃ」
「てか愛子と朝倉が加わった光景が新聞に載ったら、異端審問会は再度勢いを取り戻したりして。なーんてな、ははは」
「光一よ、そんな事言っておると、実現するぞい？」
「……明日あたり何かあったりしないだろうな？」

第二百三十三問　閑話　とあるＦＦＦ団の憂鬱と奮闘

ＦＦＦ団は考える。
学年試召戦争以来、規模がＦクラス単体のみとなり活動も縮小。
弱体化の一途をたどる集団は、考えていた。

それは、かつての勢いを取り戻すべく……

「「「なぜ急に到来した恋愛シーズンに乗れない！？」」」

ではなく、ＦＦＦ団弱体化に伴い発生した恋愛シーズン
その波に乗れずにいる事に、頭を悩ませていた

ちなみに発生した原因については、彼らは全く気付いていない。
何故なら彼らはバカなのだから。

「平和だな」
「平和だね」

そんな彼らのちょっと離れた所で、明久と光一は将棋を指しながら
ほのぼのとしていた。

「明久、お前は良いのか？　このシーズンに乗らなくて」
「乗る乗らない以前に、宛なんてないのにどうしろって言うのさ？」
「……はぁっ」

雄二が呆れたようにため息をついた。
光一はお前がやるなと思うが、どうせ言っても聞かない為だんまり。

「ま、今は面白おかしく過ごす方が優先だろ？　はい、飛車もらい」
「うん、そうだ……あっ！　待って、今のなし！」
「待った無し前提だって言ったろ？　まだ角があるんだから、それで踏ん張れ」
「まいったなあ……」
「ったく、面白みがない」

そう言って、雄二はつならなさげに自分の席に戻って、ごろんと横になった。

「……お前の言う面白みは、その幸福の妨害だろうに」
「何か言った？」
「なんも……って、そう来たか？」

まあ何にせよ、ＦＦＦ団の興味が今ＦＦＦ団の弱体化に伴い（自覚なし）訪れたこの恋愛シーズン。
それに向けられているのなら、光一にとってはしばらくのんびりと……

「よし、こうなったら一年の朝倉歩美ちゃんの……」

ポイっ！（ガス缶が投げられる音）
ブシューーっ！！（昏倒ガスが噴き出す音）
バタバタバタっ！（Ｆクラスメンバーが倒れる音）

出来なかった。

「平和だな」
「……ガスマスクさえ付けてなかったらね」

次の日。

「で、何の真似だこれは？」

光一は武装したＦＦＦ団によって、囲まれていた。

「俺達がモテない理由を考えたんだ」

「へえっ、お前らの脳に考えるなんて機能があったんだ？」

「それでだ……初心に帰る事にしてみたんだよ」

「うん。それは良い事だ……で？」

「それでな？　ＦＦＦ団は学園の風紀を守る為、女づれの異端者を裁く集団であり、お前を倒しその功績を持って女生徒に……ごほんっ。学園の平和に貢献しようと言う正義の集団だ」

つまり……

「つまり、あの頃の様に俺を倒した功績でモテようと？」

「その通り。上手くすれば工藤と木下、朝倉歩美ちゃんも俺達に心惹かれるかもしれない！」

「と言う訳で……死ねや久遠！！」

数十分後。

「あー、しんど」

死屍累々のＦＦＦ団を無視して、武器一式をしまう光一。

「ＨＲ始めるぞ！　寝てないで席に付け！」

「俺が言えた義理じゃないが、アンタも大概酷いな！？」

そして昼休み

「はぁっ……」

「あははっ。それは確かにすごい行動力だね」

その事を話したら、優子は呆れ愛子は笑った。

おにぎりを食べる明久と、サンドイッチを食べながら将棋を指す光一。

「それがFクラスの特色だから、良い事ではあるんだけど……」

「暴走傾向強いからね。あっ、王手」

「おっ、そう来たか。そうだな……まあ何にせよ、何事もやらないよりかはマシだからな。失敗恐れてたら、何もできやしないし」

「その辺りは同感だけど、反省が出来なかったら意味ないじゃない」

「反省は出来てるぞ？　……変な方向に」

「……そうね。アンタ見てるとよくわかるわ」

唇を動かさず話したり、咄嗟の脱出の為に窓に向かったり。

等、光一もFクラス特有の妙なスキルの体得者である。

「でも悪い所ばっかって訳でもないぞ。確かに暴走しがちだから、そういう面が目立つのは事実でも、普段こそ付き合いやすいのは事実だ。だからこそそれなりに楽しくはやれてるから、ある意味最も楽しいクラスなのは事実だな」

「……ま、そうかもね」

なんだかんだで、杓子定規よりは楽しいのは事実だろう。

と優子は思う。

「それに俺にしてみれば、見下し根性丸出しの上位クラスよりはよっぽどいい。根本や指ども、常夏とかに比べればな」
「わかり易過ぎるわね」
「ま、何が良いか悪いかってのは人の勝手だけど、否定すりゃ良いってもんでもないって訳だな。ほら明久、王手だ」
「うっ……あーっ、負けた」

飛車角、未だ抜き。
香車桂馬抜きの勝利から、まだ一カ月程度。

「先はまだまだ長いなあ」
「なあに、成長の兆しがないよりはずっとマシ。ま、最下位らしくコツコツと行こうや」
「……そうだね」
「では明久君、次は私と！」
「アキ、ウチとやりなさい！」
「姫路、島田、まだ決着ついてないだろ？　まずお前らでやれ」

「ま、Ｆクラスも捨てた物じゃないかもね」
「うんうん」

昼休み明け。

「……あれ？　皆は？」
「さあ？」
「もうすぐ時間だぞ？」
「ワシら以外が居ないとは、一体どういう事じゃ？」

「ああっ、それなら全員補習室だ。ボロボロの状態でな」

光一たちがFクラス教室に戻ると、そこはもぬけの殻。
誰もいない事に疑問を持ってると、ふいに鉄人がその答えを持ってきた。

「ボロボロ？」
「あのバカ共は、あろうことか3年にアプローチを仕掛けてな。その際大神に……」
「「「「「いや、その先もうわかった（のじゃ）（りました）」」」」」
「そうか。ではこれより授業を始める」

「……ある意味すごいね皆？」
「ま、どうせ偶然だろうがな。あの時の様子を考える限りじゃ」
「だろうな。お前の兄貴も相変わらずすごい様だが」

第二百三十四問　閑話　とある超人の茶会

時はさかのぼり、二学期の初め
文月学園、茶道部の和室にて。

「……結構なお手前で」

小暮の点てた茶を飲み、白夜は一息。

「……」
「？　何を見ている？」

その小暮の隣に座る女生徒、小山友香はその落ちついた姿勢に唖然としていた。

「いえ……ただ、冷血の暴君なんて呼ばれてる人の姿としては、意外で」
「暴君だから、落ちついてはいけない……とでも言う気か？　どこの誰かは知らんが、発言は考えてからやれ」
「あの、貴方とは……」
「有象無象のゴミ等、一々覚えていない」

眼中にないと断言するかのように、白夜はそう返した。

「……でも、あの吉井（バカ）の事は」
「あれは私との勝負で、しっかりと結果を残したからだ。私は傷つけられた事が滅多にないのでね」
「そんな！　たかがまぐれで……」
「……」

「……いえ、すみません」

白夜の無言の圧力に、小山の方が折れ再度頭を下げた。

……冷や汗が吹き出て、震えが止まらなくなった上で。

「ふんっ……それで何の用だ？　小暮を介して私に話とは」

「あっ、はい。改めまして、私はCクラス代表の小山友香と言います。あの……もうすぐFクラスは戦争解禁になります。それで……」

「Fクラスを抑える為に、私の力を借りたいと……？」

現状では小山に、今のCクラスを纏めるだけの器量は備わっていない。

だからこそ、後ろ盾が欲しいと言うのが小山の内心。

「話が早くて助かります。これは学園の平和の為でも……」

「断る」

即断だった。

「どっ、どうして!?」

「学園の平和……と言ったが、お前が言えた義理か？　Cクラス代表と言えば、あの負け犬の逆恨み集団の首領格の筈だ」

「うっ……でも大神先輩も」

「確かに私とてそれなりの事をした事は事実だが、それはあくまで騒動の火種を駆除すると言う名目での事だ。一学期の騒動にしても学年試召戦争にしても、貴様らの横暴が3年にまで及んだ以上、主席として黙っているわけにはいかないという前提のもとにな……しかしな、試召戦争は各クラスに与えられた正当な権利。とやかく言う気はない」

白夜はそこまで言うと、茶を一口。
それから小山に対し、呆れたようにため息をつく。

「個人としての私自身は、Ｆクラスの試召戦争決起は良い事だと思っている」
「なっ！」
「いや、寧ろ推奨すべきだな。一学期の戦いを調べてみたが、自身達の武器を自覚した上で勝算に全てをかけ、最後の戦いの布石とした……確かに詰めこそ謝りはしたが、後一歩でＡクラスに勝てる所まで追い込んだ頃は事実。それについては私も評価している」
「納得できません！　その事があったから、Ｆクラスは調子に乗って……」
「ぬかせ。貴様ら上位クラスの不甲斐なさは棚上げか？」
「そんな理不尽な！」
「理不尽？　……バカかお前は」

白夜は侮蔑の意を込め、吐き捨てるよう言い放った。
もう話を聞く価値がないと判断したかのように、茶を飲み菓子を食べる。

「世界は常に理不尽をつきつける物だと、そんな事もわからんのか？　大事にしてほしいなら檻にでも入れ。エサ位なら恵んでやるぞ」
「人を獣か何かのように……」
「……」
「……すみません」
「まあまあ代表、その位で……」

小暮が助け船を出し、白夜と小山の前に茶と菓子を出した。
白夜はそれを呑み、一息。

「全く、どいつもこいつも……理不尽など跳ね返してやる、位の気概もないとはな。そんな中身なき無能どもなど、Ｆのバカどもに蹂躙されるのがお似合いだ」

「……そんな事になったら、学園の評判は下降の一途ですよ？」

「それで取引のつもりか？　私が優先すべきは３－Ａクラスの安泰である以上、戦争が終わってからでも遅くはない。寧ろ有頂天から突き落とした方がより効果的だ」

白夜が心底どうでも良さそうに立ち上がる。

「確か、小山友香だったか？　お前は視界と了見があまりにも狭すぎる上に、勝負や戦いと言う物をあまりにも知らなさすぎる。それでは私にとって、捨駒程度の価値にすら値しない……が、猶予はやる」

「え……？」

「Ｆクラスは野球に夢中だそうだ。理由はわからんが、恐らく教師・生徒親睦野球大会に向けてだろう……それが終わるまでにそれなりの地盤を築いたという自信があるなら、また来い」

そう言って、白夜は和室から出て言った。

「……仕込みはひとまず終わり。後は待つのみか」

「あっ、此処にいましたか！　大神先輩、是非ぐふっ！」

「……さて、どこまで私の思惑通りに進むか……だな」

殴り飛ばした事に気付かないまま、白夜は帰って行った。

……気絶した根本をそのままにして。

「……軽薄な内面に反比例したかのような厚過ぎる自尊心、か。中身が伴わない傲慢程くだらない物もないな」

そして、現在

「……がっ、か……」

所は3年の教室のある4階の廊下。
死屍累々と横たわるのは、２－Ｆメンバー

その中央で……

「あれだけの事があったと言うのに、私を恐れもしないとは……湿気たハエ程度でしかないのが残念だが、まあ良いだろう。暇つぶし程度にはなった」

白夜が両手に、ぐったりと気絶してるＦクラスメンバーの胸ぐらをつかみながら、そう呟いた。
その２人を投げ捨て、赤く染まった拳をハンカチでぬぐい、そのハンカチを捨てる。

「これ位の気概が、中身が伴わないクズ揃いの我がＡクラスにも欲しい所だがな」

基本的に、白夜は身体的な強さを外面の強さ、意思の強さを内面の強さと捉えている。

意思が折れれば、力が十二分に生かされない。
かといって意思が強かろうと、力が伴わなければ意味がない。

ここで補足。

明久に関しては、能力より意思の強さを高く評価している。

「すまんな大神」

「ああっ、西村先生。いいえ、構いませんよ。軽い運動にはなりました」

興味は失せたと言う様子で、白夜は踵を返し教室へと戻って行った。

そんな白夜を見送り、鉄人西村はＦの全生徒を担ぎ補習室へ。

「……さて、そろそろ動く頃だな。やむおえん、あの小物に」

「代表、今日の放課後ですが」

「ん？　小暮か。茶会なら、茶菓子はアレでなければお断りだ」

「はい、用意はできております」

「そうか。なら楽しみにさせて貰おう」

第二百三十五問　閑話　とある転入生の召喚獣お披露目

昼休みの屋上

「私の召喚獣が出来ました」

そんな朝倉の一言に。

「そう言えばそろそろだったっけ？　懐かしいな、初めての召喚獣実習」

「うむっ、光一は特にはしゃいでおったのう」

「僕は特に興味はなかったけど、ゲームみたいで楽しかったな」

「まあそうだな」

「……（コクコク）」

全員が初めての召喚獣を召喚した時を思い出し、懐かしさに浸り始めた。

特に男性陣は、まるでゲームの様だとはしゃいだ記憶もある。

「そうですね。召喚獣はとてもかわいかったです」

「ええ。あれで戦いって、ちょっと気がひけたわ」

「……うん」

「アタシは、あまり気にはかけてなかったわね。だってテストの点数が召喚獣の強さになるんだから」

「そう？　ボクはちょっと面白かったけど？」

逆に女子は、外面の可愛らしさに気を引かれていたり、さして興味もない。

と言う様子である。

「じゃあちょっと見せてよ。アウェイクン！」

光一が新しくついた劣化型フィールド形成（教科指定不可、召喚可）を起動。

少々狭いフィールドが形成され、歩美がびっくり。

「あれ？　どうして……？」

「ああっ。俺と明久、雄二と秀吉はちょっと特別でね」

光一が目配せすると、明久と雄二が白銀の腕輪を、秀吉が黒金の腕輪を見せた。

「召喚獣の大会で優勝、準優勝賞品の腕輪の機能。ちょっと他とは違うって訳」

「は～っ、すごいですね」

ここで補足。

明久は同時召喚、光一は融合召喚と融合媒介、そして劣化型フィールド形成。

そして雄二はフィールド形成（教科指定可、召喚不可）で、秀吉もフィールド形成（教科指定不可、召喚可）である。

光一のフィールド形成は、秀吉のフィールド形成の劣化型である。

「しかし、やっぱ狭いな」

「お前の場合、逃げる為に機能しさえすれば充分だろうが。学園最低点保持者が」

「ぐっ……」

『Ｆクラス　久遠光一　古典２点　世界史１点　日本史１点』

「相変わらず酷いと表現する事すら生易しいのう」

「その代わり物理や数学や英語はトップクラスだろ」

『Ｆクラス　久遠光一　物理７２２点　数学４３２点　英語４３３点』

「だろうな。物理だけはあの超人を抜いてやがるから」

「どうだか？　あいつ必要最低限で事を成すタイプだから、あの点数も全力じゃないかもしれねーぜ？」

「……怖い事言うなよ」

腕輪どころか、武器も殆ど使わずパンチだけで１クラス制圧出来るだけに、これ以上何かあるなんて考えたくない。

と言うのが、学年試召戦争で敵対した２年の総意でもあった。

「人類皆平等って言葉を完全否定してるよね。大神先輩って」

「明久もそうだろ、逆の意味で」

「雄二うるさい！」

「？」

ただ１人、白夜の事を知らない歩美は首を傾げるのみだった。

「それより、朝倉の召喚獣」

「あっ、はい。えっと……サモン！」

『１－Ｂ　朝倉歩美　世界史１３３点』

足元に幾何学的な文様が現れ、そこから姿を現すデフォルメされた歩美の姿をした召喚獣。
武器はハルバードと呼ばれる槍を持っていて、装備は純白の軽鎧をまとっていた。

「へえっ、結構良い装備じゃないか」
「あっ、ありがとう、ございます」
「朝倉さんは勉強できる方だからね」

『１－Ｂ　朝倉歩美　総合科目１６５４点』

「点数的に、ＢかＣクラスってところか。明久より役に立ちそうだな」
「点数あっても役に立たん奴が言うな」
「「……（ガンのくれ合い）」」

「よく飽きないわねこいつ等」
「これがこの２人なりの友情って事じゃろ」
「「気持ち悪いやめろ！！」」

揃って失言した秀吉に抗議した。

「ちょうどいい。モヤシ、いい加減どっちが上かここで証明してやる」
「ぬかしたなこの野郎！　じゃあやってやろうじゃねえか、サモン！」
「バカめ、サモン！」

『２－Ｆ　久遠光一　世界史１点』
ＶＳ

『２－Ｆ　坂本雄二　世界史２３３点』

「お前らしくもないな。こんなくだらないミスを犯すとはよ」

「バカはお前だ。朝倉、ちょっと頼む」

「え？　はっはい？」

「ユニゾン」

『２－Ｆ　久遠光一（＋朝倉歩美）　世界史１点＋１３３点』

「あっ、テメ！」

「融合召喚がダメなんて言ってないだろうが」

「この卑怯者！！」

「ぬかせゴリラ！」

右手に３本のサーベルを指で挟むように、左手にはショットガンを持ち、黒いマントを羽織った融合召喚獣が、囚人服に鉄球の雄二の召喚獣と相対。

「名前に光が入ってるクセして、召喚獣は悪物じみてやがるな」

「無駄口たたくな！」

融合召喚獣がショットガンを撃ち、雄二の召喚獣が鉄球でそれを防ぐ。

その隙をついて、懐に飛び込んだ融合召喚獣がサーベルで雄二の召喚獣に３本の線を刻んだ。

「所詮はゴリラだな」

「テメ！」

ぶんっと鉄球を振り回し、雄二が反撃。

しかし武器が武器だけにモーションが大きくなり易く、光一にとってはばればれ。

そもそも召喚獣の扱いにおいて、幾多もの修羅場をくぐりぬけてきた光一と、煽って傍観してばかりの雄二ではあまりにも差がありすぎた。

「あらよっと」

下段からの振り上げに、雄二の召喚獣が手の錠を使いガード。
を見越した上で、ショットガンを雄二の召喚獣の口につっこんで、引き金を引く。

召喚獣の頭が石榴の様に破裂すると同時に……

「戦死者は補習！！」

どこからともなく現れた鉄人西村が、雄二を連れ去って行った。

「しかし、朝倉と相性が良くて助かった。ありが……あれ？」
「せんぱいと……せんぱいと……」
「おーい朝倉？　もしもーし？」

顔を真っ赤にしてパニック状態になった歩美に、その場全員があたふたとし始めた。

第二百三十六問　閑話　とある朝の散歩事情

「ふぁあ……」
「わんっ！　わんっ！」
「はいはい。んじゃ、行くぞ」
「わんっ！」

時は早朝。
光一はあくびをしつつ、ご機嫌の秀頼のリードを持って早朝の散歩へと。

「おはようじゃ光一」
「おはよう、光一」
「ああっ、おは……あれ？」

早朝ランニングに出る秀吉と出くわすのは、いつもの事。
……なのだが、今日は珍しく優子が一緒だった。

「優子？　どうして？」
「昨日体じゅくふぅっ……」
「最近運動不足だから、健康の為に走る事にしたのよ！」

いつもの事いつもの事。
昨日木下家の風呂場の方向から、優子の悲鳴が聞こえた時点で予期出来ていた事。

と、光一は思っていた。

「と言うか、悲鳴あげる程の事か？　見た目そんな変わってるよう

に見えないんだが」
「数字にはしっかり出る物なの」
「ふーん。まあ数字云々の話は、俺には関係ない話だけど」

光一は貧弱な体躯ゆえか、ダイエットの類の話はあまり好きじゃなかった。
まあ男なのだから、とやかく言っていけない事だとわかっていても、どうにも複雑な気分にさせられる。

「……きゅ～ん」
「うぅっ……すまぬの秀頼」

ちなみに秀頼は、優子の折檻で痛めた首をさする秀吉に心配そうにすり寄っていた。

「で、どうする？　一緒に行く？」
「いや、俺じゃ2人のランニングについて行ける自信ない」
「とても異端審問会を1人でつぶせる者のセリフではないのう」
「ほっとけ」

あくまで武器を使わないと、光一はてんで弱い。

「んじゃ、行くぞ秀頼」
「わんっ！」
「ならばワシはいつものペースで行かせてもらうぞい」
「はっ？」
「姉上は軽くでよかろう？　いきなりじゃと、身体を壊すぞい。ではまたの……もう居心地悪いのはごめんじゃ」

と言って、秀吉はさっさと走って行った。

残された優子は……。

「もう……」
「んじゃ、行くか？　歩くのも運動に入るし」
「そうね」
「わんっ！」

優子も揃っての散歩のおかげか、秀頼は一層ご機嫌になった。

「秀頼も朝から元気ね？」
「優子も一緒でよりご機嫌なんだろ」
「わんっ！」
「ありがと」

そしてそのすぐ後……

「おおっ、久遠か。また犬の散歩か？」

ランニング中の鉄人西村と遭遇した。
秀頼は鉄人西村の姿を見るなり、びくびくしながら光一の後ろに隠れてしまう。

「相変わらず、か」
「ま、当然だな」
「光一！　すみません。そしておはようございます。西村先生」
「ん？　なんだ、木下姉も一緒だったか」
「ほら、大丈夫よ秀頼」
「……きゅ～ん」

秀頼がびくびくとしながら、手を差し伸べた優子の手にすり寄った。

鉄人西村は、感心する様に見ていた。

「ほうっ、流石は幼馴染だな」

「優子と明久は比較的に早かったからな。秀吉に愛子は時間かかったけど」

「吉井もか！？」

「アンタも大概ひどいな！？」

その後鉄人と別れ、次は……

「あっ、おはようっ、ございます……久遠君に木下さん、それに秀頼ちゃんも」

「……（ぷいっ）」

息を切らしながらランニングしていた瑞希と出くわし、秀頼に声をかけるがそっぽを向かれた。

「……ああっ、体弱かったんだっけ？」

そこでふと、光一は瑞希が身体が弱い事を思い出した。

ちょっと前まで、明久を拷問し続けていただけにすっかり忘れていた。

「って、大丈夫か？　今にも倒れそうだけど」

「大丈夫、です……」

「全然大丈夫じゃねえよ。飲み物買ってやるから待ってろ」

と言って、近くの自販機でスポーツ飲料を買って瑞希に手渡す。

それをゆっくり飲んで、息を整えると……

「ありがとうございます」
「いや、それは良い」

くぅ～っ！

「はうぅっ！」
「……秀頼、どうした？」
「きゅ～ん？」

一応聞かなかった事にする為、今のは秀頼の鳴き声と認識したフリをする光一。

「もしかして、姫路さんも」
「はい……ちょっと、１００グラム増えちゃって」
「……アタシも……２０００グラムも増えちゃって」

「……行くぞ秀頼」
「きゅ～ん？」

付き合いきれなくなり、さっさと去っていく光一と秀頼。

「優子はともかく、どうして誤差の範囲であんな息も切れるダイエットなんて？　……女ってよくわからん」
「わんっ！」
「いや、お前メスだろ？」
「わんっ！　わんっ！」
「まあ人間の事なんてわから……ん？」

ドドドドドッ！！

「なんだ？　島田が清水に追いかけられてるのか？」
「きゅ～ん？」

突然響いてきた怒号の様な音に警戒しながら、秀頼を抱きかかえクボタンを取り出す光一。
そして土煙を上げながらこちらに向かって駆けてくるのは……

「捕まってたまるかあああああああああああっ！！」
「……逃がさない」

Tシャツにズボンと、見るからに部屋着な起きぬけの雄二。
そして文月学園の女子制服をまとった翔子が、鬼ごっこをしていた。

「おーい雄二、近所迷惑だから叫ぶな」
「わんっ！」
「この状況で言う事はそれか！？」
「だから昨日言っただろ？　ちゃんと一緒に帰ってやれって」
「テメ、覚えてやがれ！！」

状況が状況だけに光一に構う暇なく、雄二は駆けて行った。
翔子に追いかけられながら。

「朝からホント元気だな」
「わんっ！」
「ちょっと！　置いていく事ないじゃない！」

そこへ息を切らせながら優子が合流。

「あっ、悪い。話題的に聞かない方がいいと思って」
「……まあそうね」

「わんっ！」

なんか今日はにぎやかだな。

そう思いつつ、光一は優子と秀頼を伴い、帰路に就いた。

第二百三十七問　閑話　久遠さんちの秀頼ちゃんの1日　休日編

秀頼の一日は、主人を起こすことから始まる。

「きゅ～ん（ぺろぺろ）」
「んっ……おはよ秀頼」
「わんっ！」

本日休日だが、それすらもお構いなし。
光一は身支度を整えると、秀頼の首輪にリードを付けスコップとビニールを持ち、いざ散歩。

「あれ、優子は？」
「体重が落ちついたそうじゃから、まだ寝ておるぞい」
「あっそ」
「きゅ～ん？」

いつものランニングに出る秀吉とあいさつを交わし、秀吉はさっさと走って行く。

「それじゃ行くか、秀頼」
「わんっ！」

そう言って、秀頼を連れて散歩へと。

「おう久遠」
「……きゅ～ん」

途中鉄人と出くわし、いつも通りに秀頼がおびえたり……

「……おはよう久遠」
「よう霧島。もしかして泊まり？」
「……違う。さっき雄二の家に言って、今連れていく所」
「そうか。それじゃあな」
「……うん。秀頼も」
「……（ぷい）」

寝てる（？）雄二を引きずる翔子に出くわし、秀頼がそっぽを向いたり……

「お姉さまぁぁあああああ！！」
「ああもうっ！」

ランニングしてただろう美波が、美春に追いかけられていたり……。等など、摩訶不思議な光景ばかりだが、既に慣れている為気にならない光一達。

散歩を終え、家に帰ると……

「じゃあちょっと待ってな秀頼？」
「わんっ！」

光一がドッグフードを取り出すと、秀頼がエサ入れを咥えてトコトコと光一に歩み寄る。
エサ入れにドッグフードを入れてやると、秀頼はそれを食べ始めた。
光一は秀頼の背を撫でてやると、食パンを2枚取り出し目玉焼きを作り始める。

本日ひなたは出張で遠出の為、泊まりで留守である。

「おはよう光一」

それらが出来上がった頃に、優子がリビングに入ってきた。

「チャイム位ならせよ」

「ひなたおばさんから許可は貰ってるわよ」

と言って、合いかぎを見せる優子。

「はいはい。メシ出来てるぞ」

「じゃあいただくわ」

休日の朝は、優子と一緒に朝食を食べるのがほぼ日課となっていた。

と言うのも……

「高橋女史の指示とはいえ、ここまで徹底せんでも……」

「ダメ。アンタ絶対課題やらないんだから」

高橋女史の指示で、光一に出した課題の監督をする事になってるためである。

「あー……せっかくの休日なのに、優子と一緒でも色気も何もあったもんじゃねえ」

「もうっ、せめて午前だけでもしっかりしなさいよ」

「やだー」

グギっ！！

「……シャレが通じんなおい」

「……きゅ～ん」

首をさすりつつ、しぶしぶと勉強道具と課題を広げる光一。
そんな光一に“大丈夫？”と聞くかのようにすり寄る秀頼。

「ごめんね秀頼、今から大事な事やらないといけないから」
「わんっ！」

優子がやんわりとそう言うと、秀頼は少し離れて日当たりのいい窓の近くでコロンと日向ぼっこを始めた。

「……可愛い」

優子がいそいそと携帯電話を取り出すと、秀頼がそれに気付き逃げるように物陰に隠れてしまった
優子が残念と言う様に、渋々携帯を片付ける。

「やっぱり撮影は嫌がるみたいね」
「みたいだな」
「今のは残したかったけど……それより光一、どうやったら平安時代に徳川家康が出てくるのよ！？」

光一の歴史オンチは、未だ改善の余地が見えずにいた。

そしてお昼。

「……今日もてんでメチャクチャね」
「……歴史苦手」
「苦手で表現していいのこれ？」

決して頭が悪い訳ではない事は、優子どころか高橋女史も理解はしている。
しかしどういう訳か歴史と古典だけは、未だに改善の兆候が見えずにいた。

ちなみにその恩恵か、最近高橋女史の授業のレベルが格段に上がったと言うのは別の話

「きゅ～ん」

そこで秀頼がエサ入れを咥えて、光一たちの前に差し出してきた。

「あら秀頼。もうそんな時間？」
「じゃあ……」
「今日はアタシが作るから、光一は秀頼にご飯上げて。チャーハンでいいわね？」

優子は台所へ行き、光一が秀頼のエサ入れにドッグフードを入れてやると……。

ぴんぽーん！

「よう秀吉に愛子」
「お邪魔するのじゃ」
「おじゃましまーす」

部活が終わった愛子と秀吉が。
たまに明久や瑞希、歩美も混ざる事もあるが、本日はなし。

優子の作ったチャーハンを食べると……。

「わんっ！　わんっ！」
「秀頼、くすぐったいわよ」
「ほらほら秀頼ちゃん、こっちこっち」

優子と愛子は、秀頼と遊び始めた。
愛子にもようやく懐いて、今では抱っこも出来ている。

「ドッグフードがもうないな」
「買い物かの？　ならばワシも行くか」
「悪いな。ついでだから、鶏肉と卵の特売も付き合って？」
「仕方ないの」

と、光一と秀吉は2人で買物に。

「……きゅ～ん」
「やっぱりご主人様には勝てないか」
「みたいね。ほら秀頼、主人はすぐ帰ってくるから、それまで遊びましょ？」
「わんっ！」

主人がいなくなりしょんぼりした秀頼に、優子も愛子も苦笑。

それから1時間後。

「ただいま」

主人の声を聞くや否や、遊んでた優子と愛子そっちのけで玄関に駆けだす秀頼。

そのまま飛びつき、光一に抱きかかえられる。

「っとと」

「わんっ！　わんっ！」

「ただいま秀頼。ほら、土産だ」

袋の中から犬ガムを取り出すと、秀頼が喜んで齧り始めた。

「あーあ、やっぱり主人とボク達の間には、越えられない壁があるのかあ……」

「みたいね」

肩をすくめながら、それでも懐いてくれるだけまだまし。

そう思いつつ苦笑しながら、光一の手の中で犬ガムを齧る秀頼を2人は見ていた。

夕方になると愛子は帰り、優子も明日の準備と予習の為に帰宅。

家には泊まる為の秀吉と……。

「ただいま」

出張から帰って来た光一の母、ひなたのみ。

「せっせっせーのよいよいよい、じゃ」

「わんっ！　わんっ！」

その秀吉は秀頼と遊んでおり、光一は現在風呂の準備で、ひなたが今日の夕食の準備。

それらが終わると、3人で食卓を囲う。

「ひなた殿、今回はどちらへ？」
「今回はラーメン特集の為に、あちこち取材にね」
光一は基本的に、ひなたに話しかける事はほとんどない。
ただひなたに話しかけられても、最低限の返事のみ。
「……ごちそうさま」
食べ終わるとさっさと食卓から離れ、風呂へ。
「未だ光一は素っ気ないのう」
「良いのよ。全部自業自得だって理解はしてるから」
「きゅ～ん？」
「ひなた殿……あっ、待つのじゃ光一！　ワシも入るのじゃ！」
折角の男同士裸の付き合いのチャンス、潰されてはたまらない。
と言う感じで、秀吉は風呂場へと駆けて行った。
「……はぁっ」
「きゅ～ん？」
ひなたはため息をつくと、食器を片づけ書斎へと向かって言った。
すぐに記事を作り、提出する為に。
「それじゃ、寝るか」
「うむっ」
「わんっ！」
こうして、休日は静かに幕を閉じた。

第二百三十八問　第二学期試召戦争Cクラス戦　前編　プロローグ

体育祭も終わり、クラス間の均衡が崩れ始める時期となった。
そんな中、２年も３年もあるクラスの動向に、平穏を崩されると言う懸念を抱かずにいられなかった。

２年Ｆクラス。
かつての神童坂本雄二、過激派筆頭久遠光一を中心に、学力こそ最低だが統率力と行動力においては、学年どころか学園随一と言われるクラス。
１学期に置いては初日から試験召喚戦争を起こし、その後も何かと問題の渦中となったクラスであり……
２年にとって、悪夢ともいえる学年試験召喚戦争の引き金ともなった、問題クラスである。

３年にとっても、学園の評判を下げる原因ともいえるクラスに、迷惑と嫌悪を抱きながら、他の２年のクラスに期待をかけるしかないと言う、戦々恐々とした時を送っていた。

稀代の天才、冷血の暴君……そう名高き３－Ａ代表、大神白夜を除いて

「――頃合い、か」

読んでいた本をぱたんと閉じた。

白夜にとって、Ｆクラスが起こす戦争はむしろ歓迎の部類だった。
学力だけが全てじゃない……その証明自体も、まったくもって賛成である。

――しかし

「あまり、気のりされてはいないご様子ですね？」
「私情は挟まんさ。このクラスの安泰を脅かすと言うのならな……それより、手筈は？」
「既に整っています」
「ならば始めろ……この戦いで、Ｆクラスからクラスとしての機能を奪いとる」
「はい。これで平和に受験勉強が出来ますね」

白夜は目的を果たす事に躊躇いはない。

彼には善と悪、白と黒、正と誤、清と濁、と言った概念が存在しない。
彼にとっての区別は、強いか弱いかのみ。

「平和、か……最も意味なき物だな。人が人として生きている限り、恨み恨まれと縁を切る事も、皆笑顔の仲良しこよしで幸せいっぱいとなる事も、あり得ないと言うのに」

しかし、当のＦクラス教室では……

「――これより、異端者・吉井明久の審問を行う」

その吉井明久は、手足を縛られ畳の上に転がされていた。

「吉井明久、何か言い残す事はあるか？」
「途中であって、一緒に登校しただけなんだ！　無実……とまでは

いかなくても、減刑を要求する！」
「では、会員１０名による往復ハイキックで手を打とう。では久遠が来る前に……」
「おい、何の騒ぎだ？」

そこへその光一が登校してきた。
その手には拳銃とスタンガンが既に握られていて、臨戦態勢いつでもＯＫ。

「いや、これは……」
「ただ途中で姫路さんとあって、一緒に登校したのを咎められてるんだよ。この程度で重罪なら、皆だって同じことが起こったらどうするのさ？」
「だろうな。一緒に登校位、普通に頼めば出来る事だろうに」
「「「むっ……ッ！」」」

光一の指摘に、全員が動きを止めた。

「会長、被告と弁護人の言にも一理あるかと思います」
「我々も鬼ではないのですから、この程度なら看過してもよろしいかと」
「一緒に登校する位の幸運なら、我々にも訪れるかもしれませんし」

光一は“ＦＦＦ団を解散しない限り、ありえねーだろ”と思っていた。
しかしそれは思っていても、口には出さない。

「それに朝のスト―キング行為が処罰されるなら、私は毎日刑を受けなくてはならないですか」
「ちょっと待て。お前か、最近誰かの視線を感じるって怯えさせた

張本人は？」
「ちっ、違う。あの後輩ちゃんじゃない！」
「おい。確かに怯えてたの朝倉だが、誰も朝倉とは言ってないぞ」
「あっ」
「てめっ、覚悟しろ！！」
――平和な日常だった。

そして時は過ぎて、昼休み。

「相変わらずと言えば相変わらずなんじゃが、心臓に悪いぞい」
「……他人に幸せは毒の味。それが異端審問会の習わし」
「ま、それも一興と言えば一興だがな」

一番の被害者の光一は、ため息をつきつつそう言った。
なんだかんだで、結局Ｆクラスになじんでいる。

「あれ？　アキも今日お弁当？」
「うん」
「んじゃ、いつもの行くか。最初はグー、ジャンケン――」
「「「――ほい」」」

ムッツリーニがパー、他全員チョキ。

「……負けた」
「俺は烏龍茶」
「ワシは緑茶じゃ」
「僕はレモンスカッシュね」
「俺はコーヒー頼むわ。出来ればエスプレッソで」

「ウチはミルクティーで」
「すみません。私はストレートティーをお願いします」
「……行って来る」

それぞれ１００円を手渡し、ムッツリーニはそれを持って購買へと向かって行った。
光一が取りだしたサンドイッチを一口。

「朝倉が戻って来て以来、光一の弁当は豪華になったのう」
「愛子と優子、朝倉に料理教わってるらしいから」
「そうですか。でしたら私の料理の味見も……」
「させるな！」

普通に毒殺レベルである。

「あれ？」
「ん？　どうした島田？」
「なんか、アキのお弁当と瑞希のお弁当、メニューがそっくりじゃない？」
「ごふぁっ！」

そこで明久が噴き出した。

「ぐっ、偶然だね姫路さんっ！　さては……」
「え？　忘れちゃったんですか明久君。今日のお弁当は明久君が……モゴモゴ」
「姫路さぁーん!?　ちょっと向こうで僕とお話ししようねーっ！？」

と言って、明久は瑞希を引きずり教室の外へ。

「なんじゃ？」」
「さあ？」

と口では言うが、光一は知っていた。
明久の家で、瑞希がお世話になっている事は。

思い起こす事、数日前。

『もしもし光一？　ちょっと協力して欲しい事があるんだけど』
『？　どうした？』
『実は、しばらく泊めて欲しいんだ。実は……』

買い物帰りに瑞希と会って、彼女の両親は留守。
その日の晩は玲の好意で一緒に食べる事となったが、空港のストライキで帰れなくなって……。
それで戻るまで、しばらく同居しないかと玲が提案。

『成程な……ちょっと玲さんに代わってくれるか？』
『あっ、うん』
『もしもし、お電話変わりました』
『率直に聞きますけど、どういう風の吹きまわしです？』
『いえ。私もアキ君に対して、束縛し過ぎて逆によくない影響を与えていた事は認めますので。ある程度は許容しようと思いまして』
『……だったらいいです。まあ俺からも、明久に注意するよう言っておきますよ？　俺としても、変な事になって貰ったら困りますから』
『助かります』

と言う経緯である。

「お待たせ」
「ああっ、そういや来る途中、玲さんが弁当いらないって言うから処分に困ってたっけ？」
「うん、そうなんだよ。姫路さん今日は買って食べるって話だったから」
と光一が助け船を出した。
「……」
それに対し、雄二は疑念の視線を明久に向ける。
光一はやっぱ鋭いな……と内心で舌うち。
「……ただいま」
「おかえ……げっ、中指！　……じゃなくて、中山？」
「小山よ、小山友香！」
ムッツリーニが帰ってくるや否や、光一は顔をゆがませた。
それに連れられて教室に入ってきたのが、光一の嫌いなCクラス代表・小山友香だから。
「……相談を受けていた」
「え？　どうして？」
「……Fクラスの試召戦争の予定を聞きたいらしい」
「俺らのクラスの？」
「そうよ。明後日にはついに試召戦争が解禁されるから、その時Fクラスがどう動くのかを教えて貰いたいのよ」
「どうしてそんな事聞きたいんだ？」

学年試召戦争以来、B・C・Eクラスに纏まりはなくなっていた。
それと言うのも、代表が火種の1つなのだから。

「だってFクラスは、一学期にあそこまで学年全体を引っ掻きまわした、いわば台風の目なんだもの。警戒してしかるべきだと思わない？」

「そりゃ光栄な評価だが――折角2学期になって設備がリセットされたって言うのに、いきなり試召戦争なんて考えて良いのか？」

と、光一は訝しげに問うてみた。

ルールでは、戦争に負けて設備のランクダウンされても、学期が変われば元に戻るとある
この辺りは積極的に戦争をさせようと言う計らいもある為、学期末は設備ダウンのリスクなしで戦争を仕掛ける事が出来る。

ちなみにCクラスは、一学期でAクラスに敗れDクラス設備におとされている。

「別に試召戦争を考えても、私は自分達から戦争を始めるとは言ってないわよ？　ただ、また中心になるだろうFクラスの動きを知りたいだけ」

「……成程な。つまり、こっちが情報提供しないならそっちも何も教えないってことか。がっつかない辺りは、少しは成長したか？」

「まぁ、そういう言い方も出来るかもね」

光一の挑発にピクリと口元を歪めるが、それを耐える様に不敵に笑う。

「……どうする雄二？」

「良いだろう。その取引乗ってやる」

互いに理がある以上、断る理由はない。

後は……。

（……光一）

（わかっている）

光一と雄二が視線を交わし、意思疎通を終わらせる。

「言うのは目標としてるクラスだけでいいのか？」

「それだけじゃダメ。攻め込む時期も教えて貰わないとね」

「Ａクラスには、試験召喚戦争解禁から一週間――遅くとも、二週間以内には攻め込む予定だ」

「……ふぅん……？　成程ね……」

時間をおく事に明久は疑問を抱くが、光一が首を振ると頷いた。

「そっちはどうなんだ？　目的が重なるんなら、俺達との戦いになるが？」

「私たちはそこまで高望みしてないわ。ただ、Ｂクラスには挑んでみたいけどね。あなたたちと同じように、解禁から一、二週間くらいで」

「……」

「……（光一、どうだ？）」

「……（嘘言ってるように見えねえな。だが、期間を置く所にキナ臭さがある）」

光一と雄二が視線を交わし、一応は納得する様に頷いた。

「でも、良いの小山さん？　別れたとは聞いたけど、Ｂクラス代表の根本君って――」
「それ以上言ったら殺すわよ？」
「その前に俺が殺すぞ？」

小山が明久に本物の殺意を向けると同時に、光一が目を細め威嚇する様に睨みつける。
光一の視線に怯んだのか、小山が苦虫をかみつぶした顔になる。

「私はね、頭の良い男が好きなの。お勉強が出来る人って意味じゃなくてね」
「よく言うぜ。根本なんか、卑怯なだけの小物だったろうが」
「卑怯な手段って、勝つためには合理的で有効だと思わない？　私はそういうの、結構好きなんだけど……あの男は、もうごめんだけどね」
「それは事実だが、そういうのは自分の許容量で留めるべきだ。あいつはそれを見極められず、自滅同然に落ちぶれたともとれるぜ？」
「……そうかもね」

光一とて策や謀略を使うからこそ、の意見である。

『俺ってさ、ジャンケンは後だし以外した事ないんだぜ』
『何を言ってるんだ。それでもいつも負けていただろ？　お前は卑怯者なんかじゃないさ。それに引き換え俺なんて、掃除当番のときはいつも腹痛のフリをしていたんだぜ？』
『いやいや、俺の方が卑怯者さ』
『そんな事はない。俺の方が卑怯者さ』
『……実は俺、同い年の従兄弟がいてさ。彼女が欲しいってそいつに相談したら、この前クラスメイトを紹介してくれたんだ』
『『この卑怯者ッ！　殺してやる！』』

『……そいつ、男子校に通っているはずなのにな……』
『……俺のジュースやるよ』
『……今日の帰り、たこ焼きおごってやるよ』
『……ありがとう』

「よかったな中……小山、モテモテだぞ？」
「アンタね……」

光一がからかうように言うと、小山は抗議の様に殺意を向ける。

「そうなんですか。小山さんって、頭のいい人が好きだったんですね」
「ええ、そうよ姫路さん。そう言えば……坂本君って頭良かったわよね？」

『『『……（ドスッドスッドスッドスっ）』』』

各自が自分の卓袱台にカッターナイフを突き立て、雄二に一斉に殺意を向けた。
それを見て……

「……肉食うしかないと思いきや、ある程度の布石は用意してあると？」
「……何のことかしら？」

光一は挑発する様に問うてみるが、小山は余裕の笑みを浮かべた。

「それじゃ、教えてくれてどうもありがとう。お互い、目標の相手も違うみたいだし、上手くやりましょ」
「ああっ。精々がんばるこったな」

最後にそう結び、小山はFクラスから出て言った。

「……雄二、Cクラス対策は練ってるか？」

「当然だ。多少不利に追い込まれた所で、Cクラスなら勝ちに持って行ける自信はある」

「そうか……あと雄二。少し気になる事があるから、Cクラスについて調べてみる」

「無理はするなよ？」

「Cクラス相手なら、後れは取らねえよ……さて、鬼が出るか蛇が出るか」

第二百三十九問

「……どうでしたか？」
「Ｆクラスは一、二週間以内にＡクラスに攻め入る予定だそうです」
「そうですか……では代表の予想通り、幾つかの通過点を経て攻め入る予定の様ですね」
「はい……でも」
「久遠君の事なら、放っておけとの事です」
「え？　……わかりました」
「戦争の準備の方は？」
「そちらは言われたとおりに間隔をあけて、少しずつ進めています」
「わかりました。では、次は明日に」
「……はい」

時間は流れ、時は放課後。

「なんか、こうやって平和に帰れる日って久しぶりな感じがするな」
「だろうな」
「ここの所、ずっと補習だらけだったからね」

この学園はシステムの都合上、どうしても放課後の補習授業が増えてしまう。

「アンタ達は脱走しようとするから、他の人よりもさらに補習時間が多いんでしょ」
「はいはいうるさいうるさい。それよりどうする？」

と、光一がこれからについて問うてみた。

「折角だし、どっか寄って帰るか？」
「そうだな。秀頼には悪いけど、今日くらいはどっか寄って行きたい」
「僕はやめとくよ。ちょっとスーパーに寄って夕食の買い物をしていきたいからね」

雄二の提案に光一が乗ろうとするが、明久は断った。

「ふーん。今日は月曜だから、卵と肉が安かったぞ？」
「うん。だから今日はお肉にしようかなって。献立はそうだなぁ……姫路さんはぶっ！」
「すまん明久、今蚊がいたから（姫路に聞くな、バレるだろ！）」
「そっそう？（ごめん、ありがとう）」
「「「……」」」

そのやりとりに、周囲がジトっとした目を向けた。

「おい明久、今姫路に夕食の相談しようとしてなかったか？」
「え？　今のはちょっと意見が欲しかっただけだよ？」
「だったらお前の場合、光一に聞くべきだろうが」
「女性の好みも聞いておきたかったんだろ？　一々目くじら立てる理由もないと思うがな」
「……」

雄二は何か勘ぐるかのように、光一と明久にジト目を向けていた。

「えっと――じゃあ僕はスーパーによって帰るから、この辺でっ！」
「わ、私もちょっと用事があるので失礼しますっ！」

と言って、追及を逃れるように2人は走り出した。
残されたメンバーは……

「おい光一、お前絶対何か知ってるだろ？」

光一に追及を始めた。

「知らねえよ。そもそも人のプライベートを詮索しようとする奴に、誰が喋るか」
「ったく、面白みがねえな」
「霧島に同棲を持ちかけられてる状況で、よくそんな余裕もってられるな？」

ピキッ……

「……なぜそれを？」
「昨日お前との愛の巣の設計を頼まれたんだよ。その時にな」
「何ぃっ！？　テメエ！！」
「心配しなくても、断っといたよ。今はな」
「そっそうか……って今？」
「試召戦争が終わるまではって意味だ」

この野郎……と雄二は思うが、今は我慢をしておいた。
ヘタに刺激して、翔子の家に愛の巣（じんせいはかば）の設計にかかわらせたら、完全に人生がアウトになる。

「……一応礼は言っておく」
「一応時期が時期だから、何かありそうなら協力してやるからお前も自嘲しろ。今だけでいいから」
「……わかった」

一応利を示している以上、雄二にとっては乗らない理由はない。
そこまで言うと、光一は荷物を纏め教室の外へ。

「？　どこ行く気だ？」
「Cクラスの情報集めに」

と言って、出て言った。

「なんだかんだで、久遠も割と面倒見がいいわね」
「じゃからワシの兄貴分なのじゃ」

と言う話を背に、雄二は仕方ないと帰り支度を整え外へ。
そこでふと……

「さっきの驚いたよね？」
「はい。2年の吉井君と姫路さんが、あんなに仲が良いだなんて」

聞き覚えのある名が出て、雄二は話をしてる2人に聞き耳を立てた。

「さっき仲良さそうに一緒に帰ってたけど、もしかして付き合ってるのかな？」
「付き合ってるんじゃない？　夕食の献立について話してたみたいだし、スーパーで仲良くお買い物じゃない？」

「……夕食ねえ」

明久の様子は明らかにおかしい。
……が、光一がああも言ってる以上、雄二とて妙な事にするのは得策ではない。

「でももしかしてだけど、同棲とか……」

ピキッ！

「……調べてみる価値はありそうだな」

汗だくになりながら、明久の家と学園の間にあるスーパーへとダッシュで向かった。

「……ターゲットがそっち行ったよ？」

所変わって、スーパーにて。

「おや。奇遇ですね吉井君」

「あれ？　岩崎先輩？」

瑞希とスーパーでお買い物中。

そこで見知った顔と出会った。

「あの、こちらは？」

「これは失礼。僕は３－Ａ所属の岩崎賢二と申します、以後お見知りおきを」

「あっ、はっはい。私は、姫路瑞希と言います」

「これはご丁寧にどうも。吉井君と仲がよろしい様ですが、お付き合いされてるのですか？」

ボッ！　×２

「え！？　そっそんな……お嫁さんだなんて……」
「いえ、そこまで言ってはいませんが……まあ良いでしょう。吉井君もこんな可愛らしい方と仲睦まじいとは、なかなか隅に置けませんね」
「ちっ、違いますよ！　僕なんかが、姫路さんと釣り合う訳がないじゃないですか！」
顔を赤くしながらあたふたする2人に、岩崎は……
「わかりましたから落ちついてください。ここは公共の場なのですから」
と、2人を落ちつかせた。
「あの、先輩はこちらには？」
「夕食の買い出しです。僕の両親は共働きで、家事は僕がやってまして」
「大変ですね。先輩受験生なのに」
「いえいえ、日課にすれば特に苦もなく出来ますよ。お2人は一緒に買い物ですか？」
「はい、僕達も夕食の買い出しです。今日はお肉と卵が安いですし」
「あっ、今日はお茄子もお買い得みたいですよ？」
そこでふと、瑞希が野菜コーナーを見てそんな事を言った。
「おや、茄子ですか。そろそろ秋にも差し掛かってますし、是非買っておきたいですね」
「そうですね。揚げ茄子の煮びたしに、ピーマンやひき肉と合わせて炒めたり。そのまま焼いて生姜醤油で食べると言うのも良いなあ」
「他にも味噌田楽や、鶏肉と一緒に蒸し物と言うのも悪くはありま

せんよ。それにカロリーも低くヘルシーですから、姫路さんにもお勧めです」

明久は岩崎賢二と言う先輩に、親近感を感じ始めていた。
……成績こそ天地の差ではある物の、この人と仲良くなるのも良いかもしれない。

「そうなんですか……姫路さんは、茄子食べられる？」
「はい。大好きです」
「おや、今日は御一緒に夕食を？」
「はい。私今、明久君の家で…」
「あっ、姫路さん！」

瑞希を口止めしようとしたが、もう遅かった。
岩崎はキッと眼を細める。

「……あの……まさか、同居されてるのですか？」
「いいいいイヤイヤ、そんなわけあるわけないわけないじゃないですか」
「そそそそうですよ。そんなことありえなくないこともないこともないようなきがしなくもないじゃないですか」
「……落ちついてください。バレバレですから」

岩崎がある地点に目を向けると、くいっとメガネの位置を直す。

「あっ、あの……」
「わかってますよ。これが君のクラスの奇妙な集団に知られたりしたら、こちらとしても迷惑です」
「……ありがとうございます」
「礼はいりませんよ……騙している以上は」

「え？」
「なんでもありません。では、僕はこれで」
と言って、岩崎は去って行った。
「いい先輩ですね」
「うん。もう少し早く会ってみたかったかな？」

「……なんてこった。あいつ等、このタイミングでなんて事を……！」
その話を聞いてしまった雄二は、頭を抱えていた。
実は彼、翔子に“文月学園で同棲している生徒がいたら、自分達も同棲する”と言う“軽はずみな”約束をしていた。

「……だが、まだ不幸中の幸いか、知ってるのは俺とあの先輩だけだ。なんとか……」
「……雄二」
「……は？」
「……約束、覚えてる？」
「は……はは、は……翔子お前……いつからそこに……？」
「……最初から、ずっと。一緒に帰ってくれなかった雄二にお仕置きする為に、追いかけてきた」
「そ、そうか……それはそれは、すまなかったな……」
「……ううん。今はそんな事、もうどうでも良い」
「だよな。それじゃ……」
「……うん」
「さらばだっ！」
「……逃がさない。絶対に」

「ちくしょぉおおおおおーーっ！！　明久ぁあああっ！　テメェのせいだからなぁーっ！！」

雄二の絶叫と共に、逃亡劇の始まり。
そしてＦクラスに襲いかかる最悪の事態の、幕開けでもあった。

次の日

「それではＨＲを終わる。余計な寄り道などせず帰る様に」

そう言って帰りのＨＲを終えると、鉄人が教室から出て言った。

「それじゃあ帰ろうか」
「いや、ちょっと気になる事があるから」
「そう？　じゃあ光一、また明日」
「ああ」

そう言って光一が出ていき、秀吉と瑞希もそれに続いて出ていく。

「それじゃあ帰ろうか雄二」
「ん？　ああ、ちょっと待ってくれ。ムッツリーニ、大丈夫か？」
「……周辺に障害となりそうな人物の気配はなし。問題ない」
「……そうか。それでは皆、待たせてすまなかったな――祭りを始めよう」
『『『ＹＥＡＨ！　Ｌｅｔ‘ｓ　Ｐａｒｔｙ！』』』
明久が即座に殺気を察知し、横へ跳ぶ。
「雄二！　これはどういう事さ！？」

「明久……！　今日と言う日がテメェの命日だ！　生まれてきた事を地獄で後悔しやがれ！」
「朝坂本に話を聞いてから今まで、待ちに待ったぜ吉井ぃ……！」
「放課後になったからにはもう誰の邪魔もはいらねェ。たっぷりと地獄を見せてやるぜ吉井明久ぁぁぁあっ！」
「姫路と同棲生活たぁ恐れ入ったぜ。テメェのその幸せ、完膚なきまでに破壊しつくしてやろうじゃねェか！」

周囲をクラスメイトで囲まれる明久。
単純明快安直直情な連中が、秘密を知ったうえで今まで我慢していた事に驚愕する。

「朝なら授業が始まるまでと言うタイムリミットがあるが、今はそうはいかねえ。それに加えて、光一が居ない以上邪魔も入らねぇ。楽しい楽しい放課後を皆で過ごそうぜ明久ぁ……！

「……始まったか」

ぽた……ぽた……

「代表……どうして、こちらに？」
「女性をつける男がいたからおかしいと思い、後を追ったまで」
「……まさか久遠を放っておいたのは」
「……」

無言で威圧する白夜から、小暮と小山は目を背けた。

……正確には。

「……」

白夜に今投げ捨てられ、どさっと横たわる意識を失った光一から。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8742j/

バカとテストと召喚獣　試験召喚のすすめ

2011年12月28日06時56分発行